

とある科学の大空と超電磁砲(レールガン)

薔薇餓鬼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボンゴレファミリーの次期ボスである、沢田綱吉が学園都市にて送る新たな物語。

科学と死ぬ気が交差する時、物語は始まる。

目次

日常篇

標的 (ターゲット) 1 見知らぬ土地 | 1

標的 (ターゲット) 2 謎の男 | 6

標的 (ターゲット) 3 再会 | 10

標的 (ターゲット) 4 逃走 | 15

標的 (ターゲット) 5 真実 | 20

標的 (ターゲット) 6 勧誘 | 24

標的 (ターゲット) 7 才能 | 29

標的 (ターゲット) 8 天然と鈍感 | 33

標的 (ターゲット) 9 大空 (ツナ) vs 大能力者 (白井黒子)

38 標的 (ターゲット) 10 己の正義 | 46

標的 (ターゲット) 11 答え | 49

標的 (ターゲット) 12 不幸少年との出会い | 56

幻想御手 (レベルアップ) 篇

標的 (ターゲット) 13 狙われた佐天 | 61

標的 (ターゲット) 14 犯人探し | 65

標的 (ターゲット) 15 突破口 | 72

標的 (ターゲット) 16 作戦開始 | 77

標的 (ターゲット) 17 同じ境遇 | 81

標的 (ターゲット) 18 罠 | 86

91 標的 (ターゲット) 19 大空 (ツナ) vs 超電磁砲 (御坂美琴)

標的 (ターゲット) 20 女王 | 104

標的 (ターゲット)	21	機嫌と罰	108
標的 (ターゲット)	22	映画	113
標的 (ターゲット)	23	想い人の為に	117
標的 (ターゲット)	24	不幸少年との再会	121
標的 (ターゲット)	25	明かす	125
標的 (ターゲット)	26	虚空爆発 (グラビトン)	128
標的 (ターゲット)	27	訪れる危機	132
標的 (ターゲット)	28	絶体絶命	137
標的 (ターゲット)	29	怒りと同情	141
標的 (ターゲット)	30	怨み	147
標的 (ターゲット)	31	木山春生	151
標的 (ターゲット)	32	もしかして	156
標的 (ターゲット)	33	嘘	160
標的 (ターゲット)	34	緊急事態	165
標的 (ターゲット)	35	想い	169
標的 (ターゲット)	36	心の傷	173
標的 (ターゲット)	37	決意	179
標的 (ターゲット)	38	多才能力者 (マルチスキル)	183
標的 (ターゲット)	39	大空 (ツナ) & 超電磁砲 (御坂美琴)	v
S 木山春生			
標的 (ターゲット)	40	動揺	187
標的 (ターゲット)	41	ツナ無双	191
標的 (ターゲット)	42	木山の過去	195
標的 (ターゲット)	43	幻想猛獣 (AIMビースト)	201
標的 (ターゲット)	44	必殺技 (とっておき)	205

標的 (ターゲット)	6 8	第3段階	237
標的 (ターゲット)	6 7	プレゼント	322
標的 (ターゲット)	6 6	死ぬ気で	316
標的 (ターゲット)	6 5	歓迎会	311
標的 (ターゲット)	6 4	爆弾魔と天然と極限	305
標的 (ターゲット)	6 3	リボーンの強さ	300
標的 (ターゲット)	6 2	夢	293
標的 (ターゲット)	6 1	居候	288
標的 (ターゲット)	6 0	沢田家	284
標的 (ターゲット)	5 9	過去の自分	280
標的 (ターゲット)	5 8	第二段階	275
標的 (ターゲット)	5 7	第一段階	269
標的 (ターゲット)	5 6	元の世界へ	265
佐天覚醒篇			
標的 (ターゲット)	5 5	笑顔	259
標的 (ターゲット)	5 4	交渉と釈放	254
標的 (ターゲット)	5 3	能力体結晶	250
標的 (ターゲット)	5 2	もう一人の男	244
標的 (ターゲット)	5 1	ハチャメチャ	240
標的 (ターゲット)	5 0	ツナの正体	236
標的 (ターゲット)	4 9	時空を越えて	232
標的 (ターゲット)	4 8	涙	228
標的 (ターゲット)	4 7	己の弱さ	224
標的 (ターゲット)	4 6	生徒(ツナ)と教師(木山)	220
標的 (ターゲット)	4 5	ツナの記憶	216

標的 (ターゲット)	93	正体	438
標的 (ターゲット)	92	圧倒	433
標的 (ターゲット)	91	佐天、覚醒	429
標的 (ターゲット)	90	護りたい、目覚めの時	424
標的 (ターゲット)	89	目的	420
標的 (ターゲット)	88	忍び寄る魔の手	416
標的 (ターゲット)	87	不吉	412
標的 (ターゲット)	86	美琴たちの選択	407
標的 (ターゲット)	85	2度目の衝撃	400
標的 (ターゲット)	84	佐天の選択	396
標的 (ターゲット)	83	大物	392
標的 (ターゲット)	82	戦闘狂	387
標的 (ターゲット)	81	兄弟子の教え	383
標的 (ターゲット)	80	デイーノの欠点	379
標的 (ターゲット)	79	兄弟子	375
標的 (ターゲット)	78	白蘭 vs 超電磁砲 (御坂美琴)	367
標的 (ターゲット)	77	再来	364
標的 (ターゲット)	76	記憶喪失	360
標的 (ターゲット)	75	シスター	356
標的 (ターゲット)	74	面影	350
標的 (ターゲット)	73	キャパシティダウン	347
標的 (ターゲット)	72	不安	342
標的 (ターゲット)	71	愛	339
標的 (ターゲット)	70	ボンゴレの歴史	334
標的 (ターゲット)	69	佐天の強み	331

標的 (ターゲット) 94 掟の番人

標的 (ターゲット) 95 終わりとこれから

標的 (ターゲット) 96 リボーン秘密

標的 (ターゲット) 97 憧れと護りたいもの

標的 (ターゲット) 98 遊びに

標的 (ターゲット) 99 マファイアランド

標的 (ターゲット) 100 プール

標的 (ターゲット) 101 密着

標的 (ターゲット) 102 腐れ縁

標的 (ターゲット) 103 宣戦布告

標的 (ターゲット) 104 ボンゴレの次期ボスであるということ

標的 (ターゲット) 105 殺意

標的 (ターゲット) 106 佐天、暴走

学生誘拐事件篇

標的 (ターゲット) 107 2日間の出来事

標的 (ターゲット) 108 誘拐

標的 (ターゲット) 109 可能性

標的 (ターゲット) 110 新たな被害者

標的 (ターゲット) 111 現る

標的 (ターゲット) 112 大能力者(白井黒子) vs 謎の少女

522

標的 (ターゲット) 113 深まる謎

標的 (ターゲット) 114 接近

標的 (ターゲット) 115 侵入者

535 531 526

499 495 490

487 482 477 473 469 465 460 452 448 442

標的 (ターゲット) 116 超電磁砲 (御坂美琴) vs スライダー

標的 (ターゲット) 117 第2の目的

標的 (ターゲット) 118 一筋の光明

標的 (ターゲット) 119 犯人の正体

標的 (ターゲット) 120 辻褃

標的 (ターゲット) 121 リボンの提案

標的 (ターゲット) 122 女の魅力

標的 (ターゲット) 123 リベンジマッチ

標的 (ターゲット) 124 地獄との契約

標的 (ターゲット) 125 大空 (ツナ) vs 幻影魔女 (エスカ)

585

標的 (ターゲット) 126 終止符

標的 (ターゲット) 127 次元の違う存在

標的 (ターゲット) 128 残された謎

標的 (ターゲット) 129 新たな事件の予感

日常篇

標的 (ターゲット) 130 怒涛の日々1

標的 (ターゲット) 131 怒涛の日々2

標的 (ターゲット) 132 怒涛の日々3

標的 (ターゲット) 133 怒涛の日々4

標的 (ターゲット) 134 怒涛の日々5

標的 (ターゲット) 135 怒涛の日々6

標的 (ターゲット) 136 怒涛の日々7

標的 (ターゲット) 137 知らせ

650

644

640

633

626

622

618

613

605

600

594

590

580

574

568

564

559

555

551

546

540

770	レータ		
763	標的 (ターゲット)	158	対峙
757	標的 (ターゲット)	157	大空 (ツナ) vs 一方通行 (アクセラ)
751	標的 (ターゲット)	156	笑える未来
747	標的 (ターゲット)	155	絶対能力進化 (レベル6シフト) 計画
740	標的 (ターゲット)	154	第1位
735	標的 (ターゲット)	153	心
730	標的 (ターゲット)	152	妹
725	標的 (ターゲット)	151	信じてる
718	標的 (ターゲット)	150	不可解
713	標的 (ターゲット)	149	
705	標的 (ターゲット)	148	迷いと選択
699	標的 (ターゲット)	147	大空 (ツナ) vs 原子崩し (麦野沈利)
691	標的 (ターゲット)	146	尾行
684	標的 (ターゲット)	145	夏祭り
678	標的 (ターゲット)	144	花火大会
672	標的 (ターゲット)	144	引越
668	標的 (ターゲット)	143	酔い
663	標的 (ターゲット)	142	試される覚悟
659	標的 (ターゲット)	141	父親
655	標的 (ターゲット)	140	感動の再会
	標的 (ターゲット)	139	ペンダント

絶対能力進化 (レベル6シフト) 計画篇

標的 (ターゲット) 159 覚悟なき者

標的 (ターゲット) 160 究極の死ぬ気

標的 (ターゲット) 161 甘さと仲間

標的 (ターゲット) 162 初めての試練

標的 (ターゲット) 163 仲直り

標的 (ターゲット) 164 死の覚悟

標的 (ターゲット) 165 名前

標的 (ターゲット) 166 嫉妬

標的 (ターゲット) 167 存在意義

日常篇

標的 (ターゲット) 168 笹川京子

標的 (ターゲット) 169 京子(過去)と佐天(今)

標的 (ターゲット) 170 美琴の本心

標的 (ターゲット) 171 互いの覚悟

坂美琴

標的 (ターゲット) 172 無能力者(佐天涙子) vs 超能力者(御

標的 (ターゲット) 173 ハの型

標的 (ターゲット) 174 実現

標的 (ターゲット) 175 ミサの願望

標的 (ターゲット) 176 教え

標的 (ターゲット) 177 ミサとナッツ

標的 (ターゲット) 178 深層心理

標的 (ターゲット) 179 芽生え

標的 (ターゲット) 180 彫金師

標的 (ターゲット) 181 新たな力

標的 (ターゲット)	204	黒曜	1026
標的 (ターゲット)	203	ヴァリアー	1022
標的 (ターゲット)	202	シモンファミリー	1019
標的 (ターゲット)	201	10代目ファミリー	1015
標的 (ターゲット)	200	集結	1006
標的 (ターゲット)	199	協力	1001
標的 (ターゲット)	198	窮地	997
標的 (ターゲット)	197	導き出された結論	992
標的 (ターゲット)	196	知られざる秘密	987
標的 (ターゲット)	195	調査開始	981
標的 (ターゲット)	194	仲間の良さ	977
標的 (ターゲット)	193	ミルクティー	972
標的 (ターゲット)	192	美琴の成長	967
標的 (ターゲット)	191	金髪少女の秘密	961
革命未明 (サイレントパーティー) 篇			
標的 (ターゲット)	190	予言	956
標的 (ターゲット)	189	予知巫女	952
標的 (ターゲット)	188	ランキング	946
標的 (ターゲット)	187	ツンデレ教官	941
936			
標的 (ターゲット)	186	佐天 vs 元軍人 (ラル・ミルク)	931
標的 (ターゲット)	185	教官	927
標的 (ターゲット)	184	死の山	918
標的 (ターゲット)	183	殺され屋2	912
標的 (ターゲット)	182	殺され屋	

とある魔術の大空と禁書目録(インデックス)

標的 (ターゲット)	205	親友	11029
標的 (ターゲット)	206	兄弟子と妹分	10331
標的 (ターゲット)	207	ミルフィオーレファミリー	10381
標的 (ターゲット)	208	風紀委員長	10441
標的 (ターゲット)	209	アルコバレーノ	10471
標的 (ターゲット)	210	最強の殺し屋	10551
標的 (ターゲット)	211	援護する者たち	10591
標的 (ターゲット)	212	生き方	10631
標的 (ターゲット)	213	白と紫	10661
標的 (ターゲット)	214	禁句	10731
標的 (ターゲット)	215	4人目の大空	10781
標的 (ターゲット)	216	本拠地	10821
標的 (ターゲット)	217	ツナの秘策	10881
標的 (ターゲット)	218	迎撃	10931
標的 (ターゲット)	219	愛	10991
標的 (ターゲット)	220	メッセージ	11031
標的 (ターゲット)	221	大乱闘	11111
強引	222		1122
気になっていたこと	223		11261
ランチアの過去	224		11301
XANXUS	225		11331
家光	226		11371
海原の想い	227		11411
偽物	228		11471

標的 (ターゲット) 2 2 9 大空 (ツナ) v s 偽物 (海原)

1153

標的 (ターゲット) 2 3 0 幸せ | 1157

日常篇

標的 (ターゲット) 2 3 1 最後の日 | 1165

標的 (ターゲット) 2 3 2 新学期 | 1170

標的 (ターゲット) 2 3 3 騒然 | 1174

標的 (ターゲット) 2 3 4 学校 | 1178

標的 (ターゲット) 2 3 5 臨時数学教師 | 1184

標的 (ターゲット) 2 3 6 臨時教師 2 | 1188

標的 (ターゲット) 2 3 7 侵入者 | 1192

標的 (ターゲット) 2 3 8 自意識過剰 | 1196

標的 (ターゲット) 2 3 9 迷い人 | 1201

標的 (ターゲット) 2 4 0 変わり者 | 1206

標的 (ターゲット) 2 4 1 上位 | 1212

標的 (ターゲット) 2 4 2 お願い | 1217

標的 (ターゲット) 2 4 3 誤解 | 1222

標的 (ターゲット) 2 4 4 宣言と調査 | 1227

標的 (ターゲット) 2 4 5 ミサとミカ | 1232

標的 (ターゲット) 2 4 6 お世話 | 1238

標的 (ターゲット) 2 4 7 佐天、帰省 | 1244

標的 (ターゲット) 2 4 8 修羅場 | 1248

標的 (ターゲット) 2 4 9 女王襲来 | 1253

標的 (ターゲット) 2 5 0 操折の計画 | 1258

標的 (ターゲット) 2 5 1 証明 | 1264

標的 (ターゲット)	252	規格外	
標的 (ターゲット)	253	試される覚悟	
残骸 (レムナント) 篇			
標的 (ターゲット)	254	気に入らない	
標的 (ターゲット)	255	亀裂	
標的 (ターゲット)	256	窃盗と唾然	
標的 (ターゲット)	257	敵視と同系統	
標的 (ターゲット)	258	決裂	
標的 (ターゲット)	259	情報と迷走	
標的 (ターゲット)	260	樹木図の設計者 (ツリーダイアグラム)	
<hr/>			
標的 (ターゲット)	261	超電磁砲 (御坂美琴) vs 座標移動 (結	1307
標淡希			
<hr/>			
標的 (ターゲット)	262	仕返し	
標的 (ターゲット)	263	狂人	
標的 (ターゲット)	264	答え	
標的 (ターゲット)	265	譲れないもの	
標的 (ターゲット)	266	阻む者	
標的 (ターゲット)	267	恐怖と調和	
標的 (ターゲット)	268	悶絶	
標的 (ターゲット)	269	修羅場	
とある少女たちの結婚生活 (マリードライブ)			
標的 (ターゲット)	270	佐天涙子	
標的 (ターゲット)	271	御坂美琴	
標的 (ターゲット)	272	白井黒子	

138613801374

136613591350134413381331132313181312

1307

130112961292128812831277

12731268

大覇星祭篇

標的 (ターゲット) 273 愉快な仲間たち

標的 (ターゲット) 274 一気団結

標的 (ターゲット) 275 大波乱

標的 (ターゲット) 276 土御門元春

標的 (ターゲット) 277 奇病

標的 (ターゲット) 278 佐天、無双

標的 (ターゲット) 279 勝負と策略

標的 (ターゲット) 280 静かなる怒り

標的 (ターゲット) 281 迷子と保護者

標的 (ターゲット) 282 入れ替わり

標的 (ターゲット) 283 相性抜群

標的 (ターゲット) 284 泥酔

標的 (ターゲット) 285 意気投合

標的 (ターゲット) 286 作戦前夜

大覇星祭篇 2日目

標的 (ターゲット) 287 疑惑

標的 (ターゲット) 288 協力者と先手

標的 (ターゲット) 289 ミーティング

標的 (ターゲット) 290 生命の危機

標的 (ターゲット) 291 消去

標的 (ターゲット) 292 遺産と監視

標的 (ターゲット) 293 接触

標的 (ターゲット) 294 冷徹

標的 (ターゲット) 295 絶望

153615301521151315081501149614921486

14821476147114671462145514481443143314251416140613991392

標的 (ターゲット)	標的 (ターゲット)	標的 (ターゲット)	標的 (ターゲット)	標的 (ターゲット)
300	299	298	297	296
曖昧な記憶	情報提供	人形	再命令	非情
15681561155215471541				

日常篇

標的（ターゲット） 1 見知らぬ土地

虹の代理戦争が終了してから2年が経った。ツナは高校1年になった。

「はあ……はあ……」

「また強くなったなツナ。だがまだまだ甘えな」

現在ツナは並盛山にてリボーンは超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態ですパーリングしていた。だがツナはリボーンに歯が立たず肩で息をしていた。それに対してリボーンはまだまだ余裕な様子だった。

「お前はあのバミューダに勝った。だがお前を鍛えたのは誰だと思つてやがる。お前の成長を見てきたのは誰だと思つてやがる。この俺だろうが。お前の手の内なんざお見通しだ」

リボーンがそうツナに告げる。すると数秒後リボーンの腹からグーという音が鳴り響く。

「今日の修行は終了だぞ。夕飯に戻るぞツナ」

「え!?!」

まだまだ修行が続くのかと思いきや、リボーンが腹が減った為、今日の修行は終了となる。リボーンの勝手な都合によって修行が中止になってしまった為、ツナは動揺し超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態が解けてしまった。

「んじや。俺は先に帰るからな」

「ちよっ! 待てよ! リボーン!」

リボーンは相棒であり、形状記憶カメレオンであるレオンをパラグライダーに変形させるとツナの制止も聞かずに空を飛んで家へと帰ってしまった。

「ったく。リボーンの奴」

ツナはタメ息をつきながらも、諦めて歩いて家に帰ることを決め

る。

「はあ……何でこんな休みの日まで修行しなくちゃならないんだよ……」

ツナは修行への不満をぼやきながら、山を降りて行く。

「ん？」

山を降りる途中、ツナは横の方を向いた。ツナはわずかではあるが何か光っていることに気づいた。

「何か光ってる……何だろう？」

ツナは草の根をかき分けながら光っている場所へと向かって行く。

「何これ？」

光っている場所へ辿り着いたツナ。そこには光り輝く三角形の謎の物体が置かれていた。ツナはこれが何なのか気になり、手に取った。

その時だった、

「わっー！」

ツナが触れた瞬間、謎の物体がさらに輝き始める。ツナは驚き謎の物体を落としてしまった。だが謎の物体はさらに輝きを増し、ツナを包み込んでいく。光が収まった時、そこにはツナの姿はなく、あるのは謎の物体だけだった。

「う、うくん……？」

ツナは目を覚ました。ツナはゆっくりと起き上がり辺りを見回す。そこは建物と建物のある路地であった。

「あれ？ 俺、並盛山にいたはずなのに何でこんなところに……？
確か光に包まれてそれから……」

ツナは気絶する前のことを思い出す。しかし山の中にいるはずの

自分がなぜこんなところにいるのか、理由が全くわからなかった。

「とうか(こどい)……?」

ツナはここがどこかわからなかった為、路地を抜けて大通りに出た。

「び、ビルばっかり!? どうなってるの!?!」

大通りに出たツナ。しかしそこは自分の知る並盛とは全く違う場所であった。自分が全く知らない場所にいることにツナは驚きを隠せないでいた。

「はあはあ……」

ツナは町中を走り回る。だが走っても走ってもツナが知っている場所はどこにもなかった。

「そうだ! みんなに連絡して!」

ツナは耳につけていたヘッドフォンを外し、ポケットからスマホを取り出す。

「圏外!? 何で!?!」

スマホの画面に圏外という文字が写っていた。こんな都会であるのにも関わらず、電波が通じないことにツナは驚きを隠せないでいた。見知らぬ場所で連絡が取れなくなるという状況に、ツナはどうすればよいのか分からなくなっていた。

その時だった

ド——ン!

「ば、爆発!?!」

突如、爆発音が鳴り響く。ツナは爆発が聞こえた方向へ走って行く。

一方、爆発のあった場所では。

「風紀委員ですの！ 器物破損及び強盗の現行犯で拘束します！」
ジャッジメント

3人組の男が銀行強盗を起こしていた。銀行強盗犯に制服を着た茶髪のツインテールの少女が立ち塞がる。

「そこをどきなお嬢ちゃん。どかないと怪我しちゃうぜー！」

「そういう三下の台詞は……死亡フラグですわよ？」

「ぐわっ！」

大柄な男が少女に襲いかかるも、少女は男に足をかけて地面に転ばせた。

「見た目通りじゃねえってことか。だが俺だつてな」

「発火能力者……」
バイロキネシスト

男の一人が右手から炎を発生させる。少女は男の能力を前にしても恐れることはなく、冷静に能力の分析をする。男は右手に纏った炎で少女に攻撃する。

「消え……だあー！」

だが少女は目の前から姿を消し、男の背後から後頭部に両足で蹴りを入れた。そして太ももに仕込んでいた針を使い、うつぶせの状態です倒れている男の服を地面に刺して動きを封じる。

「空間能力者!？」
テレポーター

「これ以上、抵抗を続けるなら次は体内に直接テレポートさせますわよ」

「ま、参った……」

自分の状況と少女の脅し文句を受けて、男は抵抗することを諦めた。

「さてと。残りは……」

「な、何これ……銀行強盗……?」

少女が二人の強盗を倒した後、ツナは現場に到着した。現場の様子から強盗事件だということをツナは理解した。

「離せ! てめえ!」

「ダメ! 行かせない!」

「あつ!」

セミロングの少女が子供を人質にして逃げようとする男の足にしがみついている姿がツナの視界に移った。

(ど、どうしよう……このままじゃあの子が……でも……)

超^{ハイパー}死ぬ気モードになって助けようと思ったツナであったが、見知らぬ人の前で超^{ハイパー}死ぬ気モードになることに抵抗があるのか躊躇ってしまった。

「いい加減、離せつてんだよ!」

「危ない!」

男は懐からナイフを取り出すと、少女に向かってナイフを振り下ろす。少女は逃げることができず目を瞑ってしまう。

「な、何だてめえ!」

「え……!?!」

ナイフで刺されることを覚悟した少女であったが、少女に痛みはなかった。なぜなら27と書かれている手袋を持った少年が男の腕を掴んでいたからである。

「戦う気はなかったんだが……」

ツナがそう言った瞬間、手袋が赤いグローブに変化しツナの額にオレンジ色の炎が灯る。

「目の前で襲われそうになってる女の子を放っておけないんでな」

ツナ! 立つ!

標的（ターゲット）2 謎の男

少女と子供を救う為に超^{ハイパー}死ぬ気モードとなったツナ。

「発火能力者!?! てめえ一体、何者だ!?!」

「お前に語る必要はない」

「ぐあつー!」

ツナは腕を掴む力を強める。男はツナの力に耐えることができず持っていたナイフを地面に落としてしまう。

「終わりだ」

「ガハツ!?!」

ツナは男の腹部に拳を叩き込む。男は気絶し、その場でうつ伏せの状態で倒れる。男が倒れたのを確認するとツナは少女と子供の方を振り向いた。

「大丈夫か? 怪我はないか?」

「え、は、はい……」

「そうか。よかった」

「あ、あの……頭が燃えていますけど……!?!」

「これは問題ない。気にするな」

「は、はあ……」

「それよりその子連れて安全な場所に逃げろ」

「は、はい!」

ツナが逃げるように指示すると、少女は子供を連れて安全な場所へと避難する。

「佐天さん! 大丈夫!?!」

「大丈夫です。それよりこの子のことをお願い初春」

「は、はい!」

茶髪のボブカットの少女が避難してきた佐天を心配する。佐天は花飾りをつけた小柄な少女、初春に子供を預けた。

（どうやら佐天さんも子供も無事なようですね……それよりもあの殿

方は一体……ただの発火能力者とは違う……)

「黒子！ 後ろ！」

「なっ!？」

(しまった！ 私としたことが！)

茶髪のボブカットの少女が叫ぶと、黒子は即座に後ろを振り向いた。そこには先程縫い付けた男が立ち上がり黒子を襲おうとしていた。黒子がツナに注意が向いている間に、最初に黒子に倒された男が縫い付けられた男を救出したのである。

「がっ!？」

「なっ!？」

だが男が黒子を襲う前にツナの蹴りが男の顔面に決まり倒れてしまう。黒子は離れた場所にいたはずの殿方が、いつの間にか自分の横にいることに驚きを隠せないでいた。

(い、いつの間!? まさか私と同じ空間能力者!? いや……この方の能力はどう見ても発火能力……まさか多重能力者ともいうのですの!?)

ツナが発火能力だけでなく、他にも能力があるということに黒子は驚きを隠せないでいた。実際は空間転移ではなく、死ぬ気の炎を逆噴射させて高速で移動したものである。

「怪我はないか？」

「え、ええ……助かりましたの……」

ツナの問いに黒子は大丈夫だと答える。すると二人の横をもの凄い勢いで車が通り過ぎていた。車の運転手は、ツナが先程倒した男を解放した男であった。だが、車の向かうその先には先程のボブカットの少女が立っていた。

「まっすい！」

「大丈夫ですわよ。あの方こそが学園都市230万人の頂点、7人の超能力者の第3位。超電磁砲。御坂美琴お姉様。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの！」

「学園都市？ レベル5？」

美琴を助けに行こうとしたツナであったが黒子は大丈夫だと答え

た。しかし、ツナは聞いたことがない単語に疑問符を浮かべていた。一方で美琴はポケットからコインを取り出すとコインを親指で上に弾き飛ばすと、腕に電流を迸らせる。

(あれは……まずい！)

全てを見透かす力。超直感が美琴の放とうとしている技が危険だということを感じた。そして美琴のコインが親指に当たった直前にツナはすぐさま炎を逆噴射させて美琴と車の間に移動した。

「なっ!?!」

美琴はあまりの光景に驚きの声を上げる。なぜなら音速の3倍以上のスピードのコインを右手から放出した炎の壁で防御し、左手で車を止めるといふ離れ技をやったのけたツナの姿が視界に映ったからである。

(この程度ならなんとかなるな)

どうやったらコインでここまでの威力を出せるの分からなかったが、美琴のこの攻撃を防ぐことは可能だということを感じていた。そして数秒後、コインは自壊し車も動きを止める。

「ふう」

(私の超電磁砲を!? こいつ一体何者!?)

車とコインを止めることができ安堵するツナ。美琴は自分の技を防ぎ切ったことが信じられず驚愕していた。

「後は……どうやら必要なかったようだな」

車に乗った犯人を捕らえようとしたツナであったが、車を止めた時の衝撃で頭部を打ったのか、すでに気絶してしまっていた。

(ここから離れないとな)

事件が解決した為、ツナはその場からゆっくりと立ち去ろうとする。

「待ちなさいよー!」

「何だ?」

「何だじゃないわよ! いきなり現れて危ないじゃないの! 死にたいの!?!」

「それについてすまなかった。だがお前のやろうとしていることを見

逃せなかったんでな」

「どうということよっ」

「お前のあのコイン。どういう原理であそこまでの威力を出せるかは知らないが、相当な威力。もしお前の攻撃が当たればこの男がタダではすまなかったからな」

（犯人の為にあんな真似をしたってどういうの!? 一つ間違えれば自分の命だって!?!）

「それにお前の攻撃で車がもし爆発してたらどうするつもりだ？ 爆発していれば被害はさらに甚大になったかもしれないんだぞ」

「そ、それは……」

ツナの指摘に美琴は何も言い返すことができず、顔を俯かせてシユンとしてしまう。

「話は終わりか？ じゃあな」

「ちよっ!」

美琴の制止も聞かずツナは炎を逆噴射させ、その場から消える。美琴は辺りを見回すがツナの姿は影も形もなかった。

「あいつは……一体、何者なの？」

標的（ターゲット）3 再会

ジャッジメント
風紀委員。学園都市において学生のみで組織された治安維持部隊である。

「初春。そっちはどうですか?」

「ダメです。出てきません」

「ここは風紀委員177支部。ジャッジメント黒子や初春が所属している部署である。現在、二人は学園都市についての情報が載っている書庫バンクにてツナのことを調べていた。しかしツナに関する情報は一切、出てこなかった。

「これだけやっても出て来ないなんて一体……」

「おかしいですね。あれだけの能力を持つ者が出て来ないなんてありえないですよ。」

なぜあれだけの強さを持つツナの情報が出て来ないのかわからな
いでいた。すると初春は黙ったまま天井を見つめている佐天に気づく。

「佐天さん?」

「……」

「佐天さん!」

「へっ!? な、何!?!」

「何じゃないですよ。さつきから黙ってボーッとしてるから心配したんですよ」

「ご、ごめん! そ、それよりどうだったの? さつきの人のことわかったの?」

「全くダメですわ。何度調べても何も出てきませんの」

「二人がこれだけ調べても分からない正体不明の人物……はっ! もしかして異世界からやって来た人だったりして! それとも表沙汰にできない裏の人間とか!?!」

「もう。佐天さんってばまた……」

初春の言葉を聞いた佐天はツナの正体を予想する。佐天の予想に

初春は呆れてしまっていた。しかし佐天の予想はあながち間違っていない。

「でも……」

「二でも？」

「その……なんかかつこよかったよねあの人……!!」

佐天はほんのり顔を赤らめながら言う。佐天の脳裏には自分のことを助けてくれたツナの姿が浮かんでいた。

「初々しいですわね」

「だからさつきからブーツとしてたんですね」

「ち、違う!! 別に変な意味じゃ!!」

佐天の言葉を聞いた途端、黒子と初春はニヤニヤし始める。佐天は顔を真っ赤にしながら否定するが、二人はニヤニヤしたままだった。

「あつ! それより御坂さんはどうしたんですか!?!」

「誤魔化しましたね」

「誤魔化しましたわね」

「ち、違うから! 気になっただけだから!」

「先程の殿方がですか?」

「違います! 御坂さんのことです!」

「気になる!?! まさか佐天さんお姉様のことを!?!」

「そういう意味じゃないです!」

御坂が気になると聞いて、黒子は目の色を変える。黒子は普段は冷静なのだが、大好きな美琴のこととなるとアブノーマルになるのである。

「御坂さんならさつきの男性を捜しに行きましたよ」

「え? そうなの?」

「お姉様がどうしてもというので。それにお姉様があの殿方を見つけて下さればこちらとしても捜す手間が省けて助かりますの。まあ不安はありますけど……」

「不安?」

「お姉様はとても負けず嫌いな方ですの。なので騒ぎを起こさなければよいのですが……」

美琴が騒ぎを起こすのではないかと黒子が心配する頃、ツナは。

「あーあ……ついにやっちゃった……」

ツナは公園のベンチに座り、人前で超^{ハイパー}死ぬ気モードとなったことを後悔していた。

「学校のみんなにも……ていうか世間に知れ渡るだろうなー……でもあそこで戦わなかったらあの子も強盗犯も酷い目に遭ったし……」

あんな目立つ場所で超^{ハイパー}死ぬ気モードとなった為、ツナは世間に超^{ハイパー}死ぬ気モードの自分の姿が晒されると思うと憂鬱で仕方がなかった。

「それに結局ここがどこか分からないし……連絡も取れないし。あるのはヘッドフォンとボンゴレギア……」

ツナはヘッドフォンを太ももの上に置いて嘆息する。あれから、ツナはリボーンとの修行で超^{ハイパー}死ぬ気モードになる為のアイテム、死ぬ気丸を飲まずとも超^{ハイパー}死ぬ気モードになれるようになった為、死ぬ気丸は持つ必要が無くなっていった。

「あれ？　じゃあ、あの子は一体、何だったんだろう？　体から電気出してたし……コイン程度であんな凄い威力を出してたし……もしかして、またリボーンの知り合いの殺し屋^{ヒットマン}とか？」

ツナは御坂がリボーンの知り合いなのではないかと思いは始める。ツナの経験上、おかしな力を持っている人はリボーンの知り合いだということが多かったからである。

「じゃあここはボンゴレが所有する都市で……それで眠ってる間にリボーンがここに連れて来て……そう考えれば不思議じゃないかも」

ツナは並盛山からいきなり、こんな見知らぬ場所にいたのはリボーン

ンが関係していると結論づける。ボンゴレの財力を持つてすれば都市の一つや二つ、作れてもおかしくはないと結論づけたツナは、^{ハイパー}超死ぬ気モード状態の自分が世間にバレないと分かり安堵する。

「つてー！ これからどうすればいいんだよー！」

安堵したツナであつたが、これからどうすればいいの分からないのは変わらない為、取り乱してしまう。

「まあ……その内、リボーンも来るだろうし慌てても仕方ないか……」

ツナはリボーンが来るまでベンチで座って待つことに決める。

「あつー！ そうだ！ せっかくだし」

そう言うツナはボンゴレギアに炎を灯す。するとボンゴレギアが輝き、相棒であるナッツが飛び出しツナの肩の上に乗る。

「ガウ♪」

「あ！ ちょっと待てつてナッツ！」

ナッツはいつもと違う場所に来たのが嬉しかったのか、肩を飛び降りて一人でどこかへ行ってしまう。ツナはナッツを慌てて追いかける。

一方、その頃美琴は。

「つたく。どこに行ったのよ」

美琴はツナと同じ公園に来ていた。色んなところを捜したのか少しだけ汗をかいていた。

「絶対に見つけてやるんだからー！」

^{レールガン}超電磁砲を止められたことが悔しかったのか、美琴はツナを見つけることを諦める気はなかった。

「ガウー？」

「ガウ？」

下からガウという鳴き声が聞こえた為、美琴は下を見る。そこにい

たのは美琴の姿を見上げているナッツだった。

「か、可愛い！」

ナッツを見た瞬間、美琴は目をキラキラと輝かせる。

「ど、どこから来たの？ もしかして迷子？」

「ガウ〜♪」

（可愛い……）

御坂はナッツのあまりの可愛いさに、ニヤニヤが止まらなかった。

「あれ？ このオレンジ色の炎……」

「やっと思つけた！」

美琴がナッツに灯っている死ぬ気の炎を見て、何かに気づいた時だった。ナッツを追いかけていたツナがやって来た。

「すいません！ ナッツが迷惑……を？」

「あんた……」

ナツナ
美琴
大空と電撃姫出会う！

標的（ターゲット）4 逃走

ついに出会ったツナと美琴。

「あっ！ あなたはさっきの！ すいません。ナッツが迷惑をかけた。」

「い、いや……別に迷惑じゃないから……気にしないで」

ツナが美琴に謝ると、美琴は戸惑ってしまっていた。

「ダメだろナッツ。勝手に飛び出したら。俺たち知らない場所に来てるんだから」

「ガウ……」

（こいつが本当にさっきと同じ奴？ さっきと全然違う……もしかして多重人格？）

先程、話した時と雰囲気も口調も全然違うことに違和感を覚えた美琴はツナが多重人格者なのではないかと推測する。

「それじゃ俺たちはこれで。行くよナッツ」

「ガウ♪」

「ちよちよちよ！ ちよつと待ちなさいよ！」

「え？ 何ですか？」

「私があんたを捜しに来たのよ！」

「俺を？」

「そうよ！ あんた一体、何者なのよ！」

（何者？ リボーンの知り合いじゃないのこの人？）

てつきり美琴がリボーンの知り合いだと思っていたツナであったが、美琴の言葉から美琴がリボーンの知り合いではないということを理解する。

「あ。自己紹介がまだだったわね。私は御坂美琴よ」

「俺は沢田綱吉です。あ、こいつは俺の相棒のナッツです」

「ガウ。」

（あれ？ 反応が薄い……）

今まで自分が自己紹介すると驚いたり、興奮したりと何かしらの反応をするのだが、ツナは普通の反応だった為、美琴は調子が狂ってしまった。

「その……御坂さんはリボーンの知り合いじゃないんですか？」

「リボーン？ 誰よそれ？」

「俺の家庭教師で。黄色いおしやぶりをつけて、帽子にカメレオンを乗せた赤ん坊なんですけど……」

「何、言ってるのアンタ……？」

（リボーンの知り合いじゃない？ じゃあこの人は何者？）

美琴がの反応からリボーンの知り合いではないと理解するツナ。しかしこの発言で美琴が何者かわからなくなってしまった。

「それで？ あんたは何者なわけ？ どの学校？」

「何者って言われても……ただの高校生ですけど……並盛高校の……」

「並盛高校？ 聞いたことないわね。まあいいわ。この際、あんたが何者かなんてどうだっていいわ」

「じゃあ何で聞いたんですか!？」

どうでもいいのにも関わらず、美琴が正体を尋ねてきたことにツナはツツコミをいれる。

「沢田って言ったわね。勝負しなさい！ 私と！」

「はい!？」

「だから勝負よ！ 戦うの！ 私と！ 今ここで！」

「いや!? 何でそうなるんですか!？」

「私がアンタと戦いたいからよ！」

「い、嫌ですよ！ 俺は戦いませんよ！」

「何ですよ！」

「だって俺が御坂さんに敵うわけないじゃないですか！ コインを凄い威力で飛ばしてたし！」

「その攻撃を防いだのはアンタでしょうが！ とにかくさっさと戦う準備をしなさいよ！」

「だから嫌だって言ってるじゃないですか！」

「あー！ もう！ イライラする！ いいから私と戦えって言うてんでしょうが！」

「ひいひいひいひい！」

「ガウ！」

いつまでも戦おうとしないツナに御坂は痺れを切らし、御坂は電流を迸らせると、能力をぶち撒ける。その影響で地面に電流が帯電し、近くの電灯が破損した。ツナは美琴の力の前に腰を抜かし悲鳴を上げ、ナッツはビビってツナの後ろに隠れる。

「ひ、人が電気を放ってる!? 人間じゃない!?」

「アンタだって額が燃えてたでしょうが！」

美琴の体から電流が放たれているという不可解な現象にツナは恐怖する。しかしツナも似たようなものなので美琴にツツコミを入れられてしまう。

「だ、誰か助けてー！」

「ちよっ!? 待ちなさいー！」

ツナは咄嗟にナッツを抱き抱えて逃走し、逃走しながらすぐにナッツをボンゴレギアの中に戻した。美琴はすぐさま逃走するツナを追いかけるが、ツナに電流を放って行く。

「何で逃げんのよー！」

「いや！ 襲われてるんだから逃げるでしょ普通!?!」

逃げながらもいつものようにツツコミを入れるツナ。しかし美琴の攻撃が止むどころか、増々激しくなっていく。

（何なのこの人!?! 雷の炎を使ってるわけじゃないのに何で体から電流を出せるの!?! 本当にリボーンの知り合いじゃないの!?!）

死ぬ気の炎を使っているわけでもなく、リボーンの知り合いでもないのにも関わらず このようなおかしな力を使えることにツナは驚きを禁じえなかった。

「アンタを見てるとイライラするのよ！ 強いのに戦おうとしない上にそのツツツツ頭！ あいつと似てるのよー！」

「知らないですよ！ それってただの八つ当たりじゃないですか!? っていうかあいつって誰ですか!?!」

全く知らない赤の他人と似ているからというだけの理由で美琴が八つ当たりしてくることにツナは驚きを隠せないでいた。

「いい加減にしなさいよ！ いつまで逃げるつもり!?!」

「あなたが追いかけて来るのを止めてくれれば逃げる必要がなくなるんですけど!?!」

逃走開始から1時間以上、逃げ続けるツナ。今だに運動神経は悪いツナであるが、今までの色んな修羅場を越え、リボーンの修行という名の拷問に耐えてきた為、体力は通常の人の倍はあった。

「わっ!」

横断歩道橋を登り向こうの歩道に逃げようと考えツナ。しかし階段を降りようとした時、足を滑らせて落ちてしまう。そして最終的にツナは公衆電話のボックスに頭をぶつけてしまう。

「いつてえー!」

ツナはすぐに起き上がり後頭部を両手で抑える。今まで数々の修羅場を乗り越えているツナにとって、この程度では気絶はしない。

「今まで散々、逃げてくれたわね。もう逃がさないわ。覚悟しなさい!」

「ひいいいいい!」

気絶はしなかったものここで美琴に追いつかれてしまう。むしろここで気絶していた方がどれだけよかったかとツナは悲鳴を上げながら後悔する。

「そこまでですの」

「黒子。何でここに?」

「ひ、人が急に現れた!?!」

もうダメだと思った矢先、黒子が現れる。どこからともなく黒子が現れたことにツナは驚きを隠せないでいた。

「通報がありましたの。茶髪の少年が常盤台の生徒に襲われてると」

「へ、へー……そうなんだ……」

「正直こうなることはわかっていましたの。まあ私としては捜す手間が省けて助かりましたの。感謝しますわお姉様」

(い、今の内に……)

ツナは美琴がおとなしくなったので今の内に逃げることにした。

「お待ちなさいな」

「ぎゃー……」

逃げようとした途端、後ろにいたはずの黒子がツナの目の前に現れる。急に黒子が現れた為、ツナは驚きの声を上げ尻餅をついた。

「そんなに怖がらないで欲しいですの。私はあなたに話があるだけですの。」

「ま、また急に現れた！ ゆ、幽霊だ！」

「あの……話を……」

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前！」

「ちよつと！ 私を悪霊認定しないでもらえますの!?!」

「つーか何でこんなの知ってんのよ……」

ツナは九字護身法を唱える。黒子は悪霊呼ばわりされたことに怒り、美琴は九字護身法を知っていることに驚いていた。ちなみにツナに九字護身法を教えたのは同級生であり、ツナの守護者の獄寺である。

（本当にあの時の殿方ですの……？ 正直、言っただけ信じられませんの

……多重人格……?）」

美琴と同様、黒子もツナが多重人格者ではないのかと疑ってしま

う。
「とにかく私はあなたに話があるだけですの。着いて来ていただければあなたの安全を保証いたしますの」

「は、はあ……わかりました……」

事情は飲み込めないが、安全を保証してくれると言われたので渋々、着いていくことを決めるツナ。

だがこの時、ツナは知らなかった。黒子に着いて行ったことで自分が置かれている状況がどんなに深刻なのかということを知ることになるとは。

標的（ターゲット） 5 真実

黒子に連れられてやって来たのは風紀委員^{ジャッジメント}177支部だった。

「ただいま戻りましたの」

「あつ！ お帰りなさい白井さん、御坂さん……ってあなたは！」

「あつー！」

（あれ？ あの子、あの時の）

ツナが部屋に入ると、先程助けた佐天の姿が視界に映った。

「あ、あのー！」

「な、何？」

「さつきは……!! その……!! 助けてくれてありがとうございます!!」

「き、気にしないで大丈夫だよ！ それより怪我なくて何よりだよ！

だから頭を上げて！」

佐天は顔を赤らめな頭を下げてお礼を言う。ツナは両手の前に出し、顔を横に振りながら佐天に頭を上げるように促す。

「立ち話もなんですし。とりあえずそちらに座って下さいですの」

「は、はい」

黒子がそう言うのとツナはソファに座る。

「申し送れましたの。私は白井黒子と申しますの。以後お見知りおきを」

「沢田綱吉です。よろしくお願いします」

話を聞く前に自己紹介する黒子。ツナも黒子に習って自己紹介する。

「それであなたをジャッジメントに呼んだのは色々と聞きたいことがあるからですの」

「俺も聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「何ですか？」

「あの……ここってどこですか？」

「はっ？」

突然、ツナが意味のわからない質問をしてきた為、黒子は怪訝な表情をする。

「どこも何も……ここは学園都市ですが……」

「学園都市？」

(学園都市を知らない？ 能力者なのにな？ まさか記憶喪失？)

さつきも学園都市という単語は聞いたのだが、もう一度聞いても何のことがわからず疑問符を浮かべる。

「学園都市を知らないって……アンタもしかして記憶喪失？」

「記憶喪失？ でも俺、リボン……ああ。俺の家庭教師なんですけど。山でリボンとスパリングしてたのを覚えてるし……」

御坂が記憶喪失なのではないかと推測するが、ツナはリボンとスパリングしていたことは普通に覚えていた為、自分が記憶喪失ではないことを理解する。

「ちよつとお待ち下さい……ツツコミをいれたいのですがよろしいですか……？」

「何ですか？」

「なぜ家庭教師とスパリングを……？」

「なぜって。修行ですけど」

「いや！ 何で当たり前のように言ってるんですか！ 家庭教師がスパリングなんてしないですよ普通！」

「え!! しないんですか!?!」

「何で衝撃を受けてるんですの!?!」

「だって家庭教師って銃をぶっ放したり、無理やり好きな女の子に告白させたり、修行という名の拷問をするのが普通じゃないんですか?」

「何を言っていますの!?!」

ツナの発言に黒子は反射的にツツコミをいれる。リボンという普通とは違う家庭教師のせいでツナの思う家庭教師と普通の人が想像する家庭教師はどこか違っていた。

「山で修行？ 本当に山で修行してたんですか？」

「うん。それで山に降りる途中で変な物を見つけて。」

「変な物？」

「うん。光る三角形の物体なんだけど。それでその物体が急に輝きを増して……それで目が覚めたら路地裏で寝てて……その後、爆発音が聞こえたから向かったら君が襲われそうになって……」

「変ですよ。山にいたんでしょ？」

「そうなんだよね。俺もそこがわからなくて」

ツナが今までにあった出来事を話す。しかしなぜ自分がここにいるのかわからなかった。

「あの……結局、学園都市って何なんですか？」

「学園都市は記憶術や暗記術という名目で超能力研究を行ってる研究機関ですよ」

「超能力!? あ、ありえねえ！」

初春が学園都市について説明する。ツナは超能力と聞いて再び驚きの声を上げる。

「ありえないって……あなたも使っているではありませんか発火能力を……」

「発火能力？ 死ぬ気の炎のことですか？」

「」「死ぬ気の炎？」「」

死ぬ気の炎という聞いたことのない単語を聞いて、美琴、佐天、黒子、初春は疑問符を浮かべる。

「死ぬ気の炎……それがあんたの能力なの？」

「俺のつていうか……覚悟とリングさえあれば誰だって使えますよ。属性や炎の性質に個人差はありますけど」

「覚悟とリング？ じゃあ演算はしないの？」

「演算？ そんなことしませんよ」

（学園都市を知らない……死ぬ気の炎という聞いたことのない力……どういうことですか？）

死ぬ気の炎という聞いたことのない事象について美琴が尋ねるとツナは死ぬ気の炎について説明する。ツナの死ぬ気の炎について説明すると黒子はツナが一体、何者なのかわからないでいた。

「沢田さん。何か身分を証明するものをお持ちですか？」

「学生証ならありますけど……」

「貸していただけますか？」

「いいですけど……」

ツナは手帳型のスマホケースから学生証を取り出して黒子に渡した。黒子は立ち上がるとパソコンの置いてあるデスクにて何かを調べ始める。

(こ、これは!?)

パソコンで調べた結果、黒子は衝撃的な真実を知ることとなった。

「沢田さん……あなたがなぜこの学園都市にいるのか。その理由がわかりましたの……」

「え!?! 本当ですか!?!」

「ええ……ですが落ち着いて下さい……」

「落ち着いて? どういうことですか?」

ツナは黒子がただならぬ表情から何か重大なことがわかったということを察する。

「沢田さん……あなたはこの世界の人間じゃありませんの……」

「はい!?!」

「つまりあなたは異世界の人間なんですよ……」

「え!?!」

黒子によって明らかになった真実。果たしてその真意は!?!

標的（ターゲット）6 勧誘

「い、異世界!?!」

「何を言ってるのよ黒子!?!」

「冗談ですよね……!?! 白井さん……!?!」

「冗談でも何でもありませんの。沢田さんはこの世界には存在しない人物なんですの」

ツナが異世界の人間だと知って佐天、美琴、衝撃を受ける。しかし黒子が嘘をついているようには見えなかった為、本当なのだと理解した。

「沢田さん。あなたは並盛町にある並盛高校の生徒。それは間違いないですわね?」

「は、はい……」

「ですがこの世界に並盛という地名はありませんの。世界中のどこにも」

「え!?! じゃあ本当に……!?!」

「ええ。おそらく沢田さんは先程言っていた謎の物体の力によってこの世界に転移したと思われるの」

「私の言った通り、沢田さんは本当に異世界の人だったんだ! 凄いなね初春!」

「ちよつと佐天さん! 失礼ですよ! いきなり異世界に来て沢田さんは混乱してるっていうのに!」

「いやそこまで混乱はしてないけど」

「ええ!?!」

本当にツナが異世界の人間と聞いて佐天は興奮するが、初春はツナがいきなりここが異世界だと知って不安になっていると思っただのか佐天に注意する。しかしツナはあまり動揺していなかった。

「よくそんなに落ち着いていられるわねアンタ……私だったらもつと取り乱すわよ……」

「別に全く驚いてないわけじゃですよ。前に未来に行ったことがあって、その時の状況に似てて。だから慣れてるだけです」

「「「み、未来!?!」」」

ツナが異世界の人間だという事実には驚いているのにも関わらず、ここで未来という単語が出てきた為、美琴たちは驚きの声を上げる。

「それに普段からありえないことばかり起きてる生活を送ってるし」

「状況がわかってますの沢田さん!?! もしかしたら元の世界に帰れなくなるかもしれないんですよ!?!」

「ああ。それなら大丈夫ですよ。リボンたちが絶対になんとかしてくれるんで。あっ!」

元の世界に帰れないという不安はツナにはなかった。だがここでツナはあることに気づいた。

「やばっ! 住む場所ないじゃん!?! どうしよう!?!」

「異世界に来たことには驚かないのに……」

「確かにそっちも死活問題ですけど……」

「沢田さんって変わってますね……」

リボンたちが来るまで、住む場所がないことにツナは気づき慌ててしまう。ツナの驚くべきポイントが違うことに美琴、黒子、初春は呆れてしまう。

「あ、あの!! よかったら私の家に来ますか!?!」

ここで佐天が顔を赤らめながらも勇気を振り絞り、自分の家に来ないかと誘う。佐天の大胆な行動にツナ以外は口元を両手で抑えて驚いていた。

「ええ!?! い、いやそれは迷惑じゃ!」

「わ、私は一人暮しだし……!!」

「で、でも男の俺が女の子の部屋に泊まるのは流石にまずいよ! お、俺は野宿するから大丈夫だから!」

「野宿?!」

「ちよっ!?! 何、考えてるのよ!?!」

「結論を早まらないで欲しいですの! 他にも方法はあるはずですよ!」

「流石にみんなに迷惑はかけられないし……それに無人島で野宿はしたことがあるから大丈夫……」

ツナが野宿すると言い出した為、初春、美琴、黒子は慌ててしまう。シモンファミリーと戦った時にてシモンファミリーの住んでいた無人島^{聖地}にて野宿したことがあるのでなんとかなると考えたツナであるが、あの時は野宿に必要な物資が揃っていたからこそできたことであり、この学園都市にて野宿をするのは無謀である。

「それにお礼がしたいんです……!!」

「お、お礼?」

「はい……!! 私のこと助けてくれたお礼です……!! だから……!!」

「ほ、本当にいいの?」

「は、はい……!!」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。えつと……」

「佐天です……!! 佐天涙子です……!!」

「じゃあお世話になるよ。佐天」

「ね、ねえ佐天さんって……」

「はい。そういうことです」

ツナは佐天の誘いに乗り、これから佐天の家でお世話になることを決める。佐天がツナのことを好きだということを知らなかったため、美琴は小声で黒子と初春に確認を取った。

「佐天のところにお世話になるのはいいけど、これからどうしよう……戸籍がないから学校に通うのは無理だし……流石に何もしないのは……」

「それなら風紀委員^{ジャツジメント}の協力者になるっていうのはどうでしょうか白井さん?」

「それはいいですわね」

「ジャツジメント?」

「風紀委員^{ジャツジメント}は学園都市において学生のみで組織された治安維持部隊のことです。風紀委員という言い方ならわかりますか?」

「風紀委員……」

風紀委員ジャッジメントという聞いたことのない単語に疑問符を浮かべる。初春がツナでもわかるであろう言い方で説明するとツナは顔色を悪くする。

「どうかされましたの?」

「いや……風紀委員ってアレですよね……群れてる人を一方的に殴ったりするんですよ……?」

「そんなことするわけないですわ!」

「え!? しないんですか……!?!」

「だから何で衝撃を受けているのですかあなたは!?!」

「え……だってうちの高校の風紀委員長は自分の前で群れたら噛み殺すって言ってトンファーで殴ったり、他校に喧嘩しに行ったりとかしてますけど……」

「さつきから思っていたのですが、あなたはどのような学校生活を送っているのですか!?!」

ツナのズレた認識に黒子はツツコミをいれる。ツナの脳裏には並盛高校の風紀委員長であり、ツナの守護者の一人である雲雀恭弥が浮かんでいた。

「とにかく沢田さんには風紀委員ジャッジメントの協力者になっていただきたいんですの」

「風紀委員ジャッジメントって何するんですか? まさか今日みたいに銀行強盗と戦ったりとか……?」

「まあそういうこともありますが、主には街のパトロール、美化活動、落とし物の搜索などが主ですわ」

「成る程……」

「勿論、タダで協力しろとは言いませんわ。協力していただければそれなりの保証させていただきますわ。沢田さんは無一文なのですし、佐天さんに甘えてばかりではいけないでしょう」

「わかりました。協力させていただきます」

「ありがとうございますの」

ツナは風紀委員ジャッジメントに入ることを決める。

「改めて。私は常盤台中学1年、白井黒子しらいくろこですの」

「同じく常盤台中学2年、御坂美琴よ」

「柵川中学1年、初春 飾利です」

「柵川中学1年、佐天 涙子です」

「よろしく。黒子、美琴、初春、佐天」

ツナは4人が中学生だと知って、敬語を辞めて返事をした。

風紀委員ジャッジメントの協力者になることとなったツナ。果たしてこれからど

のような結末が待っているのでしょうか!?

風紀委員の協力者になることとなったツナは、177支部を後にし
ジャッジメント
 佐天と共に佐天の住んでいるアパートに向かう。

「ここです。入って下さい」

「お、お邪魔しまーす……」

佐天が扉を開けて、先にツナが入るように促す。ツナはおそるおそるアパートの中に入る。

「本当に一人暮らししてるんだね」

「学園都市の人口の8割が学生ですから。ほとんどの人が一人暮らしかルームシェアしてるんですよ」

「そうなんだ」

ツナは家の中に誰もいないことから本当に佐天が一人暮らしをしているということを知る。

「適当に座って下さい。今、お茶用意してきます」

「あ。ありがとう」

佐天はそう言うとお茶を用意する為に台所へと向かう。

（ど、どうしよう!! / / / 勢いで言っちゃったけど、これから男の人とルームシェア!! / / / それも初恋の人と!?! / / /)

台所に向かった佐天。今まで平然な態度を装っていたがツナが近くにいななくなった途端、緊張の糸が切れる。ツナを家に招いたまではよかつたものの、いきなり初恋の相手とルームシェアとすると考えた瞬間、佐天は顔を真っ赤にし、心臓の鼓動が速くなっていることに気づいていた。佐天は再び、息を整えるとコップにお茶を注ぐと、

「どうぞ」

「ありがとう」

佐天は机の上にお茶の入ったコップを置く。ツナはお茶を淹れてくれたことにお礼を言う。

「それにしても本当にありがとう佐天。見ず知らずの俺の為にこころまでしてくれて」

「い、いえ！ さつきも言った通り、助けてくれたお礼ですから！ それに……」

「それに？」

「急に全く知らない世界に来て、誰も知ってる人がいないから寂しいんじゃないかと思つて……」

「佐天……」

佐天が自分のことをここまで考えてくれたとは思つてもみなかつたので、ツナは感動していた。

「ありがとう佐天。でも大丈夫だよ。俺は一人じゃないよ。コイツもいるから」

「わっ！」

そう言うのとツナはボンゴレギアに炎を灯すとボンゴレギアが輝き始める。佐天はあまりの眩しさに目を瞑つてしまう。

「ガウ♪」

「え!?!」

手に装着していたリングが光つたと思つたら、急に可愛いらしい動物が出てきたことに佐天は驚きの声を上げる。

「俺の相棒のナッツだよ」

「ガウ！」

「い、一体どこから……!?!」

「このリングからだよ」

「ええ!?! いくら何でもそんなところに入るわけ……!?!」

「俺も詳しい原理はわからないんだよねー。未来の技術だしね」

「み、未来つて……じゃあ本当に……!?!」

「ガウ♪」

「わっ！」

佐天がナッツがリングから出て来たことに驚きを隠せないでいると、ナッツは正座している佐天の太ももの上に乗る。

「佐天のこと気に入ったみたいだね」

「あ、あの……どうしたら……?」

「時間が経ったらリングに戻るから。それとナッツは頭を撫でたら喜

ぶよ」

「い、いいんですか？」

「うん」

そう言うと佐天はおそるおそるナッツの頭を撫でる。

「ガウ♪」

「か、可愛い……」

撫でられて幸せそうな表情かおをしているナッツを見て、佐天は可愛いと呟いた。

「そういえば佐天ってどんな能力が使えるの？」

「え？」

「いや。なんか気になってさ。美琴は電気使ってたし、黒子は急に現れたりしてからさ。佐天はどんな能力が使えるのかなって思ってたさ」

「使えないんです……」

「え？」

「私は能力が使えないんです……」

「ご、ごめん……そんなつもりじゃ……」

「き、気にしないで下さい！ もう割り切ってるんです！ 私にはツナさんたちと違って才能がないんだって！」

佐天の表情が暗くなつたのを見て、ツナは後悔してしまう。ツナに悪気があつて聞いたわけではないのに、雰囲気が悪くしてしまった為、佐天は気にしないでいいと告げる。

「それは違うよ佐天」

「え!？」

「俺は佐天が思っているような凄い人間じゃないよ」

ツナは佐天の言葉を否定する。ツナの言っていることがわからず佐天はキョトンとしていた。

「俺は勉強も運動も何もできなくて、みんなからダメツナって言われてさ。中学に入るまで友達なんて誰もいなかったんだ」

「え!？」

「でもリボンと出会って変わったんだ」

「リボンって……沢田さんの家庭教師の……？」

「うん。あいつは色々と大切なことを俺に教えてくれたんだ。今の俺があるのはあいつのお陰。あいつがいなかったら今も友達はいなかったよ」

ツナの脳裏にはリボンと出会ったからあつた出来事が浮かんでいた。

「だから大丈夫だよ。佐天は一人じゃない。能力が使えるようになりたいなら俺も協力するからさ」

「沢田さん……」

協力してくれると言ってくれたことに佐天は感動する。

「でも沢田さんの力って能力じゃないですよ？ どうやって協力するんですか？」

「あ……」

佐天の言葉でツナは気づいてしまう。ツナの死ぬ気の炎は能力ではない為、協力すると言っても何もできないことをは明らかであった。

「そもそも能力の知識がないのにどうやって協力するっていうんですか？」

「い、いや……それは……」

佐天に論破されて嫌な汗をかくツナ。ツナは何か言おうとするが口をパクパクさせるだけで何も言うことができなかった。

「でもありがとうございます。ツナさん。嬉しいです」

「え……!?!? 名前……!?!?」

「ツナさんの方が呼びやすいんで。ダメですか？」

「い、いや……別にいいけど……」

「とりあえず晩御飯の準備しますね!」

そう言う佐天はナッツを机の上にさせると、台所に移動させた。(協力するか……そんなこと言ってくれる人、初めてだな。やっぱりツナさんって優しいな)

これで増々、ツナのことを好きになる佐天だった。

標的（ターゲツト） 8 天然と鈍感

ツナが学園都市に来てから次の日。

「ツナさん。ツナさん」

「う、うくん……っ？」

佐天はツナの体を揺すって起こす。ツナは起きる。

「朝ですよ。起きて下さい」

「後、5分……」

「何、言ってるんですか。早く起きないと……」

「起きる！ 起きるから！ 撃たないで！」

「きゃっ！」

早く起きないと、という単語を聞いた瞬間、ツナは瞬時に体を起こした。ツナが急に起き上がった為、佐天は悲鳴を上げる。

「お、おはようございます……ツナさん……」

「佐天？ そうだった……家じゃなかったんだ……」

驚いている佐天の姿を見て、ここが自分の家ではないということを知ったツナは思い出し安堵した。

「急に起きるからビックリしましたよ」

「ご、ごめん……いつもの癖で……」

「癖？」

「いや。早く起きないとリボーンに蹴り飛ばされたり、電気ショックで起こされたりするからさ」

「どんな起こされ方ですか!? とうか何で家庭教師が電気ショックを持ってるんですか!？」

またまたツナが変なことをいい始めた、元の世界でどんな日常を過ごしていたのか気になる佐天だった。

ツナは起きて、昨日の佐天の家に行く途中で買っておいした服（皆からお金を借りて服を買った）に着替える。

「いただきます」

二人は朝食を食べる。朝食のメニューはご飯と味噌汁、そして卵焼

きというシンプルなメニューであった。

「昨日も思ったけど、佐天の料理はやっぱり美味しいよ」

「そ、そんな！ 私なんか大したことないですよ！」

「そんなことないよ。佐天はいいお嫁さんになれる」

「お、お嫁さん……!? / / /」

想い人^{ツナ}からいいお嫁さんになれると言われて佐天は顔を赤くする。それと同時に料理ができてよかったと心の中で思っていた。

「それにしてもこんなに静かに朝ご飯を食べたのは久しぶりだよ」

「ツナさんの家って大所帯なんですか？」

「大所帯っていうか……家族は俺と母さんなんだけど、居候が5人いるからさ」

「5人!? そんなに!？」

「うん。気づいたら色々と増えててさ」

「気づいたらって……」

5人も居候がいるという事実に佐天は驚きを隠せないでいた。

「えつと……お父さんは……?」

「父さんは海外で働いているから。ほとんど帰って来ないんだ」

「そうなんですか。何の仕事をしてるんですか？」

「え、えつと……石油を掘ってる泥の男……?」

「何で疑問形なんですか……」

(流石に世界最強のマフィアのNO.2だなんて絶対に言えねえ……)

今までちよこちよこ変なことを言ってきたツナであったが、流石にマフィアのこととは言えなかった為、家光^{父親}の職業については誤魔化した。

そして佐天が行く時間となる。

「じゃあ行ってきまーす」

「いつてらっしやい」

玄関にてツナは佐天が家を出て行くのを見届ける。見届けた後、ツナは朝食で使った皿を洗う。

「とりあえず片付けが終わったけど、これからどうしよう……」

風紀委員ジャッジメントの仕事は学校が終わってかららしいし……」

片付けが終わった後、ツナはこれから何をすればいいのかわからないでいた。佐天からはゲーム機を使っていと言われているが、色々世話になっていっているのに関わらず、自分だけのうのうと遊ぶのは流石に気が引けた。

「とりあえず街を見てみよう」

ツナは街を散策して時間を潰すことに決めた。

そしてなんとか時間を潰したツナは、風紀委員ジャッジメント177支部に赴いた。

「こ、こんにちわー」

「あ、沢田さん」

「来ましたわね」

「待ってましたよ」

「あら？　もしかしてこの子が？」

ツナが扉を開けると、初春、黒子、佐天、それとツナの視界に眼鏡をかけた黒髪セミロングの少女が写る。少女もツナに気づいた。

「ええ。昨日、言った風紀委員ジャッジメントの協力者ですわ」

「そう。私は固法美偉よ。よろしくね」

「え、えつと……沢田綱吉です！　これからお世話になります！」

「そんなに緊張しなくて大丈夫よ。これからよろしくね沢田君」

固法とツナは互いに自己紹介する。緊張しているツナに対して、固法は微笑みながら緊張しなくていいと伝えた。

「ていうか何で佐天がいるの？　佐天って風紀委員ジャッジメントじゃないよね？」

「いやー。今日からツナさんが風紀委員ジャッジメントの一員になるわけじゃないですか。上手くやっていけるか心配だったので来ちゃいました」

「そっか。ありがとう佐天」

「あれ？ 佐天さん。呼び方が……」

「うん。こっちの方がいいかなって思っ」

「いいわね。じゃあ私もツナ君って呼ぼうかしら」

「なっ!?!」

佐天がツナのことをあだ名で呼んでいるのを知って、固法もツナのことをあだ名で呼ぶことを決める。固法の発言を聞いて、黒子と初春は慌ててしまう。

「いいかしら？ 仲良くなるにはあだ名で呼ぶのが一番だと思うんだけど」

「いいですよ」

「なっ!?!」

「ツナさん……」

ツナは固法があだ名で呼ぶことを許可した。ツナがあっさりとは許可した為、初春と黒子は驚きの声を上げ、佐天はあっさりとはあだ名で呼ぶことを許可したのが気に入らなかつたのか可愛いらしく頬を膨らませながらツナを睨んでいた。

「あ、あの……佐天？ 何で怒ってるの……?」

「怒ってませんよ」

「い、いや……どう見ても怒って……」

「怒ってません!」

「えー……」

ツナは佐天が何で怒っているのかわからず、どうしていいのかわからないでいた。初春と黒子のため息をつき、固法もなぜ佐天が怒っているのかわからず疑問符を浮かべていた。

「ゴホン！ それより今日から沢田さんには風紀委員ジャッジメントの協力者になっていただくのわけですが、その前にやってもらおうことがありますの」
「やってもらおうこと?」

「ええ。私と勝負してもらいますの」

「ええ!?!」

「ご安心下さい。別に本気で闘りあえとは言いませんし、手を出し

たくなければそれでも構いませんの。ただこれからどのような事件が起こるかわかりませんの。その時にあなたの力を知っておくのと、知らないのでは大きく違ってきますの。だからこっちとしては沢田さんの実力を知っておきたいのですの」

「わ、わかったよ」

黒子の言葉も一理ある上に、手を出さなくていいとまで言われたのでツナは黒子と戦うことを決める。

ツナ vs 黒子。果たして！

標的（ターゲット）9 大空（ツナ）vs 大能力者（白井黒子）

黒子と手合わせすることとなったツナ。

「ここですわ」

「ここって……体育館？」

「風紀委員の訓練場ですわ。沢田さんと戦う為に許可させていただきました。流石に風紀委員が場所を選ばず戦うわけにはいきませんもの」

ツナは黒子に連れられて、やって来たのは風紀委員の訓練場だった。

「それで……何で佐天さんが着いてきますの……？」

「ツナさんの監視です。ツナさんが白井さんに変なことしないか心配なので」

「しないよ!? 何、言ってるの佐天!?!」

佐天がジト目でそう言うのとツナは驚きながら否定する。しかし佐天は納得がしていない様子であった。

「沢田さん。たとえあなたといえど佐天さんに手を出したら、私は遠慮なく捕らえますので覚えておいて下さい」

「だからしないって!」

「殿方は狼ですからね。女性の衣類を嗅いだり、使ったコップに間接キスするに決まっていますの!」

「するわけないじゃんそんなこと! 最低だよ! 人として終わってるよ!」

「なっ!? それは言い過ぎではないのですの!?! 確かに私がお姉様の衣服を嗅いだり、間接キスして興奮しましたけど! そこまで言わなくてもいいのでは!?!」

「そんなことしてたの黒子!?! いくら女の子同士でもアウトだよ!」

「それでも風紀委員なの!?!」

「これは愛ですよ！ 犯罪ではありませんの！ お姉様なら黒子の愛を受け止めてくれますよ！」

「絶対に受け入れてないよ！」

「なんかどうでもよくなってきた……」

ポケッツコミ合戦をするツナと黒子を見ていた佐天は、当初の目的がどうでもよくなっていた。

口論が終わると3人はグラウンドに移動する。佐天は離れた場所に移動し、観戦する。

「さて。始めますわよ」

「うん」

黒子がそう言うと、ポケットから27と書かれた手袋を取り出し両手に装着すると目を閉じて深呼吸する。

「手袋……？ 手の血行を良くしてどうする……なっ!？」

今から戦おうというのに手袋を装着するのかわからないでいたが、すぐにその考えは変わった。なぜなら手袋が輝き、赤いグローブに変化したのだから。

「始めるぞ」

「ど、どうなってますの……？ その手袋……？」

ツナは準備が整ったことを告げるが、黒子は手袋が変化した理由が全くわからず戸惑いを隠せないでいた。

「手は出さなくてもいいんだよね？」

「ええ。この手合わせはあくまで私が沢田さんの能力を、沢田さんが私の能力を理解するのが目的です。手は出さなくても結構です。私は出させていただきますけど」

「わかった」

ツナは腰を少し落とし、腕をクロスさせて戦闘態勢に入る。黒子も右足を少し前に出し、両膝を曲げ、戦闘態勢に入る。

(対峙しただけでわかりますの……一部の隙がなく、数多の死線を乗り越えたというのが……)

なんとか隙を突こうとする黒子であったが、ツナに全く隙がない為に攻撃に転じることができないでいた。そしてここから膠着状態が続いていく。

(いつまでも隙を伺っているのは埒が明きませんわね……だったらこちらから仕掛けて隙を作るしかありませんの!)

「っ!」

黒子の姿が一瞬にして消え、ツナの後ろに現れた。ツナはいきなり消えたことに驚きを隠せなかった。黒子は背後からツナの首元に蹴りを喰らわせる。

「なっ!」

だがツナは一切、後ろを振り返ることはなく、黒子の蹴りを右手で防いだ。黒子は初手で防がれたことに驚くと、再び消えてすぐにツナの前に移動した。

「成る程。瞬間移動……いや空間を移動したといった方が正しいのか」

「ええ。その通りですわ。ですがそれがわかっただけで私を攻略はできませんわよ」

「お前が転移してから次に転移に使うにはわずかだがインターバルがある。そこを狙えばいいだけの話だ」

「っ!」

「どうやら当たっているようだな」

(初手で私の攻撃を防いだだけでなく、たった一度、攻撃を受けただけで私の能力の弱点を見抜いたというのですの……!?)

たった一度の攻防で自分の能力の弱点に気づかれたことに黒子は驚きを隠せないでいた。

「よくわかりましたわね……」

「お前は俺の実力を少しではあるが知っている。だったら俺の隙を作る為に何度も転移して隙を伺うはず。だがそれをしなかった。何度も転移をすれば弱点を俺に見抜かれるからな」

「流石ですわね。ですが……私の能力の全てを攻略したわけではありませんわよ！」

そう言うと黒子は再び転移する。転移した先はツナから大分、離れた場所だった。

(これならどうなの!?)

太ももにホルスターを巻いて忍ばせた金属矢を離れた場所からツナの数メートル前に転移させる。そして今度は自分自身をツナの顔の少し上に転移する。

(同時攻撃……これなら!)

ツナの顔面に向かう黒子の蹴り、上半身に広範囲に向かって行く複数の金属矢がツナを襲う。

「遅い」

(消えた!?! これは昨日の!?)

だが同時攻撃が当たる前にツナはその場から一瞬で消えた。

「自分だけでなく物も転移できるとは。流石だな」

「お誉めに預かり光栄ですの。ですが私の攻撃は当たってませんの……一体、何をしましたの……?」

「大したことじゃない。死ぬ気の炎を逆噴射させて移動した。それだけのことだ」

「炎の逆噴射による高速移動ですか……それはまた厄介ですわね！」

そう言い終わると同時に黒子は再び転移し、ツナに攻撃する。

「なっ!?!」

だが転移した先にツナの姿はなかった。それどころか背後を取られ、首元に手刀を向けられていた。そして黒子は転移して距離を置く。

「なっ!?!」

だがすでに転移した先にすでにツナが移動しており、再び黒子は首元に手刀を向けられる。黒子は何度も何度も転移を繰り返すも、結果

は同じだった。

「はあ……はあ……」

能力を多用したせいで肩で息をし始める黒子に対して、ツナは息一つ乱していなかった。

（な、なぜ転移先がわかりますの……!?!）

「悪いな。お前の攻撃はもう見切ってる」

（な、なぜ私の考えていることを!? まさか読心能力!?）

ブラッド・オブ・ボンゴレ
ボンゴレの血。

ツナは自身の力の一つである、全てを見透かす力、超直感で黒子の考えていることに対してツナはそう答えた。自分の考えていることを言い当てられ為、黒子は動揺すると同時にツナが読心能力^{サイコメトリー}を使えるのではないかと疑った。ツナは黒子の表情から、黒子が考えていることを直感しただけである。

「心を読むことまでできますとはね……」

「違う。俺はお前の表情から、お前が考えていることを直感しただけだ」

「直感……!?!」

直感だけで心の内を見透かされたことに、黒子は驚きを隠せないでいた。

「じゃあ初手で私の攻撃を防いだのも、私の転移先を先読みしたのも直感だと言うんですの……!?!」

「ああ。だがそれだけじゃない」

「それだけじゃない? 一体、他に何かあるというのですの……!?!」

「経験だ」

「経験?」

「俺は過去にお前と同じような能力を使う奴と戦ったことがある。そいつの強さはお前よりも遥かに上だ。転移するスピードもお前と桁外れな上にインターバルなんてものすらなかったからな。だから対処法も知っている」

ツナの脳裏にはマフィア界の掟の番人、復讐者^{ヴァインディチェ}のリーダーである

男、バミューダ・フォン・ヴェツケンシユタインの姿が浮かんでいた。

「成る程……私にすでに勝ち目はないというわけですね……まあお姉

様の超電磁砲^{レールガン}を止めた時点でわかっていたはいましたけれども……」

「どうする？…まだ続けるか？」

「いえ。もういいですの。全てではないですが、あなたの戦い方は理解できましたの」

「わかった」

黒子が手合わせを止めることを宣言すると、ツナも超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解除、

「見つけたわよー！」

「お姉様!？」

「美琴?」

「御坂さん!？」

しようとした矢先、なんとここで美琴が現れる。美琴が現れたことに黒子、ツナ、佐天は驚いた。

「お姉様……? どうしてここに……?」

「初春さんに聞いたのよ! あんたたちがここで戦ってるってね!」

「こうならない為に、訓練場^こまで来たというのに……後で説教ですわね……」

美琴がここに来た理由を聞いて、黒子は額に右手を当てて頭を悩ませていた。

「さあ! 勝負よ沢田! かかってきなさい!」

「俺は戦う気はない。帰ってくれ」

「帰れって何よ! あんたと戦う為に訓練場^こまで来たのよ私は! 黒

子とは戦ったクセに何で私と戦わないのよ!」

「お前が勝手に来ただけだろ。それにこれは互いの力を知る為の手合わせだ。本気で戦ったわけじゃない」

「お言葉ですがお姉様。お姉様が沢田さんに勝てる可能性は方に一つもありませんわ。諦めて下さいの」

「何ですってー!？」

ツナと黒子の言葉を聞いて、美琴の怒りのボルテージは上がって行く。

「黒子。この後、俺は何かやらないといけないことはあるか?」

「あんたが戦わないから何度も言うハメになるんでしょ！ いいから降りてきなさい！」

「ったく……わかった。そのうち戦ってやる。じゃあな」

「あっ！ ちょっと待ちなさいよ！」

あまりにしつこいのでツナは適当に誤魔化すと、そのまま飛んで帰って行ってしまおう。

「黒子！ 追うわよ！」

「私はまだ仕事があるのでこれで失礼しますわ」

「あ！ ちよっ！」

黒子も面倒事に巻き込まれたくない為、転移して逃げる。

「あーもう！ 私の労力返しなさいよー！」

誰もいなくなった訓練場で美琴はおもいつきり叫ぶのだった。

ちなみにお姫様抱っこされた佐天は幸せな気分を味わっていたという。

標的（ターゲット） 10 己の正義

黒子 との手合わせをしてから2日後。

「こんにちわー」

「これはどういうことなんでしょう……？」

「わかりませんの……」

「でも登録されてるのよね……」

今日も風紀委員ジャッジメント177支部へとツナはやって来る。しかし初春、黒子、固法はパソコンを見ていた。

「あのー……」

「あ！ 沢田さん！ これを見て下さい！」
「？」

初春はツナがやって来たことに気づくと、パソコンの画面を指を指す。ツナは何のことかわからなかったが、パソコンの前に移動した。パソコンの画面にはツナの写真が写っており、その下にレベル0と書かれていた。

「俺の写真？ これがどうかしたんですか？」

「これは書庫バンクと言って、学園都市にいる能力者の情報が見ることができるとです。そこに沢田さんが登録されているんです」

「え!? 何で俺のが!? 俺はこの世界の人間じゃないのに!？」

「ええ。どういふことか私たちにはもわからないわ。でもここに書庫バンクにツナ君の名前が載っているという事は、IDが発行されている……つまりツナ君は学園都市の人間という扱いになっているってことね」

固法は顎に右手の親指と人差し指を当てながら冷静に分析する。ちなみにツナは固法にも自分が異世界から来た人間だということは知っている。

「それだけじゃありませんの。これを見て下さい沢田さん」

「これは……？」

黒子が見せたのは一枚のカードだった。そこには学生証のように

ツナの写真があり、そこには上記の者は、ジャッジメント風紀委員177支部の協力者であることを証明すると書かれていた。

「今日、177支部のポストに入っていたんです。本来であれば沢田さんのことは上に内密して、協力してもらおう予定でしたの。上に沢田さんのことをそのまま伝えたところで承認されるわけがないのは火を見るより明らかですから」

「じゃあ俺が異世界から来たってことはもう知られてるってこと……？」

「そこまではわかりませんわ。わかっているのは学園都市は沢田さんを学園都市の住人として認定しているということですよ」

「でもこれは悪いことではありませんよ。本来、沢田さんの存在がバレたら不法侵入扱いにされて学園都市から追い出されてたわけですから」

「え!? そうだったの!?!」

学園都市から追い出されると聞いて、ツナは驚きの声を上げる。

「じゃあ何で俺のことを……!?! 俺の存在がバレたら黒子たちだって……!?!」

「あなたが学園都市から追い出されたら、この世界のどこにも居場所がなくなりますの。そんな人を放っておけるわけないですよ」

「黒子……」

「己の信念に従い正しいと感じた行動を取るべし」

「え?」

「ジャッジメント風紀委員の心得の一つですわ。私……いえ私たちは沢田さんを救いたいと思ったからあなたを助けただけですの。沢田さんもジャッジメント風紀委員の協力者なのでですから覚えておいて下さい」

「う、うん!」

黒子の言葉を聞いて、パアツとツナは顔を明るくする。そんなツナを初春と固法は温かい目で見守っていた。

「とはいつても、これからジャッジメント風紀委員としてバリバリ働いてもらいますわよ」

「わかった。ありがとう黒子。それで俺は何をすればいいの?」

「そうですね……」

右手の親指と人差し指を顎に当てて、黒子は何をしようか考える。

「まずは私たちのパトロールする範囲を教えるのはどうかしら？」

「それはいいですね。じゃあ初春。沢田さんと一緒にパトロールに行つてあげて下さいな」

「ええ!? 私が!? ここは白井さんが行く流れじゃないんですか!？」

「沢田さんは年上とはいえあなた先輩なんですから。後輩に先輩が教えるのは当然の義務でしょう」

「先輩……!？」

嫌がついていた初春であったが、先輩という単語を聞いた途端、表情が変わる。

「沢田さん！ 私に任せて下さい！ 先輩の私が色々教えてあげます！」

「う、うん……ありがどう初春……」

(チョロいですね)

(わかりやすいわね)

年上とはいえ後輩ができたことが嬉しかったのか、初春は鼻息を荒くしながら両手でツナの手を握り締めていた。あまりの初春の圧力にツナは圧されてしまう。初春の顔を見て、黒子と固法はジト目で初春の顔を見ていた。

「じゃあさっそく行きましょう！」

「えっ!? ちよっ!？」

初春に引つ張られて、強制的に連れられてしまうツナ。

ツナの風紀委員としての仕事。一体、どうなる!？」

標的（ターゲツト） 11 答え

初春とパトロールするコースを歩くツナ。

「そういえばツナさんっていつからあの力を使えるようになったんですか？」

「超^{ハイパー}死ぬ気モードのこと？ 中二の時かな？」

「そう言うとなツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードに初めてなった戦い。六道骸との戦いを思い出す。」

「凄いですね。私たちとそんなに変わらない時にあんな力を使えるようになってたなんて」

「別に欲しくて手に入れた力じゃないんだけどね。正直、この能力を初春に譲渡できるなら譲渡したいぐらいだよ」

「ツナさんの力を私に……？」

「初春？」

ツナの言葉を聞いた途端、初春は何かを考え始める。少し様子がおかしい初春を見て、疑問符を浮かべる。

「ツナさんの力を貰ったら白井さん以上に……今までの仕返しにあんなことや……」

「初春!? 何、考えてるの!？」

初春に自分が超^{ハイパー}死ぬ気モードになった姿を想像して、何やらヤバそうなことを想像していた。初春の考えていることにツナは驚きを隠せないでいた。

「あ……肝心なこと忘れてた……」

「え？ どうしたんですか？」

「いや……超^{ハイパー}死ぬ気モードに初めてなった時のことを思い出しさ……」

「何かあったんですか？」

「うん……使った後に反動で体中に痛みが走って、あまりの痛みで気絶したんだよね……」

「え……」

「そして目が覚めてから、2週間全身筋肉痛で動けなかったし……」
「……」

ツナは骸との戦いが終わった後のことを思い出していた。超^{ハイパー}死ぬ気モードがそこまでのリスキーなものだとは思ってもみなかった為、初春は顔を真っ青にしていた。

「よ、よくそんな力を使えるようになりましたね……」

「とにかく絶壁を登って、何度もスパーリングをしたよ……大岩の下敷きになったこともあったけど……」

「絶壁……下敷き……」

ツナの脳裏にはボンゴレが誇る暗殺部隊ヴァリアーと迎え撃つ為に修行した光景が浮かんでいた。レベル5の能力者でもないような修行方法に初春は開いた口が塞がらない状況だった。

「でも力をつけるには色々と修行が必要なんですネ……」

「初春は能力を持つてるの？」

「はい。定温^{サーマル}保存^{ハンド}っていつて。触っている物の温度を一定に保つ能力なんです」

「いいなー。俺もそんな能力だったら欲しいなー。初春の能力だったら美琴に狙われることもないしさ」

「アハハ……」

ツナの言葉を聞いて初春は苦笑いすると同時に、同情していた。

一方、その頃。

「あー！ 美味しかった！」

佐天はお腹をさすり、満足そうな笑みを浮かべながらスイーツ店の外に出て行く。

「ツナさん喜んでくれるかな」

佐天はスイーツの入った箱を見ながら笑みを浮かべる。ツナの為に佐天はスイーツを買っていたのである。

「どうですか沢田さん。道は覚えられましたか？」

「うん」

「え!？」

家に帰ろうかと思っていたその矢先、佐天の視界に仲良く歩いているツナと初春の姿が映る。その光景があまりにシヨックだったのか佐天はスイーツの入った箱を地面に落としてしまう。

「せっかくだし。どこかで甘い物でも食べませんか？」

「ええ!?! 俺たち戻らないと……」

「さあ! 行きましょう!」

「ええ!?!」

「なっ!?!」

初春はツナの左手を右手で掴むと、そのまま走って行く。初春がツナの手を握ったことに動揺するが、すぐに二人を追いかける。

ツナが連れられてやって来たのはファミレスだった。

「ごこの新作パフェ食べてみたかったんですよ」

（あれ? もしかしてここに来た理由って、初春の個人的な願望……?）

初春の言葉からファミレスに連れて来られた理由が、初春の個人的な理由だということにツナは気づいた。

「あつ! お金は私が出しますから。安心して下さい」

「あ、ありがとう……」

お金を出してくれることに対してお礼を言うツナ。しかしツナはこんなことをして大丈夫なのか心配でしよすがなかった。

「あ、あの初春……」

「ちよつとぐらい大丈夫ですよ。あつ！ 来ました！」

（もうパフエのことしか頭にない!）

パフエが来た瞬間、初春の目がキラキラと輝いた。初春の表情から、初春の頭にはパフエのことしか頭にないのは一目瞭然であった。しかし初春が帰る気がなさそうなのでツナは諦めることにした。

（な、何で初春とツナさんが!）

一方で佐天が二人の斜め下の席からハラハラしながら、ツナと初春の様子を見守っていた。

「ツナさんも一口食べますか？」

「いいの？ じゃあ貰おうかな」

「ええ!」

ツナの言葉を聞いた途端、佐天は動揺し顔を赤らめる。

（初春っては何で! というかツナさんもそんなに簡単にOKしちゃうの!）

佐天の脳裏には初春がツナにあくんして食べさせる光景が浮かんでいた。ツナのこと好きな佐天にとって、見逃せる事態ではなかった。

「どうぞ」

「じゃあ。いただきまーす」

「ちよ、ちよつと待つ……た?」

慌てて止めようとする佐天。しかし佐天の視界に映っていたのはツナが自分のスプーンで初春のパフエを掬って食べる光景だった。

（わ、私ってばなんて勘違いを!）

ツナのことを想うあまりとんだ勘違いをしてしまった佐天は恥ずかしさのあまり、顔を赤くし両手で顔を覆っていた。

「そういえば沢田さんってどういう人がタイプなんですか？」

「え?」

（初春！ ナイス！）

ここで気になっていたこと初春が尋ねた為、佐天は心の中でガッツポーズした。

「急にどうしたの……?」

「興味本位ですよ」

「タイプねえ……」

(沢田さんの好きなタイプがわかれば、佐天さんの力になれるはず！)
(ツナさんのタイプ。ツナさんのタイプ。ツナさんのタイプ)

初春は親友佐天の為にツナ佐天の好きなタイプを尋ねた。佐天はツナのタイプがわかると知って、ハラハラしていた。

「そうだなー。やっぱり優しく、笑顔の素敵な普通の子かな。
あっ！ 後、料理のできる女の子とか」

「じゃあ佐天さんとかどうですか?」

「佐天?」

「だってツナさんのタイプに当てはまってるじゃないですか」

「言われてみれば……」

(わ、私がツナさんのタイプ!? じゃ、じゃあ……)

ツナのタイプに当てはまってるって知って、佐天は期待してしまう。

「でも佐天と付き合うことはないかな」

(え……!?)

しかしツナは佐天とは付き合わないと答えた。ツナの答えに佐天はショックのあまり思考が止まってしまっていた。

「どうしてですか!?! だって沢田さんのタイプ当てはまってるじゃないですか!?!」

(そうだよね……私なんかと付き合えるわけないもんね)

ツナの発言に憤り覚える初春。一方で佐天は心が折れかけていた。

「だって佐天には俺なんかよりも、もっと相応しい人がいるはずだからさ」

「え!?!」

(え……!?)

ツナの答えに初春と佐天は目を丸くしていた。

「それに俺はこの世界の人間じゃない。いつかは別れないといけないし。そうになったら佐天が不幸になっちゃおうし」

(ツナさん……)

自分の幸せを考えてくれるツナに佐天は感動していた。

「って……何、言ってるんだろ。佐天が俺なんかと付き合ってくれりわけなんてないのに。馬鹿だよ俺」

「そんなに自分を卑下しないで下さい。まだ会って数日ですけど私は……私たちは沢田さんのいい所を知ってますよ」

「ありがとう初春」

自分のことを肯定してくれる初春にツナはお礼を言った。

「じゃあ……」

「？」

「もし。もしですよ。佐天さんが沢田さんのことを好きって言ったらどうしますか？」

「佐天が俺を？」

「はい」

初春が真剣な眼差しで聞いてきた為、ツナはどうするのか考える。

「それは……」

「こんな所でのんびりしているとは随分と余裕ですわね」

「し、白井さん!？」

「なっ!？」

初春の問いに答えようとしたツナ。しかしタイミング悪く、黒子がやって来てしまう。仁王立ちして怒りのオーラを放っている黒子を見て、初春とツナは慌ててしまっていた。

「遅いから心配して来てみれば。こんな所で油を売っているとは」

「ち、違うんです!。これは!」

「話は帰って聞きますわ。じつくりと」

「はい……」

抵抗したところで無駄だと判断した二人は黒子に着いて行く。佐天は慌てて机の下に隠れた。二人が店から出て行くのを見計らって、佐天は机の下から出て来る。

「なんとかバレずに済んだ……ていうかパトロールだったんだ……」

ツナに自分の存在がバレずに済んだこと、二人が一緒にいたこのは仕事だったとわかり、佐天は二重の意味で安堵する。

「ツナさん……なんて答えようとしてたんだろ……」
佐天は机に右肘をつくと、顎を掌に乗せながら窓の外を見つめるの
だった。

標的（ターゲット） 12 不幸少年との出会い

次の日。ツナは一人でパトロールをしていた。

「平和だなー」

おもいつきり背伸びをしながらパトロールをするツナ。

「こんな平和なの本当に何年ぶりだろ」

ツナは歩きながら今までの出来事を振り返る。

「不幸だー！ー！ー！ー！」

「っ!？」

突如、ツンツン頭の黒髪の少年が両手で頭を抱えながら叫んでいた。ツナは突然、大きな声が聞こえた為、肩をビクツと震わせた。ツナは慌てて少年の元に駆け寄る。

「あ、あの！ どうかしたんですか？」

ツナが先程の少年に話しかける。ツナに話しかけられた少年はツナの方を向く。

「い、いや……家の鍵を落としちゃってさ……」

「た、大変じゃないですか！ 早く捜さないと！ 手伝いますよ！」

「い、いや！ 悪いってそれは流石に！」

「大丈夫ですよ。俺、風紀委員ですから」

「風紀委員？ でもお前、腕章ないじゃん」

「正確に言うとな風紀委員の協力者なんで腕章はしてないんです。でもちゃんと証明証もあります」

「本当だ……」

腕章をしていない為、少年は本当にツナが風紀委員なのかと疑うが、証明証を見て少年はツナが風紀委員なのだということを知る。ツナは正式な風紀委員ではない為、腕章ではなく許可証を携帯している。

「とにかく一緒に捜すの手伝います。えつと……」

「俺は上条当麻だ。よろしくな」

「沢田綱吉です。それでいつ無くしたとかわかりますか？」

「多分、学校から帰る時だと思うんだけど……」

「わかりました。とりあえず学校から帰るまでに通った道を案内してもらいますか。そこから捜してみましよう」

「悪いな……」

ツナは当麻と共に、当麻が通った道を遡って捜して見ることに決める。

「それにしても大変でしたね。家の鍵を無くすなんて」

「まあいつものことなただけだな」

「いつもこと？」

「俺、昔っから運が悪くてさ。こういうことしよっちゅうあるんだよ」

「あー俺もそういうのよくあるからわかりますよ」

「そうなのか？」

「はい。サッカーボールがよく顔面に当たったり、犬に追いかけられたりとかしよっちゅうですよ」

「マジ!? 俺もそういうのよくあるよ!」

「本当ですか!？」

似たような境遇の人物に出会えて、ツナと当麻は顔をパアツと明るくさせる。どうやら意気投合したようである。

「後、体中の至るところにダイナマイトを持ってる転校生に襲われたり、嫌なのにボクシング部に勧誘させられたり、ヤクザと戦うことになったり、100人に一人しか生きて帰れない山で遭難したり、巨大亀に潰されたりとか、鯨のいる海に落とされたりとか……」

「すまん……ちよつとついていけなくなつたわ……つーか今の話って
実話……?？」

「え? 実話ですけど?」

「……」

自分が送ってきた不幸な人生よりも、ツナはさらに不幸な人生を送っていた為、当麻はドン引きすると同時に自分はまだ幸福な人生を送っているのだということに自覚した。しかしこれはまだ序の口だということを知ると当麻は知るよしもない。

「でもいいですよね学園都市って。すつごい平和で」

「お前、もしかして学園都市に来たばかりなのか？」

「はい」

「凄えな。来て数日で協力者とはいえ風紀委員ジャッジメントになるなんて。お前もしかしてすつごえ能力者なのか？」

「俺は能力なんて持ってないですよ」

「え!? マジ!？」

(まあ能力は持ってないんだけど……)

ツナが凄い能力を持っていると予想する当麻であったが、予想とは違った為、驚きの声を上げる。

「でも学園都市って平和に見えるけど、意外と治安が悪いんだぜ」

「そうなんですか？」

「ああ。結構、裏路地とかヤバイ奴がいっぱいいたりするしな」

「でも俺の住んでところは銃をぶつ放す赤ん坊とか、体中にダイナマイトを持ってる人や、照れたら大爆発する子供とか、手榴弾を投げる子供とか、作った料理が全部毒料理になる奴とか、学校の風紀を暴力で取り締まる人とかいましたけど……」

「お前どんな所に住んでたんだよ!？」

ツナ学園都市とは別の意味でヤバイところに住んでいたことを知って、当麻はおもいつきりツツコミを入れた。当麻の通った道を全部、回ったが家の鍵は見当たらなかった。

「見つかりませんね。狭い路地の裏とかも見てみましようか。動物とかが啜えて持っていったかもしれないし」

「悪いな。何か何まで」

「いえ。ナッツ」

ツナはボンゴレギアの中からナッツを呼び出した。

「ガウー！」

「うおっ!? きゅ、急に猫が!?! どうなってんだ!?!」

どこからともかくナッツが出て来た為、当麻は驚いてしまっていた。
た。

「ナッツ。この先の路地に入って、鍵があつたら持って来て」

「ガウ」

ナッツは首を縦に振ると、路地の中に入って鍵を探しに行く。

「ど、どこから出てきたんだそいつ!」

「このリングからですけど」

「い、いや! どうなつてんだよそのリング!」

「いや……まあ……俺の知り合いが作ったんですけど……」

「さつきから思ってたんだけどお前の知り合いってどうなつてんだよ!?! どうかそのリング、学園都市の技術すら越えてんだろ!」

流星に事情の知らない当麻の前で、このリングが未来の技術とは言えないので知り合いが作ったということにした。それでも当麻にはツツコミを入れられたが。

「あつ! 戻ってきた!」

ツナの視界に路地から戻ってくるナッツが映る。ナッツは口に何か啜えていた。

「あつ! 俺の家の鍵!」

「本当ですか!?! よかったあ」

当麻の家の鍵が見つかって、ツナは安堵する。

「ありがとうナッツ。戻っていいよ」

「ガウ♪」

そう言うとナッツはボンゴレギアの中に戻っていった。

「ありがとな。探してくれて」

「気にしないで下さい。鍵が見つかったので俺はこれで」

鍵が見つかるとう当麻はお礼を言った。ツナは役目を終えたのでその場から立ち去った。

「いい奴だったけど、変な奴でもあったな。あつ!」

当麻はここであることを思い出した。

「そういや……この街にはなりふり構わず電撃をぶつ放す奴がいるのを教えるの忘れてた……まあ大丈夫か。能力は持ってないって言うてたし……」

その頃、ツナは。

「なっ!?!」

「あら♪ こんなところで奇遇ね沢田♪」

ツナは支部に帰る途中、美琴と遭遇してしまっていた。

「さあ！ 今日こそ勝負……って！ 待ちなさい！」

「不幸だー！ー！ー！」

今日もまた美琴に追いかけて回されるツナであった。

この時、ツナと当麻は知らななかつた。再び邂逅することになるとは。

幻想御手（レベルアップ）篇
標的（ターゲット）13 狙われた佐天

「ただいま戻りました」

「お疲れ様ツナ君」

パトロールを終えたツナは支部に戻ってきた。支部の中には

「大分、仕事に慣れてきたわねツナ君」

「仕事っていつても、ただ学園都市って平和だからほとんど何もしてないですよ」

「そんなことないわよ。ツナ君、親御さんから人気が高いのよ」

「え？ そうなんですか？」

「ええ。ツナ君よく迷子の子供とか子供の落とし物を捜してくれるじゃない。それで色々と高評なのよ」

「別に子供の世話は慣れてますから。元いた世界じゃ5人いる居候の内、3人が子供だったんで」

「居候が5人!？」

「それにみんな素直ですから。急に手榴弾とか投げたりも、急に照れて爆発とかもしないし」

「何を言ってるのあなたは!？」

ツナが急に意味がわからないことを言った為、固法は驚きの声を上げた。

「それはそうと。実はツナ君に知っておいてもらいたいことがあるの」

「何ですか？」

「実は昨日の放課後から夜にかけて常盤台の生徒ばかりが6人が連続して襲われる事件があったの。しかも学舎の園の中で」

「学舎の園……昨日、佐天が昨日、学舎の園に招待されたから行ってくて言ってた……確か凄いい嬢様学校だとか」

ツナは昨日、夜に佐天が言っていたことを思い出した。佐天と初春

は美琴と黒子に招待されたので、明日学舎の園に行つてくると。

「犯人はスタンガンで常盤台中学の生徒を昏倒させてるの。犯人は不明。目的も能力も不明。ただ常盤台中学の生徒は全員レベル3以上の生徒ばかり。それを6人も気絶させてる時点でかなりの能力者つてことになるわ」

「そんな凄い能力者が……」

「今のところ学舎の園の中でしか起きてないけど、外で常盤台の生徒が襲われる可能性は充分にあるわ。だからツナ君にはパトロールの際に、常盤台の生徒を見かけたら注意喚起、それともし犯人を見つけたら捕まえて欲しいの」

「わかりました。あつ！ そしたら黒子と……つて大丈夫か……」

黒子と美琴のことが心配になるツナであつたが、あの二人の強さは知っている為、大丈夫だと判断する。

「あの子は風紀委員の一員。これぐらいでやられないわ。それにあの子^{ジャッジメント}のことは私が一番知ってるんだから」

「もしかして固法先輩つて黒子の師匠なんですか？」

「師匠ではないわ。でもあの子がまだ風紀委員^{ジャッジメント}の研修生だつた時に、私が色々と指導していたの」

「へー。そうだったんですか」

「とにかく。一応、このことを連絡しておかないといけないわね」

固法は今回の事件のことを黒子の耳に入れておいた方がいいと思ひ、携帯を取り出して黒子に連絡することを決める。

「あら。噂をすれば。何かしら？」

黒子に連絡にしようと思つた矢先、固法の携帯が鳴る。電話をして来たのは黒子だつた。

「もしもし……え!? それは本当なの!？」

電話に出た途端、固法は顔色を変える。固法の顔色から察するに何かあつたのだということをつなは察する。

「ええ。ええ。わかつたわ。そのことについては私に任せて」

固法は電話を切ると、ツナの方を向いた。だが固法の顔は浮かない表情だつた。

「落ち着いて聞いてねツナ君」

「何があつたんですか……?」

「佐天さんがスタンガンで気絶させられたわ。襲つたのはおそらく例の犯人よ」

「佐天が……!?!」

佐天が襲われたと知って、ツナは驚きのあまり固まってしまった。

「何で!? 何で佐天が!? 佐天は常盤台の生徒じゃないじゃないですか!?!」

「佐天さん水たまりで制服を汚しちゃって、常盤台の制服を借りてたらしいの。それでお手洗いに行つて一人になったところを……」

「じゃあ佐天が間違われたつてことですか……!?!」

「おそらくね……」

「そんな……」

本来であれば狙われるはずのなかった、佐天が犯人に気絶さられたと知つてショックを受ける。

「固法先輩。犯人を捕えるという名目で常盤台に行くことはできませんか?」

「え……!?!」

「お願いします! 固法先輩!」

「ツナ君……」

ツナは頭を下げて、常盤台に行かせてくれないかと固法に頼む。

「はい」

「え……!?! これって……!?!」

固法が差し出したのは風紀委員ジャッジメントの腕章だった。ツナは腕章を渡された意味がわからないでいた。

「常盤台中学はお嬢様学校。いくら協力者の証明証を持っているあなたでも、この腕章をしてないと色々とまずいでしょ」

「固法先輩……」

「捜査の許可は私の方でなんとかしておくから。今からすぐに常盤台中学に向かいなさい」

「ありがとうございます！」

「その代わり。必ず犯人を捕まえること。いいわね」

「はい！」

返事をするとはツナは腕章をつける。そして常盤台中学の場所を固法に教えてもらおうと支部を出て、常盤台中学へ向かう。

(待ってる！ 佐天！ 今、行く！)

ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになって常盤台中学へと向かって行く。

大空！ 動く！

標的（ターゲツト） 14 犯人捜し

空を飛んでから常盤台中学へと向かうツナ。

「あそこか」

ツナの視界に常盤台中学が映ると、降下して入り口の前に降りた。

「ここが常盤台中学か」

「待つてましたわよ」

上空から降りると超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態からノーマル状態へ戻る。そしてすぐ近くには黒子がすでに待機していた。

「黒子！ 佐天の様子はどうなの!？」

「落ち着いて下さいの。気絶させられてるだけで、他に外傷はありませんの。直に目を覚ましますわ」

「よかったあ……」

ツナは黒子と会つてすぐに、慌てて佐天の容態を尋ねた。そして佐天に大きな怪我がないと知つてツナは安堵した。

「それにしても捜査の為とは言え、女子校に来るとは……正直、驚きですわ」

「ごめん……佐天のことが心配で……」

「謝る必要はないですの。それに正直、あなたの力を借りたいと思つていたところですよ。少々、厄介な状況なのですの」

「厄介な状況？」

「詳しいことは中で話しますの」

黒子に案内されて学舎の園の中へとはいるツナ。

「え……!？」

入った瞬間、ツナは衝撃のあまり固まってしまっていた。なぜならそこには外とほとんど変わらない街並みが広がっていたのだから。

「ここって……学校だよね……?」

「何、当たり前のことを言っていますの」

「いや！ だって店もあるし！ 信号もあるし！ もう学校ていうかもう街じゃん！」

「そんなことで驚いていたらキリがありませんの。さっさと行きますの」

佐天たちのいる場所へと向かう二人。しかし向かっていく途中、女子たちがツナの姿を見ながらコソコソと話していた。男子禁制のほの女子校に男のツナがいるのだから当然の反応ではあるのだが。

「な、なんか落ち着かないな……」

「別にやましい目的があつて来てるわけじゃないのですから、堂々とすればいいんですの」

「それはわかっているんだけど……こう女子ばかりだとさ……それにみんな可愛い子ばかりだし……」

「お願いですから、その言葉を佐天さんの前で絶対に言わないで下さいの」

「え？ 何で？」

「何でもですの」
「？」

黒子の言っている意味がわからずツナは疑問符を浮かべた。

そして佐天たちのいる風紀委員室に着く。

「あつ！ ツナさん！」

「来たわね」

教室に入るとパソコンにて作業している初春と、両腕を組んで立っている美琴がいた。

「佐天……」

ツナは額に冷たいタオルを乗せ、ソファで横になって静かに眠っている佐天の近くに移動する。

「よかった……」

黒子から無事なのは聞いてはいたものの佐天のことが心配で心配でしょうがなかったツナは、眠っている佐天の姿を見て今度こそ安堵した。

「それで厄介な状況って言ってたけど。どうということなの？」

「犯人の姿が見えないんです」

「姿が見えない？」

「はい。学園都市に姿を完全に消せる能力者は47人いるんですけど、その全員にアリバイがあつて。それに監視カメラの映像には犯人の姿は映っているのに、被害に遭った生徒は犯人の姿を見ていないんです」

「え？ 何で？ 監視カメラには映ってるんでしょ？」

「それがわからないから厄介なのです」

初春の話聞いてツナは一体、犯人がどんな能力を使うのか考え始める。

「もしかして……幻覚？」

「幻覚？」

「うん。監視カメラに映ってる映像は犯人の作った幻覚によって作られた偽物。その偽物の映像が流れている間に犯人が自分と標的の姿を監視カメラに映らないようにして標的をスタンガンで気絶させたとか」

「それは無理ね」

ツナは監視カメラの映像は幻覚で作った偽物だと推測するが、美琴はツナの推測を否定する。

「幻覚で人を騙すことはできても、機械まで騙すことなんてできるわけがないわ」

「え？ そうなの？ でも俺の世界にいた奴はそれぐらいは普通にやってたんだけどなー……」

「はあ!? マジで言ってるの!?!」

「うん。中には幻覚から実体を作る奴とかもいたし」

ツナの脳裏にはツナの守護者であるクローム髑髏、黒曜中の骸とフラン、ボンゴレが誇る最強の暗殺部隊ヴァリアーの霧の守護者マーモン、ミルフィオーレファミリーの幻騎士とトリカブト、ボンゴレファミリー初代霧の守護者であるD・スペードの姿が浮かんでいた。

「幻覚から実体を作るなんて……」

「超能力者^{レベル5}でもできないわよ……」

「沢田さんの世界ってどうなってるんでしょ……」

幻覚から実体を作ると聞いて、黒子、初春、美琴は衝撃を受けてしまっていた。

「ですが幻覚というのはい線かもしれないね。犯人は幻覚で自分の姿を消して標的を強襲。通常、幻覚は監視カメラに映りませんが、被害者に見えない。辻褄は合いますわ。初春」

「はっ」

黒子は幻覚を使う能力者を調べるように初春に促した。初春はパソコンで幻覚を使う能力者とそのアリバイを調べ始める。

「ダメです。能力者全員にアリバイがあります」

「そっかー……いい線だと思ったんだけど……幻覚なら犯人に気づかれないと思ったんだけど……」

「気づかれない……?」

幻覚の能力者という線は無くなり、ツナは少しだけがつかりしてしまっていた。だが美琴はツナの言葉が引つ掛かりを覚える。

「初春さん。ちよつと調べて欲しいんだけど」

美琴はツナの言葉から何かヒントを得たのか、初春にあることを調べて欲しいと頼んだ。

「ありました。能力名は視覚^{ダミーチェック}阻害。対象物を見ているという認識そのものを阻害する能力です。該当する能力者は一名。重福^{じゅうふく}省帆^{みほ}。関所^{かんじょ}の2年です」

パソコンの画面に茶髪の団子頭の小柄な少女が写し出される。

「そいつですわ!」

「でもこの人、レベル2です。自分の存在を完全に消せる程の力ではないと実験データにあります」

「じゃあ一体、誰が……?」

幻覚を使う能力者の線も絶たれ、この重福省帆という少女の可能性も低いとなり、増々誰が犯人かわからなくなってしまいツナたちは頭を悩ませる。

「こうなったら誰かが囿になって、現れたところをみんなで捕えるしかないんじゃない?」

「しかし犯人がどこに現れるかもわかりませんし……上手く囿に引っ掛かってくれるかどうか……」

「でも能力はあくまで認識を阻害するものだから、音とか聞こえるはずだよ。人気のない所に誘き寄せられれば音も聞こえやすくなるし、それならなんとか対処できるんじゃないかな?」

「沢田の言う通りよ。このままここでわからない犯人を捜すよりもいいと思うわ」

「そうですね……こうして犯人を捜しても被害が増えるだけ……動くしかありませんわね……」

ツナの作戦にあまりに乗り気ではない黒子であったが、ここでこのまま何もしないよりはマシだと思い、黒子はツナの作戦を実行することに決める。

その時だった

「う、うくん……?」

「あっ!」

ここで気絶していた佐天が目を覚ました。ツナは佐天が目覚めたことに気づき、佐天の側に移動する。

「ツナさん……? 何でここに……?」

「佐天が襲われたって聞いたから心配で来たんだよ。無事でよかったです……?」

「ツナさん?」

佐天が目覚めて安堵するツナであったが、ツナは佐天の顔を見たま
ま固まってしまっていた。急にツナの様子がおかしくなった為、佐天
は疑問符を浮かべる。

「ま、眉毛が……」

「眉毛?」

「「ブブツ!」」

ツナは佐天の眉毛の変化に気づく。佐天はツナの言っている意味
がわからず疑問符を浮かべる。美琴たちは佐天の顔を見た瞬間、背を
向け、口元を押さえながら必死に笑いを堪えるも、堪え切れてはいな
かった。

「なななななな!? 何で私の眉毛がこんなことになってるのー!」

美琴が手鏡を渡すと、佐天は驚きの声を上げる。なぜなら鏡にはも
の凄く太い眉毛になっている自分の姿が映っていたからである。ど
うやら犯人が黒いペンで書いたものらしい。

「ちよつとみんな笑いすぎだよ」

3人が笑いを堪え切れず笑っている中、ツナは一切、笑うことなく
に3人を注意する。そして先程まで佐天の額に乗せてあった濡れタ
オルを手取る。

「スタンガンで気絶させた上に、女の子の顔に落書きするなんて酷い
よ。今、拭いて上げるね佐天」

ツナは濡れタオルを手取ると佐天の顔に自分の顔を近付けると、
ペンで書かれた眉毛を濡れタオルでゴシゴシと擦る。

「うくん。取れないな」

（ツ、ツナさんの顔が……!? / / /）

「「……」」

目と鼻の先に想い人の顔がある為、佐天は顔を赤くしてしまう。こ
の光景に先程まで笑っていた3人も唾然としてしまっていた。

「顔が赤いよ佐天……もしかして風邪……?」

「っ!」

「「なっ!」」

ツナは濡れタオルを手放すと、自分の右手を佐天の額に当て、左手

を自分の額に当てる。ただでさえ自分の目の前にツナの顔がある上に、さらにツナの手が額に触れた為、佐天の顔は真っ赤になってしまっていた。この光景に美琴たちは驚きの声を上げる。

(ダ、ダメ……!! これ以上はもう……!!)

顔を真っ赤にしながら耐えていた佐天であったが、これ以上は耐えられず、頭から煙を出しながら気絶してしまった。

「佐天!？」

佐天が気絶したのを見てツナはあたふたしてしまふ。

「どどどどどどうしよう!?! 佐天が急に!?! 早く救急車を呼ばないと!？」

((鈍感すぎる……))

佐天がなぜ気絶したのかわからず慌ててしまっているツナを、呆れ果てた目で見える美琴たちであった。

標的（ターゲット） 15 突破口

再び気絶してしまった佐天だったが、すぐに目を覚ました。とりあえず帽子を被って、ペンで書かれた眉毛を隠すことにした。

「あー……！」

「ど、どうしたの佐天!？」

目覚めて早々、佐天は先程の重福省帆が映っているパソコンを指を指しながら叫んだ。

「こいつですよ！ 私を襲った奴！」

「え!? 佐天さん犯人を見たの!？」

「見たっていうか……気絶する前に鏡越しで見たんですけど……」

佐天は完全に気絶する前にトイレの鏡に重福省帆が映っていたことを思い出す。

「でも犯人がわかったんなら……」

「なんとかかなりますわね」

佐天が犯人を見ていたということで、希望が生まれる。

「学舎の園にある監視カメラ全2458台接続終わりました」

「す、すげえ……」

初春はパソコンを複数台繋ぎ、学舎の園にある監視カメラをハツキングする。初春がこのようなことができる人間だとは知らなかった為、ツナは驚きを隠せないでいた。

「初春つてもしかして……」

「初春は情報処理の一点突破で風紀委員ジャッジメントに入りましたの」

「やっぱり……」

戦闘能力が高いわけでも、能力のレベルが高いわけでもない初春ジャッジメントがなぜ風紀委員にどうやって合格したのかツナは今までわからないでいたが、目の前の光景を目にしてツナはようやくよく理解した。

「待ってるよ！ 前髪女！ 必ず見つけ出してやるからな！」

「約束のケーキ。忘れないで下さいよ」

「3個でも4個でも好きなだけ食べてよーし！」

眉毛をこんな風にさせられたことがよっぽど悔しかったのか、佐天は気合いが入りまくっていた。

「でもいくら犯人がわかって、学舎の園の様子がわかるようになっても、この中から一人の人間を見つけるのって難しくない?」

「そうね。もつと範囲を絞らないと」

犯人の位置がわかるようになったといっても、2000台以上ある監視カメラの中から一人の人間を見つけるのは困難だと判断する。

「初春。エリアEからH。JとNは無視ですわ」

「え? 何で?」

「あの辺りは常盤台から一番遠い場所。ですからウチの生徒はほとんど行かないんですの」

「成る程」

なぜ黒子の指定されたエリアを無視したのかわからなかったツナであったが、黒子の説明を聞いて納得する。

「じゃあ人混みの多いところも後回しね」

「何ですか?」

「あの服装。学舎の園じゃかなり目立つと思わない?」

「確かに」

「そういえば……」

初春、佐天、ツナは学舎の園に入った時に常盤台の生徒から注目されたことを思い出していた。

「人目のある場所ではずっと能力を使っていると?」

「多分ね。けど能力を永遠に使い続けることはできない」

「どこか人目のつかない場所で息を潜めている?」

「正解」

「ということとは……」

佐天の推測に対して、美琴は人差し指を立てながらそう言う。初春はパソコンにてさらに搜索範囲を狭めていく。

「これなら見つけれられるね」

「絶対に捕まえてやるわ!」

「ええ!?! 佐天も行く気!?!」

「当然ですよ！」

「危ないよ！ 犯人は俺たちが捕まえるから！ 佐天はここに残ってなきやダメだよ！」

「嫌です！ 何が何でもこの眉毛の屈辱を果たします！」

犯人を捕まえようと意気込む佐天をツナを止める。だが佐天の意思は固く、引く様子はなかった。

「沢田さんの意見に私も同意ですわ。いくら相手が攻撃系の能力者でないとはいえ、戦闘技術のないあなたには危険過ぎますの」

「白井さんまで！」

黒子もツナと同じく佐天が作戦に参加することに反対する。しかし黒子が忠告しても佐天が折れることはなかった。

「はあ……仕方ありませんわね……沢田さん。あなたが佐天さんを護って下さいの」

「ええ!? 俺!?!」

「仕方ありませんの。佐天さんが引く様子はありませんし。それの中で一番強い沢田さんが佐天さんを護るのに最も適任ですの」

「ちよつと待ちなさいよ黒子。何で沢田が一番なのよ？ この学園都市第3位の私を差し置いて」

(なんかここで張り合ってきたんだけど!?)

黒子の言葉に引つ掛かりを覚えたのか、ここで美琴が張り合ってくる。こんな状況であるのにも関わらず、美琴が張り合ってきたことに驚きを隠せないでいた。

「お姉様……今は一刻を争う状況……そんなことを言っている場合ではありませんの……」

「いいや！ 重要なことよ！」

「それでは沢田さん。佐天さんのことを頼みましたわよ。初春は犯人の位置を無線で指示して下さいの」

「ちよつと！ 無視すんじゃないわよ！」

これ以上、言ったところで無駄だと判断した黒子は美琴の言葉を無視してツナたちに作戦を伝えた。

「ナツツ」

「ガウ♪」

ツナはボンゴレギアからナッツを出した。

「ええ!？」

「ど、どこから……」

「あの猫……あの時の!」

初春、黒子、美琴はどこからともなく出てきたナッツに驚きを隠せないでいた。

「ナッツ。佐天の肩に」

「ガウ」

ナッツは首を縦に降ると、ナッツは肩に乗った。

「ツナさん? 何でナッツちゃんを?」

「護衛だよ。一応、念には念をいれておかないと」

「でもナッツちゃんは……」

「ナッツは俺の相棒だよ。いざっていう時は戦えるから」

「そうなんですか?」

「うん。じゃあ行こうか」

「ちよつとお待ちなさいな! その猫は一体!？」

ツナと佐天のやり取りを見ていた黒子であったが、ナッツのことを何も自分たちに説明がなかった為、黒子はツナに説明を求める。

「そういえば黒子と初春は初めて見るんだっけ。こいつは俺の相棒のナッツだよ。普段はこのリングの中にいるんだ」

「リングの中って……」

「とりあえずいざって時は頼りになるから」

「まあ……沢田さんが言うなら……」

ナッツのことはあまりわからなかったが、黒子は作戦にナッツを加えることを戸惑いながらも了承した。

「それにしても可愛いですね」

「ガウ♪」

初春は佐天の肩に乗っているナッツの頭を撫でる。撫でられたナッツは幸せそうな表情をしていた。だがナッツの視界に美琴が映った、

「ガウ!？」

その瞬間、ナッツは佐天の肩から慌てて降りて机の下に隠れてしま
う。

「ちよっ! 何で私の顔を見て隠れるわけ!？」

「多分、美琴のことを恐がってるんだと思う……」

「恐がる? 何でよ? 私がナッツ出会った時は私に懐いてたわよ」

「いや……その後、美琴が怒って電撃を放ったから……それで……」
「……」

ツナがそう言った瞬間、美琴は静かに四つん這いになりわかりやす
く落ち込んでしまう。そんな美琴を見て、ツナたちはどうしていいや
らわからずにいた。

次回! いよいよ作戦開始!

標的（ターゲツト） 16 作戦開始

ついに重福省帆を捕縛する為にツナは作戦を決行する

『佐天さん、沢田さん。聞こえますか?』

「聞こえている」

「聞こえるよ初春」

耳にかけている小型の無線を通じて、初春から連絡が入る。初春からの連絡に二人は答える。現在佐天は外を出て、犯人が来るであろう路地から少し離れた場所で待機しており、ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードとなり犯人が来るであろう路地の上の建物に待機している。

『今、犯人は二人の近くの路地に向かっています。準備お願いします』

「わかった」

「OK」

初春からの連絡を聞いて準備をする二人。作戦は初春の指示の二元、犯人である重福省帆を最終的に美琴のいる場所まで誘導するというものである。

『今、路地を入りました。佐天さん』

「わかった!」

路地を入ったと連絡が入ると、佐天は路地に入る。ツナはまだ降りずに上から様子を覗き見ていた。

「見つけた」

「っ!」

佐天が路地に入るとお団子ヘアの小柄な少女が目映った。突然、後ろから話しかけられた為、少女はビクツと肩を震わせる。少女が恐る恐る振り返るとそこには両腕を組んで壁にもたれている佐天がいた。

「私の眉毛の仇。取らせてもらおうよ」

佐天が帽子の鍔をクイツと人差し指を使って上げる。佐天が格好つけながらそう言った瞬間、上に待機していたツナが屋根から飛び降

りて佐天の前に現れる。急に額が燃えた男が現れたことに少女は驚きを隠せないでいた。

「重福省帆で間違いないな？ 大人しく投降しろ。投降すれば手荒な真似はしない」

「くっ！」

ツナは投降するよう促した。しかし重福は投降する気はない為、自身の能力である視覚阻害^{ダミーチェック}にて姿を隠してその場から逃げ去って行く。

「わっ！ 本当に消えた！」

『ぼさつとしないで早く追って下さいですの！』

(これが視覚阻害^{ダミーチェック}……本当に見えないな……けどこの程度なら……)

重福の姿が消えて驚いている佐天に、黒子が無線で追いかけるように叱咤した。一方で重福の姿が消えてもツナは冷静に重福が逃げた方向を凝視していた。

「佐天。そこを動くなよ」

「え!? ちょ!? ツナさん!」

ツナは一言だけそう言うと言を逆噴射させてその場から消えた。佐天はツナの急な指示に戸惑ってしまう。

「終わりだ」

「っ!」

ツナは重福の姿が全く見えていないのにも関わらず、重福の左肩を掴んでいた。重福は誰にも自分の姿が見えないはずなのに、こうも正確に捕えられたのかわからず動揺してしまっていた。だがそんなことを考えている間に重福の首筋にツナの手刀が決まる。

「なん……で……?」

手刀が決まった瞬間、重福は意識を失い、視覚阻害^{ダミーチェック}によって見えなくなっていた姿が見えるようになった。ツナは重福が地面に倒れる前に、重福を抱え、建物の壁にもたれかけさせる。

「黒子か？」

『沢田さん!? 何かありましたの!』

「重福省帆を捕まえた」

『そうです。それはよかった……ええ!』

ツナから連絡があった為、黒子は何かあったのかと思っただが何事もないとわかって安堵した。だがもう重福を捕まえたを知って、黒子は驚きを隠せないでいた。

「すまない。せっかく立てた作戦を無視をして」

『今はそんなことはどうでもいいですの！ 一体、どうやって姿の見えない重福省帆を捕まえたんですの!?!』

「首筋に手刀を当てて気絶させたただけだ」

『そういう意味でないですの！ どうやってたら姿の見えない敵の首筋を狙えるんですの!?!』

「姿を消す前に重福の姿は一度、見ていたからな。その時に肩の位置と首筋の位置は把握していた。それに目に見えない敵と戦うのは初めてじゃなかったからな」

『相変わらず凄いですわね……』

そう言うツナの脳裏には幻騎士とその匣ボックス兵器である目に見えない海牛、スベットロ・ステイブランキ海牛、ミルフィオーレファミリーの最高戦力、リアル真六弔花のトリカブトとの戦いが浮かんでいた。黒子はツナが姿が消える相手までもと戦ったことがあることに驚きを隠せないでいた。

「とりあえず美琴のいるところまで重福省帆を連れて行く。それでいいか?」

『え、ええ……わかりましたわ。私は警備員アンチスキルに連絡しておきますわ』
「頼む」

ツナがそう言うのと黒子の方から無線を切った。無線を切るとずっと待機していた佐天の方を向いた。

「もういいぞ佐天。大丈夫だ」

「え……は、はい!」

「さてと」

「なっ!?!」

ツナが大丈夫だと伝えると佐天は肩の力を抜いた。だがホツとしたのも束の間、佐天は驚き光景を目にしよう。なぜならツナが重福をお姫様抱っこしたからである。

「ななな、何やってるんですかツナさん!?!」

「何って？ 美琴のいる所に運ぶだけだ。こんなところにいつまでも寝かせておくわけにはいかないだろ」

自分以外の女の子がお姫様抱っこされているのを見て佐天はわかりやすく動揺する。だがツナは佐天が動揺していることすら気づいていなかった。

「わ、私が運びます！」

「気にするな。これぐらい問題ない」

「問題あります！」

「何が問題なんだ？」

「え……!? いや、いや……それは……!?」

ツナの問いに佐天は動揺してしまう。自分以外の女の子と接触して欲しくないとは口が裂けても言えないので、どう言い訳しようか佐天は脳をフル回転させて考える。

「ど、どさくさに紛れて……変なところ触ったりしそうだし……」

「そ、そんなことするわけないだろ！」

佐天の言葉に動揺しながらツナはツツコミをいれる。

この後、佐天が責任を持って重福省帆を運んだそうなの。

標的（ターゲット） 17 同じ境遇

重福省帆を捕えたツナは重福を抱えた佐天と共に美琴の所へと向かう。すでに黒子と佐天は重福を近くにあったベンチに寝かせる。

「ちよつと沢田！ 何、勝手に作戦変更したのよー！」

「だ、だからごめんって……」

怒りを露にする美琴に何度も謝るツナであったが、美琴の機嫌は直らなかつた。本来であれば美琴が重福を捕まえる予定であったが、ツナが重福を捕えてしまった為、美琴の出番がなくなってしまう美琴はご立腹なのである。

「捕まえられるなら早い方がいいと思つたし……それに……」

「何よ？」

「あんまり追い回して能力を使わせたら、この子の負担になると思つたし」

「あんた……」

銀行強盗を捕まえた時と同じく、敵である重福のことを考えるツナに美琴は驚きを隠せないでいた。

「まああんたの言うことも一理あるけど……だからって……だからって……私の見せ場を奪う必要なんてないでしょー！」

「いや！ そこお!?!」

「お姉様……」

「アハハ……」

美琴が本当に怒っていた理由は作戦を無視したことよりも、自分の見せ場を奪われたことに腹を立てていたと知って、ツナは驚きの声を上げていた。そんな美琴を見て黒子は額に手を当て呆れており、佐天は苦笑いしていた。

「さーてと！ 私の眉毛をこんな風にしてくれた礼をしないとね！」

「佐天!?!」

佐天は不気味な笑みを浮かべると、どこからかペンを取り出し、

眠っている重福を自分と同じような目に遭わせようとし近付く。

「ダメだだよ！ そんなことしたらー！」

「ふえっ!? 〳〴〵」

ツナは佐天のやろうとしてしていることを止める為、背後から佐天の腋の下に両手を通すと、そのまま羽交い締めで佐天の動きを封じる。だがツナが佐天を羽交い締めしたことで、佐天の体とツナと体が密着した形になってしまい、佐天は顔を赤くしてしまう。

「許せないのはわかるけどさ！ 一体落ち着こう！ ね！」

「あ、あの……!? 〳〴〵」

「……」

ツナが止めるよう注意を促すが、佐天はツナと密着している状態になっっている為、顔を真っ赤にしたまま口をパクパクしており思考回路がフリーズしてしまっていた。美琴と黒子はツナが再びやかした為、呆れてしまっていた。

「わっー！」

「きやつー！」

ツナは体勢を崩してしまい後方に倒れてしまう。佐天はツナに羽交い締めされてしまっている為、ツナと一緒に倒れてしまう。

「いてて……ごめん！ 大丈夫!? 佐天……!? 〳〴〵」

「っ!? 〳〴〵」

倒れる時に羽交い締めが解けた為、ツナの手の位置がズレてツナは佐天の胸を揉んでしまっていた。ツナは佐天の胸を揉んでいるということに気づくと顔を赤くする。佐天はツナに胸を揉まれて顔を真っ赤にする。

「(ごんごんごん)、ごめん佐天！」

「い、いえ……!? 〳〴〵」

ツナは慌てて手を離すが、佐天は慌ててツナから離れるが顔を赤くしたままである。

「最低ね」

「沢田さん。牢獄に行く前に何か言い残すことはありませんか？」

「ちよつと待って！ 今のはわざとじゃないから！」

ゴミを見るような目で美琴はツナを見ており、黒子は手錠を手に持ち、笑顔でそう言い放った。ツナは慌てて誤解を解こうとするが、佐天の胸を揉んでしまった事実は変わらない為、言い逃れはできなかった。

「何よ……目覚めたと思ったら……私への嫌がらせのつもり……？」

「「っ!?!」」

こんな状況下で重福が目覚めてしまう。重福の声を聞いた途端、ツナたちは重福を警戒してしまう。だがその時、突風が吹き重福の前髪がめくれる。

「「ん……!?!」」

一瞬であったが佐天、美琴、黒子は目にした。なぜ驚いたかという
と、重福の眉毛が普通の人よりも太かったからである。

「見たわね……!?!」

重福は自分の眉毛を見られたとわかりツナたちを睨みつける。

「まあいいわー。だったら聞かせてあげるわよ!」

重福は語り出す。重福にはかつて彼氏がいた。しかしその彼氏を常盤台の生徒に取られ挙げ句、別れ際に彼氏に変な眉毛だと言われた。その時、重福は決めた。自分から彼氏を奪った常盤台の生徒に復讐し、生徒の眉毛を面白眉毛にすることを。

「「……」」

常盤台の生徒を面白眉毛にするという、よくわからない方向になった理由に佐天、美琴、黒子についていけなくなってしまっていた。

「わかるよ。その気持ち」

「え……!?!」

「「え?!」」

自分の気持ちがあわかってくれると言ったことに重福は驚き、美琴たちはなぜ重福の気持ちがあわかるのかわからず驚きの声を上げる。

「いや眉毛の話じゃなくなっつき。俺も中学の時に好きな女の子がいたんだ。もうフラれちゃったけどさ」

「あ、あなたも……？」

「うん。だから君のフラれた時の気持ちはわかるよ」

ツナの脳裏には同級生でずっと好きだった笹川京子の姿が浮かんでいた。自分と同じ思いを知って重福は驚いてしまっていた。

「フラれた時、苦しくて苦しくて……俺、一人ですっごい泣いたのを今でも覚えてる」

「私も……同じです……」

「……」

ツナの話聞いて重福も同じだと答える。あまりにも悲しすぎる話に美琴たちは二人に同情していた。

「でもさ。きつといい人が見つかるよ」

「そうでしょうか……？ こんな変な眉毛してる私なんか……」

「そうかな？ 別に変だとは俺は思わないけど」

「ほ、本当ですか……!?!」

「うん。それに君は可愛いんだしさ。もっと自信を持った方がいいよ」

「可愛い……!?! / / /」

「なっ!?!」

「……」

ツナが可愛いと言った瞬間、重福はほんのりと顔を赤らめる。ツナの発言に美琴と黒子は衝撃を受け、佐天は黙ったまま殺気を放っていた。

「あの……手紙書いていいですか?」

「手紙? 別にいいよ」

「ツナさん……?」

「佐天? どうし……ひいいいい!」

佐天が低い声でツナに話しかける。ツナが普通に振り返ると、そこには殺気を放っている佐天がおり、ツナはあまりの恐怖に悲鳴を上げてしまっていた。

「さ、佐天!?! な、何で怒ってるの!?!」

「怒ってませんよ。ただ一つだけ言っておきたいことがあります」

「な、何……!?!」

「今日。ご飯抜きです」

「ええええ!? 何で!?!」

突然、佐天が怒ったと思っただけならさらにご飯抜きと言われ動揺してまうツナ。

「はあ……」

「全く……罪な男ですの」

またやらかしたツナに美琴と黒子は頭を抱えてしまう。

こうして事件は解決したものの、新たに問題が増えてしまったのだった。

標的（ターゲット） 18 罨

重福省帆は警備員アシナスキルに連行され、事件は無事に解決した、

「あ、あの佐天……？」

と思われたが、ツナが重福に可愛いと言ったこと、そしてその言葉によつて重福がツナに惚れてしまった為、佐天の機嫌は悪くなり、ツナが話しかけてもほとんど無視されてしまうという状況である。現在ツナたちは初春と合流した後、学舎の園にあるスイーツ店に来ていた。しかし空気は最悪だった。

「お、俺が悪かったからさ……」

「……」

何で佐天が怒っているのかわからないが、とりあえずツナは謝るが、佐天の機嫌は直ることはなかった。

「あの……何かあったんですか……？ 沢田さんが何かしたっていうのはわかるんですけど……」

「えっと……まあ色々……」

「話せば長くなりますの……」

初春が小声で美琴と黒子に尋ねる。初春と同じように美琴と黒子も小声で話す。黒子はなぜ佐天があんなに機嫌が悪くなってしまうたかの原因を話す。

「成る程……それは沢田さんが悪いですね……」

「当の本人は自覚がないですがね……」

（何で怒ってるのー！？ 俺、佐天に何したっけー！？ わかんねえー！）

黒子の話を聞いて初春は納得する。黒子の視線の先にはなぜ佐天がこんなにも不機嫌なのかわからず頭を抱えるツナがいた。考えても考えても佐天が不機嫌な理由も、どうすれば佐天の機嫌が良くなるのかもわからずツナはもうどうしたらいいのかわからないでいた。

「ねえ……なんとかした方がいいんじゃないの……？ 沢田もすつごい責任感じてるみたいだし……」

「なんとかって言われましても……本当のことを言えませんか……」
「正直、沢田さんに佐天さんが機嫌が悪い原因を気づかせるのは不可能ですの……だから他の方法で佐天さんの機嫌を良くするしか……」
美琴の提案により初春と黒子は佐天の機嫌を直す方法を考える。

「あつー！」

ここで初春があることを思いついた。初春はすぐに携帯を取り出すと、何かを入力し始める。

(メール?)

初春が携帯を取り出して少しするとポケットに入れてある携帯が鳴る。一応、連絡用にツナは携帯を渡されている為、携帯を持っている。

(初春から? 近くにいるのに何でわざわざメールを……)

すぐそこにいるのにも関わらず初春が自分にメールをしてきたことに違和感を覚えつつも、メールを確認する。

(これって……)

メールの内容を見てツナ。そして不機嫌な佐天の方を向く。

「さ、佐天……?」

「何ですか?」

ツナがおそろるおそろる話しかける。佐天は少し反応が遅れたものの、無視せず反応した。

「こ、今度さー! 二人で映画でも見に行かない!」

「え……!?!」

ツナは勇気を振り絞ってそう言う。不機嫌なっていた佐天であったが、まさか映画に誘われるとは思ってもいなかったのか、佐天は目を見開いて驚いてしまう。

「い、嫌なら別にいいんだけどさ……」

(な、何で急に!?! で、でも二人で映画って……!! / / /)

佐天はなぜツナが映画に誘ってきたのかわからなかった。しかし佐天はこれはデートといっても過言ではないのかと思ひ、ほんのり顔を赤らめてしまう。

(こんなので本当に佐天の機嫌が直るの!?!)

ツナはこれで佐天の機嫌が直るのか信じられないでいた。この作戦は初春がメールで送ったものであり、ツナの考えではない。ツナはメールに書かれていたことをそのまま言っただけに過ぎない。

「し、仕方ないですね……!! ツナさんがそこまで言うならいいですよ……!!」

(本当に機嫌が治った?! 何で?! でも助かった……)

佐天の機嫌は良くなり、さらに映画に行くことまで了承する。ツナはなぜ今で佐天の機嫌が良くなったのかはわからなかったが、佐天の機嫌が良くなってくれた為、安堵した。

「なんとかなりましたわね……グツジョブですわ初春」

「よかったです……」

「ていうか何でこつちまでハラハラしなくちやならないのよ……沢田には今度、何か奢ってもらうなり何かしてもらわないといけないわね……」

どうなるかわからずずっと緊張していた黒子、初春、美琴であったが、佐天の機嫌が良くなったのを見て安堵した。

(何かする?)

美琴は自分の言った言葉に何か引つ掛かりを覚える。少し考えと美琴は悪い笑みを浮かべた。

(いいこと思いついちゃった♪)

何を考えているかはわからないが、ろくでもないことを考えていることは確かだということはある。美琴が悪いことを考えているとは知らず、ツナたちはスイーツを堪能する。

「あー! 美味しかった!」

「そろそろ帰ろうか」

スイーツを食べ終えて満足する佐天とツナ。スイーツを食べ終えて、後は帰るだけ、

そう誰もが思った時だった。

「つ・か・ま・え・た♪」

「み、美琴……!!」

いつの間にかツナの後ろに立っていた美琴が、ツナの肩を右手で掴

んでいた。ツナの視界には笑顔で自分の右肩を掴み、満面の笑みを浮かべる美琴の姿が写る。そんな美琴の姿を見てツナはもう嫌な予感しかなかった。

「あ、あのー……ど、どうしたの……?」

「決まってるじゃない。あんたを逃がさない為よ。今までさんざんさんざん逃げてくれたからね。これでもう逃がさないわ」

美琴の言葉でツナは美琴が一体、何を考えているのかツナは理解すると同時に顔を真っ青になる。

「お姉様。いくらお姉様でも見逃すわけにはいきませんの。即刻、止めていただきたいですの」

「そう。なら沢田がさつき佐天さんにしたことをバラしちゃおっかなー?」

「なっ!」

「っ! / / /」

「?」

黒子は美琴のやろうとしていることを止める。だが美琴に先程のことをバラすと言われ、ツナと黒子は驚きの声を上げ、佐天は顔を赤くする。初春は何のことかわからず疑問符を浮かべる。

「いくら正式な風紀委員ではないとはいっても、これがバレたらどうなるかしら? 証拠はないにしても、目撃者だっているんだから」

(こ、断れねえ……はめられた……)

もうここでツナに断るという選択肢はなく、選べる選択肢は一つしかなかった。

「わ、わかりました……」

「やрийい! じゃあちよつと運動場を貸し切ってくるから! ちゃんと来なさいよー!」

そう言うのと美琴は席を立ち、運動場へと向かって行く。

「あの……何かあったんですか?」

「初春。あなたは知らなくていいですの」

黒子は初春の肩に右手を置き、そう言った。

学園都市に7人しかいないレベル5と世界最強のマフィアの次期

ボス候補の戦い。果たしてどうなる!?

標的（ターゲツト） 19 大空（ツナ） VS 超電磁砲
（御坂美琴）

美琴に見事にはめられて戦うこととなったツナ。現在ツナは運動場にいた。運動場にはツナと美琴しかいなかった。

「この日をどんなに待ちわびたことか……覚悟しなさい沢田！」

「はあ……うん……」

やる気満々の美琴に対して、ツナは全くといっていい程やる気がなかった。

美琴が戦うという噂が広がったのか、運動場の外にはたくさんの方々がいた。

「御坂様が戦うらしいですわ。相手はあの殿方だとか」

「何であの殿方と御坂様が？」

「御坂様が戦いたいと言ったららしいですわよ」

「え!? じゃあ相当な能力者ってことですよ!？」

「でも相手は学園都市第3位の御坂様ですよ。あの殿方に万に一つも勝ち目は……」

コソコソと話し始める常盤台の生徒たち。生徒たちは美琴の圧勝と思っていた。

「凄い人気ですね」

「当然ですの。常盤台のエースであるお姉様が戦うのですから」

「それにしてもツナさんやる気が無さそう……大丈夫かな……?」

ギャラリーの多さに驚く初春であるが、黒子は全く驚いてはいなかった。佐天はやる気のないツナの姿を見て、少し心配になっていた。

た。

「何の騒ぎですか?」

「げっ! 婚后光子……」

黒子たちの元へ扇子を持ち、帽子を深く被った黒髪のロングの少女がやって来る。黒子は少女の名を嫌そうな顔をしながら呟いた。実は重福に気絶させられた被害者の一人でもある。

「白井さん。知り合いですか?」

「ええ、まあ……」

佐天が知り合いかと尋ねるも、黒子は適当にしか答えなかった。

「それよりもこれは一体、何の騒ぎですか?」

「御坂さんが戦うっていう噂を聞いて集まっているんです。ほら。あそこに」

説明を終えると初春は運動場を指を指す。婚后は初春の指を指した方向を見る。

「御坂……? まさか超電磁砲レールガンの異名を持つ学園都市第3位の……?」

「そうですね」

「そんな相手に勝負を挑むなんて一体、誰が……って男!? な、なぜこの学舎ジャッジメントの園に!」

「彼は風紀委員の協力者です。常盤台狩りの事件の捜査で来ていました。あなたが無様にもやられた犯人を検挙したんですの」

「無様……!」

黒子の言葉に怒りを露にする婚后。実は婚后は重福に気絶させられた被害者の一人である。

「とはいえこの勝負。結果は見えていますの」

「そうですね。いくらあの殿方が犯人を検挙したと言っても、レベル5。それも第3位に勝てるわけ……」

「お姉様に勝ち目はありませんわ」

「はあ!? な、何を言っていますの!」

「見ていればわかりますの」

「今日は厄日だったわ！ 手柄は取られるわ！ ナッツは私に怯えるわ！」

「いや！ ナッツの件は自業自得だよね!？」

「とにかく！ さっさとやるわよ！」

「はいはい……」

ツナは27と書かれた手袋をはめると目を閉じると、大きく深呼吸した。そしてツナの瞳の色が変化し、額に炎が灯り、手袋が赤いグローブへ変化する。

「その手袋どうなってんのよ……まあいいわ！ これで思う存分暴れられるわね！」

ツナの手袋が変化したことに驚く美琴であったが、すぐに電気を迸らせる。

「一つだけ約束して欲しいことがある」

「何よ？」

「この勝負。俺が勝ったらもう俺に勝負を挑むのを止めて欲しい」

「何？ もう勝った気？ 余裕ね」

「別に。そんなんじゃない」

「でもその条件を素直に私が呑むと思う？」

「何だ？ 負けるのが怖いのか？」

「何ですって？」

ツナの言葉に少しだけイラついたのか、ピクツと美琴は反応する。

「それともお前は約束の一つも守ることができない人間なのか？」

「言ってくれるじゃない。いいわよ。その条件呑んであげるわ。その代わり私が勝ったら私のパシリになってもらうわ」

「わかった」

「随分と素直ね。自分に言っておいてアレだけど」

「お前に俺が倒せるとは到底、思えないからな」

「本当にイラつくわねアンタって！ 後で吠え面かいても知らないわよー！」

そう言うのと美琴の右手の周りに黒い粉のようなものが集束していく。そして黒い粉は固まっていき、剣が造形される。

「砂鉄でできた剣か」

「ご明察。流石ね」

「元いた世界にお前と同じ力を使う奴がいたからな」

ツナの脳裏には居候であり、雷の守護者である子供のランボと、十年後の自分と現在の自分を5分間だけ入れ替える兵器、十年バズーカによって召還された大人ランボの姿が浮かんでいた。シモンファミリーの一人である大山らうじとの戦いで、大人ランボは砂鉄でできた角を造形していた。

「砂鉄が振動してチェンソーみたいになってるから、触れるとちよーっと血が出るかもね」

そう言うのと美琴は砂鉄でできた剣でツナに斬りかかる。ツナはその場から一步も動くことなく、美琴の斬撃を最低限の動きだけで躲していく。

「まだまだー！」

美琴は右足に電撃を纏わせ、ツナの首に向かっておもいつき蹴りを喰らわせる。だがツナは炎を纏った左腕で美琴の蹴りを防いだ。美琴はこのままやつても埒が明かないと判断すると、一旦、ツナから距離を取る。

「こんなことだってできるのよー！」

砂鉄の剣が鞭のようにしなやかになり、ツナへと向かっていく。だがツナはこれでもその場から動くことはなかった。

「っ!？」

「この程度か?」

ツナは砂鉄の剣を右手で掴んだ。砂鉄の剣を受け止めたことに美琴は驚きを隠せないでいた。ツナにとってこの程度の攻撃は避ける

までもなかつた。

「死ぬ気の零地点突破。初代エディション」ファースト

「っ!?!」

ツナがそう呟いた瞬間、砂鉄の剣を凍らせる。氷はどんどんと侵食していき、美琴の腕に迫っていくが美琴は自分の腕が氷で侵食される前に砂鉄の剣を手放し、凍らされるのを防いだ。

一方でギャラリーはざわついていた。どう見ても発火能力しか使えないであろうツナが氷を使ったのだから。

「御坂さんの剣を凍らせた!?!」

「まさか炎だけでなく氷も扱えたとは……一体、どれだけ隠し球を持っているんですの……!?!」

「流石、ツナさん……」

能力者ではないと知っている初春、黒子、佐天もツナが炎だけでなく氷まで使えたことに驚いていた。

「あの殿方、発火能力以外の能力まで……!?! まさか多重能力者!?!」デュアルスキル

「沢田さんは能力者ではありませんの。レベル0ですわ」

「な、何を言っていますの!?! あれが能力じゃないわけ……!?!」

「あの力は私たちの使う能力と原理が違いますの。やろうと思えば私たちもできるらしいですの」

「氷……!?!」

「隙だらけだ」

「しまった……!?!」

美琴は砂鉄の剣を凍らされたことに驚く。ツナはその隙をつき、炎を逆噴射させて美琴の後ろを取る。

「終わりだ」

「何の真似よ」

ツナは美琴の首元に手刀を突きつける。美琴はなぜか攻撃を当てないことに不満の様子だった。

「俺はお前を傷つけるつもりはない。それだけだ」

「強者の余裕ってわけ?」

「俺はさっさとお前に負けを認めさせて、こんなどうでもいい勝負を終わらせて帰りたいだけだ」

「どうでもいいですって……!?!」

どうでもいいと言われて怒りを露にする美琴。

「ふざけんじゃないわよ!」

美琴の全身から広範囲に渡って電流が放たれる。ツナは炎を逆噴射させてこの場から離れる。

「こっちは真剣にやってるのよ!」

「真剣だと? 無理やり戦わせておいてよくそんな台詞が吐けるな」

「うるさい!」

美琴は右手の掌から連続で電撃を放っていく。だがツナは空中や地上に何度も何度も高速移動を繰り返して、いとも容易く躲かしている。

「このっ!」

「いくら一撃一撃が強くても、頭に血が昇ってる今のお前じゃ当てるのは無理だ」

「偉そうなことばっか言ってんじやないわよ! ちよつとは黙って戦

いなさいよ!」

美琴は砂鉄を粉状にしたまま操ると砂鉄の竜巻を発生させて、ツナを竜巻の中に閉じ込める。

「私の全身全霊の一撃よ! 喰らいなさい!」

「ナッツ。形態変化。カンビオ・フォルマ 防御モード」

轟音と共に雷雲から雷がツナに向かって一直線に降り注ぐ。美琴の放った電撃によって辺り一面が煙に包まれていく。

「はあはあ……どうよ……? 人間相手にこの技を使うのはどうかと思っただけど……アンタにはこれぐらいやらないとね……」

煙の中にいるであろうツナに向かって不適な笑みを浮かべながら美琴はそう言う。

「でなくっちゃな」

「っ!」

煙の中からツナの声が聞こえてくる。そして徐々に煙が晴れていく。

「お前の実力がこんなものなら拍子抜けだぜ」

「マント……!」

そこにはマントを纏い、五体無傷のツナがいた。あれだけの攻撃をマントで防御したことに美琴は驚きを隠せなかった。

「サンキューナッツ」

「ガウ」

「マントがナッツに……!?! どうなってるのよ……!?!」

マントが消えるとナッツはツナの肩に乗る。ナッツがマントになっただけで美琴は驚きを隠せなかった。

「言っただけだぞ。ナッツは俺の相棒だ」と

「い、いや! それよりも! ただのマントで私の雷撃を防いだわけ!?!」

「このマントはただのマントじゃない。俺の炎と同じ効果を持ったマントだ」

「どういうことよ?」

「俺の炎の特徴は調和。調和とは矛盾や綻びのない状態。つまりこの

マントでお前の雷撃そのものを無力化したんだ」

(無力化ですつて……!?!? これじゃますますあいつと同じじゃない……!?!?)

無力化と聞いて、美琴の脳裏にある人物に浮かんでいた。それと同時に両腕の拳を握り怒りを露にする。

(だったらー!)

美琴はポケットに入っているコインを取り出して、自信の得意技である超電磁砲レールガンを放とうとする。

「え!?!」

美琴はポケットの中を探すがコインはどこにもなかった。なぜコインがないのかわからず美琴は動揺してしまう。

「探し物はこいつか?」

「っ!?!」

ツナが右手を広げると、美琴のポケットにあるはずのコインがあった。美琴はそのことに驚きを隠せないでいた。

(あ、あの時……!?!?)

首元に手刀を向けられていた時に、コインを盗まれていたことに美琴は気づく。

「お前のあの技は厄介だからな。封じさせてもらった」

「ぐっ!」

「降参しろ。お前のおきも封じた。お前に勝ち目はない」

「降参しろですつて!?! 笑わせるんじゃないわよ! 超電磁砲レールガンを封じたら私が戦えないとも思ってるわけ!?!」

「諦めの悪い奴だ……仕方ないな」

そう言うツナは持っていたコインの1枚をデコピンで弾いて美琴の前に飛ばし、ナッツをリングの中に戻す。美琴はなぜコインを返すのかわからないでいた。

「撃ってみろ。俺はこの場から一步も動かない。防御もしない」

「はあ!?! 何、言ってるのかわかっているのあんた!?!」

「お前に負けを認めさせるのは容易じゃない。そう判断しただけだ」

「馬鹿じゃないの!?! 当たったらあんたといえでもタダじゃすまない

のよ!?!」

「当たればだろ。いくら強力な技でも当たらなければ意味はないからな」

音速の3倍以上の超電磁砲レールガンを一步も動かず、さらには防御すらしないと言い出したことに美琴は驚きを隠せないでいた。

「どうした? 怖じけついたか?」

「ふ、ふん! やってやろうじゃない!」

美琴は地面に落ちたコインを拾うと、コインをデコピンで弾いて上に飛ばし超電磁砲レールガンを発射する体勢に入る。

「しっかりと狙えよ」

(どこまでも舐めやがって! 喰らいなさい!)

上に飛ばしたコインが右手の辺りに落ちてくると、美琴はコインを弾きツナへと飛ばす。音速で飛ばしたコインの余波で地面が抉れていく。

「う、嘘でしょ……!?!」

美琴の視界には信じられない光景が映っていた。少しだけ体を傾け、超電磁砲レールガンを躲し五体無傷のツナが立っていたからである。

「よ、避けた……!?! お姉様の超電磁砲を……!?!」

黒子も美琴と同様、ツナが超電磁砲レールガンを避けたことに驚きを隠せなかった。他の人たちも驚きのあまり喋ることすらままならなかった。

「ほ、本当に私の超電磁砲レールガンを避けた……!? どうやって……!?」

「お前の目線さえ見ていれば大体、どこに撃つてくるかわかる。それにこの技は真っ直ぐにしか飛ばないという弱点もある。はつきり言えば、さっきの攻撃よりも避けるのは簡単だ」

「か、簡単ですって……!? いくら撃つ場所がわかってても私の超電磁砲レールガンは音速の3倍のスピードよ！ 一体どういう動体視力してるのよ!?!」

「俺はお前のコインよりも速い奴と戦ったことがある。はつきり言っ
てそいつに比べたら、お前のコインは止まって見えたぞ」

「私のコインよりも速いですって……!?」

ツナの脳裏には虹の代理戦争で戦ったバミューダ・フォン・ヴェツ
ケンシユタインの姿が浮かんでいた。

「お前のおきも完全に封じられた。降参する気になったか?」

「……!?!」

流石の美琴も強気ではいられなくなり、何も言い返せなくなる。

(こいつはわざと私の超電磁砲レールガンを撃たせた……避けられたのは偶然
じゃなくてあいつ自身の実力……だとしたらこいつに私の攻撃は当
たらない……!?!)

自身の最速最強の技まで避けられた時点で、美琴は自身の攻撃がツ
ナには通じないということを悟る。そして美琴の脳裏に敗北という
文字が浮かび上がる。だが負けを認めたくない自分が心の隅にある
為、何もできず放心状態になっていた。

その時だった、

「随分と楽しいことをしてるじゃないか御坂」

「なっ!？」

(誰だ?)

二人の前に眼鏡をかけ、スーツを着た黒髪ロングの女性が現れる。女性の姿を見て美琴は顔を青ざめ、ツナは疑問符を浮かべる。

「りよ、寮監……!？」

(寮監……? いやそれよりも美琴の様子が……?)

目の前の女性は美琴たちの住んでいる寮の寮監であった。ツナは美琴の様子がおかしいということに気づいていた。

「それで? これはどういうことだ？」

「こ、これは! その……修行です! お互いを高め合う為にと思いまして!」

「修行……確かに自分の力に慢心せず己を磨くことは良いことだ」

美琴は寮監を恐れているのか慌てて言い訳をする。寮監は修行と聞いて、眼鏡をクイツと上げてそう呟く。

「だがこれはお互いを高め合う修行なのか? お前が無理やり付き合わせたのではないか?」

「け、決してそのようなことは!？」

「ほう。じゃあなぜお前にはほとんど砂埃がついていないのに、彼には砂埃がついているんだ?」

「っ!？」

寮監がそう言い放った瞬間、美琴は顔を真っ青にしてしまう。

「それに彼に外傷もない。にも関わらずお前は彼よりも疲弊している。これはお前の攻撃を彼が避け続けたということ。それ程の実力者がお前に反撃できないとは到底、思えないがな」

「そ、それは……!？」

「本当にお互いを高め合う修行なら彼は反撃しているはず。なのにお前には外傷どころか砂埃もついていない。これは彼に戦う意思がなかったという証拠じゃないのか?」

「……」

(俺たちの戦いを見てもいないのに……本当に寮監なのか……?)

寮監の言葉に美琴は反論できず黙ってしまった。寮監の分析力にツナはこの女性が本当に寮監なのか疑ってしまう。

「まあ。本当に修行だったとしても、お前の攻撃の影響で学舎の園の電子機器がショートしたんだ。この責任を取ってもらわないとな」

そう言うのと寮監はゆっくりと美琴に近づいていく。美琴は恐怖のあまり動けないでいた。

「ふん！」

「ぐぶっ!？」

「なっ!？」

寮監は美琴の腹部に拳を叩き込み、美琴を一撃で気絶させた。まさか気絶させるとは思ってはみなかった為、ツナは驚きを隠せないでいた。

(この人……ラルと同じタイプだ……)

ツナの脳裏には元イタリア海軍潜水奇襲部隊コムスピンの教官にして、ボンゴレ門外顧問の一人であるラル・ミルチの姿が浮かんでいた。

「そこの君」

「な、何だ？」

「御坂が迷惑をかけてすまなかったな。こいつにはきつく言っておく。だから御坂を責めないでやってくれ」

「あ、ああ……」

「もしまた御坂が君に迷惑をかけるようなことがあれば遠慮なく私に言ってくれ。私がみっちりと罰を下す」

「できれば酷いことはしないで欲しい。これでも美琴は俺の大事な友達なんだ」

(これだけのことをした御坂に文句の一つも言わないどころか、御坂のことを心配するとはな……)

ツナの言葉を聞いて寮監は驚いていた。そして少しだけ口元を緩ませ微笑む。

「優しいのだな。君は」

「俺は友達が傷つく姿を見たくない。それだけだ」

「仕方がないな。君の意見を聞かないわけにはいかないな」

寮監はツナの言葉を聞いて、美琴の処遇について改めることを決めた。

「今日のところは正座で反省文10枚を書かせる程度にしよう」

「え……!?!」

自分の意見が通ったのかと思ったら、罰を執行することが変わらなかった為、驚きを隠せなかった。

「悪いが君の意見を全て尊重はできない。学園都市3位といつても御坂はまだ子供だ。間違ったことをした子供を正してやるのが私たち大人の役目だからな」

「……」

寮監の言っていることは間違っていない為、ツナは反論できず黙ったままであった。

「本来であれば20枚の他に1週間寮の掃除を一人でやらしてもらおうと考えていたんだがな」

「そ、そうか……」

「それでは私は失礼するよ」

そう言う寮監は美琴の襟を右手で掴み、そのまま引つ張って去ってしまった。

ツナ 御坂美琴 大空 vs 超電磁砲。ツナの勝利？

標的（ターゲット） 20 女王

美琴の戦いを終えたツナ。美琴の戦いが終わったことで黒子たち以外は帰ってしまう。

「このままじゃ帰れないな……」

ツナは炎を逆噴射させて黒子たちの元の場所へ一気に移動する。運動場にいたはずのツナが急に現れたので黒子たちはビクツとしてしまった。

「ぎ、沢田さん！ 急に移動しないで下さいですの！ 心臓に悪いですわー！」

「わ、悪い……言っておきたいことがあつてな」

「何ですか？」

「俺は今からこの運動場を整備する。だから先に戻って欲しい」

「それだったら私たちも手伝いますよ」

「気持ちありがたいがこれは俺の問題だからな。俺一人で片付ける」

初春が手伝うと言ったが、ツナは自分たちが戦って運動場をボロボロにしてしまった為、自分一人でやることを決める。

「わかりましたわ。じゃあ私たちは先に帰りますわ」

「ツナさん。早く帰って来て下さいね」

「ああ。わかった」

黒子たちは先に帰ってしまう。とりあえず運動場の整備を始めようとするツナ。

「まさかあの美琴さんを圧倒するなんてね」

「誰だ？」

ツナの背後から女性の声がする。ツナが振り返るとそこには十字形の星が入った瞳に肩の辺りから2つに分けた蜂蜜色の長い髪の少女がいた。

「食蜂操祈。といったらわかるかしら？」

「いや……わからないんだが……」

「私のことを知らないなんて情報力が乏し過ぎじゃないかしら？」

「お前がどれだけ有名かは知らないが俺は最近、学園都市に来たんだ」
「最近？」

「ああ」

「もしかしてあなた。原石？」

「原石？」

原石という聞いたことのない単語にツナは疑問符を浮かべた。能力は通常、学園都市の技術によって時間をかけて能力を開花されるのである。だが中に学園都市の開発を受けず、能力が使えるものがある。そういう能力者は原石と呼ばれる。

「能力者なのに原石を知らないのお？」

「俺は能力者じゃない。こここの言い方で言えば俺はレベル0だ」

「レベル0？ 冗談にしては全然、面白くないんだゾ☆」

「そう言われても事実なんだがな……といっても提示できる証拠も何もないんだが……」

能力者ではないと言ってはいるもののツナは、自分が能力者ではないということ証明できない為、困惑してしまっていた。

「そういえば名前を聞いてなかったわねえ」

「沢田綱吉だ」

「沢田綱吉……聞いたことないわあ。御坂さんよりも強いなら学園都市の順位に入ってもおかしくないのに」

「死ぬ^{このちから}気の炎は能力じゃないからな。能力者は能力を使う時に演算するようだが、俺はそんなことはしていない」

「能力じゃないねえ……」

「それよりも俺に何の用だ？」

操折は能力じゃないと聞いて興味を示す。ツナは異世界のことを言うのはあまり得策ではないと考え、話題を反らした。

「特に用はないわあ。ただ御坂さんに勝ったあなたと話してみたいと思っただけ」

「その発言だと美琴のことを知ってるっていうことか。じゃあ操折は

美琴の友達なのか？」

「私のことをいきなり呼び捨てだなんて。失礼だゾ☆」

「す、すまない……」

「まあそれは別にいいんだけどお。そんなことより私が御坂さんの友達っていうのは止めて欲しいのよねえ。私、御坂さんのこと嫌いなんですよ」

「友達じゃない……なら腐れ縁ってやつか」

「ま。そんなところねえ」

(美琴と操折はリボンとコロネロと同じようなものか……)

ツナはリボンと元イタリア海軍潜水奇襲部隊コムスピンの隊員にして、最強の赤ん坊アルコバレーノの一人であるコロネロの姿が浮かんでいた。

「もしかして挨拶代わりに美琴と頭突きとかしてたりするのか……？」

「何を言っているのかわからないんだけどお……」

ツナの言葉を聞いて操折は何言っているんだこいつ？ という目でツナのことを見ていた。リボンとコロネロは挨拶代わりに頭突きをするということをしていたので、ツナの中で腐れ縁とはそういうものだと思っているのだ。

「ま。面白いものを見せてくれたお礼に、特別に私の能力を見せてあげるわあ」

「リモコン？」

操折は肩掛けバッグからテレビのリモコンを取り出した。急にリモコンを出した意味がわからず疑問符を浮かべていた。

(御坂さんでも勝てない相手を私が一発で操ったら、御坂さんどんな顔をするのかしらあ?)

操折の本当の目的は御坂をギャフンと言わせる為にツナを操るというものだった。操折は学園都市に7人しかいないレベル5の一人であり学園都市最高の精神系能力者なのである。能力名は心理掌握メンタルアウト。ミクロレベルの水分操作で、体内の水分の繊細な制御、主として脳内物質の分泌、血液・髄液などの配分により間接的に精神に干渉するというものである。人を操作するだけでなく記憶の読心、人格の洗脳、

念話、想いの消去、意志の増幅、思考の再現、感情の移植など精神に関する事ならなんでもできるのである。

(これで彼は私の支配下……後は証拠の為の写真を……)

操折はツナにリモコンを向けるとリモコンのスイッチを押した。

「それで？ どんな能力なんだ？」

(効いてない!? どうして!?)

完全にツナを操作したと思った操折であったが、ツナには全く効果はなかった。操折はなぜ自分の能力が効かないことに驚きを隠せなideいた。操折はこの後、何度もしリモコンを押すがツナには何の効果はなかった。

(どうして……どうして私の操作力が効かないわけえ!?)

自分の能力が効かないことがわからず操折は動揺してしまっていた。ツナに精神系の攻撃や毒物による攻撃は通じない。なぜなら大空の死ぬ気の炎の特徴は調和だからである。調和とは矛盾や綻びがない状態。つまり操折の能力は調和を乱しているからである。

(ま、まさか彼と同じっていう訳え!? で、でも彼と違って体のどこにも触れていない……どういことなのお!?)

操折は動揺すると同時に、脳裏にある人物が浮かんでいた。

「どうした？ 能力を見せてくれるんじゃないのか？」

「な、なんかリモコンの調子が悪くってえー。能力が見せられないみたいなのよねえー」

「リモコンで能力が使えるのか？ 変わってるな」

操折は正直に能力が効かなかったとは言えずリモコンの調子が悪いと言って、誤魔化した。ツナは操折の発言に対して何も疑問を抱いていなかった。

「じゃあ私は用事があるからそろそろ帰るわあ。また機会があったら会いましょう」

目的が果たせないと判断した操折は、そのまま立ち去って行った。「なんか掴みどころのない人だったな……」

ツナは超死ぬ気モードを解いて、通常モードに戻る。去っていく操折の姿を見ながらそう呟いたのだった。

標的（ターゲット） 21 機嫌と罰

操折が去った後、壊れた運動場の整備を終えるとツナは支部に戻る。風紀委員ジャッジメントの仕事を終えるとツナは佐天の家に帰る。

「ただいまー」

「お帰りなさいツナさん」

家に帰るとエプロン姿の佐天がツナを迎える。

「もうご飯できてますよ」

「え……？ 今日俺、ご飯抜きなんじゃ……」

「何、言ってるんですか。冗談に決まってるじゃないですか♪」

「そ、そうなの……？」

今日は晩御飯は食べられないと思っていたツナであったが、晩御飯が用意されていると知って戸惑う。一方で佐天は妙に機嫌が良かった。

（妙に機嫌がいいな……何かいいことでもあったのかな？）

佐天の機嫌がいいことに気づいてはいたが、なぜ機嫌がいいのかわからなかった。しかし機嫌が悪いよりはいいと思った為、ツナは靴を脱いで家の中に上がる。

「え？」

リビングに入り、いつもご飯を食べる為に使っているテーブルにはいつもとは比べものにならないぐらいの量の料理が用意されていた。

「ど、どうしたの佐天……？ なんかすっごい豪華なんだけど……？」

「なんか気合いが入っちゃいました。つい」

「そ、そう……」

ツナがあまりの多い料理に戸惑ってしまう一方で佐天はこれぐらい普通ですよと言わんばかりの顔でそう言う。ツナは戸惑いながらも食べることにする。

「そういえばツナさん。映画に行く日、いつにします？」

「映画……？」

「何、言ってるんですか。ツナさんが一緒に行こうって誘ってくれた

んじゃないですか」

「それは覚えてるんだけど……本当に行くの？」

「もしかして嘘だったんですか……？」

「う、嘘じゃないよ！ ただ俺と一緒にいいのかと思って！」

機嫌の良かった佐天が急にシユンとしてしまふ。ツナはまさかそんなに楽しみにしていたとは思ってもみなかった為、慌てて嘘じゃないと否定する。ツナの言葉を聞いて佐天は、パアツと顔を明るくした。

「そういえば美琴、大丈夫かな……？」

「御坂さんがどうしたんですか？」

「いやー。今頃、寮監に連れて行かれて正座で反省文を書かされてるはずだからさ」

ツナが美琴のことを心配しているその頃。美琴と黒子の寮では。

「も、もう膝が限界……」

「何を言っている。まだ半分しか書いていないだろう」

ツナの言う通り美琴はずっと床で正座させられながら反省文を書かされていた。美琴の横では寮監が仁王立ちしてい美琴の様子を見守っていた。黒子はベッドの上で携帯をいじっていた。

「本来であれば反省文20枚に寮の掃除を1週間、一人でやらせるつもりだったんだからな」

「珍しいですわね。寮監様が罰を軽減させるだなんて」

「軽減させるつもりなどなかったさ。ただ彼のたつての希望だったか

らな」

「沢田さんが？」

「できれば酷いことはしないで欲しい。それでも美琴は俺の大事な友達なんだって言ってな。御坂のことを心配していたぞ」

「え……!?!」

自分のことを心配し、さらに罰を軽減するよう寮監に嘆願してくれたと知って驚きを隠せないでいた。

「御坂の被害者である彼がそう言うのに、聞き入れないわけにはいかないからな」

「被害者って……そこまで言わなくても……」

「寮監様の言う通りですわ。沢田さんはお姉様の攻撃でボロボロになった運動場をあの後、一人で整備したのですよ」

「……」

自分の攻撃のせいで運動場がボロボロになったにも関わらず、ツナが一人で運動場の整備をしたと知って美琴は黙ってしまう。

「これに懲りたらもう沢田さんに勝負を挑むのは止めて欲しいですの。まあ超電磁砲レールガンを避けられた時点でもう敗北したと言ってもいいですし。もう挑むなんてことはないでしょうけど」

「ま、負けてなんかないわよ！　いつか絶対に鼻を明かしてやるんだから！」

「いい度胸だな御坂。反省文を書いている奴の台詞とは到底、思えないな」

「い、今のは違います！　言葉の綾というか！」

自分が現在、反省文を書かされているのにも関わらずツナを負かせたことを宣言する。しかし寮監は美琴の言葉を聞き逃すことはなかった。

「にしても彼は何者なんだ？　御坂よりも強いのになぜ、それにあの凍らされた砂鉄の剣……多重能力者デュアルスキルは理論上不可能なはず……なのに学園都市のランキングに入っていないんだ？」

「そ、それは……」

寮監にツナの正体について尋ねられるが、黒子と美琴は答えること

はできなかった。この後、誤魔化すのに相当苦労したそう。

再び佐天の家

「そういえば佐天。その眉毛のことなんだけど……」

「……」

「さ、佐天!？」

ツナが眉毛のことについて聞いた途端、先程まで機嫌が良くニコニコしていた佐天の顔が絶望に変わる。そんな佐天の顔を見てツナは驚きを隠せないでいた。

「初春から聞いたんですけど……あのペン……実は試供品らしくって……1週間は取れないらしくて……」

「いや……そうじゃなくって。もしかしたら消せるかもしれないんだ」

「え!?! ほ、本当ですか!？」

眉毛を今すぐに消せるということを知って、佐天の顔をパアツツと明るくする。

「うん。俺の炎の力なら」

「い、嫌ですよ！ そんなことしたら私の眉毛が燃えちゃうじゃないですか！」

そう言うとツナはリングに炎を灯した。まさかこんな荒療治とは思ってもみなかったので佐天は驚きの声を上げる。

「大丈夫だよ。俺の炎なら落書きの眉毛だけ消せるから」

「そ、そんなことできるんですか!？」

「俺の炎の特徴は調和だからさ。できると思うよ。別に嫌なら無理には言わないけど」

「そ、それなら……お願いします……」

佐天はツナを信じることにした。しかし怖いのか目を瞑っていた。ツナは炎の灯ったリングを落書きの眉毛に近づけていく。

(あれ?・熱くない………というか温かい………)

炎に当たっているのに熱いという感覚はなく、むしろ心が安らぐような温かさを佐天は感じていた。

「はい。終わったよ」

ツナがそう言うのと佐天はゆっくりと目を開けると、目の前にはツナが手鏡を持っていた。そこには黒いペンによって書かれた眉毛が綺麗に消えており、何の異常もなくなっていた。

「ほ、本当に消えてる……!?!」

鏡に映っている自分の姿を見て佐天は感動に打ち震えていた。

「ありがとうございますツナさん! 大好きです!」

「え……!?!」

「あ、ああああ!! // //」

あまりの嬉しさにとんでも発言してしまう佐天。だがすぐに自分の言ったことに気づいて顔を真っ赤にしてしまう。

この後、佐天が気絶したのは言うまでもない。

標的（ターゲット） 22 映画

次の日の放課後。 柵川中学教室。

「う・い・は・るー！」

「きゃー！」

佐天は周囲に人がいるのにも関わらず、初春のスカートを捲り上げる。初春は顔を赤くしながら悲鳴を上げる。

「今日はピンクカー」

「佐天さん！ スカートを捲るのを止めてって言うてるじゃないですか！」

「まあまあ。私と初春の仲なんだからさー。ちよつとぐらいいいじゃん」

「よくありません！ じゃあ佐天さんだって沢田さんの目の前でスカートを捲られて平気なんですか!?!」

「な、何でそこでツナさんが出てくるの!?! / / /」

初春の反論に佐天は顔を真っ赤にしながら、驚きの声を上げる。

「そ、そりゃ……恥ずかしいけど……!! で、でもツナさんになら見られても……!?!」

「ぎ、佐天さん……!?!」

「ち、違うよ初春!! 今のは違うから!!」

佐天は顔を赤くし、もじもじしながらとんでもない発言をした。初春はそんな発言をする佐天から少し距離を置き、引いてしまっていた。佐天は弁明すると距離を置いていた初春も戻って来る。

「あれ？ 佐天さん落書きの眉毛どうしたんですか？」

「実は昨日、ツナさんが消してくれたんだ」

「ええ!?! ど、どうやって!?! あれは試供品で1週間は取れないはずなのに!」

「なんかツナさんの炎は調和っていう特徴があるらしくて、それで消せたんだって」

「もう何でもありませんね……」

佐天の説明を聞いて、初春はツナのあまりの能力の幅広さに驚いてしまっていた。

「あっ！ それなら常盤台の被害者の方にも……」

「でも1週間したら消えるんでしょ？ 別にいいんじゃない？」

「良くないですよ。佐天さんだってあんな恥ずかしい思いをして……」

「いいんじゃない？」

「あ、はい……そうですね……」

初春はツナの力で重福の被害者を救ってあげようと考えるも、笑顔（目は笑っていない）で圧力をかけてくる佐天によって考えを改めてしまう。佐天はツナと知らない女の子が接触することは許せないのである。

「それはそうと今日、ツナさんと映画に行くんだよねー」

「そういえば今日、ツナさん非番でしたね。それにしてもよかったですね。ツナさんが佐天さんをデートに誘って来れるなんて」

「デ、デートなんて！ ……そんなんじゃないって！」

（まあこうなったのは私が原因なんですけど……）

デートという単語を聞いて佐天はほんのりと顔を赤くしながらデレデレしてしまっていた。初春は佐天がツナと映画に行くようになったのは自分が原因であるが、これを言うとまた佐天の機嫌が悪くなりかねないので口にすることはなかった。

「あっ！ そろそろ私の待ち合わせの時間だから行ってくるね！

じゃあね初春！」

教室の時計を見ると、ツナと待ち合わせの時刻だったので、佐天は走って教室を出る。

柵川中学校門前

「ツナきーん！」

佐天は走りながら右手を大きく振り、ツナの名前を呼ぶ。佐天の声にツナは気づき佐天の方を向いた。

「ごめんなさい。遅れちゃって」

「いいよ。俺も今来たところだから。それより一旦、帰って着替えなくていいの？」

「はい。このまま行きます」

「わかった。じゃあ行こうか」

「はい」

ツナは着替えなくていいのかと尋ねるが、佐天は着替えなくて大丈夫と答える。そう言う二人は映画館へと歩いて行く。

映画館

ツナと佐天は映画のチケットを買う為にカウンターに向かう。

「えっと。中学生一人と高校生一人でお願いします」

「本日はカップルデーになっております。なので料金はお二人で20

00円になります」

「あ。俺たちはカップルじゃなく「はい！ お願いします！」佐天!？」
店員に自分たちはカップルではないと伝えようとしたツナであったが、佐天がツナの声を遮ると同時にツナの腕に抱きついた。急に佐天に抱きつかれた為、ツナは顔を赤くしてしまった。結局、二人はカップルではないのにカップル料金でチケットを購入した。

「あ、あの佐天……いくら何でも不味いんじゃない……俺たちカップルでもないのに……」

購入した後、ツナは周りに聞こえないくらい小さな声でそう呟いた。

「嫌ですか……?」

「え……!？」

「私とカップルじゃ嫌ですか……!？」

「っ!？」

佐天は顔を赤らめ上目遣いでそう言う。ツナはそんな佐天の姿を見て、顔を少し赤くしてしまう。

「べ、別に嫌じゃないよ……!!」

「え……!？」

ツナは恥ずかしかったのか、佐天の顔を見ることができず逆方向を向いた。佐天はツナの言った意味を聞こうとするも、恥ずかしさのあまり聞けずにいた。

「と、とりあえずジュースとポップコーン買おうか!」

「そ、そうですね!」

この空気に耐えられなかったのかツナは誤魔化した。佐天もツナと同じ気持ちだったのかツナに便乗して、一緒にポップコーンとジュースを買いに行く。

標的（ターゲツト） 23 想い人の為に

映画を見終わって映画館から出ていくツナと佐天。

「お、面白かったね」

「そ、そうですね」

ツナと佐天は余程、ツナはあの時の佐天の表情が忘れられず、佐天はあの時のツナの言葉が忘れられず未だに目を合わせられないでいた。それどころか映画の内容はほとんど覚えていなかった。

（どうしよう……佐天と目が合わせられない……）

（どうしよう……ツナさんと目が合わせられない……）

二人は目が合わせられずどうしようかと思ってしまうていた。

「もう完全下校時刻だし。帰ろっか」

「は、はい……」

ツナはなんとか勇気を振り絞って、ツナは佐天に話しかけた。

「え……!?!」

ツナが一步踏み出すとツナは動きを止めてしまう。だがその代わりに佐天はツナの服の袖を右手で掴んでいた。ツナは佐天の行動に驚きを隠せないでいた。

「さ、佐天……!?!」

「手……繋いで下さい……」

「ええ!?!」

顔を俯かせながらそう言う佐天にツナは驚きを隠せないでいた。

「今日は私たちカップルだし……いいじゃないですか……」

「え!?! いや! アレは映画の料金を安くする為の嘘で……」

「ダメですか……?」

「へ……!?!」

「私と手を掴ぐのは嫌ですか……!?!」

「っ!?!」

佐天は顔を上げると、顔を赤らめ再び上目遣いでツナにそう言う。ツナも再び顔を赤くしてしまう。

結局、

「っ!?!」

ツナと佐天は手を繋ぎながら帰ることとなった。だが顔を赤らめたままであり会話が止まってしまふ。

(さ、佐天の手すっごく柔らかい……!!)

(ど、どうしよう……!!) / / ツナさんと手を繋いじやった……!!)

顔を赤らめながら黙ったままではあったものの、ツナと佐天は心の中では動揺したままであった。

「知ってますかツナさん。学園都市のどこかに金色の公衆電話があるんですよ」

「き、金色の公衆電話……!!」

しばらくすると佐天が口を開いた。佐天は妙に静かなのに対して、ツナは今だに動揺していた。

「はい。その公衆電話で好きな人に告白したら絶対に告白が成功するんですよ」

「そ、そんなのがあるの!?!」

「都市伝説ですけどね」

「あ、都市伝説か……」

佐天の話を聞いて驚いたツナであったが、都市伝説とわかり冷めてしまふ。

「他にも色々あるんですよ。逆回転する風力発電のプロペラ。幻の虚数学区。使うだけで能力が上がるレベルアップー。どんな能力も効かない能力を持つ男とか。いきなり服を脱ぎだす脱ぎ女とか」

「最後のは都市伝説っていうか、ただの露出魔だよね!?!」

佐天は自分の知っている都市伝説について話していく。ツナは最後の脱ぎ女の話だけはツツコミをいれてしまっていた。

「とういか佐天って都市伝説が好きなの?」

「はい。色々面白い情報が載ってるサイトがあるんです」

「でも本当のことかどうかわからないでしょ?」

「もう夢がないなーツナさんは。そこが面白いんじゃないですか」

佐天が都市伝説の話を切り出してから気が紛れたのか、ツナは佐天

と手を繋いでいるのにも関わらず動揺することなく平常心を保っていた。

「それにツナさんの為に色々調べてるんですよ」

「俺の為に？」

「はい。もしかしたらツナさんの友達がこの学園都市に来てたりしてないかとか。ツナさんの見たっていう三角形の物体がないかとか」

「佐天……」

自分の知らないところで佐天が自分の為にそんなことをしてくれていたと知ってツナは驚いてしまう。

「ツナさんは元の世界に帰る方法が見つかったら、やっぱり帰っちゃうんですか？」

「そりや……まあね。佐天たちと別れるのは寂しいけど」

佐天の問いにツナは少し寂しそうな表情をしながら答える。

「じゃあ私がツナさんの世界に行くって言ったら、どうします？」

「え……!?!? それってどういう……!?!?」

「私は嫌です。ツナさんと別れるなんて。私はツナさんの傍にいたいです」

「……」

佐天の言葉にツナは黙ったまま驚いしまっていた。

「何で？ 何で佐天は俺の傍にいたいのか？ どうして俺の為にそこまでしてくれるのか？」

「それは……!?!? / / /」

ツナの問いに今まで冷静だった佐天は顔を赤くしてしまっていた。

佐天はツナの問いに答えることができず黙ってしまう。

その時だった、

ドオオオオオオン

「きゃっー!」

「な、何?!」

突如、二人から少し離れた場所から雷が落ちる音がする。急に音がした為、二人は驚きの声を上げる。

「あれって……美琴の……」

ツナはあの雷が美琴のものであるということに気づく。

「ごめん佐天！ 先に帰ってて！」

「あっ……」

ツナは佐天と手を離して雷の発生した場所へと向かって行く。佐天は右手を伸ばすが時すでに遅かった。

「せっかく二人きりになれて……頑張ったのになー……」

去って行くツナの姿を見ながら、佐天はポツリと呟く。だがその想いは誰にも届くことはなかった。

標的（ターゲツト） 24 不幸少年との再会

一方、その頃。

「逃げんじやないわよ！ 戦いなさいよー！」

「不幸だー！」

当麻こと上条当麻は美琴の雷撃から絶賛、逃走中であつた。実は美琴の言っていたあいつというのは当麻のことなのである。当麻は今までも美琴に何度も勝負を挑まれていたが戦う気がなかつた為、ずっと逃げていたのだがいい加減うんざりしていた為、美琴と戦うことを決めた。勝負の結果は当麻の勝ちといつても過言ではなかつたが、当麻はまた美琴に勝負を挑まれるのが嫌だつた為やられたフリをした。だが美琴は当麻がやられたフリをしたことに気づいていた。

「いい加減にしろー！」

「くっ！」

美琴は右手から雷撃を放つ。当麻は振り返つて右手を前に出したまま立ち止まる。当麻は右手であらゆる異能を無効化できるという能力を持つている。美琴に勝負を挑まれ続けるのは過去に美琴の雷撃を右手で無効化したからなのである。

「ナツツ。カンビオ・フォルマ 形態変化。モードディフェンザ 防御形態」

「っ!？」

美琴の雷撃が当麻に迫っていく。だが美琴の雷撃と当麻の間にマントを纏つたツナが割つて入り、美琴の雷撃を防いだ。

「大丈夫……お前は……!？」

「お前……!？」

ツナが振り返ると、ツナの視界に映っていたのは以前、出会つた当麻だつた。まさか襲われていたのが当麻だつたことにツナは驚きを隠せず、当麻と前に会つた時と雰囲気が違うツナに驚きを隠せずいた。

「ていうか頭！ 頭！ 燃えてる！ 水！ 水！」

「これは大丈夫だ。気にするな」

「気にするなって……」

ツナの額が燃えていることに当麻は驚きの声を上げ慌てて水を探す。

「それより何でお前が美琴に……?」

「ビリビリと知り合いなのかお前!」

「まあな。それより何でお前が美琴に? 何かしたのか?」

「してねえよ。ただあいつの攻撃を無力化したら勝負を挑まれるようになったんだよ。いつもは逃げてただけど、いい加減めんどくさくなつたから決着しようと思って……」

「お前もか……」

「え!? お前も!」

まさか自分以外にも美琴の被害者がいるということを知って、二人は驚きを隠せないでいた。

「昨日、弱みを握られて無理やり勝負させられた……」

「マジか……あれ? 沢田ってレベル0って前に……」

「ちよつと! 何、私を無視して話してるのよ!」

自分を差し置いて喋っている二人に痺れを切らしたのか、美琴は怒りを露にする。

「それより沢田! 何で邪魔するのよ!」

「友達が襲われてるのを放っておけるわけないだろ。それに俺のような被害者をこれ以上、出すわけにはいかないからな」

「被害者って言わなくていいでしょ!」

「じゃあ犠牲者か?」

「ああ言えばこういうわねあんたは……!」

口数の減らないツナに美琴は青筋を浮かべ、怒りを露にする。

「まあいいわ! 昨日のリベンジよ! 勝負しなさい!」

「約束を忘れたのか? 昨日、俺はお前に勝った。俺が勝つたらもう勝負を挑むなと約束したはずだ」

「私は参ったなんて一言も言っていないわよ!」

(沢田がビリビリに!? こいつそんなに強いのか!?)

美琴の言葉を聞いてツナはため息をついた。しかし美琴の言う通

り、美琴は負けを認める前に寮監に気絶させられてしまった為、ツナは何も言えなかった。一方でツナが美琴に勝つたと聞いて当麻は驚きを隠せずに行った。

「この際だからはっきり言わせてもらう。お前程度の力じゃ俺には勝てない。諦めろ」

「何ですって!?!」

「能力の多様性。攻撃力。そして体術に剣術。お前はどれも優れている。それでも俺からすれば大したことはないがな」

そう言うツナの脳裏には未来で戦った幻騎士の姿が浮かんでいた。幻騎士は幻覚だけでなく体術も剣術も美琴とは比べものにならないぐらい鋭く重かった。

「だがお前が俺に勝てない要因はそれだけじゃない。自分がレベル5だという驕り、そして相手の強さも自分の弱さも認めないことだ。そんなんじゃ死ぬ気の俺は倒せない」

「さつきから私のことを見下して……!?! 何様のつもりよ!」

「俺は事実を言っただけだ。それにお前には俺と同じようになって欲しくなかっただけだ」

ツナの言葉に美琴は怒りを露にする。ツナは代理戦争の時に父親である家光と戦った時のことを思い出していた。あの時の自分は美琴と同じで自分の能力に甘え、自分の弱さも家光のことも認めておらず全然歯が立たなかった。だが呪解したりボーンの指導のお陰でツナは家光のことを認めることができ、強くなることができた。

「とにかく俺はお前ともう勝負する気もない。それと当麻に勝負を挑むのも止めろ」

「何であんたの言うことを聞かなきゃならないのよ! 私は何が何でも勝負するわよ!」

「仕方がないな……使いたくはなかったが、こうなったら奥の手を使うしかないな……」

「奥の手?」

「寮監にこのことを報告する」

「な……!?!」

寮監という単語を聞いた途端、美琴は顔色を悪くする。

「な、何よ……!?!? そ、そんな脅しで私が……!?!?」

「お前が気絶させられた後、言われたんだ。もし美琴が迷惑をかけるようなら言ってくれと。その時はみっちりと罰を下すつてな。まあ信じるも信じないのもお前の勝手だが、あの寮監がこのことを聞いたらどうなるかはお前が一番よく知ってるはずだろ」

「……」

美琴は強がってはいるものの、やっぱり寮監の存在が恐ろしいのか動揺してしまっていた。ツナが前に寮監が言っていることを伝えると、美琴は青ざめたまま黙ってしまう。

(今だー!)

ツナは美琴に隙ができたことを確認すると、ツナは当麻の右手を掴む。

「しっかり捕まってる」

「え!?!? な、何を……うおおお!?!?」

ツナは左手の炎を逆噴射させて一気に空を飛んだ。当麻はまさか空を飛ぶとは思ってもみなかった為、当麻は驚きの声を上げる。

「あつ!?!? ちよつ!?!? 待ちなさいよ!?!?」

美琴の制止も聞かずツナは当麻を連れて飛んで行ってしまふ。

こうしてツナと当麻は妙な再会を果たすのだった。

標的（ターゲツト） 25 明かす

美琴に襲われていた当麻を助けたツナ。現在二人は学園都市を飛んでいる。

「た、高えええええ！」

「暴れるな。落ちるぞ」

あまりの高さに当麻は恐怖していた。そんな当麻にツナは冷静な口調で言うが当麻の恐怖したままであった。

「家はどっちだ？」

「え？ 何？ 送ってくれんの？」

「乗り掛かった船だ。それに家なら美琴に襲われることもないだろ」

「わ、悪いな」

「気にするな。それより方向は？」

「このまま真つ直ぐでいい」

「わかった」

（にしても前に会った時と全然、雰囲気も口調違う……多重人格なのか……？）

当麻は前に会った時とツナが全然、違っていることに違和感を感じていた。

「つーか聞きそびれたんだけどよ。お前、前にレベル0だって言ってたよな。何で嘘ついたんだよ？」

「嘘はついていない。俺はレベル0だ」

「はあ!? どう考えてもお前は能力者だろ!? つーか何で能力を複数……ん!?」

ツナの言葉に当麻はツツコミを入れるが、途中であることに気づいた。

（何で俺の右手に触れているのにこいつは能力が使えるんだ……!? じゃあ沢田は本当に能力者じゃない……!? だったらこの能力は何なんだ……!?!）

当麻はあらゆる異能を無力化する右手を持っている。その右手が

ツナに触れているのにも関わらず、ツナの力は無力化されていなかった。このことから当麻はツナの力が何なのかわからずにいた。

「お前のその力が能力じゃないっていうのはわかった」

「どうしてわかった？ さっきまで信じていなかったのに」

「俺の右手はあらゆる異能を無力化できるんだ」

（能力の無力化って……佐天の言っていた都市伝説の……当麻のことだったのか……）

ツナは佐天の言っていた都市伝説の話思い出し出していた。その正体が当麻だと知ってツナは驚きを隠せないでいた。

「じゃあお前も能力者なのか？」

「いや……システムスキャン身体検査じゃレベル0っていう判定なんだ……俺もよくわかんねえんだけどさ……」

「レベル0なのに能力を無効化できる……だから美琴に狙われたのか……」

当麻の能力を聞いて、ツナは当麻がなぜ美琴に狙われるのか理解した。

「ああ。でもお前は俺の右手に触れているのに、お前の力は無力化されていない。だから能力じゃないってわかったんだ」

「お前の言う通りこれは能力じゃない。能力とは原理が違うんだ」

「でも何でそんな力を使えるんだよ？ 俺もあんまり人のことは言えねえけどさ……」

「それは……」

当麻の問いにツナは顔を俯かせて黙ってしまう。だが決意を固める。

「俺はこの世界の人間じゃないんだ」

「は……!?!」

ツナは当麻にならいいと思ったのか自分の正体を明かした。当麻はツナの言葉を聞いて衝撃を受けた。

「俺は色々あってこことは違う世界からやって来たんだ」

「い、いや……!?! いきなりそんなこと言われて信じられる……ん!?!」

ツナの言うことを信じられない当麻であったが、ここであることを

思い出す。それは前にツナがリングからナッツを出したことである。

「あつ！ そろそろ降ろしてくれ。この辺なんだ」

「わかった」

もつと色々と聞きたかったが家の近くまで来ていたので当麻は降ろしてくれと頼む。ツナはゆつくりと当麻の家の近くへ降りて行く。

「ナッツ。戻ってくれ」

「うお!？」

ツナがそう言うのとマントに形態変化したままにしていたナッツが元の姿に戻りツナの肩に乗る。マントがナッツになったことに当麻は驚きを隠せないでいた。

「本当に異世界から来たんだなお前ら……」

「悪いがこのことは他言しないで欲しい」

「お、おう……」

ツナの正体について他言しないことを了承する当麻だったが、ナッツがマントになっていたことの衝撃が抜けていなかったのか曖昧な返事になってしまっていた。

「それと連絡先を交換してくれるか？」

「連絡先？ いいけど。どうしたんだよ急に？」

「美琴に襲われた時の為にな。それ以外でも何か困ったことがあったら頼ってくれ」

「なんか悪いな。世話になってばかりで」

「気にするな。俺は風紀委員ジャッジメントの協力者だ。それに友達を見捨ててはおけないからな」

ツナの世話になってばかりな為、当麻は申し訳ない気持ちになってしまっていた。二人は連絡先を交換する。

「ビリビリの奴がもうちよつと大人しくなってくれりや沢田に迷惑をかけねえで済んだのにな……」

「あれでも俺の友達なんだ……許してやってくれ」

「確かに迷惑はしてるけど。恨んじやいねえよ」

「そうか。ありがとう」

そう言うのとツナは再び飛んで、去って行くのだった。

標的（ターゲツト） 26 虚空爆発（グラビトン）

美琴に襲われている当麻を助けてから2日後。

ジャツジメント
風紀委員177支部

「どう黒子？ 何かわかった？」

「ダメですわ。全然ですわ」

パソコンで調べ物をしている黒子にツナが尋ねるが、黒子はため息をつき、机に突っ伏す。現在黒子はここ最近、発生している連続虚空爆発事件について調べていた。事件の内容はアルミを爆弾に変えることのできる能力者が次々に爆発を起こしているという事件である。爆発が起こる前に前兆があるので死人は出てはいないが、ジャツジメント風紀委員から9人もの負傷者が出ている。爆発の能力を持つ能力者は一人だけいるのだがその者は入院していた為、アリバイがあった。その為、今だに犯人がわからないでいた。

「バンク書庫にも載ってないということは……無能力者が爆発の能力に目覚めたとか？」

「その可能性はないですわね。今回の事件の首謀者は明らかにレベル4以上の能力者。無能力者が能力を目覚めたとしてもいきなりここまでの事件を起こせるまで成長するなんてことはありませんの。能力者のレベルを上げるには時間がかかりますの」

「そっか……あっ！」

推理が外れてツナは残念そうな顔をするが、少しすると何かを思い出した。

「どうかなさいましたの沢田さん？」

「前に佐天の言っていた都市伝説のことを思い出してさ」

「都市伝説？」

「うん。使うだけで能力が上がるレベルアップっていうのがあるらしいっつて」

「レベルアップパー……聞いたことがありませんわね。まあ都市伝説ですから信憑性がありませんし。それを調べるのはあまり得策ではありませんわね」

「だよね……」

レベルアップパーのことをツナから聞くが、あるかどうかもわからないレベルアップパーのことを調べても連続^{グラビトン}虚空爆破事件の解決の糸口にはなるとは思えないので黒子はレベルアップパーについて調べることを諦めることを決意する。

「あつ！ 俺、パトロールの時間だから行ってくるね」

「何かわかったら連絡しますわ。沢田さんも気をつけて下さいですの」

「うん。わかった」

そう言うところツナは支部を出てパトロールへと向かって行く。

「もう少し手掛かりがあれば容疑者の絞り込みができますのに。遺留品を^{サイコメトリー}読心能力で調べさせても何も出せませんし。同僚が9人も負傷しているというのに……」

ツナが支部から出た後、黒子は再び机に突っ伏しながら呟いた。だがすぐに起き上がりパソコンの淵を両手で掴み、画面を凝視する。

「9人!? いくら何でも多すぎませんか!?!」

「^{グラビトン}虚空爆破事件か……学園都市は平和だと思ってたのになー」

ツナはパトロールをしながら呟く。^{グラビトン}虚空爆破事件が起こる前までは美琴が襲ってくる以外では平和だった。争いごとの大嫌いなツナにとって今回の事件は憂鬱で仕方なかった。

「沢田?」

「え?」

ツナは名前を呼ばれた為、声のする方を振り返る。そこにいたのは当麻と小さな少女だった。

「あつー！ ツナお兄ちゃんだ」

「えつと……みゆでよかったっけ？」

ツナはパトロールで子供を助けることが多く、子供の知り合いが多いのである。みゆはその子供の中の一人なのである。

「何だお前ら。知り合いなのか？」

「ツナお兄ちゃんは迷子になった私を助けてくれたの」

「へーそうなのか」

みゆがツナと知り合った経緯を説明を聞いて、当麻は納得する。

「それより当麻こそ何でみゆと一緒にいるの？」

「俺はこの子が洋服店を探してるって言うから案内してたんだ」

「どこの店に行くの？」

「セブンスミストって店だ」

「じゃあそこまで俺も一緒に行くよ。最近、物騒だからさ」

ツナはもしものことがあつてはいけないと思い、セブンスミストに着くまで二人に着いて行くことを決める。

「知ってるぜ。確か連続爆破事件だっけ？」

「うん。俺たちも調べてはいるんだけど犯人も犯人の目的もわからなくてさ。犯人はアルミを爆弾に変えるっていう能力を持っていることはわかってるんだけど」

「そいつは大変だな」

「ねえねえ。まだ終わんないのー？」

ツナは事件の詳細について当麻に話す。だがみゆは痺れを切らしたのか当麻のズボンを引っ張っていた。

「あ、ごめんね。実は俺もみゆの行くお店に用事があるんだけど、俺も着いて行つていいかな？」

「うん。いいよー」

「ありがとう」

ツナはみゆを不安にさせない為に、連続^{グラビトン}虚空爆破事件についてのことを隠し、着いて行つていいか尋ねる。みゆは笑顔でツナが着いてい

くことを了承した。

そしてツナは当麻とみゆと共にセブンスミストへ向かって行く。だがこの時、ツナたちは知らなかった。事態がすでに動き初めているということに

標的（ターゲット） 27 訪れる危機

当麻とみゆと共に歩くこと20分。目的地であるセブンスミストへと到着する。そして店内の洋服店に向かった。

「連れて来てくれてありがとうお兄ちゃん。私、行って来るねー」

「おう。転ぶなよー」

「うんー！」

洋服店が見えるとみゆは一人で先に走って行く。

「これで一安心だな。さてと帰り……ん？」

「どうしたの？」

「いやあそこにいるのって……」

みゆを無事に送り届けた為、帰ろうとする当麻であったが、何かに気づく。ツナは当麻が指を指した方向を見る。そこには鏡の前で服のサイズが合うかどうか確認している美琴がいた。

「何やってんだお前？」

「っ!？」

当麻が話しかけると美琴はビクツと肩を震わせる。そして慌てて服を後ろに隠した。

「な、何であんたたちがここにいるのよ!？」

「何でって……みゆって女の子をここまで連れて来たんだけど」

「お兄ちゃん」

ツナがセブンスミストに来た理由を答えた。服を持ったみゆが戻って来た。

「あ！ トキワダイのお姉ちゃんだ」

「昨日の鞆の子……」

みゆは美琴のことを、美琴はみゆのことを知っていた。どうやら初対面ではないらしい。

「美琴。みゆのこと知ってるの？」

「うん。昨日、この子の鞆を捜してあげたの」

昨日、美琴は固法に^{ジャッジメント}風紀委員に間違われてしまい^{ジャッジメント}風紀委員として働

くこととなったのである。その時、ツナは別の場所で子供の依頼を解決していた為、その場には居合わせてはいなかった。

「そんなことよりこの前の勝負の続きを……」

「寮監」

「っ!？」

また勝負を仕掛けようとする美琴。だがツナが自分の恐れている寮監の名前を出して来た為、美琴は顔を真っ青にする。

「前も寮監って単語を聞いた途端、顔色を悪くしてたけど何かあったのか？」

「美琴は自分の住んでる寮の寮監が苦手なんだよ」

「マジか！ いいこと聞いた！」

ツナから美琴の弱点を聞いた当麻はこれ以上なく嬉しそうな顔をする。

「ちよっ沢田！ 何で言うのよ！」

「美琴が勝負を挑むのを止めてくれれば、こんなことを言わなくていいんだけどね」

「んじや。ビリビリの弱点も知れたし俺は帰るわ」

「ビリビリじゃない！ 御坂美琴って言うてんでしょ！」

「じゃあね当麻」

「おう。またな」

美琴が怒っているのにも関わらず、当麻は何事もなかったかのように帰って行く。

「あれ？」

「ツナさん？」

「初春、佐天。どうしてここに？」

「御坂さんと買い物に来たんです。そういう沢田さんこそどうしてここに？」

「俺はみゆをここまで連れて来たただけだけど」

「み、みゆ!? だ、誰ですか!？」

「え？ その子だけだ」

みゆという知らない女の子の名前を聞いた途端、佐天が動揺し始め

る。ツナは視線を下げ、みゆの方を見る。佐天の視界には首を傾け疑問符を浮かべているみゆの姿が映っていた。

「な、なあんだ……びっくりした……」
「？」

みゆが幼い女の子であったと知って佐天は安堵する。ツナは何で安堵しているのかわからず疑問符を浮かべた。

「ちよつと私、外れるわね」

美琴はそう言うのと、その場から去って行く。口には出さなかったが美琴の向かった先は御手洗いである。

「私。トイレに行つてくるね」

「大丈夫？ 場所わかる？」

「うん。大丈夫」

みうは大丈夫だと伝えて一人で御手洗いに向かつて行った

「沢田さん。今、仕事中ですよね？ いつまでもここにいていいんですか？」

「みゆがここを出るまでは一緒にいないと。最近、物騒だから念には念を入れておこうと思つてさ」

「そうでしたね」

「物騒つて……最近、起こつてる連続爆破事件のことですか？」

「うん。だから佐天たちも買い物が終わったら、寄り道せずに帰つた方がいいよ」

「ただいま……つてあれ？ あの子は？」

「あの子もトイレに。行き違いになつたみたいですね」

ツナは佐天たちにも注意するように促していると、御手洗いに行つた美琴が戻つて来た。美琴はみゆがいないことに気づくが、佐天がみゆが御手洗いに行つたことを伝える。

「電話……まさか！」

その時、ポケットに入っていたツナの携帯が鳴る。ツナは黒子から事件のことで何かわかったのだと予測し、慌てて電話に出る。

「もしもし『沢田さん!?! 今どこにいますの!?!』わっ！」

電話に出た途端、黒子が慌てて大きな声を出した為、ツナ驚いてし

まう。

「もしかして虚空爆破!？」
グラビトン

『ええ! だから今から現場に向かって下さいませ!』
『場所は!』

『第七学区の洋服店! セブンスミストですの!』

「え……!？」

グラビトン
虚空爆破を観測した場所がまさか今、自分たちのいる場所だと知り
衝撃を受ける。

『沢田さん……? どうかしましたの……?』

「俺、今セブンスミストにいるんだ……」

『ええ!』

「俺だけじゃなくて……佐天も初春も美琴も……」

『なっ!』

観測地点にツナだけでなく、美琴たちがいると知って黒子は衝撃を
受ける。

『とにかく避難誘導をお願いしますの! 私も今からそちらへ向かい
ますの!』

「わかった!」

ツナは電話を切り、黒子の指示通り避難誘導する為の準備に入る。

「あの……どうかかしたんですかツナさん……?」

「うん。みんな落ち着いて聞いて」

佐天は電話に出た時の表情と喋り方から何かあったと推測する。

ツナはセブンスミストにて虚空爆破を観測したことを伝えた。

「ええ!?! ここが爆破!?!」

「さ、佐天! 声大きい!」

「ご、ごめんなさい!」

佐天は両手で慌てて口元を押さえる。幸い他の客には聞こえてお
らずパニックにはならなかった。

「とりあえずお店の人に協力して放送で避難誘導をしましょう!」

「私も協力するわ!」

「急ごう!」

狙われたセブンスミスト。ツナたちは無事、生き残ることができ
るのであるか!?

標的（ターゲット） 28 絶体絶命

セブンスミストにて虚空爆破が観測された。ツナたちは店の店員に頼み、放送で外に避難するように促した。幸いパニックにはならず客たちを無事に避難させることに成功した。

「よしっ！ とりあえずこれで全員……」

「美琴！」

美琴と店の中を走り逃げ遅れた客がいなか確認する。

「みゆを見なかった!」

「え？ 避難したんじゃないの?」

「俺、入り口付近で避難誘導してただけど、みゆを見てなくて……」

「まさか……!? まだこの中に……!?」

みゆが避難せずにこの中にいると知って、二人は驚きを隠せないでいた。

『初春！ 初春！ 聞きなさい!』

「今、全員避難したかどうか確認を……『今すぐそこを離れなさい!』」

二人の近くにいた初春は黒子からの電話に出る。黒子の口調は慌てており、緊急事態であるということが伺える。

『過去8件の事件の全てで風紀委員が負傷していますの！ 観測地点周辺にいる風紀委員！ 今回のターゲットはあなたですよ！ 初春!』

「っ!」

黒子から犯人の狙いが自分であると知って初春は衝撃を受ける。

その時だった

「お姉ちゃん。眼鏡をかけたお兄ちゃんがお姉ちゃんに渡してくれって」

カエルの人形を持ったみゆが笑顔で初春に向かって行く。

「よかった……無事だったんだ……」

ツナはみゆが無事だったと知り安堵する。一方で初春はカエルの人形を見て何かに気づき、みゆに飛びついた。初春が飛びついたこと

でみゆの持っていたカエルの人形が落ちる。

「逃げて下さい！ あれが爆弾です！」

「っ!？」

初春が叫んだ瞬間とカエルの人形がメキメキと不気味な音を立てながら、少しずつ形を歪めていく。

(私の超電磁砲で！)

咄嗟に美琴はポケットからコインを取り出して、カエルの人形ごと破壊することを決める。

が、

(しまった！ マズった！)

美琴は手を滑らせてしまい、コインを落としてしまう。

(間に合わない……!?)

「ナツツ！」

「GURURURU……GAOOOOO！」

美琴がもうダメだと思った瞬間、ツナの叫び声をする。

その後、動物の雄叫びが聞こえる。

「え!？」

美琴は信じられない光景を目にする。なぜなら先程のカエル人形が石化していたのだから。

「なんとか間に合ったか……」

「あ、あんたがやったの……?？」

「俺じゃない。やったのはナツツだ」

「ど、どういうこと……?？」

ナツツがカエルの人形を石化したということに美琴は驚きを隠せないでいた。今、カエルの人形を石化させたのはナツツのルツット・デイ・チエリ天空の雄叫び。大空の属性の特徴である調和によって、カエルの人形をこの建物と同じコンクリートにしてカエルの人形を石化したのである。

「その話は後だ。それより犯人はまだ近くにいるはずだ。これ以上の被害を出すわけにはいかない」

「私、多分犯人見たわ」

「本当か!？」

美琴は思い出す。御手洗いに行く途中にカエルの人形を持った奇妙な少年のことを。

「うん！ 私、犯人を捕まえてくる！ 二人をお願い沢田！」

「ま、待て！ 美琴！」

ツナの制止も聞かず美琴は犯人を追って行ってしまふ。

「よかった……無事だ……」

初春とみゆは無事だとわかって安堵する。二人は爆発すると思い込んでしまったのか、気絶してしまっていた。

「沢田さん！ 無事ですか!？」

「黒子！」

ツナが二人の無事を確認した瞬間、テレポートで黒子がやって来る。

「ああ」

「それより爆弾は!？」

「爆弾ならそこだ。石化させたから爆発の恐れはない」

「せ、石化……!？」

石化させたと聞いて黒子は驚きを隠せないでいた。

「一体、いくつ力を持っていますのあなたは……!？」

「それより初春とこの子のことを頼めるか？ 美琴が犯人を追いかけて行った」

「お姉様……あれ程、トラブルに首を突っ込むなど言ったのに……」

「それだけで済めばいいんだがな……」

「どういうことですか?」

「とにかく俺は美琴を追いかける。二人のことを頼む」

「ちよつ！ 沢田さん！」

黒子の制止を聞かずツナは美琴を追いかける。

一方、外では。

「な、何で……!?! 何で爆発しないんだ……!?!」

外では犯人である少年が驚きを隠せずにいた。自分の仕掛けた爆弾が石化させられたとも知らず。

「クソッ!」

少年は近くの路地に入る。そして自分の持っていたバッグを開ける。そこには大量のスプーンが入っていた。

「こうなったらまた仕掛けて全員吹き飛ばし……っつて!?!」

突如、後ろから少年は吹き飛ばされてしまう。

「はーい。用件は言わなくても分かるわね。爆弾魔さん」

蹴り飛ばしたのは美琴だった。美琴は笑顔で少年に近づいていく。

(嫌な予感がする……どこだ!?!)

険しい表情をしながら美琴を捜すツナ。

(頼む! 間に合ってくれ!)

ツナは何かを恐れていた。それは一体!?!

標的（ターゲット） 29 怒りと同情

犯人を追いつめた美琴。

「な、何のことだが僕にはさっぱり……」

しかし少年は自分が犯人ではないとシラを切る。

「まあそれもそうね。肝心な時に不発しちゃうようなダメダメなあんたが犯人なわけないわよね」

「黙れ！　ちゃんと成功していればあいつら全員、皆殺しにしてやれたんだ！」

「ほう」

「はっー！」

美琴の挑発に乗せられてしまい、少年はカツとなり反論してしまう。しかし自分が挑発に乗せられたことに気づき慌てて両手で口を防ぐが時すでに遅しであった。

「い、いや……それより誰も怪我なくてよかったな……」

少年は美琴の方を向いたまま、自分の後ろにあるバッグの中にあるスプーンを取り出し反撃しようとする。だが美琴は反撃される前に超電磁砲でスプーンの先端を撃ち抜いた。

「と、常盤台の超電磁砲……!?!」

撃ち抜かれたスプーンを見て少年は恐怖しながら美琴の正体を知る。美琴は少年を地面に押しさえつける。

「暴れてもいいけど今の私に手加減できる保証はないわよ」

「ハッ！　今度は常盤台のエース様か」

「いつもこうだ。何をやっても僕は地面にねじ伏せられる……」

美琴に押さえられているのにも関わらず、少年は不気味な笑みを浮かべながら呟く。

「殺してやる！　お前みたいなのが悪いんだよ！　風紀委員長だつて！

ジャッジメント

力のある奴はみんなそうだろうが！」

少年の脳裏には不良たちに殴られ、カツアゲされる自分の姿が浮かんでいた。

「？」

少年の言葉を聞いた途端、美琴は少年から手を離して少年を解放した。だが美琴は少年の前に電撃を放つ。少年は無傷であった。

「ゲッホ！ ゲッホ！」

「知ってる？ 常盤台の超能力者⁵は元々は単なる低能力者¹だった。それでもそいつは頑張って頑張って超能力者⁵と呼ばれる力を掴んだのよ。でもね。たとえ低能力者¹のままだったとしても私はあんたの前に立ち塞がったわよ。あんたのやったことは許さないし。それ以上に力に依存するあんたの弱さに腹が立つ」

「……」

美琴の言葉に少年は驚いたまま固まってしまった。

「そっちにはそっちの事情があるんでしようけど。相談に乗る前に一発、殴らせてもらうわよ！」

そう言うと美琴は右手を上げ、少年に向かって振り下ろす。少年は腕をクロスさせてその場で目を瞑るしかなかった。

「え……!?!」

だが少年に痛みはなかった。なぜかと思い目を開けるとそこには美琴の右手首を左手で握っているツナがいたからである。

「拳を引け。そいつを殴ったって傷ついた人や建物が元に戻るわけじゃないだろ」

「何、言ってるんのお!? こいつは犯人なのよ！」

「拳を引け」

「こいつが何したかわかってんのあんた!?!」

「拳を引け」

「初春さんやあの子まで死んでたかもしれないのよ！ 何も思わないわけ!?!」

「思わないわけないだろ!!」

「っ!?!」

突如、ツナは声を荒らげる。いつも温厚なツナがこんなにも怒りを

露にした為、美琴は驚きを隠せないでいた。

「許せるわけないだろ!! 何の罪のない人を……俺の友達をあんな危ない目に遭わせた奴に対して何も思わないわけないだろ!!」

「沢田……あんだ……」

美琴の視界には怒りを露にしつつも、歯を食いしばり、右手を強く握り閉めて、今にも襲いかかりそうな自分を必死に押さえているツナが映っていた。そんなツナを見て流石の美琴も拳を引いた。

「何の罪もないだと……!? ジャッジメント 風紀委員は僕を助けなかつたんだぞ!

無能力者の僕を! いつも力のある奴に散々な目に遭わされている僕を! 被害者であるはずの僕を!」

「何が被害者だ!! お前は立派な加害者だ!! 初春が一体、何をしたっていうんだ!! みゆが一体、何をしたっていうんだ!! お前は自分の勝手な都合で人を傷つけたんだぞ!! 人の命を奪おうとしたんだんだぞ!! わかっているのかお前は!!」

少年の叫び声よりもさらに大きな声でツナは叫んだ。ツナの怒りに押されたのか少年は何も言い返すことができずにいた。

「俺はお前を許せない!! 許すことなんてできない!!」

ツナはさらにヒートアップする。だがツナの怒りに満ちていた顔が悲しみに変わっていく。

「でも……でも何でだろうな……お前の気持ちかわかる自分がいるんだ……」

「え……!?」

突如、悲しそうな顔でそう告げるツナを見て少年は驚きを隠せないでいた。

「中学の時。俺は勉強も運動も何やってもダメで、ずっとダメツナって言われてて苛められてた。正直、この世を恨んだ。何か悪いことしたわけでもないのに何でこんな目に遭わないといけないのかって……何で誰も俺のことを助けてくれないのかって……」

ツナの脳裏には苛められていた中学時代の自分の姿が映っていた。

「俺は自分が傷つくのが怖くて。俺は人との繋がりを断ち切った。どうせ俺はダメツナだつて自分に言い聞かせて。でもある奴が気づか

せてくれたんだ。俺は今まで逃げてただけなんだって。死ぬ気でやろうとしなかったただけなんだって」

ツナの脳裏には自分の家庭教師であるリボーンかてきよーの姿が浮かんでいた。

「人は何もしようとしない奴を助けてはくれない。俺もお前と同じだった。どうせ誰も助けてくれないって決めつけて、何もしようとしなかった。けど今は違う。今の俺には一緒に笑ってくれる仲間が、いざとなったら助けてくれる仲間がいる」

ツナの脳裏には元の世界にいた仲間たちの姿が浮かんでいた。

「だからこれ以上を罪を重ねるのは止めてくれ……それでも憎いというなら俺を攻撃しろ。俺は抵抗しない。殴るなり蹴るなり能力を使うなり好きにしろ」

「な、何言ってるのよあんた!?!」

ツナは少年の前に立って、両手を広げて何も抵抗せずいたぶられ続けることを宣言した。ツナの常軌を逸脱した行動に驚きを隠せずにいた。

「俺は風紀委員ジャッジメントの協力者。お前の憎くて仕方がない存在だ。お前の怨みを俺が全部、受け止めてやる」

「何、考えてるのよあんた!?! 死にたいの!?! こいつの能力を知らないわけではないでしょ!」

「こいつを止めるにはこの方法しかない。だからお前はここから逃げる」

「置いていけるわけじゃないでしょ! 何、言ってるのよ!」

美琴はツナの無謀な行動を止めさせようとする。しかしツナの意思は固く、止める気はなかった。

「さあどうした? 早くやれ」

(そ、そうだ! やれって言ってるんだ! だったらこいつの期待通り……)

少年はバッグからスプーンを取り出す。そしてツナの方へスプーンを向ける。

が

『でも……でも何でだろうな……お前の気持ちがわかる自分がいるんだ……』

『中学の時。俺は勉強も運動も何やってもダメで、ずっとダメツナつて言われてて苛められてた。正直、この世を恨んだ。何か悪いことしたわけでもないのに何でこんな目に遭わないといけないのかって……何で誰も俺のことを助けてくれないのかって……』

『俺は自分が傷つくのが怖くて。俺は人との繋がりを断ち切った。どうせ俺はダメツナだって自分に言い聞かせて。でもある奴が気づかせてくれたんだ。俺は今まで逃げてただけなんだって。死ぬ気でやろうとしなかっただけなんだって』

『人は何もしようとしない奴を助けてはくれない。俺もお前と同じだった。どうせ誰も助けてくれないって決めつけて、何もしようとしなかった。けど今は違う。今の俺には一緒に笑ってくれる仲間が、いざとなったら助けてくれる仲間がいる』

『俺は風紀委員ジャッジメントの協力者。お前の憎くて仕方がない存在だ。お前の怨みを俺が全部、受け止めてやる』

『だからこれ以上を罪を重ねるのは止めてくれ……それでも憎いというなら俺を攻撃しろ。俺は抵抗しない。殴るなり蹴るなり能力を使うなり好きにしろ』

(な、何だよ！ 何で動かないんだよ！ 目の前にいるのは俺の憎むべき敵だ！)

少年の脳裏には先程のツナの言葉が浮かんでいた。そのせいか少年はスプーンを持ったまま何もすることができなかった。

「ううっ……ううっ……」

路地に音が鳴り響く。だが鳴り響いたのは爆発音ではなく、スプーンが落ちる金属音と少年の泣き声だった。少年は四つん這いになっていた。

「ありがとう。思い留まってくれて」

ツナは四つん這いになっている少年に向かって優しい言葉をかける。

「お前は弱い者の気持ちがわかる人間だ。だから今度は自分と同じく

「虐げられた人たちの為にその力を使って欲しい」
ツナは少年にそう言うが、少年からの返事はなかった。だがツナの言葉は少年に届いているだろう。

こうして連続虚空^{グラビトン}爆破事件は幕を閉じた。

標的（ターゲット） 30 怨み

美琴は黒子に電話をかけ、少年のいる場所まで来てもらう。

「送りますわ」

「頼む」

路地にテレポートして来た黒子に少年の連行を頼む。黒子は少年と共にテレポートしその場から消える。

「ねえ。何であんな真似をしたの？」

「放っておけなかった。かつての俺を見てるようだな。だから救ってやりたかった」

「じゃあもしあいつが襲いかかってきたらどうするつもりだったのよ？」

「信じてたからな。あいつは絶対に踏み留まってくれるってな」

「あんな爆弾魔を信じるなんて……あんな馬鹿じゃないの……」

ツナの発言に美琴は右手を額に当てて呆れてしまっていた。

「それにお前を危険な目に遭わせたくなかったらな」

「危険？」

「あのままお前があいつを殴っていたら、あいつはお前を怨み、必ずお前に復讐する。それを絶対に阻止したかった」

「私があんな奴に負けるわけじゃないじゃない。返り討ちよ。返り討ち」

「それが問題なんだ」

「どういうことよ？」

「怨みってというのは恐ろしいんだ。一度、復讐すると決めたらその者を復讐が成功するまで止まらない。そいつに復讐する為ならどんな手段だって使う。もしあいつがお前に復讐すると決めればお前だけじゃなく、お前の大切な者まで手を出す。たとえば自分が死ぬことになろうともな」

「何でそんなことがわかるのよ？」

「怨みの恐ろしさは身を持って体験したからな。嫌という程にな」

美琴の問いに答えると顔を俯かせたまま沈黙する。少しするとツ

ナは口を開いた。

「中学の時。俺に親友ができた。俺と同じで勉強も運動もできなくて同じ悩みを持つ奴だった。俺はそいつと初めて出会った時、嬉しかった。自分と同じ悩みを持つ人間が他にもいたことに」

ツナの脳裏にはシモンファミリーのボスである古里炎真の姿が脳裏に浮かんでいた。

「だが俺はそいつと殺し合いを演じることになった」

「な、何だよ!?!」

「簡単に言えば先祖代々の因縁だ。といつても誤解があったんだが。それでも今でも覚えてる。あいつは俺に復讐する為に力を求めさらには人格まで変わった。最終的に自分の力に飲み込まれかけて命を落としかけた」

ツナは思い出す。シモンファミリーの聖地にて炎真と戦った際、覚醒したシモンリングの力に飲まれ殺戮マシーンと化した炎真の姿を。

「ある奴はある男に復讐する為に何百年も生き続けた。その男に復讐できるなら死んだとしても本望だと言った」

「な、何百年……!?! な、何言ってるのよ……!?!」

ツナの脳裏にはマフィア界の掟の番人である復讐者ヴェディチェのリーダーのバミューダと、その仲間たちの姿が浮かんでいた。何百年と聞いて美琴は驚くと同時に意味がわからないでいた。

さらにツナは続ける。

「そして俺自身も憎しみのあまり一人の男の命を奪ったことがある」

「え……!?!」

ツナの脳裏には未来の世界でミルフィオーレファミリーのボスとして君臨していた白蘭の姿が浮かんでいた。ツナが人を殺したと知って、美琴は驚きのあまり目を見開いていた。

「憎かった。その男のせいで多くの人が犠牲になり、俺の仲間も犠牲になった」

ツナの脳裏にはジツリヨネロファミリーのボスであるユニ、同じくジツリヨネロファミリーの一員であったγ、そして自分の友達の父、山本剛の姿が浮かんでいた。

「今でも後悔している。もつと他に方法があつたんじゃないかって。そして気づいたんだ。本当に戦うべき相手は憎むべき相手じゃなくて、自分の内に潜む狂気だつてな」

ツナは悲しそうな表情でそう呟く。

「少し話し過ぎたな……ようするに俺が言いたいのは考えなしに人を傷つければ怨みが生まれ、その報いは自分に返ってくるってことだ」
そう言うとなツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いて、ノーマル状態へと戻る。

「とりあえず黒子たちの所へ行こう。みんな心配してるはずだから」

「え……う、うん……」

その夜

「……」

美琴は自分のベッドにてゲコ太人形（カエルのぬいぐるみ）を抱き絞めながら、何かを考えていた。

『怨みっていうのは恐ろしいんだ。一度、復讐すると決めたらその者を復讐が成功するまで止まらない。そいつに復讐する為ならどんな手段だつて使う。もしあいつがお前に復讐すると決めればお前だけじゃなく、お前の大切な者まで手を出す。たとえば自分が死ぬことになろうともな』

『簡単に言えば先祖代々の因縁だ。といつても誤解があつたんだが。それでも今でも覚えてる。あいつは俺に復讐する為に力を求めさら

には人格まで変わった。最終的に自分の力に飲み込まれかけて命を落としかけた』

『ある奴はある男に復讐する為に何百年も生き続けた。その男に復讐できるなら死んだとしても本望だと言った』

『そして俺自身も憎しみのあまり一人の男の命を奪ったことがある』
『憎かった。その男のせいで多くの人が犠牲になり、俺の仲間も犠牲になった』

『今でも後悔している。もっと他に方法があったんじゃないかって。そして気づいたんだ。本当に戦うべき相手は憎むべき相手じゃなくて、自分の内に潜む狂気だってな』

『ようするに俺が言いたいのは考えなしに人を傷つければ怨みが生まれ、その報いは自分に返ってくるってことだ』

美琴の脳裏には事件後にツナは言っていたことが頭から離れないでいた。

(あいつは一体、何者なの……?)

ツナの言葉を聞いてから、美琴はツナが一体何者なのであるか気になっってしまったのであった。

標的（ターゲツト） 31 木山春生

連続^{グラビトン}虚空爆破事件が終わってから2日後。いつのようにツナは^{ジャッジメント}風紀委員177支部へと向かおうとした。

「え!? 虚空^{グラビトン}爆破の犯人が昏睡状態になった!？」

「ええ。取り調べ中に急に倒れたらしいですの」

だが家に出る前に黒子から連絡が入る。ツナは黒子の言葉を聞いて、ツナは驚きの声を上げる。

『それだけではありませんの。以前沢田さんが捕まえた重福省帆も倒れましたの!』

「え!? あの子も!？」

『ええ。とにかく沢田さんの意見が聞きたいのです。今から来ていただけますか? 外部から専門の先生を呼んでいますの』

「わかった。場所は?」

『前にあなたが初春と行ったファミレスですわ』

「今から行くよ」

ツナは急いで家を飛び出して、ファミレスへと向かって行く。

ファミレス

「えつと……」

ツナは店内に入るとキョロキョロと見回して、黒子を捜す。少し捜すと窓際の席に黒子と美琴、そして白衣に身を纏い、栗色がかつた口ングヘアアの女性が座っていた。ツナは女性の横に座る。

「えつと……この人が?」

「ええ。今回の事件を解決すべく外部から派遣された脳科学者の木山さんですの」

「木山春生だ。よろしく」

「さ、沢田綱吉です」

淡々と自己紹介する木山に対して、脳科学者だと知ってツナは緊張しながら自己紹介した。

「専攻はA I M拡散力場だ」

「A I ……？」

A I M拡散力場という聞いたことのない単語を聞いて、ツナは疑問符を浮かべる。

「A I M拡散力場とは能力者が無自覚に周囲に放出している力のことだ。聞いたことはないかな？」

「沢田さんは最近、学園都市に来ましたの」

「そうか。それでは知らないのも無理ないな」

黒子が上手くフォローをいれて誤魔化す。黒子のフォローに木山は何も疑問を持つことはなかった。

「状況をもう一度、説明しますよね。連続虚空^{グラビトン}爆破事件の犯人、介旅初矢と常盤台狩り事件の犯人、重福省帆が昏睡状態に陥りましたの。他にも昏睡状態になった学生が増えていますの。お医者様の話ではこの状態になった学生が回復した例はないそうですの」

「そんな……」

他にも昏睡状態の学生がいる上に、誰も回復していないと知ってツナはショックを受ける。

「今回、君を呼んでもらったのは事件の当事者である君の話が聞きたくてな。どんな些細なことでもいい。気づいたことがあったら教えて欲しいんだ」

「教えて欲しいって言われても……」

木山に事件の時の状況を教えてくれと言われるが、何も思いつかなかった為、困ってしまう。

「特にこれといって何も……」

「そうか……まあそんな気がしていたが」

ツナは一生懸命考えるも何も思い当たる節はなかった。木山は予想の範疇だったのかそれ以上、何も言うことはなかった。

「当事者である沢田君ですらわからないとなると、今は幻想御手レベルアップを見つけないかなって思ってたが、いいようだね」

「え？ 幻想御手レベルアップって都市伝説なんじゃないの？」

「実は私とお姉様で秘密裏に調査したところどうやら眉唾物でないということがわかりましたの。といつても幻想御手レベルアップがどんな物かまではわかりませんでした」

「本当にあつたんだ。能力者をパワーアップさせるなんて代物が」

「ええ。これから私たちは幻想御手レベルアップの捜索に専念いたしますの。そして見つけ出し次第、木山先生に調査して頂いて事件の終息を謀るつもりですわ」

「わかった……ん？」

「どうかしましたの？」

黒子から今後の活動について聞いた途端、ツナは何か気づいた。

「もしかして幻想御手レベルアップって……」

「何かわかったんですの!？」

「いや。元の……並盛にいた頃にあつたんだ。額に撃たれると特殊な力が発動する弾丸が」

「だ、弾丸!？」

ツナは元にもいた世界にあつた特殊弾のことを思い出す。弾丸と聞いて黒子は驚きの声を上げる。特殊弾はツナの世界にあつた弾丸である。外部からの危機的プレッシャーによつてリミッターを外す死ぬ気弾。内面から全身のリミッターを外す小言弾などがある。

「うん。俺があんたの力を使えるようになったのはその弾がきっかけなんだ。今は必要ないんだけど」

「お、お待ち下さい沢田さん！ 本当に撃たれたんですの!？」

「うん。撃たれたよ。だから学園都市にもそんな感じの弾丸があるんじゃないかなって思ってた」

「本当にどうい生活を送っていたんですのあなたは……」

またツナが奇妙なことを言い出した為、黒子は驚いてしまう。一方

で美琴は何か言いたげそうな顔で見ている。

「特殊な力を発動させる弾丸……悪いが聞いたことがないな……」

「そうですか……」

「しかしそのような弾丸が本当にあるのか。研究者である私としては興味深いな」

木山は特殊弾については知らなかったが、興味を示していた。

「ところでさつきから気になっていたんだが。あの子たちは知り合いかね？」

そう言う木山の視線の先には笑顔でガラスに張り付いている佐天と、苦笑いしている初春がいた。二人はツナたちのところへやって来る。佐天はツナの隣に、初春は黒子の隣に座る。

「へー。脳の科学者さんなんですか。白井さんの脳に何か問題か？」

「レベルアップバー幻想御手の件で相談していましたの」

初春の失礼な問いに黒子は青筋を浮かべながら答える。レベルアップバー幻想御手

という単語を聞いた途端、佐天はパフェを食べていた手を止める。

「レベルアップバー幻想御手ですか？ それなら私……」

「レベルアップバー幻想御手の所有者を搜索して保護することになるかと思われま

「なぜですか？」

佐天はポケットから音楽プレイヤーを取り出したが、黒子の言葉を聞いた途端、動きを止めた。

「まだ調査中ですのではつきりしたことは言えませんが使用者に副作用が出る可能性があること、急激に力をつけた学生が犯罪に走ったと思われる事件が数件確認されているからですの」

「はー……どうかしました？ 佐天さん？」

「えっ……べ、別に……」

（佐天？）

初春は佐天の様子がおかしいことに気づく。佐天は何でもないと答え、音楽プレイヤーをポケットに戻す。ツナも佐天の様子がおかしいことに気づく。

この時、ツナたちは知らなかった。佐天が隠した物が重要な物であ

١٥٥

標的（ターゲット） 32 もしかして

木山との話が終わってファミレスから出るツナたち。

「お忙しい中ありがとうございます」

黒子が代表してお礼をいう。初春も黙ったままではあったが感謝の意を表して頭を下げる。

「あの……木山さん」

「どうした沢田君？」

「いや幻想御手のことじゃないんですけど、聞きたいことというか、ずっと気になってたことがあって……」

「何かな？」

「違ってたらすいません。木山さんって。先生とかしてました？」

「っ!？」

ツナの問いに木山は驚きを隠せないでいた。だがすぐに普通の表情に戻った。

「君の言う通りだ。私は過去に教師をやっていた」

「やっぱり……」

ツナの予想は見事に的中していた。ツナが木山が過去に教師をやっていたことを当てたことにその場にいた者たちは驚きを隠せないでいた。

「それにしてもどうして私が教師をやっていたってわかったんだい？」

「いや……なんとなくというか……なんか俺の家庭教師かてきよと感じが似てたっていうか……」

「そうか。君にも教師がいるのか」

「はい。まああいつは木山さんの100倍、害悪なんで同じにするのもどうかと思うんですけど……」

「害悪って……それは言い過ぎではないのか……?」

「いや……むしろそんな言葉でも足りないぐらいなんですけど……」
害悪という言葉に流石の木山も引いてしまっていた。だがツナは撤回することはなかった。

「問題を間違えると撃つてくるし、食い逃げの罪を俺に擦りつけるし、ヤクザと戦わされたり、風紀委員長と戦わされたり、100人に一人しか生きて帰れない山でサバイバルさせられたり、鮫のいる海に何度も落とされたりとか……」

「それは家庭教師のやる仕事ではないのではないか……？　というかそれは実話なのかい……？」

ツナがりボーンがしでかした数々の所業を言っていく。木山は驚くと同時に、教師だったものとしてはそれはどうなのかと思っ

た。「でもあいつがいなかったら今の俺はありませんでした。それだけは事実です」

「そうか。君はいい教師を持ったんだね」

「木山さん？」

木山はツナの清々しい顔を見た途端、寂しそうな顔をする。そんな木山の顔をしたことにツナは違和感を覚える。

「私はこれで失礼するよ。幻想御手の件。何かわかったら連絡してくれ」

そう言うのと木山はその場から立ち去って行く。

「あれ？　佐天は？」

「そういえば見当たりませんね」

「さつきまでいたのに……」

ツナは佐天がいつの間にかいなくなっていることに気づいた。黒子と初春も辺りを見回すが佐天の姿はどこにもなかった。

（なんか佐天の様子なんかおかしかったけど……一体、どうしたんだろう……）

ツナは佐天の様子がおかしかったことに気づいていた。しかしなぜ様子がおかしかったのかまではわからなかった。

「初春は支部に戻って。幻想御手の情報収集を頼みますの」

「白井さんは？」

「私は幻想御手の調査に行きますの」

黒子は初春に情報収集の指示を出すと同時に、自分は幻想御手の調査に行くことを決める。

「沢田さんはもう帰っていいですわ」

「え!? 何で!？」

「佐天さんのこと心配で仕方がないのでしょ? なにやら様子がおかしいようでしたし」

「で、でも……」

「いくら沢田さんといえど、心の迷いがある今のあなたでは足手まといにしかならないですの。これから忙しくなるのですから、今の内に蟠りを解決しておいてくださいまし」

「わ、わかったよ……」

黒子の言っていることは正論である為、ツナはこのまま帰ることを決める。

「沢田」

「何? 美琴?」

「あ……いや……ごめん……やっぱり何でもない……」

今まで黙っていた美琴がツナに話しかけるが、やっぱり何でもないと答えた。美琴の不可解な行動にツナは疑問符を浮かべていた。

「じゃあ俺は先に帰るね」

ツナはそう言うのと佐天を追って行く。

(聞けなかった……)

美琴は連続虚空爆破グラビトンの事件にツナが言っていたことを聞こうと思っていた。だが聞こうと思った瞬間、聞くのが怖くて聞くことができなかった。

その頃。佐天は。

(ああは言われたけど。やっぱり手放したくない……まだ使ったわけじゃないし黙ってていいよね)

佐天は街中を走っていた。手には先程、持っていた音楽プレイヤーが握られていた。

(やっと見つけたんだもん！)

そう。佐天の手に握られていたのは何を隠そう、レベルアップ幻想御手だったのだから。

標的（ターゲット） 33 嘘

いつの間にかいなくなった佐天を追いかけるツナ。

「どこに行ったんだろう佐天……？」

ツナは佐天を捜して街中を走る。しかし佐天の姿はどこにも見当たらなかった。

「もう帰ったのかな……？」

佐天がいそうな場所は調べつくした為、ツナは佐天が家にもう帰っているのではないかと思い一度、家に帰ることにした。

一方、佐天は。

（勝手に飛び出してきちゃった……私ってば何してるんだろう……）

佐天は自分の部屋のベッドの上で体育座りをしながら、自分が勝手に飛び出して来たことを後悔していた。

「ツナさんたち心配してるだろうな……」

佐天は黙って何も言わずに勝手に出て行ったことを悔やむ。そして少し落ち着いたのか心配させてはいけないと思って、ツナたちに連絡しようと携帯を手取る。

「佐天！ いる!?!」

連絡しようと矢先、家のドアが強引に開ける音とツナの声が家に響く。

「ツナさん……」

ツナの声のトーンから自分のことを心配していたということがわ

かり、佐天は幻想御手を机の引き出しに隠した後、慌てて玄関へと向かって行く。

玄関

「佐天！ よかった！ 急になくなったから心配したんだよ！」

「ツナさん……」

佐天が家にいたとわかってツナは安堵する。佐天はツナに迷惑をかけてしまった為、ばつの悪い顔をしていた。

「ごめんなさい……心配かけちゃって……」

「ううん。佐天が無事でよかったよ。それよりどうしたの？ 何かあったの？」

「それは……」

ツナに急にいなくなったことを尋ねられて、佐天はここで正直に幻想御手を持っていることを話そうかどうか迷ってしまう。

「実は明日までに提出しないといけない課題を学校に忘れちゃって。それで慌てて取りに帰ってたんです。ツナさんたちには連絡しようと思ったんですけど携帯の充電が切れちゃったんです」

(同じだ……あの時のハルと……)

佐天は後頭部に右手を置き、嘘をついた。だがツナは佐天が言っていることが嘘だとわかっていた。未来の世界に行った時に、友達である三浦ハルに自分の正体と自分たちの周りで起きていることを素直に話した。その時のハルは今の佐天と同じく笑顔で笑っていた。本当は悲しいのにも関わらず。

「そっか。それならよかったよ。でも佐天がいなくなってみんな心配してたから、ちゃんと後で連絡しておいてね」

ツナは佐天が嘘をついているということを知りつつも笑顔で

言った。ツナはここで無理に聞いても佐天に悪いと思いそう言ったのである。

「はい。後で連絡しておきます」

「それとき。もし本当に悩みがあったら遠慮なく言ってね。俺でよければ相談に乗るからさ」

「ありがとうございます」

佐天はツナの言葉を聞いて、笑顔でお礼を言った。

「とりあえず上がって下さい。ご飯にしましょう」

そう言う佐天は後ろを振り返り、台所へと向かって行く。

（ツナさんにはさっきのが嘘だつてバレてる……私の為に無理やり聞こうとしないでくれてるんだ……）

さっきのツナの言葉から佐天は自分のついた嘘がツナにバレているということを理解した。

（でもごめんなさいツナさん……私は力が欲しいんです……どうしても……）

佐天の心の中は罪悪感でいっぱいだった。それでも無能力者の佐天にとって幻想御手は大切な物なのである。

次の日

ジャックメント
風紀委員177支部

「え？ 音楽プレイヤー？」

「ええ。情報提供者によればこれが幻想御手の正体らしいですわ」

現在、支部のパソコンで初春が音楽サイトから音楽プレイヤーにダウンロードしていた。黒子が昨日、行った調査によると幻想御手の正体は音楽プレイヤーなのだという。

「そんなんで本当に能力が開花されるの？」

「能力を開発するには年単位で時間をかけて脳を開発します。音楽プレイヤーも脳に直接、作用しますので嘘ではないかもしれませんがね」

「の、脳を開発!?!」

「沢田さんが想像してるものとは違いますわよ……第一、それだと色々問題になっていきますの」

「だ、だよねー……」

脳を開発すると聞いてツナはえぐい想像をしてしまう。黒子はツナの反応からえぐいことを考えていると察し、安全なものだということ伝える。安全だとわかってツナは安堵する。

「ダウンロード完了しました」

ツナと黒子が話している内に幻想御手のダウンロードが完了する。

「ちなみに業者に連絡してここを閉鎖するまでのダウンロード数は5000件を超えていますね」

「5000!?! そ、そんなに!?!」

「全員が全員、使用したわけではないとは思いますがダウンロードできなくなつてからは金銭で売買する人が増えてるみたいです」

「広まるのを完全に止めることは無理か……」

初春から幻想御手の流通の状況を聞いて黒子は、全ての幻想御手を^{レベルアップ}全て回収するのは無理だと判断する。

「その取り引きの場所はわかりますの?」

「ちよつと待って下さい」

黒子が尋ねると初春はパソコンを操作し始める。少しするとコピー機から次々と用紙が出てくる。

「はい。時間と場所です」

「つて、こんなに!?!」

「多いね……」

初春から渡された分厚い用紙の束を見て、黒子とツナは驚いてしまう。

「仕方ありませんわね。とりあえず私と沢田さんで分担した方がいいですわね」

「大丈夫？ 一人で？」

「沢田さんに比べれば弱いですが、偽物の力に負ける程、私は弱くはありませんわ」

「べ、別にそんなつもりじゃ！」

「わかっていますわ。沢田さんがそういう意味で言ったことでないぐらい」

そう言うのと黒子は分厚い用紙の束の半分をツナに渡した。

「あっ！ 初春」

「何ですか沢田さん？」

「佐天の様子どうだった？」

「佐天さんですか？」

ツナは佐天と同じクラスの初春に佐天の様子がどうだったのか尋ねる。

「やっぱり元気がなかったですね。話しかけても生返事で……」

「そっか……」

「あれからどうでしたの？」

「佐天、何か悩んでるみたいなんだけど誤魔化されちゃったんだ。あんまり無理に聞いちゃいけないと思ったから、何か悩みがあったら言ってくれとは言っておいたんだけど」

「そうですか……」

ツナは昨日の出来事について話す。ツナの話聞いて黒子は仕方ないと判断した。

「佐天さんのことも心配ですが今は私たちがやれることをやりましょう」

「うん」

「じゃあ行きましょう」

ツナと黒子は支部を出て、取り引き現場へと向かって行く。

だがツナたちは知らなかった。佐天があんなことになろうとは……

標的（ターゲット） 34 緊急事態

「幻想御手^{レベルアップバー}を回収する為に、ツナと黒子は二手に別れて取引現場へと向かって行った。」

「よろしくお願いします」

ツナは警備員^{アンチスキル}に幻想御手^{レベルアップバー}と容疑者を引き渡した。ツナは1時間足らずで幻想御手^{レベルアップバー}の回収及び、幻想御手^{レベルアップバー}によって暴走している人の鎮圧に成功していた。

「にしても短時間でここまで容疑者を検挙するなんてやるじゃん沢田」

「そんなことないですよ。それよりすいません黄泉川さん。何度も連絡しちゃって」

ツナは黒髪のポニーテールの女性にそう言う。この女性は黄泉川愛穂^{アンチスキル}。警備員^{アンチスキル}の一人である。なぜツナと黄泉川がこんなに親しげなのかというと先程から何度も会っているからである。ツナは能力者のレベルに関係なく、10秒もかからずにその場にいる容疑者たちを制圧してしまう。容疑者は警備員^{アンチスキル}に連絡して連行してもらわないといけない為、その度にどうしても黄泉川と出会ってしまうのだ。

「気にする必要ないじゃん。正直、こっちとしては助かるじゃんよ」「やっぱり多いんですかこの事件？」

「ああ。正直、こっちは人手不足で首が回らない状況でな」「そうなんですか」

黄泉川の話聞いて幻想御手^{レベルアップバー}による被害が自分が思っていたよりも深刻であるということを理解する。

「とりあえず俺は一旦、支部に戻ります」「おう。ご苦労じゃんよ」

支部からそこまで離れていない為、ツナは走って支部へと戻って行った。

「にしてもあれだけ能力者と戦っているのに傷一つ負ってないって……何者じゃん?」

黄泉川はツナから通報がある度にツナと出会っているのにも関わらず傷一つ負っていないことに疑問を抱いていた。

ジャツジメント
風紀委員177支部

「ただいまー」

「え!! もう終わったんですか沢田さん!？」

「え? うん」

ツナが支部に戻ると初春が驚きの声を上げる。ツナ何で驚いてるの? みたいな顔で答える。

「あ、あんなにあつたのに……」

初春は今だに信じられず衝撃を受けていた。ツナが今まで戦ってきた敵に比べればこれぐらいどうというとはなかった。

「黒子、大丈夫かな?」

ツナは自分と同じく取引現場へと向かって行った黒子のことを心配していた。

その時、

「ただいま戻りましたの」

「あ、お帰り……って黒子!？」

支部の扉が開き黒子が帰って来る。だが黒子は全身ボロボロであった。そんな黒子を心配してツナは慌てて黒子に駆け寄る。

「大丈夫!？」

「大丈夫ですわ……それより沢田さん取引現場の方を早く……」

「ごっち終わったよ」

「終わった!?! あれだけの数……っ!?!」

「大丈夫!? 黒子!? とりあえず手当てをしないと!」

終わったと聞いて黒子は驚きの声を上げる。だがその反動で全身に痛みが走る。痛がる黒子の姿を見てツナは、黒子に手当てするように促す。

「私としたことが油断しましたの……っ!」

後悔しながらそう呟く黒子に初春が黒子の傷口に消毒液をかける。消毒液が染みたのか黒子は痛がる。

「まだ他にもあるというのに……」

「俺が黒子の分も行くよ。黒子はここで休んでて」

「そういうわけにはいきませんわ……沢田さんだけに任せるわけには……っ!」

「白井さん! 動いちや駄目ですよ! まだじつとしてないと!」

黒子はツナに任せるのが悪いと思ったのか、椅子から立ち上がって次の現場へ行くこうとする。だが横腹に痛みが走り、横腹を押さえながらその場でしゃがみ込んでしまう。初春は黒子が無理に動いた為、じつとしているように促す。

「無理しないでいいよ黒子。俺は大丈夫だから」

「ですが……」

「今まで黒子に世話になったんだからこれぐらいさせてよ」

「沢田さん……」

黒子はツナの言葉を聞いて、黒子の決意が揺らいでしまう。

「申し訳ありませんの……後をよろしくお願いいたしますの……」

「うん。任せて」

黒子はツナに取引現場の場所と時間が書かれた用紙を鞆から出しツナに渡した。ツナは黒子から用紙を受け取ると支部を出て取引現場へと向かって行く。

「やはり頼りになりますわね……沢田さんは……」

時は一気に過ぎて3日後

「ふう……終わった……」

本日も取引現場を周り幻想御手の回収と容疑者の確保を行うツナ。

「これで全部か……」

ツナは警備員アンチスキルに容疑者を連行してもらい一息つく。

その時だった。

「電話？ 佐天から？」

ポケットに入っていた携帯が鳴る。電話をかけて来たのは佐天だった。

「もしもし佐天？ どうしたの？」

『ツナさん……』

『どうしたの佐天？ 何かあったの？』

佐天の声のトーンが低かった為、ツナは佐天に何かあったことに気づく。

『アケミが……友達が倒れたんです……』

「え……!？」

『幻想御手を使ったら元に戻らないなんて私、知らなくて……』

『幻想御手を使った!?! どういうこと佐天!?!』

幻想御手レベルアップを使用したと聞いてツナは顔色を変える。

今、事態が動き出す！

標的（ターゲット） 35 想い

佐天から幻想御手レベルアップバーを使用したという連絡が入る。

「ど、どういうこと!? 何で佐天が幻想御手レベルアップバーを!？」

『幻想御手を前にたまたま見つけたんです……でも所有者を捕まえるって言ってたからどうしようって……』

（佐天の様子がおかしかったのって……）

最近、佐天の様子がおかしかったのは幻想御手が原因だとツナは知る。そしてツナは歯を食い縛り、左手を強く握ると同時に怨んでいった。佐天の様子がおかしかったことに気づいていたのにも関わらず、何もしてあげられなかった自分自身に。

『それでアケミたち、能力の補習があるって言って……でも本当は一人で使うのが怖くて……私が見んなを……』

「落ち着いて佐天! 今どこにいるの!? 今、行くから!」

ツナは佐天に落ち着くよう促すと同時に、どこにいるのかを尋ねた。

『私ももう眠っちゃうんですかね……? そしたらもう二度と起きられないんですかね……?』

「そんなことない! きつと治す方法があるはずだから!」

『私、何の力もない自分が嫌で……でも憧れは捨てられなくて……』

佐天は今までずっと心の内で思っていたことをツナに伝える。

『ツナさん……無能力者レベル0って欠陥品なんですかね……?』

「そんなことない! 佐天は明るくて、誰にでも優しくできる素敵な女の子で俺の大事な友達だよ! だから欠陥品なんかじゃない!」

『ツナさん……』

ツナの言葉を聞いた途端、佐天はボロボロと涙を溢す。

『ツナさん……私と初めて会った時のこと覚えてますか?』

「佐天……?」

佐天が急に初めて会った日のことを聞いてきた為、ツナは戸惑ってしまう。

さらに佐天は続ける。

『銀行強盗から私のことを護ってくれた。あの時のツナさんがとつてもかっこ良くて。あの日から私、ずっとツナさんに憧れてたんですよ。私もツナさんみたいになりたいなって』

佐天の脳裏には銀行強盗から自分のことを護ってくれたツナの姿が浮かんでいた。

『そしてツナさんと一緒に暮らすことになって。私、ツナさんと一緒に過ごせて幸せだったんですよ』

『佐天……』

『一緒に過ごしていく内に思いました。この時間がいつまでも続けばいいのにつて……このままツナさんとずっと一緒にいられたらいいのにつて……』

佐天の脳裏にはツナと一緒に過ごした日々が浮かんでいた。

『なのに私は幻想御手に手を出して、その夢を潰しちゃいました……使わなかったらこのままずっとツナさんといられたのにな……』

佐天は後悔していた。憧れであると同時に想い人であるツナと過ごせる日々を自分自身で壊してしまったことに。

『ごめんなさいツナさん……こんな時に変なこと言い出しちゃって……でも最後だから言っておきたくて……』

『最後になんて絶対にさせないよ！』

『え……!?!』

『俺が……いや俺たちが佐天を助ける方法を見つかるから！絶対に！だから諦めないで佐天！』

『ツナさん……ありがとうございます……』

こんな状況であつても優しい言葉をかけてくれるツナに佐天は少しだけ微笑んだ。そしてこんな状況であつても佐天は自分の心臓の鼓動が早くなつていくことに気づいていた。

『それとツナさん……私……ずっと……ツナさんのことが……』

『佐天……?』

電話越しにバタツという音が聞こえ、佐天の声が聞こえなくなる。

「佐天！ 佐天！ 佐天！ 佐天！」

ツナは携帯に向かって何度も何度も佐天の名前を叫び続ける。電話は切れてはいないものの佐天から返事が返ってくる気配は一向になかった。

「くっ！」

ツナはポケットから27と書かれた手袋を取り出すと、すぐに超死ぬ気モードになる。そして炎を

逆噴射させて空へと飛ぶと、全速力で佐天の家へと向かう。

佐天の家

「佐天！」

ツナは家の扉を強引に開けると、土足のまま家の中へ上がる。そして佐天の部屋の扉を強引に開ける。

「佐天……」

部屋の扉を開けると、ツナの視界にうつ伏せの状態で倒れている佐天の姿が映る。

「佐天！」

倒れている佐天の姿を見てショックを受けるツナであったが、すぐに佐天の側に駆け寄る。そして佐天の体を何度も揺する。だが佐天が目覚める様子はなかった。

「佐天！ しっかりして！ 佐天！」

昏睡状態に陥った佐天の姿を見たショックによってツナの超死ぬ

気モードの状態が解けノーマル状態へ戻る。それでもツナは名前を呼び続ける。

「頼むから……返事を……佐天……」

そしてツナの瞳から溢れんばかりの涙が佐天の頬へと落下していく。

レベルアップ 幻想御手の副作用にて昏睡状態へと陥った佐天。助かる道はあるのか!?

標的（ターゲツト） 36 心の傷

昏睡状態となつてしまつた佐天は病院に運ばれる。

「黒子！ 佐天さんが倒れたつて……」

黒子から連絡を受けた美琴が病院にやつて来る。遠くから走つて来たのか美琴は肩で息をしていた。

「やつぱり幻想御手レベルアップがらみ？」

「ええ。どうやらその線のようなのです」

「初春さんは？」

「木山さんの所へ行きましたわ」

「そう……沢田は？」

「あそこですわ」

美琴がツナがどこにいるのか尋ねた。黒子がツナのいる場所へ視線を移動させる。

「沢田……」

美琴の視界には待合室の椅子に座り、顔を俯かせて組んだ両手を額に当てたまま黙つたまま動かないツナの姿が映る。すると奥から白衣に身を包みカエルの用な顔をした男がツナの元にやつて来る。

「沢田君。でよかつたかな？」

「先生！ 佐天は!? 佐天はどうなんですか!？」

ツナが佐天の様子を尋ねると美琴と黒子もカエル医者カエルの所へやつて来る。ツナの問いにカエル医者は黙つたまま顔を横に振つた。

「そんな……」

カエル医者からの返答を聞いてツナは再びショックを受けてしまう。美琴と黒子もツナと同じくショックを受けていた。

「彼女も他の患者と同じだ。昏睡状態になつたまま目覚める様子はなさそうだね」

「そうですか……」

「ちよつ!? 沢田!? 大丈夫!？」

カエル医者から佐天が容態を聞いた途端、ツナの顔が真っ青とな

る。美琴はいち早くツナの容態がおかしいことに気づいた。

「はあ……はあ……はあ……」

「こ、これやばいんじゃないの!？」

「沢田さん！　しつかりして下さいですよ！」

「大きく息を吸うんだ沢田君！」

ツナは佐天が他の患者と同じく目覚めないと知ったのがショックだったのか過呼吸に陥っていた。美琴たちはツナに声を掛けるがツナの容態は安定しない。

『ツナさん』

(佐天……)

ツナの体がゆっくりと傾いていく。意識を完全に失う前に無邪気に笑う佐天の姿が脳裏に浮かんでいた。その後、ツナは完全に意識を失う。

「沢田！」

「沢田さん！」

「早く彼をこっちに！」

床に倒れる前に美琴と黒子がツナを支える。カエル医者はツナをベッドに運ぶように促す。

ツナは病院のベッドに運び込まれる。

「先生。沢田さんの容態は？」

「大丈夫だ。酸欠によって意識を失っているだけだよ。すぐに目を覚ますよ。だから安心したまえ」

「そうですか……」

「よかったわ……」

カエル医者 of 言葉 を聞いて、黒子と美琴は安堵する。

「それにしても彼は一体、何者なんだい？」

「それはどういう意味ですか？」

「彼が倒れたのは酸欠が原因によるものだ。だがそれよりも酸欠になった原因の方が気になるんだよ」

「それは佐天さんが他の学生と同じく目覚めないと知ったからではないのですか？」

「それも勿論あるだろうね」

「それも？ 他にも何か要因があるというのですか？」

ツナが倒れた原因が佐天だけでないと知り、黒子は詳しいことをカエル医者 に尋ねる。

「うん。おそらく過去に今回と似たようなことがあって、それを思い出したせいで彼は倒れたんだと僕は思うよ」

「トラウマ……」

「ああ。それにこの子は色々と見てきたんだろう。人が傷つくところや人の死ぬところを。それも一回だけじゃない。何度も」

そう言うときカエル医者はベッドで眠っているツナの方へ顔を向ける。カエル医者 of 言葉 を聞いて黒子も暗い顔でツナのことを見る。

「人の死……」

『そして俺自身も憎しみのあまり一人の男の命を奪ったことがある』

『憎かった。その男のせいで多くの人が犠牲になり、俺の仲間も犠牲になった』

美琴は死という単語と聞いて、連続虚空爆破事件でツナが言った言葉が過る。

ツナが倒れてから20分が経過した。

『ちよつと君！ 何をしているんですか!?!』

『緊急オペ中ですよ!』

『とても危ない状態です！ 出て行って下さい!』

複数の男たちがツナを取り押さえて、部屋から出て行かせようとしていた。ツナの視線の先には手術台にて治療を受けている少年の姿があつた。

病院のベッド

「山本!」

「わっ!」

ツナは飛び起きる。よつぽどうなされていたのかツナは大量の汗をかいていた。看病していた美琴はツナが急に起きたので驚いていた。

「はあ……はあ……はあ……」

ツナは肩で息をしていた。そして今まで見ていたのは夢であり、自分は今まで眠っていたということに自覚する。

「俺、何でここに……?」

「倒れたのよ。佐天さんのこと聞いて」

「そうだった……俺……」

美琴の言葉を聞いてツナはカエル医者から佐天の容態を聞いてから、急に息苦しくなったことを思い出す。

「はい。これ」

「ありがとう」

美琴は病院の自動販売機で買った水をツナに渡す。ツナは受け取るとペットボトルの蓋を開けて水を一気に飲み干す。

「あれ？ 黒子？」

「さっきのお医者さんのとこ。話があるっていうから」

「そっか。それよりごめん美琴。迷惑かけて。もう大丈夫だから」

黒子がどこにいるか知るとツナは美琴に謝る。だが美琴の表情は暗いままであった。

「ねえ？ 山本ってあなたの友達？」

「え!! 何で美琴が知ってるの!？」

「うなされながらずっとその名前を呼んでたわよ」

「そっか……俺、あの夢を見てたから……」

「あの夢？」

ツナは寝ている間に山本の名を何度も何度も連呼していたことに少し驚いていた。山本はツナの同級生にしてツナの守護者の一人であると同時に時雨蒼燕流の継承者なのである。美琴はあの夢という言葉聞いて疑問符を浮かべる。

「中学の時にさ。山本が襲われて刺されたんだ……それも手術するぐらいの……病院の人からはどうなるかわからないって……たとえ治ったとしても山本はもう二度と立つことはできないって言われて……」

「え……!？」

ツナは先程、見ていた夢のことについて話す。あまりにも酷い話に美琴は驚くと同時にカエル医者が言っていたツナのトラウマについて理解した。

「でも俺の知り合いが山本のことを助けてくれて。なんとか山本は助かったんだ」

「そう……」

山本が助かったと聞いて、美琴は山本に会ったこともないのに関わらず安堵していた。

その時だった

「大変ですのお姉様！」

病室の扉が強引に開かれる。そこには息を切らし慌てている黒子の姿があった。

「あっ！ 沢田さん！ 目覚めたのですね！ って！ 今はそれほどろじゃありませんの！」

「どうしたの黒子？」

「何かあったの？」

「木山春生の所へ言った初春と連絡が取れなくなりましたの！」
「っ!?」

黒子から知らされた事実につなと美琴は驚きを隠せないでいた。

一体、初春の身に何が!?

標的（ターゲット） 37 決意

黒子から木山の元へ行った初春と連絡が取れなくなったという報告を受ける。

「ど、どうということよ黒子!？」

「単刀直入に申し上げますと幻想御手事件の黒幕は木山先生……いえ

木山春生ですの」

「木山さんが!？」

黒子が今回の事件の首謀者が木山であるということ語る。木山が今回の事件だとわかりツナは驚きの声を上げる。

「実は先程のお医者様が教えてくれたんですの。昏睡状態となった学生の脳波と木山春生の脳波が一致したと」

「つまり被害者は幻想御手に無理矢理、脳波をいじられて植物状態になったってこと?？」

「そういうことですわ」

（何で木山さんが……? 悪い感じは全然しなかったのに……）

黒子と美琴は学生たちが昏睡状態となった原因を理解する。一方でツナは木山が犯人だということが信じられずにいた。

「とにかく一旦、支部に戻りますの! 今回のことを警備員に連絡して情報を支部へ提供してもらいますの!」

ジャックメント
風紀委員177支部

「警備員から通信よ。AIM解析研究所に到着したようだけど木山も

初春も消息不明だそうよ」

「じゃあ本当に木山さんが……」

固法は警備員アンチスキルから入った通信をツナたちに伝える。固法の報告を聞いてツナは本当に木山が今回の事件の首謀者であるということを理解する。

「俺、行くよ。木山さんの所」

「沢田さん!?! 何を!?!」

「木山さんは幻想御手の開発者なんですよ。捕まえれば昏睡状態になった人たちを助ける方法がわかるかもしれない」

「で、ですが……」

「約束したんだ佐天と。絶対に助けるって」

ツナは昏睡状態になる前、自分が佐天のことを助けると言ったことを思い出す。

「私も行くわ」

「お姉様まで!」

「友達が拐われたのよ。黙ってるわけにはいかないわ」

「お待ち下さい! 初春だって風紀委員の端くれですよ! いざとなれば自分の力で……」

ツナに続いて美琴まで木山の元へ行くと言い出した為、黒子は止めようとする。そして初春なら自分でなんとかする、

「多分……何とか……運が良ければ……」

と思った黒子であったが初春は情報処理は得意ではあるものの、運動神経や戦闘能力はダメダメだということを思い出し、自信がなくなってしまう。

「ですが単なる一科学者の木山に警備員アンチスキルを退ける術はないかと……」

「でも初春を人質にして警備員アンチスキルを突破するかもしれないよ」

「それは……」

「それに俺。木山さんに直接会って確かめたいことがあるんだ」

「確かめたいこと?」

ツナの言葉に黒子は疑問符を浮かべる。だがツナは確かめたいことが何なのかまでは言わなかった。

『そうか。君はいい教師を持ったんだね』

(あの時の木山さんの表情……今回の事件と何か関係あるのかもしれない……)

ツナの脳裏には木山と最後に会った時の寂しそうな表情が浮かんでいた。

「ここでグダグダしてても仕方ないわ。黒子、アンチスキル警備員からの情報をこっちに回して」

「お、お待ち下さい！ だったら私も……おぐっ!？」

黒子は自分も行くと言い出す。美琴は黒子の肩にポンツと手を置く。その瞬間、黒子の体に痛みが走る。痛がる黒子の姿を見てツナは黒子がまだ怪我が完治していないことを理解すると同時に心配する。

「黒子。初春は俺たちが絶対に助けるから。だから待ってて」

「沢田さん……」

「そうよ。それにあなたは私の後輩なんだから。こんな時くらいお姉様に頼んなさいよ」

「お姉様……」

ツナと黒子の言葉を聞いた途端、黒子は大人しくなる。

「沢田さん。お姉様。初春のことお願いしてもよろしいですか？」

「うん」

「当然よ」

黒子は二人にお願いする。黒子のお願いに対してツナと美琴は首を縦に振り、力強い言葉で答える。

「アンチスキル警備員から連絡よ。木山は高速道路を使って逃走中だそうよ」

「高速道路か……こんな時にバイクがあつたら……」

「え!? あんたバイク乗れるの!？」

「うん。一応」

固法から木山が高速道路を使って逃走していると聞いてそう言う。美琴はツナがバイクに乗れるという事実には驚きを隠せないでいた。

「バイクなら固法先輩のがありますわ」

「本当ですか固法先輩!？」

「ええ……ってそれよりもツナ君って確か15歳だったわよね……」

？」

「うつ!? そ、それはそうなんですけど……」

固法に痛いところを突かれてツナは視線を反らす。ツナは未来に行った時に白蘭と真六^{リアル}弔花との力比べ、チョイスに挑む際にバイクに乗れるようにならなければいけなかった為、中学の時にバイクに乗れるようになっていた。

「まあ緊急事態だから貸してあげるわ。同僚の命も懸かっていることだしね」

「ありがとうございますー!」

固法はそう言うのとポケットからバイクのキーをツナに渡した。ツナはお礼を言いながらキーを受け取る。

「じゃあ行くわよー!」

「うん!」

標的（ターゲット） 38 多才能力者（マルチスキル）

ツナと美琴は固法から借りたバイクに乗って木山の元へと向かって行く。

「ねえ沢田。さつき言ってたことってどういうこと？」

「え？」

「さつき自分で言ってたじゃない。木山に会って確認したいことがあるって」

美琴は先程、ツナが言っていたことがどういう意味なのか尋ねる。

「木山さんが本当に悪い人なのか確認したいんだ」

「な、何言ってるのよ!? 木山が何をやったのかわかってんの!? 佐天さんだって……」

「わかってるよ」

木山のせいでも佐天が倒れたというのにも関わらず、木山が悪い人間なのかどうか確認したいと言いつつ出したことに美琴は驚きを隠せなかった。

「本当に悪い人だったらもつと冷たい感じやすっごい嫌な感じがするんだけど、でも木山さんからは悪い感じがしなかったんだ」

「悪い感じって……」

あまりに抽象的な根拠に美琴は意味がわからずにいた。
ブラッド・オブ・ボンゴレ
ボンゴレの血。ボンゴレの血統者特有の全てを見透かす力、超直感を持つツナだからこそわかるものであって普通の人にはわからないものである。

さらにバイクを走らせること15分。

「爆発！」

「あそこよー！」

何度も何度も爆発音がする地点へと到着するとツナはバイクを止める。

「先に行って状況を見てくる」

ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになると炎を逆噴射させると空中から現場へ向かって行く。

現場に着いたツナ

「これは……」

ツナの視界にはボロボロになった道路と車両と倒れて動く様子のない警備員^{アンチスキル}が映っていた。辺りは硝煙と煙が漂っていた。

「初春は……?」

ツナは辺りを見渡し初春がどこにいるのか確認する。

「あそこか」

ツナは一つだけ無事な車を発見し、それが木山の車だと判断し車の側に移動する。そこには助手席に横たわっている初春の姿があった。

「彼女なら無事だよ。戦闘の余波で気絶はしているが」

「っ!?!」

前方の硝煙の中から女性の声がする。ツナは聞き覚えのある声を聞いて、戦闘態勢に入る。

「それにしても驚いたよ。君は能力者だったとは」

硝煙が晴れるとそこには白衣のポケットの能力を不敵な笑みを浮かべる木山の姿があった。

(あの目……前と同じ……いや前よりも……)

だがツナは木山の姿を見た途端、ツナは何かを感じとっていた。

「さ、沢田……」

「黄泉川！」

木山の後ろからか細い女性の声がする。声の主は黄泉川だった。だがすでにポロポロであり、とても戦える状況ではなかった。

「逃げる……そいつは……複数の能力を……使う……」

「複数の能力!? 確か能力者は一個しか使えないはずじゃないのか!?」

ツナはどういう意味なのか黄泉川に尋ねる。だが黄泉川はすでに意識を失ってしまっていた。

「幻想御手よ」

「美琴」

黄泉川の問いに追いついて来た美琴がやってくる。

「初春さんは？」

「気絶はしているが無事だ」

ツナから初春が無事だと聞くと美琴は安堵する。

「それよりさっきのはどういう意味だ? どうして複数の能力が使えることと幻想御手が関係があるんだ?」

「黒子の予想だと幻想御手で昏睡状態になった学生たちの脳を繋げてそれを操れるんじゃないかって」

「まさか……幻想御手を使った学生たちの能力を全て使えるということか?」

「ええ。つまり木山は多重能力者ってこと」

ここに来る前に黒子と連絡を取りながら出した結論を美琴は話す。

「その呼称は適切ではないな。私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。言うなれば多才能力者だ」

「この際、呼び方はどうでもいいわ。こっちはやることに変わりはないんだから」

「ああ。お前を捕えて佐天を……昏睡状態になった学生たちを助ける」

「発火能力者に学園都市に7人しかいない超能力者。君たちに止められるかな? 1万の脳を統べる私を?」

1万の能力を使える木山。ツナと美琴に勝ち目はあるのか!?

標的（ターゲット）39 大空（ツナ）&超電磁砲（御坂美琴） vs 木山春生

木山の能力がツナと美琴を襲う。

「どうやら本当に能力が使えるようだな」

「みたいね」

何度も爆発が発生するもツナと美琴は全て躲し切り、木山の力を分析するだけの余裕があった。

「はあー」

美琴は木山に向かって雷撃を放つ。だが木山の前にバリアのようなものができ電流が下へ流されていく。

「なっ!?!」

「複数の能力によって作った避雷針か……」

「ほう。一発で見抜くとは。やるね沢田君」

雷撃が流されたことに美琴は動揺する一方でツナは木山が何をしたのか分析する。木山はツナの分析力に感心していた。

「これはどうかな」

木山が右手を前に出すと大量の瓦礫が超スピードで二人に向かっていく。ツナは咄嗟に右手を前に出して炎の壁を展開する。炎に当たった瓦礫は次々と塵と化していく。

（何だあの炎は？ 燃えたのならともかく粉々になった……?）

木山は炎の壁で瓦礫が粉々になったことに違和感を覚える。ツナが使っている炎はただの炎ではなく死ぬ気の炎である。死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギーである為、瓦礫を粉碎することができたのである。

（それに額に灯っている炎……いくら自分の能力とはいえ普通であれば自分自身を焦がすはず……一体どうなっている……?）

木山はツナの額に灯っている炎を見ながら、ツナの炎について分析するが理解することはできなかつた。

「ただの発火能力者かと思っていたがどうやら普通とは違うようだバイロキネシスト

ね」

そう言うと木山の回りの地面にヒビが入っていく。ヒビは二人の元まで拡散すると地面が崩れていく。

「美琴！」

「私は大丈夫！　それより木山を！」

「わかった！」

ツナは手を伸ばすが美琴は自分だと大丈夫だと伝える。美琴の目を見て大丈夫だと判断したツナは飛んで、落下している木山の元へ向かって行く。

「飛べるのか……」

木山がツナがこっちに飛んで来たことに驚きを隠せなかった。木山は咄嗟に宙に浮いてる瓦礫を能力で集めて盾の代わりにする。

「何!？」

木山の後ろからツナがパンチを繰り出す。だが木山は念を入れていた。複数の能力で作った薄いバリアを展開しておりツナの攻撃は防がれた。だが今のツナの一撃でバリアは破壊された。ツナは瓦礫の盾を展開したことにより前から攻撃して来るだろうと思っていた木山の心理を逆手に取り、瓦礫の盾を攻撃すると見せかけて炎を逆噴射させて後ろに移動し攻撃したのである。

(どういうことだ!?!　なぜ後ろに!?!　まさか空間移動!?!)

なぜ前方にいたはずのツナが後方から攻撃して来たのか木山にはわからなかった。

「くっ！」

このままでは不味いと思ったのか木山はツナから離れる為に、飛んで一気に地面へと降りた。

「私のことを忘れてんじゃないわよ！」

ツナが戦っている間に宙に浮いた瓦礫を足場の代わりにして先に地面に到着していた美琴が木山が地面に着地した瞬間、複数の砂鉄の槍で木山を攻撃する。

「忘れてなごいさい！」

木山は再び能力で瓦礫を展開して砂鉄の槍を防いだ。

「勿論、君のこともね」

そう言うと木山はその場から飛び引いた。その直後、木山のいた場所にツナが縦方向に回転しながらかかと落としを決めた。ツナの蹴りによって小さなクレーターができる。

「お前も空を飛べるとはな。それも能力の一つか」

ライトウニスチェンジ
「軽量変化。人や物体を軽くする能力さ」

木山は空中で移動したことについてツナが指摘した為、その理由を説明した。

「こつちこそ驚いたよ。発火能力に空中移動にテレポルト空間移動。多重能力者は理論上不可能はずなんだが」

木山はツナが多重能力者だと勘違いしていた。というよりもそもそもツナは能力者ではない。ツナが異世界から来たということを知らない木山が勘違いするのは無理もないのだが。

「それに君のあの炎。私が最初に放った瓦礫を粉々にした。一体、どうなっているんだい？」

「答えると思うのか？」

「私だって能力をバラしたんだ。教えてくれてもいいじゃないか」

「1万の能力の中のたった1個だろ。それに敵の能力が何なのかを分析するのも戦いだろ」

「君は色んな意味で面白いね。得体の知れない炎を使い、能力を解放した途端、人格も変わる。今まで研究者として生きてきたが君のような人は初めてだよ。私としては実に興味深い」

ツナとの会話で木山はツナに興味を湧かせており、不敵な笑みを浮かべる。

「だが私は忙しくね。悪いが君たちの相手をしている場合ではないんだよ」

「あんたになくてもこつちにはあるのよ！」

「君たちの目的は私を捕えて昏睡状態となった学生たちを助ける方法を私から吐かせることだろうか？ 安心してくれたまえ。私の用が終れば学生たちを解放するつもりだ。誰も犠牲にはなることはない。だから退いてくれないか？」

「ふざけんじやないわよ！ 誰も犠牲にしない？ あんたの身勝手な目的にあれだけの人間を巻き込んでおいて……人の心を弄んで……こんなことしないと成り立たない研究なんてろくなもんじやない！ そんなの見過ごせるわけないでしょうが！」

「……」

木山の言葉に美琴は怒りを露にする。だがツナはそんな木山のことを黙って見ていた。

「どうして……？」

「どうして？ それを君たちに言ったところで何も変わらないだろう」

「違う。そういう意味じやない」

「？」

ツナの言いたいことが意味がわからず木山は疑問符を浮かべる。

「どうしてそんなに悲しい顔をしてるんだお前は？」

「っ!？」

「え……!？」

ツナの言葉を聞いた途端、木山はわずかだが動揺する。美琴もツナの言葉の意味がわからず動揺してしまう。

ツナの言葉を聞いた途端、動揺した木山。一体どういことなのか!?

標的（ターゲツト） 40 動揺

「やっぱりだ。お前は悪い人じゃない」

「何を言っているんだ君は？」

なんとか平然を装う木山であったが完全に動揺を隠すことができていなかった。

「過去にお前と同じような男と戦ったことがある。本当は優しい人なのに自分の本音を偽って戦っていた」

ツナの脳裏には北イタリア最強と謳われた男、ランチアの姿が浮かんでいた。

「初春を拐ったのにも関わらず、初春を人質にして警備員アンチスキルを突破しなかった。初春を人質にすれば簡単に突破できるはずなのに。それをしなかったのは初春にもしものことがあったらいけないと考えたから。だから警備員アンチスキルと戦う道を選んだ」

「あの子を人質にせずとも私の能力があれば突破できる。そう踏んだだけだ」

「じゃあ何で警備員アンチスキルの戦いで無闇に能力を使った？」

「どういう意味だ？」

ツナの言いたいことの意味がわからず疑問符を浮かべる。

「自分の能力を無闇に使えば道路が壊れて逃走できなくなる可能性が充分にあるのにも関わらず能力を使った。バリアを展開したまま自分を軽くしてスピードを上げて直接攻撃で戦って制圧した方が道路が壊れて逃げられなくなるという最悪の事態は回避できる」

「た、確かに……」

ツナの言葉を聞いて美琴も納得する。木山は黙ったままであった。「それをしなかったのはお前自身が自らの手で人を傷つけることにトラウマがあるからだ」

「トラウマ？」

これ程の事態を起こした木山になぜトラウマがあるのか美琴はわからず疑問符を浮かべる。

「おそらく教師をしていた頃にあった何らかのトラウマ」

ツナがそう言った途端、黙ったまま木山は両手の拳を強く握る。

「前に会った時にお前は俺の家庭教師のことについて聞いてきた。その問いに答えた時はお前は言った。君はいい教師を持ったと。君はということとは自分は教師として何らかの失態を起こしたということ」

ツナ能力は前に木山に会った時に言った台詞と木山の表情が浮かんでいった。

「幻想御手で昏睡状態となった学生を誰も犠牲にしないとお前は言った。お前からすれば昏睡状態になった学生を治す必要はどこにもないはず。何よりそう言った時、お前は今までで一番悲しい顔をしていった」

ツナの脳裏にはその台詞を吐いていた時の木山の表情が浮かんでいた。普通の人が見れば何も違和感がないがツナは違和感を感じていた。

「このことから導き出される答えは一つ」

ツナは今まで木山の台詞や言動、表情からある一つの答えを導き出していた。

「それはおそらく過去にお前が何らかの形で自分の教え子を傷つけてしまった。そのせいで自らの手で直接、人を傷つけることができなくなった。今回の事件はその教え子たちと関係している。違うか？」

「黙れ！」

木山は声を荒らげる。今まで必死に自分を押さえていた感情を押し返すことができなかつたのである。

「お前は初春を人質にしなかつたんじゃない。できなかつたんだ。初春が教え子たちと同じ学生だったから」

「黙れ！」

「幻想御手で昏睡状態となった学生を誰も犠牲にしないのは、それは過去にお前が教え子を傷つけてしまったことへのせめてもの罪滅ぼし」

「黙れと言っているんだ！」

（木山が取り乱した……沢田の言っていることは本当……でも何でそ

んなことがわかるの……？ 私には木山が辛い顔をしているように
は全然、見えなかったのに……)

ツナは超直感で木山の心を完璧に見透かしていた。一方で美琴は
自分には全くわからなかった木山の本心がなぜツナにはわかるのか
がわからなかった。

「もういいー！」

ツナの言葉をこれ以上、聞きたくなかったのか木山は大量の缶が
入ったゴミ箱を念動力サイコキネシスで自分の上で移動させた。そして中身の入っ
た缶を二人に向かってばら撒いていく。

「虚空爆破！」
グラビトン

「ナッツ」

「ガウ！」

自分たちに向かって大量に降って缶を見て、美琴はこの能力が
虚空爆破だグラビトンということを理解する。ツナはリングからナッツを呼び
寄せる。

「GURURURU……GAOOOOO！」

ナッツの咆哮が辺り一帯に響き渡ると空中にばら撒かれた缶が石
化する。大空属性の特徴、調和によって缶を地面に落ちていた瓦礫と
同じコンクリートにしたのである。

「せ、石化だど……!? それに何だその猫は何だ……!? どうなって
いる……!?!」

(これ……あの時と同じ……)

どこからともなく現れたナッツが石化させたことに木山は驚きを
隠せないでいた。美琴は以前にセブンスミスでナッツがカエルの
人形を石化させたことを思い出していた。

「ナッツは俺の炎と同じ特徴を持っている相棒だ」

「特徴だど？」

「俺の炎の特徴は調和。ナッツの咆哮でアルミ缶を瓦礫と同じコンク
リートにしたんだ」

「調和による石化だど……!?! なぜ猫が能力を……!?!」

「ナッツは猫じゃない。ライオンだ」

「ラ、ライオン!?!」

ナッツがライオンだと知って、木山と美琴は驚きの声を上げる。

「ちよつと待ちなさいよ! ナッツがライオンって本当なわけ!?!」

「本当だ」

「どうか何でライオンなんて飼ってるのよあんた! おかしいでしよ!」

今までナッツが猫だと思っていたら実はライオンだったということと、ライオンを相棒にしている事に美琴は驚きを隠せないでいた。

「ナッツ。形態変化」

「ガウ!」

ツナはナッツを形態変化カンビオ・フォルマさせる。そしてボンゴレギアの上に炎を噴出する為の噴射口が取り付けられる。

「決着をつけるぞ木山」

標的（ターゲット） 41 ツナ無双

ナッツを形態変化カンビオフォルマさせるとツナは戦闘体勢に入る。

（何だ？ ライオンが消えたと思ったら腕のパーツが変わった？ あのライオンがパーツに変化したのか？）

木山は形態変化カンビオフォルマの原理がわからず困惑してしまう。

（これは明らかにオーバーテクノロジー……いくら学園都市とはいえこのような技術は不可能なはず……なのにどうしてそんな技術を彼は持っているんだ……？）

急にナッツを出したこと、ナッツがパーツに変化したこと、なぜツナがこのようなオーバーテクノロジーを持っているのかわからないでいた。

（待て……確か彼は前に学園都市に来たばかりと聞いた……なのにここまで能力を……まさか原石だとも言うのか!?!）

木山は前にツナが学園都市に来たばかりだということを思い出した。そしてツナが学園都市の技術生まれの能力者ではなく、生まれながらにして能力を持っている原石であると推測する。

（いや……だとしたらなぜ彼の名前は知られていないんだ……？ 多重能力者デュアルスキルに原石。いくら学園都市に来たばかりと言ってもこんな能力者がいたらもつと有名になっているはず……一体、どうなっているんだ……？）

多重能力者デュアルスキルと原石を兼ね備える存在ツナが今まで知られていないことに違和感を覚える。

（まさか彼は能力者ではないというのか……？ そう考えれば辻褄は合う……だったらあの力と技術は何なんだ？ 彼は一体、何者なんだ？）

木山は今までの戦いからツナが能力者ではないということを通き出した。だが同時にツナの力に技術、そしてツナの正体が何者であるのかわからず謎が深まるばかりであった。

（私としたことがつい……それは今、考えるべきことではないという

のに……)

研究者の性なのかツナのが気になってしまい、木山は己自身で長考してしまったことを反省する。

(考えるのは後だ……私が一番、警戒すべきは……)

(俺を警戒しているな……)

木山はツナを見ながら、この戦況において最も警戒すべきはツナだと判断した。だがツナは木山の表情から木山が自分のことを一番警戒していることを超直感で直感していた。

「美琴。俺が隙を作る。隙ができたからお前の攻撃を至近距離で喰らわせてくれ」

「わかったわ」

ツナは口元に手を当てながら小声で美琴に作戦を伝える。なぜツナが口元を隠したのかというと木山が口の動きだけで会話を読み取る読唇術を持っているかもしれないと考え、作戦が漏洩することを防ぐ為にそうしたのである。美琴もその意図に気づき、美琴もツナと同じく口元に手を当てながら小声で返答した。

(木山は読心能力も持っているはず……だけど今まで私たちの攻撃が読まれたことはなかった……余裕があったといえればそれまでだけど、使わない理由はないはず……おそらく使えない理由がある……ということは私たちの作戦はバレていないはず……)

美琴は今の作戦が読心能力によって読まれているのではないかと警戒するが、今までの戦いから木山が読心能力を使っていないことを推測した。結論を言うと美琴の予想は当たっている。木山は読心能力を使うことができる。ただ思考を読みたい人物に触れないと発動できない。日常生活ならいざ知らず、戦闘での使用は不可能なのである。

「いくぞ」

「っ!?!」

そう言った瞬間、ツナの姿が一瞬にして消える。そしてツナは炎の逆噴射による高速移動で木山の周囲を何度も現れたり消えたりを繰り返して木山の呼吸をずらそうとする。

ワイジユアルヒスス
〔視覚過敏！〕

木山は1万の能力の中から視力が極端に良くなる能力を使ってツナの動きを見る。先程まで見えなかったツナの姿がゆっくりと見えるようになる。ツナは攻撃を仕掛けるが木山は最小限の動きでツナの攻撃を躲す。

ラァイトウニスチエンジ
〔軽量変化〕

木山はツナに対抗する為に自分自身を軽くし少しだけ宙に浮いた。
エアインジエクシヨン
〔空気噴射〕

木山は足から空気を噴射する。そして木山の姿が一瞬にして消える。ツナが炎を逆噴射して高速移動するように、木山も足から噴射した空気を逆噴射することによって高速移動を可能にした。

〔俺の移動方法に気づいたか〕

〔君のお陰さ。感謝するよ〕

ワイジユアルヒスス

視覚過敏で木山はツナが炎の逆噴射による高速移動を見抜いていた。
ファイアースローア

〔火炎放射！〕

木山は右手の掌からツナに向かって火炎を放つ。ツナは炎の壁を展開して攻撃を防ぐ。

ウオーターシヨットガン

〔散弾水流！〕

木山は空気を逆噴射させてツナの背後を取ると、大量の水の弾丸をツナに向かって放った。ツナは後ろを振り向くことなく自分の背後に炎の壁を展開する。

〔振り向きもしないとは……だがその奢りが仇となったな〕

水の弾丸を放った瞬間木山は勝利を確信し、不敵な笑みを浮かべる。

が、

〔なっ!?!〕

木山の放った大量の水の弾丸は炎の壁によって全て防がれてしまった。

〔どういうことだ……!?! 確かに私の攻撃は全て当たったはず……蒸発させたのか……いや蒸発させたとしてもあれだけの量の水で炎の

出力が弱まっていない……どうなっているんだ……!?!)

あれだけの水の弾幕ですら出力が弱まらないことに木山は驚きを隠せないでいた。死ぬ気の炎は人間の生体エネルギーを圧縮し視認できるようにしたものである為、たとえ水の中でも消えることはない。

「無駄だ。戦うことに迷いがあるお前に死ぬ気の俺は倒せない」

「黙れ!」

木山は声を荒らげると木山は空気を逆噴射させてその場から消える。ツナも炎を逆噴射させてその場から消える。そして高速の戦いが始まる。

「な、なんて戦いしてんのよ……」

美琴は地上から空中で練り広げられるツナと木山の超高速の戦いを見ていた、美琴はあまりの戦いにその場から動くことすらできなかった。

(な、何だ……? 私の攻撃が読まれて……この短時間で私の攻撃を読んでいるというのか……!?!)

木山はツナに攻撃を放つていくが全く当たらないことに驚きを戸惑いを隠せないでいた。

「幻影創造」
イリュージョンクリエイト

木山はツナを囲むように広範囲に渡って自分の幻覚を何体も作り出した。

「光線放射」
レーザーシューター

木山と幻覚の木山が両手の指先がツナに向かって一斉にレーザーを放った。

「なっ!?!」

木山は再び驚きを隠せないでいた。なぜならこれだけの幻覚の中でツナは一切、迷うことなく自分の左側に炎を展開してレーザーを防いでいたのだから。この程度の幻覚を見破るなどツナには造作もなかった。

「視覚障害!」
ダメージエック

(重福省帆の能力!)

木山の姿が完全に見えなくなる。ツナと美琴はこの能力が重福省帆のものだということを理解する。

パニングサイン

（気配消失！）

（気配が消えた……）

木山はさらに能力で気配を消した。ツナは木山の気配が消えたことと感知取り、美琴は自身の体から発生している電磁波の索敵に木山が引っ掛からなくなったことに気づいた。

（何か来る！）

ツナは超直感で何かを感じ取ると上に上昇した。上昇した後、地面が壊れる。

（避けただど!? 姿も気配を消している上に攻撃も見えないというのに!?）

（あいつどうやって……!?）

姿を気配を消している状態でツナがなぜ攻撃を避けることができなのか木山と美琴は驚きを隠せないでいた。木山はさらに攻撃を続けるがツナに攻撃は当たらなかった。

（なぜこうもこれだけの能力に即座に対応できるんだ!?）

いつまでもツナに攻撃が当たらないことに木山は焦り始める。

（上！）

ツナは木山のいる位置を特定すると炎を逆噴射させて一瞬にして上へ移動する。

「捕まえた」

（私の位置を特定しただど!? しかもこの目を持ってしても全く見えなかった!? まさか今まで本気ではなかったというのか!?）

ツナは木山の背後から両肩を両手で掴むと今まで

見えていなかった木山の姿が露になる。

「終わりだ」

「ガハッ！」

ツナは木山の頭にかかと落としを決める。木山は地面に一直線に落下していく。

フレキシブルマテリアル

「柔軟物質！」

木山は落下すると同時に地面に手をつけると、土が柔らかくなる。触れた物質を柔らかくする能力で土を柔らかくして地面への衝撃を和らげたのである。

「覚悟しなさい木山！」

今が好機だチャンスと判断した美琴は電撃を纏った両手で木山に向かって行く。

グラビティエリア
「重力領域！」

「ぐっ！」

木山は右手を前に出すと周囲に重力が発生し、美琴は立っていられなくなり片膝をつく。

「このっ！」

「この重力下で動けるのは私だ……がはっ!？」

美琴は必死に抗おうとするが動くことができなかった。木山はゆっくりと立ち上がった。その瞬間、木山の背中に痛みが走る。木山が背後を見るとそこには肘打ちを喰らわせているツナがいた。

(なぜこの重力下で動けるんだ……!?)

重力下において全く重力をもとしないツナに木山は驚きを隠せないでいた。シモンファミリーのボスである古里炎真の重力はこの数十倍の重力だった為、ツナにとってこれぐらいの重力はどうということとはなかった。

「今だ美琴！」

「喰らいなさい！」

「があああああああ！」

ツナの一撃でグラビティエリア重力領域が解けて美琴は動けるようになる。美琴は木山に抱き付いて、零距离から電撃を喰らわせる。美琴の一撃が効いて木山は叫び声を上げた。

撃破！

標的（ターゲット） 42 木山の過去

叫び声を上げる木山。これで勝負が着いた

『木山センサー』

（何？ 頭の中に直接……）

と思ったその時、美琴の頭の中に小さな少女と少年の姿が写る。

「美琴!? どうした!?!」

木山を捕えたまま動かなくなった美琴を見て、ツナは木山が何か美琴にしたのではないかと思い、美琴の肩を掴んで美琴を木山から引き剥がそうとする。

「これは……!?!」

美琴の肩を掴んだ途端、ツナの頭の中にも美琴と同じ映像が流れていく。

木山の記憶

『今日から君たちの担任になった木山春生だ』

『厄介なことになった。だがこの実験を成功させる為の辛抱だ』

『子供は嫌いだ。騒がしいし、デリカシーがないし、失礼だし、悪戯するし、論理的じゃないし、馴れ馴れしいし、すぐに懐いてくるし』

『センサー。私でも頑張ったら大能力者⁴とか超能力者⁵になれるかな?』

『私たちは学園都市に育ててもらってるから。この街の役に立てるようになりたいな』

『研究の時間がなくなっちゃった。本当にいい迷惑だ』

『A I M 拡散力場制御実験。長い時間をかけて何度も計算を繰り返し準備してきた。何も問題はない。これで先生ゴッコもおしまいだ』

『怖くないか?』

『全然。だって木山センサーの実験なんですよ。センサーのこと信じてるもん。怖くないよ』

『これでおしまい……』

木山は研究の一環で親が入学費を払って子供を学園都市の寮に入れたまま行方を眩まし学園都市に置いてけぼりにされた子供、チャイルドエラ置き去りたちの

担任することとなった。だが当の木山は乗り気ではなく嫌々、研究ということでは仕方なく引き受けた。そして長かった教師としての役目もこの実験が終了することで自由の身になれる……

『……のドーパミン値低下中!』

『抗コリン剤投与しても効果ありません!』

『早く病院に連絡を!』

そう思っていた。だが実験の途中でアクシデントが起きる。木山の教え子たちが実験の途中で昏睡状態に陥ってしまったのである。

木山はあまりのショックに顔を真っ青にする。

『木山君。よくやってくれた。彼らには気の毒だが科学の発展に犠牲はつきものだ。今回の事件は気にしなくていい。君には今後も期待しているからね』

老人が邪悪な笑みを浮かべながら木山の肩に手を置いた。この老人は木原幻生。マッドサイエンティストである。木山の教え子たちが昏睡状態に陥ったのは事故ではなくこの木原幻生によって人為的に仕組まれたものであった。

木山の記憶が終わると、木山は地面にうつ伏せの状態に倒れる。ツナと美琴はあまりに悲惨な木山の過去にショックを受けていた。

「観られたのか……!?」

木山はツナと美琴の表情から自分の記憶を見られたことを察し、肩で息をしながら二人のことを睨んでいた。木山はすぐに抵抗しようとするが頭痛が発生し演算に集中することができず能力が使えずになっていた。

「何で……」

「っ!？」

ツナがそう一言、呟いた途端、木山はツナの顔を見て驚いてしまっていた。そこには超ハイパー死ぬ気モードの状態が解けてノーマル状態のツナが涙をボロボロと溢している姿が視界に映っていた。

「何でこんなことができるんだよ!! 何であの子たちが犠牲にならなきゃいけないんだよ!! 人を何だと思っているんだ!!」

「沢田……」

「……」

ツナは涙を溢しながら怒りをぶち撒けた。そんなツナを見て美琴はツナに同情しており、木山は見ず知らずの人の為に涙を流し怒るツナに驚いていた。

「あの実験の正体は暴走実験の法則性解析用誘爆実験。能力者のAI M拡散力場を刺激して条件を探るものだったんだ。あの子たちを使い捨てのモルモットにしてね」

「人体実験……だったらそれこそ警備員に……」

「23回」

美琴が提案すると、木山は23回という回数を呟いた。木山は語る。教え子たちの回復手段を探る為、そして事故の原因を究明するシミュレーションを行う為に、ツリーダイアグラム樹形図の設計者の使用を申請したが却下されたという。

「統括理事会がグルなんだ。警備員アンチスキルが動くわけがない……」

「でもそれじゃあんたのやってることも同じになっちゃ……」

「君たちに何がわかる!! あんな悲劇を二度と繰り返させはしない!! その為なら私は何だつてする!! この街の全てを敵に回しても止まる訳にはいかないんだ!!」

木山は声を荒らげる。美琴は木山の言葉を聞いて、何も言い返すことができなかった。

「その為に他人を……学生たちを犠牲にしたんですか?」

「犠牲にはしないさ。昏睡状態になった学生は治すと言ったはずだ」

「治りませんよ。学生たちも木山さんの生徒たちも」

「何を言っている? 君にそんなことがわかるわけ……」

「わかりますよ」

研究者ですらないツナがそんなことを言った為、木山は怪訝な顔をする。ツナは真剣な眼差しで木山の言葉を遮る。

「体は治っても心の傷は治りませんよ」

ツナは真剣な眼差し、それでいてどこか悲しそうな表情で木山に言い放った。

「心に受けた傷は簡単に治らない。それは木山さん自身が一番わかっていますよね?」

「そ、それは……」

「それに木山さんが自分や他人を犠牲にして助かったと知って、喜んでくれると思いますか? 笑ってくれると思いますか?」

「じゃあどうすればいいと言うんだ!! 他に助ける方法はないんだ!!」

このままあの子たちを放っておけというのか!?

ツナの言葉を聞いて、木山は再び声を荒らげる。

「ぐっ……!?! あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!」

突如、木山は両手で頭を抑えながら苦しみ始める。

突如、苦しみ出した木山。一体、何が!?

標的（ターゲット）43 幻想猛獣（AIMビースト）

突如、苦しみ始めた木山。

「木山さん!? 大丈夫ですか!」

ツナは苦しみ出した木山を見て心配するが、あまりの激痛に木山は返事をすることもできず絶叫を上げていた。そしてそのまま地面にうつ伏せの状態で倒れてしまう。

（やばい……凄く嫌な感じがする……）

倒れた木山を助けようと思った矢先、ツナの超直感が警告した。何かが危険なことが起こると。そしてツナは再び超死ぬ気モードになる。

「気をつける美琴! 何か出て来るぞ!」

「な、何かって何よ!」

「わからない! ただもの凄く嫌な感じがする! 気を抜くな!」

「わ、わかったわ!」

何かが出るというツナの曖昧な発言に美琴はわからず聞き返した。ツナも何が出て来るかまではわかってはいなかったが、何かとんでもない事態が起こるといふことだけはわかっており必死に美琴に呼びかけた。ツナの誠意が伝わったのか美琴は戦闘態勢を取る。

「こ、これは……!?!」

「な、何なのよ……!?! これ……!?!」

木山の頭から得体の知れない何かが出て来る。得体の知れない何かは徐々に形を変えていき、巨大な胎児へと変貌し、さらに頭の上に天使の輪っかが形成される。そして胎児の目がゆっくりと開いた。

「ぎいやああああああああ!」

胎児が叫んだ瞬間、衝撃波が発生し地面が裂け、大量の瓦礫が吹き飛んでいく。美琴は磁力を操って砂鉄の壁を展開し、衝撃波と飛んでくる瓦礫を防御していく。

「沢田!?! 何してんのよ!?!」

ツナは炎の壁を展開しながら飛んで胎児へと向かって行く。ツナ

の行動に美琴は驚きを隠せないでいた。

「よしっ！」

ツナが炎の壁を解除すると前方から衝撃波によって飛ばされた木山を上手くキャッチした。そしてそのままツナは美琴の展開した砂鉄の壁の後方へと戻ってきた。

（あの状況で衝撃波の中に入って飛ばされた木山を助けに行っただって
いうの!? 一つ間違えれば自分だって!?）

ツナのあまりにも無謀すぎる行動、そして全く迷うことなく衝撃波の中に飛び込んだことに美琴は驚きを隠せずにいた。

「美琴。お前の電撃の力で木山を起こせるか？」

「え……!?! 何でそんなことを……!?!」

「あいつを倒すのに時間をかけすぎると初春たちが危なくなる。正直、木山を安全な場所まで逃がしている時間も惜しい。あいつを倒すには一刻も早く、決着をつけることが絶対条件。それにはお前の協力が必要不可欠なんだ」

ツナは木山を逃がさず、なぜこの場で起こすのかということをも美琴に説明する。

「無茶なお願いなのはわかってる。無理ならそれでもいい。逃げる時間は俺がなんとか……」

「私を誰だと思ってるわけ？ 常盤台はエリート校。人体の仕組みくらい頭に入ってるわ。これぐらい朝飯前よ」

「そうか。わかった」

そう言うツナは砂鉄の壁の前に移動し、胎児を見上げる。

「俺はあいつの注意を引き付ける。その間に木山のことを頼む」

「わかったわ」

ツナは炎を逆噴射させると空を飛んで、胎児の元へと向かっていく。

「ナッツ。形態変化」

カンビオフォルマ

カンビオフォルマ

ツナはナッツを再び形態変化させる。ボンゴレギアに噴射口が現れる。ツナは右手の掌を胎児に向けて、左手で右手首を握り、右手の噴射口から炎を逆噴射させる。

「Xカノン！」^{イクス}

右手の掌から弾丸と化した炎が胎児に向かって放たれた。炎は胎児に直撃し、体に穴が空いた。
が

「再生までするとはな……」

だがすぐに体が元に戻っていく。ツナは再生能力があることに驚きを隠せないでいた。再生しながら胎児はツナの方を見る。ツナの一撃で胎児の意識はツナの方へ向いた。

「お前の相手は俺だ」

ツナは誰の被害の出ないような場所に胎児を移動させていく。

一方で美琴は。

「ゲッホー！ ゲッホゲッホー！」

電気ショックで気絶していた木山を起こすことに成功していた。

「気絶していたのか……」

木山は今まで自分が気絶していたことを自覚する。そして胎児と戦ってツナの姿を目の当たりにする。

「ハハハ……まさかあんな化け物が……学会で発表すれば表彰ものだな……」

胎児と戦うツナを見ても木山は驚かず、乾いた笑みを浮かべながら笑っていた。

「ねえ。あれは何なの？ 何であんな化け物があんだの中にいんのよ？」

「あれは虚数学区だ」

「虚数学区？ あれって都市伝説でしょ？」

「虚数学区はA I M拡散力場の集合体だったんだ。アレもおそらく原

理は同じ。AIM拡散力場でできた幻想猛獣AIMビーストとでも呼んでおこうか」
木山はあの胎児について説明し、幻想猛獣AIMビーストという名を名付けた。
「幻想御手レベルアップ!のネットワークによって束ねられた1万人のAIM拡散力場が触媒になって生まれ、学園都市のAIM拡散力場を取り込んで成長しているのだろう。そんなものに自我があるとは考えにくい。ネットワークの核であった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれない」

木山は幻想猛獣AIMビーストが暴走している原因を推測する。

一方で幻想猛獣AIMビーストと戦っているツナは、

(そろそろか……)

すでに幻想猛獣AIMビーストの攻撃を見切っていた。そして美琴が木山を起す為の時間は稼げたであろうと判断する。

「ナッツ。形態変化カンビオフォルマ。攻撃モードモード・アタック」

ツナはナッツを攻撃モードカンビオフォルマで形態変化させた。

「ボンゴレイ世のガントレットミテリナ・デイ・ボンゴレブリーモ」

ナッツがIと書かれたガントレットに形態変化し、ツナの右腕に装着する。

「バーニングアクセル!」

ツナは右手に炎を集約させると幻想猛獣AIMビーストに向かって放っていく。

一点に集中され球体と化した炎は幻想猛獣AIMビーストの顔の半分を消滅させた。

「再生に集中している今の内に」

ツナは攻撃を止めて再生に集中している幻想猛獣AIMビーストを見ると美琴と木山の元へ戻っていく。

「あの化け物を一撃であそこまで……」

「これではどちらが化け物かわからないな……」

ツナが幻想猛獣^{AIMビースト}の体の半分程、消滅したことに木山と美琴は驚きを隠せないでいた。

「すまない。待たせた」

ツナは美琴と木山の姿を確認すると二人の元へ降りて来た。

「あんたならあのままやれば倒せたんじゃないの？」

「無理だ。あいつはでか過ぎる。俺はお前と違って広範囲に渡っての攻撃をすぐには出せない。それにあいつは再生するんだ」

「再生!？」

再生と聞いて美琴は幻想猛獣^{AIMビースト}の方を見る。幻想猛獣^{AIMビースト}はすでに半分程、再生していた。

「まさか再生までするとはな……」

「どうすればいいのよ……」

ただでさえ強い幻想猛獣^{AIMビースト}が再生すると知って、木山と美琴は険しい顔をする。

「大丈夫だ。さっきも言った通りあいつを倒す方法ならある」

「私の力が必要不可欠って言うってたけど、再生する相手に私とあんたで挑んでも無理でしょ。それに私の電撃はおそらく通じないわ」

「それはわかってる。それより美琴には時間を稼いでもらいたいだ」

「時間を？ どういうこと？」

美琴は二人で戦って幻想猛獣^{AIMビースト}を倒すのかと思っていた。だが自分の思っていた作戦とは違った為、作戦の詳細を尋ねる。

「俺の技であの化け物を消滅させる」

「はい……!？」

ツナの言葉を聞いた途端、美琴と木山は開いた口が塞がらない状態

になつてしまふ。

果たしてツナの言葉の真意とは!?

標的（ターゲット） 44 必殺技（とっておき）

消滅という単語を聞いて驚く美琴と木山。

「しよ、消滅!? 何、言ってるのよ!?!」

「そのままの意味だ。俺の最高の技で再生できないくらい粉々にする」

いくらツナが強いといっても幻想猛獣AIMビーストを消滅させることなど不可能だと美琴は思っておりツナの言葉を信じられないでいた。一方でツナは平然と凄いことをさらっと述べていた。

「とうかさつき広範囲の攻撃は苦手って自分で言ってたじゃない!」

「すぐにはな。時間さえあればいける。だからお前に時間稼ぎを頼んでるんだ」

「で、でもそんなの信じられるわけ……」

「じゃあどうする? お前の電撃は通じない。たとえ通じたとしてもお前の攻撃ではあいつを消滅させるだけの力はない。たとえお前が本気でやったとしてもだ」

「な、何で……!?!? それを……!?!」

「お前と戦った時だ。本気を出せばもつといけるはずなのに、お前は力を抑えていた。それは本気を出せば自分自身への反動が大きいからだ。そうだろ?」

ツナは美琴と戦っていた時にすでに美琴の力量を把握していた。ツナの言っていることが正しいのか美琴は何も反論できずにいた。

「わかったわよ……あんたの言う通り時間を稼いであげるわ」

美琴は自分が本気を出しても幻想猛獣AIMビーストには勝てないと理解し、ツナの言う通り時間稼ぎをすることを決める。

「その代わり絶対に倒しなさいよ! 私の頑張りを無駄にしたらただじゃおかないんだから!」

「ああ。任せろ」

そう言うところでは形態変化カンビオフォルマを解除しナッツを肩に乗せる。そして

手を開いた右腕を前方に移動させ、手を開いた左手を後方に移動させると自身の最強の技であるXイクスBバーUナーRナーNナーEナーRナーを発射する態勢に入った。

「オペレーションX」イクス

『了解シマシタボス。イクスバーナー発射シークエンスヲ開始シマス』

ツナのヘッドフォンから女性のアナウンスが聞こえ、ツナの瞳にゲージを映し出される。これはコンタクトである。勿論ただのコンタクトではなく、ツナの知り合いのメカニックのスパナが作ったXイクスBバーUナーRナーEナーRナー用コンタクトである。ヘッドフォンもスパナの作ったものであり、XイクスBバーUナーRナーEナーRナーを安定して放つ為に必要不可欠なアイテムである。

(炎を逆方向に噴射させた……!?)

ツナは後方に移動させた左手から炎を逆方向に噴射させた。美琴はなぜツナがそんなことをするのかわからないでいた。

(まさかあの炎を支えにして……!?)

ツナの構えと炎を逆方向に噴射させたことから美琴はツナが何をしようとしているのかを理解する。

「準備ができたならナッツの咆哮で合図する。ナッツの遠吠えが聞こえたらこっちにあいつを誘き寄せてくれ」

「わかったわ」

ツナは遠くで戦う美琴に発射する準備が整ったことを知らせる術を美琴に伝える。美琴はそう言うと一緒に走って、幻想猛獣AアイMビEスTの元へと向かって行く。

「木山。お前はここから逃げろ。今の俺は発射するのに集中しているからお前を護る余裕はない」

「そうはいかない。あの幻想猛獣AアイMビEスTは私が作ったんだ。私にはあれがどうなるか見届ける責任がある」

ツナは後ろを向いて木山に逃げるよう命ずるが木山の意志は固く、逃げる様子はなかった。

「わかった」

木山の目を見てこれ以上、何を言っても木山は逃げる気はないとツ

ナは判断し、この場に留まることを許した。

「だがそれでも少し離れていてくれ。この技は強力すぎて、お前まで巻き添えになる」

「わかった……」

そう言うと木山はツナから少し離れた場所へと移動した。

『ライトバーナー炎圧上昇。48万……49万……50万 F V』
ファイアンマボルテージ

一方でAIMビースト幻想猛獣と戦っている美琴は。

「何であいつはあんなダメージを与えられたのよ！」

AIMビースト幻想猛獣に砂鉄の槍を放って攻撃していた。だが斬っても斬ってもすぐに再生する為、意味はなかった。一応、電撃は放ってはみてものの木山の時と同じく避雷針を展開され、電撃が通じることはなかった。

「早くしなさいよ沢田！ いくら私でもそう長くは持たないわ！」

そしてイクスバーナーXBURNERを放つ準備をしているツナは。

『レフトバーナー炎圧上昇。48万……49万……50万 F V』
ファイアンマボルテージ
ゲージシンメトリー発射スタンバイ』

支えとなる左手の炎の量が右手の炎と同じ量となった。これで後は美琴に合図し自分たちの所へと戻り次第、XイクスBスUスRスNスEスRスを撃つだけとなった。

「ナッツ！」

「GURURU……GAOOOOOOO！」

ナッツは美琴と幻想猛獣AIMビーストのいる方向へと咆哮を放った。

「ナッツの声！」

美琴にXイクスBスUスRスNスEスRスの発射が整ったと知らせる合図が美琴に届いた。

「ごつちよー！」

美琴は戦線を離脱しツナたちのいる所へ走って行く。逃げていく美琴を見て幻想猛獣AIMビーストは美琴を追って行く。

全速力でツナの所へと向かう美琴。そしてツナたちのいる場所へ辿り着いた。ツナはナッツをリングに戻した。

「美琴！ 木山のいる場所まで離れてくれ！ お前まで巻き込むことになる！」

「OK！」

美琴が前に見えてきたところでツナがそう言う。美琴はそのまま勢いを殺すことなく木山のいる場所まで走って行く。美琴が安全な場所まで避難をしたのを確認するとツナは自分の方へと向かってくる幻想猛獣AIMビーストの方を向いた。

「能力が人間の価値じゃない。人間の価値はそんなもので決まりはない」

ツナは超直感で感じとっていた。幻想猛獣AIMビーストから昏睡状態にある学生たちの怨みや嫉妬、自己嫌悪などの負の感情が溢れ出していることに。

「俺もお前達と同じだ。落ちこぼれでずっと一人だった」

ツナの脳裏に中学時代にいじめられていた時のことが浮かんでいた。た。

「でも友達ができて変わった。嬉しいことも楽しいことも、辛いことも悲しいことも分けあえるようになった」

ツナの脳裏には元いた世界の仲間たちの姿が浮かんでいた。

「お前たちは一人じゃない。自分と同じ悩みを抱えている無能力者仲間だっている。だから一人で悩まずに今度は仲間と共に頑張って欲しい」

ツナは少しだけ微笑みながらそう言った。そして笑みが消える。

「XイクスBスUバーRナーNナーEナーR！」

ツナの右腕から大量の炎が放たれた。

放たれる最強の一撃！ 果たして!?

標的（ターゲット） 45 ツナの記憶

ツナの一撃が幻想猛獣^{A I M ビースト}へと放たれる。幻想猛獣^{A I M ビースト}もツナの炎に向かって攻撃を放っていくもツナの炎の前ではなす術もなく粉碎されてしまう。

「ぎいいやあああああ！」
そしてツナの一撃が幻想猛獣^{A I M ビースト}にぶつかる。幻想猛獣^{A I M ビースト}は苦しい声を上げる。そして徐々に体が崩れ始める。

「う、嘘でしょ……!？」

「本当にこれがたった一人の人間の力なのか……!？」

自分たちの想像を遥かに越える一撃に美琴と木山はその場で立ち尽くすことしかできなかった。

「また何か入って……!？」

「何だこれは……!？」

突如、美琴と木山の頭の中に映像が入ってきた。映像に映っていたのはダメツナと言われいじめられていた頃のツナの姿であった。

（これって……!?!）

（沢田君の記憶……!?!）

美琴と木山はこれがツナの記憶だということに自覚すると同時に、ツナの暗い過去に悲しい気持ちになっていた。

『ん？ 俺は家庭教師のリボーン』

（え!!? あの子が沢田の家庭教師!? どういうこと!?!）

(赤ん坊……!? なぜ赤ん坊が家庭教師なんだ……?)

ツナとリボーンとの出会いが映し出される。ずっとツナが言っていた家庭教師かてきよーがこんな赤ん坊だと知って美琴と木山は驚きを隠せないでいた。そこからさらに記憶は続いていく。六道骸たちとの戦い、ボンゴレ最強の暗殺部隊ヴァリアーとの次期後継者を決めるリング争奪戦。

(な、何よこれ……!?)

(一体これは……!?)

あまりにも悲惨過ぎるツナの過去に美琴と木山は頭がどうになくなりそうだった。

『誰がユニを殺したと思っているんだ……お前がこんな世界にしたからユニは……ユニは死んだんだ!! 白蘭!! 俺はお前を許さない!!』
(あんな女の子が……)

(私たちとあまり変わらないじゃない……)

未来での白蘭率いるミルファイオーレファミリーとの戦い。木山と美琴はまだあんなにも若いユニが死んだことに衝撃を隠せないでいた。さらに記憶は続きシモンファミリーとの戦い、シモンファミリーを裏で操っていたボンゴレファミリーの初代霧の守護者、デイモンD・スピードとの戦い。

『チェツカーフェイスを倒したら俺たち現アルコバレーノはどうなるんだ?』

『死ぬね』

『な!? リボーンが死ぬ……?』

(え……!?)

(な……!?)

そしてアルコバレーノの秘密を知ることとなった虹の代理戦争。突然、いきなりリボーンが死ぬという事実美琴と木山は驚きを隠せないでいた。

『サンキューなツナ』

『え?』

『お前のおかげでまだ生きられるな』

病院の屋上でツナにお礼を言うリボン。ここでツナの記憶は終わる。

そして

「これで終わりだ……」

ツナは幻想猛獣AIMビーストに向かつて悲しい表情をしながらそう呟くと幻想猛獣はツナの炎に包まれていく。

「っ!?!」

美琴と木山は驚きを隠せないでいた。なぜならたった一人で本当に幻想猛獣AIMビーストを消滅させたのだから。

（本当に消滅させた……!?! 1万の能力者の集合体であるあの幻想猛獣AIMビーストを!?!）

（私の超電磁砲レールガンの何十倍の威力……!?! こんなので……!?!）

ツナのXイクスBスUスRスNスEスRスのあまりの威力に木山と美琴は驚きを隠せないでいた。

「ふう……」

ひと息つくとツナは超ハイパー死ぬ気モードの状態を解除した。

「ありがとう美琴。助かったよ」

「え……? う、うん……」

「美琴?」

ツナは美琴にお礼を言ったが美琴は浮かない顔で返事をした。ツナは美琴の様子がおかしいことに気づく。

「沢田君……君は一体、何者なんだ?」

「木山さん?」

「君がああ技を放った後、どういうわけか君の過去が見えたんだ」

「え……?」

自分の過去が見えたを知ってツナは驚きを隠せないでいた。

「それにあのライオン。あれは明らかにオーバーテクノロジー。どうしてそんな技術を君が持っているんだい?」

「それは……」

「無理にとは言わない。答えたくないなら別にいい」

木山の質問にツナは答えるかどうか迷ってしまう。木山はツナの

気持ちを察したのかそう言った。少しの間沈黙が続く。

「俺はこの世界の人間じゃないんです。異世界から来た人間です」

ツナは木山に自分が異世界から来たという人間だということを明かしたが、自分がマフィアのボス候補だということは言わなかった。

木山に自分の正体を明かしたツナ。木山の反応は!?

標的（ターゲット）46 生徒（ツナ）と教師（木山）

木山に自分の正体を明かしたツナ。

「そうか」

「え？ 信じてくれるんですか？」

「私が考える限りそれ以外に君がああ技術を持っている理由が思い浮かばないからな」

ツナは異世界から来たといっても驚くどころか冷静でいる木山に少し驚いていた。木山はツナが異世界から来たことよりもずっとわからなかった答えがわかったことの方が重要だったのである。

「一つ聞いていいかい沢田君？」

「何ですか？」

「君は先生が死ぬと聞かされた時、どういう心境だったんだ？」

木山はツナの記憶を見た時に気になっていたことを尋ねる。

「何もわかりませんでした。どうしていいかわからなくて頭が真っ白になりました」

ツナはバミューダからリボーンが死ぬと聞かされた時のことを素直に話した。

「でもそれなのにリボーンは自分が死ぬことに対して何の疑問も持っていないくて。ろくな死に方は期待しちゃいけない、俺たちの為に死ななくていいって……いつも俺が逃げ出そうとしたり、弱音を吐いたら許さないあいつがそんなことを言ってる……俺を護る為に犠牲になろうとしたんです」

ツナはリボーンが言っていた言葉を思い出していた。

「リボーンに出会ってから散々でした。無理やり戦わされたり、無理やり告白させられたり、無理やり修行させられたり」

ツナの脳裏にはリボーンと過ごしたハチャメチャな日々が浮かんでいた。

「でもリボーンがいなかったら俺はずっと一人でした。あいつは俺に居場所をくれた。大切なことをいっぱい教えてくれた。俺にとって

リボーンは最高のかけがえのない存在なんです」

ツナの脳裏にはリボーンが今まで教えてくれたことが浮かんでいた。

「でも俺一人の力じゃどう頑張っても無理でした。だから仲間の力を借りました。そのおかげでリボーンは助かりました」

ツナの脳裏には元の世界の仲間の姿が脳裏に浮かんでいた。

「だから木山さんも一人で何もかも抱えないで下さい。俺は協力しますよ。木山さんの生徒を救うことに」

「沢田君……」

ツナが木山に協力するということを伝えると木山は驚いていた。

「俺の世界に平行世界の知識を共有できる奴がいます」

「平行世界!?!」

ツナの脳裏に白蘭の姿が浮かぶ。平行世界の知識を共有できると聞いて、木山と美琴は驚きの声を上げる。平行世界とはある時点から

分岐し、分岐前の世界と並行に連なる別の世界のことである。たとえば二つの別れ道があったとして右の道を選んで進んだ。その時に同時に左の道を進んだ世界も同時に存在する。簡単に言ってしまうばもしもの数だけ世界が存在するということである。

「そいつの力を借りられれば安全な方法で木山さんの生徒たちを助けられるかもしれません」

「でも沢田……そいつを連れて来たくてもあんたの世界に行く方法が……」

「大丈夫。絶対に来るよ。リボーンたちならきつとなんとかしてくれるから」

美琴は一番の問題を指摘するが、ツナは何の迷いもなくそう答えた。

「君は仲間を信じているんだな……」

どこまでも仲間を信じるツナの姿を見て、木山は少しだけ微笑んでいた。

「もう私はこれ以上、無理をする必要はないんだな……」

「はっ」

「今まで一人で苦勞してきたのに……まさかこんなにも簡単に解決する方法があつたなんてな……」

「一人で何もかもできる人間なんていませんよ。俺だってそうです。今、こうして木山さんを止めることができたのもみんなの力のおかげです」

「そうか……どうやら私は一人で無理し過ぎたようだな……」

ツナの言葉を聞いて微笑んで木山であつたが、再び暗い顔をしてしまふ。

「だがあの子たちが助かつたとして私はあの子たちの心を傷つけてしまった……私にはあの子たちに会う資格など……」

木山は生徒たちにしたことを思い出す。騙されていたとはいえ、生徒たちを昏睡状態にするような実験に参加していたという事実は変わらない。木山の脳裏にはそのことが頭から離れないでいた。

「生徒たちの傷ついた心を癒すのに木山さんの力が必要なんです」

「な、何を言つて……」

「傷ついた人の心を癒すことができるのは人だけです。そして生徒たちの心を癒すことができるのは生徒たちが一番、信じた人……つまり木山さん。あなただけなんです」

「信じる……あんなことをした私をあの子たちが私のことを信じてくれるはずなど……」

自分が騙されて実験を行つていたということを生徒たちが信じてくれるとは木山には到底思えなかつた。

「信じてくれますよ」

「な、何を言つて……気休めなら……」

「気休めでも何でもないですよ。だって木山さんはあの生徒たちのことを大事に想つてるじゃないですか。その想いはきつと届きますよ」

「想ひ……」

「木山さんは生徒たちのことを救おうとした。その想いがあれば信じてくださいよ」

木山が生徒たちが自分たちのことを信じてくれると思つていなかったが、ツナはそうは思つていなかった。

「それに生徒っていうのは先生に信頼されてるってわかるとすっごく嬉しいんですよ」

ツナはリボンに信頼されている時のことを思い出す。いつも色々とめちやくちやなことをしてうんざりするのだが、信頼されると凄く温かい気持ちになることを。

「君はどうしてそこまで私のことを……？」

「木山さんのことを信じてますから。だから問題ありません」
「っ!？」

ツナがそう言った瞬間、木山は目を見開いて驚いてしまう。なぜならツナの姿と生徒の面影が重なったからだ。

「やれやれ……だから子供は嫌いなんだ……こんなにも簡単に人を信じるんだから……」

木山は右手で両目を押さえながらそう呟いた。だが押さええた両目から溢れんばかりの涙がボロボロと溢していたのであった。

標的（ターゲット） 47 己の弱さ

木山は応援にやって来た警備員アンチスキルに手錠をかけられ連行されることになる。

「そうだった。君たちに言っておくことがあった」

護送車に乗ろうとした木山だったが、何かを思い出し木山は足を止める。

「花飾りの彼女に幻想御手レベルアップバーをアンインストールする治療用のプログラムを渡してある。それを使えば昏睡状態になった学生たちを起こせるはずだ」

「はい……」

木山はそう言うが、ツナの表情は暗かった。木山が逮捕される為、どうしても暗い気持ちになってしまふのである。

「そんな表情かおをするものじゃない。私は幻想御手レベルアップバーを作った張本人。それに君たちは私を捕らえる為に来たんだろう」

「でも……」

「殺されるわけじゃないんだ。時間が経てば出所できる」

木山はツナに暗い表情かおをするなど言うがツナの表情かおが晴れることはなかった。

「それに私は君と話したいことがあるんだ」

「話したいこと……?」

「君の先生のことさ。私が出所したら君の先生のこと聞かせて欲しい」

「木山さん……」

「約束だよ。沢田君」

微笑みながらそう言うのと木山は歩を進めて、護送車に乗って行く。木山が護送車の扉が閉まり護送車は走り去って行った。ツナはその場で車を立ち尽くしていた。

（一体……沢田は何者なの……? 何で沢田はあんなやばい奴らと

戦ってたの……？ どうして何度もボロボロに……)

一方で美琴は先程、見たツナの過去が頭から離れないでいた。ツナが戦ってた相手はどれも恐ろしい奴ばかり、中には人間かどうかも怪しい奴までもいた。

(でもわかったことがある……)

美琴はツナの正体がわからなかったが、一つだけわかったことがあった。

(私は弱い……)

美琴は自分の拳を握り、歯を強く食いしばっていた。

(私もいつも自分の為だけに力を使ってた……でも沢田は一度たりとも自分の力を自分の為だけに使ってた……使う時はいつも誰かの為……)

ツナの過去、そしてツナと出会ってからのことを美琴は思い出す。

(それにいつも辛そうな顔で戦ってた……)

ツナの過去を見た時、ツナが一度として笑って戦っている姿はどこにもなかったことに美琴は気づいた。

(それなのに私はいつも沢田の戦いたくないっていう意思を無視して……最低じゃない……)

美琴は自分の下らないプライドにツナを巻き込んだことをようやく自覚し、同時に何も考えずにそんなことをしていた自分自身に嫌気がさしていた。

(沢田だけじゃない……あいつも……)

美琴の脳裏にはツナと同じく、自分勝手な都合に巻き込んでしまった当麻の姿が浮かんでいた。

(虚空^{グラビトン}爆破の時、沢田は介旅と言葉でわかり合おうとしてた……力でねじ伏せれば自分だけじゃなくて、自分の周りにいる人間にまで被害が及ぶことをわかってたから……)

美琴は連続虚空^{グラビトン}爆破事件でツナが取った行動を思い出す。

(でも少し考えれば誰だってわかることよね……でも私にはそれがわからなかった……いやそもそも考えようとしなかった……ただただ怒りのままに力でねじ伏せようとした……もしかしたら大切な友

達を失ってたかもしれないのに……)

連続虚空爆破事件グラビトンで自分の取った行動の愚かさに美琴は後悔していた。

(虚空爆破グラビトンだけじゃない。沢田はいつも相手のことまで考えてた……)

『お前のあのコイン。どういう原理であそこまでの威力を出せるかは知らないが、相当な威力。もしお前の攻撃が当たればこの男がタダではすまなかったからな』

『あんまり追い回して能力を使わせたら、この子の負担になると思っ
たし』

『どうしてそんなに悲しい顔をしてるんだお前は?』

銀行強盗事件、常盤台狩り事件、今回の幻想御手事件レベルアップ。ツナはいつも相手のことを考えていたことを思い出す。

(でも沢田はこんな私でさえも友達だと言ってきて……気づかせようとしてくれて……信じてくれた……)

『できれば酷いことはしないで欲しい。これでも美琴は俺の大事な友達なんだって言ってな。御坂のことを心配していたぞ』

『だがお前が俺に勝てない要因はそれだけじゃない。自分がレベル5だという驕り、そして相手の強さも自分の弱さも認めないことだ。そんなんじや死ぬ気の俺は倒せない』

『美琴。俺が隙を作る。隙ができたらお前の攻撃を至近距離で喰らわせ
てくれ』

美琴はこんな最低な自分に対して色々としてくれたツナに対して、
申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまっていた。

「美琴」

「……」

「美琴!」

「へっ!?!」

ずっと長考している美琴にツナは何度も名前を呼ぶが反応がない為、少し大きな声で呼んだ。美琴はようやく自分が呼ばれていることに気づいた。

「な、何？」

「何って。帰ろうと思って名前を呼んだのにボーツとしてて反応がないから……」

「ごめん……ちよつと考え事してて……」

「美琴？　どうかしたの？」

暗い表情かおしている美琴を見てツナは何かあったのではないかと気づいた。

「私もあなたの過去を見たの……」

「え？」

「あなたは一体、何者なの？　何であんたがあんな奴らと戦ってたの？」

「それは……」

美琴の問いにツナは答えようかどうか迷ってしまい顔を俯かせてしまう。

その時だった、

「お姉様……」

「黒子!?　うおっ!?!」

黒子がテレポートで現れ、美琴に抱きついた。急に抱きつかれた為、美琴はそのまま押し倒されてしまった。

「お姉様！　怪我はありませんか！　黒子が今、お姉様を体を癒して……グヘヘヘ！」

「こんな時にあなたは……いい加減にしろ……」

「ああっ！　お姉様の電撃！　刺激的ですよー！　もつと！　もつと下さいですよー！」

「気持ち悪いこと言ってるんじゃないわよ！」

（た、助かった……）

黒子の変態のお陰で自分の正体をバラさないで済んだツナであった。

標的（ターゲット） 48 涙

幻想御手事件はツナと美琴によって無事解決した。初春が木山から貰ったという幻想御手をアンインストールするワクチンソフトは本物であり、昏睡状態となった学生を目覚めさせることに成功していた。そして佐天の面会が可能となった為、学校に行っていないツナは誰よりも先に佐天の入院している病院へ見舞いに行った。

「ん？」

佐天の病室に向かう途中、ツナは違和感を感じる。昏睡状態になっていたであろう学生が先程からツナのことをじろじろと見たり、コソコソと話しながら見ているのである。

「なんか見られてる……まあいいか……」

見られていることに気づいてはいたものの、なぜ見られているのかわからなかった為、そのまま佐天のいる病室に向かうことにした。

佐天のいる病室の扉の前

「ここか……」

ツナは受付で聞いた佐天のいる病室の番号と今、目の前にいる病室の番号を合っていることを確認した。

「佐天？」

ツナはおそろおそろ病室の扉を開けた。ツナの視界にはベッドから窓の外の景色を見ている佐天の姿が映る。

「あ。ツナさん」

佐天はツナがやって来たことに気づきツナの方を向いた。ツナが来ても佐天は驚くこともなく、ただただ笑顔でそう言った。

「佐天……」

笑顔で元気そうな佐天の姿を見た途端、ツナは慌てて佐天の元へ駆け寄った。

「ツ、ツナさん!？」

ツナは佐天の右手を両手で握る。再会して早々にツナが急に手を握ってきた為、佐天は驚きを隠せないでいた。

「夢じゃない……」

「ツナさん?」

突如、変なことを言い出した為、動揺していた佐天も違和感を感じてしまう。

「この感じ……本当に佐天だ……」

「ツナさん……」

ツナは嬉しさのあまり佐天の手を握ったまま涙をボロボロと溢す。

「ごめんね……佐天……」

「え?」

「俺……佐天の様子がおかしいことに気づいてた……でも俺には聞く勇気がなくて……佐天がそんなにも悩んでたのに俺は何もしてあげられなくて……」

「何でツナさんが謝るんですか……悪いのは私のに……」

佐天はツナの言葉を聞いた途端、今にも泣きそうな顔になる。だがツナの前で泣く姿を見せたくないのか我慢していた。

「でも本当によかった……佐天が無事で……」

「もう……大袈裟ですよ……別に眠っただけ……なんです……から……」

なんとか平常心でいようと思った佐天であったが、ツナの言葉を聞いた途端、我慢できなくなりツナと同じく涙をボロボロと溢していた。少しの間、二人は嬉しさのあまり涙が止まらなかった。

「あ。そういえばずっと聞きたかったことがあるんだけど」

「何ですか?」

泣き止んで落ち着いた後、ツナは丸椅子に座ってずっと気になっていたことを佐天に尋ねる。

「気絶する前に何か言いかけたよね？ 俺のことがって。何を言おうとしたの？」

「なっ!？」

『それとツナさん……私……ずっと……ツナさんのことが……』

ツナがそう言うのと佐天は顔を真っ赤にしながら、倒れる前に自分が言おうとしたことを思い出した。

(そ、そうだった!! // 私、もうツナさんに会えないかもしれない
いって思ったから……!?! //)

これで金輪際、ツナと会えないかもしれないと思った佐天は最後にツナに告白しようとした。だが想いを伝える前に幻想御手の副作用で倒れてしまった為、佐天はツナに想いを伝えることができず이었다。

「佐天? どうかしたの？」

「ななな何でもありません!! あの時に言いかけたことも大したことないですから!!」

「そ、そう……? ならいいんだけど……」

顔を赤くしながら必死で大したことはないと言う佐天を見て、ツナは戸惑いながらも納得した。

「戻ったよールイコ……え!？」

佐天とクラスメイトであり同じ病室を使っているアケミが戻ってくる。アケミは自分の方を向いているツナを見て、驚きの声を上げた。

「えつと……佐天の友達？」

「え……? は、はい! アケミっています!」

「俺は沢田綱吉。よろしくね」

アケミは少し緊張しながら自己紹介し、ツナは普通に自己紹介した。

「俺、売店で適当に食べ物買ってくるから」

そう言うのとツナは病室を出て、病院内の売店に向かって行った。

「ねえルイコ。あの人と知り合いなの？」

「うん。まあ……」

アケミは神妙な面持ちで佐天に尋ねると、佐天は曖昧に返事をした。

「私たちが夢で見た人とそっくりだけど……でも雰囲気が違うっていうか……」

アケミは昏睡状態になった時に夢を見た。それは美琴と木山が見たツナの過去である。だが見たのはアケミだけではなかった。昏睡状態となった学生全員がツナの過去を見ていた。学生たちがツナのことを見たり驚いたりしたのはそれが原因である。

「本人だよ。私たちのことを助けてくれたのはツナさんだよ」

佐天は少し悲しそうな表情かおをしながらそう答えた。

（私は……）

そして同時に佐天はあることを決意した。

佐天の決意。それは一体!?

標的（ターゲツト） 49 時空を越えて

時は過ぎ佐天は退院が認められ普通の生活に戻るようになった。

「よしっ！」

佐天はツナのいる風紀委員^{ジャッジメント}177支部の扉の前にいた。何やら佐天は深呼吸をし両頬を両手で軽く叩くと扉を開いた。

「こんにちわー」

「あ。佐天さん」

「御坂さん。来てたんですか」

佐天が扉を開くと、初春と黒子だけでなく美琴もいた。

「佐天さん。どうしたんですか？」

「ツナさんに用があつて来たの」

「沢田さんならパトロール中ですわ」

「そうですか。帰って来るまで待つていいですか？」

「いいですわよ」

黒子は佐天に支部で待つことを許可する。佐天はソファに座つてツナの帰りを待つ。

「それで沢田さんに用つて……はっ！ まさか佐天さんツナさんに告白する気じゃ!？」

「ななな、何言つてるの初春!？」

「じゃあ沢田さんが帰つて来たら、私たちは外に出ないといけません

わね」

「白井さん!! 〃〃〃悪ノリしないで下さい!! 〃〃〃」

（佐天さんのこの反応。懐かしいわね）

初春は佐天がツナに告白しに来たのではないかと真剣に思い、黒子は顔をニヤニヤさせながらそう言った。佐天は二人に振り回され顔を真っ赤にしてしまう。そんな佐天を見て美琴はしみじみとしていた。

「私はただツナさんをお願いしたいことがあつて来たんです」

「お願いしたいこと?」

「はい。実は……」

「ただいまー」

佐天がツナをお願いしたいことを言おうとした瞬間、ツナがパトロールから帰って来た。

「あ、二人とも来てたんだ」

「ツナさん」

「佐天？ どうしたの？」

佐天はツナの前に移動すると、真剣な面持ちでツナに話しかける。真剣な眼差しで自分のことを見てくる佐天を見て、何かあったということに気づいた。

「私を弟子にして下さいー！」

「「「え……？」「」」」

佐天はツナの顔を見つめたまま自分をツナに弟子にしてくれと懇願する。突然のことにツナたちは驚愕してしまう。

「で、弟子!? ど、どういうこと!?!」

「私、強くなりたいんです！ だからツナさんに修行をつけてもらいたいですー！」

「俺が佐天に!?! む、無理だって！ 俺、人に修行をつけたことなんてないしー！」

今まで教えられることはあっても、人に教えたことのないツナは、佐天に修行をつけるなど無理な話であった。

「相変わらず情けねえ奴だなお前は。そこは俺に任せろっていうもんだぞ」

「え……!?! この声……!?!」

支部内に知らない声が響き美琴たちは動揺する。だがツナだけはこの声を知っていた。すると支部の壁の一部が扉のように開いた。そこにはちよつとした部屋ができていた。

「ちやおつす。久しぶりだなダメツナ」

「リボン!?!」

そしてそこにいたのは胸元に黄色いおしゃぶりを携え、黒いスーツに身を纏い、帽子の上にカメレオンを乗せた赤ん坊がいた。

「リボーンって……」

「沢田さんがいつも言っている……家庭教師……」

リボーンを初めて見る初春と黒子は衝撃を隠せないでいた。なぜなら赤ん坊が流暢な言葉で喋っていること、そしてこの赤ん坊こそがツナの言っていた家庭教師であるということに。

「まったく。腑抜けな顔をしやがって」

「グフツ!」

「「「なっ!?!」」」

リボーンは一気にツナの所までジャンプするとツナを蹴り飛ばした。再会早々にツナを蹴り飛ばしたことに美琴たちは驚きを隠せないでいた。

「俺の生徒が世話になったな。俺はリボーン。ツナの家^{かてきよ}庭教師だ」

リボーンは何事もなかったかのように自己紹介した。

「って!・ お前はまた改造したのか!」

「当たり前だろ。ここをこの世界のボンゴレの拠点の第一号にするからな」

「勝手に決めんな! とうかそもそも改造すんな!」

「それでお前ら。ボンゴレに入らねえか?」

「人の話を聞け! とうか勧誘すんな!」

再会して早々にいつものようにリボーンに振り回されツナはツツコミまくっていた。

「いいじゃねえか。ボンゴレ初の超能力部隊だぞ。ボスのお前からしたら喜ぶべきことじゃねえか」

「だ・か・ら! 俺はマフィアのボスになる気はないって言ってるだろ!」

「「「マフィア!?!」」」

「あ……」

いつもの癖で自分がマフィアのボスだということをツナはバラしてしまった。

ついに自分がマフィアのボスだということをばらしてしまったツナ。

果たしてみんなの反応は!?

標的（ターゲット） 50 ツナの正体

「何だ言ってなかったのかお前」

「沢田さんがマファイアのボス!? どういうことですか!?!」

「ツナはイタリアにあるボンゴレファミリーっていうマファイアの次期ボス候補なんだぞ」

（マファイアのボス……）

（あの戦いって……そういうことだったの……）

佐天と美琴は自分たちの見たツナの過去のことを思い出す。そしてどういふものなのかということを理解する。

「イタリアって……沢田さんはどう見ても日本人ですよね……」

「ボンゴレファミリーの初代ボス。ボンゴレI世ファミリーは早々にボスを辞めてから日本に隠居したんだ。その子孫がツナなんだぞ」

ボンゴレがイタリアにあるのにも関わらず、なぜ日本人のツナがボンゴレの十代目なのか初春はわからなかった。リボーンは懐から家系図を取り出し、ツナがボンゴレファミリーの十代目だということを証明する。

「そして俺はボンゴレ9代目。ボンゴレIX世ファミリーの命令でツナを立派なマファイアに教育する為にやって来た、家庭教師兼殺し屋カテキョウヒットマンってわけだ」

「そんな話、信じられるわけありませんの……」
「そうですよ……」

リボーンの話が本当だということを黒子と初春は信じられないでいた。

「ツナのしているそのリングがボンゴレのボスの証なんだぞ」

「リングって……あのナッツちゃんナッツちゃんの顔が掘られた?」

「ああ。そのリングはボンゴレリング。今はボンゴレギアっていうんだが。ボンゴレの歴史上このリングを護る為にどれだけ血が流れたかわかんねえっていう曰く付きのリングなんだ」

リボーンはツナの指にはめているボンゴレギアについて説明する。リボーンの説明に信じていない黒子と初春、信じている美琴と佐天も恐怖する。

「そのリングと沢田さんがマフィアのボスという話がどう繋がりますの?」

「ボンゴレギアはボンゴレの正統後継者以外を認めねえリングなんだ」

「認めない? どういうことですか?」

「ボンゴレの正統後継者でない者がリングをはめればリングをはめた本人に害をもたらすんだ。過去に正統後継者でない奴がはめたんだが、はめた途端に血を吐いてぶっ倒れた」

リボーンの脳裏にはボンゴレが誇る最強の暗殺部隊ヴァリアーのボス、XANXASの姿が脳裏に浮かんでいた。

「なんなら本当かどうか試してみるか?」

「リボーン!」

「冗談だぞ」

信じていなかった黒子と初春も今のツナの反応から、リボーンの言っていたことが本当だということを理解する。

「沢田以外に後継者はいないの?」

「今、ボンゴレを継げるのはツナだけだ」

「でもそんなに血の繋がりがって大事なの? 血は繋がってなくてもボスに相応しい人が継げばいいんじゃない?」

「ボンゴレは血の繋がりを何より重んじるからな。そしてそれが掟なんだ」

「掟って……でも沢田は継ぎたくないんでしょ……」

「ボンゴレは世界最強のマフィア。その頂点に君臨するということは裏社会を支配することを意味するんだ」

「世界最強……!?!」

世界最強と聞いて美琴は衝撃を隠せないでいた。黒子たちもまさかそこまで凄いマフィアだとは思っていなかったのか、開いた口が塞がらない状態だった。

「そんなマフィアの頂点に君臨するんだ。普通の人間じゃ務まらねえんだ」

「普通の人間じゃないってどういう……」

「ボンゴレのボスになるには二つの条件があるんだ。一つはボンゴレの血を引いていること。二つ目にボンゴレブラッド・オブ・ボンゴレの血に継承される能力。超直感を開花していることだ」

「超直感?」

「ボンゴレファミリーの初代ボス。ボンゴレブリーモI世が持っていたとされる全てを見透かす力のことだ。お前らの言い方で言う原石つてやっだ」

「っ!?」

全てを見透かす、原石という単語を聞いて、美琴たちは驚きを隠せないでいた。

(全てを見透かす力……じゃあ木山のこともその能力が……)

木山の心を見透かしたこと、AIMビースト幻想猛獣の出現を予測したことがわかったのは超直感によるものだということを美琴は理解する。

「原石……前に操折が言ってたような……?」

「操折って……まさか食蜂操折!? あいつに会ったことがあるの!」

「え? うん……前に美琴と戦った後に……」

「なんか変なことされなかつた!」

「変なこと? そういえば能力を見せるって言われたけど、リモコンの調子が悪くて能力が見せられないって言われて結局、能力がわからなかつたんだよね……」

「それ洗脳されそうになったのよ!」

「洗脳!」

まさかそんなことをしようとしていたとは思ってもみなかった為、ツナは驚きの声を上げた。

「あいつは学園都市第5位! 学園都市最高の精神系能力者なの!」

「ええ!? じゃあ超能力者なの!」

(でも何でリモコンの調子が悪いって……そうか! 沢田の炎は調和だから能力が通じなかつたのね)

まさか操折が超能力者だとは思ってみなかったのか、ツナは再び驚きの声を上げた。美琴は操折の言ったことに引つ掛かりを覚えるがすぐに解決した。

「それで結局、原石って何？」

「原石っていうのは学園都市の技術を使うことなく能力を開花した奴のことをいうんだ。世界に50人しかいないらしいぞ。だろ？」

「ええ……よく知ってますわね……」

「ここに来る前に情報収集はしたからな」

「ていうか！ お前どうやってこっちの世界に来たんだよ！」

ツナはリボーンが自分の正体についての話をしていて忘れていたが、ここですつと気になっていたことを尋ねる。

「こいつを使つたんだ」

「あつ！ それってあの時見た！」

リボーンは懐から黒い三角形の物体を取り出した。ツナはリボーンの持つている物体に見覚えがあった。それはこの世界に来る前に見たものだった。

今、ツナがこの世界に来た理由が明かされる！

「この装置はリスペディツイオーネファミリーのイノルトって奴が作った代物らしくてな。そいつはファミリーを裏切ったんだ。だがファミリーを裏切ったことで狙われる羽目になったんだ。それでそいつは考えたんだ。異世界に逃げれば追われることはないってな」

「でも何でそんな物が並盛山に？」

「イノルトは日本に逃げてたんだ。おそらく逃げているうちに落としたりたんだろ。そしてそれがたまたま起動してお前は这个世界に来たってわけだ」

「そういうことだったんだ……」

「だがこの装置……異世界転送装置は発見した時にはこいつは壊れててな。ボンゴレが回収し気軽にこつちの世界と俺たちの世界を渡れるように改造したんだ」

「じゃあ元の世界に帰れるってこと!？」

「ああ」

元の世界に帰れるとわかりツナはパアツと表情かおを明るくする。だがその一方で佐天はツナが元の世界へ帰ってしまうと知って暗い表情かおしてしまう。

「けどお前は退学になってるぞ」

「ええ!?! まさかこの世界に行ってる間に出席日数が足りなくなったの!?!」

「違えぞ。俺が退学届けを出したんだ」

「はあ!?! どういうことだよ!?!」

「お前を鍛えるには丁度いいと思ってな。前にちゃんとこの世界に来るテストをした時に、元の世界に戻った後、学校に提出したんだ」

そう言うとりボーンは懐から一枚の紙を取り出した。リボーンが取り出したのは退学届けであり、そこにはツナが退学するということ

が書かれていた。

「つーわけだ。引き続きお前は这个世界で暮らせ」

「つーわけだぞじゃないよ！ 何、勝手に決めてんだよ！」

「これもマファイアのボスになる為だ。それに帰れねえわけじゃねえんだからいいじゃねえか」

「マファイアは関係ないだろ！」

「……」

立派なマファイアのボスにする為だけに勝手に勝手に退学届けを出すというあまりの破天荒な行動に美琴たちは驚きを隠せないでいた。

「それと……佐天でよかったか？」

「え!? う、うん……」

「俺の生徒になれ。夏休みに入ったら俺たちの世界で夏休みをフルに使って俺がお前を鍛えてやる」

「え!? ど、どういうこと……!?」

「ツナが色々世話になったからな。その礼だ。もし俺の修行を最後までやり切ることができたらお前は超能力者に匹敵する力を手に入られるぞ」

「わ、私が!?」

無能力者の自分が超能力者に匹敵する力を得ることが出来るかもしれないと知って佐天は驚きの声を上げる。

「佐天さんが超能力者に匹敵する力!?」

「な、何言ってるのよ!? 私が超能力者になるまでに何年もかかったのよー」

「そうですね！ 夏休み期間だけでそこまで強くなれるわけ……」

初春、黒子、美琴も佐天と同じくリボーンの発言に驚きの声を上げると同時に、信じられないでいた。

「俺を誰だと思っていやがる。超一流の家庭教師だぞ」

「いや……そもそも普通の家庭教師はそんなことをはしなないと思うのですが……」

リボーンの発言に黒子のツツコミをいれる。美琴と初春は黒子と同じことを思っていたのか首を縦に2回振っていた。

「で？ どうする？ 別に嫌なら断っても全然、構わねえぞ」

「やります！」

「佐天!？」

佐天は一切、迷うことなくリボーンの修行を受けることを決める。ツナは佐天の返答に驚きを隠せないでいた。

「佐天！ 考え直した方がいいって！ リボーンの修行って佐天が想像してる以上にヤバイんだよ！」

「大丈夫です！ 絶対に乗り切りつてみせます！」

ツナはリボーンの修行がどういうものなのか身を持って知っている為、ツナは佐天にリボーンの修行を受けるのを止めるように言った。しかし佐天の意思は固く止める意思はなかった。

「決まりだな」

「待ってってリボーン！ 俺は……」

ズガアン！

反対しようとした矢先、支部内に銃声が鳴り響き、支部の壁に弾丸がめりこむ。銃声が発生した場所を見るとそこにはいつの間にか銃を握っているリボーンがいた。

「るせえぞ。これは佐天の決めたことだ。お前が口を出すんじやねえ」

「い、いきなり撃つなよ！」

「……」

ツナはリボーンの放った銃弾をなんとか避ける。美琴たちはあまりの光景に開いた口が塞がらない状態になっていた。

「ななな何を考えていますの!？ いきなり発砲だなんて！」

「これが俺のやり方だ。気にすんな」

「気にしますわ！ それよりその銃をこっちに渡して下さいですの！ 没収しますの！」

「嫌に決まってるんだろ。何でてめえに俺の愛銃を渡さねえといけねえんだ。没収してえなら力づくでやってみやがれ」

「ふん……そのような台詞は死亡フラグですわよ！」

黒子はテレポートを使ってリボーンの銃を奪おうとする。

「バミューダと同じ瞬間移動か。面白えな」

「なっ!？」

だがテレポートした先にリボーンはいなかった。リボーンは黒子の頭の上に乗っていた。それから黒子は何度もテレポートを繰り返すがリボーンを捕らえることは叶わなかった。

「ねえ……あんたっていつもあんな風な生活を送ってんんの……?」

「ま、まあ……」

「佐天さん……本当に大丈夫ですか……?」

「大丈夫じゃないかも……」

リボーンの生徒になることになった佐天だったが、夏休み明けまで生き残れるのか心配になるのであった。

標的（ターゲット） 52 もう一人の男

「ぜえぜえ……」

黒子は肩で息をしていた。なぜならリボーンを捕らえる為に能力を使用し過ぎたからである。結局、リボーンを捕らえることはできなかったが。

「成る程な。全身をワープすることはできても、体の一部だけをワープさせることはできないんだな」

「な、何を恐ろしいことを言っていますの!?!」

リボーンの発言に黒子は恐怖する。ツナとリボーンが戦ったバミューダは全身をワープさせるだけじゃなくて腕や足だけをワープさせることができるのである。

「黒子のテレポートを全部、見切るなんて……」

「流石、沢田さんの家庭教師……」

黒子の能力をよく知る美琴と初春はリボーンが黒子のテレポートに全て見切ったことに感心していた。

「あつ！ そうだった！ リボーン！ 頼みがあるんだけど！」

ツナは木山の生徒を助ける為に白蘭をこの世界に呼ぶことができないかとリボーンに相談しようとする。

「木山春生の生徒の話か？」

「え!?!」

「何であんたが知ってるのよ!?!」

幻想御手事件に全く関わっていないはずのリボーンが木山春生の生徒のことについて知っていた為、ツナと美琴は驚きを隠せないでいた。

「あつ！ ユニの能力か!」

「そうだぞ」

「「ユニ?」」

（ユニって……）

(確か……死んだんじゃ……)

ツナはなぜリボンが木山春生のことについて知っているのかすぐに理解する。黒子と初春はユニが誰のことがわからず疑問符を浮かべる。佐天と美琴はツナの記憶でユニが死んだところを見ている為、ツナたちの言っていることの意味がわからなかった。確かにユニは死んだが、それは未来のユニでありツナたちのいる時代のユニは生きている。

「あの……ユニって誰ですか？」

「ユニはジツリヨネロファミリーのボスでな。予知能力が使えるんだ。ちなみにユニも原石だぞ。お前たちの言い方ならな」

「原石……よりによってなぜマフィアのボスが……」

(あ、あの子がボス!?)

(嘘でしょ!?)

初春がユニのことに尋ねてきたので、ユニのことについて説明する。黒子はなぜマフィアのボスが原石なのがわからなかった。佐天と美琴はあんな可憐な女の子がマフィアのボスだと知って驚きを隠せないでいた。

「こつちの世界に来る前にお前をすぐに見つけられるようにする為にユニの力も借りたからな。その時にユニは見たんだ。お前の場所とお前が木山の生徒が助かるところに立ち合つてるところをな」

「じゃあ……」

「そう。だから僕も来たんだよ綱吉君」

「え!?!」

突如、知らない男の声が支部内に響く。ツナは声のする方を慌てて向いた。

「やつほー♪ 久しぶり綱吉君♪」

「白蘭!?!」

白髪で三白眼、左目の下には三つ爪のマークがある青年が右手にマシユマロの入った袋を持って立っていた。この男の名は白蘭。ジエツソファミリーのボスであり、ツナの言っていた平行世界パラレルワールドの知識を共有することができる男である。

(こいつは!?)

(この人も死んだんじゃ……!?)

ユニと同じく、死んだはずの白蘭が目の前にいることに美琴と佐天が驚きを隠せないでいた。

「何で……何であんたが生きてんのよ!?!」

「御坂さん?」

「お姉様?」

リボーンは白蘭のことを紹介する。美琴は白蘭を警戒する。ツナはこの男のせいでユニが死んだと言っていたので白蘭が敵だと認識する。美琴は急にこんな態度を取った為、初春と黒子は疑問符を浮かべる。

「何でそのことを知ってるかどうかは知らないけど、それは僕だけじゃ僕じゃないから。名門常盤台中学の生徒にして学園都市第3位、レベルガン超電磁砲の異名を持つ御坂美琴君」

「なっ!?!」

リボーンと同じく異世界から来たはずの男が自分のことを知っていることに美琴は驚きを隠せないでいた。

「なぜお姉様のことを!?!」

「美琴君だけじゃないよ。君のことも知ってるよ。美琴君と同じく常盤台中学の生徒にして、レベル4大能力者の空間能力者の白井黒子君」

「な、なぜ私のことまで!?!」

美琴だけではなく自分のことまで知っていることに黒子は驚きを隠せないでいた。

「白蘭は平行世界の知識を共有できるんだ」

「こいつが!?!」

「平行世界!?!」

「?」

美琴はツナが前に言っていたことを思い出す。パラレルワールド平行世界と聞いて初春と黒子は驚きの声を上げる。佐天は平行世界が何のことがわからず疑問符を浮かべていた。

「あの……パラレルワールド平行世界って何ですか……? 聞いたことはあるんですけど

ど……」

パラレルワールド

「平行世界つてのはある時点から分岐し、分岐前の世界と並行に連なる別の世界のことだぞ」

「え、えっと……つまりどういうこと……?」

「簡単に言っちゃえばもしもの数だけ世界があるってことだ。例えばお前が能力者として目覚めた世界。そもそも学園都市に来なかった世界とかな」

「な、成る程……」

パラレルワールド

「平行世界についての説明を聞いて最初はわからなかった佐天であつたが、なんとか理解することができた。」

「もしかして……この人もマフィアなんですか?」

「そうだぞ。こいつは白蘭。ジエツソファミリーのボスだ」

「ボス!」

マフィアとは思っていたがまさかボスだとは思ってもみなかった為、初春は驚きの声を上げる。

「ちなみにこいつも原石だぞ」

「何でそんなに原石がいるんですの!? 一体、どうなっていますのあなた方の世界は!」

ツナといい、先程聞いたユニといい、こんなにも原石がいることに黒子は驚きを隠せないでいた。

「でも僕が死んだことを何で君が知ってるの?」

「前にどういうわけかはわからないけど沢田の過去を見たのよ。あんたが死んだところもね」

「死んだ……?」

「それはどういう……?」

美琴の発言を聞いた黒子と初春は美琴の言っている意味がわからず混乱していた。

「死んだのは未来の僕であつて、今の僕じゃないのさ」

「未来って……前にツナさんが未来に行ったってことは聞いてたけど……」

佐天はツナと出会って間もない頃にツナが未来に行ったことがあ

るといふことを思い出す。

「俺たちの世界の未来は白蘭が率いるミルフィオーレファミリーによって支配されていた」

「マフィアが世界を支配って……」

「それだけじゃねえぞ。未来の白蘭は能力を悪用して8兆ある
パラレルワールド
平行世界を支配してたんだ」

「てへ♪」

「「「っ!?!」」」

8兆という単語を聞いて美琴たちは顔を青ざめてしまう。

「無事だったのは俺たちの未来だけ。だが俺たちの世界ですら白蘭によって支配される一歩手前の状態。ボンゴレは壊滅状態な上にボスであるツナも白蘭に殺されていたんだ」

「ツナさんが……殺された……?」

未来の世界でツナが殺されたと聞いて佐天は顔を真っ青にしていた。美琴たちもショックを受けていた。

「正確に言えば仮死状態だがな。ミルフィオーレにスパイがいてな。そいつが細工してツナが死んだと思わせたんだ」

リボーンの脳裏は未来でミルフィオーレファミリーのスパイにして、メローネ基地の指揮官だった入江正一の姿が脳裏に浮かんでいた。

「だが未来のツナはある計画を立ててたんだ。それは過去の自分を呼んで、白蘭を倒すっていうな」

「何だよ……何で過去の沢田がそんなことをしなくちゃならないのよ……」

「未来の白蘭はマーレリングっていうボンゴレリングに匹敵する力を持つリングを持っていた。だが未来のツナは争いの火種になると言ってボンゴレリングを破壊した為にボンゴレリングがなかった。だから白蘭に対抗する術がなかったんだ」

「それで過去の自分を……」

美琴はリボーンの話聞いて美琴はなぜ未来のツナではなく過去のツナが未来の白蘭と戦う理由を理解した。

「俺たちはなんとか白蘭を倒すことを成功した。だがその代償もデカかった。白蘭が滅茶苦茶にした世界を元に戻すことと俺たちを平和な過去に帰す為にユニは自分の命を捨てた」

「だから……」

リボーンの話聞いて、美琴はユニが死んだ理由と死んだのは未来のユニだということを理解する。

「ですが今のあなたはその能力を使える上に、未来で自分のしたことを知っているんですわよね？　なのに何で沢田さんに協力するんですの？」

「未来の出来事を知ってから厄介な悪夢を見たんだ」

「悪夢？」

「うん。その夢では僕は綱吉君を倒して世界を征服してたんだ。でもその後は何もなくなっちゃってさ。もう何もやる気が起きなくなつて、生きる屍になったんだ。そんな僕の側にユニちゃんはいてくれてさ。だからもうあんなことをしないで決めてるんだ」

黒子は未来を支配するような人間とツナたちが普通に話していることに疑問を抱いていた。白蘭は黒子の疑問に答えた。

「ま。僕のことを信用してもいなくてもいいよ。僕はやるべきことをしに来ただけだからね」

「それで白蘭。木山さんの生徒を助ける方法はあるの？」

「助ける方法ならあるよ」

「本当!？」

木山の生徒たちを助ける方法があると知ってツナは表情かおを明るくする。すると白蘭は懐の中を探った。

「これがそっだよ」

白蘭が取り出したのは小瓶の中に入った赤い水晶だった。

一体この水晶は何なのか!？」

標的（ターゲツト） 53 能力体結晶

白蘭が取り出した赤い水晶だった。

「赤い……水晶？」

「これは能力体結晶といって、能力を暴走させる為のものだよ」

「暴走って……じゃあ木山さんの生徒が暴走したのってこれが原因ってこと？」

白蘭はこの水晶が能力体結晶であるということを説明する。ツナはこれが木山の生徒たちを昏睡状態に追いやったものだということを理解する。

「そういうこと。これを木山春生に渡せばワクチンソフトが作れるはずだよ」

「でも木山春生は警備員に……」

「その辺のこととも大丈夫。この町にいるカエル顔の医者はこのことを話せば保釈して貰えるから」

「カエル顔って……」

「あの医者のこと……？」

「なぜあのお医者様にそのようなことが……」

カエル顔の医者と聞いてツナ、美琴、黒子は前に出会ったカエル顔の医者顔が浮かぶと同時になぜカエル医者が木山を釈放できるのかわからないでいた。

「一応、僕はあの人の正体を知ってるけど勝手に話すのは不味いから話さないよ。とにかくあの医者にこのことを言えば全て解決するよ」

「ありがとう白蘭」

白蘭はプライバシーの観点からカエル医者の正体は言わなかった。ツナはこれで木山の生徒が助かるとわかった為、ツナは白蘭にお礼を言った。

「それにしてもこの能力体結晶？　って結局どこにあったんですか？」

「ああこれ？　なんかテレステイナっていう人の研究所にあったん

だよ。でも正直に言ってもくれなかったんだけど、ちよつとお話したら譲ってくれたんだよ」

「お前、絶対に何かしたろ！」

「そうですね！　いくら沢田さんの知り合いといえど学園都市の風紀を乱すなら許しませんわよ！」

佐天が能力体結晶がどこにあったのか尋ねると白蘭は能力体結晶を手に入れた経緯を話した。白蘭の話聞いた途端、ツナと黒子は顔色を変える。

「早とちりはよくないな。そのテレスティーナって人、裏で色々やばい研究をしてたりしたんだから」

「どういうことですか？」

「人を犠牲にしたりするような実験を計画してたり、能力者の能力を使えないような機械を開発してばら蒔いていたみたいだから」

「それは本当ですか!？」

「うん。本当だよ。だからさつき気絶させた後に研究室の情報を警備員に漏洩させたから」

「なっ!？」

白蘭がさらつと笑顔でそう言うのと黒子は驚きの声を上げると同時に恐怖してしまう。

「さつきって……じゃあお前が遅れてやって来たのって……」

「うん。能力体結晶を取りに行ってたんだ」

さつきと聞いて白蘭が遅れてやって来た理由をツナは理解する。

白蘭は笑顔で悪びれた様子もなくツナの疑問に答えた。

「まあその内、君たちにも連絡が来ると思うから」

「ま、まあそういうことでしたら……大目に見ますわ……ですが本当に風紀を乱すようでしたら容赦はしませんわよ」

「ハハッ！　無理無理。君程度の実力じゃ僕は倒せないよ。僕、黒子君より強いし」

「あなたって人は……」

忠告しても反省しない白蘭に黒子は頭を抱えると同時に頭を抱えてしまう。

「嘘じゃねえぞ。白蘭は超能力者^{レベル5}クラスの实力者だぞ」

「へー……超能力者ね……」

「もう僕はやることも終わって暇だし。戦う？」

「いいわよ！ やってやるわ！」

「さっき私が言ったこと忘れちゃったの!? それにお姉様も止めて下さいですよ！」

先程の黒子の発言を無視して美琴と戦おうとする白蘭にツツコミをいれる。

「そ、それにしても本当に凄いですね。平行世界^{パラレルワールド}の知識を共有する力……」

初春は戦う話題を反らす為に白蘭の能力について話題を移す。

「君だつて凄い能力を持つてるじゃないか。学園都市一のハッカー。初春飾利君」

「ええ!? 初春が!？」

「わ、私のことまで……」

初春の正体を知ってツナは驚きの声を上げる。初春はまさか自分のことを知っていると思っていなかったようであった。

「ハッカー? こいつが?」

「うん。守護神^{ゴールキーパー}っていう異名で知られてるよ。まあ都市伝説扱いされてるけどね」

「ハッカーか。おい初春。特別待遇してやるからボンゴレに入らねえか」

「だからボンゴレに勧誘するなつて！」

「初春をマフィアにしようとしなくて欲しいですよ！」

リポーンは白蘭から初春が凄腕のハッカーと知って口元を緩ませる。ツナと黒子は大切な友達をマフィアにしようとするリポーンにツツコミをいれる。

「安心しろ。ボンゴレは週休2日制。年間休日^{年間休日}は123日。残業もなし。産休も充実している上に敵対マフィアを壊滅させれば一年間休みが貰える超ホワイト企業だぞ」

「反社会的組織の時点でホワイト企業じゃないでしょうが！」

リボーンはボンゴレの休日や福利厚生を発表する。美琴はリボーンにツツコミをいれる。

「流石にマフィアになる気は……」

「でもボンゴレの財力ならいちごおでんを一生飲めるぐらい稼げるよ」

「いちごおでん!？」

「食いついた!？」

マフィアになるなんてさらさらなかった初春であったが白蘭の口からいちごおでんという単語を聞いた途端、目の色を変えた。

「い、いちごおでん……? 何その不味そうな飲み物……?」

「学園都市の自動販売機で売ってるジュースだよ。僕も飲んだけど意外といけるんだよ」

「ええ!?! あれ飲めるんですか!?!」

いちごおでんと聞いてツナは不安そうな顔をする。だが白蘭はすでに飲んでいた。佐天はいちごおでんを飲めることが信じられないでいた。

「あの美味しさがわからないなんて」

「ですよね!」

いちごおでんが好きな者同士。意気投合する白蘭と初春。

結局初春はボンゴレに入ることにはなかつたのだった。

標的（ターゲット） 54 交渉と釈放

「私に何の用だい？ 沢田君？」

「はい。お願いがあるんです」

ツナは白蘭に言われた通りカエル医者がいる病院へと訪れていた。ツナはカエル医者に来客用の部屋に呼ばれていた。

「何だね？」

「木山さん……木山春生を釈放させることってできますか？」

「っ!？」

ツナの頼みを聞いた途端、カエル医者は顔色を変えた。

「一体、なぜそのことを私に言うんだい？ 私はただの医者だよ？」

「詳しいことは俺にもわかりません……ただある奴からあなたが木山さんを釈放することができると聞いて……」

「……」

ツナの言葉を聞いて、カエル医者は何も言わず何か考え込んでいた。

「確かに僕なら彼女を釈放させることはできる。僕はこの街では顔が利く。それに彼女とは古い知り合いだしね」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。だが今、彼女は牢獄に身を置いている身。何の理由もなく簡単に釈放はできない。だがわざわざその様子だと何かあるんだろう？」

「はい。実は……」

ツナは自分が見た木山の過去について全てカエル医者に話した。カエル医者はツナ話を真剣な話で聞いていた。

「成る程ね……そんなことが……」

「それとこれを木山さんに解析して貰えばワクチンソフトを作れるって……」

カエル医者はツナの話聞いて、右手の親指と人差し指を顎に当てる。ツナはポケットから能力体結晶を取り出した。

「これは？」

「能力体結晶です」

「なっ……!?!」

能力体結晶と聞いてカエル医者再び顔色を変える。

「な、なぜ君がそのような物を……!?! 一体、どこで手に入れたんだい……!?!」

「えつと……それは……」

カエル医者問いにツナはどう答えたらいいかわからず困惑してしまふ。

「嫌なら答えなくていい。とにかく木山君の釈放の件。私に任せてくれたまえ」

「引き受けてくれるんですか!?!」

「ああ。君の言っていることは本当のようだしね。それに僕は医者だ。患者を救う為ならそれくらい御安い御用さ」

「ありがとうございます！」

カエル医者は木山を釈放することを了承するとツナはぱあつと表情を明るくしお礼を言った。

「能力体結晶は私が預かっておこう。それと木山君の生徒と、ワクチンソフトを開発する為の施設も用意しておく、だから後のことは任せたまえ」

「お願いします！」

そしてツナは部屋を出る前に扉の前でカエル医者に向かって頭を下げるとその場を去って行く。

(ああは言ったが一体、どうやって私のことや能力体結晶を……まさかアレイスターと何か繋がりがあのか……??)

数日後。

「まさか君たちが私の身元引受人とはな」

カエル医者とは木山の釈放手続きをしてくれた為、木山は釈放された。木山の視界にはツナと美琴の姿が映っていた。

「何よ？ 何か問題でもあるわけ？」

「別に。ただ私の身元引受人が君たちになるとは思ってもみなかったから驚いただけさ」

美琴は木山の発言に引つ掛かりを覚えた。木山は自分の思っていたことを素直に話し誤解を解く。

「にしても私を釈放させるとはね」

「俺も釈放させることができるなんて思ってたんですけど。でもあのお医者さんができるっていうことを知ったからお願いしただけですよ」

「それが前に言っていたパラレルワールド平行世界の知識を共有できる人物の力かい？」

「はい。それと木山さんの生徒と、ワクチンソフトを開発する為の施設もあのお医者さんが用意してくれていますよ」

「そうか。君には感謝してもしきれないな」

釈放させるだけでなく自分の生徒たちを助ける為にそこまでの準備までしてくれていたと知って木山はツナに感謝する。

「こんな所で長話するのもアレだしとりあえず行きましようか」

木山はツナと美琴に案内されて生徒たちのいる施設へと向かって行く。

「待っていたよ」

施設の中に入るとすぐにカエル医者が出た。だが施設内には他には気配が感じられず誰もいなかった。

「この度はご協力感謝します」

「これくらい御安い御用さ。さあ着いてきたまえ。君の教え子たちが待っている」

木山はカエル医者に頭を下げ感謝の言葉を述べる。カエル医者はツナたちに着いて来るように促す。カエル医者に着いていくとエレベーターに乗って施設の最下層へと向かって行く。エレベーターが最下層に着き、扉が開く。

「この子たちが……」

エレベーターが開いた途端、美琴が呟いた。ツナたちの視界にはガラス越しにベッドの上で眠っている木山の生徒の姿が映る。

「こつちに機材を用意してある。好きに使ってくれ」

「ありがとうございます」

カエル医者が指を指した先にはワクチンソフトを作る為の機材と椅子と机が用意されていた。木山はカエル医者に礼を言うと言った椅子に座って作業を開始する。

「これは？」

作業を開始しようと思った矢先、木山の視界に能力体結晶が映る。

木山はツナたちの方を振り返り、これが何なのか尋ねる。

「能力体結晶ですよ」

「の、能力体結晶!？」

「は、はい……この子たちを目覚めさせる為に必要なもので……木山さんに解析させれば生徒たちが助かるって……」

「い、いやそれよりも! これをどこで手に入れたんだい!？」

「い、いや……それは……」

(言えるわけないわよね……悪党とはいえ、カチコミに行つて奪つて来たなんて……やったのは私たちじゃないにしても……)

能力体結晶と聞いて木山は驚きの声を上げる。ツナと美琴は能力体結晶の入手方法についてどう言えいいのかわからず困惑していた。なんとか能力体結晶のことに成功した。

そこから木山は黙々と作業を続ける。ツナたちもその間、作業する木山を見守っていた。

「できた……」

作業開始から30分。木山はついにワクチンソフトを完成させることに成功した。

標的（ターゲット） 55 笑顔

木山はついにワクチンソフトを作ることになった。

「じゃあ……」

「これで……」

ワクチンソフトができたと言ってツナと美琴は木山の元へ駆け寄る。

「ああ。これであの子たちを助けることができるはずだ」

後はパソコンのキーボードのエンターキーを押してワクチンソフトのプログラムを生徒たちに投与するだけとなった。

「っ……!?!」

エンターキーを押してワクチンソフトを投与しようとした木山であったが、生徒たちを昏睡状態にしてしまった時のことが脳裏に過つてしまいエンターキーを押せなくなってしまう。

「大丈夫ですよ。絶対に助かりますよ」

「沢田君……」

ツナは超直感で木山がどういう気持ちでいるのか感じとっており、優しい言葉を木山にかけた。ツナの言葉を聞いて木山は落ち着きを取り戻した。

「よし……」

そしてついに木山はエンターキーを押して、生徒たちにワクチンソフトを投与する。

（頼む……効いてくれ……）

木山は心の中でちゃんとワクチンソフトが効いてくれるように祈る。ワクチンソフトが投与してから10秒が経過するが生徒たちは目覚める様子はなかった。

（ダメなのか……）

誰一人として何の反応も示さない為、木山はワクチンソフトが効かなかったと苦渋に満ちた表情かおをしていた。木山の表情かおを見て、ツナと

美琴も

諦めかけた

その時だった

「う、うくん……?」

「「っ!」」

その時、木山の生徒の一人が目を覚ました。ツナたちはその声を聞き逃さなかった。

「あれ……? っ(こど)っ……?」

「何で私たちベッドで寝てるの……?」

「ああ……ああ……!」

次々と目を覚ましていく木山の生徒たち。目覚めていく生徒たちを見て木山は感動のあまり両手を震わせていた。

「あっ! 木山センサーだ!」

「本当だ!」

「センサーだ!」

一番、最初に目覚めた女の子が木山がいることに気づくと、他の生徒たちも木山の方を向いた。木山は右手で両目を覆う。だが両目から溢れんばかりの涙が溢れていた。

「センサー?」

「何で泣いてるの?」

「何かあったの?」

「なに……色々あってね……本当に……」

急に木山が泣き出した為、生徒たちは疑問符を浮かべていた。木山は涙を流しながらも口元を少しだけ緩ませてそう言った。ツナたちは暖かい目でこの光景を見守っていた。

「僕たちは出て行くのか」

木山と生徒たちの感動の再会を邪魔してはいけなれないと思い、カエル医者はツナと美琴にそう言った。二人はカエル医者の意図に気づき、黙ったままその場を去って行った。

施設の屋上

「よかったね。木山さんの生徒が無事に目覚めて」

「そうね」

「やっぱり木山さんって凄いよね。あんな短時間でワクチンソフトを作っちゃうんだし」

（自分の手柄とは言わないのね……あんたは……）

木山がワクチンソフトを作り生徒たちを昏睡状態から目覚めさせることができたのは自分のお陰なのに、自分よりも木山のことを誉め讃えた。美琴はツナの発言に少しだけ口元を緩ませた。

（完敗ね……何もかも……）

美琴は空を見上げ、自分は色んな意味でツナには勝てないということを確認した。

「悪かったわね沢田……」

「え？」

急に美琴が自分に謝った為、ツナはキョトンとしてしまう。

「戦いたくもないのにあんたの意思を無視して勝負を挑んだことよ」

「ど、どうしたの急に？」

「別に。ただ気づいただけよ。自分のしてきたことの愚かさね。それと自分の弱さってやつをね」

美琴の脳裏には今まで自分のしてきたこと、今回の幻想御手の事件レベルアップとツナの過去が脳裏に浮かんでいた。

「でも私はいつかはあんたを越えてやるわ！ 絶対にあんたをギャフンと言わせてやるんだから！」

美琴は拳をツナに向けてそう言った。だが同じ言葉であっても以前とは言っている意味が全く違っていた。

「若いというのはいいものだな」

「木山さん！」

美琴がツナに宣言すると生徒たちの所にいた木山がやって来ていた。

「あの子たちの所にいなくていいの？」

「あの子たちならあの人の病院に搬送された。まだ完全に治るまでには時間がかかるからね」

「そう」

「そして改めてありがとう沢田君。君のお陰であの子たちを治すだけでなく、会えるようにしてくれて」

「そ、そんなー！俺は大したことはしてないですよ！」

木山は改めてツナに礼を言った。ツナは両手を前に出しながら謙遜した。

「これからどうするの？」

「さあ。まだそこまでは決めていない。とりあえずしばらくはあの子たちの傍にいるつもりだ」

「そうですか」

「それともう一つ。君との約束を果たさないと」

「約束って……リボーンのこと？」

「ああ。君のような生徒を育て上げた先生に興味がある。是非とも話を聞かせて欲しい」

「だったら話してやろうか」

「「え？」」

ツナたちが声のする方を向くといつの間にか屋上の柵の上に立っているリボーンがいた。

「ちやおつす。お前が木山春生か。俺はリボーン。ツナの家^か庭^て教^き師^よだ」

「沢田君の記憶を見てはいたが……本当に赤ん坊なのだな……」

リボーンが自己紹介する。木山は右手を顎に当てながらリボーンのことをまじまじと見ていた。

「それで木山。お前、ボンゴレに入らねえか？」

「だから勧誘するの止めろって言ってるだろりボーン！」

「会って早々に勧誘してんじやないわよ！」

「ボンゴレ……？ パスタのことか……？」

ツナと美琴はリボーンがいきなり木山をボンゴレに勧誘したことに対してツツコミをいれた。木山はボンゴレが何なのかわからず疑問符を浮かべていた。

「ボンゴレはマフィアだぞ」

「はい……!？」

「ツナはボンゴレファミリーっていうマフィアのボス候補でな。俺はボンゴレの現ボス、ボンゴレⅩ世（ノ）の命令でツナを立派なマフィアに教育する為にやって来た家庭教師（か）ってわけだ」

「すまない……あまりのことに情報が頭に入ってこないのだが……」

「んじや簡潔に言うぞ。マフィアになれ木山」

「簡潔にし過ぎだろ！」

「なんならお前の生徒も一緒に入ってもいいぞ」

「いいわけないだろ！ 何、考えてんだよお前は！」

ここからいつものようにツナはリボーンに発言にツツコミをいれる。

「うぜえ」

「ゴフツ!？」

「なっ!？」

ツナのツツコミがうざかったのかりボーンはツナを蹴り飛ばした。いきなりリボーンがツナを蹴り飛ばしたことに驚きを隠せないでいた。

「いつてえ！ 何すんだよりボーン！」

「お前が勧誘を妨害するからだ」

「するに決まってるんだろ！ いい加減、その勧誘するのを止めろ！」

「俺に指図すんじやねえ」

「あいだだだだだ！」

「沢田君があんなにも強い理由がわかった気がするよ……」

「奇遇ね……私もよ……」

苛ついたりリボーンはツナに関節技をかけた。リボーンのアマリの無茶苦茶な行動に木山と美琴は啞然すると同時にツナの強さの秘密を理解する。

「だが……いい教師だな。彼があんな風に育つたのもわかるよ」

「え……!? 本気で言ってるの……!?」

木山だけはリボーンがいい教師だということに気づいていた。美琴は木山の発言が信じられずもう一度、ツナたちの方を見るが木山の言っていることを理解することはできなかつた。

「ああ。本当にいい教師と生徒だ」

木山はツナとリボーンを見ながら今まで見せたことのないとびつきりの笑顔でそう言ったのだった。

佐天覚醒篇

標的（ターゲット） 56 元の世界へ

1学期も終わりどこの学校も夏休みに入った。

ジャッジメント
風紀委員177支部

「佐天さん。本当に行っちゃうんですか？」

「勿論！」

佐天は明日からツナたちの世界に行く。なので別れの挨拶をしに
ジャッジメント
風紀委員177支部にやって来ていた。

「本当に大丈夫ですの……？ あの方の修行を受けるなど……」
「不安がないと言ったら嘘になりますけど。私も強くなりたいたいで
す」

黒子は佐天のことを心配する。黒子の脳裏にはリボーンの所業が
頭から離れておらず、不安しかなかった。だが佐天には迷いはなかつ
た。

「佐天さん。もしあいつが酷いことするようなら私に言ってね。その
時は私があいつに電撃をお見舞いしてやるから」

「お前ごときの攻撃が俺に当たるわけないだろ」

「「「ぎやーーーーー！」」」

遊びに来ていた美琴が佐天にそう言うと、噂をしていたリボーンが
いつの間にかいた。だがリボーンの姿を見た瞬間、美琴たちは揃って
悲鳴を上げる。なぜならリボーンの顔にこれでもかというくらいセ
ミがくつつついていたのである。

「ななな、何してんのよあんだ！」

「こいつは俺の子分たちだぞ。情報収集用のな」

「何でセミなんですの！」

「情報収集って……まさか……」

「じゃあ虫の言葉がわかるってことですか……？」

情報収集をするのになぜセミが必要なかわからず黒子はツッコミをいれた。佐天と初春は情報収集と聞いてリボーンが虫の言葉がわかるということ知り、驚きを隠せないでいた。

「欲しいなら譲ってやろうか」

「いいいいいらないわよ！ 早く逃がしなさいよ！」

「何だ。お前、虫が苦手なのか」

「いいから逃がしなさいって言ってるのよ！」

「じゃあねえな」

美琴は涙目になりながら逃がすように命ずる。リボーンは渋々、自分のセミたちを支部の窓から外に逃がした。

「それで？ 何か用ですの？」

「ああ。お前たちにこれを渡そうと思ってな」

そう言うとりボーンは懐から4つの携帯を取り出した。

「携帯？」

「ただの携帯じゃねえぞ。ボンゴレの最新鋭の技術を使って作った、俺たちが元の世界にしようが連絡できる携帯だ。もし佐天に何か用があんならそいつを使って連絡しろ」

「何でマフィアがそんなものを作るんですの……」

「もう学園都市の技術、越えてんでしょ……」

マフィアが学園都市の技術を越えるような物を作ったことに黒子と美琴は驚きを隠せないでいた。

「それと佐天。もし何か用事があるんなら先に言っとけよ。お前だっ
てお盆に実家に帰るとかあるだろ」

「大丈夫。もう夏休みが終わるまではこっちに帰るつもりはないか
ら」

「いいのか？ 別に無理しないでいいんだぞ」

「うん。本当に大丈夫」

「そうか。お前がそれでいいんならそれでスケジュールを立てるぞ」

「うん。お願い」

リボーンは佐天が本気であるということを感じ取り、佐天の意思を尊重することを決める。

「そういや。今さらだがツナの奴はどこにいるんだ？」

「木山さんと一緒に木山さんの生徒の所へいますよ。沢田さん今日は非番なので」

「そうか。んじゃ後でツナに伝えといてくれ。明日からお前も元の世界に戻って修行だってな」

「え!?! ツナさんも!?!」

ツナも一緒と聞いた途端、佐天は目の色を変えた。まさか想い人と一緒に修行するなんて夢にも思わなかった為、佐天が反応するのも無理もない。

「ああ。ずっとツナをいたぶ……修行できなかつたからな」

「今、いたぶれなかつたって言いかけたよね！」

リボーンはさらっととんでもないことを言いかけた。だが佐天はリボーンが言おうとしたことを聞き逃さなかつた。

「まあ安心しろ。風紀委員の仕事はちゃんと続けさせるからな」

「沢田さんの意思を無視して勝手に決めていいんですの……? 私としては元の世界に戻れる算段がいたら辞めてもらう予定だったのですが……」

「あいつに否定する権利なんてあるわけねえだろ。言うこと聞かねえなら、無理やり従わせるまでだ。たとえ死んだ方がマシだと思わせるぐらいの痛みを与えてもな」

「……」

美琴はツナに対してあまりにも扱いの酷い扱いをするリボーンが悪魔にしか見えなかつた。

そして次の日。佐天のアパート

「準備はいいか？」

「うんっ！ いいよ！」

「うん……」

佐天はツナと一緒に修行できること、ツナたちの世界に行けるのでワクワクしていた。一方でツナは修行と聞いて、やる気は感じられていなかった。

「ツナ。こいつに死ぬ気の炎を注入しろ」

「え？ 死ぬ気の炎を？」

リボーンは例の異世界転送装置を取り出すと、ツナに死ぬ気の炎を注入しろと命ずる。

「こいつは死ぬ気の炎を注入することで起動するように改造したんだ。死ぬ気の炎を注入すれば起動するぞ」

そう言うとりボーンはツナに異世界転送装置を渡した。ツナはリングに死ぬ気の炎を灯すと装置にある窪みに向かって、リングを近づける。近づけると死ぬ気の炎が吸収される。すると装置が輝き始める。

「わっ！」

「眩しい！」

あまりの眩しさにツナと佐天は目を瞑ってしまふ。そして数秒すると光が消える同時にツナたちの姿も消えていたのだった。

標的（ターゲット） 57 第一段階

異世界転送装置を使い元の世界に戻ったツナたち。

「森……」

「ここって……あの時の……」

ツナが目を開ける。そこは森の中だった。ツナはこの場所に見覚えがあった。なぜなら今いる場所はツナが異世界転送装置を発見した場所だったのだから。

「このまま上に上がって修行を開始するぞ」

「え!? もう!？」

「当たり前だろ。お前を1ヶ月ちよつとで超能力者クラスにするんだ。のんびりしてる暇なんかねえぞ」

佐天はツナたちの世界に来て早々に修行を開始することに驚きを隠せないでいた。

ツナたちは山を登る。やって来たのはツナがヴァリアーと戦う為に使っている場所であり、学園都市に来る前にいた場所である。「んじや。さっそく修行の第一段階を始めるぞ」

そう言うとりポーンは懐から7つのリングを取り出した。

「第一段階は死ぬ気の炎を灯す特訓だぞ。この第一段階の目的はいつでも自分の意思で死ぬ気の炎を出せるようになること、そしてお前の属性を知ることだ」

「属性?」

「死ぬ気の炎には大空、嵐、雨、晴、雷、雲、霧の7つの属性があるんだ」

「属性が違うと何が違うの？」

「死ぬ気の炎にはそれぞれ特徴があるんだ。大空は調和。嵐は分解。雨は鎮静。晴は活性。雷は硬化。雲は増殖。霧は構築ってな」

「成る程……」

「ちなみに死ぬ気の炎は色で何の属性か判断できるようになってるんだ。大空はオレンジ。嵐はレッド。雨はブルー。晴はイエロー。雷はグリーン。雲はバイオレット。霧はインディゴっていう風にな」
(そういえばツナさんの記憶で色んな色の炎があっただけ……)

リボーンの説明を聞いて佐天はツナの記憶で、ツナが戦った敵が色んな色の炎を使って戦っていたことを思い出す。

「どんな人間でもこの7つの属性のどれか1つを持ってるんだ。たまに複数の属性を使える奴もいるがな」

「だから7つも用意したんだ……」

佐天はなぜリボーンがリングを7つ用意したのかを理解する。

「そしてリングの炎に灯すのに必要なのが……」

「覚悟……」

「何だ知ってるのか。だったら話は早え。だったらさっそくやってみろ」

そう言うとりボーンは佐天にリングを渡した。佐天はリングを受け取ると右手の指にリングを5つはめ、左手にリングを2つはめる。

「ふんっ！ んんんんん！」

佐天は両手をぎゅつと握っておもいきり力をいれる。だがどのリングにも炎が灯ることはなかった。

「力んでも意味ねえぞ佐天」

「でもいきなり覚悟を見せてって言われても……難しいよ……」

いきなり覚悟を見せろと言われても難しく、佐天は死ぬ気の炎を灯すことの難しさを理解する。

「佐天。お前は どうして強くなりてえんだ？」

「え？」

「お前はツナに強くなりてえって言ったが強くなりた理由は言わなかった。その強くなりた理由を吐いてみる」

「強くなりた理由……」

強くなりた理由と聞いた途端、佐天はツナの方をチラチラと見始める。ツナは佐天が自分のことを見てるとは気づいておらず、リボンは佐天がツナのことを見ていることに気づいた。

「ツナ。山を降りてコーヒーとジュース買ってこい」

「はあ!? 何で!？」

「いいから行ってこい」

「わわ、わかったよ!」

なぜこのタイミングで飲み物を買って来ないといけないのかツナはわからなかったが、リボーンに銃口を向けられた為、ツナは慌てて山を降りて行った。

「ツナがいると本音が言えねえんだろ」

「ありがとうリボーン君」

「気にすんな。それで? どうしてお前は強くなりたんだ?」

リボーンは再度、佐天にどうして強くなりたのか尋ねた。

「私、銀行強盗に襲われそうになったところをツナさんに助けてもらったの。その時からずっとツナさんに憧れたの」

佐天の脳裏にはツナと初めて出会った時のことが浮かんでいた。

「でも私はずっと能力が使えなくて……それで幻想御手に手を出して……でもそのせいで初春は木山さんに捕まって……」

自分が幻想御手レベルアップを手を出したせいで、初春は木山の所を訪れ親友初春が拐われるハメになってしまった。初春がそのことを責めた訳ではないが、佐天はそんな自分を許すことができなかった。

「何よりあの時のツナさんのあの顔が忘れられなくて……」

佐天の脳裏には自分が昏睡状態から目覚めてから初めてツナに会った時の泣き顔が浮かんでいた。

「成る程な」

「それに……」

「何だ?」

「私もツナさんの過去を見たの。いっぱい戦って、いっぱい傷ついて……戦いたくないのにそれでも友達を護る為に戦って……だから

私力が力をつければツナさんが戦わなくて済むんじゃないかって、もうあんな顔させなくていいんじゃないかと思つて……だからツナさんに強くなりたいて言つたの。死ぬ気の炎は覚悟とリングがあれば使えるつて聞いたから」

「ツナが反対してもか？」

「え？」

「ツナはお前が強くなることを望んでねえ。強くなつて戦うことになれば人を傷つけることになる。ツナは佐天にそんなことして欲しいと思つてねえ。自分と同じ思いをして欲しくない、ずっと普通の女の子のままできて欲しいと願つてる。それでも強くなりてえのか？」

リボーンは知つていた。佐天が修行すると聞いた時、ツナが反対したのはそういう理由があるということに。そして同時に佐天を試した。憧れの人の願いを聞いても佐天の覚悟が揺がないのかどうかを。「なりたい。もう後悔したくないの。私にだつて護りたい人がいるから」

佐天は一切、迷うことなくそう答えた。その目には一点の曇りもなかった。

そして

「わっ！」

「晴と雨か」

右手の中指から黄色の炎とくすり指から青い炎が灯つた。リボーンは死ぬ気の炎の色から佐天の属性が晴だということを知る。

「これが死ぬ気の炎……」

佐天はリングに灯つた炎を見て感動していた。

「あれ？　でも雨の炎は晴の炎に比べて弱いような……」

「複数持つてる場合、メインの属性以外はメインの属性に比べて弱いんだ」

佐天はリングを見つめると炎の出力が晴と雨で違うことに気づいた。リボーンは佐天の疑問に答える。

(どうせならツナさんと同じ炎がよかつたな……)

死ぬ気の炎を灯せて嬉しかった佐天であったが、ツナと同じ大空の

炎でなくてちよつとだけがつかりしていた。

「ツナと同じ炎じゃなくてがつかりしただろうが、こればつかりはどうすることもできねえんだ」

「っ!?!」

リボーンは佐天の表情から佐天が何を考えているのかわかっていた。リボーンの言っていることが凶星だったのか、佐天は驚きを隠せないでいた。

「大空の炎を持つてる奴は少ねえんだ。俺の知る限り今、マファイア界で大空の炎を持つてるのは7人。後はすでに死んだ初代から8代目だけだ」

「じゃあツナさんって凄いな……」

リボーンの話聞いて佐天は大空の炎のレア度を理解する。そしてツナがそんなレアな大空属性を持っているツナの凄さを理解する。

「そうしよぼくれんな佐天。晴の炎は便利なんだぞ」

「そうなの?」

「ああ。さつきも言ったが晴の炎の特徴は活性。つまり傷の治りを活性させて超高速治癒が可能にもなるんだぞ」

「そっか……そういう使い方もできるんだ……」

佐天はリボーンから晴の炎のメリット聞いて、晴の炎がとても便利な能力だということを知る。

「つまり愛するツナが怪我をしてもお前の力で治すことができるってことだ」

「なっ!?!」

リボーンがニヤニヤしながらそう言うと、佐天は顔を赤くする。

「ツ、ツナさんには憧れてるけど!! 別に好きとかそういうんじゃないから!!」

「隠さなくていいぞ。お前がツナのことを好きだってことぐらいお前と初めて会った時から知ってるからな」

「ええ!?!」

まさか初めて会った時にツナのことが好きだということ気づかれていたとは思ってもみなかった為、佐天は顔を真っ赤にしながら動

揺っていた。

「ま。とりあえず修行の第一段階は終了だ。炎を灯した時の感覚は覚えとけよ」

「うんっ！」

「もし忘れたらツナが他の女とイチャイチャしてる姿を思い浮かべろ。そうしたら何が何でもその女を亡き者にしたいっていう覚悟ができるはずだ」

「お、思わないよ!! そんなこと!!」

「リングに炎が灯ってるぞ」

リボーンという言葉聞いて再び顔を真っ赤にしながら佐天は動揺する。だが佐天の言葉とは裏腹にリングに炎が灯っていた。しかもさつきよりも強く。

こうして佐天は第一段階を突破することに成功した。

標的（ターゲット） 58 第二段階

見事、第一段階をクリアした佐天。飲み物を買いに山を降りていたツナも戻って来る。

「んじや。修行の第二段階を始めろぞ。次の修行はツナにも協力してもらおうからな」

「え？ 俺？」

第二段階の修行に自分の力が必要だという意味がわからず疑問符を浮かべる。

「それで次の修行は何するの？」

「この崖を登れ」

「へ……!?!」

リボーンが指を指しながらそう言う。佐天はリボーンが指を指した方向を見た瞬間、あまりの衝撃にその場で固まってしまった。なぜならそこには50メートルは優に越える絶壁があったのだから。「ええええええええええ!?!」

そして時間差で佐天は絶叫を上げる。佐天の絶壁が並盛山に響き渡る。

「無理無理！ 無理だつて！ こんな登れるわけないじゃん！ 滅茶苦茶過ぎるよ！」

「無茶苦茶じゃねえぞ。これは初代が行った由緒ある修行だぞ。実際ツナもやったしな」

「え？ そうなんですか？」

「ま、まあ……」

本当にやったかどうか尋ねるとツナは修行でこの崖を登った日々を思い出しながらそう答えた。

「初代はいつでも超死ぬ気モードになれるようになる為には絶壁を登って基礎体力をつけたんだ。まあお前がどんな戦い方をするかわかんねえが基礎体力は必要だからな」

「この修行がちゃんとしたものっていうのはわかったけど……私の力じゃこの崖を登るのは流石に……」

「そのぐらいわかってるぞ。いい方法があるんだ」

「いい方法?」

「説明するより実際に見た方が早えな」

そう言うとりボーンは相棒であるレオンを銃に変形させると銃口を向ける。

「ちよっ! お前! まさか!」

「いつぺん死んでこい」

ズガアン!

リボーンはツナの意味を無視して額に弾丸を撃ち込んだ。撃たれたツナは仰向けで倒れてしまう。

「え……?」

佐天は撃たれたツナを見て放心状態にしてしまっていた。

「いや……!」

そして数秒後、佐天の悲鳴が並盛山へと響く。

「ツナさん! ツナさん! しっかりして下さい!」

佐天は撃たれたツナの元に駆け寄り、ツナの体が揺るがツナの意識は目覚めなかった。

「落ち着け佐天」

「落ち着けるわけないでしょ! 何でそんなに平然としてられるの!? 自分のしたことがどういふことかわかってるの!」

佐天は涙を流しながら、ツナが倒れたにも関わらず平然としているリボーンに向かって叫ぶ。

その時だった

「え!」

ツナの目がカツと開き、額に大空の死ぬ気の炎が灯る。佐天は急にツナが目覚めたことに驚きを隠せないでいた。

「復活!」

「はわわわわわ!! / / /」

ツナの服が破れパンツ一丁になる。そしてツナは回転しながらお

もいつきりジャンプし地面に着地する。佐天はツナのパンツ一丁の姿になったのを見て、慌てて両手で顔を隠すが、ちゃっかり指の隙間からパンツ一丁のツナを見ていた。

「死ぬ気で崖を登るー！ー！ー！」

そう言うのとツナは崖の近くまで一直線で登り、そこからもの凄い勢いで崖を登って行く。

「イツツ。死ぬ気タイム」

「な、何をしたの……？」

「死ぬ気弾。こいつをツナの額にぶち込んだ」

「し、死ぬ気弾……？」

リボーンは人差し指と親指で炎のマークの入った赤い弾丸を摘まみながら佐天に見せる。死ぬ気弾という聞いたことのない単語に佐天は疑問符を浮かべていた。

「死ぬ気弾はボンゴレに伝わる特殊弾だな。こいつを脳天に喰らった奴はいつペン死んで死ぬ気になって甦る。死ぬ気になる内容は死ぬ前に後悔したことだぞ」

「ちよ、ちよつと待って……後悔してなかったらどうなったの……？」

「俺は殺し屋だぞ」

「死んでたの!?!」

後悔していなかったら死んでたかもしれない弾丸を撃っていたと知って佐天は驚きの声を上げる。

「つーわけだ。今からお前にも死ぬ気弾を

ぶちこむぞ」

「ままま、待って!」

「どうかしたのか？」

「どうかしたのか？ じゃないよ！ 死ぬかもしれないって聞いているのにやるわけないじゃん！ 仮に死ななくてもあんな姿になるんだよー！」

「愛するツナになら見られても問題ねえだろ」

「そ、それは……!! / / 確かにツナさんになら見られても……つ

て何、言わせるのリボーン君!! / / /

「お前が勝手に言ったただけだろ」

顔を赤らめ両手の人差し指をツンツンとくつつけながら言う佐天
にリボーンは冷静にツツコミをいれる。

「いずれツナに見られるんだからいいじゃねえか。その予行演習と思
えば」

「良くないよ! ツナさんに変な目で見られるよ! それにリボーン
君だっているのに!」

「安心しろ。俺はお前のような子供ガキの裸を見て興奮する程、子供ガキじゃ
ねえ」

「リボーン君は赤ん坊でしょ!」

リボーンの怒涛のボケに対して佐天はツツコミを入れまくる。

「つたく。しゃあねえな。だったらこいつだ」

そう言うとりボーンは懐から水色の丸薬の入った瓶を取り出した。

「な、何それ?」

「死ぬ気丸。死ぬ気になる為のアイテムだ。死ぬ気弾をよりも死ぬ気
度は落ちるがな。死ぬこ気丸を飲めばお前の嫌がってたリスクは解消
するぞ」

「ちよつと待って……死ぬそ気丸があるってことは最初からこうなるこ
とがわかってたってことじゃないの……?」

「お前が絶対に面白い反応をすと思うてな」

「私で遊ばないで!」

微妙にニヤけながらそう言うりボーンに佐天はツツコミをいれる。

「ただこつちの方が体への負担がでけえぞ。それでもやるか?」

「まあ……死ぬ気弾よりはマシだし……こつちにするよ……」

体への負担は重いと言われたが、死んだり、恥ずかしい姿になるよ
りはマシだと思い、佐天は死ぬ気丸を飲むことを選んだ。

(ちよつと怖いけど……えいっ!)

佐天は勇気を出して死ぬ気丸を口の中に入れて、一気に飲み込む。

「っ!」

佐天が死ぬ気丸を飲み込んだ瞬間、体中から力が漲り額に晴の死ぬ

気の炎が灯った。

標的（ターゲット） 59 過去の自分

死ぬ気丸を飲んで死ぬ気モードとなった佐天。

（凄い……力が溢れ出てくる……けど想像以上にきつい……）

力が漲ると同時に、自分の思っているよりも想像以上の負担が体にかかっていることを佐天は感じていた。

「大丈夫か？ 佐天？」

「うん……なんとか……」

「今はきついだろうがあの崖を登れるようになる頃にはその状態でいることも苦にならねえはずだぞ」

「うん……」

「ここで話しても体に負担がかかるだけだからな。とりあえず登ってみろ」

リボーンに言われて佐天は絶壁を登っていく

（まだあんなに……）

登りながら上を見る佐天。いくら死ぬ気状態であるとはいえこの絶壁を登ることは容易ではなかった。

（弱気になっちゃダメだ……強くなるって決めたんだ！）

それでも佐天は少しずつではあるが必死に崖を登って行く。

一方でツナとリボーンは絶壁を登っている佐天を見上げていた。ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになっていた。佐天が落ちてもすぐに助けられるようにする為である。一応、佐天が登っている下にはマットも置かれていた。

「懐かしいな。お前も死ぬ気モードでこの絶壁を登ってたよな」

「俺の記憶では死にかけた記憶しかないけどな……」

リボーンはヴァリアーを迎え撃つ為にツナが絶壁を登っていたことを思い出していた。一方でツナの脳裏には崖から何度も落ちたことを思い出していた。だが今は落ちても大丈夫のように安全対策がしてある。ツナはリボーンは女性に対してだけは甘いということを改めて実感していた。

（佐天……）

そして佐天がこんな危ない修行をしているのをツナは平然と見ていることはできなかった。

「心配するのはいいが修行を止めさせろなんて言うんじゃねえぞ」

リボーンはツナの表情からツナが今、どんなことを思っているのか言い当てた。

「佐天は自分を変えようと死ぬ気で頑張ってたんだ。それを邪魔する権利はどこにもねえ。前にも言ったがこれは佐天自身が決めたことだぞ」

「わかってる……わかってるけど……」

リボーンの話は間違っていない為、ツナは反論できなかった。佐天の強くなりたい覚悟は本物。だがどうしても普通の女の子でいて欲しいツナはどうしても妥協できないでいた。

「ツナ。アホ牛がレヴィにボコボコにされた時のこと覚えてるか？」

「当たり前だろ……忘れられるわけないだろ……」

ツナの脳裏にはヴァリアーの幹部の一人、レヴィ・アタンによってボロボロにされたランボの姿が浮かんでいた。

「あの時、お前はルールを無視してアホ牛を助け、戦いが嫌いなお前がもっと強くなりたいと言った。それは他の誰でもない。お前自身が決めたことだっただろ」

「それは……」

「今の佐天はあの時のお前と同じだ。佐天は幻想御手レベルアップの事件で己の無力さや決断を後悔した。だからもう後悔しない為に。誰かに護られる存在から誰かを護れる存在になろうとしてんだ。今まで仲間の為に戦い続けたお前ならこの気持ちが変わるはずだぞ」

「……」

リボーンという言葉にツナは何も言うことができなかった。そして佐天が心の内でそんなことを考えていたのかということを知った。

「はあ……はあ……」

佐天はかなり疲労していた。絶壁を登るだけでも体力を消費する上に死ぬ気モードになっている為、体への負担も多かった。

その時だった、

「あっ……!?!」

佐天が右手で握っていた部分が崩れてそのままバランスを崩してしまふ。

(やばっ……落ち……)

自分が絶壁から落ちていることを自覚した佐天は目を瞑ってしまふ。

「大丈夫か佐天？」

「ツ、ツナさん……!!」

だがツナが即座に炎を逆噴射させて一気に佐天の所まで移動し佐天をお姫様抱っこの状態で助けていた。何かあった時はツナが助けに来てくれることは知ってはいたが、それでも想ツナいに抱えられた佐

天は顔を赤くしていた。

「佐天。俺はお前が強くなりたいたって言った時、正直怖かった。佐天が普通の女の子じゃなくなるんじゃないかって」

「ツナさん？」

「でもさつきりボーンからお前が強くなりたいたい理由を聞いたんだ。後悔しない為に強くなるってことを」

ツナは佐天に今まで自分が思っていたことを打ち明けた。

「俺もお前と同じだ。大切な仲間を護る為に、失わない為に必死に修行した」

そう言うツナの脳裏には今まで自分がしてきた修行が浮かんでいた。

「それにお前と約束したしな」

「約束？」

「能力が使えるようにお前に協力するって。まあ死ぬ気の炎は能力じゃないんだが……」

「あ……」

佐天ツナと初めて出会った時にツナが自分に言ってくれたことを思い出した。

「だから俺もお前の協力させてくれ」

「ツナさん……」

ツナは自分の出した結論を佐天に伝えた。ツナの言葉を聞いて佐天は感動していた。

「おい。いつでもイチャイチャしてないでとつと降りて来やがれ」

「してない!!／／／」

いい雰囲気をぶち壊すりボーン。ツナと佐天は顔を赤くしながら反論したのだった。

標的（ターゲツト） 60 沢田家

この後も佐天は修行を続けていく。

「はあ……はあ……」

時刻は午後5時を回っていた。流石に1日で絶壁を登ることは叶わなかった。休憩を取りつつ修行は続けたが、佐天の疲労はピークに達していた。

「今日はここまでだぞ」

「ま、待って……まだ私は……」

「これ以上続けたら体がぶっ壊れて修行どこじやなくなっちゃうぞ」

佐天はまだできると言うがリボーンは佐天の疲労と体がピークに達していることをわかっていた。

「1日でこの絶壁を登れるなんて思っちゃいねえ。ツナだってこの絶壁を登り切るのに3日はかかってんだ。だから焦るな」

「わ、わかったよ……」

リボーンの言葉を聞いて佐天は修行を辞めることを決意する。

「んじゃ。行くかツナの家」

リボーンがそう言うと3人はツナの家へと向かって行く。

山を降りてツナの家を向かって行く3人。少し歩くと住宅街へと入って行く。

「日本とかイタリアがあるのは知ってましたけど、異世界だからもつとゲームみたいな世界だと思ってたけど、普通の町なんですわね」

「そう見えるかもしれないけど……普通じゃないから……」

「え？ そうなんですか？」

佐天はキョロキョロと辺りを見回しながら率直な感想を述べた。

だがツナは佐天の言葉を否定した。一見、この並盛は普通の町に見えるが、住んでいる人間は変な人たちばかりであり、トラブルメーカーでもある。並盛が普通ではない理由はその人たちが原因である。

住宅街を歩くこと15分。

「着いたぞ」

「俺の家だ……本当に帰って来たんだ……」

ついにツナの家に着する。リボーンが指を指した方向にはどこにでもある普通の一軒家があった。

「あれ……？　普通の家だ……てつきりすつごい豪邸にサングラスをかけた男の人たちがたくさんいるのかと思ってた……」

「その方がどんなによかったことか……」

ツナがマフィアのボス候補だと聞いていた為、佐天は家が普通ではないと思っていたが、どこにでもある普通の一軒家だった為、逆に驚いてしまっていた。ツナは自分の家にいる居候たちのことを思い出しながらボソツと呟いた。

「ツナ。ママンには俺の方針で県外の学校に通わせてつてことにしてるからな。話を合わせろよ」

「わかったよ」

リボーンはツナの母である沢田奈々にツナがいないことを心配させない為に嘘をついていた。

「ただいまー」

「あら。帰って来たのね。おかえりツナ、リボーン君」

ツナは家の玄関の扉を開けた。扉を開けると茶髪のシヨートヘアの女性がいた。この女性こそツナの母親、沢田奈々である。

「あら？　そっちの子は？」

「え、えつと……私は……」

奈々は知らない女の子がいることに気づいた。佐天は何と言えばいいかわからず焦ってしまう。

「こいつは俺の知り合いでな。夏休みの間、家に泊めて欲しいんだがいいか？」

「そうだったの。私は全然、問題ないわよ。えつと……」

「ぎ、佐天涙子です！ しばらくお世話になります！」

「涙子ちゃんね。そう緊張しなくていいのよー。自分の家だと思つてゆつくりくつろいでくれていいからね」

佐天は緊張しながら自己紹介した。奈々はそんな佐天に優しい言葉をかけた。

「あつ！ でも涙子ちゃんの寝る場所がないわ！ どうしましょう！」

「ツナの部屋で一緒に寝れば問題ねえだろ」

「え!? / / /」

「なっ!?」

居候が5人もいる為、佐天の寝る場所がないことに奈々は気づいた。リボーンがツナの部屋で寝ればいいと提案すると佐天は顔を赤くし、ツナは驚きの声を上げた。学園都市では同じアパートで暮らしてはいる二人ではあるが、同じ部屋で寝ているわけではない。

「それもそうね。じゃあとりあえずご飯の用意をするから、それまでゆつくりしててね」

奈々はリボーンの提案をすんなりと受けると台所へ向かって夕飯の準備を始める。

「リボーン！ 何考えてんだよ！」

「しゃあねえだろ。この家で空いてる部屋って言ったらお前の部屋ぐらいしかねえんだ。それに同じ部屋って言ったって同じベッドの上で一緒に寝るわけじゃねえんだ。問題ねえだろ」

（お、同じベッド……!? / / /）

リボーンという言葉聞いて、佐天は自分とツナが同じベッドで寝ている姿を想像して顔を真っ赤にしてしまっていた。

「ま、まあ仕方ないですよね!! / / /部屋がないんじや!! / / /
そうしましょう!! / / /」

「ええ!?」

（意外と欲望に正直だなこいつ……）

合法的にツナと同じ部屋で寝ることが出来る為、佐天は顔を赤くしながらも平然を装いそう言った。ツナは佐天の言葉に動揺し、リボーン

ンは佐天の性格を理解した。

標的（ターゲット） 61 居候

夏休み期間中、ツナの家泊まることになった佐天。修行で汚れていたのでお風呂に入る。お風呂から上がるとツナの部屋に戻って、晩御飯ができるまでゆっくりとくつろぐ。

「明日は9時から修行を始めるからな。ゆっくり休んどけよ佐天」
「うん。わかった」

リボーンは髪をドライヤーで乾かしている佐天に明日の修行の日程を伝える。

「本当に帰ってきたのねツナ」

「ビアンキ」

（あつ！ この人もツナさんの記憶に出てきた人だ！）

ツナの部屋の赤色の髪にロングヘアの外人の女性が入って来る。

佐天はこの女性がツナの記憶に出てきたことを思い出す。

「あら。知らない子ね。もしかして異世界の……？」

「は、はい！ 佐天涙子といいます！ 夏休みの間、ツナさんの家にお世話になります！」

「ビアンキよ。よろしく」

緊張しながら自己紹介する佐天に対して、ビアンキは冷静に簡潔に自己紹介した。

「とりあえず私からの歓迎の料理よ」

「ええええええ！？ な、何これー！？」

ビアンキはどこからか皿を取り出すとツナの部屋の中心にある折り畳み式の机に皿を置いた。佐天は皿の上に乗っている料理を見て絶叫を上げる。なぜなら皿の上には食材の原型を留めておらず、さらに紫色の煙を上げている料理があったからである。

「ビアンキ！ いきなりポイズンクッキングを出すのは止めろって！」

「ポイズン……クッキング……？」

ポイズンクッキングと聞いたことのない単語に佐天は疑問符を浮かべる。

「ビアンキはフリーの殺し屋ヒットマンでな。そして作った料理が全部毒料理……つまりポイズンクッキングになる才能を持つてんだ」

「何その才能?!? というか殺し屋ヒットマンなのこの人!?!」

ポイズンクッキングのこと、ビアンキが殺し屋ヒットマンであるということに佐天は驚きを隠せないでいた。

「ちなみにビアンキは俺の女だぞ」

「もうっ! リボーンったら!」

「意味わかって言ってるの!?!」

リボーンは親指以外の指を立てながらそう言う。ビアンキは顔をほんのりと赤らめていた。佐天はリボーンが親指以外の指を立てていることから、ビアンキが4番目の愛人だということを即座に理解しツツコミをいれた。

「ま。これからよろしく」

そう言うとビアンキはツナの部屋を出て、下へと降りて行った。

「な、なんか……変わってますね……ツナさんの居候って……」

「こんなのまだ序の口だよ……」

佐天はビアンキのポイズンクッキングに衝撃を受けていた。だがツナはこれは序の口に過ぎないということを知っていた。

「ガハハハー! ランボさん登場!」

「ランボ」

今度は牛柄の服に天然パーマの子供がツナの部屋に入ってきた。

「遊びに来たと見せかけて……死ね! リボーン!」

「いきなりかよ!」

「手榴弾!?!」

部屋に来て早々にランボは髪の毛の中から手榴弾を取り出してリボーンに投げつけた。まさか子供が手榴弾を持っているとは思ってもみなかったのか佐天は驚きを隠せないでいた。

「ん」

「ぐぴゃあー!」

ドオオオオンン!

「ええええええええええ!」

だがリボーンは手の甲で手榴弾をランボの方へ跳ね返した。跳ね返した手榴弾はランボの顔面に直撃した後、派手に爆発する。佐天はさらつととんでもないことが起こった為、驚きを隠せないでいた。

「ちよっ! 本当に爆発した!?! どうか何で子供が手榴弾を!?! とういか何やってるのりボーン君!?!」

「気にすんな。いつものことだ」

「いつものことなの!?!」

このやり取りがいつものことだということを知って佐天は驚きの声を上げる。

「うわああああああん!」

「ええ!?! 今度はバズーカ!?! とういかどうなってるのその中!?!」

ランボは泣きながら今度は髪の毛の中から紫色のバズーカを取り出した。そしてバズーカを自分に向かって撃つと部屋にピンク色の煙が充満する。

「ええ!?! 自分に撃った!?! 何で!?!」

佐天はランボがバズーカを自分に向かって撃つことに驚くと同時に意味がわからないでいた。そして部屋に充満していた煙が晴れる。

「やれやれ。せっかく食事中だったのに」

「ええええ!?! 誰、この人!?! あの子は!?!」

煙が晴れると牛柄のシャツを着た青年が現れた。佐天は急に知らない青年が現れたことに驚きを隠せないでいた。

「久しぶりですね。若きボンゴレ。おや? そちらは初めて見る女性ですね」

「うん。佐天って言って今日からしばらく家に泊まることになったんだ」

「成る程。初めまして。10年前の自分が世話になってます。ランボです」

「10年前……!?! とういかランボって……あの子と同じ名前……ど

ういうこと……!?!」

10年前という単語、急に現れた青年がさつきまでいたランボと同じ名前を名乗ったことがわからず佐天は混乱していた。

「えっと……こいつはさつきのランボの10年後の姿なんだよ佐天……」

「10年後!?! どういうことですか!?!」

「10年バズーカだぞ」

「10年……バズーカ……?」

「ボヴィーノファミリーが作った兵器でな。このバズーカに撃たれた奴は10年後の自分と5分間だけ入れ替わるんだ」

「えええ!?! それってタイムスリップってこと!?! 何でマフィアがそんな凄い物を作れるの!?!」

5分間だけとはいえタイムスリップできる兵器をマフィアが作れることに驚きを隠せないでいた。

(とうかあの子がこんなになるの……)

10年バズーカも驚きであったが、あのランボが10年経つとこんなにも変わるということの方が驚きであった。

「それにしてもお美しい方だ。ボンゴレの彼女ですか?」

「か、彼女!?! // //」

大人ランボは佐天がツナの彼女なのではないかと推測した。大人ランボの言葉を聞いて佐天は顔を赤くする。

「違うよ。佐天は友達だよ」

「そうですか? そうは見えないんですが……」

「彼女// //私がツナさんの彼女// //えへへ// //」

(こいつチョロいな)

大人ランボの視線の先には彼女と言われて表情が緩みまくっている佐天の姿があった。リボーンはそんな佐天を見ながら心の中で呟いた。

「ツナ、リボーン、涙子。ママんがご飯ができた……ロメオ!」

「ひいひい!」

再びビアンキがやって来る。だが大人ランボを見た瞬間、ビアンキ

の顔つきが変わる。一方で大人ランボも顔を真っ青にしていた。
いた。

「ポイズンクッキング！」

「ぐびやあ!？」

「ええええええ!？」

「大人ランボ！」

ビアンキは折り畳み式の机に置いていた料理を大人ランボの顔にぶちこんだ。大人ランボは顔を真っ青にしながら仰向けの状態で倒れる。ビアンキの行動に佐天は再び驚きの声を上げる。

「な、何してるんですか!？」

「大人ランボはビアンキの元彼にそっくりでさ……なんか別れるまで
険悪だったみたいで……」

「ちなみにロメオは食中毒で死んでるぞ」

「悲惨過ぎるよ！ 元彼もこの人も！」

ビアンキのことを聞いて、佐天はロメオと大人ランボに同情してしまった。その後、10年バズーカの効果が切れて大人ランボは元の時代に戻った。

（ていうか修行より疲れた……ツナさんって毎日、こんな生活を送ってるの……?）

ツツコミをいれたり驚きの連続だった為、佐天のさらに疲労していた。そしてツナの苦勞を知ったのだった。

標的（ターゲツト） 62 夢

沢田家の居候たちに驚かされた佐天。ツナたちは夕食を食べる。

「遠慮せずいっぱい食べていいからね」

「はい。ありがとうございます」

「あれ？ イーピンとフウ太は？」

奈々は笑顔でそう言う。佐天はお礼を言った。ツナはもう二人の居候であるイーピンとフウ太がいないことに気づいた。イーピンは人間爆弾の異名を持つ殺し屋^{ヒットマン}。フウ太はランキングを作らせたら右に出るものがないというランキングフウ太の異名を持つ情報屋である。かつてツナが戦った男、六道骸のせいでフウ太はランキング能力を失った。だがこの2年で徐々に力を取り戻していったのである。「イーピンは風の元^{フオン}で修行。フウ太はシモンファミリーの所に泊まってるわ」

（そういえば5人、居候がいるって言ってたっけ……）

ツナとビアンキの会話を聞いて、ツナの家には居候が5人いたと言っていたことを思い出す。

夕食を食べ終えたツナたち。少しの間くつろぐと、すぐに寝ることにする。

「すみません。私がベッド使っちゃって」

「いいよ。気にしないで。じゃあ電気消すよ」

「はー」

いつもベッドに寝ているツナは床に布団を敷いて寝ることに。佐

天はツナの使っているベッドで寝ることになった。ツナは部屋の電気を消した。

(ど、どうしよう！ ツナさんのベッドで寝ちゃった！ ツナさんの匂いがする！)

佐天は想い人の布団の香りを嗅いで興奮していた。ちなみにこの布団はツナが帰ってくる前日に奈々が洗濯している為、ツナの匂いはしない。佐天の思い込みである。

(はっ！ これって白井さんと同じになってる!?)

だが同時に気づいてしまう。今の自分は変態黒子と同じになっているのではないかということに。

学園都市。常磐台の寮

「へっくしー！」

「どうしたの黒子？ 風邪？」

再び沢田家

「すう……すう……」

修行の疲れが相当貯まっていたのか佐天はすぐに静かに寝息を立てながら眠っていた。

「涙子！ 涙子！」

「はっ!? ツナさん!？」

佐天は誰かの声で目覚める。目覚めると知らない部屋で目の前にタキシード姿のツナがいた。急にタキシード姿のツナが目前にいた為、佐天は驚きの声を上げる。

「大丈夫？ やっぱり緊張してる？」

「緊張っていうか……そもそも何でツナさんタキシードなんか着て……」

「え？ 変かな？」

「い、いや！ 変じゃないんですけどー！」

ツナはタキシードが似合っていないのかと思っただけで自分の服装を見直した。佐天は慌てて否定する。

「それよりもとうとうこの日が来たね。そのドレスもよく似合っただけよ」

「ドレス？」

ドレスと言われて佐天は自分の格好を見る。

「へ!?! / / /」

佐天は自分の着ている服装を見るとその場で固まってしまった。なぜなら自分が着ている服がウェディングドレスだったのだから。

「ええええええええええ!?! / / /」

数秒後、佐天は自分がウェディングドレスを着ていることを知って驚きの声を上げた。

「な、何で!? / / 私がウエディングドレスを着てるの!? / / /
「何でって。今日は俺たちの結婚式だし」

「けけけ、結婚?! / / / わ、私とツナさんが!? / / /

「うん。そうだけど……何でそんなに驚いてるの?」

「え!?! / / / どういうこと!?! / / / 何で私がツナさんと結婚することになってるの!?! / / /

ツナはなぜ佐天が驚いているのかわからず疑問符を浮かべていた。一方で佐天はなぜ自分がツナと結婚することになっているのかわからず顔を赤くしながら動揺していた。

「あつ!・ そろそろ時間だ。行くよ涙子」

「へっ!?! ちよっ!?!」

ツナは佐天の手を取って、部屋を出て行く。佐天は状もよくわかっていないまま強引に連れて行かれた為、慌ててしまう。

佐天が連れて行かれたのは大きな扉の前だった。

「それでは新郎新婦の入場です」

扉の向こう側から司会の声が聞こえる。すると二人の目の前の扉が開いた。そこにはバージンロードが引かれており、バージンロードの両端には今回、招かれた客人たちがいた。その中にはツナの世界の人たちも、佐天の世界の人たちもいた。ツナたちはゆっくりと一歩一歩とバージンロードを歩いて行く。

「おめでとうございます! 佐天さーん!」

「お綺麗ですわよー!」

「幸せにねー!」

初春、黒子、美琴が歩いていく2人に向かってそう言った。他の人

たち次々も2人にお祝いの言葉を述べていく。ツナは笑顔で手を振って対応していた。

(どどどどどうしよう!! / / / 本当に結婚式だよ!? / / /)

佐天は本当に自分がツナと結婚するということを知って、顔を真っ赤にしながらバージンロードを歩いていった。そしてバージンロードを歩き終わり2人は神父の前に辿り着いた。

「夫となる者よ。あなたを健やかな時も、病める時も、豊かな時も、貧しい時も、あなたを愛し、あなたをなぐさめ命のある限り真心を尽くすことを誓いますか?」

「はい。誓います」

神父が着るキャソックに身を包んだりリボーンがツナに尋ねる。ツナは迷うことなく返答した。

「妻となる者よ。あなたを健やかな時も、病める時も、豊かな時も、貧しい時も、あなたを愛し、あなたをなぐさめ命のある限り真心を尽くすことを誓いますか?」

(なんて答えたらいいの!? / / / 私はまだ何でツナさんが結婚することになったのかわかってないの!? / / /)

リボーンは佐天にツナと同じ質問する。だが佐天は答えていいものなのかわからず、リボーンの問いに答えることができないでいた。

「沈黙もまた答えです。誓約したと認めます」

(ええええ!! / / / 認められちゃった!! / / / ただ答えられなかっただけなの!? / / /)

リボーンは沈黙に誓約したと判断した。リボーンの手を聞いて佐天は顔を赤らめながら誓約が認められてしまったことに動揺してしまっていた。

「では指輪の交換と誓いのキスを」

(キキキキキキ、キス!? / / /)

キスと聞いて佐天はかつてない程、顔を真っ赤にする。まだどうしてこんなことになったのかすらわからない内にこんな人前で想い人とキスをするのだからこんな反応になるのも無理はない。佐天がそんなことを考えている間に指輪の交換が終わってしまう。

「では最後に誓いのキスを」

リボーンがそう言うのとツナはベールを外して、佐天の両肩に手を置いた。

「涙子。俺、絶対に君のことを幸せにするから」

「ツナさん……!! 〱〱〱」

ツナは真剣な眼差しで佐天にそう言った。ツナの真剣な眼差しに佐天は顔を赤くし見とれていた。

「愛してるよ。涙子」

(愛してる……!?! ツナさんが……私のことを……!?!)

想い人に愛してると言われてあまりに嬉しかったのか驚きを隠せないでいた。

「私も……!! 〱〱〱ツナさんのことを愛してます……!! 〱〱〱」

佐天は顔を赤くしながらも勇気を振り絞って自分の想いをツナに向かって話した。

「じゃあ。いくよ」

ツナは目を閉じて自分の唇をゆつくりと佐天の唇に近づけていく。佐天も同じく自分の唇をゆつくりとツナの唇へと近づけていく。

(なんでこうなったかわからないけど……私、ツナさんと結婚するんだ……ツナさんのものになっちゃうんだ……)

佐天はどうしてこんなことになったのかはどうでもよくなっていった。そしてツナの唇と佐天の唇が触れる……

「はっ!!」

寸前で佐天の目が覚めてしまう。目覚めた途端、見知った天井に、

床で眠っているツナがいる為、今までののが夢だったということを目覚める。

(わ、私ったら……!! // //なんて夢を……!! // //)

起きた佐天は両手で顔を覆い大好きなツナと結婚式を挙げていることに恥ずかしさと嬉しさに顔を真っ赤にしていた。

(でも何でここで目覚めちゃうの!?! ここで目が覚めるなんてないよ! あんまりだよ!)

だが目覚めるならツナとキスした後に目覚めて欲しかったと思う佐天であった。

標的（ターゲット） 63 リボーンの強さ

佐天がツナたちの世界に来て1日が経過した。

「か、体中が……痛い……」

「だ、大丈夫!? 佐天!?!」

佐天は朝御飯を食べ終えて着替え終えた佐天であったが、昨日の修行が相当、効いたのか佐天は全身、筋肉痛になってしまっていた。ツナはそんな佐天を心配していた。

「あれだけ崖を登った上に死ぬ気丸を使ったんだ。無理もねえ。今日は修行を中止した方がいいな」

「だ、大丈夫だよ! 痛っ……!?!」

リボーンは佐天の体の状態を見てそう判断した。佐天は大丈夫だと言ったが、再び体中に痛みが走る。

「昨日も言ったが焦んな。休むのも修行の内だぞ。休み方によって修行の効率は何倍も変わってくるからな」

「わ、わかったよ……」

（俺の時とは全然、違う……）

リボーンの言葉を聞いて佐天は納得した。一方でツナは複雑な気持ちになっていった。佐天を無理させないというリボーンの判断は正しいと思っている。しかし自分が全身筋肉痛になってもここまで長くは休ませてはくれなかった。その部分がどうしても引つ掛かってしまうのである。

「お前って女の子に本当に甘いよな……」

「いやあねえだろ。あの時とは状況が違うんだ。あの時は10日でヴァリアーを迎え撃たなきゃならなかったんだからな」

ヴァリアーとの戦いでは時間がなく無理をしなければならなかった。だが今回は30日以上以上の猶予がある。だからこそリボーンは休むという選択肢を選んだのである。

「こうなることは想定の内だ。何の問題もねえ」

リボーンは佐天がこうなってしまうのも予想の範疇だったのか、全く動じていなかった。

「それにこれで存分にお前の修行をできるしな」

(もの凄く、嬉しいそうな顔してるよ！)

リボーンは凄く嬉しそうな顔をしながらそう言った。そんなリボーンの笑みを見てツナは恐怖する。

「佐天。今日は俺とツナのスパーリングを見る。それが今日の修行だ」

「ツナさんとリボーン君の？」

「お前もその内、死ぬ気の炎を使って戦うようになるからな。見といて損はないと思うぞ」

ツナたちは昨日と同じく並盛山へと向かう。

「ツナ。準備はいいか？」

「ああ」

(ツナさんとツナさんを強くした家庭教師……どうなっちゃうの……?)

超ハイパー死ぬ気モードになったツナとリボーンが向かい合う。佐天はこの戦いの行方が全く予想ができず、ドキドキしていた。

「ナッツ。形態変化」

ツナはナッツを形態変化カンビオ・フォルマさせる。ツナの両腕に噴射口が取りつけられる。

「行くぞ」

ツナが炎を逆噴射させて高速移動をするとリボーンの頭上を取るとリボーンに向かって拳を叩き込んだ。だがツナの拳はリボーンに

は当たらず、地面にめり込む。一方でリボーンはジャンプしてツナの攻撃を躲していた。

「Xカノ……っ!？」
イクス

ツナは空中にいるリボーンに向かって即座に炎の弾丸を発射しようとするが空中にリボーンの姿はなかった。

「こっちだ」

「がはっ！」

リボーンはツナの背中に蹴りを喰らわせると同時にツナを蹴り飛ばした。

(あの一瞬で……凄い……)

佐天は見えていた。リボーンがジャンプして避けると同時に少し大きめの石を拾い、その石を空中で落として足場の代わりにしてツナが振り返る前に背後を取ったのを。

「くっ！」

「ぼけっとしてんじゃねえ」

「ぐはあ！」

ツナは炎を逆噴射させて空中で体勢を整える。だが体勢を整えると同時にすでにツナの前にリボーンがいた。リボーンはツナの腹部に拳を叩き込んだ。

「まだだぞ」

「ぐはっ！」

リボーンのアッパーがツナの顎に直撃する。アッパーを喰らわせられたツナは空中に放り出される。リボーンは追撃を喰らわせる為にツナの上を取る。

「くっ！」

ツナは追撃される前に右足でリボーンに向かって蹴りを放つ。リボーンは体を捻ってツナの蹴りを躲す。

「はあ！」

「悪くねえな」

蹴りを躲した瞬間にツナはリボーンに向かって拳を放った。だがリボーンは口元を緩ませていた。流石のリボーンでもツナの拳を躲

することはできず、腕をクロスさせてツナの拳を防御していた。そしてツナの攻撃の余波でリボーンは吹き飛ぶ。

「まだまだ！」

ツナは再び炎を逆噴射させてリボーンに突っ込んでいく。だが正面から突っ込まずあらゆる方向から何度も高速移動を繰り返しながらリボーンに攻撃を放って行く。

が、

「くっ！」

ツナは焦りの表情を見せていた。なぜならリボーンは落下しながらツナの攻撃を全て躲けていたのだから。

(嘘……ツナさんの動きが見えてるの……!?)

佐天はリボーンがツナの攻撃を躲けていることに驚きを隠せないでいた。

「はあー！」

「焦りで攻撃に隙が生まれてるぞ」

ツナがリボーンに拳を繰り出す。リボーンは空中で上半身を反らして躲す。そしてツナの服の袖を右手で掴み、ツナの腕に乗る。リボーンはツナの腕を橋の代わりにしてツナの顔面に向かう。

「がはっ!?!」

リボーンはツナの頬に拳を叩き込む。そしてさらにツナの頭の上に乗る、かかと落としを喰らわせた。ツナは地面に叩きつけられる。

「ゲッホー！ ゲッホー！」

(あのツナさんがここまでやられるなんて……)

ツナは片膝をついて咳き込みながらもなんとか立ち上がる。一方で佐天は信じられないでいた。超能力者レベル5の美琴を圧倒するだけの力を持つているツナが攻撃を当てることすらできず一方的にやられていることに。

「学園都市に行ってから修行してねえから腕が落ちたと思ってたがまた強くなったようだな。だが、俺にまともに一撃与えることができるまでには、まだまだかかりそうだな」

(まだまだだって……じゃあツナさんは今までリボーン君にダメージを

与えたことがないってこと……!?)

そして佐天は理解する。自分ほとんどもない逸材の生徒になったということ。

「んじゃ。スパーリングの続き……ぞよ……」

「ぞよ?」

リボーンの語尾が変なことに気づき、佐天は違和感を覚える。

「zzz……」

「寝てる!?!」

リボーンは目を開けたまま、鼻ちようちんを作りながら眠ってしまった。

(本当にリボーン君って凄いのかな……?)

さっきまで凄いと思っていたが、眠ってしまったているリボーンの姿を見て、本当に自分は強くなれるのだろうか不安になってしまった。

標的（ターゲツト） 64 爆弾魔と天然と極限

リポーンが起きた後もスパーリングは続いた。だがツナはリポーンに一撃を見舞うことはできなかつた。そして時刻は昼になり、修行は一旦中止となる。

「んじや。今から歓迎会に行くぞ」

「歓迎会？」

「佐天の歓迎会だぞ」

「え!? 私の!？」

自分の歓迎会と知って、佐天は驚きの声を上げた。

「佐天が筋肉痛で修行が無理だとわかつた後に俺が色んな奴に声を掛けといたんだ。佐天の修行も中止になったから丁度いいと思ってな」
「え? じゃあみんな集まるってこと?」

「そうだぞ。ついでにお前が学園都市から帰ってきた記念も兼ねてな」

「俺はついでかよ……」

「とにかく行くぞ。もうみんな待ってるはずだからな」

ツナたちは山を降りてツナの家へと向かって行く。

「お久しぶりです! 十代目!」

「ようツナ」

「獄寺君! 山本!」

（あつ! この人たちも見たことある）

ツナの家の前に銀髪の青年と、黒髪で背の高い青年が立っていた。この二人はツナの友達であり、ツナの守護者である獄寺隼人と山本武

である。3人は久しぶりに会えて嬉しかったのか、パアツと表情を明るくしていた。佐天はツナの過去に獄寺と山本がいたことを思い出した。

「お？　もしかしてそっちの奴が異世界から来たって奴か？」

「うん。佐天って言うんだ」

「ぎ、佐天涙子です！　よろしくお願いします！」

「俺は山本武だ。よろしくな佐天」

「それでこっちが獄寺君」

「獄寺隼人だ。最初に言つとくぞ。もし十代目に妙な真似してみろ。その時は十代目の右腕である俺が果たすからな」

「ダ、ダイナマイト!？」

獄寺はダイナマイトを取り出すと、両手の指と指の間に挟んだ。急に獄寺がダイナマイトが出したことに佐天は驚きを隠せないでいた。「獄寺は体中の至るところにダイナマイトを隠し持ってたな。裏社会ではスモーキングボムの異名で呼ばれるんだ」

「何それ!？」

リボンが獄寺のことについて説明すると、佐天は驚きの声を上げた。

「まあ落ち着けて獄寺。せっかくの歓迎会なんだしよ」

「るせえ！　てめえは黙ってる野球馬鹿！」

「大丈夫だよ獄寺君。佐天は悪い子じゃないから」

「十代目がそう仰るなら……」

（何この温度差!?!　ツナさんと山本さんで全然、態度が違うんだけどこの人!?!）

ツナに言われて獄寺はダイナマイトを懐にしまった。佐天は獄寺の山本に対しての態度とツナに対しての態度があまりに違うことに驚いていた。

「それと佐天は新しくファミリーに入ることになったからな」

「ええ!?!　私、ボンゴレに入った覚えはないよ！」

「佐天を勝手にボンゴレに入れるなって！」

自分がボンゴレの一員としてカウントされていたことに佐天は驚

きの声を上げる。ツナはいつものリボーンの悪癖にツツコミをいれた。

「こいつをボンゴレに!? 本気ですかリボーンさん!？」

「ああ。本当だぞ。死ぬ気の炎も灯せるしな」

「なっ!？」

「お。すげえな」

佐天が死ぬ気の炎を灯せると知って獄寺は驚きの声を上げ、山本は普通に感心していた。

「やってみろ佐天」

「へっ!?! う、うん!」

急に死ぬ気の炎を灯せと言われて戸惑う佐天だったが、佐天は右手を握り締めて集中する。すると数秒後、佐天のリングに晴と雨の炎が灯る。

「晴と雨……どうやら本当みたいだな……」

「しかもお前と同じで複数の属性を持つてるのな」

「お前と同じって……」

「獄寺は嵐、晴、雨、雷、雲の5つの属性が使えるんだぞ」

「そ、そんなに!？」

7つある属性の内、5つの属性が使えると知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「ちなみに俺は雨だけ。俺はお前と違ってメインが雨だけどな。雨の炎の使い方わからないことがあったら俺が教えてやるぜ」

「ありがとうございます」

山本は自分と同じく雨の炎を持つ佐天に雨の炎の使い方を教えることを約束し、佐天は山本にお礼を言った。

「佐天はまだ死ぬ気の炎を使えるだけで、戦闘技術はこれから俺が叩き込んでいく予定だ」

「リボーンさんが!？」

「ああ。この夏休みをフルに使って立派な殺し屋ヒットマンにするつもりだ」

「殺し屋!？」

「何、考えてるんだよ！ リボーン!」

リボーンの言葉を聞いて佐天は驚きの声を上げ、ツナはツッコミをいれる。

「ん？ 沢田ではないか！」

「お兄さん！」

（あつ！ この人も！）

ツナたちの前に白い髪の長身の男が現れた。この男の名は笹川了平。ツナの同級生である笹川京子の兄であり、ツナの守護者の一人である。佐天は了平もツナの過去に出てきていたことを思い出した。

「む？ 沢田の隣にいるのは誰だ？」

「えっと。この子は佐天といって。異世界から来たんです」

「佐天涙子です。しばらくこの町でお世話になります」

「おおつ！ 聞いているぞ！ 確か……ボクシング都市から来たという奴だな！」

「学園都市だ！ 馬鹿！」

（相変わらずだよお兄さん……）

（ボクシング都市って何!? どうやってたらそんな間違い方するの!?)

学園都市ではなくボクシング都市と言った了平に獄寺はツッコミをいれる。了平の発言にツナは相変わらず了平は変わってないということを実感していた。佐天は学園都市とボクシング都市を間違えた了平に驚く。

「おおつ！ 俺としたことが自己紹介をすることを忘れてしまっていたな！ 俺の名は笹川了平！ 並盛高校ボクシング部主将だ！ 座右の銘は極限だ！」

「よ、よろしく……お願いします……」

あまりに熱い了平の自己紹介に佐天はどう対応したらいいかわからないでいた。

「佐天といつたな！ ボクシング部に入らんか!?!」

「はい!?!」

（出た！ いつものお兄さんボクシング部への勧誘!）

自己紹介して早々に了平にボクシング部に勧誘されて佐天は驚きの声を上げてしまう。ツナはいつものボクシング部への勧誘を聞いて

て不安になってしまおう。

「い、いや……私、中学生ですし……」

「だったらボクシングをやってみんか!? 安心しろ! 俺が一から教えてやる!」

(ど、どうしよう……断りづらい……)

ボクシングをももの凄く勧めてくる了平に佐天は戸惑ってしまった。

「ボクシングボクシングってうるせえんだよ芝生!」

「何だとタコヘッド!? ボクシングこそ聖なるスポーツ! ボクシングこそ極限なのだ! 貴様の軟弱な花火とは違うのだ!」

「んだと!? 上等だ! てめえのボクシングと俺のダイナマイト。どっちが強いか決着つけてやらあ!」

「望むところだ!」

「ちよっ! 獄寺君! お兄さん!」

「果てろ!」

「極限!」

ドンドンドンドンドンドン!

「ええええええ!」

ツナの制止も聞かず獄寺と了平は戦いを始めてしまう。佐天はこんな町中で戦いを始めたことに驚きを隠せないでいた。

「ハハッ! 相変わらず仲がいいよなあいつら」

「どこがですか!? おもいつきり爆発してるじゃないですか!」

(山本も変わってねえ……)

獄寺と了平が戦っているのを見ても山本は動揺するどころか笑ってしまっていた。そんな山本に佐天はツツコミをいれ、ツナは山本も変わっていないことを実感する。

「ちなみに了平はお前と同じ晴だぞ」

「性格とびつたりだよ……」

了平と自分が同じ属性と知って納得はできたが、佐天は少し複雑な気持ちになっていた。

「安心しろ。晴の炎の使い方は俺が教えてやる。俺も同じ晴属性だか

「らな」

「う、うん……ていうか止めなくていいの……？」

「いつものことだ。気にすんな」

「これもいつものことなの!？」

標的（ターゲツト） 65 歓迎会

家の中に入るツナたち。リビングに移動するとそこにはたくさん
の用意されており、ツナの仲間たちも待機していた。

「お前らも知ってると思うが今日は異世界から来た佐天の歓迎会だ。
夏休みの間、並盛にいることになったからな。みんな仲良くしてやれ
よ」

「さ、佐天涙子です！ よろしくお願いします！」

リボンが佐天のことを紹介すると、佐天は自己紹介した後に頭を
下げる。佐天が自己紹介した後、ツナたちは拍手を送った。

「んじゃ。お前ら死ぬ気で楽しめよ」

リボンがそう言うとうちの飲んでるグラスを掲げて乾杯する。

「いただきだもんね！」

「あつ！ てめえアホ牛！ 取るんじゃねえ！」

「まあ落ち着けて獄寺。まだまだあるんだからよ」

「極限に食うべし！ 食うべし！」

（どの人もツナさんの過去に出てきた人ばかり……当たり前だけど
……）

佐天はツナの仲間たちを見回しながらそんなことを思っていた。

「ツナ兄。久しぶり」

「ツナ君。久しぶり」

茶髪の少年と赤い髪の青年が話しかける。茶髪の少年はツナの家
の居候の一人であるフウ太。赤い髪の青年はシモンファミリーのボ
スの古里炎真である。

「ツナさーん！ お久しぶりです！」

「ツナ君。お久しぶり」

「ボス。久しぶり」

「久しぶりハル、京子ちゃん、クローム」

黒髪のショートヘアの少女と茶髪の少女と黒髪のパイナツポー
ヘアに髑髏の眼帯をした少女がツナに話しかける。黒髪の少女の
名は三浦ハル、茶髪の少女の名は笹川京子。ツナの同級生である。眼

帯をした少女はクローム髑髏。ツナの守護者の一人である。

「それと初めまして涙子ちゃん。私は笹川京子。よろしくね」

「え……笹川って……もしかして了平さんの……?」

「うん。お兄ちゃんだよ」

（えええ!? 全然、似てないよ!?)

あんな熱血な了平とこんなおっとりとした京子が兄妹であるという事実に佐天は驚きを隠せないでいた。

「ハルは三浦ハルっていいいます!」

「クローム髑髏。よろしく」

（ど、髑髏!? ほ、本当に名前なの!?)

元気よく自己紹介するハルに対し、クロームは淡々と自己紹介する。佐天はクロームの名前を聞いて本当に名前なのかどうか信じられず驚きを隠せないでいた。

「僕は古里炎真。よろしく」

「僕はフウ太・デツレ・ステツレ。フウ太でいいよ。よろしくね涙子姉」

「よろしくお願いします炎真さん。フウ太君」

赤い髪 of 青年と茶髪の少年が自己紹介する。炎真はシモンファミリーのボスであり、フウ太はランキングフウ太の異名を持つ情報屋である。

「んじや。余興も兼ねて隠し芸でもやるか」

「隠し芸?」

「ああ。俺が今思いついた」

「唐突だなおい!」

「つーわけだ。クローム。お前の力を見せてやれ」

「え? 私?」

「せつかくだ。佐天に見せてやれ。お前の力」

「わかった」

（なんか出てきた!?)

そう言うとクロームは持ってきたバッグの中から自身の武器である三叉槍を取り出すと、ツナたちの前に出る。

「クロームさん何する気なんですか？」

「見てればわかるぞ」

クロームが何をするのわからず佐天はリボーンに何をするのか尋ねた。だがリボーンはクロームがやろうとしていることについて語ることはなかった。するとクロームの体が死ぬ気の炎に包まれる。

「死ぬ気の炎!? 何をやって……え!」

佐天はクロームがいきなり死ぬ気の炎に使ったことに驚くが、さらに驚くべきことが起こる。

「わ、私!」

「佐天涙子です。よろしく願いします」

「こ、声まで!」

それはクロームが佐天の姿になっただけでなく声までそっくりだったからである。クロームの能力に佐天は驚きの声を上げる。

「霧の炎の特徴は構築。要するに幻を生み出すことができるんだ」

「す、凄い……」

佐天はクロームの能力に驚く。するとクロームは何もない両隣に幻覚で作った佐天を構築する。

「な、何もない所から私が増えた!」

「佐天涙子です」

「佐天涙子です」

「な、なんか怖いよ!」

何もない所から生まれた幻覚の自分が同時に喋ったことに恐怖を感じていた。

「クロームの力はこんなもんじゃねえけどな。この辺でしとくぞ」

リボーンがそう言うのとクロームは幻覚を消して、元の姿へと戻ると少しだけ頭を下げて、元いた場所へと戻って行った。

「んじゃ次にやりたい奴はいるか?」

「リボーンさん! 次は俺にやらせて下さい!」

「お。獄寺か。やる気だな」

「当然です! 守護者であるクロームが披露したというのに、十代目の右腕であるこの俺がやらない訳にはいきませんので!」

(守護者?)

守護者という聞き慣れない言葉に佐天は疑問符を浮かべる。獄寺は隠し芸の準備する為に別室へと向かう。

「ただいま」

獄寺が別室に移動した後、すれ違いで買い物袋を持ったビアンキが帰って来る。

「ビアンキさん。ありがとうございます」

「気にしないでいいのよハル」

「え? 何かあったの?」

「ビアンキさんに食後のデザートに使う材料を買って来て貰ったの。けどスーパーが混んでたから先に歓迎会を始めてていいって言ってくれたの」

「そうなんだ」

京子はビアンキが遅れて歓迎会に参加した理由を説明する。ツナは京子の説明を聞いて納得した。

「十代目! お待たせしまし……なっ!」

「しまった!」

隠し芸の準備を終えた獄寺が戻って来るが、ビアンキの顔を見た途端に獄寺は顔色を悪くしその場で固まってしまう。ツナはそんな獄寺を見て慌ててしまう。

「あ、姉貴……」

「獄寺君!」

「おい! 獄寺!」

「タコヘッド!」

「しっかり! 獄寺君!」

「ええ!? どういうこと!? 急に獄寺さんが倒れたんだけど!? とうか姉貴って……!」

獄寺は顔を真っ青にした後、腹部を抑え、そのまま床に倒れてしまう。獄寺が倒れたのを見てツナ、山本、了平、炎真は心配する。佐天は獄寺の身に何が起きたのかわからず驚きの声を上げてしまう。

「獄寺とビアンキは姉弟だぞ」

「え!? そうなんですか!？」

「ええ。そうよ」

リボーンが獄寺とビアンキが姉弟であるということ話を話すと佐天はビアンキに本当なのかどうか確認した。

「にしても私に会えたのがそんなに嬉しかっただなんて」

「いや! 違うと思いますけど!」

「待ってなさい。今、私がとびつきり美味しいデザートを作っただけあげるわ」

勝手に勘違いしたビアンキは台所へデザートを作りに行ってしまう。

「ていうかこれどういうことなの!？」

「獄寺は幼い頃にビアンキのポイズンクッキングを食べさせられてな。その恐怖が染み付いちまって、ビアンキの顔を見るだけで腹痛を起すようになったんだ」

「悲惨過ぎるよ!」

あまりにも悲惨過ぎる獄寺の過去をリボーンから聞いて、佐天は驚きの声を上げると同時に同情する。

「ちなみに隼人兄の恐怖するものランキングでビアンキ姉はぶつちぎりの1位なんだよ」

「何そのランキング!? ていうか本でかつ!」

フウ太が巨大な本を佐天に見せながらそう言うと、佐天はあまりの特殊なランキング、いきなり巨大な本が出てきたことに驚きを隠せないでいた。

「とうか銃や核兵器よりも上じゃん!」

佐天がフウ太のランキングブックの内容をよく見ると、銃や核兵器よりも上の順位にビアンキの名前があることに気づいた。

「これで獄寺の隠し芸は終わりだな」

「いや! これ隠し芸じゃないでしょ!」

獄寺の隠し芸がビアンキを見てぶっ倒れるものだと言い切るリボーンに佐天はツツコミをいれる。

しつかりツツコミが板についた佐天であった。

標的（ターゲツト） 66 死ぬ気で

獄寺が倒れてしまうというハプニングはあったが歓迎会は無事、終了する。

そして時は一気に過ぎ、次の日の朝。並盛山。

「佐天？ 大丈夫？」

「完璧に治るとはまでは言いませんけど、昨日よりは大丈夫です。動けます」

ツナが佐天の体の状態を尋ねると佐天は大丈夫だと答える。昨日の休養とリボーンが指示した筋肉痛を早く治す方法を実践したことによって佐天の体は良くなっていた。

「そんじゃ。始めるか」

リボーンは死ぬ気丸の入った瓶を佐天に向かって投げる。佐天は瓶をキャッチすると死ぬ気丸を1錠取り出して飲み込んだ。

「あれ？」

死ぬ気丸を飲んで死ぬ気モードとなった佐天であったが、死ぬ気モードになった瞬間あることに気づいた。

「きつくない……」

初めて死ぬ気モードになった時よりも体への負担が無くなっていたのである。勿論、全く負担が無くなった訳ではない。だが明らかに前よりも体にかかる負担が軽減されているのだ。

「修行の成果だな。前よりも体力がついたことで体への負担が軽減されたんだ」

「す、凄い……たった1日修行しただけなのに……」

「それぐらいお前が真剣に修行に取り組んだってことだ。誇っていいぞ」

「リボーン君……」

「まあ一番、凄いのはお前とこの修行をやらせた俺だけだな」

「結局、お前の自慢かよー！」

せつかくいい雰囲気だったのにも関わらず、最後の最後で自分の自慢をしていい雰囲気を台無しにするリボーンにツナはツツコミをいれる。

（前よりも登るのが楽だ……）

佐天は崖を登りながら前よりも崖を登るのが楽になっているということを自覚する。

「前よりも登るペースが上がってんな」

「ああ」

リボーンと超^{ハイパー}死ぬ気モードとなったツナが崖を登る佐天を見上げながらそう呟いた。

（いける！…この調子なら！）

佐天は崖を登りながら今の自分ならこの崖を登り切ることができると確信する。

「へっ……!?!」

順調に崖を登っていく佐天。しかしここで額に灯っていた死ぬ気の炎が消え、死ぬ気モードが解けてしまう。

（力が抜けて……）

死ぬ気モードが解けたということに自覚した瞬間、力が抜けて右手で掴んでいた岩が崩れて崖から落ちてしまう。

「大丈夫か？ 佐天？」

「は、はい……」

佐天が落ちたのを見た瞬間、即座にツナは炎を逆噴射させて一瞬にして移動して佐天をキャッチすると、そのままゆっくりと下まで降りしていく。

「登り切る前に死ぬ気モードが解けたか」

「どういうこと？」

「今のお前じゃ死ぬ気モードは5分しかもたねえんだ」

「え!? じゃあこの崖を5分で登らないといけないの!？」

「そう焦んな。今までは死ぬ気モードが切れる前に落ちてたのが死ぬ気モードが切れるまで崖にしがみついているようになったんだ。それに登るペースは上がってる。死ぬ気でやりやこの崖を登るきるまでそこまでの時間はかかんねえはずだぞ」

「じゃあ……」

「ああ。お前は確実に成長してるぞ」

リボンが口元を緩ませながらそう言うと、佐天は嬉しそうな顔をしていた。今まで頑張っても頑張っても能力を開花することができず、成長が止まっていたかと思っていた。だが今はあの頃と違い、確実に成長している。佐天にとってこれ程、嬉しいことはなかった。

「そんじゃ修行の続きだぞ」

「うんっ！」

成長したとわかった佐天はここからさらにやる気を見せる。だがこの崖を登ることは容易ではなかった。それでも着実に登るペースは上がっていた。

「はあ……はあ……」

「次がラストだな」

時刻の夕方を回っていた。一昨日よりも体の負担と疲労は軽減されているものの、それでもかなり疲労が佐天の体に蓄積されていた。リボーンは佐天の顔色から次で今日の修行を最後にすることを決意する。

「はあ……はあ……」

死ぬ気モードになって崖を登る佐天。疲労が蓄積されている為、最初よりも登るペースは遅くなっていた。

「あつー！」

ここでまた死ぬ気モードが解けてしまう。死ぬ気モードが解けてしまったことで佐天の力が元の状態に戻ってしまう。

(死ぬ気モードが解けた……もうダメだ……)

佐天は死ぬ気モードが解けたことによつてこれ以上は登りきれないと諦めかけてしまう。

その時だった

『死ぬ気でやりやこの崖を登るきるまでそこまでの時間はかかんねえはずだぞ』

(死ぬ気で……)

ここで今日、リボーンが言ったあの言葉が思い浮かんだ。

(そうだ……死ぬ気モードが切れたからつて登れなくなった訳じゃない……死ぬ気でやれば私だって……)

諦めかけた佐天であったが、ここから自力で登ることを決意する。

「死ぬ気モードが切れたのに……」

「それでいいぞ佐天」

死ぬ気モードが解けてもなお諦めず崖を登る佐天にツナは驚きを

隠せないでいた。リボーンは口元を緩ませていた。

佐天は死ぬ気モードが切れてからも少しずつ崖を登って行く。

「わっ！」

佐天は足を滑らせてしまい右手だけが崖に置かれている状態になっってしまう。

(そうだ……ツナさんだっであそこまでの強さを手に入れるまでにすごい修行したんだ……私だっ！)

絶体絶命のピンチの佐天であったが、まず左手を置く場所を見つけ、その後に両足を置く場所を見つけて再び崖を登り始める。

死ぬ気モードが解けてから15分。

「後、ちよつと……」

佐天は崖を登るきるまで後、数メートルの地点まで辿り着いていた。

そして

「っ、着いた！」

佐天はついに崖を登り切ることに成功する。崖を登り終わると佐天は地面に大の字になって倒れる。

「あの状態から……」

死ぬ気モードが解けた状態から登り切ったことにツナは驚きを隠せないでいた。リボーンは口元を緩ませていた。

「これで修行の第2段階は終了だぞ」

標的（ターゲツト） 67 プレゼント

見事、第2段階をクリアした佐天。そしてツナたちは今、
「もうお腹ペコペコだよー!」

ラーメン屋の前に来ていた。修行でお腹ペコペコになっていた佐天は楽しみで仕方なかった。

「本当に何でも食べていいのリボーン君!？」

「ああ。俺の奢りだ。今日は修行、頑張ったからな。好きだけ食べ」「やったー!」

（俺の時はこんなことなかったのに……本当に女の子に甘いな……）

好きなだけ食べれると知って佐天は喜びの声を上げる。一方でツナはいつも修行を頑張っているのにも関わらずこのようなご褒美はなかったことを思い出す。

（いや……よくよく考えたらあつたな……あつたけど……）

ツナは普段頑張っているからと言われてリボーンに寿司屋に連れて行かれたことを思い出す。だがリボーンは食い逃げし、挙げ句の果てにバイトする羽目になってしまったのである。

「どうしたんですかツナさん？　なんか浮かない顔してますけど?」

「いや……本当にリボーンの奢りなのかどうか疑ってて……」

「何、言ってるんだ。生徒が頑張ったんぞ。これぐらいしてやんのは教師として当たり前のことだろ」

「食い逃げして、俺にバイトさせた奴がよくそんな言葉を吐けるな!」
「食い逃げって……」

まさかリボーンが食い逃げをするとは思ってもみなかった為、佐天は驚きを隠せないでいた。

「いいかツナ、佐天。食い逃げなんてのは序の口。マフィアは口では言えねえようなことを腐る程やるんだ。これくらいビビってんじやねえぞ。おもいつきりやれ」

「やるわけないだろ!　というか佐天をマフィアにするな!」

「本当に奢りなんだよね!」

リボーンの言葉を聞いてツナはいつものようにツツコミをいれ、左天は本当に食い逃げをするのではないかと不安になってしまった。

「ともあれ3人は店内へと入る。」

「おや?」

「え!」

「お前は……」

カウンターに座ろうとしたツナたち。ツナたちは座ろうとした席の隣に緑色の着物に丸眼鏡をかけた白髪の中年のおじさんが座っていた。目の前の男を見てツナとリボーンは驚きを隠せないでいた。

「ツナさんの知り合いですか?」

「いや……まあ……知り合いつていうか……」

ツナはどう答えていいのかわからず困惑してしまう。この男の名はチエツカーフェイス。トウリニセツテ 7・トウリニセツテ を作った人物である。7・トウリニセツテ とはボ

ンゴレリング、マーレリング、最強の赤ん坊アルコバレーノのおしゃぶりの各7つのリングのことをいう。7・トウリニセツテ はツナたちの世界の礎でありチエツ

カーフェイスは7・トウリニセツテ の管理者であった。その正体は人類が生まれる前から生きている特別な種族の生き残りであり、リボーンを赤ん坊の姿にし7・トウリニセツテ の一角である最強の赤ん坊アルコバレーノのおしゃぶりを護る為の人柱にした人物である。

「初めて見る子もいるね。僕は川平。ただのラーメン好きのおじさんだよ」

「佐天涙子です」

互いに自己紹介するチエツカーフェイスと佐天。チエツカーフェイスはいくつもの姿を持っている。チエツカーフェイスという名前も川平の名前も本当の名前なのかどうかすら不明。彼の本当の正体を知っているのはチエツカーフェイス本人だけである。

ツナはチエツカーフェイスの横に座り、ツナの横に佐天が座り、左天の横にリボーンが座る。ツナたちは自分の食べたい物を注文した。

「あの……何でここに?」

「ラーメンを食べに來ただけだよ。今日は樂々軒が定休日なんでね」

「え……？」

「ラーメンは好物だね。僕だって君たちと同じ人間なんだ。そこまで驚くことはないだろう」

（そういや10年後のイーピンがいつも川平のおじさんにラーメン届けてたっけ……10年後の世界で会った時もラーメン食べたし……）

ツナは10年バズーカで登場した10年後のイーピンが川平のおじさんにラーメンを届けないといけないのにといつも言っていたこと、10年後の世界でもラーメンを食べていたことを思い出していた。

（かなりの疲労にあのリング……成る程。修行しているのか……）

チエツカーフェイスはラーメンを食べながら横目で佐天のことを見る。そして佐天が修行しているということ推測する。

「私、お手洗いに行つてきます」

そう言う佐天は、お手洗いに行く為にこの場から去ってしまう。

「彼女は君の生徒か？」

「まあな」

「そうか」

「にしてもまさかお前とまた会うことになるとはな」

「私に復讐でもするか？」

「せっかく呪いが解けて長生きできるようになったのにそんな真似するわけねえだろ。俺がお前に勝てねえことぐらいお前だってわかってんだろ」

佐天がいなくなつてチエツカーフェイスは少しだけ口調を変えながらリボーンと話す。

「それに呪いが解けようと俺がやることは変わらねえ」

「君らしいね」

そう言うチエツカーフェイスは懐に手を入れると、懐から2つのリングを取り出した。

「プレゼントだ。これを彼女に渡しておいてくれるかな？」

「こ、これって……!？」

「私がかつて作ったリングだ。といつても失敗作だがね」

「失敗作って……」

「失敗作といつても使えないわけじゃない。おしゃぶりに代わるものを作れないかと試行錯誤した時にできた副産物だよ。ランクでいえばAランクのリングとSランクのボンゴレリングの中間に位置する代物だよ」

「代わるものって……」

「私とて色々と考えてたのだよ。おしゃぶり以外に7^{トウリニセツテ}を維持する方法がないかとかね。だがこのリングは何の意味のない物となつてしまった」

「でも何でそんなリングを佐天に？」

「君のお陰で誰も犠牲にすることなく7^{トウリニセツテ}を維持する方法を見つけられたからね。そのお礼だよ」

そう言うのとチェツカーフェイスは席を立ち上がる。

「ご馳走様。彼女によろしくと伝えておいてくれ」

チェツカーフェイスはリングをテーブルの上に置いて、そのまま会計を済ませて店を後にした。

「あれ？ 川平さんは？」

「食べ終わったから帰ったぞ」

「え？ そうなの？」

「うん。それと佐天。これ」

「へっ……!!? / / /」

ツナはチェツカーフェイスが置いていった2つのリングを掌に乗せて佐天に見せた。リングを見た瞬間、佐天は顔を赤くする。

（え、ええええええ!!? / / /これって……!!? / / /）

ツナがいきなりリングを見せて来た為、佐天はプロポーズだと勝手に勘違いしてしまう。

「これチェ……川平のおじさんが……って佐天!?!」

「ツ、ツナさんが……ツナさんが……ツナさんが……!!? / / /」

「ちよつと！ 佐天!?! 大丈夫!?!」

「本当にダメツナだな……」

顔を真っ赤にし頭から煙を出している佐天を見て、ツナは慌ててしまふ。リボーンはこの光景を見て、そう眩くだけであつた。この後、誤解は解けました。

標的（ターゲット） 68 第3段階

次の日。

「そんじや。今日から修行の第3段階に入るぞ」

修行はとうとう第3段階へと移る。第3段階と聞いて佐天に緊張が走る。

「第3段階は今まで以上にきついぞ。色々と覚えることがあるからな。覚悟はできてるか？」

「勿論！」

「いい返事だぞ」

「それで第3段階は何をするんだよ？」

佐天はリボーンの問いかけに対して迷うことなく返事をした。ツナは第3段階が何なのか気になった為、リボーンに尋ねる。

「第3段階はスパーリングだぞ」

「スパーリングって……戦うの？」

「そうだぞ。スパーリングをしながら死ぬ気のコントロール、戦闘技術の会得、死ぬ気の炎を灯しながら戦えるようになってもらうからな」

「修行の内容はわかったけど、スパーリングって誰とするの？」

リボーンは修行の第3段階の詳細を説明する。佐天はスパーリングする相手がわからず疑問符を浮かべていた。

「お久しぶりです沢田殿」

「バジル君!？」

ツナたちの前に碧眼の瞳に亜麻色の髪 of 青年が現れる。この青年の名はバジル。ボンゴレ門外顧問C E D E Fに所属している男である。

「こいつがお前のスパーリングの相手のバジルだ」

「さ、佐天涙子です！ よろしくお願いします！」

「拙者はバジルといいます。よろしくお願いします佐天殿」

「拙者!？」

自己紹介するバジル。この時代に自分のことを拙者ということに佐天は驚きを隠せないでいた。

「はい。親方様から日本では自分のことを拙者と呼ぶのが普通だと教わりましたので」

「それ間違った知識ですよ！　というかそんな変なことを教える親方様ってどんな人なんですか！」

「ツナの親父だぞ」

「ええええええ!?!」

バジルに間違った知識を教えたのがまさかツナの父親とは思ってもみなかった為、佐天は驚きを隠せないでいた。

「え!?!　でもツナさんのお父さんって海外で石油を掘ってるって……」

「違えぞ。ツナの親父の家光はボンゴレ門外顧問C E D E Fのボスだ。そしてバジルは家光の部下なんだぞ」

「え!?!　じゃあバジルさんもツナさんのお父さんもボンゴレの人なの!?!」

「そいつは違うぞ。2人はボンゴレの人間じゃねえ」
「で、でも……ボンゴレって今……」

ボンゴレという名のつく組織に属しているのにも関わらず、ボンゴレの人間ではないというリボーンの発言がわからず佐天は困惑してしまう。

「C E D E Fは平常時においてはボンゴレとは別の組織なんです。ですがファミリーの非常時においてはボンゴレを支えるという組織でもあるんです」

「な、なんか変わった組織なんですね……」

バジルからC E D E Fがどんな組織なのかどうか説明する。バジルの説明を聞いて佐天はC E D E Fが少し特殊な組織であることを理解する。

「そしてC E D E Fはボスに次ぐ権限を発動できるんだぞ」

「ボスに次ぐって……じゃあツナさんのお父さんって……!?!」

「ボンゴレのNo. 2だぞ」

「えええええ!? N.O. 2!」

ツナの父親の家光がボンゴレのN.O. 2だと知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「ツナさんのお父さんがそんなに凄い人だったなんて……」

「いやー……ただのダメ親父だよ……」

「え、でも……そんなことはないんじゃない……」

「数年ぶりに帰って来て、一番最初の会話が朝の4時に俺の部屋に入って来て『ツナ、飯取りに行かねえか?』だからね」

「か、変わってますね……」

「後、小さい頃に父さんに何の仕事してるのって聞いたたら、世界中を飛び回って交通整理してるって言ったからね……」

「……」

部下であるバジルに間違った知識を教えたり、息子であるツナにあまりにぶつとんだ発言をしたりする家光に佐天は何も言えなくなっ
てしまっていた。

「そんじゃバジル、佐天に死ぬ気のコントロール、戦闘技術、死ぬ気の炎を灯しながらの戦い、後、雨属性の炎について教えてやってくれ。メイソんじゃねえが佐天は雨の炎を持ってるんだ」

「わかりましたリボンさん」

リボンがバジルに佐天に教えて欲しいことを伝えるとバジルは了承する。

「じゃあさっそく修行を始めましょう」

そう言うバジルは目を閉じて深呼吸する。数秒後、バジルの額に雨属性の炎が灯り、瞳の色も青くなる。バジルはこの2年で死ぬ気丸なしで死ぬ気モードになれるようになった。さらに超^{ハイパー}死ぬ気モードにも自力でなれるようになってる。

「ええええ!? 死ぬ気の人相手なの!」

「ま、まあ頑張ってる……佐天……」

まさかバジルが死ぬ気モードになれるとは思ってもしなかったの
で佐天は驚きの声を上げた。ツナは過去にバジルとスパパーリングし
たことを思い出しながら、佐天に同情していた。

「お前もつと頑張らねえといけねえんだぞ」

「え……!?!」

「今まで佐天のサポートに徹しなきゃいけなかったからな。だが今はその必要はなくなった。これで思う存分修行に専念できるからな」

「ひいひいひい!」

不敵な笑みを浮かべて、腕をポキポキと鳴らしているリボーンを見てツナは恐怖するのだった。

標的（ターゲット） 69 佐天の強み

それぞれ違う場所に別れて修行することになった。

「スパーリングに入る前にまずは雨属性の炎について説明します。アルフィン！」

「イ、イルカ!？」

バジルは自身の指に装着していたアニマルリングから
デルフィン・デイ・ビオツジャ
雨 イルカ のアルフィンが飛び出して、宙を舞う。

（イルカって海の生物だよね!？ 何で空飛んでるの!？）

海の生物であるイルカが地上に出てくるだけでも驚きなのにさらに空を飛んでいる為、佐天は驚きを隠せないでいた。

「アルフィン！」

そう言うのとバジルは近くにあった石を上へ投げる。するとアルフィンはバジルの投げた石に向かって雨の炎を放った。すると雨の炎を浴びた石は落ちてくることなく、空中で動きを止める。

「え!？ 石が!？」

「雨属性の炎は沈静。人や物体の動きを停止状態に近づけたり、死ぬ気の炎を相殺したりできるんです」

「す、凄い……」

佐天はバジルの説明を聞いて、雨属性の炎の凄さを理解した。バジルのアルフィンをリングの中に戻す。

「それではまずは死ぬ気のコントロールから始めましょう。佐天殿。死ぬ気モードになって下さい」

「はい」

佐天はリボンにあらかじめ貰っておいた死ぬ気丸の入った瓶を取り出し、死ぬ気丸を瓶から1錠を飲み込んで死ぬ気モードになる。

「とりあえず拙者におもいつきり打ち込んで来て下さい」

「え……は、はいー」

おもいつきり打ち込んで来いと言われて迷う佐天であったが、バジルに何か考えがあるのだと思い、佐天は攻撃することを決める。

「やあー！」

佐天は助走をつけてバジルに向かっておもいつきり拳を放った。バジルは左手の掌で佐天の拳を受け止めた。

「佐天殿。死ぬ気になり過ぎです」

「え？」

「佐天殿の死ぬ気モードが5分しかもたないのは気力を常に全力で放出しているからなんです。本当に死ぬ気になるのは一瞬でいいんです」

「つまり死ぬ気になるのは攻撃の寸前から攻撃を当てるまでの時間だけではないってことですか？」

「そういうことです。それができるようになれば長時間、死ぬ気モードで戦えるようになれます」

そう言うとバジルは地面に落ちていた小石を拾って、佐天の後ろの崖に向かっておもいつきり投げる。石は崖にめり込む。そして時間差で崖に亀裂が入り崖が崩れて、崖に大きなクレーターができる。

「が、崖が……!?!」

「佐天殿も死ぬ気をコントロールできるようにになれば、これぐらいできるようになりますよ」

（こ、これくらいって……）

崖に大きなクレーターを空けることを当たり前のようにバジルに、佐天は驚きを隠せないでいた。

「とりあえず6分を目標に頑張りましょう。佐天殿」

「は、はいー！」

ここから佐天とバジルはスパーリングを始めていく。

（全く攻撃が当たらない……）

スパーリングを始めて1時間。佐天は本気で挑んでいく。だがバジルは佐天の攻撃を全て躲す、または全て受け止めていた。佐天は攻撃が全く当たらないことに焦りを感じていた。

（驚きました……この短時間でわずかながら死ぬ気をコントロールし始めている……）

バジルはスパーリングをしながら、佐天がわずかであるものの死ぬ

気をコントロールをし始めていることに驚きを隠せないでいた。

「やりますね佐天殿」

「いや……全然、攻撃が当たってないんですけど……」

「そうではなく。この短時間でわずかにですが死ぬ気をコントロールし始めていることにですよ」

「死ぬ気を……?」

「はい。死ぬ気のコントロールは拙者や沢田殿でもかなりの時間を要しましたから」

「ツナさんでも……」

ツナでも時間がかかったものを自分がそれよりも早く、死ぬ気のコントロールをものにしているという事実佐天は驚きを隠せないでいた。

「どうやら佐天殿は死ぬ気の精密なコントロールするのに長けているようですね」

「それって何かいいことがあるんですか?」

「死ぬ気をコントロールできるということは死ぬ気の炎をコントロールする際にも役に立ちます。死ぬ気の炎を精密に操作できれば状況に応じて炎の形態を変化させて戦うこともできます。たとえば炎を針状に変化させて貫通力を高めたりとか」

「な、成る程……」

「とりあえずは死ぬ気を完璧にコントロールできるようになりましたよ」

「は、はいっ!」

ここからさらに佐天はバジルとのスパーリングを続けて行く。

標的（ターゲット）70 ボンゴレの歴史

佐天はバジルとのスパーリングを続けて行く。

そして2時間後

「はあ……はあ……」

「そろそろお昼ですし休憩にしましょう佐天殿」

（凄い……バジルさん息一つ乱していない……）

スパーリング中、バジルは反撃はしなかったものの佐天の攻撃を全て躲していた。にも関わらずバジルが疲れた様子を一切、見せていないことに佐天は驚きを隠せないでいた。

佐天とバジルはスパーリングをしているツナとリボーンの元へと向かう。そこではボロボロのツナと余裕の笑みを浮かべながら戦うリボーンがスパーリングを続けていた。

「前から思ってたんですけどリボーン君って凄いですね……」

「リボーンさんは世界最強の殺しの腕を持つ殺し屋ですから」

「せ、世界最強!?!」

「はい。さらにボンゴレの現ボス。神の采配とも呼ばれるボンゴレⅨ世（ノーブ）が最も、信頼している殺し屋（ヒットマン）でもあります」

（リ、リボーン君ってそんなに凄かったんだ……）

前からリボーンが凄い人物であるということは知っていたが、まさかそこまでの人物だったとは思ってもいなかった為、佐天は驚きを隠せないでいた。

（というか世界最強の殺し屋（ヒットマン）に弟子入りした私って……）

一番、最初に弟子入りした相手が（白井黒子）大能力者や超能力者（御坂美琴）ではなく世界最強の殺し屋（ヒットマン）であるリボーンであることに佐天は今さらながら違和感を覚えていた。

「お。お前ら休憩か？」

「はい。もうお昼ですので」

「そうか。俺たちもお昼にするか」

お昼と知ってリボーンはスパーリングを中止してお昼にすることにする。

「すみません佐天殿。拙者まで」

「大丈夫ですよ。たくさん作ったので」

昼食は佐天が朝、作った弁当であった。バジルは自分で作ったおにぎりを持って来てはいたが、それだけでは足りないと思いい佐天は自分の作った弁当をバジルに譲ったのである。

「そっちの修行はどうだ？」

「わずかですが佐天殿は死ぬ気をコントロールし始めていきます」

「え!? もう!?」

「はい。この調子で行けば今日中には死ぬ気をコントロールできると思います」

「やるじゃねえか佐天」

「うん! 本当に凄いや佐天!」

「えへへ」

佐天はリボーンとツナに誉められて頬が緩みまくっていた。

「なんだか懐かしいですね。死ぬ気の零地点突破の修行をした時のことを思い出します」

「そうだね」

「死ぬ気の零地点……?」

バジルとツナはリング争奪戦でXANXASに勝つ為に修行したことを思い出していた。佐天は死ぬ気の零地点突破という聞いたことのない単語を聞いて疑問符を浮かべていた。

「死ぬ気の零地点突破。初代ボンゴレのボスボンゴレI世フリーモが編み出した技にしてボンゴレの奥義だ」

「奥義!?」

「いつとくが死ぬ気の零地点突破はお前にはできねえぞ」

奥義と聞いて興味を示したのか佐天は目を輝かせる。リボーンは即座に無理だということを伝える。

「えー! そんなのやってみないとわかんないじゃん!」

「わかるぞ。俺やバジルにだって無理だからな」

「え……!?!? そうなの……!?!?」

「この技はボンゴレの血を継ぐものにしかできない技だからな。それにこの技ができたのは歴代ボンゴレの中でもツナを除けば初代だけだ」

「そ、そんなに凄い技なんだ……」

リボーンから死ぬ気の零地点突破の詳細を聞いて、凄い技だということを理解する。

(まあ……9代目もできるんだがな……)

正確に言えば死ぬ気の零地点突破ができるのはツナと初代と9代目の3人である。だがこれはボンゴレの超機密事項の一つである揺りかごの話に触れてしまう為、リボーンは話さなかった。揺りかごとは10年前に起きたボンゴレ史上最大のクーデターのことである。クーデターの主犯が9代目の義理の息子、XANXASだという恐ろしい事実は機密とされ、この揺りかごのことを知るのにはボンゴレの上層部とこの時、戦った超精鋭のみである。9代目はこの揺りかごでXANXASに死ぬ気の零地点突破を使いXANXASを封印することによって事件を収めた。

「そんな技を開発する初代って凄いんだね……」

「初代は歴代のボンゴレの中で最強のボスなんですよ」

「歴代最強って……ツナさんよりも?」

「さあな。何百年も前の人間だからな」

「あつ……そつか……」

「会ったことはあるんだけどね」

「あるんですか!?!」

「会ったっていうか……なんというか……」

何百年も前の人物と会ったことがあると聞いて、佐天は驚きを隠せないでいた。ツナは未来の白蘭との戦いでボンゴレリングに宿っていた初代の意思と会ったことがある。

「でも初代がボンゴレを作ったせいでツナさんがマフィアのボスに……」

初代が凄い人物であるということ佐天は理解した。だがツナが

マファイアのボスになるきっかけを作った元凶である為、佐天の初代への印象が悪かった。

「それは違いますよ佐天殿。ボンゴレは元々は自警団だったんですよ」

「え!?! そうだったの!?!」

「初代の住んでいた街は警察もロクに機能しない街で好き放題荒らされてたんだ。初代と幼馴染みのG、そして後のシモンファミリーのボスになるシモンⅡコザアードは自分たちの街を護る為に自警団を立ち上げることを決めたんだ。それがボンゴレの起源だ」

「そうだったんだ……」

リボーンがボンゴレの起源を話す。佐天はボンゴレの起源が思っていたのと違っていた為、驚いていた。

「ちなみにシモンⅡコザアードは炎真の祖先なんだよ」

「炎真さんってボスだったんですか!?!」

ツナが炎真がシモンⅡコザアードの子孫であるということをお教えると、佐天は炎真がシモンファミリーのボスだということを理解し驚きの声を上げる。

「ちなみにこれが初代のファミリーだぞ」

「わっ! ツナさんにそっくり!」

リボーンはかつて戦ったD・スパーダが持っていた懐中時計を見せた。そこには初代と守護者の人たちの写真があった。佐天はボンゴレ1世を見てあまりにツナとそっくりだった為、驚きの声を上げていた。

（というか他の人も似すぎじゃない……!?!）

佐天は初代以外のメンバーもツナの仲間と顔がそっくりだということに驚いてしまっていた。

（え!?! この人って!?!）

佐天の視界に一人の男性が写る。そして同時に思い出す。ツナの記憶でこの男性とツナが戦っていたことを。

（な、何で何百年も前の人とツナさんが!?!）

佐天はわからなかった。ボンゴレ創世期の人間がなぜこの時代ま

で生きているのかということが。

「そいつの名はD^{デイモン}・スパード。ボンゴレをマフィアにした元凶だ」

「この人が……!?!」

リボーンは佐天がD^{デイモン}・スパードを見て驚いていることに気づき^{デイモン}Dのことを説明する。佐天はD^{デイモン}がボンゴレをマフィアにしたということを知って、驚きを隠せないでいた。

今、語られるボンゴレの歴史。

標的（ターゲット） 71 愛

「D・スピード。初代ボンゴレファミリーの守護者の一人だった男だ」

「前に獄寺さんも言ってたけど守護者って何？」

「ボンゴレにはボスを護る6人の人物がいるんです。嵐の守護者、雨の守護者、雷の守護者、晴の守護者、雲の守護者、霧の守護者。そしてボスである大空という風に」

「それって死ぬ気の炎と同じ……」

「はい。死ぬ気の炎の属性はボンゴレの守護者からきているんです」

「そうだったんだ……」

バジルはボンゴレの守護者について説明する。佐天はバジルの説明でボンゴレ守護者のことについて理解する。

「Dは元々、貴族だった。だがDは墮落した貴族を嫌っていた。たとえ地位がなくなるとも優秀な人物こそ社会の中心に立つべきだと考えていたんだ」

リボーンはボンゴレをマフィアにした男、D・スピードのことに
ついて語る。

「そんなDの考えに公爵の娘であるエレナは賛同した。その写真に写っている女性がエレナだぞ」

「この人が……」

佐天は再び写真に写っていた写真を見る。そしてD・スピードの横にいる女性がエレナだということを理解する。

「Dは愛するエレナの勧めでボンゴレファミリーに入った。そしてDもボンゴレファミリーの一員となり民衆を護る為に戦った。そんなボンゴレの一員であることにDは誇りを持っていた。そんなDをエレナも愛していた」

「じゃあどうして……」

「初代とDが対立が起きたんだ。初代はボンゴレがそのまま戦いを続

ければは独裁者になってしまおうと考え、戦力を減らす案を提案した。
Dは初代の案に反対した。勝ち続けることがボンゴレの存在価値であるとな。最終的にボンゴレは戦力を減らすことになった。だがこの選択がボンゴレをマフィアになるきっかけを生んだんだ」

「どういうこと？」

「戦力を減らしたことで隙が生まれ敵対勢力に襲撃を受けた。この時にエレナは命を落としたんだ」

「え……!?!」

エレナが命を落としたと知って、佐天は驚きのあまり衝撃を受けていた。

「エレナは死ぬ前にDに告げた。これからも弱き者の為に、ボンゴレの為に力を振るってくれてっつてな。だがDはエレナの言葉をはき違えちまった。名を聞いただけで震え上がる程のボンゴレを創ることをな」

「そ、そんな……」

「ここからDの暴走が始まった。ボンゴレを強くする為にボンゴレを弱くする恐れがある者たちを次々に殺していった。さらに奴は自分から肉体を捨てて他人に憑依することによって生き続けた。ボンゴレを強くする為にな」

「ひよ、憑依って……!?! そんなことが……!?!」

佐天は信じられないでいた。人間が憑依し生きることができるといふ事実には。

「そして軟弱な思想を持つツナを殺す為に幻術で家光に成り済まして炎真の家族を皆殺しにした。ツナに憎しみを向けさせる為にな」

「ひ、酷い……」

Dのあまりの所業と炎真の悲惨過ぎる過去に衝撃を受けてしまっていた。

「最終的にボンゴレはDの思惑通り裏社会最強の組織になった。最強になったことで無駄な争いは無くなり、無駄な血が流れること無くなった」

「でも……その為に多くの人を殺して……そんなの間違ってるよ

……」

「その通りだ。ボンゴレを最強にする為に幾人もの人が犠牲になった。だが今のボンゴレが生まれたのは愛する者を想う気持ちから生まれた。それだけは紛れもない事実だ」

「……」

リボーンの言葉にツナたちは何も言えず、黙ってしまっていた。

「愛があるから憎しみが存在する。そして憎しみによって戦いが生まれ、戦いが起きる度に憎しみは増え、また戦いが起きる。負の連鎖つてやつだ。これはマフィア界だけじゃねえ。かつての日本や今の世界にも言えることだ」

日本は今でこそ戦争が無くなり平和となった。だがその平和の為に多くの人たちが犠牲となった。そして世界では今まだに戦争をしている国はたくさん存在する。

「初代はボンゴレが勢力を拡大すれば憎しみによって多くの人間が死ぬことを予見していたんだろうな。だから平和路線に切り替えることを決意した。だがその考えによって憎しみが生まれ、初代の思い描くボンゴレは無くなっちゃった」

「あんまりだよ……初代はただ自分たちの街を護りたかっただけなのに……」

「誰かを護る為に人を傷つける。そこでどうしても憎しみが生まれちゃう。たとえばDが暴走しなくてもDのような奴が現れ、結局ボンゴレは今のようなマフィアになっていたのかもしれないねえな」

（未来のツナさんが殺されたって聞いた時……私は頭が真っ白になった……もし本当にツナさんが殺されたら私も……）

愛する者を想う気持ちと聞いて佐天はツナがもし殺されたら、自分もDのようになるのではないかと思うのであった。

標的（ターゲット） 72 不安

昼食を食べ終えたツナたち。

「そういえば言い忘れてたがお前は今日から風紀委員に復帰な」
ジャッジメント

「はあ!? 何だよそれ! 聞いてないぞ!」

「佐天の修行が第3段階に入ってお前のサポートがいらなくなったからな。今後は修行と風紀委員を両立させるからな。じゃちよつと行ってこい」
ジャッジメント

「おつかいを頼むみたいなノリで言うな!」

学園都市異世界に行くのをちよつとと言うリボーンにツナはツツコミをいれる。

「噂でしか聞いていないのですが。佐天殿のいた世界は超能力が使える人たちがいる世界だそうですね」

「正確に言えば超能力者を育成してる都市ですよ。最初に言っておくと全員が全員、超能力を使える訳じゃないですよ」

「え? そうなんですか?」

「はい。人口は230万人いますけど、超能力が使えない人の方が多いぐらいですから。能力者の中でも最高ランクの超能力者は7人しかいないんです」

「成る程」

佐天から学園都市の詳細を聞いて、バジルは納得する。

「レベル5ですか……そんなに強い人たちがいるんですか。是非とも手合わせしてみたいものです」

「いや……バジルさんはすでに超能力者クラス……下手すればそれ以上……」

バジルは学園都市の最高ランクの超能力者と戦ってみたいと思っていた。一方で佐天は理解していた。バジルが超能力者に匹敵、あるいはそれ以上の強さを持っているということに。バジルは超能力者の強さを知らないので無理はないのであるが。

「それとこいつを渡しとくぞ」

「え……!?!? これって……!?!?」

リボーンはツナに向かって三角形の物体を投げた。ツナはこの物体に見覚えがあった。

「異世界転送装着だぞ」

「でも……これデザイン違う……」

「ボンゴレの技術で量産できるようになったからな」

「量産!? こんな凄い物を!?!」

「当たり前だろ。あんな3流マファイアが作れるような物をボンゴレが作れない訳ねえだろ。量産つっても悪用される可能性があるからな。お前の守護者と白蘭とユニと炎真のファミリーにしか渡してねえけどな」

「相変わらずめちやくちやだなおい……」

(そもそも何でマファイアが異世界転送装置そなもを作れるんだらう……)

ツナはボンゴレの技術力、佐天はツナたちの世界のマファイアの技術力に驚いていた。

「とりあえず行ってこい。やり方は前と同じだ。もう黒子に連絡はしてあるからな」

「わ、わかったよ……」

どうせリボーンの決定には逆らえないのでツナは学園都市に行くことに決める。

「それとワープできる場所は何個か登録してるあるからな。今の所、佐天の寮、お前が最初にワープした地点にワープできるぞ。ワープ場所の選択は十字キーで選べるからな」

「十字キーって……」

「ゲームかよ……」

十字キーでワープ地点が選べるということに佐天とツナは複雑な気分になってしまっていた。

「私の家にワープするんだったら私の合鍵は台所の戸棚にあるので」

「うん。わかったよ」

「お気をつけて。佐天殿の修行はお任せ下さい沢田殿」

「ありがとうバジル君」

そう言うとツナはリングの炎を灯して、異世界転送装着のくぼみに死ぬ気の炎を注入する。炎を注入すると異世界転送装着が光る。光が止むとツナの姿が消えていた。

「着いた……」

ツナが転移先を選んだのは佐天の寮だった。ツナは台所の戸棚にある合鍵を取り出して、扉に鍵をかけると風紀委員177支部ジャッジメントへ向かう。

ジャッジメント
風紀委員177支部

「こんにちはー」

「あら。お久しぶりですの沢田さん」

「お久しぶりです沢田さん」

「久しぶり。黒子、初春」

「あの沢田さん。佐天さんは大丈夫ですか？」

初春は親友である佐天が凄く心配だったのか、一番に佐天のことをツナに尋ねる。

「うん。大丈夫だよ。崖を登って今はスパーリングしてるから」
「崖!?!」

崖を登ったって聞いて、黒子と初春は驚きの声を上げる。

「筋トレとかじゃなくてですか?!」

「筋トレはしてないよ。最初に死ぬ気の炎を灯す修行をクリアしたらそこから2日間は崖登りしたから。1日目の修行で全身筋肉痛になって1日休んだけど」

「ぶっ飛んでますわね……相変わらず……」

ジャンジャン

風紀委員の研修でもやらないようなことをやらせるリボーンに黒子は驚きを隠せないでいた。

「それで佐天さんのスパーリングは相手どんな人なんですか?」

「バジル君って言って、俺が前に修行した時にスパーリングしてくれた人だよ。バジル君は優しいから大丈夫だよ」

佐天のスパーリングしている相手が優しい人だとわかって初春は安堵した。

「そのバジルという方はボンゴレの方なんですか?」

「うーん。バジル君のいる組織は普段はボンゴレの組織とは違う組織なんだけど、緊急時はボンゴレを支える組織になるんだよね。だからボンゴレの人間とも言えないし、ボンゴレの人間とも言えるっていう微妙な立ち位置なんだ」

「ボンゴレフアミリーは組織構造が変わっていますのね……」

「でもすごい強いよバジル君は。前にスパーリングした時に俺、大岩の下敷きにされちゃったし」

「大岩の下敷き!?!」

「それって……前に言ってた……」

大岩の下敷きと聞いて黒子は驚きの声を上げる。初春は初めてツナとパトロールに行った時に言っていたことを思い出す。

「それは本当の話ですか?! というか本当だったとして佐天さんは大丈夫なんですか?!」

「本当に優しい人なんですよね!?!」

「だ、大丈夫……1人称が拙者っていうちよつと変わった所はあるけど、本当に大丈夫だから」

「拙者!?!」

バジルのことを聞いて黒子と初春は本当に佐天が大丈夫なのか不

安になるのだった。

標的（ターゲツト） 73 キヤパシテイダウン

「正直、沢田さんが来てくれて助かりましたわ」

「そうですね白井さん」

「え？ 何かあったの？」

ツナは黒子と初春の会話から今、学園都市で何かが起こっているという事を察する。

「前に白蘭さんが仰っていた、テレステイナという方を覚えていますか？」

「確か……能力体結晶を作った人だっけ？」

「ええ。白蘭さんのお陰で彼女を逮捕することができましたの。その後、警備員アンチスキルが研究所を調べました所、白蘭さんが言っていたように裏で色々していました。その中でも厄介な物がありましたの」

「厄介な物？」

「ええ。キヤパシテイダウンという物でして」

「キヤパシテイダウン？」

キヤパシテイダウンという聞いたことのない単語にツナは首を傾げ、疑問符を浮かべる。

「私たちも見ただけではないのですが、能力者の演算を阻害する音波で能力者を無力化するという物なんです」

「用するに能力者が能力を使えなくなっちゃうってこと？」

「はい。どうやらテレステイナは逮捕される前からこれを武装無能力集団スキルアウトに提供していたみたいなんです。現在このキヤパシテイダウンが武装無能力集団スキルアウトに出回っていきまして、能力者たちが襲われるという事件が多発しているんです」

初春は事件の概要を説明する。武装無能力集団スキルアウトとは無能力者の不良集団のことである。

「現在、警備員アンチスキルが出回って対処はしていますが、幻想御手事件レベルアップと同様、

人手が足りていない状況でして」

「それは厄介だね」

「そこで沢田さんの力をお借りしたいのです。沢田さんの力はこの事件を解決に大いに役立つと思いますので」

「俺の力が？」

「沢田さんの死ぬ気の炎は能力ではない為、キャパシティダウンでも無力化されることはありません。それに武装無能力集団からすれば沢田さんは能力者にしか見えない。なのにキャパシティダウンが効かないとわかれば、向こうからすれば恐怖でしかない。沢田さんの存在が知れ渡れば武装無能力集団の方々もおとなしくなると思いますが」

「成る程……」

黒子はツナの力がこの事件を解決できる理由を話す。ツナは自分の力がこの事件を解決する上で重要になってなるのだということを理解する。

「わかったよ」

「本当に申し訳ありませんの沢田さん。本来であれば沢田さんには元の世界に帰る方法が見つかり次第、戻ってもらう予定だったのですが……このようなことを頼んでしまって」

「謝らなくて大丈夫だよ黒子。俺は全然、大丈夫だから。それにこうなったのは黒子のせいじゃなくてリボーンのせいだしさ。それに俺の力が必要ならいつでも言つてよ。友達なんだからさ」

「沢田さん……ありがとうございます」

「このような事態になったのにも関わらず、文句の一つも言わないツナに黒子はお礼を言った。

その時だった

「白井さん！ 通報です！ 路地裏で常盤台中学の生徒が襲われているそうです！」

「さっそく来ましたわね……おそらく例の事件ですわね」

初春の言葉を聞いて黒子はキャパシティダウン絡みの事件であると確信していた。常盤台中学の生徒は全員がレベル3以上の能力者

である為、今回の事件と関係があると黒子は確信したのである。

「さっそくで申し訳ありませんが、お願いしますの沢田さん！」

「うんっ！」

ツナは通報を聞くとさっそく通報があつた場所まで向かつて行く。

ツナが通報場所に向かつているその頃。通報があつた場所では。

(な、何なのこの奇妙力満載の音は……!? 演算できないっ……!?)

蜂蜜色の髪に常盤台の制服を着た少女が両膝をつき、両手で頭を抑え苦しんでいた。苦しんでいたのは学園都市最高の精神系能力者、食蜂操折である。操折の前に一人の男が立ち、辺りには奇妙な音が響いていた。

「この時をどんなに待ちわびたことか……俺は俺たちの組織を壊滅させる原因となつたお前に復讐することばかり生きてきたんだ」

「まさか……まだ残党がいたなんてね……うっ!」

「裁きの時だ。食蜂操折。前と違って俺たちを壊滅させたあの忌々しい少年もいない。じっくりといたぶつてやる」

男は持つていた鉄パイプを操折に向かつて振り下ろす。操折は何もできずその場で、目を瞑ることしかできなかつた。

「え……!」

だが操折に痛みはなかつた。操折が恐る恐る目を開けるとそこには、鉄パイプをボンゴレギアで受け止め操折を護っているツナがいたのだから。

キャパシテイダウンによって無力化され、絶対絶命のピンチに陥っていた操折を救ったツナ。

ジャツジメント
「風紀委員だ」

「き、貴様……!?!? なぜ……!?!?」

キャパシテイダウンを使っているのにも関わらず、能力が無力化されていけないことに男は動揺を隠せないでいた。ツナの死ぬ気の炎は能力ではない為、キャパシテイダウンで無力化されない。仮に能力だったとしてもツナの上空の炎の特徴、調和によって無力化される為、どのみちキャパシテイダウンは効かない。

（この男は明らかに発火能力者……なぜ能力が使える……）

男はその場から飛び引いてツナから距離を取った。だがここからどうすればいいのかわからないでいた。

「大丈夫……お前は……!?!?」

「あ、あなたは……!?!?」

ツナは操折の方を向き、しゃがみ込む。ツナは襲われているのが操折だと知って驚きを隠せないでいた。一方で操折も助けに来たのがツナだと知って驚きを隠せないでいた。

「大丈夫か操折?」

「この奇妙力満載の音のせいで……演算が……」

「やっぱりか……」

さつきから発生している奇妙な音のせいで操折が能力を使えないということをつなは確信する。ツナが操折を向いている間にツナの背後から男がツナに向かっておもいつきり鉄パイプを振り下ろす。

「っ!?!?」

ツナは振り返ることなく左手の鉄パイプを受け止めるとそのまま鉄パイプを曲げる。男は動揺を隠せず鉄パイプから手を離して再び

距離を取った。

「じつとしてろ」

「へっ……!?! な、何を……!?!」

ツナは右手の人差し指に炎を灯すと操折の額に人差し指を近付けに行く。操折はいきなりツナが炎を近付けて来た為、動揺を隠せないでいた。避けようとしたくともキャパシティダウンの影響で動けない為、操折は目を瞑ってしまう。

「え……!?!」

だが操折は熱さを全く感じることはなかった。それどころかとても温かく心が落ち着いていた。

さらに

「演算が……できる……!?!」

「何?!」

演算ができるようになっていた。演算ができるようになってから操折と男は驚きを隠せないでいた。

「ば、馬鹿な……なぜ……!?!」

「俺の炎は調和。調和とは綻びのない状態。つまり俺の炎でキャパシティダウンの効果を無力化しただけだ」

「調和による……無力化だと……!?!」

(無力化って……まるであの人と同じ……)

ツナは男の方を振り返りそう言った。ツナの炎の特徴を聞いて、男は衝撃を受けていた。操折は驚くと同時に脳裏にある人物の姿が浮かんでいた。

(そうか……だから私の操作力が……)

同時に操折は理解する。前に自分の能力を操ろうとした際にツナを操ることができなかった原因を。

「おのれ……!?! これでは前と同じではないか……!?!」

「前と同じ?」

「こいつは私を前に襲ってきたデッドロックっていう組織の残党よお」

「デッドロック?」

「何かしらの理由で能力開発で頭打ちにされた学生たちの中で超能力者^{レベル5}を怨んでる連中で結束された組織のこと……」

「？」

操折はこの男の詳細について語る。だが操折は少しだけ浮かぬ表情^{かお}をしていた。そんな操折を見てツナは疑問符を浮かべていた。

「俺はずっとお前に復讐することだけを考えて来た……だが篡奪^{クワイーンダイバー}の槍がない今の俺ではお前の復讐は不可能……そんな時、耳にしたのさこのキャパシティダウンをな……」

男は操折に復讐する経緯を拳を強く握り、怒りに満ちた表情^{かお}で語る。

「なのに……なのに……一度ならずも二度までも邪魔が……!!」

「ただの逆恨みだろ」

「黙れ！ 貴様に何がわかる！ その女は……」

「学園都市第5位の能力者にして学園都市最高の精神能力者。だろ？」

「え……!?!」

操折は前にツナを操ろうとしたことはあったが、能力の詳細まではしていない。にも関わらずツナが自分の能力のことを知っていることに驚きを隠せないでいた。

「そうだ！ たとえそこでそいつを助けたとしてもお前も操られ利用されるだけだ！ お前だけじゃない！ お前の大切な者までもな！」

「さっきも言ったはずだ。俺の炎は調和。操折の能力は俺には効かないし、俺の力で解除できる」

「ぐっ！」

ツナの言葉に男は何も反論できなくなってしまう。余程、頭に血が登っていたのかツナが先程、言っていたことすら忘れていた。

「俺は操折のことよく知ってる訳じゃない。もしかしたら操折が酷い人間なのかもしれない」

「そうだ！ だったらその女を見捨て俺と一緒に……」

「だったとしてもだ。俺は今にも襲われそうな女の子を護る側に立てればこっちはそれで本望だ」

「え……!?!」

『今にも泣き出しそうな女の子を護る側に立てりやあ、こっちはそれで本望なんだよ』

ツナの言葉を聞いた瞬間、操折は目を見開いて驚いていた。なぜなら目の前の男が所属していた組織に襲われた時に、自分を助けてくれた青年と同じような言葉をツナが言ったからである。そして操折の中でツナの姿と助けてくれ青年の面影が重なる。

「大人しく降伏しろ。そうすれば手荒な真似はしない」

「黙れええええ！　そこをどけええええええええええ！」

男は走ってツナに向かい、ツナに向かって拳を繰り出す。だがツナは攻撃を躲し、首元に手刀を叩き込み男を気絶させる。男は地面にうつ伏せになって倒れた。

「後は……」

「アンチスキル警備員に連絡でしょお？　もう私がしておいたからあ」

「そうか」

アンチスキル警備員に連絡しようとツナであつたがすでに操折がしていた為、ツナは超ハイパー死ぬ気モードを解除する。少しすると警備員が到着し、男を拘束しキャパシティダウンを持って行った。

「大丈夫、操折？　怪我とかしてない？」

「大丈夫よお。あなたの助っ人力のお陰でねえ」

「よかった……」

(それにしてもさつきと全然、雰囲気力が違うのはどういうわけえ……?　もしかして多重人格……?)

操折が無事だと知ってツナは安堵する。操折はノーマル状態のツ

ナと超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナがあまりにも雰囲気が違う為、驚いてしまっていた。

(それに能力といい、髪型といい、さっきの発言といい。あの人と似すぎじゃないのお……)

操折はツナが前に助けしてくれた青年とそっくりだということにも驚いていた。

「もしあの時、助けしてくれたのがあの人じゃなくてあなただったら私はあなたに恋してたのかしらあ?」

「え? 何か言った?」

「何でもないわあ」

操折はボソツと呟いた。ツナは操折の言葉が聞き取れず聞き返したが、操折は何でもないと言つて誤魔化した。

「それにしてもどうして私の能力を知ってるわけえ?」

「え? 美琴から聞いたんだけど」

「成る程ねえ」

美琴から自分の能力の詳細を聞いたと知つて、操折は納得する。

「私の能力を知ってるつてことはあの時、あなたに何しようとしたかわかつてるんでしょお?」

「うん。知ってるよ。俺を操ろうとしたんでしょ」

「そうよお。御坂さんを悔しがる顔が見たくてねえ」

「どういうこと?」

「御坂さん。あなたに全然、歯が立たなかつたじゃない。だから私がああなたを一発で操つたつて御坂さんが知つたら悔しがると思つてえー」

「そんな理由で俺を操ろうとしたの!」

自分を操ろうとした理由がそんな理由だとは思つてもみなかつた為、ツナは驚きの声を上げる。

「まあいいか……」

「責めないのお?」

「俺を操つて誰かを傷つけるようなことをしようとしたわけじゃないし。それに操折は悪い感じがしないし」

「あなた相当、変わってるんだゾ☆」

「え？ そうかな？」

自分の目的の為に他者を操ってきた骸は人を操り、その人がどうなろうと何も思わない骸と比べて操折は安全な人物だということをツナは超直感で感じとっていた。

「まあいいわあ。あなたは特別に見ないでおいであげるわあ」

「見る？ 何を？」

「気にしないでいいんだゾ☆」

「？」

ツナは操折が言っていることがわからず疑問符を浮かべる。

「あ。最後に一つ聞きたいんだけどお。いいかしらあ？」

「いいけど……何？」

「あなたって歳いくつ？」

「え？ 15……高1だけど……」

(まさか年齢まで一緒なんてえ……どんだけ似てるのよお……)

またまた共通点を見つけたことで操折は驚きを隠せないでいた。

「わかったわあ。それじゃあ私はこの辺で失礼するわあ」

「え!？」

年齢を聞いた後に突然、帰ってしまった為、ツナは驚きを隠せないでいた。

「相変わらず変わった人だな……」

標的（ターゲット） 75 シスター

シヤッツメント
風紀委員177支部

「まさか2日で事件を収束させるとは……」

「相変わらず規格外ですわね……」

ツナは操折を助けた後も次々とキャパシティダウンは回収していく。そして次の日にはツナの活躍によって武装無能力集団による能力者襲撃事件は収縮した。初春と黒子は自分たちが手こずっていた事件を1日で終わらせたことに驚きを隠せないでいた。

「まあ幻想御手の時と違って、無能力者が相手だったし」

「そうでしたね……沢田さん幻想御手で強化された無能力者たちをレベルに関係なく圧倒してましたよね……」

初春は思い出す。幻想御手事件で強化された無能力者たちを次々と検挙していったことを。

「沢田さん。今日はもう帰って頂いて結構ですよ」

「え!?! 何で?!」

「幻想御手事件といい今回の事件といい、私たちは沢田さんに頼ってばかりですのよ」

「俺は別に気にしてないよ」

「沢田さんはが気にしないででも私たちが気にするんですの。ですから今日は元の世界に帰ってゆっくりして下さいの」

「黒子……わかったよ。じゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

「とはいったものの……今から帰ってもどうせ修行だしな……」

「ガウ〜……」

ツナはリングからナッツを出し、公園のベンチで軽食を食べていた。ナッツはツナの横でまったりとしていた。早く帰ることになったものの帰っても修行である為、ツナは本来の風紀委員ジャッジメントの業務の終了時間まで学園都市でのんびりすることにした。

「ん……？」

雲一つない空を見上げながらブーツとしているとツナは視線を感じる。ツナが目の前を見るとそこには緑色の瞳に、銀髪のロングヘア、そして修道服を身を纏った少女が涎を垂らしながらツナの方をジーツと見ていた。

「え、えつと……もしかしてお腹空いてる？」

ツナが少女にそう尋ねると、少女は顔を縦に何度も振ってお腹が空いていることをアピールする。

「こっちでよかつたら食べる？」

ツナは先程、コンビニで買ったパンの入ったビニール袋を少女に見せながらそう言うのと、少女は表情かおをパアツと明るくさせた。

(すげえ食欲……)

少女は何日かぶりに食事をしたのではないかというぐらいの勢いでパンを食べていた。ツナは少女の食べっぷりに少し引いてしまっていた。ツナが驚いている間にも

「ご馳走様！ 美味しかったんだよ！ えつと……」

「俺は沢田綱吉。ツナでいいよ」

「私はインデックス。ありがとうなんだよつな！」

インデックスは食べ物を分けてくれたツナにお礼を言った。

「あっ！ 猫！ もしかしてつなの猫!？」

「うん。ナッツっていうんだ」

インデックスは目を輝かせながらツナの隣でまったりとしている

ナッツの存在に気づいた。ツナはナッツの名前をインデックスに教える。

「おいでなんだよ」

「ガウ♪」

(ナッツが初対面の人に懐いてる……)

インデックスが両手を広げながらそう言うとなッツはインデックスの膝の上に乗ってまったりとする。ツナはナッツが初対面の人間にビビらず懐いたことに少しだけ驚いてしまっていた。

(それにしても変わった格好だな……)

ナッツの頭を撫でているインデックスを見ながらツナはそんなことを思っていた。

「とうかインデックスはあんなにもお腹、空かせてたの？」

「最近、とうまが入院しててまともな料理が食べられなかったんだよ」

「当麻って……もしかして上条当麻？」

「つなはどうまを知ってるの？」

「うん。最近は会ってないけど……それよりも入院してるって何かあったの!？」

「私を助ける為に色々は無茶したんだよ……」

当麻が入院したと知ってツナはどういうことなのかインデックスに尋ねた。インデックスは暗い表情かおをしながらそう答えた。

「それで当麻は大丈夫なの!？」

「うん……お医者さんの話だと数日で退院できるって……」

「そっか……よかったよ……」

インデックスから命に別状がないと聞いて、ツナは安堵する。

「どこの病院に入院しているかわかる？」

「あそこの病院なんだよ」

「あそこって……」

インデックスが当麻が入院している病院の場所を指を指した。ツナはインデックスが指した先の病院を知っていた。そこは木山の生徒が今もなお入院している病院だったからである。

「どうしたのつな？」

「いや……あの病院、俺の知り合いも入院してるから知ってるんだ」
「そうだったんだ」

「教えてくれてありがとうインデックス。俺、行ってみるよ」

「きつと当麻も喜ぶんだよ」

「インデックスはどうする？ 一緒に行く？」

「私、さつき行って来たから大丈夫なんだよ」

「あ。帰り道だったんだ」

インデックスの発言からツナは当麻の見舞いの帰りに自分と出会ったということを理解する。

「じゃあ。またねインデックス」

「うん。バイバイなんだよ」

ツナはナッツを肩に乗せて当麻の入院している病院へと向かう。

だがツナは知らなかった。当麻の身に大変なことが起きていると
いうことに。

標的（ターゲット） 76 記憶喪失

インデックスから当麻の入院している病院の場所を聞いて、ツナは当麻のお見舞いに行くことを決める。

「おや。沢田君じゃないか」

「こんにちわ」

病院の入り口に入るとカエル医者に出会った。ツナは挨拶をした。

「今日も木山君の生徒のお見舞いかい？」

「はい」

当麻のお見舞いもそうだが、木山の生徒たちの様子も見ておきたかったのでツナはそう答えた。

「あの子たちの様子はどうですか？」

「順調に回復しているよ。まだ時間はかかるがね。木山君もいるし大丈夫だよ」

「あれから木山さんは何度も……？」

「何度もというより、毎日来てるよ」

「そうですか」

「現状、あの子たちが精神を安定させることができるのは、あの子たちのことを一番よく知る彼女だけだからね。といつても彼女の力だけじゃ限界がある。だから君も可能な限り、あの子たちの所へ来て欲しい」

「わかりました」

「それじゃ私は失礼するよ」

「あっ！ 待って下さいー！」

「何かね？」

ツナはこのまま去って行くカエル医者を引き止めた。

「あの……この病院に当麻……上条当麻が入院してるって聞いたんですけど……」

「っ!？」

ツナは当麻のことをカエル医者に見尋ねる。上条当麻という単語を

聞いた途端、カエル医者は顔色を変えた。

「君は彼の知り合いかい？」

「ま、まあ……最近は会ってないんですけど……」

「そうか……」

「何かあつたんですか？」

「いや。何でもない。彼の病室を教えよう」

カエル医者はそう言うと、ツナに当麻が入院している

病室の番号を教える。

「ありがとうございます」

カエル医者から当麻の病室の番号を教えてもらうと、ツナは当麻の病室を指す。

当麻の病室

「ここか」

ツナは病室の扉の前に書かれている番号とカエル医者に教えてもらった病室の番号を確認すると、右手で扉をノックする。ノックするとうとうぞという返事が返ってくる。返事が返って来るとツナは扉を開けて病室に入る。

「久しぶり。当麻……？」

「おう。久しぶり」

（あれ？ 何か変だ……）

ベッドに座ったままそう言う当麻。だがツナはなぜか違和感を感じていた。

「どうしたんだよ？ そんなことでつつ立つて。こっちに来て座れよ」

「ねえ当麻。聞いていい？」

「何だよ。どうしたんだよ来て早々に？」

来て早々に神妙な面持ちでいるツナを見て、当麻は違和感を感じていた。

「本当に君は当麻なの？」

「な、何言ってるんだよ！ 上条当麻だよ！ 変なこと言うなよ！」

「わかってる。自分が変なことを聞いてるってことぐらい。でもなんか違和感を感じるんだ」

目の前にいるのは間違いなく当麻である。それは理解している。なのに最後に出会った時の当麻と今の当麻が違うということを超直感で感じとっていた。ただその違和感の正体まではわからなかった。

「インデックスから聞いたんだ。当麻のこと」

「お前！ インデックスに会ったのか！」

「うん。さっきね。それでこの違和感とそのことが関係してるんじゃないかって思ってる……」

「な、何でもねえって！ お前の思い込み過ぎだって！」

（ま、まさか……!?!）

ツナは当麻と会ってから当麻が自分のことを一度も名前で呼んでいないこと、そしてカエル医者のが少しだけおかしいということを感じ出した。そしてツナの中である一つの答えが導き出される。

「もしかして……記憶喪失……？」

「っ!?!」

「やっぱり……」

ツナは当麻が記憶喪失なのではないかという予想する。ツナの言葉を聞いた途端、当麻は顔色を変えた。当麻の反応からツナは当麻が本当に記憶喪失だということを理解する。

「そ、そんな訳ないだろ！ ドラマやアニメじゃないんだからさ！」

当麻は無理やり笑顔を作りながら誤魔化す。だが悲しそうなツナ
の表情かお見て観念したのか笑顔が消え、しんみりしてしまっていた。

「悪い……俺、お前の言う通り記憶喪失なんだわ……だからお前のこ
ともわかんねえんだ……」

「当麻……」

当麻はこれ以上、隠し通せないと知って自分が記憶喪失だというこ
とを打ち明けた。ツナは当麻のベッドの近くにありパイプ椅子に
座って話す。自分のこと。自分と当麻がどんな間柄だったのか。

「そっか……沢田は俺が襲われてた所を助けてくれたのか……あんが
とな……」

「気にしなくていいよ」

「にしても何で俺が記憶喪失だったわかったんだ？」

「勘……かな？」

「勘って……そんなのでよくわかったな……」

「なんか当麻と喋ってるはずなのに、別の人と喋ってる感じがしてさ」
勘だけで自分の様子がおかしいことに気づいたことに当麻は驚きを
隠せないでいた。

「それよりも当麻が記憶喪失って……インデックスは知ってるの？」

「いや。インデックスは記憶喪失このことは知らねえ。あいつに心配かけたく
なくてよ。だからインデックスにも、他の奴にもこのことは言わない
でくれるか？」

「あ……そのことなんだけどさ……もしかしたら治るかもしれない
だ……当麻の記憶喪失……」

「は……!？」

標的（ターゲツト） 77 再来

「ちよつ！ ちよつと待て！ 俺の記憶喪失を治す!?」
「うん」

「それは無理だ！ 俺は今、脳細胞が焼き切れて今までの思い出が消去されてるんだ！ これは絶対に治らないってお医者さんが！」

「勿論、絶対に治る訳じゃないよ。それでも治る可能性はあるよ」
「な、何でそんなことが言えるんだよ……?」

自分の話を聞いてもなお、ツナが大丈夫だと言い切れる理由が当麻にはわからなかった。

「俺の知り合いにパラレルワールド平行世界の知識を共有できる奴がいるんだ」

「え、えつと……パラレルワールド平行世界って何……? 聞いたことはあるんだけどよ……」

「簡単に言うともしもの数だけ世界があるってことだよ。例えば今、当麻は記憶喪失になってるけど、記憶喪失にならなかった世界、そもそも記憶喪失になった事件がなかった世界とか」

「な、成る程……」

「だからそのもしもの世界の中に当麻の記憶が戻った世界だつてあると思うんだ」

「嘘だろ……そんなことができる奴がいんのかよ……もしかしてそいつ魔術師か?」

「魔術師?」

「い、いや……気にしないでくれ……」
「?」

魔術師という聞いたことのない単語にツナは疑問符を浮かべる。当麻は慌てて気にしないでくれと言うが、ツナはまた疑問符を浮かべる。

「ていつても連絡先は知らないから一旦、戻ってリボーンに……」

「僕ならいるよー綱吉君♪」

「白蘭?」

「うおっ!? 飛んでる!? ていうか翼が生えてる!?!」

白蘭に連絡しようとした矢先、窓の外から声が聞こえた。窓の外を見るとそこには空中で胡座を掻いて、マシユマロを食べている白蘭がいた。ツナは呼んでもいないのに白蘭いること、当麻は白蘭の存在そのものに驚きを隠せないでいた。

「白蘭! お前何でこっちの世界にいるんだよ!?!」

「いやー。暇だから学園都市に来たんだよ。それで散歩してたら綱吉君の姿が見えたからさー」

「散歩って、完全に飛んでんじゃん!」

空を飛ぶことを散歩と言いつける白蘭にツナはツツコミをいれる。

白蘭はそう言うのと窓の外から当麻の病室に入った。

「なあ……こっちの世界って何だ……?」

「僕たちこの世界の人間じゃないんだ♪ 僕たちは異世界から来た人間なんだ♪」

「はあ!? 異世界!?!」

先程と同じテンションで自分たちが異世界の人間だということをかミングアウトすふ白蘭。白蘭がさらつと、とんでもないことをカミングアウトした為、当麻は驚きの声を上げる。

「えつと……記憶が無くなる前の当麻には一応、話したんだけど……」

ツナは当麻に自分たちが異世界から来た人間だということを一から丁寧に説明する。そして白蘭が平行世界パラレルワールドの知識を共有できる人物だということも説明する。

「マジか……というかよく記憶喪失前の俺はよく信じたな……そんな話……」

当麻はツナたちが異世界の人間だということにも驚いていたが、記憶の無くなる前の自分が異世界の人物の存在を信じていたことに一番驚きを隠せないでいた。

「という訳でまたお前の力を借りたいんだけどいい? あんまり無闇に能力を使わせて悪いんだけどさ……」

ツナは未来のユニが言っていたことを思い出す。未来の白蘭が能力が枯渇して、調べられる事象が減少していることを。

「それなら問題ないよ。ユニちゃんのお陰か、調子がいいんだ」
「そうなの？」

「うん。まあ未来の僕は7トウリニセツテを手に入れる為に能力を使い過ぎた部分もあるし。とにかく今は大丈夫だよ」

「そっか……」

(何、言ってるか全然わかんねえ……)

当麻はツナと白蘭が言っていることがわからずついていけていない状況になっていた。

「それと今回の治療の報酬として後で初春君と美琴君の連絡先、教えてね綱吉君」

「え？ いいけど……どうして？」

「初春君とは一緒にスイーツ巡りしたいし、美琴君とは戦いたいからさ」

「黒子が言ってたこと完全に忘れてるよなお前！」

前に学園都市の風紀を乱すような真似をしたら容赦はしないと云われていたのにも関わらず、美琴と戦おうとする白蘭にツナはツッコミをいれる。

「それじゃあとつとと終わらせる……よつと！」

「グフツ！」

「なっ!？」

白蘭は当麻の腹部に拳を叩き込むと当麻を気絶させた。ツナは白蘭がいきなり当麻を気絶させたことに驚きを隠せないでいた。

「な、何やってんだよ白蘭！」

「麻酔撃つよりこっちの方が早いし、いいかなって思ってた♪」

「ここ病院だから！」

「大丈夫だって♪ 加減したから♪」

(丸くなったとはいえ……相変わらず滅茶苦茶だこいつ……)

未来の白蘭と違って今の白蘭は変わったが、滅茶苦茶な部分は変わっていないことをツナは改めて自覚したのだった。

ちなみに当麻の記憶は元に戻ったとき。

標的（ターゲツト） 78 白蘭 VS 超電磁砲（御坂美琴）

白蘭の治療によって記憶喪失を回復した当麻。

「痛え……」

「ごめんね当麻……滅茶苦茶な奴で……」

「沢田が謝らなくなった方がいいよ。それにあいつのことを恨んじやいねえよ。記憶喪失を治してくれたんだからよ」

腹部を両手で抑えている当麻を見ながらツナは謝る。当麻は平気だと答える。

「それと白蘭の話だと当麻は記憶喪失になる以前から脳の構造が変わってたらしいよ」

「脳の構造？」

「うん。何でそうなるのかはわからないって言ってたけど、それも治しておいたって白蘭は言ってたよ」

「そうか……でも何で脳の構造が……？」

記憶喪失になる前から脳の構造が変わっていると言われて、当麻はなぜ自分の脳がそんなことになっているのかわからないでいた。

「ま。考えても仕方ねえ。それよりあいつはどこ行ったんだよ？」

「白蘭ならもう出て行ったよ。多分、美琴と戦いに行ってる……」

「ビリビリの所に!? 正気かよ!?!」

当麻は白蘭が美琴の所に戦いに行つたと知って、当麻は驚きの声を上げると同時に心配する。あの後、ツナは白蘭に初春と美琴の連絡先を教えた。白蘭は今まで滅茶苦茶な部分はあるが、よっぽどのことがない限り無害な人物である為、ツナは連絡先を教えたのである。

「ビリビリは超能力者! しかも学園都市第3位の能力者だぞ!」

「まあ……白蘭は美琴より強いしそこは心配してないんだけど……」

「あいつ……そんなに強い……?」

一方、その頃。

「暇だわ……」

美琴はファミレスで天井を見据えながらそう呟いていた。黒子と初春は風紀委員の仕事がある為、暇をもて余していた。

その時だった

「非通知？ 誰かしら？」

美琴の携帯に電話がかかる。かかってきた相手は非通知であることに気づいたが、美琴は電話に出る。

「もしもし？」

『やっほー♪ 美琴君♪』

「あんたは……確か白蘭でいいんだっけ……？」

美琴は電話の声からかけてきた相手が白蘭だということを理解する。

「というか何で私の連絡先知ってるわけ？ まさか能力で……？」

『いやいや。綱吉君から美琴君の連絡先聞いて電話したんだよ』

「そう……それで？ 私に何の用？」

『今、暇しててさ。戦わない？』

「唐突ね……まあいいわ。私も暇してたし」

初めての電話がバトルの誘いだということに若干、複雑な気持ちになっってしまったが、実際暇だったので引き受けることにする。

「んじや第七学区の河原でいい……って場所がわかんないか……」

『大丈夫だよ。今、美琴君の目の前にいるし』

「へっ……!?!」

そう言われて美琴は窓の外を見た。そこには電話を片手に、笑顔で手を振っている白蘭がいた。

「近くにいるんなら電話せず直接、かけなさいよ！ ていうか電話の意味！」

電話を片手に白蘭に向かって美琴はツツコミをいれる。

第七学区の河原

「それじゃ始めよっか♪」

（ヘラヘラしてるけど全然、隙がない……流石は沢田の世界の仲間……）

ニコニコしながらそう言う白蘭に対し、美琴は白蘭に全く隙がないことを理解していた。

（まずは……）

美琴は磁力で周囲の砂鉄を操作して、自分の周囲に集めていく。

「へー。磁力で砂鉄を操ってるんだ。流石だね」

「お誉めに預かり光荣だね。それより意外ね。私の能力の詳細はあなたの能力で全てわかってると思ってたんだけど」

「最初から攻略法を見てやるゲーム程、面白くないじゃないか。ゲームってというのは何がどうなるかわからないから面白いんだよ」

「それに感しては私も同感……よっ！」

美琴は砂鉄を操作して白蘭に向かって放つ。白蘭は掌から炎を放出して砂鉄を防ぐと砂鉄が全て消滅していく。白蘭もツナと同じく大空属性の炎を持っている。大空属性の調和によって砂鉄を消滅させたのである。

「喰らいなさいー！」

美琴は砂鉄で白蘭の視界を奪っている隙に上空から電撃を纏った足で踵落としを白蘭に喰らわせる。白蘭は右腕で美琴の蹴りを防ぐ。

「やるね♪」

「まだよー」

「おっと♪」

美琴は踵落としを喰らわせた体勢で、右手の掌から零距离で電撃を喰らわせる。白蘭はとっさにその場から引いて雷撃を回避する。

「このっー」

白蘭が飛び引いたと同時に美琴は全身から雷撃を放つ。電撃が地面を通って白蘭に向かっていく。白蘭はジャンプして美琴の雷撃を躲す。

（着地を狙う！）

美琴は着地を狙って白蘭の着地点に向かって走って行く。そして雷を纏った渾身の拳を白蘭に叩き込んだ。

が、

「なっ……!?!」

「♪」

美琴は衝撃を隠せないでいた。なぜなら白蘭は美琴の込めるを右手の人差し指だけで止めていたのだから。一方で白蘭は相変わらずニコニコしながら美琴の拳を受け止めていた。

（う、動かない……!?!）

美琴は力は込めるが美琴の拳はこれ以上、先へ進むことはなかった。

「白指」

白蘭がそう呟くと右手の人差し指から炎が放出され、美琴が吹っ飛ばされていく。美琴は2回程、地面をバウンドしながら吹っ飛ばされたが、なんとか体勢を整えた。

「ゲッホー！ ゲッホー！」

なんとか体勢を建て直したとはいえダメージは受けていた為、美琴は咳き込んでしまっていた。

「いくら手加減したっていつでも思ったより威力が出なかったなー」

(う、嘘でしょ……これで手加減って……)

白蘭は不満そうな表情かおをしながらそう呟いた。美琴は白蘭の今の攻撃が手加減されたものだということを知って衝撃を隠せないでいた。

「やっぱりGHOSTがいないとダメかー……」

(GHOSTって……まさか幽霊を召喚できるとか言うんじゃないんでしょね……)

美琴のGHOSTという単語を聞いて文字通り幽霊が出て来るのではないかと警戒する。普通の美琴あれば幽霊など非科学的なものを美琴は信じない。しかしツナたちの世界の技術は学園都市の技術すら越えてる部分がある為、その可能性が頭に残っているのである。ちなみに白蘭の言うGHOSTとは未来の白蘭が他の平行世界パラレルワールドから連れてきたもう一人の白蘭自分のことである。なぜGHOSTと呼ばれるのかというとGHOSTは死ぬ気の炎の塊であり、どんな攻撃をもすり抜けてしまう。故にGHOSTと呼ばれる。GHOSTは死ぬ気の炎を吸収し、吸収した死ぬ気の炎を白蘭自分と共有することが出来る。未来の白蘭はGHOSTの死ぬ気の炎を吸収する力と共有する力を利用してとてつもない力を入れたのである。先程放った白指も未来の白蘭と今の白蘭ものでも天と地程の差がある。

(何が超能力者レベル5と同等よ……明らかにそれ以上でしょ……こんなのが沢田以外にもいるってどうなってんのよ沢田の世界は……)

リポーンは前に白蘭の実力が超能力者レベル5クラスだと言った。しかし明らかにそれ以上だということを美琴は先程の攻撃で理解する。リポーンは学園都市に超能力者レベル5以上のランクがない為、あえてそう言うただけであり、白蘭が超能力者レベル5以上の実力者だということは理解している。

「せっかくだし美琴君の本気がみたいなー。超電磁砲レベルガンだけ？ 撃つてみてよ」

(撃つてみてですって……!?)

自身の最高の技である超電磁砲レベルガンを撃つてみると言われて美琴は衝撃を受けると同時に前にツナが白蘭と同じことを言ってきたことを

思い出す。

(いや……おそらく私の攻撃は通じない……だったら連射して……)

だが以前とは違い自分の弱さを認めた美琴は冷静でいられていた。そして1発では通じないと予見して、連射することを決める。

「いいわ……望み通り撃ってあげるわ!」

美琴はポケットの中からコインを1枚取り出すと、デコピンでコインを上弾き飛ばす。

(まずは様子見……)

闇雲にただ撃つても仕方がない為、白蘭がどう超電磁砲を対処するかどうかを美琴はこの1発で見極めることにする。そして美琴はコインを再びデコピンで弾く。能力の付与によってコインは音速の3倍以上のスピードで白蘭に向かっていく。

「白拍手」

「は……?」

白蘭は拍手で美琴の放ったコインを粉碎する。正確に言うとな掌に集中させた炎の圧力でコインを粉碎したのである。美琴はまさか拍手で超電磁砲を防がれるとは思ってもみなかった為、その場で固まってしまう、連射することを忘れてしまっていた。

「凄い威力だね。少し手が痺れちゃった♪」

(少し痺れたですって……!?)

美琴の超電磁砲は車や高層ビルをも容易に破壊するだけの能力を持つ。それだけの威力の攻撃を受けて少し痺れた程度で済んでいることに美琴は驚きを隠せないでいた。

(いや! それよりもこいつはあれだけ速さのコインを粉碎した……つまり私の超電磁砲が見えていたってこと……!?)

白蘭が超電磁砲を粉碎したことから美琴は白蘭には超電磁砲が見えていた……つまりツナと同様、躲すこともできたということを理解する。

「うん。これくらいなら全然問題ないね♪ 流石に今の僕じゃ綱吉君の全力は無理だろうけど」

(これくらいって……じゃあ沢田ってどれだけ強いのか……!?)

超電磁砲レールガンを拍手で余裕で粉碎するような奴ですら、ツナの全力を粉碎できないと言った。その言葉を聞いて美琴はツナの戦闘力の上限が全くわからないでいた。

「じゃあ準備運動も終わったし。そろそろ……」

「そろそろ……なんですか?」

「げっ! 黒子!」

「やっほー♪ 黒子君」

タイミングのいいのか悪いのかここで黒子が現れる。黒子を見て美琴は嫌な顔をするのに対し、白蘭はニコニコしながら手を振っていた。

「やっほー♪ じゃありませんの! 何をやっているのですかあなた方は!」

「何って見ての通り、ちよつと準備運動してただけだよ♪」

「どう準備運動すればこんな有り様になりますの!」

黒子が地面を指を指しながらそう叫んだ。美琴の放った超電磁砲レールガンの余波によつて地面は抉れてしまっていた。

「学園都市の風紀を乱すような真似をしたら容赦しないと仰いましたわよね」

「えー。それじゃ僕が悪者みたいじゃないかー。酷いなー黒子君」

「元々、マフィア犯罪者でしようが! あなたは!」

「それ言ったら黒子君だって犯罪者じゃないか。寮の天井裏に美琴君の私物をコレクションしてるし」

「な、なぜそれを……はっ!」

「黒子……?」

白蘭は前に平行世界パラレルワールドで得た知識で黒子のことを暴露する。まさかこんな反撃があるとは思ってもみなかった為、黒子は焦ってしまふ。だが時すでに遅く、黒子が振り返るとそこには鬼の形相をしていた美琴がいた。

「お、お待ち下さいお姉様! これは私を陥れようとする罠……ぎゃー……!」

言い訳をする黒子であったが、美琴の鉄槌雷が黒子を襲い、学園都市

中に黒子の絶叫が響き渡るのであった。

ちなみに天井裏のコレクションは撤去されたそうなの

標的（ターゲツト） 79 兄弟子

ツナは当麻の病室を出て、木山の生徒の様子を見た後、元の世界へと戻り修行をする。そして修行を終えるとツナたちは家へと帰る。バジルはホテルに泊まっている為、途中で別れる。

「死ぬ気のコントロールの方はどう佐天？」

「ぼつちりです！ 明日からバジルさんに戦闘技術を叩き込んでもらいます！」

帰る途中でツナは佐天に修行の様子を尋ねた。佐天は右手でピースしながら笑顔でそう答えた。バジルの予想通り佐天は1日で死ぬ気のコントロールをマスターした。

歩くこと15分。ツナの家に着する。

「な、何?! この人たち!?!」

3人が家に戻ると黒いスーツに身を纏った男たちがいた。男たちを見て佐天は驚きの声を上げる。佐天の声を聞くと男たちは一斉にツナたちの方を見る。

「沢田さん！ リボーンさん！ お久しぶりです！」

「ロマーリオさん！」

「久しぶりだなロマーリオ」

男の集団の中から黒髪に黒い眼鏡をかけた中年の男が挨拶してくる。

「おや？ そちらのお嬢さんは……」

「将来、ツナの妻になる佐天だぞ」

「つつつつつ妻!?! / / /」

「リボーン！ 何、言っただよ！」

リボーンという言葉を聞いた途端、佐天は顔を真っ赤にしながら動揺する。ツナはリボーンが勝手にそんなことを言った為、ツナはツツコミをいれる。

「あ、あれが……」

「まさかこの年齢で……」

「ということとはボンゴレ11代目も……」

「違いますから！ 真に受けしないで下さい！」

「私がツナさんの……えへへ……」

リボーンの言葉を聞いて男たちはヒソヒソと話し始める。しかし会話が丸聞こえな為、ツナは男たちに向かってツツコミをいれる。一方で佐天は妻と言われたのが余程、嬉しかったのかデレっとしてしまっていた。

「おい。騒がしいぞお前ら」

「デイーノさん！ 久しぶりです！」

「よう。ツナ」

（あっ！ この人って……）

ツナの家の中から左腕に馬などをあしらえたタトウーがある金髪の外国人が出て来た。佐天はこの人物に見覚えがあった。

「えっと……もしかしてボンゴレの人？」

「違えぞ。こいつはデイーノ。キャバツローネファミリーのボスで、俺のかつての教え子だぞ」

「え!?! じゃありボーン君の生徒だったってこと!?!」

「ああ。つまりお前の兄弟子ってことだ」

「兄弟子……」

リボーンはデイーノのことについて佐天に説明する。佐天はデイーノが兄弟子だと知ると、もう一度デイーノの顔を見た。

「お前。もしかして例の異世界からの人間か？」

「え!?! 何でそれを!?!」

「キャバツローネファミリーはボンゴレの同盟ファミリーだからな。噂くらい聞いているぜ。にしても弟分だけじゃなくて妹分までできるなんてな。嬉しいぜ」

デイーノが佐天が異世界から来た人間だということを推測すると佐天は驚きの声を上げる。異世界と聞いてデイーノの部下たちはざわついていた。

「改めて自己紹介するぜ。俺はデイーノだ」

「さ、佐天涙子です！」

「おう。よろしくな涙子」

「ガハハ！ ランボさん登場！」

互いに自己紹介する佐天とディーノ。するとツナの部屋の窓のさんに乗ったランボがいつものように登場する。

「死ね！ リボーン！」

「お、おい！ ランボ！」

「ええ!? またあー！」

ランボは2階からリボーンに向かって手榴弾を投げる。ディーノの部下たちがいるにも関わらず、ツナはランボが手榴弾を投げたことは、佐天はまたランボが手榴弾を投げたことに驚きを隠せないでいた。

「危ねえ！」

ディーノは咄嗟に懐から鞭を取り出すと手榴弾に向かって鞭を放つ。放たれた鞭は手榴弾に絡みつく。ディーノはそのまま手榴弾を上空へ飛ばす。飛ばされた手榴弾は上空で爆発する。

「す、凄い……」

ディーノの華麗な鞭さばきに驚くと同時に、見惚れてしまっていた。

「ムキー！ 邪魔すんなもんね！」

「悪かったな。ほらよ」

ディーノはランボに謝ると懐からクッキーの入った袋をランボに向かって投げた。

「クッキーだもんね！ ランボさんクッキー大好きだもんね！」

クッキーの入った袋をキャッチすると、ランボはリボーンに攻撃するのを忘れてクッキーを食べ始めた。

「流石ボス」

「俺たちを護るだけじゃなくフォローまで完璧だな」

「妹分ができたからってかっこつけ過ぎだぜ」

「最後のは余計なお世話だっつーの」

（凄い……ディーノさんって部下の人からすっごく信頼されてる……）

デイーノと部下たちが会話するのを見て、佐天はデイーノが部下から熱い信頼をされているということを理解する。

だが佐天は知らなかった。デイーノにはとてつもない欠点があるということに。

標的（ターゲツト） 80 デイノーの欠点

ツナたちは家の中に入る。デイノーの部下たちは泊まっているホテルへと帰って行った。

「「「いただきまーす」」」

ツナたちは手を合わせて合掌する。ランボたちは先にご飯を食べている為、4人だけである。

「さあ。何でも聞いてくれ。可愛い妹分」

デイノーは佐天妹分ができたことが嬉しいかったのか、少しだけ調子に乗っていた。

「え、えつと……キャバツローネファミリー？ ってどれくらい凄いですか？ イマイチ、ピンとこなくて……」

「キャバツローネファミリーの構成員は5000人。ボンゴレの傘下のファミリーの中で3番目に規模が多いファミリーなんだぜ」

「そ、そんなに凄いんだ……ていうかそれだけのファミリーを傘下におけるボンゴレって……」

キャバツローネファミリーの規模とそんな規模なファミリーのボスであるデイノーにも驚いたが、一番驚いたのはそんな凄いファミリーを傘下に置いているボンゴレだった。

「ボンゴレの傘下ファミリーは1万を越えるからな」

「1万!?!」

リボーンの言葉を聞いて佐天は驚きの声を上げる。そして1万の中の傘下ファミリーで3番目の規模を誇っているキャツバローネファミリーの凄さを理解する。

「まあツナがいずれ率いることになるんだけどな」

「俺はマフィアのボスになんてなりませんから!」

「照れんなって」

「照れてませんから!」

(仲いいんだ……ツナさんとデイノーさんって……)

ツナとデイノーのやり取りを見て、佐天は2人が兄弟みたいだと感

じていた。

(ん?)

ツナとデイーノのやり取りを見ていた佐天だったが、ここであることに気づいた。

「あ、あのデイーノさん……?」

「ん? どうした涙子?」

「そ、その……溢れてます……」

「うおっ!」

佐天が指を指すとそこにはご飯粒やおかずや野菜が散乱していた。デイーノは食べ物が散乱しているテーブルを見て驚きの声を上げる。

「そうだった……デイーノさん今、部下の人たちがいないから……」

「え? どういうことですか?」

「デイーノは部下がいねえとダメダメになっちまうんだ」

「はい!」

ツナは額に手を当てながらそう呟いた。佐天はツナの言っている意味がわからずどういうことか尋ねると、代わりにリボーンが答える。

「おいりボーン。涙子に変なことを教えるなって。それより拭くものを……うおっ!」

テーブルの上を綺麗にしようと拭くものを探す為に立ち上がったデイーノであったが、立ち上がった瞬間におもいきりこけてしまう。

「いってえ!」

「だ、大丈夫ですか!? デイーノさん!」

「大丈夫だ……自分の足を踏んじまったただけだ……それよりも拭くものを……いでっ!」

再び立ち上がったデイーノだったが今度は机の柱におもいきり小指をぶつけてしまう。ぶつかった衝撃でコップが倒れてお茶が溢れてしまう。

「いってえ! 小指、打った! いでっ!」

「う、嘘でしょ……」

「言つただろ？ デイノーは部下がいないと運動神経が極端に下がっちまうって」

「……」

デイノーは片足立ちで足の小指を押しさえるが、バランスを崩して後ろに倒れてしまい、そのまま壁に頭を強打してしまう。リボーンの言葉が本当だった為、佐天は衝撃を隠せないでいた。

（というか何でツナさんの人の周りって何でこんな変な人が多いの……？）

佐天の脳裏にはポイズンクッキングの才能を持つビアンキ、ビアンキの姿を見ただけで倒れてしまう獄寺の姿が脳裏に浮かんでいた。

「あー！ エンツィオー！」

頭を強打した衝撃で懐からデイノーのペットの亀であるエンツィオが落ちてしまう。落ちたエンツィオは転がり、床に溢れたお茶の上に落ちてしまった。するとエンツィオがみるみる大きくなってしまった。

「亀が大きくなってる!？」

「しまった！ エンツィオが！」

エンツィオが大きくなっていることに佐天は驚き、ツナは慌ててしまう。片手で持てるぐらいのサイズだったエンツィオが最終的に体長2メートルの大きさにまで大きくなっていく。

「ど、どうなってるの!？」

「エンツィオは水を吸って膨張するスポンジスツポンでな。巨大化したエンツィオは凶暴化して家、1軒喰っちゃもうんだ」

「ええ!？ それってやばいじゃん！」

リボーンからエンツィオのことを聞いて佐天は驚きの声を上げる。そう言ってる内にエンツィオは家の壁を食べ始める。

「大人しくしろエンツィオー！」

「いでっ！」

「ツナさん！ 大丈夫ですか!？」

デイノーは鞭を使ってエンツィオを捕らえようとするがなぜかツナの顔面に当たってしまう。

「悪い！ ツナ！ 今度こそ！ うおつ！」

ディーノウもう一度、エンツイオに向かって鞭を振るう。だが今度
はディーノに鞭が絡みつき、そのまま床に倒れてしまう。

「やべえ！ 絡まった！」

「ど、どうするの!?! このままじゃ家が！」

「早くなんとかしないと！」

家を食べていくエンツイオを見て佐天とツナは慌ててしまっ
た。

「仕方ねえな」

リボーンは相棒であるレオンをドライヤーに変化させると、エン
ツイオに向かって温風を放った。温風を浴びたエンツイオはみるみ
る小さくなってしまう。

「え!?! カメレオンがドライヤーに!?!」

「レオンは形状記憶カメレオンでな。一度、見た物なら何でも変形で
きるんだ」

「ただのカメレオンじゃなかったんだ……」

リボーンの帽子の上にいるレオンがまさかそんなにも凄いカメ
レオンだとは思ってもいなかった為、佐天は驚いてしまっていた。

この日、佐天は人体の仕組みと動物の生態系がわからなくなっ
てしまった上に、どっと疲れてしまったのは言うまでもない。

標的（ターゲツト） 81 兄弟子の教え

エンツイオの騒動はなんとか集束する。

「はあ……疲れた……」

佐天は縁側で切った西瓜を食べながらそう呟いた。現在ツナが風呂に入っている為、佐天はツナが風呂から上がるのを待っている状態だった。

「隣いいか？」

「あ、はい……」

西瓜を食べている佐天の元にディーノがやって来るとディーノは佐天の横に座る。するとディーノはお盆にあった西瓜を取り、佐天と同じく食べ始める。

「悪いな。色々と迷惑かけちゃってよ」

「いや、大丈夫です……」

ディーノは先程の出来事について謝る。佐天は大丈夫だと答える。

「なあ涙子。お前は何でリボーンの生徒になったんだ？」

「強くなりたかったんです」

「何で強くなりたかったんだ？」

「私の住んでる世界は超能力を開発する学園都市っていう機関があるんです」

「知ってるぜ。お前はその学園都市から来たんだろ」

「はい。でも私は能力が使えなくて……私は幻想御手レベルアップバーっていう誰でも能力が使えるっていうアイテムがあつて、私はそれを使ったんです。でもそれには副作用があつて、私は昏睡状態になって……そのせいで私の親友は危ない目に遭つて……他のみんなにも心配かけて……」

佐天は幻想御手レベルアップバーを使った時ことをディーノに話し始める。

「昏睡状態になつてる時。どういふことかはわからないですけど、ツナさんの過去が見えたんです。戦いたくないのに、それでもみんなを護る為に必死に戦つてる姿を……そしてツナさんの過去を見て決め

たんです。護られる存在じゃなくて誰かを護れる存在になりたい
て」

「それでリボーンの生徒になったのか……」

「はい……」

佐天が自分が強くなりたいたいと思った理由を話すと、しばらく沈黙が
続く。沈黙してから30秒後。佐天が口を開いた。

「あの……ディーノさんはどうしてリボーン君の生徒になったんです
か？」

「親父がリボーンに依頼したんだ。俺をキャバツローネファミリーの
10代目にする為にな」

「お父さんが……」

「なあ涙子。お前マフィアのことをどう思う？」

「ど、どうって……」

「遠慮しなくて大丈夫だぜ」

ディーノに問いに佐天は答えられずにいた。なぜならマフィアに
いいイメージない。だがそのことを素直に言ってしまったらディーノ
のことを悪く言うことになるからである。佐天の表情かおからそんなこ
とと思っていることを予想したのか、ディーノは佐天にそう告げた。

「そりやマフィアにいいイメージはないですよ……犯罪者なんだし
……まあ殺し屋ヒットマンのリボーン君に弟子入りしておいてアレなんですが
……」

「ハハハ！ やっぱお前は信用できる奴だな！」

「え……!?!」

「俺も最初はマフィアのボスなんてクソくらえ。マフィアを目指す奴
なんてロクな奴はいねえって思ってたんだ。だから俺はキャバツ
ローネファミリーを継ぐどころか、マフィアになんてなりたくなかつ
たんだ」

「じゃあ……何で……?」

マフィアになりたくなかったのにも関わらず、ディーノがなぜキャ
バツローネファミリーを継いだのか佐天はわからないでいた。

「俺の親父は病気で弱っててな。そんな時にイレゴラーレファミ

リーって奴らがキャバツローネファミリーのシマで好き放題暴れ回ってたんだ。俺は街のみんなやファミリーの期待を裏切ることばできないくて、奴らとボスに話をしに行くことになった」

デイーノは自分がキャバツローネファミリーのボスになろうと思つた経緯を語り始める。

「けど俺は怖くて会談の途中で逃げ出した。けど奴らも馬鹿じゃねえ。俺が会談を逃げ出したことで奴らは親父のいる屋敷に攻めて来たんだ。その時に親父は奴らに殺されたんだ……」

「え……!?!」

デイーノの過去を知つて佐天はショックを受けてしまつていた。

「それだけじゃねえ。俺に付き添つてくれたロマーリオたちも奴らに捕まつた。俺はその時、後悔した。俺が覚悟を決めてりゃこんなことにならなかつたんじゃないかつてな……」

「デイーノさん……」

「けどそんな俺にリボーンは勇気とみんなを護る力をくれた。俺を変えてくれた。そのお陰で俺はロマーリオたちを助けることができた。そして親父を死なせちまつたこんな俺をそれでもみんなは信じてくれた。だから俺は決めたんだ。俺はみんなを護る為にキャバツローネを継ぐことにしたんだ」

デイーノは自分がキャバツローネファミリーを継いだ理由を話すと、夜空に浮かぶ星空を見上げた。

「お前は俺とは違う。まだ何も失つなっちゃいねえ。だから俺のようになるな。お前なら俺と違う道を歩んでいけるはずだ」

デイーノは佐天の頭に右手をポンツと乗せてアドバイスした。

「まあツナのが気になつてようだし。俺と同じくマフィアになる可能性はあるけどな」

「ななな!! 何を言つてるんですか!?! わ、私は別に!!」

デイーノが少しだけニヤニヤしながらそう言うと、佐天は顔を真っ赤にし動揺してしまう。

「ツナならお前を絶対に幸せにしてくれるぜ。俺が保証する」

「ち、違います!!」

「照れんなくて」

顔を真っ赤にしながら否定する佐天をディーノはからかっていた。傍から見れば、妹をからかう兄と兄にからかわれる妹。まさしく本当の兄妹のようであった。

標的（ターゲット） 82 戦鬪狂

次の日。並盛山。

「あれ？ バジルさんは？」

「バジルは緊急の任務が入ってな。イタリアに戻ったぞ」

佐天はバジルがいないことに気づく。リボーンはバジルがいない理由を説明する。ツナは風紀委員ジャッジメントの仕事に行った為、今はいない。

「今日は俺がお前の修行相手だぜ。涙子」

「デイーノさん！」

やって来たのは鞭を持ったデイーノと右腕であるロマーリオだつた。

「今日は武器を持った相手とのスパーリング。そしてお前も死ぬ気の炎を灯しながらの戦いだぞ」

「う、うんっ！」

リボーンはそう言うのと死ぬ気丸の入った小瓶を佐天に投げる。佐天は死ぬ気丸を1錠、取り出し飲み込むと死ぬ気モードとなる。

「晴の炎か。後、もう一つは何だ？」

「雨の炎だぞ」

「そうか」

デイーノは佐天が右指に装着しているリングが2つあることから晴属性の炎以外にも使えるということを推測する。

「それじゃまずは死ぬ気の炎の使い方からだな。死ぬ気の炎を灯すのに必要なものは何だかわかるか？」

「覚悟ですよね」

「その通りだ。死ぬ気の炎は覚悟が強ければ強い程、純度が増していく。つまり純度が増す程、死ぬ気の炎は強くなる。故に死ぬ気の炎は覚悟の炎と呼ばれる」

「覚悟の炎……」

「そして死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギー。炎を纏った武器と炎を纏わない武器とでは攻撃力が違う」

そう言うときデイーノは自分の横の地面に向かって、おもいつきり鞭を振り下ろした。だが地面には傷一つついていなかった。

「だが死ぬ気の炎を纏わせれば……」

（大空の死ぬ気の炎!?)

そう言うときデイーノは丸めていた鞭を伸ばすと、鞭と右手の人差し指に装着している大空の死ぬ気の炎が灯る。佐天はデイーノが大空の死ぬ気の炎を使ったことに驚きを隠せないでいた。前にリボンから大空の死ぬ気の炎を持っている人物はレアだということを聞いていたからである。デイーノは死ぬ気の炎を纏った鞭をおもいつきり振り下ろす。すると先程と違い、デイーノの振り下ろした鞭は地面を破壊し、小さなクレーターができる。

「す、凄い……」

死ぬ気を炎を纏っていない時の鞭の破壊力と死ぬ気の炎を纏っている時の鞭の破壊力があまりにも違った為、佐天は驚きを隠せないでいた。

「いずれお前も武器を持って戦うことになるはずだ。といっても今のお前はまだ自分の得意な武器を見つけてねえ。とりあえず拳に炎を灯してみろ」

「拳に……」

「要領はリングに炎を灯すのと同じだ。拳をリングの代わりだと思え」

「リングの代わり……」

デイーノに言われて佐天は目を閉じ拳に力を込めて、死ぬ気の炎を灯す為に集中する。数秒後、人差し指とくすり指に装着しているリングに晴の炎と雨の炎が灯る。そこから佐天はさらに集中する。

そして

「灯った!」

佐天の両手に拳に炎が灯った。拳が灯ったことで佐天は表情をパアツと明るくする。だがすぐに炎が消えてしまう。

「あっ!」

「及第点だな。まあそれは今からやるスパリングで覚えていくぜ」

そう言うのとディーノは鞭に纏っていた炎を消して、戦闘態勢に入
た。

「遠慮はいらねえぜ。どこからでもかかってこい」

「はいっ！」

佐天は再び拳に炎を纏ってディーノに向かって行く。

「楽しそうだなディーノの奴」

「可愛い妹分ができたから、かつこいい所を見せようとしてるだけだ
ろう」

佐天とディーノのスパーリングの様子を見て、リボンとロマーリ
オは少しだけ口元を緩ませていた。

2時間後。

「はあ……はあ……」

「少し休憩するか」

「はい……」

今までと違い、今回は初めて死ぬ気の炎を放出しながらスパーリン
グをした為、いつもより疲労が激しくなっていた。死ぬ気の炎は生命
エネルギーを可視化させたものである。つまり死ぬ気の炎を使えば
使う程、疲弊し最悪の場合死に至る。ディーノは佐天の疲労具合から
休憩を取ることにする。

（死ぬ気の炎を使いながらの戦いがこんなに疲れるなんて……ツナさ
んの世界の人たちって本当に凄いな……）

佐天は死ぬ気の炎の使った戦いがここまで疲れるとは思ってもしなかった。こんな力を使いこなすツナたちの凄さを理解する。佐天たちは地面に座って休憩する。

「お前は恭弥と違って素直で助かるぜ」

「きょうや？」

「俺の弟子だ。って言ったら嫌がるんだろうけど。まあ弟子みたいなもんだ」

デイーノはツナの守護者の一人である並盛高校の風紀委員長である雲雀恭弥の姿が脳裏に浮かんでいた。

「そんなに大変なんですか？」

「すっげえ戦闘狂でな。人の言うことなんて聞きやしねえからな」

「大変ですね……」

「正直、もう勘弁して欲しいぜ。あいつと戦うのだけは」

「だったらもう戦わないようにしてあげるよ。あなたを噛み殺してね」

「へ……!?!」

デイーノがおそろおそろ後ろを振り向いた。振り向くとそこには学ランを身に纏い風紀と書かれた腕章をつけた短髪の黒髪の男がいた。

「きよ、恭弥……」

「え!? この人が!?!」

噂をしたら本当に本人が現れた為、デイーノは顔を引き攣らせ、佐天は驚きの声を上げた。

「な、何で……」

「俺が雲雀に連絡したんだぞ」

「なっ!?!」

リボーンの言葉を聞いて、デイーノは驚きの声を上げた。リボーンの横にいたロマーリオは口を押さえながら笑っていた。

「見ない顔がいるね……もしかして君、例の異世界の?」

「は、はい! 少し前からリボーン君に修行をつけてもらってます!」

「へえ。赤ん坊にねえ……」

リボーンに修行をつけてもらっていると知って雲雀は不敵な笑みを浮かべる。

「一つだけ君に教えておいておくよ。もし君がこの並盛の風紀を乱すようなら君を噛み殺す」

「っ!?!」

そう言うのと雲雀は佐天に向かって殺気を放つ。ロクに戦闘に立つたことのない佐天でも雲雀の殺気が肌で感じていた。

「さて。話も終わったし。あなたを噛み殺す」

「ちよっ! 待て! 恭弥!」

「待たない」

雲雀はトンフアーを構えて、デイーノに向かって一気に振り下ろした。デイーノはなんとか雲雀の攻撃を躲した後、両手を前に出して待つてくれと懇願するも雲雀は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

「頑張れよデイーノ。妹分にかっこ悪い所を見せたくなかつたらな」

「ふざけんな! うおっ!?!」

「余所見とは余裕だね」

(デイーノさんもツナさんと同じようにこんな風にリボーン君に振り回されたんだらうな……)

リボーンのせいで雲雀と戦うことになってしまったデイーノを見て佐天はデイーノがリボーンの生徒だった頃もこのように振り回されたのだということが容易に想像できたのだった。

標的（ターゲツト） 83 大物

デイーノに襲いかかる雲雀であったが、結局仕留め切ることは叶わず、仕事があるからと言って途中で帰って行った。

「よし。一旦、終了だぜ」

「はい……」

午前の修行が終了する。佐天は死ぬ気モードを解除する。すると額の炎が消えた。

「昼からは今の続きだ……って言いてえところなんだが、一旦、中断だぞ」

「え!? どうして!?!」

「お前に会いたいわって奴がいるんだ」

「私に?」

「ああ。とりあえず昼飯、食ったらそいつの所へ行くぞ」

昼ご飯を食べ終わると佐天たちはデイーノの車に乗せられて、リポーンが合わせたいと言っていた人の所へ向かって行く。目的地に着くと、デイーノは車を隅に寄せて停車する。佐天とリポーンは車から降りる。

「ここだぞ」

「こ、ここって……!?!」

リポーンが指を指す。そこには50階建ての超がつく程の高級ホテルだった。まさかこんな高級ホテルに自分が連れて来られるとは思ってもみなかった為、佐天はホテルを見上げながら驚いてしまっ

いた。

「俺たちは駐車場に車を置いたらホテルのロビーで待ってるからな」

「わかったぞ」

リボーンがそう言うのとデイーノは車を駐車場に置きに行く為に車を走らせて走り去って行った。

「そんじや行くぞ佐天」

「ねえリボーン君。私に会わせたい人って誰なの？」

「そいつは会ってからのお楽しみだぞ」

佐天はこれから会いに行く人物が誰なのか尋ねたが、リボーンは口元を少しだけ緩ませながら誤魔化した。

2人はホテルの中に入るとエレベーターに乗る。エレベーターは最上階へと向かって行く。

「最上階って……確かスイートルームじゃ……」

「そうだぞ」

「もしかして凄い人だったりする……？」

「どうだろうな」

こんな高級ホテルのスイートルームに泊まっているという時点で普通の人物ではないことを佐天は理解する。リボーンは佐天の質問に答えず、再び誤魔化した。

エレベーターが最上階に到着すると佐天はリボーンに着いて行く。
「この部屋だ。開けていいぞ」

(い、一体、誰なんだろう？ やっぱリマフィア関係の人なのかな……？)

会わせたい人物がいる部屋の扉の前に到着する。佐天は開けてい
いと言われた為、右手の中指を折り曲げて扉を2回ノックする。ノッ
クすると中から男性の声でどうぞという返事が帰って来る。

「し、失礼しまーす……」

佐天はおそろおそろ部屋の扉を開ける。扉を開けると部屋の1角
で花の世話をしている白髪の老人がいた。

(あつ！ この人！)

佐天はツナの記憶を見た時に目の前のいる老人が出てきたことを
思い出す。すると老人は花の世話を止めて2人の所へやって来る。

「やあ。よく来てくれたね涙子君」

「え……!?! 何で私の名前を……!?!」

記憶では見たことがあるものの、こうやって面と向かって会うのは
初めてであるのにも関わらず老人が自分の名前を知っていることに
佐天は驚きを隠せないでいた。

「リボーンから聞いているよ。君が異世界から来たことも、リボーン
の生徒で日々修行に明け暮れていることもね」

「え……じゃありボーン君の知り合いなんですか?」

「勿論。リボーンとは長い付き合いだからね。それに綱吉君を教育す
る為にリボーンを送り込んだのは私なんだから」

「リボーン君を……送り込んだ……!?!」

老人の言葉を聞いた途端、佐天の脳裏にある一つの言葉を導き出さ
れると同時に体が震え始める。

「リ、リボン君……？ も、もしかしてこの人って……」

「ああ。ボンゴレファミリーの現ボス。ボンゴレ区世だ」

「ええええええええ!?」

まさか目の前にいる老人が世界最強のマフィアの現ボスだと知って、佐天は驚きの声を上げた。

(う、嘘でしょ!? こんな優しそうな人が!?)

佐天は目の前にいる人物が9代目だということが信じられないでいた。佐天が想像していたマフィアの9代目は強面で顔の至るところに傷がある人物だと思っていたからである。

「そんなに緊張しなくてもいいよ涙子君」

「そそそ、そんなこと急に言われてたって……」

9代目が緊張しなくてもいいと言われるが、すぐに緊張が解けるはずもなかった。

「と、というか何で9代目が私に……?」

「今日は日本にいる旧友に会いに来ててね。それで君がこっちの世界で修行していることを前にリボンから聞いていたから、1度会ってみたいと思ってね」

「は、はあ……」

「すまないね。修行の途中だったのに急に呼び出してしまって」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

「立ち話も何だし座って話そうか」

「は、はい！」

佐天に会いたがっていたのはなんと9代目だった。9代目と佐天は何を話すのだろうか

標的（ターゲット） 84 佐天の選択

9代目と話す為にソファアに座ることとなった。9代目が上座に佐天とリボーンは下座に座る。9代目はルームサービスで佐天にケーキと紅茶を用意し、リボーンにエスプレッソを用意する。

「涙子君は綱吉君とはどういう風に出会ったんだい？」

「えつと……銀行強盗に襲われそうになったところを助けてくれたんです」

「そうか。綱吉君は相変わらず元気そうで何よりだ」

「その時にツナに惚れたんだよなお前」

「な、何で知ってるの!？」

銀行強盗に襲われそうになった時にリボーンは学園都市にいなかったのにも関わらず、そのことを知っていた為、佐天は顔を真っ赤にしながら動揺していた。

「どうか今、言わなくてもいいでしょ！ それも9代目の前で！」

「9代目はお前のことを知りたがってたんだ。別にいいじゃねえか」

「そこは知らなくてもいいでしょ！」

「知っておくべきだろ。お前は次期ボンゴレのボスの妻になる女なんだからな」

「つ、妻って……!?! それはまだ早いよお〜」

顔を真っ赤にしながら反抗する佐天であったが、妻という単語を聞いた途端、顔が緩みまくってしまっていた。

「ホッホッホ。若いというのはいいな。これでボンゴレの後継者も困ることはないな」

「ち、違います！ 今のは！」

佐天とリボーンの会話を聞いて9代目は笑いながらそう言った。

佐天は9代目の反応を見て、慌てて誤魔化した。それから佐天はツナと過ごした日々について語る。楽しかったことも辛かったことも全てを。

「そうか。君も色々と苦労したんだね」

9代目は佐天がなぜ強くなるうと思ったのかを知って、少しだけ悲しそうな表情かおをしていた。

「あの……」

「何かな？」

「9代目は……その……ツナさんがボンゴレファミリーの10代目になることをどう思っているんですか？」

佐天はツナがボンゴレファミリーの後継者だと知ってからずっと気になっていたことを9代目に尋ねる。

「後継者がツナさん以外にいないことは知っています。それでも聞きたくて……」

ボンゴレを継ぎたくないと言っているツナを9代目はどう思っているのか。佐天はその答えが知りたかった。

「綱吉君は弱虫で優柔不断で、優しく仲間思い過ぎる。そしていつも眉間に皺を寄せて、祈るように拳を振り戦う。決してマフィアのボスには向かない男だ」

9代目は佐天の問いに対して、自分の思っていることを正直に答え

た。

「だからこそ私は綱吉君をボンゴレ10代目を選んだ」

「え!？」

佐天は9代目の言っていることがわからないでいた。マフィアに向いていないと知っているのにも関わらずツナをボンゴレ10代目を選んだことに。

「ボンゴレは元々、マフィアではなかった」

「リボーン君から聞いています。ボンゴレファミリーの初代ボス、ボンゴレ1世ブリーモは自分たちの街と大切な人を護る為に自警団を立ち上げたんですよね？」

「その通りだ。だが2代目以降、ボンゴレはその崇高な精神を忘れられ富と権力争いに明け暮れた。そしてボンゴレは自警団からマフィアへと変貌してしまった」

デイモン
「D・スピード……」

「彼もボンゴレをマフィアにした人物の一人だろう。だが今のボンゴ

レの基礎を作ることができたのは2代目がいたからというのもある。2代目はボンゴレの歴史の中でも特に名を挙げた3人のボスの一人だからね」

いくらD・スパーDデイモンが凄くても一人だけでボンゴレを世界最強のマフィアへと変貌させるのは無理がある。Dと2代目デイモンがいたからこそボンゴレは世界最強のマフィアになったのだろうと9代目は推測する。

「だが綱吉君は違う。私利私欲の為に戦わず、大切な物たちを護る為に戦う。綱吉君こそ最もボンゴレの意思を受け継いでる人物だ。綱吉君ならボンゴレを本来の在るべき姿へと戻してくれると私は信じている」

「だからツナさんを……」

佐天は納得する。ツナならボンゴレをマフィアとしてではなく、本来の姿であった自警団へと戻してくれる人物だと確信し、ツナをボンゴレ10代目に選んだということ。

「だがボンゴレを継ぐかどうかは綱吉君自身が決めることだ。私は綱吉君の意思を尊重するつもりでいるよ」

「そうですか……」

「それと同時に涙子君。君も選択しなければならぬ」

「選択……？」

自分が一体、何を選択するのかがわからず佐天は疑問符を浮かべる。

「君は綱吉君のことをとても大切に想っている。それは友情ではなく愛情。綱吉君のことを心の底から愛し、綱吉君と一緒にいたいと心の底から願っている」

9代目の超直感かおは佐天のツナへの想いの深さを見透かしていた。いつもなら動揺している佐天であるが9代目が真面目な表情で言った為、動揺せず黙って話を聞いていた。

「仮に綱吉君がボンゴレを継いでボンゴレをどんな形にするにしろ、その道は想像を絶するものになる。逆に綱吉君がボンゴレを継がなくともボンゴレ10代目という肩書きが消える訳じゃない。敵対

ファミリーに命を狙われることだってあるだろう」

9代目は佐天にこれからツナに起こるであろう可能性を示唆する。
「君はそれでも綱吉君の傍にいたいかどうかを決めなければなら
ない」

「決める……」

「どいつてもすぐには答えは出せないだろう。だからじっくりと考えて
くれ」

「はい……」

佐天に与えられた選択。佐天はどう答えを出すのか？

標的（ターゲツト） 85 2度目の衝撃

9代目との話を終えて佐天はロビーで待っていたデイーノとロマーリオの元へ向かう。

「お。戻ったか」

「お待たせしてすみません」

「気にすんな。それよりどうだった？」

「なんか思ってた印象と違いました。マフィアのボスだからすごい怖い人かと思ってたんですけど。凄く優しい人って感じでした」

デイーノが佐天に9代目に会ってみた感想を尋ねると、佐天は正直な感想を述べた。

「9代目はボンゴレの歴代のボスの中でも初代を除く穏健派の人間だからな」

「俺たちのシマで揉め事が起きた時も応援を出してくれるって言うてくれたしな。まあ先代は断つちまったがな」

（9代目って本当に優しいんだ……）

デイーノとロマーリオから9代目のことを聞いて、佐天は9代目が優しい人物だということを理解する。

「それより涙子。リボーンはどうした？ お前と一緒にだったろ」

「あー……実は……」

デイーノは一緒に行ったはずのリボーンがいないことに気づきリボーンの居場所を尋ねる。佐天は答えにくそうな表情かおになる。

時は遡り。佐天がロビーにやって来る前に戻る。

「今日はありがとう涙子君。私の我儘に付き合ってくれて」

話を終えると9代目は笑顔でお礼を言った。するとソファから立ち上がる。

「さて。これから綱吉君の元へ行くとするか」

「え!?!」

9代目がツナの元へ行くと聞いて驚きの声を上げる。ツナは今、学園都市にいる。つまりこれから9代目は異世界転送装置を使って学園都市に行くということ。佐天は理解する。

「だ、大丈夫なんですか!?!」

「9代目の正体を知る者は学園都市にはいねえからな。それに俺が着いて行くからな」

「た、確かにリボン君がいるなら安心だけど……でもそんなことして大丈夫なの……?」

いくら9代目が学園都市に行つて狙われる可能性が低いとはいえ、ボンゴレの人たちに知れば問題になるのではないかと佐天は心配する。

「心配ないよ。私の守護者にはちゃんと許可は取つてあるからね」

「つーわけだ。お前は戻つてディーノとスパーリングしてくれ」

「う、うん……」

そして場面は戻つてホテルのロビー。

「という訳でして……」

「マジか……」

「9代目は多忙だしな……」

佐天はロビーに来る前の出来事について全て話した。佐天の話を

聞いてデイーノは驚きを隠せないでいた。ロマーリオは驚きつつも9代目の気持ちを理解していた。

「まあボスに比べればマシか……」

「え？ どういうことですか？」

「ボスは日本で面白そうなことがあるとすぐに飛行機に乗っちゃうからよ。こればかりは言うことを聞いてくれなくてな……もう胃が痛くて痛くて……」

「い、言わなくていいだろ！」

（ロマーリオさんも大変なんだな……）

佐天妹分の分の前で自分の欠点をバラされたのが恥ずかしかったのかデイーノは動揺してしまっていた。ロマーリオの話聞いて佐天はロマーリオの苦勞を知る。

一方、その頃。リボーンと9代目は。

「凄いものだな。学園都市というのは」

2人は学園都市に来ていた。自分が思っていた以上にハイテクな街であった為、9代目は感心していた。

「しかし何やら凄く見られているね」

「学園都市の人口の8割は学生だからな」

9代目は通るたちが自分のことを物珍しそうな顔で見ていることに気づく。リボーンは9代目が見られている原因を答える。学園都市の人口の8割は学生であり、老人が一人もない訳ではないが学園都市において老人を見ることは珍しいのである。

「こうして気を張らずに外に出れるのはいつ以来だろうか……」

9代目は世界最強のマフィアのボス。外に出るとなればいつ敵対ファミリー襲撃して来るかわからず常に気を張らねばならない。しかしこの世界では9代目に敵対する者はいない。なので安心して歩くことができる。9代目はそれが何よりも嬉しいのである。

「あら。リボンじゃない」

「ちやおつす。久しぶりだな美琴」

ツナのいる177支部へ向かう途中でバツタリと美琴と遭遇する。

「それで……そっちの人はもしかしてあんたの世界の人？」

「そうだぞ」

「初めまして。御坂美琴君でよかったかな？」

「え!? 何で私の苗字を!?!」

会ったこともない9代目が自分の苗字を知っていることに驚きを隠せないでいた。

その時だった

「ひったくり! 誰か捕まえて!」

「ったく……」

美琴たちの後ろの方から女学生が叫ぶ。女学生が叫んだ先には覆面を被った男がバッグを持って走り去っていた。美琴は呆れながらひったくり犯を捕らえようとする。

「へっ!?!」

美琴がひったくり犯を捕らえようとした矢先、9代目がひったくり犯の前に立ち塞がる。まさか9代目がこんな行動を取るとは思ってもみなかった為、美琴は驚きの声を上げる。

「どけえええええ! じじい!」

「能力者!? まずい!」

ひったくり犯は右手の掌に氷柱を錬成し、9代目に向かって攻撃する。相手が能力者だと知って、美琴は慌てて助けようとする。

「がっ……!?!」

「え!?!」

9代目はひったくり犯の攻撃を紙一重で躲すと足をかけて、体勢を

崩す。そして地面に倒れる前に首元に手刀を喰らわせて気絶させた。9代目があっさりとはひったくり犯を気絶させたことに美琴は驚いていた。周囲の人間はあまりにもひったくり犯をあざやかに捕らえた光景を見て拍手を送った。

「はい」

「あ、ありがとうございます！」

（あの身のこなしただ者じゃない……やっぱりマフィア関係者なの？）

9代目は持ち主の女学生の所に向かいバッグを返す。女学生は9代目に頭を下げてお礼を言った。美琴は9代目の身のこなしを見て、マフィア関係者なのではないかということ推測する。

「そうだ！ 風紀委員に連絡しない！」

「もう俺がしたぞ」

「ひったくり犯を捕らえたと聞きましたの！」

「お。噂をすればだな」

美琴が風紀委員ジャッジメントに連絡しようとしたがリボーンがすでに通報していた。その直後、黒子がレポートでやって来る。

「あっ！ お姉様！もしかしてお姉様がひったくり犯を？」

「私じゃないわ」

「え？ じゃああなたが？」

「俺でもねえぞ」

「え……？ じゃあ誰が……？」

ひったくり犯を捕らえのが美琴でもリボーンでもない知って黒子は困惑してしまう。

「私だよ」

（ご老人？）

9代目が自分がひったくり犯を捕らえたことを自供する。黒子は9代目を見て怪訝な表情する。

「少しお待ち下さい。今から犯人を捕らえますので」

9代目のことが気になった黒子であったが、先にひったくり犯を手錠で捕らえ、警備員アンチスキルに連絡した。

「お待たせいたしましたの」

「大丈夫だよ。えつと……白井黒子君でよかったかな？」

「な、なぜ私の名前を!？」

「リボーンから君のことは聞いていてね」

「え……!?!? あなたは沢田さんの世界の……!?!？」

リボーンのことを知っているということから9代目がこの世界の人間であるということを知ると黒子は確信する。

「綱吉君に会いにね。それと君たちにもね」

「私たちに?」

「ああ。君たちは綱吉君と友達と聞いていてね。1度話したいと思っ
ていてね。もし君たちがいいなら少し話がしたいんだが……」

「そうでしたか」

「私は別に構いませんわ」

「私もいいわ」

「ありがとう」

9代目の要望を黒子と美琴は承諾する。9代目は自分の我儘を了承してくれた2人にお礼にを言った。

4人は177支部へと向かう。

「ただいま戻りましたの」

「お帰りなさい白井さん。あ。御坂さんとリボーン君」

「リボーン? 何でここに? 佐天の修行は?」

ツナは元にいるはずのリボーンがここに来たことに疑問を感じる。

「お前に会いたい奴を連れて来たんだぞ」

「俺に?」

「入ってきていいぞ」

リボーンがそう言うのと扉の向こうに待機していた9代目が中へ入って来る。

「やあ綱吉君。久しぶりだね」

「ええ!？」

まさか自分に会いたい人物がまさか9代目とは思ってもみなかった為、ツナは驚きの声を上げる。

「あ。もしかして沢田さんの世界の方ですか？」

「9代目……ボンゴレファミリーの現ボス……」

「「へっ……!？」」

ツナの反応から初春は9代目がツナの世界の人なのかということを確認する。初春の問いにツナが体を震わせながら答えると初春、黒子、美琴は驚きのあまりその場で固まってしまう。

「「ええええええ!？」」

そして時間差で3人は絶叫を上げたのだった。

標的（ターゲツト） 86 美琴たちの選択

目の前にいる老人がボンゴレファミリーの9代目だと知って衝撃を受ける美琴たち。

「ど、どどっどどどうぞ……」

「ありがとう」

初春は緊張しながら9代目にお茶を用意する。9代目は笑顔で初春にお礼を言った。リボーンは念の為に外に出て、9代目の安全を確保する為に見張りについた。

（この方がボンゴレファミリーの現ボス……）

（私の想像と全然違う……）

（この人が沢田とリボーンを……）

お茶を飲んでいる9代目の姿を見ながら、黒子、初春、美琴はそんなことを思っていた。

「君が行方不明になった時はどうなるかと思っただが、元気そうで何よりだ」

「9代目も相変わらず元気そうで何よりです」

「ありがとう。それと先程、涙子君とも話してね」

「え!?! 佐天と!?!」

「ああ。リボーンから聞いていた通り、優しい女の子だったよ。何より純粋でとてもいい目をしていた。あの子は強くなるだろう」

そう言う9代目の脳裏には先程、佐天と話したいた時のことが浮かんでいた。

「あっ！ すいません！ パトロールの時間なんで一旦、失礼します！」

「構わないよ」

9代目が来たタイミングとツナのパトロールの時間が運悪く被ってしまった為、ツナは一旦席を外す。

「今日ありがとう。私の我儘に付き合ってくれて。涙子君から君たちのことも聞いたが、君たちの口からも聞きたくてね」

「い、いえ！ お気になさらないで下さいの！」

「何かあれば仕事を優先してもらって構わないからね」

「は、はい！」

流石の黒子も緊張しており声が裏返っていた。初春と美琴は黙っていたもののめちやくちや緊張していた。ここから先程、佐天と話した時と同じくツナと過ごした日々を話していく。

「沢田さんは怪我をした私の代わりに仕事を請け負ってくれましたの」

「佐天さんを……私の大切な親友を助けてくれました」

「私は自分の弱さを気づかせてくれて……」

黒子と初春は幻想御手の事件の時の出来事について語る。話していく内に3人の緊張も解けていた。

「そうか。やはり誰よりもボンゴレの意思を受け継いでいるだけあって、綱吉君に風紀委員の仕事はぴったりのようだね」

「ボンゴレの意思って……マフィアと風紀委員は全く別物じゃ……」

ボンゴレと風紀委員という相反する組織を一緒だと言う9代目の言葉に美琴は意味がわからずにいた。

「ところがそうでもないんだよ。今でこそボンゴレは世界最強のマフィアだが元々、ボンゴレは自警団だったんだ」

「「えっ！」」

世界最強のマフィアが元々、自警団だったという事実には3人は驚きを隠せないでいた。

「ボンゴレファミリーの初代ボス、ボンゴレI世の住んでいた街は警察も機能しない無法地帯だった。そこでI世は幼馴染みのGと後のシモンファミリーのボス、シモンIIコザードと共に街を護る為に自警団を立ち上げた。それがボンゴレの起源だ」

「じゃあ……」

「そう。ボンゴレは大切な者を護る為に結成された組織。本質は風紀委員と同じと云っていい」

「で、でも……じゃあ何でボンゴレはマフィアに？」

「原因はボンゴレの2代目のボス、ボンゴレII世。彼は戦いに明け暮

れ、今のボンゴレの基礎を作った。それ以降、ボンゴレは権力と利益を追求するだけの組織へと変貌し、ボンゴレの崇高な精神は忘れられてしまった」

美琴が自警団だったボンゴレがなぜマフィアになったのかを尋ねると、9代目は美琴の問いに答える。

「だが綱吉君は違う。私利私欲の為に戦わず、大切な人を護る為に戦う」

「だから……」

9代目の言葉を聞いて初春は理解する。先程、9代目がツナがボンゴレの意思を最も受け継いでいると言った理由を。

「いつも眉間に皺を寄せ、祈るように拳を振るう。だからこそ私は綱吉君をボンゴレ10代目を選んだ」

(……)

9代目の言葉を聞いて美琴の脳裏にはツナの過去を見た時の光景が浮かんでいた。9代目の言う通り、ツナは一度として喜んで戦っていなかったことを。

「綱吉君なら肥大化した今のボンゴレを在るべき姿へと戻してくれ。私はそう信じているんだよ」

「そうでしたか……」

「それと君たちには話しておかないといけないことがある。涙子君のことについてだ」

「佐天さん？ 佐天さんに何かあったんですか？」

9代目が佐天のことを話した為、初春は佐天に何かあったのではないかと心配する。

「何かあった訳じゃない。まだどうなるかもわからない。可能性の話だ」

「『可能性の話？』」

「君たちは涙子君が綱吉君のことをどう思ってるか知っているんじゃないかな？」

「それは……」

「まあ……」

「一応は……」

9代目の問いかけに黒子、美琴、初春は曖昧な返事で佐天がツナのことを好きだということを知っているということとを遠回しに答えた。「涙子君は綱吉君のことをとても大切に想っている。それは友情ではなく愛情。綱吉君のことを心の底から愛し、綱吉君と一緒にいたいと心の底から願っている。仮にたとえこの世界を離れることになったとしても。そうなった場合、涙子君は命を落とす可能性もある」

「ど、どういう意味ですか!？」

佐天^{親友}が命を落とす可能性があると知って初春は顔色を変える。黒子と美琴も初春と同じく顔色を変えていた。

「私はボンゴレファミリーを継ぐか継がないかに関しては綱吉君の意思を尊重するつもりだ。仮に綱吉君がボンゴレを継ぎボンゴレをどいう形にするにしろボンゴレの敵は多い。争いは必ず起きる。それでも涙子君は綱吉君の傍にいたいと選択する可能性は充分に考えられる。涙子君がそう選択した場合、涙子君は命を狙われる立場になる。逆に綱吉君がボンゴレを継がなくともボンゴレ10代目という肩書きが消える訳じゃない。敵対ファミリーに命を狙われることだってあるだろう」

9代目は美琴たちにこれから佐天の身に起こるであろう可能性を示唆した。

「涙子君が綱吉君と一緒にいることを選択した場合、君たちはおそらく涙子君の選択を止めることはできないだろう。だがそうなった場合、涙子君と今生の別れを告げなければならなくなるかもしれない」
「……」

9代目の言葉に美琴たちはどうすればいいのかわからないでいた。9代目の言う通り佐天がツナと一緒にいたいと選択した場合、その選択を止めることは自分たちにはできない。だが佐天がその選択をすれば2度と佐天に会えなくなるかもしれない。

「最初に言ったがこれはあくまで可能性の話だ。だがこの話が本当になった場合、君たちは覚悟しなければならぬ。大切な友達を失うかもしれない覚悟を」

(失う覚悟……)

標的（ターゲツト） 87 不吉

9代目がやって来た次の日。7月も終わり8月に入る。

「バジルの任務が長引くようなんでな。今日は俺が修行相手だぞ」

「え？ リボーン君が？」

デイーノがイタリアへ帰り、バジルの任務がまだ終わらない為、今日はリボーンが佐天の修行相手をする事となった。

「どうかしたか？」

「い、いや……まさかりボーン君が私の相手をしてくれるとは思って
もみなかったから……」

「俺はお前の家庭教師だぞ。そしてお前は俺の生徒だ。家庭教師が生徒の為に動くのは当然のことだろ。どのみち俺がお前の相手をするつもりだったがな」

そう言うとりボーンは死ぬ気丸の入った瓶を佐天に投げると、佐天は瓶をキャツチする。

「死ぬ気でこい。俺の実力はわかってんだろ」

リボーンがそう言うのと佐天に緊張が走る。佐天の脳裏にはリボーンによってボコボコにされたツナの姿に浮かんでいた。佐天は死ぬ気丸を飲み込んで死ぬ気モードになる。死ぬ気モードになると人差し指とくすり指、両腕に死ぬ気の炎が灯る。

「躊躇すんじゃないぞ。今のお前が用いる力、全てを使え」

リボーンがそう言うのと佐天は真正面からリボーンに向かって行く。
が、

「え……!?!」

佐天の視界からリボーンの姿が消える。リボーンに攻撃しようとした佐天であったが、リボーンがどこに行ったのかわからず攻撃の手を止める。そして辺りを見回してリボーンを捜す。

「こっちだ」

「っ!?!」

佐天の後方からリボーンの声聞こえる。急にリボーンの声がし

た為、佐天はドキツとしてしまう。

「い、いつの間に……」

「今のが実戦ならお前は確実に死んでたぞ」

佐天は後方にいるリボーンの方を振り返る。そこには銃口を向けているリボーンがいた。

「視覚にだけ頼るな。相手の動きを見ることは大事だが、視覚だけに頼ってちゃ生き残れねえぞ。相手の動きを見るのと同時に殺気を感じろ」

「殺気……」

殺気と言われて佐天は雲雀が自分に向けられた時のことを思い出す。身の毛がよだつあの感覚を。

「雲雀の殺気はあんなもんじゃねえぞ。雲雀はツナの守護者の中で最強。あんなの雲雀にとってはお遊びに過ぎねえからな」

「お遊び……」

前に放った雲雀の殺気がお遊び程度だと知って、佐天は衝撃を受けていた。

「ま。あいつの全力の殺気でも、俺の殺気と比べれば天と地程の差があるがな」

(っ!?)

そう言った瞬間、リボーンは佐天に向けて殺気を放った。リボーンの殺気を受けた途端、佐天の体が震え始め、金縛りにでもあったかのように動かなくなる。

(痛い……何もしてないのに体が痛い……)

リボーンの殺気を体の全身を小さな針で刺されたかのような感覚に佐天は陥っていた。数秒後、リボーンは殺気を解いた。

(リボーン君は何の攻撃もしてないのに……)

リボーンの殺気を受けただけで佐天は大量の汗をかき、疲弊してしまっていた。

「怖かっただろ?」

「う、うん……」

「恐怖に吞まれば動けなくなり、思考はめちやくちやになり、闘争心

を折られる。そうなつちまえば後は殺されるだけだ」

「っ……!?!」

リボーンの言葉を聞いて佐天は固唾を飲む。先程のリボーンの殺気で自分は全く動くことができなかった。これが実戦であれば確実に殺されていたことを佐天は理解していた。

「恐怖することは悪いことじゃねえ。むしろ恐怖を感じないのは無謀だ。全く勝ち目のない相手に対して何も感じなければ殺されるだけだからな。恐怖に従い、戦いから逃げることも立派な戦いだ」

リボーンは恐怖が悪いことだけではないということ佐天に伝える。

「だが恐怖してばかりじゃ意味はねえ。時には無理だと思っても戦わなきゃいけない時だってある。勝たなきゃいけない時だってある。そんな時にビビってばかりじゃ成長しねえ。極限の命のやり取りの中でこそ人は大きく成長するからな」

「じゃ、じゃあどうするの……?」

「死ぬ気で戦え。それだけだ」

「死ぬ気で……」

「死ぬ気とは迷わないことだ。己の魂に刻んだ絶対に譲れないもの……自分の誇りの為に戦え。それさえあれば恐怖に打ち勝てるはずだぞ」

「誇り……」

誇りと聞いて佐天は自分の譲れないものについて考える。だがすぐに答えは出なかった。

「さあ修行の続きだぞ」

「う、うんー」

ここから佐天とリボーンのスパーリングが始まって行く。

「はあ……はあ……はあ……」

修行開始から3時間が経過する。バジルやディーノにも一撃を見舞うことすら叶わなかったのに世界最強の殺し屋に一撃見舞うことなど到底、無理は話だった。

「とりあえず一旦、休憩するぞ」

これ以上、続けるのは無理だとリボーンは判断し、佐天に休憩することを伝える。

その時だった

「ん？」

突如、ブチツという音が聞こえリボーンの足元に何か落ちる。リボーンの足元には緑色の小さな物体が落ちていた。それはリボーンの相棒であるレオンの尻尾だった。

「まさかな……」

自分の足元に落ちたレオンの尻尾を見て、リボーンはそう呟く。
果たしてこれが意味するものとは!?

標的（ターゲット） 88 忍び寄る魔の手

「レ、レオンの尻尾が!?!」

突如、レオンの尻尾が何の前ぶりもなく切れた為、佐天は驚きを隠せないでいた。するとレオンは扇風機、本棚、バット、スマホと次々に変形していく。

「な、なんか次々に変形してるけど!?!」

「尻尾が切れて形状記憶の制御ができなくなっちゃったんだ」

「だ、大丈夫なの……?」

「大丈夫じゃねえな」

「大丈夫じゃないって……」

「レオンもそうだが、一番大丈夫じゃないのは佐天。お前だぞ」

「え!?!」

形状記憶の制御を失って色んなものに変形するレオンよりも、自分が一番大丈夫ではないという意味がわからず佐天は驚きを隠せないでいた。

「ど、どういうこと……!?!」

「レオンの尻尾が切れる時。俺の生徒はいつも死にかけるんだ」

「えっ……」

リボーンに死にかけると言われて佐天の頭は真っ白になってしまっていた。

（まあツナっていうことも考えられるが……ツナは2年前にレオンの尻尾が切れた上にあれから成長してるからな……）

リボーンは佐天と同じ生徒であるツナが死にかけるのではないかということを考えるが、前に一度レオンの尻尾が切れたこと、あの頃のツナと今のツナの強さは比べものにならないくらい成長しているという点からツナが死にかけるという線は薄いと判断した。

「十中八九。死にかけるのはお前だな」

「ど、どうしよう！ リボーン君！」

「どうするも何もねえだろ。死にかけねえように死ぬ気で頑張るしかねえだろ」

自分が死にかけるかもしれないと知って佐天はどうすればいいかわからず慌ててしまう。いつ、どこで、どのような形で佐天が死にかけるのが全くわからない為、リボーンは佐天の問いにそう答えることしかできなかった。

その時だった

「ん？」

「手紙？」

リボーンの目の前に一匹のカラスが止まる。カラスの口には一枚の手紙が咥えられていた。リボーンがカラスが咥えていた手紙を受け取るとカラスは再び空へと飛び立って行く。

「こいつは……」

リボーンは手紙を裏返す。そこには差出人の名前がイタリア語で書いてあった。リボーンは差出人の名前を見て、怪訝な表情をした。た。

「どうしたの？もしかしてボンゴレの人から？」

「9代目からだ」

「9代目から？」

手紙の差出人が9代目からと知って佐天は少しだけ驚いてしまっていた。リボーンは折り畳まれていた手紙を開く。そこにはイタリア語の文章、さらに文章の上には大空の死ぬ気の炎が灯っていた。

「死ぬ気の炎!？」

「死炎印だ」

「死炎印？」

手紙に死ぬ気の炎が灯っている炎が死炎印だということをリボーンは確信する。死炎印という聞いたことのない単語に佐天は疑問符を浮かべる。

「死ぬ気の炎は指紋や声紋と同じ、個人個人で性質や形が異なるんだ。同じ属性でもな」

「え!? そうなの!？」

「だからこうして自分の死ぬ気の炎を手紙に灯すことで、本人だということを証明するんだ」

「成る程……それで何て書いてあるの?」

リボーンの説明を効いて、佐天は死炎印の役割を理解すると手紙になんて書いてあるかと尋ねる。リボーンは手紙を黙読していく。

「成る程な……」

「何て書いてあったの?」

「なーに。今年の中元の話だ。何がいかつてな?」

「中元って……」

自分が死にかけるかもしれないという状況で9代目が中元の話をしてきた為、佐天は気が抜けてしまっていた。

「とりあえず先に昼飯、食ってる佐天」

「え? どこに行くのリボーン君?」

「俺はエスプレッソ買いに行つて来る」

「え……ちよつ……!？」

佐天はリボーンを制止しようとするが、リボーンはさっさと山を降りてエスプレッソを買いに行つてしまう。

???

「行つたか……これで奴は一人だ」

「もうリボン君つてば……人が死にかけるかもしれないって時に……」

おにぎりを食べながら佐天は呟く。自分が死にかけるかもしれないというこの状況でリボンが呑気にエスプレッソを買いに行った為、少し不機嫌になっていた。

「死にかける……私が……」

いきなり死にかけると言われて佐天は不安で不安で仕方なかった。

「浮かない表情かおしてどうしたのかな？ お嬢さん？」

「え？」

佐天が色々と考え込んでいると知らない男の声が聞こえる。佐天が前を見るとそこには白衣を身に纏い、赤い髪に右頬に紫色の蠍の刺青をいれている男が現れた。

「あ、あの……あなたは……？」

「なーに。浮かない表情かおした女を見たら手を差しのべるとというのが男の法則というものだ」

「はあ……」

佐天は男の問いどう答えていいかわからず、困惑してしまっていた。

「まあ捕えるべき対象……となればその法則も変わるんだが」

「え!？」

ニコニコしていた男は急に目を開き黒い笑みを浮かべる。

標的（ターゲット） 89 目的

佐天の目の前に現れた謎の男。

「待っていたよ。お前が一人になるこの時をな」

（この人……ヤバイ……!?!）

不気味な笑みを浮かべる男を見て佐天は顔を真っ青にし、恐怖していた。

「一人？ 本当にそう思ってたのか？」

「っ!?!」

「リボーン君！」

突如、佐天の後ろからリボーンの声がする。男はリボーンを睨み、佐天は後ろを振り向いた。リボーンの背中には繭となったレオンが背負われていた。

「俺がいなくなれば姿を現すと思っていただけ」

「貴様……!?! なぜ私がここに来るとわかった……!?!」

「アルコバレーノ……?！」

男はなぜ自分がここに来るということをリボーンが知っていたのかわからないでいた。

「9代目がお前が来たという情報を掴んでいたからな」

（あの手紙って……!?!）

佐天はリボーンという言葉から先程、リボーンに届いた手紙の内容がこの男が日本に来たということ伝えるものだったということとを推測する。そして中元の話とエスプレッソの嘘であるということとを理解する。

「赤い髪にその頬の蠍の刺青。お前クイエーテ・アッタートだな」

「クイエーテ……?！」

「クイエーテ・アッタート。南イタリアを活動拠点とするフリーの殺し屋だ。金さえ払えばどんな任務でもこなす男で、頬にある刺青を見て生き残った者はいないと言われている」

「私の行動の法則まで知っているとは流石は呪われた赤ん坊、アルコ

バレーノ」

「呪われた赤ん坊……？ アルコバレーノ……？」

クイエーテがリボーンのことをそう言ったが、佐天は何のことかわからず疑問符を浮かべる。

「にしてもどうやって俺に察知されず佐天に近づいた？」

「貴様を監視すれば返り撃ちにされるのは誰もが知っている法則だ。どんな方法で気配を消そうと貴様に我々の法則など通用せん。だつたら気配のない超小型の監視カメラで監視すればいい」

「成る程な。この辺り一帯に超小型の監視カメラを放っていたってことか」

「まあ意味を成さなかったがな」

「にしても南イタリアを拠点にするお前がわざわざ日本に来るなんて解せねえな」

「それは他人が勝手に思っている法則だ。南イタリアを拠点にしていたのは金集めに過ぎん」

「佐天を狙ったのはツナを捕える為の人質か」

「察しがいいな。流石はアルコバレーノ」

「え……!?!」

クイエーテの狙いが自分とツナであると知って、佐天は驚きの声を上げる。

「沢田綱吉を殺しマフィア界の転覆を謀り、この私がマフィア界の法則を変える」

「ツナさんを……殺す……!?!」

クイエーテの目的を知って佐天は驚きのあまり頭が真っ白になってしまっていた。

「そしてあの男もな」

「あの男？」

「そのことについて話すつもりはない。これで話は終わりだ」

そう言うクイエーテは懐からリングと赤い正方形の匣を取り出した。

「匣 ボックス 兵器か」

リボーンはクイエーテの持っているものが匣^{ボックス}兵器だということを確信する。匣^{ボックス}兵器。未来の技術の一つで、物や匣^{ボックス}アニマルを匣に収めることができるアイテムである。未来の戦いで記憶を受け取った元最強の赤ん坊の一人、ヴェルデが記憶を元に作ることに成功し、そこから匣^{ボックス}が普及したのである。

「その通りだ」

クイエーテはリングを右手の中指に装着すると、リングに嵐属性の炎が灯る。そしてクイエーテは匣^{ボックス}に炎を注入すると、中から錫杖が出てくる。

バストラール・デイ・テンベスタ
「嵐の錫杖」

「箱の中から杖が……これって……!?!」

小さな箱から収まるはずのない錫杖が出てきたのを見て、佐天はツナのリングからナッツが出てきたのと同じ技術だということを理解する。

「私に勝ち目がないのはわかっている。仮にここから離脱することができたとしても私の存在が知られた時点で計画を達成するのは不可能。次の好機^{チャンス}はない。だから私の野望を達成するには貴様を葬り、その女を捕える以外の道などない」

「俺が手を下すまでもねえ。お前は佐天がぶっ飛ばすからな」

「な、何言ってるのりボーン君!?!」

まさかここで自分が戦うことになるとは思ってもみなかったのか、佐天は驚きの声を上げる。

「その女が私を? 馬鹿にしているのかアルコバレーノ。その女が修行しているのは知っている。だが私には到底、及ばない。その女はマフィア^{この世界}界の法則すら理解できていないような未熟な女だ」

「超一流の家庭教師の俺が鍛えてんだ。お前ごときが勝てる訳ねえだろ」

「ちよつ!?! りボーン君! いくら何でも無理だつて!」

佐天がクイエーテに負けるとは微塵も思っていないりボーンは自信満々の表情^{かお}でそう宣言した。佐天はりボーンに無理だと言うが、りボーンは自信満々の表情^{かお}を崩さなかった。

「狙われてんのはお前だ。俺は出さねえからな。自分でなんとかしやがれ」

そう言うとりボーンは死ぬ気丸を取り出すと、佐天の口に向かって投げた。佐天はそのまま死ぬ気丸を飲み込んでしまい、そのまま死ぬ気モードとなる。

「それと死ぬ気丸は今ので最後だからな。死ぬ気モードが解けたらもう死ぬ気モードにはなれないからな」

「え!?!」

死ぬ気丸は今のが最後だけという最悪の状況。佐天の運命はいかに!?

標的（ターゲット） 90 護りたい、目覚めの時

リボーンが手を出さない、死ぬ気丸が今、飲み込んだのが最後という最悪の状況でクイエーテと戦うこととなってしまった佐天。

（ど、どうしよう……リボーン君は戦う気がないみたいだし……）

初めての命をかけた戦闘。いくら修行したとはいえ、普通の女子中学生の佐天が不安にならない訳がなかった。

（でも私が捕まったらツナさんが……）

だがここで自分が捕まってしまえばツナが殺される。リボーンが戦う気がない以上、自分が戦う以外の選択肢はなかった。

「隙だらけだな」

「っ……!?!」

クイエーテは一気に佐天の間合いに移動し、佐天の斜め右の下から、片手で錫杖をおもいつきり薙ぎ払う。佐天は飛び引いて躲した。「ほう。流石はアルコバレーノの修行を受けただけあって、戦闘の法則を全く理解してはい訳ではないということか」

佐天の躲し方を見て、簡単にはいかないとクイエーテは判断し、口元を少しだけ緩ませると両足の裏から炎を噴出して空を飛ぶ。

「空に……!?!」

「狂嵐殺人術。弑いちの刑。天てん嵐げん墜らん」

「きやあー!」

クイエーテは急降下して佐天に向かって錫杖を突き刺す。佐天は再び飛び引いてなんとか躲すが、攻撃の余波で吹っ飛んでしまう。

「いくら加減したとはいえ私の狂嵐殺人術を躲すか」

「狂嵐……殺人術……?」

「狂嵐殺人術。クイエーテが独自に編み出した独自の殺人術のことだ」

「その通りだ。私の頭脳と嵐属性の特徴である分解が掛け合わせることで生まれた新たな法則にして、最強の殺人術だ。これで私は数多の

人間を葬ってきた。私を葬ろうとした連中もあらゆる手段を持って私を葬ろうとしたが、私の法則を破れるものはいなかった」

リボーンはクイエーテの狂嵐殺人術について説明する。クイエーテは狂嵐殺人術の戦歴についての自慢する。

「しかしどうしたのやら……捕まえなければならぬから加減してしまふな。しかし加減しては捕えることはできない」

クイエーテは左手の親指と人差し指を顎に起きながら、どうやって佐天を捕えようか考える。

「仕方がない。半殺しにするか」

「っ!？」

クイエーテは無表情で冷徹な言葉を放つと、錫杖を佐天に向かって向ける。するとクイエーテの錫杖の先端がドリルのように高速回転し始める。佐天は錫杖の先端が高速回転するとは思ってもいなかったのか、驚きの表情を浮かべていた。

「狂嵐殺人術。式にの刑。刺嵐しらんき狂幽きやうゆう」

(近づいたらヤバイ!)

クイエーテは回転した錫杖で連続で突きを繰り出しながら突っ込んでいく。佐天は近づいたらまずいと思ったのその場から離れていく。

「いい判断だがこの程度の嘘ウソに気づかないとはな。やはり戦闘の法則を理解していないようだ」

そう言ってクイエーテが何度か突きを繰り出した後、錫杖の先端が持ち手の部分から分離し、勢いよく佐天に向かって行く。

「え……!？」

「狂嵐殺人術。肆よんの刑。破嵐はらんき凶悠きゆうゆう」

「グハッ!」

錫杖の先端が佐天の腹部に直撃する。佐天は腹部を押さえながら両膝をつく。切り離れた先端にワイヤーがついており、先端部分が持ち手の部分へと戻っていく。戻っていくと同時にクイエーテは再び佐天に突っ込んでいく。

「やあー!」

「狂嵐殺人術。貳の刑。嵐伝掌玉」

「グハッ！」

佐天は痛みには耐えながらクイエーテに向かって炎を纏った拳を放つがクイエーテは余裕で躲し、左手で佐天の腹部に掌底を叩き込んだ。掌底を叩き込まれた佐天は吹き飛ばされてしまう。

「狂嵐殺人術。伍の刑。炎卍竜嵐」

回転された錫杖の先端部分に炎を灯すと、クイエーテはそのまま錫杖を薙ぎ払う。回転した錫杖の先端と炎によって竜巻が発生する。

「きやあー！」

竜巻によって佐天は宙に吹き飛ばされ、同時に嵐の属性の炎によってダメージを受けてしまう。

「狂嵐殺人術。六の刑。翔刀嵐巖」

「グホッ……!?!」

クイエーテは両足から炎を噴出して再び空を飛ぶと、宙に舞う佐天の腹部に錫杖の先端を叩き込む。そして佐天はそのまま地面に落下してしまう。

(い、息が……!?!)

腹部にダメージを受け過ぎたせいかわ佐天は呼吸困難に陥っていた。それでもなんとか呼吸をしてなんとか呼吸困難から佐天はなんとか脱却し立ち上がるも、膝が震えており立っているのもやっとの状態だった。

「炎卍竜嵐以外、死ぬ気の炎すら使っていないというのに。まあ今まで誰も破られたことのない私の狂嵐殺人術を戦闘の法則すらほとんど知らないお前ごときに破られる訳もないか……これで私に勝つなどどよく言えたものだなアルコバレーノ」

「嘘じゃねえぞ。お前は佐天がぶっ飛ばすからな」

「まだ言うか」

「っ!?!」

そう言うときクイエーテは佐天に向かって殺気を放つ。殺気を受けた佐天はあまりの恐怖に腰を抜かし、動揺で死ぬ気モードが解けてしまっていた。

「この程度の殺気を受けて戦えないような奴がどうやったら私に勝てるというのだ？」

（怖い……怖い……無理だ！ 私じゃ勝てない！ でもこのままじゃツナさんが！ どうしよう！ どうしよう！ どうしよう！）

クイエーテの殺気を受けて佐天は恐怖で体が震えて、思考回路はめちゃくちゃになっていた。

「何してやがる佐天。さっさとなんとかしやがれ」

「無茶言わないでよ！」

「無茶じゃねえぞ。デイナーやツナも越えてきた道だぞ」

「デイナーさんとツナさんが……って！ 私は2人とは違うよ！ 私には無理だよ！ だから助けてよ！」

「いつまで甘えてるつもりだてめえは」

「え……!?!」

リボーンは佐天に近づくと、佐天の胸ぐらを掴んだ。

「てめえ言ったよな。ツナの過去を見てそれで強くなりたたって」

「で、でも……今の私じゃ……」

「後悔したくないんじゃないのか？」

「そ、それは……」

『もう後悔したくないの。私にだって護りたい人がいるから』

リボーンが第1段階の修行の時に佐天が言った言葉を言う。リボーンの発言で佐天は自分の言った言葉を思い出す。

「てめえの弱さのせいでお前の惚れた男は殺されるんだぞ。それでも後悔することになるんだぞ。それでもいいのかって聞いてんだ」

「で、でも……どうしたら……」

リボーンの問いかけに佐天はどうしたらいいかわからずいた。

「お前の気持ちを吐き出せ。お前自身の……お前だけの答えを」

「私の……気持ち……？」

自分の気持ちと言われて佐天は顔を俯かせて黙ってしまふ。

「何だあの男に惚れてたのか。だったら私が沢田綱吉を殺した後にいくらでも会わせてやる。あの世でな」

「たい……」

クイエーテが不気味な笑みを浮かべながらそう言うと、佐天はボソッと何かを呟いた。

「ツナさんを……護りたい……」

佐天の脳裏には笑っているツナの姿が浮かんでいた。

「私の大好きな人に酷いことをしようとするお前だけには……絶対に……絶対に負けたくない！」

佐天が自分の気持ちを吐き出すと、リボーンは少しだけ口元を緩ませていた。

その時だった

「え……!?!」

「な、何だ!?!」

突如、リボーンの中で繭となっていたレオンが光り輝き始める。

突如、輝き始めたレオン。一体、何が!?!

標的（ターゲツト） 91 佐天、覚醒

レオンが光り輝き始めると上空へ飛んで行く。そして繭となったレオンの体から無数の糸が飛び出して行く。

「レオンが……!? 何が起きて……!?」

「何だこれは……!?」

レオンの様子がいきなり変化したことに佐天とクイエーテは驚きを隠せないでいた。

「羽化したな」

「羽化……!? どういうこと……!?」

「レオンは形状記憶カメレオン。どういうわけか生徒に試練が訪れるのを予知すると、繭になる。そして俺の生徒が成長すると羽化するんだ」

「成長って……じゃあ……」

佐天は理解する。先程、自分の気持ちを吐いたことがきっかけとなりレオンは羽化したのだということ。

「私の知らない法則を見せてくれたのは面白いが、ペットが羽化したからなんだと言うんだ」

「そ、そうだよ！ レオンが羽化したからって……」

「慌てんな佐天。レオンを見てみる」

「レオンを？」

リポーンに言われて佐天はレオンのいる上空を見上げる。するとレオンは少しづつ膨らんでいた。

「レオンが膨らんで……」

「新アイテムを吐き出すぞ。俺の生徒であるお前専用のな」

「え!? 私の!?」

「ああ。ディーノの時は跳ね馬の鞭とエンツイオを吐き出したんだ」

「ええ!? レオンがエンツイオを吐き出したの!?」

エンツイオがレオンを生んだと知って佐天は驚きの声を上げる。鷹が鷹を生むということわざがある。平凡な親から優れた子供を生むというものの例えである。しかしあくまでもものの例えであり、本当

に鳶から鷹が生まれる訳ではない。ましてやカメレオンから亀が生まれることなど絶対にありえはしない。

「そしてツナの際はXグロ^{イクス}ーブ。27つて書かれた毛糸の手袋って言えばわかるか？」

「それって……!?!」

佐天の脳裏にはツナが戦う時に使っているボンゴレギアが浮かんでいた。元々、レオンが吐き出したのはボンゴレギアではなくXグ^{イクス}ロ^ブーブ。ボンゴレI世^{ブリーモ}が使っていたものと同じものである。そしてXグ^{イクス}ロ^ブーブをパワーアップさせたものがボンゴレギアである。

「盛り上がっているところ悪いんだが。私も暇ではなくてね。隙だらけの敵を前にして襲撃しないという法則はどこにもないのだよ」

これだけ隙だらけの敵を前にして何もしない程、クイエーテは馬鹿ではなかった。クイエーテが佐天を襲撃しようと歩き出す。

「るせえぞ」

「っ!」

「俺の生徒が成長するところだ。邪魔すんじゃないやねえ」

(凄い……殺気だけで……)

リボーンが殺気を放ち、ドスの効いた声でそう言う。クイエーテは金縛りにかかったのごとく、動けなくなってしまう。佐天は殺気だけでクイエーテを動けなくさせたことに驚きを隠せないでいた。

「お」

そしてついにレオンは佐天に向かって新^{ニュー}アイテムを吐き出した。吐き出されたアイテムが佐天の前へとゆっくりと落ちて行く。

「こ、これって……!?!」

「まさかな」

佐天の前に落ちてきたのは赤い炎のマークが入った黄色い弾丸。そして310と書かれた白い手袋だった。

「佐天。そいつをつけろ」

「う、うん!」

(特殊弾……!?!)

リボーンに言われて佐天は手袋を装着する。リボーンは特殊弾を

左手の親指と人差し指で摘まむ。クイエーテは特殊弾を見て表情を歪ませていた。何か怨みでみあるかのよう。

「見たことねえ弾丸だたまな。ぶつつけ本番で試すしかねえな」
「ぶつつけ本番って……まさか!？」

リボーンはレオンが吐き出した特殊弾を見るがどうやら初見だったらしく、この特殊弾の効果がわからなかった。佐天はリボーンの言葉を聞いて今から特殊弾を撃たれるということを理解し顔を青ざめる。そうこうしている内にリボーンは特殊弾を自身の愛銃に装填する。

「ま、待って!… まだ私は……!？」

ズガアン!

佐天の制止を聞かずにリボーンは佐天の額に容赦なく特殊弾をぶち込んだ。特殊弾をぶち込まれた佐天は仰向けの状態で倒れてしまう。

(あれ?… 痛くない……?)

額に弾丸を受けたのにも関わらず、佐天の意識はしつかりしており、それどころか痛みもなかった。

(頭に何か入ってる?)

佐天は自分の頭の中に何かが入ってくることに気づく。

『目の前で襲われそうになってる女の子を放っておけないんでな』
(これって……初めて私がツナさんと出会った時の……)

佐天が見たのは銀行強盗から襲われそうになった自分をツナが助けてくれた時の出来事。ツナと初めて出会った時の話だった。そこからツナと過ごした日々が流れていく。

「恋慕弾の効果だな。今、見ているのはお前が最も好きなツナと過ごした日々だ」

(れ、恋慕弾?!… こんな時にまで私はツナさんのことを!?)

こんな状況で想ツナい人との思い出を見ないといけないと知って、佐天は顔を真っ赤にし動揺してしまっていた。

『俺が……いや俺たちが佐天を助ける方法を見つげるから! 絶対に! だから諦めないで佐天!』

レブルアツパー
幻想御手の副作用で昏睡状態になる前に、ツナが電話越しで絶対に

助けると約束してくれた時の出来事。

『頼むから……返事を……佐天……』

「……」

そして昏睡状態になった自分を見て、ツナがボロボロと涙を溢した時の出来事が映像で流れる。涙を流すツナの姿を見て佐天は齒を食い縛り、拳を強く握る。

「どうやら覚悟は決まったみてえだな」

リボンが口元を緩ませると佐天はゆっくりと立ち上がっていく。

「クイエーテ……お前を倒さなければ……死んでも死にきれない！」

佐天の額に晴の炎が灯り、手袋がⅢとⅩと書かれた黒いグローブへと変貌していく。

佐天、覚醒！

標的（ターゲツト） 92 圧倒

ついに力に目覚めた佐天。

（これが私の力……死ぬ気モードの時よりもさらに力が沸いてくる……）

佐天はXグロブを見ながら、自分の力が漲ってくるのを体で感じていた。

『死ぬ気の炎は覚悟が強ければ強い程、純度が増していく。つまり純度が増す程、死ぬ気の炎は強くなる。故に死ぬ気の炎は覚悟の炎と呼ばれる』

『死ぬ気とは迷わないことだ。己の魂に刻んだ絶対に譲れないもの……自分の誇りの為に戦え。それさえあれば恐怖に打ち勝てるはずだぞ』

佐天は前に兄弟子と家庭教師が教えてくれた言葉を思い出す。

（今ならわかる。私の誇り。いや……ずっと前からわかってた……）

佐天は目を閉じてこれまでにあった自分の出来事について思い出していく。

（私はツナのが好き。そして憧れてた。ただ強いだけじゃなくて、優しくて、友達を護る為に戦うツナが……）

佐天の脳裏には先程、恋慕弾を撃たれ時に見た映像が浮かんでいた。

（ツナのようにになりたい。ツナと一緒にいたい。ツナの笑顔を守りたい。ツナへの想い。それこそが私の誇り」

佐天が両目をカツと見開くと、Xグロブと、リングにこれまでとは比べものにならないくらい程の純度の高い炎が灯る。

「待たせたわねクイエーテ。ようやくできたわ。お前を倒す準備が」
「確かに純度は上がった。だが戦闘経験の乏しい貴様ごときに……私の法則は破れはしない！」

クイエーテは佐天に向かって走って行く。佐天は動揺することなく、その場で佇んでいた。

「狂嵐殺人術。弑の刑。刺嵐狂幽」

クイエーテは回転した錫杖の先端を佐天に向かって連続で繰り出す。

「なっ!？」

佐天はその場から一步も動くことなく、クイエーテの突きを全て躲していた。

「遅いわ」

「ゴハッ!」

佐天はクイエーテの突きをしばらく躲すと、左手で錫杖の持ち手の部分を掴み、右手でクイエーテの顔面に拳を叩き込んだ。

(何だ……!?! 急に力が……!?! これが特殊弾の効果か……!?!)

クイエーテは顔面を押しえながら佐天の力の増大に驚いていた。

「恋慕弾の効果だぞ。佐天の静なる闘志が引き出されたんだぞ」

「静なる……闘志……?」

「さっきまでの死ぬ気モードは死ぬ気弾を撃たれた時と同じで外部からリミッターを解除された状態だ。それに対して、恋慕弾は佐天自身の秘めたる意志を気づかせることで内面から全身のリミッターを外す弾だからだな」

「くっ!」

リボーンの恋慕弾の説明を聞いて、クイエーテは再び表情を歪ませていた。

「1発、当てたぐらいで調子に乗るな!」

クイエーテは佐天に向かって錫杖の先端を向ける。

「狂嵐殺人術。肆よんの刑。破嵐凶悠はらんきゆうゆう!」

錫杖の先端が持ち手の部分が分離し、炎を纏った錫杖の先端が佐天に向かって行く。

「はあ!」

「なっ!?!」

佐天は両手を前に出して炎の壁を展開する。佐天の炎によって錫杖の先端は上空に弾け飛んでいく。

「なんてな」

クイエーテは釣竿を振り下ろすかのように、錫杖の持ち手を両手で

おもいつきり振り下ろした。

「狂嵐殺人術。☒の刑。御嵐怒砲」

「くっ！」

佐天は急降下した錫杖の先端を紙一重でなんとか躲すことに成功する。

「狂嵐殺人術。捌の刑。超神赤嵐」

クイエーテはハンマー投げをする時と同じように、自分自身を回転させる。それに比例して錫杖の先端がもの凄い勢いで回転する。

「ぐっ！」

佐天は炎の壁を展開する時間はなく、咄嗟に両手を縦にし、グローブの甲でクイエーテの攻撃を防御する。だが勢いまでは防ぎ切ることができず、そのまま吹き飛ばされ崖に激突し、その余波で崖が崩れ佐天は瓦礫に埋もれてしまう。

「K11/2mv・。物体は速くなればなる程、パワーを増すという法則だ。つまり回転によってスピード強化された私の攻撃を防ぐことなどできはしないのさ」

そう言うクイエーテは飛ばした錫杖の先端を元に戻した。

「強化されてこの程度？」

「っ!？」

佐天の声があると佐天を覆っていた瓦礫が勢いよく吹き飛んで行く。瓦礫が吹き飛ぶとそこには何事もなかったかのように佇んでいる佐天がいた。

「お前の実力がこんなものなら拍子抜けだわ」

「私の攻撃を防ぐこともできなかった奴の台詞とは到底、思えないな」
そう言うとき再びクイエーテは錫杖の先端を分離させると、その場で回転し始める。

「そんなに言うのであれば破ってみろ！」

回転が加わることで凶器と化した錫杖の先端が再び佐天に迫っていく。

『恐怖することは悪いことじゃねえ。むしろ恐怖を感じないのは無謀だ。全く勝ち目のない相手に対して何も感じなければ殺されるだけ』

だからな。恐怖に従い、戦いから逃げることも立派な戦いだ』

『だが恐怖してばかりじゃ意味はねえ。時には無理だと思っても戦わなきゃいけない時だってある。勝たなきゃいけない時だってある。そんな時にビビってばかりじゃ成長しねえ。極限の命のやり取りの中でこそ人は大きく成長するからな』

『死ぬ気とは迷わないことだ。己の魂に刻んだ絶対に譲れないもの……自分の誇りの為に戦え。それさえあれば恐怖に打ち勝てるはずだぞ』

錫杖の先端が近づいて行く中、佐天はリボーンが教えてくれた言葉を思い出していた。そして佐天はクイエーテの攻撃の中へと突っ込んで行く。

「何!?!」

錫杖の先端が佐天に顔へ近づく。佐天はしゃがんでギリギリの所で躲し、錫杖の先端に繋がれていたワイヤーを両手で掴む。

「お返しよ」

佐天はそのままワイヤーごとクイエーテを引っ張って手繰り寄せ

る。

「はあー!」

「ゴハッ!?!」

自分の間合いに引き寄せたクイエーテの腹部に佐天は拳を叩き

込んだ。

「嵐伝掌玉!」

クイエーテは炎を纏った掌底を佐天に繰り出す。だが掌底が佐天に叩き込まれる前に、佐天はジャンプして躲すと同時に後方に移動する。

「遅いわ」

「グフツ!?!」

そして佐天はクイエーテの背中に拳を叩き込んだ。背中拳を叩き込まれたクイエーテはそのまま吹っ飛び、崖に激突する。

(一旦、上空に……)

クイエーテはなんとか立ち上がると、両足に炎を噴射して上空へと

逃げる。

(遠距離攻撃で隙を作り、攻撃してくる範囲を絞る)

クイエーテは上昇しながら次の手を考える作戦に移る為に、錫杖を構える。

「なっ……!?!」

攻撃しようとした矢先、クイエーテは驚いていた。なぜなら佐天が自分と同じ速度で移動していたからである。

「ゴハッ!」

佐天は空中でバク宙しクイエーテの顎に蹴りを喰らわせる。佐天はさらに上昇し、クイエーテの上を取る。

「終わりよ」

「ガハッ!?!」

クイエーテは顔面に佐天の拳をモロに喰らい、そのまま一気に急降下し地面に叩きつけられた。

(なぜだ……なぜ……!?!)

クイエーテはわからなかった。ロクに戦闘に立ったことのない佐天にこうも自分が圧倒されているのかということに。

「お前の動きが遅くなってんだぞ。クイエーテ」

「遅く……まさか!」

クイエーテは気づく。先程、佐天が自分に追い付くことができたのは佐天の副属性である雨属性の炎の力であるということに。

「いやー。私は雨属性の炎を受けた覚えはない! 受けたとしてもどういう法則で……まさか!」

クイエーテは気づく。佐天がワイヤーで自分を引っ張った時に、ワイヤーをつたって雨属性の炎を流し込んでいたということに。

「がっ……!?!」

突如、クイエーテは両手で首を押さえ、地面をのたうちまわりながら苦しみ始める。

クイエーテの身に何が!?!

突如、クイエーテが苦しみ始める。

「あああああああ！」

「何……？ 何が起こってるの……？」

首を押さえながらクイエーテが苦しむ姿を見て、佐天は一体、何が起こったのかわからず困惑してしまっていた。

「まさか私が……」

「違えな。別の原因だぞ」

佐天は自分のせいでクイエーテが苦しんでいるのではないかと不安になっていた。リボーンは佐天のせいではなく何か別の要因だということを理解する。

「止める……私の邪魔をするな……」

「邪魔？」

両手で首を押さえ、苦しみながらそう言うクイエーテの発言に佐天は意味がわからず困惑してしまっていた。

「くっ！」

クイエーテはおもいつきり唇を噛む。すると両手が首から離れて、クイエーテはおもいつきり呼吸をしなんとか息を整える。

「はあ……はあ……はあ……」

「そういうことか」

先程までの苦しみは消えたが、クイエーテは大量の汗をかき、息を荒らげていた。リボーンは疲弊するクイエーテの姿を見て、あることに気づいた。

「お前。エストラーネオファミリーの生き残りだな」

「エストラーネオ……ファミリー……？」

「エストラーネオファミリー。禁弾。憑依弾を作ったファミリーだ」

「憑依弾って……まさか……」

「ああ。憑依弾は文字通り他人に憑依して他人の精神を乗っ取る特殊弾だ。といっても弾丸たまとの相性と強靱な精神力がなけりやあ使うことは不可能だがな」

「っ!？」

自分の予想通り他人に憑依するとわかり、佐天はあまりの衝撃に顔を青ざめていた。

「憑依弾はあまりにも使用法がムゴかった上に製造法は闇に葬られたんだ。その後、エストラーネオファミリーはろくでなしのレットルを貼られ多くのファミリーを敵に回すことになった。追いつめられたファミリー上層部はマフィア界への地位を再び獲得する為に人体実験に拍車をかけた。ファミリーの子供を犠牲にしてな」

「酷い……」

エストラーネオファミリーのあまりの所業に佐天はそう呟いた。

「にしてもどうやってクイエーテの体に乗っ取つりやがった？」

「乗っ取つるって……まさか!」

「こいつはクイエーテじゃねえ。クイエーテに乗っ取つたエストラーネオファミリーの人間だ。さつき苦しんだのは、おそらく弾丸たまとの相性が悪いのにも関わらず無理やり憑依弾を使った反動。佐天が弱らせたことで肉体を乗っ取られたクイエーテが肉体の主導権を取り戻そうとしたんだ」

『止める……私の邪魔をするな……』

リポーンは理解していた。先程、苦しみながら吐いた言葉からこの男がクイエーテではなく、クイエーテの体に乗っ取つた人物であるということを。

「佐天に憑依せずに人質に取らないのはもう憑依できないからだ。他の体に乗っ取ろうとしてもお前の精神が持たない。それが憑依弾を無理やり使つたもう一つのリスク」

「流石はアルコバレーノ……まさか俺の正体を見抜くとはな……」

「じゃあ……」

「そうさ……俺の本当の名はシエンツ・パツローネ。エストラーネオファミリーの上層部の一人だった」

シエンツの一人称が変わり、自分がエストラーネオファミリーの人間だということを明かす。

「やはりか。だがエストラーネオファミリーは壊滅させられたはずだぞ」

「壊滅？」

「人体実験によって覚醒した子供の一人が、ファミリー上層部を皆殺しにしてエストラーネオファミリーを壊滅させた。だから生き残りはいないはずだぞ」

「俺はエストラーネオファミリーが壊滅される前に憑依弾を使ったのさ。エストラーネオファミリーの人間が外に出れば蜂の巣にされた。俺も蜂の巣にされかけたが、死ぬ間に憑依弾を使いクイエーテの体に乗っ取った。そして私はクイエーテの体で自分を殺して、クイエーテが俺を殺したとマフィア界に思わせ俺の存在を抹消したのさ」

「そこまでして……」

「その後。俺はエストラーネオファミリーを襲撃するフリをして、ファミリーのメンバーが死んだと思わせるように隠蔽工作をする為にエストラーネオファミリーに戻った。だがすでにエストラーネオファミリーは皆殺しにされていた。六道骸によってな」

シエンツの脳裏には壊滅させられたエストラーネオファミリーの姿が浮かんでいた。

「その時、俺は決めたのだ！ 六道骸への復讐とボンゴレのボスを殺しマフィア界の頂点に立つことでマフィア界の法則をこの手で変えることをな！」

「法則。つまり憑依弾を合法にする訳か」

「そうだ！ 貴様らは特殊弾を使うことを許され、俺たちは許されなかった！ 何が違うというのだ！ 貴様らボンゴレも権力や利益を迫及する為に特殊弾を使っているというのに！」

「何でわからないのよ!!」

憎しみのあまり表情を歪ませるシエンツに佐天は怒声を上げる。

「そんな戦いもしない憑依弾に頼るからだよ!! 自業自得でしょ!!」

「マフィアのことを知らぬ小娘がほざくな!!」

「わからないよ!! 私にはマフィアのことなんてわからないよ!! 正直、私には間違ってることをしてるイメージしかないよ!! でも間違ってもみんな命がけで戦っていることくらいはわかる!!」

佐天はツナの記憶を見て知っていた。ツナたちも敵たちもみんな命をかけて戦っていたことを。

「逆は何でお前はわからないのよ!! 何の罪のない子供たちを犠牲にして!! 人の体に乗っ取って!! ツナさんを殺そうとして!! 命の重みが!! 自分たちの犯した罪が!!」

「黙れ小娘!! 生け贄の分際で俺に指図するな!!」

「犠牲になった子供たちの為にも!! 体に乗っ取られたクイエーテの為にも!! そしてツナさんの為にも!! シェンツ!! ここで私はお前を倒す!!」

佐天の怒りが頂点達したことで額の炎とグローブの炎の純度がさらに上がり、激しく燃え上がる。

標的（ターゲツト） 94 掟の番人

「ならば!! 俺の奥義で終わらせてやる!!」

シエンツは兩属性の炎による効果が切れたのか、なん起き上がり錫杖を構えると、両足から炎を噴射する。

「狂嵐殺人術。零ぜろの刑。煌嵐こうらん神式」

するとシエンツの姿が一瞬にして消える。その後、シエンツは佐天の周囲を高速移動しながら、錫杖で土煙を巻き上げて佐天の視界を塞ぐ。

（視界を塞ぎつつ、高速移動で翻弄し。加速と回転した錫杖で体を貫く! あらゆる法則を持つてしても破れるものなどいない!）

佐天の周囲を高速移動しながらシエンツは不気味な笑みを浮かべていた。余程、この技に絶対の自信があるのである。

『視覚にだけ頼るな。相手の動きを見ることは大事だが、視覚だけに頼ってちや生き残れねえぞ。相手の動きを見ると同時に殺気を感じろ』

（殺気を感じる……）

佐天はリボーンという言葉を思い出していた。佐天はシエンツの動きを見るのではなく目を閉じて、シエンツの殺気を感じとっていた。

（死ね! 小娘!）

（後ろ!）

シエンツは佐天の背後から攻撃をしようとする。佐天は後ろから殺気を感じて振り返ると同時に左手に炎を纏い、錫杖の先端に向かって拳を繰り出す。回転した錫杖の先端と佐天の拳がぶつかる。

「無駄だ! 貴様の晴の炎では俺の嵐の炎には勝てはしない!」

嵐属性の炎の特徴は分解。死ぬ気の炎の中でも攻撃力に特化している。シエンツは勝利を確信していた。

「な、何だ……!?!」

シエンツは驚く。なぜなら錫杖の先端の回転が遅くなり、嵐属性の炎が徐々に消えていたからである。

(一、これは……!?)

シエンツは佐天の炎を見る。よく見ると晴の炎を覆うようにわずかながら雨の炎が展開されていた。

(2属性の炎を同時に扱っただ?!?)

佐天が晴属性の炎と雨属性と炎を同時に扱ったことにシエンツは驚きを隠せないでいた。雨属性の炎で嵐属性の炎を弱め、錫杖の先端の回転を遅くすることで錫杖の攻撃力を弱体化させたのである。

『どうやら佐天殿は死ぬ気の精密なコントロールするのに長けているようですな』

(思った通りだわ)

佐天は前にバジルに言われたことを思い出し、この極限状態の最中、迷うことなく実践したのだ。それこそ死ぬ気で。

「錫杖が……!?!」

佐天の晴の炎がシエンツの錫杖の先端を完全に破壊した。錫杖が壊れたことにシエンツは驚きを隠せないでいた。

「狂嵐殺^そ人術はお前の力じゃない。お前がクイエーテの体に乗っ取って真似した紛い物。そんな力じゃ死ぬ気の私には勝てない」

そう言う佐天は右手に炎を灯し、右手をゆっくりと後方に下げる。

「終わりよ」

「ま、待……ゴハツ!」

命乞いしようとするシエンツの顔面に佐天は渾身の拳を叩き込んだ。佐天の拳を叩き込まれたシエンツは上空にぶっ飛ばされる。

「ごめんなさい……」

地面に叩き込まれ倒れているクイエーテに佐天は悲しい表情^{かお}をしながら謝罪すると超^{ハイパー}死ぬ気モードを解除する。解除されたことでX^{イクス}グローブは元の手袋に戻っていく。

「終わったな」

戦いを終えた佐天の元に駆け寄るとリボーンは佐天にそう言った。

「リボーン君……」

「ん?」

「辛いんだね……戦いつて……」

「それが戦いだ。それはこれからも続く。お前がツナと一緒にいたいならな」

佐天は顔を俯かせて拳を強く握りながらそう言った。その声を震えていた。そんな佐天にリボーンは9代目が言っていたことを改めて話した。

「リボーン君……私……もつと強くなりたい」

『リボーン……俺……もつと強くなりたい』

「……」

リボーンは佐天の台詞を聞いてある情景が浮かんでいた。それはかつてツナが強くなりたと言った時と同じ目を佐天がしていたからである。

「これからの修行はさらにきつくなるぞ。覚悟しとけよ」

「うん！」

リボーンから厳しくなると言われてもなお佐天は臆することなくそう答えた。

(こんなことがあつてたまるか！ あんな小娘にこの俺が！)

一方、シエンツの意識はまだあつた。しかし佐天から受けたダメージが酷く、立つこともままらなかつた。

(こうなつたら一か八かだ！ 憑依弾を使ってあの小娘の体を！)

シエンツは一か八かの賭けに出ることに決めると、体を横に傾けると自分の懐にある憑依弾を装填してある銃を取り出す。

が、

「そこまでだ」

「ガハッ!」

「な、何!？」

「来やがったか」

突如、謎の音が響き渡る。それと同時に黒い炎が現れ、そこから鎖が伸びてシエンツの首と両腕に絡みつく。佐天は突然のことに混乱しリボーンは冷静な態度でいた。

「久しぶりだねリボーン君」

「久しぶりだなイエーガー。バミューダ」

再び声が響くと黒い炎の中から黒いコートに黒い帽子、全身包帯を巻いた長身の男と同じく長身の男と同じ格好をした赤ん坊がいた。

「な、何なの……………この人たち……………」

ツナの記憶でこの2人を見たことはあった佐天であるが、この2人の風貌とこの場を支配する冷たく不気味な雰囲気恐怖に恐怖していた。

ウインディチェ
「復讐者。マフィア界の掟の番人で法で裁けない奴らを裁くんのだ」

「裁くつて……………そんな……………」

何の罪のないクイエーテが裁かれると知って佐天はショックを受ける。

「この男に罪はない。だがシエンツには色々聞きたいことがある。それさえ済めばクイエーテは解放する」

イエーガーがそう告げるが、佐天は恐怖のあまり安堵することができないでいた。

「君は異世界から来たという人間かい？」

「え……………!？」

「何で知ってやがる」

「我々の情報網は甘くない。それぐらい知ってるさ」

「そんな情報網があるならシエンツもとつとと捕まえられたらだろ」

「ずつとマークはしていた。だが骸君の時と同じで憑依弾を使ったという証拠がなかった。だが今回、そこのお嬢さんが戦ってくれたお陰でその証拠ができたのさ」

（記憶を見た時から思ってたけど……………何でこの人とリボン君と似てるの……………? 偶然……………?）

佐天はリボンとバミューダの姿が似ていることに疑問を抱く。

「黒い……………死ぬ気の炎……………?」

佐天はもう1つ気になっていたことを呟いた。それは2人の横にある死ぬ気の炎。7属性のどれにも当てはまらない黒い死ぬ気の炎のことである。

「夜の炎だ」

「夜の……………炎……………?」

「おつとリボン君。それ以上は言っちゃダメだよ」

リボンが佐天の問いに答えると、バミューダが夜の炎のことについて話すことを禁じる。

「お前の言い分はわかってるつもりだ。だがお前らのような奴を二度と生む訳にはいかねえ。だから注意喚気させて欲しいだけだ。こいつは俺の生徒なんぞでな」

リボンは注意喚気の為に夜の炎のことについて話させて欲しいとことを頼む。

「君の言うことも一理ある。そういうことなら構わないよ」

リボンの意見に納得したのかバミューダは夜の炎について話すことを許可した。

「そろそろ行くぞバミューダ」

「先に行つててくれイエーガー君。最後にあのお嬢さんに言つておくことがある」

「わかった」

そう言うといエーガーがシエンツを連れて行くと夜の炎を通つて戻つていく。

「今回はすまなかつたお嬢さん。こちらとしても確実な証拠を手に入れたくてね」

バミューダは今回、自分たちがすぐにシエンツを捕えることができなかつたことを謝罪する。

「一応、君は裏社会こっちの人間ではないということにしておくよ。ただもし君がこちら側の世界に足を踏み入れ、掟を破つたとなれば話は別。その時は容赦なく捕える。それだけは覚えておいてくれ」

そう言うバミューダはイエーガーと同じく夜の炎を通つて帰つて行く。

「こ、怖かつた……」

恐怖のあまり動けなかつた佐天であったが、2人が消えた途端、緊張の糸が途切れて腰を抜かしてしまう。

「あれ……っ？」

そして修行の疲れと超ハイパー死ぬ気モードになった反動が遅れてきて、

そのまま佐天は眠ってしまふ。
「疲れが一気に出たか。まだまだがつつり鍛えねえとな。だが良く
やったぞ佐天」

標的（ターゲツト） 95 終わりとこれから

シエンツの脅威が去ってから2時間後

「うーん……?」

佐天はベッドの上にいた。目が覚めるそこは見覚えがある天井が佐天の視界に映っていた。

「目が覚めたか」

「リボーン君……? 私……」

「復讐者が帰った後、ぶつ倒れたんだぞ。修行と超死ぬ気モードの反動でな」

「そっか……まだまだなんだね……私……」

強い力を手に入れたのにも関わらず、倒れてしまったことに佐天は自分がまだまだ未熟なんだということを知り、シユンとしてしまっていた。

「そう卑下すんな。ツナの時よりはマシだ」

「え?」

「あいつが初めて超死ぬ気モードになった時は体中に気絶する程の痛みが走って、目が覚めてから2週間は全身筋肉痛で動けなかったからな」

「え!?! そうなの!?!」

佐天は超死ぬ気モードがまさかそんなにもリスクな力だとは思ってもみなかった為、佐天は驚きの声を上げる。

「つつてもツナを本格的に鍛える前の話だがな。だがお前は違い。ちゃんと鍛えたからこそ、その程度で済んだんだぞ」

「そっか……」

「にしてもお前までその力に目覚めるとはな。結果的に初代の修行が役に立ったな」

「え? どういうこと?」

「第2段階の時に言っただろ。初代はいつでも超死ぬ気モードになれるようになる為に絶壁を登ったって」

「あつ……」

佐天はリボーンの言葉を聞いて思い出すと同時にあることに気づく。

「Xグロープで戦ったのはツナだけじゃねえ。歴代最強と唱われた初代と同じ力でもあるんだぞ」

「私が……初代と同じ……」

ボンゴレの歴代の中で歴代最強と唱われた初代と同じ力を手にしたと知って、Xグロープの凄さを改めて理解する。

「でもツナさんの記憶を見た時、最初は私と同じだったのに今は変わってるよね」

「ボンゴレギアはXグロープをパワーアップさせたもんだからな」

「そうなんだ」

「にしてもボンゴレのボス以外でXグロープを手に入れたのはマフィア界の歴史を紐解いてもお前だけだろうな。良かったな佐天。マフィア界の歴史に名を残せるぞ」

「嬉しいような……嬉しくないような……」

リボーンにマフィア界の歴史の残せると言われたが、佐天は心の底から喜ぶことができなかった。

「でも私なんかこんな凄い力を手に入れるなんて……私に使いこなせるかな……?」

「レオンはお前にあつた武器を吐いたんだ。ちゃんと修行すりや使いこなせるようになるはずだぞ」

佐天は憧れのツナと同じ力であり、歴代最強と唱われた初代と同じ力であるXグロープを手に入れたことで佐天は不安になつてしまつていた。そんな佐天に対してリボーンは大丈夫だということを伝えた。

「どんな力だつて創意工夫次第で強くなれる。7代目だつてそうだったからな」

「7代目?」

「ボンゴレのボスは個性が強くて色んな戦闘スタイルのボスばかりだったんだ。ナイフ、ジュル、ブーメラン。フォークが武器だった奴もいる」

「フオーク!? それで戦えるの!?!」

フオークを武器にして戦ったボスがいると知って佐天は驚きの声を上げる。

「フオークをメイン武器にしたのは4代目だ。ボンゴレの歴史の中でも特に世間に名を轟かせた3人のボスの内の一人だぞ」

「フオークで……」

フオークが武器であるのにも関わらず、名を轟かせたと知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「そして7代目はボンゴレの歴史の中で唯一、銃をメイン武器にしたんだ。射撃の腕と炎の性質からな」

「炎の性質?」

「7代目の炎は歴代のボンゴレのボスの中でも一際弱かったんだ。だから銃と死ぬ気弾を使うことでそれを補ったんだ」

「どういうこと?」

炎の性質と銃と死ぬ気弾がどう繋がるのかがわからず佐天は疑問符を浮かべる。

「死ぬ気弾には死ぬ気の炎を圧縮して吸収する性質がある。7代目はそこに注目したんだ。たとえ微弱な炎でも一点に集中すればその威力は計りしれない。現に7代目はその銃でどんな敵も仕留め、攻撃力といえれば必ず7代目の名が上がるようにまであつたんだ」

「凄……」

炎が弱かったのにも関わらず、創意工夫することで歴代に名を残した7代目の話を聞いて佐天は驚きを隠せないでいた。

「ツナと初代と同じ力を持つてるからって、それを真似する必要はねえ。お前はお前のやり方で強くなりゃいい」

「うん……」

「今日はもう修行しなくていい。怪我は治しておいたから後はゆっくり休め」

「あれ? 痛くない……」

倒れる前はシエンツにやられた傷のせいで体中が痛かったのにも関わらず、今は痛みがあまりないことに佐天は気づいた。

「前に言っただろ。晴の炎の特徴は活性。怪我の治る速度を活性させて怪我を治すこともできるってな。受けたダメージまでは治らねえけどな」

「そっかりボーン君も晴の炎を持つてたんだよね」

リボーンの言葉を聞いてリボーンが晴の属性だったということを知り、佐天は思い出す。

「晩飯になったら起こしに来る。それまでゆっくり寝てろ」

「ねえ。リボーン君」

「ん？」

「聞きたいことがあるんだけどいい？」

「何だ？」

「リボーン君って何者なの？」

「今さら何言ってるんだ。俺は超一流の家庭教師かてきょうしにして世界最強の殺し屋ヒットマンだぞ」

「それは知ってるよ。でもシエンツがリボーン君のことを呪われた赤ん坊とかアルコバレーノとか言ってたのが気になってさ。それにあのバミューダっていう赤ん坊とリボーン君が似てるし。第一、赤ん坊が話すなんておかしいし……今さらだけどさ……」

「……」

佐天はシエンツの言っていたこと、リボーンとバミューダが似ていることがずっと気になっていた。リボーンは佐天の言葉を聞いて黙ったまま考え込む。

「ま。いいか。もう終わったことだしな。それに話したいと思ってた夜の炎とも関わってくるしな」

今、語られる。リボーン秘密。

標的（ターゲット） 96 リボーンの秘密

リボーンは佐天の疑問に答えることを決める。

「俺のこの姿は本当の姿じゃねえんだ」

「本当の……姿じゃない……？」

リボーンの言っていることの意味がわからず佐天は困惑してしまっていた。

「俺の本当の姿は超かっけえんだ」

「自慢……？」

恥じることもなく堂々と言い切るリボーンに佐天は若干、呆れてしまっていた。

「俺が……俺たちがこの姿になったのはチェツカーフェイスっていう男が原因だ」

「俺たちって……」

「ツナの記憶を見たんなら見てんじゃねえのか。俺とバミューダ以外に俺たちと同じ姿をした奴らが」

「そういえば……」

リボーンに言われて、佐天はツナの記憶を見た時にリボーンと似たような赤ん坊がいたことを思い出す。

「俺はチェツカーフェイスからチームでの依頼を受けた。チェツカーフェイスに言われた場所に行くところには俺以外に6人の人物がいたんだ」

リボーンは6人の詳細を語る。弾丸を素手で止める程の拳法の達人の風^{フオン}。不死身のスタントマンのスカル。元イタリア海軍潜水奇襲部隊コムスピンの教官のラル・ミルチ。レオナルド・ダ・ヴィンチの再来と唱われた科学者ヴェルデ。幻術を操る超能力者^{エスパー}バイパー。予知能力を持つ巫女^{シャーマン}ルーチエ。

「不死身に超能力者って……」

集められたメンバーの詳細を聞いて、あまりの凄さに佐天はドン引きしてしまっていた。

「集められたのはメンバーは世界最強のメンバー。そんな俺たちにチエツカーフェイスは依頼してきたんだ。要人の護衛に暗殺、軍事機密の入手。色んなミッションをな。俺たちはミッションの内容よりも世界最強のメンバーでミッションをこなすことにハマってチエツカーフェイスの依頼をどんどん受けていったんだ」

リボーンの脳裏にはチエツカーフェイスが依頼してきたミッションと、そのミッションを7人でこなしていた出来事が浮かんでいた。「ある時、チエツカーフェイスが俺たちに依頼してきた。依頼内容は宝探し。山に眠ってる宝を見つけるのが俺たちのミッションだった。だが俺たちが頂上につくとまばゆい光に包まれた。気づいた時には俺たちは赤ん坊の姿にされ、胸にはずすことのできないおしやぶりがつけられてたんだ」

「それって……」

「ああ。俺たちへの依頼は俺たちを信用させる為の罠だったんだ」

「そんな……」

「俺たちが呪われた赤ん坊と呼ばれるのは、チエツカーフェイスの呪いによつて赤ん坊にされた人間だからだ。そしてアルコバレーノというのは呪いによつて姿を変えられた7人の赤ん坊の総称のことなんだ」

「チエツカーフェイスは何がしたかったの？ 何の為にリボーン君たちを赤ん坊の姿にしたの？」

チエツカーフェイスが何の為にリボーンたちを赤ん坊の姿にしたのかわからずにいた。

「俺たちの世界には7・トウリニセツテつていうものがあるんだ」

「トリニセツテ？」

「7つのボンゴレリング、7つのマーレリング、俺たちアルコバレーノ7つのおしやぶり。これらの総称が7・トウリニセツテだ。7・トウリニセツテは俺たちの世界を作った礎。つまり7・トウリニセツテが失われれば俺たちの世界の秩序は崩壊する」

「せ、世界!？」

いきなり話がぶつとび過ぎて、佐天の頭はパンクしてしまう。

「チエツカーフェイスは7^{トウリニセツテ}の管理者。俺たちはこのおしやぶりを護る為に選ばれた7人だったんだ。俺たちはチエツカーフェイスを探したが奴とは手紙でやり取りしてた為に居場所を掴むことすら叶わなかったんだ。だが2年前に奴は俺たちの前に姿を現して俺たちに言ってきた。俺たちにかけられた呪いを解きたくないかってな」

「呪いを解くって……自分で呪いをかけておいて……」

「俺たちもそう思った。しかし呪いを解く方法が他に見当たらなかった。だから俺たちはチエツカーフェイスの提案に乗り、虹の代理戦争に参加することを決めただ」

「虹の代理戦争？」

「チエツカーフェイスの考案した戦いだ。俺たちアルコバレーノが各々、代理を立てて戦うんだ。そして最後まで勝った残ったチームのアルコバレーノは元の姿に戻るっていうな」

「じゃありボーン君はその戦いで勝てなかったから赤ん坊の姿のままなの？」

「いや。この虹の代理戦争もチエツカーフェイスの罠だったんだ」

「え!?! また!?!」

虹の代理戦争もまたチエツカーフェイスの罠だったと知って、佐天は驚きの声を上げた。

「この虹の代理戦争で俺たちの誰かが勝ったところで呪いが解かれることはなかったんだ。だがこの虹の代理戦争が罠だと知っていたバミューダは虹の代理戦争に乱入し、この事実を俺たちに話した。そしてアルコバレーノの秘密もな」

「秘密？」

「アルコバレーノは昔から存在していたんだ。役割は俺たちと同じおしやぶりを護ること。だがアルコバレーノは永遠に勤めることはできない。体がおしやぶりに耐えられなくなるからな。そこで世代交代が行われる。人の記憶に残らないよう仕事の依頼、虹の代理戦争というサイクルでな」

「つまり仕事の依頼や虹の代理戦争は次期アルコバレーノを決める為のものだったってこと？」

「その通りだ。そして世代交代が行われれば前のアルコバレーノはおしやぶりから炎を全て抜かれる。つまりそれは死を意味する。要するにアルコバレーノっていうのは世界の秩序を護る為に捧げられた7人の生け贄だったという訳だ」

「そんな……!?!」

あまりに残酷過ぎるアルコバレーノのシステムに佐天はショックを受ける。

「だが一人だけ例外がいた。それがバミューダだ」

「バミューダもやっぱりアルコバレーノだったんだ」

「バミューダは世代交代によって死ぬアルコバレーノの一人だった。だがバミューダは死ぬ寸前に新たな炎を作り出しておしやぶりに注ぐことによって延命した。第8の属性。夜の炎を作ることだな」

「夜の炎……」

「この炎は怨みや憎しみによって生まれる炎。バミューダはチェツカーフェイスへの怨みから新たな属性を作った。そしてバミューダはそこからチェツカーフェイスに復讐する為に殺されるはずのアルコバレーノの中からチェツカーフェイスを怨み、骨のある者を夜の炎を使って救済し組織を作った。それがマファイア界の掟の番人。ヴァインディチェ復讐者の正体だ。そしてそこからバミューダたちは何百年と生き続けた。チェツカーフェイスに復讐する為にな」

「人間が数百年も生き続けるなんて……そんなことが……」

バミューダが自分と同じ人間であるということも驚きであるが、たった一人の男に復讐する為だけに生き続けるバミューダの執念に佐天は衝撃を受けていた。

「あの炎を手に入れば絶大な力を手に入れられる。だが夜の炎を手に入れるということは、少なくともお前が大切なもんを失うことはま
ず間違いねえ。だから絶対にあの炎を手に入れるなよ」

「う、うん……」

リボーンが夜の炎を手に入れるなということ念を押すと、佐天は念を押されながら了承する。

「話の続きだ。俺はバミューダにチェツカーフェイスを倒す為に協力

しないかと誘われた。俺はバミューダが嫌いだったが協力しようと思つた。チエツカーフェイスを倒そうが倒すまいが俺たちがどうせ死ぬことは変わりはないな。それに次期アルコバレーノを継がせる訳にはいかなかったからな」

「どうせつて……」

「この姿になつた時からロクな死に方は期待しちやいなかったからな。俺はチエツカーフェイスが俺たちの呪いを解くなんていうのも嘘だつてこともバミューダに会う前からわかつてたしな」

「え……!? いやあ何で虹の代理戦争に参加したの……!?」

自分の呪いが解けないと最初からわかっていたながら、なぜ虹の代理戦争に参加することを決めたのか佐天はわからなずにいた。

「んなもん決まつてんだろ。俺の使命はツナを立派なボンゴレ10代目にする事。虹の代理戦争はツナを鍛えるには丁度いいと思つたからな」

「っ!?!」

呪いが解かれないことがわかつていながら、ツナを鍛える為だけに虹の代理戦争に参加したという事実佐天は驚きを隠せないでいた。正直、どうかしているとも思っていた。

「けどツナは違つた。あいつは俺たちアルコバレーノを死なせず、トウリニセツテ

7・も維持する方法があるはずだと、俺を絶対に死なせないと言つたんだ」

「ツナさん……」

自分が昏睡状態になつた時と同じで戦いが嫌いだ、仲間の為なら命を賭ける。佐天はツナが昔からそういう人間だつたのだということとを理解する。

「俺はツナの意志に従い復讐者ヴァインディチエと敵対することにした。復讐者の実力ヴァインディチエは俺たちの想像を遥かに越えたものだつた」

「そ、そんなに強かつたの……!?!」

「相手はアルコバレーノ。それも歴代のアルコバレーノの中でも選りすぐりの奴らだつたからな。特にバミューダはやばかつた。少しだけ戦つたが俺は手も足も出なかつた」

「リボーン君が……!?!」

正直、信じられなかった。ツナに余裕で勝てるだけの力を持つリボーンですらバミューダすら勝てないという事実には。

「それでもツナは俺ですら勝てなかったバミューダに打ち勝った。そしてツナの考えで誰も犠牲にすることなく7トウリニセツテを維持する方法が見つかった

俺たちは生きられるようになった」

「凄い……」

「ツナが行動を起こさなきゃ俺たちは死に、ツナはアルコバレーノになつてた。確実にな」

「そ、そうなの!?!」

ツナがアルコバレーノになつていたと知り、佐天は驚きの声を上げる。

「チエツカーフェイスは次元が違った。人でありながら人としての理を越えた存在。ツナやバミューダよりもさらに強かったからな」

「そんなに強い……!?!」

「少なくとも俺たちの世界の全勢力とお前らの世界の全勢力が束になつてもチエツカーフェイスには勝てねえだろうな」

「っ!?!」

チエツカーフェイスの強さを知って佐天は衝撃のあまり固まってしまうていた。

「ほ、本当に人間なの……!?! チエツカーフェイスって……!?!」

「本人は地球人だつて言つてたぞ。人類が生まれる前から地球にいるらしいがな」

「じ、人類が生まれる前!?!」

「人類が誕生したのは500万年前だからな。500万歳以上だな」

「5、500万!?!」

リボーンはチエツカーフェイスの年齢を推測すると、佐天は驚きの声を上げた。

「あつ！ でも何でボンゴレリングつてチエツカーフェイスが作った物なんでしょ？ 何でそれがボンゴレにあるの?」

この世界を護る為の重要なアイテムがなぜボンゴレの手にあるのかわからず佐天はリボーンに質問する。

「ボンゴレの初代ボス。ボンゴレI世フリーモはボンゴレリングの適合者だったんだ」

「成る程……」

「元々7トゥリニセツテは7つの石だった。チェツカーフェイスの種族はその石に炎を灯し7トゥリニセツテを機能してた。だが仲間が次々に死んでいき自分たちの力だけで機能できなくなった。そこでチェツカーフェイスたちは人間の力を借りることを決めた。そこで生まれたのがアルコバレーノのおしゃぶりだ。だがさらに仲間が死に仲間が2人だけになり石を制御できなくなった。そこで生き残ったチェツカーフェイスとセピラという巫女はさらに人間の力を借りることにした。そこで生まれたのがボンゴレリングとマーレリングだ。この2つはセピラの提案によっておしゃぶりのようなデメリットがないように作られたんだ」

「だからツナさんは大丈夫だったんだ……」

おしゃぶりと同じ7トゥリニセツテであるボンゴレリングを持つているツナがりボーンのように死ぬことがないのかということ佐天は理解する。

「あれ？ でも呪いは解けたんだよね？　じゃあ何でリボーン君は赤ん坊の姿のままなの？」

「赤ん坊のまま育たないっていう呪いが解けただけで、今は成長段階の途中なんだ」

「そうなんだ」

「長くなっただがこれが俺の秘密だ。理解できたか？」

「正直、スケールがでか過ぎてあれだけ……なんとか……」

世界の秩序やら、人知を越えた存在が出てきて佐天の頭はパンクしかかっていたが、なんとか理解することはできた。リボーンの話が終わった途端、佐天の眠気が襲い、そのまま眠ってしまう。

「寝ちまったか」

リボーンは静かに寝息を立てながら眠る佐天を見ながらそう呟い

たのだった。

標的（ターゲット） 97 憧れと護りたいもの

時間はさらに経過しツナが風紀委員ジャッジメントの仕事を終えて戻ってきた。

「佐天がマファイアに襲われた?!」

佐天がマファイアに襲われたと知ってツナは驚きの声を上げる。

「声がでけぞツナ。佐天が寝てんだぞ」

「ご、ごめん!」

リボーンがベッドで寝ている佐天を見ながらそう言うと、ツナは声量を落としながら謝る。

「相手はエストラーネオファミリーのシエンツ・パツローネだ」

「エストラーネオファミリーって……骸が壊滅させたんじや……」

「骸の奴に壊滅される前に憑依弾を使ってクイエーテっていう殺し屋ヒットマンに憑依することで生きていたんだ。まあ憑依た弾との相性が悪いのにも関わらず使ったからこれ以上、憑依することはもうできなかったようだな」

「で、でも何の為に佐天を?」

「お前を確実に殺す為の人質だ。奴はお前を殺してマファイア界の頂点に君臨することでマファイア界の法則を変える。つまり憑依弾を合法にしようとしたんだ」

「そ、そんな……俺と一緒にいたせいで……」

自分のせいで佐天が襲われと知って、ツナはショックを受ける。

「そして佐天はこいつを使ってシエンツを退けた」

「え……!?!? それって……!?!」

リボーンは310と書かれた手袋をツナを見せた。ツナは手袋を見て衝撃を受けた。なぜなら自分と同じ武器が目の前にあるのだから。

「レオンの尻尾が切れた。お前が骸と戦った時と同じようにな。佐天は自分で答えを出しお前と同じ力を手にして、シエンツを倒したんだぞ」

「佐天が……!?!」

ツナは信じられなかった。まさか佐天が自分と同じ力を使って戦い、シエンツを倒したという事実には。

「佐天は言ってたぞ。お前を護りたい。自分の大切な人に酷いことをする奴にだけは絶対に負けたくねえってな」

リボーンはプライバシーの観点から私の大好きな人から、大切な人と言い換えて佐天の言っていた言葉をツナに伝えた。

「もう佐天はお前が心配する程弱くはねえ。佐天は変わったぞ。誰かに護られる存在から誰かを護る存在にな。そして今回の戦いで戦いの辛さを知ってより一層、強くなることを決めたぞ。自分の意志でな」

「……」

修行の第2段階の時に佐天の意志を尊重をすることを決めたツナであったが、それでもやはり佐天が傷ついてしまったことに平気でいられるはずもなかった。

「佐天がどうして強くなるうと思っただか知ってるか？」

「え……もう後悔したくないからじゃないの……?」

「それもあるが一番はお前の影響だぞ」

「俺!?!」

佐天が強くなるうと思っただ理由が自分だと知ってツナは驚きの声を上げる。

「幻想御手を使って昏睡状態になった時にどういう訳かは知らねえが^{レベルアップ}」

佐天はお前の過去を見たんだぞ」

「佐天が……俺の過去を……!?!」

美琴と木山だけではなく、佐天も自分の過去を見ていたと知ってツナは驚く。

「お前の過去を見て佐天は強くなるうと決意したんだぞ。憧れの存在だったお前の辛い過去を知り、憧れるだけじゃなく憧れの人のようになりたいと強く願った。そして自分が力をつければお前の悲しむ顔を見なくていいんじゃないかってな」

「え……!?!」

佐天が強くなろうと思った理由がまさか自分だということを知って、ツナは驚きを隠せないでいた。

「お前と出会ったせいで佐天は傷ついたのかもしれないねえ。だがお前と出会わなければ佐天は以前のように無能力者であることに負い目を感じて、前に進めなかつたかもしれないねえ。可能性の話だがな。ただ間違ひなく言えんのはお前に出会ったから佐天は変わったんだぞ。お前が俺と出会って変わったようにな」

「俺が……佐天を変えた……」

ツナは信じられなかつた。自分と出会ったことが佐天の人生に影響していたということに。

「お前がいたからこそ佐天はシエンツに打ち勝つことができたんだぞ。憧れや誰かを護りたいという想いは力を呼び覚ますからな。それはお前だつてわかるはずだぞ」

「……」

ツナは憧れで強くなろうと思ったことはない為、それはわからなかつたが護りたい者の為に強くなろうと思ったことは何度もある為、それは理解できた。

「佐天はお前を護りたいと思つて命懸けで戦つたんだ。負い目を感じるなどは言わねえ。だがお前との出会いは絶対に間違ひじゃなかつたつてことは覚えとけ」

「うん……」

完全に吹っ切れた訳ではないが、リボーンの言葉を聞いてツナは少しだけ落ち着いた。

「にしても佐天とずっと暮らしてたのに佐天の気持ちを全然わかつてねえなんてな。本当にダメツナだな」

「そ、そこまで言わなくても良いだろー！」

「なあツナ。お前は佐天のことをどう思つてんだ？」

「え？」

「佐天はお前に憧れてる。じゃあお前はどうかのかつて話だ。お前から見て佐天はどういう印象だ？」

「な、何だよ……急に……」

「いいからさっさと答えやがれ」

「わ、わかったよー」

急に佐天のことをどう思ってるかと聞かれて困惑するツナであったがリボーンに銃口を向けられた為、ツナは慌てて答えることを決める。

「佐天の印象……やっぱり優しく料理もできて……とつても真っ直ぐで明るい女の子って感じかな」

「付き合いたいと思わねえのか？」

「っ、付き合う!? 何、言ってるんだよ!?!」

「声がでけえぞ」

「お前が変なことを言うからだろ!」

ツナはリボーンの質問に動揺のあまり大きい声を出してしまふ。リボーンが再び注意するとツナは声のトーンを落としながらツツコミをいれる。

「そ、そりゃ……佐天と付き合えるなら幸せだと思うよ。というかあんな可愛い女の子と付き合えるなら誰だって幸せだろ」

ツナはリボーンの問いに素直に答える。ツナの答えを聞いてリボーンは少しだけ口元を緩ませる。

「ツナー。ご飯できたわよー」

「わかったー。今、行く」

階段の下から奈々が晩御飯ができたことを知らせてきた為、ツナは返事をする。

「俺が佐天を起こす。先に言ってるいいぞツナ」

「え……? う、うん……」

少しだけ困惑したツナであったが、部屋を出て台所へと向かって行った。

「よかったな。可愛いって言ってもらえて」

ツナが部屋から出て言った後、リボーンは部屋の扉の方を見ながら、ベッドで寝ている佐天に向かってそう言った。その言葉を聞いた途端、佐天の被っていた布団がビクツとする。リボーンは佐天が起きていることに気づいていた為、あんな質問をしたのである。

「それに全く脈なしっていう訳でもなさそうだぞ
「っ!？」」

リボーンという言葉聞いて佐天は布団を被ったまま真っ赤になった
両手で顔を覆ったのだった。

標的（ターゲツト） 98 遊びに

シエンツの脅威を退けた次の日

「調子はどうだ？ 佐天？」

「うん。大丈夫」

「よかった……」

リボーンの晴の炎の力で傷は完璧に完治し、ぐっすり寝たことで体力は完全に完全に回復していた。佐天の怪我が無事だと知ってツナはホツとする。

「それに思ったより痛みもない……」

「シエンツは最初、お前を完全に格下だと思い込んでたのと、お前を捕える為にどうしても加減せざるをえなかったからな。まあ修行してなかったらこんなもんじゃ済まなかっただろうな。鍛えたお陰で前の体は以前よりも頑丈になったからこれぐらいで済んだんだぞ」

いくらリボーンが傷を完璧を完治させたとはいえシエンツから受けたダメージまでは回復しない。にも関わらずあまり体が痛くないことに佐天は気づく。リボーンは佐天の疑問について補足する。

「んじゃ。今日の修行なんだが……今日は修行を止めて遊びに行くぞ」

「え!?!」

今日も修行だと思っていたツナと佐天であったが、まさか遊びに行くと言いだめた為、驚きの声を上げる。

「佐天も頑張ったしな。そのご褒美だ。つー訳で行くぞ。マフィアランドにな」

「マフィアランド!?!」

「マ、マフィアランド……?」

マフィアランドと聞いてツナは驚きの声を上げ、佐天はマフィアランドという奇妙な言葉を聞いて疑問符を浮かべる。

「マフィアランドはマフィアが警察の目を気にせずゆつくりとくつろぐ為に各ファミリが莫大な資金を出し合って建造したスーパードリームリゾートアイランドだ」

「リゾート!? マフィアが!？」

マフィアが金を出し合ってリゾートを作ったと知って、佐天は驚きの声を上げる。

「というかマフィアが作ったリゾートって……本当に大丈夫なの……?」

「大丈夫だぞ。マフィアランドは島自体が移動できる上に強力な妨害電波で誰からも察知されねえようになってんだ」

「無駄に大掛かり……」

「なんせマフィアがまつさらな気持ちで休めるようにドス黒い金を注ぎ込んでるからな」

「すつごく行く気が失せるんだけど……」

マフィアランドの詳細を聞けば聞く程、佐天はマフィアランドにこうと思えなくなってしまうていた。

「そういやお前。マフィアランドを入国審査で不合格になって遊ぶどころじゃなかったっけな」

「あれはお前のせいだろ！ お前の策略のせいで裏マフィアランドに行くことになったんだろ！」

「お前をボンゴレの10代目にする為に必要なことだからな」

「だから！ 俺はマフィアのボスにならないって言ってるだろ！」

「裏マフィアランド……?」

リボンが薄ら笑いを浮かべながらそう言うのとツナはツツコミをいれる。裏マフィアランドというまた不可解な単語が出てきた為、佐天は疑問符を浮かべる。

「裏マフィアランドは入国審査で不法侵入が決定された奴が行く訓練場のことだ。マフィアランドの入国審査に失敗して不法侵入が決定した奴はもう1度だけ入国審査を受けるチャンスを貰えるんだ。その為に鍛える場所が裏マフィアランドって訳だ」

「え!?! 入国審査に失敗したら修行なの!?!」

せつかく遊びに行くというのに修行させられるかもしれない知らされて佐天は嫌な表情かおをしてしまっていた。

「安心しろ。入国審査を受けんのは代表の1名だ。それに今回は俺が代表で入国審査をする。だからお前ら2人は入国審査せず遊んでろ」
「気持ち悪いな……何、企んでんだよ……」

いつもこんな気前の良いことなどするはずのないリボーンがこんなことを言う為、ツナはリボーンが何か良からぬことを企んでいるのではないかとツナは疑っていた。

「さつきも言っただろうが。佐天が頑張ったそのご褒美だつてな。第一、生徒が頑張ったのことに對してご褒美を与えるのは教師として当たり前のことだろ」

「嘘くせえ……」

教師の鏡とも言えるような発言をするリボーンであるが、当のツナはリボーンの発言を一ミリを信じてはいなかった。

「つー訳だ。準備しろお前ら」

「いや……行く気がしないんだけど……」

佐天はマフィアランドの詳細とツナの反応から、正直言つて行く気がなかった。というよりも行きたくないと言う方が正しい。するとリボーンは佐天の右肩に乗る。

「せつかくチャンスを作つてやったのにそれでいいのか？ ツナとデートできるチャンスなんだぞ」

「え!?!」

リボーンは佐天の耳元でツナに聞こえないぐらいの小さな声で囁いた。リボーンの言葉を聞いて佐天は顔を赤くする。

「今回、お前ら以外誰も連れて行きはしねえ。それにマフィアランドはデートスポットもたくさんあるぞ」

「デ、デートスポット……!?!」

「そうだ。何なら告白したつていい。昨日も聞いた通り、お前は全く脈無しじゃねえんだからな。可能性は零じゃねえ」

「っ!?!」

『そ、そりや……佐天と付き合えるなら幸せだと思うよ。というかあ

んな可愛い女の子と付き合えるなら誰だって幸せだろ』

リボーンの言葉を聞いて佐天は顔を真っ赤にしながら昨日、ツナが言っていたことを思い出す。

「何、話してんだよりボーン？」

「行きます……マフィアランド」

「ええ!? 何で!？」

リボーンが佐天にコソコソと何かを話している為、ツナは気になり何を話しているのか尋ねようとしたが、佐天が急にマフィアランドに行くと言い始めた為、驚きの声を上げる。

「せっかくりボーン君が用意してくれたし。私も息抜きしたいと思っただので」

(な、何でにやけてるんだろ佐天……?)

(本当に単純だな。こいつ)

リボーンの悪魔のささやきに魅了されてしまった佐天を見て、ツナとリボーンはそんなことを思っていた。

結局、マフィアランドに行くことになりました

標的（ターゲツト） 99 マファイアランド

リボーンの策略によって佐天がマファイアランドへと行くことを決めた為、3人は豪華客船に乗ってマファイアランドへと向かっていた。「わあっ!」

豪華客船の甲板にいた佐天は顔をパアツと明るくさせながら叫んだ。なぜなら佐天の視界には巨大な島に巨大な遊園地が映っていたのだから。

「思ってたよりも何倍も凄い……」

正直、リゾートと言っても避暑地ぐらいのものだと佐天は思っていた為、驚きを隠せないでいた。

「言っただろ。マファイアがまっさらな気持ちで休めるようにドス黒い金をつぎ込んだってな」

「それがなかったら最高なんだけどな……」

こんな華やかなリゾートアイランドなのに、このリゾートアイランドを創るにあたってドス黒い金が使われているという事実は受け入れ難いものだった。そして船は港に停泊すると、3人は船を降りてマファイアランドの地に足を踏み入れる。

その時、

「わっ!」

突如、花火が撃ち上がる。いきなり花火が撃ち上がった為、佐天は驚いてしまう。

「な、何あれ!」

「なっ!」

花火が上がった後、ようこそマファイアランドへと書かれた垂れ幕と、ツナとリボーンのアドバルーンが上空へと上がっていく。それを見た佐天とツナは驚きの声を上げる。

「な、何でリボーン君とツナさんのアドバルーンが!」

「決まってるんだろ。俺は世界最強の殺し屋^{ヒットマン}。ツナは^{ポングレファミリー}世界最強のマファイアの次期候補だぞ。そんだけの有名人が来るとな

りやあこれくらい当然だぞ」

「す、凄い……」

「嬉しくねえ……」

リボーンから理由を聞いて佐天は驚き、ツナは複雑な気分になってしまっていた。

「パンフレットとこいつを渡しとくぞ」

「何これ？」

「ブラックフリーパスだ。今日中であればいくらでマフィアランドで金がかかるもんは全部、そいつを見せればタダになるっていう特別なフリーパスだ」

「す、すげえ……」

「よくこんなの用意できたねリボーン君……」

リボーンからブラックフリーパスの詳細を聞いてツナと佐天は驚きを隠せないでいた。

「俺は入島手続きに行つて来るからな。せつかくの休みだ。楽しんでこいよ」

そう言うとりボーンは入島手続きをする為に、受付へと向かつて行く。そしてついにツナと佐天は2人きりになってしまう。

（どどど、どうしよう!? 本来に2人きりになっちゃった!? ツナさんとこんな風に2人きりで遊ぶなんて前に映画に行つたきりなのに……!?!）

（リボーンの奴、本当に何もせず行つた……本当に何も企んでいないのか……?）

佐天はツナと2きりになったことで顔を赤くし動揺していた。佐天がそんなことを考えているとも知らずツナはリボーンが何もせずに行つて行つたことに違和感を覚えると同時に、天変地異の前触れなのではないのかとまで思つてまっていた。正確に言えばこのマフィアランドに連れて来たこと自体、リボーンの企みなのであるがツナがそのことに気づくはずもない。

（まあ佐天のご褒美つて言つてたし大丈夫……だよな?）

リボーンは女の子には甘い為、滅茶苦茶なことは基本的にしない。

なので大丈夫だと思いたいのが、どうしても大丈夫だとツナは思えないのだ。

「考えてもしようがないか……佐天」

「ひゃ、ひゃい!？」

リボンが何を企んでいようと（もう企んでいるか）現状、どうすることもできないのでツナは考えるのを止めて遊ぶことにした。佐天はツナに話しかけられて変な返事をしてしまう。

「さ、佐天……？ 大丈夫……？」

「だ、大丈夫です！ ビックリしただけです！」

「そ、そう……」

「そ、それよりのアトラクションに乗ります!？」

佐天は話題を反らして、パンフレットを見てどのアトラクションに乗るかを決めるようとする。

「そうだね。あつ！ とりあえずコーヒーカップとかどう？」

「コ、コーヒーカップ!？」

ツナはパンフレットを見ながらコーヒーカップに乗らないかと提案する。ツナの提案を聞いて佐天は驚きの声を上げる。

「ご、ごめん……コーヒーカップ嫌だった？」

「い、嫌じゃないです!! 大丈夫です!!」

「そ、そう……じゃあ行こうか」

佐天の反応からコーヒーカップが嫌なのではないかとツナは思い、佐天に謝る。佐天は顔を赤くしもじもしながら嫌ではないことを伝える。コーヒーカップは狭い空間で2人きりになる。その為、密着しやすいアトラクションである。なので佐天は驚いたのである。ツナは佐天の圧力に押されてコーヒーカップに向かって歩いて行く。

???

「奴らはどうなっている?」

「順調にこちらに向かっています」

「よし。奴らが到着次第、マフィアランドに向かうぞ。準備をしておけ」

「はっ!」

標的（ターゲット）100 プール

ツナの提案によりコーヒーカップに乗ることとなった佐天。

（の、乗っちゃった……!?! ツナさんとコーヒーカップに……!?!）

しかし佐天は狭いコーヒーカップの中で顔を真っ赤にしながら動揺した状態でツナと一緒にいた為、ツナとコーヒーカップを楽しむ余裕などなかった。

「ねえ……佐天、顔赤いけど大丈夫?」

「へっ!?! だ、大丈夫ですよ! ちよつと暑いだけです!」

「あー。そういえば今日、暑いしね」

（ご、誤魔化せた……）

ツナに時分の顔が赤くしていることを指摘されて佐天は暑さのせいでと誤魔化した。ツナも佐天の言葉を聞いてもなお全く疑うことはなかった。何も懐疑心を抱いていないツナを見て佐天はホッとする。

「あつ! だったらこの後、プール行かない?」

「プ、プール!?!」

「うん。暑いから丁度いいかなって思つて。水着も貸してくれるし」

（プール!?! プールってことは……!?!）

ツナは顔の暑い佐天の為にプールに行くことを提案する。プールと聞いて佐天は顔を真っ赤にする。プールに行くということはツナの目の前で水着になるということの意味する。

（それに……!?!）

それに加えツナの水着姿を合法的に見ることができるといふ、佐天にとつてこれ以上ない幸せを体感できる千載一遇のチャンスなのである。

「勿論、無理には言わないし、佐天が他にいきたい所とかあれば優先

するけど」

「大丈夫です！　というかこの後、私も行きたいと思ってきました！
是非、行きましょう！」

「う、うん……わかったよ……」

ツナの水着姿を見たいという一心で佐天はツナの提案に乗ることを決める。あまりの佐天の圧にツナは圧されながらも、ツナは佐天とプールに行くことを決める。

コーヒーカップから降りたツナと佐天はパンフレットの地図を見ながらプールへ向かって行く。2人は施設で水着を借りる。

「じゃあ着替えたらさっき言った場所で待ってて」

「は、はい……」

ツナと佐天は水着に着替える為にそれぞれの更衣室に入って行く。

「変じゃないよね……!?!」

佐天は青色のビキニに着替え終わると、鏡の前で自分の水着姿を見て変ではないかということを確認する。

(前に水着を着たけど……あの時はツナさんいなかったし……)

佐天は幻想御手事件レベルアップバーが終わった後、美琴たちと一緒に水着モデルの撮影を頼まれたことがある。あの時はツナはいなく、他に男性がいた訳ではなかった。しかし今回は違う。男性……それも想い人であるツナの目の前で水着姿になる為、佐天は緊張してしまっていた。

佐天は更衣室を出るとツナと待ち合わせを場所に決めていた場所に向かう。

「ツナさんまだ来てない……」

待ち合わせ場所に着いた佐天であったが、ツナはまだ来ていなかった為、佐天は待つことに決める。

(な、なんか見られてる……)

ツナを待っている佐天はプールにいた人からじろじろと見られていることに気づく。佐天は誰か何と言おうと美少女。そして艶のある長い黒髪に加え中学1年とは思えないぐらいのスタイルの持ち主。そんな佐天が水着姿でいるとなれば注目しない人などいるはずがなかった。

「ごめん佐天。待たせちゃって」

(ツナさんの水着姿……かつこいい……)

少しすると待ち合わせ場所にツナがやって来る。オレンジ色の水着を着たツナの姿を見て、佐天は見とれてしまっていた。

「あの……それって？」

「ああこれ？ さっき借りてきたんだ」

佐天はツナが持っているものに気づく。それは空気が入っていない浮き輪とビーチボールだった。ツナは水着に着替えた後、施設内で借りられたので借りてきたのである。

「こういうのあった方がいいと思つてさ。ちよつと待つて。今、膨らませるから」

「わ、私も手伝います！」

「じゃあこっちの浮き輪をお願い」

ツナが膨らませようとした為、佐天は慌てて手伝うことを決める。

ツナは2個ある浮き輪の内の1つを佐天に膨らませてくれと頼んだ。
(お、思ったより大きい……)

佐天は浮き輪の口から空気を入れていくが、思ったよりも浮き輪が
大きかった為、膨らませるのに苦戦していた。

「はあ……はあ……」

浮き輪に大量に酸素を送り込んだことで佐天は息が上がってし
まっていた。一方でツナは先に浮き輪を膨らませていた。

「大丈夫？ 佐天？」

「思ったより大きくて……ちよつときつくて……」

「じゃあ俺が替わるよ。佐天は息が整ったらビーチボールの方、お願
い」

「え!?! ちよつ!?!」

ツナは佐天に浮き輪よりも簡単に膨らませることができるとビーチ
ボールを膨らませることを頼むと、佐天が膨らませていた浮き輪を自
分の手元に持つてくる。佐天はツナの行動に驚きを隠せないでいた。

(はああああ!!)

ツナは何の躊躇いもなく佐天が膨らませていた浮き輪を膨らせる。

佐天は浮き輪を膨らませているツナの姿を見て顔を真っ赤にする。

(こ、これって……!?! これって……!?!)

ツナは佐天が口を咥えていた場所に自分の口を咥えて浮き輪に空
気を入れ始めた。そう。これは間接キスである。佐天はツナと間接
キスしたと知って顔を真っ赤にし動揺していた。

「よし。できた……って佐天!?!」

間接キスしてしまったという自覚すらないツナは浮き輪を膨らま
せ終わる。だが佐天が顔を真っ赤にしたまま気絶してしまっている
のを見て慌ててしまっていた。

この後、無事に佐天は意識を取り戻したそうなの

ツナと間接キスしてしまったことで気絶してしまった佐天であったがその後、ツナと一緒にプールで遊ぶ。

「どう佐天？ 少しは涼しくなった？」

「は、はい!! 涼くなりました!!」

2人はプールサイドにある自動販売機でジュースを買い休憩していた。ツナはプールに来る前に佐天が暑いと言っていた為、今はどうかと尋ねる。佐天は大丈夫だと答える。

が、

（涼しくなんかないよ!! むしろさつきより暑いよ!!）

本当は暑くて暑くて仕方がなかった。それもそれはず。佐天の脳裏には今だにツナと間接キスしてしまった出来事が鮮明に浮かんでいるのだから。

（ツナさんとデートするだけでも緊張してるのに……!! ってデートじゃないし!! 私とツナさんと私はまだ付き合っていないのに!! まだって何!! ああもう!! さつきから何言ってるの私!）

ツナと間接キスしたことが余程の衝撃だったのか、佐天の思考回路は滅茶苦茶になってしまっていた。

（落ち着け私!! とりあえず……）

佐天は自分にそう言い聞かせると大きく深呼吸すると、ツナの方から視線を外しプール内にいる人たちを見渡す。

（カップルの人かな?）

佐天の視界にカップルであると思われる人が目に入る。するとカップルの女性が床に寝転ぶと男性が女性の背中にサンオイルを塗り始める。

「っ!?!」

佐天は見ているのが恥ずかしくなったのか慌てて目を反らした。

(やっぱり付き合ったらああいうことするんだ……!?)

その瞬間。佐天の脳内に存在しない記憶が溢れ出した。それは少成長したツナが同じく成長した佐天にサンオイルを塗る光景だった。

(つて!! 何を考えてるの私!?)

佐天は顔を真っ赤にしながら顔を横に何度も振りながら、己の過ち悔いる。

「佐天」

「ご、ごめんなさい!!」

「え!? 何で!?」

ツナに話しかけられて佐天は顔を真っ赤にしながら頭を下げ咄嗟に謝ってしまう。ツナは話しかけただけなのに急に佐天が謝ってきた為、困惑してしまう。

「い、いや!! すいません!! ちょっと考え事してて!!」

「そ、そう……」

「え、えつと……それで何か?」

「いや。次はどうしようかと思つてき。それともまだ遊ぶ?」

「え、えつと……!?!」

これからのことについて尋ねられて佐天はどうしようかと思ひ、迷つてしまう。

「あつ……」

すると佐天にあるものが視界に入る。それはプール内に設置されていたウォータースライダーだった。

「あそこに行きたいです」

「あれって……ウォータースライダー?」

佐天はウォータースライダーのある方向を指を指した。ツナは佐天が指を指した方向を見て、佐天がウォータースライダーに乗りたいのだと理解する。

「はい……その……!! 乗りたいです……!! ツナさんと……!!」

「俺と?」

顔を赤らめながらも勇気を出してツナとウォータースライダーに

乗りたいと言う。自分とウォータースライダーに乗りたいと言われてツナはキョトンとしてしまっていた。

「いっよ」

「ほ、本当ですか!?!」

キョトンしたツナであったが、すぐに笑顔でウォータースライダーに乗ることを了承した。ツナの返答を聞いて、佐天は表情かおを明るくする。

2人はウォータースライダーのある場所まで移動する。2人はウォータースライダーと一緒に滑る為、2人用の浮き輪に乗ってウォータースライダーの入り口にスタンバイする。

「大丈夫?」

「は、はい……!!」

ツナが先頭、佐天が後方に乗る。ツナは佐天がちゃんと乗ったどうか確認する。佐天は顔を赤くしながら大丈夫だと答える。

(ツナさんの背中……)

佐天はツナの背中を見ていた。憧れの背中であり、大好きなツナの背中を。

「え……!?!」

ツナは驚きの声を上げる。なぜなら佐天がツナの腹部に手を回して、佐天がツナの背中に身を預けたからである。

「佐……天……!?!」

「行つて下さい……!! これがいいんです……!!」

「え……!?! う、うん……!?!」

ツナは佐天の行動に困惑しつつも、そのまま出発する。水の勢いに乗った浮き輪は凄い勢いで滑っていく。

(ツナさんの背中……温かい……)

(佐天の髪……すっごくいい匂いがする……)

ウォータースライダーを滑るほんの短い時間。佐天はツナの背中の温もりを感じていた。佐天が密着したことによって佐天の髪の毛がツナの鼻を刺す。

時間はあっという間に過ぎて2人はウォータースライダーを滑り終え、プールサイドへ移動する。

「ご、ごめんなさいツナさん……急にあんなことしちゃってさ……」

「い、いいよ！ 別に悪いことした訳じゃないし！」

佐天は自分が起こした行動に対して謝る。ツナは慌てて大丈夫だということ伝える。すると2人のお腹が鳴る。

「ぷっ！ ……アハハハ！」

同時にお腹が鳴ったのがおかしかったのか、2人は笑い合う。

「ご飯、食べに行こっか」

「そうですね」

「じゃあ着替えたら外で待ち合わせで。俺はトイレに行ってくるから。先に行つてて」

「わかりました」

今後の予定を決めるとツナはトイレのある方角へと向かって行く。

「あっ！」

ツナが数歩くと、ツナは何かを思い出し立ち止まると佐天の方を再び向いた。

「今さらだけどき。その水着すっごく似合ってるよ」

「へっ……!?!」

ツナはそれだけ伝えると去って行く。水着のことを誉められた佐天は顔を赤くしてしまう。

「もう……ズルいですよ……!!」

ツナの姿が見えなくなっただけから佐天は顔を赤らめながらそう呟いたのだった。

標的（ターゲット） 102 腐れ縁

???

「全ての連合艦隊。到着しました」

「よし。全艦隊に通達せよ。マフィアランドへの進行を開始すると
な」

「はっ！」

「今度こそ手に入れてやるぞ。マフィアランドをな」

プールから出た2人は水着から私服に着替えるとマフィアランド
内の飲食店にて食事をする。食事をし終えると2人は再び、アトラク
ションを楽しむ。

「あー！ 楽しかった！」

佐天はおもいきり背を伸ばし、満足そうな笑みを浮かべながらそ
う呟いた。

「次はどこに行きますか？」

「楽しそうだね佐天」

「そりゃ勿論！ せっかくのリゾートなんですから！」

「良かった。なんかホッとしたよ」

「え？」

佐天はツナの言っている意味がわからず、キョトンしてしまう。

「いや。なんか今日、佐天の様子がずっとおかしかったからさ」

ツナから見た佐天のイメージはいつも明るくて元気いっぱいの子のイメージであった。にも関わらず今日はどこか様子がおかしいいつもの佐天らしさを感じなかった。

「なんかやつといつもの佐天らしくなったっていうかさ。俺の一番知ってる佐天って感じがしたんだよね」

（ツナさん……そんなこと思ってたんだ……なんか心配させちゃってたんだな……）

ツナの言葉を聞いて、佐天はツナに心配をかけてしまっていたのであるということを理解する。

（でもそりやいつも通りでいられる訳ないじゃん!! いきなり好きな人と遊ぶことになってさ!! しかも間接キスしちゃったんだしさ!!）

だが普段通りにいられる訳がなかった。佐天は顔を真っ赤にしなから悶絶してしまっていた。

そんな時だった

「よう。久しぶりだな。コラ！」

「グホッ!」

「ツナさん!」

突如、聞き覚えのない声の人物に話しかけられたと同時にツナが蹴り飛ばされた。いきなりツナが蹴り飛ばされた為、佐天は驚きの声を上げる。

「コ、コロネロ！」

（この人もリボン君と同じアルコバレーノ？ でもリボン君からコロネロっていう人は聞いたことがない……）

2人が振り返るとそこには迷彩服を纏い、背中にショットガンを携え、鷹の足に頭を掴まれている赤ん坊がいた。佐天はコロネロの姿を見て、リボンと同じアルコバレーノなのではないかと推測するが、前にリボン言っていたアルコバレーノの中にコロネロという名前の人物はいなかった為、コロネロがアルコバレーノなのかどうかかわらないでいた。

「お前が来てるっていう噂を聞いたからな。にしても彼女連れでマフィアランドに来るなんざやるじゃねえか沢田」

「か、彼女!? 違うよ!」

「照れなくていいぜコラ!」

「彼女!? えへへ……」

(わかりやすいなこいつ……沢田の奴。気づいてねえのか。相変わらず鈍感な奴だぜ)

デレデレしまくっている佐天を見てコロネロは佐天がツナのことを好きだということを理解すると同時にツナが佐天の気持ちを理解していないということを理解する。

「初めましてだな。俺はコロネロだぜ。コラ」

「私は佐天涙子。えつと……コロネロ君はリボーン君の友達でこといいいの?」

「友達じゃねえぞ。腐れ縁だ」

「リボーン!」

「リボーン君!」

佐天がコロネロに尋ねると、コロネロが答える前にコーヒーの入ったカップを右手に持ったリボーンがやって来て、コロネロの代わりに佐天の問いに答える。

「久しぶりだなへボライバル」

「こっちの台詞だぜコラ!」

するとコロネロは地上に降りてリボーンに向かって行き、リボーンもコロネロに向かって行く。すると2人は互いに頭突きを喰らわせる。

「でた! 挨拶代わりに頭突き!」

「挨拶!? これがですか!」

このリボーンとコロネロ頭突きが挨拶だと知って、佐天は驚きの声を上げた。

「ね、ねえリボーン君。コロネロ君はアルコバレーノなの?」

「そうだぞ」

「え!?! 何で佐天がアルコバレーノのことを知ってるの!?!」

「俺が話したんだぞ。呪いのこともな」

「だから……」

ツナは佐天がアルコバレーノという単語を知っていたことに驚きを隠せないでいたが、リポーンが話したと知って納得する。

「リポーン君が言っていた7人の中にコロネロ君の名前はなかったよね？」

「俺はアルコバレーノになるはずだったラルの代わりにアルコバレーノになったからな」

「代わり？」

「嫌な予感がしてな。俺はラルを庇ってアルコバレーノになったんだ。ていつてもラルも半分だけ呪いにかかっちゃったがな」

「でもそこまでして庇おうとするなんて……大切な人だったんだね」

「当たり前だぜコラ！　ラルは俺の惚れた女だからな」

「惚れたって……!?!」

コロネロが照れることもなく惚れた女だと言い切った為、佐天は少しだけ顔を赤らめる。

「コロネロはラルと同じイタリア海軍潜水特殊奇襲部隊コムスピンの隊員でコロネロはラルの部下だったんだぞ。そしてコロネロは上官であるラルと禁断の恋に落ちたんだぞ」

「え!?!　それって!?!　恋人だったってこと!?!」

「そうだぞ」

教師と生徒でありながら恋人になったと知って、佐天は顔を赤らめ口元を両手で覆っていた。

「まあラルは否定してるけどな。でもそこがまた可愛いんだけどな」

(私もツナさんにこんなこと言われてみたいな……)

好きだということを包み隠さず言うコロネロを見て、佐天もツナがこんな風に言われてみたいという願望が湧き出た。

その時だった

「な、何!?!　この音!?!」

「警報!?!」

マフィアランド内に警報が鳴り響く。警報を聞いて佐天とツナは

動揺を隠せずにいた。一方でリボンとコロネロは警報を聞いても動じてはいなかった。

突如、マフィアランド内に鳴り響いた警報。一体、何が!?

標的（ターゲツト） 103 宣戦布告

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 敵襲です！ 島内にいる人たちは速やかに避難して下さい！ 繰り返しします……』

島内にアナウンスが響き渡る。アナウンスを聞いた人たちは一斉に避難を始める。すると島に次々と大砲が撃ち込まれていく。

「また敵襲!?!」

「て、敵襲!?! どとど、どういこと!?!」

アナウンスで敵襲と聞こえた為、ツナと佐天は動揺を隠せずにした。

「このマフィアランドは麻薬に手を出さない善良のマフィアによって作られてんだ。逆に言えばこのマフィアランドの存在を疎ましいと思ってる連中もたくさんいるんだ」

「善良なマフィアって……そもそもマフィアに善良とかないでしょ……犯罪者なんだし……」

リボーンはマフィアランドが敵襲を受ける理由を説明する。佐天は敵襲よりも善良なマフィアという単語に引っ掛かってしまった。

『あー。あー。マフィアランドにいる者たちに継ぐ』

「こ、この声って!?! まさか!?!」

「そのまさかだな」

「あいつしかいねえゼコラ」

「え!?! 知り合いなの!?!」

突如、海の方こうから側から拡声器によってかん高い声が響き渡る。この声を聞いて、ツナとリボーンとコロネロはこの声の主が誰なのかを理解する。

『このマフィアランドはすでに我々反マフィアランド連合によって包囲されている。抵抗する者は皆殺しだ、だがおとなしく降伏するならば我がカルカツファミリーの奴隷として生かしておいてやる。どちらか好きなほうを選ぶがいい。どちらか地獄に変わりはないがな、』

「ア—ハツハツハツハツ！」

「そいつは面白いな。誰を奴隷にするって？」

『リ、リボーン先輩!』

「先輩!」

リボーンは相棒であるレオンを拡声器に変形させると声の主に向かってドスの聞いた声で話した。リボーンの声聞いた瞬間、声の主の態度が変わる。声の主がリボーンのことを先輩だと呼んだことに驚きを隠せないでいた。

『な、何でリボーン先輩がマフィアランドに!』

「なんか文句あんのか？」

『い、いえ! ありません!』

「なんかすっごい態度が変わってるんだけど!? 一体、どういう関係なの!？」

リボーンの声聞いた途端、声の主が先程の強きな態度とは180度変わったことに佐天は気になって仕方がなかった。

「奴はカルカツサファミリーの軍師のスカルだぜコラ」

「スカル……って確かアルコバレノの一人じゃなかったっけ？」

「そうだぞ。そして俺のパシリだ」

「パシリなの!？」

『俺は貴様のパシリじゃない! 訂正しろリボーン!』

「なんか言ったか？」

『あ……いえ……何でもありません……』

(相変わらずリボーンには頭が上がらないんだスカル……)

リボーンが佐天にスカルがパシリだと言ったことが拡声器に伝わっていたのかスカルは訂正するように言う。しかし自分のことを貴様呼ばわりしたことが気に入らなかったのか再びドスの聞いた声でスカルにそう言うのと、スカルはビビって萎縮してしまう。相変わらず変わらないリボーンとスカルの関係を見て、ツナはスカルに同情してしまっていた。

『ちよ、ちよつと待て……リボーン先輩がいるということはまさか
沢田綱吉もいるんじゃない……』

「そうだぞ」

『なっ!?!』

リボンだけでなくツナもいるということを知ってスカルはさらに絶望してしまっていた。

「それで？ さっきのは俺たちに対する宣戦布告と取っていいんだろ
うな？」

『え…………いや…………その…………』

「マフィアランドから大人しく撤退するなら見逃してやる。だがそれでも戦うつていうなら、てめえも死ぬ覚悟はできてんだろうな？」

『ひいひいひい!』

「す、凄い…………遠くにいるのに…………」

リボンはパニックに陥っているスカルに脅迫し恐怖のドン底へと落としていく。佐天は姿すら見えていないのにも関わらずリボンがスカルを声だけで恐怖させていることに驚きを隠せないでいた。

『えーい! こうなったらやっつてやるぞ! これを機にパシリを脱却してやる! 全隊、戦闘準備! これよりマフィアランドの支配にかかろ!』

「交渉決裂か」

「上等だぜコラ」

「もうヤケだ…………」

「なんか可哀想…………」

追い詰められたスカルであったが、ここまで連合艦隊を連れて来た上に堂々と宣戦布告してしまつた為、引き下がることできず、ヤケになりながらリボンたちと戦うことを決める。スカルの宣戦布告を聞いてリボンは銃を構え、コロネロもショットガンを構えて戦闘準備に入る。一方でツナと佐天はヤケになっているスカルの言葉を聞いて同情してしまつていた。

今、マフィア大戦が始まる。

標的（ターゲット）104 ボンゴレの次期ボスであるということ

スカルたち反マファイアランド連合と戦うこととなったツナたち。

「ファルコー」

コロネロが自身の相棒である鷹のファルコの名前を呼ぶと、ファルコはコロネロを上空まで持ち上げる。

「開戦の合図だぜコラ！ SHOT^{ショット}！」

コロネロは上空からスカルの乗っているであろう艦隊に向かって狙撃する。離れた弾丸は一直線に向かって行き、途中で複数に別れて複数の艦隊に直撃する。

「た、弾が分裂した!？」

「あれってあの時の……」

「コロネロの得意技。マキシマムライフルだな」

佐天は途中が弾丸が分裂したことに驚きを隠せず、ツナは虹の代理戦争の時に見た技だということを思い出す。リボーンはコロネロの技名を説明する。

「何!？」

コロネロは驚愕する。何故なら自身の放った弾丸は直撃したのにも関わらず、戦艦に傷一つ付いていなかったからだ。

『前にお前に艦隊を沈められたからな！ だから船を強化したんだ！』

貴様の軟弱な弾など通用せぬわ!』

「だったら！ こうだぜコラ!」

『え……ぎゃー!』

「直でいったー!？」

「鬼だ……」

戦艦に自分のライフルが効かないとわかったコロネロはスカルに直接弾丸をぶちこんだ。弾丸をぶちこまれたスカルは断末魔を上げ

る。スカルの断末魔はマファイアランド中に響き渡る。コロネロの所業に佐天は驚きの声を上げ、ツナはコロネロがリボーンと同じく滅茶苦茶な人間だということを改めて自覚する。

『き、貴様！ 直接、狙うとは！ それでも軍人か！』

「お前が軍人を語るんじゃないやねえぞコラ！」

「ふ、不死身って本当だったんだ……」

コロネロの弾丸を喰らってもなおスカルはすぐにツツコミをいれる。佐天は前にリボーンの言っていた通り、スカルが不死身だというのが本当なんだということを知って驚いていた。

「俺はもつと強力なのを取ってくる。後は任せたぜコラ！」

そう言うところネロはファルコと共に空を飛んで武器を取りに行った。

「俺たちはマファイア城に向かうぞ」

「マファイア城……?」

「マファイア城はマファイアランドの象徴だ。そこにはこの島にいるマファイアたちがいるはずだ。奴らの協力なくしてはこの事態の収集は計れねえからな」

リボーンがそう言うところ佐天とツナは、マファイアランドの象徴であるマファイア城へと向かうことを決意する。

「佐天。こいつをつけとけ」

「こ、これって……!?!」

リボーンは佐天に向かってある物を投げつけた。それは310と書かれた手袋だった。

「手相を見せる時も真夏のうだるような暑い日でもそいつをつけとけ」

「ちよつ!? 佐天を戦わせる気かよ!?!」

「自衛の為だ。何が起きるからわかんねえからな。とにかく急ぐぞ」
リボーンが手袋を渡したのを見てツナは驚いてしまうが、リボーンは自衛の為だと言う。3人はマファイア城に向かって走って行く。

「せっかく生徒のご褒美の為に来たつてのに、これじゃもう遊ぶのは無理そうだな。スカルの野郎。後で半殺しにしねえとな」

「ざらつと恐ろしいことを言うなよ！」

(遊べない……)

リボーンは砲撃によって破壊されたアトラクションを見ながら呟いた。頑張った生徒佐天の為にマファイアランドに連れて来たというのにスカルのせいで台無しになってしまった為、リボーンは少しだけキレてしまっていた。リボーンの台詞を聞いてツナはツツコミをいれ、佐天はシユンとしてしまっていた。

走ること5分。3人はマファイア城に到着する。

「着いたぞ。ここがマファイア城だ」

「デカっ!？」

(どうしよう……継承式の時に使った城の方が凄くて、あんまり驚かない……)

そこには名前の通り巨大な城が建っていた。思っていたよりも何倍も大きな城だった為、佐天は驚きの声を上げる。一方でツナはボンゴレを継ぐ為の継承式(山本を襲った犯人を捕まえる為に9代目を開いてもらった)で使った城を見ていたせいか、マファイア城を見てもあまり驚かない自分に驚いていた。3人はマファイア城の中へと入る。

「うわー……人がいっぱいいる……この人たち全員、マファイアなんだよね……」

マファイア城にいるたくさんの人たちを見て佐天はそう呟いた。

「てめえ! 舐めてんのか!」

「上等だ! やってやらあ!」

「な、何!？」

「おそらくマファイア連合の大将を決めるのに揉めてんだろ」

(なんか前にもこんな光景があったような……:というか嫌な予感しかない……)

一部のマファイアたちが言い争いをしているのを見て佐天は何が起きたのかわからず驚いてしまう。リボーンは言い争いの原因を推測し、ツナは前にマファイアランドに来た際にも同じような光景があったことを思い出すと同時に嫌な予感がしていた。

「お、おい！ あれ見ろ！」

「何だよ？ あの茶髪のがキが何だつてんだよ？」

「馬鹿かお前は！ あのお方はボンゴレファミリーの次期ボスであるお方だぞー！」

「ボンゴレだと!?!」

「あ、あの方が……!?!」

(嫌な予感的中……!)

ツナのことを知っている男がそう言うのと城内にいた人たちがざわざわし始める。ツナは嫌な予感的中して心の中で後悔してしまっていた。

「よ、よく見ろ！ あの隣にいるのはアルコバレーノのリボーンさんじゃないのか!?!」

「本当だ！ 間違いねえ！」

「あれがボンゴレ区世(ノール)が最も信頼する殺し屋(ヒットマン)……」

(本当にツナさんとリボーン君って裏社会(こっち)じゃ有名なんだ……)

リボーンの姿を見てツナの時と同じく、城内にいた人たちがざわざわし始める。城内にいる人たちの反応を見て佐天は2人が本当に有名なのだということ改めて時間する。するとリボーンは再びレオンを拡声器に変形させる。

「お前ら。ボンゴレの次期候補であるツナはこう言ってるぞ。俺がお前らを導く。だからお前らも俺に着いて来い。みんなで共に反マファイアランド連合を皆殺しにするぞってな」

「ちよっ!? 何、言ってるんだよりボーン!?!」

「流星は次期ボンゴレ！」

「最高だぜ！」

「俺はあんたの為なら命を懸けるぜ！」

「気合いが入ってきたぜ！」

リボーンの嘘を聞いてツナは動揺してしまう。一方で城内にいた人たちはリボーンの言葉を聞いて、一丸となっていた。

「そしてツナの隣にいるこの女は俺の生徒。そしてボンゴレの次期ボスであるツナの妻になる女だぞ。てめえら死ぬ気で護れよ」

「リボーン君!?!」

「リボーン！ 何、変なこと言ってるんだよ!?!」

こんなたくさんの人の前でツナの妻になる女だと言われて佐天は顔を真っ赤にし、ツナはまたリボーンが変な発言をしたことに驚きを隠せないでいた。

「マジか……」

「もうそこまで……」

「よっしやあ！ 俺たちで護ってやろうぜ！」

「やろうぜじゃねえ！ 護るんだよ！」

「安心してくれ姐さん！ あんたには俺たちが指一本触れさせやしねえー！」

(な、何で信じるのー！?!?)

リボーン of 言葉を聞いた人たちは佐天を護る為に一丸となる。佐天はなぜリボーン of 言葉に疑いもせず信じるのかわからず頬に両手を当て、顔を真っ赤にしながら驚くのであった。

標的（ターゲツト） 105 殺意

リボーンのせいでツナは大将に、佐天はツナの妻になる女だと認知されてしまった。

「敵が来たぞー!」

「迎え撃てー!」

城の上から敵が来たのを確認すると、城内にいたマファイアたちは敵を迎え撃つ為に一斉に城から出て前線へと向かって行く。すると銃声や爆発音、そして武器と武器がぶつかり合う音が鳴り響いていく。

「な、なんか凄い……」

「安心して下さい姐さん!」

「姐さんの命は俺たちが護るんで!」

「その呼び方、止めてもらっていいですか!?!」

（俺程じゃないけど、佐天もリボーンのせいで俺みたいになってきたな……）

佐天は戦いの音が聞こえて不安な表情^{かお}する。そんな佐天を安心させようと護衛に残ったマファイアたちがそう言う。佐天は姐さんと呼ばれることに抵抗があったのか止めて欲しいと叫ぶ。ツナは佐天の反応を見て、自分と同じくリボーンに振り回されて苦勞する側の人間になったのだということを実感する。

その時だった

「きゃっ!」

「な、何!?!」

「敵襲か!」

突如、マファイアランドの天井が壊れて上から何かが落ちて来る。何かが落ちてきた余波で城内に土埃が立ち上がり、その場にいた者たちは吹き飛ばされてバラバラになってしまう。

「きゃあー!」

「佐天!?!」

煙が蔓延している中、佐天の体に何かが絡み付く。絡み付いた佐天は宙に浮いて行く。佐天の悲鳴を聞いてツナは佐天に何かが起こっ

たということを理解する。すると煙が晴れる。

「あ、あれはスカルの巨大鎧ダコ！」

「た、タコ!? デカ過ぎでしょ!?!」

煙が晴れるとそこには体の所々に鎧を纏った、体長3メートルを越える巨大なタコがいた。ツナはこのタコがスカルの相棒である巨大鎧ダコであるということを確認する。佐天はあまりにデカ過ぎるタコに驚きを隠せないでいた。

「ハーハッハ！ どうだリボーン！ これで手も足も出せまい！」

「スカル！」

「あ、あの子が！」

タコの頭の上から顔が隠れる程ヘルメットを被った赤ん坊が現れる。ツナがスカルの名前を叫んだ為、佐天はあの赤ん坊がスカルだということを理解する。

「人質を使うとはな。お前らしい姑息な作戦だな」

「うるさい！ どんな手を使っても勝てばいいのだ！」

「ううっ……」

「佐天！」

「姐さん！」

スカルがそう言うのと巨大鎧ダコは締め付けを強くする。締め付けを強くしたことで佐天は苦しみながらも両手でなんとか巨大鎧ダコの締め付けを解こうとするがビクともしなかった。

「さあ！ どうした！ この女がどうなってもいいのか！」

スカルは佐天を人質にしたことで勝利を確認したのか興奮しながらそう言った。

「いぞ別に」

ズガアン！

リボーンは涼しい顔でそう答えると佐天に向かって目にも止まらぬ早さで弾丸を撃ち込んだ。

「は？」

予想外の出来事にスカルは唾然としてしまっていた。人質を用意したのにも関わらず、リボーンが容赦なく人質を切り捨てたのだか

ら。

「何、驚いてんだ。お前が言ったんだろ。どんな手を使っても勝てばいいってな」

「リボーン！ お前！ 何で!?!」

リボーンの非情な言葉を聞いて、ツナは怒りを露にした。

その時だった、

「え!?!」

「なっ!?!」

すると巨大鎧ダコに捕らわれていた佐天の額に晴の死ぬ気の炎が灯り、310と書かれた手袋が光り輝き、Xグロブへと変化していく。そんな佐天を見てツナとスカルは驚きの声を上げる。

「何か勘違いしてねえかスカル。俺は人質を見捨てて勝つなんて言う意味で言ったんじゃないぞ。俺の生徒である佐天の秘めたる力を使っても勝つっていう意味で言ったんだぞ」

「俺の生徒だと……!?!」

(俺と同じ力……)

リボーンはドヤ顔でそう言いきった。スカルは佐天がリボーンの生徒であるということに驚き、ツナは本当に佐天が自分と同じ力を手に入れたことに驚きを隠せないでいた。

「手を離しなさい。痛い目に遭いたくなかったらね」

佐天は巨大鎧ダコに向かって一言だけそう言った。巨大鎧ダコは佐天の目を見ても恐怖するが、主人であるスカルの命令が大事だったのか佐天を離すことはなかった。

「大した忠誠心ね。だったら……」

そう言うと佐天はXグロブに炎を灯すと、自身を捕えている巨大鎧ダコの足に向かって炎を当てる。炎を喰らわされた巨大鎧ダコは熱さのあまり苦しみ始める。これ以上は耐えられないと思ったのか佐天を解放した。解放された佐天はツナたちの元へと降りる。

「スカル。でよかったわよね?」

「な、何だ!?!」

「リボーンから聞いてるわ。あなた不死身なんですよ?」

「そ、それがどうした!？」

「不死身ってことは、どれだけ痛ぶっても死問題ないなないってことでいいのよね?」

「へっ……!？」

「ぎ、佐天……!？」

佐天がそう言うのと額の炎が荒ぶり、グローブに灯っていた炎がシエ
ンツと戦った時よりもさらに純度が高くなっていく。そして佐天の
目は虚になっており、膨大な殺気が放たれる。佐天の発言を聞いた
後、スカルは恐怖してしまう。ツナもスカルと同じく佐天の発言に恐
怖してしまっていた。

「私の楽しみを奪ったんだからタダで済むとは思わないことね。さん
ざんさんざんさんざんさんざん。グチャのグチャのグチャグチャに
してあげるわ。例え不死身でも死んだ方がマシというぐらい痛みを
与えてあなたのしたことを後悔させてあげるわ」

(な、なんか佐天がこれまでみたことないぐらいヤバくなってるので
すけど……!?)

佐天はスカルのせいでツナとのデートを邪魔されたことでスカル
に対して静かに怒り狂っていた。ツナは明らかにヤバい佐天を見て
驚愕してしまっていた。

佐天、暴走!

標的（ターゲツト） 106 佐天、暴走

スカルのせいでこれまでになく死ぬ気の炎が純度が上がった佐天。
「や、やれー!」

スカルは恐怖しつつも巨大鎧ダコに命令を下す。巨大鎧ダコも佐天に恐怖しつつも、8本ある足で佐天に縦横無尽に攻撃を繰り返す。
「なっ!?!」

だが佐天は炎を逆噴射させると一瞬にして消える。そして巨大鎧ダコの額に渾身の拳を一撃を喰らわせた。佐天の一撃を喰らった巨大鎧ダコは気絶してしまった。

「なっ!?!」
「い、一撃……!?!」

佐天が一撃で巨大鎧を倒したことにスカルとツナは驚きを隠せな
いでいた。

「次はあなたよ。スカル」
「ひひひひひひ!」

佐天は倒れている巨大鎧ダコから、ビビって腰を抜かしているスカ
ルを見て、次の標的ターゲットを定める。

「と言いたいところだけど。まずは外で戦ってる奴をなんとかしない
といけないわね。あなたはその後よ。終わってからじっくりと痛
ぶってあげるわ」

そう言うと佐天は外で反ファイアランド連合と戦っている人たち
の加勢に向かうことを決める。そして炎を逆噴射させてその場から
消えてしまう。

「ぎゃあー!」

「く、来るな!」

「に、逃げろ!」

「た、助けてくれ!」

「い、命だけは! 命だけは!」

(な、なんかヤバいことになってるー!?)

佐天が向かった瞬間、外から断末魔が聞こえてきた。声と台詞だけで明らかに反マフィアランド連合が佐天に恐怖してしまっていることを理解したツナは、再び恐怖する。

「な、何がどうなっている!?! あんな化け物がボンゴレにいるなんて俺は聞いたことがないぞ!」

「佐天は最近、俺の生徒になったからな。それに佐天をあんな風にしたのはお前が原因だぞスカル!」

「ど、どういうことだ!?!」

「今日、佐天は憧れであるツナとこのマフィアランドで楽しく遊んでいた。それをお前がぶち壊した。つまりお前は佐天の触れてはならない領域に土足で踏み入れたんだ!」

(そ、そうだったんだ……だから……)

リボーンの話聞いてツナは佐天があんな風になってしまったのかを理解する。

「今の佐天は俺でも止められねえぞ。今の佐天の頭にあんのは楽しみを奪った奴らを殲滅することしかねえ。その覚悟が佐天をさらにパワーアップさせたんだ!」

「あああ……!?!」

佐天が覚醒した理由をリボーンから聞いて、スカルは自分がしでかしたことがどれだけヤバいことだったのかということに自覚する。

『スカル様! こちら海上部隊! コロネロの狙撃にとって全艦隊、撃墜しました!』

「な、何い!?!」

戦艦に残っていたメンバーから無線で連絡が入る。前回の戦艦よりも強力なものを用意したのにも関わらず、前回と同じくあっさり撃墜された為、スカルは驚きを隠せないでいた。

『こちら制圧部隊! 突如、現れた謎の女によって制圧部隊がほぼ壊滅状態です! 至急応援……ぎゃー……!』

「お、おい! どうした! 応答しろ!」

部下の1人が無線でスカルに応援を頼んだが、突如叫び声と共に応

答がなくなってしまう。スカルが無線に再び話しかけるが部下からの応答はなかった。

が

『聞こえてるわよねスカル』

「お、お前は!?!」

無線から男の声ではなく女の声が聞こえてきた。無線からの声を聞いてスカルは戦慄する。

『敵はもう殲滅したわ。後はスカル、あなただけよ』

「ひいひい!」

『安心しなさい。殺してはいないわ。全員、気絶させてるだけ。それはあの人を一番、悲しませることだもの』

暴走してはいるものの佐天は自分の誇りを捨ててはいなかった。佐天の誇りはツナへの想い。ツナの悲しませるようなことは絶対にしない。たとえツナへの想いがなくとも佐天は優しい女の子である為、殺すなどということは絶対にしない。

『だからといってあなたを許すつもりはないわ。報いは受けてもらうわよ。そこで待つてなさい』

そう言う佐天は一方的に無線を切った。そしてもう敗北とお仕置きが決まったスカルにはもう絶望以外、何もなかった。

「終わったなスカル。つーわけだ。今からお楽しみのお仕置きタイムだぞ」

「ひいひいひい!」

(リボーンがかつてない程、嬉しそうな顔をしてるー!?!?)

リボーンがレオンを2tと書かれたハンマーに変形させる。スカルへのお仕置きを楽しみにしていたのかりボーンはかつてない程、嬉しそうな顔をしていた。そんなリボーンの顔を見てスカルは悲鳴を上げ、ツナは恐怖していた。

「この俺に逆らった上に生徒佐天の楽しみを奪ったんだ。俺からも報いは受けてもらうぞ」

「俺からもだぜコラ」

「コ、コロネ先輩!?!」

リボーンがそう言うところネロもスカルにお仕置きする為にやって来ていた。

「待たせたわねスカル」

（デザインは違うが涙子の奴、沢田と同じ力を手に入れたのか……ボングレのボス以外あのグローブを手に入れるなんてやるじゃねえかコラ）

そしてついに魔王^{佐天}がやって来る。佐天^{ハイパー}の超死ぬ気モードとXグ^{イクス}ローブを見て滅多に笑うことのないコロネロの口角がわずかに上がっていた。

「でも1人ずつだと時間がかかるわ」

「だったら3人同時に殺ればいい」

「名案ね」

「だな」

「ひいひいひいひい！」

（めちやくちや一致団結しちやってる!?)

リボーン^案の案を聞いて、佐天とコロネロはリボーン^案の案に乗ることを決める。3人の提案にスカルは恐怖し、ツナはスカルをお仕置きするという名目がかつてない程一気団結してることに驚いていた。

「ここじゃあれだ。場所を移すぞ。逃げられたら意味ねえからな」

そう言うところ3人はスカルを連れて別室に移動する。そしてスカルの断末魔がマファイアランド中に響き渡る。別室から数十分、スカルの断末魔が絶えることはなかった。

遊びに来たはずが、結果的に佐天がまた強くなってしまった。そんな1日となった。

余談であるがこの戦いで佐天は味方からも敵からも恐れられ、絶対に敵に回さないことを心に誓ったという。

学生誘拐事件篇

標的（ターゲツト） 107 2日間の出来事

マファイアランドに行った次の日。

「おはよう」

「おはようございますの」

「おはようございます沢田さん」

ツナはいつものように風紀委員ジャッジメント177支部へと訪れていた。

「今日は少し早いですわね沢田さん」

「あー……うん……少し話しておかないといけないことがあってさ……」

黒子はいつもよりツナが早く来たことに気づいた。ツナは少しだけ暗い表情おしながらそう答える。

「佐天のことなんだけどさ……」

「佐天さんに何かあったんですか!？」

「うん……実は……」

ツナの言葉と表情から何かあったと初春は察する。ツナはシエンツというマファイアに佐天が襲われおことについて話した。

「佐天さんが……」

「そんなことが……」

佐天が一昨日マファイアに襲われたと知って初春と黒子はショックを受けていた。

「ごめん……俺のせい……」

「それで!? 佐天さんはどうなったんですか!？」

「佐天はシエンツを倒したよ」

「た、倒した!？」

「佐天さんがですか!？」

まさか佐天がシエンツマファイアを倒すとは思ってもいなかった為、黒子と初春は驚きを隠せないでいた。

「うん。レオンが吐き出したアイテムでシエンツを倒したんだ」

「吐き出した!?!」

アイテムを吐き出したという言葉聞いて、黒子と初春は誰かが吐き出したのではないかと思っつてしまい驚いてしまう。

「何で人がアイテムを吐き出すんですの!?!」

「え? レオンは人じゃないよ。レオンはリボーンの帽子に乗ってるカメレオンのことだよ」

「あのカメレオンがですか!?!」

まさかりボーンの帽子に乗っているカメレオンがアイテムを吐き出したとは思ってもよらなかった為、初春は驚きを隠せないでいた。

「うん……俺のあの手袋もレオンが吐き出した物だし」

「そうだったんですか!?!」

「とうか何でカメレオンがアイテムを吐き出すんですの!?!」

ツナのボンゴレギアがレオンから吐き出した物だと知って初春は驚きの声を上げる。黒子はなぜカメレオンがアイテムを吐き出すのかわからなかった。

「レオンは形状記憶カメレオンっていつて、一度見た物なら何でも変形できるカメレオンなんだ。それでリボーンの生徒が試練が訪れるのを予知すると繭になって、生徒が成長すると羽化して生徒専用の武器を吐き出してくれるらしいよ」

「あのカメレオンってそんなに凄いカメレオンだったんですね……」

「とうか沢田さんの世界の生態系はどうなっていますの……」

あのカメレオンがそんなに凄いカメレオンだと知って初春は驚き、そんなカメレオンがいるツナの世界の生態系に黒子は驚いていた。

「佐天はシェンツを倒したけど、でも怪我也いっぱいしちゃってさ……」

「そうですか……」

佐天が怪我をしたと知った為、初春は暗い表情かおをしてしまっていた。

「でも大丈夫だよ。命に別状はないから。昨日も俺とリボーンと一緒にリゾートに遊びに行くぐらい元気になったし」

「元気になったんですか!?!」

怪我した次の日に元気になり、さらに遊びに行つたと知って、初春は驚き声を上げた。

「う、うん……体中に怪我してたけどリボーンが治してくれたお陰で傷は全部、塞がったから……」

「何をしましたの!? まさか怪しい薬とかじゃありませんわよね!?」
「大丈夫だから! そんなじゃないから!」

怪我をいっぱいしたと言うのに怪我が1日で万全に治つた知って黒子はヤバいものを佐天に投与したのではないかと疑ってしまう。ツナは大丈夫だと言う。死ぬ気の炎に属性があることを知らない為、疑うのも無理もない。

「それと昨日もマファイアランドっていうリゾートに言つただけど……」

「マファイアランド……?」

「何ですの……?」

ツナはマファイアランドに行つた時のこと話すことを決める。マファイアランドという聞いたことのない単語に初春と黒子は何だそりゃ? という表情かおをしていた。

「リボーン曰く、マファイアがまっさらな気持ちで休めるよう色んなマファイアがドス黒い金を注ぎ込んだリゾートらしいよ……」

「何ですか……その行く気が失せるリゾート地……」

「同感ですわ……」

ツナはリボーンの言っていたマファイアランドの詳細をそのまま伝える。マファイアランドの詳細を聞いて初春と黒子は行きたくないと思つてしまつていた。

「そこでマファイアが襲撃して来てさ……」

「しゅ、襲撃!？」

「マファイアランドはマファイアがお金を出し合つて作られたリゾート地ではなかったんですか!？」

「リボーン曰く、マファイアランドは麻薬に手を出さない善良なマファイアによって作られて……それを良く思わないマファイアはいっぱいいるらしい……」

「善良なマフィアって……マフィアに善良も何もないでしょう……」
マフィアランドが襲撃された理由を話す。善良のマフィアという単語に黒子は引つ掛かってしまう。

「そ、それで!? 佐天さんは大丈夫だったんですか!?!」

「いや怪我は全然しなかったんだけど……ただ……」

「ただ?」

「その……佐天が……敵を1人で全員、殲滅させちゃってさ……」

「せ、殲滅!?!」

佐天がマフィアを殲滅させたと知って2人は驚きの声を上げた。

「うん。佐天、俺と遊ぶのすつごく楽しかったみたいでさ。それを邪魔されて怒っちゃって……死ぬ気の炎って覚悟が強ければそれに比例して強くなるから……」

(な、成る程……)

初春と黒子はツナの説明を聞いて恐怖すると同時に理解する。佐天が覚醒した理由は想い人であるツナと遊んでいたのを邪魔されたことだということに。

「とりあえず話したいことはこれで全部だよ」

「いや……強くなり過ぎじゃないですか佐天さん……一体どんな修行をしたんですか……」

「ジャツジメントですら現場に出るまでかなりの時間を要したというのに……しかも相手はマフィア……」

無能力者で戦闘経験も0だった佐天がたった10日でマフィアと戦えるまでに成長したことに初春と黒子は驚きを隠せないでいた。

「沢田さんたちも色々あったんですね」

「もって……何かあったの?」

「はい。実は……」

「私が話すわ」

「固法先輩?」

初春が話そうとしたその時、支部の扉の方から声がする。声がする方を振り向くとそこには神妙な面持ちの固法がいた。

今、新たな事件が始まる!

標的（ターゲット） 108 誘拐

「あの……何かあったんですか固法先輩？」

「実は8月1日の夜から、学生たちが拐われているのよ」

「拐われる？」

「ええ。何者かの手によってね」

「そんなことが……」

固法はツナに事件の概要を説明する。自分がいない間にそんな事件が起きたと知ってツナは驚きを隠せないでいた。

「さつき風紀委員と警備員アンチスキルが集まって、学生誘拐事件について情報を共有する会議に参加したんだけど、犯人も犯人の目的も、何もわからなかったの」

「でも学生を拐うってことはやっぱり能力者を狙ってるんじゃないんですか？」

「そうじゃないのよ。拐われた学生は能力者だけじゃない。無能力者もいるの」

「無能力者も？」

能力者の学生を拐い悪用するのが目的かとツナは推測するが無能力者の学生も拐われていると知って、自分の推測が外れていることを自覚する。

「事の発端は無能力者武装集団ススキルアクトが襲われるという事件から始まったの。その事件で無能力者武装集団ススキルアクトの何人かが行方不明になっていたの。残ったメンバーは生きてはいるけど重症だったの。そこから学生が行方不明になるという事件が多発し始めたの」

「え？ 全員じゃないんですか？」

「妙なことに襲われた学生は全員が行方不明になってる訳じゃないのよ」

「それなら襲われた学生に事情聴取すればいいんじゃない？ ……犯人を見るし手がかりになるんじゃない？」

「それが被害者によって犯人の顔が違うのよ。顔に十字傷がある男、

ガリガリの男、ムキムキの大柄の男、金髪ツインテールのギャル、短髪にピアスをした銀髪の女、着物姿の黒髪ロングの女、性別不詳なんていうのもあったわ。とにかくたくさんあり過ぎて犯人の特定がでないのよ」

「変身するとか、幻覚を使う能力者なんじゃ……」

固法は先程の会議で被害者から聞いた人物像を話そた。ツナは変身できる能力者や、幻覚を使う能力者の仕業ではないかと予測する。

「そう思ったんだけど被害者は全員、爆発を使う能力者だっていうのよ。現場には爆発物はなかったって言うし。能力者が持てる能力は1人1つまでだしね。能力とか関係なしに犯人が変装や声を変えるのが上手いっていう可能性も考えられたから警備員が調査したんだけど、その線も薄いみたいなの」

「まさか木山さんみたいに幻想御手で複数の能力を使ってるとか？」

「^{レベルアップ}幻想御手の流通は完全にストップされてる上に、学生たちにも^{レベルアップ}幻想御手のリスクのことは知っている方は多いですよ。絶対にはないと言い切れませんが可能性は低いですわね」

「そっか……」

「もしかしたら木山先生の研究を盗み見て悪用した人がいるっていう可能性もあると思いますよ。私は木山先生の研究者で^{レベルアップ}幻想御手の研究の資料を見てたとか。私はそれで木山さんに捕まってしまうましたし。木山さんは自分以外の人を客室に入れたことはないって言うてましたけど」

「二応、木山先生に聞いてみるよ俺」

初春は自分が木山に捕まった時に木山が言っていたことを伝えた。ツナは木山に詳しく聞きに行くことを決める。

「それと爆発系の能力者を調べただけで全員、アリバイがあって全員シロだったわ」

「厄介ですね……」

「そうなのよ……犯人の目的がわからない、犯行時間もバラバラ、そして通報があるのがいつも事件が起こった後だから対策の仕様がなくて……」

何もかもがわからず固法は右手を額に乗せて、ため息をつき悩んでいた。

「あっ！　　そういえばさつき会議で聞いたんだけどーつ妙なことがあるのよ」

「妙なこと？」

「ええ。全ての被害者じゃないけど、被害にあつた場所が違うって言う被害者がいるのよ」

「どういうことですか？」

「被害者が襲われたのは人気のない路地が多いの。けど被害者は自分はこの襲われてはいないって言ってる被害者がチラホラいるのよ」

「襲われた場所と被害者の証言があつていないってことですか？」

「そういうことよ」

「ますます妙ですね」

「そうなのよね」

固法の話聞いてツナはますますどういふことなのかわからなくなってしまうていた。

「とにかくこれ以上、被害者を出さない訳には行かないわ。私たちの役目は犯人を捕えること。その為に徹底的に犯人の手がかりを見つけてるわよ」

「はいっー」

固法の言葉を聞いて3人は大きい声で返事をする。

だがこの時ツナたちは知らなかった。この犯人がまさかの人物だということだ。

標的（ターゲット） 109 可能性

学生誘拐事件の手がかりを探るべく、ツナは木山に連絡する。初春は木山と幻想御手事件を解決に協力していた為、連絡先を知っていた。初春はツナに木山の連絡先を教えてもらい木山と連絡する。

「待たせてすまないね沢田君」

「こちらこそすいません。急に呼び出してしまって」

ツナは木山と初めて出会ったファミレスにいた。ここで集合することをあらかじめ電話で決めていたのである。

「生徒の皆さんは大丈夫ですか？」

「もう少しで退院できるそうさ」

「そうですか。よかった」

ツナは生徒たちの状態について聞く。もうすぐで退院できると知ってツナはホッとする。

「それで話というのは何かかな？」

「はい。最近、学生が行方不明になってることは知っていますか？」

「知っているよ。ニュースで話題だからね。それがどうしたのかな？」

「実は……」

ツナは先程、固法にから聞いた事件の概要について木山に説明する。

「成る程……爆発の能力者を使うが爆発系能力者はシロ。それに襲われた被害者の犯人の人物像が違うと……変装や声帯を変化させるのが得意な人物という線も薄い。つまり犯人がかつて1万の能力を使った私が怪しいと言いたいのかかな」

「い、いや！ そういうことじゃなくて！」

「フフツ。冗談だよ」

木山の言葉を聞いてツナは慌てて訂正する。慌てるツナの姿を見て、微笑みながら冗談だと言った。

「要するに私の研究を誰かが悪用しているのではないか。そう言いた

「いんだね」

「はい。誰か心当たりはないですか？」

「私は花飾りの少女以外を幻想御手の資料がある客室には入れなかったからね。万が一を備えて私は監視カメラを設置していたしね。監視カメラの映像は私の目と共有できるコンタクトをつけていた。花飾りの少女に見つかった後は研究資料やデータは消去した。同僚もアンチスキル警備員の事情聴取で幻想御手のことは知らないと判断された。可能性は低いだろうね」

「そうですか……」

「いや……待てよ……」

「誰か心当たりあるんですか!？」

同僚が犯人だという可能性は低いと考えた木山であったが、右手の親指と人差し指を顎に当てて何かを考え始める。ツナは木山の反応を見て、誰か心当たりがあるのだと判断する。

「木原幻生。私のかつての上司だった男。そして私の教え子たちを昏睡状態にした元凶だ。君は私の記憶を見たから知っているんじゃないかい？」

「もしかしてあのお爺さん……」

「ああ。あの事件があった後で色々調べてわかったんだが、彼は研究の為に数多の研究施設を壊滅させている。学者の間ではマッドサイエンティストと呼ばれているそうだ」

ツナは木山の記憶を見た時に出て来た邪悪な笑みを浮かべた老人のことを思い出す。木山は幻生のことについて木山に説明する。

「そして幻生は私に脳波調律について教えた。それを元にして私は幻想御手を作り上げたのさ」

「じゃあ……木原幻生が怪しいんですか？」

「それはなんとも言えない。彼は幻想御手の詳しい方法を知らないはず。と言いたいが彼はこの学園都市に深く根付いている。正直、知っただけでも不思議じゃないし、脳波調律を私に教えた彼なら作り出すことも不可能じゃない」

「成る程……」

「彼は目的の為なら手段は選ばない男だが、こんなにも目立つ事件を起こすようなタイプじゃない。可能性はゼロじゃないがはつきり言って微妙だ」

性格や自分に脳波調律を教えた幻生が怪しいと睨んだ木山であったが、本当に幻生が犯人であるかどうかまでは断言できなかった。

「もし彼を調べるといふなら気をつけた方がいい。さつきも言った通り彼は数多の研究機関を壊滅させている。それに彼は神出鬼没だ。そう辿り着けるものじゃない。辿り着けたとしてもタダで済まないと思っておいた方がいい」

「はい」

幻生が危険人物だということをも身をもって理解している木山はツナに注意を促した。

「助かりました木山さん。ありがとうございます」

「礼は言わなくていい。彼がまだ犯人だと決まった訳じゃない。あくまで私の勝手な推測に過ぎないからね。別の人物という可能性もある。それにまだまだこの世には知られていない力だっけ考えられる。例えば超能力とは違う力を使い、学園都市をも上回るオーバーテクノロジーを持つような人間とかね」

「ハハハ……」

例えば自分のことだと知って、ツナは苦笑いしていた。木山はツナの死ぬ気の炎が超能力とは別の原理の力を理解していた。

「そういえばリボーン君は元気かい？ 正直、会えると思っていたのだが」

「リボーンは元の世界で佐天に修行をつけてますよ。あっ！ 髪の毛の長い黒髪の女の子のことです」

「知っているよ。花飾りの少女から聞いたからね」

ツナは木山が前に佐天に会っているがあの時、佐天は自己紹介していなかった為、外見的特徴を伝えた。木山は初春から佐天のことを聞いていた為、佐天のことを知っている。

「彼女にも悪いことをしてしまった。あれから彼女は大丈夫かい？」

「自分のしたことの過ちに気づいて前を向いています。リボーンに修

行っけてもらってるのもあの1件で色々と後悔したからなんですよ」
「そうか……」

佐天が幻想御手事件^{レベルアップ}によって傷ついてしまっているのではないかと心配したが、ツナからの話を聞いて少しだけ安堵していた。

その時だった、

「黒子からだ。もしもし?」

『沢田さん。すいません。至急、支部に戻っていただけますか?』

標的（ターゲット） 110 新たな被害者

学生誘拐事件の手がかりを探すべく木山に話を聞きに行つたツナであつたが、黒子からの連絡を受けて支部へと戻つて行く。

「ただいまー。何かあつたの?」

「あつー!」

「あなたはあの時の……」

「えつと……どこかで会つたっけ……?」

ツナが支部に戻ると常盤台の制服を纏い、ウェーブのかかったライトブラウンでセミショートセミショートの髪髪の女の子と、同じく常盤台の制服に身を纏い黒髪のロングヘアロングヘアの女の子がいた。ツナは2人の反応から自分とどこかで会つてゐるということを理解する。しかし記憶の糸を辿つてもツナはこの2人に会つた記憶はなかつた。

「い、いえ……前に学舎の園で御坂さんと戦つていたのを拝見しまして」

「あー。そういうことか」

常盤台狩り事件の際にツナは美琴と戦つた。その時にツナと美琴が戦う所を多くの生徒たちが見ていた。この2人もその場いた為、自分のことを知つてゐるということを理解する。

「この方はたちは私のクラスメイトの湾内さんと、泡浮さんですわ」

「湾内絹保わんないきぬほと申します。以後、お見知りおきを」

「泡浮万彬あわつきまあやと申します。以後、お見知りおきを」

「え、えつと……沢田綱吉です。よろしく願ひします!」

湾内と泡浮が丁寧に自己紹介する。常盤台のお嬢様オーラに押されたのかツナは年上であるのにも関わらず敬語で自己紹介してしまつた。

「それで話つて何、黒子? 何かあつたの?」

「ええ……」

ツナが黒子に支部に戻つて来るように言つた理由を黒子に尋ねると、黒子は暗い表情かおをしてしまう。

「実は婚后さん……友達と連絡がつかないんです」

「そ、それって……!?」

泡浮が暗い表情かおをしながらそう答える。泡浮の言葉を聞いてツナは理解した。婚后が学生誘拐事件に巻き込まれたということに。

「今日、婚后さんと遊ぶ約束していたんです。けど待ち合わせ場所でいくら待っても来なくて。連絡もしたんですけど、全然出なくて。寮の方にも行ったんですが寮にもいなくて。同じ寮の方が寮から出て行くところを見ていると言っているという証言がありました」

「それで最近、学生誘拐事件が多発していることを思い出して。それで友人である白井さんに相談しに来たんです」

「そっか……」

湾内と泡浮が友達である婚后が誘拐事件に巻き込まれたとのではないかという可能性を示唆する。

「ですが正直、どうしようもないというのが現状ですの。本当に拐われたとしても事件が起こったかどうかがわからない以上、風紀委員ジャッジメントも警備員アンチスキルも動くこともできませんの」

「そうか……通報があつたのは集団でいて拐われなかった人だから……」

「悔しいですわ。事件が起きてるかもしれないのに動けないだなんて。なにより友人が困っているというのに何もしてあげられないなんて」

（ど、どうしよう……白蘭の力を借りれば解決できるとは思うけど……）

黒子はどうしようもないこの状況に悔しを覚えてしまっていた。黒子の言葉を聞いて湾内と泡浮は暗い表情かおをしてしまう。そんな2人の表情を見てツナは白蘭の力を借りようかどうか迷ってしまった。いた。

「仮に婚后光子が拐われたとなればこの誘拐事件とても厄介ですの」

「どういふこと?」

「婚后光子は大能力者レベル4の風力使いエアロハンド。キャパシティダウンを使っていないのにも関わらず大能力者レベル4を拐ったとなればかなりのやり手ですの」

「大能力者⁴つてことは……黒子と同じ……」

「今まで大能力者⁴が拐われた事例は通報のある限り今回が初めて。このまま犯人を捕まえられなければ大変なことになりますの」

「婚后が大能力者⁴だと知りツナは婚后を拐った人物が相当な手練れであるということを理解する。」

「やっぱり木原幻生が犯人なのかな……」

「木原幻生？」

「うん。さつき木山さんが言ってたんだ。かつての木山さんの上司で目的の為なら手段を選らばなくて、いくつもの研究施設を壊滅させてきたつて。木山さんのその人から脳波調律？ つていうのを教わつてらしくつてさ。そこから幻想御手^{レベルアップバー}を作るきつかけを手に入れたらしいよ」

「それなら不可能ではないかもしれませんがね」

「ただ木原幻生は手段を選らばない人だけどこんなにも目立つようなことをする人間じゃないつて。だから犯人かどうかは微妙だつて。仮にそうだったとしても神出鬼没で辿り着いたとしても危険人物タダでは済まないつて」

「微妙ですわね……」

「……」

ツナの話聞いて黒子と右手の親指と人差し指を顎に当てて考え込む。湾内と泡浮は2人の会話はわからなかったが、相当ヤバイ人物がこの事件に関わつていてという可能性があることを理解していた。「それと沢田さん。実はお願いがありますの。湾内さんと泡浮さんを学舎の園まで送つて欲しいんですの」

「学舎の園に？」

「この2人の寮は学舎の園の中にありますの。学舎の園まで送つて頂ければ2人は安全ですの。いくら手練れでもあそこのセキュリティを突破するのは不可能ですから」

「俺よりも黒子のテレポートを使った方が早いんじゃない？」

「私はこれから婚后光子が通つたであろうルートを散策して手がかりを見つけに行きますの。失礼ながら沢田さんは戦闘は得意ですが、調

べるのは得意ではないのです。それに沢田さんが護衛なら仮に犯人に襲われたとしても心配する必要がないですから」

「わかった」

黒子はツナに2人を護衛するメリットを話す。ツナは黒子の言葉に納得し2人を学舎の園に送ることを了承する。

「何かあれば初春から連絡があるのでいつでも連絡を取れるようにしておいて下さい」

「うん。って初春は？ 固法先輩もパトロールに言ったって聞いているけど」

「初春は別室で集中したいと言ってパソコンを使って作業していますの」

「わかった。黒子も気をつけてね」

「ええ。じゃあ行ってきますの」

そう言うのと黒子はテレポートで誘拐事件の手がかりを調べに行つた。

(2人の為に早く犯人を捕まえないとな)

黒子がテレポートした後、ツナは心の中でそう決意するのであった。

ツナは黒子の指示通り湾内と泡浮と共に学び舎の園へと向かって
いた。

「ごめんね……力になってあげられなくて……」

「あ、謝らないで下さい沢田さん！」

「私たちの護衛にあたって下さっているだけでも申し訳ないというの
に！」

ツナは力になれなかったことを謝罪する。そんなツナを見て湾内
と泡浮は慌てながら謝罪しなくていいと述べた。

「でも絶対に助けるから。だから待ってて絹保、万彬」

「は、はい……」

「ありがとうございます……」

ツナは真剣な表情で婚^{かお}后を助けることを約束した。ツナの言葉を
聞いて湾内と泡浮は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしながらそう
言った。

「な、何か変なこと言った？」

「い、いえ……家族以外の方に下の名前で呼ばれたことなかったもの
で……」

「わ、私も……」

ツナは何か不味いことをしたのでがないかと心配になってしまっ
ていた。湾内と泡浮は下の名前で呼ばれる機会がなかった為、困惑し
てしまったのだった。

「ごめん急に。嫌だったら普通に名字で呼ぶけど……」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

「お気になさらず！」

名前呼びが不快だったのではないかと思ったツナであったが、そう
ではないと泡浮と湾内は訂正する。

「そういえば以前に学び舎の園に入られていましたがどうやって入っ
たのですか？」

「あれは常盤台狩りの捜査っていう名目で特別の許可が降りたんだよ」

「ですが沢田さんは私服でいらっしやいますけど本当に風紀委員の方なのですか?」

「俺は風紀委員の協力者だからさ。正式な風紀委員の人間じゃないんだ」

「そうでしたか」

湾内は本当にツナが風紀委員の一員なのかどうか尋ねる。ツナの返答を聞いてツナが私服の理由を理解する。

「逆に聞きたいけど何で2人は制服着てるの? 今って夏休みだよね」

「私たちの学校は外出時は制服を着用しないといけないという決まりがあるんです」

「そういえば美琴と黒子の私服姿って見たことなかったっけ……」

泡浮に言われてツナは今さらながら思い出す。黒子と美琴が制服以外の服を着ているところを見たことないことを。

「やはり御坂さんとはご友人なのですな」

「うん」

「やはり超能力者同士。仲がいいのですね」

「へっ……!?!」

泡浮が自分のことを超能力者だと認識していた為、ツナは驚きの声を上げてしまっていた。

「常盤台では話題になっていますのよ。ずっと謎だった学園都市の第1位か第2位の超能力者。それに加えて理論上不可能なはずの多重能力者だと」

「(そ、そんなことになってるのー!?)」

泡浮がツナが常盤台の間で有名人だということ伝える。常盤台の生徒は自分のことをそんな風に思っているとは思ってみなかった為、ツナは驚いてしまっていた。

「(ど、どうしよう!? どうやって誤魔化そう!?)」

ツナはどう誤魔化そうかと考えたがツナは何も思い浮かばず焦っ

ていた。

「沢田さん？　どうかなさいました？」

「い、いや！　何でも！　あっ！　学び舎の園が見えて来たよ！」

湾内はツナの様子がおかしいことに気づいた。ツナが誤魔化そうとしようとした時、タイミング良く学び舎の園が見えて来た為、結果的に誤魔化すことに成功した。

「送って頂きありがとうございます」

「2人も気をつけてね。外に出るのは必要最低限にね」

学び舎の園のゲート前に到着すると2人はツナに深々と頭を下げてお礼を言った。ツナも事件に巻き込まれないよう注意を促す。そして湾内と泡浮は学び舎の園へと帰って行く。

「ふう……とりあえず支部に戻ろう。黒子が何か証拠を見つけてくれたらいいんだけど」

一方、誘拐事件の手がかりを探している黒子は。

「やはり手がかりが全くなしで見つけるのはきついですわね……」

黒子は婚後が通ったであろうルートの中で人気のない所をしらみ潰しに散策していた。

「ここは一旦、支部に戻るのが懸命ですわね」

黒子はこの方法で誘拐事件の犯人を見つけることを諦めて、一旦支部に戻って別の方法を模索することを決定する。

その時だった

「ねえ。お姉ちゃん。こんな所で何してるん？」

突如、関西弁で誰かが話しかけて来る。黒子が声のする方を向くとそこには茶髪のショートヘアの女の子が立っていた。

「あなたの方こそこんな人気のない所で何をしているんですの？」

「今から友達の家遊びに行くんや。この道を使うと友達の家までの近道やねん」

「最近、このような通りで誘拐事件が多発していますの。通るなら人気のある場所を通って下さいですの」

「ウチも知ってるよ。ニュースで見たよ」

「ええ。とにかく危ないですから早くここから移動しますわよ」

黒子は小学生を人気のある場所へと移動させるようとする。

その時だった

ドーン！

「ガハッ!」

黒子の後方に爆発が発生した。黒子は爆発をモロに喰らってしまい、うつ伏せの状態で倒れてしまう。

「最近、学生が襲われてるんやて。お姉ちゃんも気を付けた方がええで」

(ば、爆発……!?! まさかこの子が……!?!)

小学生は爆発が起きてもなお一切、動揺することなく笑顔で言った。まさかこの小学生が敵だとは思ってもみなかった為、黒子は驚きを隠せないでいた。

黒子の前に姿を現した学生誘拐事件の犯人。果たして黒子の命運は!?!

標的（ターゲット） 112 大能力者（白井黒子） V
S 謎の少女

黒子の目の前に現れた学生誘拐事件の犯人。

「どうしたんお姉ちゃん？ そんなところで寝てたら危ないで。最近、学生が誘拐されるっていう事件が多発してるんやで」

少女は倒れている黒子に向かって笑顔で言う。黒子は咄嗟にレポートを使い小学生から距離を取る。

「わあ！ 急に消えた！ ウチの思った通りや！

その制服を着てる学生は全員、能力が使えるんやね」

（常盤台の知らない？）

正上内の発言を聞いて黒子は違和感を覚える。常盤台中学は学園都市において強能力者以上の超お嬢様学校。常盤台中学を知らない人間の方が少ない。

（考えられる可能性は学園都市に来たばかりの原石の能力者？）

学園都市の来たばかりの原石の能力者であれば常盤台のことを知らないことも辻褄が合う。外部の侵入者という線も考えられたが学園都市は世界最高のセキュリティを誇っている。不法侵入することなど不可能に近い。

「さっきもお姉ちゃんと同じ制服を着た人と戦ったんやけど全然、つまらへんかった。すっごい高飛車で偉そうなこと言ってたクセに話にならへんもん」

（やはり婚後光子は……）

少女の言葉を聞いて婚後が拐われたということを知り確信する。

「もしかしてお姉ちゃんの友達だったりするん？ それやったら堪忍な」

「友達じゃないですの。彼女と私は犬猿の仲でしてね。ですが風紀委員としてあなたを拘束させていただきますの」

すると黒子はレポートで小学生の後ろを取ると両足を畳んで即

座に伸ばし頭に直撃させる。

「なっ!？」

黒子の蹴りは確かに直撃する。しかし黒子の蹴りは当たらず、すり抜けた。黒子は自分の攻撃がすり抜けたことに驚きを隠せないでいた。

「残念。ハズレや」

「ガハッ!？」

少女がそう言うと言をパチンと鳴らす。すると黒子の背後からに爆破が発生する。黒子は再び爆破を喰らってしまい地面に倒れてしまう。

(やはり幻想御手……!?)

自分の攻撃がすり抜けたことと、爆破の力を使うことから幻想御手レベルアップバーによって複数の能力を得た能力者なのではなかと推測する。

「全く戦闘経験のない能力者やないんやね。今まで戦ってきた相手よりはマシやけどウチの相手やないな」

「くっ!」

そう言うと少女は黒子を蹴りを入れる。黒子はレポートで少女の蹴りを躲した。

(いない!?)

空中にレポートした後、金属矢を放って攻撃の間を作ろうとした黒子であったが、先程いた場所に小学生が影も形もなかった。

「こっちやでー」

「グフツ!？」

黒子は背中にモロにドロップキックを喰らってしまう。蹴りを喰らわされた黒子は路地の壁に叩きつけられてしまい、地面に倒れてしまう。

「はあ……はあ……」

「へえ。まだ立つんや」

「あなたの攻撃よりも……お姉様の電撃の方があなたの何倍も痛いんですの……これくらいどうってことありませんの……」

「強がりさんやね。なんなら手当てしてあげよか? 治療代は出世払

いで構へんで」

「遠慮いたしますの……それより学生を誘拐して何を企んでいますの？」

「そうやねー。大人しゆう降伏してくれるんやったら教えてやってもええけど」

「残念ですがそういうことならお断りですわ。こうなったら実力行使で聞くことにしますの。あなたの目的も幻想御手のことも」

「レベルアップパー？ 何やそれ？」

レベルアップパー

（幻想御手を知らない？ じゃあ幻想御手を使わずして複数の能力を

レベルアップパー

……じゃあ木原幻生、もしくは木原幻生と何かしら繋がりはないということですか？）

今までふざけた口調で喋っていた小学生が幻想御手という単語をキョトンとしてしまう。黒子は小学生の反応から今回の事件にレベルアップパー幻想御手と木原幻生が関係がないかもしれないという可能性を示唆する。

（だとしたら何も使わずに多重能力者になったとでも!? それとも何か別の方法で……どういことかはわかりませんがここで捕らえなければ被害は広がってしまいますわー！）

黒子はこの誘拐事件の犯人が自分の想定していたよりも遥かに危険な人物だと理解する。

（おそらくあの爆破は一定以上の距離内の好きな場所に爆破できる能力、そして姿を消して私の背後を取ったのは壁をすり抜けの応用……）

黒子はこの短期間で小が使った能力の詳細を見抜いていた。

「じゃあ。そろそろ私と来てもらうで。お姉ちゃん」

「ぐっー！」

少女は再び黒子の周囲を爆破させる。黒子はテレポートを使わず腕をクロスさせて爆破に耐える。そして爆煙に黒子は包まれていく。

「ちよつとやり過ぎたやろか？」

少女が煙の中にいる黒子に向かってそう言った。黒子の返事はなかった。

その時だった

「わっ！ 何やこれ！」

突如、少女の視界が真っ暗になる。少女は突如、視界が真っ暗になった為、慌ててしまう。少女の視界が真っ暗になった理由はビールケースだった。黒子は爆煙の中、近くにあったビールケースを少女の頭の上にテレポートさせた。そして落ちてきたケースが少女の頭にすっぽりとハマったのである。

「さっきのお返しですわ！」

「ガハッ!？」

黒子は少女の背後に回り背中にドロップキックを喰らわせて吹っ飛ばした。少女は数回、バウンドしながら吹っ飛んだ後、倒れてしまう。

(今ですわ！)

自分が身を挺して作ったチャンス。黒子は少女を気絶させる為にテレポートで一気に少女の元へ移動する。そして黒子の手が少女の手に延びる。

「なんてな☆」

「ガハッ……!？」

がしかし。黒子の背後から少女が蹴りを叩き込んだ。蹴りを叩き込まれた黒子は再び吹き飛ばされ倒れてしまう。

「な、なぜ……!？」

黒子はわからなかった。捕らえる直前までに確実に目の前にいたはずの少女が背後から攻撃を仕掛けたかということに。

「それを教える必要はないわ。ほな行こうかお姉ちゃん」

少女の手が少しずつ少しずつ黒子へと伸びて行く。

絶体絶命のピンチ。黒子の運命は!？」

標的（ターゲツト） 113 深まる謎

絶体絶命の絶命のピンチに陥った黒子。

「ん？」

すると少女の顔の前に鉄製の球体が現れる。少女は何かわからず疑問符を浮かべる。

「わっ！」

すると球体が破裂し目が開けられない程の目映い光が放たれる。少女は咄嗟に右腕で目を覆い、目を閉じた。数秒程で光は消える。

「あれ？ もうおらへんわー。せつかく面白い能力者を見つけたのになー。まあええか」

光が収まると黒子の姿はどこにもなかった。少女は焦った様子は全くなく、探す素振りすらみせなかった。

「お陰で面白いこと思いついたしな」

一方で黒子は

「はあ……はあ……」

閃光弾で隙を作った後に黒子はテレポートを使って路地を抜けて、なんとか人気のある場所まで逃げることに成功していた。

（捕まえると言っておきながらこの有り様……しかも逃げることにできないなんて……）

左手で脇腹を押さえ、建物に右手を当てながら黒子はなんとか歩き、情報を持ち帰る為に支部に戻ろうとしていた。

（なんとしてでも……情報を……）

黒子の視界が段々と薄れていく。それでも黒子は歩みを止めな

かった。だが自分の意識とは反比例して黒子の体は傾いていき、黒子は意識を失ってしまった。

「う、うーん……?」

「白井さん!」

「黒子!」

「初春……沢田さん……お姉様……?」

黒子は目覚める。目が覚めると初春とツナ、そして美琴の姿があった。

「ここは……?」

ジャッジメント

「風紀委員の医療室です。連絡しても出ないからもしかしてと思って沢田さんに様子を見に行ってもらったんです」

「そしたら黒子が倒れてさ。よかったよ本当に無事で。怪我はリボーンに来てもらって全部、治してもらったから」

（本当に治ってる……沢田さんが言っていた佐天さんの怪我を治したというあの……）

黒子は右腕を上げると怪我をした箇所を見る。少女に負わされた怪我が綺麗さっぱりと無くなっており、これがツナの言っていた佐天の怪我を治した技術だということを理解する。

「それよりなぜお姉様がここに……?」

「初春さんから連絡があったのよ。黒子が例の誘拐事件の犯人にやられたって。それで力を貸して欲しいって。誘拐事件の詳細も聞いたわ」

「すいません白井さん。白井さんがここまでやられた以上、この先どうしても御坂さんの力が必要になると思つて……」

黒子は美琴が支部にいることがわからなかった。美琴は自分がここに理由を話す。初春は自分の勝手な判断で美琴に協力を要請したことを謝る。

「いえ……謝る必要などありませんの……むしろ敵は私たちが思つている以上に厄介だということがわかりましたの……」

「そうなの？」

「ええ。詳しく話しますわ。固法先輩は？」

「固法先輩は警備員アンチスキルと一緒に黒子が倒れてた場所の周辺の捜査をしてるよ」

「いけませんわ！ 早く……っ!?!」

固法が調査をしていると知つて黒子は慌てて飛び上がる。だが怪我は治つていてもダメージまでは治つていない為、体に痛みが走る。

「まだダメだよ黒子！ 傷は治つてもダメージは治つてないんだから！」

「それより早く固法先輩に連絡して、捜査を止めて撤退するように言つて下さいですよ！」

ツナは無理して体を動かさないよう言うが、黒子は自分の体を気にしている場合ではなかった。

「どういうことですか白井さん!?!」

「もし犯人に襲われれば固法先輩や警備員アンチスキルでは歯が立ちませんの！」

固法は透視能力クレヤボヤンス。警備員アンチスキルの構成員は大人である為、能力者はいない。固法と警備員アンチスキルでは太刀打ちできないと黒子は判断したのである。

「大丈夫よ。もう捜査は終わったわ」

「固法先輩……」

黒子が心配した矢先、固法が戻つてきた。固法が無事だとわかつて黒子は安堵する。

「あの固法先輩。捜査の方は？」

「今まで通り収穫ナシよ。それより無事で何よりだわ。リボン君のお陰ね」

「固法先輩、リボンさんに会ったんですか？」

「ええ。あなたが怪我をしたって連絡があったから支部に戻って来たの。その時に会ったの」

「そうでしたか」

「それで？ どうだったの？ 犯人と戦ってみて？」

「はい……」

黒子は犯人と戦って得た情報を話す。原石の可能性、多重能力者デュアルスキルの可能性、そして自分と同じく大能力者レベル4である婚后光子が拐われたこと、そして今回の事件に木原幻生が関わっていないということ。

「そんな……婚后さんが……」

婚后が拐われたと知って美琴はショックを受けていた。

「木原幻生は関係ない……」

「じゃあ一体、誰の仕業なんでしょう……」

「ますますわからなくなってしまったわね……」

黒子の情報を聞いてツナ、初春、固法は犯人が一体、誰なのかわからず悩んでいた。

「わかっているのは大能力者レベル4でも太刀打ちできないだけの強さを持っていることね」

「そうなれば現状、太刀打ちできるのは私の知る限りでは沢田さんとお姉様アンチスキルぐらいですわ」

「警備員アンチスキルに協力してもらってこの誘拐事件の危険度を上げてもらうことと、学生に不要不急の外出を控えることを通達してもらわないことね」

固法は犯人の強さ、素性がわからないことを考慮して固法は対策を練った。しかし犯人への手がかりは1つもわかっていない。この対策も気休めでしかない。

固法の提案によってこの後、学園都市中に固法の提案が知らされることとなった。

しかしこの時、ツナたちは知らなかった。こんな対策でさえ犯人の

前では何の意味もなさなかったということに。

標的（ターゲット） 114 接近

黒子が襲われてから通報は無くなった。しかしあれから調査を続けるも、犯人に繋がる手がかりは一向に見つからなかった。そして今日は全員、一旦家に帰ることとなった。

「学生誘拐事件……私がいけない間に学園都市も大変なことになってるんですね」

「うん。調べても調べても全然、犯人に繋がる手がかりが見つからなくてさ」

ツナは家に帰り、ご飯と風呂を済ませた後、現在学園都市で起きている誘拐事件について佐天に話した。

「白井さんは大丈夫なんですよね？」

「傷は俺が完治させたからな。問題ねえ。お前の時と一緒にダメージは残ってるけどな」

「よかった……」

リボンから黒子が無事だと知って佐天は安堵した。

「それも大変だったんだけどさ。実は佐天のクラスメイトが支部に来てさ……佐天と連絡が取れないから誘拐されたんじゃないかって大慌てでさ……なんとか誤魔化すことに成功したけど……」

「学園都市に帰ったら謝っておかないとな……」

佐天はクラスメイトに異世界に行つて修行して来るとは言えない為、夏休みの間、最近できた能力者の友達に能力の修行をつけてもらう。修行に集中したいから連絡をしないで欲しいとあらかじめ言っておいた。しかし学園都市で誘拐事件が起き、外出の規制が発動されるといふ緊急事態が発生した為、友達の安否が気になってしまう。それでクラスメイトは佐天に連絡。しかし何度電話しても連絡がつかず、寮に行つても佐天はいない。それで支部に佐天のクラスメイトが押し寄せて来たのである。なんとかツナたちは誤魔化すことに成功した。ツナの話聞いて佐天は罪悪感を覚えており、学園都市に帰つたらみんなに謝ることを心に決める。

「にしても黒子が負けるなんてな。相当な手練れってことだな」

リボーンは黒子の能力と強さを体感している為、誘拐事件の犯人がかなりの手練れだということを理解する。

「白蘭さんに聞いたらどうですか？ あの人ならすぐに事件解決できるじゃないですか」

「そいつは止めたおいた方がいいぞ。前の事件と違って今回の事件は公になっちまってる。そんな事件をいきなり解決したら怪しまれる。そいつがバレたら俺たちの存在がバレちまう。白蘭を利用しようとする連中だつて現れるはずだ」

「そっか……」

佐天は白蘭の能力を使えばいいと提案するが、リボーンはそれを否定する。リボーンの意見を聞いて佐天は白蘭の能力を使わない方がいいという理由を理解する。

「あいつの能力の前じゃどんな兵器や能力者が敵になろうが何の意味を成さねえからな。第一、能力はなくともあいつに勝つのは不可能だろうがな」

「だろっね……」

リボーンもツナも学園都市の技術や能力者を全て知っている訳ではないが、白蘭が負ける姿は想像できなかった。

「本当に犯人は誰なんでしょうね。あつ！もしかして宇宙人だったりとか！」

「アハハ……佐天らしいね」

都市伝説が好きな佐天らしい答えを聞いて、ツナは苦笑いしていた。

「いやー……異世界の人だっているんだからいてもおかしくないじゃないですか」

「そういえば木山さんも同じようなこと言ってたっけ……この世にはまだ知らない力があるって……まあ死ぬ気の炎のことだったんだけど……」

「何だお前。木山に会ったのか？」

「うん。最初は幻想御手^{レベルアップ}を悪用した人物の仕業じゃないかと思って、

木山さんなら何か知ってるんじゃないかって聞いてみたんだ。まあ結局、木山さんの予想も外れちゃったんだけどさ……」

リボーンはツナが木山に会ったことが気になったのかツナにそのことについて尋ねた。ツナは残念そうな顔で答えた。

「とにかく明日からまた頑張らないと。明日も早いから俺はもう寝るよ」

「そうですね。私も明日の修行に備えてゆっくり休みます」

まだ9時過ぎであったが、ツナと佐天は今日もう寝ることを決める。

同時刻。美琴と黒子の寮

「結局、何もわからなかったわね……」

「そうですね……外出自粛を呼びかけましたがこんなもの、一時凌ぎに過ぎませんの。あれから通報はありませんでしたが、学生はまた拐われているかもしれないというのに……」

「絶対に許さないわ。私の友達に手を出したんだから」

「私も許さないですわ。私の友人を悲しませたんですから」

友達である婚後を拐ったことに美琴は拳を握り絞めて怒りを覚え、黒子は友達を悲しませたことに怒りを覚えていた。

「一刻も早く手がかりを掴む為にも今日は早く寝ることにしましょう」

「そうですね」

2人もこれからの捜査の為に余計なことはせず、寝ることを決め

る。

黒子たちが寝てから1時間後。

???

「ここが……まるであーしの野望を叶える為に用意されたものにはか見えなくない？ ハイパーウケる。ハイパー感謝感激なんだけどー」
夜の学園都市のとある場所。学校の制服に身を纏い、紫色のロングヘアの女性が何かを見ながらそう呟いた。

「まあいいか。とつとと終わらせよつと。そんじやおつ邪魔しまーす」

そう言うと女子高生はそのまま真つ直ぐと突き進んで行く。

標的（ターゲツト） 115 侵入者

美琴の黒子の寮

「白井！ 御坂！ 起きてるか！」

「な、何よ……もう……抜き打ち検査？」

「何ですの寮監様……？ 私たちは誘拐事件の調査の為に今日は早く寝ていましたのに……」

2人の部屋の扉が乱暴に開かれ部屋の灯りが点灯する。やって来たのは寮監だった。2人は完全には寝ていなかったものの、休んでいるところを邪魔された為、不機嫌な様子だった。

「緊急事態だ！ 常盤台に侵入者が現れたとの連絡が入った！」

「侵入者!?!」

寮監から常盤台に侵入者が入って来たと知って2人は驚きの声を上げる。

「ああ。爆発系の能力者が常盤台にて暴れてるそうだ……」

「爆発系って……」

「まさか……」

寮監の話聞いて黒子と美琴は常盤台に侵入したのが誘拐事件の犯人だということを理解する。

「生徒たちは応戦しているが全く歯が立たない状態だ！ 至急、向かってくれ！」

「黒子！」

「ええ！」

美琴がそう言うと黒子は美琴の肩に手を置く2人の姿が一瞬にして消える。

常盤台中学

「選ばれた能力者しか入れない学校って聞いてた全然相手にならないのねー。まあ無理もないよねー。能力は持つってても全然、戦闘経験がないだもーん」

そう言う女子高生の周囲には常盤台の生徒が取り囲んでいた。そして倒れている生徒も何人もいた。

「別にあーしはあんたらを傷つけない訳じゃないのよねー。ただ私の目に協力して欲しい……おっと！」

女子高生が喋っていると上から雷が落ちてきた。女子高生は飛び引いて躲した。

「何が協力よ……一方的に学生拐って、みんなを傷つけて……偉そうなことやってんじやないわよー！」

「御坂様！」

「御坂様だわ！」

ここで美琴が登場する。美琴が登場したことで常盤台の生徒は表情をパアツと明るくする。

「みさか……ミサカ……ああ！ 確か超電磁砲^{レールガン}っていう異名を持つ学園都市に7人しかいない超レアな能力者だっけー！ 会えるなんてハイパー感激なんですけどー！ サインプリーズ！」

「あんたね!!」

「お姉様！ 落ち着いて下さい！」

女子高生のふざけた態度に美琴は女子高生を睨みつけながら怒りを露にする。黒子は敵の挑発に乗ってしまった美琴を宥める。

「でもその服のセンスはハイパーダサーい。超能力者^{レベル5}でも服のセンスはレベル0なのねー」

「なんですってー!! ゲコ太を馬鹿にすんじゃないわよー！」

女子高生はゲコ太がプリントされている寝巻きを見て、呆れた表情しながらそう言った。女子高生の発言を聞いて美琴はさつきより怒っていた。美琴たちは着替える間もなかったので寝巻きのまま来

てしまったのである。

「お姉様！ これに関してはあの方の言う通りですわ！」

「ちよつと黒子!! あんたはどっちの味方なわけ!？」

「……………」

これに関しては女子高生と同じ意見だったのか黒子は女子高生の意見に賛同した。しかし黒子にまでそう言われた美琴は黒子にまで怒りの矛先を向けた。このグダグダなやり取りを見て周囲の生徒の緊張感は無くなってしまうていた。

「あつ！ 今日、戦った人じゃーん！ またこうして会えるなんて！もしかしてあーしに会いに来てくれたのー！ ハイパー嬉しいんですけどー！」

「姿が変わってもお調子者な所なのは所は全然、変わらないのですね」

女子高生は黒子の方を見ながら手を振り笑顔でそう言った。黒子は流されることなくそう言った。

「知らないのー？ 女の子っていうのは少し時間で変わるもんなんだよー。例えばおっぱいとか。あつ！ あなたたち絶望的だよねー。ごめんごめん。許してちょ」

「黒子」

「何ですのお姉様?」

「あいつ。殺っていい?」

「奇遇ですわね。私もそう思っていましたの」

女子高生は舌を少しだけ出し、ウインクと合唱しながらそう言った。
コンプレックス
胸のことを言われて、美琴と黒子はドス黒いオーラを放ちながらそう言った。

「怒るってことはやっぱり絶望的なのは自覚あったんだ。ごめんってばー！ お詫びにどんな絶望的な胸でも大きくなる方法を教えてあげるからさ。これで絶望的な胸ともおさらば！ もう誰にも絶望的な胸だなんて言われないから！ だから絶望的な胸って言ったのは許してってばー！」

「絶望的、絶望的って……何度も言ってんじやないわよ!!」

「おつとー」

絶望的という言葉は何度も使われて美琴は堪忍袋の尾が切れたのか、女子高生に雷撃を放った。女子高生は首を横に傾けて美琴の雷撃を躲した。

「胸が大きいから何なのよ!! そんなので人間の価値が決まるわけじゃないでしょうが!!」

「そうですね! 確かにお姉様のお胸は慎ましやかなものです! ですがお姉様は魅力はそれだけ……グフツ!」

美琴は黒子が最後まで言い切る前に、黒子の頭に拳骨を喰らわせた。拳骨を喰らった黒子は地面に倒れてしまう。

「常盤台中学の超電磁砲レールガンはファツションセンスゼロ。胸もゼロ。成長はハイパー絶望的（笑）送信つと」

「投稿してんじやないわよ!!」

女子高生はスマホを操作しSNSに美琴に胸のことを投稿していた。SNSに投稿したと知って美琴はさらにヒートアップする。美琴完全に相手のペースに乗せられてしまっていた。

「冗談はこれくらいにしてー。そろそろ始めちゃおつかー。ええと……胸ナシ美琴ちゃん?」

「御坂美琴よ!!」

「そうそう! まな板ゼロ子ちゃん」

「御坂美琴って言うてんでしようが!! もう名前の原型すら無くなつてんでしようが!!」

「えー。だって御坂美琴ってハイパー覚えずらくってー。その方が覚えやすいんだもーん」

「覚えてるじゃない!!」

「もうさつきから怒ってばかりじゃーん。そんなんだからゼロ子ちゃんはモテないんだよー」

「その名で呼ぶな!!」

「……」

ゼロ子というあだ名までつけられて美琴の怒りは頂点にまで達していた。敵にいじられまくる美琴を見て全員、戦意が喪失してしまっ

ていた。

「もうゼロ子ちゃんも待てなさそうだしー」

そう言うと女子高生は学ランの中に手を入れる。すると出てきたのは自撮り棒だった。女子高生は自撮り棒の先端にスマホをセットする。

「ボンジョルノー。スフィードだよー」

「どこまでも舐めやがって……!?!」

スフィードは動画撮影を始める。目の前に堂々と動画撮影を始めたスフィードに美琴は怒りを覚える。

「今日は常盤台中学に来てまーす！ 本日はちよつ常盤台に入つてみたをお送りする予定だったんだけどー、本日は予定を変更しまーす！」

「いい加減に……!?!」

「本日の動画はこちら！」

そう言うとスフィードは自分と美琴が映るように体を反対方向に動かした。

「御坂美琴を倒してみた！ おっ楽しみにねー！」

「上等じゃない」

スフィードの言葉を聞いて美琴は笑いながらそう言った。

学生誘拐事件の犯人 v s 学園都市に7人しかいない超^{レベル}能力者⁵。果たして!?

標的（ターゲット） 116 超電磁砲（御坂美琴） V
S スライダー

「これで動画の再生数もハイパー爆上がり間違いなし！ ハイパー有名名人！ 企業から声がかかって広告収入で億万長者！ これで私の将来も……わっ！」

テンションが上がっているスライダーの言葉を遮るかのように美琴の雷撃が放たれる。美琴の雷撃はスライダーのスマホは完全に破壊された。

「ちよつとちよつとー。このスマホ最近、奪って手に入れた最新のスマホなのにー。どうしてくれんのー？ 後で弁償してよねー」

「後なんかないわよ。これで終わりよー！」

「本当にー？」

「っ!？」

スライダーが笑顔でそう言うとき美琴は全身から自分の周囲に雷撃を放った。雷撃が放たれた後、美琴の周囲に爆発が発生する。

「ありやりや。どうしてわかったのー？ 全然、見えてないのにー？」
「私は体から電磁波が発生してんのよ。何かあったら反射波でわかるのよ」

「へー。面白いー。今度、動画であーしのゲストの登場しようよー。動画名はちよつと死角からの攻撃を対処してみたって感じでどうかなー？」

「あんたは爆破系の能力者じゃない。爆発物を消して爆破系の能力者に見せかけてだけ」

「あれれ？ ちよつと無視なんて酷いよーゼロ子ちゃーん。あーしハイパー傷ついちゃう」

「だからその名で呼ぶんじゃないわよ！」

(あの爆破がそんなトリックだったとは……)

スフィードの戯れ言に耳を貸さないようにする美琴であったが再びゼロ子と呼ばれた為、再び怒りを爆発させる。黒子は爆破のトリックを知って驚いていた。

(爆発物は真っ直ぐこっちに向かって来た……おそらく念動力テレキネシスで操つてる……どうやら本当に多重能力者デュアルスキルつてのは本当らしいわね……)

美琴は目に見えない爆発物を念動力テレキネシスによってスフィードが操作したということを理解する。

「黒子、みんなを連れてここから離れて」

「了解しましたの」

美琴は周囲を巻き込まない為にここから離れるように命ずる。美琴の言葉を聞いて黒子は指示に従って、他の生徒と協力して戦線から離脱しようとする。

「仲間外れにしないでよー。ハイパーショックなんだけどー」
「っ!?!」

拐う為の生徒が逃げていくのを黙っているのを見ていられなかったのか、スフィードは再び仕掛ける。美琴は電磁波で感知しみんなに当たる前に爆発物を雷撃で処理した。

「行ってー!」

「はー!」

黒子たちは倒れている生徒を連れて戦線を離脱した。

「人の心配してる場合とかハイパー余裕だねー」

爆破によって怪我をしていないを確認する為に黒子たちの方を向いた。その隙にスフィードは美琴に2本のナイフを投げた。

「ありゃ?」

「こんなものいくら集まろうと私の磁力でいくらかでも無力化できるわよ」

スフィードの放ったナイフは美琴の前でピタッと止まった。ナイフが急に止まったことにスフィードは少しだけ驚いていた。美琴はそのままナイフを磁力で操ってスフィードに飛ばす。

「ほい」

「なっ!？」

スフィードは自分に向かって来る2本のナイフを両手で触るとナイフは形が崩れ塵と化す。塵と化したナイフを見て美琴は驚きを隠せないでいた。

「これはハイパー使いたくないんだけどさー。でも相手が相手だしー。まあ美琴ちゃんは電撃は全身から出せる訳だし。最悪、両手が無くなるぐらいなら問題ないかー」

(触れた瞬間、ナイフが塵に……近づいたらヤバイわね……)

右手の掌を見ながらスフィードは呟いた。美琴はスフィードの手で自分の体を触れられて塵になる自分の姿を想像していた。

「それじゃー行つくよーん!」

(増えた!?)

するとスフィードがさらに2人増える。美琴はスフィードが増えたことに驚きを隠せないでいた。3人スフィードの内、2人のスフィードが残ったスフィードの背中をおもいつき蹴りで吹き飛ばした。

「くっ!」

美琴は飛んだ来たスフィードに雷撃を放つ。スフィードは雷撃を喰らって倒れてしまう。

(隙を作った後からの同時攻撃! けど私には通じないわよ!)

飛んだ来たスフィードのせいで視界が塞がれてる内に上空と前方から残り2人のスフィードが攻めて来る。美琴は反射波で2人の位置を特定し雷撃を放った。残りのスフィードも雷撃によって倒れてしまう。

「手数で隙を作って反射波を突破しようと思ったんだろうけど。その程度じゃ無理よ」

「だっよねー」

「っ!？」

美琴はの後方から声がする。美琴は声を聞いた途端、咄嗟に振り返ると同時に雷撃を放つ。だが雷撃が放たれる前に美琴の後方から

ロープが伸びて美琴の足首に絡み付いた。美琴の後ろにはロープを握っているスフィードがいた。後方にいるスフィードはロープを引っ張る。

「がっ!?!」

美琴はそのままバランスを崩し転倒し、地面に仰向けに倒れ頭を強打してしまう。そしてすぐにスフィードはロープに絡まった美琴ごとを背負い投げする。

「ガハッ!?!」

美琴は空中に強制的に飛ばされると、すぐに急降下する。そして美琴は仰向けの状態でおもいつきり地面に叩きつけられた。

「いっくよー!?! スフィードちゃんハイパーキック!」

「グフツ!?!」

美琴の背後を取ったスフィードが蹴りで美琴の顎を蹴ると同時に上空へ飛ばした。

「もういっちょよ!」

「ゴハッ!」

蹴り飛ばされた美琴の上にスフィードがジャンプすると、かかと落としで再び地面に叩きつけた。

（あの時に……!?!）

美琴はスフィードの体で視覚が塞がれた時にさらにもう2人分身を作った。そして分身の1人は美琴の攻撃を仕掛け、もう1人の分身と本体は身を潜ませていたことに気づく。

「2人しか分身を出せないと聞いた覚えはないんだよねー。あーしはこう見えてハイパーハイスペックなんだからー。という訳でどどめといきまっしょっか!」

（え、演算が……間に合わない……!?!）

そして最後に見えない大量の爆発物が美琴を襲う。通常であれば対処できる爆発物も地面に叩きつけられた痛みで演算が間に合わず、爆発をモロに喰らってしまう。

「ちよつとやり過ぎぢやったかなー? まっいつか。生きてるし。それに相手は超能力者だしこれくらいししょうがないよねー」

(こいつ……どうやって私の反射波を……!?)

ロープで自分を捕えた方のスフィードが美琴の横に現れる。美琴は反射波に感知されずに後方にいきなり現れた理由がわからず困惑していた。

「どうやって反射波に感知されたかわかんないっていう表情してるねー。簡単だよ。実体があるから感知される。逆に言えば実体が無くなってしまうばいんだよー」

(黒子の言っただすり抜け……!? まさか分身もすり抜けを使えるっていうの……!?)

スフィードは反射波が当たらない理由をバラす。美琴は黒子の言っていたこの力がすり抜けだということを理解すると同時に分身までもがすり抜けが可能だということに驚きを隠せないでいた。

「最初にあーしの分解する力を見せたせいで美琴ちゃん、遠距離攻撃で勝とうとしたのはバレバレだったからさー。そもそもあーしは美琴ちゃんに分解の力を使うつもりはなかったしー」

(私の心理を逆手に……!?)

スフィードはあえて分解の力を見せることで美琴が近距離で攻めて来ないように仕向けていたのである。

「それに能力者って能力に演算を使うんでしょー? 演算は脳によって行われる。つまり動揺や焦り、そして脳を揺したりすれば演算は遅れる。それさえわかってれば能力者もただの人間。つまり雑魚ってことなんだよねー」

スフィードは語る。美琴への攻撃は全て計算されていたものだった。

「これで目的が2つ果たせたわ」

「2つ……? どういう意味よ……?」

「うーん。まあせっかくだし美琴ちゃんには特別に教えてあげちゃう。どうせ知ったところで何もできないしねー」

常盤台の生徒を誘拐するだけでなく他にも目的があると知って美琴はどういうことか尋ねる。スフィードは少しだけ迷うが美琴にもう1つの目的について語ることを決める。

スライダーのもう1つの目的とは!?

標的（ターゲット） 117 第2の目的

「今、学園都市には誘拐事件に巻き込まれないよう外出自粛が出されてる。けど学園都市の中で最高クラスのセキュリティを誇る学び舎に侵入者が入り生徒が拐われた。そうならば学園都市の人はどう思うかなー?」

「ま、まさか……」

スフィードの言葉を聞いて美琴は理解すると同時に恐怖する。学び舎の園のセキュリティを突破できた上に常盤台のエリート能力者が拐われたと知られれば学園都市の人はどこにも安全な場所がないと恐怖する。つまり学園都市は混乱に陥ることになる。

「学園都市で常盤台の黒髪の女の子とテレポートの子の制服を見て知ったんだよねー。常盤台の制服を着てる子はハイパーエリート能力者だって。だからあーしはこの学び舎の園に来たってこと。そして美琴ちゃんを呼ぶ為にもね」

「呼ぶ……?」

「おかしいとか本当に思わなかったのー? いくらテレポ^レポ^ルの子⁴がやられたとはいあなたたちにこの事態を収集させようと常盤台から寮に連絡が入ったことにさ」

「な、何でそれを知って……!?!」

「決まってるじゃん。だってあなたたちの寮に電話したのあーしなんだしー。警備員^{アンチスキル}じゃあ歯が立たない。美琴ちゃんを呼んでくれてね」

「そ、それって……」

「そ。寮に電話する前にあーしはすでにこのセキュリティを乗っ取って、この生徒になりすまして学生を拐いまくったってこと。要するにあーしが連絡しなければ誰も学び舎の園にあーしが侵入したってことすら気づかなかったってこと。アンダスタン?」

(じゃあ最初から私たちは……)

美琴は理解する。自分たちは最初からスフィードの掌で踊っていたということに。そして自分たちが学び舎の園に来た時にはもうすでに全てが終わっていたということに。

「今日はハイパーついてるなー！ 超能力者を2人も手に入れられたんだし！」

「2人って……まさか！」

自分以外にも拉致された超能力者がいると知って驚きを隠せないでいたが、すぐに気づく。その人物が誰なのかということに。

「食蜂操折ちゃん！ 美琴ちゃんも知ってるよねー。同じ学校の人なんだし。操折ちゃんは学園都市最高の精神系最強の能力者って聞いたからマインドコントロールしてあーしの駒にしちやった。凄いでしょう？」

「う、嘘でしょ……!?!」

美琴は信じられなかった。学園都市最高の精神系能力者を操ったという事実。

「美琴ちゃんの寮の寮監は絶対に警備員アンチスキルに通報するだろうから警備員アンチスキル対策に操折ちゃんを使ったの。これだけ時間が経過しても警備員アンチスキルが来ないってことは操折ちゃんが警備員アンチスキルを操って無力化することに成功してるってこと。それに操折ちゃんアンチスキルの能力があればあーしが拐って来た人たちをマインドコントロールする手間も省けてコスパも最強！ 本当に凄いよねー！ こんな作戦を思いつくあーしのハイパー頭脳がさ！」

「あんたは一体……まさか学園都市の第1位か第2位……?」

最高のセキュリティを誇る常盤台への侵入、誰にも正体を悟られず誘拐を続け、幻想御手レベルアップバーを使わず複数の能力を使用し、学園都市に7人しかいない超能力者レベル5をも圧倒しさらにマインドコントロールできるだけの力を持つ存在。美琴が知る限りではそんなことができるのはまだ知られていない学園都市の超能力者レベル5しか心当たりがなかった。

「そこまで教えるつもりはないなー。じゃあそろそろ行こっか。美琴ちゃんの能力で色々してもらいたいことがあるし」

(クソッ！ 体が……!?)

スフィードは美琴をマインドコントロールして連れて行こうとする。美琴はなんとか逃げようとするも爆破を喰らい過ぎた為、動くことができなかつた。

その時だつた

「ゲッホ！ ゲッホ！ ちょっと!? 小麦粉!?!」

すると大量の小麦粉が周囲に霧散する。あまりの大量の小麦粉にスフィードは涙目になりながら咳き込む。少しすると視界が暗れる。

「小麦粉だらけとか乙女としてハイパー最悪なんですけどー。つて美琴ちゃんがない!?! またあの子ね！ もうちょっとだつたのにー！ ハイパー厄介!」

スフィード全身が小麦粉まみれになつた。そして美琴がないことに気づく。スフィードは黒子がテレポートで美琴を拐つたのだと理解する。

「美琴ちゃんの力は欲しかったけどまーいいか。敵に回つたところで脅威じゃないし、やろうと思えば手に入れられるし。全て失敗した訳じゃないしー。それじゃ撤収しますか！ 明日、学園都市がどうなるか楽しみだわー」

「お姉様、大丈夫ですか!?!」

「黒子……ありがとう……」

(まさかお姉様がですら勝てないなんて……)

黒子はテレポートで美琴を建物から建物へと移動していた。ボロボロになつた美琴を見て驚きを隠せないと同時に敵が相当の強さを持っていることを理解する。

黒子は第7学区の病院へと運んだ。そして美琴は病院に運ばれた。「見た目はあれだが、怪我はそこまで大したことはない。命に別状はないよ。明日には退院できる。ただし激しい動きは絶対にダメだからね」

「ありがとうございますの」

ベッドで寝ている美琴を見ながらカエル医者はそう言った。黒子は頭を下げながらカエル医者にお礼を言った。

(いくら急だったとはいえ沢田さんに連絡していれば……)

面会時間は過ぎていた為、黒子は病室を出る。そして同時にツナを呼んでいればと後悔していた。

(私としたことが何を……沢田さんは別の世界の人間……本来であれば私たちが解決しなければいけないというのに……何を甘えてるんですの私は……)

本来であればこの事件は学園都市にいる黒子たちが解決しなければならぬ問題。にも関わらず別の世界の住人であるツナに頼ってしまうという考えに至った自分を黒子は叱咤する。

一方その頃。ツナたちの世界。イタリアボンゴレ総本部

「9代目。失礼します」

「ガナツシユか。どうした？」

メツシユ髪の若い男が9代目の部屋に入って来る。この男の名はガナツシユ・Ⅲ^{サイド}。9代目の守護者の1人である。日本はすでに夜であるが、日本と7時間程の時差がある為イタリアはまだ夕方である。なので9代目とガナツシユは普通に起きている。

「先程、ボンゴレに9代目宛ての手紙が」

「手紙？ 誰からだ？」

「それが……」

そう言うとガナツシユは手紙を裏返して、宛て名の部分を見せた。
「こ、これは……!?!」

9代目は手紙の差出人を見て驚きを隠せないでいた。なぜならそこにはB e r m u d a v o n V e c k e n S t e i nと書かれていた。つまり差出人は復讐者ザインデユチエのリーダーであるバミューダだった。

バミューダから9代目への手紙。一体、何が!?

標的（ターゲット） 118 一筋の光明

常盤台中学が襲撃された次の日。学園都市中に衝撃の事件が報道される。内容は学び舎の園の中に侵入し寮にいた多くの能力者が誘拐される。犯人は今だ逃走中。犯人の素性も不明。学び舎の園の監視カメラには何も映っておらず侵入方法も不明。わかっているのは犯人の目的が学生だということだけである。学び舎の園にいた人たちは現在、学園都市の様々な施設に避難。学び舎の園は常盤台以外にも3つ存在する為、残り3つの学び舎の園内に住んでいる生徒たちも避難することとなった。このニュースが報道されてスフィードの思惑通り学園都市は混乱状態に陥った。

ジャツジメント
風紀委員177支部

「美琴と操折が……」

ツナは支部に来て昨日あった出来事を聞かされる。美琴が怪我をし、操折までもが拐われたということを知ってショックを受ける。

「それだけじゃありません。スフィードとか名乗った人物は御坂さんとの戦いを撮影していたみたいで。その動画が配信されてしまって混乱状態に陥った人たちがさらに増加してしまって。動画は削除されたんですけど、その動画を見た人も多くいたみたいで」

初春は学園都市が混乱に陥った大きな原因を語る。あの時、美琴はスマホを破壊したがあれは嘘ウソであった。

「沢田さん。恥を承知でお願いしますの。どうかこの事件を解決するのに協力していただませんか？」

「く、黒子!?!」

黒子は深々と頭を下げる。ツナは急に黒子が頭を下げたことに困

惑してしまっていた。

「本来であれば学園都市で起きた事件は私たちが解決しなければいけないのです。ですが私たちはずっと沢田さんに甘えていました。けどお姉様が負けてしまった以上、もう私の知る限り沢田さん以外頼れる人がいませんの……だから……」

「黒子……」

黒子の想いを知ってツナは黒子はなんとも言えない気持ちになっ
てしまう。黒子は昨日からずっと悩んでしまっていた。本来であ
れば学園都市の秩序を護らないといけない立場にある自分が何もでき
なかったことに。ツナに頼ってばかりではダメだということに。し
かし事態がここまで紛糾してしまつた以上、もうツナに頼るしか黒子
にはなかった。

「頭を上げてよ黒子。誰だつて無理なことはあるし、無理ならできる
人に頼つたつていいんだよ」

「沢田さん……ありがとうございます……」

頭を下げるている黒子にツナは優しい言葉をかける。黒子はツナ
の発言を聞いて声を震わせながらお礼を言った。

「し、失礼します……」

「お取り込み中の所、申し訳ありません……」

「湾内さん、泡浮さん？ どうしたんですか？」

支部内に湾内と泡浮が入つて来る。この2人は学び舎の園の中の
寮に住んでいたが幸いにも狙われることはなく、177支部に避難し
ているのである。初春は2人が神妙な面持ちをしていた為、何かあつ
たのだと判断する。

「お願いあるんです」

「お願い？」

「はい。私たちも誘拐事件の捜査に協力させて頂けないでしょうか
？」

「「「え？」」」

湾内からのお願いを聞いてツナ、初春、黒子は驚きの声を上げた。
「湾内さんと相談したんです。私たちにもできることはあるんじゃないな

いかって」

「ま、待ってよ！ もうこの事件の犯人は美琴ですら勝てない相手なんだよ！ 危ないよ！」

「重々承知しております。ですがもう嫌なんです。私たちが知らないところで友人が拐われた。だから何もできませんでしと言うのは」「どこにいても危険というなら、私たちは戦うことを選びます」「……………」

泡浮と湾内は真剣な眼差しでそう言う。ツナ、黒子、初春は2人の覚悟が本物だということを理解する。しかしどうすればいいかわからず何も答えることができなかった。

「そいつらの覚悟は本物だ。協力させてやってもいいんじゃないか？」

「リボーン!?!」

「あ、赤ちゃんが……………」

「しゃ、喋ってる……………」

支部に急にリボーンが現れた為、ツナは驚きの声を上げる。湾内と泡浮はリボーンを見て衝撃を受けていた。

「ちやおつす。俺はリボーン。ツナの家庭教師かてきよーにして殺し屋ヒットマンだぞ」

「家庭教師……………」

「殺し屋……………」

リボーンの自己紹介する。だが赤ん坊が喋っているだけでも驚きを隠せないのに、家庭教師かてきよーと殺し屋ヒットマンなどと言ってきた為、湾内と泡浮の頭のショートしてしまっていた。

「お前ら。ボンゴレに入らねえか？」

「だから勧誘するなって！ リボーン！」

「ヴオンゴレって……………」

「パスタのことでしょうか……………」

リボーンはいつものごとくボンゴレに勧誘し、ツナもいつものごとくツツコミをいれる。ボンゴレと聞いて湾内と泡浮はパスタを想像していた。

「あの…………何の用ですか？ 今、学園都市は大変なことに……………」

「常盤台が襲われたんだろ。そのことについて話があつて来たんだ」

「話？」

「この誘拐事件の犯人がわかったからな。それを教えに来てやったんだぞ」

「「「は!?!」」」」

学園都市の誰もが犯人の手がかりすら掴んでいないのにも関わらず、なぜかリボンが犯人の正体を知っていると知って全員、驚きを隠せないでいた。

標的（ターゲット） 119 犯人の正体

リボーンが犯人の正体を知っていると知って騒然する。

「な、何でリボーン君が……あつ！ 白蘭さんの能力ですね！」
「違えぞ。こいつだ」

初春は白蘭の能力で犯人を特定したと推測するがリボーンは否定する。そして懐から封筒に入った手紙を取り出した。

「昨日の夕方にボンゴレに9代目宛てに届いた。そしてこれがさつき俺の元に届いた。こいつが誘拐事件の犯人の手がかりだ」

「ボンゴレに？」

「それが今回の事件とどう関係してくるんですの？」

リボーンが手紙の詳細を話す。ツナと黒子はこの手紙と今回の事件の犯人が関係しているのかがわからず疑問符を浮かべる。

「あの……話の腰を折るようで申し訳ないのですが……」

「さつきから仰ってるボンゴレとは一体……？」

リボーンの言っていることをツナと黒子は当たり前のように理解しているが、湾内と泡浮はボンゴレが何のことかわからなかった為、ボンゴレが何なのかについて尋ねた。

「お前らには俺たちのことを説明しておかなえとな。後、固法にもな。固法どこだ？」

「固法先輩は会議に出てます。その内、戻って来るとは思います」

「そうか。それと美琴に連絡してえんだが連絡取れるか？ 固法が戻って来る前にあいつに確認したいことがある」

「何かあった時の為にお姉様の携帯は今朝、病院に私が届けましたの。連絡は可能ですの」

「わかった」

そう言うとりボーンの帽子の上に乗っているレオンがリボーンの掌に移動する。するとレオンが携帯に変化する。リボーンは携帯で美琴に連絡する。

「カ、カメレオンが携帯に……!?!」

「どうなっていますの……!?!」

「あれはリボーンの相棒のレオンだよ。レオンは形状記憶カメラオンって言って、一度見た物なら何でも変身できるカメラレオンなんだ」
「沢田さんの言ってたのって本当だったんですね……」

「もう何でもアリですわね……」

レオンが変形したことに驚きを隠せない湾内と泡浮にツナがレオンの詳細を説明した。前にツナからレオンの詳細を聞いていた初春と黒子でさえ驚きを隠せないでいた。

「そうか。あんがとな。退院したら俺が手当てしてやるからな」

美琴にそう言うとりボーンは通話を切る。レオンは携帯から元のカメラレオンの姿に戻った。

「やっぱりな。どうやらあいつらの予想は当たってやがったな」

「ただいま。あらリボーン君じゃない」

「お。帰ってきたな」

リボーンは電話を切ると、タイミング良く固法が戻って来た。

「今回の事件の説明をする上でまず俺たちの正体を話さなきゃならねえ。まず俺とツナはこの世界の人間じゃねえ。俺たちは異世界から来た人間なんだ」

「い、異世界……!?!」

「な、何を……!?!」

リボーンが自分たちが異世界の人間であるということを話す。異世界の人間と聞いて湾内と泡浮はリボーンは驚きを隠せないでいた。それでもリボーンはさらに続ける。ツナは世界最強のマフィアであるボンゴレファミリーの後継者であり、自分がボンゴレファミリーの現ボスであるボンゴレIX世の命令でツナをボンゴレのボスにする為に派遣された家庭教師であるということをする。

「ツナ君が……」

「……」

固法はツナが異世界の人間であるということは知っていたものの、ツナがマフィアの後継者であることは知らなかった為、衝撃を受けていた。湾内と泡浮は頭がどうにかなりそうになっていた。

「そして昨日、ボンゴレにこの手紙が届いた。そして今日その手紙が俺の元に届いた。差出人はバミューダ・フォン・ヴェツケンシユタイン」

「え!? バミューダから!？」

「そのバミューダ・フォン……バミューダさんという方はマフィアなんでしょうか?」

手紙の差出人がバミューダだと知ってツナは驚きの声を上げ、初春はバミューダのことがわからなかった為、リボーンに尋ねる。

「バミューダは復讐者^{ヴァイデンチエ}っていう組織のリーダーに当たる男の名だ。復讐者はマフィア界の掟の番人で、法で裁けない奴らを裁くんだ。マフィア界で掟を破った者は復讐者^{ヴァイデンチエ}によつて罪を裁かれ投獄されるんだ」

「それで何でバミューダがボンゴレに送った手紙と今回の事件がどう関係するんだよ?」

「バミューダの手紙の内容に今回の事件の犯人の手がかりがあったんだ」

「手紙の内容に?」

手紙の内容と今回の事件がどう繋がってるのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「手紙の内容はこうだ。最近、我々はエスカ・ピアレを危険視していた。掟こそ破ってはいないものとても危険な女だと」

「エスカ?」

「エスカ・ピアレ。^{ファータ・ヴェローラ}幻影魔女という異名を持つ殺し屋^{ヒットマン}だ。エスカは男を騙し、数多のマフィアを壊滅し転々するっていう神出鬼没の女だぞ」

「ファータ・ヴェローラ……」

「幻影魔女……」

「大層な通り名ですこと」

常盤台のエリート教育を受けている湾内、泡浮、黒子はエスカの異名の意味を理解していた。

「話の続きだ。そして最近、エスカがついに掟を破った。我々はエス

力を拘束する為に動いた。だがおかしなことに捜しても捜してもエスカが見つからない。そこで我々はエスカの経歴を洗い、エスカの行方の手がかりを探すことにした。そしてあることを判明した」

「あること？」

「エスカがリスペディッツイオーネファミリーに所属していたことが判明した」

「そ、それって……!？」

「ああ。リスペディッツイオーネファミリーにいたイノルトは異世界転送装置を作り、お前をこの世界……学園都市に転送した原因をきっかけ作ったファミリーだ」

「じゃ、じゃあ……!？」

「今回の学生誘拐事件の犯人は学園都市の人間じゃねえ。俺たちの世界の人間。エスカだ」

「「「「っ!?!」」」」

今回の事件の犯人が異世界の人間だと知ってツナたちは驚きを隠せないでいた。

標的（ターゲット） 120 辻棲

リボーンによって学生誘拐事件の犯人がツナたちの世界にいる殺し屋、エスカであるということが判明する。

「ちよ、ちよと待って！ 本当にそのエスカって人が犯人だという証拠はあるの？」

「固法先輩の先輩の言う通りですわ。異世界転送装置を作ったファミリーに属していたとはいえ証拠がなければ信じることはできませんの」

固法と黒子は本当にエスカが学生誘拐事件の犯人なのかどうか信じられないでいた。

「物的な証拠はねえ。だが今回の事件の不自然な部分は死ぬ気の炎を使った犯行であれば説明がつく」

「「死ぬ気の炎？」」

死ぬ気の炎を知らない固法、湾内、泡浮は疑問符を浮かべる。

「死ぬ気の炎って沢田さんが使ってる炎ですよね」

「そうだぞ。こいつを装着してやってみろ黒子」

「わ、私が!? 何ですの!?!」

「口で言うよりも実際にやった方がわかるかるしな」

「で、ですが……急にやってみてって言われても……」

リボーンは懐からリングを取り出すと黒子に投げて渡した。急にやってみろと言われて黒子は戸惑ってしまう。

「覚悟を炎にするイメージだ。そうすりや炎が灯る。お前の風紀委員としての覚悟を見せてみる。そのリングに炎が灯らないってことは何の覚悟もなく風紀委員をやってるのと同義だからな」

「上等ですわ。やってやりますわ」

リボーンに煽られて黒子はリングを装着すると目を閉じて集中する。

「で、出ましたわ……」

「ど、どうして……!?」

「能力は1人1系統なはずなのに……!?」

黒子のリングに嵐の炎が灯った。湾内と泡浮はすでに能力を持っている黒子が発火能力が使えることに驚きを隠せないでいた。

「死ぬ気の炎は生命エネルギーを可視化したもので普通の炎と違って死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギーだなんだ。死ぬ気の炎はお前らの能力と違って、自分だけの現実を観測する必要も演算も必要ねえんだ。覚悟とそれに応えるリングさえあれば誰でも使える力だ」

「そんな力が……」

「ということは沢田さんは……」

死ぬ気の炎という超能力とは全く別の力があると知って湾内と泡浮は驚くと同時にあることを理解する。

「うん。俺は能力者じゃないんだ。学園都市の言い方で言うと俺は無能力者なんだ」

「二つ!」

ツナは超能力者である美琴をも圧倒する力を持っていた為、てつきり超能力者だと思っていたが、実は無能力者だと知って湾内と泡浮は驚きを隠せないでいた。

「でも沢田さんのと色が違いますね。沢田さんはオレンジですが白井さんは赤ですね」

「死ぬ気の炎には大空、嵐、雨、晴、雷、雲、霧の7つの属性があつてな。色で何の属性か判断できるようになってるんだ。大空はオレンジ。嵐はレッド。雨はブルー。晴はイエロー。雷はグリーン。雲はバイオレット。霧はインディゴっていう風にな」

初春はツナの死ぬ気の炎と黒子の死ぬ気の炎が色が違うことに気づいた。

「そして各属性にはそれぞれ特徴があるんだぞ。大空は調和。嵐は分解。雨は鎮静。晴は活性。雷は硬化。雲は増殖つて言う風にな」

リボーンは死ぬ気の炎の属性と霧属性以外の炎の特徴を説明する。

「そして霧は構築。あるものをないものとし、ないものをあるものにできる。つまり幻覚を産み出せる。エスカの人物像が違うのは霧の炎で自分の姿を偽ってるからだ」

「でもいくら霧の炎が幻覚を産み出せるといっても常盤台の侵入はどう説明できるの?」

幻覚を使って人物像を変えていたのは理解できたが、幻覚と常盤台の侵入がどう関係しているのか固法にはわからなかった。

「あれは幻覚で周囲と同調して自分の姿で隠していたからだ」

「いくら幻覚を使っても監視カメラやセンサーまでを誤魔化すことなんてできるわけ……」

リボーンは常盤台の侵入も幻覚だと言うが、固法は幻覚で機械をも騙すことは不可能だと言う。

「強力な幻術は機械をも誑かす。霧の炎と強力な術士なら充分、可能だ」

「そういえば常盤台狩りの時に沢田さんが……」

「ですが本当にそんなことが可能なんですの……?」

常盤台狩りの事件の時に犯人の能力を話し合っている時にツナが言っていたことを初春と黒子は思い出していた。

「何なら証拠を見せてやるぞ」

リボーンがそう言うと言指をパチンと鳴らす。すると支部内に突如、クロームが姿を現した。

「クローム!?!」

「ひ、人が急に!?!」

「い、一体どこから!?!」

まさかクロームがここにいるとは思ってみなかった為、ツナは驚きの声を上げ、泡浮と湾内は急に人が現れた為、驚きの声を上げる。

「最初からいたぞ。幻覚で姿を消してはいたがな。なんなら監視カメラで調べてみる。クロームは支部に入る前から幻覚を使ってるぞ」

「初春」

「はいー」

リボーンの言葉を聞いて黒子は初春に監視カメラを調べるように

指示する。初春は支部の周辺にある監視カメラをハッキングして時間を遡り監視カメラの映像を見る。

「ほ、本当に……映ってない……」

初春が映像を見ると途中まではクロームの姿が映っていたが幻覚を使った瞬間、クロームの姿が消えて監視カメラの映像からクロームの姿が完全に消える。初春はクロームの姿が消えたことに驚いていた。初春の反応を見てツナとリボーン以外、パソコンの周辺に集まり映像を見る。そして全員、初春と同じく衝撃を隠せないでいた。

「な。言っただろ」

「で、では爆発はどう説明するんですの!?!」

「これに関してはおそらく匣^{ボックス}アニマルの力だな」

「ボックスアニマル?」

「見せた方が早えな。ツナ、クローム」

「う、うん!」

「うん……」

リボーンが指示するとツナはリングからナッツを出し、クロームは耳に装着しているイヤリングから梟を出した。ちなみにこの梟の名はムクロウである。

「「猫と梟!?!」」

どこからともなくナッツとムクロウが出て来た為、固法、湾内、泡浮は驚きの声を上げた。

「こいつは匣^{ボックス}アニマルつってな、死ぬ気の炎の特徴を使ったり武器になつたりする動物だ。おそらく爆発は霧属性の匣^{ボックス}アニマルが周囲と同化して爆発したんだぞ。つまり匣^{ボックス}アニマル自体が兵器つてことだ。これに関しては流石に試しようがねえから無理だがな」

リボーンはエスカの能力が匣^{ボックス}兵器だということを確信する。

「そ、それよりもこの動物たちはどこから……」

「えつと……俺はこのリングから……」

「私はこのイヤリング……」

「ど、どうなってるのよツナ君の世界の技術は……」

泡浮がナッツとムクロウがどこから出て来たのか尋ねると、ツナと

クロームはリングとイヤリングを見せつけながら答えた。

「とにかくだ。これでわかっただろ？ 今回の事件がエスカの仕業だってな」

「ま、まあ……」

リボーンのこれらの証言で黒子は完全に信じるとまでは言わなかったが、十分に可能性があるということとは認めた。

「けど敵の正体がわかったとしても結局の犯人の居場所がわからないのではどうしようもないですよ」

初春が一番の問題を指摘する。敵の正体と能力の詳細がわかっても居場所がわからなければ捕えることもできない上に学生の誘拐は止めることはできない。

「だったら餌をばら蒔いて、誘き寄せりゃいいだけの話だろ」

「餌？」

リボーンの言う誘き寄せる為の餌が何なのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「美琴を誘拐させてエスカを誘き寄せるぞ」

「……はあああああ!?!」

リボーンの突拍子の無い作戦にツナたちは驚きの声を上げる。

標的（ターゲット） 121 リボーンの提案

リボーンの提案した案に衝撃的を浮けるツナたち。

「み、美琴を誘拐させるって何考えてるんだよりボーン!？」

「そうですね！ あなたはお姉様を何だと思ってるんですの!？」

美琴を誘拐させるという正気の沙汰ではない作戦にツナと黒子は猛反発する。

「冷静になって考えてみる。エスカは常盤台の生徒に成り済ましてでも美琴を呼んだ。つまり美琴を喉から手が出る程、欲しいと思ってる。だから殺されることは絶対にねえ。だったら美琴に発信器でもつけて敢えて拐われてもらう。そうすりゃエスカも誘き寄せられる上に捕まった奴らの居場所もわかる。まさに一石二鳥だろ」

「ですが御坂さんにそんなことさせるなんて……」

「いくら犯人が御坂さんを殺せないといっても……」

「危険過ぎますわ……」

「そうね。賛同しかねるわ」

リボーンの作戦を聞いて初春、湾内、泡浮、固法は反対であった。当然の話ではあるが。

「まあそう話を急ぐな。俺は本物の美琴にやらせるつもりはねえぞ。偽物の美琴にやらせるって言うってんだぞ」

「偽物って……あつ！ そっか！ それならいけるかも！」

リボーンの話聞いてツナはリボーンが考えている作戦を理解した。

「目には目を。歯には歯を。そして幻覚には幻覚だ。幻覚の美琴でエスカを誘き寄せるんだぞ」

「幻覚って……でもそれじゃ発信器が取り付けられないわよ」

「そこは問題ねえ。クローム」

「うん」

固法はリボーンの作戦の問題を指摘する。リボーンはニツツと笑

いながらそう言うのとクロームの名前を呼ぶ。クロームは首を縦に振ると自分の横に幻覚の黒子を作り出した。

「わっ！ そっくり！」

「見分けがつかないわね……」

あまりに精巧な幻覚^{黒子}を見て初春と固法は本物の黒子と幻覚^{黒子}を見比べながら驚いていた。

「白井黒子ですの。よろしく願いしますの」

「しゃ、喋りましたわ!？」

「声までそっくりだなんて……」

「なんかドツペルゲンガーを見てるようでなんか複雑ですわ……」

姿だけでなく声までそっくりだった為、湾内と泡浮は驚きを隠せないでいた。一方で黒子は見たら死ぬと言われるドツペルゲンガーを見ているみたいであまり言い気持ちではなかった。

「それだけじゃねえぞ」

リボンがそう言うのと幻覚の黒子は動き始めると初春の前に移動すると、幻覚の黒子は初春の肩に右手を置いた。

「え!? 幻覚なのに実体がある!？」

「「「「っ!?!」」」」

初春は幻覚の黒子に触れられているのにも関わらず、確かに質量があることが感じられていることに驚きを隠せないでいた。初春の言葉^葉を聞いて、ツナとリボンとクローム以外は驚きを隠せないでいた。

「有幻覚つってな。実体のある幻覚なんだぞ。それなら発信器だつてつけられるだろ」

「実体のある幻覚って……」

「超能力者^{レベル5}でもできないんじゃないでしょうか……?」

超能力者^{レベル5}でも不可能なのではないかということ^を当たり前のようにやって退けるクロームを見て湾内と泡浮は驚きを隠せないでいた。(あの時、吹き飛ばしたのにも関わらず、背後から攻撃を受けたのはこの有幻覚の力……)

黒子は思い出す。エス力を蹴り飛ばしたのにも感触があつたのに

も関わらず、エスカが後ろから攻撃して来た時のことを。そして自分が吹き飛ばしたのが有幻覚のエスカだということに。黒子の予想は当たっている。あの時、見えない爆発物によって発生した煙で黒子の視界が塞がっている間にエスカは有幻覚を作り出し、自分自信は幻覚で周囲と同調することで身を潜めたのである。そして有幻覚のエスカが黒子に蹴り飛ばされた後、黒子の背後を取って攻撃を喰らわせたのである。

「さて。どうだ？ これなら何の問題もねえだろ」

「ですが相手に幻覚つてバレてしまえばこの作戦は終わってしまいますの」

「問題はねえ。クロームは超一流の術士。エスカなんて三流の術士とは格が違うからな」

「……」

エスカに幻覚の美琴がバレてしまうという可能性があるると黒子は言うがリボーンは微塵も心配していなかった。学園都市を混乱に陥れるようなエスカを3流呼ばわりするリボーンにツナとクローム以外は驚きを隠せないでいた。

「でも現状これしか方法がないのも事実。考えても仕方がないわ。やりましょう」

これ以上いい作戦がない為、固法はこの作戦に懸けることを決意する。

「後は……絹保と万彬だけだね」

「どうしたの？」

「実は友達が救いたいから捜査に協力したいって言ってきたんです」

「協力……」

「お願いしますー！」

「……」

ツナが固法に事情を説明すると湾内と泡浮は固法に頭を下げて協力させてくれないかと頼む。固法はどうするべきか考える。

「そいつらの覚悟は本物だぞ。それにお前らはエスカに一矢報いたい訳じゃねえんだろ」

「はい……」

「私たちは婚後さんを……私たちの友人を救いたいんです」

「だったらエスカに誘拐された奴らを助ける部隊とエスカと戦う部隊に別れりゃいい。エスカに誘拐された奴らを助けるんなら危険は少ないしいんじやねえのか」

「そうねえ……それなら危険は少ないわね。それに誘拐された人はたくさんいるから人手も欲しいわね……」

リボーンの提案を聞いて、固法は右手の親指と人差し指を顎に当てながら考える。

「わかったわ。協力を許可するわ」

「ありがとうございます！」

固法は協力を許可した。許可が出て湾内と泡浮は表情をパアツと明るくさせながらお礼を言った。

いざ！ 作戦開始！

標的（ターゲツト） 122 女の魅力

リボーンの作戦は美琴にも伝わる。そして時刻は一気に過ぎて夜になる。当に下校時刻は過ぎており人通りの少ない時間帯ではあるがそれでも下校時刻を守らない不良たちもいたりするのだが、昨日の1件が尾を引いていたのか学園都市に人はいなくなっていた。

「歩きづらいわね松葉杖って」

そんな人通りの少ない中で美琴は松葉杖を使いながら歩いていた。慣れない松葉杖に苦戦しながらも美琴はなんとか歩いていた。

「あらあら。もう元気になってるわ。流石は学園都市の医療ね。けどもうこんなところを見つかるなんて。運がないわね」

建物の上で胸元と太もが見えるぐらいの少し露出の度の高い黒いフードを被った銀髪のロングヘアの女性が美琴を見ていた。この女性こそエスカ・ピアールである。エスカは松葉杖で歩いている美琴を見て口元を緩ませていた。するとエスカは霧の炎でジャージを着た赤い髪の変身すると何の音も立てることなくその場から消える。

「おわっ……!?!」

「だ、大丈夫ですか!?!」

慣れない松葉杖で歩いていた為、美琴はこけてしまう。エスカは全く違和感のない流れでエスカは美琴に近づいていく。

「大丈夫よ……ただ初めての松葉杖で慣れなくて……」

「わかります。僕も部活で怪我してしばらく松葉杖の生活だったの。寮はどちらですか？ 手を貸しますよ」

「それは悪いわ。あんたの手を煩わせることになるじゃない」

「手を煩わせるなんてとんでもないですよ。これくらい当然ですよ。なんせあなたがこうなったのは僕が原因なんですから。償わせて下さい」

「な、何を言ってる……あんた……グハツ!?!」

美琴はエスカの言葉に違和感を感じるが時すでに遅く、美琴はみぞ

おちにエスカの一撃を喰らってしまい気絶してしまう。

「本当に運がない女だ。だがこちらとしては手間が省けた。まあ挑んで来たところでこの女に勝ち目はないがな」

そう言うときエスカは周囲と同化し誰からも黙視できなくなる。エスカは自分の姿を消すと美琴をそのまま連れて行った。

エスカが美琴を拐ってから15分後。エスカは廃墟された工場の前に来ていた。エスカは姿を現し、本来の姿へと戻った。

「これで重要な駒は揃った。後は……」

「あんたを倒してこの誘拐事件に幕を降ろすだけね」

「っ!?!」

自分の後ろから声が聞こえた為、エスカは慌てて後ろを振り向いた。そこには腕を組んで仁王立ちし不敵な笑みを浮かべている美琴がいた。

(ど、どうなってる!?! なぜ奴が2人いる!?!)

エスカは自分の抱えている美琴と目の前にいる美琴を見比べる。そして今、抱えている美琴が影武者なのではないかと推測する。すると幻覚の美琴が消える。

(幻覚!?…これが!?! まるで本物と変わらない!?! 学園都市にはこんな幻覚が作れる能力者がいるのか!?!)

エスカはクロームの作った偽物の美琴に驚きを隠せないでいた。これは虹の代理戦争でヴェルデが作った幻覚を本物にする装着によって生まれたものである。本物なので死ぬ気の炎も発生しない。なのでエスカも気づかなかったのだ。

「やられた借りを返しに来たわよスフィード。いやエスカ・ピアールでよかったかしら?」

「な、なぜ私の名を知っている!?!」

この世界の人間であるはずの美琴が自分の本名を知っていることにエスカは動揺を隠せないでいた。

「復讐者からお前がこの世界にいる可能性があるっていう手紙がボンゴレ宛てに届いたんだぞ」

「ア、アルコバレーノ!?! なぜお前がこの世界に!?!」

(アルコバレーノ……虹? どういうこと?)

美琴の後ろからリボーンが登場し、エスカの疑問に答えた。エスカはこの世界にリボーンがいることに動揺を隠せないでいた。美琴はエスカがリボーンのことをアルコバレーノと呼んだことが引っかけかっていた。アルコバレーノがイタリア語で虹を意味することはわかるのだが、何故リボーンがそう呼ばれるのか美琴にはわからなかった。

「イノルトが落とした異世界転送装着で1ヶ月前に飛ばされてな。そいつをボンゴレで改造してから俺はこの世界を自由に往き来できるんだぞ」

「ちっ! せつかく奴を騙して奴の研究を手に入れたというのに。本末転倒ね」

「騙した?」

「ファミリーを裏切って隠れ家住まいのイノルトに取りいつたのよ。男なんて少し誘惑すればすぐに鼻の下を伸ばすんだから。イノルトも一緒。すぐに研究を見せてくれた。私はその研究の成果を盗んで逃走。それからイノルトの隠れ家をファミリーに密告。それで消されたと聞いてただけどまさかあの装着を完成させてたなんてね。逃走中にでも完成させたか。使えないどころか私の計画の邪魔までするなんてあの豚」

「よっほど自分の容姿に自信があるのね。自意識過剰も大概ね。オバサン?」

「あら? 美貌は武器なるのよ。場合によっては戦わずに目的を達成できる。って体の一部が絶望的なあなたじゃ誘惑しようにもできないものね。失礼」

「相変わらず煽るのだけは得意なようね」

煽った美琴であつたがエスカは余裕の笑みで言い返してくる。そして美琴は笑つてはいたものの全身から電流を迸らせていた。完全にキレている。

「そんな感じだから男の1人も落とせないのね」

「うっさいわね!! 大事なのは中身でしょうが!!」

「そう言う人に限って大抵、貧相な体してるのよ。そして自分の体のことを棚に上げてそう言うのよ。それにしても不思議よね。本当にあの食蜂操折と同じ学年なの? もしかして飛び級で常盤台で入ったとかそういう感じ?」

「あいつとは同級よ!!」

同級生である操折と美琴の体つきが月とすっぽんであつた為、エスカは美琴が飛び級で中学に入ったのではないかと本気で疑つてしまつていた。美琴はおもいつきり雷撃を放つがエスカに意図も簡単に避けられてしまう。

「もうさつさと始めろよお前ら」

「うっさいわね!! 黙つてなさいよ!! 今は女のプライドを懸けた戦いなんだから!!」

「戦うも何も戦う前からお前の負けだろ。そいつの言う通り今のお前じゃどう足掻いたつてエスカに女の魅力で勝てる訳ねえだろ。10対0のゴールドゲームだろうが」

「ちよつと!! あんたはどっちの味方よ!?!」

「俺は事実を述べただけだぞ」

「事実つて何よ!! 赤ん坊のあんたには女の魅力なんてわかんないのよ!!」

「何、言つてんだ。俺はお前に興奮する程、子供じゃねえぞ」

「赤ん坊のあんたにだけは言われたくないわよ!!」

エスカからだけでなくリボン^{味方}にまで貶されてしまい美琴はブチギレていた。

「流石はアルコバレーノ。よくわかつてるじゃない」

「だろ。まあお前に興奮する程、子供じゃねえけどな」

「手厳しいのね。惚れちゃいそうだわ」

「そうか。だったら俺の愛人にしてやろうか？」

「あんた意味わかって言ってるの!？」

赤ん坊でありながら愛人という言葉を使うリボーンに美琴はツツコミをいれる。

「愛人ぐらいで動揺するなんて。やっぱりお子様ね」

「だな」

「何、仲良くなってるのよ!! あんたたち敵同士でしょうが!!」

敵同士でありながら意気投合しているエスカとリボーンに美琴はツツコミをいれる。

「まあいいわ」

そう言うときエスカは懐から電話を取り出すと電話をかける。

「私よ。敵が来たわ。迎撃の準備しなさい」

『嫌よお。だってあなたの操作力は解けちゃったしい』

「何!？」

誘拐した学生を人質に使って美琴を無力化しようと考えたエスカであった。しかし電話に出た操折の言葉を聞いてエスカの目論見は外れてしまう。

「どうやって私のマインドコントロールを……!？」

『うーん。強いて言うならオレンジ色の炎を額に灯した王子様だぞ☆』

「オレンジ色の炎……まさか大空の死ぬ気の炎か!？」

エスカは操折の言葉を聞いて食蜂のマインドコントロールを解いたのが大空の炎による調和の力だということを理解する。

『あなたが何を言ってるかよくわからないけどお。私たちはもう辞職させてもらおうんだぞ☆じゃあね〜』

そう言うとき操折は一方的に電話を切った。エスカは表情を歪ませると携帯を潰した。

「どうやら作戦は失敗したみたいね」

「問題ないわ。ならもう1度拐って集めるだけよ」

口元を緩ませながら美琴はそう言う。しかしエスカはすぐに冷静

さを取り戻す。

美琴のリベンジマッチ。果たして!?

標的（ターゲット） 123 リベンジマッチ

エスカと対峙する美琴。

「俺は手を出さねえからな。お前でなんとかしろ」

「最初からそのつもりよ」

「随分と強気ね。私に負けた人の台詞とは思えないわ」

「あなたの力は理解している。もう負けないわ」

「私の力を知ってる？ 私はあなたに力の全てを見せた覚えはないわよ」

強気な美琴に対しエスカは冷静な態度でいた。すると胸の谷間から匣ボックスから取り出しリングに炎を灯すと匣ボックスに注入する。すると周辺の建物が消えていく。

「う、海?! これが本当に幻覚なの!」

「幻覚は5感を支配するからな。とはいえここまでするとはな」

美琴は信じられなかった。自分が立っている場所が砂浜に、視線の先が海になったことに。そして幻覚であるのにも関わらず砂の感触を感じることに。一方でリボーンは動揺することなくここまでの幻覚を使うエスカの力に感心していた。

（黒子が言ってたっけ……被害者の中に襲われた場所と被害者の証言があつていないって……幻覚で場所まで誤魔化したのね……）

美琴は始めに学生誘拐事件の概要を聞いた時に言っていたことを思い出す。

「この程度の幻覚で驚くなんてね。まだまだだね」

するとエスカはさらに谷間から匣ボックスを取り出した。そして炎を注入すると中から？ の形をした杖が出て来る。

「どっから出してんのよ……」

「どこから出そうと私の勝手でしょ。ま、あなたには一生できないからわからないと思うけど」

「本当に煽るのが得意ね……」

「私は煽ってるつもりはないわよ」

そう言った瞬間、海の水が渦を巻きながら美琴へと向かって行く。美琴は咄嗟に雷撃で処理する。

が
「幻覚……!?!」

雷撃は水をすり抜ける。幻覚と頭でわかっている体も体がすぐに反応してしまうのである。

「やっぱり幻覚を使う相手に慣れてないのね。体がすぐに反応しちゃってる」

「このっ！」

後ろからエスカが炎を纏った杖で攻撃する。美琴は攻撃を躲して雷撃を纏った拳をエスカに叩き込んだ。だがエスカは有幻覚でありすぐに消えてしまう。

(有幻覚……!?!? 厄介ね!)

有幻覚は実体を持った幻覚。なので美琴の反射波に引っ掛かってしまう為、どうしても対処せざるをえない為、美琴にとってこれ程厄介な相手はいない。

「前の戦いであなたの反射波の有効範囲は理解しているわ。たとえば有幻覚と思っても実際はただの幻覚。幻覚と思ったら有幻覚。それを見破る術があなたにあるかしら?」

するとエスカがさらに4体、増える。そして一斉に美琴に襲いかかる。

「くっっ！」

「私にだけに集中していいのかしら?」

エスカが口元を緩めると目に見えない爆発物が美琴の反射波の有効射程ギリギリの所で爆破する。爆破によって視界が塞がれる。美琴は爆煙の中から咄嗟に飛び出した。するとエスカの3本の杖が美琴に向かって来る。

「くっっ！」

頭で考えるよりも先に体が反応してしまい美琴はジャンプして杖を避けてしまう。

「空中に出てよかったのかしら?」

エスカたちは空中にいる美琴に向かって杖を向けると杖の先端から炎の玉が放たれる。美琴は咄嗟に雷撃を放つ。しかし雷撃は炎の玉をすり抜ける。

(クソっ！ また幻覚！ これじゃ消耗するだけだわ！)

空中に羽上げて身動きが取れないところを攻撃する作戦と思いきや、ただの幻覚であった。このままでは余計に体力を消耗し、その内動けなくなってしまうのが目に見えていた。

(後ろ！)

美琴は反射波で見えない爆発物を閏知すると後ろに向かって雷撃を放った。しかし爆破の余波によって美琴は地面に向かって吹き飛ばされる。

「隙だらけ」

「グハッ!」

爆破で吹き飛ばされたところをエスカの膝蹴りが美琴の腹部に直撃する。そしてエスカは杖をバットを振るかのように杖を振って美琴を海の方角へと飛ばした。

「ゲッホ！ ゲッホ！」

美琴は腹部を押さえながら咳き込む。濡れた場所が浅瀬だった為、美琴はなんとか立つことできた。

(あえて反射波の有効範囲外からの攻撃をすることで幻覚か有幻覚か迷わせてくる……そしてその隙を必ずついてくる……)

美琴はエスカの戦法を理解する。しかし幻覚を見破ることのできない美琴は頭で考えるよりも、体が先に反応してしまう為、エスカの戦法を破ることがどうしてもできない。

(これが沢田たちの世界の人たちの力……)

美琴はツナたちの世界の人の戦闘レベルが相当なものだということとを理解する。

「さーて。いつまで持つかしら？」

「ねえずっと思ってたんだけど。あんたは何で学生を誘拐してんのよ？」

「何？ 時間稼ぎのつもり？」

「そんなんじゃないわよ。ただ気になったただけだよ」

「そうねえ。強いて言えば本能ってやつかしら？」

「本能？」

エスカは人差し指を右頬に手を当て妖艶な笑みを浮かべながらそう答えた。本能と聞いて美琴は疑問符を浮かべる。

「別に大したものじゃないわよ。私は人の上に立って支配したいだけ。だから他人を欺き利用する。けど罪のない人間まで被害が及んで復讐者ヴァインディチエから狙われちゃって。だから奴らの手の届かないこの世界に來たってわけ。そして私はこの学園都市を支配して、ゆくゆくはこの世界を蹂躪する。その為の手駒が学生ってこと。ちなみに無能力者レベルを拐ったのは捜査を攪乱させる為よ」

「そんなことの為に婚后さんを拐って……黒子を傷つけたっていうの……!?!」

エスカの目的を知って美琴は拳を握り絞めて怒っていた。

「言ったでしょ。本能よ。本能」

「本能って……私の友達を手を出してタダで済むと思わないことね!!」

美琴はエスカに向かって走って行く。エスカは怒った美琴を見てもなお、余裕の笑みを浮かべていた。

「あなたに私の幻覚は見破れないわ」

「だったら全部ぶっ壊してやるわよ!!」

分裂したエスカに向かって広範囲に渡って美琴は電撃を放った。エスカたちは飛び引いて雷撃を躲す。

「怖い怖い。気をつけないと」

(遠距離攻撃させたら幻覚で判断が遅れる。だったら接近戦に持ち込んで有幻覚が出せなくなるまで破壊しまくる！)

(とか思ってるんでしょうね。馬鹿な子)

美琴は実体がある本体と有幻覚を破壊することに集中することを決める。だが美琴の作戦をエスカは看破していた。そして再び見えない爆発物が反射波の有効範囲ギリギリのところ爆発し再び視界が遮られる。

「また……!?!」

「またじゃないわよ」

(後ろ!?)

遮られる視界の中でエスカが襲いかかる。美琴は反射波で感知し咄嗟に雷撃を纏った回し蹴りを繰り出す。

「いい蹴りね。けどー!」

「っ!?!」

美琴の回し蹴りをエスカは杖で防ぐが、杖は破壊される。だがエスカ杖の破片を掌底で美琴の目に向かって飛ばす。咄嗟に目を閉じた為、目にダメージはなかったが隙が生まれてしまう。

「私は接近戦が苦手だと言った覚えはないわよ」

「グフツ!?!」

エスカは3発程、美琴の腹部に拳を叩き込んださらに蹴りを喰らわせる。美琴はエスカ蹴りの余波で吹き飛ばされた。

「ゴッホー! ゴッホー!」

美琴は地面うつ伏せになった状態で咳き込む。そんな美琴の上空から数十体のエスカが杖を向けていた。有幻覚と幻覚が混ざったもので、反射波の射程範囲外である為、美琴にはどれが幻覚で有幻覚かわからない。

(終わりよ)

エスカは仰向けに倒れている美琴を見て、勝利を確信したのか口元を緩ませていた。

その時だった

「がっ……!?!」

美琴の雷撃がエスカを襲う。しかも有幻覚のエスカとエスカと美琴の後ろにいた雷撃に当たる。

(馬鹿な……どうやって私と有幻覚だけを……!?!)

幻覚を見破ることのできない美琴がなぜ幻覚を見破れたのかエスカはわからなかった。

「幻覚のせいで騙されたけどここは廃工場。だから砂鉄をあなたに付着させてもらったわ」

「砂鉄……あの時か!？」

美琴が一番最初に雷撃を放った時にエスカの本体と砂有幻覚に砂鉄を同時につけていた。

「砂鉄をつけておけば後は避雷針の要領で雷撃が誘導される。有幻覚は強力だけど強力な分、何体も何体も出せるわけじゃないはず。一種の賭けだったけど成功したようね」

そう言うのと幻覚と有幻覚が消えて行く。本体がダメージを受けたことで幻覚と有幻覚が消えたのである。

「あの時は砂鉄を使ってもすり抜けて意味がないと思っただけど、それがないとわかればこつちのものよ。さあ覚悟しなさいエスカ！」

(か、体が……まずい……!?)

美琴はエスカへと向かって行く。エスカは避けようとするも体が痺れて動けなかった。

「終わりよ!!」

「があああああ!!」

雷撃を纏った美琴の拳が顔面に直撃しそのままエスカは吹き飛ばした。

標的（ターゲツト） 124 地獄との契約

「はあ……はあ……」

「大丈夫か美琴？」

「ええ……なんとか大丈夫よ……」

なんとかエスカに勝てたとは言え、美琴はかなり体力を消耗してしまっており、肩で息をしていた。昨日のエスカとの戦いで傷は治したものの、ダメージまでは治り切っている訳ではない。なのでダメージはかなりものだった。今回の作戦はツナが誘拐され操られた学生を洗脳を解くのに必要だった為、美琴がエスカと戦わなければならなかった。それに美琴は1度エスカに負けてしまったことと、婚後を誘拐し黒子を傷つけたエスカにどうしても一矢報いたかったというのもある。

「幻覚を使う相手が……こんなにも厄介だなんて……本当にあんたたちの世界はどうなってるのよ……あんなのが他にもたくさんいるわけ……?」

「俺だって裏社会の人間を全員、把握してる訳じゃねえからなそいつはわからねえな。ただ死ぬ気の炎は覚悟が強ければ強い程強力になるからな。まだまだ強い奴はいるだろうし、これから現れるだろうな」

「やっぱ……おかしいわよあんたらの世界……」

リボーンの返答を聞いて、美琴はツナたちの世界の戦闘レベルおかしいことを改めて自覚する。

その時だった

「小娘が……よくも……よくもこの私に……!?!」

「嘘……」

2人の後ろから声がする。振り返ると美琴の一撃を喰らって倒れたはずのエスカが立って美琴を睨んでいた。いくら殺すつもりで攻撃しなかったとはいえ、通常であれば立つことはおろか数時間は意識を取り戻すことなどない一撃。にも関わらずエスカが立っていたこ

とに驚きを隠せないでいた。執念。たとえ強力な攻撃を喰らっても、それを上回る執念がエスカを奮い立たせたのである。

「遊びは終わりよ……この力を使うつもりはなかったけど……あなたを地にねじ伏せられるならそれで構わないわ……」

そう言うときエスカはポケットの中からリングを取り出した。そのリングは普通の物とは違い、リングの中央に角のような装飾が施されたリングだった。エスカはそのリングを手に嵌める。

「さあ！ 私に力を！」

「な、何?!」

エスカがそう言うときエスカの体を大量の死ぬ気の炎が包んでいく。美琴は何が起こっているのかわからないでいた。するとエスカを覆っていた炎が消える。

「な、何よ……これ……!?!」

美琴は驚愕していた。なぜなら目の前に頭部から2本の角、口からは2本の牙、額から新たな目が開眼し、両目も目と額の目は真っ赤に染まっており、瞳は金色になり、腕、足からは刺のようなものが何本も生え、背中から下部からは尻尾が生え、顔が真っ黒になっていたエスカがいたのだから。

「力が!! 力が漲って来るわ!! アーハッハッハ!! アーッハッハッハ!!」

姿が変わった途端、エスカは先程までの上品さはどこにもなくなり高笑いしていた。

「まさかヘルリングまで持ってやがるとはな」

「ヘルリング……?」

「ヘルリング。死ぬ気の炎が発見される前からあるといわれる、世界に6つしかないと言われる霧属性最高ランクの呪いのリングのことだ。ヘルリングは所有者との契約によって膨大な力を与えることができる。己の精神をリングに喰わせることだな」

「精神を……喰わせるって……!?! そんなことが……!?!」

「温厚だった人物が暴君に変わっちゃまった裏にはこのリングが関係してっていう噂もあるぐらいだからな。前に他のヘルリングに己の精

神を喰わせた奴がいたが、あまりの強さに人格が破綻しちまってたからな。あながちその噂も嘘じゃねえかもな」

リボーンは未来でツナと山本が戦った幻騎士がヘルリングを使い、パワーアップしていた姿が脳裏に浮かんでいた。

「今の私は超越者!! つまり神にも等しい存在になったのよ!! 超能力者^{レベル5}なんてただのゴミ!! お前を地獄に底へ叩き落としてあげるわ!!」

「何が神だ。ヘルリングっていう呪いによって生まれたただの化け物だろ」

「アハハハハハハ!! お前がそれを言うの!? これは傑作だわ!! 呪われた赤ん坊、アルコバレーノ!!」

（呪われた赤ん坊……? それにまたアルコバレーノ……? 一体、何なのよ……?）

リボーンの言葉に高笑いしながらエスカはそう言い返す。美琴はエスカがリボーンのこと呪われた赤ん坊、そして再びアルコバレーノと呼んだことが引つ掛かっていた。

「この力があればもう学生なんてどうでもいい!! この力さえあれば私一人でこの世界を支配できるわ!!」

エスカの額の角と角の間に霧の炎が一点に集束し始めると、炎が玉の形になる。そして大量の霧の炎が2人に放たれた。2人はエスカの攻撃を躲す。

ドオオオオオオオン!

「う、嘘でしょ……!?!」

攻撃は避けたものの後方で轟音が発生し、大量の砂が巻き上がり暴風が発生する。あまりの威力に美琴は驚愕してしまっていた。

「ボケツとしてんじゃねえ美琴!」

「っ!?!」

リボーンが叫ぶと美琴は正気に戻る。そして反射波でエスカが上空にいるのを感知すると、美琴は横に飛び引くとほぼ同時にエスカが降ってきた。エスカが落下したことで再び砂が舞い上がり小さなクレーターができる。

(危なかった！ リボーンがいなかったら確実にやられてた！)

美琴は先程、エスカが放った一撃があまりに強力なものだった為、愕然としてしまっていた。リボーンが叫んでいなければあのままやられていた。

(出し惜しみしてる場合じゃないわね！)

美琴はポケットからコインを取り出して空中に飛ばすとエスカに向かって、超電磁砲レールガンを放った。音速を越えたコインが一直線に向かって行き、あまりのスピードで砂が抉られていく。

「幻覚……!?!」

しかし美琴の超電磁砲レールガンはすり抜けた。先程の攻撃で砂が舞い上がり美琴の視界からエスカの姿が見えなくなった。その時にエスカは幻覚を作ったのである。

(私としたことが……!?!)

ヘルリングによる劇的な見た目、それに加え攻撃力の上昇というインパクトの強さのせいで幻覚のことが完全に頭から抜けてしまっており、美琴は心の中で舌打ちしていた。

「今のが超電磁砲レールガンってやつかしら!?! 大した威力ね!!」

(速い!! 反射波でもギリギリ……!?!)

後ろから超スピードでエスカが近づいて来る。美琴はバク転して躲すと、エスカの背中に両手を置いた。

(さっきの砂鉄がある！ だったら零距离で！)

美琴はエスカに砂鉄がついていることに気づいてこれが本体だということを確認する。そしてありったけの力を零距离で放つ。

「なっ……!?!」

だが美琴が雷撃を放つ前にエスカの姿が美琴の視界から消える。美琴はあまりの速さに驚きを隠せないでいた。

「どこ見てやがるこのノロマが!!」

「ガハッ!?!」

エスカは美琴の頭を右手で鷲掴みにするとそのまま地面におもいっきり叩きつけた。叩きつけられた美琴はうつ伏せの状態で倒れる。

「跡形もなく消し飛ばしてやるわ!! このガキ!!」

(や、やばい……演算が……!?)

エスカは美琴の腕を踏みつけると、美琴を消し飛ばす為に角と角の間に炎が集束させる。美琴は痛みで演算ができず能力が使えないでいた。

絶体絶命のピンチ!

標的（ターゲット） 125 大空（ツナ） VS 幻影魔女（エスカ）

「死ね!! 超電磁砲!!」

「させない!」

「ゴハツ!」

エスカの顔面に拳が叩き込まれる。拳を叩き込まれたエスカはおもいつきり吹き飛ばされる。吹き飛したのはツナだった。

「大丈夫か美琴!」

「お姉様!?! 大丈夫ですか!?!」

「黒子……沢田……向こうは?」

「全員、避難完了いたしました。それでこちらに向かって来ましたの」

美琴が救出の方がどうなったのか尋ねると、黒子は全員救出したことを報告した。

「それにしてもどうなっていますの? 途中から海が広がって……これも幻覚ですか?」

黒子は戸惑っていた。ここに来る途中から海が広がっていたことに。これが本当に幻覚なのかということに。

「そのグローブのエンブレム……まさかお前のことだったとはね……ボンゴレX世!!」

「あれは……まさか……!?!」

「な、何ですのあれは……あれも幻覚ですの……!?!」

エスカはツナのボンゴレギアの甲に描かれているボンゴレのマークを見て、ツナの正体に気づく。エスカの姿を見てツナは何か気づき、黒子はあまりにもおぞましいエスカの姿を見て、恐怖しながら幻覚なのかどうか疑っていた。

「ヘルリングだ」

「やっぱりか……」

「ヘルリング……?」

リボーンがそう答えるとツナは自分の予想が当たっていたことに気づき、黒子はヘルリングという聞いたことのない単語を聞いて驚きを隠せないでいた。

「死ぬ気の炎が発見される前からあるといわれる、世界に6つしかないと言われる霧属性最高ランクの呪いのリングのことだ。ヘルリングは所有者との契約によって膨大な力を与えることができる。己の精神をリングに喰わせることだな」

「精神を喰わせる……!?!? じゃあこれは幻覚じゃないんですの……!?!」

「ああ。温厚だった人物が暴君に変わっちまった裏にはこのリングが関係してつっていう噂もあるぐらいだからな。前に他のヘルリングに己の精神を喰わせた奴がいたが、あまりの強さに人格が破綻しちまっていたからな。あながちその噂も嘘じゃねえかもな」

リボーンは先程、美琴にした全く同じ説明を黒子にした。己の精神を喰わせるという条件、あれが幻覚ではないのだと知って驚愕していた。

「相手があのボンゴレX世デーチモとはねえ!! 壊しがいがあるわね!!」

相手がボンゴレの次期ボスであるツナだと知ってエスカのテンションはさらにハイになる。するとエスカの体が徐々に大きくなっていく。

「か、体が……!?!」

「どうなって……!?!」

急にエスカの体が大きくなったことに美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。

「それがそのヘルリングの力か?」

「そうよ!! これデモナー・リセントイメントが鬼 怨 念のヘルリングの力よ!! このリング

と契約したものは絶大な力が与えられるだけじゃなく、怨念を感知して取り込みパワーアップできる!!」

「怨念を感知して取り込むって……」

「そんなことが……」

エスカの体が大きくなるのを見てツナはこれがエスカのヘルリングの力だと理解する。怨念を取り込みパワーアップすると聞いて美琴と黒子は信じられないでいた。

「さあ!! 来なさいボンゴレX世!!^{デーチェ} ぶち殺してあげるわ!!」

「お前には無理だ。化け物」

「言うじゃない!! このクソ……がっ!」

ツナは炎を逆噴射させると一気にエスカの間合いへと侵入した。そして右手を拳をおもいつき振り上げ、エスカを上空へと飛ばした。

「調子に乗るな!!」

角に炎を集束させると下にいるツナに向かって放った。大量の霧の炎が一直線にツナへと向かっていき、ツナに直撃する。

「直撃!」

「沢田さん!!」

「アハハハ!! 大口を叩いてた癖にその程度! 全然、大したことないじゃない!!」

エスカの攻撃が直撃したのを見て美琴と黒子は驚きを隠せず、エスカは嘲笑っていた。

「誰が大したことないって?」

爆煙の中からツナの声がある。そして爆煙が徐々に晴れる。そこには炎の球体に包まれながら右手の手の平と左手の手を組み合わせ、四角形を作っているツナがいた。すると炎は徐々に収縮していき四角形を作っている手に炎が吸収され、ツナの炎がさらに大きくなり激しく燃え上がる。

「死ぬ気の零地点突破改」

「炎を……吸収して自分の力に変えただと!」

エスカは驚愕していた。何か吸収する機材を使わずに人体だけで炎の吸収したことに。

「な、何が起きたんですの……!」

「あいつ何を……!? 確かに直撃したのに……!」

黒子と美琴はツナが何をしたのかわからず、困惑していた。

「死ぬ気の零地点突破改だ」

「死ぬ気の零地点……?」

「死ぬ気の零地点突破改。相手の死ぬ気の炎を吸収して自分の力に変換するツナ専用の技だ。死ぬ気の炎を使う奴がないこの世界じゃあ使えない技だがな」

「いくらこの世界で使えないといっても……まだそんな技を……」

「相変わらず底が知れないわね……」

リボーンから死ぬ気の零地点突破改の詳細を聞いてまたツナの凄さを実感する。

「流石はボンゴレX世!! デーデモ 殺りがいがあるわね!!」

エスカは有幻覚と幻覚の分身を作り出すと空中から一気にツナへと向かって行く。ツナは一步も動くことなく最低限の動きだけでエスカの攻撃を躲す。

「ガハッ!」

「な、何をしたんですの……!」

そして躲すと同時に有幻覚のエスカと本体だけを手刀で攻撃した。本体のエスカは消えないのでツナはエスカの背中にさらに拳を叩き込むとエスカ地面にうつ伏せの状態で倒れる。黒子はあまりのことに何が起きたのかわからず困惑していた。

「簡単だ。攻撃を避けつつ有幻覚と本体だけを攻撃したんだぞ」

「あの一瞬で幻覚と有幻覚と本体を見破ったっていうの……!」

「今までツナが経験した幻覚はエスカよりも遥か上だからな。あの程度の幻覚を見破るなんざツナにとっては造作もねえぞ」

リボーンの説明を聞いて美琴は驚愕していた。ほんの数秒も満たない時間で有幻覚と本体を見破ったツナの力に。リボーンは口元を緩ませながらそう言った。

「くっ!」

エスカは地面に向かって炎を纏った拳を叩き込むと砂を舞い上がりツナの視界が塞がる。

(三方からの同時攻撃……上が本体か)

左方のエスカは炎を纏った腕でリアット、右方のエスカは姿勢を低くした状態で拳に纏った炎で攻撃、上空のエスカは角に炎を集束して放とうとしておりツナは完全に包囲されてしまう。

「何……!?!」

エスカは驚きを隠せないでいた。ツナは体をおもいつきり反らすと同時に空中にほんの少しだけ浮くと、空中で仰向けになった状態で左方と右方のエスカの攻撃を避けていたのだから。

「がっ!?!」

ツナは右足で右方のエスカを上空にいる蹴り飛ばした。有幻覚のエスカと本体のエスカがぶつかる。ツナのまさかの行動に反応が遅れてしまったのである。

「終わりだ」

「ゴハッ!?!」

ツナは炎を逆噴射させて一瞬にして上空にいるエスカのいる場所まで移動するとエスカの背中に拳を叩き込んだ。エスカは地面におもいつきり叩きつけられた。

ドオオオオオオオン!

「があああああ!!」

エスカの角に集束していた炎が暴発し爆発してしまう。エスカは断末魔が幻覚内の海に響き渡った。

ツナ! 圧倒!

標的（ターゲット） 126 終止符

ヘルリングによってパワーアップしたエスカを余裕で圧倒するツナ。

「はあ……はあ……この私が……この私がクソガキ共に……!?!」

ヘルリングパワーアップしたエスカだったが美琴から受けたダメージに加えて、ツナの攻撃と自分の暴発した一撃を喰らって満身創痍だった。

「こうなれば!!」

エスカは再び上空に移動すると再びエスカの体が大きくなる。ヘルリングの力を最大限に使い、学園都市中に広がる怨念を取り込んでいく。

「感じるわ!! この学園都市に広がる怨念が!! いいわ!! いいわ!! 最高だわ!!」

怨念を取り込んで自身の力がさらに漲っている感じて、エスカは嬉々としていた。そして力が溜まるとエスカは両手を上げる。すると巨大な炎の球が想像され、さらに大きくなっていく。

「いくらお前でもこの量の死ぬ気の炎を吸収はできないでしょう!?

これで終わりよ!! ボンゴレX世^{デーチェモ}!!」

「な、何よこれ……!?!」

「ま、まずいですわ! あんなものが落ちれば私たちどころか、この辺り一帯が焦土と化しますわ!」

巨大な炎の球体を見て美琴は驚愕し、黒子はあの炎の球体が地面に落ちた時どれだけの被害が出るか容易に想像できてしまっていた。

「オペレーションX^{イクス}」

『了解シマシタボス。イクスバーナー発射シークエンスヲ開始シマス』

ツナは炎の球体を見ても動じることなく静かに呟いた。そしてツナは左手を斜め左に下げ、右手を上空にいるエスカに標準を定める。

「炎を逆方向に噴射!?! 沢田さん一体何を……!?!」

「あ、あれって……!?!」

黒子はツナが何をしようとしているのかわからず困惑し、美琴は^{AIMビースト}幻想猛獣を消滅させた技をツナが放とうとしていることを理解する。

「久しぶりだな。X^{イクス}BURNERを見んのは」

「イクス……バーナー……？」

リボーンは口元を緩ませながらそう言った。虹の代理戦争以降、リボーンはツナとスパリングをしていたがツナの^{イクス}BURNERを見ていない。

X^{イクス}BURNERは強力な技ではあるものの発射するまでに時間を要する。そんな技をリボーン相手に撃つ時間を作ることなど不可能に近い。

「ツナの必殺技だ。それより気を抜くんじゃねえぞ。攻撃の余波がこつちまで来るぞ」

「攻撃の余波って……ま、まさか……!?!」

リボーン of 言葉聞いて黒子は理解する。ツナは逆方向に噴射したのはあの炎の球体を破壊する為の炎を発射するのに必要な支えだということに。

『ライトバーナー炎圧上昇。23万……24万……25万 F V』^{ファイアンマボルテージ}

「いいじゃない!! いいじゃない!! ただこのまま消えるなんて面白くないわ!! このまま自分の力の弱さを嘆いて絶望する表情が見たいのよ私は!!」

エスカはツナがやろうとしていることを理解する。しかしエスカは臆するどころか、逆に嬉々とした表情をかを浮かべ、喜んでいた。

『レフトバーナー炎圧上昇。23万……24万……25万 F V』^{ファイアンマボルテージ}
ゲージシンメトリー発射スタンバイ』

ついにX^{イクス}BURNERを発射する準備が整った。

「この一撃でこの事件に終止符を打つ。覚悟しろエスカ」

「ほぎけ!! 終わるのはお前だクソガキ!!」

ツナもエスカも放つ準備が完了し、双方いつでも放つことができる状態となった。

「魔女の導き!!」^{グライダー・ディア・ヴオラ}

「X^{イクス}BURNER!!」

エスカの巨大な炎の球体がツナに向かって放たれ、ツナは炎の球体に向かって大量の炎が放たれる。

「はああああああ!!」

「おおおおおお!!」

炎の球体とツナの炎がぶつかる。エスカとツナは叫び声を上げる。

「な、何……!?!」

だが炎の球体が徐々に破壊されていく。破壊されていく球体を見てエスカは驚きを隠せないでいた。そして炎の球体は完全破壊される。

「終わりだ」

「わ、私が……こんな……こんなクソガキに……!?! がああああああああああ!!」

ツナの炎がエスカを包んでいく。エスカは断末魔を上げる。そしてエスカは上空から落ちるとヘルリングによって変貌した姿は元に戻る。かろうじて生きてはいるもののエスカの全身は焼け焦げており、以前のような透き通るような白い肌はどこにもなかった。

(あれだけの炎を……!?! お姉様の超電磁砲レールガンの何十倍もの威力……!?!)

XBURNERイクスバーナーを初めて見た黒子は驚愕していた。辺りを焦土と化するような一撃を完全に破壊した上にエスカまで倒したのだから。

「魚……?」

「クマノミだな。こいつがこの幻覚世界を作ってたんだ」

「本当に幻覚だったのですのね……」

ツナがエスカを倒したことで幻覚世界が崩れ、元の廃工場へと戻っていく。すると上空から大量のクマノミが降って来る。霧ネッピア・ベッシン・バリアッチのクマノミ。これがエスカの匣ボックスアニマルである。黒子は元の廃工場に戻って来るのを見てこの海が幻覚だったということを理解する。

「これで終わりでもいいのよね? また幻覚って訳じゃないわよね?」

「大丈夫だ。あれは間違いなく本体だ」

エスカの幻覚に振り回されたせいもあつたか美琴は今、倒れている

エスカが幻覚なのではないかと疑ってしまっていた。ツナは幻覚ではなくエスカ本人だと断言する。

「でしたら後は……」

黒子は携帯を取り出すとエスカを護送してもらおう為に警備員アンチスキルに連絡しようとした。

その時だった

「後は僕らに任せてくれ」

「この声……!?!」

「っ!?!」

突如、ツナたちの後方から知らない声が響き渡る。ツナはこの声を知っており、美琴と黒子は知らない声が聞こえた為、慌てて後方を振り向いた。そこには丸い形をした夜の炎があった。

「久しぶりだね綱吉君」

「っ!?!」

そして夜の炎の中からバミューダとイエーガーが出て来る。黒子と美琴はバミューダの姿を見て驚きのあまり固まってしまっていた。

掟の番人。再び

標的（ターゲツト） 127 次元の違う存在

ツナの世界にいるはずのバミューダとイエーガーが学園都市へ現れる。2人が現れた瞬間、その場の空気が凍りつく。

（な、何ですの……!?!? この方たちは……!?!? 沢田さんの名前を知っているということは、沢田さんの世界の方だというのはわかりますが……）

（こ、こいつら……!?!? 沢田の記憶に出てきた奴ら……!?!?）

バミューダとイエーガーの姿を見て、黒子と美琴は夏場であるのにも関わらず全身の寒さが襲い、震えが止まらなかった。ヘルリングの力によつて禍々しい姿へと変貌したエスカが可愛く見える程であった。

（あの長身の男もヤバイ！ けど一番ヤバイのはあの赤ん坊！ どうなつてんの……!?!? 何であんなヤバイ奴とリボーンの様子が似てんのよ……!?!?）

（偶然……? ただ一つ言えるのは……あの赤ん坊が一番、危険な存在だということだけ……）

リボーンとバミューダの様子が似ている理由が美琴と黒子にはわからなかった。しかしバミューダがこの場において一番、危険な人物だということをも本能が伝えていた。

「な、何でバミューダとイエーガーがこの世界に……!?!?」

（バミューダ……ということとはヴィンディチェという法で裁けない方々をを裁く組織……）

ツナはこの世界にバミューダとイエーガーがいる理由がわからなかった。黒子はバミューダと聞いて、リボーンが言っていたことを思い出す。

「俺が呼んだんだぞ」

「お前が……!?!?」

「今回はボンゴレと協力体制を取った。ボンゴレの力がなければこの

世界には来ることは不可能なんぞだ」

イエーガーが自分たちがこの世界に来た理由を説明する。その瞬間、イエーガーの右腕が一瞬にして消え、すぐに元の位置に戻る。するとイエーガーの手にはツナたちの後方にいたはずのエスカがイエーガーの手に抱えられていた。

(な、何をしたのこいつ……!?)

(腕が消えたと思ったらエスカが……どうなって……!?)

自分たちの後方にいたはずのエスカを一步も動くことなく、エスカを捕えたことに美琴と黒子はイエーガーが一体何をしたのかわからず驚きを隠せないでいた。夜の炎の特徴は空間移動と加速、イエーガーは自分の右腕だけをワープさせてエスカを捕らえたのである。リボーンが過去にこのことを少しだけ話してはいるのだが、今の2人はそんなことを思い出す余裕などなかった。

「エスカは捕らえた。行くぞバミューダ」

「そうだね」

「お、お待ち下さい！ 今回の事件は学園都市で起きた問題！ いくらあなた方が掟の番人と言えど、勝手なことをされるのは困りますの！」

黒子はなんとか勇気を振り絞ってそう言った。今回の事件の首謀者がツナたちの世界の人間であるとはいえ、事件が発生したのは学園都市。このままエスカが捕らわれれば犯人は有耶無耶になってしまい、学園都市の人たちが本当の意味で安心することはできない。

「問題ねえ。この後、俺たちを巻き込もうと爆破したかのように隠蔽工作する」

「ですが！」

リボーンの場合に納得できなかったのか黒子は反論する。

その時だった

「君の言うことも最もだ」

「っ!?!」

するとバミューダは夜の炎を使った空間移動——短距離瞬間移動ショート・ト・ワープを使ってツナたちの目の前にワープする。急に目の前にバミューダ

が現れたことに美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。

(全く見えなかった……!? というか、私の反射波でも反応できなかった……!? 私の目がおかしくなっていないければ、こいつ沢田の何倍も速い……!?)

(私と同じ空間移動……!? いや、私とは次元が違い過ぎる……こんなことが……!?)

美琴と黒子はバミューダのあまりの速さに驚愕、バミューダが自分たちとは次元が違う生き物だということに自覚する。

「しかし死ぬ気の炎のないこの世界では死ぬ気の炎を無力化する術がない。それにこのヘルリングが誰かの手に渡ればこの学園都市に今回以上の被害がもたらされる場合だつてある訳だ。しかし我々に任せてもらえればそう言つた事態も起こらないと約束しよう」

「バミューダの言う通りだ。復讐者の牢獄は脱獄不可能な牢獄だ。問題ねえ」

バミューダは自分たちがエスカを捕らえるにあたつてのメリットを話す。リボーンもバミューダたちに任せても大丈夫だと言う。

「わ、わかりましたの……」

「ありがとう。君の英断に感謝するよ」

黒子はバミューダにエスカの身柄を任せることを承諾する。バミューダはお礼を言うと、短距離瞬間移動ショート・ワープを使って元いた場所へと戻る。あまりの速さにツナたちの目の前にバミューダの残像が残っていた。

「しかしこの短期間で2度も会うなんてな。正直、お前らの面を見たくねえんだがな」

「ハハハっ！ 相変わらず手厳しいな。今、君は呪いが解けているとはいえ僕と同じアルコバレーノだったんだ。もう少し仲良くしてもいいじゃないか」

(アルコバレーノ……虹？ 何なのですか?)

(またアルコバレーノ……一体、何なのよ……?)

リボーンとバミューダの会話の中に出てきたアルコバレーノという単語に黒子は引つ掛かり、美琴は再びアルコバレーノという単語が

出てきて気になってしまっていた。

「あの黒髪のお嬢さんは元気かい？ 僕らの姿を見てトラウマになつてたりとかはしてないか？」

「佐天のことか？ 佐天なら問題ねえぞ」

「な、何で佐天さんがあんなたちと……!？」

「君は彼女の友達だったか。彼女は前にシエンツ・バツローネというマフィアに襲われてね。我々はその男の身柄を拘束する時に彼女と会っているのさ」

「佐天さんが……マフィアに襲われた……!？」

美琴は佐天がマフィアに襲われたこと知らなかった為、衝撃を受けてしまっていた。

「心配すんな美琴。佐天はシエンツを倒した。自分の力でな。それにもう襲われる心配はねえ」

「佐天さんが……倒した……!？」

リボンから佐天がマフィアを倒したと聞いて、驚くと同時に信じられないでいた。

「先に言っておくよ。我々は今のところ彼女を裏社会こちら側の人間と認識してはいない。だが、仮に彼女が裏社会こちら側の世界に入り、掟を破ったとなれば話は別だ。その時は我々が容赦なく捕らえる」

「バミューダ。そろそろ行くぞ。あまり長居は無用だ」

「すまない、イエーガー君。じゃあ、僕たちは失礼させてもらおうよ」

そう言うとバミューダは異世界転送装置に夜の炎を注入した。すると、異世界転送装置が輝き始める。そして光が止むと、バミューダとイエーガーの姿が消えた。

「ふう……」

「はあ……はあ……」

「い、息が……」

バミューダとイエーガーがいなくなった後、ツナは超ハイパー死ぬ気モードの状態を解き、黒子と美琴は大きく息を吸った。あまりの恐怖で2人は最低限の呼吸しかできていなかった。

「大丈夫？ 2人とも」

「大丈夫な訳ないでしょ……あんな奴らを目の前にして、何で平気でいられるのよ……?」

「な。やべーよな。あいつら」

ツナは息をしている美琴と黒子を心配するが美琴は大丈夫とはいえなかった。一方でリボーンは呑気な様子だった。

「あの方々は本当に人間なんですの……?」

「一応はな。まあ数百年生きてる人間を人間と呼んでいいのかはわかりやしねえがな」

「す、数百年……!?!」

「数百年って……!?!」

バミューダとイエーガーの寿命を知って黒子は驚愕する。一方で美琴は前にツナが言っていた数百年生きた人間とはあの2人のことを指していたのだと理解する。

こうして学生誘拐事件は幕を閉じた

一方その頃、第7学区にある窓のないビル。

「学園都市がここまで振り回されるとはな……暇潰しの余興にはなつたな」

窓のないビルの内部。その中にある水の入ったビーカー形の機器の中に逆さまの状態で浮いている銀髪の男がいた。この男の名はアレイスター・クロウリー。学園都市の統括理事長である。

「魔神とまではいれないが人間でありながら人の領域から外れた存在。異世界。そして死ぬ気の炎という超能力とも魔術とも違う力。是非とも知りたいものだ」

アレイスターはどういう訳かツナたちのこと、死ぬ気の炎のことを知っていた。

「しかしあの連中の中にこの世界どころか魔神やエイワスすら滅ぼせる可能性を持ったジョーカーがいる。そうなってしまうえば取り返しのつかないことになる。やはりこのまま観察せざるを得ないか……まあい。幻想殺しイマジンブレイカーの成長のきっかけになるやもしれないしな」

標的（ターゲツト） 128 残された謎

エスカを倒してから2日後。学園都市に報道が流れる。エスカは死亡。原因は敵を爆弾で道連れにしようとしたことによるもの。爆発的は遺体が残らない程の爆破であり結局、エスカの正体は謎のまま。今回の事件を受けて学園都市は今回のような事件が起こらないようさらにセキュリティを強化することを発表。こうして学園都市に再び、平和が戻った。

ジャックメント
風紀委員177支部

「なんか事件が解決した気がしませんわね……」
「どうかヴァインディチェでいいんだっけ？ あいつらの方がヤバ過ぎてエスカが可愛く見えたわ……」

事件の真相を知る黒子と美琴はスッキリするどころかむしろモヤモヤしてしまっていた。負傷した美琴はリボーンの治療によって傷は治り、1日程休んだことで回復していた。

「そんなに凄いですか？ ヴァインディチェって？」
「正直、あの方たちを見た瞬間、死を覚悟しましたわ……初春。あなたでしたら完全に気絶してますわよ……」

「初めてだったわ……ただ目の前にいるだけなのに勝てないと思ったのは……」

初春はバミューダとイエーガーの姿を見た時のことを尋ねた。黒子と美琴の脳には鮮明にあの2人のことが焼き付けられていた。見た目だけならヘルリングに精神を喰わせたエスカの方がヤバイはずなのに、それが可愛く思えてしまう程の存在感が。

「ただあの方バミューダという方は一体、何者なんでしょうか？」

「黒子もそう思った？」

「え？ 何かあったんですか？」

黒子と美琴はリボーンの似た姿をしていたバミューダのことが気

になっていた。初春は何のことかわからずどういふことか尋ねた。

「さつき言ったバミューダって奴とリボーンの様が似てたのよ」

「リボーン君とですか？」

「うん。リボーンと同じ赤ん坊だったの。それに呪いが解けたとはいえ自分と同じアルコバレーノだったって言ってたわね……」

「アルコバレーノ？」

美琴はバミューダがリボーンに言っていたことを思い出していた。

初春はアルコバレーノが何のことかわからず疑問符を浮かべる。

「イタリア語で虹という意味ですわ。ただリボーンさんがなぜそう呼ばれているのかはわからないですの」

「エスカもリボーンのことをアルコバレーノって呼んでたわ。後、呪われた赤ん坊だって」

「アルコバレーノ……呪われた赤ん坊……」

「ますます意味がわかりませんわね……」

美琴はエスカがリボーンのことをバミューダと同じくアルコバレーノ、呪われた赤ん坊だと言ったことを思い出す。初春と黒子はますますリボーンのことかわからなくなってしまうていた。

「というか今さらですけど……赤ちゃんが喋るっておかしくないですか……？」

「そういえば……」

「なんか当たり前になり過ぎて忘れてたわ……」

初春は今さらであるがリボーンが普通に喋っていることに感じて指摘する。黒子と美琴も今さらながらおかしいことに気づいた。

「あーもう！ 気になって仕方がないわ！」

「仕方ねえな。教えてやるぞ」

美琴は気になり過ぎて両手で頭をクシヤクシヤしていた。すると支部内にリボーンの声が響いた。美琴たちはリボーンがどこにいるのか気になり辺りを見回す。すると支部の一部が床が沈み、床とコーヒーマーカーが乗った机と椅子に座りコーヒーを飲んでいるリボーンがエレベーターのように上がってきた。

「ちやおつす」

「どっから出て来てんのよ！」

当たり前のように床の下から出て来たリボーンに美琴がツツコミをいれる。

「あの……前に言いそびれたんですけど……勝手に改造するのを止めてもらえますの……？」

「ここはこの世界のボンゴレの拠点第1号だぞ。いずれはお前らもボンゴレの一員になるんだから別にいいだろ」

「よくないですわ！　というか私たちはマフィアになどなる気はありませんの！　今すぐ撤去して下さいの！」

「もう遅えぞ。拠点はここだけじゃねえ。柵川中学、常盤台中学、他にも学園都市の至るところにあるからな」

「常盤台!?　どうやって入ったんですの!?!」

「普通に入ってセキュリティに引掛からないように突破しただけだぞ。安心しろ。俺が侵入したのはエスカが来る前よりずっと前だ」

「安心できる訳がないですよ！」

「あんなショボいセキュリティしてる学園都市が悪いんだ。あれじゃ俺に入ってくれて言ってるようなもんだぞ。だから俺は悪くねえ」

「どう考えてもあなたが悪いですわ！」

「……」

リボーンの言葉に次々と黒子はツツコミをいれていく。エスカよりも前に常盤台に侵入したと聞いて初春と美琴は衝撃を受けていた。

「んなことはどうでもいいだろ。それよりだ」

「どうでもよくありませんわ！　今すぐあなたを不法侵入の容疑で捕まえますわ！」

「やってみやがれ。俺を捕らえることすらできなかった奴にできるんならな」

「ぐぬぬ……!!」

リボーンを捕らえようとする黒子であったが、リボーンに論破されてしまい悔しい表情かおをしていた。

「そ、それよりアルコバレーノのことを教えてくれるんですよね？」

「今回はごつちの事情にお前らを巻き込んだからな。だから教

えてやるぞ。それに佐天には教えたしな」

初春は気を遣って話を反らした。リボーンは美琴たちが気になっていたことを話すと決める。そしてリボーンは語る。運命の日、
7・トウリニセツテ、アルコバレーノの役割、チェツカーフェイス、虹の代理戦争、
ヴァインデイチェ復讐者の正体。佐天に自分の秘密を話した時と同じことを話した。

「以上が俺の秘密の全てだ」

「「っ……!?!」」

リボーンは話を終える。話を聞き終えた美琴たちはあまりに壮大の話に衝撃を受けていた。

(あの時のバミューダの言葉はそういうことだったのね……)

美琴はツナの記憶を見た際にバミューダが言っていた言葉の意味をリボーンの話の聞いて理解する。

「じゃあ……下手したら……あなたもあの方々と同じように……」

「なってただろうな。ま。どうせチェツカーフェイスに勝とうが負けようが俺は死んでたがな」

「どうせって……そんな軽く……」

リボーンが復讐者ヴァインデイチェのようになっていたかもしれないと知って黒子は驚きを隠せないでいた。自分が死ぬことを軽く言うリボーンに初春は悲しそうな表情かおをしていた。

「この姿になった時からロクな死に方は期待しちやいなかったからな。チェツカーフェイスが呪いを解いてくれることがないくらい最初ハナからわかってたしな」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ あんた呪いを解けないことをわかってたのに、何で虹の代理戦争ってやつに参加したのよ!?!」

「んなもん決まってるんだろ。俺の使命はツナを立派なボンゴレ10代目にする事。ツナを鍛えるのに虹の代理戦争は丁度いいと思ったからな」

「「え……!?!」」

「どうかしてるわよあんた……!?!」

自分の呪いが解けないとわかっていたのにも関わらず虹の代理戦争

争に参加した理由がツナの為だと知って、3人は驚きを隠せないでいた。

その時だった

「し、失礼します……」

「婚后さん？」

支部に誰か入って来る。入って来たのは学生誘拐事件の被害者の1人である婚后光子。そして湾内と泡浮だった。

標的（ターゲット） 129 新たな事件の予感

支部に婚后、湾内、泡浮がやって来る。

「どうしたんですか？」

「今日はお礼を言いに来たんです」

「今回、事件に協力させてくれたのも解決できたのは白井さんたちのお陰ですから」

初春はここに来た理由を尋ねる。湾内と泡浮は支部に来た経緯を説明する。

「ん？ もしかしてそいつがお前らの助けたいって言ってた奴か？」

「はい。そうです」

「じゃ、喋った!？」

リボーンが湾内と泡浮と共にいる婚后が2人が助けたいと言っていた人物だと推測すると、泡浮がそうだと答える。婚后はリボーンが喋ったことに驚いていた。

「初めましてだな。俺はリボーン。ツナの家庭教師だぞ」

「こ、婚后光子と申します……以後お見知りおきを……」

「よろしくな光子。それよりお前ボンゴレに入らねえか？」

「いい加減にしなさいよあんた!」

「ヴオンゴレ……パスタのことですか？」

いつものようにボンゴレに勧誘するリボーンに美琴はツツコミをいれる。婚后はボンゴレのことをパスタのことだと思っていた。

「あの……沢田さんは？ 沢田さんにもお礼を言いたいのですが」

「沢田さんならパトロールに出ていますの」

「ただいまー」

「噂をすればですわ」

湾内が支部内にいないのでどこにいるのか尋ねる。黒子はパトロールに出ていると答えると、タイミング良くツナがパトロールから戻って来る。

「あつ！ 光子。どうしたの？」

「あ、あの!! 今日はお礼を言いに……!! 先日は助けていただきありがとうございました……!!」

（や、やっぱり……!?!）

（あれ？ 婚后さんの様子が？）

ツナは婚后を見て気づく。すると婚后はツナを見た途端、顔を赤らめ少しだけでもじもじしながらお礼を言った。そんな婚后の姿を見て美琴たちは違和感を感じる。

時は遡り。救出作戦の時に戻る。

「間違いないわ。ここに学生がたちがあるわ」

美琴がエスカと接触している頃。幻覚のクロームに取り付けた発信器を辿ってツナたちはエスカから少し離れた場所にいた。固法はクレヤポヤンス透視能力で近くの建物内を透視して廃墟の建物内に学生がいることを確認する。

「エスカは御坂さんが足止めしていますけど……」

「万が一のことを考えて間違はなく迎撃するよう命令してあるでしょうし……」

「私たちと同じ常盤台の生徒も多くなりますし……」

「どうしましょう……」

初春、黒子、湾内、泡浮はここからどうすればいいかわからず迷っていた。

「問題ない」

そんな中、ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになって大丈夫だと全員に告げ

る。

「俺が建物内に侵入して制圧する。俺が連絡したら学生たちの保護を頼む」

「ちよ、ちよつとツナ君、何を言ってるの!?!」

「エスカが操折を手中に収めたことで操折の能力で学生たちは操られているはず。だったら俺の炎で元に戻せる。それに操折の能力は俺には効かない。俺が適任だ」

「で、でも……」

ツナの言うことが本当であるならば確かにツナが適任であるが、能力者が何十人もいる所に突っ込むなど無謀である。

「問題ない。能力を使われる前に制圧すればいいだけの話だ」

「ちよつ!?! ツナ君! もう!」

そう言うのとツナは炎を逆噴射させて一気に建物内へと侵入して行く。固法は勝手に飛び出したことに怒っていた。

「い、一瞬で……」

「な、何がどうなって……」

「炎を逆噴射させることによって高速移動したのですわ」

湾内と泡浮はツナが何をしたのかわからず困惑していた。そんな2人に黒子はツナがどういう原理で高速移動したのか説明するわ

「呑気に解説してる場合じゃないわ! 早くツナ君を!」

「沢田さんなら大丈夫ですわ固法先輩。音が全く聞こえないでしょう?」

「た、確かに……」

黒子がそう言うのと固法は戦闘の音が全く聞こえないことに気づく。つまりこれはツナが相手に能力を使わせる前に学生たちを制圧している証拠である。

「本当だわ……本当に制圧してる……」

「相変わらず凄いですね沢田さん……」

固法は再び透視能力クレヤボヤンスで建物内を覗く。固法の視界には倒れている学生たちが映っていた。

「あ、あの1つお尋ねしたいのですが……沢田様は多重人格なのです

か？」

「明らかに雰囲気が変わりましたが……」

「それは私にもわかりませんわ……」

湾内と泡浮はツナの雰囲気が違うことに疑問を抱き、黒子に尋ねる。しかし黒子にもそれを答えることはできなかった。

一方。建物内に侵入したツナは

「階を進むごとに人が増えている……上に操折がいるのは間違いないな……」

ツナは上の階を見ながらそう呟いた。操折は学園都市に7人しかいない超能力者^{レベル5}。いくら他人を

操れる力を持っていると言っても、そんな貴重な存在をわざわざ前線に立たせたりはしないことをツナは理解していた。

「とにかく急がないと」

ツナはさらに階を上がっていく。次の階に上がると操折と、能力者たちがいた。だがツナは一瞬にして気絶させる。

「……」

(マインドコントロールされている話は本当だったようだな……操折さえ元に戻せれば操られていた学生も元に戻せる……)

操折はリモコンを何度も押してツナを操ろうとしていた。しかし大空の炎の特徴である調和によって操折の能力はツナには通じない。そんな操折を見ながらツナは長考していた。そしてツナは操折の所まで移動すると人差し指に炎を灯し、額に当てる。

「……は……っ？」

ツナの大空の炎によって操折のマインドコントロールが解け、光を

失っていた瞳が元に戻る。

「気づいたか」

「あ、あなた……どうしてここに……？」

「お前たちが誘拐されたと聞いて助けに来た」

「誘拐……？」

そう言うのと操折はリモコンを自分の額に押し当てるとリモコンのスイッチを押した。

「あーはいはい。そういえば奇妙力満載の女が襲って来たわねえ……それで私は操られてここに……そして他の学生を私の操作力で操ったと……そういうことねえ」

「操るだけじゃなくて自分の記憶を辿れるとはな。精神系に関することなら何でもできるってことか」

「まあね。感がいいわねえあなた」

「それよりお前に操られている学生の解除を頼む。ここに来る間に全員、気絶させた」

「あなたの力なら解除できたんじゃないのお？」

「そうしたかったが正気に戻った後で操られた学生に襲われたら意味がない。全員、気絶させた後でお前に解除させた方が安全で早いと思っただけだから」

「滅茶苦茶ねえ……ま。いいわ」

あれだけの能力者相手に傷一つ負わず気絶させたことに驚いていた操折だったが、リモコンのスイッチを押した。

「はい。これで洗脳力解除だぞ☆」

「今のだけで全員を解除したのか……」

たった1回リモコンのスイッチを押しただけでこの建物内にいた全員の洗脳を解いたことにツナは驚いていた。

「歩けるなら下に降りてくれ。そこに黒子たちがいる。保護してもらってくれ」

「了解よお」

ツナがそう言うのと操折は歩いて建物内へと降りて行く。

「さてと……まずはこの階の人から……」

ツナはこの階で自分が気絶させた人たちを助けることを決める。

「う、うくん……?」

「大丈夫か!」

一人の学生が目を覚ます。ツナは慌ててその学生の元へ駆けつける。目を覚ましたのは婚后光子だった。

「あ、あなたは……前に御坂さんと戦った……私は一体……なぜここに……?」

「お前は誘拐されてたんだ。誘拐事件の犯人にな」

「誘拐……? 私が……?」

「だから助けに来たんだ。今、犯人は美琴が足止めしている。今の内にここから脱出するぞ」

「御坂さんが……!」

友である美琴が犯人と戦っていると知って、婚后は驚きを隠せないでいた。

「立てるか?」

「ええ……なんとか……」

ツナが大丈夫かどうか尋ねると、婚后はふらつきながらもなんとか立ち上がる。

「あつ……」

だがツナが気絶させた影響で体が思うように動かず、婚后の体は傾いてしまう。

「大丈夫か?」

「え……!」

地面に倒れる前にツナは婚后をキャッチする。そしてそのままお姫様抱っこして黒子たちの元へ歩いて行く。

「だ、大丈夫ですわ! 少しふらついただけで!」

婚后は顔を少し赤くしながら大丈夫だと伝える。それでもツナは婚后を下ろさず抱えたまま進む。

「そんな体になったのは俺のせいだ。俺がお前を気絶させたからな」
「気絶って……」

「お前たちは操られていたんだ。だから俺が気絶させてお前たちを

操っていた奴のマインドコントロールを解いて、洗脳を解いてもらった。俺がお前たちの洗脳を解くこともできたんだが、解いている間に他の学生たちが襲って来たら洗脳が解けた学生たちが傷つく可能性があったからな。だから気絶させた。すまない。手荒な真似になっ
てしまつて」

「そんな……!? あなたは何も……!?」

ツナは事情を説明すると同時に婚后に謝る。婚后は何も悪くなのに謝るツナを見て婚后はそう言った。

「お前がどう言おうと俺がお前を傷つけたことは事実だ」

「たとえばそうだったとしても私は感謝しています。あなたがいなければ私はこのまま捕まっていたかもしれないわ。だから謝らないで下さい」

「ありがとう。優しいんだな。えつと……」

「婚后光子ですわ」

「俺は沢田綱吉だ。よろしくな光子」

「っ!?!」

ツナが微笑みながらそう呼ぶと婚后は顔を赤くする。

(ど、どうしたのでしょうか!?! 急に沢田さんの顔を直視できなくなりましたわ!?! それに体が熱く……ですが……とても温かくて、落ち着きますわ……!!)」

婚后は自分に起きている違和感に気づく。この後、ツナがお姫様抱っこしているのを見た黒子たちは開いた口が塞がらない状況になつていたという。

そして場面は戻り風紀委員177支部

ジャッジメント

「そんなお礼を言わなくてもいいよ。俺は当然のことをしただけだし」

「そ、そんな……!! 助けていただいたのですからこれくらい当然ですわ……!!」

(こ、これは不味いですわ……)

(佐天さんがこれを知れば……)

(大変なことになるわ……)

婚後がツナに惚れていると知って黒子、初春、美琴は体を震わせていた。特に黒子と初春はツナから佐天がマフィアをたつた1人で壊滅した話を聞いてしまっているの、佐天がこのことを知れば大変なことになることを理解していた。

「何だお前ら知り合いなのか。だったら連絡先を交換したらどうだ」

「あっ！ そうだね」

「「なっ!」」

リボーンは婚後がツナに惚れているのを理解していながらそう言った。ツナは普通にリボーンの提案に乗り、黒子、初春、美琴は驚きを隠せないでいた。

「れ、連絡先ですか……!?!? ま、まあ沢田さんがいいと言うなら交換しあけても構いませんわ……!?!?」

「じゃあしよっか」

「へっ……!?!?」

「これで遊びに行けたりできるね」

(あ、遊ぶ……!?!? 殿方と2人で……!?!? こ、これが噂に聞くでえーと
というものですか……!?!?)

遊びに行けると聞いて婚後は顔を赤くしながらこれはデートなのではないかと思つてしまつていた。

この後、ツナと婚後は連絡先を交換した。こうして学生誘拐事件は幕を閉じた。しかしこの1件で美琴たちは学園都市で新たな事件が始まるのではないかと恐怖することになった。

日常篇

標的（ターゲット） 130 怒涛の日々1

ツナが婚后と連絡を交換し終えた後、ツナたちはこれまで通り、通常業務へと戻る。婚后、湾内、泡浮、美琴、は帰って行く。

「んじゃ。俺もそろそろ帰るぞ。佐天を鍛えなきゃいけねえしな」

そう言うとりボーンも同じく支部を出て元の世界に戻ることを決める。

「そーいや言い忘れてたが今日、獄寺が学園都市に遊びに来るらしいぞ」

「え!?! 獄寺君たちが!?!」

リボーンがそう言うのとツナは自分たちの仲間が学園都市に遊びに来ると知って驚いていた。リボーンはそのまま何も言わず支部を出て行った。

「沢田さんの世界の方ですか。私、会ってみたいです」

「いやー……あまり会わない方が……」

初春はツナたちの世界の方と聞いて興味を抱くが、ツナはおすすめることができなかった。

その時

「通報です! 第7学区の路地で爆破事件発生です!」

「爆破事件!?!」

爆破事件と聞いてツナと黒子は驚きの声を上げる。エスカが爆発物を使っていた為、その場はピリピリしていた。

「犯人は高校生だそうです!」

「高校生……?」

初春から犯人の特徴を聞いてツナは何か引掛かっていた。

「急いで現場へ行きますわよ沢田さん!」

「え……!?! ちよっ……!?!」

黒子はツナの肩に手を置くとテレポートして現場へと向かって行

く。

そして現場に到着する。

「通報場所はここですわね……」

通報のあった路地に到着すると黒子はおそろおそろ路地を踏み出そうとした。

その時だった

「あっ！ 10代目じゃないですか！」

(やっぱり獄寺君だー！)

すると路地の奥から獄寺が出て来た。ツナはこの爆破事件がやっぱり獄寺だったと知って驚きを隠せなかった。

「もしかして沢田さんの世界の方ですか？」

「う、うん……まあ……」

獄寺がツナのことを10代目と呼んだことで獄寺がツナの世界の人物だと黒子は理解するが一応、ツナに確認を求めた。ツナは曖昧な返事で答えた。

「にしても学園都市っていうのは治安が悪いんですね。ちよつと路地を通っただけで絡まれるんすから。まあダイナマイトで始末したんすけど」

「ダ、ダイナマイト!？」

獄寺がダイナマイトを出しながらそう言うと黒子はダイナマイトを出したことに驚きを隠せなかった。

「獄寺は体中の至るところにダイナマイトを持って……スモークンゴムっていう異名で呼ばれて……」

「ということはマフィアなんですか!? というか犯人はこの方だったんですか!？」

いつの間にか現場にリボンが来ておりリボンは獄寺のことを説明する。黒子は獄寺が犯人だと知って驚きを隠せないでいた。

「ダイナマイトを持って来るなんて！ 何を考えていますの!？」

「うるせえぞ。俺が何を持ってようが勝手だろうが。果たすぞコラ」

「ご、獄寺君！ 落ち着いて！」

黒子はダイナマイトを持っていることを指摘する。獄寺は初対面である黒子に対してやる気満々だった。ツナは獄寺を止めようとする。

その時だった

ドオオオオオオン！

「ま、また爆発!？」

「い、一体何が!？」

再び爆発が起こる。再び爆発が発生した為、ツナと黒子の驚きを隠せないでいた。すると黒子の携帯に電話が入る。

『白井さん大変です！ 公園で子供が爆発物を放っていると通報が!』

「こ、子供が手榴弾を放ってる!? 何を言っていますの!？」

「ま、まさか……………」

「あのアホ牛……………」

黒子の言葉を聞いてツナと獄寺はこの爆破を起こしたのか理解していた。

「10代目行きましょう!」

「うん!」

「あっ！ 勝手に!」

勝手に動くツナと獄寺を見て怒る黒子であったが、それでも現場に向かって行く。

一方公園では

「ガハハ！ 今からここはランボさんの領地だもんね！」

「何で子供が手榴弾持つてるのよ……沢田の世界の仲間はどうなったのよ……」

噴水の上でバカ笑いしているランボがいた。そしてたまたま居合わせた美琴がいた。周囲の人は避難したのか美琴以外、誰もいなかった。

「ちよつとあんた！ 他の人のことも考えなさいよ！」

「うるさいぞ！ ここはランボさんの領地！ 逆らう奴には容赦しないんだもんね！ ましてやパンツも履いてない奴になんて負けないんだもんね！」

「履いてるわよ！」

手榴弾を投げた時に発生した爆風で美琴のスカートがめくれた時にランボは美琴のショートパンツを目撃していた。その為ランボは美琴が下着を履いていないと思っっているのだ。美琴はちゃんと履いてると主張する。

「やーい！ やーい！ ノーパン女！ 悔しかったらかかって来るんだもんね！」

「このっ……クソガキ！」

「ぎゃあああああ！」

「しまっ……!?!」

美琴の雷撃が地面を通って噴水の上にいるランボに当たる。美琴はランボの叫び声を聞いて我に返る。

「うわあああああん！ 痛いだもんね！」

「え……!?!」

ランボの泣き声を聞いて衝撃を受けていた。今の一撃は全力ではないものの、かなりの威力だった。その一撃を子供が喰らってタダで済むはずはない。にも関わらずランボは泣いてはいるものの五体無傷である理由がわからなかった。

「ったく！ やっぱリアホ牛の仕業か！」

「美琴!?!」

「お姉様!?! 大丈夫ですか!?!」

美琴が驚いていると獄寺、ツナ、黒子が公園にやって来た。

「どうされたんですかお姉様……?」

「今、私……怒りで我を忘れてあの子に雷撃を喰らわせたのに……あの子に効かなかったの……」

「そ、そんなことが……!?! ただの見間違いでは……!?!」

美琴が先程の出来事のことを黒子に話す。黒子は美琴の言っていることが信じられないでいた。

エレットウリコ・クオイオ
「電撃 皮膚だな」

「エレットウリコ・クオイオ……?」

獄寺は2人の会話を聞いて、なぜランボに電撃が効かなかった理由を答える。エレットウリコ・クオイオという聞いたことのない単語に「リボンさんの話では電撃 皮膚は電撃を通しやすい皮膚のことらしい。雷撃を喰らっても体の表面を通過しちまうから脳や内臓へのダメージがほとんどねえんだ」

「じゃ、じゃあ……!?! お姉様の雷撃を無力化したって言うんですの……!?! あの子が……!?!」

エレットウリコ・クオイオ
電撃 皮膚の説明を聞いて黒子は信じられないでいた。こんな小さい子供が美琴の雷撃を無力化したことに。

「ま、まあ……わ、私はこのくらいで……動揺する人間じゃないしい……? ベ、別に気にしてなんか……」

(美琴が壊れた!?! やっぱリシヨックだったんだ!)

いくらランボがツナの世界の人間とはいえ、あんな子供に自分の電撃が無力化されてしまったことに美琴はシヨックを受けてしまったのだった。

ランボに自分の電撃が効かず美琴はショックを受けてしまった。
「もう怒ったもんね！」

怒ったランボは頭の中を探り始める。するとランボは頭からミサイランチャーを取り出した。

「頭の中からミサイランチャー!? どうなっていますのあの子の頭の中は!?!」

「あのアホ牛！ 黙らせてやる！」

「ダイナマイト!?!」

「獄寺君！ それ一番アウトだから！」

黒子はランボがミサイランチャーを出したことに驚きを隠せな
いでいた。獄寺はダイナマイトを使ってランボを黙らせようとする。
獄寺がダイナマイトを取り出したことに美琴は驚き、ツナは獄寺を止
めようとする。

「死ね！」

ランボはツナたちに向かってミサイランチャーを放つ。
が、

「ぐぴゃー！」

突如、ランボが空中に吹き飛ばされた。そして空中で縦横無尽に移
動するとそのまま地面に叩き込まれた。ランボは気絶してしまった。

「イーピン！」

ツナが横を向く。するとそこには極度の細目の弁髪を結わえカン
フー服に身を纏い、右手に餃子餡を持った子供が立っていた。この子
供の名はイーピン。人間爆弾の異名を持つ殺し屋^{ヒットマン}である。

「あ、あの方も沢田さんの方なんですの？」

「うん。そうだよ。俺の家の居候なんで。人間爆弾っていう異名を持
つ殺し屋^{ヒットマン}なんだけどさ……」

「殺し屋!? あの子がですの!?!」

イーピンが殺し屋だと知って黒子は驚きを隠せないでいた。

「で、でも確かイーピンは修行に行つてたはずじゃあ……」

「今日、修行から帰つて来たんすよ」

「それよりさっきの念動力よね!? まさかあの子も原石なの!?!」

修行に出ているはずのイーピンがここにいる理由がツナにはわからなかったが獄寺が補足説明する。美琴とはイーピンが念動力を使つたことに驚きを隠せないでいた。

「今のは念動力じゃないよ。今のは餃子拳つていう拳法だよ」

「ぎよ、餃子拳……?」

餃子拳というよくわからないネーミングセンスの技名を聞いて、美琴と黒子は困惑してしまつていた。

「イーピンは餃子餡の食べた後の臭い息を拳法で圧縮してそれをアホ牛の鼻に叩き込んで脳を麻痺させたんだ。そして脳が麻痺して筋肉が動いて念動力みたいに見えたつていう寸法だ」

「そ、それつて臭い拳法つてことですよ!?! い、嫌ですわ! あんなの絶対に喰らいたくないですわ!」

念動力だと思われた能力が実は臭い息がこの技の正体だと知って黒子は驚くと同時にもの凄く嫌そうな顔をしていた。

「凄い技なんだけど……なんか格好悪いわね……正体が臭い息つて……」

「っ!?!」

「あつ!」

「バカ!」

美琴の言葉を聞いた途端、イーピンは体中から大量の汗をかき始める。ツナと獄寺は顔を真っ青にしていた。

「ちよつ!?! 大丈夫!?! なんか凄い汗かいてるわよ!?!」

「まさか熱中症!?!」

美琴と黒子はイーピンの体に何かが起きたのではないかと心配する。すると汗は止まりイーピンの額に麻雀の9つの筒子が現れる。

「ヤバい! 筒子時限超爆のカウントダウンが始まつた!」

「な、何よそれ!？」

「イーピンは極度の恥ずかしがり屋で恥ずかしさが極限に達すると額キョウビンに九筒キョウビンが現れるんだ!　そして筒子ピンズが一筒イーピンになると大爆発を起こすんだ!」

「ば、爆発!?!　何で人間が爆発すんのよ!?!」

「だから人間爆弾だったんですの!?!」

ツナから筒子ピンズ時限超爆の詳細を聞いて驚くと同時にまたトラブルが発生しまったことを理解する。

「なんてことしてくれたんだクソ女!　このままだどこの公園アマが吹っ飛ぶぞ!」

「人間がいきなり爆発するなんて分かる訳ないでしょ!　ここは学園都市なのよ!　あんたらの世界みたいにおかしなことが起きる世界じゃないのよ!」

「喧嘩してる場合じゃないよ2人とも!　早くなんとかしないと!」

喧嘩している獄寺と美琴にツナにそう言うと、イーピンは凄い勢いでこっちに向かって来ると美琴の右足に抱きついた。

「ちよっ!　何でくつつくの!?!」

「イーピンはカウントダウン中はすり寄って来るんだ!」

「お姉様にくつつくなんて、なんて羨ましいことを!　そこは私はそのポジションだというのに!」

「こんな時に何気持ち悪いこと言ってるんだ変態女!」

「へ、変態!?!　それは聞き捨てなりませんわ!　私のお姉様の愛が変態だというんですの!?!　あなたの目は節穴ですの!?!」

「そういうお前の頭がイカれてんだろうが!　この変態バカ女!」

「バカとはなんですの!　バカという方がバカなんですの!」

「ちよっど喧嘩してる場合じゃないよ!」

「そうよ!　早くなんとしなさいよ!」

ツナはイーピンを引つ張りながら、美琴は青筋を浮かべながら喧嘩してる2人に叫んだ。そうしている間にもイーピンの額の筒子ピンズは減っていき、残り2筒となっていた。

「ヤバイ!　もう2筒しかない!」

「黒子！ テレポートでこの子を上空へテレポートさせて！」
「わかりましたの！」

2筒しかないと知ってツナは焦る。美琴は黒子のテレポートでイーピンを上空にテレポートさせるように命じる。黒子は咄嗟にイーピンに触れてテレポートさせた。そしてイーピンが上空にテレポートされるとイーピンの筒子が一筒になる。

そして

ドオオオオオオン！

筒子ピンス時限超爆が発動し大爆発が起こり、公園中に爆発音が響き渡る。

「ほ、本当に爆発しましたわね……」

「あやうく死んでたわ……」

信じていなかった訳ではなかったが黒子は本当に爆発したことに驚きを隠せず、美琴はあのまま黒子がテレポートさせなければ死んでいたということに自覚する。

「間一髪でしたね10代目……」

「うん……」

「あんたたち……本当にこんな生活送ってた訳……？」

「こんなの命がいくつあっても足りませんわ……」

イーピンの爆破を見てツナたちの苦労を知る美琴と黒子であった。

標的（ターゲツト） 132 怒涛の日々3

イーピンの筒子ピンス時限超爆をなんとか回避したツナたちは安堵していた。

「おー。凄い爆発だったな。怪我人はいねえか？」

「っ!?」

ツナたちの後ろの方から白のスーツを身に纏った黒髪の中年の男がいた。すると美琴と黒子の胸に男の手が触れる。いきなり胸を触られて美琴と黒子は顔を真っ赤にする。

「何すんのよ!! / 何するんですの!?!」

「グハツ!」

美琴と黒子は慌てて振り返ると2人は同時に男の顔面におもいきり拳を叩き込むと男はおもいきり吹き飛んだ。

「おーいてて……これだけ元気なら安心したぜ……」

「シャマル!?!」

「何やってんだエロ親父!」

「また沢田さんの知り合いですの!?!」

顔を押しえながらそう言う男を見てツナと獄寺はこの男を見て驚いていた。このセクハラ男がツナの世界の世界の人物だと知って黒子は驚きの声を上げる。

「とかいかいきなり胸を触るなんてどういう神経してんのよ!? 一体、何のよこいつは!?!」

「シャマル。トライデント・シャマルの異名を持つ殺し屋ヒットマンだ」

「このセクハラ親父が!?! 嘘でしょ!?!」

獄寺がシャマルの詳細を話す。いきなりセクハラ行為してきた男が殺し屋ヒットマンだということに美琴を驚きを隠せないでいた。

「シャマルはトライデント・モスキートっていう蚊を使って相手を病死させるんだ」

「怖っ!?! 何よそれ!?!」

シャマルの使うトライデント・モスキートの詳細を獄寺から聞いて

美琴は驚くと同時に恐怖する。

「俺はウイルスを寄せ付けやすい体質でな。666の不治の病にかかってる」

「666の不治の病!？」

「ああ。どうやって生きてるかっていうと対となる2つの病気にかか
ることで症状を緩和してる。そしてその666の病原菌を持ったト
ライデント・モスキートを使って病気を治したり、病死させたりでき
るっていう訳だ」

「す、凄い……」

「じゃあその力を正しく使えば医療に大きく貢献できるんじゃない……」

「嫌なこった。俺は男は診ないんだ」

「は……?？」

「シャマルは男の人を治療しないんだ……俺は特別に治療してもらっ
たことあるんだけど……」

シャマルのトライデント・モスキートの力に感動する2人であった
が、シャマルの言葉を聞いて冷めてしまっていた。ツナはシャマルの
理念を説明した。

「安心しな。お前ら2人は異世界だろうが何だろうとどこへだって治
療しに行つてやるぜ」

「遠慮するわ／遠慮しますわ」

シャマルがかっこよくそう言い放つが、黒子と美琴は即答で断つ
た。

「けっ！ 相変わらず代わり映えのしねえ野郎だぜ」

「わかってねえな隼人。俺がお前の修行をつけた時に言っただろう
が。頭をちよいと捻つてタネと仕掛けを作つちまえば地球上に落と
せない女なんていねえ」

「その前にセクハラ行為をなんとかしやがれ！」

「はっ！ では私の愛がお姉様に通じないのは考えが足りなかったと
いうことですね!？」

「あんたもセクハラ行為をなんとかするのよ！」

（何だろう……黒子はシャマルと似てるし、美琴は獄寺君と似てる

……)

変態のシャマルと黒子。気の強い獄寺と美琴。そして師弟の関係にある獄寺とシャマル。先輩と後輩の関係にある美琴と黒子。ツナはそれぞれが似てると感じていた。

「という訳で2人共！俺と熱い熱いデートしようぜええええ！」

「こ、こつちに来ないで下さいまし！」

「そ、それ以上来たら撃つわよ！」

シャマルは両手を広げて黒子と美琴にキスしようとする。近づいていく。黒子と美琴はシャマルのあまりの気色悪さに後退りしていた。

「ポイズンクッキング！」

「グハッ！」

絶体絶命のピンチにビアンキが現れる。ビアンキはシャマルの顔面にポイズンクッキングを容赦なく叩き込んだ。ポイズンクッキングを叩き込まれたシャマルは地面に倒れてしまった。

「大丈夫？あなたたち？」

「ビアンキ！」

「また沢田さんの世界の方ですよ！」

ビアンキが現れたことにツナは驚き、黒子はまたツナの世界の仲間が現れたことに驚きを隠せないでいた。

「あ、姉貴……」

「ちよっ!? あんた大丈夫!？」

「しまったー！」

獄寺はビアンキを見た瞬間、顔を青ざめる倒れてしまう。急に獄寺が倒れた為、美琴は驚きを隠せず、ツナは慌ててしまう。

「あら隼人ってば。暑さで倒れちゃったのかしら」

「いやー。どう考えてもそうじゃないでしょ!？」

倒れている獄寺にビアンキそう言うと、美琴はツツコミをいれる。「とうかあれは何ですよ!？ どう考えても危険物にしか見えないのですが!？」

「ビアンキは作った料理が毒料理……ポイズンクッキングになる才能を持った殺し屋なんだ……」

「また殺し屋!? ヒットマン つーか作った料理がポイズンクッキングになるって
どんな才能よ!?」

「大切なのは才能じゃないわ……愛よ!」

「知らないわよ!」

ビアンキが閉じていた目をカツと開きながらそう言う。聞かれてもいないことをビアンキが勝手に言ってきた為、美琴はツツコミをいれる。

「私は隼人が元気になる料理を作る為に材料を調達して来るわ」

それだけ言い残すとビアンキは材料を調達する為に走り去って行った。

「あつ! 獄寺君! 大丈夫!」

ツナは獄寺が倒れたことを思い出すと倒れている獄寺の方を向いた。

「一体、何があったんですの!? あのビアンキとかいう方が来た途端に倒れましたけど!」

「獄寺君はビアンキを見ると腹痛が起こって倒れちゃうんだよ!」

「はい!」

「獄寺君とビアンキは姉弟なんだけど、獄寺君は幼い頃にビアンキのポイズンクッキングを食べさせられてその恐怖が体に染み付いて……そのせいで獄寺君はビアンキの顔を見ただけで腹痛が起こるようになったんだ……」

「何ですかそれ!? 悲惨過ぎですわ!」

「とうかあんたの仲間は何でこんな変な奴ばかりなのよ!」

獄寺が倒れた原因を聞いて黒子と美琴は驚きの声を上げる。

こうしてまた黒子と美琴はメンタルが削られるのであった。しかし2人はまだ知らなかった。こんなのはまだまだ序の口だということに。

標的（ターゲット） 133 怒涛の日々4

倒れたランボ、イーピン、シヤマルは177支部に運ばれることになつた。

その頃

「ボクシング都市……強きボクサーたちがいる都市と聞いてみたが……」

第7学区にとある広場。そこに常時死ぬ気男。笹川了平は立っていた。相変わらず学園都市の名前を覚えていない上に学園都市の存在意義すら履き違えていた。

「なのに！　なのにボクサーがどこにもいないではないか！」

了平は両手の拳を握り体を少し反らすと空に向かって雄叫びを上げた。周囲の人々はいきなり雄叫びを上げる了平を見て変な目で見たり、コソコソと話していた。完全に不審者扱いである。

そんな時だった

「いい根性してるな。お前」
「む？！」

了平の後ろから誰かが話しかけてきた。後ろを振り向くとそこには白の学ランにハチマキ、そして旭日旗が描かれたTシャツに身を纏い、両腕を組んで仁王立ちしている男がいた。

「極限に誰だ貴様は？」

「俺は削板軍覇だ！」
そぎいたくんは

「俺は並盛高校ボクシング部主将！　笹川了平だ！」

互いに大きな声で自己紹介する削板と了平。どうやら似た者同士らしい。

「並盛高校……聞いたことのない学校だな……まあ細かいことはどうでもいいな！　ササガワ！　俺と勝負しないか？」

「何っ!？」

「俺にはわかるぞササガワ。お前は強者の匂いがする。強者と拳と交えたいんじゃないのか？」

「その通りだ！ 俺の座右の銘は極限だからな！」

「極限……いい根性だぜ。俺も強者と拳を交えたいと思っていたところなんぞな」

「ならばその勝負！ 受けて立つ！」

「よく言った！ ササガワ！」

了平が勝負することを了承すると削板は満面の笑みを浮かべた。

「だがここでは周囲に迷惑がかかる。移動するぞササガワ」

了平と削板は河原へと移動する。

「ここなら誰も巻き込まねえな」

削板がそう言うのと削板の周囲に暴風が吹き荒れる。了平は一切、臆することなくボクシングの構えを取る。

「その構え……ボクシングか！」

「そうだ！ ボクシングは俺の誇りだ！」

「いい根性だぜササガワ！ 気にいったぜ！」

了平の発言を聞いて再び満面の笑みを浮かべると削板も拳を構える。そして両者共に拳を構えたまま膠着状態が続く。

(隙がない……この男かなりのやり手だな……)

(隙がねえ……こいつかなりのやり手だな……)

膠着状態の中、了平も削板も同じことを考えていた。

(このままでは拉致がないな……こうなれば！)

(このままでは拉致がねえな……こうなったら！)

(先手必勝！)

このままでは膠着状態が続くだけで何の意味のないと判断した了平と削板は同時に飛び出した。そして互いに拳を繰り出した。

「グハツ!?!」

放たれた拳は互いの頬にモロに直撃した。だが了平と削板は笑っていた。

「極限にいい拳だぞ削板……」

「根性の入ったいい拳だぜササガワ……」

拳をモロに喰らっていた了平と笹川はそのまま同時に飛び引いた。

「そんなものではないだろう削板!」

「勿論だぜササガワ!」

そう言うのと了平と削板は満面の笑みを浮かべながら再び同時に飛び出して行く。

「極限太陽!」

「すごいパアアンチ!」

今度は了平の拳と削板の拳が正面からぶつかり合う。ぶつかり合ったことで暴風が発生し地面と川が抉れ、大気が震える。

「ぐっ!?!」

そして互いの攻撃の余波によって2人は吹き飛ばされた。

(俺の極限太陽を正面から……)

(俺のパンチを正面から受け止めやがった……)

了平と削板は信じられないでいた。自分の拳を真正面から受け止めたということが。

「正直、使うつもりはなかったんだがな。だがお前になら使っても問題あるまい」

「何?」

「我流!」

了平は自分のボンゴレギアである晴のバツクルから相棒であるカンガルーの我流を出した。

「カ、カンガルー!?!」

「我流！・カンビオ・フォルマ形態変化！」

了平がそう言うのと我流が光輝くと形態を変化させていく。すると上半身の服は破れ両腕にボクシングのグローブを装着され、足には鎧のような者が装着されていた。この状態になると了平は晴の活性によって身体能力が何倍にも向上するのである。

「もう出し惜しみはせん！ お前も全力で来い削板！」

「すげえ根性だぜササガワ……色々とツツコミたいところはあるが今はどうでもいい！ 俺も全力でいかせてもらおうぜ！」

カンビオ・フォルマ

形態変化した了平を見て削板は満面の笑みを浮かべる。そして右手を強く握り締め、左手で右手の手首を握った。

「うおおおおお！」

削板が叫び声を上げると削板の立っている地面から数メートルに渡ってクレーターができる。了平に触発されたことで削板も本気になったようである。

「極限!!」

「根性!!」

そして常人では捕らえきれない速さで了平と削板は戦い始めた。2人が攻撃する度に攻撃の余波で地面と川が抉れ、大気は震えていく。だが2人は嬉々とした表情を一切崩すことなく拳を振るっていた。

「はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

殴り合いを始めて20分。その間、一切休むことなく了平と削板は拳を繰り出していった。2人の体はすでにボロボロ。しかし嬉々とした表情は崩れてはいなかった。

「驚いたぜ……ここまでやるとはな……」

「貴様こそ……」

「もつと拳を交えたいとこだが……お互い満身創痍……どうだ？ 次の一撃で決めるってのは……？」

「望むところだ……丁度フルチャージになったところだから……」

「フルチャージ？」

削板は了平の言うフルチャージというのがどうということなのか
からず疑問符を浮かべる。

「このボンゴレギアは敵の攻撃を喰らえば喰らう程、左腕のバツクル
に炎が灯り炎エネルギーをチャージする。10個の炎が灯った時、フル
チャージとなる。つまり今の俺は最強の一撃を放つことができる
！」

「最強の一撃……面白え」

最強の一撃という単語を聞いて削板は武者震いが止まらない状態
であった。すると削板は再び拳を構える。

(この1撃に全てを込める！)

もう両者に超高速で動けるだけの余力は残っていないかった。それ
でも両者共、真っ直ぐ走って行く。

「^{マキシマム}極限サンシャインカウンター!!」

「ハイパーエキセントリックウルトラグレートギガエクストリーム
もっかいハイパーすごいパーンチ!!」

了平の全力の一撃と削板の全力の一撃が真正面からぶつかり合う。

「おおおおおおお!!」

大地は抉れ、大気は震え、周囲の道路は抉れ、2人の周囲に巨大な
竜巻が発生する。竜巻の影響でゴミや砂利、川の水が雨のように降り
注ぐ。そして爆発が起こり爆風によって土煙が発生し2人を包んで
いく。

「はあ……はあ……極限にいい勝負だったぞ……削板……」

「はあ……はあ……根性が入ったいい勝負だったぞ……ササガワ
……」

2人の攻撃の余波が収まり土煙が晴れると、そこには大の字になっ
ている了平と削板が満足そうな笑みを浮かべながら倒れていた。

「こないいい勝負をしたのは勝負をしたのは沢田以来だ……」

「沢田？」

「俺が戦った相手の中で一番強い男だ」

「へえ……お前がそこまで言うなんてな。根性のある男なんだろう
な」

了平がツナのことを語る。ツナのことを聞いて削板はツナに興味を抱いていた。

「俺はそろそろ行くぜ。楽しかったぜササガワ。機会があったらまた戦おうぜ」

「おうー！」

削板が立ち上がると了平も同じく立ち上がると互いに拳を突き出すと両者共に拳と拳を合わせる。そして削板は歩いてその場から去って行く。

「極限に悪くない試合だったな……」

「通報があったのはこの辺りですわ！」

「つて！ お兄さん!？」

「おつ！ 沢田ではないか！」

「またあんたの世界の奴なの!？」

黒子のテレポートでツナと美琴がやって来る。まさか了平がいるとは思ってもいなかった為、ツナは驚きの声を上げ、またツナの世界の仲間の仕業だと知って美琴は驚きの声を上げる。

「あ、あの……まさか……あなたがこれを……?」

「なに。極限に根性のある男と拳を交えただけだ」

「どう拳を交えたらこんなになりますの!？」

「どうか何をどうやったらこんなになるのよ……」

拳を交えただけと了平は言うも、周囲はボロボロになっていた。黒子はちよつと手合わせした程度に言う了平にツツコミをいれる。美琴は周囲のあまりの被害を驚きを隠せないでいた。

「しかし……」

「何ですの?」

「俺としたことが戦いに夢中になるあまりボクシング部に勧誘するのを忘れていた！ あのパンチは我が部に欲しかったー！」

「知りませんわ！」

(学園都市に来ててもやってることは全然変わってねえ！)

学園都市に来てもおボクシングのことを忘れない了平を見て相変わらず変わらないことをツナは自覚する。

「まあいい！ お前ら！ ボクシング部に入らんか!?」

「何でそうなのよ!?」

「何を言う！ このボクシング都市は世界中からボクサーを集めているというではないか！」

「学園都市よ！ 馬鹿じゃないのあんた！」

「それに学園都市は能力者を育成する機関ですわ！」

学園都市の名前と存在意義を間違えている了平に美琴と了平にツッコミをいれる。

「知らん！ それよりもボクシング部に入れ！」

「入らないわよ！」

「あなたはボクシングのことにしか頭がないんですか！」

「ない！」

どこまでも馬鹿一直線の了平に振り回される美琴と黒子。こうしてまたメンタルが削られる美琴と黒子であった。

標的（ターゲツト） 134 怒涛の日々5

その後、了平も支部へと送られて行く。ツナたちは街中にある自動販売機にて飲み物を買って飲んでいく。

「だ、大丈夫……？ 2人共……？」

「大丈夫に見えると思う……？」

「沢田さん……あなたの方の方にまともな方はいらつしやいませんか……？」

ツナは2人を心配する。美琴と黒子の精神は削れまくっており、疲弊しまくっていた。

その時だった、

「学園都市到着記念ですぞ！」

「まーねまーね！ ピースピース！」

細長い中年のおじさんとヘッドフォンした小さな男と、ロリータファッションに身を纏った女性が、パンク系ファッション赤い髪の青年を胴上げしていた。

「何でこんな街の真ん中で胴上げしてんのよ……？」

「まあ別に悪いことしている訳ではありませんし……放っておいて構いませんわね……」

（あ、あれは……!?）

自分たちのいる少し先にいる妙な連中を見て怪しんでいた美琴と黒子であったが、特に事件性がある訳でもないので放っておくことにした。だがツナはあの連中に見覚えがあった。

「ん？ あー！ 沢田ちゃんじゃん！」

「何!? ボンゴレですと!？」

「やっぱりあんたの世界の奴か!？」

「何でこういつもいつも……」

赤い髪の青年と中年のおじさんがツナの存在に気づいた。またツナの世界の仲間と知って叫び、黒子はうんざりしていた。

「どうもどうもー。トマゾファミリーの8代目ボスの内藤ロンシャンです。ピースピース」

(もうこの時点で……)

(変人確定ですわね……)

笑顔でピースしながら躊躇うことなく自分がマファイアのボスだということ公言してる時点でロンシャンが変人であることを美琴と黒子は確信する。

「でこのおっさんはマングスタ。ヘッドフォンしてるのはルンガ。それでこっちの女の子パンテラ。俺のファミリーだけど全員、イカれちゃってるからさー!」

「は、はあ……」

「そう……」

「ちよつとちよつとー。テンション低くなーい? テンション上げていこうよー!」

ロンシャンは自分のファミリーの自己紹介する。だが精神が削れている黒子と美琴のテンションは低かった。2人のあまりのテンションの低さを見て元気を上げていこうと言うも2人のテンションが上がることはなかった。

「いやー久しぶりだね沢田ちゃん。継承式の時以来だよー!」

「そうだね」

「継承式?」

「沢田ちゃんがボンゴレ10代目になる為の式だよ! まあ式は敵の襲撃のせいで中止にさせられちゃったんだけど!」

「な、何ですよ!? あんたボンゴレを継ぐ気はないって言ってたじゃないー!」

「ああ……それには事情があるっていうか……話せば長くなるんだけど……」

ボンゴレを継ぐ気がないと言っていたのにボンゴレを継ぐ為の継承式にツナが参加したことに美琴は驚きを隠せなかった。継承式は山本を瀕死の重症に負わせた犯人を誘き寄せる為にツナが9代目に開催してもらったものであり、山本の件がなければツナは継承式を

開催してもらうつもりはなかった。

「というか何でロンシャンたちがここに？」

「ボンゴレから異世界転送装着が送られて来たのですぞ。継承式の招待状といい、全く敵に塩を送るなど何を考えているのやら……」

「敵？ どういうことですか？」

「ボンゴレファミリーとトマゾファミリーはマフィア創成期においてお互いの2代目と殺し合い演じている。つまり我々トマゾとボンゴレは敵対関係にあるのですぞ」

「敵対してるんですの!？」

マングスタがボンゴレファミリーとトマゾファミリーの関係について説明する。凄く仲良さそうにしてくるのにまさか敵同士だと知って黒子は驚きの声を上げていた。

「ま。そんな細かいことはどうでもいいんだよ！ なんせ俺と沢田ちゃんは親友なんだし」

「いや！ 親友のとか以前に中2の途中から学校サボってたじゃん！」

「しようがないじゃん。彼女とのデートの方が大事だったんだし」

（う、嘘でしょ……こんな奴に彼女……!?!）

（信じられませんわ……）

こんな変人であるロンシャンに彼女がいるということを美琴と黒子は信じられなかった。

「あっ！ 最近、新しい彼女ができてさー」

ロンシャンはスマホを取り出すと、写真のアプリを開いた。そして画面をツナたちに見せた。そこにはロンシャンと、スーパーのレジのおばさんとの写真のツーショットが写っていた。

「どう？ どう？ 新しい彼女のれみっぴー！ 可愛いでしょー！」

「そ、そうね……」

「ハハハ……」

（相変わらず女性の趣味、変わってねえー!）

まさか彼女がこんなおばさんだとは思ってもみなかった為、美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。しかし人の好みを否定することはで

きない為、2人は苦笑いしながらロンシヤンの言葉を肯定した。ツナは相変わらずロンシヤンの美的感覚が変わっていないことを改めて自覚した。

「他にも歴代の彼女の写真があるよー!」

ロンシヤンはさらに画面をスライドさせていく。だがどの写真もお世辞にも綺麗と言える人はおらず、それどころか本当にこの世の間とは思えない程の人もいた。

(全員、同じような人種ばかり……)

(どういう神経してきますの……?)

ロンシヤンのあまりの美的センスに美琴と黒子についてはいくことができなかった。

(つーかあいつらは一体何なの……? 何でさつきから一言も喋んないのよ……?)

美琴は出会ってから一言も喋らないパンテラとルンガが気になっていった。

「あーパンテラは無口でさ。照れ屋なんだ……よつと!」

美琴の考えていることに気づいたロンシヤンはパンテラのことを説明する。するとパンテラは無言のままロンシヤンに風車を投げていく。ロンシヤンは紙一重で躲していく。

「もう照れ隠しが激しいなー。パンテラはー」

「いや! どう考えても違うでしょ! 気づきなさいよ!」

「明らかに殺しにきてますわよ!」

(今だに命狙われてんの!?)

次々と飛んで来る風車を笑いながら躲していくロンシヤン。しかし絶対にこれが照れ隠しではなく明らかに殺しにかかっているものだということに美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。ツナは相変わらずパンテラに命を狙われていると知って驚いていた。

「仲間じゃないんですの!」

「なななな何もないよ! こっちの事情に首を突っ込まないで頂こう!」

「何があつたのよ! / 何があつたんですの!」

体を震わせながらそう言うマングスタに美琴と黒子はツツコミを
いれる。

「それでルンガは富士の樹海に年に一度しか咲かない花を渡した人に
しか心を開かないから」

「何でよ!」

「意味がわかりませんわ!」

ロンシヤンはパンテラの風車を躲しながらルンガが話さない理
由を説明する。あまりにも特殊な理由だった為、美琴と黒子はツツコ
ミをいれた。

その時だった、

「誰か! ひったくりよ!」

「どけー!」

ひったくり犯がナイフを持ちながらツナたちの方へ向かって来た。
ひったくり犯と聞いてその場にいた者たち

緊張が走る。

が、

「まあまあ。落ち着いて。ピースピース」

「な、何だてめえは!」

「ちよっ!? あんた何やってんのよ!」

ひったくり犯に向かってロンシヤンがピースしながら近づいて
行った。ロンシヤンの行動にひったくり犯は戸惑い、美琴は驚きを隠
せないでいた。

「大丈夫だって。俺ん家、内乱がよくあるからさ。これくらい慣れて
るから。だから俺に任せとけて」

「いや! どんな家ですの!」

(そうだった……ロンシヤンの家って内乱がよく起きるんだった
……)

笑顔でとんでもない発言をするロンシヤンに黒子がツツコミをい
れる。ツナはロンシヤンの家に遊びに行った時のことを思い出して
いた。ロンシヤンの家の庭でガチの内乱が起きていたことを。

「何があつたか知らないけどさ。一旦、落ち着こうよ。ほらピース

「嘆き弾に撃たれた人は一回死んで、嘆きながら甦るんだ……」

「どんな弾よ!」

「何で嘆きながら甦るんですの!?!」

ツナから嘆き弾の詳細を聞いて美琴と黒子はツツコミをいれる。

「気づいてるよ……俺ってばみんなから嫌われてるって……テンションがうざいとかがソコソコ言われてるし……でもこんな俺にも親友はいてさ……何でも話せる最高の理解者だった……でも3年前にそんなポチも散歩中に他界……」

「い、犬……」

「何もしてないのに……罪悪感を感じますわ……」

ロンシヤンの話を聞いて美琴と黒子は複雑な気持ちになってしまった。

「な、なんか……お前の話を聞いたら……自分が幸福な人間だって気づいたわ……自首するわ……」

「「ええええええええ!?!」」

ロンシヤンの話を聞いてひったくり犯は自首することを決めた。まさかひったくり犯が自首するとは思ってもみなかった為、美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。ロンシヤンの活躍によってひったくり事件は無事解決した。

「じゃあ、いつものいきますか」

マンガスタがそう言うと言とマンガスタ、ルンガ、パンテラはロンシヤンを胴上げし始める。

「ひったくり犯検挙記念ですぞ!」

「ピースピース」

「何でいちいち胴上げすんのよ!」

「その前に服を着て下さいの!」

こうしてまた美琴と黒子のメンタルが削れるのであった。

標的（ターゲツト） 135 怒涛の日々6

内藤ロンシヤンがいなくなった後にも問題はさらに続いた。

「ねえねえ！ その彼女！ 俺とお茶でもしない？」

「ジュリー貴様！ 性懲りもなく！」

帽子と眼鏡をかけた青年が女の子をナンパしていた。それを見て黒髪の長身の女性が怒っていた。この2人はシモンファミリーの加藤ジュリーと鈴木アーデルハイトである。

「お、怒んなくなってアーデル！ 嫉妬すんのはわかるけどさ！」

「誰が嫉妬などするか！」

アーデルが登場してジュリーは体を慌てて弁明するが逆にアーデルを怒らせてしまった。その間にジュリーにナンパされた女の子は逃げてしまう。

「あつ！ ちよつと待って！ まだ話は！」

「ジュリー貴様！ 反省が足りないようだな！ 今すぐここで貴様を粛清する！」

「ちよつ！ 待ってて！ アーデル！」

逃げた女の子の方に手を伸ばしながらそう言うジュリーにアーデルは再び怒りを爆発させる。

「あそこです！」

「加藤ジュリーにアーデルハイト!?」

「おつ！ ボンゴレじゃん！」

「もうつつこまないわよ……」

「私もですわ……」

先程ジュリーがナンパされた女の子がツナたちと共にやって来る。ツナはまた知り合いだったことに驚いていた。美琴と黒子はもうツツコミをいれる気力もなかった。

「おつ！ 誰だよ！ その可愛い子ちゃんたち！ 紹介してくれよボ

ンゴレ！」

「ひっ!?!」

黒子と美琴を一目見た途端、ジュリーは紹介してくれと頼み込む。2人はジュリーの発言を聞いてシャマルのことを思い出したのか恐怖していた。

「ダイヤモンドキャツスル!!」

「うぎやー！ー！ー!!」

「なっ!?!」

自分を無視してナンパを続けようとするジュリーに、アーデルは大地の7属性の1つ、氷河の炎の使つて巨大な氷の城を作つてジュリーを城の中に閉じ込めた。アーデルのあまりの力にナンパされた女性は慌ててその場から逃げ出し、美琴と黒子は驚きを隠せないでいた。「うちのジュリーが風紀を乱してすまない……後できつく言つておく」

「いや！ あなたが一番、風紀を乱していますの！ 早く溶かして下さいー!」

さらにトラブルは続く

「あらあなたたちも来たの」

「た、助けて……」

「こ、こんなところで……料理……しないで……下さいまし……」

ピアノキが広場で炊き出しを行っていた。しかしピアノキのポイズンクッキングの匂いを嗅いだ人たちや動物たちは地面に倒れ瀕死状態になっていた。黒子はハンカチで手を押さえながらポイズンクッキングの匂いを緩和し注意するも、志半ばで倒れてしまった。

さらにさらにトラブルは続く

「これがこうなって……凄いな学園都市は……ウチの知らない技術ばかりだ……」

「スパナ！」

「バラさないでしないで下さいまし！」

ツナがXイBクUスRバNパEナRイを安定して撃てるようにコンタクトレンズとヘッドフォンを作ったメカニック、スパナが街に配備されている警備ロボをバラしていた。警備ロボをバラバラに分解するスパナに注意するもスパナは作業を止めなかった。というよりも未知の技術にワクワクし過ぎて黒子の声が聞こえない程、集中していると云った方が正しい。

「この技術を使えばボンゴレを倒すモスカが作れる」

「スパナ!？」

「何、物騒な物を作ろうとしてるのよ！」

そしてスパナの件を終えたツナたち

「もう嫌ですわ……せつかく学生誘拐事件が解決して学園都市に平和が戻ったというのに……」

「私も頭が痛くなってきたわ……」

「なんか……ごめん……黒子……」

心が折れかかっている黒子と美琴を見てツナは申し訳ない気持ちになっていた。今までも色々な事件を解決していたがツナたちの世界の仲間が起こした事件は今まで解決してきた事件とは格が違い、事件の起こした人物が全員、一癖も二癖もある人たち。風紀委員ジャッジメントであることに誇りを持っている黒子の心でさえ折るものだった。そして両者共に叫び過ぎて喉は痛くなり、頭痛が発生し精神は削れまくっていた。

「なんか……沢田さんが強い理由がわかった気がしましたわ……」

「あんな生活を毎日、送ってたら強くなるわよ……ていうかよく身が持つわねあんた……」

「いや……リボーンが来てから毎日あんな感じだからさ……多少は慣れてるっていうか……ハハハ……」

黒子と美琴はツナがあんなにも強いのはリボーンが鍛えたからというだけでなく、普段からあんな日常を送っているからというのも関係しているということを理解する。2人の言葉を聞いてツナは苦笑いを浮かべ、今までの日常を思い浮かべながらそう答えた。すると黒子の携帯に着信が入る。

『白井さん！ 大変です！ 大事件です！ 至急、向かって下さい！』

支部にいる初春から連絡が入る。その時、黒子と美琴は知らなかつた。この事件が今までツナたちの仲間が起こした事件よりも遥かに大きな事件だということを。

標的（ターゲット） 136 怒涛の日々7

初春から事件だと連絡が入る。

『第7学区の商業施設に亀が出現したそうです！ 至急、現場に向かつて下さい！』

「それがどうしたと言うんですの……？ そんなの風紀委員ジャッジメントに連絡せずに動物保護団体に連絡すればいいじゃないの……」

凄い緊急事態が起こったかのように初春は話すがたかが亀が出現しただけだった為、黒子は呆れてしまっていた。

『違うんです！ もの凄い巨大な亀なんです！ 商業ビルを食べてるらしいです！』

「な、何を言ってますの!? SF映画じゃあるまいし！ そんなこと……」

黒子は初春の話を信じられないでいた。がありえない事態を何度も経験した黒子は途中で思考が止まり、ツナの方を向いた。

「沢田さん……商業ビルを食べる巨大な亀が出現したそうなのですが……心当たりは……？」

「ごめん……めっちゃくちゃある……」

「ビルを食べる巨大な亀って……どうやったらそんなのが現れんのかな……」

黒子が恐る恐るツナに尋ねると、ツナは申し訳なさそうな顔をしながらそう答えた。美琴はどうやったら巨大な亀が現れるのかわからず驚いていた。

一方、事件が起きた場所では

「さ、最悪だ……やっちゃまった……」

デイーノが巨大化したエンツイオを見て顔を真っ青にしていた。通報にあつた巨大な亀とはデイーノのペットでありエンツイオのこどだったのである。なぜこうなったのかと言うと、デイーノが転んだ拍子にエンツイオが懐から飛び出した。そしてエンツイオが近くにあつた噴水の中に浸かつてしまい事件に発展してしまったのである。周囲にいた人たちエンツイオを見て逃げていた。

「デイーノさん！」

「ツナ！」

「さ、沢田さん……!?!」

「ほ、本当に巨大な亀だわ……」

「もう勘弁して欲しいですわ……」

黒子のテレポートでツナたちがやって来る。ツナの姿を見てデイーノは驚き、婚後は顔を赤らめていた。美琴と黒子は本当に巨大な亀が存在したことに驚きを隠せないでいた。

「やっぱりエンツイオだったんだ……」

「エンツイオって……あの亀のこと？」

「うん。エンツイオはスポンジスツポンで、水に浸かると巨大化するんだ。だから乾かせば元に戻るよ」

「それはわかったけど……まずあのエンツイオの身動きを封じないとどうにもならないわよ……」

ツナの説明を聞いてエンツイオの性質を理解した美琴であつたが、今のエンツイオをどうにかしないとどうにもならないことを理解する。

「この事態は俺が引き起こしたんだ。ペットの問題は飼い主が解決しねえとな」

そう言うとデイーノは鞭を構える。そしてデイーノはエンツイオの足元に鞭を放つた。

が、

「や、やべえ！ 絡まった！」

「こんな時に何してんのよ!？」

「どうやったらそうなりますの!？」

鞭はディーノの全身に絡みつきそのまま地面に倒れてしまう。そんなディーノを見て美琴と黒子はツツコミを入れると同時にディーノの体に絡みついた鞭を解こうとしていた。

「はっ！ ディーノさん！ 部下の人は!？」

「ロマーリオたちならいねえぜ。今日はここに1人で来たからな……」

「さ、最悪だ……」

「な、何が最悪ですの……?？」

「ディーノさんは部下の人がいないと運動神経が極端に下がって力が発揮できない体質なんだよ……」

「どんな体質よ！ どんな体質ですの!？」

ツナがディーノの体質について説明する。ディーノの体質を知って黒子と美琴はツツコミをいれる。そうしてる間にもエンツイオはビルを食べていた。ツナたちがどうすればいいか迷っていた。その時だった。

「エ、エンツイオが……!？」

するとエンツイオの動きが止まる。するとエンツイオの体が徐々に傾いていく。

「ま、まずいですわ!？」

「あんなのが倒れたらとんでもない被害になるわ!？」

ゆっくりと倒れていくエンツイオを見て、黒子と美琴は焦ってしま
う。

「「え……!?!」」

だがエンツイオは倒れることはなかった。それどころかエンツイオは地面から離れて空中に浮いていた。

「助っ人登場」

「大丈夫、ツナ君?？」

「山本！ 炎真！」

「あいつ……沢田と同じ……!?!」

声のする方を振り返るとそこには山本と超ハイパー死ぬ気モードとなった炎真がいた。山本の自身の匣ボックスアニマル。雨ローンデイン・デイ・ビオッチャの燕の小次郎を使つて雨の炎を降らせてエンツイオの動きを止め、炎真の炎の大地の炎の重力操作によつてエンツイオを浮かせたのである。美琴はツナと似ている力を使っている炎真を見て驚きを隠せないでいた。

「このまま日の光で乾かすから」

「もう大丈夫だぜ」

「わ、悪いお前ら……助かったぜ……」

「やっと……やっとまともな方が……」

「黒子!?!」

炎真と山本がそう告げるとディーノは2人にお礼を言った。ここに来てようやくまともな人間が来たことで黒子は涙を流していた。こうして事件は解決した。

と思われたが

「ギャハハ！ ランボさん復活！ 殺し屋ごっこ始めるんだもんね！」

「ランボダメ！」

「初春ちゃん！ 俺とデートしよう！」

「いいや！ 俺とデートしよう！」

「貴様らそこに直れ！ 私が肅清する！」

「果たすぞ芝生頭！」

「望むところだタコヘッド！」

「新作料理の完成したわ」

「あ、姉貴……!?!」

「やっぱり学園都市の技術は面白い……」

「胴上げいきますぞ！ ロンシャン君！」

「イエーイ！ ピースピース！」

「白井さーん！ 沢田さーん！ なんとかして下さいーい！」

支部に戻るとツナの仲間たちが騒ぎまくっていた。手のつけられ

ないツナの仲間たちに初春は涙を流しながらそう言った。

「もう風紀委員ジャッジメントなんて辞めてやりますわ……」

「白井さん!」

「黒子!」

「なんか悪いな……」

「ごめんね……」

黒子は騒ぎまくっているツナの仲間を見てそう言い放った。黒子の発言を聞いて初春とツナは驚きの声を上げ、ディーノと炎真は謝罪した。

「ハハッ! なんかみんな仲良くなれて何よりだな」

「どこがよー!」

そんな中でも山本は天然を發揮していた。山本の発言を聞いて美琴はツツコミをいれる。

この夜。黒子は悪夢にうなされたという。

おまけ

「ね、ねえ僕?」

「ん?」

フウ太も同じく学園都市に来ていた。街を歩いているとお下げのように後ろで二つに束ねた長い茶髪に、上半身は桃色のサラシを巻いて上にブレザーを羽織り、下は冬服のミニスカートに金属ベルトという露出度の高い格好をしていた女性が話しかけてきた為、フウ太は後ろを振り返った。

「ちよ、ちよつと! わ、私と一緒に! お茶でもどうかしら……!」

「ほ、僕! 用事あるから!」

「あ! ま、待って!」

鼻息を荒くしながらそう言う女性を見て恐怖したのかフウ太は全カダツシユでその場から逃げた。

「わ、私としたことが……しくじったわ……」

女性は地面に四つん這いになってがっかりしていた。

フウ太は元の世界に帰ってから語ったという。変質者に話しかけられたと。

標的（ターゲツト） 137 知らせ

ツナの世界の仲間たちが学園都市にて大暴れした次の日。沢田家。
「な、何これ!？」

佐天が起きて2階から降りて台所に向かうと衝撃の光景があった。そこには机にこれでもかというぐらいの料理がたくさん並べられていたからである。

「ランランラーン♪」

「しかもまだ続けてる!？」

「あー……もしかして……」

さらに驚くべきはこれだけの料理の作って起きながらまだ奈々が鼻歌を歌いながら料理を作り続けていることだった。ツナはなぜ朝から豪華な料理を作り続けているのか理解した。

「あつ！ ツナ！ 涙子ちゃん！ おはよう！」

「お、おはようございます……あの……何かあつたんですか……?」

「そうなのよ！ あの人が……お父さんが帰って来るのよ！」

「え!?! ツナさんのお父さんですが!？」

「やつぱりか……」

ツナの父である家光が帰って来ると知って佐天は驚きの声を上げる。ツナは自分の予想通りだった為、驚きを隠せないでいた。

「涙子ちゃんには話してなかったわね。私たちのお父さんは海外で石油を掘っている泥の男なの。だからあんまり帰って来ないのよ」

（ツナさんのお母さんは知らないんだ……ツナさんのお父さんがボンゴレファミリーのNO.2だって……それもそうか……）

奈々は佐天が夫である家光のこと知らないだろうと思い、佐天に家光のことを説明する。奈々の説明を聞いて佐天は家光がボンゴレ門外顧問のボスであることを知らないことを理解した。

「今日の昼には帰って来るって」

「ここって石油出るんですか!？」

（相変わらず変わってねえ……あの親父……）

そう言うと奈々はエプロンのポケットから絵ハガキを取り出して2人に見せた。ハガキには雪山の写真が写っており、写真の上にもうすぐ帰るというメッセージが手書きで書いてあった。妻である奈々にボンゴレの人間であることを隠しておかないといけなのにあまにもいい加減な誤魔化し方だった為、佐天はツツコミをいれた。ツナは家光が相変わらず変わっていないことを実感した。

場所は変わって風紀委員^{ジャツジメント}177支部

「へー。お父さんが帰って来るんですか」
「それはよかったですわね……」

ツナは支部にて家光が帰って来ると聞いて初春は普通に受け答えし、一方で黒子は顔色を悪くしながらそう答えた。

「だ、大丈夫……？ 黒子……？ 顔色悪いけど……帰った方がいいんじゃない……」

「この程度で根を上げられてなどいませんわ……」

ツナは顔色の悪い黒子を心配する。黒子は昨日はあまりのトラブルメーカーばかりで風紀委員^{ジャツジメント}を辞めてやるなどとまで言った黒子であったが、なんとか思い止まった。昨日、見た悪夢のせいであまり眠れてはいないが。

「沢田さんのお父さんってどんな方なんですか？」

「ええっと……母さんには海外で石油を掘っている泥の男って言うけど、ボンゴレファミリーのNO. 2で……」

「NO. 2!?!」

ツナが家光がボンゴレファミリーのNO. 2だと説明すると初春

と黒子は驚きを隠せないでいた。ボンゴレ門外顧問C E D E Fは普段はボンゴレとは別の組織であるが非常時においてはボスに次ぐ権限を発動できる組織である。ボンゴレのボスを決める際にはボンゴレのボスと門外顧問のボスが決めるのである。

「す、凄いんですね……沢田さんのお父さんって……」

「いやー……ただのダメ親父だよ……それに俺が小さい頃に父さんに何の仕事してるのかって聞いたら世界中で交通整理したって言ったからな……」

「こ、交通整理って……」

「へ、へえー……変わってますのね……」

「後、2年ぶりに帰って来た時の俺への第1声が朝4時に俺の部屋に入ってきて、飯取りに行かないか？ だからね……」

「ダメですわ……なぜか手足の震えが止まりませんの……」

「白井さん!」

「黒子!」

家光のエピソードを聞いて黒子の手足が震えてしまっていた。初春とツナは手足が震えてしまっている黒子を見て驚きの声を上げる。昨日の1件のせいで変わった性格の人がトラウマになってしまい体が拒絶反応を起こしてしまったのである。

「そ、そういうえばみんなは親元から離れてるけど家族には会ってるの?」

「大覇星祭の時に会ってますの」

「大覇星祭?」

「大覇星祭は学園都市の全ての学校が集まり7日間かけて行われる運動会だと思って下さい。普段学園都市に外からの人が入るには手続きを踏まなければならぬのですが、大覇星祭の時は手続きが普段より緩くなりますの」

「成る程……というか運動会を7日間もやるとか学園都市って凄いなだね……」

「学園都市の存在をアピールする為に行われるようなものです。大覇星祭は世界中に中継されますから」

「世界中……凄い……」

7日間も運動会をやるだけでも驚きなのに、世界に向けて発信されると聞いてツナは驚いていた。

「でもよかったー。俺は学校に行っていないから大覇生祭に参加しないでいいし。俺、運動会って嫌いなんだよねー。どうせ出てもビリだし」

運動が苦手であるツナにとって運動会など一番、嫌な競技である。しかし今年のリボンが学校を辞めさせた為、運動会に出なくてもいい。なのでツナは嬉しくてたまらなかった。ツナは死ぬ気状態では運動神経が抜群ではあるものの、ノーマル状態では運動神経が絶望的である為、体育でもいい成績が残せないのである。

(いや……沢田さんが大覇星祭に出たら……)

(どの競技でも1位を取れると思うのですが……)

大覇星祭は普通の運動会とは違い能力の仕様が認められている。死ぬ気の炎は能力ではないが、ツナが死ぬ気の炎を使えば相手が無能力者であろうが超能力者であろうがツナの相手ではない。初春と黒子はツナが仮に大覇星祭に出場すればにぶっち切りで1位になれることを理解していた。

「あつー！俺、パトロール行つて来るから」

ツナは2人にそう告げると支部を出てパトロールに出て行く。

いつものように巡回するツナ

「昨日は大変だったなー……」

ツナは背伸びしながらそう呟いた。昨日は仲間たちが次々にトラ

ブルを起こした為、黒子や美琴程ではないがツナは疲れているのである。

「ん?」

ツナの視界にびよこつとクセツ毛がついている少女が目に入った。少女は地図を持ちながらキョロキョロ辺りを見渡していた。

「迷ってるのかな?」

ツナは少女がおそらく迷っているのだと推測し、少女の方へと歩いていく。

しかしツナはこの時、知らなかった。この少女が意外な人物だということに。

標的（ターゲット） 138 ペンダント

ツナはパトロール中に迷っているだろう少女を見つけた。

「あの。ちよつといいかな？」

ツナは少女に話しかけた。ツナに話しかけられた少女は黙ったままツナの方を向いた。

「間違つてたらごめんね。もしかして迷つてる？」

「は、はい……それと落とし物を捜してるんです……」

「落とし物？」

「はい……今日、第7学区に遊びに来たんですけど大事な物を落としちゃった……けど第7学区は詳しくなくて……」

「だったら俺も探すの手伝うよ」

「え……でもそれは流石に申し訳ないなの……」

ツナは手伝うと言うが、少女は自分の都合に他人の時間を割くのが悪いと思つたのか遠慮してしまつていた。

「大丈夫。俺、風紀委員ジャッジメントの協力者だからさ。だから全然、遠慮しないでいいよ」

「協力者……」

ツナは証明書を出して自分が風紀委員ジャッジメントの協力者だと明かした。証明書を見て少女はツナが風紀委員ジャッジメントの協力者だということを理解する。

「ほ、本当にお願ひしていいんですか？」

「うん。遠慮しないでいいよ」

「じゃ、じゃあお願ひしますなの」

少女がツナに確認を取るとツナは笑顔で心良く了承した。ツナの返答を聞いて少女はお言葉に甘えさせてもらうことにした。

「俺は沢田綱吉。よろしくね」

「春上衿衣はるうえりいです。よろしくお願ひしますなの」

「それで落とし物捜してるって聞いたんだけど。何を落とししたのか聞かせてもらつていい？」

ツナと春上は互いに自己紹介する。自己紹介し終えると先程、言っ

ていた落とし物についてツナは尋ねた。

「ロケットペンダントです」

「ペンダント?」

「はい。昔、施設で一緒にいた友達の写真が入ってる大事な物なんです。探し始めたのはいいけど第7学区の地理に詳しくなくて困ってます……」

「だから地図を見て迷ってたんだね」

「はい……」

春上から経緯を聞いて、ツナはなぜこの第7学区で迷っていたのか理解した。

「事情はわかったよ。とにかく一緒に探そっか。通った場所の特徴とか覚えてる?」

「ええつと……」

ツナが尋ねると春上は記憶の糸を辿りながら自分の通った場所の特徴を伝えた。ツナはなんとか春上の言っていることを理解し春上の行ったであろう場所に向かおうと同時にロケットペンダントを捜す。

「あっ! ……ここ通りましたなの!」

「じゃあここから探してみようか」

ツナに案内された場所に来ると春上はこの場所に覚えがあったようであった。

「聞きたいんだけどペンダントって凄い高価な物だったりする?」

「そんな高価な物じゃないはずです。普通に学生でも買えるぐらいの値段だと思いますなの」

「じゃあ盗難の線はないか……」

ペンダントが高価な物であれば盗難の可能性もあると思い、ツナは春上にペンダントの価値を尋ねた。だがそこまで高価な物ではないとわかってツナは盗難の可能性は低いと判断した。それから2人はしらみ潰しにペンダントを探すがペンダントは一向に見つからなかった。

「見つからないな……」

「手間をかけさせて本当にごめんなさいなの……」

「謝らなくていいよ。これぐらいどうってことないから」

自分の落とし物を探すのに付き合わせたことが申し訳なかったのか、春上はツナに謝った。しかしツナは嫌な顔をせず笑顔でそう言った。

「あつ！ ツナお兄ちゃんだ！ 久しぶり！」

「久しぶりみゆ」

その時、空虚爆破事件クラビトンの被害者であるみゆがやって来た。

「あつ！ 丁度よかった！ ツナお兄ちゃんに渡したいものがあるんだ！」

「渡したいもの？」

「うん！ さつき落とし物拾ったの」

そう言うともみゆは身につけていたポーチの中を探り始めた。するとポーチから何かを出した。

「はい」

「わ、私のペンダントなの！」

「ええ!？」

みうがポーチから取り出したのはペンダントだった。しかも春上が探していたペンダントだった為、春上とツナは驚いていた。

「お姉ちゃんのだったの？ はい」

「あ、ありがとうなの」

春上のペンダントだと知ったみゆはペンダントを春上に渡した。春上はみゆにお礼を言った。ペンダントを渡し終えるとみゆはこの場から走り去って行った。

「一応、中身を確認しといたら？」

「わかりましたなの」

みゆが拾ったのが全く同じペンダントで中身は違う物かもしれないと思ったツナは春上にペンダントの中身を確認するように促す。春上はツナの言いたいことを理解したのかペンダントの中身を確認する。

「大丈夫です。私のペンダントです」

「え……!?!」

写真に写っていたのは茶髪のショートヘアにカチューシャをつけた子供だった。写真を見て春上はちやんと

自分の物だとわかり、ツナはその写真を見た瞬間に驚きのあまりその場で固まってしまっていた。

「絆理……!?!」

「え……!?!」

ペンダントに写っていたのは木山の生徒の1人にして木原幻生の人体実験の被害者、枝先絆理えださきぼんりだった。ツナは木山の生徒のお見舞いにも何度も行っている為、彼女のことを知っていた。春上はなぜツナが友達である絆理のことを知っていることに驚きを隠せないでいた。

標的（ターゲット） 139 感動の再会

「ど、どうして沢田さんが絆理ちゃんのことを……!?!」

「え、えっと……」

ツナは迷ってしまっていた。絆理が人体実験の被害者となったことを言うべきかどうかを。

「もしかして絆理ちゃんがどこにいるか知っていますのかなの……!?!」

「し、知ってるけど……」

春上はツナが絆理の居場所を知っているかもしれないと思ったのか、ツナに絆理の居場所を尋ねた。ツナは口ごもりながらも正直に答えた。

「お、教えてくれませんかの!?! 絆理ちゃんは途中で別の施設に移っちゃって、それからずっと会えていないんです!」

（本気だ……：衿衣は本気で絆理に会いたいたいんだ……）

大人しい春上がここまで必死な様子を見せたのを見てツナは春上は本気で絆理に会いたいのだということを理解する。

「いいよ」

「ほ、本当ですか!?!」

「ただ1つだけ聞いて欲しいことがあるんだ」

「聞いて欲しいこと?」

「うん。衿衣にとっては辛い話になるよ」

そう言うとツナは絆理のことを話す。木原幻生というマッドサイエンステイストが行った人体実験のせいで昏睡状態になったことを。

「ば、絆理ちゃんが……」

「うん。でも今は昏睡状態から目を覚まして、第7学区の病院で治療を受けて元気にしてるよ。それにもうすぐ退院できるから」

「よ、よかった……」

絆理が友達絆理が昏睡状態となったと聞いてショックを受ける春上であった。

しかし今は元気にしていると知って安堵した。

「じゃあ会い行こっか」

「はいー!」

ツナは絆理たちが入院している病院へ春上を案内する。

「あつ! ツナお兄ちゃんだ!」

「本当だ!」

「ツナお兄ちゃん!」

ツナは絆理たちのいる病室の扉を開ける。ツナがやって来たのを見て、絆理たちは嬉しかったのか表情を。ペアつと明るくしていた。

「どうしたんだい? 今日もお見舞いかい?」

そして病室には絆理たちの担任だった木山もいた。

「今日は絆理に会わせたい人がいて連れて来たんです」

「え? 私?」

「うん。入って来ていいよ」

ツナの言葉を聞いて絆理は疑問符を浮かべていた。ツナが廊下に待機させている春上に向かってそう言った。すると絆理と再会に緊張しているのか、春上がおそるおそる入って来た。

「え……!?! 衿衣ちゃん……!?!」

絆理は春上がここにいることに驚きを隠せないでいた。

「な、何でツナお兄ちゃんが衿衣ちゃんと……!?!」

「さつき出会ったんだ。それでペンダントを落としたっていうから一緒に探したんだ。それでペンダントは見つかったんだけど、その中に絆理の写真があったんだ」

この場にいる誰にも話したことのない自分と春上の関係をツナが知り、連れて来たということに。ツナは絆理の疑問に答えた。

「ば、絆理ちゃん……ようやく会えたなの……私……あれからずっと……ずっと……」

「衿衣ちゃん……」

春上はボロボロと涙を流し、声を震わせながら自分の気持ちを話す。春上の言葉を聞いて絆理も同じく涙を流し声を震わせていた。

「絆理ちゃん！」

「衿衣ちゃん！」

春上はベッドにいる絆理の元へと駆け寄る。そしてベッドにいる絆理に抱きついた。2人共、ここが病院だということも忘れて泣きじやくつていた。他の生徒たちも2人の感動の再会に涙していた。

「若いというものは……いいものだな……」

（木山さんめちやくちや泣いてるよ！）

その中でも一番、泣いていたのはなぜか木山だった。一番泣いている木山を見てツナは驚いていた。おそらくずっと昏睡状態になっていた絆理たちが目を覚ました時のことを思い出したのだろう。

（俺は帰った方がいいかな……）

感動の再会をこれ以上、邪魔してはいけなれないと思い黙ったまま病室を出ることを決める。

「ツナお兄ちゃん」

「沢田さん」

黙って出て行こうとした矢先、絆理と春上はツナを呼び止めた。呼び止められたツナは2人の方を向いた。

「絆理ちゃんと再会させてくれて……」

「衿衣ちゃんと再会させてくれて……」

「ありがとうございます／＼ありがとうございます」

2人は再会するきっかけを作ってくれたツナにお礼を言った。ツナは気にしないでいいと言おうと思ったが、何も言わず笑顔で2人のことを見守った後、病室の扉を開けて出て行く。

「ふう……まさかこんなことになるなんて思ってたな……」

ツナは廊下の天井を見ながら呟いた。まさかこんなドラマみたいな展開が起き、自分がそのきっかけを作ることになるとは思っていなかった。その為、少しだけツナは疲れていた。

「再会か……」

絆理と春上が再会した姿を見て、ツナは今日帰って来る家光のことが脳裏に浮かんでいた。家光と最後に直接、会ったのは虹の代理戦争の時。それから家光とは1度も会っていない。

「つて……感動も何もないか……」

絆理と春上は感動の再会に涙していたが。しかしツナは家光と再会したところなのであの2人のように涙が出ることはない。ツナは家光のことが嫌いな訳ではないが苦手意識がある為、むしろ家光と会うのはどちらかと嫌な方である。

「父さん佐天に変なことを言わなきゃいいけど……」

家光が佐天を困らせるのではないかと心配するツナであったが、ジャック風紀委員の仕事が終わるまではどうすることもできないので諦めて、パトロールに戻ることにした。

一方、ツナの世界。

「やつと着いたな」

空港にプライベートジェットが止まり、そこからオレンジのツナギを身に纏い、黄色いヘルメットを被った金髪の男が降りて来た。この男こそツナの父親でありボンゴレ門外顧問C H D E Fのボス、沢田家光である。

「久しぶりに愛する奈々の手料理がが食えるぜ。待ってるよ奈々」

緩みまくった表情かおでそう言うと家光は沢田家へと向かって行くのだった。

標的（ターゲツト） 140 父親

時刻は昼になる。

「はあ……はあ……」

いつものように修行していた佐天は肩で息をしていた。現在、リボーンが考案した修行の1つを行っていた。修行内容は超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態で

手首と足首に重りをつけた状態で死ぬ気の炎を使わずに崖を登るといふものだった。超^{ハイパー}死ぬ気モードの負荷に耐えられる体を作りつつ、常に超^{ハイパー}死ぬ気モードの負荷のかかった状態で修行をすること^{ハイパー}で超^{ハイパー}死ぬ気モードの負荷に慣れるようにするのがこの修行の目的である。

「よし。午前の部はこれで終わりだぞ」

「ふう……」

リボーンがそう言うのと佐天の額の炎が消え、黄色くなった瞳が元の黒に戻り、X^{イクス}グロブが310と書かれた手袋へと戻っていき超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いた。

「だいぶ慣れてきたみてえだな」

「うん……」

シエンツとの戦いを終えてから修行はさらに過酷なものになっていった。修行内容は主にリボーンの考案した修行、様々な人とのスパークリング、そしてリボーン以外の人物からの修行も受けている。だが佐天は弱音も泣き言も吐かず修行に取り組んでいた。

「もう家光は帰ってるだろうし、今日はツナン家で昼飯だな。挨拶しといた方がいいだろうしな」

「うん」

「それにツナの妻になる女だって紹介しとかねえといけねえしな」

「それはいいよ!!」

ニヤニヤしながらそう言うリボーンに佐天は顔を真っ赤にしながら否定した。

沢田家

「多っ!？」

ツナの家に戻ると庭に大量のツナギが物干し竿に干されていた。大量に干されているツナギを見た佐天は驚きの声を上げた。

「お？ 帰ったか」

「ちやおつす。家光」

(この人がツナさんのお父さん……)

庭の扉から缶ビールを片手に家光が挨拶してくる。リボーンは軽く挨拶し、佐天はツナの記憶で家光のことを知っていたがこの人がツナの父親だとは思っていたなかつた為、少しだけ驚いていた。

「君が異世界から来たっていう……涙子ちゃんでよかつたかな？」

「は、はい！ 佐天涙子です！ いつもバジルさんにはお世話になってます！」

「おう。俺は沢田家光だ。よろしくな」

家光は9代目から佐天のことを聞いていたのか佐天のことを知っていた。前にバジルは家光の部下だと聞いていた為、自己紹介すると共に自分の修行にバジルを付き合わせてもらっていることに関してお礼を言った。自己紹介を終えると佐天とリボーンはとりあえず家の中に入る。

「ママンはどうした？」

「奈々なら買い物に行ったぞ。俺が冷蔵庫の食料を全部、食っちゃったからな。悪いな涙子ちゃん」

「い、いえ！ 気にしないで下さい！」

昼ご飯を食べる為に戻って来たのに自分が全部、食べてしまったことを謝る。佐天はまだ緊張しているのか挙動不審になっていた。

「せっかくだ。ママンが帰って来るまで話してたらどうだ？ お前はいずれツナの妻になる女なんだ。家光と良好な関係を築いておくのも悪くねえだろ」

「リ、リボーン君!!」

「ほう。涙子ちゃんがツナにねえ……」

リボーンという言葉聞いて佐天は顔を真っ赤にし、家光は佐天がツナに好意を抱いていると知ってニヤニヤしていた。

「けどツナの奴。佐天の気持ちに全然、気づいてねえんだ」

「かー！ 我が子ながら情けねえな。こんな可愛い子に好かれてるつてのに……全く誰に似たんだか……」

リボーンからツナと佐天の進展から聞いて、自分の息子の鈍感さに幻滅してしまっていた。

「安心しな涙子ちゃん。俺は涙子ちゃんにならツナを任せてもいいと思ってる。あんな息子だけどよろしく頼むよ」

「い、いや!! 私とツナさんはまだ付き合ってますんから!!」

「まだってことは結婚願望がない訳じゃないってことか」

「え……!?!? そ、そりゃ……ないって言ったら嘘になりませんけど……!?!?」

家光の言葉を聞いて、佐天は顔を真っ赤にしながらツナと自分が結婚した姿を想像していた。

「んじや俺はこの辺りで失礼するぞ」

そう言うとりボーンは佐天と家光が2人で話せる環境を作る為にリビングから出て行った。

「そーいや涙子ちゃんは何歳なんだい？」

「12歳です。中学1年です」

「中学生かー。算数だっけ？ あれ笑っちゃうよなー」

（何で笑うの!?!? というか中学校は算数じゃなくて数学なんですけど!?!?）

「後、生活だっけ？ あれは大変だよなー」

(生活って……)

小学校低学年までしか言わない生活と聞いて、佐天は驚くと同時に少し懐かしさを感じていた。そして家光が変わった人であるということを理解する。

「あ、あの……聞きたいことがあるんですけど……」
「ん？」

「奈々さんとは……その……どういう出会いだったんですか？」

佐天は気になっていたことを尋ねた。それと今後の参考も兼ねて。「奈々との出会いは喫茶店でな。奈々はデパートの喫茶店で働いていた。奈々はまさしく天使でな。一目惚れしちゃったんだよな」
「そ、そうなんですか……」

緩みまくった表情かおをしながら家光は奈々との出会いを語る。あまりにもだらしない表情かおをしている家光を見て佐天は若干、引いてしまっていた。

「それから俺は奈々のいる喫茶店に毎日通った。奈々に会う為だけに。それくらい奈々は輝いて見えたんだ」
「……」

家光は少しだけ口元を緩ませ、天井を見つめながらそう呟いた。佐天は家光の話を聞いて家光が奈々のことを心の底から愛しているのだということを理解する。

「俺は勇気を出してプロポーズした。フラれちゃったけどな」
「ええ!？」

現在、夫婦になっているのにも関わらず、プロポーズした時にフラれてしまったと知って佐天は驚きの声を上げる。

「けどその後、雨に濡れる俺の姿を見て奈々はかっこよく見えたらしくってな。奈々は雨に濡れてる俺に傘をさしてくれてな。そして俺のプロポーズをOKしてくれたんだ」

「わあ!」

家光と奈々のなり初めを聞いて佐天は他人の話であるのにも関わらず、キュンとしていた。

「俺ももつと奈々と一緒にいたんだが、門外顧問の仕事は忙しい上に

俺を怨んでる連中はたくさんいる。だから中々、帰れなくなっとなー」

「やっぱり奈々さんは知らないんですか？」

「まあな。奈々を巻き込む訳にはいかないからな。だから奈々には俺のことは黙っておいて欲しいんだ」

「わかりました」

言われなくてもわかっていたことであるが、佐天は家光の願いを了承した。

「そういや涙子ちゃんは修行してるんだったよな？」

「はい。そうですけど……」

「だったら今日は俺が涙子ちゃんの相手をしてあげよう」

「へっ……!?!」

標的（ターゲツト） 141 試される覚悟

家光の提案により家光が修行相手になることとなった。佐天とりボーンは昼飯を食べた後、並盛山へと向かって行く。

「よーし！ 涙子ちゃん！ いつでも来ていいぞ」

（た、戦いづらいなー……）

家光が笑顔で手を広げながらそう言ったが、佐天は相手がツナの父親である為、非常に戦いづらい相手であった。

「油断すんじゃないぞ。家光はボンゴレのNo. 2であると同時にバジルの主でもあるからな。未来のお義父さんだからって遠慮すんじゃないぞ」

「余計なことはいわなくていいよ!!」

最初の家光の詳細だけでいいのにも関わらず、後半の佐天と家光の関係にまで言うリボーンに佐天はツツコミをいれる。

「それに家光はツナでも勝ったことがない相手だぞ」

「え……!?!」

リボーンは佐天に家光の強さをわかりやすく伝える為にそう答えた。リボーンの言葉を聞いて家光の強さに驚きを隠せないでいた。ツナが家光と戦ったのは虹の代理戦争で2回だけ。1回目は敗北。2回目は決着がつかなかった。

（ま。今じゃあわかんねえだろうがな）

しかしリボーンは最後にツナが家光と戦った時に一晚経てばもしかしたら家光に勝てるかと推測していた。虹の代理戦争から2年が経過した今のツナなら勝るとリボーンは思っていた。

「んじゃ。始めるぞ」

ズガアン!

リボーンは佐天を超死ぬ気モードにする為の特殊弾、恋慕弾を佐天の額に打ち込んだ。恋慕弾は打ち込まれた佐天は地面に仰向けの状態で倒れるがすぐに起き上がる。そして佐天の額に晴の炎が灯り、

瞳の色は黄色に変化し、310と書かれた手袋がXグローブへと変化していく。

「バジルから聞いていたが本当に初代と同じグローブを……」

佐天のXグローブを見て家光は驚いていた。佐天はシエンツとの戦いの後、色んな人物と修行している。バジルとも修行しているので上司である家光も佐天の力についてバジルから聞いている。

（リボーンの言う通りツナが一度も勝ったことがないっていうなら……）

佐天は両手を腰の辺りに下ろすと炎をXグローブに炎を灯す。そして逆噴射させて一気に加速して家光の腹部におもいつきり拳を叩き込んだ。

「いい拳だ」

「っ!？」

佐天の拳は確実に家光の腹部にクリーンヒットした。だが家光は笑っていた。家光の顔を見た瞬間、佐天は慌ててその場から飛び引いた。

（効いてない……!?!）

ツナですら勝ったことのない家光に自分が勝てるなどとは微塵も思っていない。そもそもツナの世界の人間に勝てると思っていない。しかしそれでも佐天は驚きを隠せなかった。kill/2mv。運動エネルギーは質量×速さ。物体は速くなれば速くなるという法則である。佐天の今出せる最大の速さで動き拳を叩き込んだ。それでも

佐天の攻撃は効いていなかった。つまりそれだけ家光と自分に絶対的な差があるということの意味をしていた。

「でもまだまだ甘いな」

（超死ぬ気モード?! しかも大空の炎!?!）

家光の額に大空の死ぬ気の炎が灯つたのを見て、佐天は驚きを隠せないでいた。

「ふんっ!」

「なっ!?!」

すると家光は地面に拳を叩き込んだ。すると地面に巨大なクレ―ターができる。あまりの威力に佐天は驚きを隠せないでいた。

「ツナと本当に一緒にいたいというならこれくらいで驚いてたらダメだぜ」

「っ!？」

家光もツナと9代目と同じように超直感を持っている。家光は佐天の心を見透かしていた。

「裏社会はこんな甘い世界じゃない。裏社会で生き抜く奴はあらゆる手段を使う。そこで生き抜きたいならあの程度の拳じゃ生き抜くのは不可能。確実にあの世行きだ。諦めた方がいい。そうすれば死ななくて済む」

家光は佐天を試している。死ぬ気の炎を灯している時点で佐天に覚悟があるのは理解している。今の一撃を見ても佐天の覚悟が揺るがないかどうかを。

「わかっているわよ。全てじゃないけどツナの実力だって知ってるし、バジルもディーノもリボンもあなたも……この世界の人たちの強さは超能力者^{レベル}をも越える人たちばかりだってことも。そして私が弱いってことも」

佐天の脳裏にはツナの戦う姿、実際にスパークリングをした人たちのことが浮かんでいた。

「たとえば裏社会がどんなに強い人がいようと私はツナの隣にいたい。ツナのことを護りたい。だから私はツナを越える人間になる。だって私にとってツナは絶対に譲れないもの……私の誇りだから」

佐天は真つ直ぐな目で家光にそう言い放った。自分の気持ちを家光の強さを見てもなお佐天の覚悟は揺るぐことはなかった。

「くくっ！ いい覚悟だ。すまなかつたな涙子ちゃん」

「もしかして私を試したの？」

「まあな。涙子ちゃんの覚悟が本物かどうか試したくてね。伝わったよ君の覚悟もツナへの愛もね」

「最後の余計よ……!!」

家光が余計な言葉を言った為、佐天は視線を反らして顔を赤くしな

がらそう言った。

「修行も頑張らなきゃいけないが、ツナを射止めるのも頑張らないといけないよな。ぼやぼやしてたらツナが他の誰かに取られちゃうかもしれないねえしな」

「他の誰か？」

「ん……？」

家光の言葉を聞いて佐天の炎が純度を増し、瞳から色が消えて、ファイアランドで覚醒した時と同じようになる。それを見た途端、家光は違和感を覚える。

(こりや相当、ヤバいことになりそうだな……)

佐天の触れてはならぬ領域に触れてしまったと知った家光は自分の発言に後悔するのだった。

標的（ターゲツト） 142 酔い

家光は途中で家に帰ってしまった。ツナも途中で帰って来て修行に参加。そして家光のいる家に帰って来る。

「もう寝てるし！」

帰って来て早々、家光は鼻ちようちんを作って眠っていた。アホ面を浮かべながら眠ってる家光を見てツナはツツコミをいれる。

「ん〜……？ おおツナじゃねえか……久しぶりだなく……」

「ひ、久しぶり……父さん……」

ツナのツツコミのせいで家光は目が覚めた。なんとも格好のつかない再会にツナは複雑な気分になってしまっていた。

「にしてもこんな朝早くに起きてるなんて……なんかあったのか……？」

「まだ夜だよ！」

（あんまりこういうこと言いたくないんだけど……本当にあの時と同じ人物なのかな……？）

今を朝だと勘違いしている家光にツナはツツコミをいれる。佐天はスパーリングした時のかつこ良さが微塵も感じられなかった為、本当に同一人物なのかどうか疑ってしまっていた。

「そうかまだ夜か……とりあえず酒でも飲むか？ どうだツナ？ お前も？」

「飲む訳ないだろ！ 俺まだ未成年だぞ！」

「あれ？ お前まだ未成年だっけ……？」

（寝ぼけてるんだよね……？）

本当に自分の息子の年齢を忘れていいのかどうかわからず佐天は困惑していた。

「まあ細かいことはいいじゃねえか。飲もうぜ。丁度ここに缶ビールあるし」

「飲む訳ないだろ！」

「やっぱ反抗期か……」

「反抗期の問題じゃなくて一般常識だろ！」

「じゃあねえな。じゃあウイスキーでどうだ？」

「ウイスキーもお酒だろ！」

（これが久しぶりの親子の再会……？）

あまりにも奇抜な親子の再会に佐天は本当に親子の再会なのかどうか疑ってしまっていた。

晩御飯を食べ終わるとツナは風呂に入る。そして寝間着に着替えると台所へ行く

「あー！ ツナしゃんが3人いるー！」

「佐天!？」

台所に行くと顔を赤くしなぜかハイになってる佐天が椅子に座っていた。そんな佐天を見てツナの驚きを上げる。

「こ、この感じまさか……」

ツナは思い出していた。前に家光がランボやフウ太に酒を飲ませた時と同じ感じだということ。そして佐天は今、酔っているということに。

「父さん！ 何で佐天に酒を飲ませてるんだよ！」

「い、いや！ 父さんだって飲ませたくて飲ませたんじゃないんだって！ 水の入ったコップと日本酒の入ったコップを間違えて渡しちまってだな！」

「結局、父さんのせいじゃん！」

わざと飲ませた訳ではないにしろ、結局家光がしでかしたと知って、ツツコミをいれる。

ツナは佐天に肩を貸し、自分の部屋に連れて行く。そして佐天をベッドで寝かせる。

「はあ……父さんが帰って来たら何でもこういつも……」

佐天をベッドに寝かせるとツナは嘆息する。ツナは家光が帰って来てからいつもトラブル続きなのでうんざりしていたのである。

「さてとタオルを……」

「ツナさーん♪」

「佐天!？」

ツナは水を濡らしたタオルを持って来ようとする。すると日本酒のテンションがハイになった佐天が背後から抱きついてきた。佐天に抱きつかれてツナは顔を赤くする。

「えいー!」

「わっ!・ いでっ!」

佐天はツナに抱きついたままベッドから落ちた。ツナは抱きつかれたまま傾いて床に叩きつけられる。

「っーかまえーた!」

「ぎ、佐天!？」

佐天は自分の頬をツナにくっつけすりすりしてきた。佐天の行動にツナは顔を真っ赤にし動揺する。

「どうですかツナさくん? 気持ちいいですか?」

(や、やばい! 佐天の肌、めちやくちやスベスベでいい匂いがする……!?! って俺はこんな時に何を考えて!)

佐天は妖艶の笑みを浮かべながらツナにそう言う。ツナは顔を

真っ赤にしながらか動揺しながらも、佐天の肌の質感と匂いを実感していた。

「さ、佐天……お、落ち着いて……!?!」

「えー? 落ち着いてますよー。もしかして私に抱き着かれて興奮してるんですかー?」

「そ、そんなんじゃ……!?!」

佐天の誘惑に顔を真っ赤にしながらもなんとかツナは強がって、佐天の言葉に抗う。

「ふくん。じゃあ脱いじやおつかなー? 暑くなってきたやつたしー」

「ぶはっー!」

妖艶の笑みを浮かべながらそう言うと、ツナは鼻血を吹き出した。

「えー! そんなに見たいんだー! ツナさんのエッチー! やっぱりツナさんも男の子なんですわー!」

佐天はニヤニヤしながらそう言う。佐天の言葉にツナは反論することができず顔を赤くしたまま黙ることしかできなかつた。すると佐天はツナから離れた。

「しようがないですねー。ツナさんの為に人肌脱いじやいます」
「なっ!?!」

そう言う佐天は上着の下部に両手を添えると本当に服を脱ごうとする。そんな佐天を見てツナは顔を真っ赤にし動揺する。

「ダ、ダメだよ!! 流石にそれは不味いよ!!」

「えー? せっかくツナさんが喜ぶと思つたのにー」

「お、女の子がそんなことしちやダメだつて!」

「じゃあキスしてあげます」

「キ、キス!?!」

服を脱ぐのを思い止まつたと思つたら今度はキスすると佐天は言い出した。キスという単語を聞いてツナは顔を真っ赤にしながらか動揺してしまう。

「いいじゃないですかー。私はツナさんの……ボンゴレのボスの妻になるんですよー。今からキスしたつていいじゃないですかー」

「俺はボンゴレを継ぐ気はないから！ それに佐天と結婚しないから！」

いつものなら顔を真っ赤にしながら否定する佐天であるが、酒を飲んだせいで思考回路がめちやくちやになっていて、恥ずかしがることなくそう言った。ツナは佐天の発言にツツコミをいれる。

「グスツ……ツナさん酷い……私と結婚するのはそんなに嫌なんですか……？」

「い、いや！ それは！ その……」

さつきまでテンションが高かった佐天であったが、結婚の話が否定されたのがショックだったのか目を潤ませてしまっていた。ツナは佐天がまさか泣くとは思ってもみなかった為、慌ててしまっていた。

「い、嫌じゃないよ！ 佐天と結婚できるなんて絶対に嬉しいに決まってるじゃん！ 佐天はすっごく可愛いし、料理もできるんだからさー！」

「本当ですか!?! 嬉しいー！」
「なっ!?!」

ツナは佐天を元気づける為に慌ててそう言った。ツナの発言を聞いてシヨックを受けていた佐天も元気になるに再びツナに抱き着いた。ツナは再び顔を真っ赤にする。

「じゃあキスしちゃいますね」

(ヤ、ヤバい!! 身動きが!?)

佐天は目を閉じて唇をツナの唇へと近づいて行く。ツナは顔を真っ赤にしながらなんとか逃れようとするも佐天にがちりホールドされてしまった為、身動きが取れないでいた。

その時だった

「あれ?」

佐天の唇があと少しで届くというところで佐天の酔いが覚めてしまふ。

(な、なななな何でこんなことになってるのー!?)

佐天は今、自分が想い人に抱き着いてしまっていることに聞いて気

づき顔を真っ赤にしながら慌ててツナから離れた。

「はああああああ!!」

そして酔っていた時に自分がツナに何をし、何を言ったのかを思い出す。そして思い出した途端、全身が真っ赤になりボンツ！ と音を立てて気絶した。

こうして佐天の黒歴史が新たに刻まれたのだった。

標的（ターゲツト） 143 引っ越し

家光が帰って来た次の日。ジャッジメント 風紀委員177支部。

「そういえば沢田さん。久しぶりにお父さんと再会してどうでしたか？」

「最悪だったよ……」

「沢田さん……？」

初春は家光と再会した感想がどうだったのかツナに尋ねた。ツナは物凄く疲れた顔をしながらそう言った。初春はそんなツナを見て違和感を覚える。

「昨日、父さんが佐天に酒を飲ませてさ……」

「酒!？」

佐天に酒を飲ませたと聞いて、初春と黒子は驚きを隠せないでいた。

「正確に言えば父さんが水の入ったコップと日本酒の入ったコップを間違えて渡しちゃって……それで佐天が酔っぱらっちゃって……それで手がつけられなくなっちゃってさ……」

「て、手がつけられないって……」

「ま、まさか……」

ツナの話の聞いて初春と黒子は想像する。酒を飲んだことによつて大暴れして手がつけられなくなったのではないかということに。

「佐天が……その……抱きついてきたり……キスしようとしたりして来てさ……もう大変でさ……」

ツナの脳裏には昨日の佐天の行動が浮かんでいた。あれからもの凄く気まずくなつてしまひ今だに喋りづらいのである。

「何だそんなことですか……」

「驚かせないで下さいまし……」

「何で驚かないの!？」

大暴れしたのではなく酒の勢いでただただ素直になつただけだった為、初春と黒子は冷めた目でツナの方を見て呆れてしまつていた。

2人の発言を聞いてツナはなぜそんな反応するのかわからず驚いていた。

「いきなり女の子が抱きついたり、キスしようとしてきたんだよ！
今から佐天にだって好きな人だってできるはずなのに！　好きでもない俺にキスなんて知ったらショックを受けるに決まってるんじゃない！」

「そうですね……」

「そうですね……」

「だから何で驚かないの!?!」

ツナがあんまりにも鈍感である為、初春と黒子は再び呆れた顔をしながらそう言った。ツナはなぜそんな顔をするのかわからず驚きを隠せないでいた。普通であれば驚くことなのではあるが、佐天がツナに好意を寄せていると知っている2人にとってはむしろそのままキスして結ばれば良いとしか思っていなかった。

「あっ！　もう時間なので行ってきますね」

「もう初春のパトロールの時間か」

「はい。それでは行ってきますね」

そう言うと初春は支部を出てパトロールへ向かって行く。

初春がパトロールに向かってから30分後。黒子の携帯に初春から電話が入る。

「わかりましたわ。すぐに向かいますわ」

少しだけ会話すると黒子は電話を切って、はあ……と少しだけため

息をついた。

「何かあったの？」

「実はとある学生が困ってて手伝って欲しいそうなのですの」

「困ってる？」

「どうやら他の学区から引越して来たらしいのですが、時間を間違ってしまったって荷物だけが先に寮に届いてしまったみたいなんですの。だから手伝って欲しいと」

「成る程ね」

「全く……それぐらい1人でなんとかして欲しいものですわ……私が鍛えあげているというのにいつまでも小学生並の体力……」

「ハハハ……」

いつまでも体力のつかない初春の姿を想像しながら黒子はため息をつき、ツナはそんな黒子を見て苦笑いしていた。

ツナと黒子は初春の言われた場所へと向かって行く。

「白井さーん！ 沢田さーん！ こっちですー！」

初春が右手で大きく手を降って自分がここにいるというアピールをする。初春は寮の扉の前に2人を案内する。そこには大量のダンボールが置かれていた。

そして

「衿衣!？」

「沢田さん!？」

なぜか春上がいた。ツナは春上がここにいることに驚き、春上はツ

ナがここに来たことに驚きを隠さないでいた。

「まさか衿衣が依頼者だったなんて……」

「沢田さん。春上さんと知り合いなんですか？」

「昨日、衿衣が落とし物をしたっていうから一緒に探したんだ」

「そうだったんですか」

「昨日は本当にありがとうございます。落とし物を探してくれ
た上に絆理ちゃんと再会させてくれて」

「絆理ちゃん？」

春上は頭を下げてツナに頭を下げる。絆理という知り合い単語を
聞いて黒子と初春は疑問符を浮かべる。

「実は……」

ツナはわからない初春と黒子の為に説明する。衿衣と絆理の關係
と、春上と衿衣が感動の再会を果たしたことを。

「春上さんが……」

「これは驚きましたわ……」

春上と絆理の關係を知って、初春と黒子は春上の方を見ながら驚い
ていた。

「それで何で衿衣は初春の寮に？」

「実は2学期から絆理ちゃんが柵川中学に通うついでなので転校する
ことに決めたんです」

「転校!？」

まさか友達絆理の為に転校するとは思ってもいなかった為、ツナは驚きを
隠さないでいた。

「はい。正確に言えばまだ転校はしてないんですが、昨柵川中学に相
談したらここが開いてるって聞いたので寮を契約解除したんです」

(衿衣って意外と行動力があるな……)

昨日の今日で決断し行動に移す春上の行動力にツナは驚きを隠せ
ないでいた。

「絆理ちゃんと約束したんです。退院したら一緒に寮で住もうって。
だから今度は私は絆理ちゃんの居場所を作ってあげて決めたく
す」

「衿衣……」

「事情はわかりましたわ。とにかくお手伝いしますわ」

「わっ！ 急に荷物が！」

春上の話を聞いてツナは感動し、黒子は笑顔でテレポートでダンボールを寮の中に転移させた。急に荷物が消えた為、驚きを隠せないでいた。

「白井さんはテレポーターなんですよ」

「す、凄いの……」

「当然ですわ。この学園都市において私、以上の空間能力者テレポーターなどそうはいませんわ」

初春が黒子の能力を説明すると春上は驚いていた。黒子は自慢気にそう言った。荷物の入ったダンボールを全部、寮の中の送るとツナたちは中に入りダンボールを開けて荷物を寮の中へ置いていく。

「た、高い……」

「だ、大丈夫ですかなの？」

ツナは踏み台を使って電球を取り付けていた。決して身長の高いとは言えないツナは踏み台を使って背伸びをしてもギリギリだった。春上はそんなツナを見て落ちないかと思いいハラハラしていた。

「よしっ！ 届いた！」

悪戦苦闘しながらもなんとか電球を取り付けることに成功したツナは表情をパアッと明るくした。

「わっ!？」

「え……!？」

ホツとしたのも束の間。ツナはバランスを崩してしまいそのまま春上の方へ倒れてしまう。春上は反応が遅れてしまった為、避けることができなかった。ツナは仰向けになった状態の春上の覆い被さっていた。だがなんとか両手を床につけることで全体重を春上に乗せることはなかった。

「ご、ごめん衿衣……」

「ああ……!？」

だがツナの両手は春上の顔の横にあり、さらにお互いの至近距離に

あった。壁ドンに近い状態になったことで春上は顔を真っ赤にしてしながら顔をパクパクさせていた。

「何かあったんです……なっ!？」

「さ、沢田さん……!？」

ツナが倒れる音を聞いて別の部屋で作業していた黒子と初春が慌ててやって来た。だがこの光景を見て開いた口が塞がらない状態になっていた。

「ち、違う!! これは!？」

「王子様なの……」

ツナは慌てて春上から離れて黒子と初春の方を向いて言い訳する。一方で動揺していた春上であったがすぐにうっとりした表情かおでそう呟いたのだった。

こうしてまたツナに想いを寄せる人物が増えたのであった。

標的（ターゲツト） 144 花火大会

春上の引越しが終わってから2日後。8月10日。第7学区の病院前。

「退院おめでとう」

「退院おめでとうなの絆理ちゃん」

「ありがとう。ツナお兄ちゃん。衿衣ちゃん」

ツナと春上が絆理にそう言った。ついに絆理たちが退院することとなったのである。退院を祝ってくれた2人に絆理はお礼を言う。

「これからずっと一緒だね衿衣ちゃん」

「うん。嬉しいの」

退院できることはわかっていたことではあるが本当にこれから一緒にいられるということが嬉しかった。絆理は春上が自分の為に引越し、これから一緒に暮らしていくことは話してある為、そのことは知っている。

「2人に見せたいものがあるんだけどいいかな？ 色々と話したいことがあるとは思うんだけど」

「見せたいもの？」

見せたいものと聞いて絆理と春上は疑問符を浮かべた。ツナはポケットの中から折り畳まれた紙を取り出すと、紙を広げて2人の方を見せた。その紙には花火大会が開催されることが書かれていた。

「花火大会……？」

「なの……？」

「うん。昨日、見つけたんだ。今日の夜に第7学区で開催されるんだ。退院記念にどうかと思つてさ」

「花火大会！ 私、行きたい！」

「私も行きたいです」

ツナから花火大会の詳細を聞いて絆理と春上は行くことを決意する。ツナは2人の返事を聞くと持っていた紙を絆理に渡す。紙には

開催場所と時間が書いてある為、ツナは紙を渡したのである。

「それと友達を呼びたいんだけどいいかな？」

「もしかして初春さんたちですか？」

「うん。そうだよ」

「私は大丈夫です。絆理ちゃんは？」

「私も大丈夫です！」

ツナが美琴たちを誘っていいかどうか確認すると春上と絆理は了承した。2人の返事を聞いてツナは美琴たちに連絡する。そして全員OKの返事が返ってきた。

そして時刻は一気に過ぎ夜。花火大会の開催場所。

「さ、沢田さーん！」

「初春！」

ツナが集合場所で待っていると緑色の浴衣姿の初春が息を切らしながらやって来た。そんな初春を見てツナは大きく手を振った。

「どうしたの？ そんなに息を切らして？」

「浴衣を着るのに手間取ってしましまして……帯が体に絡まってしまっただけで動けなくなっちゃって……」

「だ、大丈夫だったの……？」

「はい……隣の部屋の人が異変に気づいてくれて……浴衣を着るのを手伝ってくれたので……」

「た、大変だったんだね……」

「はい……それで他の皆さんは？」

「まだ来てないよ」

「そうですか……よかったです……」

浴衣を着るのに苦戦した為、他の人たちを待たせてしまったのではないかと思つた初春であつたがそうではなかつた為、安堵していた。

「着いた!」

「お待たせしましたの」

初春が来た直後、テレポートで黄色の浴衣を着た美琴と紫色の浴衣を着た黒子がやって来た。

「ごめん。寮監の目を掻い潜るのに苦戦しちゃつてさ」

「え? 何でそんなことをする必要があるの?」

「ウチの寮監は祭りの時ですら外出を禁止してるのよ」

「え!?! そうなの!?!」

美琴たちの寮の事情を聞いてツナは驚くと同時に、まさかそういうルールがあつたとは知らなかつた為、申し訳ない気持ちになつてしまつていた。

「なんかごめん……そうとも知らずに誘つちやつて……」

「構いませんわ。ちゃんとバレないように細工はしましし、私たちもこういうイベントには参加したいので」

「本当……夏祭りの時でも外出を禁止にしてるのってウチの寮ぐらいのものよねえ」

(こ、根性あるな……)

あの寮監が恐ろしいことはツナも充分に理解している。にも関わらず花火大会に来ようとする黒子と美琴の度胸にツナは驚いていた。

「ツナお兄ちゃん!」

「あつ! 絆理! 衿衣!」

絆理の声が聞こえるとツナは声のする方を向いた。そこには水色の浴衣を着た絆理とピンク色の浴衣を着た春上がやって来る。

「初めまして! 枝先絆理です!」

「は、春上衿衣です!」

「初春飾利です」

「白井黒子ですわ」

「御坂美琴よ」

互いに自己紹介する5人。絆理は美琴たちとは初対面であった為、自己紹介した。春上は美琴とは初対面だった為、自己紹介した。

「あ、あの!! 沢田さん……!!」

「何? 衿衣?」

「ど、どうですかなの……!!」

「どうって?」

「こ、この浴衣です……!? へ、変じゃないですかなの……!!」

春上は顔を赤くしモジモジしながら、ツナに自分の浴衣姿の感想を尋ねた。

「変じゃないよ。とつても似合ってるよ」

「あ、ありがとうございますなの……!!」

「ね、ねえ……あれってまさか……」

「そのまさかです……」

ツナがそう言うのと春上は顔を赤くしながら嬉しそうな表情を浮かべていた。美琴は初春に小声で確認を取った。

「衿衣ちゃん私が知らない間に。隅に置けないなー!」

「ち、違うの!! そうじゃないなの!!」

春上の気持ちを知って絆理はニヤニヤしながら肘でツンツンしながらそう言った。春上は顔を真っ赤にしながら慌てて誤魔化した。

「佐天さんも来られたらよかったんですけどね」

「佐天?」

「私のクラスメートです。今は沢田さんの知り合いの所で修行してていないんです」

「せっかくの夏休みなのに……」

「凄いな……」

初春が佐天のことを説明する。夏休みなのにも関わらず遊ばずに一生懸命、修行に打ち込んでいる佐天に絆理と春上は感心していた。(そういえば明日は並盛の夏祭りだっけ……せっかくだし佐天も連れて行こうかな……)

ツナは元の世界にて夏祭りがあることを思い出し、佐天を連れて行

こうと考える。

「あつ！」

「始まりましたわね」

「綺麗なの……」

「これぞ日本の夏って感じですね」

「そうね」

ついに花火が打ち上がる。打ち上がった花火を見て、絆理、黒子、春上、初春、美琴は感動していた。

(あつ！ そうだ！)

少しするとツナはあることを思いつく。ツナはポケットの中から27と書かれた手袋を装着する。

「沢田さん？」

「何で手袋してるのツナお兄ちゃん？」

いくら夜とはいえ真夏であるのにも関わらずツナが手袋を装着する意味がわからず春上と絆理は疑問符を浮かべていた。するとツナが目を閉じると額にオレンジ色の炎が灯り、手袋がボンゴレギアへと変貌する。

「も、燃えてるなの!？」

「は、早く！ 水を持って来ない！」

超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナを初めて見た春上と絆理はツナの額が燃えてるのを見て驚きの声を上げていた。

「大丈夫だ衿衣、絆理。問題ない」

「ほ、本当なの……」

「全然、燃えてない……」

額が燃えているのにも関わらず体が全然、燃えていないツナを見て本当に大丈夫だということを絆理と春上は理解する。

「きゅ、急にどうしたというんですの……?」

「ちよつと思いついたことがあつてな」

いきなり超^{ハイパー}死ぬ気モードになったことに黒子は驚きを隠せないでいた。するとツナは絆理の近くに移動した。

「俺に掴まってくれ絆理」

「え？ 何するの？」

「説明は後だ。とにかく俺に掴まってくれ」

「う、うん……」

ツナが何をするのかわからなかったが絆理は戸惑いながらもツナの言葉を信じることにする。ツナは絆理をお姫様抱っこするとそのまま炎を逆噴射させて上空へと上がって行く。

「と、飛んでる!？」

自分が地面から遠ざかっていくのを見て絆理は驚きの声を上げる。

「前を見てくれ絆理」

「あ……」

地面を見ていた絆理にツナがそう言うのと絆理は感動のあまり固まってしまっていた。なぜなら打ち上がった花火と同じ高さの位置に自分がいるのだから。

「退院記念と思つてな。どうだ？ こんな高さで花火を見た感想は？」

「うん！ すっごく最高！」

絆理は凄く喜んでいた。並盛ではこんなことはできないが、超能力を開発する学園都市だからこそできることである。

「ありがとうツナお兄ちゃん」

「え？」

「昏睡状態になった私たちを助けてくれて、衿衣ちゃんと再会させてくれて、こんな楽しい思いをさせてくれて。私とっても幸せだよ」

「そうか」

絆理はとびっきりの笑顔を浮かべながらそう答えた。そんな絆理を見てツナは少しだけ微笑んでいた。

この花火大会は絆理にとって忘れられない大切な思い出となったのであった。

「あ、あの衿衣……何で怒ってるの……？」

「怒ってませんなの……」

（（相変わらずの鈍感……））

（ツナお兄ちゃんって鈍感……）

絆理をお姫様抱っこしたことに嫉妬したのか春上は可愛らしく顔を膨らませそっぽを向いてしまっていた。ツナはなぜ春上が怒っているのかわからず困惑していた。あまりに鈍感なツナを見て美琴、黒子、初春、絆理はジト目で見ていたのだった。

標的（ターゲツト） 145 夏祭り

花火大会の次の日。8月11日。並盛山。

「夏祭り？」

「そうだぞ。つってもなんてこともねえ普通の夏祭りだけだな」

今日もまた佐天は修行に勤しんでいた。そしてリボーンから今日、並盛にて夏祭りがあることを聞いていた。リボーンはあらかじめ並盛の夏祭りが特別なものではないかと伝えておいた。

「悪い話じゃねえはずだろ。なんせツナとお祭りデートできるんだからな」

「なっ!？」

リボーンがニヤニヤしながらそう言うと、佐天は顔を赤くしながら動揺する。

「ま。どうせ他の奴らも来る上にツナがお前の気持ちに気づいてねえ以上、2人つきりになるのは絶望的だろうな」

「そ、それは……」

リボーンは夏祭りにて2人つきりになれる可能性は低いと示唆する。佐天はリボーンの言葉に反論できずにシユンとしてしまった。た。

「1つだけ2人きりになれる秘策があるぞ」

「え!？」

そして時間は一気に過ぎて夜。夏祭りが開催される並盛神社。

「佐天。焼きそば3つお願い」

「は、はい！」

ツナと佐天は夏祭りに参加しているのかと思いきやなんと、屋台にて2人で販売していた。

時は遡り再び並盛山。

「お前とツナが2人つきりになる方法。それは屋台で焼きそばを売ることだ」

「は……？」

リボーンはツナと佐天が2人つきりで夏祭りを楽しめる秘策を佐天に授ける。佐天はリボーンの秘策を聞いて意味がわからずポカンとしていた。

「ごめん……意味がわからないんだけど……」

「よく考えろ。普通に夏祭りに参加したんじゃ邪魔が入る。だが屋台ならどうだ？ 誰かが買いに来ることはあっても屋台の中まで入って来れねえ。つまり誰にも邪魔されることはねえ2人だけの空間が出来上がる」

「た、確かにそれなら2人つきりになれるけど……屋台を出すのって色々、手続きとかいるんじゃない？」

「そつちの方は俺に任せとけ。生徒が困ってるのを助けんのは家庭教師である俺の役目だからな。こんな面白……重要なイベントを逃す訳にはいかねえからな」

「今、面白って言いかけたよね!? 楽しんでるよね!?」

佐天はリボーンが面白いと言いかけていたのを聞き逃すことはな

かった。

「ツナは料理ができる女が好みだ。お前の女子力をアピールするチャンスだぞ」

「アピール……」

そして現在に至る。

「ツナさん慣れてますよね。もしかして屋台で働いたこととかあるんですか？」

「うん。まあね」

佐天はツナが接客に慣れている為、過去に屋台で働いたことがあるのではないかと予想した。佐天の予想は正しく、ツナは借金を返済する為に屋台でチョコバナナを獄寺と山本と一緒に販売したことがある。

「にしてもまた屋台で働かせるなんて……リボーンの奴、何を考えてんだよ……」

「さ、さあ……な、何でしょうねえ……？」

リボーンに脅迫された為、屋台で働くことになったツナであるが以前と違って今回は借金をしていない。にも関わらずリボーンが屋台で働かせる理由がわからないでいた。自分とツナの距離を縮める為とは言えない為、佐天は視線を反らしながらそう答えた。

「ごめんね佐天。修行で疲れてるのにリボーンがこんな無茶、言い出して」

「き、気にしないで下さい！ 結構、楽しいですし！ それにこういう体験って中々できないですから！」

「ならいいんだけどや……」

ツナはリボンが勝手にこんなことを決定したの為、佐天に謝罪した。むしろこうなったしまった原因は自分にある為、申し訳ない気持ちになっていた。しかし誰にも邪魔されずツナと一緒にいられる為、嬉しい気持ちもあつた。屋台で販売することに関しては本当に楽しんでる為、嘘ではない。

「でもやっぱり佐天の作る料理は凄いな。次々、売れていくよ」
「そ、そんな！ 大したことないですよ！」

ツナの言葉を聞いて佐天は謙遜する。実際に佐天の作る焼きそばは人気があり、先程から飛ぶように売れている。現在はピークが一旦、落ち着いている。

「本当……佐天の料理を毎日、食べられたら最高なんだけどなー」
「へっ!？」

佐天の料理の美味しいさを知っているツナはそう呟いた。あくまで好きなのは佐天の料理であり、佐天自身が好きではない。(友達としては好きであるが恋愛対象としては好きではないという意味)ツナの言葉を聞いた途端、佐天は顔を真っ赤にしてしまっていた。

「そ、それってどういう……!?!」
「すいません。焼きそば一つ下さい」

ツナの言葉の真意を確かめようとした佐天であつたがタイミング悪く客が来てしまった為、聞くことができなくなってしまふ。そしてここから次々に人が来てしまった為、先程のツナの言葉の真意を聞くことができなくなってしまった。

「ふう……これで終わり」
1時間後。材料を全て使い切った為、焼きそばの販売は終了となる。

「どうやら終わったようだな」
「随分と楽しんでるなおい！」

グレーの浴衣を身に纏い、いつもの帽子を脱いでツンツン頭を晒しているリボンがやって来た。右手にはリング飴、左手にはわたがしが握られていた。自分たちに無理やり働かせておいて夏祭りを堪能

しているリボーンを見てツナはツツコミをいれる。

「それで？ 何しに来たんだよりボーン？」

「佐天にこいつを渡そうと思ってるな」

そう言うとりボーンはどこからか綺麗に折り畳まれた緑色の浴衣を手にしていた。

「これって……」

「お前の浴衣だぞ。ああは言ったが夏祭りに参加してんだ。楽しんでこい。もうすぐ花火が始まるぞ」

「で、でも着替える場所が……」

「問題ねえ。簡易の更衣室を用意してある」

「準備、良すぎでしょ……」

どこまでも用意周到なりボーン佐天は驚きを隠せないでいた。佐天はリボーンから浴衣を受け取るとリボーンは簡易更衣室のある場所へと案内する。簡易更衣室で佐天はリボーンからもらった浴衣へと着替える。

「お待たせしました」

佐天は浴衣に着替え終わると簡易更衣室から少し離れた場所で待っていたツナの所へと向かう。

「それじゃ行こっか」

「あ、あの……!! ツナさん……!!」

「何？ 佐天？」

「ど、どうですか……!!? この浴衣、変じゃないですか……!!?」

佐天は勇気を振り絞ってツナに、今着ている浴衣の感想を尋ねた。「変じゃないよ。とっても似合ってるよ」

「そ、そうですか……!!」

想い人に似合っていると言われて佐天は顔を赤らめながら嬉しそうな表情を浮かべていた。

「それじゃ行こっか」

そう言うるとツナは佐天を連れて花火が見えるスポットへと向かって行く。ツナの案内の元、佐天はツナについて行くが周囲に全然、人はいなかった。

(あれ? 全然、人がいない?)

佐天は違和感に気づく。花火を見えるスポットに向かっているはずなのに人氣が全くない林にやって来ていることに。

(ま、まさか!? こ、これって!?)

佐天は人氣のない林に連れて来られたことであることが頭に浮かんでいた。

佐天の妄想

『ダ、ダメですよツナさん……こんなところを誰かに見つかったら……』

『本当はこうなることを望んでたんだろ?』

『そ、そんなこと……』

木の方に立っている佐天の両手首をツナが両手で掴み、顔を近づけて甘い言葉を囁く。佐天はツナの顔をまともに見れないのか顔を赤くしながら視線を反らしていた。

『可愛いな佐天は』

そう言うとツナは掴んでいた佐天の両手首を離すと佐天の両頬を掴み、視線を反らしている佐天の顔を自分の方へと向ける。そして自分の唇を佐天の唇へと近づけていく。

現実

(つて!! 何、考えてるの私!?)

妄想していた佐天であったが途中で我に返り、顔を真っ赤にしながら顔を横に何度も振ってしまっていた。佐天が妄想の世界から戻ってから少しすると目的地へと辿り着いた。

「着いたよ」

「ここって……」

着いたのは神社だった。しかしここにはツナと佐天以外に誰もいなかった。

「ここは花火の隠れスポットなんだ。だからここにはほとんど人が来ないんだ」

「隠れスポット……」

ツナは中学の時にここが花火の隠れスポットだと知って以来、夏祭りではここで花火を見ている。ここが隠れスポットだと知って佐天はなぜツナがこんな人気のない所に連れて来たのか理解する。

(こ、これって……!? 告白のチャンス……!?)

自分たち以外、誰もいないというこの状況。告白するチャンスだと思った。

(あの時は私が倒れちゃって告白できなかったけど……今なら!)

佐天は思いきってツナに告白することを決意する。

「あ、あの!! ツナさん!!」

「ん? どうしたの佐天?」

「あ、あの!! その!! えっと……!!」

顔を真っ赤にし鼓動が速くなっていくのを感じながらも勇気を振り絞って想いを伝えようとする。しかしどうしても好きという単語が言えずにいた。

(言うんだ……私の想いを……好きだって!!)

そう自分に言い聞かせると佐天はおもいつきり深呼吸した。

「わ、私……ずつと……!! ツナさんのことが……す……す……す……す……!!」

深呼吸した後、ついに佐天はツナに自分の想いを打ち明け、

「10代目ー!」

「ツナ！」

「ツナさん！」

「ツナ君！」

「沢田！」

「ツナ君！」

「ボス」

「ツナ兄」

「ランボさん参上！」

「ツナさん」

ようと思つた矢先、獄寺、山本、ハル、京子、了平、炎真、クロム、フウ太、ランボ、イーピンの声が聞こえて来た。獄寺たちがやって来たと同時に花火が打ち上がり始める。

「あつ！ 始まつたね！」

「そ、そうですね！ これぞ日本の夏って感じですよね！」

ツナの意識はすでに花火に向いてしまつていた。佐天は先程の発言を誤魔化す為に慌てて話を反らす為にそう答えた。

(後ちよつとで告白できたのになー……まあいつか……)

告白できなかったことを残念がる佐天であったが、すぐに切り替えて花火を楽しむことにするのだった。

絶対能力進化（レベル6シフト）計画篇
標的（ターゲット）146 尾行

夏祭りから時は経過して8月19日の昼。

「ふー………今日も異常なしっ」と

ツナはいつものようにパトロールに赴いていた。何も起きなかつたものの8月である為、ツナは額に汗をかいていた。

「あ。美琴だ」

パトロールをしていると遠目ではあるが美琴の後ろ姿が視界に入った。せつかくなのでツナは話しかけることにする。

「あれ？」

美琴が曲がり角に入って行ったのを見て、ツナも同じく曲がり角を曲がった。しかし美琴の姿はどこにもなかった。

「いない？ まあいいか」

ツナは美琴を見失った為、話しかけるのを諦めて、元来た道に戻ることにした。

「あら？ 沢田じゃない」

「え!？」

来た道に戻ってから少しするとツナの前から美琴が現れた。ツナは先程、見かけた美琴が反対方向からやって来たことに驚きを隠せないでいた。

「どうしたのよ？ 何、驚いてるのよ？」

「い、いや………さつき美琴があっちの方に歩いていくのを見たからさ………俺の勘違いだったみたい………」

「っ!？」

ツナはさつき美琴を見た方向を指を指しながら説明すると同時に、先程、見た美琴は自分の勘違いだと理解した。一方で美琴はツナの言葉を聞いて驚き隠せていないようだった。

「美琴？ どうしたの？」

「ううん。何でもないわ。多分、あんたの勘違い……」

「美琴!？」

ツナは美琴に違和感を感じた。美琴は笑顔でそう答えるが、答えた瞬間に美琴はフラついてしまう。フラついた美琴を見てツナは驚いてしまう。

「心配させてごめん。なんか最近、夏バテ気味みたいなの。悪いけど今日は帰るわ。じゃあね」

「え!?! ちよつ!?! 美琴!?!」

そう言うのと美琴は走つてとツナから離れて行った。まるでこれ以上、ツナといるのを避けるかのように。美琴の行動にツナは驚きを隠せずにいた。

(あの感じ……幻想御手事件レベルアップの時の佐天と同じ……)

ツナは全てを見透かす力、超直感で違和感を感じていた。そして同時に思い出していた。幻想御手事件レベルアップの時に幻想御手レベルアップを持っているにも関わらず、隠し通そうとしていた佐天と同じということに。

(黒子なら何か知ってるかも……)

美琴と同じ寮に住んでいる黒子であれば何か知っているのではないかと思い、ツナは支部に戻ることを決意する。

ジャッジメント
風紀委員177支部

「ただいまー」

「沢田さん。お帰りなさい」

「パトロールお疲れ様。ツナ君」

「……」

ツナが帰ると初春と固法、そして真剣な眼差しでパソコンとにらめっこしてる黒子がいた。

「あの……黒子。ちよつと話があるんだけどいい？」

「何ですか？」

「ちよつと美琴のことで話があるんだけど……」

「っ!？」

ツナに話しかけられても真剣な眼差しでパソコンから目を離すことをしなかった黒子であったが、美琴という単語を聞いた途端、顔色を変えてツナの方を向いた。

「固法先輩。少しだけ席を外しますわ」

「え!?! ちよつ!?! 黒子!?!」

黒子はそう言うのとツナを引っ張って、医務室へとツナを連れて行った。

医務室

「それで？ お姉様のことでお話とは？」

「ど、どうしたの黒子？ 急に慌てて？」

「そんなことはどうでもいいですわ。それよりあ姉様のことをお話下さい」

「う、うん……」

高圧的な黒子に圧された為、ツナは美琴のことを話すことを決める。

「さつきパトロールの途中で美琴に会ったんだけどさ、何か変な感じがしてさ。黒子なら美琴に何かあったか知ってるんじゃないかと思ってるさ」

「やはりそうですか……」

ツナは先程あった出来事について話した。ツナの話聞いた黒子は残念そうな表情をしながらそう言った。

「やはりって……やっぱり何か知ってるの？」

「いいえ。その逆ですわ」

「え？ どういうこと？」

先程の黒子の発言から黒子は何か知っているのかと思っていたツナであったが全くその逆だった為、困惑してしまっていた。

「実は最近、お姉様が寮にほとんど帰って来ないんですの。いつも野暮用だと言って……」

「野暮用……？」

「ええ。いつも夕方にそう言って寮を出ていくんですの」

「それは変だね……」

黒子はここ最近の美琴の行動について語る。ツナは黒子から最近の美琴の行動を聞いて違和感を覚える。

「いつそのこと美琴の後を追ってみたら？」

「何をしているのか調べたいのは山々なのですが、寮監の抜き打ち検査ありますし。私が寮監の目を誤魔化さないとお姉様が罰を受けることになりますの……」

「そっか……」

「それに……」

「ん？」

「ここで追ってしまえば私はお姉様の信頼を裏切ることになってしまいう気がしまつて……」

「黒子……」

本当は美琴を追いたいのにも関わらず、追うことのできない黒子は悲しい表情をしまつてしまっていた。そんな黒子の表情を見てツナはなんとも言えない気持ちになってしまっていた。

「とりあえず沢田さん。このことは他言しないで下さいまし。他の方々に心配をかけたくありませんの」

「わかったよ」

そして時刻は一気に過ぎて夕方。美琴たちの寮。

「ふう……誰もいないわね……」

美琴は寮の外に出ると周囲を見回し、誰もいないことを確認すると走ってどこかへ向かって行く。

「動いたな……」

美琴の上空。そこには超ハイパー死ぬ気モードになっているツナがいた。

(ごめん黒子……悪いがもう俺はもう後悔したくないんだ……)

ツナの脳裏には昏睡状態になった佐天の姿が浮かんでいた。あの時、ツナは佐天の違和感に気づいていた。だがツナには佐天に詳しいことを聞く勇気がなく、佐天が話してくれるのを待つことにした。その結果、佐天は昏睡状態になってしまった。もし木山が根っからの悪人であったならば今だに昏睡状態から目覚めていなかったかもしれない。そんな思いからツナは美琴が何をしているのか調査することを決めたのである。本当は美琴に直接聞きたいのだがルームメイトである黒子にすら話していない為、聞いたところで話してくれるはずもない。その為、ツナは尾行という形を取ることにした。

(学生があまりいないのが幸いだな……)

ツナは上空から美琴を尾行する。地上であれば監視カメラがある為、下手をすればストーカーと判断される可能性がある。しかし上空

には監視カメラがない為、カメラにツナの姿は映らない。それに加え学生たちは家に帰っている時間なので人にバレる心配もない。

(ホテル?)

ツナが尾行を続けていると美琴はホテルの中に入ってしまった。少しすると制服姿だった美琴がハートマークが3つ入った上着に短パンに着替えて出て来た。

(まさか着替える為だけにホテルを借りたのか……)

ツナは美琴の行動に呆れると同時に、美琴の金銭感覚に驚きを隠せないでいた。ここからさらに美琴は移動していきツナも美琴を追って行く。すると美琴はとある建物内に侵入していく。美琴が侵入していくのをちゃんと確認した後、ツナは地上へと降りる。

「製薬会社?」

ツナが建物の入り口に降りると会社名の書かれたプレートがあった。

製薬会社へと侵入した美琴。一体、美琴の目的は!?

標的（ターゲツト） 147 迷いと選択

製薬会社へと侵入した美琴。

「これと言って怪しい点はないな……」

ツナは上空から製薬会社の周囲を調べる。しかし美琴がなぜ製薬会社の中に入ったのかはわからなかった。

（どうして美琴はこんな夜中に製薬会社に行く必要があるんだ？ 何か理由があるんだろうが……）

ツナは昼間ではなく誰もいない夜に美琴がわざわざ製薬会社に侵入した理由を考えるが、思い当たるフシはなかった。

その時だった

ドオオオオオン！

「爆発!？」

建物内にて爆発が発生する。爆発音を聞いてツナは驚きの声を上げる。爆発音は1回だけでなく2回、3回とさらに続いて行く。

（ま、まさか……）

ツナは爆発音を聞いた途端、あることを思い出した。

時は遡って昼。

「不審火？」

「ええ。ここ数日、研究施設で不審火が確認されてるの」

「それは物騒ですね」

「全く……人騒がせですわね……」

固法から最近、研究施設にて不審火が確認されていることをツナ、初春、黒子に伝えていた。

製薬会社

(信じたくはないが……まさか美琴が……でも何の為に……？ 様子がおかしいことに関係があるのか……?)

ツナは固法が言っていた不審火が美琴の手によって行われているものではないかと予想する。仮に不審火の犯人がだつたとしてもなぜこんなことをするのかわからなかった。

(……ここで考えても意味がない……直接、確認するしかない……)

ツナが考えている間にも爆発音は続いていた。ここで考えても意味がないと判断したツナは直接、乗り込んで確認することを決める。

製薬会社建物内部

「爆発音はあつちの方が……」

ツナは爆発音のする方へと走って向かって行く。建物内は狭い為、

飛ぶとぶつかる可能性がある。その為ツナは走っていた。

(何だ？ 人形？)

爆発音のする方へ向かって行く最中、ところどころに人形が置かれていることに気づいた。なぜ製薬会社にこんなにも多くの人形が置かれていることにツナは疑問を抱いた。

(テープか……？)

それと建物内の床や壁、天井に白いテープのようなものが貼られていた。これに関してはそこまで不自然ではないのだがツナには不自然に感じていた。超直感是对人にしか働かない。しかし今までの戦って来た経験からあのテープに違和感を感じたのである。

(気になるところだが、今は美琴が優先だ)

人形と白いテープのことを調べたかったが、今は美琴のことが気になる為、美琴の元へ急ぐことを決める。

一方で美琴は。

「あんたみたいなのが他にいるの？ 能力者ならその能力？」

(はっ……そんなの教える訳が……)

美琴は金髪の少女に尋問していた。少女は答える気などない様子だった。すると美琴は恐ろしい形相で金髪の少女の側に電撃を放った。

「黒焦げになりたくなかったら3秒以内に答えなさい」

「ひいー」

美琴はそう言うとかウントダウンを始めた。金髪の少女は美琴に脅されて恐怖していた。そしてこのままでは殺されると思ったのか

喋ることを決意する。

(し、舌が……痺れて声が出せない……)

少女は美琴の尋問に答えようとするも美琴の電撃によって舌が痺れてしまつてしまい答えを出すことができないでいた。そうしている間に美琴のカウントダウンが終了してしまふ。

「そう。仲間は売れないって訳ね」

(違うの！ 電撃で体の自由が……!?)

美琴は少女が喋れないことに気づかず、仲間を売らない為に喋らなかつたのだと判断した。

「そういうのを嫌いじゃないけどね」

美琴がそう言った。その時だった。美琴の真横の壁から緑色の光線が放たれた。その威力は凄まじく、鉄筋の壁を余裕で貫通する程の威力だった。

「あんまり静かだったから殺られちゃつたのかと思つたけど、危機一髪だつたみたいねフレンダ」

(麦野おー！)

貫かれた壁から茶髪のロングヘアの女性と、黒髪のショートヘアの女が現れた。この2人を見た途端、フレンダはパアッと明るくしていた。

「私らが合流するまでは足止めに徹しろつて言つておいたのに。深追いした挙げ句返り討ちにあつて捕まっちゃうなんて。撃破ボーナスに眩んだからつて何やつてんだか。ギャラの配分を考えないとね」

「……」

「大丈夫だよ。私はそんなフレンダを応援してる」

麦野の言葉を聞いてフレンダは反論することができず意気消沈してしまつていた。そんなフレンダを黒髪の女が励ましていた。麦野たちは雑談しているのに美琴は磁力で近くにあつたタンクを操りおもいつきを飛ばした。

「で？ あれが噂のインベーターね」

タンクは麦野に直撃されたと思われたが、タンクは消し飛ばされ麦野にダメージはなかつた。すると麦野が右手を前に出すと緑色の光

球が現れる。そして緑色の光球は形を変えて一直線に美琴の方へ伸びていく。美琴は光線を避けようとした。

その時

「え……!?!」

「は……!?!」

ツナが美琴とレーザーの間に割って入り麦野の光線を右手で弾き飛ばした。美琴はツナがここにいることに驚き、麦野は自分の攻撃が弾き飛ばされたことに驚きを隠せないでいた。

「む、麦野の原子崩しマルチダウナーを弾き飛ばした……!?!」

「発火能力者……!?!」

フレンダと黒髪の少女も麦野のレーザーを弾き飛ばしたツナに驚きを隠せないでいた。

「あ、あんた何でここに……!?!」

「その話は後だ。ここから逃げるぞ」

「待って！ 私はやらないといけないことがあるの！」

「……」

逃げるといってもなお美琴は引き下がらなかった。ツナは美琴の表情かおを見た途端、ツナは超直感で何かを感じ取っていた。

その時だった

「っ!?!」

ツナと美琴の体に悪寒が走った。その原因は黒髪の女の雰囲気きふいが先程と変わったからである。美琴は即座に床に電撃を放って煙幕を発生させた。煙幕が晴れるとそこに2人の姿はなかった。

「お前も気づいたか」

「ええ。何をしたのかわからいけど黒髪の女の雰囲気が変わったわ」

通路を走りながら先程の黒髪の少女の変化に美琴が気づいたことにツナは気づいていた。相手がどんな能力を使ってくるかわからない以上、無策に戦うのはリスクである。だから2人はあの場から離れた。

その時だった

「なっ!?!」

突如、通路から麦野のレーザーが貫通する。自分たちがどこにいたかわからないにも関わらず、光線が自分たちの所までやって来たことに2人は驚きを隠せないでいた。そこからさらに次々に光線が放たれていく。さらに光線だけでなくあちこちに仕掛けていた人形までもが爆発した。

「くっ!?!」

「美琴!」

「大丈夫!」

美琴はギリギリのところを躲したが爆風で吹き飛ばしてしまう。ツナは心配するが美琴は壁に磁力で壁に貼り付いていた。

（あの人形は爆弾……そしてあの白いテープみたいなものは導火線という訳か……）

ツナはあちこちに仕掛けられた人形と白いテープの役割を理解する。

（おかしい……）

ツナは違和感に気づく。先程から狙われているのが美琴でだけで自分には当たらないことに。爆弾は広範囲攻撃である為、ツナにも被害が及ぶ。しかし光線に関しては一点集中型の攻撃。絶対に当たらない訳ではないがツナだけは美琴と違って直接狙われていない。

（まさか!）

ここでツナは自分だけ狙われない理由を理解した。するとツナは美琴の前に出る。そして両手を前に出して炎の壁を展開すると再び光線が襲って来た。しかし光線はツナの炎の壁によって霧散してし

まう。

「わかったぞ。これがあの黒髪の女の能力だ」

「どういうこと?」

「さつきからお前は光線で直接狙われている。だが俺は狙われていない。つまり無能力者である俺には能力が働いていない」

「そ、それって……まさか!」

ツナの言葉を聞いて美琴も黒髪の女の能力が何であるか理解する。

「ああ。おそらく黒髪の女の能力はAIM拡散力場を追跡する能力だ」

AIM拡散力場。能力者が無自覚に周囲に放っている力である。ツナと美琴の違いは無能力者と超能力者。その違いにツナは気づいたからこそ、黒髪の女の能力を何なのか判明したのである。

「今から俺が戻ってあいつらを足止めする。その間にお前の目的を果たせ」

「な、何言ってるのよ!? こんなことに巻き込んでおいてそんなことできる訳ないでしょ!」

「巻き込んだんじゃない。俺が勝手に首を突っ込んだだけだ」

「けど……」

美琴はここでツナを置いて1人で行けない為、迷ってしまった。た。

「俺がここに来た理由は黒子が悲しんでいたからだ。最近、お前が帰って来ないことを心配していたからな。黒子はお前が何かを抱え込んでることは気づいていた。けどそれを調べようとすればお前の信頼を裏切ってしまうって嘆いていた」

「黒子が……」

「黒子を悲しませたくないならさつきと目的を果たせ。お前が本当に黒子のことを思うならな」

「……」

ツナは黒子の名前を出すことで美琴の迷いを立ち切ろうとした。美琴はどうするべきか必死に考えていた。

「お願いしてもいい……?」

「任せろ」

ツナの目論見は成功し美琴はツナに足止めしてもらおうことを決意した。それでも美琴はこの選択を後悔していたが、ツナなら大丈夫だと信じていた。

「あいつらの所に向かうまでには時間がかかる。それまでなんとか逃げ切ってくれ」

「わかった……」

「目的が終わったら落ち合うぞ。場所は俺とナッツがお前と最初に会った公園だ」

「わかったわ……」

そう言うと2人は同時にそれぞれ反方向へ飛び出して行った。

標的（ターゲツト） 148 大空（ツナ） VS 原子崩
し（麦野沈利）

一方で麦野たちは。

「おかしい……」

「どうしたの滝壺？」

ツナと美琴を追跡していた滝壺は違和感を感じていた。滝壺の発言が気になったのかフレンドは何があったのかを滝壺に尋ねた。

「電子能力者のAIM拡散力場は追跡できる。けど発火能力者のAIM拡散力場が追跡ができない」

ツナのAIM拡散力場を探知できないことに滝壺は困惑していた。ツナの予想は当たっていた。滝壺理后。能力名はAIM拡散力場のAIM拡散力場を覚えることで、能力者の居場所を感知することができる大能力者である。

「どういふこと？」

「わからない。とにかく私の能力が通じない……無能力者相手に使ってるのと同じ感じ……」

（滝壺の能力追跡にマーケティングされた能力者はたとえ地球の裏側にいようと追跡できる……能力者である限り滝壺の能力追跡から逃れられる術はない……奴はあきらかに発火能力者……にも関わらず追跡できない……妙ね……）

滝壺の言葉を聞いて麦野は腕を組んでなぜツナに滝壺の能力追跡追跡が通じないのかを考えるが、一向に答えが出ることにはなかった。彼女の名は麦野沈利。能力名は原子崩し。電子は通常、粒子か波形どちらかの性質を示す。麦野は粒子と波形二つの中間である、曖昧なままの状態に固定して強制的に操ることができる。簡単に言えば破壊力抜群の光線を出すことのできる能力である。そして学園都市にか7人しかいないとされる超能力者の1人である。序列は第4位である。

「結局、最初から滝壺の能力を知ってて、何かしらの対策を取ったとか

「じゃないの？」

フレンドはツナが滝壺の能力を阻害する対策を取ったのではないかと推測する。彼女の名はフレンド・セイヴェルン。無能力者^{レベル}ではあるが爆発物の扱いに長けており、能力者相手にも難なく対抗できる実力を持っている。建物内に仕掛けられた人形^{爆弾}はフレンドの物である。「じゃあもしかして私たちと同じ人間？」

「ゼロではないけど考えられるわね……」

滝壺の意見に麦野は納得する。彼女たちは普通の人間ではない。学園都市の暗部組織の1つ。組織名はアイテム。統括理事会直属の暗殺部隊である。統括理事会を含めた学園都市上層部や暗部組織の監視や暴走の阻止、そして学園都市にとっての不穏分子の削除、抹消が主な業務である。

その時だった

「やっぱりお前の能力はAIM拡散力場を追跡する能力だったか」

「「っ!?!」」

突如、ツナの声が聞こえた為、麦野たちは慌てて辺りを見回しツナを捜す。だがツナの姿はどこにも見当たらなかった。

「上……」

滝壺は驚きながら右手の人差し指で天井を指す。滝壺の言葉を聞いて麦野とフレンドは天井の方を向いた。そこには天井に両足をつけて逆さまの状態で立っているツナがいた。

「天井に貼り付いて……!?!」

「まさか多重能力者……!?!」

発火能力者であるのにも関わらず天井に貼り付いているのかわからずフレンドと滝壺は驚いてしまう。そんな中で麦野は取り乱すことなく天井にいるツナに向かって光線を放った。

「大した破壊力だな」

「「っ!?!」」

ツナは炎を逆噴射させて天井から一瞬にしてに麦野の背後へと移動した。ツナのあまりの移動速度に3人は驚きを隠せないでいた。

「てめえ！ 一体、何者だ!?!」

麦野は咄嗟に回し蹴りをツナに向かって放つ。ツナは再び炎を逆噴射させると麦野たちの後方の少し離れた場所へ移動した。ツナたちがいるこの場所は広い為、ツナが高速で移動しても何の問題もない。

「それはこつちの台詞だ。さっきの戦い方といい、その身のこなし。殺し屋のそれと同じだ。お前たちの方こそ何者だ？」

「っ!？」

(この短時間で私たちのことを見抜きやがった……!?)

ツナは今までの戦いの経験からこの3人がタダ者ではないということを見抜いていた。フレンド、滝壺、麦野はツナの推理力に驚きを隠せないでいた。

(このガキただのガキじゃねえ……!?! 何が目的かは知らないがここで消すしかねえ!)

麦野はツナを危険人物だと認定した。そして麦野の周囲に複数の緑色の光球が出現すると全ての光球から光線がツナへと一直線に向かって行く。

(破壊力が強いところや一点集中型の攻撃……XANXASに似てるな。だがXANXAS程じゃない)

ツナは光線を躲しながらかつて戦ったXANXASのことが脳裏に浮かんでいた。XANXASはボンゴレが誇る最強の暗殺部隊、ヴァリアーのボスにして死ぬ気の炎の亜種である憤怒の炎の持ち主である。憤怒の炎とはボンゴレファミリーの2代目ボス、ボンゴレII世セコンドが持っていたとされる炎であり2代目が激昂した時に見せたとされる炎のことである。憤怒の炎は通常の死ぬ気の炎よりも破壊力に特化している炎である。XANXASは7代目と同じ銃を使って憤怒の炎を一点に集中し放つという戦い方をしていた。

(このガキ……この短時間で私の攻撃パターンを見切つてやがる……!?)

麦野は次々に放たれたていく光線を躲すだけでなく攻撃を見抜いているツナに驚きを隠せないでいた。今までの戦いの経験と全てを見透かす力、超直感を持つツナだからこそ短時間で攻撃を見抜くこと

ができるのである。

「威力は高いがそれ以外はどうかということはないな」

「ああ!？」

「その能力は連射ができない上に広範囲の攻撃ができない。それに一定以上の出力を出そうとしない。正確に言えば出せないと言った方がいいのか」

（私の攻撃を見切るだけでなく私の能力の弱点まで見抜きやがった……!?!）

麦野は攻撃パターンだけでなく能力の弱点までも見抜かれたことに驚きを隠せないでいた。ツナの推測は当たっている。麦野の原子崩しは威力こそ強いものの連射できない。そして一定、以上の威力を撃とうとすると自分の体が吹き飛んでしまう。麦野が美琴より序列が低いのは能力の制御における部分が序列に影響している。

（XANXASの下位互換ってところだな……）

XANXASは麦野とは違い、威力は自由に調節できる上に連射も可能。攻撃を一点に集中するだけでなく広範囲攻撃も可能。それでいて破壊力は麦野よりも上。虹の代理戦争においては一撃でホテルの屋上を全て吹き飛ばしている。XANXASはまさに麦野の上位互換と呼べる存在である。

（大した洞察力だが私が広範囲攻撃できないって勘違いしてやがる。やっぱリガキだな）

拡散支援半導体。麦野の弱点を補うアイテムである。この半導体に自身の光線を当てると光線が拡散するのである。

（油断している今の内に拡散支援半導体であいつの体を抉ってやる）
ツナが広範囲攻撃がでないと油断している内に麦野は仕掛けることを決めると、口元を緩ませながら懐から拡散支援半導体を取り出す。

（ねえ!?!）

麦野は拡散支援半導体がなくなっていることに気づき困惑してしまっていた。

「探し物はこいつか？」

「てめえ！ いつの間に！」

ツナの右手には麦野の拡散支援半導体の束が握られていた。ツナは麦野の回し蹴りを躲した際に麦野の真横を高速で通過すると同時に麦野の懐にある拡散支援半導体を抜き取ったのである。

「お前の弱点はここに来る前からすでにわかった。そしてその弱点にちゃんと対策をする奴だったこともな」

ツナは美琴と一緒に移動していた際にすでに麦野の弱点を見切り、麦野が弱点に対策を講じる人間だということも理解していた。

「死ぬ気の零地点突破初代エディション」

「氷!？」

ツナは拡散支援半導体を凍らせて使えないようにする。能力は1人1系統であるにも関わらず、ツナが炎だけでなく氷を使ったことに麦野は驚きを隠せないでいた。

「時間稼ぎはこの辺で終わりだ」

「ガハッ!？」

そう言うとツナは炎を逆噴射させて麦野の間合いに一瞬にして移動すると、麦野の腹部に拳を叩き込む。加速によって威力が何倍にも底上げされた拳によって麦野は体が傾いてしまうのだった。

標的（ターゲット） 149 不可解

ツナの拳が麦野の腹部にモロに入る。麦野の体が徐々に傾いていく。

「このクソガキイ!!」

「っ!？」

だが麦野は床に倒れる前に体制を立て直した。しかし今の一撃で頭にきたのか、麦野は顔を歪ませながら光線をツナに向かって放った。ツナは即座に炎を逆噴射させて距離を取って光線を躲した。

「チヨロチヨロしてんじゃねえ!!」

（なんて耐久力だ……あの一撃を喰らって気絶しないなんて……）

麦野は次々に光線を放っていく。ツナは加速+死ぬ気の炎を纏った拳を叩き込んだのにも関わらず気絶しない麦野の耐久力に驚きを隠せないでいた。

（さつきより威力が上がってる……ますますXANXASにそっくりだな……）

XANXASは本気で怒るとゆりかごにて9代目につけられた古傷が浮かび上がり攻撃力が上がる。ツナはその時のXANXASと今の麦野が似てることに気づいた。

「さつきまでの威勢はどうしたあ!？ もう終わりかあ!？ もっと私を楽しませろや!!」

（正攻法でやっても意味がないな……）

ぶちギレたことよってテンションがハイになっている麦野を見て普通にダメージを与えても麦野は倒れることはないと理解する。

（あまり気は進まないがあれをやるか……）

時はツナが中学3年に遡る。

「いいかツナ。戦いの中で肉体が精神を上回って、本来なら気絶してもおかしくない程のダメージを受けてもなお気絶しねえ奴がいる。そんな奴を前にした時には人体急所を狙うのが一番だ」

ツナはリボーンとのスパーリングの最中、リボーンから話を傾けていた。

「それに人体急所を狙えば必要以上に相手を傷つけず即座に相手を倒せる。人を傷つけたくないお前にとって覚えておいて損はねえはずだぞ」

再び場面は戻り製薬会社

「いくぜ」

そう言うのとツナは炎を逆噴射させて光線を全て躲しながら再び麦野の間合いへと一瞬にして移動する。

「ガハッ!？」

ツナはアッパーで麦野の顎を攻撃した上空へ吹き飛ばした後に炎を逆噴射させて麦野の上空へと一瞬にして移動する。

「ゴフッ!？」

そしてツナはさらに麦野のみぞおちに拳を叩き込んだ。麦野のそのまま地面におもいつきり三日月で落下し気絶してしまった。

(人体急所の顎三日月とみぞおち水月を的確に……!?)

爆発物を扱えるだけでなく体術にも心得のあるフレンドはツナが
麦野の人体急所を的確に狙ったことに驚きを隠せないでいた。

（あの麦野を余裕で圧倒した上に……不可能なはずの能力の多数使用
……!?! 結局、何なのよこいつは……!?! こんな化け物が学園都市に
いるなんて聞いたことがないわ……!?!）

フレンドは強い麦野をも余裕で圧倒するような相手にどうすれば
いいかわからず頭の中が真っ白になってしまっていた。

（あれは……）

ツナは滝壺の様子がおかしいことに気づいた。滝壺は肩で息をし、
大量の汗をかき、明らかに疲弊していた。ツナは炎を逆噴射させて滝
壺の前へ移動した。

「っ!?!」

「滝壺……!?!」

いきなり目の前にツナが現れたことに滝壺は驚く。しかしあまり
の恐怖に動けないでいた。フレンドは滝壺を助けようと動こうとす
るも美琴から喰らった電撃のせいで体が痺れ、四つん這いの状態に
なってしまっていた。ツナは右手の人差し指に炎を纏うと滝壺に近
づけていく。滝壺は目を瞑ることしかできなかった。

「?」

だが滝壺は気づく。痛みや熱さが全くないくところか温かく安らぎ
を覚えていることに。そして自分の中にある淀みが消えていくこと
に。

「その能力、副作用があるようだな」

「え……!?!」

「俺の炎でお前の中の毒を浄化した。このまま使い続ければ間違いな
く死ぬぞ」

ツナは滝壺の体が今、どのような状態であるかを超直感で見抜いて
いた。ツナの予想は当たっており滝壺の体は毒のようなものに蝕ま
れている。理由は能力を使用ではなく、使用する際に使うアイテムで
ある。そのアイテムは体晶。正式名称は能力体結晶。絆理たちが木
原幻生の人体実験に使われた物と同じ物である。通常はデメリット

しかなく服用すれば絆理たちのように昏睡状態に陥ってしまう。しかし滝壺は暴走状態の方がいい結果を出せるのと能力の使用に体晶が必要である為、体晶を服用している。とはいえ負担は大きく、使い続ければ使った本人は死に至る。

「忠告はしたぞ」

「え……!?!」

そしてツナは振り返りゆっくりと歩みを進めて行く。滝壺はツナの言葉を聞いてキョトンとしてしまっていた。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 結局、あんたは何なのよ!?! 何がしたかったのよ！」

急に現れ麦野を倒したと思ったら、今度は滝壺を助けるという一貫性のない行動にフレンドはツナは一体、何をしにここに来たのかわからず叫ぶ。フレンドの言葉を聞いてツナは歩みを止める。

「俺は最近、あいつがどこかでフラフラしていると聞いて後をつけてここまで来たただけだ。結局のところあいつが何をしたのは知らないがな」

「あんた……まさか……結局、何も知らずにここまで来たっていうの……!?!」

「そうだ」

「そ、それだけの為に……!?!」

何も事情を知らないのにも関わらず美琴の為にここまでするツナにフレンドは驚きを隠せないでいた。

「じゃ、じゃあ何で滝壺を助けたのよ!?! 私はあんたたちを殺そうとしたのよ!?!」

「何を言ってる。目の前で苦しんでいる女の子がいたら助けるのが普通だろ」

「「え……!?!」」

ツナの言葉を聞いて滝壺とフレンドは驚きを隠せないでいた。

「じゃあな」

「あ、あの……」

「何だ？」

「あ、ありがとう……」

滝壺は勇気を振り絞って、自分を助けてくれたツナにお礼を言った。滝壺の言葉を聞いた後、ツナはそのまま黙って施設を出て行くのであった。

ツナが去ってから20分後。

「う、うくん……?」

「麦野!」

「麦野……」

ツナによって気絶させられた麦野が目覚める。麦野が目覚めたのを見て、フレンダと滝壺を表情かおを明るくする。

「私は……って! あのガキは!」

「も、もういないわ……」

「あの野郎……次会ったら絶対に殺してやる……」

麦野はツナに倒されたことを根に持ったのか、麦野は再び表情かおを歪ませていた。

「ん? 滝壺、能力を使ったのに顔色がいいわね。いつもならもっと顔色が悪くなるのに」

「あの発火能力者パイロキネシストが治してくれた……」

「助けた?」

麦野は自分を倒したのにも関わらず、滝壺を助けたことに違和感を感じていた。

(何を考えてやがる? そもそもあいつは一体、何者なんだ? そもそも私たちの今回の依頼依頼はあの電子能力者エレクトロマスターからの施設の防衛だったはず……一体、何がどうなってやがる……?)

麦野はツナの取った行動の意味、ツナの正体について考えるが答え

は出なかった。

「あ。ここにいたんですが。超お疲れ様です」

すると麦野たちの元へ小柄な茶髪のショートヘアの少女がやって来る。

「絹旗。何でここにいのよ?」

「あっちの仕事が終わったので」

「そう」

「それで? こちらは? 例の電子能力者は?」

「逃げられたわ。急に現れた発火能力者のせいだね」

「発火能力者?」

発火能力者と聞いて絹旗は疑問符は浮かべる。この少女の名は絹旗最愛。アイテムのメンバーの一人である。能力名は窒素装甲。空气中の窒素を

操ることができる大能力者である。

「侵入者は電子能力者だけじゃないんですか?」

「そのはずだったんだけどね。私だって何が何だがよ」

その時、麦野の携帯が鳴る。麦野は電話を出た。

「何? はあ? ……どういう……ちっ! わかったわよ」

麦野は電話に出たが何か文句のあるようであったが、途中で渋々、承諾すると電話を切った。

「超何かあったんですか?」

「仲介人からの連絡よ。統括理事会から今回、介入して来た発火能力者には絶対に手を出さなつてさ」

「統括理事会…!?!」

「何で統括理事会が…!?!」

「知らないわよ。統括理事会がそう言うなら従うしかないわ」

統括理事会と聞いてフレンダと絹旗は驚きを隠せないでいた。「とか何で発火能力者がいるってことを…!?!」

「統括理事会は私でさえ知らない技術を持つてる。下手に関わらない方が身の為ね」

滝壺はどうしてこんなにもツナが存在が統括理事会に知られてい

るのかわからないでいた。麦野は何かしらの技術で知ったと推測する。

こうしてアイテムとの戦いは幕を閉じた。

標的（ターゲット） 150 信じてる

アイテムを退けたツナ。一方で美琴は。

（あいつ……大丈夫かしら？）

目的を果たした美琴はツナに言われた場所に到着していた。

（ううん……沢田なら大丈夫よきつと……）

美琴はツナならきつと無事だと自分に言い聞かせる。ツナの強さは理解している為、大丈夫だと思いたいのだがどうしても不安が拭えないのである。

（でも沢田にはなんて言おう……）

美琴は今回の件をどうやって説明しようかと考えていた。あんなことがあつた為、誤魔化すことはできない。美琴は自分が何をしていたのかを話そうかどうか迷っていた。

「美琴」

「ひゃっ！」

美琴が迷っている間にかノーマル状態へと戻ったツナが自分の後ろにいた。美琴は急に話しかけられた為、驚きの声を上げてしまった。

「ご、ごめん……そんなびつくりさせちゃって……」

（あんなヤバい奴らと戦って無傷……相変わらず規格外ね……）

後ろから急に話しかけられたことにも驚いた美琴であったが、一番驚いたのはあれだけの相手にツナが無傷であることだった。

「それで？ 目的は終わり？」

「え……う、うん……」

「嘘つかないでよ美琴」

「っ!？」

ツナの問いにそう答えた美琴であったが、すぐにツナに嘘だと見抜かれてしまった。嘘がバレてしまったことに美琴は驚きを隠せないでいた。

「前に幻想御手事件レベルアップの時に佐天が嘘をつけてからわかるんだ。美琴が嘘をついてるって」

(バレた……もう正直に話すしか……)

さっきの発言が嘘だとバレてしまった為、美琴は正直に話すことを決める。

「別に無理して言わなくてもいいよ」

「え……!?!」

「美琴が何かを抱えてるっていうのはわかったよ。でも無理に話さなくていいよ。さっきも言ったけど今回は俺が勝手に首を突っ込んだだけだから。美琴が巻き込んだ訳じゃない」

「で、でも……」

「俺はただ美琴が何かを抱えてたから協力したかったのと黒子に元気になって欲しいかったただだよ。それにもうあんな思いをしたくないしや」

「あんな思い?」

前半の部分は何のことかわかったが、後半のあんな思いという意味がわからず美琴は疑問符を浮かべていた。

「幻想御手事件の時、佐天が悩んでることに気づいてたんだ。でも俺は佐天が自分から言うまでずっと待ってた。けどその判断のせいで佐天は昏睡状態になった……あの時、後悔したんだ。俺がちゃんと佐天にもっと寄り添ってあげられたら佐天はあんな目に遭わなくて済んだんじゃないかってさ……だから決めたんだ。悩んでる友達がいたら待つんじゃないかって手を差し伸べてあげようって」

「沢田……」

「だから無理に話さなくてもいいよ。俺はただ美琴が元気になってくれればそれでいいよ」

「それがたとえ間違ったことだとしても?」

「え?」

突然、美琴が変なことを言い出した為、ツナはキョトンとしてしまう。

「私が仮に間違ったことをしようとしていたとしてもあんなは私に協力するって言えるの?」

「大丈夫だよ。美琴はそんなことする人間じゃないって知ってるか

ら」

「そうかしら？ 私は戦いたくないって言ってるあんたの言葉を無視して戦おうとする女よ」

美琴の問いにツナは迷わずそう答えた。だが美琴は自分自身がツナの言うような綺麗な人間だとは思っていなかった。

「でも美琴はちゃんと自分の過ちに気づいて反省した。それに何よりあの時、すっごく辛そうな表情してたし」

『待って！ 私はやらないといけないことがあるの！』

ツナは先程の美琴の表情が脳裏に浮かんでいた。あの時、ツナは美琴がとても苦しんでいることに気づいていた。

「本当に悪いことしてたらあんな辛そうな表情をしないよ。本当に悪いことをする人間はあんな辛そうな表情どころか笑ってるよ」

ツナは今まで戦ってきた人のことを思い出す。悪いことと知りながらも本当に辛そうな表情をしながら戦っていた者。逆に悪いことだとすら思っておらず嬉々とした表情をしていた者。

「だから俺は美琴を信じるよ」

「全く……あんたってバカね……」

そう言う美琴ではあったが、ツナの言葉を聞いて嬉しかったのか少しだけ笑っていた。

「ついて来て」

「うん」

美琴がそう言うのとツナは首を縦に振りながらそう答える。そして走って行く美琴にツナは着いていく。

走ることに15分。着いたのは先程と同じような施設だった。

「ここよ」

「ここって……」

美琴に案内されてやって来たのは先程の製薬会社と似ている施設だった。

「おかしいわね」

「どうしたの？」

「電気機器が1つも稼働していない……」

「夜だし普通じゃない？」

「夜でも警備ロボや監視カメラは起動してるはずでしょ」

「あ。そっか」

「とりあえず中に入ってみるわ」

違和感を感じながらも美琴とツナは施設の中へと入って行く。

「ここね」

少し歩くと美琴はとある部屋の扉の前に止まる。美琴は扉を開ける為の装置に電流を流して部屋の扉を開けた。

「扉の前で待っていてくれない？　ここで誰か来ないか見張って欲しいの」

「わかった」

美琴はそう言うのと部屋の中に入る。ツナは美琴に言われた通り部屋の中に入らず部屋の外で見張ることにする。美琴は部屋の中で機械を操作していた。ツナは気になったが振り返らず自分の役目を真つ当することを決める。

「終わったわ」

「え？　終わったの？」

「ええ。とにかく一旦、ここを出ましよう」

部屋に入ってから1分足らずで美琴の目的が終わってしまった為、ツナは驚いてしまったが美琴が嘘をついていないとわかったので外に出ることにした。

「本当に助かったわ沢田」

（よかった……いつもの美琴に戻ってる……）

協力してくれたツナに美琴はお礼を言った。ツナは美琴がいつも

の美琴に戻ってくれた為、安堵していた。

「そういえば今さらだけど、どこから私を尾行して来たの？」

「え？ 美琴の寮からだけど……」

「私、あんたに寮の場所を教えたことあったっけ？」

「初春に聞いたんだ。そしたら知ってるって言ったから。黒子には聞けなかったからさ。あつ！ 初春には今回のこと言っていないから安心して！ 美琴が体調が悪そうだからお見舞いの品を持って行くって言うておいたから！」

「悪いわね……そこまで気を遣わせちゃって……」

「気にしないでいいよ。美琴が元気なってくれたならそれでいいよ」

「ありがとう沢田……」

「じゃあ帰ろっか」

「そうね」

美琴の目的も果たされツナと美琴はそれぞれの家路へと帰って行く。

だがこの時2人は知らなかった。この行いが全く意味を成さなかったということ。

標的（ターゲット） 151 妹

夜が明け8月20日。再び日常に戻る。

「ふわあ……」

ツナはあくびをしながらパトロールしていた。夜中に活動して夜中に帰ったのでツナは若干、睡眠不足であった。ツナは自分の家には帰っていない。事前に佐天とリボンには風紀委員ジャッジメントの仕事で遅くなる為、佐天の寮に泊まって行くと伝えておいた。

「色々であったけど……美琴が元気になってくれたこと、本当によかったですよ……」

色々であったが美琴が元気になってくれたことがツナにとって何より嬉しかったのである。

「あれ？ おつかしーなー？」

「あれ？ 当麻？」

しばらく歩いているとツナの視界に自動販売機の前で何かしている当麻が写った。

「何してるの当麻？」

「おう沢田か。実はちよつと困っててさ」

「え？ 何かあったの？」

「実はこの自動販売機でジュースを買おうと思ってお金を入れたんだけどよ。ジュースが買えないんだよ。しかもお金も返って来なくてさ」

「それって機械の故障だね？ 業者に電話した方がいいと思うよ」
「そうだな」

当麻から事情を聞いてツナは業者に電話することを提案する。ツナの提案を聞いて当麻は携帯を取り出すと、業者に今回の事件を連絡しようとする。

「何やってんのよあんたたち？」

「げっ！ ビリビリ！」

「御坂美琴って言ってんでしょが！」

そんな時、美琴がやって来る。当麻は美琴を見た途端、嫌そうな顔をする。美琴は相変わらず名前では呼ばない当麻に苛立ちを覚えていた。

「お、俺は今それどころじゃねえ！ お前と戦う気はねえぞ！」

「戦わないわよ」

「え？」

「悔しいけど決めたのよ。もう相手の意思を無視して戦うことはしないってね」

いつもならすぐに勝負を挑んで来るはずの美琴が戦わないと言ったことが当麻には信じられないでいた。美琴の言葉を聞いてツナは少しだけ微笑んでいた。

「な、何かあったのか……？ ビリビリが戦いを止めるとか、まさか天変地異の前触れか……？」

「人がせっかく改心したっていうのに……素直に受け止めなさいよ！」

だが当麻は美琴が勝負を挑むのを止めたということが逆に恐怖してしまっていた。せっかく改心したのにも関わらずこんな反応をされてしまった為、再び怒りを露にした。ツナは苦笑いしてしまっていた。

「それで？ 何してたのあんたら？」

「あー。実は当麻がこの自動販売機でジュースを買おうとしたんだけどお金が返って来なくなっけ。だから業者に電話しようとしてたんだよ」

「何だそんなこと。そんなまどろっこしい真似しなくても大丈夫よ。私に任せなさい」

「!?」

ツナが経緯を説明すると美琴は自動販売機の前へ移動する。美琴は任せろと言ったがツナと当麻は美琴が何をするのかわからず疑問符を浮かべていた。

「ちえいさー！」

「なっ!？」

美琴は右足でおもいつきり自動販売機の横を蹴った。蹴った瞬間、警報が鳴り響き、中から大量のジュースが出て来た。あまりの美琴の破天荒な行動にツナと当麻は驚きの声を上げた。

「思ったよりいっぱい出たわね。とりあえず3人で分けましょう」

「逃げるぞ沢田！」

「ええ!？」

「ちよっ!? 何で逃げんのよ!？」

当麻は右手でツナの左手首を握るとそのままツナを連れて逃げる。美琴はせっかく損したのを取り返して上げたのにも関わらず、逃げる2人を見て美琴はジュースを全て拾い上げた後、2人を追いかける。「ほい。あんたらの分」

「これももう犯罪だろ……」

「一応、俺も風紀委員ジャッジメントなんだけど……」

美琴は何の悪気もなくジュースを投げて渡す。結局、2人とも美琴から逃げ切ることはできなかった。当麻とツナは複雑な気持ちになりながらジュースを受け取るようになってしまった。いた。

「ねえ美琴……いつつもこんなことやってるの?」

「あ、あの自動販売機は前に私の1万円札を飲み込んだのよ! 別にいいでしょ!」

「え……? そもそも自動販売機って1万円札って使えないんじゃない?」
「……? 使えるのって普通1000円札までじゃない……?」

「「え……?」」

ツナは美琴の言っていることに違和感を覚える。ツナの言葉を聞いて美琴となぜか当麻まで驚きを隠せないでいた。

「いや……自動販売機のおつりって普通、小銭でしか返って来ないし……」

「……」

(やべえ……何で2千円札、入れたんだろう……俺……)

ツナの言葉を聞いて美琴は自分のしでかした過ちに気づく。同じく当麻も美琴と同じようになってしまっていた。先程、当麻は2千円札を中に入れたのである。ツナは学園都市の自動販売機の事情を把

握している訳ではない。だが大抵の自動販売機であれば1000円札以外のお札を自動販売機に入れると受けつけず戻って来るのが普通である。

「お姉様？」

「え？」

すると知らない女性の声がある。ツナと当麻が振り返るとそこには常盤台の制服に身を纏い、美琴と瓜二つの顔をした少女が立っていた。唯一の違いは額にゴーグルを装着しているという部分だけである。

「同じ顔……」

「遺伝子レベルで同質ですから。とミサカは答えます」

「ああ……双子なのね……」

（美琴って妹いたんだ……じゃあ、あの時見たのは美琴の妹だったんだ……）

御坂妹と当麻の会話を聞いてツナは昨日、パトロールの時に見たのは妹の方だったということを理解する。

「先程、ミサカと同質の力を確認してたので見て来たのですが現場には壊れた自販機。大量のジュースを持つあなたたち。まさか窃盗の片棒を担ぐとは……」

「おい！ 主犯はお前の姉ちゃん！ 俺は傍観者だぞ！」

「電子で自販機表面を計測した結果、最も新しい指紋はあなたものです」

「嘘!? そんなことまで分かんのか!?」

「嘘です」

（か、顔に似合わず結構お茶目……）

御坂妹の言葉を聞いて当麻は動揺するが、すぐに冗談と言われて安堵する。一方で凄く無表情な御坂妹が意外な一面を見せた為、少し驚いてしまっていた。

「どうして……あなたがこんな所でブラブラしてんのよ!!」

「美琴……?」

突如、美琴が御坂妹に向かっておもいきり叫んだ。急に美琴が大

きな声を出した為、ツナは困惑してしまっていた。すると美琴は妹を連れてどこかへ行ってしまった。

「美琴……」

「止めとこうぜ。家族の問題に他人の俺たちが安易に介入するべきじゃねえよ」

ツナはただならぬ美琴の雰囲気になったのかツナは美琴たちを追いかけようとするも当麻がそれを止める。当麻の意見も最もなのでツナは追いかけることを止めることにする。

(どうしたんだろう……美琴……)

せっかく美琴が元気になったのにも関わらず、また様子がおかしくなってしまった為、ツナは心配になってしまうのであった。

標的（ターゲット） 152 心

美琴が妹を連れて行った後、当麻は先に寮へ帰って行った。

「はい。はい。よろしくお願いします」

ツナは携帯で先程の自動販売機の業者に故障していることを伝えていた。

「これでよしと……そろそろ帰らないと……」

美琴たちのことが気になったツナであったが、今はパトロール中である為、いつまでもここにはいられないのでツナは支部に戻ることを決める。

「あ……」

戻ろうとした矢先、御坂妹が自分の方にやって来たことに気づいた。当麻は家族との問題に介入すべきではないと言ったが、美琴と何かあったのか気になってしまった為、ツナは聞くことにする。

「あ、あの……」

「あなたは自販機泥棒の片割れの方ですね。とミサカは思い出しします」

「違うからね!? 俺は泥棒なんてしてないからね!」

凄いい真面目な話をしようと思っていたツナであったが、御坂妹の発言のせいでいつものようにツッコミを入れてしまった。

「何か用ですか? とミサカは尋ねます」

「用っていうか……さつき向こうで何を話したのかって思てさ……なんか美琴の様子がおかしかったからさ……何かあったんじゃないかと思つてさ……別に言いたくないなら無理にとは言わないんだけど……」

「大した話はしていませんよ。とミサカは先程の会話の詳細をについて話します」

「そっか……」

何も情報が得ることができなかつた為、ツナががつくりしてしまう。

「ただお姉様にその声でその姿で私の前に現れなくてくれと私に言いました。とミサカはお姉様の言っていた言葉をそのままあなたに伝えます」

「な、何で……!?!」

御坂妹の話をツナは信じることができずショックを受けていた。

「ど、どうして……美琴がそんなことを……!?!」

「私にもわかりません。とミサカは答えます」

どうして美琴が家族妹にそんなことを言うのかわからずツナは御坂妹に詳細を尋ねる。しかし御坂妹ですらその真意はわからないようであった。

「ですがその時、私は違和感を覚えました。とミサカは自分自身のことについて伝えます」

「違和感?」

「お姉様の言葉を聞いた途端、胸部が痛みが走りました。とミサカはこれが何なのかわからないでいます」

(え? それって……)

御坂妹の話を聞いてツナはなぜ胸部に痛みが走った理由を理解すると同時に、その痛みの理由がわからないでいることに少しだけ困惑してしまっていた。

「ミサカはどこが悪いのでしょうか? とミサカは病気の線を疑います」

「まあ……病気といえば病気だよ。心のね」

「心ですか? とミサカは尋ねます」

「うん。きつと美琴の言葉がショックで悲しくなったんだよ。だから痛みが走ったんだよ」

「悲しい? そんな訳はありません。とミサカはあなたの言葉を否定します」

「え?」

「ミサカには感情なんてものはありません。おそらく何かしらの病気にかかっているのだと思います。とミサカは推測します」

「誰にだって感情はあるよ。じゃなかったら美琴の言葉を聞いて痛み

が走るなんてことはないよ」

「どうしてそう言い切れるのですか？ とミサカは明具体的な根拠を求めます」

「俺、中学の時さ。勉強も運動も何もできなかったんだ。そのせいでずっと周りの人からダメツナって呼ばれてバカにされて友達もいなかったんだ。その時はずっと苦しかったんだ。いつも胸が痛くて痛くて……苦しくてずっと悲しかったんだ……」

御坂妹に根拠を求められた為、ツナは中学時代に体験したことを伝えた。

「だからわかるんだ。今の君がああ時の俺と同じだって。多分、君はその悲しいっていう感情がわからないだけで何も感じてない訳じゃない。ちゃんと君にも感情はあるんだよ」

「わかっていない……ではどうすればこの痛みが治るのでしょうか？

とミサカは具体的な治療法を尋ねます」

「そりや美琴と仲直りするのが一番の治療法だと思うよ。君が美琴を受け入れてくれればその痛みも消えていくよ」

「あなたもそうだったのですか？ とミサカは尋ねます？」

「うん。自分のことを受けて入れてくれた大切な友達がいたから、俺の心の傷はなくなった。心に傷を負ってもみんながその傷を埋めてくれたんだ」

ツナの脳裏には自分のいた世界の仲間の姿が脳裏に浮かんでいた。

「美琴が君に酷いことを言ったのは何か事情があると思う。きっと美琴も君と同じで悲しんでると思うよ」

「なぜそんなことがわかるのですか？ とミサカは尋ねます」

「友達だから。美琴は根はとっても優しく友達想いな子だって俺は知ってるから」

自分の意思を無視して勝負させようとしてきたこともあったが、ツナは美琴がどのような人間であるかということとはちゃんと理解していた。

「それでもし先程のお姉様の言葉が本当であったならばあなたはどうするのですか？ とミサカは尋ねます」

「それだったら美琴と君が仲良くなれるように協力するよ」

「あなたがですか……？ とミサカは少しだけ困惑します」

「うん。だって放っておけないもん。美琴と君が困ってるのを見るのはさ。やっぱり友達だからさ」

「私とあなたは友達なのですか？ とミサカは尋ねます」

「え？ 違うの？」

「まだ出会って間もないあなたを友達認定するのは早すぎだと思うのですか。とミサカは伝えます」

「友達になるのに時間とか関係あるの？ 正直、俺は君のことを友達だと思ってるよ。話しててすっごく楽しいし」

御坂妹はまだ出会ってほんの少ししか経過していないのにも関わらずツナが自分のことを友達だと呼んだことに違和感を覚えていた。ツナはキョトンとした表情でそう答えた。

「美琴が本当に君を否定したとしても俺は君のことを絶対に否定しないから。俺が君の側にいるよ。だから大丈夫だよ」

「え……!？」

ツナが笑顔でそう言った途端、御坂妹は鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情かおをしていた。

「あつ！ やばつ！ もうこんな時間だ！」

ツナは公園に設置されてあつた時計を見て、そろそろ支部へ戻らないといけないというのを思い出した。

「ごめん！ 俺、そろそろ戻らないといけないから！」

そう言うとツナは走って支部の方へと帰って行く。だがすぐに御坂妹の方を振り返った。

「何か困ったことがあったら風紀委員177支部に来てね！ 俺、そこにいるから！ また会おうね！」

そう言うとツナは再び、走って支部へと戻って行った。一方で御坂妹はツナが走って行った方向を見たままその場で立ったままでいた。

『美琴が本当に君を否定したとしても俺は君のことを絶対に否定しないから。俺が君の側にいるよ。だから大丈夫だよ』

「なぜでしょう？ 先程の言葉はとても温かくて、胸の痛みが無く

なつたのは……とミサカは自分自身に起きた変化に困惑します……」

標的（ターゲット） 153 第1位

御坂妹と初めて出会った次の日。8月21日。

「ええ!? また美琴の様子がおかしくなった!？」

「はいですの……」

ツナは支部の医務室で黒子と2人つきりでした。そして黒子から再び美琴のことを聞いてツナは驚きを隠せないでいた。

「今日の朝……なぜかヤケになられているように感じましたの……」

（昨日、美琴の妹と喧嘩したと関係があるのかな……?）

黒子は朝、起きた時の美琴の様子を話した。ツナは黒子の話を聞いて美琴の様子がおかしいことと御坂妹と喧嘩したことと何か繋がりがあるのではないかと心配する。

「その様子だと沢田さんも何も知らないようですわね……」

「うん……」

「もう嫌ですわ……せつかく元気になられたと思ったのに……私はどうすればいいんですの……」

「黒子……」

せつかく元気になって喜んでいたが、また美琴の様子がおかしくなってしまうた為、黒子は悲しい表情をしまっていた。前よりも悲しい表情をしている黒子を見てツナも悲しくなってしまうた。（ただの姉妹喧嘩なら黒子に隠す必要はないはず……やっぱり美琴に何かあったのかも……）

姉妹喧嘩をしたことをわざわざ黒子に黙っておく理由はない為、ツナは美琴の身に何かあったのではないかと推測する。

（風紀委員の仕事が終わったら美琴を捜してみよう……）

考えてもわからないので風紀委員の仕事が終わったら美琴を捜すことを心に決める。

そして時刻は進み夕方。ジャツメン風紀委員の仕事が終わった後、ツナは美琴を捜しに街へと出て行く。

「やっぱり携帯にも出ない……」

ダメ元でツナは美琴の携帯に電話するが美琴は出ることはなかった。

「やっぱり手がかりなしで捜すのは無謀か……」

学園都市の中から手がかりなしで一人の人間を見つけることは容易なことではない。しかし現状、こうする以外に美琴を捜す方法がないというのも事実だった。

「ダメだ……見つからない……」

美琴を捜すこと1時間。夕日が沈み辺りは暗くなり、街頭が点灯し始める。

「今日もまた言っておかないといけないな……」

ツナはリボーンに連絡して今日もまた佐天の寮に泊まることを伝える為、ツナはポケットから携帯を取り出した。

その時だった

「っ!？」

ツナの超直感をもの凄く嫌な気配を感じ取った。嫌な気配を感じ取ったのはツナの横にある路地だった。

(何だ……凄い嫌な感じがする……)

美琴を捜している途中ではあったが、この嫌な気配を放っておけなかった為、ツナは27と書かれた手袋を両手に装着すると路地の中を進むことを決める。

路地

(嫌な感じが強くなってく……)

ツナは周囲を警戒しながらおそるおそる路地を歩いて行く。そして路地は奥に進めば進む程、嫌な気配が強くなっていくことを感じ取っていた。

「え……!?!」

そしてツナはありえない光景を目にした。ツナの少し先。そこに瀕死状態の御坂妹が倒れていたのだから。

「だ、大丈夫!?! 何があったの!?!」

「あ、あなたは……どうして……ここに……とミサカは……尋ねます……」

ツナが尋ねると御坂妹は右目だけを開けながら掠れそうな声で答えた。

(とにかく救急車を……)

ツナはポケットの中にある携帯を取り出して救急車を呼ぼうとする。

その時だった、

「オイオイ。部外者が紛れ込んでんじゃねエか」

「え……!?!」

するとツナと御坂妹の白髪の青年がやって来た。突然、青年が現れたことにツナは驚いたのではない。こんな状況であるのにも関わらず、青年が助けを呼ぶどころか動揺していないことに驚きを隠せないでいた。

「こういう場合はどうすればいいんだア? 実験は中止かア? それとも実験の内容が口外されねエように口封じの為に消しておいた方がいいのかア?」

「実験……!?! 何を言って……!?!」

ツナは動揺すると同時に、青年の言っている実験という意味がわか

らず困惑していた。

「お前がこの子やったのか……!?!」

「だったらどうするってンア？ まさかこの俺を倒すとかって言うんじゃねエんだろうなア？」

ツナは怒りを露にしながら尋ねると青年は自分が御坂妹に手をかけたことにもたいして謝罪するどころか、不気味な笑みを浮かべながらそう答えた。

「俺を学園都市第1位の能力者。一方通行と知ってて言ってるのかア？」

「学園都市第1位……!?!」

「その方の言うことは本当です……と……ミサカは……伝えます……」

一方通行と名乗った青年が自分の正体を明かした。ツナは一方通行の正体を聞いて驚きを隠せなかった。御坂妹は一方通行の言うこと本当であるということをつなに伝えた……

「逃げて下さい……とミサカは……警告します……」

「君を置いて逃げられる訳ないだろ！」

「問題ありません……私は……この為だけに……生まれた存在……とミサカは……自分の存在意義を……主張します……」

「何を……!?! 言ってる……!?!」

「そいつの言う通りだ」

ツナは御坂妹の言っていることの意味がわからず動揺する。一方通行は御坂妹の言葉を笑いながら肯定した。

「そいつは人間じゃねエ。俺に殺される為に生まれたただの実験動物だ」

「本気で……言ってるのか……!?!」

一方通行は邪悪な笑みを浮かべながらそう言った。一方通行の言葉を聞いてツナは怒りは頂点に達する。

「何、怒ってんだよ。そいつは実験動物だって言ってるんだろ。実験動物の分際でこの俺に役に立ってんだ。感謝されてもいいぐらいいだぜ」

「ふざけんな!!」

一方通行がそう言った瞬間、ツナは叫んだ。そしてツナの額にオレンジ色の炎が灯り、27と書かれた手袋がボンゴレギアへと変貌し、瞳の色がオレンジ色に変化した。

「人の命を何だと思ってるんだ!!」

「発火能力者か。だが雑魚には変わりねエ。いいぜ。どこからでもかかって来いよ。すぐに無惨な死体にしてやるよオ」

「ナッツ!! 形態変化!!」

アクセラレータの言葉を聞いた後、ツナはナッツを通常モードで形態変化させた。するとツナのボンゴレギアに噴射口が取り付けられる。

「ここでお前を倒す!!」

「何だア? さっきの手袋と今のパーツの変化は……」

一方通行はボンゴレギアの変化と形態変化による変化を見て違和感を感じた。

「まあいい。どんな手を使おうが所詮は三下……俺の前じゃ何の意味も成さねエ」

だが一方通行は微塵も動揺などしていなかった。そしてツナは手を開いた状態の右手を左手で抑え、アクセラレータに照準を定める。それでもなアクセラレータは動揺するどころか、戦闘の構えすら取ることはなかった。

「Xカノン!!」

「ああ?」

ツナは一方通行に向けていた手の標準を自分の真下に下げて、地面に向かって炎を撃った。放った炎の影響で路地に煙が上がる。一方通行はツナの意味不明な行動に違和感を覚える。

「視界を断って不意打ちを仕掛けるって寸法かア……今まで俺に挑んで来た奴よりはマシだが所詮は三下……考えることが単純だ……」

一方通行はすぐにツナの考えを理解するが、それでもなお戦闘態勢を取ることはなかった。

「攻撃が来ねエ……まさか!」

すると路地に発生した煙が一瞬にして吹き飛んで行く。煙が晴れるとそこにはツナと御坂妹の姿はどこにもなかった。

(あの発言は嘘……あの三下、最初から俺と戦うことなんて考えてやがらなかった……あの実験動物を逃がす為に……!?)

ツナはあえて能力を解放し倒すと発言したことで一方通行と戦う意思があると思わせた。その上で煙幕を発生させることで一方通行に煙幕で視界を断って不意打ちしてくると思わせ、その間に御坂妹を連れて逃亡したのである。ツナは自分の強さに絶対の自信を持っている一方通行を利用し、御坂妹を助けたのであった。

(舐めやがって……!?! 三下の分際で……!?!)

自分の心理を利用されたのが余程、気に食わなかったのか一方通行は表情を歪ませていた。すると一方通行は全くのノーモションから一気に跳躍し上空へ移動する。

(俺を出し抜いたのは素直に褒めてやるぜ三下ア……だがこの俺を出し抜いておいて逃げられると思うなよオ)

一方通行は人を抱え、この短時間で長距離移動は不可能だと踏んで上空からツナから捜すことにする。

(どオいうことだ? どこにもいやがらねエ……)

だが一方通行の視界にツナの姿を捕らえることはできず、違和感を覚える。すると一方通行は空中を足場にするかのように移動する。

(クソがア!! どこまでも俺をコケにしやがって!!)

捜しても捜してもツナが見当たらない為、一方通行は苛立ちを覚える。

一方、ツナが入った路地の反対側。その路地の裏を出た先にある古

本屋。

「あれ？ どこに行ったんだあいつ？」

古本屋の中から本を持った当麻が出て来る。誰かを捜しているのか当麻は周囲をキョロキョロしていた。

標的（ターゲツト） 154 どうして

アクセラレータを見事出し抜いたツナは御坂妹を連れて逃亡することに成功する。そしてツナがアクセラレータから逃げることできたのには理由がある。

「山……とミサカは……急に知らない場所に来たことに……困惑します……」

御坂妹は路地にいたのにも関わらず急に自分たちが山に移動したことに驚きを隠せないでいた。今、ツナたちがいるのは並盛山。ツナの住んでいる世界である。アクセラレータがどんな能力を持っているかわからない以上、逃げ切ることはできない可能性を念頭に置いていた。煙幕が上がっている間に異世界転送装着を起動させてツナは御坂妹ごとこの世界に転送させたのである。いくらアクセラレータが強くともこの世界に来ることは絶対に不可能。この場所はツナがいつも修行の場であるが、基本的に人はやって来ない。それに加えてもう佐天も帰っている時間である為、佐天もいない。治療するのはうってつけの場所なのである。だからこそツナはこの場所を逃亡先に選んだ。

「死ぬ気の零地点突破初代エディション」
ファースト

「氷……!?!」

ツナは御坂妹の傷口を凍らせて止血していく。御坂妹は1人1系統しか使えないはずなのに複数の能力を使えることに驚きを隠せないでいた。

（止血はしたがこのままじゃ……）

止血はしたがこのまま放っておけば命に関わることをツナは理解した。するとツナは超ハイパー化を解いて、27と書かれた手袋を外してポケットから携帯を取り出した電話をかける。

『ツナか？ お前、どこで油売ってんだ？ ママンと佐天が……』

「リボーン！ 並盛山に来てくれ！ 今すぐに！ お前の力が必要なんだ！」

『っ!?!』

ツナが電話をかけた相手はリボーンだった。リボーンは晴属性の死ぬ気の炎の持つている上に、治療の心得がる為、ツナはリボーンに御坂妹の治療させようと考えていた。リボーンはツナの様子がおかしいことにすぐに気づいた。

「落ち着け。何があったの説明しろ」

「美琴の妹が襲われたんだ！ 早く治療しないと命が！」

『わかった。今、行く』

リボーンは美琴に妹がいるという点が気になったがリボーンは今からツナたちの所へ行くということだけを伝えるところに電話を切った。

「もう大丈夫だよ！ すぐにリボーンが治療してくれるから！」

「どうしてミサカを……助けたのですか……？ とミサカは……あなたの行動に……疑問を覚えます……」

ツナは御坂妹に助かるということを伝えたが、御坂妹はなぜ自分を助けるのかわからず困惑してしまっていた。

「助けるよ!! だって友達じゃないか!!」

「ミサカは……殺される為だけの……存在……助けても何も意味はありません……とミサカは再びあなたに……自分の存在意義を……伝えます……」

「何でそんなこと言うんだよ!! 君は殺される為だけの存在じゃない!! まだ出会ってほんのちよつとしかないけど俺にとって君は大切な存在なんだ!! 君は俺の大切な誇りなんだ!!」

「誇り……?」

ツナは素直に自分の想いを御坂妹に伝えた。御坂妹はツナの言う誇りが何なのかわからず困惑していた。

「誇りっていうのは譲れないもの……俺にとって君は譲れない存在なんだ!! 君がいなきやダメなんだ!!」

「ミサカは殺される為だけにいる存在……それが自分の役割だと私は思っています……なのにどうしてあなたは私にそこまで……どうしてなのですか……?」

「俺は君を失いたくないんだ!! 嫌なんだ!! 辛いんだ!! 悲しいんだ!! 俺は……君に生きていて欲しいんだ!!」

「生きていて欲しい……?」

ツナは大声で御坂妹に伝える。だが御坂妹はツナの言っている意味がわからず驚きを隠せないでいた。

(どうして……どうしてあなたのそんな顔を見ると……胸に痛みが走るのでしょうか……)

御坂妹は辛そうな表情かおをしているツナを見た途端に胸部に痛みが走るのを感じていた。

(どうして……どうしてあなたのそんな顔を見るのが嫌だと感じている自分がいるのでしょうか……)

御坂妹は辛そうな表情かおをしているツナを見たくないということを感じていた。

(どうして……どうしてあなたのそんな顔を見ると……こんなものが……)

御坂妹の両目から涙が流れていた。しかしそれが何なのかかわからず御坂妹は困惑してしまっていた。

「これは何なのでしょう……? とミサカは今まで自分自身に起こったことのない現象に……困惑します……」

「涙だよ」

「涙ですか……とミサカは尋ねます……?」

「うん。それは本当に辛い時に流れるものだよ。それが流れるってことは君にもちやんと感情はあるんだよ。感情がなかったら涙なんて絶対に流れない」

「感情……本当にそんなものが……とミサカは自分の知られざる部分を知ってに驚きを隠せないでいます……」

ツナの言葉を聞いて、御坂妹は自分の中に本当に感情というものがあつたということに驚きを隠せないでいた。

「そいつが美琴の妹か?」

「リボン!」

「あの方が……? とミサカは流暢に喋る謎の赤ん坊に戸惑いを隠せ

ないでいます……」

リボーンがやって来るとツナは表情を明るくさせる。御坂妹はリボーンの存在に驚きを隠せないでいた。

「こいつは酷えな……が今から治療すれば問題はねえ」

「本当!? よかった……」

(にしてもいくら双子や姉妹だったとしても美琴とあまりに似すぎてやがる……考え過ぎか?)

リボーンは御坂妹の怪我の具合から助けられると判断する。助けると知ってツナは安堵する。だがリボーンは御坂妹と美琴があまりにも似すぎていた為、違和感を覚えていた。

(私が治る知った途端、あんなに嬉しそうに……本当にあなたは私に生きていて欲しいのですね……とミサカはあなたの気持ちを理解します……)

自分が助かると知って安堵しているツナを見て、御坂妹はツナの思いを理解する。

「ミサカは……今から独り言を呟きます……とミサカは宣言します……」

「え……?」

急に御坂妹が訳のわからないことを言い始めた為、ツナは違和感を覚える。

「私は学園都市で七人しかいない超能力者……御坂美琴お姉様の量産軍用モデルとして製造された体細胞クローン……妹達です……とミサカは自分の正体を明かします……」

「え……!?!」

御坂妹の発言を聞いてツナは驚きを隠せないでいた。

今、明かされる御坂妹の正体!

標的（ターゲット） 155 絶対能力進化（レベル6
シフト）計画

御坂妹は自分の正体を明かす。

「クローンって……人間のDNAから作られるっていう……あの……!?」

「はい……とミサカは答えます……」

（どおりで似てる訳だ……）

ツナの言葉を御坂妹は肯定する。リボーンは美琴と御坂妹があまりにも似ているという理由を理解する。

「だがクローンはクローン技術規制法っていう法律で禁止されてるはずだ。学園都市にも日本の法律が適応される。それを犯してまでクローン人間を作ったってことは何か目的があるってことだろう？」

「はい……全ては絶対能力進化計画の為です……とミサカは自分が作られた理由を説明します……」

「レベル6って……学園都市を能力者のレベルは超能力者^{レベル5}までじゃ……」

「学園都市の目的……神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの……その境地に辿りつくには超能力者^{レベル5}では辿りつけないのです……そこに辿りつくにはミサカを殺す必要があるのです……とミサカは……説明します……」

「ど、どういふこと……!?」

絶対能力者^{レベル6}に辿りつくことと、御坂妹を殺すことがどう繋がるのかツナはわからず困惑する。

「絶対能力者^{レベル6}に辿りつけるのは……学園都市最強の能力者……アクセラレータ^{アクセラレータ}一方通行^{シスターズ}ただ1人……そしてアクセラレータ^{シスターズ}が妹達^{シスターズ}を2万回、殺すことで絶対能力者^{レベル6}に辿りつけるのです……これが絶対能力進化計画の詳細です……ミサカは計画の詳細を説明します……」

「何だよ……それ……!?!」

「イカれてやがんな」

あまりにも酷い計画にツナはショックを受けており、リボーンですら憤りを覚えていた。

「じゃあ美琴の様子がおかしかった原因って……」

「どういうことだツナ？ 何か知ってんのか？」

「最近、美琴の様子がおかしかったんだ。寮にほとんど帰らなかったり、夜中に研究施設に忍び込んだりしてたんだ。そしてこの子と会った時、また様子がおかしくなったんだ……」

「成る程な。美琴の奴は何らかの方法でこの計画のことを知って動いてたわけか。昨日、お前が帰って来なかったのは美琴が何をしてんのか探ってた訳か」

ツナが最近の美琴の行動を話すとリボーンは昨日、ツナが帰って来なかった理由を理解した。

「2万回……妹達……ってことはお前以外にもクローンがいるってことでいいのか？」

「はい……ミサカの検体番号は10031号です……とミサカは自分の詳細を説明します……」

「つーことはすでにお前らは一方通行って野郎に10030回、殺されてるってことか」

「その通りです……とミサカは答えます……」

「そんな……」

リボーンは御坂妹の検体番号から、現在どのくらいの妹達が殺されたのかを割り出した。ツナは妹達がそんなにも殺されたと知ってショックを受ける。

「何で……何で……せつかく生まれたのに……何で殺されなきゃならないんだよ……君たちが何したって言うんだよ……」

ツナの両目から溢れんばかりの涙が零れ落ちる。友達を何よりも思いやるツナが悲しまない訳がなかった。

「どうしてこのことを俺たちに話した？ こいつは明らかに公表できねえような機密事項だぞ」

「今までミサカは……殺される為だけに生まれた存在……そう周りに
言われ……ミサカ自身もそれが当たり前だと思つて生きていました
……」

御坂妹の脳裏にはこの計画に携わる研究者たち、この計画の要とな
る一方通行アクセラレータが浮かんでいた。

「でもあなただけは違つた……ミサカを絶対に否定しない……大切な
存在……生きていて欲しいと言つてくれました……」

だがそんな中で唯一、ツナだけが自分のことを違う目で見ていた。
「ですがあなたの言葉だけが脳裏から離れないのです……あなたのそ
んな表情かおを見るのが嫌だと感じている自分がいるんです……あなた
と会えなくなるのが嫌だ感じている自分がいるんです……」

御坂妹は今までにはなかった不可解な現象に困惑しつつも、自分の
素直な気持ちを吐き出した。

「なぜ話したのかは自分でもわかりません……ただの気まぐれなのか
もしれません……」

正直なところ、御坂妹自身も本来機密であつたこの計画の詳細を話
したのかは理解できていなかった。

「しかしこの計画の……一端に触れたあなたは……口封じの為に……
消されるでしょう……ですがミサカがあなたを消されないよう情報
を偽装します……」

「な、何を言つて……!?!」

「ミサカは……お姉様と程の出力の電撃を出すことはできません……
ですが他のミサカと……協力すれば……あなたの情報を……消すこ
とができるはずです……後はこの実験にさえ関わらなければ……あ
なたが消されることはありません……とミサカはあなたが……無事
に助かる方法を……提示します……」

「いい訳ないだろ!! そんなの!! 君たちを犠牲にして俺が生き残つ
たつて嬉しくなんかないよ!!」

「私はクローンです……何も問題ありません……あなたに犠牲になつ
て欲しくないのです……これしかあなたを救える手がないのです
……とミサカは伝えます」

「クローンとか関係ないよ!! 俺は絶対に君たちを犠牲になんて絶対にさせない!! 何か手があるはずだよ!! 君たちが死ななくていい方法が!!」

自分たちの命を犠牲にしてツナを助けようとする御坂妹。しかしそんなことをツナが受け入れるはずもなかった。

「妹達を犠牲にせず、実験を止める方法ならあるぞ」

「え……!?!」

「ツナ。お前が一方通行を倒すんだ」

「俺が……一方通行を……!?!」

リボーンの提案を聞いて、ツナはなぜアクセラレータを倒せば妹達を死なせず、実験を止められることができるのかわからないでいた。

「絶対能力者になれんのは一方通行だけなんだろう。だがその一方通行がレベル0に負ける程、弱かったと知ればどうなる?」

「あつ……」

リボーンはわかりやすく自分の言いたいことを伝えると、ツナのリボーンの言いたいことを理解した。

「そうだ。無能力者に負ける程、弱ければ一方通行に絶対能力者になれるはずがないと思わせることができる。そうなればこの計画は頓挫するはずだぞ」

「無理です……相手は学園都市最強の能力者……勝てるはずがありません……とミサカは実行すべきではないと提案します……」

リボーンの提案を聞いて、御坂妹は絶対に無理だということを伝え

た。

「わかった。俺、行くよ。一方通行の所に」

「ダメです……今度こそ殺されます……とミサカは警告します……」

「大丈夫だよ。俺は絶対に死なないから」

「なぜ……そう言い切れるのですか……とミサカはあなたの根拠のない自信に違和感を覚えます……」

御坂妹はわからなかった。学園都市最強の能力者と聞いても一切、迷うことなく戦いに赴けるのかを。

「自信がある訳じゃないよ……俺は君のこともつと知りたい。君ともつと話したい。ただ君を死なせたくない。それだけなんだ。だからその為には何が何でも生きないといけない。俺は死ぬ為に戦うんじゃない。君と一緒に生きる為に死ぬ気で戦うんだ」

「……」

ツナは真つ直ぐな目でそう答えた。御坂妹はツナの言葉を聞いて、何も言い返すことなく黙ったままであった。

「ギブアンドテイクです……とミサカはあなたに交渉を持ちかけます……」

「ギブアンドテイク……?」

「次の実験場所をあなたに……教えます……その代わり絶対に帰って来て下さい……とミサカはあなたに……交換条件を持ち出します……」

「うん。わかった。絶対に帰って来る。約束するよ」

御坂妹の条件を聞いてツナは一切、迷うことなく約束した。そして御坂妹から次の実験場所を聞くと、ツナは異世界転送装置を取り出した。

「リボーン。その子をお願いします」

「任せとけ」

リボーンに御坂妹のことを頼むと異世界転送装置に炎を注入すると装置が輝き、ツナが目映い光に包まれる。そして光が消えるとそこにツナの姿は影も形も無くなっていった。

「き、消えた……!? とミサカは……説明のつかない現象に……戸惑いを隠せないでいます……」

「俺たちは学園都市の人間じゃねえからな。俺たちは異世界の人間だからな」

「い、異世界……!? とミサカは……急な展開についていけず混乱します……」

「信じられねえのも無理はねえだろうがな。とりあえずお前の治療を始めんぞ。あいつが帰って来て、お前が死んだんじゃ話にならねえからな」

「どうしてあの方を……そこまで信用できるのですか……とミサカは尋ねます」

「あいつはかつて死を待っただけの俺を救った。自慢の生徒だからな」

リボーンは知っていた。御坂妹と同じく死ぬ運命にあった自分を救った生徒ツナの力を。

「あなたは一体……？ とミサカはあなたの正体を尋ねます……」

「俺はリボーン。ツナの家庭教師かてきよにして世界最強の殺し屋ヒットマンだ」

そう言うとりボーンは御坂妹の治療を始める。

（死ぬ気でやれよツナ。お前はアクセラレータに勝たなきゃなねえんだからな）

標的（ターゲット） 156 笑える未来

学園都市に移動したツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードとなり上空を飛んで、御坂妹を助けるべくツナは次に実験が行われる場所へと向かって行く。

（次の実験開始は8時20分。まだ間に合う！）

現在、時刻は8時15分。このペースでいけば実験が始まる前に目的地へ辿り着くことができるとツナは確信していた。

「美琴……？」

実験場に向かう途中、橋の上から手すりに両腕を置いて川を眺めている美琴をツナは上空から確信していた。

（この方向は……!?!）

ツナはなぜここにいるのかをすぐに理解した。美琴がいる先には今からツナが向かう実験場がある。

（まさか……!?!）

そして同時にツナは気づく。美琴が何をしようとしているのかを。

橋

「どうして……こんなことになっちゃったのかな……？」

美琴は両腕に顔を埋め、涙声になりながらそう呟いた。いつも強気な美琴がこんなにも弱気になっていた。理由は妹^{シスターズ}達のことである。今まで妹^{シスターズ}達の関連施設を破壊していた美琴であった。ツナの協力もあつて妹^{シスターズ}達の関連施設は全て破壊できたと思われた。しかし施設はさらに増えていた。その時に美琴は気づいた。こんな非道な実験が

容認されているのは学園都市上層部がバックにいるからということに。つまり学園都市そのものが敵であるということに。

「……よ……助けてよ……」

どう足掻いても打開策がないこの状況に心が折れていた。誰も助けてはくれないとはわかつてはいるが美琴は助けを求めた。

「わかった」

「え……!?!」

だが美琴の声は届いた。聞き覚えのある声が聞こえた為、美琴は振り返ると美琴の視線の先には超^{ハイパー}死ぬ気モードのツナが立っていた。美琴はツナがここにいることに驚きを隠せないでいた。ツナが超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解除すると美琴はすぐに偽りの笑顔を作った。

「何? 他人の独り言に反応しちやつて。というか何でこんなところにいるのよあんた。風紀委員の仕事はもう終わってるんでしょ」

「もう嘘は止めてよ美琴」

「嘘? 何、言ってるのよ?」

「妹達。絶対能力進化計画」

「っ……!?!」

偽りの笑顔で誤魔化していた美琴であったがツナの口から、妹達^{シスターズ}と絶対能力進化計画という単語から出たことに驚きを隠せないでいた。

「妹達の1人が一方通行に襲われたところを助けたんだ。その後あの子から聞いたよ。自分がクローンだったことも、計画のことも、目的も何もかも全部。今はリボンが治療してくれてる」

(聞いた……!?! まさかあの子の心を動かしたっていうの……!?!)

ツナの言葉を聞いて美琴は驚愕していた。機密事項だと言って頑なに教えてくれなかった。にも関わらずツナには教えた。つまり御坂妹の心を動かした以外に理由が思い当たらなかった。

「美琴……もしかして死ぬつもり?」

ツナは理解していた。おそらく実験の要たる一方通行に勝てなかった為、妹達^{シスターズ}の関連施設の破壊し実験を止めようとした。しかしそれすらもなんらかの形で不可能になったしまった。しかし美琴が

死ねばこの実験の関係者に美琴にアクセラレータを絶対能力者にさせるだけの価値がないと思わせることができる。美琴は自分の命と引き換えに実験を中止させようと考えているのだと。

「流石ね。超直感でよかったつけ？ あんたのその力」

「誤魔化さないでよ美琴」

ツナの洞察力を褒める美琴。偽りの笑顔でそう言う美琴にツナは真剣な顔でそう言った。

「そうよ。この事態は元々、私がDNAマップを提供したのが原因。私にはこの実験を止める義務がある。だから私の命と引き換えにこの実験を止める。こんな私でもまだ使い道がある。だから沢田。みんなに伝えておいてもらえる？ ごめんって。そしてありがとうって」

美琴は自分が死ぬということを肯定すると同時に、黒子たちへの伝言をツナに伝えた。

「ふざけんな!!」

「っ!？」

だがツナは美琴の言葉を聞いた途端、ツナは激怒した。滅多に怒らないツナが激怒した為、美琴は驚きを隠せないでいた。

「何の為に戦ってると思ってるんだよ!! またみんなで花火見るんだ!! みんなで遊ぶんだ!! だから戦うんだ!! だから強くなるんだ!! またみんなで笑いたいのに美琴がいなくなったら意味がないじゃないか!!」

ボンゴレファミリーの次期ボスを決めるリング争奪戦。その時に獄寺は自分の命を引き換えに勝利しようとした。その時の獄寺と美琴が重なったのか、ツナは激怒しながらそう叫んだ。

「じゃあ何よ……あんたに方法があるっていうの？ あんたはいつも綺麗事ばかり。虫酸が走るわ」

「だからって何で美琴が死ぬ必要があるんだよ!! どう考えたっておかしいだろ!! そんなの間違ってる!!」

「話にならないわね」

ツナの言葉を聞いた途端、ツナの近くに電撃を容赦なく放った。

「警告よ。撃ち抜かれたくなかったらそこをどきなさい」

「どかないよ絶対」

「力づくって訳ね……私はあんたより弱いわ。けど！　今回だけ負けられないわ！　何が何でも勝つわ！」

美琴はツナの目を見てどかないと判断した美琴はツナと戦うことを決める。

「戦わないよ俺は」

「何を言って……!?!」

「ここで美琴と戦っても意味がない」

「ふざけんじやないわよ!!　あんたになくともこつちにはあるのよ!!　戦う気がないなら立ち塞がるんじやないわよ!!　人の半端な気持ち踏みにじってんじやないわよ!!」

「ふざけてるのは美琴だろ!!　美琴が死んだらみんながどうなると思ってるんだよ!!　ずっと悲しみを抱えたままこれから生きていかなきゃならないんだぞ!!」

「っ……!?!」

ツナの言葉を聞いて美琴は何も言い返すことができなかった。そして同時に美琴の脳裏にみんなの姿が浮かんでいた。

「だったら……だったらどうしろって言うのよ!!　あんたはあの子たちがどうなつてもいいっていいの!?!」

「いい訳ないだろ!!　あの子たちが死ぬなんて絶対に間違ってる!!　だから……だから俺が一方通行と戦う!!　その為に来たんだ!!」

「え……!?!」

アクセラレータを倒すというツナの言葉を聞いて、美琴の驚きのあまり頭が真っ白になってしまっていた。

「一方通行が無能力者に倒されればアクセラレータに絶対能力者になれる素質がないと思せることができる!!　そうすれば実験を止められるし、美琴も死ななくていいし、あの子たちも死なずに済むんだ!!」

「無理よ……」

ツナは自分がアクセラレータと戦えば誰も犠牲になることはない
と美琴に言った。しかし美琴の表情が明るくなることはなかった。

「一方通行の能力は運動量、熱量、電気量などを問わずあらゆる種類のベクトル向きを皮膚上の体表面に触れただけで自在に操ることができるの。こつちが放った攻撃は全て反射されちゃうの……そんなの勝てる訳じゃない……仮に勝てたとしてもこの計画には学園都市上層部が関わってる……タダじゃ済まないわ……」

「勝てるかどうかなんて言ってるんじゃないよ!! 勝つんだ!!」

「え……!?!」

ツナは一方通行の能力を聞いてもなお臆することはなかった。ツナの言葉に美琴は驚きを隠せないでいた。

「あの子と約束したんだ!! 絶対に生きて帰るって!! 絶対に死なせないって!!」

ツナは御坂妹との約束したことを思い出していた。

「もう嫌なんだ!! 大切な人が死ぬのを見るのは!!」

ツナの脳裏には未来の戦いで白蘭のせいで死んだユニとγの姿が浮かんでいた。

「だから俺が実験を止める!! あの子たちも美琴を絶対に死なせない!! 俺の誇りにかけて!!」

そしてもう一度、ツナは自分の意思を伝える。美琴はツナの迫力に気圧され何も言えず、ただただ驚いてしまっていた。

「何ですよ……何でそこまで……あんた戦うのが嫌いなんでしょ……? いいじゃない私が死んだって……私が死ねばあんたは戦わなくて済むのよ……」

美琴はわからなかった。戦いが大嫌いなツナがなぜ自分の為にかまでしてくれるのか。

「たい……」

「?」

「一方通行に……勝ちたい……」

「え……!?!」

美琴はツナの言葉が信じられないでいた。戦いが大嫌いなツナが勝ちたいと言ったことが。

「あの子たちを傷つけて、美琴をこんなにも悲しませた奴に負けたく

ない……あいつだけには勝ちたいんだ!!」

「……!!」

ツナは拳を強く握りながらそう答えた。ツナの言葉を聞いた途端、美琴は両手で口元を抑える。そして必死に泣かないように耐えていた。

「それに学園都市がこんな間違ったことをさせるっていうなら……俺が……俺が学園都市をぶっ壊してやる!!」

「っ……!?!」

ツナの言葉を聞いた途端、美琴の両目から溢れんばかりの涙が溢れ落ちる。

「やっぱりあの子とそっくりだ」

「……?」

「俺の言葉を聞いた途端、急に泣き出したんだ」

「え……!?!」

ツナは泣いている美琴を見て微笑んでいた。御坂妹が泣いたと知って美琴は目を見開きながら驚いていた。

「実験の一旦に関わった俺が消されるって知って言ったんだ。自分たちが犠牲になる代わりに俺に生きて欲しいって」

ツナは美琴と御坂妹が同じことを言っていたことを思い出していた。

「それと昨日、公園で話したんだ。美琴の言葉を聞いて胸が痛くなっただけ。だからこの戦いが終わったらちゃんと謝って仲直りしてあげて」

そう言うとツナは再び超^{ハイパー}死ぬ気モードになった。

「待ってる美琴。今からみんなが笑っていられる未来を作ってやる」

そしてツナは炎を逆噴射させると空を飛んで、実験場所へと向かって行くのだった。

標的（ターゲット） 157 対峙

再びツナは飛んで実験場所へと向かって行く。

（もう時間は過ぎてる……早く行かないと！）

本来であればギリギリ間に合っていたのだが、美琴を説得するのに時間がかかってしまった為、実験の時間は過ぎてしまっていた。

（頼む！ 無事でいてくれ！）

ツナは自分の出せる最大の速さで移動しながら、御坂妹が殺されていないことを祈るしかできなかった。

そして一方、実験場。そこは開けた場所に大量のコンテナが並べられた場所だった。

「もう終わりア？」

「……」

うつ伏せの状態でボロボロになっている御坂妹を見下ろしながら一方通行はそう尋ねる。御坂妹はかろうじて意識がある状態ではあったが、返事をすることはなかった。

「じゃあトドメといきますか」

一方通行不気味な笑みを浮かべながら右足を上げる。そして右足ベクトルの方向を操り、御坂妹にトドメを刺そうとしていた。

その時だった、

「てめエは……!?!」

一方通行は自分の背後から気配を感じた為、後ろを振り返った。そ

ここには自分を出し抜いて逃亡したツナの姿があった。一方通行は表情を歪ませていた。

「丁度よかつたぜ。実験動物ばかり殺すのも飽き飽きしてたからなア。それにてめエはぶち殺しても問題ねエ上に、俺自身てめエをぶち殺すと決めてたからなア」

だがすぐに一方通行は嬉々とした表情を浮かべていた。

「っ!」

一方通行がまばたきした瞬間、一方通行の視界からツナの姿が消えた。急にツナが消えたことに一方通行は驚きを隠せないでいた。

「てめエ!!」

一方通行は再び後ろに気配を感じた為、後ろを振り抜いた。しかしツナはおろかそこには御坂妹もいなかった。ツナはすでに一方通行の背後にいた。そして御坂妹をお姫様抱っこし一方通行に背を向けた状態で御坂妹を安全な場所に運んでいた。

「オイオイ……俺を相手に背を向けるとか……どこまで舐めた真似してンだよ三下ア……」

一方通行は笑ってはいるもの、ツナの態度が余程気に触ったのか頭にきいていた。

「そんなに殺されてエっていうなら……望み通り殺し……!」

自分を前にして堂々と背を向けるツナを一刻も早くツナを殺そうとした一方通行であったが、途中で動きが止まってしまう。

「後で戦ってやる。そこで待ってる」

(う、動けねえ……)

ツナは右目だけが見える状態で一方通行の方を振り向いた。ツナの右目を見た途端、一方通行は金縛りにあったかのように動けなくなってしまう。ツナは再び、御坂妹を安全な場所に運ぶ為に再び歩を進めた。

「なぜあなたが……? とミサカは尋ねます……?」

「俺のことがわかるのか?」

この御坂妹は同じ顔をしてはいるもののツナが助けた御坂妹とは別の個体である。にも関わらずツナのことを知っていた為、ツナは少

し驚いていた。

「ミサカは……ミサカネットワークという脳波リンクで……情報を共有できる為……あなたのことも知っています……とミサカは……自分たちの能力について……説明します……」

「そうか……」

「どうしてあなたは……また……ここへ……とミサカは再び尋ねます……」

「この実験を壊して妹達シスターズが殺されるんじゃないやなくてみんなで笑いあえる未来を作る為にここに来た」

「なぜ……ですか……？ ミサカは機材と薬品があれば……ボタン1つで自動生産できるんです……作り物の体に……借り物の心……単価にして18万円……在庫にして9969も余りがある……そんなもの為にあなたは……」

先程、助けた御坂妹とは情報を共有していない為、この御坂妹はツナがなぜここに来たのかわからないでいた。

「これは俺の助けたあの子に言ったことだがちゃんとお前にも伝えておく。俺はもつと君に生きて欲しいんだ」

「生きて……欲しい……」

「ああ。クローンとか関係ない。もつと君のことを知りたい。君と一緒にいたい。ただそれだけだ」

情報が共有されていないと知ったツナは先程、伝えた言葉をもう一度、御坂妹に伝えた。

「これは単なる俺のワガママかもしれない。でもお前たち妹達シスターズが殺されるのは間違ってる。誰にだって存在する権利はある。殺されるだけが存在意義だっていうことは絶対じゃない。だから一方通行アクセラレータに殺される為だけに生きるんじゃないやなくて、自分の生きたいように生きて欲しいんだ」

ツナは御坂妹に自分の思いを伝えると、御坂妹の傷口に両手を置いた。

「死ぬ気の零地点突破初代エディションファースト」

そしてツナは御坂妹の傷口を殺されていく。幸い命に別状はな

かった為、今すぐに治療が必要という訳ではなかった。

「ここで待っていてくれ。すぐに終わらせる」

そう御坂妹に言うとなつなは振り返って、ゆつくりと一方通行アクセラレータの元へと歩を進めていく。

一方。その頃、美琴は。

「行かないやー!」

美琴は涙を拭い、ツナに加勢する為に実験場所へと行くことを決意した。

その時だった

「待てよ」

「え……!?!」

再び聞き覚えがある声が聞こえる。美琴が振り返るとそこには当麻と黒猫がいた。当麻の右手には紙の束が握られていた。

「どこに行くつもりだよ」

「あんた……その……資料……!?!」

「ああ。悪いが調べさせてもらったぜ。妹達シスターズも実験のことも一方通行アクセラレータのこともな」

当麻は資料を美琴に見せつけながらそう言った。

なぜ当麻が絶対能力進化計画を知っているのか。それを語るにはツナが御坂妹を助けた時まで時間を遡らなければならない。

「あれ？ どこに行っただあいつ？」

古本屋の中から本を持った当麻が出て来る。誰かを捜しているのか当麻は周囲をキョロキョロしていた。当麻の言うあいつとは御坂妹のことである。当麻はツナと別れた後に別の個体の御坂妹と出会っていた。当麻は御坂妹は捨て猫を拾って欲しいと頼まれた為、当麻は御坂妹と一緒に猫の飼い方に関する本を古本屋で買いに行くことにした。店内には猫を入れることは無理なので当麻は御坂妹に猫を預けて店内に入った。しかし戻った頃には御坂妹はおらず猫だけ残されていた。当麻は御坂妹を探す為にツナたちがいた路地へと入って行った。

「見つけた。どうした……!？」

路地に入った当麻であったがそこには驚きの光景が広がっていた。そこには御坂妹と同じ姿をした人たちがたくさんいたのだから。当麻は知らなかったが、この時、御坂妹は戦いの痕跡を無くす為に隠蔽工作をしていたのである。

「勝手にいなくなつて申し訳ありません。とミサカは謝罪します」

「何だよ……!?! 何なんだよ……!?! 何でビリビリの妹がこんな……!?! お前らは一体……!?!」

「学園都市で七人しかいない超能力者、お姉様の量産軍用モデルとして作られた体細胞クローン。妹達ですよ。とミサカは答えます」

御坂妹の正体を知った当麻は胸騒ぎがし、美琴にこの事実を確認する為に美琴の寮へと向かった。美琴はいなかったが、そこで当麻は発見したのである。絶対能力進化計画に関する資料を。

そして現在に至る。

「ごめん！ その話は後にして！ 私は行かないと行けないの！ あいつが……沢田が一方通行と戦ってるの！」

「何!？」

当麻に色々と聞きたいことがあつた美琴であつたが今はそれどころではなかつた。当麻はツナが一方通行と戦っていると知って驚きの声を上げた。

「何であいつが!? あいつもこの計画を知ってるのか!？」

「うん……あの子たちを助ける為に1人で……」

「バカ野郎……そんなヤバい奴、相手にたつた1人で行くなんて……無謀過ぎるぜ……」

「とにかく私は沢田の所に行くわ」

「俺も行くぜ」

「な、何を言つて……!？」

「あいつには借りがあるからな。それに放っておけねえだろ」

当麻は思い出す。ツナがいてくれたお陰で本来、戻るはずのない記憶を取り戻すことができたことを。

「相手は学園都市第1位。人手が多い方がいいだろ。それにこの右手が役立つかもしれねえだろ」

「あんた……」

当麻の右手にはあらゆる異能を無力化できる幻想殺しという力が備わっている。当麻はこの力が役に立つかもしれないと考えていた。

「止めても無駄だぜ」

「わかつたわ……ついて来て」

正直、巻き込みたくはなかつたが当麻が先程のツナと同じく、大人しく引いてくれないというのは明らかに明白であつた為、美琴は了承した。

一方でツナは。

「待たせたな。一方通行」

「気にするな三下。これから俺にブチ殺されんだ。心の準備ぐらいさせてやる。こう見えても俺は優しいンんだぜ」

ツナは一方通行と対峙していた。先程、金縛りにあつた一方通行であつたがそんなことも気にせず邪悪な笑みを浮かべていた。

学園都市最強の能力者とのついに始まる。

標的（ターゲット） 158 大空（ツナ） V S 一方通行（アクセラレータ）

ついにツナは一方通行アクセラレータと対峙する。

「そーういや何が目的でここへ来た？ 三下ア？」

「お前を倒してこの実験を止める。そして妹達シスターズが生きられる未来を作る」

「ギャハハハ!! 俺に勝てると思ってるだけでもめでてエのによ!! あの人形共まで護るってかア!? こいつは傑作だア!」

ツナの目的を聞いて一方通行アクセラレータはバカ笑いしていた。だがツナは妹達シスターズを貶されても怒っていたがそれでも歯を食い縛り、拳を強く握って怒りに耐えていた。

「わからないな。学園都市最強と能力者であるお前がなぜ力を求める？」

「力だよ。全てを黙らせる絶対的な力を手にする為。最強レベル5だとか学園都市1位だとかそんなつまんねえもんじゃねえ。俺に挑もうと思うことすら許さねえ程の絶対的な力。無敵レベル6が欲しいんだよ」

「そんなことの為に……!?!」
一方通行アクセラレータが絶対能力者になりたい理由を聞いてツナは怒りを露にする。

「そんなことの為に妹達シスターズの命を奪ったのか!! お前は!!」
「っ!?!」

ツナの怒りが頂点に達し、ツナの周囲に暴風が吹き荒れ、大量の死ぬ気の炎が溢れ出した。未来の白蘭との戦いでユニとγが死んだ時と同じ現象である。発生した竜巻によって大量の石が吹き飛んで行く。だが一方通行アクセラレータに触れた瞬間、反射が発動しツナに帰って行くが竜巻のせいで石は空中へと飛ばされてしまう。

（炎を使って気流を起こしたのか……だがこの規模……こいつ

超能力者か!?)

一方通行は今、起きた現象を分析すると同時にツナが超能力者だと知って嬉々とした表情を浮かべていた。

「発火能力者の超能力者がいるなんて聞いたことがねエが……今はどうでもいい!! 楽しませてくれよ三下ア!!」

「ふざけんな!! 人が死ぬかもしれない戦いが楽しくないだろ!!」

「ギャハハハ!! それを楽しんでいるだろうが!! 出来損ないないの実験動物を殺したって面白くもねエ!!」

「それ以上、妹達を侮辱するな!! 一方通行!! 俺はお前を許さない!!」

「許さないだア? だったらやってみるよ。この学園都市最強のであるこの……ガハツ!!」

両手を広げてどこからでもかかっても構わないと言わんばかりの一方通行の顔面におもいつきり拳を叩き込んだ。一方通行は吹き飛んで行った。

「ガアアアア!!」

吹き飛ばされた一方通行は両手で顔面で覆いながらのたうち回っていた。

(やつぱり。そういうことか)

ツナは怒りに身を任せ一方通行に攻撃した訳ではない。ちゃんと攻撃が通るといふ確信があった為、ツナは一方通行に攻撃したのである。そして今の攻撃でツナは一方通行の能力のシステムを理解する。

(美琴の話だと体表面に触れた瞬間、反射が発現するって言ったが、さつき吹き飛んだ石はアクセラレータのわずか手前で反射した……おそらく一方通行の体表面にわずかだが反射を発動させるバリアみたいなのが展開されてる……)

怒りを爆発させながらもツナは一方通行の能力を分析していた。ツナの予想は当たっている。一方通行は体表面に反射を発動させる保護膜が覆っており、この保護膜に触れることであらゆるものの向きを自由自在に操作している。

(だが俺の炎なら反射を無力化できる)

大空の死ぬ気の炎の特徴は調和。調和とは矛盾や綻びがない状態のことを指す。大空の炎に反射が働くということは調和を乱すことである。故に一方通行アクセラレータの反射の力はツナの大空の炎には作用しない。

(な、何でだア!? 何で痛みが走ってやがる!?)

だがそんなことなど知らない一方通行アクセラレータは自分にツナの攻撃が当たった理由がわからないでいた。

(そうか……喜びのあまり無意識の内に反射膜を切っちゃったのかア? 俺としたことが情けねエぞ……)

一方通行アクセラレータは自分が殴られたのはツナが超能力者レベル5だと知って喜んだせいで無意識化で保護膜を切ってしまったのだと思う。

「俺としたことが油断しちまったぜエ……だがもう俺に隙はねエぞ三下ア」

一方通行アクセラレータは殴られたところを抑えながらも笑っていた。そして右足で線路をコツンと触れると線路のレールが宙を舞い、一方通行アクセラレータがもう一度右足で触れるとレールがもの凄い勢いでツナへと向かって行く。ツナは右手を前に出して炎の壁を展開してレールを弾き飛ばした。

(弾き飛んだ?)

レールが弾き飛んだことに一方通行アクセラレータは違和感を感じる。通常であれば炎には実体がなく燃えない物質はそのまますり抜ける。しかし死ぬ気の炎は普通の炎とは違い実体がある為、防御にも使える。一方通行アクセラレータはさらにレールの部品の向きベクトルを変化させて次々に放つて行くが全て炎の壁に弾かれてしまう。

(どオやらの炎……ただの炎じゃねエようだなア……)

すると一方通行アクセラレータは近くにあったコンテナに触れ、次々に放つて行く。だがこれも全て炎の壁で弾かれてしまう。弾かれたことによつてコンテナは倒れ、コンテナの中に入っていた小麦粉が大量に漏れ出し周囲に充満する。

「よオ三下? 粉塵爆発って知ってるか?」

そう言う一方通行アクセラレータはコンテナを上空に飛ばした。そしてコンテ

ナが地面に落ちた瞬間、広範囲に渡って爆発が発生する。

「あー死ぬかと思った。酸素奪われるところっちも辛いんだっつもの」

爆発が発生している中をゆっくりと歩きながら、一方通行はそう呟いた。
一方通行はそう呟いた。

「どオやら死体も残らね工程に吹き飛ばされたようだなア!! ざまアねエなア三下ア!! ギャハハハ!!」

爆発の中、どこを捜してもツナの姿を確認できなかった為、一方通行は爆発によってツナの体が残らなかったにだと判断し笑っていた。

「隙だらけだ」

「ゴハッ!」

バカ笑いしていた一方通行であつたが突如、ツナが目の前に現れ腹部に拳を叩き込まれた。拳を叩き込まれた一方通行はツナの方に向かって倒れて行く。

「まだだ」

「ガハッ!」

そしてツナはアクセラレータの左肩に左手で掴んで倒れるのを阻止すると、右手で一方通行の顔面に拳を叩き込んだ。一方通行はツナの攻撃によっておもしろいっけりぶっ飛んで行った。

(ど、どういうことだ……!!? 1度ならず2度までも……!!?)

一方通行はちゃんと保護膜を展開していた。にも関わらず一方通行は反射が機能せず自分がダメージを受けていることに驚きを隠せないでいた。

(それにあの野郎……どうやって爆発から逃れやがった……!!? しかも急に現れやがった……!!? まさかテレポート……!!? 多重能力者……!!?)

ダメージを受けた理由もわからなかつたがどうやって爆発から逃れ、急に目の前に現れたのかわからず一方通行は驚きを隠せないでいた。ツナは爆発の瞬間、炎を逆噴射させて一瞬で上空に移動して爆発を回避。そして再び炎を逆噴射させて一方通行の前に移動したのである。

「学園都市最強の能力者と謳われた男がたった3発、攻撃を受けただけでそこまで痛がるとはな。今まで攻撃を受けたことがなかったのが災いしてダメージに対して耐性がないようだな」

「三下がア!? 調子に乗ってンじゃねエぞコラア!!」

一方通行は立ち上がると全くノーモションで一気にツナの目の前に移動した。自分自身の運動エネルギーの向きを^{ベクトル}変化させることで助走なしでの超高速移動を実現したのである。

「じゃあその三下にやられるお前は一体、何なんだろうな?」

「ガアアアアア!!」

だがツナは動揺するどころか一步も動くことなく、左手で一方通行^{アクセラレータ}の顔を驚掴みにしていた。一方通行は死ぬ気の炎による熱によって焼かれている為、悲痛を上げていた。

「ゲツホ!? グホツ!? ゴハツ!」

ツナは左手で一方通行^{アクセラレータ}を掴んだまま、右手で一方通行^{アクセラレータ}の腹部に3発程、拳を叩き込んだ。

「グフツ!」

ツナは左手を離すと、地面を落下する前の一方通行^{アクセラレータ}の顎にアッパーを喰らわせた。アッパーを喰らった一方通行^{アクセラレータ}は宙を舞い、そのまま地面に落下する。

(こ、この俺が……あんな三下にイ……!?)

一方通行^{アクセラレータ}は歯ぎしりしながら怒りを露にしていた。学園都市最強の能力者と言われた男にとってこれ程、屈辱なことはなかった。

(どういふ訳かは知らねエがあの炎は反射できねエ……だったらあの炎を解析してあの三下を今度こそぶち殺してやる……)

一方通行^{アクセラレータ}の能力は反射ではない。反射は副次的なものなのである。解析した後には保護膜を組み直してしまえば反射できなかつたものも反射できるようになるのである。

(炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギー? 人間の生命エネルギーを可視化したもの……妙な力を使いやがるな……だが解析しちまえばもう問題ねエ)

一方通行^{アクセラレータ}は死ぬ気の炎について解析すると、もう反射されることは

ないと高を括り、口元を緩ませていた。

(調和……だと……!?)

だが一方通行アクセラレータの笑みが消え驚きに変わる。なぜならツナの上空の死ぬ気の炎の特徴を知ってしまったからである。

(つまり俺がいくらフィルターを組み直しても無駄……!?!? ああ炎はどうやってても反射できねエだと……!?!?)

一方通行アクセラレータは理解する。いくらツナの炎を解析しようと意味がないこということに。本来なら解析してしまえば反射できるのだが、ツナの炎を反射するということは調和を乱すことになってしまうので解析はできても反射することはできないのである。

「どうやら気づいたようだな。俺の炎の特徴に」

(こいつ……!?!? 俺の考えてることを……!?!?)

ツナは一方通行アクセラレータが解析している間に見せた表情から一方通行アクセラレータの考えていることを超直感で見透かしていた。一方通行アクセラレータは自分の考えていることを読まれたことに動揺を隠せないでいた。

「この炎の特徴は調和。調和とは矛盾や綻びがない状態。お前の反射は俺の炎には機能しない」

「だったら何だっただア……じゃあその炎に触れずにてめエをぶち殺せばいいだけだろうがア!!」

一方通行アクセラレータは右足で地面におもいつき踏みつけた。すると地面が割れて地割れが発生する。さらに一方通行アクセラレータは両手で大気に流れる風を操り、ツナの両サイドに風を放った。ツナはジャンプして空中へと逃げた。

(空中じゃ逃げ場はねエ!! 血流操作でぶち殺してやる!!)

地割れと両サイドに放った風によってツナを空中に誘き寄せることに成功した一方通行アクセラレータは運動エネルギーベクトルの向きを操作して上空にいるツナへと向かって行く。ツナは体全体を反らして一方通行アクセラレータの攻撃を躲した。

(躲したかア……だが今度こそ終わりだア!!)

一方通行アクセラレータは自分自身の運動エネルギーベクトルの向きを操作して背後から一気にツナへと襲いかかる。

「なっ!?」

一方通行の視界からツナの姿が消える。ツナが一瞬にして消えた為一方通行は驚きの声を上げる。そして一方通行の両肩をツナは握る。

「ガアアアア!!」

「空中で動けるのはお前の専売特許じゃないぞ」

炎の熱が両肩を焼いていき一方通行は悲痛の叫びを上げる。ツナは一方通行の両肩を掴んだ状態から、空中で一回転し後に脳天目掛けて踵落としを放った。

「ガハッ!?」

すると炎を纏っていない蹴りであるのにも関わらず一方通行はダメージを受けて地面にうつ向きの状態で叩きつけられた。

（い、今の攻撃は……炎を纏っていない攻撃だったはず……!!?　なの
に何で反射が機能しねエ……!!?）

一方通行はわからなかった。両手で肩を握られていた感触があったのにも関わらず、反射が機能せず自分がダメージを受けているのかわからないでいた。

「簡単だ」

（そうか……炎の逆噴射して推進力にしてやがったのか……）

一方通行は空中からゆっくりと降りて行くツナを見て理解した。今まで見せたテレポートのような動きは炎を逆噴射させて高速移動したのだということに。

「お前の反射は発動するまでにわずかだが時間がある。だったらお前の展開しているバリアに触れると同時に攻撃を引いて反射の方向をお前自身に向けるようにすればいい」

（俺の反射を内側に発動させるように仕向けただと……!!?）

ツナの言葉を聞いて一方通行は驚きを隠せないでいた。ツナは最初に石が反射したのを見た時に保護膜に触れてから石が反射されるまでにタイムラグがあることに気づいていた。そして踵落としが保護膜に触れた瞬間に足をわずかに真上に移動させた。つまり遠のいた攻撃を反射をさせたことで反射の方向が一方通行の内側に向いた

のである。

「三下アアアアアアア!!」

そして一方アクセラレータ通行はダメージを受けている体を無理やり立ち上がったツナに再び挑んで行く。

標的（ターゲット） 159 覚悟なき者

ツナと一方通行アクセラレータが戦っているその頃。美琴と当麻は。

「あそこよー！」

美琴が指を指した先のはツナと一方通行アクセラレータが戦っている実験場所だった。美琴と当麻は実験場所の中に入って行く。

「え……!?!」

「嘘だろ……!?!」

金網の向こう側でツナが一方通行アクセラレータと戦っているのを見て美琴と当麻は衝撃を受けていた。そこには五体無傷のツナが一方通行アクセラレータを圧倒している姿が目映っていたのだから。

「クソツタレがアアアアアア!!」

「動きが単純になって来てるぞ」

「ゴフツ!!」

一方通行アクセラレータは頭に血が登っているのか自身の運動エネルギーの方向を変えてもの凄い勢いで真正面からツナに突っ込んで行く。しかし腹部にツナの拳を顔面に喰らって一方通行アクセラレータはぶっ飛ばされてしまう。

「おいおい……」一方通行アクセラレータはあらゆるものを反射させるんじゃないの
よ……!?! 何であいつの攻撃が通じてんだよ……!?!」

ここに来る途中に美琴から一方通行アクセラレータの能力の詳細を当麻は聞いていた。美琴の言うことが本当であるならばツナの攻撃は反射して
なければならぬ。にも関わらずツナの攻撃は反射されてはい
なかった。

「そうか……一方通行アクセラレータの反射は沢田の炎には効かないんだ……」

美琴はあまりに追い詰められてしまっていた為、忘れていたのである。ツナの炎の特徴を。

「効かないって……どうということだよ？」

「あいつの炎はあんたの右手に似てるのよ」

「俺の右手と？ どういうことだよ？」

「あいつの炎の特徴は調和……調和は矛盾や綻びのない状態……つまり沢田アクセラレータがあアクセラレータの炎で一方通行の反射を無力化してる……だから一方通行は沢田の攻撃を反射することができないのよ……」

「マジか……」

美琴からツナの炎の特徴を聞いて当麻はツナが自分の右手と似てる力を持っているということに。

「これは……本当に現実ですか……？ とミサカは今、目の前で起きている状況に……驚愕します……」

「あんた！」

「お前！ 大丈夫かよ!?!」

美琴と当麻の後ろから声がする。そこには重症の体を引きずってやって来た御坂妹がいた。ツナは待っていると言ったが、戦いの行方が気になってしまった為、ここまでやって来たのである。

「命に別状はありませんし……あの方が傷口を止血してくれたので……問題ありません……とミサカは自身の体の状態について……伝えます……」

「問題ない訳ないでしょー!」

そう言うとき美琴は御坂妹に肩を貸す。それを見た当麻も御坂妹に肩を貸した。

「本当はあの方を逃がそうと……思ったのですが……まさかこんなことになるとは……とミサカは予想外の展開に困惑しています……」

「俺たちだって困惑してるよ……いくら反射されないとと言っても、あれだけの猛攻に難なく対応できてんだからよ……」

アクセラレータ
一方通行は自身の運動エネルギーの方向を変えて高速移動しながら、周囲に落ちているありとあらゆるものに触れていく。一方通行によつて触れられたコンテナ、鉄パイプ、部品が次々にツナに襲いかかって行く。

(美琴に……当麻!? しかもあの子まで……!?)

しかしツナは炎を使わず最小限の動きだけで躲していく。それどころかツナは美琴たちがいるのを確認する余裕まであった。

(さっきお返しだア三下!! 今度は俺がお前の脳天をぶち抜いてやらア!!)

飛ばした様々な物を飛ばして、目眩まししている間に一方通行はツナの真上に移動していた。そして自身の運動エネルギーの向きを操作して真上からツナの真上へと一気に移動していく。

「ゴハッ!?!」

だがツナは一方通行の動き読んでおり、右手の拳を上に向かって放つと一方通行の顔面に叩き込んだ。

「グフツ!?!」

そして拳を離すとツナは落下する一方通行の横腹に回し蹴りを喰らわせた。勿論、これもただの蹴りではなく反射の向きを内側に発動するように保護膜に触れた瞬間に蹴りを左にずらして蹴りの方向を内側に発動させた蹴りである。

その光景を見た美琴たちは。

「あ、足で……!?!」

「あ、あいつどうやって……!?!」

「ミサカにもわかりません……とミサカは今、起きた現象に驚愕します……」

ただの蹴りで一方通行アクセラレータの反射を無力化したのかわからず驚愕していた。

そして

(こ、この俺が……この俺が……こんな三下にイ……)

ついに一方通行アクセラレータは地面にうつ伏せの状態で這いつくばっていた。しかしそれでもツナへの憎しみは消えておらず、ツナの方を睨んでいた。

「もういい。止めだ」

(何……だと……!?!)

地面に這いつくばっている一方通行アクセラレータを見てツナは拳を下ろした。一方通行はツナの言った言葉が信じられないか驚きを隠せないでいた。

「これ以上、お前を傷つけても妹達シスターズが甦る訳じゃない。それだけやられればもうお前が絶対能力者レベル6なれないと実験の関係者は思うはずだ。だからもう戦いは終わりだ」

そうツナは一方通行アクセラレータに告げるとツナは背を向け、美琴たちの元へと向かって行く。

「そこで大人しくしてろ。病院には連れて行ってやる」

(ふざけやがって……!? この俺が……この俺が三下に一方的にやられた上に……情けをかけられただと……!?)

ツナは歩を進めながらそう言う。だがこの言葉を聞いて、一方通行アクセラレータは怒りを露にする。一方的にやられただけでも一方通行アクセラレータにとって屈辱であるのにも関わらず、さらに情けをかけられ、見向きもされない。ツナの言葉とこの行動は一方通行アクセラレータのプライドを傷つけるには充分だった。

「待つてろって言ったのにな……」

美琴と御坂妹が来たことに大した色々と言いたいことがあったツナであったが、自分のことを心配して来てくれのだと理解していたためこれ以上は何も言うことはしなかった。

「それにしても何で当麻がここに？」

「話せば長くなんだけどよ。偶然、この計画を知っちゃってよ」

「そうか」

詳しく話したい当麻であったが御坂妹のこともあるので端的に説明した。ツナも当麻の意思を汲み取り、詳しく聞くのは後にすることにした。

「あいつは……」

「まだ意識はある。けどあそこまでやられれば実験の関係者は

一方通行に絶対能力者になれないと思うはずだ。とにかく今は救急車を呼んで早く治療を……」

美琴が一方通行のことを尋ねてきたのでツナは説明した。その時だった、

「くかきけくかかきくけききくかかきくくくけけけきくかきくくくくけけくかきくくくけけくかきくくけけくくくけけくかきくくけけくくくけけくかかか!!」

一方通行から意味不明な言葉が放れた瞬間、暴風が発生しコンテナや金網、部品や砂利が飛んで行く。ツナは咄嗟に炎を上に出すと炎をドーム場に展開して美琴たちを護る。

「な、何だよあれ……!?!」

「おそろく……: 大気に流れる風の向きを……: 操作してるのだと思います……: とミサカは予想します……: 」

あまりの現象に当麻は驚愕し、御坂妹は一方通行が何をしたのかを理解する。

「この手で大気に流れる風の向きを掴み取れば世界中に流れる風の動き全てを手中に収めることができれ世界を滅ぼすことも可能。学園都市最強? 絶対能力? そんなもんはもオいらねエ!」

一方通行を止められる奴なンギもうどこにも存在しねエ! 世界はこの手にある!」

一方通行は仰向けの状態で左手を上げながらそう言った。

「圧縮……: 空気を圧縮……: 圧縮ねエ……: いいぜエ! 愉快なことを思いついた!」

一方通行は自分の体を無理やり起こし、風を一点に集中させていく。すると風を一点に集中させたことで一方通行の上空に高電離気体が発生する。

「風を一点に凝縮して生み出した高電離気体……: あいつこの辺り一帯をまとめて消すつもりだわ……: 」

(俺の右手なら消せる……: こうなったら一か八かあそこに飛び込んで……:)

「……: 」

美琴は一方通行の起こした現象と目的を理解して絶句する。当麻

は右手で高電離^{プラズマ}気体を打ち消す為に一か八かの特攻をしようとしていた。ツナは高電離^{プラズマ}気体を見てもなお動揺することなく上空を見上げていた。

「ナッツ」

「ガウー！」

そしてツナはリングからナッツを呼び出すと、展開していた炎の壁を解いた。そして肩に乗っているナッツを風で飛ばないようにナッツの頭に手を置いた。

「GURURURU……GAOOOOO!!」

ナッツの咆哮が一带に響き渡る。ナッツは自身の技である^{ルツジード・デイト・チエリ}天空の雄叫びを高電離^{プラズマ}気体に向かって放ったのである。

「は……!?!」

そして一方通行^{アクセラレータ}は驚愕していた。高電離^{プラズマ}気体が石化したのだから。「な、何をしたんですか……!?!」とミサカは尋ねます……」

「ナッツは俺の炎と同じ特徴を持った俺の相棒だ。ナッツの咆哮である高電離^{プラズマ}気体を地面に落ちてるコンテナや部品と同じように石化させた」

「め、めちやくちやだぜ……」

御坂妹が今の現象について尋ねるとツナはナッツの能力を説明した。当麻はナッツの能力を知って驚きを隠せないでいた。

(な、何だ……!?! 急に猫が出て来たと思ったら……高電離^{プラズマ}気体が石化した……!?! まさかあの猫がやったっていうのか……!?!)

一方通行^{アクセラレータ}は信じられないでいた。あれだけの高電離^{プラズマ}気体をたった1匹の動物に破られたという事実には。

(いやー！ それよりも何で動物が能力を使える!?! 一体、どうなってやがる……!?!)

一方通行^{アクセラレータ}なぜ動物であるナッツが能力を使えるのかわからないでいた。

「どうした一方通行^{アクセラレータ}? 今のが全力か? だとしたら大したことはないな」

「なっ……!?!」

「まさか学園都市最強の男が2対1で戦ったことに対して、卑怯だと言うつもりじゃないだろうな。それとも自分の知らない力だから勝てませんでしたなんて言うつもりか?」

「クソが……!?!」

「お前は弱い。俺が今まで戦ってきた誰よりも」

「弱いだと……!?!」

「そうだ。今まで俺は色んな奴と戦って来たが、いい奴も悪い奴もみんな覚悟を持ってた」

ツナは思い出す。マフィアを壊滅し世界大戦を起こそうとした六道骸。ボンゴレのボスの座を手にする為にクーデターを起こし、さらにボンゴレを内部分裂させたXANXAS。7^{トウリニセツテ}を手に入れ時空の覇者になろうとした白蘭。シモンファミリーの復権する為にマフィア界の転覆を企てた古里炎真。恋人であるエレナとの約束を守る為に時代を超えて人に憑依し続け、手段を選ばずボンゴレを最強のマフィアへとしたD・スペード。たった1人の男に復讐する為に何百年も生き続けたバミューダ・フォン・ヴェツケンシュタイン。そして学園都市を敵に回すことになっても生徒を救おうとした木山春生。決して誉められるような行為ではないが、その目的の為に全員、命をかけていた。

「それに比べてお前から何の覚悟も感じない。自分の能力に甘えて鍛えた様子もない。少しやられただけですぐに信念を曲げた。お前は最強でも何でもない。世界一最弱な男だ」

学園都市最強の能力者と謳われてはいるが能力が強いだけで、自身の素の力は大したことない上に、戦闘技術すら会得していない。そして絶対能力者^{レベル6}に成りたいと言っておきながら、その目的をどうでもいいと言ったこと。ツナが今まで戦った敵の中でも誰よりも弱い人間だと理解していた。

「覚悟だア!! 下らねエ。そんなもんあったところで何になるってんだ!?!」

「だったら見せてやるよ。俺の覚悟を」

そう言うツナはナッツをリングの中に戻す。そして両手に装着

していたボンゴレギアを外した。

「悪いがこいつを見ててくれ」

「お、おい！ 何やってんだよ沢田！」

「何で武器を捨てんのよ!?!」

ツナはそう言うとき一方通行アクセラレータの方へ歩を進めて行く。当麻と美琴はツナの行動に驚きを隠せないでいた。

「何のつもりだてめエ!?!」

「言ったはずだ俺の覚悟を見せるってな」

ツナが武器を外したことに一方通行アクセラレータは苛立ちを覚えていた。ツナは目を閉じて大きく息を吸う。そして目をゆっくりと開けた。

「死ぬ気の到達点」

標的（ターゲット） 160 究極の死ぬ気

「死ぬ気の到達点」

ツナがそう呟いた。その瞬間、ツナの全身から大量の死ぬ気の炎が溢れ出し、周囲に溢れ出る。あまりの炎の量にツナ以外、両足にしっかりと力を入れなければ吹き飛んでしまう程であった。

「沢田の全身から炎が……!? な、何だよあれ……!?」

「わ、私も初めてみるわよ……」

ツナの全身から大量の炎が出たことに当麻は驚くと同時にあれが何なのかわからなかった為、美琴に詳細を尋ねた。しかし美琴も初めて見る為、あれが一体何なのかわからないでいた。死ぬ気の到達点。ツナが虹の代理戦争にて発現した力であり、死ぬ気に向こうにある究極の死ぬ気のことである。この力を発現するには死ぬ気弾が必要であったのだがリボンとの修行によって死ぬ気弾なしで死ぬ気の到達点の力を使えるようになったのである。

「全ての細胞がお前を倒す為に死を覚悟した」

（俺でもわかる……こいつは今までとは次元の違う力だってことが……）

（あいつまだ……まだこんな隠し球を……!?!）

炎が消えた途端、大気が震え、実験場全体に重力がかかったかのよくな圧力がかかる。近くにいただけだというのに当麻と美琴はツナから放たれる力がとてつもないものだということを感じていた。

「これが俺の覚悟だ。一方通行」

（か、勝てねエ……）

ツナの真つ直ぐな瞳、そしてこの場を支配するかのよくな圧力に一方通行は後ずさりしていた。そして今まで自分が負けることなど微塵も考えたことになかった男が対峙しただけで絶対に勝てないと

いうことに気づいてしまった。

(戦う気すら起きねエ……体が思うように動かねエ……演算ができねエ……)

さらに戦う気力すら起きず、体全身に重りをつけたかのようになり体が自分の思うように動かなかった。そして演算ができなくなり一方通行を覆っていた保護膜も消えてしまっていた。

(まさか……まさか……!?)

この絶対的な圧力を間近で感じた一方通行はあることに気づいた。

(こいつはすでに辿り着いてるとでもいうのか……!?! 絶対能力者に……!?)

学園都市最強の能力者に戦う気すら起こさせないと思わせる絶対的な圧力。一方通行はツナが絶対能力者の境地に辿り着いているのではないかと推測する。

(いやー。そんなはずはねエ！ 絶対能力者になれる可能性を持つてるのは俺だけだ……!?)

ツナが絶対能力者に辿りついていてという事実を認めたくないのか一方通行は自分の予想を否定する。

(だが……だが……こいつはまさしく俺が求めた力……!?)

自分の思惑を否定した一方通行であったがこの絶対的な圧力を体験して、認めたくはないがツナが自分の求めている力を手にしているということを確認ざるを得なかった。

(何でだ……!?! 何でためエはこんな力を持っていて俺とは違う……!?)

一方通行の脳裏には浮かんでいた。自分を倒そうとヘラヘラした笑みで挑んできて最後は命乞いし恐怖の眼差しを向ける学生たち。自分の力を利用して甘い汁を吸おうとする大人たちが。

(何でそんな目をしてやがる……!?)

一方通行はこれだけの力を持つてもなお自分とは違い、真っ直ぐな目をしているツナが気に入らなかつた。

(何でためエは一人じゃねエんだ……!?)

一方通行の脳裏には周りに誰もいない真っ暗な空間に立っている

自分が浮かんでいた。

(何で……!?! 何で……!?!)

何度、考えても一方通行にはわからなかった。ツナと自分が何でこんなにも違うのか。

「答えは1つ。俺が死ぬ気だからだ」

(こいつ……また俺の心を……!?!)

ツナは一方通行の表情から一方通行が何を考えているのか直感した。一方通行はまた自分の心を読まれたことに驚きを隠せないでいた。

「死ぬ気とは迷わないこと。悔いしないこと。そして自分を信じること。俺は死ぬ気を繰り返す度に自分の知らない自分に出会った。そしてそれが本当の自分だと確信した時、俺は気づいた。この死ぬ気の向こうにある究極の死ぬ気にな」

ツナは思い出す。今までの戦いを。この境地の存在に気づいた時のことを。

「迷いのあるお前に死ぬ気の俺には勝てない」

「迷いだと……!?!」

「そうだ」

ツナは超直感で気づいていた。一方通行の迷いに。だが一方通行自身、ツナの言う自分の迷いが何なのかわからず困惑していた。

「お前は言った。全てを黙らせる絶対的な力が、自分に戦うことすら許されない程の絶対的な力が欲しいと。だがそんな力を手にせずともお前にはそれだけの力がある。さっきの力を使えばお前の望みは叶う。にも関わらずお前はその力を使っていない。それをしないのはお前の心に迷いがあるからだ」

ツナはさっきの高電離気体をすぐに対処したが、やろうと思えばツナが手がつけれられない程の威力にすることができた。それを実行するチャンスなどいくらでもあった上に、一方通行の望みが叶うことをツナは理解していた。

「それをしない理由はただ1つ」

そしてツナは理解していた。一方通行がそれをしなかった理由を。

「孤独だろ?」

「黙れ……」

「強力な力を持てば疎まれ、怨まれ、妬まれる。そのせいでお前は1人になった。孤独は地獄。学園都市最強と呼ばれようと、あらゆるものを反射できようと自分に向けられた軽蔑の視線、寂しいという気持ちまでは反射できない」

「黙れ……」

「だからこそお前はこの計画に参加したんだろ。絶大な力を手に入れば……絶対能力者になればもう誰も傷つけなくていい。そう思ったんだろ?」

「黙れ……」

「学園都市を……世界を破壊しないのはまだお前の中にまだ誰かと繋がりたいという願望がるからだ」

「黙れつつてんだろ!!」

アクセラレータ 一方通行はツナに心を見透かされ、動揺し始めた。

「その絶大な力を手に入れる為に妹達シスターズを殺した。誰も傷つけない力を手に入れる為にお前は10030人の妹達シスターズを殺した。だがその選択は間違いだ。そんなことをしてもお前の本当の望みが叶うことはない」

孤独の辛さを知ってるツナは知っていた。こんなやり方で孤独から逃れることはできないということ。

「絶対能力者レベになっても今よりもさらに孤独に苛まれるだけだ。お前が本当にやるべきことは絶対能力者レベになることじゃない。他人から信頼してもらえるように努力をすることだ。死ぬ気でな」

「黙れエえええええええ!!」

アクセラレータ すると一方通行は叫び声を上げながらツナへと向かって走って来た。そして右手の拳をツナに向かって拳を繰り出した。お世辞もその拳は見栄えのいいものではなく、素人の放ったものよりも酷い拳だった。

「ガハッ!?!」

だが能力を使っても当たらなかった攻撃がツナに当たるはずもな

く軽々と躲された後に、顔面に拳を叩き込まれた。

「うおおおおお……りやあー！」

ツナはおもいつきり拳を振り切った。ツナの拳によって一方通行アクセラレータは宙を舞う。

(強エ……強すぎる……)

薄れゆく意識の中で一方通行アクセラレータはツナのあまりに強すぎる力を実感していた。

『絶対能力者になっても今よりもさらに孤独に苛まれるだけだ。お前が本当にするべきことは絶対能力者になることじゃない。他人から信頼してもらえるように努力をすることだ。死ぬ気でな』

(本当……何やってんだ……俺……)

そして先程のツナの言葉を一方通行アクセラレータを思い出し、自分が今までやってきたことを後悔した。そして一方通行アクセラレータは意識を手放すと地面へ落下した。

「最後の一撃。悪くなかった」

決して誉められない一撃であったが、ツナは意識を失っている一方通行アクセラレータにそう言い残すと背を向けて美琴たちへと向かって行ったのだった。

こうして一方通行アクセラレータとの戦いは幕を閉じた。

標的（ターゲツト） 161 甘さと仲間

アクセラレータ
一方通行との戦いが終わった次の日。8月22日。戦いが終わりに御坂妹は第7学区にある病院に搬送された。幸いにも御坂妹に命に別状はなかった。そしてリボンから連絡もあり、向こうの世界にいる御坂妹も一命を取り留めたと連絡が入った。

「ああ……?」

アクセラレータ
そして一方通行も病院に運ばれていた。

（ここは……? 病院かア……?）

アクセラレータ
一方通行は自分の体に巻かれている包帯と、周囲を見渡してここが病院だということを理解する。

「あつ！ よかった！ 目が覚めたんだ！」

「てめエ……!? 何でここにいやがる……!?」

アクセラレータ
一方通行が目覚めたのを見て、ツナは表情をパアツと明るくさせながら安堵していた。アクセラレータ
一方通行は自分が倒したはずのツナがなぜ目の前にいるのかわからなかった。

「何でという言い方はないだろう?」

アクセラレータ
するとカエル顔の医者が一方通行のいる病室に入ってきた。

「倒れた君を病院に連れて来たのは彼なんだよ? 君は彼に感謝しないといけない立場だよ? あれだけのことでおいて病院に運ばれてることにね?」

「連れて来ただと……!? てめエが……!?」

アクセラレータ
カエル医者が事情を説明する。カエル医者は今回の1件のことを知っている。一方通行はわからなかった。自分は目の前にいる男を本気で殺そうとした。だがその男が自分を病院に連れて来たってことが。

「い、いや……だって……怪我してたし……というかそんなになつたのは原因は俺な訳だし……」

（こいつ……どうかしてエンじゃねエのか……!?）

ツナが病院に連れて来た理由を説明する。理由を聞いてもなお
一方通行はツナの行動をどうかしていると思っていた。

「ま。怪我自体はそんなに大したことはないんだね？ どうやらある程度、手加減されてみたいだからね？ ともかく安静にしてるんだね？」

「そう言い残すとカエル医者は病室から去って行った。そして病室にはツナと一方通行の2人きりになってしまう。」

「何で俺を殺さなかった？」

「俺はお前を殺す為に戦ったんじゃないよ。この実験を止めるのにお前を倒す必要があったから戦った。殺す必要なんてない」

「俺はお前を殺そうとした上に10000回以上、あいつらを殺した人間だぞ。ためエは俺のしでかしたことに對して激昂し、俺を許さな
いって言っただろうが」

「お前を許せないと思っただのは本当だよ。でも俺はお前を殺したいとまで思っていない」

「甘ったれた野郎だ……」

ツナが本当に自分を殺す気がないということを知って一方通行は
ツナの人間性に対して悪態をついた。

「俺を倒しても実験が止まるかどうかは俺にもわかんねエぞ。お前は
今回の1件で学園都市の闇に触れ、多くの人間の怨みを買った。下手すりゃ消されるぞためエ」

「その時は戦うよ。たとえ学園都市を敵に回すことになっても。約束
したんだ。妹達シスターズが……みんなが笑える未来を作るって。だからもう
覚悟はできてる」

一方通行はそう警告するがツナは一切、動揺することなく真っ直ぐ
な目で答えた。

（ちっ！ 相変わらず気にいらねエ目をしてやがるぜ）

一方通行は警告してもなお、戦った時と同じ目をしているツナが氣
にいらぬ心の中で舌打ちしていた。

「お前はみんなが生きられる未来とかほざいてやがったが、どうする
つもりだア？ クローン共は後、9970体もいんだぞ。同じ顔した

奴らが学園都市に急に現れて他の奴らが違和感を感じねエわけねエだろうが」

一方通行はツナの言うみんなが笑いあえる世界のデメリットを指摘した。

「そうだったー!!」

アクセラレータ

一方通行に指摘されてツナは両手を頭に起きながら叫んだ。ツナはその辺りについて何も考えていなかった。

「考えてみたらそうじゃん!! どうしようー!？」

（こいつあんなこと言っておいて何も考えてやがらなかったのか……というか俺と戦った時とは別人じゃねエか……多重人格か……？）

今のツナと戦っていた時のツナがあまりにも雰囲気違って、為、呆れると同時にツナが多重人格なのではないかと疑っていた。

「ったく。ボンゴレのボスになるって奴が情けねエ声を上げてんじやねえ」

「ゴフツ!？」

すると病室にリボーンの声が響き渡る。それと同時にリボーンがツナにドロップキックでツナを蹴り飛ばした。

「リ、リボーン!？」

「あ、赤ん坊……!？」

ツナは頬を右手を抑えながらリボーンがここにいることに驚きを隠せないでいた。アクセラレータ一方通行は急にツナを蹴り飛ばし流暢に喋る謎の赤ん坊の存在に驚きを隠せないでいた。

「ちやおつす。お前が一方通行か？俺はリボーン。ツナの家庭教師だ」

「どオいうことだ？細胞の老化現象を抑える研究はもオ完成してたって訳かア？これが実験同時に囁かれていた250年法の実態ってとこだな。世界の裏の裏まで知ったつもりでいたが、学園都市ってなアどこまで科学技術を先に進めちまってやがる……」

リボーンは自己紹介するが、アクセラレータ一方通行はリボーンのことを分析していた。

「無駄だぞ。学園都市程度の科学技術じゃ俺のことを説明できねえ

ぞ」

「リボーン。お前、何でここにいるんだよ？」

「妹達シスターズのことで話があつてな。それとここに一方通行アクセラレータがいるつて言うから、顔ツラを拝もうと思つてな」

ツナがリボーンがなぜこの世界にいるのか尋ねるとリボーンはここに来た目的を話した。

「ツナ。今回、実験を知つてる奴を病院内のレストランに集めてこい。さつき言つた妹達シスターズのことで話がある」

「お、俺が!？」

「当たり前だろ。いいからとつと行つてこい」

「わ、わかつたよ!」

リボーンがツナに銃口を向けながらそう言うのとツナは逃げるように病室を出て行つた。

「どうだ？ 俺の生徒と戦つた感想は？」

「ガキの戯言かたきごゑんを信じると思つてんのか？」

「超一流の家庭教師かてきょうしである俺が育てたんだからな。お前程度じゃ勝てねえぞ」

「無視してんじゃねえよ」

「俺の質問に答えねえお前が悪い」

「お前がああの野郎を育てたつていう根拠がねエのに信じられる訳、ねエだろうが。第一、俺はお前みたいな得体の知れねエガキを信じられる程、大人じゃねエんだよ」

「ガキの分際で大人ぶつてんじゃねえ」

「赤ん坊のお前だけに言われたくねエんだよ。つーか結局、俺に何の用があんだよ？」

「言つただろ。俺はお前の顔ツラを拝みに来ただけだつてな。まあただの捻くれたクソガキだつた訳だつたがな」

「悪かつたな。捻くれたクソガキで。家庭教師様」

リボーンアクセラレータの言葉を聞いて、一方通行はリボーンに向かつて皮肉を言い放つた。

「だったら1つ聞かせてもらうぜ。あいつは俺と何が違う？ 何であ

「いつはあれだけの力を持って1人じゃねえんだ？」

「ツナもお前と同じだ。俺があいつと始めて出会った時、あいつは1人だった。勉強も運動も何もできなくてダメツナって呼ばれてな。だがあいつは死ぬ気でその運命に挑み、孤独という名の呪縛が逃れた。勉強も運動も何もできないダメツナのままな」

一方通行はアクセラレータこの男ならツナのことを……自分の知りたい答えを知ってるのではないかと思いいりボーンに尋ねる。りボーンは一方通行の問いに答える。

「いつも眉間に皺を寄せ祈るように拳を振るう。あいつは敵だろうと情けをかける甘い男だ。今、お前がこうして無様に生きてんのが何よりの証拠だろ」

「そんな甘い考えでよくこれまでやって来れたもんだぜ」

「だからこそだぞ」

「あア？」

「いつ何時も勝利よりも仲間の身を案じるからこそここまで来れたんだぞ。そんなツナだからこそついて来る奴等がいる。そんなツナだからこそ命を張れるんだぞ」

「……」

りボーンの言葉を聞いて、一方通行はアクセラレータ黙ったままであった。

「んじゃ。俺はそろそろ行くからな」

りボーンはそう言うのと病室から出る。かと思われたが病室の入り口の前で歩を止めた。

「お前がこれからどうするのかは知らねえ。これから闇の道を進むなら光の道に進むなり好きにすりやいい。だが次にこんな真似してみろ……」

すると入り口の方を向いていたりボーンがゆつくりと一方通行の方を向いて行く。アクセラレータ

「殺すぞ」

「っ!？」

りボーンはドスの効いた声で殺気を放ちながら一方通行にそう言い放った。りボーンの殺気を受けて一方通行はあまりの殺気に動くアクセラレータ

ことすらできなかつた。そして自分がグチャグチャにされる幻覚まで見えた。リボーンは直接ではないが絶対能力進化計画の一旦に触れた。ちよつとやそつとのことでは動揺しないリボーンではあるが、クローンとはいえ女の子を10030回も殺した男を許せるような男ではなかつた。

「警告はした。じゃあな」

そう言うとりボーンは殺気を解いて病室から去って行くのだった。

「はあ……はあ……はあ……」

一方通行はリボーンの殺気を受けて動けないどころか酸欠しかけてしまっており、何もしていないのに関わらず体中から大量の汗をかいていた。冷房が充分に効いている部屋であるのにも関わらず。

(い、今のは……あの時と同じ……!?)

一方通行は思い出す。死ぬ気の到達点状態のツナから放たれたあの絶対的な圧力を。

(いや……同じなんてもんじゃないねエ……あいつのはこんなドス黒いもんじゃなかつた……)

ツナの時は勝てないとわかつた。だがリボーンの場合は殺されるということがわかつた。勝てないことがわかるのと殺されるがわかるのでは全く違って来る。

(あ、ありえねエ……絶対能力者も2人もいるなんて……しかもあんなガキが……!?)

ツナが絶対能力者の領域に辿り着いているだけでも信じられないのに、子供どころか赤ん坊の

リボーンが絶対能力者の境地に辿り着ていることがもつと信じられないでいた。

(一体、学園都市はどうなつていやがる……!?)

標的（ターゲット） 162 初めての試練

リボーンの指示で今回の実験のことを知っている人を集めろと言われたツナは御坂妹のいる病室を訪れた。

「あつ！ 当麻！」

「よう沢田。どこに行ってたんだ？」

室内にいるのは当麻だけであり、美琴と御坂妹はどこにもいなかった。

「えっと……その……」アクセラレータ「方通行の所に……」

「はあ!？」

ツナは言い訳しようにも何も思いつかなかった為、正直にアクセラレータ「方通行の所に行っていたことを当麻に話した。当麻はツナの話を聞いて驚きの声を上げた。

「お、お前……勇氣あるな……」

「い、いや……どうしても気になったからさ……」

あれだけのことをしたアクセラレータ「方通行を病院に連れて来ただけでも驚いているのに、実際に会いに行つたと知つてツナの勇氣が計り知れないと当麻は思っていた。

「それで美琴とあの子は？」

「何か話したいことがあるって外に出たぞ」

「わかった」

「何か用があつたのか？」

「うん。実は今回の実験のことを知ってる人を集めてくれてリボーンが言つてさ」

「リボーンって確かお前が助けた別の御坂妹を治療したお前の世界の奴のことか？」

アクセラレータ「方通行を倒した後、互いに実験のことを知つた経緯を話している為、当麻もリボーンの名は知っていた。

「うん。とにかく病院のレストランに集まって欲しいんだ。俺は美琴たちを呼んで来るから」

「おう。わかった」

そう言うとツナは病室を出て、外にいるという美琴と御坂妹の所へと向かって行く。

病院から一番、最寄りの公園。美琴と御坂妹は遊ぶ子供たちをベンチで座りながら見守っていた。

「不思議です」

片目を包帯で覆っている御坂妹は上空を見上げながらそう呟いた。

「昨晚の実験でミスカは死んでいるはずでした。それは1万回以上繰り返されてきた当たり前のことでした。それなのに今もこの瞬間、活動を続けています。ミスカたちは殺され殺される為に造り出されました。ただそれのみが存在意義であり生み出された理由でした」

御坂妹はこれまで一方通行との戦いアクセラレータが脳裏に浮かんでいた。

「ですがあの方は言っておきました。私に生きていて欲しい。殺されるだけが存在意義なんてことは絶対にありえない。自分の生きたいように生きて欲しいと」

御坂妹はツナが言っていた言葉を美琴にそのまま伝えた。

「正直、これからどう生きていいかミスカにはわかりません。だからミスカにも生きるということの意味を見出させるようこれから一緒に探すのを付き合ってくださいとミスカは精一杯のワガママを言います」

「うん。よろしく」

御坂妹が自分の考えを伝えると、美琴は空を見上げながらそう言った。

「あつ！　ここにいたんだ」

「沢田？」

すると美琴たちを捜していたツナがやって来た。美琴はツナがここにやって来たことに驚きを隠せないでいた。

「どうしたのよ？」

「リボーンがみんな集めてくれって。妹達シスターズのことで話があるからって」

「私たちのことですか？　とミサカは尋ねます」

「うん。詳しいことはわかんないんだけど」

「わかったわ」

ツナがリボーンからの伝言を2人に伝えると、病院へと戻って行く。

病院内のレストラン。

「え!?　実験が中止になった!?!」

リボーンが待っている間、ツナは実験が中止になったことを知らされた。ツナが一方通行アクセラレータの所に行っている間に美琴と当麻にはこの事実が知らせていた為、2人は驚いていなかった。

「はい。一方通行アクセラレータをあなたが倒したことで実験は中止となりました。とミサカは伝えます」

「よかった……」

御坂妹はミサカネットワークで得た情報を伝える。ツナは先程、一方通行アクセラレータに実験が本当に終わったのかどうかかわらないと言われ、内心不安になっていたツナであったが、実験が中止になったと知って安堵する。

「けどこれから治療が必要になるらしいわ」

「治療？」

治療と聞いて、なぜ御坂妹に治療が必要なのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「ミサカの体はお姉様の体細胞から作られた体細胞であり薬品を投与することで急速に成長を促した個体なので寿命が短いのですとミサカは説明します」

「そんな……!?!」

「ですが急速な成長を促すホルモンバランスを整え、細胞核を調整することである程度の寿命を回復させることができます。とミサカは答えます。なので研究施設の世話になって個体を調整する必要があります。とミサカは説明します」

「よかった……」

寿命が短くなると聞いてショックを受けるツナであったが、治療で回復させることができると知って安堵する。

「にしても遅いなりボーンの奴」

実験の中止が告げられてから30分。リボーンに言われた通り、全員を集めたがりボーンは一向にやって来なかった。

「待たせたな。お前ら」

「あ、赤ん坊……!?!」

「流暢な言葉で喋る赤ん坊……とミサカは奇妙な存在に違和感を覚えます……」

当麻と御坂妹、突然現れた謎の赤ん坊の存在に驚きを隠せないでいた。

「ちやおつす。俺はりボーン。ツナの家庭教師だ」

「え!!? お前が!?!」

「そうだぞ。何をそんなに驚いてんだ」

「いや……お前ただの赤ん坊じゃん……お前みたいなチンクリンな奴が人に勉強を教えられる訳ないし御坂妹を治療できる訳ねえだろ……」

「るせえぞ」

「ゴフツ!？」

当麻は目の前にいる赤ん坊がツナの言っていたりボーンだと信じられないでいた。当麻の発言を聞いてりボーンは当麻の頬に蹴りを喰らわせた。

「痛い!! めちやくちや痛い!!」

「何やってんだよりボーン!」

「俺の言葉を信じねえこいつが悪い」

「なぜでしょう……正直、アクセラレータ一方通行よりもこの赤ん坊が恐ろしいと感じているのは……とミサカはますますこの赤ん坊のことが気になります」

「その認識は間違っていないわよ……」

当麻は頬を抑えながらりボーンのあまりの蹴りの威力にめちやめちや痛がっていた。いきなりりボーンが当麻に蹴りを喰らわせたことにツナは驚いていたがりボーンは反省していなかった。御坂妹はなぜかはわからないがりボーンがアクセラレータ一方通行よりも恐ろしいと感じてしまっていた。美琴は御坂妹の言葉を肯定した。

「それでシスターズ妹達のことと話があるって言ってたけど何なの?」

「お前たちには一応、話しておこうと思っただけな。シスターズ妹達のこれからについてな」

「これから?」

「その話をする前にまず俺たちのことを話しておかねえとな」

そう言うとりボーンは自分たちのことについて話す。異世界から来たこと、ツナが世界最強のマフィアボンゴレファミリーの次期後継者であること、自分はボンゴレファミリーの9代目の依頼によってツナを立派なマフィアのボスに育てる為に派遣された家庭教師兼ヒットマン殺し屋であるということ。

「マジか……」

「信じられません……とミサカはあまりのぶっ飛んだ話に驚きを隠せません……」

当麻はツナが異世界から来た人間であることを知っていたがマフィアの次期ボスということは知らなかった為、驚きを隠せないでい

た。御坂妹は現在ツナたちの世界にいる御坂妹とは情報を共有できていない為（流石に異世界にまでミサカネットワークは機能しない）この話を始めて知った。なので驚きを隠せないでいた。

「今回、ツナが一方通行を倒したことで実験は中止になった。それはもう知ってるよな」

「え!?! 何でリボーンがこのことを知ってるの!?!」

「さつきカエル顔の医者から聞いた。実験が中止になったことも、治療が必要だったことも、研究機関で治療を受けることもな」

リボーンが実験が中止になったのかを知っていることにツナは驚きの声を上げた。リボーンはカエル顔の医者から聞いて全てを知っているようであった。

「だが実験は終わったがまだ問題が残ってる。妹達シスターズがどうやって生きていくかだ。ツナはみんなが笑いあえる未来を作るとは言ったがそれは容易なことじゃねえ。同じ顔をした奴らが表を歩いてたらどう考えたって変な目で見られるのは確実だ。全員が全員、俺たちのように妹達シスターズを受け入れられる訳じゃねえ。それに絶対に妹達シスターズの力を悪用する奴らが現れる」

「つまり。この子たちが安全に暮らせる場所が必要ってことね」

「ああ。だから俺はさつきこの病院のカエル顔の医者とある交渉した」

「『交渉?』」

交渉と聞いてツナたちは何のことかわからず疑問符を浮かべた。

「妹達の半分をボンゴレと9代目が特に信頼を置いているファミリーに送ることにした」

「ええ!?!」

リボーンの言葉を聞いてツナは驚きの声を上げた。美琴と当麻も驚きを隠せないでいた。

「ど、どういふことだよりボーン!?! 何で妹達シスターズを!?!」

「妹達はクローン。もし妹達シスターズの存在が公になってみる。クローン技術規制法によって確実に処分されんのがオチだ。だが表の法律も関係ねえ裏社会なら処分を逃れられる」

「で、でも……」

「現状、これが妹達シスターズが安全に暮らす為に打てる最善の手だ。こうでもしなけりや妹達シスターズどころかオリジナルである美琴にまで変な目で見られる。そうなつちまえば妹達シスターズも美琴も居場所がなくなつちまうぞ」
「……」

リボーンの提案を受け入れたくはないツナであるが、リボーンが言っていることも事実である為、何も言えないでいた。

「それとボンゴレの力を持ってすれば治療もできるしな」

「治療って……マフィアが治療できんのかよ……」

「学園都市の科学技術よりもボンゴレの科学技術の方が上だ。そこは安心しろ」

「今さらつと……とんでもねえことを言ったよな……」

学園都市の科学技術は2、30年先の域まで達している。その学園都市の科学技術をも越えるボンゴレの存在に当麻は驚きを隠せないでいた。

「本来なら全員連れて行きてえとこなんだが、流石に全員はきついらな。安心しろ、妹達シスターズを戦場に立たせるなんて真似はしねえ。妹達シスターズたちには事務仕事及び、ミサカネットワークを使った情報伝達の簡略化に貢献してもらおうつもりだ」

「とはいってもマフィアだろ？ 敵が攻めて来たらどうすんだよ？」

「ボンゴレは世界最強のマフィア。傘下は10000以上。伝統、格式、規模において右に出るファミリィは存在しねえ。そんなファミリィに敵が強襲すると思ってるんのか？」

「せ、世界最強って……!?!」

まさかボンゴレファミリィがそこまで凄いファミリィだとは思ってもいなかった為、衝撃を隠せないでいた。

「言つとくがこれはまだ決定じゃねえ。お前たちが俺たちの世界に行くかどうかはお前が……お前たちが決めろ」

「ミサカがですか？ とミサカは少しだけ困惑します」

「そうだ。これからお前たちは様々な選択をしていかなきゃならねえ。今までみたいに誰かが決めた勝手なルールじゃなく自分たち

の意思でな」

これまで御坂妹を勝手に作った科学者たちが御坂妹の人生を勝手に決め、御坂妹もその科学者たちの用意した人生を生きしてきた。リボーンは御坂妹自身の力で決めさせるといふ試練を与えているのである。

「すぐに決めろとは言わねえ。これは重要なことだ。他の奴らと話し合って決めろ」

「……」

リボーンの言葉を聞いて御坂妹は黙ったままであった。

リボーンの提案に御坂妹はどう答えるのか？

標的（ターゲツト） 163 仲直り

リボーンがツナたちの世界に来るかどうかを御坂妹に選択肢を与えた。その後、ツナたちは病院を出る。当麻は居候であるインデックスを心配させたらいけない為、先に帰ってしまった。

「美琴お前はいいのか？ 妹達シスターズが俺たちの世界に来ることになったとしても？」

「私はあの子たちが望むならそれでいいわ。それに9代目がとってもいい人だってことは知ってるから」

「美琴はリボーンの提案に一切、反対はしなかった。リボーンの言っていることは本当である上に9代目の人となりは知ってる為、心配はしていないのである。」

「んじゃそろそろ帰るぞツナ」
「うん」

今日ツナは風紀委員ジャッジメントの仕事が休みである為、ツナは元の世界に帰ることにする。

「ねえ。あんたたちの世界にいるあの子はどうしてるの？」

「今、俺たちの住んでる街の病院で安静にしてるぞ」

「びよ、病院!？」

病院と聞いて美琴は驚きの声を上げた。御坂妹は学園都市の人間の上にクローン人間。御坂妹が病院に入院できているという事実に驚きを隠せないでいた。

「病院つっても廃業になった病院だ。安心しろ。ちゃんとした治療の設備は俺たちが整えてある」

「それ大丈夫なの……？」

「ま。誰も何も言わねえし問題ねえだろ」

（今さらだけどヤバいんじゃない……）

いくら廃業になった病院とはいえ勝手に治療設備を整えて、使っているのはまずいのではないかと美琴は思っていた。当のリボーンは気にしている様子はなかった。ツナは今さらながら罪の意識を覚え

ていた。御坂妹が今いるのは並盛町にある廃病院、中山外科医。リング争奪戦の時に負傷したバジルを治療した廃病院である。

「それでそれがどうしかしたのか美琴？」

「前にあの子に酷いこと言ったの……だから謝りに行きたいのよ……」

「美琴……」

美琴は御坂妹に言った言葉を思い出していた。あの時、実験が中止になったと思いきや中止にならず追い詰められていた為、美琴は御坂妹に酷いことを言ってしまうと後悔していたのである。そんな美琴を見てツナは美琴の想いを知った。

「いいぞ」

「ありがとう」

美琴の話を聞いてリボーンは美琴を自分たちのいる世界に来ることを了承した。

並盛山

「ここが……あんたたちの世界……」

異世界転送装置を使って並盛山にやって来たツナたち。初めて来るツナたちの世界に美琴は周囲を見回しながら驚いていた。

「この上で佐天が修行してるが見に行くか？」

「ううん。いいわ。修行に集中させてあげたいから」

「そうか」

佐天に会っていかないとリボーンから言われたが美琴は首を横に振りながらそう答えた。

並盛山から降りるとツナたちは街へ降りて御坂妹のいる中山外科医へと向かって行く。

「にしても普通の町ね。あんな奴らがいるからもつと変わった街だと思っただけど」

美琴は住宅街を見ながらそう呟いた。前にあんなにバラエティーに富んだ連中を見ていた為、街も普通じゃないと思っただが意外にも普通の街だった為、美琴は意外そうな顔をしていた。

「着いたぞ」

「ここにあの子が……」

歩くこと10分。御坂妹のいる中山外科医に着いた。美琴は建物を見上げながらそう呟いた。3人は病室の中へと入って行く。

「ようツナ」

「え!?! デイノさん!?!」

(この人……あの時の……)

中に入ると待合室にデイノと部下が数名いた。なぜここにデイノがいることにツナは驚きを隠せないでいた。美琴は前にデイノと会ってはいるのだがロクに自己紹介しないまま別れたのでデイノのことを詳しく知らないのである。

「そーいや。お前とは前に会ったがまだ自己紹介がまだだったな。俺はデイノ。キャバッローネファミリーのボスだ。よろしく」
「御坂美琴です。初めまして」

「どうか何でデイノさんがここに?」

デイーノと美琴は互いに自己紹介する。ツナはなぜここにデイーノがいる理由を尋ねる。

「昨日の夜にリボーンに呼ばれたんだ。お前の妹の護衛の為にな」

「え……!?!」

デイーノが御坂妹の護衛してくれていたと知って、ツナと美琴は驚きを隠せないでいた。

「そっちで何があったのかは聞いてるぜ。実験のこともお前の妹のことも、これからのこともな」

「あ、ありがとうございます。あの子の為に」

「気にすんな。元家庭教師の頼みだしこのくらい問題ねえぜ」

「元……家庭教師って……!?!」

元家庭教師と聞いて美琴は驚くと同時にあることに気づく。

「俺はツナの所に来る前はデイーノの所で家庭教師してたからな」

「つまり俺はツナと涙子の兄弟子って訳だ」

「あなたが……!?!」

デイーノがリボーンの元生徒であり、ツナと佐天の兄弟子であると知って美琴は驚いていた。

「わざわざここまで来たってことはあいつに会いに来たのか?」

「ええ……まあ……」

デイーノは美琴がわざわざこの場所に来たということとは御坂妹に会いに来たのだと推測する。美琴は暗い表情をしながらそう答えた。

「何か伝えたいことがあるんだろう?」

「はい」

「だったら行って来い」

「はい」

デイーノがそう言うのと美琴はそれ以上、何も言うことなく奥へ進んで行った。

「美琴……」

「いくらあいつがクローンとはいえ姉妹であることは変わりねえんだ。2人きりにさせてやれ」

美琴の背中を見ながらツナは心配そうな表情をしていた。ツナは

美琴の後を追おうとするがリボンがそれを制止した。

廊下

「ここが……」

美琴は御坂妹のいる病室の前にいた。御坂妹は美琴と同じ力を持ったクローンであり、レベルは違えども同じ力を持っている為、美琴は御坂妹の力を感じ取る事ができるのである。

「よし……」

そして美琴は勇気を振り絞って病室のドアノブを掴んだ。そしてドアノブを捻って病室の扉を開けた。

「やはりお姉様でしたか」

病室の扉を開けるとそこには病室のベッドから窓の外を見ていた御坂妹がいた。美琴と同じく御坂妹も美琴の存在に気づいていた。

「わざわざこの世界に来てまで私に会いに来るなんて何かあったのですかお姉様？ とミサカは尋ねます」

「え、えつと……」

御坂妹は美琴がなぜここにいるのか尋ねる。美琴は謝ろうと来たのだが、勇気が出せず口ごもってしまった。

「お姉様？ どうしたのですか？ とミサカはお姉様の様子がおかしいことに気づきます」

御坂妹は口ごもっている美琴を見て、美琴の様子がおかしいことに気づき、疑問符を浮かべていた。

「ごめん……」

「？」

美琴は勇気を振り絞って御坂妹に謝罪の言葉を口にした。しかし

御坂妹はなぜ美琴が自分に謝るのかわからず疑問符を浮かべていた。「前にあんたに酷いこと言っちゃったでしょ……だから謝りに来たの……」

美琴は自分が何の為にこの世界に来たのかを御坂妹に伝えた。

「あの時、私はどうしたらいいかわからなくて……色々と混乱してたの……だからあんなこと言っちゃって……」

美琴は公園にて御坂妹に言った言葉を思い出していた。

「だからって許されるなんて思ってたない……私にも顔を見たくないってかもしれない……それでも私は……あんたたちが生きられるように協力していくつもり……だから償わせて欲しいの……」

そして美琴は御坂妹にこれから償いたいということを伝えた。

「本当にあの方の言う通りでした。とミサカは驚きます」

「え!？」

「前にお姉様と別れた後、あの方はミサカに言いました。お姉様はきっと悲しんでいると。きっと何か事情があると。とミサカはあの時の出来事を伝えます」

『美琴が君に酷いことを言ったのは何か事情があると思う。きっと美琴も君と同じで悲しんでいると思うよ』

御坂妹は思い出していた。ツナが自分に言ってくれたあの言葉を。「お姉様の言葉を聞いた途端、ミサカの中にあつたわずかな蟠りも取れました。とミサカは伝えます」

御坂妹は胸部に手を当てながら自身の中にあつたわずかな蟠りが無くなつていくのを感じていた。前にツナの言葉で胸部の痛みは無くなつたが、それでもまだ御坂妹には蟠りが残っていたのである。だがその蟠りも美琴の言葉で無くなった。御坂妹の言葉を聞いて美琴は安堵する。

「ミサカはこの世界で暮らしてみたいと考えています。とミサカは自分の願望を伝えます」

「え!？」

御坂妹は自分の願望を伝えた。御坂妹の言葉を聞いて美琴は驚きの声を上げた。御坂妹はディーノから自分たちのこれからのついて

聞いている。

「あの方があんな風に育ったこの世界を知ってみたいのです。とミサカはこの世界で暮らしたい理由を答えます」

「そっか……」

「だからお姉様。もしこの世界で暮らすことになっても忘れないでいてくれますか？ とミサカは尋ねます」

「当たり前じゃない。だってあんたは私の妹なんだから」

御坂妹の言葉を聞いて微笑みながら美琴は答えた。

こうして美琴と御坂妹は仲直りを果たした。

標的（ターゲット） 164 死の覚悟

御坂妹の謝罪を終えた美琴はツナたちの元へ戻って来た。デイーノたちはおらずいたのはツナとリボーンだけだった。

「終わったの？」

「うん」

「そっか」

美琴が無事に謝罪できたのだとわかってツナは安堵していた。

「あの子。この世界で暮らしてみたいって」

「え!? そうなの!？」

「うん。この世界のことを知りたいたんだってさ」

「だったらあいつにはこの世界に来てもらわねえとな」

御坂妹がこの世界で暮らしてみたいと美琴から聞いてツナは驚きの声を上げた。リボーンは美琴の言葉を聞いて口元を緩ませていた。

「ツナ。もう遠慮せず行って来い。行きたくてしょうがねえんだろあいつの所へ」

「え？」

「俺はお前の家庭教師かてきょうだぞ。そのくらいわかるぞ。とつとつ行って来い」

「う、うん……」

ツナの気持ちを察していたのかりボーンはツナに御坂妹の所へ行くように言った。ツナはリボーンの言葉を聞いて御坂妹の病室へ向かって行く。

「あのさ……今回は色々ごめん……迷惑かけちゃって……」

美琴はやるべきことが全て終えることができたので今まで迷惑をかけたことについて謝罪する。

「私、みんなを巻き込みたくなくて……どうすればいいのかわからなくて……だから……」

「気にすんな。お前と俺の仲だろ」

「でも……」

「それに全部が全部、悪かった訳じゃねえだろ」

「え？」

「創り出された理由はロクでもねえが、それでもお前がいたからこそ妹達は生まれた。それだけは紛れもねえ事実だ」

「リボーン……」

リボーンの言葉を聞いて美琴はキョトンとした。今回の事件で多くの妹達が殺された。しかし美琴がいなければ妹達には出会えず友になることはできなかった。

「超能力者って呼ばれようが超電磁砲の異名で呼ばれようがお前は人間だ。1人でできることなんてたかが知れてる。何でもかんでもできる訳じゃねえ。だから1人で背負おうとすんな。巻き込みたくねえっていう気持ちはわかるが、お前には頼れる仲間がいるだろ。仲間に頼ってればもつと早く解決できたはずだぞ」

「それは……」

「仲間ってのは自分の大切な者の為に死ぬ気になれる奴らのことだ。仲間の為に死ぬ気になれず仲間を失うことは死と同義だ。間違うなとは言わねえ。ただ奴らを本当の意味で死なせたくなえなら仲間を頼れ」

「うん……」

リボーンの言葉を聞いて美琴はちよつとだけ微笑みながら返事をした。

「そうやってあんたの指導を受けたからこそ沢田は色んな試練を乗り越えて来れたのよね……なんか沢田があんな風に育った理由がわかる気がするわ」

美琴は先程のリボーン言葉で感じていた。今のような指導でツナを導き、どんな修羅場も2人で乗り越え強くなっていったのだというこを。

「あいつは教わるだけの存在じゃねえぞ。俺にも教えてくれたからな」

「教える？」

「前に言っただろ。俺はアルコバレーノと呪いによって死ぬはずだった。俺はその運命を受け入れた。俺の使命はツナを立派なボンゴレ

10代目にすること。ツナが死んじゃったら意味はねえ。そう思ってた。だからツナにも戦わないでいいって言った」

リボーンは虹の代理戦争中に自分がツナに言った言葉を思い出していた。

「けどあいつは言った。今度は俺がお前が教育してやる。お前を絶対に死なせない。死ぬ気の強さは覚悟の強さだってな」

リボーンは虹の代理戦争中にツナが自分に言った言葉を思い出していた。

「教える立場にいた俺が逆に教えられのさ。いつもあいつに教えていた死ぬ気の強さってのは何かってな。そのお陰で俺はこうして生きてる。お前もそうなんじゃねえのか？」

「……」

リボーンの言葉を聞いて美琴は思い出す。橋でツナが自分の死を止めようと言ってくれた言葉を。

「まあつまり俺たちはツナのお陰で生き残った似た者同士って訳だ」

「そうね」

「ま。1つ違いのはツナに惚れてるか惚れてないかの違いだがな」

「ブハッ!!」

リボーンがニヤニヤしながらそう言うと美琴は顔を真っ赤にしながらからおもいつきり吹いた。

「な、何言ってるのよ!? そ、そんな訳ないじゃない!?」

「この程度で動揺するとはな。常盤台の超電磁砲レールガンと呼ばれようとまだまだ14歳のガキだな」

「だ、だからそんなじゃないって言ってるでしょ!!」

「これは佐天に聞かせたらどんな反応をするだろうな」

「ちよっ!? 止めなさいよ!! それだけは絶対に止めなさいよ!!」

リボーンがニヤニヤしながらそう言うと美琴は恐怖してしまっていた。

「前に佐天がツナとデートした時、面白い発見があっつてな」

「デ、デート!?」

デートという単語を聞いた途端、美琴は顔を真っ赤にしながらから動揺

し始める。

「そんな時に敵対ファミリーの襲撃を受けてな」

「しゅ、襲撃!? どういうこと!?!」

「2人がデートしたのはマフィアランドって言ってな。マフィアが警察の目を気にせずまっさらな気持ちで休めるようにとドス黒い金を注ぎ込んだスパーリゾートドリムアイランドでな」

「何よ……その行く気が失せるリゾート……」

リボーンからマフィアランドの詳細を聞いて、美琴は何とも言えない気持ちになってしまっていた。

「って!・ 何で襲撃を受けんのよ!? マフィアがゆっくり休む為のリゾートなんでしょ!?!」

「マフィアランドは麻薬に手を出さないいいもののマフィアが作ったからな。それをよく思わねえ敵対マフィアもいるんだ」

「そもそもマフィアって存在そのものが反社会組織ってことを忘れてるんじゃない……?」

マフィアランドの建設に携わったマフィアたちが善人みたいな言い方することに美琴は引っ掛かっていた。

「そのせいでせっかくのデートも中止。そのせいで佐天の怒りが頂点に達してな。敵対ファミリーを1人で壊滅させたからな」

「か、壊滅……!?!」

リボーンはマフィアランドでの出来事を美琴に話した。美琴は壊滅という単語と聞いて恐怖する。

「このことを知れば佐天はまたパワーアップすること間違いなしだな」

「だから絶対に止めなさいよ!」

「わかってくれ美琴。俺は家庭教師かてきょうとして佐天生徒を強くする義務があるんだ」

「いい話風に言っても騙されないわよ!」

「これは仕方のないことなんだぞ美琴。こんな面白……佐天を強くするのに必要なことなんだ」

「あんた自分のことしか考えてないでしょ!」

美琴はリボーンが面白いと言いかけたのを聞き逃すことはなく、ツツコミをいれる。

「つたく。そんなんじやツナに振り向いてもらえねえぞ」

「だ、だからそんなんじやないって言ってるでしょ!!」

「ま。佐天がツナと付き合うことになっても愛人になれるし。フラれる心配はねえぞ」

「そんなもんになる訳ないでしょ!! とにかく佐天さんに余計なことを言うんじゃないわよ!!」

美琴が顔を赤くしながらリボーンが余計なことを言わないように釘をさした。

「しろうがねえな。言わないでおいでやるぞ」

「あ、あんた……まさか……!?!」

リボーンは表情をニヤニヤさせながら懐からスマホを取り出した。美琴はリボーンのスマホを見て恐怖する。

「言うのはダメなんだろう。ならスマホで情報を送信するのはいいってことだよな?」

「あんたは一休さんか! というかいつの間に送ったのよ!」

「お前が病室に行ってる間だぞ」

するとリボーンのスマホに着信音が鳴った。リボーンはスマホにメールが届いたのである。タイピングがいいのか悪いのかメールを送って来たのは佐天だった。

「佐天からの返信だぞ。夏休みが終わったらお話ししよう御坂さん。だってよ」

(私……死んだかも……)

リボーンが佐天の送って来た文章をそのまま美琴に伝えた。それを聞いた美琴は死を覚悟するのだった。

標的（ターゲツト） 165 名前

美琴がツナの世界にいる御坂妹に謝罪しに行つた次の日。8月23日。ツナ、リボン、美琴、当麻は第7学区にある病院に来ていた。リボンの言つた提案の返答を聞きに来たのである。

「それで？ 答えは出たか？」

「あれからミサカネットワークを使ってあなたの提案について他のミサカと相談し答えを出しました。とミサカは伝えます」

リボンはベッドの上にいる御坂妹は昨日の提案の返答を尋ねた。御坂妹は自分たちで答えを出したということを伝えた。

「他のミサカにあなたの提案について相談した結果、ミサカたちの半数をあなたたちのいる世界に行くことに賛成しました。とミサカは議論の結果を報告します」

「そうか」

妹達シスターズがちゃんと自分たちで話し合い自分たちで答えを出したとわかつて口元を緩ませていた。

「昨日は言いそびれましたが皆様にはご迷惑をおかけしました。そしてミサカたちの為に色々として下さりありがとうございます。とミサカは謝罪の言葉と感謝の言葉を述べます」

「いいよ。お礼なんて」

「気にすんな。それに俺は大したことはしてねえ。ほとんど沢田のお陰だぜ」

「そうよ。私は何もしてないわよ」

御坂妹から今回の件についての謝罪と感謝の言葉を聞くとツナと当麻と美琴はそう言った。

「あんた自身はどうするつもりなの？」

「ミサカは学園都市に残ろうと思っっています。とミサカは自分の考えを伝えます」

「じゃあ元気になったら一緒に遊びに行けるね」

「え？ とミサカは戸惑います」

御坂妹が学園都市に残ると知ってツナはそう言った。御坂妹はツナの発言を聞いて困惑していた。

「だってもう実験が中止になったから自由になった訳だし。一緒に遊んでも問題ないでしょ」

「なぜミサカと遊ぶ必要が？ とミサカは尋ねます」

「だって君のことを色々知りたいからさ」

「ですがミサカが外に出ればお姉様にも迷惑がかかります。とミサカは問題点を指摘します」

「それはあくまでお前たち妹達シスターズが全員で外に出ればの話だ。ミサカネットワークで情報を共有しあえばその問題を回避できるだろ」

ツナの提案を聞いて御坂妹はリボーンが以前に言っていた問題を思い出す。御坂妹の言葉を聞いてリボーンは問題の解決策を提示した。全員で外に出れば白い目で見られるが、1人だけであれば美琴の双子の妹ぐらいでしか見られ無い為、問題はなくなる。

「あつー！」

「どうしたのよ？」

「あ……いや……なんて呼ぼうかなって思ってたさ……」

「呼ぶ？」

ツナの呼ぶということが何なのかわからなかった為、美琴と当麻は何のことかわからず疑問符を浮かべていた。

「いや今まで名前で呼ばなかったからさ。これから接していく上で名前が必要かなって思ってたさ」

「ミサカはミサカですが？ とミサカは答えます」

「ミサカは苗字でしょ。ミサカの下の名前が欲しいんだよ。ミサカだと美琴とややくしくなるし」

「10032号でいいのでは？ とミサカは提案します」

「それだと機械みたいだしなんか嫌だよ……」

「では妹達シスターズはどうでしょう。とミサカは次の案を提案します」

「それは君たちの総称でしょ。もつといい呼び方は……」

「だったらお前が決めてやりやいいじゃねえか」

「え？俺が？」

これから御坂妹のことをなんて呼ぼうかとツナは悩んでいた。そこでリボーンはツナに御坂妹の名前を決めたらどうかと提案する。リボーンは提案を聞いてツナはキョトンとした。

「ないんならみんなが呼べるようにすればいいだけだろ」

「そっか……だったら……」

リボーンは提案を聞いてツナは両腕を組んで御坂妹の名前を考え始める。

「じゃあミサってどうかな？」

「「ミサ？」」

ツナは御坂妹の名前を提案する。なぜミサなのかわからず当麻、美琴、御坂妹は疑問符を浮かべる。

「うん。ミサカから取ってみただ。御坂ミサ。どうかな？」

「ミサカは別に構いません。とミサカはあなたの安直過ぎるネーミングセンスにがっかりします」

「嫌だった!？」

「冗談です。とミサカはあなたの反応を見て楽しみます」

(なんかめちやくちやいじってくるんだけど!?)

御坂妹からダメ出しされて驚くツナであったが御坂妹は少しだけ微笑みながらそう言った。ツナは急にいじってきた為、驚いていた。

「じゃあこれからはミサって呼ぶね」

「おう。よろしくなミサ」

「……」

ツナと当麻はミサと呼んだ。当の本人は名前を呼ばれてもなお黙ったままだった。

「どうしたのよ？」

「いえ……今まで名前と呼ばれることはなかったの……どうしても慣れないのです……とミサカは今の自分の心境を伝えます……」

「まあ無理もないわね……」

「ですが皆さんとの距離が縮まった気がします。とミサカは今まで感じたことのない感覚に少しだけワクワクします」

ミサはミサと呼ばれたことに困惑すると同時にワクワクしています。

「じゃあこの際だし俺たちのことも名前で呼んでもらうってのはどうだ？」

「あつ！ いいね！」

ミサのことをミサと呼ぶことが決まった為、当麻は自分たちのことも名前で呼んでもらうのはどうかと提案した。当麻の提案にツナは賛成する。

「ミサカがあなたたちのことを名前で呼ぶのですか？ とミサカは尋ねます」

「うん。友達同士なんだからさ。やっぱり名前で呼んでくれる方が嬉しいよ」

「友達ですか？ とミサカは尋ねます」

「そうだよ。ね？ 当麻」

「おう」

「わかりました。ではあたちをどのように呼べばいいでしょうか？

とミサカは尋ねます」

「俺は沢田綱吉だから沢田とかツナって呼ばれるけどミサの好きなように呼んでよ」

「俺は上条当麻だから上条とか当麻とか。後、カミヤンって呼ぶ奴もいるぜ」

ミサが尋ねるとツナと当麻は自分が普段、どのような呼ばれ方をしているのか答えた。

「俺はみんなからリボーン様って呼ばれ崇められてるぞ」

「嘘つけ！ みんなお前をそんな風に呼んでないだろ！」

「あんた私の妹になんて呼び方させようとしてんのよ！」

リボーンがしれつと嘘をついたことにツナと美琴はツツコミをいれる。リボーンは基本的にリボーン、リボーン君、リボーンさんと呼ばれることがほとんどである。リボーン様と呼ぶ人はいない訳ではないがツナの周りの人間では基本的にこれらの名称で呼ぶ人がほとんどである。

「ではツナ、当麻、リボーン様と呼ばせてもらいますがいいでしょうか？」とミサカは確認を取ります

「間に受けなくていいから！ リボーン様なんて呼ばなくていいから！」

「ではリボーン閣下でどうでしょう？ とミサカは再び確認を取ります」

「悪くねえ響きだな。いいぞ。それでも」

「調子に乗ってんじゃないわよあんた！」

リボーンのことをリボーン様と呼ぼうとするミサを制止する。しかし今度はリボーンのことをリボーン閣下と呼ぼうとする。リボーンはその呼び方が気に入ったのかそう呼ばせようとしたが美琴によって止められてしまう。結局、ツナ、当麻、リボーンという呼び方で決まった。

「それであなた……ツナに聞きたいことがあります。とミサカは伝えます」

「何？」

「先程、一緒に遊ぶと言いましたがそれはいつになるのでしょうか？」

とミサカは正確な日時を尋ねます

「え……そこまで考えてないけど……」

「では今決めて下さい。とミサカは強要します」

「ええ!?! 何で!?!」

何でミサがこんなにも遊ぶことに関して執拗に迫って来るのかわからず驚きの声を上げる。

「ま、まあ……俺、学校に行っていないから夏休みが終わった後でも全然、大丈夫なんだけど……」

「では平日に遊ぶのがいいでしょう。とミサカは進言します」

「え？ 何で？」

「平日であれば学生も少なく混むこともなくスムーズに動けます。とミサカは平日を選ぶ理由を説明します」

「なっ!?!」

ミサが平日に遊ぶメリットを説明する。ミサの説明を聞いた美琴

は動揺してしまっていた。

「確かに……でもそれだと他のみんなを誘えないし……」

「それはまたの機会でもいいのでは？ とミサカは助言します」

「まあ……それもそうか……」

「な、な、な……!?!」

ミサが遠回しに2人きりになろうとしているのにも関わらず、ツナはミサの意図に全く気づいていなかった。ミサの意図に気づいた美琴は動揺を隠せないでいた。

「おい……もしかしてビリビリの奴……」

「そのまさかだぞ……ツナがミサが2人きりになるって知って動揺してやがる……」

「でも沢田の奴、全然気づいてねえぜ」

「あいつは鈍感だからな。ちよつとやそつとじゃ気づかねえからな」

「こりや前途多難だな」

当麻はミサと美琴の気持ちに気づいたのか小声でリボンに確認を取った。リボンも当麻と同じく小声で返事をした。

「動揺しているように見えますがどうかされたのですかお姉様？ と

ミサカは尋ねます」

「べ、別に何でもないわよ!!」

「もしかして嫉妬しているのですか？ とミサカは推測します」

「ち、違うわよ!! そ、そんな訳ないでしょ!!」

「では平日にツナと一緒に遊びに行きます。とミサカはお姉様に予定を伝えます」

「なっ!?!」

ミサは美琴の気持ちをわかっていながらツナと遊びに行くということを伝えた。しかし美琴は動揺を隠せずに行った。

「ツナはどこか行きたい場所がありますかか？ とミサカはツナの希望を尋ねます」

「きゅ、急に言われても……」

(な、何よ……急に親しくしちやつて……し、しかもツナつて……!?!)
自分よりもツナと過ごした日々が少ないミサが馴れ馴れしくツナ

と呼んでいることに美琴は嫉妬してしまっていた。

「おやおやリボンさん。ビリビリの奴、2人の仲睦まじい姿を見て動揺してますよ」

「しかもツナって呼ばれたことに反応していませんぞ」

(こ、こいつら……後で殺す……!?)

当麻とリボンがニヤニヤしながら美琴にだけ聞こえるようにコソコソと話す。美琴は顔を真っ赤にしながら拳をおもいつきり握りながら恥辱に耐えることしかできないのであった。

標的（ターゲット） 166 嫉妬

一方通行を倒して絶対能力進化計画を阻止したツナ。計画が頓挫しても風紀委員の仕事がなくなった訳ではない。ツナは病院でみんなど別れた後、177支部へと走って向かっていた。今日は昨日と違って風紀委員の仕事があるのだが、ミサのことがあるのであらかじめ黒子に遅れるということ伝えておいたのである。勿論、本当のこととは話していない。

風紀委員177支部

「ごめん。遅れちゃって」

「沢田さん！ これは一体どういうことですか!?!」

「え!?! な、何!?! 何かあったの!?!」

支部の入り口に入った瞬間、一枚の用紙を指を指しながら黒子が問い詰めてくる。入って早々に黒子が叫んだ為、ツナは驚きの声を上げた。

「学園都市の上層部が沢田さんに学園都市から当面の間、出ていくようにという書類が届いたんですよ」

「ええ!?!」

初春から急に自分が学園から追い出されることを知らされてツナは驚きの声を上げた。

（やっぱり実験関係かな……）

このタイミングで学園都市から出て行くように言われる程の出来事があったとすれば、ツナの知る限り絶対能力進化計画以外に考えられるものにはなかった。

（でもこんなに早く……やっぱりあの実験には学園都市の上層部が関わって……）

何で自分を消そうとせず当面の間、学園都市に出て行くという命令

が下されたのかはわからないが、こんなにも早く自分に処分が下されたということから美琴の言っていた通り、本当にあの実験に学園都市が上層部が関わっているというのをツナは理解する。

「一体どういうことか説明して下さい沢田さん！」

「ごめん……それは言えないんだ……」

黒子は問題行動など起こさないようなツナがどうして学園都市に出て行かないといけないことになったのかが当然、気になったのでツナに詳細を求めた。しかし黒子に絶対能力進化計画レベル6シフトについて話すことはできないのでツナは言えないと言った。ツナとしては言いたいのであるが美琴がそれを望んでいない。今回の1件に黒子たちが巻き込まれたのであれば話すべきなのだろうがそうではない為、ツナは話さないことを決めたのである。

「本当にごめん……後で埋め合わせはするから……」

「ちよっ!?! 沢田さん!?!」

ツナは2人に謝罪すると黒子の制止も聞かずそのまま支部を出て行ってしまった。

「何かの間違いだと思ったんですけど、あの様子だと何かあったみたいですわね……正直、信じられません……あの沢田さんが……」

「私ですわ……一体、何があったというんですの……」

初春と黒子はツナに何かあったという事実を知ってもなお、信じられないでいた。黒子の能力を持つてすればツナに追い付き話を聞くことなど朝飯前である。しかし先程、ツナが謝罪した時の表情かおがそれを躊躇ためらさせた。

佐天の家

「もしもし? 美琴?」

『どうしたのよ？ あんた今日は風紀委員の仕事じゃないの？』

ツナは一旦、佐天の家に入ると美琴に電話をかける。美琴は風紀委員の仕事に行つたはずのツナが電話をかけてきたことに違和感を感じていた。

「実はさ。当面の間学園都市から出て行くようについていう通達が177支部に来たんだ」

『え!?!』

ツナは先程、あつた出来事をそのまま美琴に伝えた。ツナの話聞いて美琴は驚きの声を上げた

『ま、まさか実験のせいだ……!?!』

「うん。おそらくね」

『そう……』

美琴はツナが学園都市から出て行くように言われたことに対し罪悪感を覚えてしまっていた。

「あつ！ 黒子たちには実験のことは喋ってないから安心して。美琴が喋らない限りは実験のことが黒子たちに知られることはないから。だから安心して」

『ごめん沢田……私……あなたに迷惑かけてばかりで……』

「いいよ。別に追い出されるっていつでも当面の間だから。帰つて来れない訳じゃないしさ。それに俺には帰る場所があるし。美琴が心配するようなことは起きないから。帰つて佐天と一緒にリボーンの修行を受けるだけだよ」

『っ!?!』

ツナの口から佐天の名前が出た途端、美琴の胸部に痛みを走つた。

「美琴？ どうかしたの？」

『ううん。何でもないわ。ただ罪悪感を感じちゃっただけだから』

「そっか……」

もう1度気にしないでいいと言おうとしたツナであつたが、気にするなといつても美琴は気にするだろうと思ひ、それ以上、何も言うことはしなかつた。

「とりあえず何かあつても俺の方から学園都市には行けないから。も

し何かあったら連絡して。リボーンをそっちに向かわせてこっちに
来れるようにしておくから」

『わかったわ……』

「じゃあそういうことだから。よろしく美琴」

そう言うのとツナは電話を切った。電話が切れた後、美琴は空を見上
げていた。

『いいよ。別に追い出されるっていつでも当面の間だから。帰って来
れない訳じゃないしさ。それに俺には帰る場所があるし。帰って
佐天と一緒にリボーンの修行を受けるだけだよ』

(佐天さんの名前が出た途端……嫌な気持ちになった……)

美琴は思い出す。ツナの口から佐天の名前が出た途端に胸部に痛
みが走ったことに。

(やっぱりリボーンの言う通り……私は沢田のことを……)

先程、ツナがミサと仲良くしているのを見た時も今のように胸部に
痛みが走っていた。美琴はリボーンの言う通り、自分がツナに対して
特別な感情を抱いているのではないかと気づく。

(でも佐天さんは私の大事な友達……そして佐天さんは沢田に特別な
感情を抱いてる……)

美琴の脳裏に佐天の姿が浮かぶ。自分の大切な友達であり、誰より
もツナのことを愛している佐天の姿が。

(私は……一体……これからどうしたらいいの……?)

標的（ターゲット） 167 存在意義

学園都市から当面の間、出て行くようにと命じられたツナは美琴との電話での会話が終わった後、異世界転送装置を使って並盛へと戻って行く。並盛山に着くとツナは佐天が修行してる場所へと向かって行く。

一方で佐天は

「はあ……はあ……」

現在は佐天は超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態で

2メートルはあるであろう大岩を両手で持ち上げた状態でスクワットしていた。

（負けない……たとえ御坂が相手でも……）

佐天はリボンから美琴がツナのことを好いてるということを知りてより一層、修行を励んでいた。

「お。いたいた。おーいリボン。佐天」

「ん？」

「え!？」

^{ジャッツメント}風紀委員の仕事に行ってるはずのツナがここにやって来たことにリボンと佐天は驚きを隠せないでいた。佐天は大岩を降ろしてツナの方を向く。

「また無茶苦茶な修行を……」

「そんなことよりツナ。お前は何でこっちにいる？ 今日^{ジャッツメント}は風紀委員の仕事があるはずだろうが」

「えっと……その……黒子が休暇をくれたんだ。だから少しの間、

こつちにいることになったんだ」

「……」

佐天に心配をかけたくなかった為、ツナは本当のことを言わず休暇を貰ったと嘘ついて誤魔化した。リボーンは黙っていたがツナが嘘を言っていることを見抜いていた。

「そうか」

そう言うとりボーンはポケットの中に手をいれると小銭を取り出した。そして小銭を佐天に向かって投げた。佐天は急に小銭を投げたことに驚きを隠せないでいたが佐天はなんとか小銭をキャッチした。

「休憩だ佐天。その金でジュースでも買ってもいいぞ」

「え……う、うん……」

リボーンが帰る前から修行していたとはいえ、まだ修行を開始してから間もないにも関わらずいきなり休憩と言われたことに佐天は戸惑いを隠せずにいた？ それでも佐天は超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いて山を降りて行った。

「それで？ こつちに戻って来た本当の理由は何だ？」

リボーンは周囲から佐天の気配が完全になくなったのを確認してからツナがこつちに帰って来た理由を改めて尋ねた。

「実は当面の間、学園都市から出て行くようについていう通達が支部に届いたんだ」

「あの実験か」

「うん。おそろくね」

「解せねえな。正直、この実験を潰したのにも関わらずその程度で済むなんてな。この実験は学園都市が関わってんのかな」

学園都市が容認する程の禁忌の実験^{プロジェクト}を潰したというのにこの程度^{ペナルティ}の罰で済んでいることにリボーンは違和感を感じていた。

「俺は正直、学園都市と戦う覚悟はしてたよ」

「まあ何もねえならそれに越したことはねえがな。だが油断すんなよ。今回の件といい木山の生徒の件といい。学園都市は裏でヤベえことをしてんのにも関わらずそれを容認してやがる。その魔の手が

誰かに及ぶ可能性だつてある訳だからな」

「うん……」

リボーンは学園都市の魔の手が美琴たちにも及んでもおかしくないという可能性を示唆した。リボーンの言葉を聞いてこれから気をつけなければならぬということをつなは認識する。

「にしても学園都市ってのは一体、何なんだろうな」

「何って……学園都市は超能力を育成する為に造られた機関だろ」

「俺が言いてえのはそういうことじゃねえ」

「え？ どういうこと？」

「学園都市は超能力の育成機関。だが学園都市の詳細は完全に機密次項。街は壁に覆われ最新のセキュリティによって守られてる独立都市だ」

「そりゃ超能力の詳細がバレたら大変なことになるからでしょ」

学園都市の超能力の情報を外部に漏洩すれば悲劇が起こる。それを防ぐ為に情報をシャットアウトをしているということはツナでもわかった。

「その通りだ。そういう理由なら情報を漏らせないと誰もが思うだろう。だがそこがポイントだ」

「どういうこと？」

「超能力の詳細が知れば悲劇が生まれる。だから情報をシャットアウトする。そうなっちまえば学園都市内で何が起きているかなんて外の人間が知る術はねえ。つまり学園都市が中で何をしようと誰にも知られないって訳だ。表沙汰にできねえ非道な実験とかな」

「あつ……!?!」

リボーンの言葉を聞いてツナは理解する。木山の生徒を使った人体実験、そして今回の実験も最新のセキュリティによって守られている独立都市だからこそできたことであると。

「学園都市は超能力を育成するだけの機関じゃねえ。表沙汰にできねえようなことをする為の機関でもあるってことだ。おそらくな」

「そんな……じゃ、じゃあ……学園都市って……一体……」

「ただ1つだけ言えるとするなら今回の実験のような

悲劇が起こることが前提で学園都市が創られたっていうのは間違いねえだろうな」

リボーンは木山の生徒を使った人体実験。そして今回の絶対能力進化計画から学園都市の存在意義を推測する。

一方その頃。学園都市。窓のないビル。

「今回の件で奴らも学園都市の存在意義について少しだけ気づいただろうな」

学園都市の統括理事長であるアレイスターはビーカー型の機器の中で逆さまの状態で浮きながらそう呟いた。

「一方通行には上条当麻をぶつけるはずだった……そして妹達の半分は奴らの世界に……多少、当初の予定とはズレたが計画には影響はない」

アレイスターは自分の思惑通りにはいつていないのにも関わらず笑みを浮かべていた。

「計画に影響を及ぼす可能性がある者は消して起きたいのだが……それができないとは煩いな……まあいい」

日常篇

標的（ターゲツト） 168 笹川京子

一方、ジュースを買いに佐天は。

（ここ数日……ツナさんとリボン君の様子がおかしい……）

山を降りてジュースを買いに行つた佐天は自動販売機の取り出し口からジュースを手にとつた。そしてペットボトルのキャップを回し封を解除する。

（帰つて来ない日が何日かあつたと思つたら……急に御坂さんがツナさんのことを……）

ジュースを飲みながら佐天はここ数日にあつたことを思い出す。

（まさかあの御坂さんがツナさんのことを好きになるなんて……それは仕方がないことだけど……私が修行している間に……何があつたんだろう……）

佐天はリボンから美琴がツナを好きになつた原因が気になつていた。佐天は美琴がツナのことを好きになつたことに驚いてはいたがそこまで嫉妬していなかった。リボンの携帯にお話しましょうと言つたのはどういう経緯で好きになつたのか聞きたかつただけである。美琴はリボンからマフィアランドでの佐天の1件を聞いて佐天があまりの嫉妬に狂つてると勘違いしているだけである。リボンが美琴が慌てる反応を見たいが為にそう仕向けたのであるが。

「涙子ちゃん？」

「え……!？」

ペットボトルを自動販売機の横にあるゴミ箱に捨てて並盛山へ戻ろうとした矢先、誰かに話しかけられる。声がる方に向くとそこにはいたのは私服姿の京子だつた。

「やっぱり涙子ちゃんだ」

「京子さん……どうしてここに？」

「今からスーパーに買い物に行くの。涙子ちゃんは修行？」

「はい。丁度、休憩中なんです」

「そつか。頑張ってるんだね……じゃあ涙子ちゃんも無理か」

「え？」

「実はケーキバイキングの無料クーポン券が2人分手に入ったからハルちゃんも2人で行く予定だったんだけどハルちゃんが用事で来られなくなっちゃったの。それで涙子ちゃんならどうかなって思ったんだけど修行中みたいだったから」

「いいぞ。別に行かせてやっても」

京子が佐天に詳しい説明をするとリボーンが佐天をケーキバイキングに行かせることを許可した。

「あ。リボーン君」

「リボーン君、何でここに？」

急にリボーンが現れたことに京子は平然としていたが佐天はなぜここにリボーンがいるのかわからないでいた。

「俺も飲み物を買おうと思ってな。それより佐天。せつかくだから京子とスイーツを堪能してこい」

「え？でも……」

「なーに。気にすんな。お前が京子とスイーツを堪能してる間に俺はツナをおもいつきり痛ぶって遊ぶだけだからな」

「最悪だよ！　　というかそういうことは思っても口に出さないですよ！」

リボーンは満面の笑みで自分の生徒にしようとしていることを隠そうとさえせず堂々と公言した。リボーンの発言を聞いて佐天はツツコミをいれる。不安はあったが佐天は京子とスイーツ店に行くことを決める。

「じゃあお昼ごはん食べたら私がツナ君の家に行くから」

「すみません。ありがとうございます」

京子は佐天が並盛町の土地勘がないだろうと思ってツナの家を迎えに行くということを佐天に伝えた。佐天は自分に気を遣ってくれた京子に謝罪とお礼の言葉を述べた。

午前の修行を終えるとシャワーを浴び、昼御飯を食べ終わると佐天は京子が来るのを待つ。そしてツナの家インターフォンが鳴る。佐天が玄関の扉を開けるとそこには京子が立っていた。

「お待たせ涙子ちゃん。行こっか」

「は、はい」

そう返事をする佐天は京子の案内の元、ケーキバイキングの店へと向かって行く。

「ここだよ」

ツナの家から歩くこと15分。ケーキバイキングの店に到着する。2人は店内に入るとケーキを取って椅子に座る。

「ありがとうございます。私を誘ってもらって」

「ううん。気にしないで。こっちこそありがとう。修行中だったのに」

佐天はケーキバイキングに誘ってくれた京子にお礼を言った。京子は修行中にも関わらず一緒に来てくれたことにお礼を言った。

（前から思ってたけど……京子さんって本当に美人だよな……）

佐天はケーキを食べている京子の姿を見ながらそんなことを考えていた。

（常盤台のお嬢様並……下手したらそれ以上かも……）

佐天は京子の美貌が常盤台中学の生徒以上なのではないかと思っていた。

（いくら歳上って言っても私と3つしか変わらない……それでいて優しく、おしとやかで、笑顔が素敵で……うう……勝てるどころが1つもない……というか私の理想そのものなんだけど……）

美人なだけでなく優しさとおしとやかさまでも兼ね備えている京

子の存在に佐天は悲観的になってしまっていた。

「あ、あの！ 京子さん！」

「どうしたの？ 涙子ちゃん？」

「どうやったら京子さんみたいになれますか!？」

佐天は今後ツナにアピールする為に京子のような女性になろうと考えた。そして京子のような女性になる為の秘訣を尋ねる。

「私みたいに？」

「はい！ 普段どんな物を食べてるとか！ 習慣とか！ 美容法とか

！ そういうのを教えて欲しいんです！」

「え……特に何もしてないよ……」

「へ……!？」

京子がこんな素敵な女性がなっているのには何か秘密があると踏んだ佐天であったが、京子の返事を聞いてキョトンとしてしまっていた。

「ほ、本当ですか……!?!?じよ、女子力を上げる為に何かしたことかないんですか……!?!？」

「うーん。別にこれといって何かしたことはないかな。今まで普通に生きてきただけだから」

(じ、次元が違う……ほ、本当に私と同じ女性なの……?)
「？」

佐天は京子の言葉が信じられなかったのか本当に今まで何もしてこなかったのか再び尋ねた。京子は少しだけ上を向いた状態で人差し指を顎を置きながら今までの人生を振り返るが特にこれといって思い当たる節はなかった。佐天は今までこれといった自分磨きをせずにこんな輝いている京子の存在が眩し過ぎて佐天は落ち込んでしまっていた。京子は何で佐天が落ち込んでいるのかわからず疑問符を浮かべていた。

「そういえばこうして涙子ちゃんと2人でゆっくり喋るのは初めてだね」

「そ、そうですね」

歓迎会と夏祭りで京子と佐天は話しているがそれ以外では佐天が

1日中修行に明け暮れているのであまり話せていない。せいぜい修行の向かう時と帰る時にたまに会うぐらいであった。

「涙子ちゃんの世界のことを聞きたいんだけどいいかな?」

「いいですよ」

京子は佐天のいる学園都市のことが知りたかった為、佐天に学園都市のことを尋ねた。佐天は学園都市での体験したこと全てを話す。ツナと出会う前のこと、ツナと出会ってからのことも。

「そっか。涙子ちゃんも色々大変だったんだね」

「逆に聞きたいんですけど。京子さんはツナさんとはどういう風に出会ったんですか?」

「え? 私?」

「はい。なんか気になっちゃって」

自分とツナとの出会いを話した佐天であったが、逆に京子がどんな風に出会ったのかが気になった。

「私がツナ君に出会ったのは中学の時なんだ。ツナ君いきなり私に告白してきたんだ」

「こゝ、告白!」

まさかツナが京子に告白したなどと夢にも思っていなかった為、佐天は顔を真っ赤にしながら動揺するのであった。

ツナが京子に告白したという衝撃の事実を知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「こ、告白って!? ど、どういうことですか!？」

ツナのことが好きな佐天にとつてこの話を聞き逃せるものではなかった。そして同時に理解する。常盤台狩り事件の時にツナがフラれた相手が京子なのだということを。

「うん。ほとんど関わりもなかったのにいきなりツナ君が学校の校門で私に告白してきたの。なぜかパンツ1枚で」

（パンツ1枚って……ま、まさか公然の面前で死ぬ気弾を撃つたのりボーン君……!?! 鬼過ぎる……）

京子がツナと始めて会った時のことを語った。ツナがパンツ1枚だということからりボーンがツナに死ぬ気弾を撃つたということを理解すると同時にりボーンのあまりの所業にドン引きしていた。りボーンは人目を気にせず死ぬ気弾を撃ちまくっている。しかも女性である京子とハルにも死ぬ気弾を撃つたことがある。

「でも私、怖くって逃げ出しちゃったの」

「そ、そりやそうですよ……いきなりパンツ1枚で告白されたら誰だってビビりますよ……というかよくそこから友達になれましたね……」

佐天は驚くと同時に不思議でたまらなかった。ほとんど面識のない人間からいきなりパンツ1丁で告白されたのにも関わらず、普通に話しているということに。

「そのツナ君が私に告白したっていうことが持田先輩っていう人の耳に入ったの。持田先輩は私のことを勝手に彼女だって言っ、ツナ君が私に告白したことに怒って私を商品にしてツナ君に決闘を申し込んだの」

「な、何ですかそれ!? 最低じゃないですかその持田って人!」

京子の話の中に出てきた持田という男のしたことに対して佐天は怒りを覚える。

「でもツナ君は持田先輩を倒したの。その時にツナ君って凄い人だって知ってそこから仲良くなったの。ていつても私もツナ君のあの告白を冗談だと思ってたっていうのもあるんだけど……」

（悲し過ぎるよ！ 死ぬ気弾まで使って告白したのに冗談だと思われてたなんて！）

死ぬ気弾を使ってまで告白したのに返事が貰うこともどころか、本人に想いが届かず冗談だと思われたことに。

「そして中3の時に私、ツナ君に再び告白されたの。でも私は断ったの」

「どうして断ったんですか？」

「怖かったの」

「怖かった？」

「うん。ツナ君は何度も傷ついてきた。もしかた戦うことになって私が巻き込まれたらツナ君がすつごく傷ついちゃうんじゃないかって思っちゃって。だから友達のままでもいいよと思ったの」

「……」

京子がツナの告白を聞いて佐天は黙ってしまふ。もし自分が戦いに巻き込まれたらツナは確実に悲しむことは明白。佐天の脳裏には恋慕弾で見た昏睡状態の自分を見て涙を流すツナの姿があった。

「ツナ君は私を巻き込まみたくないって思ってる。私が戦いに巻き込まれた時、ツナ君は私に全てを話すのを躊躇ってた。話した後も私が手伝えることはないかって聞いても大丈夫だって答えて結局、何があつたかは教えてくれなかったの。何か抱えてるのに」

京子の脳裏には未来の世界でツナが自分の秘密を話してくれた時のこと、虹の代理戦争で空き地でぐっすり眠っていたツナのこと、脳裏に浮かんでいた。

「それでも……私は……ツナさんの傍にいたいです……」

「え？」

「私はツナさんのことが好きです。ツナさんは私に大切なことをたく

さん教えてくれました。だから今度は私がツナさんを護りたいです。でも私には能力の才能がなくて……だからこの世界に来て修行することに決めたんです」

京子の話を聞いて色々と考えた佐天であったがそれでも佐天の意思は変わらなかった。

「涙子ちゃんは強いんだね」

「え？」

「昔、お兄ちゃんと敵対してた人たちがいたの。私はその人たちの人質に取られてお兄ちゃんが酷い目にあつて……それ以来、誰かが傷つくのを見るのが怖くなちゃつて……」

「京子さん……」

京子は過去にあつた出来事を話す。京子の話を聞いて佐天は同情してしまつていた。

「私は涙子ちゃんと違ってそこから強くなるうなんて考えもしなかつた。それどころか私は護らればかりで……だから涙子ちゃんは凄いなと思うよ」

「そんな……私はそんな大したことないですよ……それに戦うことが正しいっていう訳じゃないし……」

ツナが傷つくことになつてもなお強くなろうとする佐天を称賛する。佐天は自分の意思で強くなりツナを護ることを決意はしたが、それが絶対に正しいなどと1度も思ったことはなかった。

「涙子ちゃんならきつと大丈夫だよ。きつと涙子ちゃんの想いは届くよ」

「そうだといいいんですけど……ハハハ……」

京子は涙子の想いがツナに届くとは言うものの、ツナは鈍感過ぎる為、佐天は苦笑いしてしまつていた。

こうして佐天と京子はより仲を深めたのであつた。

標的（ターゲツト） 170 美琴の本心

ツナが学園都市から当面の間、出ていくように言われたその夜。美琴たちの寮では。

（私は……）

（お姉様……また……）

寝間着姿の美琴はベッドの上で枕に抱きつきながら考えていた。これから自分がどうすればいいのかを。浮かない表情かおをしている美琴を見て黒子は心配していた。

（そう……最初の出会いには銀行強盗に襲われた時だった……）

美琴は思い出す。ツナと初めて出会った時の出来事を。どこからともなく現れたツナを。

（超電磁砲レールガンを軽くあしらわれて……そしてあいつに対抗心を覚えて……でもあいつは戦おうとしなかった……私はそれが気に入らなかった……）

美琴は思い出す。何度、勝負を挑んでも頑なに戦おうとせず、ようやく戦ったと思えば一向に手を出そうとしない。そんなツナが美琴は気に入らなかった。

（でも知らなかった……あいつがどんな思いで戦ってたのか……）

美琴は思い出す。幻想猛獣AIMビーストとの戦いで見たツナの過去を見た時のことを。

（私はあの子を助けようとしたけど間に合わず助けられなかった……でもあいつは目の前にいてユニって子を救えなかった……そんな奴があの子のことを何とも思わない訳ないじゃない……）

『だったら……だったらどうしろって言うのよ!! あんたはあの子たちはどうなってもいいじゃないの!』

美琴は橋の上でツナに放った言葉を後悔する。自分と同じく救えたかもしれない命を救えなかった。その苦しみを知っているツナがミサのことをなんとも思わないはずなどなかったということに。

(そして……あいつは一方通行をも圧倒する力を見せた……)

美琴は思い出す。一方通行をも恐怖させ、能力すら使うことすらさせない絶対的な力。死ぬ気の到達点を。そして自分自身もあの力に圧倒されていたことに。

(私はいいつを越えると宣言した……でもあの力を見てわかった……私が入っていたのはピラミッドの頂点……でもあいつがいるのはピラミッドの遙か頭上にある大空……)

美琴はツナの死ぬ気の到達点を見て理解した。自分は能力者の頂点に位置すると呼ばれている。だが自分が立っているのはピラミッドの頂点であるということに。そしてツナが立っているのはピラミッドではなくピラミッドの遙か頭上にある大空。自分とツナは立っている場所が全く違うということに。

(ピラミッドの頂点に立っても大空を見上げても大空は遠い……でも空から見れば地上もピラミッドの頂点も大差なんてない……あいつから見れば無能力者も超能力者も変わらない……神のみならぬ身にて天上の意思に辿り着く者……学園都市で誰一人として辿り着くことのできなかつた領域にあいつはいる……)

美琴は確信する。ツナは学園都市が掲げている領域にツナは辿り着いているということに。

(あいつの世界の人たちの強さは私たちと次元が違うのはわかってる……色んな修羅場を超えてるっていうこともわかってる……それでも……あいつが遠い……!?)

自分と違い修羅場を何度も越えて来たことであれ程の強さを手にしていることはわかっている。しかしそれでもあの時に見たツナの絶対的な力を見て美琴は思った。どれだけ努力しようがツナは越えられないのではないか。能力者の頂点と言われた超能力者とは一体何なのか。美琴はわからなくなってしまった。

(そんなあいつに佐天さんは憧れ、心の底から愛している……私に佐天さんの幸せを邪魔なんてできない……でも私の頭からあいつの顔が離れない……)

友達の為にツナを諦めないといけな。だが美琴の脳裏からツナ

のことが頭から離れないでいた。

(わからない……わからない……わからない……私はどうすればいいの……?)

どうすればツナに追い付けるのかわからない。ツナを諦められなければならぬのにツナのことを頭から離れずどうすればいいのかわからない。美琴の頭の中はグチャグチャになってしまっていた。すると部屋の壁の一部が扉のように開いた。そこにはちよつとした部屋ができており、そこでゆったりとコーヒーを飲んでるリボーンがいた。

「よう。お前ら。元気にしてたか？」

「元気にしたかじゃありませんわ！」

何事もなかったかのように普通に挨拶するリボーンに黒子はツツコミをいれる。

「とうかまさか私たちの寮まで改造するなんて！プライバシーの侵害ですわ！」

「安心しろ。そこんところはちゃんと弁えてるぞ。まあお前らの体を見たところで俺は興奮なんてしやしねえがな」

「プライバシーを侵害しておいてよくもそんな言葉が吐けますわね！」

プライバシーの侵害をしておきながら全く反省していないリボーンに黒子は青筋を浮かべていた。

「それで？ 一体、何の用ですか？」

色々と言いたいことがある黒子であったがリボーンに何を言つて無駄な上に捕えることはできない為、黒子は諦めて要件を尋ねることにした。

「ツナのことを謝りにな。あいつは今こっちに来れねえからな」

「一体、沢田さんは何をしたんですの？」

「さあな。何か隠してんのはわかるが俺にも頑なに話そうとしなかったからな。あいつのことだ。道を外すような真似はしちやあいねえはずだ。だからあいつを責めないでやってくれ」

リボーンならツナが何をして学園都市を追い出されたのか知って

いるのかと思ひ尋ねた。勿論、リボーンは理由は知っているのだが、
の実験のことを話すことはできないので上手く誤魔化した。

「どうやら悩んでるようだな美琴」

「……」

話を終わるとリボーンは浮かぬ表情かおを浮かべている美琴の方を
向いてそう言った。美琴は返事をしなかった。

「佐天が惚れた男にお前も惚れたのはいいが、佐天の幸せを邪魔でき
ない。そんなところか」

「っ!?!」

「なっ…!?!」

リボーンは美琴が思っていることを言い当てた。自分の考えてい
ることを言い当てられた美琴は僅かに反応し、黒子はあまりの出来事
に開いた口が塞がらない状態になってしまっていた。

「な、何を言っていますの!?! お姉様が沢田さんのことを!?! どうい
うことですか!?!」

「そのままの意味だぞ」

美琴にゾッコンである黒子にとってリボーンの話聞き逃すこと
などできるはずもなかった。

「らしくねえな。お前ならそんな落ち込まずにツナにアタックする奴
だと思っただが。ただただ落ち込んでるだけなんてな」

「じゃあ……どうすればいいっていうのよ……」

リボーンの話聞いた途端、今まで黙っていた美琴がようやく口
を開いた。

「佐天さんはあいつのことを誰より愛してる……憧れてる……佐天さ
んの想いを邪魔することなんてできる訳ないじゃない……」

「お姉様……」

美琴は自分の気持ち吐き出した。いつもなら怒り狂う黒子も美琴
の言葉を途端、何も言えなくなってしまっていた。

「違えだろ。それはお前の本心じゃねえだろ。佐天との関係が壊れる
のが怖い。ツナに拒絶されんのが怖い。ただそれだけだろうが。格
好つけて逃げんじゃねえ」

「っ…!?!」

リボーンは美琴の本心を理解していた。美琴はリボーンに心を見透かされて動揺を隠せないでいた。

「ま。お前じゃツナは落とせねえだろうな。お前より佐天の方が脈アリだしな」

「うるさい……」

「ツナは超がつくお嬢様学校の生徒よりもどこにでもいるような普通の女の方がタイプだからな」

「うるさい……」

「そして同じ互いに落ちこぼれでその苦しみを理解する者同士。エリートのお前じゃあ、あの2人に付け入る隙なんてどこにもねえもん
な」

「うるさい……」

「そして2人で一つ屋根の下で暮らしてる。ツナが佐天の魅力に気づくのも時間の問題かもな」

「うるさいって言ってるのよ!!」

リボーンの言葉に耐えられなくなったのか美琴は声を荒らげる。黒子は声を荒らげる美琴を見て困惑していた。

「その様子じゃあ未練タラタラじゃねえか。それにお前が自分の想いを押し殺してるって知って佐天が本当に幸せになれると思ってるのか?」

「それは……」

リボーン of 言葉を聞いて美琴は何も言い返すことができずシユンとしてしまっていた。

「美琴。明日、俺たちの世界に來い。お前を佐天と戦わせる」

「な、何を言ってる…!?!」

リボーンの提案を聞いて美琴は意味がわからず動揺を隠せないでいた。

「これ以上、口で言っても無駄だしな。こうなったらおもしろい拳で語った方がいいだろ」

「で、でも……」

「明日の9時に寮の入り口で待ってる。来たくねえならそれでもいい。そのことで責めたりしねえ。だが少しでも今の自分を変えてえと思うなら来い」

そう言うとりポーンは部屋の窓を開けるとレオンをハンググライダーに変形させて飛び去って行った。

「お姉様……」

（私は……）

いつもなら怒り狂う黒子であるが美琴の心中を知ってどうしたらいいのかわからず困惑していた。美琴はリポーンと言った通り佐天と戦うかどうか迷っていた。

標的（ターゲツト） 171 互いの覚悟

リボーンが来た次の日。8月24日。朝。

「来たか」

リボーンが美琴の寮の前で待っていると寮の入り口から美琴が出て来る。

「それでどうする？ 行くのか？ 行かないのか？ どっちだ？」

まだ美琴が出て来ただけである為、リボーンは美琴にどうするのかを尋ねる。

「行くわ。このまま落ち込んだって仕方がないわ」

「そうか」

美琴はツナの世界に行き佐天と戦うことを決めた。美琴の答えを聞いてリボーンは呟いた。

2人は異世界転送装置を使って並盛山へとやって来る。

「お久しぶりです。御坂さん」

「久しぶり……佐天さん……」

そして久々の再会を果たす佐天と美琴。リボーンから事前に話を聞いていた佐天は準備万端の様子であった。美琴は覚悟を決めて来たはずであったが、佐天の顔を見た途端後ろめたさを感じたのか暗い表情かおになっていた。

「色々と話したいことがあるだろうがさっそく戦ってもらおうぞ」

「話はリボーン君から聞いてます。だから全力でいきます。御坂さん」

(あ、あれって……!?)

リボーンがそう言うのと佐天は310と書かれた手袋を両手に装着する。佐天の持っている手袋を見て美琴は驚きを隠せないでいた。なぜなら佐天が持っている手袋がツナと同じ物だったのだから。

「準備はいいかお前ら?」

「いいよ。お願いリボーン君」

「ええ……」

2人が返事をするとりボーンは懐から愛銃を取り出して銃口を佐天に向ける。

そして

ズガアン!

「え……!?!」

リボーンは佐天の額に容赦なく弾丸を放つ。弾丸を喰らった佐天は地面に仰向けの状態で倒れる。佐天が撃たれたのを見て、美琴は衝撃を隠せないでいた。

「落ち着ついて御坂。私は大丈夫よ」

「え!?!」

佐天が撃たれたのを見て放心する美琴。だがすぐに佐天から大丈夫だと返事が返ってくる。弾丸を額に受けて生きていることにも驚いた美琴であつたが、それよりも呼称と口調に変化があつたことに驚きを隠せないでいた。そして佐天はゆっくりと起き上がる。

「今のは特殊弾。私がこの状態になる為のアイテムよ」

「嘘……!?!」

佐天の額に晴属性の炎が灯り、瞳の色が黒から黄色に変化する。そして手袋がXグロ^{イクス}ーブへと変化する。美琴は佐天が本当にツナと同じ力を手に入れたことに驚きを隠せないでいた。美琴はツナの記憶を見ている為、ツナがかつてあのグロ^{イクス}ーブを使って戦っていたことも知っている。

「さっきも言ったけど全力でいくわ。だから御坂も死ぬ気がかかって来て」

そう言うのと佐天のXグロ^{イクス}ーブに炎を灯る。そして佐天は戦闘態勢

を取る。

「そんじゃ始めるぞ」

リボンがそう言うのと近くにあった石を拾うと空中へ投げた。戦いの合図である。そして石が地面へと落ちる。

「っ!？」

石が落ちた瞬間、佐天は炎を逆噴射させて一瞬にして美琴の間合いに移動し拳を繰り出す。あまりの佐天の速さに反射波で感知するのにもギリギリでありしやがんでなんとか躲す。佐天のあまりの速さに驚く美琴であつたがすぐに右腕に電撃を纏い反撃に出る。

が、

「っ…!？」

だが佐天を傷つけてしまうと咄嗟に思ってしまった美琴は攻撃の手を緩めてしまう。

「隙だらけよ」

だが佐天は容赦なく死ぬ気の炎を纏った左拳で美琴に攻撃する。美琴は腕をクロスさせて佐天の拳を防ぐ。だが衝撃までは防ぐことができず美琴は吹き飛ばされる。

(痛っ……!?)

通常の炎と違い死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギー。防御したとはいえ佐天の攻撃を無力化することは叶わず美琴の腕に痛みが走る。

(本当に私って馬鹿だわ……沢田があんな性格じゃなかったら今頃どうなってたか……)

美琴はツナと戦った時のことを思い出す。ツナは目で追うどころか反射波でさえ感知できない程の速さを誇っている。そんな速さで死ぬ気の炎の一撃を喰らえば一溜りもない。美琴はツナに勝負を挑んだことがどれだけ愚か行爲だったのかということは今さらながら理解する。

(炎も厄介だけど……あのグローブも厄介ね……)

死ぬ気の炎による一撃もそうだが佐天の武器であるX^{イクス}グローブとてつもない強度を誇っているということを美琴は先程の一撃で理解

していた。

「Xグローブはただのグローブじゃねえぞ。ボンゴレファミリアイクス創始者にして歴代最強と唱われた、ボンゴレI世フリーモが使ってた武器だからな」

「なっ!?」

Xグローブイクスのことをリボーンは説明する。ボンゴレファミリアの歴代最強のボスが使っていた武器だと知って美琴は驚きを隠せないでいた。

「どういうつもり？ 私は死ぬ気でかかって来いと言ったはずよ」

「それは……」

「私を心配してくれるのは嬉しい。でもここに来たってことは私と戦う覚悟があるから来たってことですよ？」

「……」

佐天の言い分に美琴は何も言い返すことができず美琴は黙って俯いてしまう。

「御坂が何でツナを好きになったかは知らない。でも1つ言えるのはツナは御坂を助ける為に戦った。違つかしら？」

佐天は美琴がそう簡単にツナに惚れるとは到底、思えなかった。考えられるとすれば美琴を救う為に戦ったのだと佐天は確信していた。佐天の言葉を聞いて美琴は何も言えないでいた。

「ツナはボンゴレファミリアの次期ボス候補。でもツナはボスになることは望んでない。でも肩書きのせいでツナは苦しんできた。戦いなんて大嫌いなのに戦って、傷ついて……きつとこれからも苦しむ……だから私はツナを護るの」

「でも……沢田は強い……私たちがいてもただの足手まとい……余計にあいつが傷つくだけよ……」

佐天の言葉が本気だというのはわかってる。しかし死ぬ気の到達点状態のツナを見た美琴は余計にツナの心を傷つけることにしかならないと思っていた。

「あいつは凄い力を隠し持ってる……次元の違う力を……学園都市が掲げてる神ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者……その領域にい

るのよ……」

「そんなの知ってるわよ」

「え……!?!」

美琴は死ぬ気の到達点のことを佐天に話した。しかし佐天は動揺するどころか死ぬ気の到達点のことまで知っていた。

「何を驚いてるの？ 私はツナと一緒に修行してたのよ。知ってたっておかしくないでしょ」

「あっ……」

「おそらく御坂が言ってるのは死ぬ気の到達点」

「死ぬ気の……到達点……?」

美琴はツナのあの絶対的は力が何なのか知らない為、疑問符を浮かべていた。

「死ぬ気の到達点。死ぬ気の向こうにある究極の死ぬ気」

「究極の死ぬ気……」

「初めて見た時、私はあまりの凄さに言葉が出なかった」

時は遡り。夏祭りの終わった後。

「これが俺の全力だ」

「……」

リボーンは佐天に発破をかける為にツナに死ぬ気到達点を見せるように命じた。あまりの凄さに佐天は言葉が出ずその場で固まってしまっていた。

「こいつは死ぬ気の到達点。死ぬ気の向こうにある究極の死ぬ気だ」

「究極の死ぬ気……」

場所は戻り並盛山

「でも同時に思った。やっぱりツナは凄いなだって。憧れたのがツナで間違いなかったって。私の越えるべき人はやっぱりツナで間違いなかったんだって」

「沢田を越える……!?!」

ツナを越えると豪語する佐天に美琴は驚きを隠せないでいた。

「そ、そんなのできる訳……!?!」

「今の私じゃツナを護れないことぐらいわかってる。当たり前だけどツナを越えなきゃツナを護ることなんてできない。だから私は死ぬ気で強くなる。それが私の覚悟」

「……」

佐天の覚悟を知って美琴は自分が情けなくなってしまっていた。勝手に越えられないと諦め、佐天とツナに拒絶されるのを恐れて落ち込んだことに。

「だから負けるつもりはないわよ。恋も強さも」

「え?」

「私はツナのが大好き。私にとってツナは譲れないもの。私の誇りなの。何が何でも譲れない。たとえ御坂でもあっても譲れないわ」
佐天は堂々と美琴の前でツナへの想いを伝えた。その目には一点の曇りもなかった。

「私にとって御坂は……超能力者^{レベル5}は通過点に過ぎない。だから御坂。私はあなたを越えるわ。だからあなたも覚悟を見せなさい」

佐天は美琴に自分の覚悟を示した。そして今度は美琴が覚悟を見せてみると命令した。

「佐天さんの言う通り……私は沢田に助けられた……」

美琴は思い出す。学園都市第1位の一方通行を倒し実験を頓挫させ、ミサたちを救ってくれたツナのことを。

「それから……どうしてもあいつのことが頭から……離れないの……」

美琴は実験が頓挫してからずっとツナの姿が頭から離れないでいた。

「あいつの口から佐天さんの名前が出た時……私、すっごく嫌な気持ちになった……」

前にツナと電話で話しツナの口から佐天の名前が出ただけで嫌な気持ちになったのを美琴は思い出す。

「佐天さんの為に私は沢田のことを忘れようとした……けど全然、忘れなくて……むしろ苦しかった……」

佐天の幸せの為に美琴はツナへの想いを押し殺した。しかしそれは自分自身を苦しめるだけだった。

「友達に嫉妬するなんて最低だと思ってる。それでも……それでも私は……!!」

美琴は徐々に顔を赤くする。そんな美琴を佐天は黙ったまま見守っていた。

「それでも私は誰にもあいつを渡したくないって思ったの!! 自分以外の女の子を見ないで欲しいって思った!! 私だけを見て欲しいって思ったの!!」

美琴は顔を真っ赤にしながら自分自身の本当の気持ちを気持ちをおもいつきり叫んだ。

「伝わったわ。御坂の覚悟」

「い、いや……!!私はその……!!」

「私と一緒に強くなりましょう御坂」

「え……!?!」

「だってツナを想う気持ちは同じ。ツナのことを好きだってことはツ

ナを失いたくない。御坂だってそう思ってるんでしょ？」

「それは……」

「ツナを失いたくないならまず強くならなきゃ……ツナを越える強さを手にしなきゃツナを失っちゃう。だったら私と一緒に高め合いましよう。一緒にあの人を越えるわよ」

「佐天さん……」

そう言うと佐天は美琴に右手を突き出して宣言した。自分とは違い落ち込んで後ろ向きになるどころか、どこまでも前向きな佐天を見て美琴は驚いていた。

「ありがとう佐天さん」

佐天の言葉を聞いて美琴は自分の内にあつた蟠りが取れていくのを感じていた。そして美琴は戦闘態勢を取った。

恋する乙女の決戦。果たして!?

標的（ターゲット） 172 無能力者（佐天涙子） V
S 超能力者（御坂美琴）

美琴が吹っ切れたことでついに再び戦いが始まる。佐天は右手に炎の球を作り出す。

「死し 炎球えんきゆう」

そして炎の球をおもいつきり美琴に向かって投げ飛ばした。美琴は佐天の炎の球に向かって雷撃を放つ。美琴の雷撃によって炎の球は爆破する。

「死し 炎速えんそく」

「がっ!?!」

佐天は両手を後ろを構えた状態から一気に加速し右足で真空飛び膝蹴りを美琴の額に喰らわせた。

（さつきより速い……!?! 私わたしの反射波でも反応が……!?!）

先程はなんとか反射波でも反応できる程の速さであった。しかし今回の速さは反射波ですら反応できない程の速さだった。美琴は急に佐天の速度が上がったことに驚きを隠せないでいた。

「このっ!」

美琴は咄嗟に佐天の右足を掴もうとする。しかし美琴が足を掴むよりも早く佐天は空中へ逃げた為、美琴によって捕えられることはなかった。

（やっぱ飛べるわよね……）

空中にいる佐天を見て美琴は佐天もツナと同じように飛べるのだという推測が当たっておりどうするかかどうか迷っていた。美琴は攻撃力は強いが機動力においては乏しい為、どうするか考えていた。

「死し 炎光線えんこうせん」

すると佐天は人差し指を美琴に向ける。そして指先から炎の光線を連続で放っていく。

「くっ!」

美琴は走って炎の光線を躲して行く。このままでは埒が明かないので美琴は地面に雷撃を撃って煙幕を発生させる。佐天は煙幕のせいで美琴の姿を見失った為、攻撃を中断した。

(機動力じゃどうやっても佐天さんには敵わない……)

煙幕の中で美琴は考える。機動力はどうやっても佐天には勝てない。これをどうにかしないと自分に勝ち目ないことを理解する。

(だったら……)

美琴は打開策を思いついたのか、煙幕の中で磁力で砂鉄を操作し始めた。そして煙幕の中から空中にいる佐天に向かって電撃を放って行く。佐天は砂鉄を炎の壁を展開して防御する。

「あそこね」

煙幕が薄くなり、美琴のシルエットが見える。佐天は煙幕の中に突っ込んで行く。

「これは……!?!」

佐天は煙幕の中に突っ込んで行った。だがそこには砂鉄によって作られた美琴の偽物があった。佐天が見た美琴は砂鉄偽物だった。すると後ろから美琴が襲って来る。

(嵌められた……!?! ああ、あの電撃は私を誘導する為の罠……!?!)

(接近戦に持ち込む……このまま!)

電撃が放たれた場所と偽物の美琴の場所が同じであった為、佐天はそこに美琴がいると錯覚してしまったのである。そして美琴は佐天に向かって拳を繰り出す。

が、

「死しえんとう炎刀」

「っ!?!」

佐天は美琴の方を振り返ると同時に1本の小刀を炎で造形し、美琴の方へ向かって投げる。美琴は飛んで来る小刀を体全体を反らして紙一重で躲す。

「はあー!」

「ぐっ!?!」

佐天は美琴が小刀を躲した隙に美琴の腹部に拳を叩き込んだ。

「捕まえた……」

「っ!？」

美琴は佐天の攻撃を喰らったものの佐天の右腕を両手で捕まえた。そして佐天を捕まえたまま美琴は佐天に電撃を喰らわせた。

「ぐっ……!？」

(これで決まり!)

美琴の電撃が佐天に決まる。美琴の電撃を喰らって佐天が苦渋の表情かおをする。美琴は勝利を確信する。

「ふんっ!」

「がっ!？」

佐天は美琴の額におもいつきり頭突きを喰らわせた。美琴は佐天の頭突きを喰らって地面に倒れる。佐天は地面に片膝をついた。

(な、何で……!?!いくら鍛えたとは言ってもあの程度で済むなんて……!?)

美琴は決定打になる程の電撃を確かに佐天に与えた。にも関わらず佐天は反撃してきた。その理由が美琴にはわからなかった。

(か、体が……!?)

美琴が起き上がろうとする。しかし起き上がろうにも体が思うように動かなかった。なぜ体が思うように動かないのか美琴はわからないでいた。

「死ぬ気の炎には7つの属性があってそれぞれ特徴があるの」

「7つ……!？」

美琴は学生誘拐事件の時にエスカに敗北し病院で入院していた為、死ぬ気の炎に属性の特徴を全てを把握していない。知っているのは大空の炎と霧の炎だけである。

「私は晴と雨の2つの属性が使える。晴の炎の特徴は活性。そして雨の炎の特徴は鎮静」

「鎮静……!？」

佐天の言葉を聞いて美琴は気づく先程、佐天が反撃できたのは雨属性の炎で電撃を雨の炎の力で鎮静したのだと。そして今、動きが抑制されているのも雨の炎の力だということに。

「といつても私は晴の炎がメイン。だから副属性の雨の炎の力は晴の力より弱いから電撃を完全に無効化できないし持続時間も短い」

(体が……!?)

佐天がそう言うのと美琴の体が徐々に動くようになっていく。美琴は自分の体が動くようになっていくのを感じていく。

「まだこんなものじゃないわよね御坂?」

「当たり前よ」

そう言うのと美琴は砂鉄を集めて砂鉄の剣を造形する。一方で佐天は死ぬ気の炎でできた日本刀を造形した。

「炎の剣……」

「佐天は死ぬ気の超精密なコントロールが得意でな。死ぬ気をコントロールができるってことは炎のコントロールにおいても役に立つ。だから状況に応じた武器を作れるんだぞ」

(成る程ね。さっき佐天さんが急に加速したのは炎を収縮することによってジェット噴射を実現したのね……)

リボンが佐天の力について説明する。リボンから佐天の力について聞いて、急に加速した理由を理解する。

「いくわよ」

「ええ」

そう言うのと佐天と美琴は同時に駆け出す。そして砂鉄の剣と炎の剣がぶつかり合う。そして剣と剣が何度もぶつかり合う。そして佐天は斜め左下から美琴を切り上げる。それを見た美琴は斜め左上から切り下げる。

「え……!?!」

だが剣と剣がぶつかり合うことはなかった。なぜなら佐天の右手に剣がなかったのだから。美琴は佐天の手に剣がないことに驚きを隠せないでいた。

「ガバツ!?!」

そして美琴の脇腹に佐天の剣が決まった。美琴は何が起きたのかわからなかったがすぐにその場から飛び引いた。峰打ちだった為、ダメージが深刻なものになることはなかった。

「時雨蒼燕流。攻式五の型。五月雨」
「時雨……!？」

標的（ターゲット） 173 ハの型

「時雨蒼燕流。 攻式五の型。 五月雨」

「時雨……!?!」

佐天の言っている時雨蒼燕流が何かということがわからず美琴は困惑する。

「時雨蒼燕流。 戦乱の世に数多の人間を闇に葬ってきた殺人剣だ」

「さ、殺人剣!?!」

リボーンは時雨蒼燕流の詳細を説明する。 時雨蒼燕流が殺人剣だと知って美琴は驚きの声を上げる。

「そしてさっきのは時雨蒼燕流。 攻式五の型。 五月雨。 斬撃の瞬間に刀の位置を入れ替え軌道とタイミングをずらす変幻自在の剣だ」

「す、凄い……」

リボーンから五月雨の詳細を聞いて美琴はそんな技を佐天を会得していたことに驚きを隠せなかった。 先程佐天は右手に持っていた剣を斬撃の瞬間に左手に持ち変えて攻撃タイミングをズラし美琴に喰らわせたのである。

「にしても中学生に殺人剣を教えるって……あんたはどういう神経してんのよ……」

「教えたのは俺じゃねえぞ。 俺は選択肢を与えただけだ。 剣を造形できて剣を扱う術を覚えなきゃならねえからな。 だから提案したんだぞ。 時雨蒼燕流を会得してみねえかってな。 会得できるかどうかは賭けだったかな」

「賭けって……そんなに難しいの？ 時雨蒼燕流の会得って?」

「時雨蒼燕流の師から弟子への継承は1度きり。 その時に会得できなければ時雨蒼燕流を扱うことはできねえんだ」

「1度って……それじゃあ継承できなかつたら途絶えちゃうじゃない……」

「ああ。 だから時雨蒼燕流は気と才ある者途絶えた時、 世から消える

ことも仕方なしとした滅びの剣とも言われてるんだ」

「滅びの剣……それを会得するなんて……」

美琴は佐天が1度だけ技を見ただけで時雨蒼燕流を継承したという事実には驚きを隠せないでいた。

(本当……会得するまでですっごい大変だったわ……)

佐天は目を閉じて時雨蒼燕流を会得した時のことを思い出す。

リボーンの提案により時雨蒼燕流を会得することを決めた佐天は時雨蒼燕流の継承者である山本の元へ師事してもらうことに決めた。山本は快く快諾した。

のだが、

「こうやってブンって振って、後はビュンビュンってやればいいんだぜ」

「え……!?!」

山本は竹刀を振りながらそう佐天に伝える。山本のあまりの抽象的な教え方に佐天は困惑を隠せないでいた。山本の教え方は独特で基本的に理解することは困難なのである。しかし教えてもらっている側なので文句は言えないのでそれでもなんとか頑張るしかなかった。

場面は戻り並盛山

(本当……よく継承できたわね……)

佐天は山本の独特過ぎる教え方で時雨蒼燕流を会得できた自分を今だに信じられないでいた。

「佐天は能力開発に関しては何がなかったが、戦闘技術の会得に関しては才能があったからな。そしてツナへの想い。ツナへの憧れ。それがあったからこそ佐天は時雨蒼燕流を会得できたんだぞ。といっても佐天の強みはそこじゃねえんだけどな」

「どういうこと?」

「佐天は器用でな。あらゆることをこなす才能がある。炎で造った武器もすぐに扱えるようになったからな。だから俺はあらゆることをこなす才能を極めることに決めたんだけだ。だから同じ戦闘方法でも極める奴には劣る。その代わり手数で相手を攻める。手数の多さ。これこそが佐天の強みだぞ」

(これが沢田を導いてきたリボーン家庭教師の力……)

リボーンが佐天をあらゆることをこなす才能を見抜いただけでなく、それを短期間で最大限に活かせるようにできるまでに佐天を育て上げたリボーンの力に感心していた。

「続きよ御坂」

「ええ」

そう言うと美琴は砂鉄の剣を鞭のようにしなさらせる。蛇腹剣と化した砂鉄の剣が佐天に向かって行く。

「時雨蒼燕流。守式二の型。逆巻く雨」

(炎の壁!?)

佐天は剣を下から振り上げて、晴の炎によるカーテンを作り出したことよって佐天の姿が見えなくなる。佐天が見えなくなったことで美琴はどこに攻撃していいかわからず攻撃が外れてしまう。

「死炎速」

佐天は炎の壁を突き破って自身の最速技にて美琴に突っ込んで行く。

「がつ!?!」

だが美琴はこの攻撃を予測していたのか、自分の直線上に電撃を放ち佐天に電撃を喰らわせた。死炎速は速さは凄いものの、勢いが強すぎて発動してからは方向転換ができず真っ直ぐにしか進めないという弱点がある。美琴はその弱点を突いたのである。

「まだよ!」

「グフツ!?!」

そしてさらに砂鉄の剣の持ち手の部分に電撃を纏わせて腹部に叩き込んだ。

「まだまだ!」

「ガハツ!?!」

さらに美琴は電撃を纏った足で佐天の顎を蹴りを上げる。そしてさらに回し蹴りで佐天を勢いよく吹き飛ばした。

「死炎槍」

追撃されるのを回避する為に、佐天は吹き飛ばされながら両手に2本の槍を造形して美琴の方へ飛ばす。美琴は砂鉄の剣にて槍を弾き飛ばす。

「死炎球」

（塞がれた!）

さらに佐天は両手に炎の球を造形すると美琴の両サイドに放った。爆発によって両サイドが塞がれたことを美琴は理解する。そんなことを考えている間に美琴は佐天の姿を見失う。

（後ろ!）

美琴は反射波で後ろから佐天が来ることを感知し、咄嗟に後ろへ振り向く。

「時雨蒼燕流。攻式三の型。遣らずの雨」

（しまった!?!）

佐天は右足で蹴りで美琴に向かって剣を蹴り飛ばした。反射波で感知したのが佐天ではなく佐天が蹴り飛ばした剣だと知って、美琴は砂鉄の剣で炎の剣を弾くと同時に自分の失態に気づく。そして佐天は美琴に向かって走り出すと同時に新たに剣を造形し両手で握る。

「時雨蒼燕流。攻式一の型。車軸の雨」

「ぐっ!?!」

勢いをつけた突きが美琴を襲う。美琴はなんとか剣の表面で佐天の突きを防御したが衝撃を和らげることができずに後ろへ飛んでいく。

「剣が……!?!」

美琴が飛ばされた後、時間差で砂鉄の剣が折れる。剣が折れたことに驚きを隠せないでいた。佐天は晴の炎の剣の周囲に雨の炎を纏わせることで砂鉄の剣の防御力を鎮静させた後でメインの晴の炎で砂鉄の剣を破壊したのである。

「時雨蒼燕流。攻式八の型」

「ついにアレを出すのか佐天……」

すると佐天は居合いの構えしながらそのまま美琴に向かって行く。佐天の構えを見てリボーンは口元を緩ませていた。すると途中から佐天は横方向に回転しながら美琴に向かって行く。美琴は佐天に向かって電撃を放つが回転によって強化された剣で電撃を斬り裂いていく。

「外持雨」
ほまちあめ

「ガハッ!?!」

回転することによって強化された無数の斬撃が美琴の上半身を襲う。まともに喰らった美琴はうつ伏せの状態で倒れる。

時は佐天が時雨蒼燕流の継承をした時に遡る。

「次。七の型」

「繁吹き雨」

佐天は日本刀で縦長の藁に向かって斬撃を放ち、藁を斬り裂いていく。

「よし。これで稽古は終わりだぜ。後は自分で頑張ってくれよな」

「え!?! 技を1回見て真似しただけですよ!?!」

「時雨蒼燕流の継承は1度きりっていう掟があるんだ。だからこの1度の継承で会得できなきゃ時雨蒼燕流は会得できねえんだ」

「え……でもそれじゃ会得できなかったら次に継承したくても継承できなじゃないですか……?」

「時雨蒼燕流はあまりに危険過ぎる剣。故に気と才をある者途絶えた時、滅ぶこともや仕方なしとした滅びの剣と言われるんだ」

「滅びの剣……」

付き添いに来ていたリボーンが時雨蒼燕流の詳細について説明する。滅ぶことが前提で作られた時雨蒼燕流の存在に佐天は驚きを隠せないでいた。

(ほ、本当に私は継承できたのかな……?)

1度見て真似しただけで本当に自分が時雨蒼燕流を継承できたのかわからず佐天は不安になっていた。

「大丈夫だぜ」

「え?」

「お前が強くなりたいっていう覚悟があるのはわかってるぜ。だから自分を信じろ」

佐天が不安な表情かおをしているのを見て、山本は笑顔でそう言った。

「山本さん……ありがとうございます!」

「おう」

山本の言葉を聞いて吹っ切れたのか佐天はお礼を言った。山本は笑顔でそう一言だけ答えた。

「先に帰ってる佐天。俺は山本に話したいことがある」

「え?う、うん……」

リボーンの言葉を聞いて戸惑う佐天であったが、佐天は先に帰って行く。

「それで? 話って何だ小僧?」

「お前。何で八の型を教えなかった？」

時雨蒼燕流は攻型が4式。守型が4式。全部で8つの型が存在する。だが山本は佐天に八の型までしか教えていない。山本には八の型、篠突く雨があるのにも関わらず。

「篠突く雨は親父が作った型だ。けどよ。この篠突く雨は親父と俺だけの技にしてえって思ったんだよ」

「そうか。まあそれが時雨蒼燕流の特徴だもんな」

山本が篠突く雨を佐天に教えなかった理由を聞いてリボーンは納得する。山本に時雨蒼燕流を教えた山本の父ともう1人の同門はから師匠から一から七の型までを教えられた。そして山本の父ともう一人の弟子はそれぞれが別の八の型を作った。そこで生まれたのが篠突く雨である。そして山本の父は山本に篠突く雨を伝授したのである。時雨蒼燕流の継承者は先人の残した型を受け継ぎながら新たな形を作りそれを弟子に伝えていく。それが時雨蒼燕流の特徴である。今回、山本は新たな型を教えるのではなく新たな八の型を作る役を佐天に担ったのである。

「それにあいつならきつと新たな型を作れるはずだぜ」

山本は佐天なら新たな八の型を作れるということを確認していた。その後、リボーンが佐天に篠突く雨のことを話さず、新たに型を作るよう佐天に命じた。そして佐天は新たな型を作り出したのである。

そして場面は戻り並盛山

「はあ……はあ……はあ……」

美琴の4連撃を喰らった佐天と、佐天の外持雨を喰らった美琴はなんとか立ち上がるも互いにダメージが蓄積され疲労していた。

(流石は学園都市第3位……超電磁砲も出してないのにここまで……)

(たった1カ月でここまで……一体、どんな修行したのよ……)

佐天は美琴と戦って超能力者の強さを実感する。美琴はたった1カ月に超能力者とまともにやり合えるだけの力を手に入れた佐天に驚きを隠せないでいた。

「次で決めましょう御坂……もう互いに余力はあまり残ってないはずよ……」

「そうね……」

佐天も美琴もこれ以上、戦いを長引かせるのは無理だということ相互に理解していた。

決着の時！

標的（ターゲツト） 174 実現

いよいよ佐天と美琴戦いに決着が着こうとしていた。

「撃つていいわよ……超電磁砲」

「なっ!？」

佐天から超電磁砲レールガンを撃つて来いと言われて美琴は驚きを隠せないでいた。

「言つたでしょ。私はあなたを越えるって。だから撃つてきなさい」
「わかつたわ……」

佐天の目を見て、美琴は佐天が本気であるということを理解しポケットの中からコインを取り出した。

（超電磁砲レールガンは速いけど真つ直ぐにしか飛ばないっていう弱点がある……けど私の動体視力じゃ避けるのは無理……それに御坂の電撃のせいでさつきみたいにく動けない……だったらー！）

佐天は両手を前に出して炎の壁を展開する。避けられないのであればあらかじめ防御壁を展開して美琴の超電磁砲レールガンを防ぐしかない。佐天はわかっていた。晴の炎の壁の周囲には微弱ながら雨の炎が展開されていた。美琴の超電磁砲レールガンに対応する為に佐天が取れる最善の手である。

「いくわ」

佐天が炎の壁を展開したのを見計らって美琴はコインをデコピンで上へ弾いた。そして落ちてきたコインを佐天に向かってデコピンで弾いた。ローレンツ力によって音速を越えた速度にまで加速したコインが佐天へ一直線に向かって行く。

「はあああああ!!」

炎の壁に音速の数倍の速さで突き進むコインがぶつかり火花が散る。佐天は必死に防御壁が崩されように全力で炎を放出していた。

「負けない……絶対……絶対に負けない!!」

「え……!？」

すると佐天の副属性であるはずの雨の炎が大量に溢れ出す。そし

て美琴のコインが速度が落ちていく。それを見た美琴は驚きを隠せないでいた。

「はあ……はあ……破ったわ超電磁砲……」

「佐天さん！」

美琴の超電磁砲を破った佐天であったが、その為に炎を使いすぎてしまいそのままうつ伏せの状態で倒れてしまった。そして額の炎が消え、Xグロブが元の手袋に戻っていく。

「佐天の奴。無理やり雨の炎を強化させてぶっ倒れちまったようだな」

「強化？」

「本来なら微弱な雨属性の晴の炎の活性で無理やり活性させてお前の超電磁砲を止めたんだ。ただ強化させた分、炎の消費し過ぎてぶっ倒れちまったようだがな。にしてもまああの極限状態の中でそれを思いつき実行するなんてな」

「す、凄い……」

あの極限状態の中で超電磁砲を止める方法を思いつき、さらにそれを即座に実行する佐天の行動力に驚きを隠せないでいた。

「それでどうだ？ 佐天と戦った感想は？」

「どうも何もないわよ……」

リボーンは美琴に佐天と戦った感想を尋ねた。すると美琴は大の字になって地面に倒れてしまった。

「強くなり過ぎてしょ……普通の女の子がどんな修行したらたった1カ月で超電磁砲を止められるまでになんのよ……もう体中が痛くてたまらないわ……」

「そうか」

美琴の感想を聞いてリボーンは自分の佐天生徒が強くなったのが嬉しかったのか笑みを浮かべていた。

「1カ月で超能力能レベル5に相当する力を手に入れるなんて……1カ月前は信じられなかったけど、まさか本当に実現するなんて……」

リボーンと初めて会った時に佐天を超能力能レベル5と同じ力を手に入れられるとリボーンは佐天に言った。美琴はその言葉を信じていな

かったのだが、佐天と戦ってリボーンが言ったあの言葉が本当だったことを理解した。

「でもなんかスッキリしたわ……」

佐天とおもいきり殴り合い拳で語り合ったことで美琴は嬉しそうな表情かおをしていた。

（死ぬ気の到達点っていうの力を見て私はビビって諦めたみたい……でもそんな私を佐天さんは救ってくれた……ありがとう……佐天さん……）

（どうやら吹っ切れたみてえだな）

美琴は気絶している佐天の方を向いた。そして心の中でお礼を言った。美琴の表情かおを見てリボーンは美琴が完全に吹っ切れたということを理解する。

「ん？」

自分の中にあつた蟠りが吹っ切れた美琴であつたがあることを思い出した。

「ねえ。ちよつと聞きたいんだけど」

「何だ？」

「あんた前に私に佐天さんがマフィアランドっていう所に行った時のことを話したでしょ？あれはどういうつもりで話したわけ？」

「お前の反応を楽しみたいと思つてな」

「やっぱりか！」

佐天が自分がツナが好きだということを知っていながら特に何もなかったことに違和感を感じた美琴はリボーンに真実を尋ねる。リボーンが正直にバラすと美琴は自分の予想が当たっていたとわかつて怒りを露にする。

「ちなみに佐天から返事が返った時の着信音は俺があらかじめ録音しておいたやつで佐天の返事は俺が勝手にそう言っただけだ」

「そこまでして私をいじりたいのかあんたは！」

自分をいじる為だけに色々と手の込んだ小細工をするリボーンに美琴はツツコミをいれる。

「ちなみに佐天にお前がツナのが好きだつてことを言ったのは本

当だぞ。カエル顔の医者とミサのことで交渉しに言った時に言っておいた」

「あんたにはプライバシーってもんがないのか！」

「遅かれ早かれバレてたことだ。いいじゃねえか」

「はあ……もういいわ……」

これ以上、リボーンに何を言っても無駄だと判断した美琴は追及することを諦めた。

「そーいや沢田はどこにいんのよ？」

「何だ。常に惚れた男の居場所をわかってないと落ち着かねえのか」

「ち、違うわよ!!」

「お前、結構束縛の強い女なんだな」

「だから違うって言ってるでしょ!!」

「ツンデレ属性かヤンデレ属性かはつきりしろよな」

「だくかくらく……違うって言うてでしょうが!!」

あんまりにもリボーンがしつこいので美琴は堪忍袋の緒が切れたのか、美琴はリボーンに向かって電撃を放った。リボーンは電撃を意図も容易く躲す。佐天との戦いでかなり消費したのか電撃の威力は落ちていた。

「ツナならデートだぞ。ミサと一緒にな」

「は……!?!」

標的（ターゲツト） 175 ミサの願望

時は遡り昨日。京子と佐天がスイーツを楽しんでいる間の出来事である。ツナとリボーンはミサのいる中山外科医に訪れていた。ツナとリボーンは定期的にミサの元へ訪れて、経過を見ると同時に暇しないように何かを持って来たりするのである。

「どうだ？ 体の調子は？」

「体の痛みもなくなり以前のように活動できそうです。とミサカは自分の体の状態を伝えます」

「よかった……」

リボーンがミサに体の調子を尋ねられてミサは自分の体の調子を答えた。ミサの言葉を聞いてツナは安堵していた。

「ここまで回復できたのはツナとリボーンのお陰です。とミサカはお礼を述べます」

ミサは2人に感謝の言葉を述べる。このミサも学園都市にいるミサと同じくツナとリボーンに呼ぶようになり、ツナとリボーンもミサと呼ぶようになった。

「せっかく回復したんだ。何かしたいこととかあるか？」

今まで治療の為に安静していないといけなかったが、ミサが完全に回復し動いてもよくなった為、リボーンはミサに何かしたいことはないかと尋ねた。

「ミサカは外に出てこの世界を色々を見て歩いてみたいです。とミサカは自分の願望を述べます」

「そうか。じゃあツナ。明日、修行はいいからミサを色々案内してやれ」

「それはいいけど……大丈夫？ 今、佐天もいるんだよ？」

この世界にはミサと美琴のことを知っている者はほんの一部であり、2人が姉妹であるとバレても問題ない上にミサがクローンだと知られる可能性は低い。しかし佐天は美琴のことを知っている。もし妹がいると知れば学園都市に帰った際にみんなにミサのことを話

し、そこから学園都市中に話しが広がりミサがクローンだと知られる可能性があるかもしれない。美琴に妹がいるということ話を話すのは何もおかしい話ではないのだから。

「とりあえずお前らに発信器を渡しておく。俺が常にお前らの位置を把握しておく。もし佐天とミサがエンカウントしそうならエンカウントしねえように俺が上手く誘導する。それなら大丈夫だぞ」
「わかった」

リボーンはツナの言いたいことを理解し即座に対策を取った。リボーンの対策を聞いてツナは大丈夫だと理解する。

「さてんとは一体、誰のことですか？ とミサカは初めて聞く人物の名が気になります」

「佐天は学園都市から来た女の子だよ。今、こつちの世界で修行してるんだ」

「修行ですか？ とミサカは学園都市の人間がわざわざこちらの世界で修行する理由がわからないでいます」

「佐天は無能力者レベル0で能力が開花しなくてな。だから俺たちの力を使えるようになる為に修行してんだぞ」

「俺たちの力？ とミサカは尋ねます」

「見せた方が早いな。ツナ、ボンゴレギアに炎を灯せ」

「うん」

リボーンがボンゴレギアに炎を灯すよう命じるとツナはボンゴレギアに炎を灯した。

「この発火能力が力なのですか？ とミサカは尋ねます」

「ああ。こいつは死ぬ気の炎つってな。超能力とは違う力なんだぞ」

「超能力と違う力……?! とミサカは驚きを隠せません」

「死ぬ気の炎には演算も自分パーソナルリアリテイだけの現実も観測する必要がねえんだ。覚悟とそれに応えるリングがあれば誰でも使える力だからな」

「誰でも……そんな力が……とミサカは新たな力を知って驚きます」

「ミサは死ぬ気の炎という新たな力にも驚くと同時に、ツナ自身も無能力者レベル0であるということを理解する。

「つつてもこの力の存在を使つてんのは主に裏社会の人間。一般カタギ人に

は知られてねえんだ。お前もボンゴレに行つた時に見るようになるかもな。まあ能力が使えるお前には必要ねえかもしれねえがな」

「そんな技術を学園都市の人間に教えて良いのですか？」 とミサカは今後、学園都市が混乱する可能性を示唆します」

ミサは佐天を通じて学園都市に死ぬ気の炎の存在が知れば、学園都市で死ぬ気の炎を使った者たちの暴走が始まるのではないかと思っていた。

「そこは問題ねえ。死ぬ気の炎を使う為のリングの製造方は俺たちの世界でしか知らねえからな」

「それなら大丈夫ですね。とミサカは理解します」

「それに佐天はボンゴレの次期ボスであるツナの妻になる女だからな。教えんのは当然のことだぞ」

「変なことを言うな!! 俺と佐天はマフィアにならないし!! 勝手に嫁にするな!!」

リポーンが佐天をマフィア扱いした上に自分の妻だと言つたことにツナはツツコミをいれる。

「ツナは佐天という少女のことをどう思ってるのですか？ とミサカは尋ねてみます」

「どうって……優しくて明るくて、前向きで料理ができる素敵な女の子だと思ってるよ」

「ではミサカ自身のことはどう思っていますか？ とミサカは尋ねます」

「え？ ミサのこと？ まだ出会って間もないからわからないからな……」

ミサと出会って3日しか経過していない為、ツナはいきなりミサがどんな女の子なのかすぐにわからず腕を組んで考えてしまう。

「やっぱり誰かを護ろうとすることのできる優しい子かな。俺が実験のことを知った時に俺を護ろうとしてくれたし」

ツナは思い出す。ツナが実験の一旦の触れてしまった際に情報操作すると言つて自分を護ろうとしたことに。

「それがツナから見たミサカの印象なのですか？ とミサカは確認を

取ります」

「うん。だってこれって誰にでもできることじゃないと思うんだ。自分があんなにボロボロだったのに他人のことを救おうとすることなんて普通できないよ。やっぱり美琴と似てるんだよねミサって」

ツナは自分のことを犠牲にして他人を護ろうとする部分が美琴と似てるということをミサに伝える。

「佐天という少女の時は印象をたくさん言っていたのにミサカの方はそれだけなのですね。とミサカは不満を漏らします」

「い、いや……ミサとは会って3日ぐらいしか経ってないし……」

「学園都市じゃあツナと佐天は同棲してるしな。一緒にいる時間があつ分、他の奴らより佐天の印象が強いんだろ」

「それは本当なのですか？ とミサカは確認を取ります」

「う、うん。本当だけど……」

「それに今はツナの部屋と一緒に寝てるしな」

「同じ布団になるなんてやっぱりツナは佐天という少女にいやらしいことをしようとしているんですね。とミサカはツナを軽蔑します」

「しないから!! それに同じ布団で寝てないから!!」

リボーンの言葉を聞いてミサはツナと佐天が同じ布団で寝ていると勘違いしてしまっていた。ミサの言葉を聞いて顔を赤くしながらツツコミをいれる。

「でもお前、前に佐天に抱きつかれた上に鼻血まで出して喜んでたんじゃないねえか」

「見てたのかよ!」

リボーンは佐天が酔った時のことを語る。あの時、リボーンはいなかった為知られていないと思ってたツナであったがきつちりと見られていたと知って驚いていた。

「やっぱりツナは変態なのですね。とミサカはゴミを見るような視線でツナのことを見ます」

「違うからねミサ! あれは事故だから! 父さんが間違って酒を飲ませて佐天が酔っ払っておかしくなったただけだから!」

「それを利用して女体を堪能していたのですね。とミサカはその時の

ツナの心境を推測します」

「してないから！ そんな状況じゃなかったから！ いきなりキスとかされそうになって大変だったんだから！」

「男性なら嬉しいシチュエーションなのでは？ とミサカは頬が緩みまくっているツナを見てそう思います」

「緩んでないから！」

「男性は女性相手になら誰だって鼻を伸ばす生き物でありツナも例外ではないです。とミサカは男性の心理について語ります」

「何でさつきから俺に対してそんなに辛辣なの!? 俺ミサになんかしたっけ!？」

先程から自分の言うことに対して全く信じてくれないミサにツツコミをいれる。相変わらず無表情なミサではあるが実はものすごく嫉妬しているということにツナは気づいていない。

「だったら明日は俺がホテルを予約してやろうか。お前ら2人で泊まってこい」

「それは名案です。とミサカはリボーンの見解に賛同します」

「ええ!？」

再び舞台は戻って並盛山

「つー訳だぞ」

「何やってんのよ!？」

デートするだけでも耐えられないのにも関わらず、ツナとホテルに泊まるというイベントまで発生していると知って美琴は顔を真っ赤にしていた。

「私の妹と沢田が同じ部屋に泊まるようにするなんてどういうつもり

よ!!」

「何だ嫉妬してんのか？　　そういやさつき自分だけを見て欲しいって
言ってたもんなお前」

「そ、そんな訳ないでしょ!!　　沢田が私の妹に変なことをしないか心
配してるだけよ!!」

ニヤニヤしながらそう言うリボンに対して美琴は顔を赤くしな
がらそう答えた。一度はツナのことを好きだと認めた美琴であつた
がすぐに元の美琴に戻ってしまった。

「そんなに気になるんならお前もホテルに泊まれるように手配してや
ろうか？　　あつ！でもお前門限があるしダメだもんなー。常盤台の
超電磁砲レベルガンが唱われるお前が門限を破ったら他の生徒に示しがか
ねえもんなー」

(こ、こいつ……!!)

ニヤニヤしながらわざと煽ってくるリボンに美琴は怒りを覚え
ていたが、ここで言い返せばリボンに負けたことになるのでグツと
堪えていた。それに門限を破りたくとも最近、実験関連で夜に無断外
出してしまったせいで寮監の怒りに触れてしまったのでそれができ
ないのである。

波乱のデート。一体どうなる!?

標的（ターゲツト） 176 教え

そして佐天と美琴が戦っている頃ツナとミサは予定通りデートしていた。

「ここが動物園なのですね。とミサカはたくさん動物たちを見回します」

ツナはミサを動物園に連れて来ていた。なぜ動物園に連れて来たのかというとツナは中学の時に京子と一緒に来たことを思い出したからである。

「あの動物は何ですか？ とミサカは尋ねます」

「あれはラッコだよ」

「ラッコ……貝を持ってプカプカ浮いてるだけで楽しいのでしょうか？ とミサカは純粹な疑問を述べてみます」

「さあ？ 流石に動物の気持ちはわからないけど……楽しいって思ったり思わなかったりする奴がいるんじゃないかな？」

ミサは水の上にプカプカと浮いてるだけのラッコを見てミサはそう呟いた。ミサの疑問にツナはそう答えるしかできなかった。

「同じ生物なのに性格があるんですか？ とミサカは尋ねます」

「そりゃ動物にだって感情があるんだから」

「ミサカたち妹達シスターズとは違うのですね。とミサカは動物と自分たちの性能を比較します」

「ミサたちにも感情があるんだから性格だって違うはずだよ」

「ツナに教えられた通りミサカたちにも感情があるのはわかっていますが、ミサカたちは同一のクローンなので性格の違いはないと思います。とミサカは伝えます」

「多分、今から色々ことを体験していけば同じミサでも性格が違うんだってことがわかると思うよ」

「ツナが言うのであれば間違いはありませんね。とミサカはツナの言葉信じます」

「いや……多分だから……俺だってクローンのことに関して理解して
る訳じゃないし……」

ミサが自分の言葉を素直に信じてくれるのは嬉しかったツナで
あったが、あまりにも簡単に信じてくれことに同時に困惑もしてい
た。

「ツナはミサカの大事な友達です。とミサカはツナの言葉を信じる根
拠を伝えます」

「ミサ……」

ミサが自分のことを初めて友達だと言ってくれたことにツナは感
動していた。

「次に行きましょう。とミサカは急かします」

「え!?! ちよつ!?!」

ミサがそう言うのとミサはツナの左隣に移動するとツナの左手を
握った。ミサの行動にツナは驚いてしまっていた。

「人が多いので離れ離れにならない為に手を繋ぎます。とミサカは
説明します」

「い、いや……でも……」

「ミサカと手を繋ぐのは嫌ですか？ とミサカはツナの心境を尋ねま
す」

「い、嫌って訳じゃないけど……」

女の子に手を繋がれるのが嫌な訳ではなかったが、流石に緊張して
しまっていた。

「前にツナが言った言葉を覚えていますか？ とミサカは尋ねます」

「前に言ったこと……?」

ツナはミサの言う前に言っていた言葉というのがわからず疑問符
を浮かべる。

「ミサカのことを知りたい、ミサカともっと話したい、ミサカと一緒に
生きる為に戦うのだと。とミサカはあの時のツナの言葉を伝えます」

ミサはツナが一方通行アクセラレータに戦おうと決意した時に言った時のことが
脳裏に浮かんでいた。

「ツナがミサカのことを知りたいようにミサカもツナのことを知りた

いのです。とミサカは自分の気持ちを伝えます」

「ミサ……」

ミサが心の中でそんなことを思っていたということを知ってツナは驚いていた。

「それにこうすればツナとの距離が縮む気がするのです。とミサカは自分の考えを伝えます」

「わ、わかったよ……」

ミサも色々と考えがあって手を繋いでいたということを知ってツナは手を繋ぐことを了承した。そして2人は動物園内を回って行く。

「あの餌を洗っている動物は何ですか？ とミサカは尋ねます」

「アライグマだよ」

「アライグマ……名前の通り餌を洗ってる…フフツ……」

（自分で言っただけでウケてる!! というかこんなしょうもないことで笑うのミサって!?)

アライグマの名前と行動が一貫していたのが面白かったミサはなぜか笑っていた。ツナは普段、無表情なミサはこんなことで笑ったことに驚きを隠せないでいた。

「あの首の長い動物はなんですか？ とミサカは尋ねます」

「あれはキリンだよ」

ミサは指を指しながら尋ねた。ツナはキリンを指を指しながら説明する。

「あの白い動物は何ですか？ とミサカは尋ねます」

「あれはシロクマだよ」

「白いクマ……だからシロクマ……フフツ……」

（また笑った!?)

シロクマの名前を知ってミサは再び笑っていた。またしようないことで笑ったことにツナは驚きを隠せないでいた。

「あの小さな動物は何ですか？ とミサカは尋ねます」

「あれはウサギだよ」

「ウサギ……モフモフしてとても気持ち良さそうですね。とミサカは第一印象を述べてみます」

ミサはたくさんいるウサギを見ながらそう呟いた。その後もミサと一緒に園内の動物を見て回った。1時間程、園内を回ると2人はベンチに座り休憩する。

「この世にはたくさん動物がいるんですね。とミサカは感想を述べます」

「ミサって動物のことに詳しくないの？」

ツナは疑問に思っていたことを尋ねる。ミサ園内の動物のことを全く知らず全て聞いてきた。普通の人なら知ってるような動物でさえも。

「ミサカは学習装置テスタメントによって知識を植えられた存在である為、知識には偏りがあるのです。とミサカは説明します」

「テスタメント？」

学習装置テスタメントという聞き覚えのない単語を聞いてツナは疑問符を浮かべる。

「学習装置テスタメントとは人工的に技術や知識を直接脳にインストールできる装置のことです。とミサカは学習装置テスタメントの詳細を説明します」

「へー。そんなもの作れるなんてやっぱり凄いなだね学園都市って」

「ミサカかからすれば異世界を行き来する装置を作れるこの世界の技術力の方が凄いと思います。とミサカはこの世界のあまりにイレギュラーな科学技術にツッコミをいれます」

「ま、まあそうなんだけどさ……」

ツナの脳裏には色んな物が浮かんでいた。撃たれると特殊な力を発動できる特殊弾。現在の自分と10年後の自分を5分間だけ入れ替える10年バズーカ。死ぬ気の炎の特徴を備えた匣ボックス。アニマル。武器や匣ボックスアニマルを収納できる匣ボックスやアニマルリング。10年後の世界においては人や物を数百キロ単位で転送できる超炎リング転送装置システム。そしてタイムマシンまで存在した。

「でも何でミサはその学習装置テスタメントっていうので知識を植えつけられたの？」

「ミサカは薬物によって急成長を遂げた個体なのです。とミサカは自分自身のことについて説明します」

「うん。それは向こうにいるミサから聞いたよ」

「そうですか」

ミサはツナが自分たちがどのような状態に生まれたのか知らないと思っただけ、説明した。だが実験が終わった後にそのことを聞いていた為、ツナはそのことを知っていた。

「ですが生まれた瞬間、見た目はこの状態で生まれるのですが中身は赤ん坊と同じく何も知識がない状態で生まれるのです。とミサカは産まれた時の状況を話します」

ミサの脳裏には培養機から出て泣きじやくる自分の姿が浮かんでいた。

「そこで学習装置テストメントを使ってミサカたちの脳が知識や人格をインストールして今の状態になるのです。とミサカは自分の出生の秘密を語ります」

(だから……)

ツナは理解する。普通の人なら知っていることを知らないのは学習装置の影響によるものであるということ。

「逆に尋ねたいのですがリボーンはなぜ赤ん坊であるのにも関わらず、あんなに流暢に話せるのですか？ とミサカはずっと気になっていたことを尋ねます」

「リボーンはまた違うっていうか……」

そう言うとツナはリボーンの秘密を話す。リボーンが佐天たちに話した時と同じ内容を。

「ということなんだけど……わかった？」

「正直、信じられないというのが本音です。とミサカは漫画や小説のような話に驚愕しています」

「はは……だよね……」

「でもリボーンが言っていたのはこういうことだったのでですね。とミサカは謎が解けて納得します」

「謎？」

ミサカはあの時リボーンが言っていた言葉が先程、ツナが話してくれたリボーンの秘密と関係があったのだということを理解する。ミ

サの言っている謎というのが何のかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「リボーンがミサカを治療した時になぜそこまでツナを信じられるのかと尋ねたのです。とミサカあの時のことを語ります」

ミサはリボーンの治療を受けている時に聞いたことをツナに話した。

「その時リボーンはツナは死を待つだけの自分を救った自慢の生徒だと言っていました。とミサカはリボーンが言っていた言葉を伝えま
す」

「リボーンが……」

ミサがリボーンが自分を治療した時に言っていた言葉を伝える。リボーンがそんなことを言っていたと知ってツナは驚きを隠せなかった。

「死の運命から逃れられなかったミサカとリボーンを救ったツナはやはり凄いんですね。とミサカはツナを称賛します」

「俺一人じゃ何もできなかったよ。みんなの力がなかったら助けることなんてできなかったよ」

ツナはわかっていた。リボーンを救えたのは仲間の力があつたからであることに。ミサが処分されず生きられるようになったのも仲間がいたからということ。

「そもそもリボーンと出会ってなかったら俺はリボーンもミサも助けることもできなかったよ」

「どういうことですか？ とミサカは詳しい説明を求めます」

「俺さ。中学の時、勉強も運動もできなくてずっとダメツナって呼ばれていていじめられてたんだ。俺は傷つくのを恐れて何もかも諦めてたんだ。何も変えられないって」

ツナは思い出す。ダメツナと呼ばれいじめられていた中学時代を。「でもリボーンがそんな俺の運命を変えてくれたんだ。あいつは俺に居場所をくれた。みんなを護る力をくれた。大切なことをいっぱい教えてくれた。俺にとってリボーンはかけがえのない存在なんだ」

「かけがえのない存在……それは前にツナが言っていた譲れないもの

……誇りというもののですね。とミサカは理解します」

ツナの言葉を聞いて、ミサはツナが前に言っていた誇りというものののだとことを理解する。

「ツナはリボンから強さと志を学び、その教えをもつてリボンとミサカを救い、リボンの教えをミサカに教えたのですね。とミサカは人とのツナの行動理念の原点と人との繋がり of 凄さを理解します」

ミサは先程、ツナの言っていたリボンがいなかったらリボンもミサも救うことのできなかつたという意味がどうということなのかを理解した。

「ミサカもこの世界でたくさんの人たちと繋がれるでしょうか？ とミサカは少し不安になります」

「大丈夫だよ。何なら今度、俺の友達を紹介するよ」

「ツナの友達ですか？ とミサカは尋ねます」

「うん。この世界はミサがクローンだって知る人はいないし。みんなだったらミサがクローンと知っても受け入れてくれるよ。だから安心して」

「みんな……」

みんなという単語を聞いて、ミサは何かを考え始めるのだった。

標的（ターゲツト） 177 ミサとナツツ

休憩を終えた2人は再び園内を歩いて回る。

「そういえば今日、動物と触れ合える触れ合い体験があるらしいけど行ってみる?」

ツナは昨日、この動物園のことを調べていた時に動物と触れ合えるコーナーがあることを思い出したのでミサに行ってみないかと誘ってみた。

「せっかくの提案ありがたいのですが遠慮しておきます。とミサカは伝えます」

「え? どうして?」

「ミサカの体からは能力の関係上、常に微弱な電磁波が放出されている為、動物は怯えてしまい触れることができないのです。とミサカは自身の体質について説明します」

「え!? そうなの!」

ミサが能力のせいで動物に触れられないと知ってツナは驚きの声をあげる。

「ということとは美琴も?」

ツナは前に美琴程ではないがミサも美琴と同じ能力が使えると言っていたことを思い出す。そのことから美琴もミサと同様に体から電磁波が常に出てるのではないかと推測した。

「以前、子猫と触れ合った際にお姉様も怯えられていました。とミサカはお姉様との思い出を話します」

ミサはミサカネットワークで別のミサが美琴と出会った際に美琴が体から出た電磁波のせいで子猫に怯えられてしまった時の光景が脳裏に浮かんでいた。

「いいかと思っただけだなー……そういうことなら仕方ないか……」

動物との触れ合えばミサも楽しんでくれるんじゃないかと思った

ツナであつたが、体質上の話なのであれば仕方がない為、諦めるざる終えなかつた。

(あれ? でも……)

諦めようとしたツナであつたがあることを思い出した。それは美琴と公園で出会つた時のことである。その時にナッツは美琴のことを嫌がつていなかった。その後ナッツは鬼のような形相の美琴を見て、恐怖するようになってしまったのだが。

(そつか……ナッツは調和の特徴を持つてるから……)

ツナは理解する。ナッツにはツナと同じく大空の炎の特徴である調和が備わっている。調和とは矛盾や綻びのない状態のこと。つまりあの時、ナッツは美琴の電磁波の影響を無力化していたのである。「どうかしたのですか? とミサカは考え事をしているツナの様子を伺います」

「ミサでも触れる動物がいるんだ。ミサの電磁波を嫌がらない動物が」

「そんな動物が本当にこの園内にいるのですか? とミサカは信じられないでいます」

「この動物園にいる訳じゃないんだ。後で見せてあげるよ」
「?」

自分を嫌がらない動物がいるというのでこの動物園にいるのかと思いきや、この動物園にはいないとツナが言うので意味がわからずミサは疑問符を浮かべた。しばらく園内を回ると動物園を出た。

「それで? ミサカでも触れられる動物というのは?」

「うん。ちよつと待ってて」

ツナは周囲を見回して人がいないということを確認した。そしてボンゴレギアに炎を灯す。するとリングが輝き始める。

「ガウツ!」

「え……!?!」

そしてリングの中からナッツが出て来て、ツナの右型に乗った。いきなりどこからともなくナッツが現れた為、ミサは驚きを隠せないでいた。

「ガウ!？」

出て来たのよかったがナッツはミサの顔を見た途端、恐怖し肩から降りてツナの右足にしがみついてプルプルと震えていた。

「やはりミサカの電磁波のせいで怯えているんですね。とミサカはやはり動物に懐かれれないという体質だということを改めて認識します」「いや……電磁波のせいじゃないんだ……」

「どういうことですか？ とミサカは詳しい詳細を求めます」

「実は前にナッツが美琴に懐いてたことがあるんだ。けどその後、怒った美琴を見て以来、ナッツは美琴に怯えるようになったんだ。だからナッツが怯えてるのは電磁波のせいじゃなくて、ミサが美琴とそっくりだからっていう理由なんだ」

「そうですか。とミサカは理解します」

「ナッツ。美琴に似てけどじゃないよ。ミサは美琴の妹なんだよ。だから大丈夫だよ」

ツナはミサに怯えているナッツに優しい声音でそう言った。ツナの言葉を信じたのかナッツは怯えながらもおそろおそろミサに近づいていく。

「触ってみてミサ」

そう言うとミサは怯えているナッツに手を伸ばした。ナッツは近づいて来るミサの手を目を閉じ、ミサはナッツの頭の上に右手を置いた。

「ガウ……?？」

「触れられました……とミサカは信じられない光景を目の当たりにして驚きを隠せないでいます……」

ナッツはおそろおそろ目を開けて顔を見上げてミサの方を見た。ナッツの視界には驚きを隠せず困惑しているミサの姿があった。

「どうしてこの子はミサカの電磁波の影響を受けないのですか？ とミサカは尋ねます」

「ナッツは俺と同じ炎の特徴を持つてるからなんだ」

「どういうことですか？ とミサカは再度尋ねます」

「死ぬ気の炎には大空、嵐、雨、雷、晴、雲、霧の7つの属性があつて

それぞれの炎に特徴があるんだ。俺は大空の炎を持つてるんだ。それで大空の炎の特徴は調和。調和は矛盾や綻びのない状態のこと。だからナッツはミサの電磁波の影響を受けないんだ」

「調和……」

大空の炎の特徴を聞いてミサは理解する。自分がナッツに触れられた理由を。アクセラレータ一方通行に勝つことができた理由を。

「ガウ♪」

「よかった。ナッツもミサに懐いたみたい」

するとツナの言う通り、ミサが美琴と違うということに気づいたのかナッツはミサの右足に向かって頬を擦り付ける。怯えた様子から打って変わって幸せそうな表情かおで懐いているナッツを見てツナは安堵する。

「ミサカは御坂ミサといいます。とミサカは自己紹介します」

「ガウ♪」

「これからあなたのことはナッツと呼ばせてもらいます。とミサカは確認を取ります」

「ガウ♪」

ミサの自己紹介と問いかけに対してもナッツは一切、怯えることなく返事をした。

「せつかく打ち解けんだしミサが抱えてみたら？」

「いいんですか？ とミサカは確認を取ります」

「うん。いいよ」

ツナが許可するとミサはナッツを両手で挟むようにして抱えた。ナッツは居心地がいいのか幸せそうな表情かおを浮かべていた。

「というかこの猫は……ナッツはどこから出て来たんですか？ とミ

サカは今さらながら質問します」

「あー……ナッツは普段このリングの中にいるんだ……」

「相変わらず規格外ですね。とミサカはこの世界の科学技術に改めて驚きを隠せないでいます」

「後、ナッツは猫じゃなくてライオンなんだ……」

「どういう経緯に至ったらライオンを飼うことになるのですか？ と

ミサカはツナの思考がわからないでいます」

「い、いや……俺もこうなるとは思ってたからさ……」

ナッツは未来の戦いにおいて白蘭を倒す為に未来のツナが現在のツナへ与えたものであり、ツナ自身ナッツと出会うことになるとは思ってもいなかったのである。

「そろそろ次に行こっか。どこか行きたい場所とかある？」

「そうですね。とミサカは考えます……」

標的（ターゲット） 178 深層心理

ミサがナッツと打ち解けた後、ツナたちは。

「これがクレープというものですか。とミサカは生クリームとチョコバナナが織り成すハーモニーに満足します」

ミサがクレープを食べたいと言ったのでツナはクレープを売っている店を案内した。

「結構、食べるねミサ……」

「ガウ……」

現在ミサはこの店にてクレープを食べている。あまりの食欲にツナとナッツは驚きを隠せないでいた。クレープの他にもたこ焼き、たい焼き、フライドポテトも食べている。ミサはリボンからかなりお金を貰っている為、これくらいという事はないのであるが。

「研究所では点滴や錠剤での栄養補給が主だった為、食べるという行為に興味があるのです。とミサカはクレープを堪能しながら説明します」

「え……食べさせてもらえなかったの……?」

「ミサカたちは産まれてもすぐに一方通行に殺されてしまうので食事を与える意味がないのです。とミサカは当時のことを語ります」

「……」

ミサの話を聞いてツナは何も言うことができず表情を曇らせていた。

「けど今は生きてよかったと心の底から思っています。とミサカは現在の心境を語ります」

「え……!?!」

「ツナがミサカたちを救ってくれたお陰で、この世には色々面白いものがあるのだということを知り、もつと生きてみたいと思っている自分がいます。とミサカは心の変化を語ります」

「ミサ……」

少し前まで自分が殺されることに何の疑問を抱いていなかったミ

サが生きたいと言ったことにツナは驚くと同時に嬉しく思っていた。「ご馳走でした。とミサカは本日4度目の合唱を終えます」

ミサはクレープを食べ終わると両手を合わせて合唱した。そして再びナッツを両手で抱き抱える。

「次は何食べたい?」

「食事はもう充分なので次はおもいきり体を動かしてみたいです。とミサカは次の願望を述べます」

「運動か……」

ミサが体をおもいきり動かしたいと言ったのでツナはどこに連れて行こうか考え始める。

「お姉様? とミサカはお姉様の近づいて来るのを感じます」

「え!? 美琴がこの世界に来てるの!?!」

ツナは美琴が来ているということを知って驚きの声を上げる。今日、美琴がこの世界に来るということをツナはリボンから聞かされていない。

「というか何で美琴がいるってわかるの?」

「ミサカとお姉様は同質の力を持っているのでその力を互いに感じ取ることができるのです。とミサカは説明します」

「へー。そうなんだ」

なぜミサが美琴の姿を視認していないのにも関わらず美琴が近づいているというのがわかるのかという理由を知ってツナは感心する。

「や、やっと見つけたわー!」

「あ。本当に来た」

「ガウツ!」

すると2人の正面から美琴が走って来る。信じていなかった訳ではないが、ミサの言った通り美琴が本当にこの世界にいたので少しだけ驚いていた。ナッツは視界に美琴が映った瞬間、怯えながらミサの胸元に顔をうずめてしまっていた。

「はあ……はあ……はあ……」

「ど、どうしたの? 美琴そんなに慌てて……?」

美琴は両膝に両手を置いた状態で息を切らしていた。そんな状態

の美琴を見てツナは何かあったのではないかと思っていた。

「リボンから聞いたのよ……あんたたちが一緒にいるって……」

「成る程ね。というか何で美琴がこの世界にいるの？ 何かあったの？」

「へっ……!? そ、それは……!?」

ツナがこの世界にいるということは何かしらの用があったのではないかと思い尋ねた。ツナの言葉を聞いて美琴は顔を赤くしながらモジモジし始める。リボンから2人がデートしていると聞いていても立ってもいられなくなったので飛び出して来ただけなので本当のことが言えないのである。

「用がないのでしたら行きましょう。とミサカはお姉様に別れを告げます」

「あ、あるわよ!!」

「では何の用ですかお姉様？ とミサカは尋ねます」

「そ、それは!! あれよ!! 姉である私としては妹を護る義務があるのよ!! だから来たのよ!!」

「心配してくれるのはありがたいのですがミサカにはお姉様よりも強いツナがいるので、帰って頂いても大丈夫です。とミサカは護衛が必要ないということを伝えます」

「か、帰って何よ!! こつちがせつかく心配してるっていうのに!!」
「お姉様がいたらナッツが怯えたままで可哀想です。とミサカはナッツのことを心配します」

「なっ!? 何でナッツがあんたに……!?」

自分と同じ顔をしているのにも関わらず、ナッツがミサに懐いているという事実には美琴は驚きを隠せないでいた。

「最初ナッツはお姉様と似ているミサカを怯えていましたが打ち解けることに成功しました。とミサカはナッツの頭を撫でながら伝えます」

「ぐぬぬぬ……!?」

ナッツに触られてもなお怖がられないことに美琴は嫉妬してしまっていた。

「俺は美琴のことを怖がってないから懐いてもいいはずなんだけどなー」

「何であんたとナッツが懐くことが関係あんのよ？」

「ナッツと初めて会った時、俺が心の中で不安を抱えてたからナッツは俺に襲いかかって来たんだ。けど不安が無くなってからはナッツが襲いかかって来なくなったんだ」

「それは何？ あんたの深層心理がナッツに反映されてるってこと？」

「う、うん……そうだけど……ど、どうしたの美琴……!？」

「ナッツが懐かないのはあんたが心のどこかで私に対して恐怖してるからってことでしょ……？」

「い、いや……だから……これに関しては俺の心とか関係なくナッツ自身の問題であって……」

「じゃあ何で今、あんたは私を見てビビってるのよ!？」

「それは美琴が……怖い顔をしてるからであって……」

「だったら今すぐ私への恐怖心を無くしなさい！ 今すぐ！」

「急に言われても無理だから！ 一旦、落ち着こう美琴！」

美琴はナッツと仲良くなりたいたいという思いが強すぎたのかツナに恐怖心を無くせるように命じがその必死過ぎる顔を見て恐怖心を捨てられる訳もなかった。

「諦めてんじやないわよ！ さあ早くしなさい！」

「み、美琴………苦しい………」

「ガウウ………」

美琴は両手でツナの胸ぐらを掴みながらツナの体を揺らす。ツナは苦しいと訴えるが必死になり過ぎている美琴にその言葉が届くことはなかった。この光景を見てナッツはさらに美琴に恐怖することになってしまった。

「わっ！」

「そこまです。とミサカは制止します」

ミサは美琴の横暴を見ていられなくなったのかツナを引き剥がした。

そして

「これ以上の乱暴はいくらお姉様でも許しません。とミサカは宣言します」

「ちよっ!? ミサ!？」

「なっ!?」

ミサは両手でツナの腕へ絡み付いた。ミサの行動を見てツナと美琴は顔を赤くしながら動揺する。

「ツナは私の大切な人です。とミサカは明確な意思を露にします」
「……」

美琴はミサの話を聞いて両手を強く握り涙目になりながら、プルプルと体を震わせていた。それもそのはず。ナッツに怖がられ、思い人まで奪われた美琴の心中は穏やかなものではなかった。

「知らない……」

「み、美琴……?」

「あんななんて知らないんだからー！ー！！ このバカーー！ー！！」

美琴は顔を真っ赤にしながら叫ぶとそのまま走り去ってしまったのだった。

嫉妬のあまり怒りを爆発させて帰ってしまった美琴。ツナは美琴に追いかけてしようとしたのだがミサに今の美琴に何を言っても意味がないと言われて追うことを諦めた。その後、ツナはミサの行きたい場所を案内して行った。

そして時刻は夕方になる。ツナとミサはリボーンが予約したホテルへと向かって行く。

「ん、んんって……!？」

ツナはこのホテルに見覚えがあつた。なぜなら今、2人が来ているホテルは継承式の際に9代目が泊まっていた超がつく程の高級ホテルだったのだから。

「ここは凄い高級ホテルなのではないですか？ とミサカは尋ねます」

「うん……リボーンの奴まさかここまでするとは……」

男女2人きりでホテルに泊めさせるということ事態、規格外の提案であるのにも関わらずさらに超がつく程の高級ホテルを用意するリボーンの策略にツナは驚きを隠せないでいた。2人はホテル内に入り、受付を済ませるとカードキーに書かれた番号に向かって行く。そして部屋の扉を開ける。

「なっ!？」

ツナが扉を開けると驚きの声を上げる。なぜなら部屋にはベッドが1つしかなかったのだから。

「ベッドが1つしかないですね。とミサカは内部の状況を分析します」

「冷静に分析してる場合じゃないよ!」

ベッドが1つであるという状況であるのにも関わらず全く動揺せず冷静でいるミサにツツコミをいれる。

その時だった

「よう。楽しんでるかお前ら」

「リボーン!?!」

部屋にあるテレビが勝手に起動する。テレビの画面にはリボーンが映っていた。リボーンがテレビ画面に映ったことにツナは驚きを隠せないでいた。

「つて! これどういうことだよ! ベッドが1つしかないぞ!」

「当たり前だろ。あらかじめ俺がそういう風にしたんだからな」

「女の子と同じベッドで眠れる訳ないだろ! 俺は帰るぞ!」

流石にミサと同じベッドで寝れないのでツナは飛び出して行く。
が、

「あ、あれ!?! 開かない!?!」

ツナは扉を開けようとドアノブに手をかける。しかし押ししても引いても扉が開くことはなかった。何度やっても扉が開かないことにツナは焦りを見せていた。

「無駄だぞ。その扉は開かないように俺が細工してある」

「なっ!?! どういうことだよ!?!」

「その部屋の扉を開けるにはある条件を満たさないと開かねえぞ。俺がそういう風に仕組んでるからな」

「条件? 何だよそれ?」

この部屋から出る為に条件があるということを知ってツナは疑問符を浮かべる。

「ミサとベッドで一緒に寝て一晩過ごせ。それで扉が開く」

「はあ!?! どういうことだよ!?!」

「そのままの意味だぞ。要するに今、お前たちいる部屋は一晩一緒に過ごせないと出られない部屋ってことだ」

「なっ!?!」

リボーンからこの部屋の詳細を聞いてツナは驚きを隠せないでいた。

「グツジョブですリボーン。とミサカはリボーンに惜しみない称賛を送ります」

「何で!?!」

ミサは親指を立てながらこのような状況を作ってくれたりボーンに感謝の意を送った。ツナはミサの発言に聞いて驚きを隠せないでいた。

「お前ならばっ壊して突破できるだろうがな。それがお前にできんならな」

「そ、そんなことする訳ないだろ！」

「どうしても嫌だっつてんなら別に構わねえぞ。その代わりに、俺と一緒に明日の朝までネツチヨリ修行してもらおうがな。どうするツナ？」

「こ、このまま……泊まらせていただきます……」

リボーンの第2の提案を聞いてツナはリボーンのスパルタ修行を受けるよりもミサと一緒に一晩過ぐすことを選んだ。

「そんじゃ。楽しめよお前ら」

そう言うのとテレビの画面が一方的に切られる。そして再び静寂が訪れる。

「え、えつと……ごめんミサ……リボーンが勝手に……」

「何も問題ありません。とミサカはむしろ美味しすぎる展開に喜びを感じています」

「だから何で!？」

リボーンの勝手な行動に対して謝るツナ。しかしミサは気にするどころか喜びを感じていた。なぜミサが動揺しないのかわからずツナは驚いていた。

「それではミサカはシャワーを浴びてきます。とミサカは次の予定を告げます」

「あ。うん。いってらっしゃい」

「覗かないで下さいね。とミサカは忠告します」

「の、覗かないよー」

ミサの言葉を聞いてツナは顔を真っ赤にしながら叫んだ。それだけ言い残すとミサは風呂に入っていた。

「はあ……リボーンの奴、一体何を考えてるんだよ……」

また滅茶苦茶なりボーンの行動にツナは嘆息してしまっていた。ミサがシャワーを浴びてから15分後。ツナも同じくシャワーを浴

びた。

「じゃ、じゃあ……そろそろ寝ようか……」

「はい。とミサカはツナの意見に賛成します」

一日中、歩き回っていたということもあり2人は早く寝ることにした。そしてツナは部屋の電気を消すと、2人はベッドにて横になる。「どうしてそんなに離れるのですか？ とミサカは純粋な疑問に尋ねます」

「い、いや……だって……」

「もしかしてツナは私に意識してるいるのですか？ とミサカはツナの心理状態を推測します」

「そ、そりゃ……女の子と一緒に寝てるんだし……意識しない訳が……」

「そうですか。とミサカは次の行動に出ます」

「ミ、ミサ!?!」

自分から距離を取り、顔を合わせないようにしているツナにミサは近づくと、横になってる状態のツナに後ろから抱きついた。抱きつかれたツナは顔を真っ赤にする。

「ツナの背中が温かいんですね。とミサカはツナに抱きついた感想を述べてみます」

「ちよつ……ミサ……何をやって……!?!」

「抱き枕の代わりです。とミサカは抱きついた理由を答えます」

「だ、抱き枕って……」

ツナは自身を抱き枕扱いされたことに驚くが、それよりも女の子に抱きつかれていることの方の刺激が強かった。

「いい抱き枕心地です……とミサカは……」

（寝た!?!）

ツナの抱き心地がよかったのかミサはそのまま眠ってしまった。ツナは抱きつかれたまま寝てしまったことに驚いてしまった。

（やはりあの方の言う通りでしたね……）

眠ったと思ったミサであったが寝たフリをしていただけだった。

時は遡り。ミサが入院していた頃。

「ツナと一緒にいると心臓の鼓動が早くなるのですがこれは病気ですか？ とミサカは尋ねます」

ミサはベッドの上から自分の護衛の為いるディーノに自身に起こっていることを尋ねた。

「それはお前がツナに恋してんのさ」

「恋ですか？ とミサカは再び尋ねます」

「お前はツナと一生を共にしたいと思う程、好きでいるんだ。だからそれは病気なんかじゃねえ。お前の気持ちを体が伝えてるだけだ」

「これが恋……」

そして再びホテル

(もし私たちが普通に生きられるよう未来になったらその時はこの気持ちをお前に伝えます。とミサカは心の仲で宣言します)

こうしてツナとミサのデートは幕を閉じた。

標的（ターゲツト） 180 彫金師

時は遡り。佐天が美琴と戦った後の出来事。

「負けちゃった……やっぱり強いなー御坂さん……」

美琴の超電磁砲レールガンを防ぐ為に大量の炎を消費した影響で気絶してしまった佐天。そして目覚めた佐天は美琴が本当に強い人物だということを改めて認識した。

「そうがっかりすんな佐天。たった1カ月で超能力者レベル5に渡り合えるようになったんだ。むしろすげえぞ」

「それはわかってるんだけどさー……」

がっかりしてる佐天にリボーンは励ましの言葉をかける。この短期間で美琴と渡り合えるようになったのがどれ程、凄いことなのかは理解してはいる。しかしそれでも悔しいのである。

「お前の成長は俺でも未知数だ。まだまだこれから伸びる。だからその悔しさをバネにしてより高みを目指せ。ツナを越えてんだろ？」

「うんっ！」

リボーンの言葉を聞いて笑顔でそう答えた。佐天の笑顔を見てリボーンは口元を緩ませる。

「んじや。まずはお前がツナを越える為の力を手に入れに行くぞ」

「手に入れる？」

「そろそろお前にも匣ボックスアニマルを与えようと思ってな」

「ボックスアニマルって……ツナさんのナッツみたいな動物のこと？」

「そうだぞ。ちよつと前に俺がボンゴレに要請しといたんだ。それが今日、日本に届いてる。だから今から行くぞ」

「わ、私の為に用意してくれたの？」

「当たり前だろ。お前は俺の生徒なんだからな。生徒の為ならこれくらい当然のことだぞ」

「ありがとうリボーン君」

何から何まで自分の為に力を貸してくれるリボーンに佐天はお礼を言った。

そして佐天はリボーンの案内に従って付いて行く。

「ここだぞ」

「(トク)？」

やって来たのは森に囲まれた一件の日本家屋だった。2人がいるのは家屋の庭であり、庭には小さな池とししおどしがあった。

「というか何でこんな山奥なの？ ツナさんの家に届けてもらうようにした方がいいんじゃないの？」

「お前の今、持つてるリングと今から貰うリングを1つにするんだ。ボンゴレ専属の彫金師にな」

「ちようきん……？」

「金属を加工してアクセサリを作る職人のことだ」

「成る程……」

「んじゃ入るぞ」

2人は靴を脱ぐと縁側から家屋に入る。そして目の前にある襖を開けた。

「ほう。来たか」

2人が襖に入ると畳の部屋が広がっていた。そこには黒い目隠しに全身にマントを纏った老人が座布団の上に座っていた。

「代理戦争以来じゃのうアルコバレーノ。その娘がお主が言っておった奴か？」

「ああ。俺の生徒の佐天だ」

「そうか」

(一体、誰だろう？ このお爺ちゃん……)

ツナの記憶を見ていた佐天であったが佐天が見たツナの記憶の中にこの老人は出てきていなかった為、この老人が何者なのかわかっていないでいた。

「紹介するぞ佐天。こいつの名はタルボ。ボンゴレファミリーに仕える最古の彫金師だ。めったに姿を見せない仙人みたいな爺さんでな。初代プリモの時代からボンゴレ仕えてるって噂があるぐらいなんだぞ」

「そ、それってボンゴレの創設期から仕えてってこと!？」

「そういうことだぞ。まあ噂だがな」

「ほ、本当にそうなんですか!？」

「アルコバレーノの言う通りじゃ。わしはボンゴレの創設期から仕えておる」

「も、もしかしてバミューダとかチェッカーフェイスみたいな特殊な人間だったりとか……?」

「あの2人を知っておるのか。最初に言うておくがわしは奴らみたいな特殊な人間ではないぞ。わしは普通の人間じゃ」

「し、失礼ですが……おいくつ何ですか……?」

「140は越えていたと思うんじゃが……もう正確な歳なんぞ忘れてしもうたわい」

(人間って……そんなに生きられるんだっけ……?)

特殊な人間ではなく普通の人間の身でありながら人知を越えているタルボの存在に佐天は驚きを隠せないでいた。

「さて作業に入る前にまずはお主のリングを貸して貰おうか」

「は、はいー!」

佐天は指に装着している2つのリングを外してタルボに渡した。

「ほう……これはチェッカーフェイスが作ったリングか……どおりでいいリングのはずじゃわい」

「え!? チェッカーフェイスが!？」

「なんじゃ。知らなかったのか」

「い、いや……チェッカーフェイスはリボーン君の話に出てきたから

知ってるだけで……会ったことは……」

「お前はすでにチェツカーフェイスに会ってるぞ」

「え!? いつ!?!」

「お前が修行の第1段階をクリアした時にラーメン屋で川平って男と出会っただろ。あいつがチェツカーフェイスだ」

「あの人が!?!」

ラーメン屋にいたどこにでもいそうなあの男がチェツカーフェイスだと知って佐天は驚きの声を上げる。そしてこれらのリングはりポーン君が用意したものじゃないということを理解する。

「ほう……あのボンゴレの小僧に追いつく為に異世界からこっちの世界に来て修行しておるのか……」

「な、何でそのことを!?!」

「優れたリングには魂が宿る。魂があれば感じるところもある。その声を聞いてやるのがわしの生業じゃ」

「つまりリングと話ができるってことですか……?」

「まあそんなところじゃ。それだけじゃない。お主の性格や、お前があのボンゴレの小僧に憧れてるだけでなく特別な感情を抱いているともリングは言っておるぞ」

「っ!?!」

ツナに好意を抱いているということまでタルボに知られてしまい佐天は顔を赤くしていた。

「しかしお主は似とるのう。ダニエラの奴に」

「ダニエラ?!」

「ボンゴレ^{オッターゾオ}Ⅷ世……ボンゴレの8代目のボスの名前だ」

「ボンゴレファミリーの8代目?」

「ダニエラ。ボンゴレファミリーの歴史の中で唯一の女のボスだ」

「え!?! 女性のボスがいたの!?!」

ボンゴレの歴代のボスの中に女性のボスがいたということに驚きを隠せないでいた。

「そのダニエラさんと私がどんな所が似ているんですか?」

「ダニエラはのう。そりゃあもう手がつけれんようなお転婆娘

じやった」

「お転婆……」

いいところを言うのかと思いきや、そうではなかった。佐天は複雑な気持ちになってしまっていた。しかし自分もお転婆な部分があることを自覚しているのかそれ以上、何も言うことはなかった。

「しかし戦いとなれば部下の前に立ち、ギリシア神話のアテナのように勇敢じゃった」

「8代目はボンゴレの歴代のボスの中で特に名を残した3人のボスの1人でもあるんだぞ」

「凄い……」

女性でありながらとても勇敢で、特に後世まで名を残した人物だと知って佐天はダニエラが凄い人物なのだということを理解する。

「そしてダニエラは初代のファンでもあった」

「初代のファン……」

8代目が初代のファンと聞いて佐天は少しだけ親近感を覚える。初代はツナの祖先でありツナと同じ武器で戦い、ツナと同じ志を持つた人物なのだから。

「さて……そろそろ作業に移るか。悪いが集中したいから部屋から出ててくれるかのう」

「え!?! ここまでできるんですか!?!」

「わしを誰じゃと思うと。道具さえあれば場所など選ばん」

タルボがそう言うのと2人は部屋を出て、縁側に座ってリングが完成するのを待つことにする。

縁側

「ボンゴレって凄い人がいっぱいいるんだね」

「まあな。タルボは俺たちアルコバレーノを救った男だからな」

「どういうこと？ 救ったのはツナさんでしょ？」

「ツナは俺たちアルコバレーノが犠牲ならずともいい方法を思いついた。そして自分の考えを成功させる為にツナから相談を受けたタルボは俺たちアルコバレーノが犠牲にならずとも7トウリニセツテを維持する器を作ったんだ」

「す、凄い……」

タルボがリボンたちアルコバレーノの救った男だということを知ってタルボの凄い人物なんだということを理解する。

「さらにあいつはボンゴレの危機をも救ったしな」

「ボンゴレの危機？」

「2年前にボンゴレのボスの座をツナに継承する為に継承式があったんだが継承式の途中で襲撃が起きたことがあってな」

「継承式って……ツナさんが参加したの……!？」

ボンゴレを継ぐことを嫌がっているツナがボンゴレのボスの座を継ぐ為の式典に参加していたという事実には驚きを隠せないでいた。

「ツナは最初はボンゴレのボスを継承することを拒んだ。だから継承式は本来なら開催されるはずはなかったんだがある事件が起こってな」

「事件？」

「継承式の数日前に山本が何者かに襲われたんだ。生死を彷徨う程のな」

「山本さんが……!？」

自分の師である山本がそんな大変なことになっていたと知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「その事件で敵が継承式に参加するファミリィだということ俺たちは突き止めた。ツナは犯人を捜す為に継承式に参加したんだ。そして俺たちの読み通り犯人は襲撃してきた」

「一体、誰なの？ その犯人って？」

「古里炎真率いるシモンファミリィだ」

「炎真さんが!？」

「ああ。つっても前に言った通りD・スペードデイモンに利用されてただけだったんだがな」

「D・スペード……」
デイモン

D・スペードと聞いて佐天は前にリボーンがボンゴレの歴史を語ってくれたことを思い出した。

「だが炎真は強かった。ツナたちは炎真1人に手も足も出さず一方的にやられた上にクロームまで拐われた」

「そ、そんなことが……!?!」

佐天は信じられなかった。ツナたちが手も足もでなかったこと。炎真がそこまで強い人物だということに。

「さらにボンゴレの至宝であるボンゴレリングを破壊されて俺たちはどうすることもできずにいた。だがそんな時に現れたのがタルボだった。タルボは壊れたボンゴレリングを修復し、さらに強化したボンゴレギアを作り出し、シモンファミリーへの対抗する力を作り上げたんだ」

「そこまで……」

アルコバレーノの運命、ボンゴレの危機。これらを救ったタルボの存在に驚きを隠せないでいた。

「わしは大したことなどしておらん。わしは手助けをしただけに過ぎん」

「完成したのか」

「え!?! もう!?!」

タルボの経歴を聞いていると襖が開き、タルボが現れる。このタイミングで現れたことからリボーンはリングが完成したのだと理解する。佐天はこの短時間で作業が終わったことに驚きを隠せないでいた。

「これがお主のリングじゃ」

「これが……」

タルボは閉じていた右手を開いて出来上がったリングを佐天に見せた。何の変哲もない銀色のリングが黄色と青色のリングに変化していた。晴のリングとセンターストーンの部分には615。雨のリ

ングの方には310という数字が刻まれていた。

「新機能もつけておいたからのう」

「新機能？」

「口で言うよりも実際に試した方が早い。試してみろ」

「は、はい！」

佐天はタルボからリングを受け取るとリングを装着する。そして靴を履いて庭に出るとリングに炎を灯す。そしてリングが輝き始めるのだった。

標的（ターゲツト） 181 新たな力

佐天はタルボによって新しくなったりリングに炎を灯す。

「ピュイ！」

「キューー！」

「ウサギとペンギンか」

「これが私の匣ボックスアニマル……」

リングの中から出て来たのは白いウサギとペンギンだった。自分専用の匣ボックスアニマルを見て佐天は今イチ実感がわかないのか呆然としていた。

「コニツリヨ・デル・セレーノ」

「晴ウサギ。そして雨ペンギンじゃ」

「え、えつと……」

「イタリア語だ。晴ウサギと雨ペンギンっていう意味だ」

タルボの言っている言葉がわからず困惑する佐天であったが、リボーンが翻訳した。

「新機能を試す前にとりあえずこいつらに名前をつけたらどうだ佐天？」

「名前か……うーん……」

名前と言われて佐天は両腕を組んでどんな名前にしようか悩み始める。

「じゃあウサギの方はコルイ。ペンギンの方はクイーンかな」

20秒ほど、悩んだ後に佐天はウサギとペンギンの名前を思いついた。

「ウサギの方はお前の名前のアナグラム。ペンギンの方はピングイーノのグイーノの部分をもじったのか」

「うん。これからよろしくねコルイ。クイーン」

そう言うと佐天は左手でコルイの頭を右手でクイーンの頭を撫でた。コルイとクイーンは佐天に警戒することなくすぐに懐いた。

「名前も決まったようだし次は新機能を試してみい」

「どうすればいいんですか？」

「簡単じゃ。其奴らに向かって形態変化カンビョウ・フォルマと言うだけじゃ」

「まずはコルイの方から試してみろ佐天」

「うん」

タルボが佐天に新機能を発動させる方法を教える。リボーンの言葉を聞いて佐天はコルイの方を見る。

「コルイ。形態変化カンビョウ・フォルマ」

佐天がそう言うときコルイの体が輝き始める。そして佐天の両手に形態変化したコルイが移動する。

「こ、これって……!？」

佐天の両手に握られていたのは木製の三節棍だった。初めての形態変化に佐天は驚きを隠せないでいた。

「三節棍か」

ランデック・セゾーネ・トレ・セレニダ
「晴の三節棍じゃ」

「三節棍って……漫画とかアニメとかでしか見たことないんだけど……」

漫画やアニメで三節棍を見たことはあるが実際に手に取って見るのは初めてであるので、驚きを隠せないでいた。

「三節棍の扱いを教えてやる。とりあえず試してみろ佐天」

「う、うん……」

リボーンは三節棍の扱い方を教える。リボーンの言う通りに佐天は三節棍を振るっていく。

20分後

「ほう。もう扱えるようになったのか。器用じゃのう」

佐天はすでに三節棍を扱えるようになっていた。たった20分で三節棍を扱えるようになっていたことにタルボは感心していた。

「どうだ佐天？ 扱えそうか？」

「まだちょっと違和感があるけど、慣れたら扱えそう」

「そうか。とりあえず三節棍の練習はその辺にして次にいくぞ」

「うん。えっと……どうしたら元に戻るの？」

「普通に戻れって言えば戻るぞ」

「戻って。コルイ」

リボーンの言われた通りするとコルイは三節棍の状態から元の姿に戻って地面に降りる。

「次はクイーンの方だな」

「クイーン。形態変化」

佐天がクイーンの方を向いてそう言うときクイーンの体が光り輝き

始める。そして形態変化したクイーンが右手に握られる。

「雨のボウガン」

「雨のボウガン。8代目と同じタイプのボウガンか」

「8代目と？」

「8代目はボウガンを主力武器メインウェポンにして戦ったボスなんだぞ」

（私が8代目と同じ武器を……）

第2の武器が8代目と同じ武器だと知って佐天は驚いていた。

「なんかボンゴレのボスってみんな武器が個性的だよ」

「武器が被ってるのはツナと初代くらいなもんだ。後は全員、バラバラだからな」

「2代目の小僧は武器すら持っておらず素手じゃったがな。まあ憤怒の炎を持ってたおったからのう」

「憤怒の炎？」

憤怒の炎という聞いたことのない単語を聞いて、佐天は疑問符を浮かべる。

「憤怒の炎。死ぬ気の炎の亜種で2代目が持ってたときされる光球の炎だ」

「高級？ 炎に価値があるの？」

「その高級じゃねえ。光の球と書いて光球だ」

「あっ！ そういうこと！」

光球を高級と勘違いした佐天であったが、リボーンの説明で光球の意味を理解し相槌を打った。

「それで憤怒の炎って何なの？」

「死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギー。それは知ってるな？」

「うん」

「その中でも憤怒の炎はあらゆるものを灰に帰す死ぬ気の炎の中でも圧倒的な破壊力を持った炎。2代目が激昂した時に見せたことから今は死ぬ気の炎とは別に憤怒の炎と呼ばれるようになったんだ」

「そんなに凄いの？ 憤怒の炎って？」

「現在、憤怒の炎を持つてる奴がボンゴレにいるが純粋な破壊力じゃあツナよりも上だ」

「ツナさんより上……!?!」

炎の破壊力でツナよりも上の人物がいるということが信じられなかったのか佐天は驚きを隠せないでいた。

「2代目の小僧はそりゃあ強かった。戦いに明け暮れボンゴレの敵となる者を次々に潰し勢力を拡大していった。じゃが自警団じやつたかつてのボンゴレは見る影もなくなりボンゴレはマファイアへと変わってしまった」

タルボの脳裏にはボンゴレの主権が初代から2代目へと移行した時のことが浮かんでいた。

「さて。用も終わったしわしはそろそろ帰るとするかの」

「今日はありがとうございました」

佐天は自分専用の新しいリングを作ってくれたタルボに頭を下げお礼を言う。

(この子たちと一緒に強くなってツナさんに追い付くんのだ！)

コルイとクイーンを見ながら佐天は心の中でそう誓うのであった。

標的（ターゲット） 182 殺され屋

時はツナがミサと一緒にホテルの泊まっている頃。

「今日はツナさんが帰って来ないんだよねー…」

佐天はツナのベッドで横になっていた。あらかじめリボーンはミサとデートしているということを隠していた。京子たちがツナをキャンプに誘ったのだとリボーンがあらかじめ佐天に説明しておいたのである。

『夏休みが終わったならあいつは学園都市に行くことになるんだ。いくら異世界転送装置があるとはいえ学校が始まったら会いに行くのは難しくなるからな。今の内に楽しませてやろうと思ってな』

（いや……そもそもリボーン君が勝手にツナさんを退学にしたんだよね……）

ベッドで横になりながら佐天はリボーンの言っていた言葉を思い出すと同時にツツコミをいれる。

（もうちょっと夏休みが終わる……みんな元気にしてるかな？）

佐天の脳裏には初春、黒子、そしてクラスメートの姿が浮かんでいた。そして佐天は睡魔に襲われて、そのまま眠りについてしまう。

一方。その頃。ツナの家の外。

「んじゃ。後は頼んだぞ」

「了解す。リボーンさん」

ツナの部屋

「う、うくん……?」

佐天が眠ってから3時間後。眠っていた佐天であったが目が覚めてしまう。

「な、何の音……?」

目が覚めた佐天は少し不機嫌だった。なぜなら部屋の中でゴソゴソという音が何度も部屋の中で響き渡っていたからである。

「え……!?!」

佐天は衝撃の事実を目にする。なぜならそこには全身に黒服を纏いニット帽を被った知らない男の背中が見えたのだから。すると男は佐天の振り返る。

「ど、泥棒……!?!」

「っ!?!」

佐天はこの男が泥棒だということに気づく。男は佐天の声に気づくとももの凄い勢いで佐天の方を振り向いた。そして口封じしようとゆっくりと佐天に近づいていく。

(だ、大丈夫……相手は泥棒……)

シエンツとの戦いを経たお陰か佐天は慌てることなくそれどころか冷静に対処しようとしていた。

が、

(あ、あれ……?)

泥棒をやっつけようと思った佐天であったが急に睡魔が襲い、佐天は再び眠りについてしまう。

そして次の日の朝。8月25日。

「う、うくん……?」

佐天は再び目を覚ます。目覚めるとそこにはいつもの見知った天井が佐天の視界に映っていた。

「昨日の夜、泥棒がいたと思ったけど……夢か……」

男が襲いかかって来たのにも関わらず、自分の体に何の異常もないことから、昨夜の出来事は夢だったのだと佐天は理解し安堵する。

「え……!?!」

安堵する佐天であった驚きの光景を目にしてしまう。なぜなら佐天の視界の先には部屋にもたれかかるような状態で男が血を流して倒れていたのだから。

「う、嘘だよね……?」

佐天はおそろおそろ倒れている男に近づいて行く。そして男の体を両手でゆする。しかし男の意識が戻るどころか何も反応も返って来ることはなかった。

「も、もしかして……わ、私が……!?!」

佐天は昨夜の出来事を覚えていなかったが、今のこの状況から自分が何をしたのか理解する。

「もう起きる時間だぞ佐天」

「リ、リポーン君……」

「どうした佐天?」

朝御飯ができたことを知らせに来たりポーンであったが涙目になりながら自分の方を見ている佐天を見て、何かあったのだと理解する。

「こ、この人……泥棒なんだけど……私……殺しちゃったかも……」
「そうか。お前もついに殺し屋ヒットマンとしての才能に目覚めたか。家庭教師かてきょうとして鼻が高いぞ」

「そういうのは今いいから!」

こんな時でも相変わらず平常運転であるリポーンに佐天はツツコ

ミをいれる。

「泥棒なんだからそいつ？ だったらいいじゃねえか。正当防衛だろ」

「で、でも……」

「というか本当に死んでんのかそいつ？」

「へ？」

「ただ気絶してるっていう可能性もあんだろ。ちゃんと心臓が動いてるとかは確認したのか？」

「そ、そういえば……」

リボーンに指摘されて男の心臓の部分に耳を当てて心臓が動いているかどうか確認する。

「う、動いてない……」

気絶しているだけと信じてしまったが男の心臓は全く動いておらず佐天は顔を真っ青にしながら絶望する。

「安心しろ佐天。証拠も残さないように手配してやる」

「安心できないよー！」

「心配いらねえ。雲雀に依頼すれば死体の処分もやってくれるからな」

「何で高校生がそんなことしてるの!？」

雲雀が死体の処分をしてくれると聞いて佐天は驚きの声を上げる。

（どうすればいいの……!?! 相手が泥棒だからって殺しちゃうなんて……!?!）

佐天は両手で頭を抱えながら人を殺したという罪悪感に押し潰されそうになってしまっていた。

が、

「そろそろ起きていいぞモレッティ」

「あ、はい」

「ぎゃー……!?!」

リボーンがそう言うのと急に何事もなかったかのように男がゆつくりと体を動かした。完全に心臓が止まっていた男が何事もなかったかのように起き上がった為、佐天は叫び声を上げた。

「い、生き返った!?! ど、どうなってるの!?!」

「驚かせちゃってすみません。私、ボンゴレの特殊工作員のモレッティと申します」

「ボ、ボンゴレって……!?　じゃ、じゃありボーン君の知り合いってこと……!?」

「そうだぞ。ボンゴレの特殊工作員にして殺され屋のモレッティだ」

「こ、殺され屋……?　殺し屋じゃなくて……?」

「ああ。モレッティは自分の意思で心臓を止めて仮死状態になれるアツディーオっていう才能を持つ男なんだ」

(で、出た……ツナさんの世界の変わった人……)

佐天はまた奇妙な才能を持つモレッティの能力を聞いて、なんとも言えない気持ちになってしまっていた。

「ん?……ということはこの人は初めから死んでなかったってこと……?」

「そうだぞ。全て俺たちが仕組んだことだ。お前がモレッティに襲われそうになった時に俺は催眠ガスで眠らせて夢だと思わせたんだ」

「よ、よかったー……」

自分がモレッティを殺していないとわかって佐天は力が抜けたのか脱力してしまっていた。

「いやー。本当にすいません。休暇で日本に遊びに来たんですよ。それで親方様からあなたのことを聞いたことを思い出しまして。だからせっかくなのでアツディーオを見て貰おうと思ひまして」

「もっと他に見せ方があるでしょ!　　とかせつかくの休暇中に何してるんですか!?!」

休暇中であるのにも関わらず、こんなドツキリをしようとするモレッティに佐天はツツコミをいれる。

「このまま学園都市に行つて美琴たちにもアツディーオを見させてえな」

「例の異世界ですか?」

「そうだぞ。佐天と同じく面白い反応をしそうな奴がいるんだ。どうだ?　行ってみないか?」

「リボーンさんがそう言うなら面白そうっすね。いいですよ」

(なんかごめん……みんな……)
ノリノリなりボンとモレッツテイの姿を見て、佐天はなぜか申し訳
なくなり心の中で謝るのであった。

標的（ターゲット） 183 殺され屋2

リボーンがモレッティと共に学園都市に行った後、ツナがホテルから帰って来た。

「あれ？ リボーンは？」

「え、えつと……モレッティさんっていう人と学園都市に行きました」

「え!? もしかしてあの殺され屋の!？」

「やっぱリツナさんも知ってたんですねモレッティさんのこと……」

「もしかして佐天もリボーンのドッキリに……?」

「もつてことはツナさんも……?」

「うん……中学の時にやられた……」

佐天もという言葉から佐天はツナも先程の自分と同じようにモレッティのアツデイーオによつて騙されたのではないかと推測する。ツナは前にモレッティのアツデイーオによつて騙された時のことが脳裏に浮かんでいた。

「学園都市に行ったつてことは……」

「はい。学園都市でアツデイーオ? つていうのをやるみたいです……」

「あいつ……」

リボーンとの付き合いが長いツナは理解していた。自分が楽しむ為にモレッティを連れて行ったのだと。

「あー……それと修行のことなんですけど……修行は特別講師を呼んでおいたつて言っていましたよ……」

「特別講師……」

特別講師と聞いて、誰が特別講師としてやって来るのかはわからなかったツナであったが、嫌な予感しかなかった。

学園都市

「へー。ここが学園都市……これはまた凄いところですね」

自分の思っていたよりも大都会の学園都市を見て、モレッツティは感嘆する。

「それで今回はどういうシナリオでいきますかりボンさん？」

「そうだな……」

時刻は一気に経過して昼過ぎ

「つたく……何よ……こっちの気も知らないで……」

美琴は街中を歩いてきた。昨日の一件を引きずっているのか今だに怒りが収まっていないようだった。先程、昨日の怒りを晴らす為にバッテリーセンターに行ったのであるが、怒りは晴れなかった。

「もう帰ろう……」

美琴は他にうつぷんを晴らす方法を考えたが、特にいいアイデアが思いつかなかった為、寮に戻って寝ることにする。寝ていれば昨日のことを考えないでいるからである。

歩くこと20分。美琴は自分の寮にたどり着く。

「つたく……何で私がかんなに悩まされないといけないのよ……」

美琴はブツブツと文句を言いながらドアノブを捻って自分の部屋の扉を開ける。

「へっ!?!」

美琴は驚きの声を上げる。なぜならそこにはニット帽にマスクを装着し、ベッドの下を覗きこんでいたモレッツティがいた。

「あ、あんた一体どこから!?!」

「っ!?!」

美琴が叫ぶとモレッツティは慌てて出口が他にないかと辺りを見回し始める。

「観念なさい!?!」

「グフツ!?!」

モレッツティが慌てている隙について美琴はモレッツティを蹴り飛ばした。モレッツティは壁にぶつかり、もたれかかるような体制で倒れる。

「常盤台の寮に侵入するなんてどんだけ命知らずなのよ……」

美琴はモレッツティを見ながら呆れていた。常盤台中学は強能力者^{レベル3}以上の生徒しか入学することのできない超がつく程のお嬢様学校。そんなところに侵入しようなどと考える者など普通はいない。

「とにかく黒子に連絡しないと……つとその前にロープで体を縛っておかないと」

美琴はポケットから携帯を取り出して風紀委員^{ジャッジメント}に通報することにしようとする。しかし通報してる間に目覚めてしまったて何かあったらいけないと思い美琴は部屋からロープを見つけ出してモレッツティを拘束した。

「ん?」

美琴は違和感を感じる。なぜならモレッツティの瞳孔が開いていたからである。

「ま、まさか……」

嫌な予感がした美琴は慌ててモレッツティの心臓の辺りに耳を当てた。

「う、嘘……!?!」

美琴は驚きを隠せないでいた。なぜならモレッツティの心臓が止まっていたからである。泥棒が相手とはいえ人を殺してしまったことに罪を感じていた。美琴はすぐに心臓マッサージをする。しかしモレッツティの心臓が動くことはなかった。

「御坂。いるか?」

「な、何ですか!?!」

ドアの向こうから寮監の声がする。美琴は泥棒とはいえ人を殺してしまつて為、返事が上ずつてしまっていた。そして美琴はモレッツティをベッドの死角に隠す。

「実は少し前にこの寮に盗聴機の類いが仕掛けられてるのが判明してな。それで他に盗聴機がないか業者に来てもらつてるんだ」

「へ、へー……そうなんですか……」

「途中でお前の部屋に点検に来るかもしれないからな。失礼のないようにな」

そう言うと寮監は扉の前から去つていた。寮監の言葉を聞いた美琴は先程、慌ててベッドの下を調べる。そこには盗聴機探知機があった。盗聴機探知機を見つけた美琴はモレッツティが泥棒ではなく寮監の言った業者だということを理解する。

「やつちやつた……」

泥棒ではなく何の罪もない一般人を殺してしまった美琴は顔を真っ青にしながら絶望してしまっていた。いくら知らなかったこととはいえ、自分の勝手な早とちりで人を殺めてしまった為、罪悪感を感じてしまっていた。

「自首するしかないわね……」

美琴は自首を決意する。捕まるなら黒子がいいと思ったのかポケットの中から携帯を取り出した。

「自首はしなくていいですよ」

「いやー……いやー!!」

するとモレッツティが起き上がった。心臓が止まっていたはずのモレッツティが何事もなかったかのように起き上がったのを見て美琴は悲鳴を上げた。

「い、生き返った!? な、何で!? 心臓は完全に止まっていたのに!」

心臓が完全に止まっていたのにも関わらず、生きているモレッツティを見て美琴は涙目になりながら恐怖していた。

「俺が説明するぞ」

すると以前と同じように部屋の壁が扉のように開いた。壁の中にちよつとした部屋の中ができておりリボーンは椅子に座っていた。

「ま、まさかこれはあんたたちの仕業……?」

「そうだぞ」

「やつぱりか!!」

リボーンがタイミング良く登場したので美琴はこれまでの出来事がリボーンとモレッツティによって仕組みられたものだということを理解する。

「それで? この人は一体、何なのよ? マフィア関係の人だつてことはわかるけど……」

「こいつはボンゴレ特殊工作員にして殺され屋のモレッツティだぞ」

「殺され屋? 殺し屋の間違いじゃないの?」

「モレッツティは自分の意思で心臓を止めて仮死状態になれるアツディーオっていう体質の持ち主なんだ」

「何でそんなことができるのよ……」

心臓を自分の意思で止めることができるという普通の人間にできないことを平然とやってのけるモレッツティに驚きを隠せないでいた。

「いやー。驚かせてすいません。リボーンさんに私のアツディーオを見て面白い反応をする人がいると聞いたもので」

「私で遊ぶんじゃないわよ!!」

リボーンの私情によってこのようなドツキリにかけられたと知って美琴は怒りを露にする。

「ちなみに寮監も俺たちの協力者だ。ドツキリのことを話したら喜ん

で協力してくれたぞ」

「寮監……」

寮監が喜んで協力してくれたと知って、美琴は額に右手を当てながら呆れていた。

「さつき佐天にもこれをやったんだが、お前と同じように面白い反応してたぞ」

「私の友達に何してんのよ!」

「安心しろ。ツナにも中学の時にちゃんとこのドッキリはやったぞ」

「そういう問題じゃないわよ!!」

「ことごとくボケまくるリボーンに美琴はツツコミをいれまくる。

「んじやこれは回収させてもらいますね」

モレッティはベッドの下に仕掛けておいた盗聴機を発見する機械を回収する。

「それって本物よね?」

「本物だぞ。お前を騙すのに偽物じゃあバレルからな」

美琴が盗聴機探知機が本物であるかどうか確認するとリボーンはレオンを盗聴機に変形させた。それを見たモレッティは探知機のスイッチをいれる。すると探知機からハウリングが聞こえる。

「な。本物だろ?」

「ちよつと待って……その前に何でカメレオンが盗聴機になったのよ……?」

「レオンは形状記憶カメレオンつってな。一度、見た物になら何でも変形できるカメレオンなんだぞ」

「あんたちの世界の生態系ってどうなってるのよ……?」

レオンの詳細を知ってリボーンたちの世界が規格外な世界なんだということを知った美琴は改めて実感する。リボーンはレオンを元に戻すが、

「え……!?!」

美琴は驚く。レオンが元に戻ったのにも関わらず探知機からハウリングがしたからである。

「な、何で……!?! まさかあんたたちの仕業……!?!」

「違えぞ。流石にそこまではしてねえ」

美琴はリポーンたちが他に盗聴機を仕掛けているのではないかと疑うがリポーンはそれを否定する。

「どうやら第3者の仕業のようですね。お詫びも兼ねて私が調べましょう。こういうのは得意ですから」

「得意？」

「私はボンゴレの特殊工員であると同時にスパイとしても活動しているんです。死んだと思わせて敵地に侵入し盗聴機を仕掛けて情報を収集することもありますのでこういう手口は手に取るようにわかるんです」

「説得力があるわね……」

モレッティの言葉を聞いて美琴は頼もし過ぎて逆に引いてしまっていた。するとモレッティは探知機と自分の感を駆使して盗聴機を探し出す。すると1分もしない内に3つの盗聴機を発見する。

「これで全部ですね。にしても誰がこんなことを……心当たりはありますか？」

「おそらく……いや絶対にあいつね」

美琴は自分の部屋に誰にも気づかれないことなく盗聴機を仕掛けられる人物を1人だけ知っていた。美琴はその人物に話す為に携帯を取り出す。

ジャッジメント
風紀委員177支部

「にしても結局、学園都市第1位を倒したっていう無能力者^{レベル0}っていうのは誰なんですかね？」

「わかりませんわ」

初春と黒子は今、学園都市にて起こっている事件のことについて話

していた。現在学園都市ではある噂が流れていた。無能力者が学園都市の第1位を倒したという噂である。その噂が流れてからガラの悪い学生たちが学園都市第1位を倒したという学生を倒して名を上げようと考え、無能力者を片っ端から襲うという事件が多発しているのである。そのせいで風紀委員や警備員は大忙しなのである。

(そんなことよりも沢田さんですわ!! 私のお姉様に手を出すなんて!! 絶対に許せませんわ!!)

昨日、美琴はミサとツナのこと嫉妬しそのグチを溢していた。それを聞いた黒子は美琴がツナに好意を抱いていることを理解し嫉妬にしているのである。

すると

「あつ! お姉様ですわ!」

美琴から黒子の電話がかかって来る。美琴からの電話と知って黒子は表情をパアッと明るくさせる。

「もしもしお姉様。どうかされました?」

『ええ。ちよつとあんたに聞きたいことがあるの。実は部屋で面白い物を見つけたのよね。盗聴機を』

「なっ……!?!」

盗聴機という単語を聞いて黒子の顔色が真っ青になる。何を隠そう部屋に盗聴機を仕掛けたのは黒子だった。常盤台の寮に侵入しようなどと考える人はまずいない。そうなるに寮に入っても怪しまれず、自分の部屋の構造を理解し、自分に異常な好意を抱いている変態黒子しか美琴にはは考えられなかった。

「い、一体、誰がそんなことを……!?! 絶対に許しませんわね!! この黒子が犯人を捕まえてみせますわ!!」

黒子は冷静を装うが動揺を隠し切れず、声が震えてしまっていた。

『もう犯人はわかってるわ。ねえ黒子?』

「な、何のことですの……!?! なぜ黒子がそのようなことを……!?!」

『実はリボンに来てもらって指紋を調べてみたの。そしたら指紋が出てきたの。あんたのが』

「そ、そんな訳ありませんわ! 指紋が残らないようにちゃんと手袋

を……はっ！」

黒子は途中で気づいた。美琴に嵌められてしまったということに。だが気づいた時はすでに遅かった。

『認めたわね黒子』

「い、いや……今のは……!?!」

必死に誤魔化そうとする黒子であったが言い訳が見つからず何も言うことができなかった。

この後、学園都市に雷が降り注いだという。

標的（ターゲツト） 184 死の山

一方、その頃。ツナと佐天は。

「こ、ここって……」

ツナたちは森に来ていた。リボーンがツナと佐天に特別講師がいるという場所の地図を佐天に渡していた。地図に書いてある場所に着いた。この場所にツナは見覚えがあった。

「そのままかだぞー！ コラ！」

「グフツ！」

「ツナさん!？」

すると突如、ツナが蹴り飛ばされた。蹴り飛ばされたツナを見て佐天は驚きを隠せないでいた。

「久しぶりだな！ コラ！」

「コロネロ君!？」

ツナを蹴り飛ばしたのはコロネロだった。マフィアランドにいるはずのコロネロがここにいることに佐天は驚きを隠せないでいた。

「と、特別講師つてもしかしてコロネロ君なの……?」

「俺だけじゃねえけどな」

「え？ 他にもいるの?」

「まあな。それはこのデスマウンテンの試練を越えればわかるぞコラ」

「デス……マウンテン……!？」

「やっぱりー!!」

デスマウンテンという不吉な単語を聞いて佐天は驚きを隠せずにいた。ツナはデスマウンテンのことを知っていたのか両手を頭に乘せながら叫び声を上げる。

「デ、デスマウンテンって何なの!? もう単語からしてヤバい感じなのはわかるんだけどさ!？」

「デスマウンテンは100人に1人しか生きて帰ることのできないボ

ンゴレの秘密特訓場だ。ここはそのデスマウンテンとそっくりに作られてるんだぞコラ」

「な、何それー!?」

コロネロからデスマウンテンの詳細を説明する。デスマウンテンの恐ろしさを知って佐天は驚きの声を上げた。

「お前らの目的は俺たちがいるポイントまで辿り着くことだ。当然、俺たちの場所に辿り着くまで罠があるが自力で乗り越えろ。どうしても無理だと思ったらおもいつきり叫べ。その時は涙子のみ安全な場所まで運んでやるぜ。コラ!」

「何で佐天だけ!」

「甘ったれるじゃねえぜコラ!」

「ゴフツ!」

(コロネロ君もリボーン君並みのスパルタ……)

コロネロは再びツナを蹴り飛ばした。蹴り飛ばされるツナを見て佐天はリボーンに負けずとも劣らないスパルタな人間だということを理解する。

「お前にもイタリア人の血が流れてんだ。イタリア男ならそこはお前を護ってやるから俺だけを信じろぐらい言ってみろ! コラ!」

「い、いや……確かに初代はイタリア人で俺はその子孫だけ……俺はもうほとんど日本人だし……」

「男がいつまでもつべこべ言うんじゃねえぜコラ!」

「ゲフツ!」

(理不尽なところもリボーン君にそっくり……)

またもやツナはコロネロに蹴り飛ばされた。佐天はコロネロの教育の仕方がリボーンに似ているということを理解する。

「とにかくだ。これでお前らに伝えるべきことはちゃんと伝えたからな。それじゃ俺は先に目的地で待ってるからな。ちゃんと涙子のことを護ってやるんだぜ沢田。コラ!」

コロネロはそう告げると相棒の鷹ファルコに頭を捕まれてそのまま目的地まで飛び去って行くのだった。

「と、とりあえず行こうか……佐天……」

「だ、大丈夫ですか……？ 行けますか……？」

「行かないともつと酷い目に遭うし……行かないと……」

「……」

右頬を集中的に蹴られたツナは頬を右手で抑えながらそう言った。ツナの言葉を聞いた佐天は何も言えなくなってしまった。

2人は吊り橋を渡り、デスマウンテンの中へと入って行く。

「きゃっ！」

突如、突風が吹いて吊り橋がグラグラと揺れる。揺れる吊り橋のロープに捕まりながら佐天は悲鳴を上げてしまう。

「佐天！ 捕まって！」

「え……!？」

前にいたツナが佐天に向かって手を伸ばす。ツナの行動に佐天は驚きを隠せないでいた。だがすぐに佐天は手を伸ばしてツナの手を握った。

「このままゆっくり向こうまで渡るけど大丈夫？」

「は、はい!! だ、大丈夫です!!」

ツナは佐天の手を握った状態でここからさらに進めるかどうかを尋ねた。佐天は顔を赤くしながらも返事をする。

（えへへ……ツナさんと手を握っちゃった……!!）

偶然とはいえ想い人^{ツナ}の方から手を差し伸べてくれるという美味しい展開になった為、佐天はデスマウンテンの恐ろしさなど完全に忘れており、顔を赤らめながら心の中で喜んでしまっていた。棚からぼた餅とはまさしくこのことである。

（ミ、ミサと一緒に遊んだお陰でなんとか……）

そんなことを佐天が考えているとも知らずツナは昨日のことが脳

裏に浮かんでいた。昨日は移動の際、ミサと手を繋いだ状態にあった。その経験のお陰か全くではないがツナは動揺せずいられた。

100人に1人しか生きて帰ることのできないデスマウンテン。果たして2人は無事に帰ることができるのであろうか

標的（ターゲツト） 185 教官

デスマウンテンにて修行することとなったツナたち。最初はツナと手を繋げて柵からぼた餅状態になった佐天であったが……

「な、何で大岩が転がって来るのー!？」

「佐天!! 今は走ることに集中した方がいいよ!!」

現在2人は転がって来る大岩から必死に逃げ惑っていた。2人が走っている道は崖に囲まれた狭い道である為、横道に反れて逃げるという選択肢はないのである。

「佐天ー あれー!」

ツナが指を指した先には崖だった。そこには狭いスペースであるがなんとか2人が入れるだけの隙間があった。2人は咄嗟に隙間に飛び込んだ。2人が飛び込んだ後、大岩が通過し事なきを得た。

と思われたが

（あああ!?! ツナさんと密着してる!?!）

佐天は顔を真っ赤にしながら動揺していた。現在、佐天は隙間の奥の方でツナと零距离で密着している状態になってしまっており、大岩を回避して安堵するどころではなくなっていた。

「ご、ごめん!! 佐天!!」

佐天と密着していると知ってツナは顔を赤くしながら慌てて隙間から離れた。ここから2人は崖のゾーンを抜ける。崖のゾーンを抜けると今度は草木が1本も生えていない広野に辿り着く。

「何で空から手榴弾!？」

「どうなってるのー!?!」

広野に辿り着いた瞬間、ツナと佐天の頭上から手榴弾の雨が降り注ぐ。遮蔽物がない開けた広野である為、先程のような逃げる場所がないので走るしかなかったのである。

「し、死ぬかと思った……」

爆発エリアを突破した2人は爆発から逃げ切ることに成功し安堵していた。現在2人がいるのは草むらが生い茂るエリアである。

「とにかくここで一息……」

この草むらエリアであれば何も無いだろうと思ひ佐天は腰を下ろした。

その時だった

ドドドドドドドド！

「な、何か聞こえない佐天……?」

「聞こえますね……というかこっちに近づいて来てません……?」

遠くから轟音が響き渡っているのを2人は感知する。そしてその轟音が自分たちのいる場所へと近づいて来ているということも感知する。

そして轟音の正体が判明する。

「動物の群れ!」

轟音の正体は大量の動物だった。野良犬、熊、猪、狼、羊、ヤギなどの大量の動物が2人の方に向かって来る。

「逃げるよ佐天!」

「は、はい!」

こうして2人はまともに休息を取ることできないまま、全速力で走り出した。

「な、なんとか撒けましたね……」

「だね……」

全速力で逃げること15分。佐天とツナは動物の群れから逃げ切ることに成功する。2人ともリボーンの生徒である為、これだけ走ってもなお息を切らしてはいなかった。ここからさらなる罠が2人を襲ってくる。

「ピ、ピラニア!」

川を渡ろうと岩の上をジャンプして渡ろうとした2人であったが、なぜか川にピラニアがいたり。

「水……!」

下り坂を下っていると後ろから大量の水が流れ込んできたり。

「地雷!」

普通に歩いていたら急に地面が爆発し、危うく地雷の餌食になりか

けたりしかけた。

「こ、これがデスマウンテン……常識が通じない……」

「前に来た時はは完全に遭難したあげく、火に囲まれてその後、巨大化したエンツイオが襲ってきたしたしね……」

佐天はデスマウンテンの恐ろしさを身に染みる。ツナは中学の時にデスマウンテンに来た時のことが脳裏に浮かんでいた。2人がそんなことを言っていると今度は森のエリアに入る。

「きゃあ!!」

「うわあ!!」

2人が森の中に入って少しすると地面から拘束用の網が飛び出し2人は網の中に捕らわれてしまう。網の中に捕らわれた2人は再び密着してしまう。

さらに

「っ!!」

「ツ、ツナさん……!? そこは……!?」

ツナと佐天は顔を真っ赤にしていた。なぜならツナの顔が佐天の胸によっておもいつきり押し潰されてしまっていたのだから。

「ダメです……!? そんなに動いたら……あんっ!!」

ツナはなんとか佐天の胸から抜け出そうと動く。しかし抜け出せないどころかさらに佐天を刺激する形になってしまう。そのせいで佐天はいやらしい声が出ってしまった。

「いっ!!」

「きゃ!!」

しばらく暴れたせいで網を支えていた紐が切れてツナと佐天は地面に落下する。だがそのお陰で網が開いて脱出することができた。

「ご、ごめん……!! 佐天……!?」

「い、いえ……!?」

網から抜け出せたのはよかったが、先程の出来事のせいでお互い顔を赤くし、視線を反らしてしまった。この後、気まづくなった2人はまともに互いの顔を見るこちができないまま、デスマウンテンを進んで行く。

そして

「お。ついに来たかコラ！」

ついにコロネロのいる地点に辿り着いた。そこにはコロネロと青色の髪をした高身長的女性が立っていた。

「ラル!?」

「久しぶりだな。沢田」

ツナはこの女性のことを知っていた。この女性の名はラル・ミルチ。ボンゴレ門外顧問組織。C H D E Fの1員であり、アルコバレーノのなり損ないだった人物だった女性である。

「ラルって……」

佐天はラルという単語を聞いて佐天は思い出す。目の前にいる女性がコロネロが前に言っていた人物だということを読み出す。

「そうだぜコラ！ こいつが前に言った俺のかつての上官のラル・ミルチだ」

「やっぱり！ 教官と生徒の関係でありながら禁断の恋に落ちたっていうあの！」

「ぶっ!!」

佐天の言葉を聞いた途端、ラルは顔を真っ赤にしながらかおもいつきり吹いてしまった。まさか佐天がこのことについて知っているとは微塵も思っていなかった為、完全に油断していたのである。

「ゴ、コロネロ貴様!! 何を変なことを教えている!!」

「相変わらず可愛いなお前は」

「やかましい!!」

ラルは自分たちの過去のバラしたことを咎める。だが当の本人は反省するどころかラルを褒めていた。コロネロの発言を聞いてラルはさらに顔を赤くする。

「俺はラル・ミルチ……お前が家光の言っていたリボーンのもう1人の生徒か?」

「は、はい。佐天涙子といいます」

初対面でいきなり醜態を晒してしまったラルであったが、何事もなかったかのように自己紹介する。ラルの心中を察したのか佐天は先

程のことについて言及せず自己紹介した。

「今日は俺がお前を鍛えてやる。俺は甘くはないぞ。覚悟しておけ」

「は、はい！」

「沢田は俺が鍛えてやるからな覚悟しておけよコラ！」

「ひいひいひい！」

標的（ターゲット）186 佐天 VS 元軍人（ラル・ミルチ）

デスマウンテンを乗り越えコロネロとラルの元に辿り着くことに成功したツナと佐天は2人の修行を受ける。

「死炎速！」

「甘い！」

「ぐっ!？」

ラルは超スピードで自分の元に向かって来る佐天の攻撃をしゃがんで躲すと腹部に肘鉄を叩き込んだ。さらに上段蹴りにて佐天を上空へ蹴り飛ばした。

「機動力は申し分ないが真っ直ぐにしか飛ばない分、軌道が読みやすい！ 使うタイミングを選べ！」

するとラルは腕に装備していたガントレットを標準を佐天に定める。そしてガントレットから佐天に向かって霧の炎を纏った弾丸が佐天に向かって行く。佐天は弾丸を炎で打ち落とすと同時にラルに突っ込んでいく。

「っ!？」

だが佐天はラルを通り過ぎ、地面に着陸する。真正面からの攻撃と見せかけたフェイントにラルは驚きを隠せないでいた。

「晴静拳！」

佐天は振り向くと同時に晴の炎と晴の活性で強化した雨属性の炎を纏った拳を繰り出す。晴の炎で強化した雨の炎で相手を鎮静化し、本命である晴の炎を相手にぶつける2段構えの技である。美琴の超電磁砲レールガンを防いだ時の佐天自身が攻撃として昇華させたのである。

「な……!？」

だが佐天の拳はラルのリングが放たれた雨属性の炎によって防がれてしまう。ラルが雨属性の使ったことに佐天は驚きを隠せないで

いた。佐天は咄嗟にラルから距離を取る。
が、

「しまっ……!?!」

飛び引いた瞬間にラルを足をかけられて落下して地面に落下する。地面に落下した衝撃で一瞬、目を瞑ってしまった佐天。

「っ!?!」

再び目を開くとラルがガントレットの標準に自分に向けていた。ラルは容赦なく弾丸を放つ。

(軌道をずらされたか……)

(危なかった……)

だが弾丸は上空に飛んで行った。佐天は咄嗟にラルのガントレットに向かつて蹴りを繰り出して弾丸の軌道を上へ反らしたのである。

「死炎光線!」

佐天は右手の人差し指をラルに向けると指先から炎のレーザーを放った。ラルは上半身を反らしてレーザーを躲した。佐天はラルがレーザーを躲した隙に炎を逆噴射させてその場から離れる。

(っ、強い……詳しいことは知らないけど本来だったらこの人もリボン君と同じアルコバレーノになる人だったのよね……)

佐天はコロネロが前にラルがアルコバレーノになるはずだったと言っていたことを思い出す。

「晴の活性で雨属性の炎を強化するとは面白い発想だが俺が雨属性の炎を持ってないと思えば油断したな」

「……」

ラルの言う通り佐天はフェイントに加えあらゆる炎を鎮静化できる晴静拳を放ったことで完璧に決まったと思いついてしまった。ラルの言い分に佐天は何も言うことができないうでいた。

「沢田と同じ力を持ってても沢田には遠くに及ばん」

「わかってる。だから越えるのよツナを」

「沢田を越えるだど? 本気か?」

「本気よ」

ラルは佐天にツナを越えるという覚悟が本当なのかどうか確かめ

る。佐天は即答で答える。

「ふっ。いいだろう」

ラルは佐天のツナの覚悟が本物だということを理解すると口元を緩ませる。そして戦闘体制を取る。

「コルイ。形態変化」
カンビオ・フォルマ

佐天がそう言うのと晴のリングが輝き始める。そして佐天の右手に木製の三節棍が握られる。

ランデットロ・セジオーネ・トレ・セレニタ
「晴の三節棍」

「どこからでもかかってこい」

ラルがそう言うのと佐天は左手を後ろに下げると炎を逆噴射させて突っ込んで行く。ラルはガントレットから弾丸を放った。

（弾丸が……!?!）

すると途中で弾丸が増える。急に弾丸が増えたことに驚きを隠せないでいた佐天であったが、三節棍の先端を回転させて弾丸を防いでいく。三節棍によって全ての弾丸は爆破していく。佐天は勢いを殺すことなくラルに向かって行く。

「はあー!」

佐天は1回転した後三節棍をラルの顔面目掛けて放った。ラルは回転によって強化された三節棍を左腕に装備しているガントレットで防ぐ。

「っ!?!」

だが佐天の右手にあった三節棍はどこにもなかった為、ラルは驚きを隠せないでいた。

「時雨蒼燕流。攻式五の型。五月雨」

佐天は攻撃のタイミングをズラすろラルの脇腹目掛けて三節棍を放った。

「っ!?!」

だが三節棍が決まる前にラルは佐天の左手首を掴んで五月雨を無効化する。五月雨が無効化されたことに佐天は驚きを隠せないでいた。

「ゴハッ!?!」

ラルはそのまま佐天を引き寄せると佐天の腹部に左足の膝蹴りを喰らわせる。

「どうした？ もう終わりか？」

「ガハッ!？」

さらに左腕で肘鉄を佐天の額に喰らわせる。額に肘鉄を喰らった佐天は反撃に出ようとするが佐天の目の前にラルの姿はどこにもなかった。

(上！)

上から殺気を感じて佐天は上空を見る。そこには右足を高く上げてかかと落としを喰らわせようとしているラルがいた。佐天は咄嗟に三節棍の両端を持って三節棍の真ん中の棍でラルの蹴りを防ぐ体勢を取る。

「判断を誤ったな」

「っ!？」

だがラルのかかと落としは三節棍にぶつかることはなかった。ラルは高々に上げていた足を振り降ろしはしたが三節棍に当たるかどうかというギリギリのところまで振り降ろすというフェイントを佐天にかけたのである。まんまと嵌められた佐天は三節棍による防御体勢を取らざる終えなくなってしまったのである。

「終わりだ」

「ガハッ!？」

ラルは防御体勢を取って腹部ががら空きの佐天に向かって零距离で弾丸を放った。零距离射撃をモロに喰らった佐天は仰向けの状態で倒れる。そして額に灯っていた炎が消え、Xグロブが毛糸の手袋の状態に戻ってしまい完全に超^{ハイパー}死ぬ気モードが解除されてしま

う。

「ううっ……」

「零距离で俺の弾丸^{たま}を喰らって意識があるか。リボーンの生徒だけあるな」

あれだけ痛みつけられてもなお佐天が意識を失わないでいることにラルは感心していた。

「だが腕はまだまだ未熟だ。フェイントをかけるのはいいが破られた時のことを想定しなかったり、逆にフェイントをかけられたり。この程度で沢田を越えるなどとよく言えるな」

そう言うところでは倒れている佐天に近づくとラルは左手で佐天の胸ぐらを掴むとそのまま佐天を持ち上げた。

「いつまでそこで寝ている!! さっさと立たんか馬鹿者が!!」

(お、鬼過ぎる……)

するとラルは右手で佐天に往復ビンタを喰らわせる。あまりにもスパルタ過ぎるラルに佐天は往復ビンタを喰らいながら佐天はラルの恐ろしさを体感するのであった。

こうして佐天はトラウマを植えつけられるのであった。

標的（ターゲツト） 187 ツンデレ教官

その後もラルとのスパークリングが続いた。そして3時間後。ようやくラルとのスパークリングが終了する。

「し、死ぬかと思った……」

大の字になって地面に寝転ぶ佐天。体中から覇気はなくなり死んだような目をしていた。

「どうやらみっちりとラルにしごかれたようだな佐天」

「リボーン君……?」

学園都市から帰って来たリボーンが佐天の顔を覗き込むように見下げる。

「リボーン。お前はこういう教育している。ちよつとしごいただけでこのザマだぞ。お前の教育は甘いんじゃないのか?」

「そういうお前こそ随分と熱心だったじゃねえか。いつもならできる訳がない。見込みは0だ。立ち去れつて言うお前が。佐天がツナを越えたいと知って軍人時代の血が騒いだか?」

「そんな訳ないだろ。こいつがあまりにも軟弱だったからしごいただけのことだ」

「そうか。お前エロい顔してたぞ。佐天と戦っている間ずつとな」

「な!?! 何を言ってるリボーン貴様!?!」

「エ、エロいって……!?!」

リボーン of の言葉を聞いてラルは動揺を隠せないでいた。ラルはエロい顔していると知って佐天は顔を真っ赤にする。

「教官と生徒の禁断の恋だけじゃ飽き足らず、女同士の禁断の恋まで……!?!」

「ち、違う!! リボーン of の言葉に惑わされるな!!」

エロい顔をしていたと聞いて佐天はラルが自分のことを恋愛対象として見ているのではないかと思ひ顔を真っ赤にしながら誤解していた。ラルは佐天の勘違いを知って必死に弁明する。

「ご、ごめんなさい……!! わ、私には……その……!!す、好きな人がい

るので……!! ラルさんの気持ちには応えられないっていうか……!!」

「だから誤解だ!!」

「どうぞ佐天。ラルはコロネロ一筋だからな」

「貴様はいい加減にしろ!!」

今だに自分のことを好きだと思っている勘違いしたままの佐天にラルは弁明する。しかしリボーンの言葉によってさらにラルは顔を赤くする。

「随分と盛り上がってるなコラ!」

リボーンがラルをいじっていると修行を終えたコロネロと佐天と同じくボロボロになっているツナがやって来た。

「来てやったぞへボライバル」

「待ちくたびれたぞクソライバル」

そしてリボーンとコロネロは互いに挨拶代わりに頭突きを交わす。

「っ!?」

一方でツナと佐天は顔を赤くし、視線を反らしていた。先程の罨トラップの件が尾を引いているのである。

「どうした? 何かあったのかツナ?」

「い、いや……!!」

「佐天の裸でも見たか?」

「ぶっ!!」

「ちよつとリボーン君!!」

急にセクハラ紛いのことをリボーンが言った為、ツナは顔を真っ赤し吹き出し、佐天は顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「何だ違うのか。未来でラルのエロい体を想像してた時と同じ反応してたしからってつきりそうだと思ったんだがな」

「していないから!!」

「でもラルの裸を見たのは事実だろ」

「そ、それは……!!」

「はい?」

リボーンという言葉にツナは顔を赤くしたまま何も言い返すことがで

きなかった。ツナは未来のラルが水浴びしていると、獄寺と共に見てしまったことがあるのである。その話を聞いた佐天の心中は穏やかではなかった。

「ツナさん？ それはどういうことですか？」

「ち、違うよ佐天!! あれは事故で別にやましい気持ちがあつた訳じゃあないから!!」

「へーーーーー?」

「ひいひいひい!!」

「何だこの状況は……?」

「修羅場つてやつだ」

佐天は虚ろな瞳でツナの顔を見ながら尋問する。佐天の顔を見てツナは恐怖のあまり悲鳴を上げてしまう。佐天はツナがラルの裸を見たということに嫉妬するあまり綱の中で密着した時のことなどに忘れていた。ラルはこの状況を見てラルはなんとも言えない気持ちになり、リボンだけはこの状況を楽しんでいた。

「そーいやお前らあれから仲直りしたようだが結局、結婚式の件はどうなつたんだ？」

「結婚式!? 婚約してるの!？」

「ああ。2年前に俺たちの元に招待状が届いたんだがこいつらが喧嘩しちまったから結婚は延期になつちまつたんだ。それから全然、結婚のことについて何も聞いてなかったからどうなのかと思つてな」

「俺はいつでもラルと結婚する気満々なんだが結婚の話をしようとするラルは口を聞いてくれなくなつてな」

「相変わらずのツンデレだな」

「やかましい!!」

「まあ出会つた頃に比べたらマシだぜコラ」

「出会つた頃?」

「俺が最初ラルと出会つた頃、3カ月ほど口も聞いてくれなくてな」

「それはお前が俺にしつこくナンパしてきたからだ!!」

「ナンパつて……」

佐天は2人が相思相愛になつたきっかけは戦場にて何かあつたの

だと推測していたが、まさかナンパだとは思ってもいなかったので複雑な気持ちになっていった。

「まあその仕草にも惚れたんだがな」

「へー。それでコロネロ君はラルさんのどういうところが好きなの？」

「お、おい!!」

佐天はラルとコロネロの恋愛話が気になるのか興味津々な顔でコロネロに尋ねた。佐天がこの話に興味を持ったことにラルは顔を赤くしながら焦っていた。

「勿論、全部に惚れてるぜコラ!」

「きゃー……!!」

「っ……!?!」

コロネロは恥ずかしがることもなく堂々と言い切った。佐天はコロネロの発言を聞いて黄色い歓声を上げた。ラルは黙ったまま顔を赤くしていた。

「じゃ、じゃあ! 今までで一番、ラルさんにときめいた瞬間は!?!」

(なんかめっちゃくちゃ興味持ち始めてる!?!)

先程よりも増々、興味津々な顔でコロネロに質問する佐天。そんな佐天の変わりようを見てツナは驚きを隠せないでいた。

「それはラルが敵の罠に……」

ズガアン!

コロネロが佐天の質問に答えようとした矢先、それを遮るかのよう銃声が響き渡る。するとコロネロの前に小さなクレーターができていた。

「それ以上、口を開くな!! それ以上、おかしなことを口走れば撃つ!!」

(いや! もう撃ってるよ!)

ラルが顔を赤くし腰に装備していたショットガンを向けながら警告する。撃った後に警告するラルを見てツナは心の中でツツコミをいれる。

「そんじゃその話は俺の方から話してやるぞ」

「おいリボーン。これは俺が言わねえと意味がないだろコラ！」

「貴様らああああ!!」

自分の警告を無視して余計なことを喋ろうとするリボーンとコロネロを見てラルは怒りを爆発させる。

「そこを動くな貴様ら!! その腐った根性を叩き直してやる!!」

ラルが叫ぶとショットガンの標準をコロネロとリボーンに向けてショットガンを乱射させる。コロネロとリボーンは軽々と躲していく。

「腕を上げたじゃねえかラル」

「俺の惚れた女だぞ。これくらい当然だぜコラ！」

リボーンとコロネロは軽々と躲していくどころか軽口を叩く余裕まであった。

「根性を叩き直すだけでは足りんようだな……だったら貴様らまとめて地獄に送ってやる!!」

(あ、相変わらず怖え……)

(ラルさんを怒らせるような真似だけは絶対に止めよう……)

軽口を叩くリボーンとコロネロを見てラルの怒りが頂点に達し死ぬ気の炎を纏った弾丸を連射していく。ツナはラルの恐ろしさを改めて理解し、佐天は心の中でラルを怒らせてはならないと誓った。

こうしてデスマウンテンでの修行は終了した。

標的（ターゲツト） 188 ランキング

デスマウンテンでの修行を終えた次の日。8月27日。今日も修行を終えて家に帰宅するツナと佐天。

「ただいまー」

「お帰りツナ兄、涙子姉」

ツナと佐天がただいまと言いながら玄関に入るとフウ太がツナと佐天と迎えた。その後、晩御飯を食べる為に3人は台所へ向かい食事を始める。

（そういえば今さらだけどフウ太君って何者なんだろう？ 普通の男の子にしか見えないんだよね）

佐天は食事をしながら晩御飯を食べているフウ太を見てそんなことを思っていた。

（そういえば大きい本に何かを書いたり、見てたりはしてたよねー……あれって何してるんだろう？）

佐天はフウ太がリビングで本に何かを書いたり、見たりしているの光景が脳裏に浮かんでいた。食事をしている間、佐天はフウ太が何者なのか考えたが結局のところわからず食事を終えてしまう。

「ねえリボン君。聞きたいことがあるんだけどいい？」

「何だ佐天？」

食事が終わってフウ太が風呂に入っているのを見て佐天はリボンにフウ太のことを直接、聞くことに決める。

「ずっと思ってたんだけどフウ太君って何者なの？」

「何だ突然？」

「うん。ランボ君たちのことは知ってるけどフウ太君のことだけ知らないし。なんか普通の男の子にしか見えないし」

ランボは元ボヴィーノファミリーの一員であり現在はボンゴレに所属。イーピンとビアンキは殺し屋^{ヒットマン}。リボンは言わずもがなであ

る。なのにフウ太のことだけは佐天は何も知らなかった。

「まあ言葉で説明するよりも実際に見た方がいいかもな」

「見る?」

「はー。さっぱりしたー」

「お。噂をすればだな」

リボーンの言っていることの意味がわからず佐天は疑問符を浮かべる。フウ太の話をしているとタイミング良くフウ太が風呂から上がってきた。

「フウ太。佐天にお前の力を見せてやりたいんだがいいか?」

「涙子姉に? 別にいいよ」

「そうか。なら移動するぞ」

フウ太の力を見せる為に移動する佐天たち。

「つー訳だぞ」

「理由はわかったけど何で俺の部屋なんだよ……」

やって来たのはツナの部屋だった。リボーンから経緯を聞いてなぜ自分の部屋にフウ太を連れて来たのか理解するが、なぜ自分の部屋で力を見せる必要があるのかはわからずにいた。しかしリボーンに逆らえないツナは承諾せざるをえなかった。

「そんじゃ始めてくれフウ太」

「うん」

リボーンがそう言うのとフウ太は天井を見上げてぶつぶつと呟き始める。するとツナの部屋にあった軽い者が次々に浮かんでいく。

「念動力!^{サイコキネシス}!」

急に周囲の物が浮かんだのを見て佐天は驚きの声を上げると同時

にフウ太が念動使用サイコキネシストいなのではないかと推測する。

「涙子姉の好きな趣味ランキング第1位は都市伝説や噂話の追及」

「ええ!?! 何で知ってるの!?!」

「教えたことのない自分の趣味をフウ太が知っていることに佐天は驚きを隠せないでいた。」

「フウ太はランキングを作らせたなら右に出る者はいないというランキングフウ太をつていう情報屋なんだぞ」

「フウ太君が……?」

フウ太が情報屋だと知って佐天は信じられないでいた。フウ太はかつてランキング能力を失ったが去年の今頃に能力が戻ったのである。

「ああ。そしてフウ太が作るランキングの的中率は100%なんだ」「100%!?!」

的中率100%のランキングをフウ太が作れると知って佐天は驚きの声を上げた。

(そういえば歓迎会の時……)

『ちなみに隼人兄の恐怖するものランキングでビアンキ姉はぶつちぎりの1位なんだよ』

佐天は自分の歓迎会を開いてもらった時にフウ太の発言を思い出す。あの時にフウ太がランキングの話をしていたことを。

「それだけにマフィアの戦略データの価値が高く最も多くのランキングを収録するフウ太のランキングブックを手に入れば世界も取れると言われているんだ」

「世界!?! あの本にそんなに価値があるの!?!」

まさかあの本がそこまでの価値があるとは思ってもしなかった為、佐天は驚きの声を上げる。今の佐天にはあの本は偉人が残したものの凄い価値のある本にしか見えなくなつた。

「というか何で物が浮いて……」

「フウ太はランキング能力を使う際に自分の脳をレッドゾーンにまで追い込んでランキングするんだ。その時にフウ太の体内に凝縮されたエネルギーが磁場を狂わせてフウ太の周りの引力を無効化させる

んだ」

「つ、つまりどういうこと……?」

「遠い宇宙のランキングの星と交信してるっていう説もあるぞ」

「わかるけど信じられないよ!!」

(やっぱりそういう反応するよなー……)

リボーンによるフウ太の能力の詳細を知って佐天はあまりもおかし過ぎて脳が処理できずにいた。佐天の言葉を聞いて自分もフウ太の能力を初めて見た時に同じ反応をしていたことを思い出す。

「ちなみに涙子姉は今年のルーキーマファイア35421人の中で強さが1番だよ」

「何で佐天がマファイア認定されてるの!？」

「流石、俺の生徒だな。よかったな佐天」

「あんまり嬉しくないんだと……」

1位であることは名誉なことなのではあるのだが内容が内容である為、佐天は素直に喜ぶことはできなかった。

「んじやフウ太。次はツナが佐天のどんところが好きかランキングしてくれ」

「わかった」

「ええ!? ちょっと!？」

リボーンの言葉を聞いてフウ太はランキングを開始する。佐天は急にリボーンが変なことを言い出した為、慌ててしまっていた。ツナは友達として好きだと意味だと捕らえていない為、全然動揺していなかった。

「ツナ兄が涙子姉のどんところが好きかランキング第1位は……明るくて優しいところ」

「明るくて優しい……」

「うん。第2位は笑顔が素敵なところ。第3位は女子力が高いところだね」

「えへへ……」

フウ太のランキングを聞いてツナが自分のことをそんな風に思っていたのだと知って佐天は嬉しさのあまり顔がニヤけまくっていた。

(フ、フウ太君の能力なら……ツナさんのことが好きな人が……!?)

フウ太の力を使えばツナが誰が好きなかわかるということ。佐天は理解する。最悪ツナに好きな人がいなくても誰が一番、可能性があるのかもわかる。

(で、でも……)

しかしツナに好きな人がいるのだと知ればショックである為、佐天にフウ太にランキングをお願いしようか迷ってしまっていた。

「それじゃ次は佐天の愛してる人ランキングでもいくか」

「了解」

「えええええ!? ちょっと待ってフウ太君!!」

「ちよつ!? リボーンそれはダメだろ!!」

リボーンの言葉を聞いて佐天とツナはランキングを止めさせようとフウ太に近づいた。しかしフウ太の能力の影響によってツナと佐天は空中に浮かんでしまう。

「涙子姉の愛してるランキング第1位は……」

(ああああああ!! 私がツナさんのことが好きだってことだってことがツナさんにバレちゃう!!)

空中に浮かんだ状態で佐天は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤し両手で顔を覆った。

「コルイとクイーン」

「え……!?!」

しかしフウ太口からツナの名前が出るどころか、なぜか相棒であるコルイとクイーンが出て来た。佐天はツナの名前が出なかったことに驚きを隠せないでいた。

(た、確かにコルイとクイーンは好きだけど……私ってコルイとクイーンのことそんなに好きだったの……)

自分がコルイとクイーンをツナよりも好きだという事実佐天は困惑していた。

「いっー」

「きゃっー」

するとフウ太の能力の影響がなくなりツナと佐天は床に落ちてし

まう。そしてフウ太はダルそうな表情をしながら床に横たわる。

「ど、どうしたのフウ太君!？」

「僕、雨に弱いんだ……」

「雨に?」

「うん……雨が降るとランキング能力がデタラメになっちゃうんだ……」

「デタラメって……」

デタラメという言葉聞いて佐天は理解する。先程のランキングは間違いであるということに。

「雨が降ると能力が乱れるのはランキング星の交信が乱れるからって
いう説があるんだ」

「もう説はいいから!!」

佐天はリボーンの言葉にツツコミをいれる。しかし内心ではツナに自分がツナのこと好きなことがバレないで安堵する佐天であった。

標的（ターゲツト） 189 予知巫女

佐天が初めてフウ太のランキング能力を見た次の日。 8月28日。

「おはよう佐天」

「おはようございますツナさん」

いつもと同じように同じ時間に目覚めて、朝の挨拶を交わすツナと佐天。

「起きたかお前ら」

2人が起きたと同時にツナの部屋にリボーンが入って来る。

「今日は客が来てるからな。早く着替えて降りてこい」

そうリボーンが言い残すとリボーンはツナの部屋から去って、1階へ降りて行く。

「客って誰のことですか？」

「さあ？ 何も聞いてないけど……」

リボーンの言う客をツナなら知っているのではないかと思つた佐天はツナに尋ねるがツナ自身もリボーンの言う客がわからないでいた。2人は何もわからないまま寝間着から着替えると1階へ降りる。

「お久しぶりです沢田さん」

「ユニ!？」

2人が台所へ向かうと黒髪のおかつぱ尻尾髪に左頬に花卉天のマークが入った少女がいた。ツナはこの人物の名はユニ。ジツリヨネロファミリーの現ボスであり元アルコバレーノの1人だった人物である。

（ユニって……）

ユニの名前を聞いて佐天は思い出す。リボーンと初めて出会つた時に出て来た名前であり、ツナの記憶に出て来て未来にて死んでしまった少女だということを。

「初めまして。私、ジツリヨネロファミリーのボスのユニといいます。よろしくお願ひします佐天涙子さん」

「え……!?!? 何で私の名前を……!?!？」

記憶では見たことがあるものの会うのは今日が初めてたのにも関わらずユニが自分の名前を知っていることに驚きを隠せないでいた。

(そっか！ 予知能力！)

佐天はユニが予知能力を持っていることを思い出し、ユニが自分の名前を知っている理由を理解する。

(というか本当にマフィアのボスだったんだ……)

前にリボーンからユニがボスだということは聞いていたが、本当にマフィアのボスだとなのだということを知って佐天は驚きを隠せないでいた。

「それでユニが何で日本に？」

「しばらく日本で休暇を取ろうと思ひまして。ファミリー全員で日本に遊びに来たんです」

「つー訳だ。佐天、案内してやれ」

「え!? 私が!？」

「もう大体、並盛この町の地理は頭に入ってるんだろ」

「ま、まあ……」

もう1カ月以上も並盛にいる上、修行で町を走ったりすることもあるので佐天は並盛の地理を全く頭に入っていない訳ではない為、無理ではなかった。

「勿論お前は修行だがな」

「はいはい……」

ツナはリボーンがこう言ってくるのを予想していたのか、投げやりな返事をした。

リボーンの命令で佐天はユニを案内することになった。2人は町

の中を歩く。

「すみません。案内させてしまつて」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

ユニは自分よりも年下であるということとはわかっているのだがジツリヨネロファミリーのボスという肩書きのせいかなぜか佐天は敬語になってしまつていた。

「別に私がジツリヨネロファミリーのボスだとしても敬語である必要はありませんよ」

「い、いや……そうなんです……そうなか……」

敬語で話す必要はないとは言われるが、どうしても敬語になつてしまふのである。

(とういか……)

リボンとの修行で佐天は強くなつたせいか先程から複数の視線が自分たちに向けられていることに気づけるようになっていた。周囲を見回すと一般人に成り済ました人間がチラホラといた。

「すみません。護衛は必要ないと言つたのですが……」

「まあそれは仕方ないとうか……」

佐天の行動からユニは佐天の考えているということ推測した。いきなりそう言われてもはいそうですと云つてボスの護衛を離れられる訳がないとうことを佐天は理解していた。

「とりあえず喫茶店でも入りま……ろうか？」

佐天の提案によつて2人は喫茶店に入ることにする。

(とういかこんな幼い子がボスなんて……)

佐天はこんな幼い少女がマフィアのボスだということが今だに信じられないでいた。

「私は先代のボス……母の子供なので私がジツリヨネロファミリーのボスになることになったんです」

「へ……!?!」

なぜか自分の考えていることをユニが言い当てられたので佐天は驚きを隠せないでいた。

「で、でも何でユニちゃんがボスに？　いくら先代の子供といつてもまだユニちゃんは……」

いくら正当後継者とはいえこんなにも幼い少女がボスの座についている理由が佐天にはわからなかった。

「私の母はすでに他界しているんです。だから私がボスの座を後継することになったんです」

「そう……なんだ……」

「元々、私の一族は短命。長く生きられない一族なんです」

「長く生きられないって……そんな……」

ユニが短命という宿命を決定づけられた一族だということを知って、佐天は悲しい気持ちになってしまっていた。

「ですが沢田さんがその運命は変えてくれたんです」

「ツナさんが？」

「はい。本来であれば私は2年前に死ぬ運命にありました。そして長く生きられるようにしてくれた」

「え……!?!」

佐天は2年前と死の運命という単語を聞いて、あることが浮かんでいた。

「もしかしてユニちゃんって……アルコバレーノだったの……?」

「知っていたのですか」

「嘘……!?!」

ユニがアルコバレーノの1人であったと知って佐天は驚きを隠せないでいた。

今語られるユニの秘密。

標的（ターゲツト） 190 予言

ユニは佐天にアルコバレーノだった時のことを語り始める。

「私はかつてアルコバレーノの1人でした」

「で、でも私……アルコバレーノの名前は全員聞いたけどそこにユニちゃんの名前は……」

リボーンからアルコバレーノの秘密を聞いた際にユニの名前がなかったことを思い出す。

「それにユニちゃんは赤ん坊じゃないし……」

アルコバレーノは全員、赤ん坊の姿をしている。だがユニだけは他のアルコバレーノと違い赤ん坊の姿ではない。だからユニがアルコバレーノだということが信じられないでいた。

「アルコバレーノの中にルーチェという名前が出てきませんでしたか？」

「確か予知能力を持つ巫女^{シャーマン}って……あつー！」

佐天はリボーンの話の思い出すと同時に気づく。ルーチェとユニが同じ力を持っているということに。

「元々、私はアルコバレーノではなく祖母がアルコバレーノだったんです。ですがアルコバレーノの天空は長く生きられない。だから天空のアルコバレーノが死んだ際にはその血縁者がアルコバレーノになるのです」

「じゃあお母さんが亡くなったのって……」

「それは少し違います」

佐天はユニの母が亡くなった原因はルーチェと同じく短命によるものだと思った。しかし佐天の予想は外れておりユニは首を横に振りながら否定した。

「私の母であるアリアは予知で虹の代理戦争が起こることを知っていました。そして虹の代理戦争で優勝すれば私が長生きできると知った母は私を長生きさせる為に身を引いたのです」

「そんな……虹の代理戦争で優勝しても呪いは解けないのに……」

自分の娘の為に自分を犠牲にしたということを知り佐天は悲しい気持ちになってしまっていた。しかも優勝したとしても呪いが解けないことを知っている為、余計に悲しくなってしまった。

「それでも沢田さんのお陰で私たち8人の命は救われ長生きできるようになったんです」

「8人？ アルコバレーノは7人じゃないの？」

「本来であれば雨のアルコバレーノはラルさんという方がなるはずだったんです」

「でもコロネロ君がラルさんを庇ってコロネロ君がアルコバレーノになったんじゃないの？」

「はい。しかし完全には庇いきれずラルさんも半分だけ呪いにかかってしまい中途半端な形でアルコバレーノになってしまったんです」

「そうだったんだ……」

半分だけとはいえラルがアルコバレーノになり、リボンたちと同じく呪いによって死ぬ運命にあったと知って佐天は驚きを隠せなかった。

「ラルさんは呪いにかかったのが半分だった為に完全に元の姿に戻ることができたようですが、体質による影響までは戻らなかったようなんです」

「体質による影響？」

「ラルさんは半分だけ呪いにかかり中途半端な形でアルコバレーノになった為に歪な体質変化を起こして、死ぬ気の炎の属性が雲と霧に変化してしまっただけなんです」

「複数の属性が使えたのにそんな理由が……」

ラルが複数の属性を扱えたのは天性のものだと思っていたが、呪いの副作用だということを知って佐天は驚きを隠せなかった。本来なら雨属性の炎を使うにはラル自身の命を燃やす必要があった。呪いが解けたことによって雨属性の炎を正常に扱えるようになったが、体質変化による影響までもは解けることはなかった。

「死の運命を聞いた私たちアルコバレーノは大喧嘩になりバラバラになりました。しかし沢田さんの私たちアルコバレーノを救いたいと

「いう思いに突き動かされ私たちは再び1つになることができました」
ユニは思い出す。アルコバレーノの秘密を知って心がバラバラだったアルコバレーノを1つにしたツナの行動を。

「だから私にとって沢田さんは特別な人なんです」

「と、特別って……!?!」

特別な人というユニの発言を聞いて佐天はユニがツナのことを好きなのだと思ひ顔を赤くしながら動揺をしまっていた。

「特別というのは恩人という意味で恋愛対象という意味ではありませんよ」

「そ、そっか……」

ユニの言う特別な人というのが恋愛対象ではなく恩人という意味であることを知って佐天は安堵する。

「それに私には好きな人がいますので」

「へー。誰なの?」

「はい。同じファミリーの方であると同時に私の右腕なんです。歳は大分、離れてはいるんですがとても魅力的な人なんです」

「大事に想ってるんだねその人のこと」

「はい。大好きです」

「っ!?!」

ユニはとびつきり笑顔で大好きだと言った。佐天は女の身であるもののユニのとびつきりの笑顔を見て顔を赤くしてしまう。

「暗い話ばかりでしたのでここは女の子らしく恋バナでもしてみませんか? 佐天さんも沢田さんのことが好きなんですよね?」

「ええ!?! いや!! 私は!!」

「隠さなくもいいですよ。先程の反応でわかっていますから」
(バ、バレてた……)

佐天はユニならバレないだろうと思っていたがすぐにバレてしまい恥ずかしさのあまり顔を赤らめてしまう。そして2人はしばらく恋バナをする。

「佐天さん大変ですね。沢田さんに想いが伝わらなくて」

「ユニちゃんこそ。好きな人が前に好きだった人に未練があつて進展

しないなんて」

佐天とユニは恋愛での苦労を愚痴っていた。お互い恋愛での苦労を聞いてお互いに大変なんだということを理解する。しばらく話した後、佐天とユニは喫茶店を出る。佐天は並盛の色々な所へユニを連れて行った。

「今日はお忙しい中ありがとうございます佐天さん」

ユニは自分たちが泊まっているホテルの前にて佐天にお礼を言った。佐天の修行がある為、午前中の間だけ案内する約束だったのである。

「それと佐天さんにお伝えしておくべきことがあります。私の見た予知について」

「予知？ 何で私に？」

「私の見た予知が佐天さん……佐天さんたちに関係する予知だからです」

「私たちに？ 一体どんな予知なの？」

ユニが自分たちに関する予知を見たということを知って佐天はどんな予知なのか気になる様子であった。

「そう遠くない未来。大空は異世界の人間の1人と永遠の愛を誓う」

「それって……!!？」

ユニの予言を聞いて佐天は理解する。ツナが佐天たちのいる世界の人と結ばれるということを。

「佐天さんの想像通りです。ただそれがいつになるのか、誰と結ばれるのかは私にもわかりません」

「い、今までユニちゃんの予知って外れたことはあるの……!!？」

「ありません」

「っ!？」

ユニの言葉を聞いて佐天は不安で仕方がなかった。もしツナが自分以外の人間が好きなお人と結ばれるのであればどう足掻いても意味のないのだから。

「ですが絶対に外れないとも言いきれません。今まで外れなかったからといってこれからも外れないという確証はありません

から。それに未来というのはちよつとしたきつかけで変わるものです。もしかしたら沢田さんが私たちの世界の人と結ばれる可能性だってあります」

「平行世界……」

「はい。未来とは複数に枝分かれしています。私が見た予知はパラレルワールド平行世界の1つに過ぎないかもしれません。私の予知を聞いて不安になったかもしれませんが諦めないで下さい。未来を選ぶ権利は全ての人にありますから」

「う、うん……」

ユニの言葉を聞いて佐天は完全に不安が無くなった訳ではないが、ツナと結ばれる可能性がゼロではないということを理解した。

「それでは私は失礼します」

ユニはそう言うのと佐天に一礼し、ホテルの中へ戻って行った。

(ユニちゃんの言葉が本当だとしたら……頑張らなくちゃ!)

不安になった佐天であったが、両手の拳を強く握ってこれまで以上に頑張ることを決意するのだった。

革命未明（サイレントパーティー） 篇
標的（ターゲット） 191 金髪少女の秘密

佐天がユニの予言を聞いた次の日。 8月29日。

「久しぶりだなー。学園都市に来るの」

ツナは学園都市にいた。昨日の夜、初春から連絡があり学園都市への出入りが許可されたのである。

「ん？ 電話？」

177支部を目指していたツナであったが途中で携帯が鳴る。かけて来たのは美琴だった。

「もしもし美琴？ どうしたの？」

『ちよつとあんたにお願いがあるの』

「お願い？」

『うん。第7学区の病院に来て欲しいの』

「いいけど……何かあったの？」

美琴のトーンが低かった為、美琴に何かあったのだということをつなは理解する。

『訳は後で話すわ。とにかく来て欲しいの』

「わかった」

そう言うツナは携帯を取り出して初春に遅れるということ伝えて後に、第7学区の病院へと向かう。

第7学区の病院。

「待ってたわ。着いて来て」

病院の待合室にいた美琴と再会の挨拶もなしにツナは美琴に美琴の後に着いていくことになってしまった。美琴に連れて来られたのは病室だった。

（ミサがいる病室じゃない……）

てつきりミサ絡みのことだと思っていたツナであったが、案内された場所がミサの病室ではなかったのでミサ絡みの話ではないのだということを理解する。そして2人は病室に入る。

（女の子？）

病室に入るとそこにはカエル医者と飴を啜えた金髪の少女がいた。ツナは初めて見る少女を見て何で自分がここに呼ばれたのかわからないでいた。

「ミコト？ 誰その人？ ミコトの友達？」

「そんなところよ」

少女はツナの姿を見て不思議そうな顔をしながらそう言った。

「この子はフェブリ。公園で倒れているところを見つけて助けたの」「倒れてた？」

美琴はこのフェブリと呼ばれた少女と出会った経緯をツナに話した。ツナはフェブリが倒れていたということに疑問を抱く。

「フェブリはフェブリっていうの。あなたのお名前は？」

「俺は沢田綱吉。気軽にツナって呼んで」

「うんっ！ よろしくツナ！」

フェブリが倒れていたということを詳しく聞きたかったがその前にフェブリがツナに興味を持ってしまった為に、美琴に詳細を聞くことを諦め自己紹介した。しばらく話し続けると2人は打ち解け始めた。

「ちよつと話があるんだがいかい沢田君？」

「は、はい……」

するとずつと2人が話すのを黙って見ていたカエル医者がツナに話しかける。急にカエル医者が話があると言って来た為、ツナは少し困惑していた。

「ツナ。もう行っちゃうの？」

「ちよつと話があるだけだから。すぐに戻って来るから戻って来るまで美琴と一緒にいてね」

「うんっ！」

ツナがいなくなると知って寂しそうな顔をしていたフェブリであったが、すぐに戻って来るとわかって顔をパアツと明るくさせた。

ツナはカエル医者と一緒に病室を出る。

「それで話って何ですか？」

「君に頼みたいことがあってね？」

「頼みたいこと？」

カエル医者に頼みたいことがあると言われて、ツナは疑問符を浮かべる。

「あの少女の体を君に治してもらいたくってね？」

「治すって……どういう……？」

医者であるカエル医者が医者でもない自分にフェブリを治して欲しいと言ってきたことにツナは意味がわからず疑問符を浮かべる。

「まずあの子のことを話さないといけない。あの子は普通の人間じゃないんだね」

「普通の人間じゃない？ どういうことですか？」

フェブリが普通の人間ではないということを聞いてツナは意味がわからないでいた。

「あの子は科学的に造られた人工物だ」

「造られた……!?!? フェブリが……!?!?」

フェブリが普通の人間ではなく人工的に造られた存在だと知ってツナは驚きを隠せなかった。それでもツナはカエル医者のことを信頼している為、フェブリが人工的に造られた存在であることを信じ

た。

「ま、まさかフェブリはミサとたちと同じクローンってことですか……!?!」

「いや。彼女たちと違ってあの子は誰かのDNAから造られた訳ではない。完全にゼロから造られた存在だ」

「まさかまた絶対能力進化計画みたいな実験を学園都市が……!?!」

「さあね。そこまでは僕にもわからないんだね?」

ツナはカエル医者話を聞いてまた学園都市がろくでもない実験をしようしているのではないかと推測する。ツナの言葉を聞いてカエル医者は首を横に振りながら答えた。

「何年か前に科学的に人間を造るという研究あってね。その研究には暗部が関わっていたらしいんだね」

「暗部……」

カエル医者から暗部という言葉聞いてツナの脳裏には、麦野を筆頭としたアイテムの存在が浮かんでいた。

「それよりも問題はあの子の体のことなんだ」

「体?」

「あの子は新陳代謝を繰り返す度にある一定量の毒を生成してしま
う」

「毒……!?!」

フェブリの体に毒が生成されると知ってツナは驚きを隠せな
いでいた。

「で、でもフェブリは元気そうしてたじゃないですか……」

毒に犯されているというのにフェブリは元気いっぱいであり、どこ
にも異常があるようにはツナには全く見えなかった。

「あの飴だよ」

「飴?」

「あの子が啜えている飴は体内で生成されている毒素を中和する効果
がある。あの飴がないとあの子は生きられず放っておけば体内に蓄
積されて機能不全を起こし死に至ってしまうんだよ?」

「そんな……!?!」

フエブリの悲惨過ぎる体質を知ってツナはショックを受けてしまっていた。

「だが沢田君ならあの子を治すことができる」と聞いたんだが本当なのかい？」

「治すって……あつ！」

カエル医者 of 言葉聞いてツナは理解する。大空の炎の特徴である調和の力があればフエブリの体内で生成された毒素を中和することができるということを。美琴はツナの力を知ってツナを呼び出したのだと。

「治すことはできるとは思いますがただフエブリが怖がると思うんです」

「怖がる？ それはどうということだい？」

「フエブリを治すにはこの炎を使う必要があるんです」

そう言うツナはリングに炎を灯し、カエル医者に死ぬ気の炎を見せた。

「炎？ これが本当にあの子の毒を治すのに必要なのかい？」

「はい。この炎には調和っていう特徴があるんです。これを使えばフエブリの中の毒を浄化できるはずですよ」

「調和……確かにそれなら毒を浄化できるかもしれないね……」

ツナの炎の詳細を知ってカエル医者は親指と人差し指を顎に当ててそう言った。

「ただこの病院だということをお忘れてはいけませんよ。もし火事になれば他の患者の命が無くなる可能性だってあるんだから」

「その点は大丈夫です。この炎は燃焼力はあるに上には調和だけにこの力を集中すれば他に燃え移ることはありません」

「成る程ね。それなら問題ないか」

普通の人間であれば疑うところであるがカエル医者はツナのことを信頼している為、全く疑うことなくツナの言葉を信じる。

「たださっき言った通りフエブリがこの炎を怖がってしまったら意味がないんです。いくら大丈夫だと言っても流石に炎に対して怖がらない訳はないと思うし、強引にやるのは気が引けるっていうか……」

「だったら僕があの子に睡眠薬を投与して眠らせよう。それなら怖がることなく治療できるはずだ」

「お願いできますか?」

「僕を誰だと思ってるんだい? 患者の為に全力を尽くす。医者として当たり前のことだよ」

「お願いします」

フェブリの治療。果たして上手くいくのか?

標的（ターゲツト） 192 美琴の成長

美琴の要請でフェブリを治療することになったツナ。カエル医者
の話術によってフェブリは睡眠薬を飲んでくれることを了承した。
フェブリが睡眠薬を飲むと1分も経たずフェブリは眠ってしまう。

「それじゃ始めてくれ沢田君」

カエル医者はフェブリが完全に眠ったのを確認するとツナに治療
するようにお願いする。カエル医者にそう言われたツナは27と書
かれた手袋を装着して目を閉じる。

「始めるぞ」

ツナの額に炎が灯り、手袋がボンゴレギアへと変貌し超^{ハイパー}死ぬ気
モードになる。ツナは右手に炎を灯すとフェブリの額に炎を灯した
ボンゴレギアを当てた。美琴とカエル医者は緊張の面持ちで見守っ
ていた。するとフェブリの体が死ぬ気の炎に包まれていく。しかし
フェブリの体もベッドも燃えることはなかった。ツナは今、調和の特
性を持つ大空の炎を殺傷力のない調和だけの炎に絞っているので
フェブリや他の物に炎の影響を無くしているのである。

「これでよくなったはずだ。検査を頼む」

「わかったよ」

滝壺の体昌の副作用を治した時とは違い、フェブリの中の毒が完全
に無くなったかどうかかわからない為、ツナはカエル医者に毒が完全
無くなったかどうかを確認するようにお願いする。ツナの言葉を聞
いたカエル医者はフェブリの検査の為に別室に連れていく手配をす
る。フェブリが別室に連れられると病室にはツナと美琴の2人だけ
となる。

「ふう……」

フェブリがいなくなった後、ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解い
てノーマル状態へ戻る。

「これで良くなってくればいいわね」

「大丈夫だと思おうよ。前に会った女の子も治ったし」

「前に？」

「A I M 拡散力場を追跡する女の子だよ。あの黒髪の。なんか能力の副作用があったみたいだから俺の炎で治したんだよ」

「会ったって……あんた……」

ツナの脳裏には能力追跡A I M ストーカーの能力を持つ滝壺理後の姿が浮かんでいた。美琴は殺し合いを演じた相手をまるで普通に友達と会ったかのように話すツナに呆れてしまっていた。

「でも嬉しかったな」

「え？」

「美琴が俺のことを頼ってくれたことだよ。ミサの時は誰にも相談せず1人で抱えてたからさ」

絶対能力進化計画レベル6 シフトの時は1人で解決しようとして誰にも頼ることのなかった美琴が自分を頼ってくれた。ツナは美琴が成長したのだということを理解した。

「前にあんたの世界に行った時にリボーンに言われたの。仲間をもつと頼れって」

『超能力者レベル5って呼ばれようが超電磁砲レールガンの異名で呼ばれようがお前は人間だ。1人でできることなんてたかが知れてる。何でもかんでもきる訳じゃねえ。だから1人で背負おうとすんな。巻き込みたくねえっていう気持ちはわかるが、お前には頼れる仲間がいるだろ。仲間に頼ってればもっと早く解決できたはずだぞ』

『仲間ってのは自分の大切な者の為に死ぬ気になれる奴らのことだ。仲間の為に死ぬ気になれず仲間を失うことは死と同義だ。間違うなとは言わねえ。ただ奴らを本当の意味で死なせたくねえなら仲間を頼れ』

美琴の脳裏にはツナの世界にいるミサに謝罪した後リボーンから言われた言葉が浮かんでいた。

「黒子たちにはまだフェブリのことは話してない。けど今回はちゃんと話して協力してもらおうつもり。どうやら思ってた以上に厄介な問題になりそうなの」

「厄介な問題？」

「フェブリが狙われてるみたいなの」

「狙われてる!？」

美琴からフェブリが狙われているということを知ってツナは驚きの声を上げる。

「何でフェブリが狙われてるの!？」

「それがわからないの。学会っていうの学園都市の中でも成績が優秀な人の発表会ってというのが今度あるんだけど、その会場で警備ロボットがフェブリを襲おうとしたの。その後も人気のない場所に誘導されて私たち急に謎の駆動鎧パワードスーツに襲われたの」

「パワードスーツ?」

「簡単に言うと警備ロボットを戦闘用にパワーアップさせたものね」

「成る程……でもそれだけでフェブリが狙われてるって確定するのは無理があるんじゃないの?」

美琴から最近、起こった出来事を聞いてそう言う。いくら襲われたといってもフェブリ以外の人を狙った、もしくはフェブリを人質にしようとしたという可能性もあるのだから。

「それだけだとね。けど謎の男がフェブリを回収するって言っていたっていうのを婚后さんたちが聞いてらしいの」

「回収って……」

いくらフェブリが科学的に造られた存在であるとはいえ、回収という言い方をしていたと知ってツナは憤りを覚えていた。

「ただ妙なことがあったのよね」

「妙なこと?」

「さっき言った駆動鎧パワードスーツのことなんだけど。普通、駆動鎧パワードスーツは人が中に入って操縦するものなんだけど私たちが襲って来た駆動鎧パワードスーツには誰も人が入っていなかったのに襲って来たのよ」

「人が誰もいないのに?」

美琴の言葉を聞いてツナの脳裏にはある存在が浮かんでいた。

「モスカみたいな兵器を学園都市が造ったのかな?」

「モスカ?」

「俺たちの世界にある機械兵器ことなんだけど、モスカは中に人が入ってなくても死ぬ気の炎をエネルギー源にして動くことができるんだ」

「相変わらず滅茶苦茶ね……あんたたちの世界の科学力……」

モスカ。元々は旧イタリア軍が隠滅しようとしていた訳アリの研究をであり大戦後に裏でマフィアが買い取ったものである。その中身は人の死ぬ気の炎を強制的に奪って動くというあまりに人道に反する兵器である。しかし未来では無人でも動けるようになっていた。現在、未来の技術を使ってスパナは無人で動くモスカを造っている。モスカの詳細を聞いて美琴は驚きを隠せないでいた。

「まさかまたエスカみたいなのが来てるんじゃないわよね……」

「どうだろう……それはないと思うけど……」

無人で動くモスカの存在を知ってまたエスカのような人間が学園都市にやって来て学園都市を混乱に陥れようとしているのではないかと美琴は推測するが現状、手がかりがない為、どうすることもできなかった。

「こんな誰もいない病室で2人きりになって何をしていますか？

とミサカは純粹な疑問を抱きます」

「ミサカ！」

フェブリが狙われる理由を考えていると病室の扉が少し開いており、扉の隙間からツナと美琴のことを見ているミサカがいた。

「もしかしてお邪魔だったでしょうか？ とミサカは空気の読めない行動を取ったのではないかと思い反省します」

「違うわよ!! そんなんじゃないから!!」

「？」

ミサカの言葉を聞いて美琴は顔を真っ赤にしながら動揺する。ツナはミサカの言っている意味がわからず疑問符を浮かべていた。

「ツナとお医者様とのあの少女の病室の前で会話しているのが見えたので盗み聞きしていました。 とミサカはそちらの事情を把握していることを伝えます」

「ということはミサカはフェブリのことも全部知ってるの？」

「昨日の夜、ミサカはあの少女と会話しました。とミサカは伝えます」
「そうなんだ」

「お姉様にはすでに話したのですがフェブリには姉がいるらしいです。とミサカ少女との会話でわかったことを伝えます」

「姉……!？」

ツナはミサからフェブリに姉がいるということを知り驚きを隠せないでいた。

「姉って……フェブリはミサたちと違って誰かのDNAを使って造られた存在じゃないんだから姉なんて……」

「詳細はミサカにもわかりませんが確かに姉がいると言っていました。とミサカは嘘ではないことを伝えます」

「別にミサを疑ってる訳じゃないんだけど……」

ミサの言葉を疑っている訳ではないが、フェブリに姉がいるという意味がわからないでいた。

「それにあの少女の知識には一定の偏りがあり、これはミサカたちシスターズと同じ学習装置が使われたものだと思われます。とミサカはあの少女との会話にて気づいたことを伝えます」

「学習装置テストメントって確か知識や技術を脳インストールできるっていうやつだよね」

「何で学習装置テストメントのことを知ってるのよ？」

学園都市のテストメントによって名付けられた学習装置のことをツナが知っている理由を美琴はわからないでいた。

「前に向こうにいるミサと2人で遊んで時に教えてくれたんだ」

「ちよつと待って下さい、それはどういうことですか？ とミサカは詳しい詳細を求めます」

「詳細も何も向こうにいるミサが俺たちの世界を見て回りたいつて行ったから一緒に連れて行っただけよ」

「へーそうですか。 とミサカは他のミサカとデートしたということを知って拗ねてみます」

「デートじゃないから！ ただ一緒に遊んだだけだから！」

「それを一般的にデートというのは？ とミサカはあまりにもツナの頭の悪いので失望します」

「そこまで言う?!」

ミサの言葉にツナはショックを受ける。ツナにとってデートとは恋人同士になった者がするものだと思っている為、恋人同士でなければたとえ男女の2人きりで遊んでもデートには該当しないのである。「前にツナが言った通りちゃんとミサカとも一緒に遊んでくれますよね?」とミサカは再び確認を取ります

「大丈夫だから! ちゃんと行くから!」

「了解です。とミサカは先程から嫉妬している自分を必死に押さえ込んでいるお姉様をチラ見しながらそう言います」

「ししし、してる訳ないじゃないでしょ!!」

ミサの言葉を聞いて美琴はわかりやすく動揺してしまっていた。いつもなら以前のように感情が押さえ込むことができず怒りを爆発させてしまう美琴であるが、病院であるということとを考慮したのと、これからフェブリを狙う者たちと戦うことになった時の為に仲違いしては意味がないと思えば必死に我慢していたのである。

「それよりもフェブリを狙おうとしてる奴のことに話を戻すわよ!」

「強引に誤魔化しましたね。とミサカは誤魔化し方が下手なお姉様に呆れています」

「うっさい!」

強引に話を反らそうとした美琴であったがミサにツッコまれてしまふ。

「さっき言った学習装置のことなんだけど。この子の話だとフェブリに使われてる学習装置と妹達に使われている学習装置が同じらしいのよ」

「え? それってミサとフェブリに学習装置を使ったのって同じ人ってこと?」

「ええ。布束砥信^{ぬのたばしのぶ}って女よ」

「誰なの?」

「絶対能力進化計画にも関わってた人間の1人よ。そして量産型能力者計画にもね」

「レディオノイズ計画?」

「前に私のDNAマップを提供したっていうのは話したわよね？」
「うん」

ツナは思い出す。一方通行と戦う前に美琴が言っていたことを。自分のDNAマップを渡したせいで絶対能力進化計画が始まってしまったことを。

「元々、私のDNAマップは超能力者を確実に増やす為に使われるはずだったの」

「超能力者を増やすって……美琴のクローンなら超能力者の力を持つてると思っただってこと？」

「そうよ。けど研究者の目論見は外れてクローンたちは超能力者級の力を持つていなかったことが判明。だから実験はすぐに凍結したの。でもこの時のクローン技術が絶対能力進化計画に使われることになったの」

量産型能力者と絶対能力進化計画の関連をツナは理解する。

「でもあの女は妹達を助けようとしてたの」

「助けようとした？」

「妹達と関わってあの子たちがただのクローンだと思えなくなっただって言ってたわ」

「そっか……」

ツナは嬉しかった。絶対能力進化計画に関係者の中にも妹達のことを1人の人間として見てくれた人がいたということに。

「ただ私も2度しか会ってないし、その後どうなったかも調べたんだけどわからなかったわ。ただ1つ言えるのはフェブリを狙う奴らと何か関係しているかもしれないってこと」

「ですが彼女はミサカにミルクティーの味を教えてくださいました。とミサカは彼女のことを語ります」

「ミルクティー？」

「彼女がいなければミサカはミルクティーの味を知ることができませんでした。とミサカは当時のことを思い出しながら語ります」

「そっか。ミサカにとって大切な人なんだね」

ミサカの言っているミルクティーのことが何なのかはわからなかつ

だが、ミサにとって布束という人物が大切な人物であるということ
ツナは理解する。

「もしその布束っていう人がフェブリを狙っている人たちと関係して
るなら助けないとね」

「え？ とミサカはツナの言葉に戸惑いを隠せないでいます」

「決めたんだ。ミサたちが……みんなが笑い合える未来を作るって。
でも布束っていう人を助けられないならミサたちが笑うことなんて
できない。だから助けるよ」

「あなたは本当に変わらないのですね。とミサカはそんなツナの変わ
らない真っ直ぐな思いに感服します」

一方通行と戦った時と同じく大切な人の為に動くツナの信念を見
てミサは少しだけ微笑んでいた。

「やあ。待たせたね？」

「あの！ フェブリはどうでした!？」

するとカエル医者病室に戻って来る。美琴はさっそくフェブリ
の容態をカエル医者に尋ねる。

「毒は完全に浄化されているよ？ 毒も新たに生成されることなくね
？ 完全に治療は成功だよ？ 後は目が覚めるのを待つだけなんだ
ね？」

「よかった……」

カエル医者からフェブリが完全に良くなったと聞かされて美琴は
安堵する。

「しかし君は本当に一体、何者なんだい？ 学園都市第1位を倒し、調
和の特性を持ったあの炎？ 君のような逸材があまり周知されてい
ないということが僕からしたら不思議なんだね？」

「い、いや……それは……」

「まあ別に無理に聞くつもりはないよ？」

ツナの正体が気になったカエル医者であったが、ツナが答えたくくな
いということ察してこれ以上、深く尋ねることはなかった。

「とりあえず後は……」

「フェブリを狙ってる奴らを調べなきゃね」

フェブリが治り後はフェブリを狙う黒幕を調べるだけとなった。
フェブリを狙う黒幕の正体とは!?

標的（ターゲツト） 194 仲間の良さ

カエル医者からフェブリが完全に治ったということを知りかされたから1時間後。睡眠薬によって眠らされていたフェブリが目覚ました。フェブリが目覚ました後、ツナと美琴は病院を後にして今回のことを黒子たちに伝える為に風紀委員^{ジャツジメント}177支部へと向かった。

のだが

「これゲコ太！ 美琴がくれたの！」

「本当に？ よかったね」

「……」

フェブリはツナと手を繋ぎながら楽しそうに支部へと向かっていった。そんな2人を美琴は面白くなさそうな顔で見ている。ただ美琴だけがなぜか警戒されてしまっていた。フェブリ懐かれる為にあらゆる手を講じた美琴であったがフェブリが自分に懐いてくれるまでかなりの時間を要したある。

「何でこの短時間でフェブリがあんたにそこまで懐くわけ？」

「何でって言われても……普通に話してたら懐いただけだけど……」

「私だけなぜかフェブリに懐かれるまでに凄い時間がかかったのよ」

「そう言われても……ナッツの時みたいに怖がらせるようなことしたんじゃない……」

「何か言ったかしら？」

「な、何でもありません……」

ツナはフェブリが美琴に懐くまでに時間がかかったのは美琴がナッツの時と同じように何か怖がらせるような真似をしたのではないかと推測する。ツナの言葉を聞いて美琴は暗殺者のように目でツナを見ていた。そんな美琴を見てツナは何も言うことができないでいた。動物好きなのにも関わらず、体から電磁波のせいで動物に触る

こののできない美琴にとってナッツは特別な動物存在なのである。だからこそ美琴は諦め切れずナッツと仲良くなりたいと必死なのである。しかし美琴の思いとは裏腹にナッツは美琴を恐怖の対象としか見ていない為、仲良くするのは不可能に近いのであるが。

「ミコト……怖い……」

「ちよっ!? あんたが変なこと言うから!」

「ええ!? 俺のせい!」

暗殺者のような目をした美琴を見てフェブリは怖がってツナのズボンの裾に捕まりながら後ろに隠れていた。

なんとか美琴がフェブリにまた懐かれなくなるという事態だけは避けられ、3人は177支部へと到着する。

「そんなことが……」

「まさかフェブリちゃんか……」

「人工的に作られた存在だったなんて……」

美琴は黒子、初春、固法にフェブリに爛することを話した。人工的に作られた存在であること。体内で毒が生成されてしまい飴を舐め続けられないと生きられないこと。フェブリを狙う黒幕がいるということ。学園都市の暗部が関わっているかもしれないこと。3人は美琴からフェブリの全てを知ってショックを受けていた。

「しかも飴を舐めないと生きられないなんて……」

「そっちの方は大丈夫。さっき沢田に頼んで治してもらったから」

「え!? 沢田さんが!」

医者でもどうにもならない案件をツナが治したと知って初春は驚きを隠せないでいた。

「で、でもフェブリちゃんは飴を舐めてるじゃないですか！」

「あれは市販で売ってる飴を買ってあげたの。もうあの飴はいらないから処分したわ」

「で、でも……どうやって治したんですか……!?!」

「あいつの炎は調和っていう特徴があるの。あの炎を使ってフェブリの体内にある毒を浄化して毒が生成されずに生きられるようにしてくれたの」

「そういえばリボン君が前にそんなことを言ってたわね……」

「流石、沢田さん……」

「……」

美琴がツナの上空の炎を説明した後、横の方を見る。そこには楽しそうにツナの似顔絵を書いているフェブリを温かい目見守っているツナがいた。固法と初春はツナの力を知って驚きを隠せないでいた。黒子は面白くなさそうな顔でツナのことを見ていた。

「問題はフェブリを狙う連中。正直、何が起きるかわからない。みんなを巻き込むことになるかもしれない。けど私一人じゃどうすることもできないの。だからみんなの力を貸して欲しいの」

「当然ですわ!」

「フェブリちゃんの為です!」

「任せて」

美琴は病院でツナに言った通り、3人にフェブリを狙う黒幕と戦ってくれるようお願いする。黒子、初春、固法は迷うことなく即答で答えた。ツナはこの光景を温かい目で見守っていた。

「どうしたのツナ君? そんなニヤニヤして?」

「少し不謹慎じゃありませんこと? 今からまだ見ぬ黒幕と戦うかもしれないというのに。沢田さんらしくありませんわよ」

ニヤニヤしながらこちらを見ているツナを見て固法と黒子は違和感を感じていた。

「ごめん。そんなつもりじゃないんだ。ただ……」

「……ただ?」

「改めて仲間っていいなって思ってた。なんかこう1つの目的の為に

みんなで協力する感じがさ」

ツナの脳裏には虹の代理戦争にてバミューダを筆頭した復讐者ヴァインディチェに勝つ為に皆で協力した時のことが浮かんでいた。

「それじゃフェブリを狙う謎の黒幕の捜査ね。それじゃ私は白井と一緒に捜査するから、ツナ君は御坂さんをお願いね」

「なっ!？」

「ま、まあ仕方ないわね……!？」

フェブリを狙う黒幕を捜査するペアを固法が指示する。ペアの詳細を聞いて黒子は衝撃を受け、美琴は顔を赤くしながら返事をした。

「初春はパソコンで情報を調べると同時にフェブリちゃんのお世話をお願い」

「わかりました」

「じゃあ行こうか美琴」

「うん」

(お姉様と2人きりで捜査なんて!! しかもお姉様は今回の件を私より先に沢田さんに話すなんて!! 許せませんわ!! お姉様は私のものですのに!! この件が片付いたら絶対にお姉様と2人であんなことやこんなことをしてやりますわ!!)

捜査に向かう2人の後ろ姿を見て涙目になりながら黒子はそう心の中で誓うのであった。

標的（ターゲット） 195 調査開始

ツナは美琴と共に調査に乗り出した。2人がまず向かったのは、「ようお前ら。どうしたじゃんよ」

アンチスキル 警備員の黄泉川のいる学校だった。黄泉川は警備ロボとパワードスーツ 駆動鎧がフェブリを襲って来た際に事件の事後処理を行っていた為、2人は黄泉川の元を訪れたのである。

「実は前に誤作動で動いた警備ロボとパワードスーツ 駆動鎧を調べさせて欲しいんです」

「残念だがあれはもうないじゃんよ」

「いえ!?!」

美琴は黄泉川に事情を話す。しかし黄泉川は答えにくそうな表情かおで返事をした。まさかの返答にツナと美琴は驚きを隠せないでいた。「あの後、上に回収されてな。嫌に迅速だったんでおそらく訳アリじゃんよ」

「そんな……」

フェブリに繋がる手がかりが途絶えてしまった為、ツナはシユンとしてしまっていた。

「ここで落ち込んでも仕方ないわ。他に手がかりがないか捜しに行きましよう」

「うん」

美琴落ち込んでいるツナにそう言うのとツナも気持ちを切り替えて他に手がかりを捜すことに決めると、黄泉川にお礼だけ言って職員室から出て行く。

「次はどうしようかしら?」

「木山さんの所へ行ってみない? 元々、研究者だった木山さんなら何か知ってるかも」

「いいわね」

廊下を出て今後のことについて美琴が考えるとツナは木山に会うことを提案する。美琴はツナの意見に賛同する。

「ちよっと待つじゃんよお前ら」

「?」

廊下を歩いていると黄泉川に呼び止められる。ツナと美琴は黄泉川の方を振り向いた。しかしなぜ呼び止められたのかわからず疑問符を浮かべる。

「これ持って行くじゃんよ」

黄泉川は金色の細い糸のような物が入った紫色の長方形のケースを2人に見せた。

「これは?」

「例の駆動鎧パワードスーツに入ってたじゃんよ。上に回収される前に私が回収しておいたじゃんよ」

「いいんですか?」

「このまま私が持つても意味がないし、上に回収されるだけじゃんよ。だったらお前らに預けておいた方がいいじゃんよ」

「ありがとうございます」

「ただしこれだけは約束しろ。無茶はするな」

「はい」

2人は黄泉川に頭を下げると黄泉川から紫色のケースを受け取った。そして2人は学校を後にする。

そして2人は今度は木山と連絡を取り、木山の住んでいるアパートを訪れる。

「人間をゼロから作る……相変わらず君たちは色々と巻き込まれているね……」

「すいません……木山さんなら何か知っているかと思って……」
ツナと美琴は木山に他の人に口外しないことを条件にフェブリの
ことについて話した。

「何年か前に科学的に人間を造り出す研究があったというのを耳にし
たことがあるが、残念だが詳しい詳細までは私にもわからないな。た
だ1つ言えるとするなら人間をゼロから造り出すという禁忌の研究
を表沙汰にすることはできない。となると我々ですら手の届かない
人間の仕業ということになる。といつてもただの私の勝手な推測だ
が」

木山はフェブリを造った黒幕の正体を推測する。しかし木山の返
答はカエル医者と同じものであった。

「私に言えるのはこれくらいだ。力になれなくてすまないね」

「とんでもないです。ありがとうございます木山さん」

「さて。悪いが私はそろそろ行かないといけないのでね」

「行く?」

「あの子たちが退院してから新しい仕事を始めたんだ。家庭教師の仕
事をね」

「え!？」

木山が家庭教師の仕事をしているということを知って2人は驚き
を隠せないでいた。

「君とリボン君を見てやろうと思ったんだ。それに幻想御手事件で
は多くの学生に迷惑をかけた。その償いも兼ねてね。生憎、私にはこ
んなことしかできないが」

「そんなことないですよ。素晴らしいと思います」

「ありがとう」

木山のいるアパートを後にする2人。

「木山さんも知らなかったか……」

「唯一の手がかりはこれだけね」

木山も知らなかったのがつくりするツナ。美琴は黄泉川からもらった金色の糸が入った紫色のケースを見る。

「そういえばフェブリは倒れてたんだよね？」

「そうだけど。それがどうかしたの？」

「いや……もしかしたら倒れてた場所に手がかりが残ってるかもしれないって思ってたさ」

「可能性は低いわね。でも行ってみる価値はあるわね」

手がかりが残ってはいないと思っただ美琴であったが、このまま何もしないよりはマシだと思いつナの意見に賛同する。それに黄泉川から貰ったケースだけでは黒幕を突き止めるは不可能だと思っただからだというのもある。

美琴はフェブリが倒れてた場所までツナを案内する。美琴に案内されてやって来たのは公園だった。

「ここよ。2日前にここでフェブリが倒れてたの」

「ここが……」

やって来たのは公園にある花壇だった。美琴はフェブリがここに倒れていた時のことが脳裏に浮かんでいた。ツナはフェブリが倒れていた花壇を見つめていた。

「とにかくこの辺りを捜してみましよう」

「うん」

そう言うと2人はフェブリの倒れていた花壇、その周囲に黒幕に繋がる手がかりがないかどうか捜し始める。証拠を捜し始めてから30分。しかしフェブリに繋がる手がかりはどこにもなかった。

「ダメだ……何も見つからない……」

「こうなるとは思ってたけど……」

証拠がある可能性は低いと理解していたがそれでもフェブリの黒幕に繋がるものが何もなかったことにツナと美琴はショックを受けていた。

「とりあえずこれを持って一旦、支部に戻りましょう」

「そうだね」

これ以上、黒幕に繋がる手がかりの心当たりがないので美琴は支部に戻ることを提案し、ツナも美琴の意見に賛成する。2人は支部のある方角へと歩を進めて行く。

その時だった

「あつ！ ツナ兄だ！」

「フウ太!」

(この子……)

ツナたちの後ろからツナを呼ぶ声がある。2人が振り返るとそこにいたのはツナの世界にいるはずのフウ太であった。美琴はフウ太がツナの記憶に出て来たことを思い出していた。

「御坂美琴よ。フウ太君でよかったかしら？」

「え!?! あなたが美琴姉!?!」

「そ、そうだけど……」

美琴が自己紹介するとフウ太は目を輝かせる。急に目を輝かせるフウ太を見て美琴は戸惑いを隠せないでいた。

「涙子姉から聞いてるよ！ 美琴姉は学園都市に7人しかいない超能力者の1人！その中で序列が3位っていう凄い人だって！」

「そんな大したもんじゃないわよ」

「ううん。それだけじゃないよ。美琴姉は遠距離系の能力者ランキング30万人中3位だからね」

「な、何を言ってる……!?!」

「え……!?!」

急にフウ太が意味のわからないことを言い出した為、美琴は困惑してしまっていた。ツナはフウ太の発言を聞いてツナは驚きを隠せな
いでいた。

「フウ太!　もしかしてこっちでも能力が使えるの!?!」

「うん。前に遊びに来た時にいつものクセで使っちゃったんだけど、
なんかこの世界でも使えることがわかったんだ」

「ちよ、ちよつと……何の話をしてるのよ……?」

ツナとフウ太の会話についていけず美琴は困惑してしまっていた。

(フウ太の力ならフェブりを狙う黒幕がわかる!)

標的（ターゲット） 196 知られざる秘密

フェブリを狙う黒幕の証拠を捜しに来ていた2人の前にフウ太が現れた。ツナはフウ太の力を使ってフェブリを狙う黒幕を炙り出そうと考える。ツナと美琴はフウ太を連れて支部へと戻る。

「初めまして。僕はフウ太・デツレ・ステツレ。よろしくね」

「えつと……沢田さん……？」

「この子は一体……？」

フウ太は元気よく自己紹介する。初春と固法はツナと美琴が急に子供フウ太を連れて来たことに戸惑いを隠せないでいた。一方でフェブリはソファで寝息を立てながら眠っていた。

「俺の家の居候なんだ。今、学園都市に遊びに来てたんだ」

「私たちは黒幕の捜査をしているんですよ。生憎ですが今は構っている暇はありませんわ」

「フウ太の力なら黒幕の正体がわかるかもしれないんだ」

「力？ どういうことですか？」

「フウ太は的中率100%のランキングを作れるんだ」

「……はい……?!?!」

ツナがフウ太の能力を説明すると、美琴、黒子、初春、固法は驚きのあまりその場で固まってしまっていた。

「いきなりそんなことを言われても信じられないのはわかるよ。とりあえずフウ太の力を見て判断して欲しいんだ。フウ太お願いできる？」

「うん。いいよ」

ツナの問いかけにフウ太は笑顔でそう答えた。そして顔を上に向けて能力に集中し始める。するとフウ太の周囲にある軽い物が浮かんでいく。

「物が浮いて……?!?!」

「まさか念動能力?!?!」

「でもフウ太君は学園都市の人間じゃないわよ……!?!」

「まさかこの子も原石とでもいうんですの……!?!」

急に物が浮き始めたことに初春、美琴、固法、黒子は驚きを隠せないでいた。

「とりあえず何でもいいからフウ太にランキングして欲しいことを言ってみて」

ツナは黒幕を洗い出す前にフウ太のランキング能力を信用してもらう為にそう言う。しかし黒子たちはフウ太の能力が本当なのかどうか半信半疑の状態で、いきなりランキングして欲しいことがないかと言われても何も思いつかず困惑してしまっていた。

「だったら私がするわ」

そんな中、美琴が真剣な面持ちで手を上げフウ太にランキングしてもらうことを意思表示する。

「黒子が私に隠していることをランキングしてもらえるかしら?」

「わかった」

「お姉様!」

美琴は以前に黒子が部屋に盗聴器を仕掛けていたことから他にも黒子がかを隠しているのではないのかと思いつウ太にランキングを依頼する。美琴の言葉を聞いてフウ太はランキングを始め、黒子はわかりやすく動揺してしまっていた。

「黒子姉が美琴姉に隠していることランキング第3位。美琴姉の寝息を録音して携帯に保存していること」

「なっ!? なぜそれを!?!」

「第2位は?」

フウ太の言葉を聞いて黒子は動揺を隠せずにいた。一方で美琴は無表情で第2位をフウ太に尋ねる。

「第2位。美琴姉専用の盗撮用のドローンを購入した」

「あ、あれは捜査の為に買ったのであつて決してそのようなことは!?!」

「第1位は?」

黒子は動揺しながら言い訳をする。美琴はそんなことを気にせず無表情のまま第1位を尋ねる。

「美琴姉の私物を第7学区にあるレンタル倉庫に保存している」

「ありがとうフウ太君」

「だ、騙されてはいけませんわお姉様!!」

（ロクな秘密がねえ……）

（白井さん……）

フウ太のランキングを聞き終えて美琴は無表情のまま殺気を放ちながら黒子の方を見る。黒子は動揺しながら言い訳し、ツナと初春は呆れてしまっていた。

「これでわかったわね。フウ太君の能力が本物だつてことが」

「そうね。それと白井さんに再教育が必要だつてこともね」

「お、お姉様……!?! 固法先輩……!?!」

普通なら誰も信じられないところであるが、いつもこの行動が災いし誰も黒子が無罪だということをも美琴と固法は誰も信じられないでいた。鬼のような形相をしている美琴と固法を見て黒子は恐怖していた。そして黒子は美琴と固法の鉄拳によつて床にうつ伏せの状態に倒れてしまう。

「あ、あの……フウ太君は何で的中率100%のランキングを作れるんですか?」

「リボーンの話だとランキングの星つていうのがあって、フウ太はその星と交信してるつていう説があるらしいよ……?」

「ランキングの星!? そんなのが本当にあるんですか!?!」

「あつたとして星と会話できるつて……」

「白蘭といい相変わらずぶつとんでるわねあんたたちの世界の人間は……」

フウ太のランキングの能力の詳細を聞いて初春、固法、美琴は驚きを隠せずにいた。

「ちなみに固法姉がみんなに隠している秘密ランキング第1位は元々ビッグスパイダーつていう武装無能力者集団の一員だつたつてことだね」

「ぶっ!!」

「ええ!? 固法先輩が!?!」

「マジ……!?!」

「む、昔の話よ……能力開発で行き詰まって悩んでた時に一時的ね……」

フウ太に自分の秘密をバラされて固法はおもいつきり吹き出してしまふ。固法の知られざる秘密を知って初春と美琴は衝撃を隠せないでいた。

「はっー!」

固法の知られざる秘密が知られたその時、床に倒れていた黒子が覚醒する。

「でしたらお姉様に一番、相応しいランキングで私は何位なのかランキングして下さいまし!!」

「ちよっ!?! 黒子!?!」

「わかったよ」

黒子の言葉を聞いて美琴は驚き、フウ太は黒子の依頼を承諾しランキングを開始する。

「美琴姉に相応しいランキングで黒子姉の順位は……」

（これでお姉様が私がものだということを証明できますわ! 悔しがるがいいですわ沢田さん!）

フウ太のランキング能力でツナよりも自分が相応しいとわかればツナが美琴を諦めると黒子は踏んだ。しかしツナは美琴のことを意識していないのでこの結果がどうであれ何の意味を成さないのであるが。

「圏外」

「け、圏外!?!」

（なんか前に見た光景なんだけどー!?!）

フウ太のランキングの結果を知って黒子は驚きを隠せないでいた。ツナは前に獄寺がフウ太に自分の右腕に相応しいランキングで自分は何位なのかを聞いた時に獄寺も圏外と言われた時のことを思い出していた。

「圏外って何なんですの!?! 圏外って!?!」

「ランキング圏外だって言ってないよ。大気圏外だよ」

「地球の外!?!」

ランキング圏外どころか地球の外だということを知って黒子は衝撃を隠せないでいた。

「そ、そんなはずは……この私が……こ、これは夢に違いありませんわ……」

フウ太のランキング結果がショックだったのか、黒子は現実逃避してしまっていた。

「い、今って雨って降ってないよね?」

「今日は降水確率0%で雨は絶対に降りませんよ」

「急にどうしたのツナ君? 天気なんか気にして」

今日は雨が降らないかどうかツナが確認すると初春は降らないということ伝える。ツナが急に天気を気にしたことに固法は違和感を覚える。

「リボーンの話だと雨が降るとランキング星と交信が乱れてランキングがデタラメになるっていう説があるらしいんだけど……」

「もう説はいいわよ!?!」

ツナがランキング能力の弱点のことを教えると美琴はツツコミをいれた。

「ということはさっきの大気圏外は本当ってことに……」

「ガハッ!?!」

ツナの言葉を聞いた途端、黒子は吐血した後石化してしまう。

黒子の犠牲によってフウ太のランキング能力が本物であるということが証明されたのであった。

標的（ターゲット） 197 導き出された結論

フウ太のランキング能力が本物だということを証明できた為、ようやくツナたちはフェブリを狙う黒幕の正体をフウ太の能力で暴くことにする。

「という訳なんだフウ太。フウ太の能力でフェブリを狙う黒幕ランキングを調べて欲しいんだ」

「わかったよツナ兄」

黒子がショックから立ち直った後（完全に立ち直れてはいないが）一旦、ランキングモードを解除していたフウ太に今回の事件のことをツナが説明した。事件の概要を聞いたフウ太はツナの依頼を快く承諾した。

「じゃあいくよ」

フウ太が虚空を見上げると周囲にあった物が浮かび始め、さらにフウ太の瞳から光が失われる。フウ太は完全にランキングモードに入る。

「フウ太。フェブリを狙う黒幕ランキングを第1位を調べて」

「わかったよ」

ツナの言葉を聞いてフウ太はランキングし始める。その場にいた者たちはフウ太のランキング結果をドキドキしながらランキング結果を見守っていた。

「フェブリを狙う黒幕ランキング第1位は……STUDY」

「「STUDY?」」

フウ太のランキング結果を発表する。STUDYという聞いたことのない単語を聞いて疑問符を浮かべる。

「STUDY……おそらく組織名だとは思うけど……」

STUDYと聞いて組織名だということを固法は推測する。しかしこれだけは何もわからず困った表情かおをしてしまう。

「フウ太君。そのSTUDYの中で権限が大きい人物ランキングをお願いできる?。」

「わかった」

美琴はSTUDYに関連する人物から黒幕を炙り出すことを決め、フウ太にランキングを頼む。フウ太は再びランキングを始める。

「STUDYの中で権限を大きい人物ランキング。第6位。布東砥信」

(布東ってミサが言ってた……!?)

(やっぱりあのジト目女が!)

フェブリに学習装置テストメントで知識を与えた布東の名前がフウ太の口から告げられる。布東の名前を聞いた途端、ツナはミサが言っていた人物だということを思い出し、美琴は自分の予想が当たっていたということを理解する。

「第5位は斑目健治まだらめけんじ。第4位は関村忠弘せきむらただひろ。第3位は小佐古俊一こさこしゅんいち。第

2位は桜井純さくらいじゆん。第1位は有富春樹ありとみはるき」

「聞いたことのない名前ばかりね」

「初春。今上がった人物を検索をお願いしますわ」

「わかりました」

右手の人差し指と親指を顎に当てながら固法はそう言った。フウ太が言ったメンバーの名前をメモしていた黒子が初春にメモを渡すと、初春はパソコンにてフウ太の言ったメンバーの名前を調べ始める。

「出ました」

初春がそう言うのとフウ太以外、パソコンの前に集まる。パソコンの画面にはフウ太が言ったメンバーが映っていた。

「この布東って言う人だけは違いますが、他の人は全員、学会の上位入賞者ばかりです」

「学会って確か学園都市の中でも成績優秀者たちの発表会だけ?。」

「はい。そしてこの人たちがフェブリちゃんを造った黒幕ということですね」

「黒幕の正体がわかりましたわね。次は黒幕の目的ですわね」

「フウ太君。STUDYの目的ランキングを調べてもらえる?」

「わかったよ」

STUDYの構成員がわかったところで次はSTUDYの目的が何なのかという話題に移る。そして固法の依頼を聞いてフウ太は再びランキングを行う。

「STUDYの目的ランキング。第1位は学園都市で大規模テロを起こすこと」

「「「大規模テロ!?!」」」

フウ太の口から目的が告げられた。STUDYの目的が大規模テロだということを知ってツナたちは驚きの声を上げた。

「フウ太君! その大規模テロの方法ランキングを調べてもらえる!?!」

「わかった」

大規模テロを起こすということ知って驚くツナたちであったが、そんな中で固法はすぐに気持ちを切り替えてフウ太に大規模テロの詳細を尋ねた。

「STUDYのテロの方法ランキング第1位。学会会場に搬入してある2万体の駆動鎧パワードスーツによるテロ」

「「「2万體?!」」」

2万体の駆動鎧パワードスーツによるテロが行われるということを知ってツナたちは驚きの声を上げる。

「2万體って……そんなの私だって……」

学園都市1位の電撃使用エレクトロマスタであっても2万体の機械をハッキングして操ることは不可能。しかもSTUDYのメンバーは全員、無能力者。超能力者ですらできないことを無能力者にできる訳がない。

「沢田! 黄泉川先生に貰ったケース!」

「え!?!」

だが美琴の脳裏にある1つの仮説が生まれる。それは黄泉川から貰った金色の糸が入った紫色のケースであった。ここで黄泉川から

貰ったケースが出てくる意味がわからずツナは困惑してしまっていた。

「いいから出して!」

「う、うん!」

美琴が何を考えているかわからなかったツナであったが、美琴の言われるがままツナは黄泉川から貰ったケースをポケットから出した。

「フウ太君。このケースの用途ランキングをお願いできる?」

「わかったよ」

美琴は自分の脳裏に浮かんだ仮説が正しいかどうかを確かめる為に、フウ太このケースが一体、何の為に使われているものなのかをランキングしてもらおう。

「このケースの用途ランキング第1位。駆動鎧パワードスーツの動力源」

「動力源って……このケースが?」

「正確に言うところのケースに入ってる髪の毛よ。おそらくこの髪の毛の人物が駆動鎧パワードスーツを操っているのよ」

「この髪の毛って……まさかフェブリの!? まさかフェブリが駆動鎧パワードスーツを操ったっていうの!?!」

この髪の毛の色からツナはフェブリが駆動鎧パワードスーツを操ったのではないかと思いきや驚きの声を上げた。

「おそらく違うわ。フウ太君。この髪の毛の持ち主ランキングをお願いできる?」

「わかった」

ケースに入っているのが髪の毛が誰のものなのか確認する為に美琴はフウ太にランキングを依頼する。

「この髪の毛の持ち主ランキング第1位。ジャーニー」

「そのジャーニーと一番、近い存在ランキングをお願いできる?」

「わかった」

「「?」」

「まさか……!?!」

美琴が一人で納得しさらに意味不明なランキングをフウ太に依頼したのでツナ以外は疑問符を浮かべてしまっていた。ツナは美琴が

何を考えているのか理解していた。

「ジャーニーと一番、近い存在ランキング第1位。フェブリ」

「やっぱり……そういうことなの美琴？」

「ええ。そういうことよ」

「い、一体何なのよ！ 2人だけで納得しないで私たちにもわかるように説明して！」

ツナと美琴だけが勝手に納得している状況に痺れを切らした固法はどういうことなのかを説明するよう2人に求める。

「今回のテロ。おそらくフェブリのお姉ちゃん。ジャーニーによって引き起こされます」

「「?!」」

標的（ターゲツト） 198 窮地

ツナはSTUDYのテロの要がフェブリの姉、ジャーニーであると
いうことを固法たちに話した。

「フェブリちゃんにお姉ちゃん!? どういうことですか!? だって
フェブリちゃんは人工的に造られた存在なんですよね!? お姉ちゃ
んなんている訳……!?!」

「ごめんけど俺にも詳しいことわからないんだ。さつき病院でミ……
カエル顔のあの医者さんが聞いたらしいんだ。フェブリにお姉
ちゃんがいるって」

ツナはミサが言っていたとは言えないのでカエル医者が言ってい
たということにしてフェブリの姉であるジャーニーのことを話した。
「フウ太君。STUDYのテロに使われる駆動鎧パワードスーツを操っている人物
ランキングをお願いできる?」

「わかった」
STUDYの使う駆動鎧パワードスーツを本当にジャーニーが操っているのかど
うか確認する為に美琴はフウ太にランキングを依頼する。

「STUDYのテロに使われている駆動鎧パワードスーツを操っているランキング。
第1位はジャーニー」

「やっぱりね」
「じゃ、じゃあ何の為にフェブリちゃんは造られて……!?!」

「確認してみましよう。フウ太君。フェブリが造られた理由ランキン
グをお願いできる?」

「わかった」

ジャーニーが駆動鎧パワードスーツを操れるのにも関わらずなぜフェブリが造ら
れた理由が初春にはわからなかった。固法は初春の問いに答える為
に固法はフウ太にランキングを依頼する。

「フェブリが造られた理由ランキング第1位。ジャーニーが使えな

かった時のスぺア」

「スぺアって……」

「人を道具みたい……」

「許せせんわね……」

フェブリが造られた理由がジャーニーのスぺアだと知って初春、固法、黒子は憤りを覚えていた。

「フウ太君。ありがとう。もう大丈夫よ」

「うん」

これ以上、ランキング能力に頼る必要はなくなった為、美琴はフウ太にそう言った。フウ太はランキングモードを解除する。ランキングモードを解除した影響によって浮いていた物が床に落ちていく。

「じゃあ僕はこれで。また何かあったら呼んでね」

そう言うのとフウ太は支部を出て、再び学園都市の散策へと向かって行った。

「フウ太君のお陰で黒幕の目的もわかったわね」

「後は彼らの本拠地を調べて事件が起こる前にテロを防ぐだけですわ。初春」

「はい」

フウ太のランキング能力のお陰で敵の全てがわかった為、固法、黒子、初春は気合いが入っていた。名前さえわかればフウ太の力を使わずとも初春の優れた情報収集能力によって、STUDYの本拠地を炙り出すことができる。

「本当にこれでいいのかな？」

「「「え？」」」

捜査に乗り出そうとした矢先、ツナは神妙な面持ちでそう言った。ツナの発言を聞いて美琴たちは驚きを隠せないでいた。

「だってこれで逮捕できてもいつかは出所するんですよ？ そうなったらまたSTUDYはテロを起こそうとするんじゃないかな？」

「沢田……」

絶対能力進化計画を潰したツナは知っていた。研究施設を破壊したところで計画は頓挫することではなく一方通行を倒すことアクセラレータでようや

く計画は頓挫した。仮にここでSTUDYのメンバーを逮捕したところで意味はない。出所すればまたテロを画策する。STUDYのテロを止めなければ正面から戦って相手の計画だけでなく相手の闘争心折らなければ本当の意味でテロを阻止することはできないと。美琴はツナの発言からツナが何を思っているのかを理解する。

「確かにその通りかもしれないけど……」

「戦いを嫌うあなたの発言とは到底思えませんわね。第一、相手は2万^{パワードスーツ}体駆動鎧の軍勢。私たちだけでどうにかなる相手ではありませんわ」

ツナの言うことも間違いではないということ固法と黒子は理解してはいる。しかし駆動鎧は2万^{パワードスーツ}体もいる。それと正面からまともに戦えばどうなるかは明白であった。

「いや……どうにかしないといけないかもしれませんよ……」

「……え……!?!」

テロが起こる前になんとかしようという流れになっていたが、パソコンでSTUDYのことを調べていた初春の口から絶望的な言葉が発せられた。初春の言葉を聞いてツナたちは驚きを隠せないでいた。

「STUDYのことを調べていたんですがどうやら表向きはSTUDYコーポレーションという^{アンチスキル}薬品の製造や科学関係の企業なんです。しかもそれだけじゃなくて警備員の備品の納入も行っているみたいなんです……あのケースそのものが動力源ならともかく、あのケースの中の髪の毛を媒介にして駆動鎧^{パワードスーツ}を操っているのではあのケースは証拠として不十分です。つまり捜査に乗り出すのは無理なんです……」

「そんな……では本当に戦うしかないということですか……!?!」

STUDYが完全なる悪の組織であれば強行策に打って出ることでもできた。しかし表向きが一般企業。しかも警備員^{アンチスキル}に備品を搬入するという実績があるだけの企業である故に信頼も厚い。故に簡単に手が出せない上にテロを計画すると言っても信用されない。フウ太のランキング能力で得た情報が本当であってもそれが本当だという証拠を他者に知らしめることができない。確実性のある証拠がない

以上、捜査もできない上に警備員アンチスキルを頼ることができない。フウ太の能力で証拠がある場所を割り出せても、証拠は本拠地パワードストリートにしかないであろうことは明白。もし侵入してジャーニーの能力で駆動鎧パワードストリートが学園都市に進行されれば被害は甚大になることは明白。学園都市にいる人間全てが人質に取られているのといってもいい。故にどうすることもできなかった。

「研究会まで2日の猶予があるわ。まだ正面から戦うと決まった訳じゃないわ。きつとテロを止める方法が必ずあるはずよ。だから諦めちゃダメよ」

みんなの動揺を無くす為に固法はそう言った。しかし実際のところ冷静を装っているだけで、固法自身もどうすればいいかわからない状態であった。だがツナたちも固法が窮地に置かれていること、そして自分たちもどうすればいいかわからないでいたおり曇った表情かおをしたまま黙ってしまっていた。

STUDYが起こそうとしている大規模テロ。果たして止める手立てはあるのだろうか？

標的（ターゲット） 199 協力

STUDYの目的が明かされた後、何か良い方法がないか考えたツナたちであったが何もいい案が出なかった。フェブリにもSTUDYにいた頃のことを尋ねたが何も覚えておらず有力な情報を得ることはできなかった。結局のところいい案が出なかった為、全員帰宅することになった。

「ええ!? 2万体の駆動鎧バワードスーツによるテロ!?!」

家に帰ってからツナはフェブリのこと、ジャーニーのこと、STUDYのこと。そして学会当日にSTUDYによつてテロが行われるということ佐天とリボーンに話した。ツナの話聞いた佐天の驚きの声を上げ、リボーンは動揺することなく黙ってツナの話聞いていた。

「正直、何もいい案がない状態なんだ。仮にテロの前にSTUDYの本拠地バワードスーツに乗り込んで証拠を手に入れようとしても、駆動鎧が起動されて学園都市に被害が及ぶかもしれないから、乗り込むのも難しいって状況なんだ」

「じゃあ……戦うことになるんですか?」

「多分ね」

「でも相手は2万体制……いくらツナさんでも……」

相手は2万体制。どんなにツナが強くても人間であることには変わりはない。駆動鎧バワードスーツと違って体力の限界がある。しかも他の人たちまで護りながらの戦いになるのは必然。ツナにかなりの負担がかかってしまう。

「あつー！ ボンゴレファミリーに協力してもらうっていうのはどうですか!?!」

「そいつは無理だな」

佐天はボンゴレファミリーの力を借りるといふ案を出すですがすぐにリボーンに却下されてしまう。

「こいつは誘拐事件の時と違って学園都市の問題だ。病人を助けるぐらいならともかく、学園都市の秩序に関わる問題に俺たちが手を出すべきじゃねえ。それに見返りがない以上、俺たちが協力することはできねえ」

「見返り？」

「テロの阻止に協力したとして俺たちにメリットがねえんだ。大人の仕事ってのは正義感や好き嫌いだけじゃあ決められねえってことだ」
「そんな……」

ツナたちの世界の仲間が協力すればテロを阻止できる。しかし、そう簡単に協力できないと知って佐天はシュンとしてしまうのだった。

「ツナー。涙子ちゃん。リボン君。お風呂が入ったわよー」

「佐天。先に入ってきていいぞ」

「う、うん……」

1階から奈々がそう言うとりボーンは佐天に先に入るよう促した。

佐天は曇った表情を曇らせたまま部屋を出て1階へと降りて行った。

「戦うのか？」

「うん。みんなを護らなきゃ……それに助けたい人がいるんだ」

「助けたい人？」

「STUDYのメンバーの中に布束っていう人がいるんだけど」

「そいつがどうかしたのか？」

「その人は絶対能力進化計画に参加してた人なんだけど、ミサを救おうとしてたらしいんだ。そして、ミサにとって大切な人らしいんだ」

「おい、それは本当か？」

「う、うん……それがどうしたんだよ？」

ツナはリボンに布束のことを話した。布束の話をした途端、リボンが反応した。そんなリボンを見てツナは違和感を覚えた。

「ミサの為っていうなら話は別だ。それならボンゴレの協力が得られるぞ」

「え!?! 何で!?!」

「ボンゴレの起源は自警団。今でこそボンゴレはマフィアに変わっちゃまったが、ファミリーを愛する絆、ファミリーを想う精神は変わっ

ちやいねえ。ミサはボンゴレの一員、ファミリーの為っていうなら異世界も秩序も関係ねえ。動くのは当然のことだぞ」

「リボーン……」

「それに見返りもあることだしな」

「見返り？」

「お前がさつき言ってた布束って奴だ。布束をボンゴレファミリーに迎えるぞ」

「はあ!? 何でそうなるんだよ!」

リボーンが急に布束をボンゴレに入れようと言い出した為、ツナは驚きを隠せないでいた。

「その布束っていう奴は絶対能力進化計画に関わり、フェブリの製造にも関わってる。つまり人工的に造られた人間に関する知識が豊富ってことだろ。そうなればミサの治療も円滑に進められるようになるだろう」

「あっ!」

リボーンは布束にボンゴレに迎える理由を答えた。リボーンの理由を聞いてツナは納得する。

「で、でもいくらミサたちの為と言っても、ボンゴレに入ってくれるかな……?」

「さあな」

「さあなって……」

「とにかく今回のことは9代目には俺から説明しといてやる。後のことは俺に任せて、お前は2日後のテロに備えてろ」

「うん」

そして次の日。テロが起こる1日前。8月30日。風紀委員17
7支部。

ジャッジメント

「ええ!? ボンゴレがテロを阻止するのに協力してくれるんですか
!?!」

「うん」

ツナは美琴たちにボンゴレファミリーがテロを阻止するのに協力
してくれていることを話した。

「それとボンゴレだけじゃなくて9代目が他のファミリーにも声をか
けてくれるって」

リボーンが昨日9代目に今回のことを話した際に9代目は他の
ファミリーに協力して貰えるよう話しをしてくれるよう約束してく
れたのである。

「ど、どうしてそこまで……? これは私たちの世界の問題なのに
……」

固法はわからないでいた。学園都市の問題に協力してくれる理由
が。

「この世界に来た俺を助けてくれたこと。学生誘拐事件の時に俺たち
の世界の人間が学園都市を混乱させたお詫びをさせて欲しいんだっ
て」

「なんて方ですの……」

(シスターズあの子たちを引き取ってもらってるだけでもありがたいのに……)

9代目のあまりの心の広さに黒子と美琴は驚きを隠せないでいた。
勿論、ミサのことも9代目はちゃんと考えている。しかし、黒子たち
がいる前でミサのことは言えないのでツナが伏せただけである。

「協力はありがたいけど……本当に大丈夫なの? 相手は2万体の
バワードスーツ
駆動鎧よ?」

「そつちは大丈夫です……ただどちらかと言えば相手がトラウマにな
らなければいいんですけど……」

いくらツナの世界の仲間が協力してくれるといっても2万体の
バワードスーツ
駆動鎧相手にしても大丈夫かどうか固法は心配していた。ツナの仲
間の心配よりもSTUDYのメンバーを心配していた。闘争心が折

れるだけならいいのだが、トラウマにまでなられたら流石に申し訳ないと思っっているのである。

「ト、トラウマ……」

「白井さん!」

「ちよっ!?! 黒子!?!」

(そうだった! 黒子はすでにトラウマになってたんだっ!)

トラウマと聞いた途端、黒子は両腕をクロスさせ両腕を握った状態で震えてしまっていた。前に獄寺たちが起こした騒動を思い出したのである。そんな黒子を見て初春と美琴は驚きを隠せず、ツナは黒子がトラウマについて思い出した。

ツナたちの世界の仲間の協力が得られることに成功し、後は決戦に挑むだけとなるのだった。

標的（ターゲツト） 200 集結

そして8月31日。早朝。ついにテロが起こる日となった。

「いよいよだ」

ここはSTUDYの本拠地。眼鏡をかけ白衣を纏った青年。STUDYのリーダーである有富が不適な笑みを浮かべながらそう言った。

「いよいよ僕たちの野望が叶うんだね」

「長かったわね」

有富と同じく眼鏡をかけ白衣を纏った小太りの青年と眼鏡を白衣を纏った茶髪の女性が呟く。この2人は有富と同じくSTUDYのメンバー関村忠弘と桜井純である。

「という訳だしっかり頼むぞ」

「……」

邪悪な笑みを浮かべながら有富は後ろを振り向いた。そこには青い髪のショールヘアーの女性がいた。この女性こそ布束砥信である。

（ジャーニー……）

そして布束の後ろを振り向いた。そこには水の入った容器があり、その中にはフェブリと瓜二つの存在がいた。この少女こそジャーニー。フェブリの姉であり今回のテロによって駆動鎧パワードスーツを動かしている存在である。

（また救えないのね……）

布束の脳裏にはミサたちの姿が浮かんでいた。布束はツナと美琴がアイテムと戦っている時に別の施設でミサたちを救おうとした。しかしアイテムの1人である絹旗に捕まりその後、STUDYに売られた。STUDYに入った布束はミサと似たような存在であるフェブリを救おうとフェブリを逃がした。そしてフェブリの毒の中和剤のデータを入手しようとしたがところを有富に見つかってしまった。だが入手しようとしたデータは偽物であり本物のデータは有富に破壊されてしまった。布束は暗部に売られている。もし逃げようとする

れば学園都市を敵に回すことになってしまふ。その為、布束は従うしか道はなかつた。

「さあ始めよう。我々の計画……革命未明を！」

「……」

有富がそういういい放つと布束は苦悶の表情を浮かべながらコンピューターに映っているキーボードを見つめる。そしてジャーニーの能力を発動させる為にエンターキーに向かって右手の人差し指を降ろして行く。

その時だった

「これは!？」

「どうした桜井?」

「全ての会場に人がいるわ!」

「何だと!？」

「学究会の会場は全部で4つ存在する。そしてここは第1会場。

「そろそろだな。てめえら準備できてんだらうな?」

「おう」

「極限に任せておけ!」

「負けない」

「何が何でも死守してみせます!」

獄寺はダイナマイト、山本は愛刀である時雨金時を構える。了平はボクシングの構えを取り、クロームが三叉槍、バジルは三角定規の形をした武器であるメタルエッジを構えた。

「みんな準備はいい?」

「結局、任せておけ」

「うん」

「ああ」

「OKだぞ☆」

炎真がそう言うのと緑色の髪に眼鏡をかけた男と、ぽつちやりした大柄な男と、強面なリーゼントヘアの男とサングラスをかけ浮き輪のようなものを身に纏った女性が返事をする。この3人の名は青葉紅葉、あおばこうよう 大山らうじ、おおやま 水野薫、みずのかおる SHIT・P。しつとぴー シモンファミリーの守護者である。

「うつひよー！ 君たちめつちや可愛いじゃん！ 連絡先教えてよー！」

「ひっー！」

「ちよ!? こんな時に何を言ってるの!?!」

「ジュリー貴様!!」

「ガフツ!!」

こんな時にジュリーがナンパして来た為、黒子はシャマルと同じオーラを感じたのか恐怖し、固法は困惑を隠せなかった。アーデルは嫉妬のあまり怒り狂いジュリーに鉄拳を喰らわせた。ジュリーは仰向けの状態で倒れてしまう。

「しかしまあ……風紀委員がマフィアと組んで戦うなんて……こんな後にも先にもないわね……」

「本当ですわ……」

「何、言ってるんだ。いずれお前らもボンゴレの一員となってあいつらと一緒に戦うことになるんだぞ」

「私はマフィアになる気はないわよ!?!」

「私たちを勝手にボンゴレの一員にカウントするのは止めて下さいましー！」

第2会場

「うゝ おおおおおい！ 敵まだか！」

長髪で銀髪の男がおもいつきり叫ぶ。この男の名はS^{スベルヒ}・スクアアロ。ボンゴレが誇る最強の暗殺部隊、ヴァリアアの幹部である。

「俺たちに機械掃除をやらせるとは……」

「もう。ここまで来て文句言わないのレヴィ」

「ししし。でも運動には丁度いいじゃん」

黒髪に背中に6本の傘を携えた男とサングラスをかけたオカマと目元を前髪で隠している男がそう呟く。この黒髪の男の名はレヴィ・ア・タン。オカマの人物はルツスーリア。金髪の男の名はベルフェゴール。3人ともスクアアロと同じくヴァリアアの幹部である。

「金さえ貰えれば内容はどうだっていいよ」

目元を自身に纏っている黒いフードにて隠し、宙に浮いている赤ん坊が呟く。この赤ん坊の名はマーモン。ヴァリアアの幹部の1人であり、アルコバレーノの1人だった人物である。

「久々に大暴れしてやるか」

「あんまり無理し過ぎんなよボス」

そして同じくディーノが鞭を構え、右腕であるロマーリオが銃を構える。

「すいません……あの人たちは一体……？」

ロマーリオはディーノの部下だということを会話から察することはできたが、スクアアロたちが何者なのかがわからず初春はディーノに詳細を求めた。

「ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー。ボンゴレが誇る最強の暗殺部隊の幹部たちだ」

「ボンゴレ最強の暗殺部隊!？」

スクアアロたちが世界最強のマフィアであるボンゴレファミリ

の最強の暗殺部隊だと知って驚きを隠せないでいた。

「じゃあ。あの人たちもボンゴレの方ですか？」

「僕を醜いマフィアと同じにするなど心外ですね」

初春がそう言うのと右目に六の文字が刻まれたオッドアイの青年が返事をした。この男の名は六道骸^{ろくどくむくろ}。エストラネオファミリーの所属していた人物であると同時にエストラネオファミリーを壊滅させた人物でもある。2年前に憑依弾を使ってツナの体に乗っ取りマフィアの殲滅を企んだが、力に目覚めたツナに敗北し復讐者^{ヴァインディチェ}の牢獄に投獄された。だがD・スピードとの戦いの功績によって牢獄から解放された。

「そうたびよん！ 2度と俺たちをマフィア扱いするんじゃないやねえびよん！ 俺らは骸さん一派だ！」

「犬。うるさい」

金髪で柄の悪い青年に眼鏡をかけた青年がそう言った。この2人の名は城島犬^{じょうしまけん}と柿本千種^{かきもとちくさ}。骸と同じくエストラネオファミリーに所属していた人物である。ファミリー上層部の非道な実験から解放してくれた骸に忠誠を誓っている。

「それにネーミングセンスがなさすぎですー。相変わらず犬並の脳ミソですな犬兄さん」

「うっせえびよん！ 変な被り物をしてるお前に言われたくないびよん！」

林檎の被り物をした少年に犬がツツコミをいれる。この少年の名はフラン。フランはマフィアでも何でもなく一般人であったが、術師としての才能があった為に骸一派とヴァリアーにスカウトされた。のだがフランの性格に問題があった為、骸一派もヴァリアーも互いにフランを擦り付けるといふ結果に。最終的にフラン自身が骸たちについていくことを決めたのである。

「ねえ敵はまだな訳？ さっさと金貰って帰りたいんですけどー？」

茶髪のショートヘアの少女がめんどくさそうな顔をしながら呟いた。この少女の名はM・M。骸たちが日本に来る前に拘留されていた刑務所に捕らわれていた人物なのであるが、骸たちが脱獄する際

と一緒に脱獄し現在は骸の仲間になっている。ちなみにマーモンと同じく金に強欲。金の使い道は全て洋服やバッグに使用。骸といのも骸の金払いがいいからである。

「前にも言ったはずよ。あなたは間違ってる。大事なものは愛よ」

「あ、あんたは……!?!」

すると今度はビアンキが現れる。ビアンキを見てM・M・Mは表情を歪ませる。ビアンキとM・M・Mはかつて敵対し死闘を演じたことがある。すると2人はお互いに睨み合い、火花を散らせる。

(ど、どうしましょう……正直、私だけで手に負えるんでしょうか……?)

第3会場

「ど、どうしよう……僕チン不安になってきた……」

「ハハン。安心なさいデイジー。いくら数が揃おうと所詮はただの口ポット。我々の相手ではありませんよ」

緑色の髪の少年がガタガタと震えているのを見て同じく緑色の髪をした青年が落ち着くよう促した。この2人はデイジーと桔梗。白蘭の配下である真^{リアル}六弔花のメンバーである。

「ねえねえ! どっちが一番、倒すか競争しようよ!」

「バーロー。俺はガキの戯れに乗る気なんてさらさらねえよ。1人でやってろクソガキ」

「子供扱いすんなー! バカザクロ!」

水色の髪の少女がだるそうな顔をしてる赤い髪の青年にそう言った。この2人の名はブルーベルとザクロ。この2人も真^{リアル}・六弔花のメンバーである。

「悲しき者よ」

「ちよつとトリカブト! あんたまでザクロの味方してんじやないわ

よ！」

ブルーベルとザクロのやり取りを見て仮面を被りローブに身を包んだ謎の人物がそう言った。この人物の名はトリカブト。真六弔花^{リアル}の1人ではある。詳しい詳細はわからないがトリカブトの本体は仮面であり仮面を被っているのは生贄なのである。詳しい詳細は知られていない。

「これが沢田さんのご友人たちですの……？」

「あんな子供まで……」

「本当に大丈夫なのでしょうか……？」

桔梗を始めとする真六弔花^{リアル}を見ながら婚后、泡浮、湾内はそう呟いた。

「お前たちの気持ちもわからないでもないが腕は立つ奴らだ。いつでも知らない男にこんなことを言われても無理だろうが……」

すると金髪の青年が婚后たちにそう言った。この男の名はガンマ^{ガンマ}。ジツリヨネロファミリーの一員でありユニの右腕である。

「おや。なぜユニ様の右腕であるあなたがなぜここに？」

ジツリヨネロファミリーのNo.2、ユニへの忠誠心が特に高いγがここにいる理由が桔梗にはわからないでいた。

「姫の命令だ。命を救ってくれた恩を返す為に協力してくれってな。ま。俺も個人的に姫の命を救ったボンゴレには借りを返さないといけないと思ってたところだしな」

「ユニだけじゃないぜ」

「沢田に命を救われた奴はここにもいるぜコラ！」

そしてさらにラルとコロネロが現れる。この2人もユニと同じくツナに命を救われた。その恩を返す為にラルとコロネロも参戦したのである。

「喋る赤ん坊……」

「リボーンさんみたいですわね……」

「ご友人の方でしょうか……？」

リボーンと似たような存在であるコロネロを婚后、湾内、泡浮は不思議そうな顔で見っていた。

「しかし解せませんね。ジツリヨネロファミリーで一番の実力者であるあなたが命令とはいえユニ様の護衛を外れるなんて」

「その点は問題ない。姫は学園都市にいる。しかも学園都市の中でも安全な場所にな」

「？」

第4会場

「何で君がここにるの？」

「沢田綱吉には命を救ってもらった礼がありますから」

第4会場には雲雀とカンフー服を身に纏った三つ編みの赤ん坊がいた。この赤ん坊の名は風^{フオン}。アルコバレーノの1人だった人物である。

「そういう意味じゃないよ。僕は1人で戦いたいんだ。そこにいられたら邪魔だよ」

「相変わらずですね。安心して下さい。あなたの邪魔にならないようあなたの目の届かないところで戦いますから」

虹の代理戦争にて自分の代理として戦ってもらった風は雲雀の性格を理解していた。

そして

「いよいよ始まるわね」

「ああ」

学園都市にあるとあるビルの上。そこに美琴と超^{ハイパー}死ぬ気モードとなりフェブリを背中に乗せたツナがいた。フェブリは紐で固定されている為、ツナの動きが制限されることはない。

「安心しろフェブリ。俺の誇りにかけてお前をジャーニーと会わせる」

標的（ターゲット）201 10代目ファミリー

STUDYの本拠地

「なぜ僕たちの計画が!?!」

「確かにテストでパワードスーツ駆動鎧を動かしたりはしたけど計画のことはバレていないはずよ!」

自分たちの計画がバレていたことに関村と桜井は動揺を隠せないでいた。

「いいじゃないか。奴らが誰だろうとこちらの物量には遠く及ばない。我々の計画に何ら支障はない」

計画が露見されていたことに有富だけは動揺せず、不敵な笑みを浮かべながらそう言った。

「布束。起動だ」

「っ……!?!」

有富が布束に命令する。布束は苦渋の表情かおを浮かべながら画面に映っていたエンターキーを押した。これによってジャーニーの能力が解放され、学究会会場にある2万体のパワードスーツ駆動鎧が起動し始める。

第1会場

「来やがったぜ」

獄寺の視線の先は数百を越える大量のパワードスーツ駆動鎧が出現し、獄寺たちへと向かって来る。

「いくぞ! 瓜!」

「小次郎、次郎」

「我流！」

「ムクロウ！」

「アルフィン！」

獄寺は嵐のバググルから嵐猫の瓜を。山本は雨のネックレスから雨燕の小次郎と雨犬の次郎を。了平は晴のバングルから晴カンガルーの我流を。クロームは霧のイヤリングから霧フクロウのムクロウを。バジルはリングから雨イルカのアルフインを呼び出した。

「二二形態変化」

獄寺、山本、了平、クローム、バジルがそう言うとき匣アニマルの形態が変化する。獄寺は体中にダイナマイト、口に着火用のパイプとサングラスが装備される。山本は2本の日本刀に服が和服へと変貌する。了平は上半身裸になり両手にボクシングのグローブとヘッドギアが装備される。クロームは持っていた三叉槍が錫杖へと変貌。バジルのメタルエッジは十手へと変貌する。

「バジルお前！ 新しい力か！」

「はい！ 雨の十手。拙者の新しい武器です」

「拙者って……」

「この方のことだったのですね……」

今まで形態変化を見せたことのないバジルが形態変化を見せた為、山本は表情を明るくさせた。バジルの一人称を聞いて固法は驚き、黒子は前にツナが言っていた人物だということを理解する。

「果てる！ ロケットボムVer. X！」

獄寺はパイプに炎を灯すとダイナマイトの導火線に炎を着火すると駆動鎧に向かってダイナマイトを放った。放たれたダイナマイトは空中で2度方向転換し駆動鎧はバラバラに破壊される。嵐属性の炎の特徴である分解が加わったダイナマイトの威力は通常のダイナマイトの何倍もの威力を発揮する。

「時雨蒼燕流攻式八の型。篠突く雨」

獄寺の放ったダイナマイトの爆煙の奥からさらに駆動鎧が現れ

る。山本はジャンプし空中から無数の斬撃で駆動鎧を真つ二つにしていく。

「極限太陽！」

了平が駆動鎧に拳を叩き込んだ。すると拳を放った余波で爆風が発生し大量の駆動鎧が吹き飛んでいく。晴の活性の炎を全身に作用させることで了平は身体能力を何十倍にも引き上げているのである。だがこれは肉体どころか細胞まで何億人に1人というバネとしなやかさを持つている了平だからできる。まさに神業である。

「はあー！」

バジルは駆動鎧の群れの中で突っ込んでいく。そして十手と体術を巧みに使い次々に駆動鎧一体一体を一撃で倒していく。家光に鍛えられているバジルは、獄寺たちに比べると派手さはないが戦闘能力は高い。

「やあー！」

するとクロームは地面に三叉槍の柄の部分を地面に突き刺した。すると地面から無数の火柱が上がり、駆動鎧に火柱が直撃する。

「熱っ!？」

「火柱!?! どうなって!?!」

急に地面から火柱が上がり、周囲が地獄絵図と変化したことに固法と黒子は驚きを隠せないでいた。

「落ち着け。これはただの幻覚だぞ」

「幻覚……前に見た有幻覚という奴ですのね」

「違えぞ。こいつは霧の構築の力にクロームの能力を加えたただの幻覚だ」

「「スキル?」」

「六道輪廻って知ってるか?」

「聞いたことがあるわ。人間は死ぬと地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天界道にいくつていう……」

「そうだ。クロームはその6つの冥界の力を使うことができるんだ。そしてこの力は地獄道。永遠の悪夢により相手の精神を破壊する能力だ」

「怖っ!?!」

妖艶の見た目とは裏腹に使う力が相手の精神を破壊するという能力だった為に2人は顔を真っ青にし恐怖していた。すると火柱が消えて元の状態へと戻る。火柱を喰らった駆動鎧パワードスーツに傷1つついてはいなかったが、電源が落ちたかのようにぐったりとしていた。

「ほ、本当にただの幻覚だったのですね……」

「幻覚は5感を支配する。5感を支配するということは知覚のコントロール権を奪われることだ。さっきの火柱に直撃して一瞬でもリアリティーを感じていたらお前らもあの駆動鎧パワードスーツみたいになっただろうな」

「っ……!?!」

リボーンがそう言うのと黒子と固法はクロームの力によって動かなくなった駆動鎧パワードスーツを見て恐怖すると同時にクロームが味方でよかつたと心の底から思っていた。すると今度は獄寺たちが戦っている後ろから駆動鎧パワードスーツがやって来る。

「僕たちも行くよ」

すると後ろからやって来る駆動鎧パワードスーツの前に炎真を筆頭とするシモンファミリリーが横に並ぶ。

「ツナ君の為にほここはシモンファミリくリーが食たい止める」

標的（ターゲット）202 シモンファミリー

ついにシモンファミリー力を解放する。

「結局、俺の前では数など意味を成さぬということを教えてやろう」
紅葉がそう言うのと紅葉の周囲に大量の葉が出現する。これは森の炎の力である。シモンファミリーは上空の7属性と対を成す大地の7属性を使う。紅葉の森の炎の特徴は切断。葉の形をした大量の炎は切れ味抜群の刃であり、死角皆無の全方位攻撃にもなる。そして刃と化した炎が一斉に駆動鎧パワードスーツに襲いかかり豆腐を切るかのように次々に切断していく。

「脆いな。人間は鍛えれば鍛える程、強くなる。しかしお前らには限界強度というものがある。結局のところ真の強さとは己自身によって鍛えあげられた肉体だ！」

すると紅葉は森の炎によってできた刃を自分の周囲に展開しながら駆動鎧パワードスーツの群れの中に突っ込んでいき拳を放っていく。駆動鎧パワードスーツは紅葉の拳によって砕かれていく。紅葉は了平と同じくボクシングの心得がある。故に接近戦にも強い。紅葉の強さの真髄は炎ではなく鍛え上げられた肉体と決して砕けぬ鋼の心なのである。

「機械の突進くらいじゃおいらは倒せないよ」

するとらうじの顎に巨大な炎の角が構築される。そしてらうじは突進していき駆動鎧パワードスーツを蹴散らしていく。らうじの使う炎は山の炎。山の炎の特徴は浸透同調。大地の土や砂に浸透同調して炎を帯びた土砂を自在に操ることができる。さらに山の炎は大地の7属性の中でも随一の爆発力と硬度を誇る為、らうじの突進を正面から受け止められる者などわずかである。

「どれだけたくさんいようと標的ターゲットに辿り着けなかったら全く意味がないんだゾ☆」

SHITT・Pの周囲に沼が展開されていた。そして沼に入った駆動鎧パワードスーツは沼に沈んでいき溶けてしまい完全に消失してしまう。SH

ITT・Pが使う炎は沼の炎。沼の炎の特徴は発酵。どんな無機物をも発酵させることができる為、防御が意味を為さない。しかも駆動鎧は敵を見つけ次第、特攻するようにプログラムされていて上に遠距離攻撃がない為、自分の周囲に沼を作っておくだけで勝手に突っ込んで沈んで溶けてしまう。この未明革命においてSHITT・Pほど脅威の存在はいないといつていい。

「そっちが数で来るならこっちも数で応戦しよう」

するとアーデルの周囲に氷でできたアーデルを500体程、出現させた。アーデルの使う炎は氷河の炎。氷河の特徴は凍結。あらゆるものを凍結させることができる。そして今アーデルが使った技はブリザードロイド。一体一体がアーデルと同じ戦闘力を持った氷の軍隊。無敵の攻撃隊を作ることができる。

「はあああー」

アーデルの声と共にブリザードロイドが一斉に駆動鎧に襲いかかる。そしてアーデル自身もブリザードロイドを周囲に配備しながら駆動鎧を体術と両腕に装備された刃にさらに3つの刃が装備された武器を使って次々に駆動鎧を破壊していく。物量は依然、駆動鎧たちの方が遥かに上であり数を上回ることができない。だが戦闘力の方はブリザードロイドの方が上である為、戦況は大きく変わる。

「うおおおおおー」

薫は雄叫びを上げながら左手に装備されているランサーで次々に駆動鎧を刺して一撃で破壊していく。薫の使う炎は川。川の炎の特徴は穿孔。貫通力に優れた炎である。

「俺は武に酷い事をしてしまった……更にはボンゴレの仲間的心を傷つけた……それでもあいつらは俺の事を友達だと言ってくれた……あいつらの為なら俺は命を張れる！」

薫はかつてシモンファミリーの計画を知ってしまった山本を刺し、瀕死の重症を負わせた。白蘭が助けに来てくれなければ山本は死んでいたか、生きられたとしても2度と立てないぐらいの重症を。しかしそんな大罪を犯した自分を山本たちは受け入れてくれた。

「大地の重力」

炎真が右手を前に出すと駆動鎧パワードスーツが潰され地面に這いつくばった状態になる。大地の炎の力である。大地の炎の特徴は重力操作。自由自在に重力を操ることができるのである。

「いくら数を揃えたって覚悟のない機械ききみたちじゃあ僕たちの絆を断ち切ることはできないよ」

「つ、強すぎででしょ……!? もう私たちがいなくても大丈夫なんじゃない……!?!」

「な、何を言っているんですの固法先輩！ 学園都市の治安を護るのは風紀委員ジャックジメントの役目なのですよ！ 私たちが戦わないでどうするんですの!」

あまりに強すぎるボンゴレファミリーの守護者とシモンファミリーの力を見て、固法は自分たちがここにいるのが場違いなのだということを理解する。そんな固法に黒子は一括するが、本心では固法と同じく自分がここにいることが場違いだということを頭で理解している。

「固法ちゃんの言う通りだよ黒子ちゃん♪ 君たちはこんな物騒な場所なんて似合わないって！ だからこんな物騒な所とはおさらばして俺と一緒に今から遊園地でも行こうぜー」

「ジュリリーリーリーリー!! 貴様こんな状況で何を言っているー!?!」

「げっ!? こつちに来やがった!!」

「こ、こつちに来ないで下さいましー!」

「に、逃げるわよー!」

ジュリーの発言を聞いた途端、ブリザードロイドを引き連れたアデルがジュリーたちの方に向かって来た。ブリザードロイドと怒り狂ったアデルを見て、ジュリーたちは逃げる。そして駆動鎧パワードスーツを倒し道を開きながらアデルとブリザードロイドから逃げなければならぬという状況。まさしく前門の虎、後門の狼である。

恋する乙女、アデルの嫉妬力によって戦況は大きく変わったのであった。

標的（ターゲット） 203 ヴァリアー

第1会場が戦っている頃。第2会場では。

「いくわよーん！」

ルツスーリアは鮮やかなフットワークにて駆動鎧を翻弄し晴の炎を纏った拳で次々に破壊していく。

「太陽 膝！」

そして鋼鉄が仕込まれた左膝にて真空飛び膝蹴りを繰り出す。鋼鉄のかたさと炎の破壊力が加わった膝によって駆動鎧を貫通し次々に破壊していく。

「ぬうおおおおおー！」

レヴィは雷の炎を傘を纏った傘と匣アニマルである雷 エイのリヴァイアの放電を使って駆動鎧を破壊していく。雷の炎の特徴は硬化。硬化によってコーティングされた武器は最強の盾にも矛にもなる。

「SUPER・LEVI・VOLT！」

8本の電気傘が空中で開き傘の中心から伸びた針状の絵柄の部分から電撃が広範囲に渡って放たれた。死角皆無の攻撃にリヴァイアの発炎能力によって増幅された一撃は通常の何倍もの威力を発揮する。

「ししし。単純過ぎ！」

ベルの周囲にある駆動鎧が急に動かなくなる。ベルの武器であるナイフの柄に視認しにくい程のワイヤーを取り付けてある。そのワイヤーつきのナイフを駆動鎧に投げる。そして駆動鎧に刺さったところでワイヤーを張る。それを何重にも張り巡らせてワイヤーによる領域を作って駆動鎧は動けなくさせたのである。

「紅蓮の炎」

ベルの匣アニマルである嵐ミンクのミンクが嵐属性の広範囲に

放つ。嵐属性の特徴である分解の炎によって駆動鎧は完全に消失してしまう。

「この程度で金が貰えるなんて。今回はなんて楽な仕事なんだ」

マーモンは幻覚で氷の空間を作り出した。駆動鎧は電源を落としかたかのように大人しくなる。

「仕事は楽だけどまた金を集めるのは一苦労だ」

マーモンは代理戦争においてヴァリアー専用のリングをタルボに依頼した。しかしヴァリアー専用のリングであるヴァリアーリングに造るにあたってマーモンが今まで貯めてきた財産を全て使うことになってしまった。虹の代理戦争が終わった後も再び金を集め始めたマーモンであったがヴァリアーリングを作った時の金には遠く及んでいない。

「うお、おおおおおい！ 全然話にならねえぞ！」

スクアアローが左手の手の甲に固定してある剣に雨の炎を灯しながら駆動鎧を次々に斬り裂いていく。そしてスクアアローの匣兵器である暴雨、鯨のアアローが駆動鎧を蹴散らしていく。

「鯨の特攻！」

スクアアローが縦横無尽に剣を振り回しながら駆動鎧を斬り裂いていく。鯨の特攻。剣の帝王と謳われ先代のヴァリアーのボスであったテュールを倒した技にしてスクアアローの奥義でもある。

「す、凄い……これがボンゴレ最強の暗殺部隊……人間とは思えない……」

「これこそヴァリアークオリティーってやつだな」

「ヴァリアークオリティー？」

ロマーリオの言うヴァリアークオリティーが何なのかかわからず初春は疑問符を浮かべる。

「ヴァリアーは人間技では到底クリアできないといわれる殺しをいかなる状況でも完璧に遂行してきた殺しの天才集団。その悪魔の所業とも言われる殺しの能力の高さを人々を畏怖の念を込めてヴァリアークオリティーというの」

「だから……」

ビアンキの説明を聞いてヴァリアーがボンゴレで最強の暗殺部隊だと言われる所以を理解する。

「特にあの中でもスクアアロは別格。2代目剣帝であると同時にヴァリアーのNo. 2だからな」

「けんてい?」

「剣の帝王。略して剣帝。まあ世界最強の剣士だと思ってくれ」

「せ、世界最強!」

デイーノが剣帝の詳細を説明する。初春はスクアアロが世界最強の剣士だということも驚いたが世界最強の剣士の称号を持つスクアアロですらヴァリアーにトップになれないという事実には驚きを隠せないでいた。

「でもスクアアロはリング争奪戦で負けてるしもう剣帝じゃないんじゃないかしら?」

「ルツスーリアの言う通りだな。しかも仕込み火薬まで使って負けていたしな」

「マジでださかったよなアレ。しかも奥義もあっさり打ち破られてたよねあのアホロン毛隊長」

「だね」

「づお、おおおおいしい!! 聞こえてるぞおおお!! てめえらああああ!!」

ルツスーリア、レヴィ、ベル、マーモンの言葉を聞いてスクアアロは青筋を浮かべながらぶちギレた。

「そういえばこの人たちは幹部の人だと言ってましたけどボスの方は来ていないんですか?」

「あー……あいつは来ないと思うぜ……あいつはこんなところに来るよな奴じゃないからな……」

「来てたら大変なことになってたと思うぜ」

「同感ね」

初春はヴァリアーのボスの姿が見えないことに疑問を感じていた。デイーノ、ロマーリオ、ビアンキはヴァリアーのボスの恐ろしさを知っている為、むしろ来なくて正解と思っていた。

「XANXASなら来てるぞ跳ね馬」

「はあ!? マジかよ!」

スクアアロからヴァリアアのボスであるXANXASが来ているということを知ってデイーノは驚きの声を上げた。2年前の虹の代理戦争の時は相手がバミューダを筆頭とする復讐者ヴァインデイチエが相手であったが。だが今回の相手はただの機械。XANXASが協力したくなるような相手ではない。

「最近、ボスったら機械が悪くってねー。まあ機械の悪いのはいつものことなんだけど。今回は特に機械が悪くってねー。だからちよつとストレス発散にと思つて連れて来たのよー」

「ストレス発散って……」

ルツスーリアがXANXASが協力してくれた理由を答えた。2万体の駆動パワードスーツによる大規模テロにストレス発散という理由でXANXASが参戦したことに初春は驚きを通り越して呆れてしまった。

「正直、これでボスの機械が治るとは思えぬが」

「大丈夫だって。その為にスクアアロがいるんだぜ」

「ボスの機嫌なら治すにはスクアアロを使うしか方法はないよね」

「うお、おおおおおい!! 何で俺がストレス発散用のサンドバックみたいな扱いになってんだ!!」

レヴィは機械をいくら破壊したところでXANXASの機嫌が治ると思っていなかった。ベルとマーモンはスクアアロを盾代わりにするのでXANXASの機嫌が治るので大丈夫だと思っていた。ベルとマーモンの言葉を聞いてスクアアロは再びぶちギレル。

(一体、ヴァリアアのボスのもってどんな方なんでしょう……?)

スクアアロたちの言うXANXASとはどういう人物なのか気になり出した初春であった。

標的（ターゲツト）204 黒曜

ヴァリアーが大暴れしている頃。同じく第2会場では。

「久々に大暴れしてるびょん！」

犬は駆動鎧パワードスーツの群れに突っ込んでいく。すると動物の牙のようなものを歯に装着した。

「コングチャンネル！」

体全体が駆動鎧パワードスーツよりも大きくなった犬が次々に晴の炎を纏った拳パワードスーツで駆動鎧を破壊していく。犬の能力は動物を体の一部を模したアイテムを口に装着することでその動物の特性を生かした力を使うことができるのである。今のはコングチャンネル。霊長目オラウータン科のニシローランドゴリラの力である。

「めんどい……」

千種は両手に持ったヨーヨーを上放った。するとヨーヨーから大量の小さい針が広範囲に渡って放たれる。針には雲属性の炎が纏っており、雲属性の特徴である増殖によって針はさらに増えている。通常であれば刺さることのない針が炎の破壊力が加わったことパワードスーツによって駆動鎧に刺さる。すると駆動鎧がみるみる溶け始める。千種は針に王水を仕込んでいた。王水とは濃硝酸と濃塩酸の混合物。酸ですら溶けない金や白金をのような貴金属をも溶かすことのできる水溶液である。

「早く帰ってシャワー浴びたい」

こんな真夏の炎天下にいれば動かずとも汗をかくのは必然。汗をかくのが嫌いな千種にとってこんな炎天下で戦うのは嫌で仕方なかった。

「あー。もう相性最悪！」

嵐属性の炎を纏ったクラリネットを振り回しながらM・Mは文句を言っていた。M・Mの使っているクラリネットは特殊な音波を照射し対象物の水分子を振動させて温度を上げて物質を沸騰させる。人間がこの音波をまともに喰らえば爆発する。しかし相手は機

械。水分がない為に広範囲の制圧ができない。M・M・は接近戦も得意ではある為、パワードスーツ駆動鎧相手でもなんなく対応していた。

「これが終わったらバックや洋服を買い漁ってやるんだから！」

いつもと同じ戦法で戦えないストレスからM・M・はイライラしていた。そして衝動買いすることを心に決めたのであった。

「たーまやー」

気の抜けた声を出しながらフランは幻覚から作った本物のミサイルをパワードスーツ駆動鎧を次々に破壊していく。

「クフフ。トレーニングには丁度いいですね」

骸もフランと同じく幻覚から作った本物の物体を創造していた。フランとは違って岩、鋼鉄、爆弾、槍な様々な物を作って攻撃していた。当の本人は幻覚トレーニングにすら思っておらず全然、余裕の様子であった。

「クフフ。せっかくこんな丁度いい練習相手いるのですからアレをやりませよフラン」

「もしかしてミーが考案した師匠の戦闘用コスチューム。シャインニングナツポーアーマーをついに使うんですか？」

「違います」

「ゲロ!?!」

「きやあ!!」

フランの言葉を聞いた途端、骸は持っていた三叉槍でフランの頭を貫いた。その光景を見て初春は悲鳴を上げすぐに視線を反らした。

「師匠ー。痛いですー」

「え……!?! どうなって……!?!」

被り物をしているとはいえ明らかに頭を三叉槍で貫かれているはずなのにフランが無表情のまま覇気のない声でそう言った。初春はどうなっているのかわからず困惑してしまっていた。フランはよく骸のパイナップルヘアーをいじって頭を三叉槍で貫かれている。しかしなぜ平気でいられているのかは解明されていない。

「それ以上、くだらないことを言うのであれば輪廻に送りますよフラン」

「わかりましたよー。やればいいんでしょー。やれば」

骸にそう言われてフランは渋々、了承した。すると骸とフランは霧の炎を高め、一点に集中し始める。すると霧の炎が形を変え何かを形成し始める。

「二幻影龍魔龍牙」
げんえいりゆうまりゆうが

「ド、ドラゴン!?!」

すると空中に巨大な黒い龍が出現する。急にドラゴンが現れたことに初春は驚きを隠せないでいた。2年前の代理戦争にて幻覚から鴉を作ったことがある。その応用技である。すると幻覚でできたドラゴンは爪、翼、尻尾、そして口から霧の炎を吐いていきパワードスーツ駆動鎧を次々に破壊していく。

「クハハハ!! どうですか僕の創り出した世界は!?!」

「手柄を一人占めにするの止めてもらえますか師匠」

2人で幻覚でできたドラゴンを創り出したのにも関わらず、自分一人で創り出したかのような発言にフランは少し不満そうな様子であった。

「ではそろそろ幕引きといきましょうか」

ドラゴンがパワードスーツ駆動鎧を破壊していたのを見た骸は右手の指でパチンと鳴らした。するとドラゴンが膨れ上がり大爆発が発生する。爆発によって大量のパワードスーツ駆動鎧が粉々になっていく。

「落ちろ。そして巡れ」

「師匠。中二臭い台詞もいいですけど相手は機械ですよ」

「お黙りなさい」

標的（ターゲット） 205 親友

「ポイズンクッキング！ イタリアンフルコース！」

そう言うのとビアンキは駆動鎧パワードスーツの群れの中へと突っ込んでいく。

「食前酒！」

ビアンキは毒々しい紫色のシャンパンが入ったグラスを両手に持ちシャンパンを駆動鎧パワードスーツにぶち撒けた。すると駆動鎧パワードスーツはみるみる溶けていく。

「おつまみ！」

ビアンキは毒々しいブルスケッタを駆動鎧パワードスーツに叩き込む。イタリア中部郷土料理でありイタリアのフルコースでは軽食として出る料理。バゲットにオリーブオイルを塗って焼いたものである。

「前菜！」

毒々しいカルパッチョの乗った皿を駆動鎧パワードスーツに向かって放つ。

「第1のお皿！」

毒々しいパスタをロープのように放った。ビアンキの放ったパスタが駆動鎧パワードスーツを拘束し溶かしていく。

「メインディッシュ！」

左手に毒々しい魚料理が乗った皿、右手に毒々しい肉料理が乗った皿を持ち駆動鎧パワードスーツを投げつけた。

「副菜！」

今度は毒々しいサラダが大量に盛られた皿を駆動鎧パワードスーツを投げつけた。

「チーズ！」

毒々しい大量のモッツアレラチーズを次々に投げつけていく。ちなみになぜチーズが出るのかというとチーズはデザート前の消化剤の役割を果たすからである。

「デザート！」

最後に大量の毒々しいフルーツが盛られた皿を駆動鎧パワードスーツをぶち撒ける。

「これが本場イタリアのフルコースよ」

(イタリアのフルコースはあんなやべえもんじゃねえよ……)

ビアンキの発言を聞いてディーノは本当のことを言うどビアンキのポイズンクッキングの餌食になるかもしれないので心の中でツッコミをいれた。

「前にも見たんですけど……ビアンキさんのあの料理は一体、何……!?!」

ゲテモノ料理が好きで初春でさえもビアンキのポイズンクッキングは受け入れることができなかったのか、口元に右手を当てた状態で気持ち悪そうな表情かおをしていた。

「ビアンキは毒蠍の異名を持つ殺し屋ヒットマンでな。作った料理が全て毒料理……ポイズンクッキングになる才能を持つてるんだ……」

「どんな才能ですか!?!」

ディーノからポイズンクッキングの詳細を聞いて初春は驚きの声を上げる。

「久々の死線。やっぱりワクワクするわね。これでリボンがいたら最高ね」

ビアンキはツナの居候になってからは死線に立つことは以前より少なくなつた。しかし今は久々に自分の力を思う存分発揮できる為、満足そうな笑みを浮かべていた。

「さあ。今度は私が直々に調理してあげるわ」

するとビアンキはポイズンクッキングによって作られた料理を持たないまま駆動鎧パワードスーツの群れの中に突っ込んでいく。ビアンキは駆動鎧パワードスーツの攻撃を紙一重で躲しながら駆動鎧パワードスーツの群れの中から抜け出した。

「調理完了」

ビアンキがそう言うど時間差で駆動鎧パワードスーツ一斉に同じタイミングで溶けていく。駆動鎧パワードスーツは完全に原型を留めていなかった。この技の名は千紫毒万紅せんしどくばんこう。ビアンキがリボンとの結婚式で会得した触れたものを全てポイズンクッキングにするビアンキの究極料理奥義である。ビアンキは駆動鎧パワードスーツの群れの中に突っ込んだ際に攻撃を躲すだけでなく駆動鎧パワードスーツにも触れていたのである。

「ど、どうなってるんですか……!? 料理を使っていないのに駆動鎧が……!?」

「千紫毒万紅だ」

「せんし……?」

「千紫毒万紅。触れたものを全てポイズンクッキングにする究極料理にして毒蠍の奥義だ」

「何ですかそれ!」

デイーノから千紫毒万紅の詳細を聞いて初春は驚きの声を上げると同時に恐怖しかなかった。

「そっちに行ったわ! 気をつけなさい!」

ビアンキが叫ぶとデイーノ、初春、ロマーリオの方に大量の駆動鎧が向かっていく。デイーノは鞭を、ロマーリオは銃を構えると初春を護るように初春の前に移動する。

「死炎球!」

上空から球体と化した晴の炎が落ちて来る。炎の球体が駆動鎧に当たると爆発し駆動鎧が破壊された。

「え……!」

そして初春たちの前に黒髪ロングの女性が降り立つ。初春はその女性の後ろ姿を見て衝撃を隠せないでいた。

「大丈夫? 初春?」

「佐天さん……!」

佐天がゆっくりと初春の方へ向いた。初春は佐天が助けに来たことに驚いた。だがそれよりも驚いたのは佐天の姿である。額に炎を灯らせ、両手には黒いグローブを装着。まるでツナのようになったたからである。

「もう初春を危険な目に遭わせたりなんかしないわ」

佐天は思い出す。自分が幻想御手に手を出したことで初春を悲しませ、人質にさせてしまったことを。

「だから今度は私が初春を護るわ」

そう言うと佐天は再び振り返る。そしてXグローブに晴の炎が灯る。

「私の^{親友}初春には指一本触れさせない！」

標的（ターゲット） 206 兄弟子と妹分

ついに佐天が現れた。

「死炎速！」

両手を後ろに下げて炎を絞ってジェット噴射の要領で加速した蹴りにて佐天は駆動鎧パワードスーツを蹴り飛ばした。蹴り飛ばしたことで他の駆動鎧パワードスーツも巻き込みボーリングのピンのように倒れていった。

「死炎球収束！」

佐天は炎の逆噴射させると上空に飛ぶ。そして人差し指の先に炎を収束して小さく球を錬成した。それはさながら小さな太陽のようだった。

「死炎球拡散！」

収束された炎の球から広範囲に渡って炎が拡散され放れていく。放たれた炎によって駆動鎧パワードスーツは破壊されていく。それはさながら全てを照らす太陽の光のようだった。

「おや……？」

「だ、誰だびよんあいつ!? ボンゴレと同じグローブを持つてるびよん!？」

「どういうこと……？」

ツナと同じグローブを持って戦う佐天を見て骸は興味を持ち、犬はわかりやすく動揺し、千種はポーカーフェイスでいながらも動揺していた。

「一体、何なのよあの娘!？」

「あのグローブで戦ったのは初代と沢田だけのはずだろ……？」

「まさかボンゴレブラッド・オブ・ボンゴレの血を持っていない人間がああグローブを手にするなんてね」

「どこのファミリー奴だ一体?！」

「よ、妖艶だ……」

骸たちと同じくレヴィ、ルツスーリア、ベル、マーモン、スクアーロも佐天の存在を見逃せないでいた。レヴィに至っては違う理由で見逃せないでいた。

「涙子は裏社会の人間じゃねえ。涙子は学園都市の人間だからな」
「「「「「つ!?!」」」」」

デイーノが佐天のことを話す。佐天が裏社会の人間どころか学園都市の人間であると知って驚きを隠せないでいた。

「な、何か佐天さんを見て動揺してますけど……?」

「あの嬢ちゃんの装着しているグローブを見て驚いてるのさ」

「あのグローブがですか?」

佐天を見て動揺している理由が佐天が装着しているグローブだとロマーリオから教わる初春であったが、なぜグローブを見て動揺するのかわからないでいた。

「あのグローブはボンゴレファミリーの創設者にして歴代最強のボスと謳われたボンゴレI世^{ブリーモ}が使っていたグローブと同じものだからな」
「歴代最強……!?! しかもボンゴレの創設者と同じ武器を佐天さんが……!?!」

ロマーリオが佐天のX^{イクス}グローブの詳細を説明する。初春はX^{イクス}グローブがそんなに凄なものだということを知って衝撃を隠せないでいた。

「今は形は違うがあのグローブで戦ったのは初代を除けばツナだけだ。だがボンゴレの血統でもない人間であるあのグローブで戦ったのは裏社会の歴史を紐解いても涙子以外誰もいねえだろうがな」
「なっ!?!」

たった1カ月で成長しただけでなく裏社会の歴史に残るような偉業を親友^{佐天}が成し遂げてしまったことに初春は衝撃を隠せないでいた。

「時雨蒼燕流攻式三の型。遣らずの雨」

(あれは!?!)

佐天は炎の刀を錬成すると上空から刀を蹴り飛ばすと駆動鎧^{パワードスーツ}の胴体を貫いた。佐天の動きを見てスクアードは目を見開いた状態で驚いていた。すると佐天は炎を逆噴射させて先程、貫いた駆動鎧^{パワードスーツ}を前に一瞬にして移動して刀を引き抜くと同時にそのまま体を反転させて背後にいた駆動鎧^{パワードスーツ}に斬撃を繰り出した。駆動鎧^{パワードスーツ}は持っている黒

いホツケーのステイツクみたいな武器で防御体勢に入った。だが佐天の刀がステイツクにぶつかるところか右手に握られていた刀はどこにもなかった。

「時雨蒼燕流攻式五の型。五月雨」

斬撃を繰り出す瞬間に刀の持ち手を入れ替えてパワードスーツ駆動鎧の両足に斬ってパワードスーツ駆動鎧を強制的に動けなくした。

（間違いねえ……あれは時雨蒼燕流攻式五の型。五月雨……）

武者修行していた時に戦った時雨蒼燕流の継承者とリング争奪戦で山本と戦ったことのあるスクアードは知っていた。佐天が使っている流派が時雨蒼燕流だということ。

「さてと。妹分が戦ってんのに兄貴分の俺が戦わねえ訳にはいかねえよな」

佐天の戦いっぷりを見て熱くなったのかデイーノは鞭を構えると同時に鞭に炎を灯した。

「スクーデリア」

デイーノのリングから大空属性の馬が現れた。デイーノのボックス匣アニマル、カザアット・アラート天馬のスクーデリアである。虹の代理戦争が終わった後にデイーノが手に入れた新たな力である。デイーノはスクーデリアに跨がる。そして疾走するスクーデリアの上から鞭を振るってパワードスーツ駆動鎧を次々に破壊していく。

「す、凄い……!?!」

「かっこつけすぎだぜボス」

デイーノの鮮やかな鞭捌きを見て初春は驚くと同時に感動していた。ロマーリオは微笑みながらそう言った。

「だが」

するとロマーリオは持っていた銃から1発の弾丸が放たれた。弾丸には雲属性の炎が纏われており弾丸が増加しパワードスーツ駆動鎧を貫いた。ロマーリオは早撃ちの達人。リボンに比べれば天と地程の差があるがロマーリオの右に出る者はそういるものではない。

「仕留めきれてねえぜボス」

「仕留めきれてないんじゃないやなくてわざと仕留めなかったんだよ。お前

も暴れたいだろうと思つたからな」

「よく言うぜ」

(凄いなー……)

デイーノとロマーリオのやり取りを見て初春はデイーノとロマーリオの信頼し合っているのを見て感動していた。同時に自分も黒子とあんな風になれたらいいなと思つていた。

「そんじゃ一気にいこうぜ。涙子」

「ええ」

デイーノはスクーデリアと共に上空を舞い、佐天は抜刀の構えをしながらパワードスーツ駆動鎧の軍勢の中に突っ込んでいく。

サルト・ヴォランテ・ヴェローチ・コメ・ルーチェ
「光速 天 翔 ！」

「時雨蒼燕流。攻式八の型。外持雨」

デイーノは空中から大空属性の炎を纏つた鞭を高速で振るい、佐天は高速回転軸しながら斬撃を喰らわせる。パワードスーツ駆動鎧は広範囲に渡って次々に破壊されていく。

(俺が戦つた奴らにあんな技はなかった……まさかこれまでになかった新たな型を作つたともいえるのか……!?)

佐天が作つた八の型、外持雨を見てスクアーロはさらに驚愕する。時雨蒼燕流は先人の残した型を受け継ぎながら新たな型を作つてそれを後の継承者に伝承していく。その為には時雨蒼燕流の継承者に渡される時雨蒼燕流以外では変形しない刀、時雨金時を變形させなければならぬ。継承者の山本が時雨蒼燕流を継承してからまだ2年しか経過していない為、佐天は時雨金時を持つてはいない。しかし修行の時に時雨金時を借り、時雨金時を變形させている。

「クイーン。形態変化」
カンレオ・フォルマ

佐天がそう言うのと右手の薬指に装着しているリングが光り輝いていく。

パレストラ・デイ・レオッチャ
「雨のボウガン」

佐天の右手にボウガンが握られる。佐天は再び上昇する。そして標準をパワードスーツ駆動鎧に定めると雨属性の炎を纏つた矢が超スピードで放たれるとスピードに加え死ぬ気の炎を纏つた影響で矢はパワードスーツ駆動鎧を貫通

する。そして雨属性の特徴である鎮静によって駆動鎧の動きが鈍化していく。

「まだまだー！」

佐天は左手の炎を逆噴射させて上空を移動していく。

ヴエレッタ・ファイアンマ・ブルーヴァイア
「雨の炎矢」

上空を移動しながら佐天は矢を放っていく。矢が雨のように降り注いでいき駆動鎧を次々に鎮静化していく。

パワードスーツ
ヴエレッタ・ファイアンマ・ヴァイラータ
「旋回炎矢」

佐天は上空で止まるとその場で横方向に高速回転し始める。そして回転しながら矢を放つことによって多方向に矢が飛び駆動鎧を次々に鎮静化していく。

「ボウガン……そんな武器まで扱えるようになってるなんて……」

「ありやただのボウガンじゃねえ。ボンゴレファミリーの8代目のボス。ボンゴレVIII世が使っていたのと同じタイプのボウガンだ」

「ええ!？」

ロマーリオは佐天の持っているボウガンについて説明する。初代のグローブに加えてさらに8代目のボスのボウガンまで持っている。と知って初春は驚きの声を上げる。

(でも……よかったです……)

初春は戦う佐天を温かい目で見守っていた。佐天はずっと能力開発で上手くいかなくて悩んでいた。だが今は違う。能力とは違う力ではあるが力を手に入れ、前に進むことができたのだから。

標的（ターゲット） 2007 ミルファイオーレファミ
リー

同じく第3会場では。

「白蘭様はおもいきりやっていいと仰られた。という訳でおもいきりいきますよ」

守護者のリーダーである桔梗がそう言うと、桔梗、ブルーベル、ザクロ、デイジー、トリカブトは匣ボックスを取り出した。

「「修羅開匣」」

そして5人は一斉にリングに炎を灯して匣ボックスに炎を注入する。すると5人は炎の球体に包まれていく。少しすると炎が消え、5人の真の姿が露になる。

「な、何ですのあれは……!？」

「どうなっていますの……!？」

「に、人間……!？」

5人の姿を見て婚后、湾内、泡浮は衝撃を隠せないでいた。デイジーは体中に鱗が生え、トリカブトは目玉の模様が描かれた翼が生え、ザクロは全身が赤くなり腕と足が一回り大きくなり手と足の爪が伸び、ブルーベルは上半身裸になり足から尾ひれが生え、桔梗は髪の毛が一気に伸び先端から牙の生えた細長い生物が無数に生えていた。

「修羅開匣か。コラ」

「修羅かいこう……?」

「修羅開匣。生物の力を人間に宿すことで人間を越えた力を発揮できるんだ。コラ」

「そ、そんなことが……!？」

コロネロから修羅開匣の詳細を聞いて婚后は衝撃を隠せないでいた。
た。

「生物って……あのお二方がトカゲと蛾の翼はわかりますが……」

「他のお三方は一体……!?!」

デイジーとトリカブトは見た目からトカゲと蛾だということを湾内と泡浮は理解できたが、ザクロ、ブルーベル、桔梗が何の生物かわからなかった。

「まあわかんねえのも無理はねえさ。ありや確かに地球上に存在してた生物ではあるが実際に見たことある奴はいねえからな。なんせ6千500万年以上前の生物だしな」

「6千500万年前って……!?!」

「それって……!?!」

「まさか恐竜ですよ!?!」

γの口から6千500万年前という単語から泡浮、湾内、婚后はザクロ、ブルーベル、桔梗の姿が恐竜だということを理解する。

「これが沢田さんの世界の方々……」

「世界?」

学生誘拐事件の時にエスカに拐われていた為、湾内の言う沢田さんの世界という意味がわからなかった。

「婚后さんは知らないのでしたね。今回、戦いに協力してくれた沢田さんのご友人は全員、異世界から来た方々なんです」

「い、異世界!?!」

泡浮から異世界という単語を聞いて驚きの声を上げていた。今回、ツナの仲間が協力してくれることは婚后も知っていたがツナの仲間が異世界の人物だということは知らなかった。

「何を言っていますの……!?! ここにいる方々は発火能力パイロキネシスを使って……!?!」

「あれは死ぬ気の炎という力で生命エネルギーを可視化したものなんです。学園都市の能力と違って自分だけの現実パーソナルリアリティを観測する必要も演算もする必要がないんです。覚悟とそれに応えるリングさえあれば誰でも使える力らしいんです」

「学生誘拐事件の主犯もこの力を使って学園都市を混乱に陥れたんです」

「あの事件が……!?!」

自分を拐ったエスカが学園都市の人間ではなかったと知って婚後は驚きを隠せないでいた。婚後は正直、信じられなかったが友人である湾内と泡浮がこんな状況で自分に嘘をつくはずがない為、婚後は信じるしかなかった。

「桔梗の言う通りに……」

デイジーは足に纏った炎を逆噴射させながら駆動鎧パワードスーツの中に突っ込んでいき、晴の炎を纏った拳で次々に駆動鎧パワードスーツを破壊していく。

「ぼぼっ!？」

デイジーの右拳が駆動鎧パワードスーツにめり込んで抜けなくなる。デイジーは予想外の出来事に驚きの声を上げた。だがデイジーは即座に右腕を切断した。すると切断した腕が伸びて駆動鎧パワードスーツを拘束し潰していく。

「勢いつけすぎちゃった。次からは気をつけないと」

すると切断した右腕が再生し再び駆動鎧パワードスーツの群れの中に突っ込んでいった。デイジーはトカゲの尻尾のように再生できる。晴の炎の特徴である活性の力が加わることで通常の何十倍の速さで再生できるのである。

「悲しきものよ」

トリカブトは幻覚で時空を歪めていた。他の人たちを巻き込まない為にとりかぶトは少し離れた場所で戦っていた。トリカブトの目玉模様を見た者は五感を狂わされとりかぶトの幻覚世界の住人になってしまう。強力な幻覚は機械をも誑かす。駆動鎧パワードスーツたちはトリカブトの幻覚で機能を停止する。

「海蛇セルペンテ・デイ・アヴァンツァータの突進」

するとトリカブトのマントの内側から雷属性の炎を纏った大量の海蛇が飛び出していき幻覚に巻き込まれていない駆動鎧パワードスーツも貫いていく。トリカブトは霧の炎だけでなく雷属性の炎を持っている。副属性とはいえ硬化によって強化された海蛇は対戦車ライフルの弾丸並みの威力である。

「にゅにゅーんー! いくよー!」

ブルーベルは両腕をクロスさせた後におもいつきり両腕を広げた。すると両手の掌から大量の雨の放出された。

「クレグ・バリア」

ブルーベルから広範囲に渡って雨の炎の結界が展開され、パワードスーツ 駆動鎧は結界内に閉じ込められる。雨属性の特徴である鎮静によって雨の結界内に閉じ込められたパワードスーツ 駆動鎧は動きが抑制されていく。

「んじゃー！ とつとめー！」

ブルーベルは結界内を縦横無尽に泳ぎながらパワードスーツ 駆動鎧は次々に破壊される。ブルーベルの修羅開匣は雨シヨニサウロ・ピオツジャ シヨニサウロス。2億年前に存在した魚竜。シヨニサウロスの力が加わったことで戦闘力だけでなく潜水能力が向上しているのである。

「どうした!? この程度か!？」

嬉々とした表情を浮かべながらザクロは嵐の炎を纏った爪で次々にパワードスーツ 駆動鎧を切り裂いていく。ザクロの修羅開匣はテイラノサウロ・テンベスタ ティラノサウルス。ティラノサウルスの力に死ぬ気の炎の中で攻撃力に特化した炎を持つ嵐属性の力が加わる。それ故にザクロは純粹に攻撃力に特化した形になっている。

「二気にぶっ壊してやるぜー！」

ザクロは足に纏った炎を逆噴射させて上空へ上がって行くと右手の掌を下へ向けた。

「マグマ・インフラインマート 烈火マグマ！」

右手の掌から嵐属性の炎が放たれた。分解の力によって直撃したパワードスーツ 駆動鎧は跡形もなく消え去り、直撃しなかったパワードスーツ 駆動鎧もザクロの攻撃の余波で吹き飛んで行った。

「ハハン。他愛もないですね」

桔梗は一步も動くことなく髪の毛の先端から生えた複数のスピノサウロスがパワードスーツ 駆動鎧を加え歯で粉碎していた。桔梗の修羅開匣はスピノサウロ・ヌーヴオラ スピノサウロス。雲の炎の特徴である増殖の力でスピノサウロスは分裂しどんどん増えていき、物量で敵を翻弄する。リアル 真六弔花最強の戦闘力を持つ男である。

「ただ獲物を喰らうだけでは芸がありませんね」

すると増殖したスピノサウロスの口から雲の炎の球体が造形される。

「グラナター・アウメンター」
「増加する砲弾」

そしてスピノサウロスの口から一斉に炎の砲弾が連続で発射されていく。発射している間にもスピノサウロスはどんどん増殖し、それに比例して砲弾も次々に増えていく。

「ほ、本当に人間なんですよね彼らは……!?!」

「一応な。まあ奴らは人間を越えた化け物ではあるが。本物の化け物はいつらじゃねえけどな」

婚後の質問にγが応えるとγはラルとコロネロの方を向いた。

「奴らにばかり戦わせると沢田に借りを返せなくなっちゃうしな。そろそろ俺もいくか」

γはアニマルリングに炎を灯すと2匹の黒い狐が現れた。
黒狐ネレ・ヴォールビ

「いけ」

γが命令するとコルルとビジェットは縦方向に回転しながら駆動鎧パワードスーツに突っ込んでいく。硬化の特徴を持つ雷の炎を纏ったコルルとビジェットの体当たりパワードスーツに駆動鎧はなす術もなく破壊される。

「戦闘で使うのは初めてだが……」

γは匣ボックスを取り出すと匣ボックスに炎を注入した。すると匣ボックスからビリヤードに使う木製の棒であるキューとキューで弾く為の球、まじたま的球が出て来る。的球は宙に浮く。

「ショットプラズマ!」

γは炎を纏ったキューで炎を纏った的球を突いた。キューで突いた的球は他の的球に当たると、さらに他の球に当たりの的球は多方向に飛んでいき駆動鎧パワードスーツに貫通し次々に破壊されていく。

「次はこいつだ」

するとの的球が上空に浮き始めると的球は三角形を描くように配置についた。

「エレクトリック・タワー」

的球が一斉に放電し始め、雷の炎のタワーができる。雷の炎の硬化パワードスーツの力で駆動鎧は次々に破壊されていく。

「召されな」

自分が倒した駆動鎧パワードスーツにそう言うとγは再び駆動鎧パワードスーツの軍勢に突っ込んでいくのであった。

標的（ターゲット） 2008 風紀委員長

同じく第4会場では。

「ロール」

駆動鎧パワードスーツの軍勢が視界に入ると同時に雲雀は雲ハリネズミホルコスビーン・ヌーヴオラのロールを装着していたブレスレットから呼び出した。

「形態変化」

雲雀がそう言うのとロールが輝き始める。すると雲雀の着ていた服が改造長ランに変化し、両手に持っていたトンファーにアーマーが取り付けられる。

「機械とはいえ僕の前で群れたんだ。まとめて噛み殺す」

雲雀がそう言うのとトンファーに雲の炎を灯し、駆動鎧パワードスーツの軍勢の中に突っ込んでいく。まず炎を纏ったトンファーで駆動鎧パワードスーツを次々に破壊されると同時に吹き飛ばしていく。雲雀の炎圧は破格である為、殺傷能力があまり強くない雲の炎でも嵐の炎や雷の炎に匹敵する破壊力を持っている。だが雲雀の炎圧が強すぎる故に、ボンゴレリング以外のリングでは耐えられず壊れてしまうのである。

「脆いね」

雲雀はトンファーと体術を駆使して駆動鎧パワードスーツを破壊していく。雲雀はリング争奪戦にてヴァリアーの雲の守護者、ゴーラ・モスカを炎を使わずに倒している。いくら科学技術が優れている学園都市の駆動鎧パワードスーツといえども凶悪さでいえばゴーラ・モスカの方が圧倒的に上回る。はつきり言って雲雀の相手ではなかった。

「遅い」

すると雲雀は目にも止まらぬ速さで次々に駆動鎧パワードスーツを破壊していき。雲雀はあまりの速さに駆動鎧パワードスーツは反応できず破壊される音だけが響き渡る。しばらく破壊を続けた後に雲雀は駆動鎧パワードスーツを足場に上へと飛んだ。すると学ランの裾かミニサイズのロールが飛び出す。そして雲雀はロールをトンファーで弾いた。弾かれたミニサイズのロールは駆動鎧パワードスーツにめり込んでいく。

「球針体」
きゆうしんたい

雲雀がそう呟いた瞬間、雲雀が打ち込んだミニサイズのロールが一気に巨大化し駆動鎧を貫く。そしてロールは雲属性の特徴である増殖の力によってロールを打ち込まれていない駆動鎧をも次々に破壊していった。雲雀は落下中に増殖するロールの針の生えてない場所を蹴っておもいつきり飛んで移動すると同時にロールの膨張から逃れる。そして再び駆動鎧の群れの中に着地すると駆動鎧の破壊を始めていく。

「つまらないな……」

雲雀は不満そうな表情を浮かべていた。かつて雲雀はシモンファミリーの聖地でアーデルハイトのブリザードロイド500対と対峙し全て全滅させている。数は違えどブリザードロイドと駆動鎧の戦闘力は天と地程の差がある。しかも駆動鎧プログラムされて動いているだけなので攻撃方法はスティックで攻撃のみ。故に攻撃を見切るのは容易い。ボンゴレの守護者の中で最強の戦闘力を持つ雲雀にとってこれ程、つまらない相手はいなかった。

「準備運動にもならない」

すると雲雀の両手に握られているトンファアの先端からチェーンが飛び出す。このチェーンは雲雀が元からトンファアに仕込んでいたものである。雲雀は横方向に回転する。するとトンファアの先端のチェーンがどんどん伸びていき駆動鎧を次々に真っ二つにしている。ロールの時と同じく雲の炎の特徴である増殖の力でチェーンが伸びたのである。

「これが片付いたら他の人を噛み殺そう」

2万体の駆動鎧という数字を聞いて少しは楽しい戦いができるかと期待した雲雀であったが、数だけが凄いだけであつて駆動鎧そのものの戦闘力は大したことはなかった。なので雲雀は落胆している。今日、他の会場に自分の世界の人たちがいるということは雲雀も聞いている為、この会場の駆動鎧を片付いたら他の会場にいる猛者たちと戦うことを心に誓うのであつた。

「さて……誰にしようか」

雲雀の目には駆動鎧パワードスーツなど映ってはいなかった。雲雀はもう駆動鎧パワードスーツへの興味は全くと言っていないのである。雲雀の興味はこの後、戦いたいと思っている者たちのことしか頭になかった。そのことを考えるだけで雲雀は不適な笑みを浮かべていた。

「おやおや。相変わらず強者にしか興味がないようですね」

近くの木の子に乗って雲雀のことを見ていた風は、雲雀の表情から彼が今何を考えているのかを理解していた。

「さてと。そろそろいいですかね」

そう言う風は懐から白い腕輪を取り出し、右手首に装着した。そして腕輪についているスイッチを押した。すると腕輪から晴の炎が溢れだし風の全身を包んでいき、小さかった風の体がみるみる大きくなっていく。

「虹の代理戦争以来ですね。この姿になるのは」

赤ん坊の姿だった風の姿が大人姿へと変化していく。これは風の呪われる前の姿である。晴の炎の特徴である活性の力で成長を何十倍にも促進させたのである。普通の人間であればこんなことは不可能なのであるが、一度成長していたアルコバレーノだからこそなせることである。

「久しぶりに私も……私たちも暴れられますね」

そう言う風は枝から降り駆動鎧パワードスーツの群れの前に降り立つと拳法の構えを取る。

アルコバレーノ立つ！

標的（ターゲット）209 アルコバレーノ

風は謎の腕輪の力にて本来の姿へと戻る。

「それではいきましようか」

風はその場から一步も動くことなく駆動鎧が向かって来るのを待つ。

「はあー！」

風は一步も動くことなく炎を纏わないただの正拳突きで駆動鎧を破壊すると同時に駆動鎧を蹴り飛ばした。蹴り飛ばした駆動鎧は他の駆動鎧をも巻き込んでいく。

「甘い」

風は背後から襲って来る駆動鎧の一撃を後ろを見ることなく右腕で防ぐ。そして背後を向くことなく右足の後ろ蹴りで蹴り飛ばした。その後も風は一步も動くことなく拳法で駆動鎧を破壊していく。

「人間には体力の限界があり機械にはそれがない。そこに着目したのはいい。しかし機械は人間と違って鍛えて強くはなれない。故に限界強度がある」

そう言うと風は上着を脱ぐと、おもいつきり投げ捨てた。そして鍛え上げられた風の肉体が露になる。

「見せてあげましょう。これまで研磨し鍛えてきた私の力を。爆煉疾風拳を」

風は右腕と右足を上げ、片足立ちの状態で立つ。アルコバレーノの風。アルコバレーノ1の体術の使い手にして弾丸をも素手で止める程の拳法の達人である。

「爆龍炎拳」

風は嵐属性の炎を纏った拳を連続で何度も繰り出し炎を飛ばしていく。駆動鎧は嵐の炎の特徴である分解によって次々に破壊していく。

「爆龍旋炎脚」

風はその場で逆立ちすると横方向に回転しながら嵐属性を纏った

蹴撃にて駆動鎧を蹴散らしていく。
「爆龍炎舞」

風はジャンプし空中へと移動すると炎の鎧を全身に纏う。そして炎を操作し放つ。放たれた炎は龍の形になり駆動鎧に襲いかかっていき次々に破壊していく。

「テロリストさん。機械に任せてばかりでなくあなたも武術を学んでみてはどうでしょう？　きっと心が清らかになりますよ」

第3会場

「サバイバルキヤノン！」

ラルはショットガンを連続で放った。たださえ強いショットガンの威力が雲の炎の力で底上げされるだけでなく雲属性の炎の特徴である増殖によって増え、次々に破壊されていく。

「サバイバルホーミング！」

今度は腕に装着されているガントレットから雨属性の炎を纏った弾丸を放っていく。放たれた弾丸は駆動鎧を追尾していき次々に破壊していく。

「まだまだぜ」

ラルは斜め上ジャンプすると同時にショットガンの銃口を自分の後方へ向けるとショットガンの引き金を引いた。ショットガンの威力の反動を利用して斜め上に飛んだ。

「サバイバルクラスター！」

反動で空中に移動すると同時にホーミング弾とショットガンを空中から放ち駆動鎧を破壊していく。

「サバイバルミサイル！」

ラルはショットガンを真上に向けて放つ。ショットガンの反動でラルは真下に急降下し踵落としを放った。ショットガンの反動によって加速された強化された踵落としは駆動鎧パワードスーツの頭を完全に破壊し胴体や中身にはヒビが入り強制的に機能を停止させる。

「なんて命中精度……!?!」

「しかもショットガンを武器として使うだけでなく推進力としても利用している……!?!」

「に、人間技じゃありませんわ……!?!」

ラルの人間離れた戦闘を見て湾内、泡浮、婚後は衝撃を隠せないでいた。

「つまらんな。COMSUBINの訓練の方がきついぞ」

元軍人にしてCHDEFの一員であるラルにとって銃火器すら搭載していない駆動鎧パワードスーツなどおもちゃも同然であった。

「流石はラルだな。俺もいくぜコラ！」

「「ええ!?!」」

婚後たちが後方からのコロネロの声を聞いて振り返る。するとそこには巨大なライフルを持った青年がいた。コロネロも風と同じく腕輪を使って呪解したのである。先程まで赤ん坊だったコロネロが急に青年の姿になったしまったことに3人は驚きを隠せないでいた。

「特殊弾装填！」

コロネロはライフルを構える特殊弾をライフルに装填すると銃口を駆動鎧パワードスーツに向ける。

「マキシマムバースト！」

鳥を象った弾丸がライフルから放たれた。放たれた弾丸によって駆動鎧パワードスーツが100体以上破壊され、地面は抉れてしまっていた。

「「なっ……!?!」」

コロネロが急に成長したことに驚いた婚後たちであったが、コロネロの放ったライフルの一撃を見てさらに驚いていた。

「もつといくぜコラ！」

コロネロは先程とは違う特殊弾をライフルに装填すると銃口を上

へ向けて空中に向かって弾丸を放った。一直線に向かって放たれた弾丸は空中で無数に分裂する。

「マキシマムレイン！」

コロネロが叫ぶと同時に分裂した大量の弾丸が雨のように降り注ぐ。降り注ぐ大量の弾丸によって駆動鎧は次々に破壊。この一撃によつて500体以上の駆動鎧が破壊された。

「「なっ!？」」

コロネロの弾の威力を見て婚后たちは塞がらない状態になってしまっていた。

「人間と違つて遠慮する必要がねえ。もつとぶちこんでやるぜコラ」

第2会場

「まさかこんな形で元の姿に戻るなんてね」

マーモンも同じく腕輪の力にて呪解していた。そしてそしてマーモンの周囲には砂漠が広がっていた。これはマーモンが作った幻覚の空間である。幻覚の空間にはマーモンと駆動鎧以外、誰もいなかった。

「でも丁度いい機会だ。僕の力は定期的に使わないと手に負えなくなるからね」

マーモンがそう言うとマーモンの周囲に砂が集まっていく。

「砂の巨人」

マーモンの周囲に集まった砂は巨人を形成していく。そして駆動鎧を次々に襲いかかり機能を停止していく。

「幻覚世界の住人の君たちに何もできやしないよ」

第1会場

「大分、片付いきたな」

獄寺がそう言うのと獄寺の視界には破壊された大量の駆動鎧パワードスーツが映っていた。

「皆さん！ ボックスコンビネーションで一気に片付けましょう！」

「お。いいなそれ」

「極限にいいアイデアだな」

「ちつ。しゃあねえな」

「了解」

バジルの提案を聞いて山本、了平、獄寺、クロームは賛成する。そして5人は形態変化カンビオ・フォルマの状態を解いた。ボックスコンビネーションシステムとは匣ボックスアニマル同士の連携を高めてコンビネーションの必殺技を放つことができるシステムである。これは知能の高い演算能力と脳波を飛ばす特殊機能によって仲間の匣ボックスアニマルの知能を繋ぐことのできる雨デルファイノ・デイ・ピオッチャイルカイルカにしかできない能力である。

「アルフィン」

バジルがそう言うのと小次郎、次郎、我流、瓜、ムクロウがアルフィンに向かつて炎を放つと十アルフィンの尻尾の部分に炎が収束する。

「炎炎旋風！」

アルフィンが横に風払うと雨、晴、嵐、霧の炎が混ざった巨大な竜巻が3つ発生し駆動鎧パワードスーツを吹き飛ばすと同時に炎の破壊力によって破壊されていく。晴の炎の特徴である活性の力で他の炎の力を何十倍にも引き上げた竜巻であると同時に霧の炎の特徴である構築によって作られた偽物の竜巻を放つことで相手にどれが本物の竜巻かわからなくさせてもいる。この竜巻によって獄寺たちの方にいる駆動鎧パワードスーツ

は全滅する。

「極限にやったぞ！」

「これでこっちは一件落着だな」

「ったく。美味しいとこだけ持っていきやがって」

バジルの技が決まったのを見て了平と山本は喜びの声を上げる。獄寺はコンビネーションシステムをやることを承諾したとはいえバジルに見せ場を取られのが少しだけ気にいらないうだった。

「僕の方も終わらせようか」

炎真は右手を上げると掌から複数の球体が放たれ空に浮かぶ。すると球体に少しずつヒビが入っていく。

スーベル・グラウイター・ブラック・ホール
「超 重 力 B H」

炎真がそう呟くと空に浮かんでいた球体が完全に破壊され黒い渦が現れ駆動鎧を吸い込んでいく。

「う、嘘でしょ…!?!」

「ブラックホール…!?!」

駆動鎧を吸い込んでいく黒い渦を見て固法と黒子はあれがブラックホールだということを理解すると同時に衝撃を隠せないでいた。そして炎真は全ての駆動鎧をブラックホールの中に吸い込んでいった。

「ふう……」

炎真が駆動鎧を全部、吸い込んだのを確認し終わるとブラックホールを消し、^{ハイパー}超死ぬ気モードの状態も解いた。

「本当に駆動鎧を全滅させるなんて……」

「規格外過ぎですわ……」

たった12名で千体以上もいた駆動鎧を壊滅させたという事実
に固法と黒子は衝撃を隠せないでいた。

STUDY本部

「第1会場！ 駆動鎧全滅！」

「同じく第2会場、第3会場、第4会場の駆動鎧も全滅よ！」

関村と桜井は各会場の上空に設置していた監視カメラの映像から現状を報告する。2人の顔はとてつもなく焦っており動揺を隠せないでいた。

「な、何なんだ……一体奴らは何者なんだ……!? 学園都市には7人しか超能力者^{レベル5}いないはずだ……!?」

関村と桜井と同じく有富も動揺を隠せないでいた。そして同時にわからないでいた。超能力者^{レベル5}クラスの強さを持っている人物が何人もいるということに。

「嘘でしょ……!?」

「どうした桜井!」

「全ての会場の中でAIM拡散力場が確認できるのが6人しかいないの……!? しかも化け物じみた奴らの中にAIM拡散力場を確認できる人間は1人もいない……!?」

STUDYが各会場にあらかじめ仕掛けていたAIM拡散力場を検知する機械からAIM拡散力場の反応が6人しかないということに桜井は気づき衝撃を受ける。

「ま、まさか奴らは無能力者^{レベル0}なの!」

「馬鹿な!? 何かの間違いじゃないのか!」

化け物じみた能力を持った人たちが無能力者^{レベル0}だという事実に関村と桜井は驚きを隠せないでいた。有富たちは死ぬ気の炎の存在を知らないので無理もない。

(一体……何が起きて……)

そんな中、布束は沈黙していたが予想外の展開が起こって困惑していた。

「小佐古と斑目を出陣させろ！」

第1会場

「何だ？」

獄寺がこちらに向かつて来る音にいち早く気が付く。すると猛スピードで巨大な駆動鎧がやって来る。今まで戦った駆動鎧とは違い巨大で兵器も搭載された駆動鎧であった。

「極限にでかいぞ」

「まだ出てくんのかよ」

「でけえな」

「でも今までと全然違うよ」

了平、獄寺、山本、炎真は今までとは違うタイプの駆動鎧を見てもなお全く動揺することはなかった。

「おのれ！　どこの誰だが知らんが我々の崇高なる革命を邪魔しよつて！　絶対に許さんぞ！」

STUDYのメンバーの1人である小佐古が怒りを露にする。この駆動鎧はSTUDYの特製品であり直接中に入って操縦するタイプである。

「何が崇高なる革命だ。偉そうにほざいてんじゃねえぞ」

「！！！！！！！！！！」

すると突如、知らない男の声がある。その場にいた者は声のする方を向く。そこには銃を構え右手首に白い腕輪を巻いた大人の男が立っていた。

「カオスだな」

最強の殺し屋。立つ！

標的（ターゲット） 210 最強の殺し屋

ついに最強の殺し屋が呪解し戦場に立つ。獄寺たちは虹の代理戦争にてバミューダと戦った際に見せたりボーンの本래の姿だということを理解する。

「も、もしかしてあれがりボーンさんの呪われる前の姿……!?!」

獄寺たちも同じく黒子も大人になつたりボーンの姿を見て以前聞いた、呪われる前の姿だということを理解すると同時に赤ん坊の姿だった頃の面影が全くなりハードボイルドになつたりボーンの姿に衝撃を隠せないでいた。

「の、呪われる前ってどういうこと……!?!」

「詳しい説明をすると長くなるので簡単に言うとりボーンさんは昔チエツカーフェイスという男に呪いをかけられて赤ん坊の姿にされたりしいんですの。そしておそらく右手首にしているあの腕輪を使って元の姿に戻ったのだと思われまますの」

「呪いって……そんなことが……!?!」

黒子は先程までしていなかった腕輪を見てあの腕輪がりボーンを元の姿に戻した要因だということを理解した。固法はりボーンの呪いのことを知って驚きを隠せないでいた。

「手え出すんじゃねえぞお前ら。こいつの相手はこの俺がする」

「舐めているのか貴様。銃ごときでこのSTUDY特製の駆動鎧パワードスーツに勝てるでも思っているのか!?!」

「御託はいいからとつととかかかってきやがれ。格の違いってのを教えてやるクソガキ」

「どこまでも我々は愚弄しよつて!! 全員まとめてあの世に送つてやる!!」

舐められていることに怒りを露にした小佐古は駆動鎧パワードスーツを操作し両肩に装備されているガトリングガンの照準をりボーンに向けた。

「我々に楯突いたことを後悔させてやる!!」

ガトリングガンの標準が向けられてもなおリボーンは全く動揺することはなく弾丸を地面に向かって2発撃った。

「な、何をしてるの!？」

「地面に弾丸を撃ってどうするんですの!？」

なぜリボーンが弾丸を地面に向かって放ったのかわからず固法と黒子は驚きの声を上げる。

「死ね!？」

小佐古が叫ぶと両肩に装備されたガトリングガンは回転し銃口から大量の弾丸が放たれた。

「なっ!？」

小佐古は驚きを隠せないでいた。なぜなら駆動鎧パワードスリーブから大量に放たれた大量の弾丸はリボーンをすり抜けていった。リボーンは最小限の動き、それも常人では見えない程の速さで弾丸を躲しているのである。それが常人に弾丸がすり抜けているように見えるのである。

「目障りだな」

そう言うとりボーンは大量の弾丸が放たれたる中、8発の弾丸を放った。弾丸の雨の中に放たれた弾丸はガトリングガンの銃口に入る。リボーンの弾丸がガトリングガンの銃口に入ったことでガトリングガンは爆発し強制的に機能を停止させられた。

「ほ、砲弾が!？」

あの弾幕の中、しかも回転する銃口を正確に撃ち抜くという人間離れしたリボーンの技に小佐古は衝撃を隠せないでいた。

「おのれ!？」

小佐古は駆動鎧パワードスリーブを操作してリボーンの接近し、両腕を上に移動させた。

「死ね!!」

小佐古が叫ぶと上に移動させた両腕をおもいつき振り下ろす。

「CHAOS……SHOT」

両腕が接近する中でリボーンはその場から全く動くことなくそう呟いた。するとリボーンの近くの地面から2発の弾丸が飛び出し、両腕の関節部分を貫いた。関節を貫かれたことによって両腕のリボーン

ンの目前で動きを止めた。

「な、何だ!? なぜ動かない!?!」

小佐古は急に駆動鎧パワードスーツの腕が動かなくなったことに動揺する。

「あ、ありえない……!?! 地面に撃った弾丸が飛び出すなんて……!?!」

「い、一体どうやったたらあんなことが……!?!」

地面に撃った弾丸が飛び出すという物理法則を完全に無視したことをリボーンが当たり前のようにやってのけたことに固法と黒子は衝撃を隠せないでいた。するとリボーンはその場から飛び引く弾丸を次々に放つていく。リボーンの放った弾丸は駆動鎧パワードスーツの装甲を徐々に破壊していく。

「チエックメイトだ」

リボーンがそう言うのと駆動鎧パワードスーツは完全に機能を停止した。そしてところどころ破壊された駆動鎧パワードスーツにCAHOSという文字が浮かび上がっていた。

「も、もう人間技じゃないわ……!?!」

「も、もう頭がおかしくなりそうですわ……!?!」

あまりにもリボーンの技がぶつ飛び過ぎているので固法と黒子は驚きを通り越してしまい、顔を引き攣らせながら笑ってしまっていた。

「ば、化け物……!?!」

リボーンと対峙していた小佐古は常軌を逸したりボーンの強さに闘争心は完全に折られてしまい、恐怖のあまり体の震えが止まらなっていた。

「おい」

「ひっ!」

リボーンの声聞いた途端、小佐古は恐怖の声を上げる。すでに操縦席にある画面には何も映っていないのにも関わらず。

「銃ズごときじゃ勝てねえとかほざいてやがったな」

「ああああ……!?!」

「だったら試してやろうか? お前の体で」

そう言うとりボーンは銃口を操縦席にいる小佐古に定めた。

「どこに撃つてやろうか？ 頭か？ 心臓か？ それとも徐々になぶり殺してやろうか？」

（な、なんて殺気!?!）

（吐き気がしますわ……!?!）

リボーンは殺気を放ちながらそう言った。あまりの殺気に固法と黒子は気持ち悪くなり口元を押さえていた。これでも一方通行に放った殺気に比べてたら抑えている。

「5秒やる。さあ選べ。5……4……」

（こ、殺される!! 早く!! 早く逃げなければ!!）

リボーンのカウントダウンを聞いて小佐古は逃げなければならぬということを理解する。しかし頭でわかってもリボーンの殺気のせいで操縦席から動くことができなかつた。

「3……2……」

（殺される!! 頼む!! 動け!! 動け!! 動いてくれ!!）

命の危機感じた小佐古は必死に自分の体に命令するが体は全くといって動くことはなかつた。

「1……0」

「うわあああああああ!!」

リボーンのカウントダウンが終了すると小佐古は絶叫が会場中に響き渡つた。すると絶叫の後、何事もなかつたかのように静かになつた。するとリボーンは操縦席に向かって発砲した。すると操縦席の装甲が開いた。そこには泡を吹きながら気絶している小佐古がいた。「つたく。この程度で気絶するとはな」

気絶している小佐古を見てリボーンは嘆息しながらそう言う腕輪のスイッチを押し、元の姿へと戻つた。

「殺気だけで気絶させるなんて……!?! そんなことが……!?!」

「リボーンさんは拙者たちの世界の最強の殺し屋ヒットマンですから」

「そ、そんなに凄いのリボーン君って……!?!」

殺気だけで気絶させたことに黒子は驚き、固法はリボーンがそこまで凄い人物だったということに驚いてしまっていた。

（後は任せたぞ。ツナ。美琴）

標的（ターゲット） 211 援護する者たち

一方でSTUDYの本拠地に向かっているツナと美琴は。
「あそこよー！」

美琴が指を指した先には大きなスタジアムがあった。このスタジアムの地下にSTUDYの本拠地があるのである。

「やっぱりいるか」

スタジアムに入らせまいと大量の駆動鎧パワードスーツがツナと美琴たちの元へと向かって来る。

「美琴。頼む」

「わかってるわ！」

ツナがそう言うと美琴はポケットからコインを取り出して上空へ弾いた。そして落ちてきたコインを真正面に向かって弾き飛ばした。電磁力が加わったコインは音速の何倍ものスピードで飛んでいき数百体もの駆動鎧パワードスーツが一気に破壊される。しかしすぐに駆動鎧パワードスーツが次から次へと現れる。

（コインを大量に用意したとはいえ……）

相手の数が数だけにそんなにホイホイ超電磁砲レールガンを撃てないということ在美琴は理解する。

（XBUNERを撃ちたいが……）

XBUNERイクスパーナーを使えばこの場にいる全ての駆動鎧パワードスーツを破壊できる。しかし今はフェブリを背負っている。XBUNERイクスパーナーは強力だが反動がでか過ぎる為にフェブリにも影響が出る。仮にフェブリに影響が出なかったとしてもXBUNERパーナーは発射するまでに時間がかかる。発射されるまでのその間、美琴一人に駆動鎧パワードスーツの相手をさせることなどできるはずもなかった。

（クソっ！ 敵の本拠地は目の前だったのに！）

（このままじゃ……）

接近戦で駆動鎧パワードスーツを破壊していくが大技が撃てない為、ツナと美琴

は焦りが見えていた。特にツナはフェブリを背負っている為、超スピードでの移動の戦闘はフェブリが耐えられない。故にいつものように戦いができないのである。

その時だった

ぼうじやれっば
「暴蛇烈覇！」

巨大な鋼球が暴風を発生させながらパワードスーツ駆動鎧を蹴散らしていった。

「な、何!？」

「い、今のは……!？」

パワードスーツ駆動鎧を蹴散らした鉄球に美琴は困惑していた。その一方でツナは今の攻撃に見覚えがあった。

「久しぶりだな。ボンゴレ」

「ランチア!？」

声がする方を振り向くとそこには蛇が描かれた鋼球を持った黒髪の男がいた。ツナはこの男のことを知っていた。この男の名はランチア。かつて北イタリア最強と恐れられた男である。

「あんたの知り合い?」

「ああ……だがなぜここに? 償いの旅の途中じゃ……」

「償い?」

ランチアはかつて自分の所属したファミリーのメンバーを皆殺しにした経歴がある。しかし真相は六道骸に操られたというものでありランチアの意味ではないがランチアは殺された仲間の家族の元を回って償いをしている。そのことを知るはずもない美琴は償いが何のことかわからずにいた。

「ボンゴレと個人的に契約を結んでな。ボンゴレからの依頼をこなすかわりに旅の資金を支援をしてもらってるんだ。この世界に来たのも9代目の依頼だ。お前の力になってくれってな」

「それで……」

ランチアがこの世界にいる理由を聞いてツナは納得する。

「さてと。感動の再会に喜びたいところだが相手も待ってくれそうにもないな」

ランチアはポケットからリングを取り出した。そして右手の人差

し指にリングを装着するとリングに嵐属性の炎が灯る。するとリングの輝き始める。

「オオooooooooooooo!」

「ぼ、ボックス 匣 アニマル!」

すると嵐の炎を纏った狼が遠吠えを上げながら現れる。ランチアが匣ボックス アニマルを持っていることにツナは驚きを隠せないでいた。

ルーボ・テンベスタ 「嵐 狼のガルムだ。ガルム」

ランチアがガルムの名前を呼ぶとガルムは口から広範囲に渡って嵐の炎を吐いた。嵐の炎の特徴である分解によってパワードスーツ 駆動鎧は分解されていく。

「さて。俺も行くか」

（か、片手で!? なんて馬鹿力!?!）

50kg以上はあるであろう鋼球を片手でなんとなく回すランチアの腕力に美琴は驚きを隠せないでいた。鋼球の上に飛ばし落ちて来たところを嵐の炎を纏った掌底で弾き飛ばした。

「嵐蛇烈覇!」

掌底によつて弾き飛ばされた鋼球は烈風を発生させながら飛びんでいく。鋼球に当たったパワードスーツ 駆動鎧は破壊され鋼球に当たらなかつたパワードスーツ 駆動鎧烈風によつて吹き飛ばされる。さらに烈風に当たっていないパワードスーツ 駆動鎧にも烈風よつて吹き飛んだ嵐の炎が当たり分解されていく。

「な、なんて威力……!?!」

先程よりもさらに強い威力の鋼球に美琴は驚きを隠せないでいた。ランチアの鋼球、蛇鋼球に彫られている蛇の溝は当たった空気をねじ曲げて強力な烈風を生み出す。直接、鋼球に当たらなくとも烈風に巻き込まればタダでは済まない。

すると今度はツナたちの後ろから爆発音が響き渡る。

「な、何よ!?! あれ!?!」

「あれは!?!」

美琴が振り返るとそこには巨大な人形のロボットが指の先から炎を纏った弾丸を発射しながら飛んで来る。ツナはこのロボットのことを知っていた。そしてロボットはツナたちの前に降り立つ。する

とロボットの胸の部分から立体映像ホログラムが放射される。

『なんとか間に合った』

『助けに来たよ綱吉君!』

『久しぶりだな沢田綱吉』

「スパナ! 正一! ヴェルデ!」

立体映像ホログラムに映っているのはスパナと茶髪に眼鏡をかけた青年と、緑色の髪に白衣を纏った赤ん坊が映っていた。茶髪青年の名は入江正一。他校ではあるがツナの友達でありスパナと同じメカニックである。一般人ではあるがボンゴレファミリーのことや死ぬ気の炎のことなども知っている。白衣の赤ん坊の名はヴェルデ。アルコバレーノの1人だった男であり、レオナルド・ダ・ヴィンチの再来と唱われる程の天才科学者である。

「まさかモスカをこの世界に連れて来るとはな……」

「これがモスカ……」

ツナはモスカを連れて来たことに驚きを隠せないでいた。美琴はこれが前にツナが言っていたモスカだと知って驚いていた。

『僕たちは直接、戦闘はできないけどこのモスカで力になるよ』

『ウチらの作ったモスカは学園都市の駆動鎧バワードスーツには負けない』

『勘違いするなよ沢田綱吉。私は貴様を助けにきたのではない。2年前の借りを返しに来たのと発明品を試すのに丁度いいと思ったからに過ぎん』

正一とスパナがそう言う中でヴェルデが気になる発言をする。ヴェルデの言う発明品とはリボンたちが呪解する為の腕輪のことである。あれはヴェルデが作ったアイテムである。

「だったら俺も貴様に借りを返すでしょう」

「お、お前は……!?!」

また新たな援軍が到着する。ツナはその人物を見て衝撃を隠せないでいた。

標的（ターゲツト） 212 生き方

新たな援軍が登場する。

「この時代で会うのは初めてだな。ボンゴレ」

「げ、幻騎士……!? 何でお前が……!?」

『え……!?』

やって来たのは4本の剣を腰に携えた黒髪の青年だった。この男の名は幻騎士。ツナは未来の世界で幻騎士とメローネ基地にて戦ったが追い込まれた幻騎士は逃亡した。そしてチヨイスにて再び現れ山本と対戦。しかし山本にも敗北した幻騎士は白蘭に用済みにされ消されてしまう。ツナと正一は幻騎士がここに現れたことに驚きを隠せないでいたと同時になぜここにいるのかがわからないでいた。

「幻騎士。お前が噂に聞く幻覚を使う四刀流の剣士か」

「貴様に俺の名を知られているとは光栄だな。北イタリア最強と恐れられたランチア」

「北イタリア最強……!?」

ランチアが強いのをわかっていたがそこまで強い人物だと思っ
てはいなかった為、美琴は驚きを禁じえなかった。幻騎士は両手に剣を握ると剣に霧の炎を灯した。

ダンザ・スベットロ・スバナ
「幻 剣 舞」

幻騎士は何度も剣を振る。すると刃と化した炎と霧の炎から作り出したミサイルで一気に駆動鎧パワードスーツを破壊される。

（なんて威力……!? しかもこいつエスカと同じ霧属性の炎……!?）

美琴は幻騎士の剣技にも驚いたが纏う炎を見てエスカと同じ幻覚を使う人物だということに驚きを隠せないでいた。

「お前、何でここに……!?」

「言ったはずだ。お前に借りを返しに来た。白蘭殿に話を聞いてな」

「え……!?」

未来では白蘭のことを様付けしていた幻騎士が様付けをせずに白蘭殿と呼んでいることにツナは驚いていた。

「未来でのことは知っている。俺がしたことも俺の末路もな」

未来からツナたちへの時代へユニが命の炎を通じて伝えられた記憶。幻騎士もまた記憶を受け取り、未来で何が起きたのかを知っていた。

「俺は未来での出来事を知って俺はショックを受けた。自殺を決意するくらいにな。だがそんな俺の前にユニ殿が現れ俺の心を救って下さった。一方で白蘭殿は俺の為に償いをして下さっていている」

「白蘭が……!?!」

ユニはまだ理解できるが白蘭が幻騎士の為にそんなことをしていたとは思ってもいなかった為、ツナは驚きを隠せないでいた。

「2年前の戦いのことは聞いている。ユニ殿の為に白蘭殿が戦ったことも。俺が見た未来と違う生き方をしていた2人を知って思った。大事なのは未来ではなく今だということをな」

「幻騎士……」

「お前にも大切なことを教えてもらった。自分の心の弱さをというもののをな」

未来の幻騎士はツナと戦った際にツナの覚悟の目に惑わされ、戦いに集中できず敗北した。それは自分の心の弱さが原因だということ。幻騎士は理解していた。

「そして誰かに依存することは本当の忠誠とは言わない。忠誠を誓うことは悪いことじゃない。ただ主君の善し悪しを見ようとせず主君の全てを肯定し従っているだけでは自分を見失うだけじゃない。最悪、自分の命を失うことになる」

未来の幻騎士は不治の病によって死ぬはずだった。そんな幻騎士に白蘭は平行世界得た知識で作ったワクチンによって助けられた。治るはずのない病気を治してくれた白蘭を幻騎士は神だと崇め称え白蘭に忠誠を誓うことを決意した。そして同時に白蘭は自分を奇跡に値する人材なのだと思っていると思い込んでしまった。しかし白蘭は幻騎士にそんな感情は微塵も持ち合わせておらず自分の命令で何でもしてくれる便利な駒にしか思っていなかった。そんなことを微塵も思っていない幻騎士はチョイスで消される間際になってもな

お白蘭が自分に信頼している、白蘭が自分を殺すはずがないと思い込み、白蘭の本性を知ることなく命を落とすこととなった。

「本来であれば未来を知ることとはできない。しかし俺は自分の未来を知ることができた。だったら未来の自分のようにならない生き方をする。他人の意思に振り回されるのではない。己の意思で生き方を選択する。まだ自分がどういう生き方をするのかは決めてはいない。だが答えを見つかるまで歩みを止めず己を鍛え上げ続ける。そしてその先に答えを見つかるつもりだ。それが今の俺にできることだ」

幻騎士は剣を真正面に向けてそう言った。その目には一点の曇りはなかった。するといきなりツナたちの周囲が爆発する。

(これってエスカと同じ……!?)

周囲に爆発物がないのにも関わらず爆発が起こったのを見て幻騎士もエスカと同じくボックス「アニマルによるものだということ」を美琴は理解する。スベットロ・ステイブランキ「幻海牛」霧属性の炎の特徴である構築によって周囲と同調した海牛が駆動鎧に襲いかかって爆発したのである。

「行け。ボンゴレ」

「わかった。いくぞ美琴」

幻騎士がそう言うのとツナはここは任せてもいいと判断し、先に進むことを決め美琴と共にスタジアムへと向かって行く。そしてツナと美琴がいなくなったのを見計らうと幻騎士はスベットロ・ステイブランキ「幻海牛」の力で草原の空間を構築した。

「ここは通行止めだ」

標的（ターゲツト） 213 白と紫

幻騎士たちの助けついにスタジアム内へと到達することに成功した。

「やっぱりここにも……」

「後、少しだったのに……」

しかしスタジアム内も駆動鎧パワードスーツによって埋め尽くされていた。後、少してジャーニーの元に辿り着けるといふ所まで来ているのに先に行けないことにツナと美琴は焦っていた。

そんな時だった

「やつほく♪。綱吉君く♪美琴君く♪」

「白蘭!?!」

「つ、翼!?!」

ツナと美琴が焦っていることも知らず背中から白い翼を生やした白蘭が空中から笑顔で手を降っていた。ツナは白蘭が現れたことに驚き、美琴は白蘭の背中から翼が生えていることに驚きを隠せないでいた。この密閉された炎が翼に見えているのである。すると白蘭は2人の前に降り立つ。

「いやー。ごめんごめん。今日のごことは聞いてたんだけど学園都市にあるコンビニスイーツの食べ歩きしてたら遅れちゃって」

「お前……」

「あんたね……」

白蘭が遅れた理由を聞いてツナと美琴は呆れて反論する気すら起きなかった。

「さーてと」

すると白蘭の右手が炎に包まれる。そして白蘭の右手が白い龍へと変形する。この龍の名は白龍。白蘭の匣ボックスアニマルである。

「行っておいで白クン」

白蘭がそう言うと言と白龍は駆動鎧パワードスーツの軍勢に突っ込んでいき駆動鎧パワードスーツを次々に破壊されていく。

「ハハッ。白クンってばあんなにはしゃいじゃってるよ。久しぶりに

遊べて嬉しいみたいだね」

「ペット感覚で言って何んじやないわよ！　　というか何でドラゴンが当たり前のように存在してんのよ！」

ペットの飼い主のような感想を述べる白蘭。美琴は白蘭の発言とドラゴンが存在していることにツツコミをいれた。

「白指」

白蘭は襲いかかって来たパワードスーツ駆動鎧を炎を集中させた右手の人差し指にて吹き飛ばした。吹き飛ばしたパワードスーツ駆動鎧は他のパワードスーツ駆動鎧を巻き込んでいき一気に100体以上のパワードスーツ駆動鎧が破壊された。

「スットラーイック♪」

「あれは……!?!」

「相変わらずめちやくちやね……」

白蘭の技を見てツナは未来の白蘭が自分に放った技だということを理解し、美琴は100体以上のパワードスーツ駆動鎧を指1本で破壊した白蘭の戦闘力に驚きを隠せないでいた。

「貴様らの快進撃もここまでだ！」

すると第1会場に現れた人が操縦するタイプのパワードスーツ駆動鎧がツナたちの前に現れた。操縦席に乗っているのはSTUDYのメンバーの1人である斑目である。するとパワードスーツ駆動鎧に搭載されている細い大砲から緑色の光線が放たれた。放たれた光線をツナは炎を纏った右手で弾き飛ばした。

「なっ!?!」

「これは……」

斑目は光線を弾き飛ばしたことに驚き、ツナは弾いた光線が研究施設で戦った麦野と同じものだという事に驚いていた。

「おのれ！」

光線を弾かれて焦った斑目は近接戦闘でツナたちを倒そうとする。
が、

「何だあ!?!　今の汚ねえ光は!?!」

すると女性の叫び声と共に緑色の光線が放たれた。光線は斑目の乗ったパワードスーツ駆動鎧を貫き強制的に機能を停止させた。

「騙されてデータ取られるなんて！ マジで情けねえぞ！」

「麦野。超キレてますね」

「結局、利用されるだけされちゃったからねー」

「怒り心頭」

現れたのは麦野だけでなく絹旗、フレンダ、滝壺も一緒だった。怒る麦野を見ながら絹旗は窒素を纏った拳で、フレンダは爆弾を発射して駆動鎧パワードスーツを破壊する。

「あ、あいつらは!?!」

「なぜ奴らがここに……?」

「あいつらは!?!」

絹旗は初めて見るがそれでも麦野たちの仲間だということとは理解できたが麦野たちがここにいるのかツナと美琴はは理解できずに驚いていた。一方で麦野もツナと美琴がいることに驚きを隠せないでいた。なぜアイテムがここにいるのかというアイテムはSTUDYからの偽の依頼を掴まされ、麦野の能力である原子崩しマルチデータウナーのデータを取られてしまったのである。利用されたことが気に入らなかつたアイテムはSTUDYに仕返しせんと現れたのである。

「ハハッ。凄い威力だね」

「ああ!?!」

「つ、翼!?!」

「な、何ですか!?! あの超意味のわからない人間は!?!」

「そもそも人間なの……?」

白蘭は麦野たちの前に現れる。背中から翼の生やしてあぐらを掻いた状態で宙に浮いている白蘭を見て、麦野、フレンダ、絹旗、滝壺は驚きを隠せないでいた。

「流石は学園都市の超能力者レベル5にして第4位の麦野沈利君」

「な、なぜ麦野のことを!?!」

「君のことも知ってるよ。学園都市の暗部組織アイテムのメンバーにして窒素装甲オフエンスアーマーの使い手。そして暗闇の五月計画の生き残りの絹旗最愛君」

「なっ!?!」

(暗闇の五月計画?)

麦野のことだけでなく自分の名前と過去について白蘭が知っていたことに絹旗は驚きを隠せないでいた。暗闇の五月計画という聞いたことのない単語にツナと美琴は疑問符を浮かべていた。暗闇の五月計画とは能力者の自分だけの現実の最適化と能力の性能向上させる為に一方通行の精神性と人格を植え付けるというものである。今はもうこの計画は破綻したが絹旗はこの計画の中で優等生に位置していた。

「同じくアイテムのメンバーにして爆発物の扱いが得意なフレンダ・セイヴェルン君」

「な、何で私のことまで!?!」

フレンダも絹旗と同じく白蘭に自分の素性を知られていることに驚きを隠せないでいた。

「そして能力追跡の使い手にして8人目の超能力者の滝壺理后君」

「AIMストーカー「8人目の超能力者!?!」」

「え……!?!」

滝壺が8人目の超能力者だということが白蘭の口から告げられるとツナと美琴どころか麦野たちも驚きを隠せないでいた。しかも滝壺自身もそのことを知らなかった為、驚きを隠せないでいた。

「知らなかったのかい? 彼女は学園都市の全機能を賄える人材なんだよ。といっても能力を使うのに能力体結晶を使う必要があるから8人目の超能力者っていうのも公表はされてんだけどね」

「てめえ! 一体、何者だ!」

白蘭が平行世界の知識を共有するという力を持っていないことを知らない麦野は自分たちの素性どころか自分たちですら知らなかった滝壺の秘密を知っていた為、麦野は白蘭を敵と認識し白蘭に光線を放った。

「白拍手」

「なっ!?!」

しかし白蘭は麦野の放った光線を掌の圧力だけで完全にかき消した。麦野は自身の攻撃を拍手だけでかき消されたことに衝撃を隠せ

ないでいた。

「ハハッ！ 手が痺れちゃった」

「手が痺れただと……!?!」

「麦野の原子崩しを……!?!」

「拍手だけで……!?!」

「ありえない……!?!」

麦野は順位でこそ美琴より下であるが破壊力は美琴の超電磁砲レールガンをも上回る。それを拍手だけでノーダメージでかき消したことに麦野、フレンダ、絹旗、滝壺は驚きを隠せないでいた。

「てめえ!!」

「おっと♪」

麦野は白蘭に向かって光線を連射する。連射されてもばお白蘭は笑顔を絶やさず余裕で光線を躲していた。

その時だった

「ぎやーーーーー!」

白蘭が避けた光線によって破壊された駆動鎧パワードスーツが爆発しその余波に巻き込まれた者の断末魔が響き渡る。そして空中から2つの影がツナたちの前に落ちて来る。

「ひ、酷い目にあった……」

「スカル!?!」

「デカっ!?!」

落ちて来たのはスカルとスカルの相棒である巨大鎧ダコだった。スカルがここにいることに驚きを隠せないでいた。美琴はスカルの相棒の巨大鎧ダコのデカさに驚いてしまっていた。

「な、何でスカルがここに?」

「リボーンにこの戦いに参加しろと脅されたんだ！ もし断ればボンゴレの総力を持って俺たちのファミリを壊滅させるとな!」

「鬼過ぎるでしょ……」

リボーンのあまりにも鬼畜過ぎる行動を知って美琴は会ってばかりであるもののスカルに同情してしまっていた。

「あ、赤ん坊が喋ってるわ……」

「というか化粧超濃過ぎです……」

「タコ大きい……」

フレンダ、絹旗、滝壺はスカルの存在、化粧の濃さ、タコの大きさに衝撃を隠せないでいた。スカルが装着しているヘルメットは先程の爆発によって吹き飛んでしまったのである。

「おいボンゴレ！ ここにあの女はいないだろうな！」

「あの女って……佐天のことか？」

「そうだ！ あの女のせいで俺たちのファミリーの構成員のほとんどはあの女にトラウマになったんだぞ！」

（佐天さん一体、何したの!?）

スカルはマフィアランドでの戦いが終わった後のことを語る。スカルのファミリーの構成員がトラウマになったと知って美琴は驚くと同情に恐怖していた。

「そして来たら来たでその足の太いババアのせいで来て早々に酷い目遭った！ 俺の人生はもう散々だ！」

「ああん!?」

「「なっ!?」」

スカルの言葉を聞いて麦野は怒りは頂点に達し青筋を浮かべていた、フレンダたちはスカルの言葉を聞いて恐怖のあまり顔を蒼白させていた。麦野は自分の足のことがコンプレックスなのである。

「てめえ!! ぶっ殺す!!」

「え……ぎやー……!!」

麦野は標的ターゲットを白蘭からスカルをへと変更し、容赦なく光線を放つた。光線は見事にスカルに直撃しスタジアムにスカルの断末魔が響き渡る。

「痛い痛い痛い!! おい貴様！ いくら凶星だったからとはいえここまですることないだろ!!」

「ああ!？」

「「「なっ!?」」」

麦野の原子崩しマルチダメージは鋼鉄をも余裕で貫けるだけの貫通力がある。普通の人間がまともに喰らえば体は破壊され死に至る。しかし

アンデッド・ボデー
不死身の肉体を持つスカルは痛みこそあれど死に至ることはない。
そのことを知らない麦野たちは衝撃を隠せないでいた。

「あれを喰らってもあの程度で済むのか……流石はアンデッド・ボデーの持ち主……」

「不死身って本当だったのね……」

スカルがアンデッド・ボデーの肉体を持っていることは知っていたがあの威力の攻撃を喰らってもなお大したダメージを受けていないことにツナと美琴は驚きを隠せないでいた。

その時だった。先程、斑目が乗っていたバワードスーツが一瞬にして塵と化した。

「今度は何だ!?!」

「まさか……!?!」

一瞬にしてバワードスーツが塵と化したのを見て麦野は何が起きたのかわからないうでいた。一方で塵と化したバワードスーツを見て何が起きたのかを理解したツナはスタジアムに設置されていた電光掲示板の上を見た。

「ドカスが」

標的（ターゲット） 214 禁句

「XANNXUS……!?!」

ツナの視線の先には額と左頬に古傷がある黒髪の強面の男がいた。ツナはXANNXUSがここにいることに衝撃を隠せないでいた。

「な、何ですかあの見るからに超ヤバそうな人は……!?!」

「し、知らないわよ……!?!」

「怖い……!?!」

（あいつとは絶対に戦っちゃいけねえ!! 戦ったら間違いなく殺される!!）

絹旗、フレンダ、滝壺、麦野はXANNXUSを見た途端、恐怖という感情に支配される。暗部で活動でしているからこそ普通の人よりもXANNXUSがヤバいということを感じ取れているのである。

「い、一体何なのよあいつ……!?!」

「XANNXUS。ボンゴレが誇る最強の暗殺部隊。ヴァリアーのボスだ」

「見たまんまね……」

ツナはXANNXASの詳細を話す。美琴は肩書きの名に恥じない見た目だったので納得するしかなかった。

「そして9代目の息子だ」

「はあ!?! 嘘でしょ!?! あいつが9代目の息子!?!」

XANNXUSがヴァリアーのボスというのは納得できたが、XANNXUSがああのお優しいような9代目の息子だということは信じられず美琴は衝撃を隠せないでいた。

「つて! ちよつと待ちなさいよ! ボンゴレの後継者はあんたしかいないんじゃない?!」

リボーンの話ではボンゴレの後継者はボンゴレの血を引いている者が選ばれる。そして現在、後継者はツナしかいないということ。美琴たちはリボーンから聞いている。XANNXUSが9代目の息子な

らばボンゴレの血を引いている。にも関わらずリボーンはツナしか後継者がいないと言っていた。美琴はその意味がわからないでいた。「かつ消えろ」

XANNXUSは懐から二丁拳銃を取り出すと、銃口をスタジアム内に定めた。するとXANNXASの大空の炎が銃に吸収されていき銃身がオレンジ色に染まっっていく。

「スコッピオ・デイーラ
怒りの暴発」

XANNXUSが銃を連射すると一点に凝縮された炎が極太のレーザーのように放たれ駆動鎧パワードスーツを次々に塵にしていく。そしてXANNXUSの見境無しに攻撃を続ける。そして攻撃の範囲はツナたちの所まで及ぶがツナたちはなんとか躲していく。

（あの野郎！ 私の原始崩しマルチダウナー以上の威力をノーリスクで連射してやがる！ 化け物だ！）

XANNXUSが放った炎を躲しながら麦野はXANNXUSが自分の上位互換の存在だということを理解する。

「ちよつと！ あいつもあんたの仲間じゃないの!? これじゃ私たちも巻き添えじゃない！」

「そうだぞ！ なんとかしろボンゴレ！」

「無理だ。XANNXUSの炎の威力は俺の炎より上だ。俺の炎でも防ぎ切れない」

「う、嘘でしょ!?!」

XANNXUSの炎がツナの炎よりも破壊力が上だという事実^に美琴は衝撃を隠せないでいた。普段であれば死ぬ気零地点突破改で吸収できるのだがフェブリを背負っている状態ではフェブリが巻き込まれる為、吸収したくてもできないのである。

「XANNXUSは2代目が持っていたとされる憤怒の炎の持っているからな」

「憤怒の炎……？ 死ぬ気の炎じゃないの……？」

「死ぬ気の炎の中でも特に強い破壊力を持った炎。2代目が激昂した時のみこの炎を見せたことから死ぬ気の炎と別に憤怒の炎と呼ばれているんだ」

憤怒の炎という聞いたことのない単語を聞いて疑問符を浮かべる美琴にツナは憤怒の炎の詳細を説明する。

「そして7代目と同じ銃を使っている」

「7代目の銃？」

「7代目は歴代のボスの中でも一際、炎が弱かったらしい。そこで7代目は銃に炎を蓄積する方法を思いついた。たとえ微弱な炎でも蓄積され一点に集中されればその攻撃力は計り知れない。7代目はその方法でどんな敵をも仕留め、攻撃力といえれば必ず7代目の名が上がる程にまでなっただけらしい」

「ちよっ……!?! 待ちなさいよ……!?! あいつの炎は普通の炎よりも数倍の破壊力を持った炎なんですよ……!?! そんなのを一点に集中させたら……!?!」

「とてつもない破壊力になる。わかりやすく言えばお前の超電磁砲^{レールガン}あの女の光線以上の威力の炎を即座に何発も撃てる。しかもXANXUSの攻撃力はあんなものじゃない。あれでも加減してる」

「ど、どんだけヤバいのよ……!?!」

ツナの炎よりも破壊力が上だというだけでも衝撃の事実であるのにも関わらず、それをノーリスクで撃てるという全く弱点のない力に衝撃を隠せないでいた

「安心していいよ。美琴君。このぐらいの戦いじゃXANXUS君が本気になることはないから」

絶望的なバッドニュースを聞いて絶望しかける美琴に白蘭が大丈夫だと告げる。

「XANXUS君の怒りが頂点にならない限り本気になることはないよ。XANXUS君が綱吉君に負けた時ぐらいのことがない限りは本気になることはないから♪」

「なっ!?!」

白蘭の言葉を聞いた途端、ツナは驚きの声を上げた。

「てめえら……全員、かつ消す!!」

するとXANXUSの額とみ左頬にあった傷が顔全体に広がっていく。XANXUSは怒りが頂点に達すると9代目につけられた傷

が浮かび上がり、怒りに比例して炎圧も上昇するのである。

「ベスター」

するとXANXUSの装着していたリングから鎧を纏ったXANXUSの匣ボックスアニマルが姿を現した。金剛鎧アルマトウラ・ブラティノ・リグレ・テンベスタ・デイ・チエーリの天空嵐ライガーのベスターである。ライガーとはまれにライオンのオスとトラのメスが異種交配して生まれる混血の子供のことである。

「形態変化」

XANXUSがそう言うのとベスターとXANXUSの二丁拳銃が合体した。

「ピストラ・インペラトール・アニマル獣 帝 銃」

そう言うのと二丁拳銃に大量の炎が蓄積されていき、銃口から球体と化した炎が溢れ出ていた。

「あ。やっちゃった♪」

「呑気なこと言ってる場合か！ このままじゃこの会場が吹き飛ぶぞ！」

「「「「なっ!」」」」

この会場が吹き飛ぶと知って美琴、スカル、アイテムのメンバーは衝撃を隠せないでいた。

「ちよ、超逃げましょう!」

「逃げるって結局、どこに逃げるのよ!」

絹旗は逃げるよう提案するがこの会場が吹き飛ぶとなればどこに逃げても意味がないということを理解していた。

「大丈夫♪大丈夫♪空に逃げれば問題ないよ♪」

「てめえと一緒にするんじゃないねえ!」

「そうだ! アレを喰らったら俺でもあの世行きだ!」

こんな状況下において呑気にそう言う白蘭に麦野とスカルは突っ込みをいれる。

「コルポ・ダ・デイオ決別の一撃!!」

XANXUSの二丁拳銃から膨大な炎が放たれた。放たれた2発の炎は混ざり合い炎は獅子の形へと変貌していき駆動鎧パワードスリットは一瞬にし

て風化していった。

標的（ターゲット） 215 4人目の大空

XANXUSの本気の一撃がツナたちに迫っていき絶体絶命のピンチに陥るツナたち。

その時だった

「ふんっ!!」

XANXUSの放った炎を大空の炎を纏った拳で横から何者かがおもいつきり殴った。それによって炎の軌道は横に逸れていったがスタジアムの客席部分はおろか客席部分から数十メートルが焦土と化していた。

「よ。ツナ。大丈夫か?」

「と、父さん!」

「はあ!」

XANXUSの炎の軌道を変えたのは家光だった。ツナは家光がここにいることに驚き、美琴が目の前にいる男がツナの父親だということに驚きを隠せないでいた。

「う、嘘でしょ……!? あんな威力って……!」

「しかもあの威力の攻撃を拳だけで軌道を変えるとか超ありえませんか……!」

「に、人間技じゃない……!」

軌道が反れたことよって跡形もなく破壊された客席部分を見てフレンダ、絹旗、滝壺は衝撃を隠せないでいた。

（い、一体こいつらは何なんだ! こんな化け物みたいな^{バイオキネシスト}発火能力者が学園都市に4人もいるなんて聞いてねえぞー!）

自分を余裕で圧倒したツナ。拍手だけで^{マルチダウナー}原始崩しを相殺した白蘭。自分以上の威力の攻撃力をノーリスクで放つXANXUS。そのXANXUSの攻撃の軌道を拳1つで反らす家光。化け物だと呼ばれるこのとの多い麦野ですらこの4人に畏怖の念を抱いていた。

「お。君が美琴ちゃんか。初めまして。ツナの父親の沢田家光だ」

「え!?! 何で私の名前を……!」

「そりやミサちゃんから聞いてるしな。なんてたつてミサちゃんは俺たちC H D E Fの一員でもあるらね」

「チエデフ？」

「ボンゴレ門外顧問機関C H D E F。普段はボンゴレとは違う組織だけどファミリーの非常時においてはボスに継ぐ権限を持つ。綱吉君のお父さんはC H D E Fのボスであると同時にボンゴレのN o . 2なんだ」

「N o . 2!？」

白蘭から家光がボンゴレのN o . 2だということを知って美琴は驚きの声を上げた。

（というか沢田の父親ってことはこの人もボンゴレの血を引いているんじゃない……）

美琴は家光もボンゴレのボスの後継者になる為の条件を満たしているのにも関わらず、後継者の中に家光の名前が上がっていないことに疑問を抱く。

「そんなに驚く必要はないぞ美琴。大層な肩書きは持つても中身はただのダメ親父だ」

「おいツナ！ せっかく助けてやったのにその言い草はねえだろ！」

いきなり息子^{ツナ}がそんなことを言われて家光はツッコミをいれる。ツナは虹の代理戦争で家光の強さは認めてはいるが家光の人間性までは認めてはいないのである。

「つたく……ミサちゃんはお前と違って聞き分けが良いつてのに……」

「あ、あの……あの子たちは元気にやっていますか？」

「ああ。物覚えも早いし仕事も真面目にやってくれてるよ。特にミサカネットワークの力は遠くにいる仲間への連絡や同盟ファミリーの連携に役立ってる。そのお陰で仕事も大分、楽になってて本当に助かってるよ」

「そうですか……」

ツナたちの世界にいる妹^{ミサ}が元気にやっていると知って姉^{美琴}は嬉しそうな様子であった。

「仕事の効率も家に帰れる頻度も上がって愛する奈々と一緒にいられる時間も増える。まさに一石二鳥ってやつだ」

「帰って来なくて結構だ。前にも言ったがあんたが家に帰って来るとめっちゃくちゃになる」

「何でお前は父親にそんなにもドライなんだよ!？」

「自分の胸に聞いてみる」

(さ、沢田がいつになく冷たい……)

家光家光に対して冷ややかな視線を送りながら冷たい言葉を吐くツナに家光はツツコミをいれた。こんなにも冷たいツナを初めて見た美琴は驚きを禁じ得なかった。

「邪魔だ家光」

XANXUSは家光に邪魔をされたのが気に入らなかったのかも
う一度、二丁拳銃の銃口をスタジアムへ向けた。

「やれやれ。まだ懲りてねえのかあいつは……」

家光はXANXUSの行動を見て嘆息するとまだ破壊されていない
かっつパワードスーツ駆動鎧を右手で掴んだ。すると炎をパワードスーツ駆動鎧に炎を纏わせて数
十メートル先にいるXANXUSに向かっておもいきりぶん投げ
た。XANXUSは即座に二丁拳銃から炎を放つてパワードスーツ駆動鎧を破壊し
た。

「あの暴れん坊は止めておいてやるから。先に行けツナ」

パワードスーツ(駆動鎧をボールを投げるくらいの感覚のくらいで投げるって……
!?)

パワードスーツ駆動鎧を片手でしかも100キロ以上のスピードぶん投げた家光
の馬鹿力に美琴は衝撃を隠せないでいた。

「ま。XANXUS君を怒らせちゃったのは僕だし。僕はここに残る
よ」

「本気のあいつと戦いたいだけでしょあんた……」

自分のせいだから責任を取るみたいなことを言っている白蘭であるが、自分がXANXUSと戦いたいだけということを美琴は理解していた。

「ボンゴレ! この俺様が協力してやったんだ! 絶対に負けんじや

ないぞ！」

「いや……あんた何もしてないわよね……」

何もしていないのにも関わらず、何かしらの達成感を醸し出しているスカルに美琴はツツコミをいれた。

「いくぞ美琴」

「うん」

数々の仲間の助けによってここまで来た2人。いよいよSTUD Yの本拠地へ突入するのであった。

標的（ターゲット） 216 本拠地

「おい！ 斑目！ 応答しろ！」

STUDYの本拠地では有富が連絡の取れなくなった斑目に何度も連絡していた。

『あ、有富か……!?』

「斑目！ 無事だったのか！」

斑目は麦野が放った光線によつて駆動鎧が機能を停止した際にすぐに離脱していた。そして見てしまったのである。血と涙の結晶であるSTUDY特製の駆動鎧パワードスーツを一瞬にして塵と化した男を。塵と化した駆動鎧をも遥かに上回る一撃を拳1つで軌道を反らした男の姿を。

『拠点を捨てて今すぐ逃げろ……』

「な、何を言つて……!?」

『僕たちはとんでもない相手に喧嘩を売つたんだ……奴らは人間じゃない……化け物だ……』

「何を言っている!! 憎き能力者共に我々の力を知らしめる!! お前もその意思に賛同したはずだろ!!」

『そうさ……お前たちと一緒に何だつてできる……そう思つてたさ……でも奴らの力を見てわかつた……このままじゃ僕たちは間違いなく殺される……』

斑目の心はすでに折れていた。STUDYの力など何の意味も成さないということを感じたからである。

『お前たちが殺されるのを僕は見たくない……お前たちが殺されるぐらいなら計画なんて失敗していい……』

「斑目!!」

『今までありがとう……計画は失敗したけどお前たちと過ごした日々

……悪くなかった……」

「おい斑目!! 斑目!!」

有富の静止を無視して斑目は一方的に通信を切った。有富は斑目の名を何度も呼ぶが斑目からの返答はなかった。

「クソツ!!」

有富は拳をおもいつきり台に叩きつけた。そんな有富を見て関村と桜井を心配そうな何と云えばいいのかわからず心配そうな表情かおをしながら有富の顔を見ていることしかできなかった。

「なぜだ……!?!? なぜだ……!?!? 我々の計画は完璧なはずだ!! なのになぜだ!?!? 一体、奴らは何だと言うんだ!!」

「仲間だ」

「!!?!?!」

すると知らない声の本拠地に響き渡る。3人が声のする方を向くとそこにはツナ、美琴。そしてツナのズボンの裾を握っているフェブリがいた。

「フェブリ!」

「砥信!」

（あいつが布束砥信か……そしてあの機械に入っているのがジャーニーか……）

お互いの顔を見た途端、布束とフェブリは声を上げる。フェブリの名前を呼んだ女性が布束、布束の後ろに機械に入っているのがジャーニーだということをツナは理解する。

「大人しく投降しろ。そうすれば手荒な真似はしない」

「……」

ツナの言葉を聞いて桜井と関村は何も抵抗することなく俯き投降の意思を示した。駆動鎧パワードスーツも全て破壊されてここまで侵入されてしまった以上、打つ手はもうないということを理解しているのである。「ふざけるな!! 貴様らに捕まるぐらいなら死んだ方がマシだ」

だがこんな絶望的な状況の中で有富だけが投降する意思を見せなかった。

「なぜだ? 何でお前は……?」

「貴様らにはわかるまい!! 我々の屈辱を!! 我々の無念を!!」

ツナはわからなかった。本拠地に侵入され抵抗する手段もないでこの絶望的な状況で有富だけが投降せず死んだ方がマシだということと言ふことに。ツナの言葉を聞いて有富は怒りをヒートアップさせる。

「この学園都市では能力こそが全て!! たとえ素晴らしいどんな論文を書こうともどんな賞を貰おうと結局、能力が全て!! 我々がどんなに頑張っても能力でなければ認められることなどない!! だから起こしたのさ!! この未明革命を!!」

「だったらなぜフェブリとジャーニーを造った?」

「え……!?!」

フェブリのことだけならともかくジャーニーのことまで知っていたことに桜井と関村は驚きを隠せないでいた。

「我々は過去に能力を使える人間を安定的に量産する計画を過去にプレゼンしたことがある。しかし我々の研究は否定された。奴らは我々の研究の素晴らしさを理解しようとしな。だから我々は能力より知性の方が優れていると学園都市に知らしめる為の道具を造った。それがフェブリとジャーニーだ」

「そんなことの為に……!?!」

「貴様ら能力者に我々の気持ちなどわかるはずないだろ!! 能力は才能がある者の特権!! どんなに頑張っても能力を得られない者たちの気持ちは!! 特に学園都市に超能力者であるお前には!!」

「だからって……!?!」

能力者であり超電磁砲という異名で呼ばれる美琴には能力で挫折する気持ちはわからない。故に有富のことに反論できずにいた。

「これは我々の誇りを知らしめる聖戦になるはずだった……なのにそれを貴様らは……!?!」

自分たちが築き上げてきたものを壊された怒りと恨みの矛先を有富はツナと美琴に向けた。

「確かに学園都市は能力者が無能力者を見下し能力は才能によるものが大きい。そして超能力開発を目的としている上に何かと能力者が

優遇されている部分があるのもわかる。だからこそお前たちの怒りの理由もわかった。でも人を傷つけることは誇りを知らしめることじゃない」

「我々のことをわかったかのような口ぶりで喋るな!!」

すると有富は後ろを振り向くことなく右手の人差し指で画面をタッチした。

「有富君！　あなたまさか!？」

「終わりだ!!　もう何もかも終わりだあ!!」

「な、何よ!?　何をしたのよ!？」

有富の行動に仲間であるはずの桜井と関村までもが動揺を隠せなideいた。桜井と関村の反応から美琴はただ事ではないことが起ころうとしていることを理解する。

「ジャーニーの能力を暴走させて軌道衛星上……高度3万五千キロから毎秒7キロでこの学園都市にミサイルが向かっている……このままじゃ学園都市は壊滅するわ……」

「そんな……!？」

布束が有富がしたことを説明すると美琴は驚きを隠せないでいた。

「布束の言う通りだ……こいつだけは使いたくなかったが……こうなってしまった以上、もう関係ない。憎き能力者もろとも道連れにしてやる」

すると有富は懐から銃を取り出す。そして銃口を自分の頭に向けた。

「俺は先に逝く。ミサイルが降り注ぐその瞬間までせいぜい余生を楽しむんだな」

そう言うとき有富は右手の人差し指を銃の引き金に当てる。しかし死への恐怖があるのか手は震えており引き金を引けないでいた。

その時だった

「っ!？」

だが銃に引き金が引かれる前に有富の手に握られていた銃が弾き飛ばされた。銃を弾き飛ばしたのはツナだった。ツナは有富が銃口を引く前に炎を逆噴射させて一気に有富の元まで移動したのである。

「ふざけんな……」

ツナは有富の胸ぐらを掴んだ。するとツナの額の炎が消えボンゴレギアが手袋の状態になった。

「自分の命を何だと思ってるんだよ!!」

「な、何を言ってる……!!?」

ノーマル状態に戻ったツナの叫ぶが本拠地に響き渡る。一方で有富はわからないでいた。敵があるはずのツナが自分に放ったツナの発言が。

「死んだら何も残らないんだぞ!! やり方は間違っけていても認められなかったんじゃないのかよ!! 何で死ぬ必要があるんだよ!! 何でお前はそんなにも簡単に命を捨てることができるんだよ!!」

「沢田……」

敵であろうともツナは命を軽んじる有富のことが許せなかった。ツナの言葉を聞いて美琴は過去の自分のことを思い出す。ミサたちの為に命を捨てようとした自分のことを。

「何を言っている……!!? ふざけているのか貴様は……!!?」

「ふざけてるのはお前だろ!! 何でお前の勝手な行動で学園都市が壊滅されないといけないだ!! 何で大勢の人たちが死なないといけないんだ!! この学園都市にはお前と同じ無能力者が!! お前と同じく知性で認められようと努力する人たちが!! お前と同じ境遇の人がいるだろ!! そんな人たちがいることを知っていて何で簡単に命を奪えるんだお前は!! 自分だけが良ければそれでいいのかよ!!」

ツナは有富が自分の命を軽んじたことも許せなかったが、何よりも許なかったのは簡単に他人の命を奪おうとしたことであった。

「フェブリだってそうだ!! 人工的に造られたとか関係ない!! フェブリにだって感情があるんだ!! なのに何で道具扱いしてるんだよ!! 何であの子があんな目に遭わないといけないんだ!!」

フェブリが飴がないと生きられない体質だということ。ジャーニーが使えなかったというスペアだったということに関してツナは怒りを覚えていた。

「仲間の命だってそうだ!! やってることは間違っても同じ仲間だろ

!! お前が死んだら悲しむ奴がいるんだろ!? お前は仲間の想いを!! 仲間の命を犠牲にしても目的を成したいのかお前は!？」

ツナにそう言われて有富は横を向いた。そこには迫り来る死を知って絶望していた桜井と関村がいた。そして理解する。2人が絶望しているのは自分の勝手な行動のせいだということ。

「あああ……!!」

有富は2人は自分がしてしまった過ちの重大さに気づき後悔した。そして脱力しそのまま尻餅をついてしまったのだった。

標的（ターゲツト） 217 ツナの秘策

ツナに気圧された有富は壊れた人形になったかのように大人しくなり手錠をかけてもなお全く抵抗することはなかった。そんな有富を見た桜井と関村も手錠をかけられてもなお大人しくしていた。

「砥信!! 会いたかった!!」

「私もよ……フェブリ……」

一方でフェブリは布束に抱き付き布束もフェブリを涙を浮かべながらフェブリを抱き締めていた。そんな2人をツナと美琴は温かい目で見守っていた。

「つてフェブリ!? 飴は!?!」

布束はフェブリが飴を舐めていないことに気づき驚きの声を上げる。感動の再会のあまりフェブリが飴を啜えていないことに布束は気づくのが遅れてしまったのである。

「それについては大丈夫よ。こいつがフェブリの体の中にある毒を浄化して飴がなくても生きられるようにしてくれたから」

「浄化……!?! 一体、どうやって……!?!」

「こいつの炎には調和っていう特徴があるの。だからフェブリの中の毒を浄化できたの」

「そんなことが……!?!」

美琴がフェブリの体内にあった毒を浄化した方法を説明した。布束はツナの方を見ながら驚きを隠せないでいた。

「感動の再会のところ悪いが話は後だ。まずは学園都市に向かってミサイルをなんとかするぞ美琴」

「そうね」

再び超^{ハイパー}死ぬ気モードになったツナがそう言うとき美琴も気持ちを切り替える。

「無理よ……そんなこと……もう何もかも終わりなのよ……」

「終わりなんてさせない。ミサイルは絶対に止める」

「どうして……？ 何でそう言い切れるのよ……？」

桜井にはわからなかった。この絶望的な状況においてもツナが絶望しないことに。

「俺には絶対に譲れないもの……誇りがある。俺の誇りは仲間だ。仲間を護る為ならどんな絶望だってうち壊してやる」

ツナの脳裏には自分の世界の仲間の姿と学園都市の仲間の姿が浮かんでいた。

「第一、ダメかどうかはやってみなくちゃわからないだろ」

ツナは今までの戦いのことを思い出す。どの戦いも絶対に勝てるという保証はなかった。それでも死ぬ気で運命に抗ったからこそ勝つことができたのである。

「それに仮にこれでダメだったとしても俺は最後の最後まで仲間を護る為に抗う。死ぬ気でな」

「死ぬ気で……」

ツナの言葉を聞いて有富はボソツと呟いた。有富の脳裏には学会にて少ない観客に向かって必死に演説している自分が。純粹に誰かに認められたいと打算もなくただがむしやらに頑張っていたあの頃の自分を。

「ダメだわ……ジャーニーの能力を暴走させるのに集中し過ぎたせいで機械系統が機能を停止してるわ……」

布束はミサイルが今どの辺りにあるのか位置を把握しようとしたがジャーニーの入っている機能以外の機械系統が機能を停止してしまっただけにミサイルの位置がわからない状態になってしまった。

「ミサイルの位置はこっちで調べて破壊する」

「調べるって……一体どうやって……!？」

「仲間に聞く」

するとツナはポケットからスマホを取り出した。

学舎の園

「どうですか？ 美味しいですかユニさん？」

「はい。とても美味しいです」

ユニは学舎の園のカフェにて朝御飯を食べていた。なぜユニが学舎の園にいるのかというとジツリヨネロファミリーの実力者であるYがない今、ユニを安全な場所に避難させなければならぬ。そこでツナと美琴は革命サイレントパートナー未明が始まる前にユニを学舎の園に預けたのである。学舎の園は学園都市の中でも最高なセキュリティな上に生徒は強能力者レベル3以上の能力者しかいない上に襲撃を受ける可能性はまずない。ユニを護る上でこんなに適した場所はない。

「操折さんありがとうございます。こんな豪華な食事をご馳走してもらって」

「気にしないでいいのよお。むしろいっぱい食べて御坂さんみたいな貧相力満載な体にならないようにしなさい」

ユニは向かいに座っている操折にお礼を言った。操折は笑顔で対応する。

(にしてもいきなりこの子を預かって欲しいって……一体、何を考えているのかしら……まああの人には借りがるし別に御坂さんと違って良い子だから全然、苦労力もないから別にいいんだけど……)

過去にツナに2度助けられた操折はツナの頼みを了承した。了承したのはいいのだがユニは素直で聞き分けがいい為、何も苦労することがないのでこれで借りを返したことになるのかと思うくらいであった。

その時、ユニが持っているスマホに電話がかかる。

「すみません。ちよつと……」

そう一言だけ言うとユニは椅子から立ち上がり少し離れた場所に移動してから電話に出た。

「沢田さん？　どうかされました？」

『ユニ。いきなりで悪いが落ち着いて聞いて欲しい』

「わかりました」

ツナの声から緊急事態だということを悟ったユニは落ち着いてツナの話を聞いた。そしてユニはツナから学園都市を壊滅させる程のミサイルが落ちて来るということを知る。

「わかりました。ミサイルの落ちて来る場所を予知で割り出せばいいんですね」

ユニは内心では驚いてはいたが周囲の人間に聞かれパニックになつてはいけないと思い、平静を装っていた。そしてユニは予知を始めミサイルのいる位置を割り出す。

「見えました。ですが……」

『どうした？』

「私は学園都市の地理がわからないのでここがどこなのかわからなくて……」

予知で未来が見えても学園都市に初めて来たユニに学園都市の土地勘があるはずもなく予知で見た場所がわからないでいた。

「学会の第4会場。その上空だぞ☆」

『操折!?!』

リモコンを持った操折がミサイルの落ちる場所をツナに教えた。操折は能力でユニの頭の中を覗いたのである。

「なーんか面倒な事件に巻き込まれてるみたいだけど。これで力になれたかしらあ？」

『ああ。助かる。ありがとう』

「ま。あなたに借りを返さなきゃいけないって思ってたしねえ」

『ついでと言つてはなんだが後でお前にお願ひがあるんだが』

「いいわよお。あなたには2度助けて貰つてるし。じゃあ後はよろしく〜」

再びSTUDYの本拠地

「わかったぞ。第4会場の真上だ」

「よし。後はミサイルをなんとかするだけね」

ミサイルが落ちて来た場所がわかったところで後はミサイルを破壊するだけとなった。

「あのミサイルは一定の高度に達すると無数の分裂するわ。どうにかしたいなら分裂する前にどうにかしないといけないわよ」

「だったら分裂する前に俺が破壊する」

「そうするしかないわね……でもいくらあんだでも移動するまでの時間がかかるわよ……」

ツナの意見に賛成する美琴。しかしいくらツナが素早く飛ぶことができるとはいえミサイルが分裂する前の高度まで分裂する前に間に合わないことを理解していた。

「大丈夫だ。策はある」

「どんな方法よ?」

ツナは美琴にミサイルの元まで移動する策を話した。

「あ、あんた正気……!?!」

「めっちゃくちゃね……」

ツナが思いついたミサイルの元へ向かう方法を聞いて美琴と布束は衝撃を隠せないでいた。

果たしてツナの秘策とは!?!

標的（ターゲット） 218 迎撃

いよいよミサイルの迎撃する段階へと入る。

「あっちの方から行きなさい。あっちから行けば第4会場の近くに出れるわ」

「わかった。布束。フェブリことは頼んだぞ」

「了解よ」

ツナからの頼みを聞いて布束は了承した。

「それと後で話がある。妹分シスターズのことだな」

「え……!?!」

ツナが妹分シスターズのことを知っていることに布束は驚きを隠せないでいた。布束は詳しいことを聞きたかったが先にツナと美琴が先に行ってしまったので聞きそびれてしまった。

2人は本拠地に来た道とは別のルートから外に出た。2人が着いたのはスタジアムから少し離れた場所だった。

「第4会場はあっちで合ってるよな?」

「ええ」

「よし。俺に捕まれ美琴。俺がお前を抱えて第4会場まで移動する」

「へ……!?!」

ツナが運んでくれると知って美琴は顔を赤くしながら動揺する。

「ななな、何でそうなるのよ!?!」

「飛んだ方が早く着くだろ」

「そ、そうだけど……!?!」

「どうした美琴? 何を躊躇ってる?」

「だ、だって……!?!」

ツナにお姫様抱っこされる姿を想像して美琴の顔は真っ赤になり、頭から湯気が出てしまっていた。結局、美琴は勇気を振り絞ってツナにお姫様抱っこされながら第4会場へ飛んでいくこととなった。

ツナと美琴は第4会場に向かった。そこにはすでに誰もおらずあ
るのは破壊された駆動鎧パワードスーツあるだけだった。そしてツナは無線で第4
会場からミサイルが学園都市に落ちて来ることとその対処法をみん
なに通達した。

「持つて来たぞボンゴレ」

「お待たせ綱吉君」

「感謝するんだな沢田綱吉」

ツナの通達を聞いて今まで遠隔操作でモスカを動かしていた正一、
スパナ、ヴェルデがモスカと共にやつて来た。
「しっかし……凄いこと考えたわね……」

美琴はモスカを見ながらそう言った。ツナの考えた作戦とはツナ
がモスカの中に入りその後で美琴の超電磁砲レールガンでモスカを上空まで飛
ばしミサイルが落ちて来る場所まで移動するといふものであった。
「ごめん。せつかく造ったモスカをこんな形で使っちゃって」

「謝るなボンゴレ。緊急事態だから仕方がない」

「私としてせつかく造ったモスカを使い捨てにされるのは癪だがな。
まあ学園都市の能力者の力を見ることができるといふものだから許してやる
う」

「それよりも。問題はミサイルが来る時間はわかっているのかい？」
「ええ。ミサイルが地球の上空に到達するのは78分後よ。2分前に

「ここから発射させるわ」

「だったらその間にコンタクトとヘッドフォンの異常がないかを調べ
る。万が一のことがあったらいけないからな」

「うん。お願い」

そう言うのとツナはコンタクトとヘッドフォンを外してスパナは渡
した。スパナはコンタクトとヘッドフォンを受け取ったスパナは
さっそく異常がないかどうかを確認し始める。

「あんた目が悪かったの？」

「違うよ。あのコンタクトとヘッドフォンはXBURNERを安定し
て撃つ為のアイテムなんだ」

「あの技を？」

XBURNERを撃つのとコンタクトとヘッドフォンがどう関係
するのかわからず美琴は疑問符を浮かべる。

「綱吉君のXBURNERは強力だけど安定して撃つのは難しいん
だ。まず1つ目に両手から放出する炎の量と同じにしないといけな
いんだ」

「そっか……発射する炎が強いと支えの炎が支えきれなくなって後ろ
に吹き飛ばし、逆に弱いと十分な威力が出せないのね……」

「うん。それと炎の出力を同じにしても両手を左右対称にしなきゃバ
ランスが崩れて安定したXBURNERを撃つことができない」

「そりゃ感覚だけで両手を左右対称にするなんて普通できないわよ
……」

「そう。だからコンタクトには炎の出力情報と手の位置が映るよう
なってるんだ。そしてコンタクトの情報はヘッドフォンから音声で
伝えられるようになってるんだ」

（まさかそんなにもリスクがある技だったなんて……）

正一がコンタクトとヘッドフォンの役割について説明する。発射
するまでに時間がかかるというリスクだけが弱点だと美琴は思っ
ていたが、他にも弱点があったことに驚いていた。

「チェック完了だ。どこにも異常はない」

「ありがとうスパナ」

コンタクトとヘッドフォンのチェックが終わるとツナはコンタクトとヘッドフォンを装着する。そしてついにミサイルが地球の上空に落ちて来る時間となる。ツナは超^{ハイパー}死ぬ気モードになってモスカの中に入り、スパナがモスカをパソコンで操作して美琴より少し高い位置に浮かせた。

「このモスカは複合装甲に雷の炎の特徴である硬化の炎でコーティングして強化してある。おもいつきりいくがいい」

「了解！」

ヴェルデのアドバイスを聞いて美琴は右腕に電撃を纏わせる。

「沢田？ 準備はいい？」

「いつでもいいぞ」

「じゃあいくわよ。セーの……いっけー……いっけー……いっけー……!!」

美琴は電撃を纏った右手でももいつきりモスカを殴りつけた。そしてローレンツ力が加わったモスカは音速の3倍の速さで上空へと飛んでいく。

モスカが発射されてから72秒後。上空7km。

「止まった……」

モスカが止まったのを確認するとツナはモスカから出る。そして外に出る。そしてモスカは地上へゆっくりと落ちていく。

「オペレーションX」

『了解シマシタボス。イクスバーナー発射シークエンスヲ開始シマス』

外に出たと同時にツナはすぐに両手を左右対称にしてXBURN ERを発射する準備に入った。

(寒さはなんとか耐えられる……問題は空気の薄さだ……最低限の呼吸で最速で撃つて終わらせる……)

超^{ハイパー}死ぬ気モードは全身のリミッターの解除。つまり5感を強化された状態である為、寒さにはなんとか耐えられる。しかし空気の薄い状態は流石にきついということをつなは理解する。

『ライトバーナー炎圧上昇。16万……17万……18万 F V』

ファイアンマボルテージ

コンタクトに表示されている右側の炎の出力情報を示したメーターが徐々に上昇していく。

『レフトバーナー炎圧上昇。16万……17万……18万 F V』

ファイアンマボルテージ

今度はコンタクトに表示されている左側の炎の出力情報を示したメーターが上昇していく。

『ゲージシンメトリー。発射スタンバイ』

そして両手の位置が完全に左右対称となり、ついに発射する準備が整った。

その時だった

『ミサカたちの計算は合っていたでしょうか？ とミサカは尋ねます』

「ああ。完璧だよ」

ツナのヘッドフォンから通信が入る。通信してきたのはミサだった。ユニの予知でミサイルの大体の位置は判明したが、細かい位置まではわからなかったのでツナと美琴はミサたちにミサイルの弾道計算を第4会場に着いてすぐに依頼。ミサカネットワークを利用した弾道計算によって最速でミサイルの位置と時間を割り出したのである。そしてツナの視界には小さくではあるがすでにミサイルを捕らえていた。

「それにしてもどうやって俺に連絡した？」

『リボーンがミサカたちの病院に来て無線を貸してくれたのです。とミサカは説明します』

「そうか」

ツナのミサイルの迎撃法を聞いてリボーンは気を聞かせてカエル医者 of 病院に向かいミサに無線を貸して連絡できるようにしたので

ある。

「ミサイルは必ず打ち落とす。ミサたちが生きられる未来を作るって決めたからな。だから待っていてくれ」

『了解です。とミサカは心の中であなたの無事を祈りながら待っています』

そう言うとミサは通信を切った。そしてついにミサイルの距離がツナに近づいて来た。

「XBURNER^{イクスバーナー} AIR^{エア}!!」

ツナの右手から膨大な炎が放たれた。放たれた炎はミサイルにぶつかり大空の炎の特徴である調和の炎によって空気と調和して一瞬にして塵と化した。

「終わった……」

標的（ターゲット） 219 愛

ミサイルを打ち落とすとしたツナは両手を広げてそのなま自由落下していく。ある程度の高さにまで落ちるとツナは炎を逆噴射させて空中で一旦、止まるとそこからゆっくりと地上へ降りていった。

「終わったぞ」

「じゃあ後は……」

「ああ。後はジャーニーをなんとかするだけだ」

ツナと美琴はジャーニーをなんとかする為に再び本拠地に戻った。

「待たせたわね」

「その様子だと成功したみたいね」

美琴の表情と台詞から無事にミサイルを打ち落とせたということ
を布束は理解する。

「それでジャーニーのことなんだけど。能力を発動するコアとして機能するための最低限の機能と生命維持能力のみが入力された状態なの。だから私たちはジャーニーを昏睡状態にさせた。けど目を覚ませる方法は私たちでもわからないの」

「そんな……」

ジャーニーを目覚める方法がないということを知ってツナと美琴はショックを受ける。

「あつ！ フウ太の力なら！」

「そつか！ フウ太君の力なら！」

「フウ太？」

ツナはフウ太のことを思い出す。ツナの言葉を聞いて美琴を表情^{かお}を明るくさせる。布束はフウ太のことが誰なのかわからず疑問符を浮かべる。

「沢田！ 早くフウ太君に連絡！」

「うん！」

ツナは急いでスマホを取り出しフウ太に連絡した。フウ太は向この世界にいたがすぐに学園都市にきた。そしてジャーニーを目覚めさせる方法ランキングを調べて、そのランキング結果をツナに伝えた。

「ありがとうフウ太」

ランキングの結果を聞いたフウ太にツナはお礼を言うと言った。切った。

「それで？ フウ太君は何て言ってたの？」

「フェブリだって」

「へ……!?!」

ジャーニーを目覚めさせるのにフェブリが必要だという意味がわからず美琴はポカーンとしてしまう。

「正確に言うとならフェブリの愛の力だね」

「あ、愛って……それ本当なの……!?!」

「うん。フウ太が言うんだし間違いないと思うよ」

「まあ……雨は降ってないし……的中率100%だしね……」

フウ太のランキングの結果を疑った美琴であったが、フウ太のランキングが外れたことはないので複雑な気分になりながらも信じることにした。

「お姉ちゃんフェブリだよ」

フェブリは美琴に抱えられ、生命維持装置で眠っているジャーニーに話しかける。

「これはねゲコ太だよ」

フェブりは美琴から貰った指人形のゲコ太をジャーニーに見せた。その後もフェブりはジャーニーに色々と話しかけていくがジャーニーは何も反応を示すことはなかった。

「ねえ……本当にこれでジャーニーが目覚めるの？」

「大丈夫だよ。ジャーニーは目覚めるよ」

科学者である布束にとって愛という非科学的な方法でジャーニーが本当に目覚めるのか信じられないでいた。だがツナはフウ太の力を知っている為、ジャーニーが必ず目覚めるということを確認していた。

その時だった

「見てー ジャーニーがー！」

美琴が叫ぶ。そして美琴の視線の先には目を開けたジャーニーの姿があった。

「嘘……!?!」

布束は驚きを隠せないでいた。本当にフェブりの愛の力でジャーニーが目覚めたことに。そして目覚めたジャーニーを生命維持装置から出すとツナの上空の炎の力でジャーニーの中にある毒を浄化した。

「これでジャーニーの中にある毒も浄化できたはずだよ」

「不思議な力ね……」

炎であるのに関わらず、全くジャーニーを燃やすことなく毒を浄化したことに布束は驚きを隠せないでいた。ジャーニーはずっと生命維持装置の中にいた為、運動神経がほとんどない。その為、立つこともままらない状態なので本拠地内にあるベッドに横にすることにしていた。フェブりはベッドで横になっているジャーニーと楽しく話していた。

「これで全て終わったのね」

「うん」

ベッドで横になっているジャーニーを見ながら美琴とツナはそう言った。ミサイルも打ち落としフェブりの姉であるジャーニーも助けた。これでツナたちの目的は全て果たされた。

「そういえばフェブリがここじゃなくて学園都市いたのっでもしかしてあんたが逃がしたの?」

「そうよ」

「え? どういうこと?」

布束と美琴が言っていることがわからずツナは疑問符を浮かべた。

「私たちがフェブリに初めて出会った時、フェブリはどういう訳か私の名前を知ってたの。多分、私ならフェブリを助けてくれると思って私の名前を教えたとところなんでしょ」

「あなたの推測通りよ」

「でも何で私だったの?」

「私には頼れる人がいなかった。だから研究所からフェブリを逃がす時に御坂美琴を探すようにフェブリに言っておいたの」

「だから……」

美琴は何で自分の名前をフェブリに教えたのかわからないでいたが、布束の説明を聞いて納得した。

「一か八かの策だったけど結果は予想以上だったわ。まさかSTUDYの完全に壊滅させられるなんて思ってもみなかったもの。まさかあなたにあんな化け物じみた知り合いがいるなんてね」

「あれは私っていうか……こいつの仲間だから……」

「アハハ……」

美琴はツナを指さしながら苦笑いしていた。ツナも苦笑いしていた。

「そうだったわ! さっきは聞きそびれてしまったけれど何であなたが妹分シスターズのことを知っているの!？」

「え、えっと……それは……」

布束は聞きそびれてしまったことをツナに尋ねる。ツナはどこから説明しようか迷ってしまっていた。

「まあ……単刀直入に言っちゃおうと……こいつが一方通行アクセラレータを倒して計画を頓挫させたの……」

「え……!？」

標的（ターゲット） 220 メッセージ

美琴は布束にツナが絶化能力進化計画を頓挫させた張本人だということを明かした。

「あなたが絶対能力進化計画を潰したって……あの計画を潰したのは無能力者のはずよ……」

布束絶対能力進化計画を潰したのが無能力者だということは知っていた。明らかに発火能力者であるツナが絶対能力進化計画を潰したと聞いても信じられる訳がなかった。

「ん？」

美琴の言うことが信じられず否定しようと思つた布束であつたが、あることを思い出すSTUDYが仕掛けたAIM拡散力場を感知する機械にAIM拡散力場の反応が数名にしか反応がなかったことを。「どうしたの？」

「実はSTUDYは学園都市のあちこちにAIM拡散力場を感知する機械を設置していたの。その時に反応した数と人数が合わなかったの……」

サイレントパーティー
革命未明の際に起こった不可解な出来事を思い出す布束。STUDYは学園都市に侵攻する予定であつたので学会の会場だけでなく学園都市の至るところにAIM拡散力場を感知する機械を設置していたのである。

「こいつ……つていうかこいつの仲間が使う力は一見、能力に見えるけど能力とは原理が違う力なのよ……」

「確かにそれなら反応がなかったことにも辻褄があるけど……でもそんな力が存在するなんて……」

「まあ……この世界の力じゃないしね……」

「この世界……？ どういうこと……？」

美琴が急に意味のわからないことを言い出した為に布束は詳しい詳細を求めた。

「こいつはそもそも学園都市の人間じゃないのよ。私たちとは別の世

界……異世界から来た人間なのよ」

「ごめんなさい……なんか私、疲れてるみたい……もう1度言って貰えるかしら?」

(そりやいきなりそんなこと言われたらそうなるよな……)

美琴があまりにも突拍子もないことを言った為、布束は聞き間違えたのかと思ってもう1度聞き直した。布束の反応を見てツナは布束の気持ち的理解できてしまった。美琴はもう1度、ツナが異世界から来たということ伝える。

「聞き間違えじゃないようね……でも本当に異世界なんてものが存在するのなんてことがあるの……?」

学園都市に7人しかいないはずの超能力者クラスが7人以上存在。そして能力に見えるがAIM拡散力場がない者たち。これらの事実が全く周知されていないこと。美琴の言う通りツナたちが異世界から来たというのが本当であれば辻褄は合ってはいる。辻褄は合っているとはいえ異世界の存在を布束は信じられないでいた。

「あるぞ」

「リポーン!」

「あ、赤ん坊が喋っている……!?!」

布束は喋る赤ん坊の存在驚きを隠せないでいた。映像ではリポーンたちアルコバレーノを見ている布束であるが、駆動鎧を全て壊滅させられるという衝撃の方が強かった為に、気にするどころではなかったのである。

「ちやおつす。俺の名はリポーン。ツナの家庭教師だぞ」

「ごめんなさい……ちよつと考える時間が欲しいのだけれど……」

異世界に続いて流暢な言葉で喋る赤ん坊が現れただけでも衝撃なのに、さらに自分のことを家庭教師だと言い始めた為、脳が情報を処理し切れず布束は混乱してしまった。

「でだ。お前にボンゴレに来てもらうぞ。ボンゴレ科学班の一員としてな」

「聞けよ!」

「とかちよつと待ちなさいよ! こいつをボンゴレに入れるつも

りなの!？」

ツナは布束は混乱しているのにも関わらず勝手に話を進めたことにツツコミをいれる。美琴は布束をボンゴレに入れることを初めて聞いたので驚きを隠せないでいた。

「今回、ボンゴレおれたちが協力したんだ。こいつはその見返りだ。こいつがボンゴレに来れば妹達シスターズの治療を円滑に進められるようになるだろうが」

「何であなたもあの子たちのことを……!？」

ツナだけでなくリボンまでもが妹達シスターズのことを知っていることに布束は驚きを隠せないでいた。

「生き残った妹達シスターズの9970人。その内の半分……4985人は俺たちボンゴレとボンゴレが特に信頼している同盟ファミリーにいるからな」

「ボンゴレ……? さっきから出てるけど一体何なの……?」

布束はボンゴレという聞いたことのない組織のことが気になっていた。リボンの話が本当だったとしてクローンを受け入れて治療し、さらに4985人も受け入れられるだけの資金を持つ組織など学園都市以外に存在するとは到底、思えなかった。

「ボンゴレは俺たちの世界における世界最強のマフィアだぞ」

「世界最強のマフィア!？」

妹達シスターズを受け入れたのがマフィアだとは思ってもみなかったのか、クールで大人しい布束が大きな声で驚く程であった。

「な、何でマフィアがあの子たちを……!？」

「ツナの夢は妹達シスターズが笑い合える未来を作るのが夢だ。しかしその夢を実現すんのすぐには無理だ。クローンが存在が知られれば処分されるのがオチだ。だから表の法が届かねえボンゴレが受け入れることにしたんだ。別に戦場に立たせたりするような真似はしちやいねえから安心しろ」

「なぜこの人とボンゴレが関係が……?」

ツナの夢を実現する為になぜマフィアが協力するの理由が布束にはわからなかった。

「ツナはボンゴレの創始者の子孫。つまりボンゴレの次期ボスになる男なんだぞ」

「は……!?!」

まさかこんな優しい少年がボンゴレの次期ボスなどとは思ってもみなかった為、布束は衝撃のあまりその場で固まってしまった。今日は色々と驚くことが多い日であったが、ツナがボンゴレの次期ボスであるということが一番の衝撃であった。

「まあ俺たちが言っても信じられねえだろうし証人に証言してもらおうぞ」

そう言うとりボーンの帽子に乗っていたレオンが右手の甲の上に移動する。そしてレオンはスマホに変形した。リボーンはレオンが変形したスマホを操作し始めた。

「カメレオンが変形した……!?!」

「あのカメレオンはレオンっていつて、一度見た物なら何でも変形できるカメレオンらしいわよ……」

「それはカメレオンって言っているの……?」

「よし準備できたぞ」

美琴と布束がレオンのことを話していると、リボーンはスマホの画面を上に向けた状態で地面に置いた。するとスマホから立体映像が写し出された。

『お久しぶりです。とミサカは挨拶します』

「あなたは……!?!」

リボーンのスマホから写し出されたのはミサだった。

『ミサカの検体番号は10032号です。とミサカは自己紹介します』

ミサがいるのはカエル医者のある病院にいる屋上であった。ミサが立っているのは丸い白い装置の上だった。そしてミサの周囲にはカメラが取り付けられていた。このカメラで撮影された映像はリボーンのリボーンのスマホを通じて映し出されているのである。

『今回はミサカの大事な人を助けてくれてありがとうございます。とミサカは皆さんに感謝の言葉を述べます』

ミサは布束を助けてくれたことに対して頭を軽く下げてお礼を言った。

『そしてまたあなたとこうして話すことができるととても嬉しいですよ。とミサカは再会の喜びを噛み締めます』

「あああ……!?!」

映像越しとはいえこうして再び会うことができ嬉しかったのかミサは少しでも微笑んでいた。布束は感動のあまり言葉を失ってしまっていた。

『こうして再び会えたのはツナが絶対能力進化計画を頓挫させたお陰です。とミサカは説明します』

ミサはツナの方を向き、一方通行の魔の手から自分を助け出した時のことを脳裏に浮かべながら言った。

『現在、ミサカたちの半分は異世界にあるボンゴレファミリーというマフィアの元にて治療を受けながら働いています。とミサカはミサカたちのその後について説明します』

(じゃあ……本当に……!?!)

ミサの口から先程、同じことが語られる。布束はミサの言葉を聞いてリボンたちが言っていたことが本当なのだという事を理解する。

「こいつが言うなら本当だろ。まあ映像の捏造やあらかじめこう言うように仕込んでると思うだろうがな」

「それは絶対ないわ。私にはわかるもの」

科学者であり量産型能力者レディオノイズと絶対能力進化《レベル6シフト》計画に関わっていた布束にはわかっていました。この映像が捏造でないことが。ミサ

が嘘を言っていないことを。

『それと報告したいことがあります。とミサカはあなたに言いたくて言いたくて仕方がないことがあります』

「報告?」

『この度、ミサカはツナとデートする約束をしました。とミサカは報告します』

「ぶっ!!」

「デ、デート……!?!」

ミサの言葉を聞いてツナと美琴は顔を赤くしながらおもいきり吹いた。布束もデートという言葉聞いて顔を赤くしながら動揺してしまっていた。

「だからデートじゃないからね! ただ2人で遊びに行くだけだからね!」

(それを一般人にデートと言うんじゃないかしら……?)

ツナの言葉を聞いて、布束はデートの意味をちゃんと理解していないのだということを理解する。

「というか今、言わなくても良くない!?」

『日本では彼氏、彼女ができた際に生みの親に報告する義務があります。とミサカは学習装置テストメントで得た知識を披露します』

「そもそも俺とミサは付き合っていないよね!」

「ミサ……?」

ツナが妹達シスターズのことをミサと呼んだことに対して布束は違和感を感じる。

「妹達シスターズの名前のことだ。これから接していく上で名前が必要だからあいつがつけたんだぞ」

「彼は本当にあの子たちを1人の人間として見ているのね……」

『フェブリだってそうだ!! 人工的に造られたとか関係ない!! フェブリにだって感情があるんだ!! なのに何で道具扱いしてるんだよ!! 何であの子があんな目に遭わないといけないんだ!!』

布束はツナが有富に言った言葉を思い出し理解する。ツナは人工的に造られた人間であろうとも1人の人間として見てくれていることを。

「私は自分の死と引き換えに実験を止めようとした。でもあいつは私もあの子たちも死なせない。みんなが笑い合える未来を作るって言ったの」

美琴は思い出す。橋の上で自分に言ったツナの言葉を。

「戦いなんか大嫌いのクセに大切な者の為なら死ぬ気で戦う。あいつ

はそんな奴よ。でもあいつがいたから私もあの子も生きていられたているの」

「お。惚気話か」

「そ、そんな訳ないでしょ!!」

少しだけ微笑みながらそう言う美琴をリボーンが茶化す。リボーンの言葉を聞いて美琴は顔を赤くしながら動揺してしまっていた。

「それでどうする? ボンゴレに来るか? フェブリたちを連れて来ても構わねえぞ」

「ええ。行かせてもらうわ」

リボーンは布束にボンゴレに来るかどうか意思確認を行った。布束は迷うことなく了承した。

そして立体映像を切った。

「私だけじゃなくてフェブリとジャーニー。あの子たちのことまで助けてくれてありがとう」

布束はSTUDYの呪縛から解放してくれたこと、フェブリとジャーニー、ミサのことを助けてくれたことに対して改めてお礼を言った。

「そしてツナでよかったかしら?」

「え? うん」

「あの子たちのことを一人の人間としてみてくれたこととても嬉しかったわ。これからもあの子たちのことをよろしくね」

布束はとびっきりの笑顔でツナにお礼を言った。

こうしてSTUDYとの戦いは幕を閉じた。

『沢田さん!! 聞こえますか!?!』

かに思えたがツナのヘッドフォンに初春から連絡が入った。しかも初春声とても慌てた様子であり、何か大変なことがあったことが伺える。

『大変です!! 緊急事態です!!』

標的（ターゲツト） 221 大乱闘

時は少しだけ遡る。

第2会場

「ふう……終わったー……」

ミサイルを迎撃したことが伝えられると佐天は超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いた。

「佐天さん！」

「お。久しぶり初春」

超^{ハイパー}死ぬ気モードの状態を解いた佐天の元に初春が駆け付ける。

「どうだった初春？ 私、強くなったでしょ？」

「強くなったでしょって……強くなり過ぎですよ……しかも歴代に名を残すような偉業まで成し遂げてるじゃないですか……」

「らしいね。でもこれで初春を護れるよ。ピンチの時は遠慮なく私のことを呼んでね初春」

「佐天さん……」

「うお、おおおおおい!! その黒髪の長髪女!!」

「へ!? わ、私!?!」

久しぶりの再会に喜んでいる佐天と初春。その邪魔をするかのよう^{よう}にスクアアローが乱入する。

「そうだあ!! てめえには色々聞きたいことがある!!」

「「ひいひいひい!」」

そう言う^{よう}とスクアアローは剣を佐天の方を向けた。いきなり剣を向けられた佐天と初春は恐怖のあまり悲鳴を上げる。

「てめえ!! なぜ時雨蒼燕流^{そうあま}を使える!?!」

「な、何でって……山本さんに教えてもらって……」

「だったら何で剣一筋でいかねえんだああああ!!」

「ひいいひいい!!」

佐天は大声で怒鳴り散らしているスクアアロに怯えてしまい返事ができなかつた。

「まあまあ。その辺にしておいてやれってスクアアロ」

スクアアロに怯える妹分佐天を見かねたのかデイーノが助け船を出した。

「リボン曰く、涙子はあらゆるものをこなす才能がある。だからその長所を伸ばして手数が多さで攻めることにしたらしいぜ」

「こなすだとおおおおお!?」

(こ、この人うるさい!)

(鼓膜が破れそうです!)

こなすという単語を聞いた途端、スクアアロが今まで以上に怒鳴り散らした。あまりのうるささに佐天と初春は両手で耳を塞いでいた。

「剣はこなすもんじゃねえ!! 懸けるもんだああああ!!」

(きゅ、急にいいことを言い出した……)

ただうるさいだけの人物かと思いきや急に名言を言い出した為、佐天はちよつとだけ感心していた。

「いいかあ!! 時雨蒼燕流は完全無欠にして最強無敵の流派!! 何百、何千もの流派を潰してきた俺が唯一負けた流派だ!! そこら辺のカスに会得できる流派じゃねえんだ!!」

(完全無欠にして最強無敵……そんなに凄い流派だったんだ……)

時雨蒼燕流の継承は1度きり。気と才ある者途絶えた時、滅ぶこともやむ無しとも言われる滅びの剣ということは知っていた為、凄い流派だということは佐天も理解していた。しかし完全無欠にして最強無敵という肩書きがある程の流派であるということは知らなかつた。

「ししし。大声で自分が負けたことを知らしめてるよ。ダッセエ」

「うるせえぞおおおお!!」

ドオオオオオオン!!

「ば、爆薬!?!」

悪口を言ったベルにスクアアロは刀をなぎ払った。すると刀に仕

込まれた爆薬がベルに向かっていった。ベルはなんなく爆薬を躲した。佐天と初春は刀に爆薬を仕込んでいたことに驚きを隠せないでいた。

「それに!! あの回転する技についても聞きたいことがある!!」

「ほ、外持雨のことですか……?」

「そのネーミング!! やっぱりてめえで新たな八の型を作ったってことかあ!？」

「な、何でそのことを……!？」

佐天は初対面であるスクアア口なぜそのことを知っていることに驚いてしまっていた。

「会得してるクセに知らねえのか!! 時雨蒼燕流は先人の技を受け継ぎながらそれを弟子に伝えていく!! 俺が最初に戦った奴の八の型は秋雨!! 山本の八の型は篠突く雨!! そしてお前の八の型は外持雨!! 要するにお前は今までの時雨蒼燕流になかった新たな八の型を作ったんだ!!」

「ええ!？」

自分がそんな偉業を成していたとは露程も思っていなかった為、佐天は驚きの声を上げた。リボーンは八の型を作る際に余計なプレッシャーになると思い敢えて言わなかったのである。

「時雨蒼燕流の継承者は最強を名乗り敢えて敵に狙われるようにすることで自分を追い込んでいく!! そしてその極限の中で新たな型を作る!! 常に流派を超えようとする流派だ!! それが時雨蒼燕流が完全無欠にして最強無敵と言われる所以だ!! わかったかあ!？」

（そっか……他の継承者と型が全部一緒だったら見切られる……場合によっては戦いの最中に新たな技を作らないといけない……でも時雨金時は時雨蒼燕流でしか変形しない……戦いの中で時雨金時を変形させて新たな型を作ることができなきゃ敵にやられちゃう……）

時雨蒼燕流が減びの剣と呼ばれているのは継承が1度きりという掟があるからだ佐天は思っていた。勿論、それも理由の1つではある。だがそれだけではない。場合によっては極限の最中で時雨金時を変形させなければならぬ時がある。その為には流派を超えなけ

ればならない。それができるのは気と才がある者だけである。佐天はスクアーロの言葉で時雨蒼燕流が滅びの剣と呼ばれる理由を本当の意味で理解した。

「どうやらわかったようだな!! だったら剣以外を捨てて剣一筋でいけええええ!!」

「い、いや……時雨蒼燕流のことわかりましたけど……剣だけで行く気は……」

「ぎけんなああああ!!」

「ここまで言っても剣一筋で行こうとしない佐天にスクアーロはぶちギレてしまう。

「落ち着けてスクアーロ。涙子には涙子の戦い方があるんだ。自分の考えを押し付けるのは良くねえぞ」

「るせえぞ跳ね馬!! 時雨蒼燕流を会得した上に新たな型を作ってる時点でこいつには超一流剣士としての才能がある!! 剣に全てを捧げればこいつは間違いなく超一流剣士になる!! そのチャンスを逃すバカがどこにいる!?!」

「最初からそう言えばいいのにー。スクったらツンデレなんだからー」

「仕方ないよルツスーリア。スクアーロは剣以外のことは考えられねえ単細胞なんだから」

「つーか。剣以外のことはあのだっせえロン毛に吸い取られて剣以外のことは考えられないんじゃないやね?」

「うお、おおおおい!! てめえら!! そこに直れ!! 叩き斬ってやる!!」

ルツスーリア、マーモン、ベルの言葉を聞いてスクアーロは3人の元に爆薬を放った。3人は軽々と躲した。

「な、なんか始まつちやった……」

「そ、そこの長髪の黒髪の娘よ」

「ひい!?!」

すると顔を赤らめ息を荒立てているレヴィが佐天に近づいてきた。そんなレヴィを見て佐天と初春は悲鳴を上げる。

「た、単刀直入に言う!! 一目惚れした!! 俺と付き合ってくれ!!」

「えええええええ!!」

いきなりレヴィが告白してきた為、佐天と初春は驚きの声を上げた。

「必ず幸せにしてみせる!! だから頼む!!」

(無理無理無理!! こんなむき苦しい人!!)

レヴィは必死に佐天に自分の愛を伝える。しかし佐天はレヴィを生理的に受け付けられないでいた。

「え、えつと……わ、私には好きな人いるので……あなたの気持ちは答えられないっていうか……」

しかし本音を言う訳にはいかなかったので佐天は正直に好きな人がいるということ伝えた。

「ぬおおおおおお!!」

フラれたレヴィはシヨツクのあまり四つん這いの状態で拳を何度も地面に打ち付けていた。こう見えてレヴィは超一流大学を首席で卒業して教授になるまでの道が用意される程のスーパーエリート。ヴァリアー内の体力テストでも超人揃いのヴァリアー幹部の中でも平均以上の成績を叩き出している。そしてボスであるXANXUSへの忠誠心は誰よりも高い。しかしそんなレヴィにも悩みがある。それは女性から全くモテないことである。原因は見た目とモテたいと必死過ぎるあまり常人には見せられない顔になってしまったことが原因である。

「な、なんか……悪いことしちゃったかな……?」

「気にするな涙子……」

シヨツクを受けるレヴィを見て罪悪感を覚えていた。ディーノは右手を佐天の右腕に置きながらレヴィに同情していた。

「くだらねえことしてんじゃねえレヴィ!!」

「グボオ!」

シヨツクを受けてみっともない醜態を晒しているレヴィに腹を立てたスクアーロがレヴィをおもいつき蹴り飛ばした。

すると今度は会場に無数の火柱が吹き出した。

「ひ、火柱!?!」

「ど、どうなってるんですか!?!」

急に地面から火柱が吹き出したことに佐天と初春は驚いてしまっていた。

「やっぱり君から噛み殺そう。六道骸」

「クフフ。相変わらずですね雲雀恭弥」

灼熱の業火が吹き出す中、骸と雲雀は不適な笑みを浮かべながら武器を構えていた。

「うおおおおおい!! 六道骸!! このちよこざいな幻覚を止めやがれ

!! 止めねえとてめえから叩き斬るぞ!!」

「なんらと!?!」

「……」

スクアアローが骸に敵意を向ける。その言葉を聞いて犬は怒りを覚える。千種も黙ったままヨーヨーを構える。

「クフフ。止める必要などありませんよ。僕が全員まとめて黄泉の国の送ってあげますよ」

「何、言ってるの。君もあそこにいる連中も全員、噛み殺す」

「上等だああああ!! 全面戦争だああああ!!」

すると骸一派、雲雀、ヴァリアーによる大乱闘が始まっていく。しかも駆動鎧パワードスーツと戦った時よりも本気である。戦いの余波で周囲が次々に破壊されていく。

そして現在に至る。

『私たちでは止められません!! なんとかして下さい沢田さん!!』

「そ、そう言われても……」

初春は現状を説明すると同時に大乱闘を止めるよう訴えた。しかしツナはどうしたらいいのかわからず困惑してしまっていた。

『沢田さん!! 聞こえますか!』

「光子? どうしたの?」

すると今度は婚后から通信が入った。婚后が慌てた様子だったのでツナは何かあったのかを悟る。

『あなたのご友人が大暴れしています!! 私たちでは止められそうもありません!! どうにかして下さい!!』

「ええ!」

第2会場だけでなく第3会場でも問題が発生しまったと知ってツナは驚きの声を上げる。

『ツナ君!! 大変!! あなたの仲間が大喧嘩して手がつけられないの!!』

「ええええ!」

今度は固法から連絡が入る。次々に仲間が問題を起こしていく為、ツナは再び驚きの声を上げた。

第3会場

「1回地獄に落とすだけでは生ぬるい!! 地獄に落として再び転生したところで俺が地獄に送ってやる!!」

ラルは持っている武器を全て駆使してコロネロに攻撃していた。理由はいつもと同じ照れ隠しである。戦いが終わった後、コロネロが婚后たちに怪我はないかと尋ねた。それだけならよかったのだが……

「よかったぜ。お前らみたいな美女に何かあったら一大事だからな」

「コロネロ貴様!! ここに来てまでナンパとはそどういう見だ!!」

「何だ? 嫉妬かラル。可愛いな」

「そ、そんな訳あるか!!」

「安心しろラル。俺が惚れた女はお前以外いねえぜ。お前は俺のものだぜコラ」

「「っ!?!」」

赤ん坊でありながら大胆にラルに告白するコロネロの台詞を聞いて婚後たちは両頬に両手を置いて顔を赤くする。そして現在に至る。

「私の方が上だつて素直に認めるバカザクロ!!」

「だから認めたつってんだろうがバーロー!!」

そしてさらにブルーベルとザクロも大暴れしていた。ブルーベルが駆動鎧を破壊した数が自分の方が上だと自慢した。しかしザクロがだらけきつた態度で適当に負けを認めた為、ブルーベルの瘤に障つてしまい現在に至る。しかも修羅開匣状態を解いていないので被害はとんでもないことになっている。

第1会場

「極限に返り討ちにしてくれる!!」

「結局、我が拳にやられるだけということとその身に教えてやろう!!」

第2会場では了平と紅葉が殴り合いをしていた。ささいなことでは喧嘩いつものことではある。しかしいつもとは違い2人は炎を使っている。

「極限サンシャインカウンター!!」

「甘いわー!」

了平のバッグルに50%分の炎がチャージされる。そしてチャー

ジされた炎が拳が放たれ地面が抉れていく。紅葉は不適な笑みを浮かべながら即座に躲す。

「周囲のことを考えやがれこの脳筋共!! 俺たちまで巻き込むんじゃない!!」

「はっ! あの前はちよこパンチでビビるとは。ボンゴレの右腕が聞いてくれる。結局、貴様も了平と同じく軟弱なのだな」

「タコヘッドと一緒にするな紅葉!! 極限に軟弱なのはタコヘッドだけだ!!」

「この脳筋共が!! 人が黙ってりやあ好き勝手言いやがって!! まとめて果たしてやらあ!!」

紅葉と了平の言葉を聞いて獄寺はぶちギレる。そして

獄寺はダイナマイトを放った。

「あのバカ共が……テロを止めに来たのに風紀を乱すとは……」

3人の大乱闘を見てアーデルは額に右手を当てながら頭を悩ませていた。

「よし。そんじゃ俺は学園都市の可愛い子ちゃんをナンパしにいきますかー」

「ジュリー!! 貴様という奴は……!! いつもいつも……!!」

「うわっ!! ま、待ってってアーデル!!」

(さっき言ってたこととやってることが全然違う!!)

するとジュリーの上空から氷の雨が降り注いだ。降り注ぐ氷の雨をジュリーはなんとか躲していく。炎真はアーデルの行動に驚きを隠せないでいた。そこからアーデルはジュリーへの攻撃を続けている。

「私は何も知らない……私は何も知らない……私は何も知らない……私は何も知らない……私は何も知らない……」

一方で黒子は両手を頭に乗せた状態でしゃがんで現実逃避していた。

本拠地

「何でこうなるのー！？」

「もうSTUDYより悪人ね……」

他の会場の現状を知ってツナは頭を抱えながら叫ぶ。美琴は自分たちがSTUDY以上のテロリストであるということを理解していた。

『ツナー？ 聞こえるかー？』

すると今度は父である家光から連絡が入った。

『現在進行形でXANXUSを止めてんだけどなー。ただ暴れ過ぎちまってなー。このままだと地下にいるお前らもペしやんこになっちゃうから早くそこから避難した方がいいぞー』

「なっ!？」

軽口でとんでもないことを家光は口走る。家光の言葉を聞いてツナは驚きの声を上げる。すると本拠地からミシミシという音がし始め、天井の隙間から塵が落ちて来る。ツナたちは急いで会場から避難する。

「本当に大丈夫なのかしら……?？」

本拠地から逃げながら布束は自分の選んだ選択肢が正しかったのか不安になるのであった。

今回、ツナたちの仲間が暴れたことによつて第1会場、第2会場、第3会場、スタジアムは全壊。さらに会場とスタジアムの周辺にも甚大な被害が出てしないこれによつて学級会は延期になってしまったのだった。

その後、美琴の力によって今回の件に関わる全ての情報を消去。さらに操折の力によって今回の関係者の記憶から布束の記憶を消去。これによって布束がSTUDYに所属していたことを知る術はなくなり布束は自由の身となった。

そして

「こちらでお待ち下さい。すぐに9代目をお呼び致します」

布束、フェブリ、ジャーニーはボンゴレ総本部にやって来た。9代目の守護者であるガナツシュ・Ⅲサイドにとある1室に案内された。

(世界最強のマフィアのボス……一体、どんな方なのかしら?)

ポーカーフェイスを気取ってはいる布束であったが内心ではもの凄く緊張していた。5分程経過すると部屋の扉が開かれた。

「初めまして。布束砥信君。そしてフェブリとジャーニーでよかったですかな?」

とある魔術の架空と禁書目録（インデックス）
標的（ターゲツト） 222 強引

STUDYによる大規模テロ。サイレントパーティー 未明革命を阻止したツナたち。

「はあ……」

しかしツナは浮かない表情かおをしていた。現在、ツナは学園都市にてパトロールをしていた。黒子たちは事件の事後処理をしている為、ツナがパトロールを行うことになっているのである。

「せっかくフェブリたちを助け出せたのに……」

ツナが浮かない表情かおをしている理由は1つ。自分たちの仲間が大暴れして施設を破壊したことであった。幸い人に被害ペナルティが出ていない上にSTUDYのテロを食い止めた功績があったので罰ペナルティはなかった。

「あ。美琴……ん？」

しばらく歩いているとツナの視界に美琴と後ろ姿しか見えないが黒髪の高身長ペナルティの青年が映った。

（知らない人だ……道でも聞かれているのかな？）

ツナの知る限り美琴にあのような青年の知り合い知らない。ツナは青年が美琴に道を尋ねているのではないかと推測した。すると美琴がツナに気づいたのか慌ててツナの方に走って来る。

「ごめん！ 待ったー？」

「へっ……!？」

美琴はツナの前で止まると笑顔でそう言った。ツナは美琴の行動の意味がわからずその場で固まってしまっていた。

「ちよっとめんどくさいことに巻き込まれてるの。このまま私と一緒に移動して」

「え……!?! う、うん……!?!」

美琴はツナにしか聞こえないくらいの小声でそう言った。ツナはいきなりのことばで状況を把握できていなかったがそれでも首を縦に振りながら答えた。そして美琴は右手でツナの左手を掴むとそのまま青年がいる方向とは逆方向へ走っていった。

走ること20分。ようやく美琴が止まった。

「よし。ここまで来れば大丈夫ね」

美琴は周囲を何度も見回した後、ツナの手を握っていた右手を離れた。

「ねえ美琴。どうしたの？ 急に走り出して」

「あの男よ」

「さつき美琴の隣にいた人？」

「そう。あいつ海原光貴うなばらみつぎっていうの。実はちよつと前から付きまどわ
れてるの」

「それって……もしかしてストーカー!？」

「そういうんじゃないのよ。ただいつもどこかに一緒行かないって誘われるのよ。まあナンパみたいなものね。今までなんとか誤魔化し来たんだけど、ここ最近しつこくって。だからたまたまいたあんたをその……こ、こ、恋人役に見たてたってわけ!!」

「成る程ね」

偽とはいえ恋人と言うのが恥ずかしかったのか美琴は顔を赤らめながら言った。事情を聞いてツナはなぜ美琴が自分を連れて逃げるように移動したのかということを理解した。

「とりあえず問題は解決したし。じゃあ俺はパトロールに戻るね」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!!」

問題が解決して一件落ち着いたと判断したツナはパトロールに戻るうとする。そんなツナを見て美琴は両頬を赤らめながら制止した。

「まだ問題は解決してないわよ!!」

「え? 何で?」

「何でじゃないわよ!! ここでもまたあんと別れたら私があの男にしようく付きまとわれるじゃない!!」

「いや……俺を恋人役にしたんだし……もう付きまとわれることもないんじゃない?」

「あいつにあんたが私の……ここ、こ、恋人って言った訳じゃないわ!! しかも勝手に逃げ出したんだから不審に思われてるわ!!」

「確かに……」

美琴の言葉を聞いてツナは海原に自分が美琴の恋人であるということを知りさせられていないということを理解する。

「というか断ればいいだけじゃないの?」

ツナは今さらながら気づく。そんなに嫌なのであれば本心を持って断ればいいのではないかと。

「あいつ常盤台^{ウチの学校}中学の理事長の孫なのよ。だから断りづらいのよね……」

「あー……それはなかなか言えないよね……」

「そ、そうなのよ!! だ、だから……いい、今から……わ、私と……その……デ、デ……デートしなさい!!」

美琴は恥辱に耐えて顔を真っ赤にしながらも勇気を振り絞ってツナにデートするように命じる。

「わ、私とあんたが付き合ってるっていうのがあいつに伝われば私があいつに付きまとわれることもなくなるわ!! どう!? 完璧でしょ!?」

「え……でも……俺、^{ジャッジメント}風紀委員の仕事だし……」

「困ってる人を助けるのは^{ジャッジメント}風紀委員の仕事でしょうが!!」

「それはそうなんだけどさ……」

美琴の言う通り^{ジャッジメント}風紀委員は困っている人を助けるのも仕事の1つである。しかしいくら美琴を助ける為とはいえ、仕事中に遊んでいる姿を見せてもいいのかと思いついてしまったのである。

「もしこれで事件が起きたどうすんのよ! 何かあってからじゃ遅い

のよー!」

「いくらしつこく付きまとわれてるって言ってもあの人はナンパして来てるだけであって美琴に何かしてきた訳じゃないんでしょ?」

いくらしつこくてもナンパをしているだけの青年を悪者認定するのはどうかとツナは思っていた。

「確かに今まであいつが何かしてきたことはないけど、もしかしたら私に手を出してくるかもしれないのよ!! あいつは大能力者の念動使いなのよ!!」

「それを言ったら美琴は超能力者だし大丈夫じゃん……」

青年が大能力者だということを知ったツナ。だが美琴が超能力者であるということと、実際に手合わせで美琴の実力を知っているツナからすれば何も問題はないとしか思えなかった。

「私だって穩便に済ませたいのよ!」

「とうにかむしろ恋人がいるって思われた方が事件になると思うんだけど……」

「あー!! もう!! 面倒くさいわね!!」

むしろ偽の恋人を演じて自分が美琴の恋人だと思われて、そのシヨックによって青年が何か事件を起こす可能性の方が高いのではないかとツナは思っていた。しかしツナの言葉を聞いた途端、美琴が怒りが爆発した。

「いいからとつとと着いてきなさい!!」

「え!? ちょっと美琴!」

このままでは埒が明かないと判断した美琴はツナの意志を無視して右手首を掴んで強制的に連行していくのであった。

標的（ターゲット） 223 気になっていたこと

急遽、美琴とデート（青年を諦めさせる為）することになったツナ。
「はあ……」

「ちよつと。いつまで暗い顔してんのよ。これじゃあいつを諦めさせられないでしょ」

「強引に連れて来てよく言うよ……」

行く気がないという意思表示がないのにも関わらず強引に連れて来られた為、ツナはため息が止まらないでいた。

（まさかこんなチャンスが舞い降りるなんて!!）

成り行きとはいえツナとデートできるとなつて美琴はめちゃくちゃ喜んでいた。

（佐天さんやあの子とデートしたんだから今日は私の番よ!!）

今回は自分がツナにアピールする番だということで美琴は張り切っていた。

「それで？ どこに行くの？」

「へっ……!？」

このまま何を言っても無駄だということを理解したツナは美琴にプランを尋ねた。しかし美琴はツナの質問に答えられないでいた。

「まさか……自分で言っておいて何も考えてないの？」

「そ、そんな訳ないでしょ！ ちゃんと考えてるわよ！」

美琴の反応からツナは何も考えていないことを察した。だが自分から提案しておいて何も考えていないということがバレるのが恥ずかしかつたのか強がって見せた。

「そ、そうだわ！ あそこの店に行きましょう！」

（そうだわって……）

美琴は近くにあったホットドックの販売店を指を指した。ツナは美琴の発言からやっぱり何も考えていないということを理解するが、これを言うとかかをされそうなので黙っていた。

「あそこのベンチで座って待ってて。私、買って来るから」

「え……でもお金……」

「それくらいいいわよ。こっちが誘ったんだし」

そう言うのと美琴は店へと走って行った。ツナは仕方なくベンチに座って待つことにした。

「はい」

美琴が購入して来たホットドックをベンチに座っているツナに渡す。そして2人はホットドックを食べ始める。

「2000円の割には美味しいわね」

「ぶっ!」

美琴がホットドックを食べた感想を述べる。まさかこのホットドックが2000円をもするとは思ってみなかったのでツナは驚きのあまりホットドックを吹いてしまった。

「ちよっ!?! 何やってんのよ!?!」

「ご、ごめん……ありがとう……」

まさかツナが吹き出すとは思ってもみなかったのか美琴は驚く。そして右手でツナの背中をさすった。ツナは吹き出したことに謝罪すると同時にさすってくれたことにお礼を行った。

「驚き過ぎでしょ。学び舎の園だったらもつとするわよ。こんなの安い方よ」

(金銭感覚がおかし過ぎる……)

ツナは自分の金銭感覚と美琴の金銭感覚があまりにも違い過ぎるということを理解する。学園都市の学生は補助金や奨学金が支給される。美琴は超能力者^{レベル5}であると同時に選ばれた者のみしか入学することのできない常盤台^{名門校}中学の出身。故に多くのお金が支給される。その影響か普通の人とは金銭感覚が違うのである。

(そういえば……前に着替える為だけにホテル借りてなかったっけ……)

ツナは思い出す。前に美琴が絶対能力^{レベル6}シフト^{シフト}進歩計画の関連施設である製薬会社に乗り込む前にホテルを借りていたことを。

「そういえば夏休みも今日で終わりなのよね」

「そうだよ。それがどうかしたの？」

「いや。そういえばもう少ししたら広域社会見学があるなーと思っただのよ」

「広域社会見学？」

「ランダムで選ばれた学園都市の学生が海外の都市に行くのよ。と
いっても学園都市の創設で協力関係のあったアメリカの各都市に行
くって決まってるのよね」

「そんなのがあるんだ。いつから？」

「9月2日から1週間よ」

「1週間か……長いね」

「でも実際は自由行動がほとんどらしいから、ほとんどただの旅行と
変わらないわよ」

「へー」

広域社会見学自分たちの世界の学校にはないような行事があるこ
とを知ったツナは面白いと感じていた。

「お。何やってんだお前ら」

「リボーン」

ツナと美琴が世間話をしているとリボーンが現れた。

「もしかしてデートか？」

「まあ……なんというか……」

「どうした？」

ニヤニヤしながらそう言うリボーンであったが、ツナが動揺せず煮
え切らない返事をしたので何かあったということを探る。ツナは
リボーンに事情を話した。

「成る程な。そいつに諦めてもらう為に恋人を演じてる訳ってか」

ツナから事情を聞いてリボーンは2人が一緒にいる理由を理解す
る。

「俺はてつきり将来の為に愛人とのデートをしてんのかと思っただ
ぞ」

「俺はマフィアのボスにならないって言ってるだろ!!」

「私もマフィアにはならないわよ!! とうか何で私が愛人なのよ

!!

ニヤニヤしながらそう言うリボーンにツナと美琴はツツコミをいれる。

(あ……そういえば……)

美琴はここであることを思い出した。サイレントパーティー革命未明にて気になっていたことを。

「んじや俺はこの辺で帰るぞ。楽しめよお前ら」

「あつ！ ちよつと待ってリボーン！」

「ん？」

「あんたに聞きたいことがあるの」

「何だ聞きたいことつて？」

「ランチアさんつて人とXANXUSと沢田のお父さんのことよ」

「何で3人のことが知りてえんだ？」

「ランチアさんが何で償いの旅のしているのか。9代目の息子のXANXUSと沢田のお父さんが正当後継者選ばれてないのかってこと」
「その話か」

リボーンはなぜ美琴がなぜあの3人のことを知りたいと思っっているのかという理由を知って納得した。

「だったらエスプレッソ買ってきてくれ」

「はあ!?! 何でよ!?!」

「話す代わりに駄賃だ。買って来ないんだつたら話すつもりはねえ」

「あー！ もうわかったわよ！」

エスプレッソを買って来ないと話を聞くことができないので美琴はベンチから立ち上がってエスプレッソを買いに行った。5分するとエスプレッソが入っている紙コップを持った美琴が戻って来る。

「はい。買って来たわよ」

「サンキュー」

美琴が紙コップを渡すとリボーンはさつそくエスプレッソを堪能する。

「買って来たんだし教えなさいよね」

「ああ。いいぞ。じゃあまずはランチアのことからだ」

標的（ターゲツト） 224 ランチアの過去

「ランチアは7年前、北イタリアにあるマフィアに所属していたんだ。元々、ランチアはみなし児だった。そんなランチアをファミリ―は温かく迎えた。ランチアにとって自分を拾ってくれたファミリ―は命。その恩に報う為に強くなり北イタリア最強と恐れられるようになったんだ」

「凄…」

ファミリ―に報いたいというただそれだけの想いで北イタリア最強と恐れられるまでに至ったランチアの凄さに美琴は驚いていた。

「そしてある時、ランチアたちのファミリ―のボスがみなし児を捨てて来た。ボス曰く野望に満ちた目が入ったらしい。ランチアはその子供の面倒を任された。ランチアはファミリ―に自分にしてくれたようにその子供も可愛がった」

「いいファミリ―ね」

マフィアではあるもののランチアの所属していたファミリ―はとてもいい人たちなのであるということを美琴は理解する。

「だがそれから間もなくして事件が起きた。ランチアがアジトに戻るとファミリ―の連中が皆殺しにされていたんだ」

「え…!?!」

まさかここでランチアのファミリ―が皆殺しにされるといふ展開になるとは思っていなかった為、美琴は驚きを禁じえなかった。

「勿論、ランチアは怒りに燃え犯人を探した。そしてついにランチアは犯人を突き止めた。だがその犯人は意外な人物だった」

「意外な人物?」

「ファミリ―を皆殺したのはランチアだったんだ」

「は…!?!」

美琴はわからなかった。なぜここでランチアの名前が出てきたのかということに。

「な、何でそうなるのよ!?! だってファミリ―のみんなが殺されて怒りを覚えてたんでしょ! 意味がわかんないわよ!」

「普通ならな。だがそこからランチアは目を覚ます度に身に覚えのない屍の前に立っているという出来事が何度も起こったんだ。ランチアは自分がおかしくなったと思い自殺することを決意した。だがランチアは自殺することができなかった。自分が面倒を見た子供……六道骸にランチアは操られていたんだ」

「そ、そんな……」

ランチアのあまりにも悲惨過ぎる過去に美琴はショックを受けてしまっていた。

「でも操るって言ったってあんな強い人を子供が操るなんて……」
美琴はランチアの強さを目の当たりにしている。あれ程の強さを持った男を子供が操ることができるとは到底思えなかった。

「ただの子供ならな。だが骸はある特殊弾を持っていた」

「特殊弾って……嘆き弾やあんたが佐天さんに撃った弾のこと？」

「そうだ。そして骸が使ったのはエストラネオファミリーが作ったとされる禁弾の特殊弾。憑依弾だ」

「憑依弾って……まさか……!?!」

「お前の想像通りだ。憑依弾は文字通り相手の精神を乗っ取る弾だ。だがあまりにも使用法がムゴかった為に製造法も闇に葬られたがな」
「じゃあランチアさんはその弾のせい……!?!」

「ああ。骸はこいつを使ってランチアの精神を乗っ取りランチアのファミリーを皆殺しにしたんだ」

「なんてことを……!?!」

リボーンという言葉聞いて恩を仇で返すとはまさしくこのことなのだということも美琴は理解する。

「と、というか何でその骸って奴はそんな物を持つてるのよ……そいつはまだ子供だったんでしょ……!?!」

「骸は憑依弾を作ったエストラネオファミリーの生き残りだったんだ」

「生き残り？」

「エストラネオファミリーは憑依弾を作ったことでろくでなしのレットルを張られ多くのファミリーから狙われることになった。そ

ここでエストラネオファミリーの上層部はマフィア界での地位を再び獲得する為にファミリーの子供を使って人体実験に拍車をかけた。しかしその実験によって力に目覚めた骸はファミリー上層部を皆殺しにしてファミリーを壊滅させたんだ。そして同時にマフィア界への復讐を誓った」

「じゃあ……」

美琴は理解する。ランチアのファミリーが殺されたのは骸の復讐心によるものだということ。

「憑依されたランチアは殺戮マシンと化し、ランチアは偽の六道骸と呼ばれるようになったんだ」

「……」

美琴はランチアの悲惨過ぎる人生に言葉を失ってしまった。

「そして2年前に骸たちが日本にやって来た。骸の目的はボンゴレ10代目であるツナの体に乗っ取りマフィアを殲滅。そして世界中の要人の体に乗っ取り世界大戦を起こす為にな」

「イカれてるわ……!？」

骸のマフィアの殲滅及び世界大戦を起こすというあまりにもぶっ飛びすぎた計画に美琴は畏怖の念を感じていた。

「この時にフウ太が人質に取られ俺たちは骸のアジトに乗り込んだ。俺たちはなんとか骸を倒すことに成功した。そして骸を倒したことでランチアを骸の呪縛から解放されたんだ。そこからランチアは殺されたファミリーの家族を訪れて償いの旅をしている。自分の一生をかけてな」

「全部、骸って奴のせいじゃない……本当ならそんなことする必要のないのに……」

せっかく骸の呪縛から解放され自由の身になれたのにも関わらず、残りの人生を償いの為に使わなければならなくなってしまった。そのことに美琴は憤りを感じてしまっていた。

「これがランチアの過去だ。次はXANXUSのことだな」

標的（ターゲツト） 225 XANXUS

「元々、ボンゴレの後継者候補はツナとXANXUS以外に3人いたんだ」

「え!?! そうなの!?!」

「ああ。だがエリンコは抗争の中で撃たれ死亡」

「何で写真があんのよ!」

リボーンは懐から銃を持ったまま倒れているエリンコの写真を見せた。美琴はその時の写真があることにツツコミをいれた。

「マツシーモは海に沈められ」

「だから何で写真があんのよ!」

今回は海に沈められた小太りの男の写真を見せる。美琴は再びツツコミをいれる。

「フェデリコはいつの間にか骨に」

「いやあああああ!!」

最後にリボーンは頭蓋骨だけとなったフェデリコの写真を見せる。美琴は両手で両面を隠しながら悲鳴を上げた。

「この3人が生きていたとしてもXANXUSへの支持は圧倒的だった。ボンゴレの次期ボスはXANXUSだと誰もが疑わなかった。だがある時、XANXUSは上層部を敵に回すことになった。その後XANXUSはファミリーを抜けた」

機密である揺りかごを話す訳にはいかなないのでリボーンは嘘をついた。

「XANXUSがファミリーを抜けてから8年後。奴は再び表舞台へ現れた。XANXUSの目的は10代目候補であるツナを消して自分が次期10代目になること。そこで次期ボンゴレ10代目を決める為の戦い、リング争奪戦が行われることになった。勝負の内容は互いのボス候補とボスを護る守護者のガチンコバトル。そして最後の

戦い。ツナとXANXUSとの戦い。その決着が決まると思われた
目前に驚愕の事実が明かされた」

「驚愕の事実……?」

「XANXUSが9代目の本当の息子じゃないということが判明した
んだ」

「え……!?!? どういうこと……!?!?」

ツナはXANXUSが9代目の息子だと言った。しかしリボーン
は今、XANXUSが9代目の息子ではないと断言した。

矛盾する2人の言葉に美琴は困惑していた。

「XANXUSは9代目の義理の息子。つまり養子だったんだ」

「そういうこと……」

養子という言葉でツナとリボーンの食い違っていないということ
を美琴は理解する。

「でも何あいつが正当後継者じゃないってことがわからなかったの
?」

「全ては9代目の優しさが原因だったんだ」

「9代目の?」

「元々、XANXUSはイタリアの下町生まれの子供だった。そして
生まれながらにXANXUSは死ぬ気の炎を灯していた。それを見
た母親はXANXUSがボンゴレの後継者だと確信したんだ」

「何で死ぬ気の炎を持っているだけでボンゴレの後継者だと思っただ
よ? 死ぬ気の炎はみんなが持っている力でしょ?」

「元々、死ぬ気の炎はボンゴレの象徴。そして死ぬ気の炎を使えるの
はボンゴレの正当後継者のみと思われていたんだ。だから死ぬ気の
炎に属性があるということも知られていなかった。だが未来の世界
で死ぬ気の炎は覚悟とそれに応えるリングがあれば誰でも使え、死ぬ
気の炎には7つの属性があるということがわかったんだ。そんな中
でXANXUSは今で言う大空の死ぬ気の炎を持っていたんだ。ボ
ンゴレの正当後継者は皆、大空の炎を持っていたからな」

「だから……」

美琴はXANXUSがなぜ後継者じゃないとわかってないことが

わからなかった理由を理解する。

「XANNXUSの母親はXANNXUSを9代目に会わせた。そして9代目はXANNXUSの死ぬ気の炎を見てXANNXUSをボンゴレに迎えることにした。XANNXUSがボンゴレの後継者でないことをわかっていながらな」

「わかってた……!?! じゃあ何で……!?!」

「XANNXUSたちは貧困な暮らしを送っていた。それ故にXANNXUSの母親はXANNXUSが自分と9代目の息子との間に生まれた子供だという妄想に取り憑かれてたんだ。2人の暮らしぶりと、何も知らずただ母親の言葉を信じているXANNXUSを見た9代目は母親の言葉を否定できなかったんだ。だからXANNXUSを息子だと言ったんだ」

「本当に凄いのね……9代目は……」

絶望させないと嘘をついてまで2人を救った9代目の行動に美琴は感動していた。

「ボンゴレに迎えられたXANNXUSだったがある時、知っちゃったんだ。自分が9代目の息子ではないこと。ブラッド・オブ・ボンゴレボンゴレの血なくしてボンゴレのボスになれないことを。そこからXANNXUSは怒りに燃え暴走し始めた。俺たちですら口にすることすら恐ろしいことも次々に起こした」

「な、何やったのよあいつ……!?!」

リポーンに口にすることすら恐ろしいと言わせる程のことを起こしたと知って美琴は衝撃と恐怖隠せないでいた。

「詳細は言えねえが別件の調査で諜報活動をしていたモレッティがXANNXUSの虐殺行為に巻き込まれ重症を負わされたことがあったな。その後、モレッティは怪我から回復したがあまりの出来事にXANNXUSの恐怖に捕らえ続けまともな報告すらできない程、精神的に追い詰められていたらしいぞ」

「……」

「そんなことが……」

モレッティの身に起きたことを知って美琴はもう恐怖以外の感情

は何もなく言葉を発することすらできなくなっていました。ツ
ナもそのことは知らなかった為、驚きを隠せなかった。
「XANXUSのことはこんなところだ。次は家光のことだな」

標的（ターゲット） 226 家光

「次は家光のことだが……家光は確かにボンゴレの正当後継者だ。だが家光にはボンゴレブラッド・オブ・ボンゴレの血に継承される力。超直感が発現してねえんだ」

「そつか……ボンゴレの血を引いているだけじゃダメだったのよね……」

（父さんって超直感がないんだ……）

美琴は前にリボンが言っていたボンゴレファミリーのボスになる為の条件のことを思い出した。息子であるツナは家光に超直感がないということを知り驚いていた。

「1回だけ9代目の影武者に騙されて弾丸を喰らっちゃったことがあつてな。しかもその影武者は幻覚すら使っていない、ただの変装技術で変装しただけの影武者。超直感があれば変装ぐらい簡単に見破れるはずだからな」

「超直感がなくても……強すぎるわよ……」

美琴は思い出す。XANXUSの一撃の軌道を変え、野球のボールを投げるくらいの感覚で駆動鎧パワードスーツを数十先にいるXANXUSに100キロ以上のスピードで投げてるところを。正直、超直感がなくてもボンゴレのボスとして充分にやっていけるのではないかと思つていた。

「それに家光が仮にボンゴレのボス10代目になることができたとしても、他にCHDEFのボスを任せられる奴がいねえからな」

「CHDEFって……白蘭が言ってたわね。確か普段はボンゴレとは別の組織だけど非常時においてはボスの次に権限を発動できるって。それでCHDEFのボスの沢田のお父さんはボンゴレのNo.2だつて」

「その通りだ。CHDEFは表向きは一般企業を装ってる。故にボン

ゴレの仕事だけでなく、一般企業の業務もボンゴレの仕事も両立させつつ組織を完璧に運営させなくちゃならねえ。そしてボスを何者からも護れる程の戦闘力を有し非常時においてファミリーを導いていかなきゃならねえ。そんな資格を兼ね備えてる奴は今のボンゴレには家光ぐらいしかいねえからな」

「凄いわね」

(信じられねえー……)

家光の能力を知って美琴は感心するがツナは家光がそんな能力を有しているとは思えない為、信じられないでいた。

「あのXANXUSでさえ家光と戦うのを避けたぐらいだから」

「あいつが……!?!」

「自分がボンゴレ10代目になる為にXANXUSは家光がイタリアへ向かうように仕向けたんだ。家光に勝てるのならそんな小細工する必要なんてねえからな。家光が自分の目的に一番の障害になると思っただら」

「ただの暴れん坊じゃないって訳ね……」

決して相手を見誤ることなく勝つ為に最良の選択し実行する。美琴は誰もがボンゴレのボスがXANXUSだと云わしめた理由を理解する。

「それにツナですら家光に勝ったことはないからな」

「う、嘘……!?!」

「うん……2回だけ戦ったけど、1回目は一撃でやられたし。2回目は決着がつかなかったよ」

「つ、強すぎでしょ……!?!」

まさか家光がそこまでの戦闘力を有しているとは思っていなかったのか美琴は衝撃を隠せないでいた。

「当たり前だろ。家光はツナの100倍修羅場をかくぐりツナよりも家族の為に100倍戦ってきた超がつく程の強者だ。ま。俺には劣るがな」

「結局、自分の自慢……」

(あれ? あのスーツの男の人と同じことを……)

家光のことを話していたのにも関わらず、最終的に自分の自慢をしているリボーンに美琴は呆れてしまっていた。ツナは虹の代理戦争にて黒いスーツを身に纏った男が言っていた言葉をリボーンが言ったので違和感を感じる。虹の代理戦争にてツナに家光のことを教えたのは呪解したリボーンなのであるがツナは呪解したのがリボーンなのだとわかっていない。超直感が開花しているのにも関わらず、単にツナが鈍感なのだが。

「つってもそれは2年前の時点での戦闘力だ。今のお前ならもしかしたらもしかするかもしれないぞ」

リボーンの見立ててでは今のツナで死ぬ気の到達点を使わずとも家光に勝てるかと確信していた。

「あなたの父さん……とんでもない人ね……」

「そんなことないよ。家じゃあ1日中アホ面浮かべながら寝てるだけだよ……」

今までの話を聞いて家光がとんでもない人物だということを知ることになる。ツナの脳裏には下着姿でいびきをかきながら寝ている家光の姿が浮かぶだけだった。

「小さい頃、父さんに何の仕事をしているのかって尋ねたら世界中を飛び回って交通整理しているって言ったからね……」

「世界中って……」

自分がマフィアだということを隠したかったというのは理解できたのだが、あまりの強引な誤魔化し方に驚いていた。

「2年前に帰って来て最初に話しかけてきた言葉が朝4時に俺の部屋に入ってきて、飯取りに行かないか？ だからね」

「か、変わってるわね……」

ミサたちを引き取っている手間、あまり家光のことを悪く言うことができない為、美琴はそう言うのが精一杯だった。

「そして前に佐天に酒も飲ませたしな。つっても水の入ったコップと日本酒の入ったコップを間違えたらしいがな」

「な、何やってんのよ!?!」

いくら間違ったとはいえ友達佐天に酒を飲ませたと聞いて流石の美琴

も落ち着いていられなかった。

「その後、酔った佐天に抱きつかれて挙げ句の果てにキスされる寸前まで言ってもな」

「っ!？」

「キ、キス!？」

ツナはその時の光景を思い出したのかツナは顔を真っ赤にしていた。酔った勢いで実際にしていないとはいえこのことを知った美琴の心中は穏やかではなく顔を赤くしながら動揺していた。

「そういや家光も佐天のことを絶賛してたっけな。佐天にならツナのことを任せてもいいってな」

（お、親からも了承されてるの!？ ど、どうしよう……）

リボーンはさらに追い討ちをかける。美琴はまさかそこまでの展開になっているとは思っていなかった為、慌ててしまっていた。

（落ち着きなさい！ 今日が千載一遇のチャンスが舞い降りたのよ！

これを機に私も形勢逆転してやるわ！）

標的（ターゲツト） 227 海原の想い

リボーンから3人の過去を聞いた美琴。気になっていたことが知れた為、ツナとのデートを再開する。

のだが

（さっきから食べてばっかり……）

リボーンと別れてからずっと美琴は食べ物系の店に連れて行かれてばかりであり、ツナは大分、お腹いっぱいであった。だが奢ってもらっている上にどこかいい場所を知っている訳でもないので文句は言えなかった。現在ツナはベンチに座って美琴がジュースを買って来るのを待っていた。

（というか……）

デートが始まってから1時間が経過する。ツナは今さらではあるがここで大事なことに気づいてしまった。それはこのデートを海原が見ていなければ本人に自分たちが付き合っていると思わせることができないということである。周囲を常に確認していた訳ではないがツナは海原の姿を見ることはなかった。つまりこのままでは今まで自分たちがしてきたことは何の意味もなく、ただただ遊んで終わりになってしまう。

「おや？ あなたは先程の」

「え……!？」

するとツナの前に海原がやって来た。海原のことを考えている夕イミングで本人がやって来たのでツナは驚いてしまっていた。

「隣いいでしょうか？」

「ど、どうぞ……」

海原は隣に座っていいかどうか尋ねる。ツナは戸惑いながらも了承する。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「さ、沢田綱吉です。えっと……海原光貴さんでよかったですよね？」

「そうですけど……なぜ自分の名前を？」

「美琴から聞いたんです」

「その呼び方。あなたは御坂さんのご友人と捕えてもよろしいのでしょうか？」

「え、えつと……そうです……」

ツナは自分が美琴と付き合っているとさえ海原が何か事件を起こすかもしれない。起こさなかったとしても海原の心の傷つけてしまう。そう思ってしまった。そう答えてしまった。

「それで……俺に何か用ですか？」

「気になってしまったですよ。自分の好きな人の側に男性がいるとなれば当然」

「え……!?!」

海原が好きな人と言った瞬間、あまりのことにツナは固まってしまった。

「ええええええええええええ!?!」

そして時間差で海原の言っていることを理解し、ツナは絶叫する。ツナの絶叫は学園都市中に響く。

「そんなに驚くことでしょうか？」

「い、いや……だって……!?!」

海原は何かおかしなことでも言ったでしょうかとという風な表情かおをしていた。ツナは正直、しつこいと言っても軽い気持ちだと思っていた。しかし海原がそこまでの感情を美琴には思っていないのか、驚きを隠せないでいた。

「しかしよかったです。どうやらあなたは御坂さんの恋人でないようですね」

「え!?! いや……!?!」

「隠さなくもいいですよ。大方、自分を諦めさせる為に御坂さんがあなたに恋人役を頼んだというところでしょうか？」

(バ、バレてる……!?!)

海原は美琴の友人なのかどうかを尋ねた際にツナが後ろめたい表情かおをしていたのを見て、ツナが美琴の恋人ではないということを見

抜いたのである。

「毎回、御坂さんが本当の気持ちを言ってくれないことはわかっていましたが、まさかここまでするなんて思ってもみませんでしたよ」

「じゃあ美琴をずっと声をかけてたのって……」

「御坂さんがちゃんと断っていたら自分は諦めていましたよ。そりや御坂さんに断られたらショックですよ。ですが彼女の幸せを奪うことなんて自分にはできない。しかし御坂さんが本当のことを言ってくれないので何度もアタックするしかなくなってるんです」

（この人は本当に美琴のことを大切に想ってるんだな……）

想い人^{美琴}に想いを伝える為ならば努力を怠らず積極的に行動する。そして自分が美琴の幸せを奪ってしまうのであれば潔く諦める。海原がそんな人物であると知ったツナは海原がフラれても何かを事件を起こすことはない人物だということを理解する。

（でも何だろう？ この感じ……）

ツナの超直感が違和感を感じる。別に海原が嘘を言っている訳でもないければ、海原から悪い嫌な感じがする訳でもないので悪い人間ではないというのは間違いない。しかしながらツナは海原から得も言えぬ違和感を感じていた。だがこの違和感が一体何なのかわからな
いでいた。

「お待たせー。買って来た……」

「あつ……」

しかしタイミング悪くここで美琴が帰って来てしまう。美琴はツナの隣に海原がいることに驚く。ツナはこの状況をどう説明しようかと慌ててしまっていた。

「ちよつと来なさい」

「み、美琴！ 聞いて！」

「いいから来なさい」

「え!? ちよつと!?!」

このまま言っただけの意味がないと判断したのか美琴は右手に持っていたジュースの入ったペットボトルを脇腹に挟むとツナの手首を掴む。「ごめんなさい。私、今日はこの人と大事な用があるの」

「そうですか。わかりました」

(嘘だ……本当は行って欲しくないのに……)

笑顔で美琴の言葉に対応する海原。しかしそれが偽りだということをつなは見抜いていた。

「ええ。ごめんなさい。それじゃ」

「ちよつと美琴！ 待ってって！ ねえってば！」

美琴はそう言うとなつなを制止を聞かずつなの手首を引っ張って強引に海原の元から離れていった。

しばらく離れると美琴はつなの手首から手を離しつなの方を振り返った。

「何やってんのよ！ あんたが海原と仲良くしたんじや何の為に演技してるのかわからないじゃない！」

「……」

「ちよつと。何、黙ってんのよ」

「ごめん美琴。もうこれ以上、演技をするのは俺には無理だよ」

「な、何言って……!？」

突如、恋人を演じることを止めにすると言われた為、美琴は動揺を隠せないでいた。

「あの海原って人。俺たちが偽の恋人だっことも美琴が今まで本当の気持ちを言わなかったことも気づいてるよ」

「え……!？」

「少しだけ話しみてわかったよ。理事長の孫だからって偉ぶったり

しないし。たとえば美琴がどんな返答したって何かするような人じゃないよ。それに美琴のことを何より大事に想ってるよ」
「……」

ツナは海原と話してわかったことを嘘偽りなく美琴に伝える。超直感という人を見抜く力に長けたツナが言うのであれば嘘ではないということとはわかる。そしてツナが何も間違ったことを言っていないということも。頭ではわかってはいるのだが体は正直だった。現在、美琴の心中はざわついていた。

「別れ際に笑顔で対応してたけどすっごく寂しくて悲しい感じがすっごく伝わってきたよ。だからあの人を傷つけることになったとしても美琴の本当の気持ちを言っただけでいい。このままずっと誤魔化して美琴の本当の気持ちが知れないままじゃあの人を可哀想だよ」

美琴にフラれたショックで海原が傷つくのは明白。だが本心を偽りとちゃんと向き合ってもらえず、ずっと誤魔化され続けていくことの方が海原にとっては辛いのではないかとツナは思っていた。

「何よ……何であいつの肩ばかり持つのよ……こっちも気も知らないで……」

「美琴？」

「私だって色々考えるのよ……なのに何で私が悪いみたいになってるのよ……」

「べ、別に美琴が悪いなんて一言も……」

「だったら何であいつの肩ばかり持つのよ!! 何で私のことを見たくないのよ!! 佐天さんやあの子たちのことは見てるのに!!」

「美琴……?」

両目に涙を浮かべながら叫ぶ美琴。ツナは美琴の言っていることの意味がわからず愕然としてしまっていた。

「あんななんて知らない!!」

そう言うとき美琴はツナの横を通り抜けて走り去って行った。

「美琴……」

追いかけてしようとしたツナであったが、足が縫いついたように動かなかった。そして走り去って行く美琴の後ろ姿をただただ見ることし

かできないのであった。

標的（ターゲツト） 228 偽物

ツナが自分のことよりも海原のことを肩に持ったことに腹を立てた美琴は走り去ってしまった。そしてしばらくすると後ろ振り返った。

（いない……）

だが後ろを振り返っても美琴の視界にツナの姿はどこにもなかった。ツナが追いかけてもくれないと知って美琴は余計に腹を当ててしまう。

（私なりに頑張ったのに……なのに……）

佐天やミサのように自分は素直になれないのはわかっている。それでも自分なり一生懸命頑張った。だがツナは自分のことを見てはいなかった。

（帰ろう……）

怒りと悲しみが渦巻く中で何をしても意味がないと悟った美琴は寮へと帰ることを決める。

一方、その頃。ツナは。

「美琴……急にどうしちゃったんだろう……」

今、美琴に追いかけて美琴に話したところで聞き入れてくれないだろうと思いい、一先ずパトロールに戻ることにした。しかし美琴が急に涙を浮かべながら怒ったのか考えるがツナはわからずにいた。

（俺はどうすればいいんだろう……？）

ツナは俯きながらこれから美琴になんていう言葉をかければいいのかわからないでいた。しかし美ツナは琴が怒った原因すらわかっていないので、必死に考えたところでわかるはずもなかった。

その時だった

「いでっ！」

ツナは俯いた状態で考え事をしていた為、ツナは反対側から走って来た青年に気づかずぶつかってしまい尻餅をついてしまう。青年もツナと同じく尻餅をついてしまう。

「す、すいません！ 大丈夫ですか!？」

「こつちこそすいません。余所見してて…あ」

青年は慌てて立ち上がりツナに手を差しのべた。ツナは謝罪の言葉を述べると同時に目を開いた。手を差しのべたのは海原であった。

「さつきは勝手に帰っちゃってすいません。それと美琴のことなんですけど……」

「美琴って……もしかして御坂さんのご友人の方ですか!？」

ツナは海原に美琴が今、怒っているということを伝えようとする。だが美琴とという単語を聞いた瞬間、海原は血相を変えた。

「え……さつき言いましたよね……?」

ツナはさつき海原が聞いてきたことを再び聞いてきた為、不思議そうな顔をしていた。

「違います！ 自分はあなたとは初対面です!」

「な、何言って……!？」

「あなたが会ったのは自分に成り済ましている偽物なんです！ 自分は先程まで捕まっていたんです!」

「そ、そんなことを言われても……」

海原は必死に伝えるが、急に成り済ましていると言われてもツナは信じられずツナは戸惑ってしまう。

(あれ?)

信じられないツナであったが、ここであることに気づいた。それは前に海原に話した際に感じた違和感が、今日の前にいる海原から全く感じられないことに。

(もしかしてこの人が言っていることは本当なのかも……!?)

ツナは違和感を感じた理由が見た目と中身が違うということだったのだと理解する。

「このままだと御坂さんが危ないんです！ 彼は御坂さんを狙っているんです！」

「何だって!?!」

海原から偽物の海原の目的が明かされる。偽物の海原の目的を知ってツナは血相を変える。

「とにかくこのことを早く御坂さんに伝えないと！ 二手に別れて御坂さんを捜しましょう！」

「あー！ ちよつとー！」

ツナの制止を聞かずに海原は美琴を捜しに行ってしまう。仕方がないのでツナも美琴を捜す為に走っていく。

美琴を捜す為に奔走するツナ。

(でも一体、何で……!?!)

走りながらツナは考えていた。あの海原からは悪い感じがせず美琴のことを大事に想っていたのが凄く伝わってきた。そんな男が美琴に害を成そうとしていることが今でも信じられなかった。

(とにかく早く捜さないと！)

美琴に別れたのはほんの少し前。故にまだそう遠くには行っていないと判断したツナ。

その時だった

「おや？ あなたは先程の……」

(こ、こんな時に……!?)

ここでタイミング良く偽物の海原が登場してしまう。ツナは本物の海原から感じられなかった違和感を感じ、目の前にいる男が本物の海原ではないと理解すると同時に慌ててしまっていた。

「どうされたんですか？ 何やら慌てているようですが」

「い、いや……あの……!?!」

ツナの表情かおから何かあったということを察する海原。ツナはどうすればいいのかわからず何も言うことができなかった。

「もしかして御坂さんに何かあったのですか!?!」

(ま、まずい！ このままじゃ！)

海原はツナの慌てた表情から何があったのかを推理する。ツナは目的がバレそうになってしまい窮地に陥った。

その時だった

(あ、あれは!?)

ツナたちのいる反対側の歩道。そこにはゆっくりとした歩幅で歩いている美琴がいた。美琴は落ち込んでいっぱいっぱいなのかツナたちには気づいていない様子であった。

(このままじゃ美琴が……!?)

このまま美琴を海原と接触させてしまえば、海原の魔の手が美琴に及ぶかもしれないとツナは咄嗟に判断した。

そして

「美琴を狙ってるって本当ですか？」

「っ!?!」

ツナは美琴を護る為に自分に敵意を向けさせる。ツナの言葉を聞いた瞬間、海原は驚きの表情を見せたがすぐに笑顔になった。

「勿論。先程も言った通り、自分は御坂さん一筋ですから。本心が聞けるまで彼女を狙うつもりですよ」

「誤魔化さないで下さい。もう知っています。あなたが偽物だつてことも。全部、本物のあなたから聞いています」

「自分が偽物？ 一体何の冗談ですか？」

ツナは先程、知った事実を正直に話した。海原はそれでもシラを

切っていた。

「あなたと出会ってからずっと違和感を感じてたんです。それが本物のあなたからは感じられなかった。でもさつき本物の出会って違和感の正体がわかりました。それはあなたの見た目と中身が違うから」
「あなたの仰っている意味がわかりませんね……それよりも御坂さんに何かあったのでしょうか？ 早く彼女の元へ向かい……」

「行かせませんよ」

ツナはいつまでもとぼけて誤魔化そうとする海原の言葉を遮るようにそう言った。

「正直、あなたが悪い人だとは思えないし、戦いたくもない。でも本当に美琴に手を出すっていうなら俺は何が何でもあなたをここで引き止めます」

ツナはかつて美琴と約束した。美琴が笑える未来を作ると。もし美琴の未来を奪う者が現れるのであれば戦う覚悟もできている。

「やれやれ……まさかあの拘束から抜け出すとは……」

「それは認めたってことでいいんですか？」

「ええ。本物の自分とあなたが会ってる以上、隠す意味もありませんしね」

これ以上は隠し通せないと判断した海原は正直に自分が偽物だということ素直に白状した。

「それに自分の秘密を知られた以上、あなたを生かしておく理由もない」

すると海原は懐からナイフの形をした黒曜石を取り出した。

（ここから離れないと！）

ツナは黒曜石のナイフを見た途端、背を向けて慌てて走り出した。ここで戦えば周囲の人たちを巻き込んでしまうからである。

（とりあえず人気のない所へ！）

誰も巻き込まずに戦える場所へ移動する為にツナは咄嗟に路地を曲がった。海原もツナに着いていく。

ツナが逃げ込んだ先は建設中の工事現場であつた。幸い工事の関係者はいなかつた。

「いない?」

ツナを追いかけて来た海原。しかし周囲を見渡してもツナの姿はどこにもなかつた。

(確かにここに逃げたはず……まさか光学系の能力者?)

確実に追いかけて来たのにもツナの姿がどこにもなかつた。海原はツナが光学系の能力であり、姿を消しているのではないかと推測する。

「どこを見ている?」

「っ!」

すると海原の上の方から声が聞こえる。海原が上を向くとそこには鉄骨の上に佇み、額と両手に装着しているグローブに炎を灯しているツナがいた。

「お前の相手はここにいるぜ」

標的（ターゲツト） 229 大空（ツナ） VS 偽物
（海原）

ついにツナは海原と対峙する。

「いつの間に……」

「俺のスピードを甘く見るな」

海原がツナに追いつくまでにそこまでの時間はかからなかった。故に鉄骨の上に登るまでの時間は無いに等しい。しかし自分がここにたどり着く前にツナは鉄骨の上に登っていた。

（彼は明らかに発火能力者……つまり鉄骨を登ったのは素の身体能力……だとしたらこれはかなり厄介ですね……）

海原はツナのことを冷静に分析する。そして黒曜石のナイフをゆつくりと天にかざした。

「っ!？」

するとツナの鉄骨足場のボルトが綺麗に外れて、ツナは下へ落下していく。

（仕掛けるなら早い内にー!）

ツナが強い人物だと理解している海原は短期決戦でツナを倒すことを決め、ツナが落下した瞬間を狙う為に走り出した。

（もらった!）

落下しているツナに向かって海原は黒曜石のナイフを突き出した。が、

「ゴハッ!？」

ツナの姿が一瞬にして消え、海原は背中に蹴りを喰らわされていた。ツナの蹴りによって海原は吹き飛んでしまい、鉄骨に激突してしまう。

(な、何だ……!?!? 今のは……!?!?)

自分は確実にツナを捕えていた。しかしツナの姿が消えたと思っただけで、同時にすでに蹴り飛ばされ体に痛みが走っていた。

「くっ!」

だがツナの力を分析する暇もない為、海原は黒曜石のナイフを傾けた。今度はツナの真上にある鉄骨を止めていたボルトが外れて、ツナの頭上から鉄骨が落下していく。ツナは慌てることなく右手の掌を上に向け、炎の壁を展開して鉄骨を弾き飛ばした。

(炎で弾いた……!?!?)

死ぬ気の炎は普通の炎とは違い、炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギーギー。故に防御にも向いている。そのことを知らない海原は炎で鉄骨を弾いたことに驚きを隠せないでいた。

「ナイフで反射した見えない何かで攻撃しているようだな。だが一番、最初の攻撃が俺に当たらなかったところを見る限り、お前自身も反射した何かが見えていないようだな」

(たった2度の攻撃でそこまで見抜くとは……)

海原はこの短期間で自分の能力と弱点を見抜いたツナの洞察力に驚いた。

「それと攻撃に移る際の体の動きが能力者と違う。どうやらその力は超能力とは別の力のようだな」

「っ!?!」

能力者が能力を使うには演算が必要不可欠。だが能力者が演算する時の予兆と海原の使う際の予兆が違うことをツナは超直感で見抜いていた。故に海原の力が超能力とは別の力だということを理解していた。

「科学に染まったこの学園都市で超能力以外の力に気づくだけでなく、その存在を即座に信じることができるとは……恐ろしい方だ」

まさかここまで見抜かれるとは思っていなかったのか海原は驚きを通り越してむしろ笑ってしまっていた。

「殺しなさい。自分にはもう勝ち目はない。こんなことをした以上、御坂さんに拒絶されるのは目に見えています。そうなるぐらいなら

死を選びます」

ツナに手を出したと美琴に知られれば自分は美琴と普通に話すことすらできなくなる。そうなるぐらいであれば死んだ方がマシだと海原は判断した。

「俺にそんなことはできない」

だがツナは振り返り海原の申し出を断った。だがそれを見た海原は口元を緩ませる。

(その甘さは命取りですよ……)

ツナがそんなことができないとわかっていた海原は黒曜石のナイフの標準をツナの方に向けた。

(終わりです……)

今、ツナは目の前にいる上に完全に油断している。これなら不可視の攻撃でも当てることができると海原は勝利を確信する。

「ナッツ」

「ガウ」

(な、何だ……!?)

するとツナは振り向くことなくナッツを出した。急にどこからともなくナッツが登場した為、海原は驚きを隠せないでいた。

「GURURU……GAOOOOO!!」

ナッツは海原に向かっておもいつきり雄叫びを上げると炎が周囲に飛び散る。海原は腕を咄嗟にクロスさせて防御体制を取った。

「？」

だが海原の体のどこにも異常はなかった。海原は今の何だったのかわからず困惑していた。

「終わりだ」

「何のつもりですか？ こんなこけおどしで勝ったつもりですか？」

「お前の武器を見てみるんだな」

「何を……なっ!？」

ツナに言われて海原は右手に握られている黒曜石のナイフを見た。そして海原は衝撃を受ける。なぜなら黒曜石のナイフが石化していたのだから。

「石化……!?! 一体、どうなって……!?!」

「ナッツは俺の炎と同じ特徴を持った相棒だ」

「特徴?」

「俺の炎の特徴は調和。さっきのナッツの咆哮でお前のナイフを鉄骨と同じにして無力化した」

(調和による石化だと……!?!)

黒曜石のナイフが石化した理由を知って海原は衝撃を隠せないでいた。

「クソツ!!」

海原は石化した黒曜石のナイフをツナに向かって投げつけた。ツナはその場から一步も動くことなく顔を少し傾けた状態でナイフを躲した。そして海原はツナに向かって拳を振るった。

が、

「無駄だ。そんな弱い心では死ぬ気の俺は倒せない」

ツナは左手の掌で海原の拳をなんなく受け止めた。海原は焦りの表情を浮かべていた。そこから海原は何度も拳を繰り出していくが全て躲されていく。

「終わりだ」

「ゴハツ!?!」

ツナは海原の拳を躲した後、運命の右手首を掴んだ。そして海原の顔面に拳を叩き込んだ。海原はおもいつきり鉄骨にぶつかり背中を強打した。

「それが本物のお前か」

すると海原の顔が時間差で溶解液を浴びたかのように溶けていく。そして褐色の青年が姿を現した。

大空属性の炎の特徴である調和の力によって海原は矛盾綻びのない状態。つまり本来の海原が姿を現した。

「どうやら幻覚でもなければただの変装という訳でもなさそうだな。それもお前の力か？」

「本当にあなたは勘がいいですね……そうですよ。これも私の力……いや魔術の力と言った方が正しいですかね……」

「魔術……」

海原の使う力の正式名称が魔術だということを知ったツナであったがピンときてはいなかった。

「運がありませんね自分は……海原を殺して成り代わろうと思えばテレキネシス念動力で体を分子レベル固定。仮死状態というかコールドスリープ状態になってしまい心臓を刺そうにも冷凍肉に刃を立てるようにピクともせず槍でも分解できず……だから手足を縛って部屋に転がしてたのに逃げられて上に私の存在がバレて……そしてあなたを殺して成り代わろうと思えば返り討ちに遭い……今日は厄日だ……」

海原はこれまでのことを振り返る。とても不運な目に遭ったにも関わらず海原はなぜか笑っていた。

「どうして美琴を狙った？」

「我々の組織から命令ですよ……とある勢力を瓦解する為に自分はこの学園都市に送り込まれたんですよ……その為に御坂さんに近づく必要があった……」

「違う。それも聞きたかったことだが、今聞いているのはそういう意味じゃない」

「？」

「自分自身に嘘をついてまでこんなことをした理由を聞いているんだ」

「っ!？」

ツナは超直感で海原の心を見透かしていた。海原の心に迷いがあることを。

「最初にお前に会った時、美琴は俺の近くにいなかった。その時に俺を殺して成り代わって美琴を狙うことだってできたはず。それをしなかったのはお前の心に罪悪感……迷いがあるからだ」

「……」
ツナは超直感で導き出した答えを伝える。しかし海原は何も答えることはなかった。

「本当は海原のことだって傷つけたくなかったんだろ？　いくら殺せなくなつたといつても能力をずっと使い続けることはできない。能力の効果が切れるのを待って殺すか、出て行くフリをして能力を解いたところを殺すこともできたはずだ」

「……」
「仮に本当に海原が殺せないのなら他の人間を殺して成り済すことだってできたはずだ。そうすれば成り済ました人物を殺せて完全に成り代われる上に海原にも自分の正体がバレないはずだからな」

「……」
「本当は最初から誰も傷つけたくなかったんだろお前は」
「……っ!？」

無表情のまま沈黙を貫いていた海原であつたが、ツナに心の内を見透かされていき動揺を隠せなくなつてきてしまつていた。

「それだけじゃない。姿を偽つていてもお前の美琴への想いは間違ひなく本物だつた。お前は護りたかつたんだろ？　美琴を……美琴のいる世界を」

「一体、何ですかあなたは……？　どうしてそこまでわかるんですか……？」

ずっと沈黙を貫いていた海原であつたが、観念したのかようやく口を開いた。

「そうですね……僕だってこんなことしたくなかつた……誰も傷つきたくなかつた……だってそうでしょ？　誰も傷つかないのが一番いいに決まつてるじゃないですか……」

「……」

そして海原は悲しそうな表情で本音を語った。ツナは黙って海原のことは見ていた。

「自分はこの街が好きだったんです。ここに来た時からずっと。たとえこの住人になれなくなっても、御坂さんがいるこの世界が大好きでした。でもねあの男せいで自分はこんなことをしなくちゃいけなくなりました！ 全てはあの男せいだ！」

「あの男……？」

海原の言うあの男が誰なのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「これで自分はあなたたちの敵になってしまった……これではもう御坂さんと話すことすらできない……御坂さんに自分の正体が知られれば自分は大好きな御坂さんが嫌われるのですから……終わりです……もう何もかも……」

「その程度で諦めるのか？ お前の美琴への想いはそんなものなのか？」

「じゃあどうしろと言うんですか？」

「簡単だ。今度は自分の姿を偽らずに美琴へ自分の想いを伝え続ければいい。死ぬ気でな」

「ふざけているんですか……!?!」

ツナに知られた以上、美琴にこのことが伝わるのは必然。それなのに関わらず想いを伝え続けるという残酷な提案をするツナに海原は怒りを覚える。

「お前の美琴の想いに免じて今回の件はなかったことにしてやる」

「な、何を言って……!?!」

怒りを露にしていた海原であったが、ツナの言葉を聞いて怒りが驚きへと変わっていった。

「嬉しかったんだ」

「嬉しかった？」

「お前のような優しい人間が美琴のこんなにも想ってるって知ってるのと知ってたな」

ツナは海原が美琴のことを好きだと公言した時、衝撃を隠せないで

いた。しかし同時にとても嬉しい気持ちにもなっていたのである。
「美琴は前に心に深い傷を負った。お前のような奴が美琴の隣にいて、美琴の心の傷を埋めてくれたら美琴は幸せになれると思っただ」

ツナは思い出す。絶対能力進化計画^{レベル6ソフト}にて涙を流した美琴の姿を。

「なぜ自分なのですか……？　あなたが御坂さんの隣にいてあげればいいじゃないですか……？」

「俺には無理だ」

「なぜですか？」

「さっきお前と別れた後、美琴と喧嘩してな」

「喧嘩？」

「正直、何で美琴が怒ったのかは今でもわかっていない。俺のせいだってことはわかるんだが……ただ美琴は泣いてた。美琴を泣かせるような奴が美琴を幸せにすることなんてできないからな。だから俺には無理だ」

ツナの脳裏には怒りを露にしながら涙目になっていた美琴のことが浮かんでいた。

「それでも約束はした。みんなが笑い合える未来を作るってな。美琴を泣かせた俺に言う資格はないが、それでも俺は美琴のことを護る。そう決めた」

ツナは思い出す。橋の上で美琴と約束した時のことを。

「でも俺はいつか美琴と別れなきゃいけない」

今、ここにいるのはリボーンの気まぐれによるもの。いつかは元の世界に戻らないいけない。そうなってしまうえばツナは傍にいられず美琴を護れなくなる。

「お前にも事情があるのはわかっている。でもお前が美琴の味方でいてくれれば、俺がいなくなっただ後も美琴は笑っていられる。もしお前の組織のせいで美琴の笑顔が奪われるようなことになるなら、俺がお前の組織をぶっ壊してやる」

（なんて方だ……）

今回の件を水に流しただけでなく、自分の為に美琴を護れるような

環境を整えようとしていることに海原は驚きを隠せないでいた。

「だから美琴の味方でいてくれ。頼む」

そしてツナは海原に頭を下げて、美琴のことを護ってくれるよう懇願した。

「ここまでお膳立てされては仕方ありませんね……あなたの願い……聞き入れましょう……」

ツナの覚悟が本気だということを悟った海原は、微笑みながらツナの頼みを了承した。

「お前の名前は？」

「名前？」

「海原光貴じゃない。本当の名前があるだろ」

「自分の名は……エツアリ……」

「そうか」

本当の名前を知ったツナはエツアリに近づいていく。そしてエツアリの手を取るとエツアリの手を自分の肩へ乗せた。

「しっかりと捕まっている。病院に連れて行ってやる」

「お人好しにも程がありますね……あなたこそまさしくヒーローのような方ですね」

「俺はヒーローなんかじゃない」

「謙遜する必要はありませんよ」

「謙遜でも何でもなし。かつて言われたんだ。俺の家庭教師に。お前はヒーローになんてなれない男だってな」

(家庭教師……？)

ツナは未来での修行の時にリボンに言われた言葉を思い出す。ここでなぜ家庭教師という単語が出てくるのかわからなかったが、エツアリは何も言わなかった。

「それに俺には護れなかった者たちがいる。ヒーローつていうのはいつでもどこでも現れて、何もかも救っていく存在だ。俺がなれるような存在じゃない」

ツナの脳裏にはユニとY、そしてミサたちのことが浮かんでいた。自分がヒーローと呼ばれる存在であるならば救えていた命である。

「だから美琴のことを幸せにしてやってくれ」

「幸せにとって……自分の想いは御坂さんに届いていませんが……」

「届くさ。今は無理でも。いつかきつと」

そう言うのと左手の炎を逆噴射させてゆっくりと飛んでいく。

「成る程……炎を逆噴射させていたのですか……」

宙に浮いてエツアリは理解する。ツナが一瞬にして自分の背後を取った理由を。

「それにしても信じられませんね。あなたが御坂さんと喧嘩したただなんて。何があつたんですか？」

「美琴にお前とちゃんと向き合ってくれと言ったんだ。そしたら何であいつばかり肩を持つのか、何で自分が悪いみたいになってるんだ、何で自分のことを見てくれないんだって言ってるな」

「なっ!？」

ツナは喧嘩した時のことを語る。ツナの話聞いた海原は驚きの声を上げると同時に理解してしまう。美琴がツナのことを好きなのだということを理解する。

「色々と考えたんだが……正直、どうすればいいのかわからないんだ……」

(なぜわからないのでしょうか……?)

あれだけ自分の心を見透かしながら、乙女心を全く理解できないことにエツアリは衝撃を隠せないでいた。

「やれやれ……自分の恋はとっくに終わっていたのですね……」

「何か言ったか？」

「いえ。何でもないですよ……」

こうしてツナとエツアリとの戦いは幕を閉じた。

そしてツナとエツアリが戦っていた建設現場へ戻る。

(バカだ私……)

そこには鉄骨の柱を隠れ蓑にして顔を赤らめている美琴がいた。美琴はツナと喧嘩した後、海原から全ての事情を聞いた。そしてもしかしたらツナが危険な目に遭うかもしれないと思いここまでやって来たのである。美琴がこの場所に到着した時、戦いはすでに終わっていた。そして聞いてしまったのである。ツナとエツアリの会話を。

(あいつは私のことをこんなに考えて……見ていてくれた……)

ツナは自分の幸せにする為に色々と考えている一方で自分は何も知らずただ自分のことばかり考えているだけだった。

(どうしよう……私……)

そしていつもより心臓の鼓動が早く、頬の温度がいつもより熱くなってしまっていることに美琴は気づいてしまう。

(こんなことしてる場合じゃない！ 謝らなきゃ！)

ツナに謝ることを決意した美琴は、その場から駆け出した。

第7学区。カエル医者者の病院前。

「もうここままでいいですよ」

「え……でも……」

「もう後は診察を受けるだけですから。それに何から何まででもらっては格好がつかいませんからね」

そう言うとエツアリはツナの肩に乗せていた左腕を降ろして、一人で病院の中へと入っていた。

「沢田」

「え!?!」

エツア리가病院の中へと入った後、後ろから声がした。後ろを振り向くとそこには申し訳なきような表情かおをしている美琴がいた。

「さつきはごめん……」

「え……!?!」

てつきりツナは自分が美琴に謝る立場であると思っていた。しかし美琴の方から謝ってきた為、ツナは何がどうなっているのかわからないでいた。

「私ってば自分のことばかり考えてた……あんたのこととも海原のことも考えずに」

美琴はここに来る途中で気づいた。自分の身勝手さでツナと海原に迷惑をかけていたということ。

「私、ちゃんと海原と向き合うわ」

「そっか」

美琴が海原と向き合うと知ってツナは少しだけ微笑んでいた。

「い、言いたかったのはそれだけ！ 海原のことは傷が治ってからちゃんと返答するわ！」

「え？ 何で美琴がそのことを知ってるの？」

「っ!?!」

ツナはエツア리가怪我したことは美琴に知られていないと思っていた。故になぜそのことを美琴が知っているにわからないでいた。美琴は自分が墓穴を掘ってしまったことに気づき顔を赤くしてしまう。

「もしかして美琴……」

「そ、そんな訳ないでしょ!! 用は済んだから私は帰るわ!!」

「ええ!?!」

美琴があの場合にいたのだと推測したツナであったが、美琴は顔を真っ赤にしながら強引な誤魔化しそのまま帰ってしまったのだった。

日常篇

標的（ターゲット） 231 最後の日

8月31日。夜

「今までお世話になりました」

「いいのよ。また暇があったら遊びに来てね」

佐天に玄関にて奈々に頭を下げてお礼を言った。今日は夏休みが終わりなので佐天は今日をもって並盛での生活を終えて、学園都市へ戻るのである。

「んじゃ。そろそろ行くぞ」

「ツナ。涙子ちゃん。向こうでも元気だね」

「うん」

「はい」

ツナたちはいつも修行で使っている並盛山に移動する。

「んじゃ佐天。こいつに炎を注入してくれ」

「うん」

リボーンは佐天に向かって異世界転送装置を投げた。装置を受け取った佐天は装置に炎を注入した。そして装置が輝き始め、3人は光に包まれた。そして光が消えると3人の姿は跡形もなく消えた。

学園都市。佐天の寮。

「戻って来た……」

転送した場所は佐天のリビングだった。久々に自分に寮に戻って来て感慨深い気持ちになる佐天。朝は未明革命サイレントパーティーで学究会の会場にて戦ったが、戦いが終わった後はすぐに並盛に戻った。その際に自分の寮に戻らずに並盛に戻った為、寮に帰るのは1カ月ぶりなのである。

(今日からまたツナさんとの生活が始まるんだ!!)

また学園都市で想ツナい人と2人きりの生活が始まる。そう思うと佐天は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

「そんじゃ今日から俺もここで泊まるからな」

「え!?!」

「しゃねえだろ。俺はツナと同じくこの世界に戸籍がねえんだ。だからアパートも借りられねえ。それに俺はお前たちの家庭教師かてきよなんだ。教育するなら近くにいた方がいいだろ」

(そうだった……)

いつも当たり前前のようにいるので佐天はツナたちに戸籍がないということを忘れていた。そしてツナと2人きりの生活ができないとことがわかり佐天はシュンとしてしまっていた。

「安心しろ。お前の楽しみを邪魔する気はねえ」

「楽しみ?」

「ななな、何でもないです!! こっちの話ですから!!」

リボーンは佐天がどんなことを考えているか手に取るようになっていた。ツナは何のことかわからず疑問符は浮かべていた。佐

天は顔を赤くし、慌てて両手を前に出して誤魔化した。

「それにお前の勉強の方もがつりやらねえとな」

「こんなにあんのー!?」

するといつの間にかリビングに置いてある折り畳み式の机に大量の参考書が置いてあった。あまりの参考書の多さにツナは驚きの声を上げていた。

「しようがねえだろ。お前はこっちの世界に来てから学校に行けてねえ上に通っていた並盛高校も退学になっちゃったんだからな」

「退学したのはお前のせいだろ!」

「とにかくだ。これからは風紀委員との仕事以外の空いた時間はネットチヨリと勉強するからな」

「ネットチヨリ嫌だー!!」

「ハハハ……頑張つて下さい……」

ネットチヨリと勉強させられると知ってツナは両手を頭に乘せて絶望する。佐天は苦笑いしながらツナに同情してしまっていた。

「そんじや。今から始めるぞ」

「今から!」

「当たり前だろ。お前は学校がねえんだからな。今日は朝まで勉強だぞ」

「あ、朝まで!」

(鬼だ……)

今から朝まで勉強させられると知ってツナは驚き、佐天はリボーンのアマリのスパルタ教育に引いてしまっていた。

「じゃ、じゃあ私は夜食作りますから」

「甘やかすんじやねえ佐天。お前はツナと違って明日から学校じゃねえか」

「で、でも……」

「それに2日後に広域社会見学っていうのがあんだろ。ここで生活リズムを崩して体調まで崩ちまったらせつかく楽しめるものも楽しめなくなっちゃうぞ。晩メシはもう向こうで食ったんだ。お前は明日のことだけ考えとけ」

「う、うん……」

ツナに夜食を作ってあげたかったが、リボーンの言い分は何も間違っていない為、佐天は渋々承諾し明日の準備することを決めた。

佐天はまず風呂に入ることに関決めた。

「ふう……」

湯船に浸かりながら佐天は天井を見上げた。そしてこの夏休みのことを思い出していた。

「こんな夏休みは始めてだったなー……」

今回の夏休みは今までの夏休みとは違った。いつもなら友達と遊ぶだけで夏休みが終わっていたが、今回は修行したり、戦ったりという今までにない夏休みだった。

(みんな元気にしてるかな?)

佐天は目を閉じながらクラスメートのことが考えていた。学生誘拐事件が発生した際は自分が拐われたと思い177支部に押し掛けたということもツナから聞いていたので謝らないといけないと思っていた。佐天はしばらく湯船に浸かりながら感傷に浸っていた。

が、

ドオオオン!

「ば、爆発音!?!」

突如、リビングの方から爆発音が聞こえて来る。感傷に浸っていた佐天であったが、それどころではなく慌てて湯船から出るとバスタオルを巻いて風呂場から飛び出した。

佐天がリビングに向かう間にも爆発音が何度も聞こえてくる。

「ちよつと！ 爆発音が聞こえたけど何があつたの……？」

リビングへとやって来た佐天。そこで目にしたのは全身が真っ黒焦げになり、机の上でうつ伏せの状態で倒れているツナだった。

「どうした佐天？」

「どうしたじゃないよ!! 何でツナさんがこんな風になつてるの!？」

「問題を間違えたから爆発させた」

「何で爆発させる必要があるの!？」

「これが俺のやり方だ」

「絶対に間違つてるよ!! どうか他の部屋の人に迷惑だよ!!」

「問題ねえ。お前の寮だけ防音対策と施しているからな。他の奴らに

は聞こえねえぞ」

「勝手に私の寮を改造しないで!!」

「防音対策だけじゃなくて防弾仕様も施してあるからな。仮にミサイルが飛んで来たとしても耐えられる仕様になつてるぞ」

「何で防弾仕様がいるの!？」

「いつ敵が襲つて来るかわからねえからな」

「ここは学園都市だから!!」

かつてない施のリボーンのボケに佐天も今まで以上にツツコミをいれていく。

(学園都市こっに帰つて来たら普通の日常を送れると思つたのに……)

学園都市なら普通な生活を送れると思つていたが、リボーンがいる限り、普通の生活を送れることはないと悟つた佐天であつた。

標的（ターゲット） 232 新学期

次の日。9月1日

「じゃ、じゃあ……行ってきまーす……」

「い、行ってらっしやい……」

佐天は玄関にてツナに見送られていた。しかし佐天の顔は引き攣っていた。なぜならツナの全身は黒焦げになっており、徹夜で勉強したいせいで目の下に隈ができており完全に生気が失われていたからである。

「はあ……これからこんな生活が続くのか……」

家を出て自分の通っている柵川中学まで道を歩きながら佐天はため息をついていた。

「お」

元気がなかった佐天であったが、自分の前方に歩いている初春の後ろ姿を視界に捕える。すると不適な笑みを浮かべながら駆け出していく。

「おはよう！ う・い・は・る〜！」

「いやああああ!!」

佐天は両手でおもいつきりスカートをめくった。初春は恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしながら悲鳴を上げた。初春の悲鳴は学園都市中に響き渡る。

「お。今日は水色か」

「新学期早々何するんですか佐天さん!!」

「いやー。昨日は久々に会ったのにできてなかったからさー」

「習慣にしないで下さい!! 次やったら佐天さんが沢田さんのことだって好きだってバラしますから!!」

「ちよつと!! 何でそうなるの!?!」

「佐天さんのセクハラ行為を止めさせる為です!!」

「だからってそこまでする!？」

「ネット上にあげられるとどっちがいいですか？」

「調子に乗ってすいませんでした!!」

流石にネット上全世界に知られたくはないので

佐天は掌を返し全力で謝罪した。

「はあ……それはそうと佐天さん。ちゃんと宿題はやったんですか？」

「勿論。リボーン君が教えてくれたから3日で終わったよ」

「3日!？」

3日で終わったと知って初春は驚きの声を上げる。初春はジャッジメント風紀委員の仕事が忙しかったのもあって宿題が終わるのがギリギリだったのである。

「リボーン君、教えるのが凄い上手いんだよねー。修行のも滅茶苦茶に思えるんだけど、ちゃんと考えられてるんだ」

「ちなみにどんな修行を……?」

「えつと……崖登りでしょ。スパーリングでしょ。時雨蒼燕流の継承。大岩を持った状態でのスクワット。狙撃を避ける訓練。森でのサバイバル。機械兵器と戦ったり。42・195kmをウエイトをつけて走ったりとか。重力のかかった状態で筋トレとか……」

「……」

少し前まで普通の女の子だった親友が佐天1カ月あまりにもぶっ飛んだ修行をしていた為、初春は開いた口が塞がらない状態であった。

「せっかくだし初春もリボーン君に鍛えてもらったら? 1カ月頑張れば初春も体力がつくよ」

「無理に決まってるじゃないですか!」

初春は情報処理の一点突破でジャッジメント風紀委員になった。故に体力が小学生低学年並み。そのことを知る佐天はリボーンの修行を受ければ体力がつくようになることを確信した。しかし先程、佐天からリボーンの修行の内容を聞いている為、絶対にできる訳がないということを知り初春は理解していた。

「大丈夫だって! 死ぬ気でやればできるって!」

「死ぬ気でやるどころか死んじやいますよ！」

歩くこと20分。佐天と初春の通っている柵川中学へ到着する。2人は自身の教室へと入る。

「お！ 久しぶり！ みんな！」

「あ！ ルイコ！」

「よかった！」

「無事だったんだ！」

佐天のクラスメイトであるアケミ、マコ、むーである。この夏休み、連絡しても全く返答がなかった為、ずっと心配していた。学生誘拐事件の時に何とか誤魔化し無事だということは伝えたのだが、それでも心配だったのである。そして佐天が無事だと知って再会に3人は顔を明るくした。佐天は3人に事情を話した。

「「修行に行ってた!？」」

「うん」

まさか佐天が修行に行っていたとはこれぼっちも思っていなかった。たので3人は驚きを隠せないでいた。

「知り合いの家庭教師の人に修行をつけてもらったんだ」

「か、家庭教師って……能力について教えてもらったってこと……?」「うん」

能力について教えてくれる家庭教師など聞いたことがない為、アケミは胡散臭そうな表情をしていた。

「といってもここで見せると色々大変だからまた後でね」

ここでリングに炎を灯してしまえば大騒ぎになってしまうので佐天はそう言った。

「あ！ ルイコ指輪してるー！」

「綺麗な指輪だね」

むーとマコが佐天が右手に装着してるリングに気づくと、興味津々な様子でリングを見ていた。

「ああこれ？ これは彫金師の人が作ってくれたんだ」

「「ちようきんし？」」

元のリングをくれたのはチェツカーフェイスであるがチェツカーフェイスのことが話せないので佐天はそう言った。彫金師が何のことかわからず初春、アケミ、むー、マコは首を傾げていた。

「金属を加工してアクセサリーを作る職人のことらしいよ」

「何でそんな人と知り合いな訳？」

「その彫金師と私の家庭教師が知り合いなんだ。だから造って貰えたんだー」

「また家庭教師……う？」

「ここでもたしても家庭教師という単語が出てきた為、アケミは佐天の言う家庭教師が気になり始めてしまった。

すると始業開始の予鈴が鳴る。教室にいる生徒たちは席につく。

「おはようございます」

生徒が座った後、眼鏡をかけた青髪の男性が入って来る。柵川中学の教師であり佐天たちのクラスの担任の大園である。

「えー。知っている人もいると思いますが今日は転校生を紹介します」

（へー。転校生が来るんだ）

肩肘をつきながら佐天は大園の話を聞いていた。他の生徒は噂で知っていたが、佐天はずっとツナたちの世界にて修行していたので知らなかったのである。

「では入って来て下さい」

大園が教室の入り口の方を向いてそう言うと、教室の扉が開いた。すると2人の少女が入って来た。

「今日からこの学校に転入することになった枝先理です」

「同じく春上衿衣です。よろしくお願いしますなの」

標的（ターゲツト） 233 騒然

今日は2学期初日ということもあり授業はなく始業式だけで終わった。始業式が終わり放課後になると☒理と春上は皆に囲まれていた。

「まさかあの2人と同じクラスになるなんて」

「初春、あの2人のことを知ってるの?」

「はい。夏休みの時にちよつと」

初春は佐天に説明する。ツナが春上のペンダントを探してあげたこと。そのペンダントの中に入っていた写真の中に☒理が写っていたこと。そして☒理が木山の生徒であり、春上と同じ施設で育った人物だということを。

「へー。そんなことがあったんだ」

（あのことは話さないでおきましょう……）

初春の説明を聞いて佐天は納得する。そして初春は春上がツナのことが好きなのだということ。花火大会で☒理をお姫様抱っこしたことは黙っておいた方がいいと判断した。

「私は風紀委員の仕事なのでお先に失礼しますね」

そう言い残すと初春は教室を出て、177支部へと向かって行った。

「さーて。学校も早く終わったし何しよっかなー」

「お前は修行だぞ」

佐天は両肘を顎に置きながらこれから何をするかどうかを。だがその佐天の言葉を否定する声が聞こえて来る。すると佐天の座っている席の真上の天井が開きそこからリボーンが降りて来て、佐天の席に着地した。

「明後日の広域社会見学のせいであつた、今日までしか修行できねえんだからな。今日は夜までみっちり修行するぞ」

「リボーン君!? 何でここにいるの!?!」

自分の寮にいないはずのリボーンが当たり前のように学校にいるこ

とに佐天は驚きを隠せないでいた。

「そりやそうだろ。俺はお前の家庭教師だからな。生徒の様子を見に来るのは当然だろ」

「家庭教師は学校に来るんじゃないやなくて家に来るものでしょ!! いか何で学校の天井が自動で開くようになってるの!?!」

「俺の手で学校を改造したからな。それに俺のアジトは学校中に張り巡らしてある。この学校はもう俺のアジトになったといっても過言じゃねえ」

「ありえないよ!!」

学校を改造しただけでも驚きなのに、誰にも気づかれることなく学校中を改造するということをやったのけるリボーンの神業に佐天は信じられないでいた。

「修行はするからさ!! とにかく早く帰ってよ!! 先生たちに見つかったら不味いつて!!」

「問題ねえ。そんな時はこいつで口封じするだけだ」

「一番のダメなやつだよそれ!!」

懐から愛銃を取り出してそう言うリボーンに佐天はツツコミをいれる。佐天がツツコミをいれまくったせいでクラス中が佐天に注目していた。

「騒ぎ過ぎだぞ佐天。お前のせいでクラス中の奴らがお前に注目しちまってるじゃねえか」

「誰のせいだと思ってるの!!」

こんな状況になってもなお気にすることなくリボーンがボケるの
で佐天はツツコミを入れざるを得なかった。

「赤ん坊が喋ってる……」

「もしかしてルイコの弟……?」

「というか今、家庭教師つて言つてなかった……?」

朝、佐天から聞いた家庭教師がまさかこんな赤ん坊だとは思っても
みなかった為、アケミ、むー、マコは衝撃を隠せないでいた。

「ちやおつす。俺の名はリボーン。佐天の家庭教師にして世界最強の
殺し屋だぞ」

「「「「は?」「」」」」

(もう最悪だー!ー!ー!ー!!)

喋る赤ん坊の存在だけでも意味がわからないのに、さらにまた変なことを言い始めた為に、教室にた者たちは衝撃を隠せないでいた。佐天は両手で頭を抱えてしまっていた。

「お前らボンゴレに入らねえか?」

「「「「ボンゴレ?」「」」」」

「いきなり勧誘しないでよ!!」

リボーンの言うボンゴレの意味がわからずクラス中が首を傾げた状態で疑問符を浮かべていた。いきなりボンゴレに勧誘しようとしたリボーンに佐天はツツコミをいれた。

「いい加減にしてよリボーン君!! みんなを巻き込まないでよ!!」

「今なら洗剤もつけるぞ」

「無視しないで!! というか洗剤ぐらいでボンゴレに入る単純な人なんて訳ないでしょ!! 新聞の勧誘じゃないんだから!!」

「惚れた男と一緒に居たいが為にボンゴレに入ったお前よりはマシだと思うぞ」

「なっ!?!」

「「「「「え!?!」「」」」」」

リボーンのまさかの反撃に佐天は動揺し顔を真っ赤にする。惚れた男という単語を聞いてクラス中は騒然としてしまう。

「こ、ここでツナさんは関係ないでしょ!! というか私はボンゴレに入っていないからね!!」

「ツナって……もしかしてあの人!?!」

(しまったー!ー!ー!ー!!)

ツナという単語を聞いて、アケミは思い出す。佐天と同じく^{レベルアップ}幻想御手の副作用で昏睡状態になって目覚めた時に見舞いに来ていた人物だということ。佐天は墓穴を掘ってしまったことに気づき後悔してしまっていた。

(あの人……!?!)

佐天がツナのことが好きだということを知って、春上はハラハラし

ながら佐天のことを見守っていた。

「アケミ知ってるの!？」

「あの人だよ! 私たちが幻想御手レベルアップ!で昏睡状態になった時に夢に出て来たあのツンツンの茶髪の人だよ!」

「え!?! あの人!?!」

自分と同じく昏睡状態になっていたむーとマコモツナの過去を見ているのでツナのことを全く知らない訳ではない。なので佐天の好きな人がツナなのだとということを知って衝撃を隠せないでいた。

「ど、どうしようなの☒理ちゃん……」

「だ、大丈夫だって! まだツナお兄ちゃんがあの人と付き合ってる
と決まった訳じゃないよ! まだ衿衣ちゃんにもチャンスはあるつ
て!」

動揺する春上を安心させようと☒理は春上にしか聞こえないよう
な小声でそう言った。

(あいつらツナのこと知ってるのか……しかもあの衿衣って奴はツナ
に惚れてんのか……)

小声で話した☒理であったがリボーンには聞こえてしまっていた。

(こいつはまた面白くなりそうだな)

春上がツナのことを好きだということを知ったりリボーンは不適な
笑みを浮かべる。そして同時に何かを企むのであった。

標的（ターゲット） 234 学校

時は佐天が学校に行っている時に戻る。

「10分休憩だぞ」

「……」

ツナはリボーンに徹底的に絞られて机のうつ伏せの状態になってしまっていた。

「情けねえ奴だな。この程度でくたばってるようじゃボンゴレのボスにはなれねえぞ」

「だから俺はマフィアのボスにはならないって言ってるだろ！」

いつものリボーンという言葉にいつものようにツナはツツコミをいれる。

「そーいや今日はあいつが並盛高校に転入するんだったな」

「あいつ？」

「お前の知ってる奴だぞ」

「俺の？」

リボーンから自分の知っている人物だと言われるがツナは一体、誰のことを言っているのかわからず疑問符を浮かべていた。

その頃。並盛高校。

「今日は転校生を紹介します」

「ついに来るねハルちゃん」

「すっごいエキサイティングです」

先生から転校生が来ると知らされて京子とハルはとても楽しそうな顔をしていた。

「それでは入って来て下さい」

先生が教室の入り口の方を向いてにそう言った。すると教室の扉が開いた。

「本日からこの並盛高校に転校して来た、御坂ミサと申します。とミサは自己紹介します」

なんと並盛転校に転校して来たのは並盛高校の制服を身に纏ったミサであった。

再び。佐天の寮。

「え!?! ミサが並盛高校に転校!?!」

「そうだぞ。あいつが学校に行ってみたって希望したんだぞ」

「ミサが……」

ミサが自分の意思でそう言ったことにツナは驚きを隠せないでいた。だが同時に嬉しくも思っていた。

「というかよくどうやって転校させたんだよ? ミサは学園都市の間だろ」

「そこところは雲雀に事情を話して、ミサを並盛高校に転校できるようにしてもらったんだ」

「何でそんなことができるの雲雀さん……」

明らかに風紀委員のできるはずのないようなことを当たり前のようにやって退ける雲雀の権力にツナは驚きを隠せないでいた。

「事情を話したってことは雲雀さんにミサがクローンだって言ったって……?」

「雲雀だけじゃねえぞ。獄寺たちにもあらかじめ話してある」

「それって京子ちゃんやハルにも話したってこと？」

「ああ。あいつらならミサがクローンだって知っても問題ねえからな。」

「でも大丈夫なの？ ミサは定期的な治療が必要なんですよ？」

「問題ねえ。定期的に別のミサと入れ替わるようにする。まず見た目だけで別人だと判断できる奴はいねえからな。それにミサカネットワークの力で情報を共有してるから話が噛み合わねえっていうこともねえ。もし何かあった場合にはクロームの幻術でやり過ごすつもりだ」

「そうだよね……それぐらい必要か……」

リボンからミサの為の対策を聞いて、ツナは安心してミサが学校生活を送ることができるとは仕方がないということを理解する。

「でもミサが学校に行きたいって言うなんてびっくりしたよ……」

「何言ってるんだ。ミサが学校に行きたいと思ったきっかけはお前だぞ」

「え？ 俺？」

「そうだぞ」

時は夏休みに遡る。ミサが入院している中山外科医。

「学校に通ってみたい？」

「はい。とミサカは答えます」

「どうして学校に通いてえんだ？」

「知りたいのです。とミサカは答えます」

「知りてえ？ 何をだ？」

「ツナがなぜあのようになったのかを知りたいのです。とミサカは学校に通いたい理由を語ります」

「学校に行くこととツナのことを知ることがどう関係してるんだ？」

「ツナはミサカを……他者との繋がりを何よりも大事にしています。とミサカはツナのことを語ります」

ミサはツナと過ごした日々を思い出す。ツナにとって仲間こそが何よりも譲れないもの。誇りであるということ。

「ツナの仲間と一緒に過ごせば、ツナがどうしてあのような人物なのかはわかる気がするのです。とミサカは自分で導き出した答えを伝えます」

「そうか」

ミサの言葉を聞いてリボーンは微笑む。今まで自分で命令されがまま動くことがほとんどであったミサが自分の願望を述べたことが嬉しかったのである。

「無理だというのは承知ですがそれでもミサカは学校に行ってみたいのです。とミサカは誠心誠意頭を下げてお願いしてみます」

学園都市の人間であるミサには戸籍がない。故に学校に通うことはできない。それはミサ自身が一番よくわかっている。それでもミサは学校に通ってみたいのである。

「いいぞ。俺が話をつけてやる」

「本当にできるのですか？ とミサカは自分で頼んでおきながら驚いています」

「雲雀ならなんとかしてくれるはずだ」

「雲雀とは誰ですか？ とミサカは尋ねます」

「並盛高校の風紀委員長であり並盛の不良の頂点に立つ男だぞ」

「その肩書きはおかしくないですか？ とミサカは疑問に思います」

不良と風紀委員長という相反する2つの肩書きを雲雀が持っていることにミサは違和感を覚えていた。

「あいつは並盛のことが誰よりも好きだからな。不良の頂点に立つことで裏の秩序を統制し、風紀委員長になることで表の秩序を統制することで並盛全土の秩序を護っているんだ」

「ですが風紀委員長に話したところでミサカが学校に転入できないのでは？ とミサカは疑問を抱きます」

「どういう訳か知らねえが雲雀は並盛において絶大な権力を持ってて

な。雲雀の許可さえ貰えれば転入できるはずだぞ」

「それは普通の風紀委員にできることではないのでは？ とミサカは雲雀という人物が何者なのか気になり始めています」

雲雀のことを聞いてミサは雲雀の権力の大きさに疑問に抱いていた。

「ただし条件がある」

「条件ですか？ とミサカは尋ねます」

「お前がクローンだということは雲雀と一部の奴らに話す。それとお前が治療してる時は他のミサがお前の代わりに学校に行かせる。この条件でいいなら俺が雲雀に話をつけてやる」

「問題ありません。とミサカは即答します」

再び佐天の寮。

「つー訳だぞ」

「ミサが……」

リボンからミサが学校に通いたいという理由を聞いてツナは驚いていた。

「でも嬉しいな。ミサが学校に通いたって言うなんて」

ツナもリボンと同じくミサが自分で考えて願望を述べたことが嬉しい様子だった。

「それと今日からミサをお前の家に迎え入れることにしたぞ」

「え!?! ミサを!?!」

「いつまでも病院っていう訳にはいかねえからな。丁度、佐天もいな

くなつたしな。ママンも許可はもらつてるぞ」

「相変わらず母さん人良すぎ……」

佐天がいなくなつた次の日にまた新たに居候が来てもなお、嫌な表情かおをせずニコニコしている奈々の姿がツナには容易に想像できた。「今まで辛い目にあつたんだ。これからは楽しく暮らせることを祈ろうじゃねえか」

「そうだね」

リボーンの手紙を聞いてツナも同じくミサが楽しい学校生活を送れるよう心の中で祈るのだった。

標的（ターゲット） 235 臨時数学教師

春上と☒理が柵川中学に転校して来た次の日。9月2日。

「はあ……」

朝のホームルームが終わって10分の休憩時間に入っていた。しかし佐天は浮かない表情かおをしながらため息をついていた。理由は昨日の一件で佐天に好きな人がいるということがバレたこと、そして変な赤ん坊と関わっていることが大勢の生徒に知られたからである。

「だ、大丈夫ですか……佐天さん？」

「大丈夫に見える……？」

「ハハハ……」

佐天の心情を察して佐天の席までやって来て心配する初春であったが、なんと声をかけていいかわからず苦笑いすることしかできないでいた。

「あ。もう少しで休憩時間が終わりますね」

「1時間目は数学だっけ？」

「はい」

初春に1時間目の教科のことを聞くと佐天は引き出しから数学の教科書とノートを取り出して机の上に置いた。

すると1時間目の開始の予鈴が鳴る。

「佐天さん。色々大変だとは思いますが学生の本文は勉強ですからね。ちゃんと授業は聞いて下さいよ」

「はい」

初春の言葉を聞いて佐天は投げやりに返事をした。初春は自分の席へと戻っていく。

予鈴が鳴ってから1分後、教室の扉が開く。

「おいお前ら。静かにしろー」

（は……!?!）

教室に先生の声が響き渡る。佐天は先生の声を聞いて衝撃を受ける。なぜなら教室に入って来た人物が茶色のスーツを身を纏い、いつも被っている黒帽子を外しツンツンヘアーが剥き出しのリボーンだったからである。

するとリボーンはジャンプして黒板の縁に乗ると、白いチョークで黒板にリボ山と書いた。そして再び黒板の縁から教卓へとジャンプして移動する。

「今回、臨時でやって来た数学教師のリボ山だ。みんなよろしくな」
「何やってんのリボーン君!？」

リボ山と名乗ったリボーンが自己紹介する。佐天は当たり前のように学校に来て教師を名乗っているリボーンに心の中でツツコミをいれる。

「リボ山って誰？」

「あんな先生いたか？」

「ていうか小さくない？」

「何でみんなわかんないのー!？」

生徒たちは突如として現れた奇妙な教師に違和感を覚えてはいるものの、昨日の放課後に現れたリボ謎の赤ん坊ンだとは微塵も思っていないかった。佐天はなぜみんながリボ山の正体に気づいていないことに驚きを隠せないでいた。

「あんな先生がいるなんて。この学校、面白いね衿衣ちゃん」

「不思議な先生なの」

「あんな先生いる訳ないじゃん！」

いくら理と春上が転校したてとはいえ、常識で考えればあんな先生が存在する訳がない。なぜそれがわからないのが佐天にはわからないでいた。

「どうしてでしょう？ 初対面のはずなのにどこかで会ったことがあるような気がするのですが……」

「何で初春もわかんないの!? 私がおかしいの!？」

何度も会っている初春ですらリボ山がリボーンだということがわかっていなかった。この場にいる誰もリボ山の正体がわからないの

で佐天は自分だけがおかしいのではないかと思いはじめてしまった。

「いつもの数学教師は食中毒になったらしくつてな。今日は俺が代わりに授業をすることになった。短い間だがよろしくな」

(絶対リボーン君の仕業だ！)

リボーンの言葉を聞いて、リボーンが数学教師を食中毒にさせたということを佐天は確信した。

「さっそく授業を始めるぞ。2学期の内容に入る前に1学期の復習から入るぞ。今から黒板に書いた計算式を解いてみる」

そう言うとりボーンは黒板に白のチョークで問題を書き始めていく。

「解けた奴は挙手した後、黒板に答えを書いてくれ。途中式は書いても書かなくてもどっちでもいいぞ」

リボーンがそう言うのと生徒たちはノートに計算式を書き写すと問題を解いていく。復習は15分程で終了する。

「1学期の復習はこれで終わりだ。ここからは2学期の内容に入っていくぞ」

そう言うとりボーンは黒板消しで計算式を一斉に消すと2学期の内容を黒板に書いていく。

(なんか普通にわかりやすいんだけど……)

リボーンの教え方はとても上手く、生徒たちはすぐに理解していた。その影響もあってか授業はスムーズに進んでいった。

「そんじゃ。次は今覚えた公式を使って解く応用問題だぞ」

(一時はどうなるかと思ったけど……)

リボーンが出て来た時はどうなるかと思ったが何事もなく授業が進んでいる為、佐天は安堵する。

「こいつを解いてみる」

「「「え……!?!」「」」」

(何これ!?)

黒板を見てクラス全員が絶句する。なぜならそこには黒板を埋め尽くす程の計算式が書かれていたのだから。安堵した矢先にこんな

難問を解いてみると言われているとは露にも思っていないなかつた為、佐天も驚愕してしまっていた。

「遠慮せず手を上げろ」

（無理だつて！　こんなの絶対に解ける訳ないつて！）

間違う間違わない以前にどうやって解けばいいかすらわからない状態である為、手を挙げられるものなどいるはずもなかった。

「ちなみにこの問題が解けた奴には俺からいいマフィアの就職口を紹介してやるぞ。特別待遇でな」

「「「「は？」「」「」」」」

（リボーン君、このクラスの中からボンゴレに入る人材を探すつもりだー！）

リボーンの発言を聞いて、佐天以外の生徒は何を言ってるんだこいつ？　みたいな表情かおをしてしまっていた。佐天はリボーンがリボ山と名乗ってまで柵川中学にやって来た目的を理解する。

「マフィアつて……大丈夫か……頭おかしくなったんじゃねえのか……？」

「私語は慎まんか」

「がっ!？」

（あまりの速さに黒板消しが凶器と化したー!?!）

1人の男子生徒がそう呟いた瞬間、リボーンが超スピードで男子生徒に黒板消しを投げた。黒板消しは男子生徒の額に直撃し、男子生徒は気絶してしまう。ただの黒板消しで人を気絶させるリボーンの技量に佐天は愕然としてしまっていた。

「そんじやお前ら。こうなりたくなかったら死ぬ気で解けよな」

リボーンがそう言った瞬間、恐怖に支配された生徒たちは一斉に問題を解き始めるのであった。

標的（ターゲツト） 236 臨時教師2

恐怖の数学の授業が終わった後の授業はリボーンは出て来ず普通に終わり昼休みを迎える。

「はぁ……」

佐天は廊下を歩いていった。2時間目以降からはまたリボーンがやって来て何かするのではないかと思ってしまうずっと警戒していた為、いつもより余計に疲れてしまっていた。

「まだ2日なんだよなー……」

学園都市へ戻って来てから2日。たった2日なのであるがリボーンに振り回されたせいで数十日分疲れているような気がしてしまっていた。

（まさかとは思うけど……）

佐天は嫌な予感がしていた。明日からの広域社会見学にリボーンもやって来るのではないかと。そして広域社会見学に行く他の生徒たち、広域社会見学の行き先である学芸都市の人たちをボンゴレに勧誘したり、何か変なことをするのはないかと。佐天は心配で心配でたまらなかった。

「何、湿気た面^{ツラ}してやがんだ。そんなんじや

惚れた男は振り向いてくんねえぞ」

すると佐天の廊下に設置してある消火栓の扉が開いた。そこには椅子に座って優雅にコーヒーを飲んでいるリボーンがいた。

「ちやおっす佐天」

「ちやおっすじゃないよ!! 何で当たり前のようにウチの学校に教師やってるの!?!」

1時間目の出来事があったのにも関わらず、何事もなかったかのように挨拶するリボーンに佐天はツツコミをいれる。

「俺の超高度な変装に気づいているとはな。成長したな佐天」

「わかるよ!!」

リボーンの変装はどういう訳かはわからないが普通の人には見破ることができない。リボーンの生徒を除いて。

「それより俺の授業はどうだった？ 楽しかっただろ？」

「楽しい訳ないでしょ!! 恐怖しかなかったよ!!」

「おかしいな。死地であればある程、スリリングなもんなんだがな」

「それはリボーン君だけでしょ!!」

殺し屋^{ヒットマン}として幾千もの死地を乗り越えて来たリボーンと、柵川中学の生徒たちの感覚が同じな訳もなかった。

「どうか生徒を気絶させるなんていくら何でもやり過ぎだよ!!」

「生徒の分際で教師である俺の悪口を言ったんだ。あれぐらいの制裁は当然だ」

「いきなりあんなこと言ったら誰だってそう思うよ!!」

いきなりいいマフィアの就職口を紹介してやるなどと言われたら気絶させられた男子生徒のような反応をするとは当然。佐天の主張は間違いないと正しいと言っている。

「どうかこの学校に来る為だけに数学の教師を食中毒にさせたでしょ!!」

「食中毒は本当の話だぞ」

「え……そうなの……？」

「ああ。何でもボンゴレピザっていうピザ屋のピザを食べて食中毒になったらしいぞ」

「やっぱりリボーン君のせいじゃん!!」

一度は無関係と思っていたが、結局リボーンが関係していたと知って佐天はツツコミを入れざる得なくなってしまった。

「それはそうと今日はお前に新兵器ができてるぞ」

「新兵器？」

新兵器が何なのかわからず疑問符を浮かべる佐天。リボーンはアジトの奥に置いてあるアタッシュケースを取り出して佐天に見せた。

「何が入ってるのこれ？」

「バトル用のマフィアスーツだぞ」

「マファイアスーツ!？」

「そうだぞ」

「い、いいよ! そんなの渡されても着ることないって!」

「安心しろ。見た目は柵川中学の体操服と一緒だ」

「あ。本当だ」

リボンがアタツシユケースを開けて見せた。そこには柵川中学の体操着が入っていた。見た目が普通の体操着だと知って佐天は安堵した。

「こいつは俺のスーツと同じレオンの体内で生成された糸でできた特別製でな。死ぬ気の炎でも簡単には燃えねえんだ」

「そんなことまでできるんだレオンって……」

「ちなみに死ぬ気弾はレオンがいなきや作れねえんだぞ」

「どういうこと?」

「死ぬ気弾はボンゴレ伝統の素弾を形状記憶カメレオンの体内に3日間埋め込むことでできるんだ。貝で真珠を作るみてえにな」

「え!?! 死ぬ気弾ってそんな作り方だったの!？」

あらゆる物に変形したり、生徒の危機を予測したり、生徒専用のアイテムを吐き出したりするだけでも驚きだというのに、ここにきてさらに知られざる能力を持っていることを知った為、佐天は驚きを声を上げる。

「そのスーツは通常の10倍の厚さにしてあるからな。だから美琴の超電磁砲レールガンが直撃しても耐えられる仕様になってる。つっても3、4発ぐらいが限度だがな」

「すごい過ぎるでしょ……」

このスーツの強度に佐天は驚きを隠せないでいた。リボンはリング争奪戦の際にレオンの糸で作ったスーツをツナに与えた。ツナはXANXUSの攻撃をモロに喰らったがこのスーツのお陰で命拾いした。

「これからそいつを着るようにしとけ」

「ありがとうリボン君。次の時間は体育だからさっそく使ってみるよ」

そして昼休みが終わり体育の時間になる。佐天たちはグラウンドに集合していた。予鈴が鳴つても先生が来ていなかった為、準備運動を始めていた。

(全然、違和感がない。それどころかめちやくちや動きやすい……)

準備運動をしながら佐天はリボンが用意してくれた着心地を実感する。厚さを10倍にしていたとはいえ全然、動きにくいどころかむしろ柵川中学の体操着よりも動きやすいぐらいであった。

「待たせたわね」

(え……!?)

すると先生がやって来る。だがその先生を見て驚愕する。なぜならそこには青いジャージを来て黒髪のポニーテールのカツラを被っているリボンいたのだから。

「臨時教師のリボ川よ。よろしくね」

(また変なの来たー！ー！！)

標的（ターゲット） 237 侵入者

数学に続いて体育の授業までリボーンが現れた。

「また臨時教師？」

「なんか朝のリボ山に似てないか？」

「身内とかじゃない？」

（だから何で気づかないのー!?!）

またしても生徒たちは目の前にいる人物がリボーンだということに気づいていないことに佐天は驚きを隠せないでいた。

「いつもの体育教師は超モテモテの超一流の殺し屋ヒットマンに襲われて入院したそうなの。だから今日は私が授業をするわ」

「何それ！」

「変なの！」

（最悪だよ!! 1日で2人も手を出しちやつてるよ!!）

リボーンの言葉を聞いてクラス全員に笑いが起きる。だが佐天だけは笑うことができなかった。

「じゃあ今日の授業の内容を発表するわ。今日の授業のは運動であれば何をしても自由よ」

リボーンが授業の内容を発表する。授業の内容を聞いてクラス全員はポカーンとしていた。

「野球でもサッカーでもマラソンでも、何なら筋トレでもいいわ。みんながやりたいと思ったことを自由にやりなさい。それじゃあ解散よ」

そう言うのとクラスの全員は困惑しながらも解散していきリボーンに言われた通り自由に運動を始めていく。そんな中、佐天だけはリボーンの元へ移動する。

「自由にするって思いきったことしたねリボーン君」

「強制的に決めるよりも自分のやりたいことをやらせたいことがやった方が楽しめると思ってたな」

「ちやんと考えてるんだね」

「当たり前だろ。俺を誰だと思つてやがる」

「超一流の家庭教師かてきよーにして世界最強の殺し屋ヒットマンでしょ」

「わかつてんじゃねえか」

佐天の言葉を聞いてリボーンは口元を緩ませていた。するとリボーンは懐からメモ帳とペンを取り出して何かを書き始めた。

「それにやらせてえことをやらせた方が潜在能力がわかるからな。潜在能力がわかればどの部署に配置させるべきかどうかが見えてくるしな」

「結局、ボンゴレに勧誘することしか考えてないじゃん!!」

せつかくいい話だったのに急に台無しになってしまった為に佐天はツツコミをいれる。

「んじゃ。お前は修行な」

「え!? 今!?!」

「当たり前だろ。今日は放課後、修行できねえんだ。やるなら今しかねえだろ。とつととこいつをつけれ」

「Xグローブ!?!」

リボーンは佐天に310と書かれた手袋を渡した。今から修行をするだけでも驚きなのに、まさか超死ぬ気モードにならないといけないと知つてさらに佐天は驚いてしまう。

「学園都市こっなら人前で超死ぬ気モードになつても問題ねえからな」

そう言うとりボーンは佐天専用の特殊弾である恋慕弾を取り出して愛銃に装填した。

「とつとと準備しろ佐天」

「ま、待つて! それは流石に不味いつて! こんな所で特殊弾なんて撃つたらみんなが驚いちゃうよ!」

「大丈夫だろ。その内あいつらにも死ぬ気弾を撃つ予定だからな。それに今、撃つとけば特殊弾が安全な物だということをみんなに理解してもらえるだろ」

「全然、安全じゃないよ!! というか下手したら死んじやうんだよ!!」
死ぬ気弾で潜在能力を引き出すには後悔することが必要不可欠。

後悔していなければ死んでしまうというリスクがある。仮に潜在能力が引き出せたとしてもあられもない姿になってしまう。そのことを知っている佐天は死ぬ気弾を他者に撃つことに対して大反対である。

その時だった

「な、何?！」

学校中に警報が鳴り響く。突如、警報が鳴り響いたことよって生徒たちは行動を中断。そして動揺し始めていた。

「どうやら学校に不審者が侵入したようだな」

「侵入って……まさかりリボン君のことがバレたんじゃ……」

「そんな失敗を俺がすると思ってるのか?」

「それ犯罪者みたいな発言だよ……いやもう犯罪者なんだけどさ……」

リボーンの台詞が犯罪者みたいだと思った佐天であったが、よくよく考えればリボーンは殺し屋ヒットマンである。故に犯罪者である事実が変わらなかつたということを出す。

「はあ……はあ……」

するとグラウンドに黒いフードを被った凶体のデカイ男が息を荒立たせながら走って来る。だが男は不気味な笑みを浮かべていた。

「佐天。戦闘準備だ」

「うん!」

リボーンという言葉聞いて、佐天は咄嗟に手袋を装着する。佐天が手袋を装着した瞬間、男の速度が急に加速し一瞬にして佐天の目の前に移動。そして佐天は男の加速した蹴りによって蹴り飛ばされ校舎の壁に激突し、崩壊した瓦礫の中に埋もれる。

「佐天さん!!」

「ルイコ!!」

瓦礫の中に埋もれた佐天を見て、初春とアケミは涙目になりながら叫んだ。

「ハハハ……ハハハハ!! 殺した!! 殺してやったぞ!!」

男は瓦礫に埋もれた佐天を見て高笑いを上げる。高笑いを上げる

男を見て生徒たちは表情を真つ青にさせながら恐怖していた。

「さあ次は誰だ？」

男は後ろを振り向いて次の標的ターゲットを誰にしようかと決め始める。

「舐めんなよ。あいつを誰だと思ってるやがる」

いつの間にかいつもの黒いスーツに着替えたリボーンが口元を緩ませながらそう言った。リボーンの右手には銃が握られており、銃口から煙が上がっていた。

その時だった。

ドゴオオオン!!

「何だ!？」

佐天を覆っていた瓦礫が吹き飛んでいく。男は慌てて後ろを振り向いた。男の視線の先には視線を下に向けながらも平然と立っている佐天の姿があった。

「佐天さん……」

五体無傷の佐天の姿を見て初春は安堵し笑顔がこぼれる。

「佐天。あいつの実力は大能力者レベル4つてところだ。油断できねえ相手だぞ」

「わかってるわ」

すると佐天の手袋がXイクスグローブに変貌する。そしてグローブと額に炎が灯った。

「死ぬ気でこいつを片付けるわ」

柵川中学にやって来た不審者と対峙する佐天。

「片付ける？ 俺の攻撃を避けられなかった奴がよく言えたものだな」

「さっきまでの私と同じに見える？」

^{ハイパー}超 死ぬ気モードになった佐天を見ても男は動揺することはなかった。同じく佐天も男に対して

微塵も動揺していなかった。

「あれがルイコ有能力……!？」

「でもあれって……!？」

「夢に出て来たあの人とそっくり……」

^{ハイパー}超 死ぬ気モードになった佐天を初めて見たアケミ、むー、マコは驚いていた。一番、驚いていたのは佐天が能力に目覚めたことよりも、夢に出て来たツナと佐天の能力が似ているというところであった。

「あの人ツナお兄ちゃんと同じ力だ！ 凄いね衿衣ちゃん！」

「本当にそっくりなの……」

☒理と春上もツナと同じ力を持っている佐天の存在に驚きを隠せないでいた。

「まあいい。簡単に殺すのも面白くない。俺との実力差に絶望させてやるぜ」

男が一步踏み出した途端、一気に加速し佐天の間合いへと一瞬にして移動する。

「絶望するのはお前の方ね」

「ゴハッ!？」

だがその場から一步も動くことなく佐天は男の顔面に拳を叩き込んだ。拳を叩き込まれた男はもの凄い勢いで空中で吹き飛ばされる。

「くっ!」

(止まった?)

佐天の拳によって勢いよく吹き飛ばされた男であったが空中で急に動きが止まる。佐天は男が空中で急に止まったことに違和感を覚える。

すると空中で止まっていた男は一気に加速し地上へ落下していく。そして地面に着地する寸前に再び動きが止まりゆっくりと着地する。

「クソが!!」

男は近くにあった石を佐天に向かっておもいつき蹴り飛ばした。普通に蹴って飛ばした石の速度とは違い、石は弾丸並みの速さで佐天に向かっていく。弾丸並みの速さで飛んで来る石を佐天はその場から一歩も動くことなく首を傾けて避ける。

(後ろ!)

背後から殺気を感じ、佐天は咄嗟に後方を振り向くと同時に男に向かって右手の拳を繰り出す。男も同じく佐天に向かって右手の拳を繰り出した。

「っ!」

だが男の動きが急激に加速する。佐天は咄嗟に左手の掌で男の拳を防いだ。佐天は再び右手の拳を叩き込もうとしたが、叩き込む前に男はもの凄い勢いで飛び引いたのだった。

「成る程。そういう能力ね」

佐天は今までの一連の行動から、男の能力の詳細が何なのかを理解した。

「自分自身と触れた物の速度を変えることができる。それがお前の能力」

(この女……この短期間で俺の能力を……)

自分の能力を短期間で見破られたことに男は動揺を隠せないでいた。佐天は修行にて多くの人との戦いを経験した。それによって見切る力が格段に上がっていた。

「速度操縦。正確に言えば運動エネルギーの速度を調整できる能力だが細かいことはいい。正直、この学校にお前みたいな能力者がいる

とは思ってなかったぜ。嬉しい誤算だ」

「嬉しい誤算？」

「全ては超能力者になる為さ」

「話が見えてこないわね」

「俺は学園都市では大能力者⁴と格付けされている。だが実際、俺の力は超能力者⁵になれるだけの實力を持つてる。だが学園都市は俺を超能力者⁵と認めようとしない。だから学園都市に俺の實力を知らしめる為に色んな奴と戦った。だが学園都市は俺を超能力者⁵と認められるどころか少年院にぶちこまれた。捕まっている間、俺は思ったんだよ。ただ倒すだけでは駄目だったんだと。ちゃんと殺さなかったから認められなかったんだと」

そう言う男の表情はおぞましいものであった。自分の言っていることがおかしいとは微塵も思っていない様子だった。

「そして俺は今日、少年院を脱獄した。超能力者⁵になる為にな。喜べ。お前たちは俺が超能力者⁵になる為の生け贄になるんだ。光栄に……ガハッ!？」

男はおぞましい笑みを浮かべながら語る。佐天は炎を逆噴射させて一気に間合いに移動して男の顔面に拳を喰らわせて吹き飛ばした。「ごめんなさい。あまりにも隙だらけだったから攻撃させてもらったわ。でもおかしいわね。超能力者⁵になるような男がこの程度の攻撃を避けられないなんて」

「調子に乗るんじゃないぞクソ女!!」^{アマ}

男は青筋を浮かべながら真正面から突っ込んでいく。能力によって男のスピードは何倍にも引き上がる。

「ガッ!？」

「調子に乗ってるのはあなたの方ね」

だが佐天は冷静に炎の壁を目の前に展開する。男は炎の壁に自らぶつかってしまう形になってしまう。死ぬ気の炎は炎自体が破壊力を持った超圧縮エネルギー。そこにぶつかることは鉄筋コンクリートにおもいつきりぶつかることに等しい。

「自信過剰とはまさしくこのことね。お前程度の實力で超能力者⁵にな

れるなら誰だつて苦労してないわよ」

美琴と対峙したことのある佐天は知っていた。学園都市に7人しかいない超能力者の力を。

「終わりね」

佐天は姿勢を低くし右足を風払う。男は佐天の右足が直撃する前に能力を使って加速し、一気に上空へ移動した。

(脳天をかち割ってやる!!)

男は能力で落ちるスピードを加速させた蹴りで佐天の息の根を止めようと画策する。

が、

「なっ!?!」

男が狙いを定める為に下を見た。だがそこには自分と同じ速度で空中を移動している佐天がいたのだから。

「と、飛んでる……!?!」

「凄い……」

「この1カ月でどこまで強くなつてんのよ……!?!」

能力に目覚めただけでなく飛んで戦えるようにまでなっていることにむー、マコ、アケミは衝撃を隠せないでいた。

「私が飛べないって言った覚えはないわよ」

(この女!! 俺を空中に移動させる為に!!)

男はまんまと佐天に嵌められたことを理解する。敢えて足元を狙うことで自分を空中へ誘導させた。しかも男は佐天が飛べるとは微塵も思っていない。故に完全に油断したのである。

すると佐天は右手で男の足を掴んだ。そして男をハンマー投げをするようにグルグルと回し始める。

「があああああ!!」

男は苦しみの声を上げる。佐天は右手の炎の熱で男の右足を焼いていた。グルグルと回して脳を揺らし、炎の熱で苦しませることで能力を発動させないようにしているのである。

そして佐天は地面に向かって男を投げ飛ばした。

「死炎速」

佐天は両手を後ろに構えると炎を細く絞った状態で逆噴射させる。
「グボオ!？」

地面に落下している男の腹部に超加速した佐天の蹴りが決まる。男はそのまま地面に叩きつけられた。叩きつけられた余波によって大量の砂塵が舞う。少しすると砂塵が消える。そこには小さなクレーターができており、完全に白目を向いて気絶している男がいた。「これに懲りたら反省することね」

白目を向いて気絶する男に佐天はそう呟くのだった。

その後、警備員^{アンチスキル}によって男は捕えられた。そして大能力者^{レベル4}を倒した
ことよって柵川中学に佐天の名が知られることとなったのだった。

侵入した不審者の男を撃破した佐天。男は逮捕されたが不審者が入ったことで授業は中断。柵川中学の生徒は全員、下校することになった。

ジャッジメント
風紀委員177支部

「ええ!? 不審者を佐天が倒した!?」

ツナは初春から今日、柵川中学にて起きた出来事を話した。佐天は事件の終了後、警備員アンチスキルに連れて行かれて事情聴取を受けている。故に寮には戻っていない。なのでツナは佐天からの事件のことを聞いていない。故に初耳なのである。

「どうやら少年院から脱獄して来たみたいで。しかも相手は大能力者レベル4の能力者なんです」

「大能力者……!?」

不審者の能力者が自分と同じレベルの能力者だったという事実を知って黒子は驚きを隠せないでいた。

「佐天は!? 佐天は大丈夫なの!? 怪我とかしてない!?」

「大丈夫ですよ。佐天さんは不審者を圧倒。他の誰にも被害を及ぼすことなく事件を収めました」

「ど、どれだけ強くなっていますの……!?」

佐天のあまりの成長ぶりに黒子は驚きを隠せないでいた。STU DYの起こしたテロ。革命未明サイレントパーティーにおいて佐天が活躍したということは黒子も耳にしている。しかしそこまでの成長を遂げているとは露程にも思っていないかった。

「これで白井さんも佐天さんを護る立場から佐天さんに護られる立場

になつちやいましたね」

「な、何を言っていますの初春！ 私に勝とうなどそう簡単な話ではありませんわよ！」

初春の言葉を聞いて黒子は動揺しながら答えた。しかし佐天はツナと同じくリボーンの修行を受けている。故に本当に自分を超えている可能性が十二分にあるということがわかっていた。だが事実認めたくない自分がいる為、初春の言っていることを素直に認めることができないのである。

「あ。パトロールの時間だから俺、行って来るね」

パトロールの為に街へと出たツナ。

「まさか佐天がそこまで強くなってるなんてなー」

初春の話を思い出すツナ。ツナも黒子と同じく佐天が美琴と戦ったことを知っている。しかしその時ツナはミサとデートしていた為、一部始終を見てはおらず佐天が負けたという結果しか知らないのがある。

「あ。常盤台の生徒だ」

少し歩いているとツナの前方に常盤台中学の制服を身に纏い、後頭部の髪を結んで紅葉の形のようにしている黒髪の生徒の後ろ姿を視界に捕える。

「あ」

すると女性のスカートのポケットからハンカチが落ちる。そのことに気づいたツナは咄嗟に落ちたハンカチを拾い、女性の元へ向かう。

「あ、あの！ すいません！」

「何でしょうか？」

「これ。落としましたよ」

「あら。私としたことが」

女性はスカートのポケットの中を探る。そしてハンカチがないということを確認した。

「これはこれは。ご丁寧にありがとうございます」

「い、いえ！ 当然のことをしたただけですから！」

女性は笑顔でお礼を言った。ツナは女性の笑顔を見て顔を赤くしてしまっていた。女性はお礼を言うとその場から去り、ツナもパトロールに戻る。

「なんか緊張しちゃうんだよね……」

相手は中学生^{年下}であるのにも関わらずつい敬語になってしまったことを思い出す。常盤台中学の生徒は大人っぽく見えてしまう為、どうしても敬語になってしまうのである。そのせいか最初は美琴と黒子、そして湾内と泡浮にも敬語になってしまっていた。

何事もなくパトロールを続けるツナ。

「あ」

「あら。先程はどうも」

すると先程の女性がツナの前の方から現れる。女性は軽く会釈をするそのまま歩みを止めることなくそのまますれ違う。

「えっ？」

「あら。また会いましたね」

また先程の女性と出会うツナ。こんな短期間で再び会ったことにツナは違和感を覚えていたが、女性は何も違和感を覚えていなかった。

「え……？」

「またまた会うなんて。こんな偶然があるのですね」

またまた女性と出会うツナ。こんな短期間に3回も会った為、流石にどうなっているのかとツナは思ってしまった。だが女性は何の違和感もなく通り過ぎ行った。

そしてそこからツナは何度も何度も女性と出会う。

(あ、あれ……？ 道、合ってるよな……？)

何度も何度も女性と出会っていく中でツナは自分がパトロールのコースを間違えてしまったのではないかと錯覚してしまっていた。

「あ、あの……」

「え!？」

すると今度は後ろの方から声がする。ツナが後ろを振り返ると顔を赤くし、とても申し訳なさそうな顔をしていた女性がいた。ツナはいつも前方から現れていた女性が後方から現れたことに驚いてしまっていた。

「ど、どうかしましたか?」

「い、今……お時間の方ははございますでしょうか……?」

「大丈夫ですけど……どうかされたんですか……?」

女性が道に迷っているので教えて欲しいと言おうとしていることは容易に想像することはできたツナであったが、敢えてそこに触れないようにした。

「た、大変恐縮なのですが……実は道を教えてもらいたくて……」

「いいですけど……どこに行きたいんですか?」

「ま、学舎の園です……」

「え……?」

女性の行きたい場所が学舎の園だということを知ってツナは聞き間違いではないのかと思ってしまう、つい驚きの声を上げてしまった。

「えつと……常盤台中学の人ですよね……?」

「そ、それは……!!」

「わ、わかります! 常盤台中学の場所ならわかります!」

ツナが聞き返した瞬間、女性が恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてみました。それを見たツナは気を遣って知っているということをし

伝えた。

「とりあえず案内します！ えつと……」

「雅王院が おういんつかぎ司と申します……」

「沢田綱吉です。それじゃ俺について来て下さい」

「お、お手数をおかけします……」

標的（ターゲット） 240 変わり者

パトロール最中、学舎の園に帰れず迷子になっている常盤台中学の生徒。雅王院司を学舎の園まで案内することになってしまったツナ。「申し訳ございません……お時間を奪うようなことになってしまつて……」

「気にしないで下さい。丁度、パトロール中だったので」

「パトロール？ もしかして風紀委員ジャッジメントの方のですか？」

「正確に言うとは協力者なんです」

そう言うとなツナはポケットに入っているスマホを取り出す。そしてスマホの中に入っている風紀委員ジャッジメントの協力者であるということの証明したカードを取り出して見せる。

「成る程。それで腕章をしていないのですね」

司は興味津々な様子でカードを見ると同時にツナが腕章をしていない理由を納得する。

（にしても司って今まで見て来た常盤台の生徒の中でも一番、お嬢様らしいよな）

ツナは興味津々な様子でカードを見ている司を見てそんなことを思っていた。

「どうかされましたか？」

「あ……いや……俺より年下なのに俺より大人っぽいよなって思つて……」

「これはこれは。お褒め頂き至極光栄です。ですが年上なのでしたら敬語でなく普通に話して頂いて構いませんよ。私からすれば沢田さんは人生の先輩なのですから」

（発言がすでに俺より大人なだけ……）

司の言葉を聞いて余計に普通に話しくらくなってしまったツナであつたが、それでもなんとか普通に話すことを決意した。

「え、えつと……そもそも司は何で迷つていたの……？」

「実は学舎の園の外に用がございまして。いつはお付きのメイドがいるのでサポートしてもらつているのですが今日は有給を取つており

まして。しかも私としたことが携帯を寮に置き忘れてしまったものでGPSも使うことができません」

「それで……」

「それにしても情けがありません。派閥の長たる私がこんな体たらくでは派閥員に示しがつきませんね」

「派閥？」

「常盤台には特定の目的や意思の元に集まった人々が形成する集団、組織があるのです。それが派閥なのです」

「へー。そんなのがあるんだ。じゃあ司って凄いなだね」

「大したことはありません。私などまだまだ未熟者です」

ツナに褒められてもなお司は慢心することなく自分を戒めるかのような発言をした。

「派閥か……じゃあ美琴も入ってるのかな？」

「おや？ 御坂様のことをご存知で？」

「うん。友達だから」

「そうでしたか。ですが御坂様は派閥に入られてはいませんよ。常盤台の生徒は派閥に入っている方の割合は多いのですが派閥に入る入らないは個人の自由です。まあ私個人としては御坂様は派閥に入らない方がいいと思います」

「え？ 何で？」

「派閥に属すれば組織的なバックアップを受け入れられ、特に派閥の創設者ともなれば並みではない名声を得ることができのです。そして最大派閥を1年以上かつ卒業まで得られた方は永代姫君マズエステイと呼ばれる将来的に出世コースが約束されるのです」

「そ、そんなに!？」

ただ集まってワイワイ楽しくやるサークルぐらいの感情だと思っていたツナであったが、まさか派閥がそこまで凄いものだとは微塵も思っていなかった為、驚きの声を上げた。

「ちなみに現在の常盤台の最大派閥は超能力者レベル5の1人である食蜂操折が率いる食蜂派閥なのですよ」

「え!?! 操折が!？」

「もしかして食蜂さんともご友人で？」

「どうだろう。ちよつと話したことがある程度だから微妙なところかな？」

「そうでしたか」

「それで何で美琴に派閥に入らない方がいいの？」

「先程、申し上げた通り最大派閥になれば出世コースが約束されます。ですがそれ故に対立もございまして。過去には負傷者が出る程の事態になったこともあるんです」

「そこまで……」

負傷者が出る程の事態があつたと知ってツナはとても悲しい気持ちになつてしまっていた。

「もし御坂様……超能力者が派閥に入れば他の派閥が黙っている訳がありません。派閥のパワーバランスが崩れ争いが起こると思われま

す」

「でもおかしいよ……名声だとか出世だとか……そんなものの為に人を傷つけるなんて……」

「その通りです。いかなる理由があろうとも人を傷つけていい理由にはなりません。第一、名誉や名声の為に平気で人を傷つけられるような人間が出世したとして、そのような者が描く未来などたかが知れています」

どんな時でも利益よりも仲間のことを何よりも大事にするツナにとって、利益の為に人を傷つけたということに対して憤りを覚えていた。司もツナと同じ気持ちであつた。

「とはいえ全員が全員がそのような思考を持ち合わせている訳ではありません。派閥に属し切磋琢磨している者もいれば、青春の1ページを刻む者と理由は様々。その者たちを見るだけでとても尊い……」

「とうとうい……う？」

司は両手を組み合わせ祈りを捧げるようなポーズでそう言った。ツナは司の言っている意味がわからず疑問符を浮かべる。

「あまりの素晴らしき昇天してしまいそうになることです。私は常盤台中学の少女たちがひた向きに何かに打ち込む姿を見る度に昇天し

そうになるのです」

「そ、そうなんだ……」

「ああ……できることなら私自身が後者の天井になって少女たちの尊い姿を見守り続けたい。そう……私は常盤台になりたい……」

(常盤台になりたいってどういうこと!?)

礼儀正しくしつかり者のだと思っていた司が実は変人だということを知ってツナは驚きを隠せないでいた。

「しかし夏休みに学舎の園に侵入者が現れるという前代未聞の事件が発生。あろうことか多くの常盤台の生徒が拐われるという事態に。派閥員と遠征に出ていた私たちは難を逃れましたが遠征から帰ってから事件のことを聞いた時、私は怒りに燃えました。もしその場に居合わせたのであれば私が犯人を見つけてとつちめてやりましたのに！」

(よ、よかった……遠征に出ててくれて……)

学生誘拐事件の首謀者は自分たちの世界の人間が起こしたものであり、ヘルリングで強化されたエスカは美琴ですら相手にならなかった。もし司が常盤台に居ればエスカに確実に拐われていた。ツナは司が遠征に出ていてくれて本当に良かったと思っていた。

「しかし最近は何の問題がございまして」

「別の問題？」

「実は最近、常盤台に困ったちゃんが現れまして」

「困ったちゃん？」

「はい。黒いスーツに黒い帽子。胸に黄色いおしやぶりを携えた奇妙な赤ちゃんがなぜか常盤台に現れまして」

(絶対にリボーンだー！ー!!)

司の言う困ったちゃんの特徴を聞いて、ツナは困ったちゃんの本体がリボーンであるということを確信した。

(とかどうやって入ったんだよあいつ!!)

常盤台中学は学園都市の中でもトップクラスのセキュリティを誇っている。そんな常盤台に当たり前のようにリボーンが侵入していることにツナは驚きを隠せないでいた。

「学舎の園は尊い関係に満ちた花園。たとえ相手が赤ちゃんとはいえ乙女の楽園に侵入するなどと言語道断。何より生徒会副会長として見逃す訳にはいきません」

「え!? 生徒会副会長もやってるの!?!」

司が派閥の長だけでなく生徒会副会長もやっていることに知ってツナは驚きを声を上げた。

「私は何度も捕まえようと試みたのですが……どういふ訳か全く捕まえることが叶わず……」

(そりやそうだよな……)

リボーンが世界最強の殺し屋ヒットマンであることを知っているツナは司にリボーンを捕えることができない理由を理解すると同時に申し訳ない気持ちになってしまっていた。

「ですが他の方々はその赤ちゃんを可愛がっております。その姿が尊くて……捕まえないといけないのは頭ではわかっているのですが体が少女たちの尊い姿を求めてしまつて……」

(ダメだこの人……!!)

生徒会副会長としてリボーンを捕まえないといけない立場であるのにも関わらず、司は自身の欲望を優先してしまっていた。そんな司を見てツナは救いようがないということを確認してしまっていた。

「あ。見えて来ましたよ」

「ああ……帰つて来ましたわ……常盤台エデ中学に……」

「よ、よかつたね……」

山奥で何日も遭難しなんとか生還したかのような発言をする司を見てツナは若干、引きつつもそう言った。

「ここまででいいですよ。学舎の園はもう見えていますから」

数十メートルまで来ていた為、もう迷うことはないのです。司はツナにそう言った。

「本日は私の為にありがとうございました。このご恩は一生、忘れません」

「いや! ただ道案内しただけだから!」

ただ道を案内しただけであるのにも関わらず、司が大袈裟な発言を

した為、ツナは驚いてしまっていた。

「それではぐきげんよう」

司は両膝を少しだけ曲げ、左足を後ろに下げる。そして両手の人指し指と親指でスカートの裾を少しだけ持ち上げながらそう言う。司は学舎の園へと向かっていく。

が、

「ちよっ!?! 司!?! どこ行ってるの!?!」

真っ直ぐ行かなければならないのに、なぜか司は右側へ行ってしまうていた。

結局、この後ツナは司を学舎の園の入り口まで案内する羽目になったのだった。

標的（ターゲット） 241 上位

ツナが司を学舎の園に案内した次の日。9月3日。

「それじゃ後のことはよろしくお願いします」

「うん。わかった」

「任せとけ」

寮にて荷物を持った佐天を見送るツナとリボーン。今日から佐天は広域社会見学にてアメリカの都市へ行く為、1週間程いないのである。

「それじゃ行ってきまーす」

「いってらっしゃい」

「めいっばい楽しんでこいよ。」

ツナとリボーンがそう言うのと、佐天は扉を開けて出掛けて行った。

「そんじや俺たちは勉強だぞ」

「はいはい……」

リボーンがこう言ってくるのは折り込み済みだったのかツナは投げやりに返事をした。

「そういやお前。あれはどうなってんだ？」

「あれって何だよ?」

「ミサとの約束だ。遊びに行くって言っただろ」

「あつ! そうだった!」

ミサと遊びに行くことを約束してから時間が経過している。にも関わらずツナは連絡の1つも寄越していない。

「ミサと遊ぶなら今が絶好のチャンスだぞ」

「え? 何で?」

「今日から佐天たちは広域社会見学で学園都市にいねえからミサのことも知られることもねえ。それに今は学校の行く時間帯。ほとんどの奴らは学校にいる。常盤台の奴らに見られることもねえから安心して遊べるはずだぞ」

「そっか！」

リボーンの意見に納得したツナはさっそくミサに連絡する為に、スマホを取り出した。

第7学区の病院。カエル医者者の病院。

「先生。沢田綱吉と名乗る学生が先生にご用があるとのことですよ」
「代わろう」

カエル医者は看護師から電話を受け取ると、受話器を右耳に当てた。

『朝、早くからすいません。沢田です』

『どうしたんだい？ 僕に何か用かい？』

『ミサに俺の携帯に電話をかけて欲しいということを伝えてもらいたくて』

「それは別に構わないんだがね？ 何かあったのかい？」

『実は前にミサと一緒に遊びに行くこうって約束したんです。今日から美琴は広域社会見学でいないし今は常盤台の人は学校に行く時間だからいい機会だと思って』

「了解したんだね？ それじゃ君の電話番号を教えてくださいませんか？」

『はい』

再び場面は戻って佐天の寮。カエル医者に伝言を頼んでから5分後。ツナのスマホに電話がかかる。

「もしもし？ ミサ？」

『そうですよ。とミサカは答えます。それで何の用ですか？ とミサカは尋ねます』

「急で悪いんだけどさ。今から時間ある？」

『もしかして遊びに行く話ですか？ とミサカは予想してみます』

「うん。そうだよ」

『問題ありません。とミサカはワクワクしながら答えます』

「そっか。じゃあ今からそっちに行くから。病室で待ってて」

『了解です。とミサカは今か今かと待ちわびながら待っています』

待ち合わせの約束をし終えると、ツナは電話を切ってスマホをポケットに入れる。

「どうやら問題なさそうだな」

「うん」

ツナはカエル医者 of 病院へと赴く。待合室で軽くカエル医者と話した後、ツナはミサのいる病室へと向かって行く。病室の前に着くとツナは病室の扉を3回ノックする。

「どうぞ。とミサカは入室許可の返事をします」

ミサから入っただけという許可が出たのでツナは病室の扉を開けて、中へと入る。

「あつ……」

病室に入るとツナは絶句しその場で固まってしまっていた。そこにはいつもの常盤台の制服ではなく白いワンピースに白い帽子を被ったミサがいたのだから。

「どうかしましたか？ とミサカは様子のおかしいツナを見てそう思っています」

「いや……いつもと服装が違うから……その……戸惑ったっていうか……なんていうか……見とれてたっていうか……」

「それはミサカのことを意識してくれたということでしょうか？ とミサカは確認してみます」

「ま、まあ……」

「作戦成功です。とミサカはあの女性誌に書いてあることは本当だということを理解し、これからも定期購読することを心に決めます」

ミサの脳裏には学園都市に残った他のミサと一緒に女性誌を読んでいる光景が浮かんでいた。ミサたちはツナを射止める為にネットや女性誌を駆使して調べていたのである。

「それじゃそろそろ行くっか。どこか行きたい場所とかある？」

「最近、この近くにできた新しいケーキ屋に行ってみたいです。とミサカは自分の願望を述べてみます」

「おおっ！ それはすっごく美味しいそうってミサカはミサカは興味を示してみる！」

「え？」

突如、病室に知らない声が響き渡る。ツナは辺りを見回すがミサ以外の人物は見あたらなかった。

「ここにいるんだよってミサカはミサカは存在をアピールしてみたり！」

「え……!?!」

誰かが自分のズボンの裾を引っ張っていることに気づいたツナは下を見た。そこには茶髪の髪にアホ毛を生やした10歳前後の少女

がいた。

「な、何これー！ー!? どうなってるのー!?」

だがその容姿はまるで美琴をそのまま幼くしたような少女であった。ツナは目の前にいる少女の存在に衝撃を隠せないのであった。

「ま、まさか!? 10年バズーカの故障!?!」

過去に故障した10年バズーカにランボが被弾し、肉体は10年後の姿になったが、精神だけは5歳のままなったという事態があった。そして今回は美琴かミサが10年バズーカに被弾し肉体も精神も子供になり、そのまま戻れなくなってしまったのではないかとツナは思い慌てていた。

「ど、どうしよう!! 早くなんとかしないと!!」

「落ち着いて下さい。とミサカは慌てるツナにそう言います。目の前にいるミサカたちと同じ妹達シスターズです。とミサカは説明します」

「ええ!? この子が!?!」

標的（ターゲット） 242 お願い

ミサたちと似ているとはいえ見た目の違うこの少女がミサたちと同じ妹達であるということにツナは驚く。

「彼女の名は打ち止め。とミサカは紹介します。20001人目の妹達にして妹達の上位個体です。とミサカは説明します」

「え!? 妹達は20000人しかいないんじゃないの!?!」

「打ち止めは妹達が反乱や暴走した際に備えて造られた存在なので。とミサカは説明します」

「じゃあこの子が命令すれば妹達全員を止められるってこと……?」

「その通りです。とミサカはツナの言葉を肯定します」

「こんな子が……」

幼い見た目とは裏腹に凄い能力を持っていることにツナは驚きを隠せないでいた。

「今回は実験を頓挫させてくれてありがとうってミサカはミサカは代表してお礼を言ってみる」

「打ち止めはツナに向かって頭を下げて、お礼の言葉を言った。」

「あなたが異世界から来た人間だっこともミサカたちの半分があなたたちの世界にいるってことも知ってるってミサカはミサカはあなたのこと知っていることを披露みたり」

「えつと……ミサカネットワークでいいんだっけ?」

「そうだよってミサカはミサカは肯定してみる。あつ! あなたの正体は他言しないから安心してってミサカはミサカは約束してみる」

「うん。ありがとう」

「それでさつき新しくできた美味しいケーキ屋に行くって聞いたんだけどってミサカはミサカは確認を取ってみる」

「ああ。それは……」「何でもありません。とミサカはあなたが言っていることが間違いであるということを指摘します」え!?!」

「打ち止めの発言に対してツナは返事をしようとしたがミサがそれを遮る。急にミサが先程とは違うことを言った為、ツナは驚きの声を

上げる。

「それでは行きましょう。とミサカはツナの手を取ってそそくさと出掛けようとしています」

「いや!? ミサカ!? ちょっと!?!」

ミサはツナの右手を取って一刻も早く、病室から出ようとする。ツナはなぜミサが急いで出ようとするのかわからず困惑してしまう。

「ちよっと待った! ってミサカはミサカは制止してみろ!」

「え!?!」

今度は打ち止めがツナの左手を両手で握り、病室を出ようとする2人を止めた。

「2人だけで行くななんてズルいってミサカはミサカは駄々をこねてみる!」

「え……じゃあ一緒に行く?」

「え!? いいの!? ってミサカはミサカは喜んでみたり!」

「ダメですよ打ち止め。とミサカは忠告します。あなたが不用意に外出するのはダメだと止められています。とミサカはお医者様の言葉を伝えます」

目を輝かせている打ち止めラストオーダーにミサがそう言った。カエル医者が言った言葉は本当の話である。しかしミサがこんなことを言った理由はこのままではツナと2人きりでデートできなくなることを危惧していることである。

「だってだって! ずっと病院にいればかりでずっと退屈だしあの人には全然、構ってくれないんだもん! ってミサカはミサカは不満を漏らしてみろ!」

(あの人?)

打ち止めの言うあの人ラストオーダーが誰なのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

「この人と一緒ならあのお医者さんも外出を許してくれるってミサカはミサカは確信してみる! だから一緒にあのお医者さんの所に行行って欲しいってミサカはミサカはお願いしてみる」

「別にいいけど……」

「やったあ！ ってミサカはミサカは喜んでみたり！」

「最悪です……とミサカはツナの鈍感さに頭を抱えます……」

ツナの返答を聞いて打ち止めは喜び、ミサは右手の五指を額に当てながら嘆息する。

その後、カエル医者から打ち止めの外出許可が出た為、3人は外に出る。

「わーい！ ってミサカはミサカは久々の外に出れて大はしやぎしてみたり！」

「あんまりはしやぐと危ないよ」

おもいつきり走り回る打ち止めを見てツナは注意する。

「どうしてこうなったのでしょうか……とミサカは嘆息してみます」

「え？ 何か言ったミサ？」

「何でもありません。とミサカは返答します」

2人きりでのデートのはずが打ち止めの子守りみたいになってしまった。一見するといつもと変わらないように見えるが、内心では凄くがっかりしている。

(それにしても……)

時は少しだけ遡り、ツナがカエル医者に打ち止めの外出する許可を

貰った時のこと。

「まあ君と一緒にいるにであれば文句はないんだね？」

絶対能力進化計画を頓挫したツナと一緒に行くということでもカエル医者への許可はすんなりと貰えた。

「ただ君はもう少し女心というものを理解できるようになった方がいいと思うんだね？」

「？」

そして再び場面は戻る。

(あれってどういう意味だったんだろう?)

カエル医者という言葉の思い出し考えるツナであったがどういう意味なのかわからずにいた。

「そうだった！ とミサカはミサカは忘れてたことを思い出してみる！」

「どうかしたの？」

「名前をつけて欲しいってミサカはミサカを懇願してみる！」

「名前？」

「ミサカは他のミサカとはちよつと違うから別の名前が欲しいってミサカはミサカは名前が欲しい理由を説明してみたり！」

「確かに……」

打ち止めは同じ妹達ではあるものの見た目は違う。打ち止めの言

い分に納得したのかツナは名前を考え始める。

「ミカってどうかかな?」

ツナは打ち止めラストオーダーの名前を提案する。ミサカのミとカの部分を取ったのである。

「ミカ……いいね! ってミサカはミサカは新しい名前をつけられて有頂天になってみたり!」

新しい名前をつけられてミカは両手を上へ上げその場で回転しながら大喜びしていた。

「それじゃあこれからはミカって呼ぶね」

「じゃあミサカはあなたのことをツナって呼んでいいってミサカはミサカは許可は尋ねてみる!」

「うん。いいよ……いでっ!」

お互いの呼び方に関して話しているとツナの右足に痛みが走る。ツナが右足を見るとそこには左足で自分の右足を踏みつけているミサがいた。

「ごめんなさい蚊がいたもので。とミサカは伝えます」

「痛い! 痛い! 痛い! グリグリしないで!」

「蚊はしぶといのでこれぐらいしなないとけませんとミサカは蚊に対しての対処法を説明します」

「ちよっ!?! 何で怒ってるの!?!」

「怒っていません。とミサカはさらにグリグリしてみます」

「いだだだだだ!! やっぱり怒っているよね!?!」

「怒っていません。とミサカは再度、告げてみます」

この短期間でミカに名前つけられツナと呼ぶようになるまでの仲になった為、ミサは嫉妬している。そんなことをツナがわかるであろうはずもなかったのだった。

標的（ターゲツト） 243 誤解

ミサとミカと出かけることとなったツナ。

「あ！ アイスクリームを売ってる店を発見！ とミサカはミサカは指を指してみる！」

「あ。本当だ」

ミカはアイスクリームを売っているキッチンカーを発見し目を輝かせる。ミカの言葉を聞いてツナはキッチンカーの存在に気づく。

「せっかくだし食べていけない？」

「食べたい食べたい！ ってミサカはミサカは即答してみたり！」

「ミサカもいいですよ。とミサカは了承します」

ツナが提案するとミカとミサはツナの意見に同意。3人はキッチンカーへと向かって行く。

「すみません。アイスクリーム3つ欲しいんですけど」

「あいよー」

ツナがそう言うのと定員の男はツナたちに背を向けながら返答した。そして男はツナたちの方を向いた。

「お？ あんたはこの前のお嬢ちゃんじゃねえか」

「あなたは……とミサカは思い出します」

「え？ 知り合い？」

「前にお姉様とミサカにアイスクリームを無料^{タダ}で提供してくれた方です。とミサカはこの方のことを説明します」

「え!? 無料^{タダ}で!？」

「無料^{タダ}っていつでも売れ残った物をあげただけだな。それに姉妹喧嘩してたしな」

（それって……）

男の言葉を聞いてツナは理解する。おそらく美琴がミサの存在を知ったばかりでミサのことが受け入れられなかったのだと。

「にしても学校をサボって彼氏と一緒にデートなんてな。やるじゃねえか嬢ちゃん」

「い、いや俺は彼氏じゃ……」ツナはミサカの最高の彼氏ですよ。とミ

サカは自慢してみます」ミサ!？」

ミサはツナの言葉を遮りツナが彼氏だということをアピールする。勝手に彼氏認定されたツナはなぜミサがそんな嘘をつくのかわからず驚きの声を上げる。

「世間話もいいけど早くアイスを食べたいってミサカはミサカは急かしてみる」

「あ。ごめん。抱えるからちよつと待って」

「何だ他にもいたのか」

ミカの背丈ではキツチンカーの上に置いてあるメニュー表を見ることができない。ツナはミカの脇腹を掴んでミカをメニュー表のある位置まで抱える。キツチンカーの下からツナでもミサでもない声がした為、男は先程のミサの発言が嘘だということを理解する。

「どう? 見える?」

「見えるよってミサカはミサカは現状を報告してみる」

「なっ……!？」

ツナが抱えたことによつて男は初めてミカが存在を視界に捕える。だがミカの姿を見た途端、男は空いた口が塞がらない状態であった。

「一度は違うと思つたが……まさかこんな予想外の展開になつてるやがるとは……今時の若い者はあなどれねえな……」

「え?」

「まさか……まさかその年で子供ができてるとはな……」

「はい!？」

男はミカをツナとミサの間にできた子供だと勘違いしてしまつていた。ツナは男の壮大な勘違いに驚きの声を上げる。

「違いますからね!! 俺とミサはそういう関係じゃないですからね!？」

「隠さなくていいぜ兄ちゃん。あの子との間に子供はできた方がいいがそのせいで2人共、学校に行けなくなつちまつたんだろ。だから兄ちゃんが色んなバイトを掛け持ちして2人を養つてるんだろ。そんな中で2人の為になけなしの休みとバイト代を使つて出掛けたんだろ。泣かせる話じゃねえか」

(なんか勝手に話ができあがってるんだけど!?)

男は右腕を両面に当てながら涙を拭っていた。ツナは勝手に男が話を作ったことに驚いてしまっていた。

「安心しな兄ちゃん。俺は学生結婚には理解がある方だ。だから俺はあんたたち家族を応援するぜ」

「だから違いますって!」

親指を立てグッドサインを送りながら男にツナはツツコミを入れる。

「ミサとミカも何か言つてよ!」

「ツナはとても優しく頼りがいのある夫です。とミサカは夫の自慢します」

「ミサカもこんないいお父さんを持って幸せだよってミサカはミサカは自慢してみる」

「ちよつと!?! 2人共、何言ってるの!?!」

誤解を解こうとミサとミカに頼ったツナであったが、2人は悪ふざけしてしまう。そのせいで誤解を解くどころか余計に事態がこんがらがってしまった為、ツナは驚きの声を上げてしまう。

「よーし! あんたらの微笑ましい家族愛に免じて無料^{タダ}で好きなアイスをサービスしてやるぜ!」

「ええ!?!」

「流石だねってミサカはミサカは太っ腹な店主を称賛してみる!」
「やってやったぜ。とミサカはガッツポーズしてみます」

男の発言を聞いてツナは驚きの声を上げる。ミカとミサは無料^{タダ}でアイスを食べられると知って嬉しそうな様子であった。

「い、いや……流石に無料^{タダ}で貰う訳には……」

「気にすんな兄ちゃん。もう代金は貰ったからよ。家族愛という名の代金をな」

(な、なんか急に格好いいを言い始めたんだけどこの人……)

格好いいことを言つてやったぜと言わんばかりのドヤ顔で男はそう言った。急に男がかっこつけたことにツナはどう反応しているかわからず困惑してしまっていた。結局、ツナたちは無料^{タダ}で貰うこと

になってしまった。

アイスを貰った3人は近くにあつた椅子を見つけてそこでアイスを食べる。

「このチョコアイス美味しいってミサカはミサカは絶対してみる！」
両足をバタバタとさせながらミカはチョコアイスの味を堪能していた。

「ツナのオレンジ味のアイスも美味しそうってミサカはミサカは気になつてみたり！」

「1口食べる？」

「食べたい！ ってミサカはミサカは即答してたり！」

「はい」

「頂きまーすってミサカはミサカは食らいついてみたり！」

ツナはプラスチック製のスプーンでアイスを掬うとミカの前に差し出した。ミカは口を大きく開けてツナのスプーンを啜えた。

「こつちのオレンジ味も美味しいってミサカはミサカは絶賛してみる！」

「……」

ツナから貰ったアイスの味を堪能するミカ。その一方でミサは無表情のままツナの方をジーツと見ていた。

「な、何……？ ミサ……？」

「ミサカにも食べさせて下さい。とミサカは願望を口にします」

「え!? 何で!？」

「いいから早く食べさせて下さい。とミサカはツナは急かします」

「い、いや……………!?!」

幼いミカなら平気であったがツナであったが、年頃の少女であるミサ相手にそんなことできる訳もなく顔を赤らめてしまっていた。

「も、もうスプーン使ってるしさ! さ、流石に衛生的に問題があるよ!」

ツナは衛生的観点からミサの願望を遠回しに断る。ツナのスプーンはミカを食べさせる為に使っている為、嘘ではない。

「このへタレが。とミサカは遠回しに逃げたツナの意気地の無さに呆れてしまいます」

「そこまで言わなくてもよくない!?!」

標的（ターゲツト） 244 宣言と調査

アイスを食べ終えてミサの行きたいケーキ屋に向かうツナたち。
だが

「わーい！ ってミサカはミサカははしゃいでみる！」

「危ないよミカ！」

公園にて勢いをつけたブランコを立ち漕ぎするミカ。そんなミカを止めようとツナは慌ててブランコに向かつて行く。

「えい！ ってミサカはミサカおもいつきってみたり！」

するとミカは立ち漕ぎで勢いをつけたブランコからおもいつきり飛び降りた。

「着地成功ってミサカはミサカは自画自賛してみたり！」

「ちよつと何やってるのミカ！」

「次はジャングルジムに登りたいってミサカはミサカは次の目的地に向かつてみる！」

ミカは怪我をすることなく見事に着地する。ツナはミカを注意するがミカはツナの言葉を無視してそのままジャングルジムを登って行く。

「この街はミサカのものだってミサカはミサカは独裁者のごとく宣言してみたり！」

「だから！ 危ないってミカ！」

ジャングルジムが一番上で仁王立ちして宣言する。それを見たツナはジャングルジムに登ってミカを救出しようとする。しかしツナがジャングルジムを登っている間にミカはジャングルジムを降りる。

「次は鬼ごっこだよってミサカはミサカは次の遊びを発表してみる！」

「ええ!？」

今度は勝手にミカが鬼ごっこが始めてしまった為、ツナは驚きを隠せないでいた。

「ツナを困らせてはいけませんよ打ち止め。^{ラストオーダー}とミサカは忠告します」

「もしかして負けるのが怖いの？ ってミサカはミサカは煽ってみたり」

心配するツナの言葉を無視して自由奔放にはしゃぐミカにミサがそう言う。しかしミカは反省するどころかニヤニヤしながらミサを煽る。

「上等です。とミサカはこの生意気な少女を黙らせる為に鬼となることを決意します」

「え!? ちょっとミサ!？」

「安心して下さいツナ。とミサカは伝えます。ツナの手など借りずともミサカがすぐに捕まえてみせます。とミサカは勝利を宣言します」
「その生意気な口をへし折ってやるぜってミサカはミサカは宣言し返してみる！」

互いに勝利宣言をした後にミカとミサは一斉に走り出し鬼ごっこが始まってしまふ。

(ケーキ屋に行く話はどうなったの!?)

ジャングルジムの上から鬼ごっこをする2人を見ると同時に心の中でツツコミをいれるツナ。しかしここでケーキ屋の話をしたところで今の2人は聞き入れてくれないだろうと思い、黙って見守ることにした。

鬼ごっこが開始してから30分。暑さに加えて互いに本気を出し過ぎてしまった為に体力が尽きてしまい勝負は引き分けドローとなった。

「生き返るー！ ってミサカはミサカはサイダーの味を堪能してみたり！」

「このオレンジジュースは疲れたミサカの体を癒してくれますね。とミサカは感想を述べてみます」

2人が遊び疲れた為、公園のベンチでジュースを飲むこととなつ

た。

「ふああって……ミサカはミサカは大きくあくびをしてみたり……」
遊び疲れた影響かミカは大きくあくびをした後、眠そうな顔をす
る。

「おやすみなさいって……ミサカはミサカは……横になってみたり
……」

眠気に耐えることができなかつたのかミカの体は右隣に座ってい
たツナの方へと倒れていく。そしてミカの頭はツナの膝の上に乗
り、スウスウと寝息を立てながら熟睡してしまった。

「寝ちやつたか」

ツナ自分の膝にて熟睡しているミカを見て微笑むと右手でミカの
頭を撫でる。ドタバタしてた先程までと違って平和な光景。

に思えたが

「そこをどいて下さいツナ。とミサカは促します」

「な、何やってるのミサ……？」

いつの間にかミサが左手を右肩に当てながら右腕をグルグルと回
しながらそう言った。なぜミサがこんなことをしているのか微塵も
わからなかつたが、ツナは嫌な予感しかしなかつた。

「ミサカは今からこの小娘にアイアンクローをかまします。とミサカ
は宣言します」

「何で!」

ミカが自分の想い人^{ツナ}である膝枕をされた上に頭を撫でられた。こ
れを見たミサが黙っていられる訳もなかつた。だがミサがそんなこ
とを考えているなどツナにわかるもはずもなかつた。

(ようやく掴んだわ。あの男が現れる日時と場所を。学校をサボつてまで調べた甲斐があつたわねえ)

スマホの地図アプリにつけた星マークを見ながら操折が街を歩いていた。

(ただあの男を相手にするのなら石橋力を叩きまくっても足りないのよねえ……)

操折は真剣な眼差しであり、何かを考えている様子であった。

「ん？」

長考していた操折。そんな時、とある光景が操折の目に映る。

(御坂さん?)

ミカにアイアンクロウをしようと思腕をグルグル回しながらツナに近づこうとしているミサたちが操折の視界が写っていた。

(いや……御坂さんは今日から広域社会見学はず……ということはあれは妹達……)

なぜか操折はミサが美琴のクローン。妹達であるということを知っていた。操折はツナたちの近くに生えていた木を隠れ蓑にして様子を伺う。

「どういう訳か知らないけど落ち着いてミサ！」

「ミサカは冷静ですよ。ミサカは殺意を露にしなからそう言います」

「全然、落ち着いてないじゃん!! とにかくダメだつてば！」

「それではミサカネットワークで情報を共有して他のミサカと協力し、この小娘にアイアンクロウを喰らわせます。とミサカは次のプランを提示します」

「さつきよりもさらに悪くなつてんじゃない!! とうか何でそんなにミカが恨んでるの!?!」

(っ!?)

ミサの次のプランを聞いてツツコミを入れるツナ。操折は今の会話を聞いて驚きの表情を浮かべていた。

(まさか……妹達シスターズのことを知っているの……?)

ミサカネットワークという単語は一般人には知られていない単語。ミサカネットワークの存在を知る者は絶対能力進化計画を知る

者のみ。そのことから操折はツナがミサがクローンだということを知っているのではないかと推測する。

(今さらだけど妙なのよねえ……御坂さんを圧倒するだけの力を持っているながら全然、有名力じゃない……彼の炎の特徴を考えても奇妙力満載なのよねえ……)

学園都市の第3位である美琴よりも強く、調和という特徴を持つ炎は学園都市において利益をもたらさず。にも関わらずツナの名前は学園都市において知られていない。

(それにあの学生誘拐事件……)

8月に起きた学生誘拐事件。学園都市を混乱を陥れ、誰も突き止めることのできなかつた犯人の元にツナも辿り着いていた。

(どうやら彼について調査をする必要性がありそうねえ……)

操折はツナを調査することを決めると、ツナたちにバレないようにその場から去って行った。

(場合によっては彼を……)

標的（ターゲット） 245 ミサとミカ

ミカが起きない為、ツナはミカをおんぶしてケーキ屋へと向かって行く。

「えっと次はこっちでいいの？ ってミサ？」

ツナはケーキ屋の道へ尋ねようと後ろにいる振り向いた。だがミサはツナの数メートル後方にある店の前にいた。ミサはショーウィンドウに置いてある商品をジーツと見ていた。ツナはミサの元へ向かう。

「どうしたのミサ？」

「とても綺麗だったのでつい見惚れてしまいました。とミサカはこの商品の感想を述べます」

「これって……」

ツナはミサが見ていた商品を見る。ショーウィンドウの中にあつたのは綺麗な宝石がついた指輪であつた。

（で、でも……）

ミサが興味を持っていたのでミサの為に買ってあげようと思つたツナであつたが、ショーウィンドウに置いてある指輪はどれも十万円から数百万もするものでツナが到底、手が出せる代物ではなかつた。

「ごめんねミサ。買ってあげたいのは山々なんだけど……」

「わかっています。とミサカはツナの心情を察します。先を急ぎましょう。とミサカは本来の目的を思い出します」

ジュエリーショップを後にしたツナたち。歩くこと15分。ミサの来たかったケーキ屋へと辿り着いた。

「う、うくん……?」

「あ。起きた」

タイミングがいいのかケーキ屋に辿りつくと同時に眠っていたミカが目を覚ました。

「何でミサカはツナにおぶられているの? ってミサカはミサカは状況がわからず困惑してみる」

「じゃあここはどこ? ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

「さっきの鬼ごっこでミカは遊び疲れて寝ちゃったんだよ。何度も起こしたんだけどミカが全然起きないからおぶって来たんだ」

「ケーキ屋!? ってミサカはミサカは魅惑の単語を聞いて興奮してる!」

ツナから自分が寝た後のことをミカに伝える。ケーキ屋に着いたことを知ったミカの眠気は完全に覚める。ツナはミカを下ろす。

「どれも美味しそうってミサカはミサカは悩んでみる!」

ミカはケーキが並べられているショーウィンドウに両手を当て、どれにしようか悩んでいた。

「なんていうか……同じ妹達でもミサとミカは全然、違うんだね」
シスターズ

「打ち止めは妹達の司令塔ですよ。とミサカは打ち止めの詳細を再び説明します」
ラストオーダー

「そういう意味じゃなくてさ。ミサはすごくクールな感じだけど、ミカは感情豊かなんだなって思ったんだ」

「ミサカは大人ですからあのようにみつともなくはしゃぐような真似はしません。とミサカは大人宣言してみます」

(いや……さつきおもしろきはしゃいでたよね……)

自分が大人だと言うミサ。しかし先程、ミカの挑発に簡単に乗って鬼ごっこをしていた。その光景を見ていたツナはミサが本当に大人なのか疑ってしまっていた。

「まだミサやミカが笑える世界を完全に作れた訳じゃないけど、それでもミカが笑ってる姿を見てると安心するよ」

「ツナは笑顔が素敵な女性が好きなのですか？ とミサカは尋ねます」

「そりゃ……まあ……」

「……」

ツナが笑顔が素敵な女性が好きだということを知ってミサは何かを考えていた。

ケーキを買い終えて、目的を達成したツナたちは第7学区にあるカエル医者の病院へと戻る。

「今日はありがとうってミサカはミサカはお礼を言ってみる！」

「また出かけたくなったらあのお医者さんに言っただけ。俺の電話番号を教えるから俺に連絡できるよ」

「わかったってミサカはミサカは理解してみる！」

「……」

病院の入り口前にて楽しく会話をするツナとミカ。その一方でミサは黙ったままであった。

「どうしたのミサ？ どこか具合が悪いの？」

「ちよつと考え事をしていただけです。とミサカは体調不良ではないということ伝えます」

「そっか。じゃあ俺はそろそろ帰るから。また遊ぼうね」

ミサが体調不良ではないとわかると、ツナは病院を後にしていく。

「ふう」

佐天の寮がある方角に向かって歩き始めるツナ。一緒に遊ぶという目的を果たせて安堵していた。

「ん？ あれって……」

カエル医者者の病院。ミサが生活している病室。

「笑顔……」

ミサは病室にある鏡で笑顔の練習をしていた。しかし笑顔を作ってみようと思ってもミカのように笑うことができなかった。

「簡単そうなことなのにミサカには難し過ぎます。とミサカは挫折しそうです」

笑顔を作りたくともいつもと変わらない表情を浮かべている自分を見てミサは落ち込んでしまっていた。

すると病室にノックする音が聞こえる。

「ミサ。いる？」

「ツナですか？ とミサカは声から扉越しにいる人物を推測します」

「うん。ちよつとミサに渡したい物があるんだけど入ってもいい？」

「いいですよ。とミサカは入室を許可します」

ミサの許可が出るとツナ病室の扉を開けて、中へと入る。

「ごめんね。さつき別れたばかりなのに」

「それで渡したい物とは一体、何でしょうか？ とミサカは尋ねます」

「うん。これなんだ」

「これは……!? とミサカはツナの持っている物を見て衝撃を隠せな

いでいます」

ツナはズボンのポケットからある物を取り出した。ミサはツナの
見せた物を見て驚いていた。それは先程、自分が興味を持っていた指
輪だったのだから。

「まさかあの指輪を買ったのですか……!?! とミサカはツナの行動に
驚きを隠せないでいます」

「ううん。実は帰る途中で路上販売でさっきの指輪と似たようなのを
売ってるのを見つけたんだ。だから値段は大したことはないんだ」

「そうでしたか。とミサカは納得します」

「あの指輪に比べたら大したことはないけどいいかな?」

「勿論です。とミサカはツナの好意を受け取ります」

ミサはツナから指輪を受け取る。そして指輪を右手の人差し指に
装着する。

「どうかな?」

「とてもいいです。とミサカは感想を述べてみます」

「よかった……」

安価な代物であったがミサが気に入ってくれた為、ツナは安堵す
る。

「これはプロポーズと受け取っていいのですね。とミサカは解釈しま
す」

「何でそうなるの!?!」

「プロポーズ際には男性が女性に指輪を渡すのが通例だと聞いたので
すが。とミサカは雑誌で読んだ知識を披露してみます」

「そう言う意味で渡したんじゃないから!!」

「冗談です。とミサカはツナからかってみます」

「え!?!」

慌てるツナを見て面白かったのかミサは自然と笑みをこぼしてい
た。ツナは笑顔のミサを見て顔を赤らめてしまっていた。

「どうしたのですか? とミサカは尋ねます」

「い、いや……ミサが笑ったところ初めて見たかドキってしちゃつ
たっていうか……!?!」

「え……!?」

今、自分が笑顔になっていたということを知ってミサは驚きを隠せないでいた。

(笑顔になれるだけでこんなにもツナがミサカのことを意識してくれるなんて。とミサカは笑顔の効果が絶大だということを理解します)

何だかんだあったが最後にツナを意識させることができ嬉しくなったミサだった。

標的（ターゲツト） 246 お世話

午前中にミサとミカと遊んだ後、佐天の寮に戻ったツナは再び佐天の寮を出て、ジャッジメント風紀委員の仕事へと向かった。

「はあ。終わったー」

そして風紀委員の仕事を終えて背伸びをしながら佐天の寮へと戻るツナ。

「ただいまー」

「お帰りツナ兄ちゃん」

「お帰りなさいなのツナさん」

「絆理!? 衿衣!?!」

ツナが寮の扉を開くと他の寮にてルームシェアしているはずの絆理と衿衣がなぜか寮にいた。ツナはなぜ2人がここにいるのかわからず驚きの声を上げる。

「な、何で2人がここに!?!」

「俺が呼んだぞ」

「はあ!?! お前が!?!」

リボンがこの2人を呼んだということを知ってツナは驚きの声を上げる。

「今日から広域社会見学で佐天がいねえからな。だからその間、泊まり込みで飯を作りに来てもらうことにしたんだぞ。お前、まともな料理作れねえしな」

「そりやそうだけど……」

「だからお前と知り合いだっていうこいつらを呼んだんだぞ」

「というか何でこの2人と俺が知り合いだっていうことを知ってるんだよ」

「柵川中学にも俺のアジトがあるんだぞ。それぐらいの情報ぐらい知ってるぞ」

「お前また改造したのか!!」

「前に言っただろうが。俺のアジトは学園都市の至る所に張り巡らせてあるってな」

「お前なあ……」

「いいじゃねえか。俺のアジトのお陰でまともな飯にありつけるんだ。感謝しやがれ」

「はいはい……わかりましたよ」

これ以上、何を言っただころで無駄だということを感じたツナは投げやりに返事をした。

「ごめんね。リボーンが勝手に」

「ううん。そんなことないよ。ツナお兄ちゃんは私たちを助けてくれたんだから、これぐらいどうってことないよ。ね？ 衿衣ちゃん？」

「はい。ツナさんがいなかったら絆理ちゃんと再会できなかったかもしれない。だからお礼をさせて下さいなの」

絆理と春上に謝罪の言葉を述べるツナ。しかし2人は全然、気にしている様子はなかった。

「じゃあさっそく始めようか絆理ちゃん」

「うん」

そう言うと2人はあらかじめ買っておいた食材を入れている袋を持って台所へと向かって行く。

「あ！ 佐天には連絡しておかないと」

「大丈夫だぞ。佐天には俺からちゃんと2人が来るっていうことは伝えておいたから連絡する必要はねえぞ」

「ならいつか」

リボーンが勝手に2人を呼んだのでちゃんと佐天に事情を話しておいた方がいいと思っただツナであったが、リボーンが連絡したというのを知って連絡するのを止めた。しかしこの時、ツナは気づいていなかった。これがリボーンの策略だということに。

そもそもなぜこの2人がここにいるのか。それを語るには時を少しだけ遡らなければならぬ。

9月3日。放課後の柵川中学の教室。

「ねえ衿衣ちゃん。今日の晩御飯どうする？」

「……」

「衿衣ちゃん！」

「はっ！ 絆理ちゃん!? な、何?！」

春上に声をかけるも反応がなかった為、絆理は大きな声で春上に話しかける。絆理の声で春上は我に返った。

「衿衣ちゃんってばツナさんのこと考えてたんでしょ」

「そ、そんなこと……」

「わかるよー。佐天さんって人がツナさんを好きだって知ってから衿衣ちゃん上の空なんだもん」

「そ、それは……」

絆理に自分の心の内を見透かされて春上は反論できずシユンとしてしまう。

「別に佐天さんがツナお兄ちゃんと付き合って訳じゃないんだし落ち込む必要なんてないよ」

「で、でも……佐天さんすごく可愛いし……」

「衿衣ちゃんだってすごく可愛いよ。それにやる前から諦めてちゃ前になんて進めないよ」

「良いこと言うじゃねえか」

「?」

突如、知らない第三者が2人の会話に割って入って来る。2人は声の主を探す為周囲をキョロキョロと見渡すが声の主は見当たらない。

かった。

「こつちだぞ」

「あつ……」

「あー！ 君は前に佐天さんと一緒にいた子だ！」

「ちやおつす」

下から声が出たので春上と絆理は下を向いた。そこには先程、噂していたリボーンがいた為、2人は驚いていた。

「絆理と衿衣でよかったか？ お前らはツナの知り合いつてことではないんだよな？」

「うん。君もそうなんだよね？」

「俺は佐天の家庭教師かてきよであると同時にツナの家庭教師かてきよでもあるからな」

リボーンと絆理は互いにツナのことを知っているということを確認する。

「話を元に戻すぞ。絆理の言う通り、やる前から諦めてたんじや佐天をツナに奪われて終わりだぞ。それに佐天は片想いだ。全くチャン스가ねえ訳じゃねえ。ツナと付き合えるかどうかはお前次第だぞ」

「でも私……引つ込み思案で特に何の取り柄もないし……」

「だからこそだぞ」

「え？」

「その引つ込み思案な性格が最大の武器になる。男っていうのはか弱い女程、護ってあげたくなくなるもんだ。それでいてツナはどこにいてもいるような普通の女がタイプだ。お前のような女がな」

「そ、そうなの？」

ツナのタイプが自分のような人だということを知って春上は少しだけ表情かおを明るくさせる。

「ところで聞くんだが。お前、料理はできるか？」

「できるけど……それがどうしたなの？」

「ここだけの話なんだが実はツナは佐天の寮にて居候してんだ」

「ええ!?!」

リボーンからさらつと衝撃の事実を知らされて春上と絆理は驚き

の声を上げる。

「銀行強盗に襲われそうになったところをツナが助けてな。その縁でツナは佐天と一緒に住むようになったんだ。だがその佐天が広域社会見学で1週間いねえ。そしてツナはまともな料理がねえ。ここまて言えばわかるな?」

「そっか! その間に衿衣ちゃんが佐天さんの寮に行つて料理を作つてあげればツナお兄ちゃんと衿衣ちゃんだけの2人っきりの空間ができる上に訳だね!」

「ば、絆理ちゃん!!」

リボーンの考えていることを理解した絆理。絆理の言葉を聞いて春上は顔を明るくして慌てる。

「という訳だ。しばらく絆理の寮に世話になるがいいか?」

「勿論だよ! じゃあ衿衣ちゃん頑張つてね!」

「ま、待つて!! 私はまだ行くなんて一言も!!」

などというやり取りがあり、佐天の寮にこの2人がやって来たのである。絆理が来たのは春上がツナと2人きりという状況が耐えられない為、どうしても来て欲しいと言ったからである。

そしてついに晩御飯が完成する。晩御飯のメニューはシチューと

サラダだった。

「美味しい！」

「本当ですかなの？」

自分の作ったシチューが想い人に絶賛されて春上はとても嬉しそうな様子だった。絆理はサラダを作る担当であった為、シチューは完全に絆理が作ったのである。

「このシチューは衿衣ちゃんが1から作ったんだよ」

「え？ そうなの？」

「うん。それはそれは愛情を込めてね。ね？ 衿衣ちゃん？」

「絆理ちゃん!!」

春上の方を見ながらニヤニヤしながら絆理はそう言った。春上は顔を真っ赤にしながら慌ててしまっていた。

だがこの時、春上たちは知らなかった。至福の時間が長く続かないことを。

標的（ターゲツト） 247 佐天、帰省

春上たちが佐天の寮にやって来てから3日後。 9月6日。

「ただいまー」

「お帰りなさいツナさん」

「お帰りツナお兄ちゃん」

いちものように風紀委員ジャツツメンの仕事を終えて寮へと帰るツナ。ツナが帰ると春上と☒理がツナを迎える。

「お風呂にしますかなの？ それとも御飯にしますかなの？」

「じゃあ先にお風呂かな？」

「わかりましたなの」

春上がそう言うのとツナは風呂場へと向かって行く。春上たちはできた料理を用意する為に台所へと向かって行った。

「さっきの会話。なんか夫婦みたいだったね衿衣ちゃん」

「ち、違うよ!! そんなじゃないよ!!」

「せっかくだし今からお風呂に行つてツナお兄ちゃんの背中を流して来たら？ 衿衣ちゃん？」

「し、しないよ!!」

ニヤニヤしながらそう言う☒理。☒理の言葉を聞いて春上は顔を真っ赤にしながら動揺してしまっていた。

「でも衿衣ちゃんそろそろ行動を起こさないと佐天さんが帰つて来ちゃうよ。そうならこんな風にツナさんと一緒にいられる時間はほとんどなくなっちゃうんだよ」

「それはそうだけど……」

☒理の意見は紛れもない正論である為、衿衣は反論することできずシユンとしてしまう。

結局、どう行動を起こせばいいのか思いつかなかった。そしてツナ

が風呂から上がってしまった為、晩御飯を食べることとなった。晩御飯を食べた後、☒理と衿衣は風呂に入っていた。

『それでは次のニュースです』

「本日、アメリカにある学芸都市の施設が謎の勢力によって襲撃を受けたとの情報が入りました』

「ええ!？」

「……」

夕方のニュースにて佐天が行っているはずの学芸都市が襲われたということを知りツナは驚きの声を上げた。黙っていたリボンも自分の生徒がいる場所が襲われたと知って無視できない様子だった。『学芸都市に人たちは救助艇にて脱出し死傷者はいない模様です。しかし学芸都市を襲撃した者たちの詳細なわかっておらずアメリカ政府は調査を続ける様子です』

「よかった……」

誰も死傷者がいないということは佐天も無事だということの意味する。それがわかってツナは安堵して脱力する。

『なお今回の襲撃が起こる前に学園都市の女子生徒を監禁しようとしたとして学芸都市の係員であるオリーブⅡホリデイ氏が逮捕されました。女子生徒には手錠をつけられた跡がありました。女子生徒に怪我はなかったどころか女子生徒はオリーブ氏を取り押さえたのです。現場には壊された手錠が落ちており女子生徒が手錠をなんらかの方法で手錠を壊した後にオリーブ氏と交戦したと思われまます』

「凄い生徒がいるんだね」

「まさかと思うがこれ佐天のことじゃねえのか？」

「え!？」

「考えてみる。手錠をかけられた状態で死ぬ気モードになりや手錠も壊せるだろ。前にお前もやっただろ」

「そういうえば……」

未来でスパナに捕らえられた際にツナは超ハイパー死ぬ気モードになって手錠を破壊したことを思い出す。

「美琴ら手錠にかけられようが相手を制圧できるだろうし、黒子なら

手錠を破壊せずともレポートで脱出できるだろうしな。そう考えれば消去法で佐天しかいねえだろ」

「で、でも……佐天って特殊弾を使わないと死ぬ気モードになれないんじゃない……」

「佐天は要領がいいからな。無理じゃねえと思うぞ」

「た、確かに……」

佐天と一緒に修行したツナは佐天の要領の良さを知っている。なのでツナはリボーンの言っていることが本当なのではないかと思いは始める。

「ただいまー」

「お。噂をすればだな」

寮の玄関の扉が開く音がし、佐天の声が聞こえてきた。リボーンは玄関のある方向へと顔を向ける。

「なんか監禁されそうになったららしいな佐天」

「帰って来て第一声がそれかよー！」

もの凄く大変だったことを軽いノリで言うリボーンにツナはツツコミをいれる。

「な、何で知ってるの!？」

「さつき学芸都市のニュースをやってたからな。名前は出てなかったがニュースの内容からお前んじゃないって思ってたな」

「ハハハ……流石、リボーン君だね……」

「じゃ、じゃあ本当なの……？ 監禁されたって……」

「は、はい……まあ死ぬ気モードになって手錠を壊して

犯人を倒したんですけど……」

「大丈夫佐天!? 怪我とかしてない!？」

「は、はい……」

「よかった……」

ニュースで無事であるということを知っていたツナであったが、それでも心配だった。佐天の口から直接、大丈夫だということを知ってツナは再び安堵する。

(ダメだな私……)

ツナを護るといふ目標を掲げた佐天。だがツナを心配させるようではまだまだ未熟だといふことを実感する。

「それにしても特殊弾を使わずに超^{ハイパー}死ぬ気モードになれるようになるとはな。また1歩成長したな佐天」

「うん……」

リボーンは佐天が成長したことを褒めたが佐天は浮かぬ表情を浮かべていた。

「何かあったのか？」

「うん……まあね……」

「そうか」

リボーンは佐天の表情から何かあったことを悟るとそれ以上、何も聞くことはしなかった。ツナも同じく佐天に何かあったかを聞くことはなかった。佐天に何かあったのを察したことによってツナたちは喋り辛い雰囲気になってしまう。

が、

「あー。さっぱりしたー」

「気持ちよかったなの」

「ええ!？」

タイミングが良いのか悪いのかクラスメイトである理と春上が現れてしまったのだった。

急に現れた☒理と春上の存在に驚きを隠せない佐天。

「どどど、どういうこと!? 何でこの2人がここにいるの!？」

「何でって。リボーンから聞いているでしょ。佐天がいない間に☒理たちが俺たちの世話をしてもらうって」

「聞いてませんよ! そんなこと!」

「ええ!？」

自分が広域社会見学にて留守にしている間にそんなことになってるは露にも思っていなかった為、佐天に驚き以外の感情などあるはずもなかった。ツナもどういふことかわからず困惑してしまっていた。

（ま、まさか……）

ここで佐天は気づいた。こんな真似をするのは自分の家庭教師であるリボーンしかないということ。

「リボーン君? これはどういうことか説明してくれるかな?」

（あ……なんとなくわかってきちゃった……）

犯人がわかった佐天は真意を問い詰める為にリボーンの方を向いた。佐天の発言を聞いて☒理はなぜリボーンが衿衣を佐天の寮に招いたのかということを理解した。

（ね、寝てる……!?!）

リボーンに真意を問い詰めようとした佐天。しかし佐天の視界に映ったのは両腕を組み、あぐらをかいた状態で鼻ちようちんを作りながら寝息を立てているリボーンの姿であった。

（な、殴りたい……!?!）

額に青筋を浮かべながら、右手の拳をおもいつきり握り締める佐天。初めてリボーンに対して殺意が芽生えた瞬間であった。

「はあ……」

だがここで怒ったところで何の意味も成さないと判断した佐天は

ため息をついて、怒ることを諦めた。

「あ、あのー……」

「あーいいいよいいよ。気にしないで。どうせリボン君に言われてやって来たってところでしょ？」

「そうなのですけど……」

「だったらいいよ。それよりも私のいない間にツナさんたちのお世話をしてくれてありがとう」

（うわあ……すっごくかっこいいなの……）

満面の笑みでそう答える佐天。勝手に寮に入って来たのにも怒るどころ優しく接してくれる佐天に春上は感動してしまっていた。

（こんな人がライバルなるなんて……勝てる気がしないなの……）

（あちゃー……これは不味いなー……）

感動した反面、佐天に勝てる気がしなくて卑屈になってしまっていた。春上の反応を見て☒理は春上が何を思っているのか察したのか額に右手に当てて、頭を悩ませてしまっていた。

（どうしよう……このままじゃ衿衣ちゃん……）

本来であれば佐天はこんなにも早く帰って来るはずもなく、佐天が帰って来る前に自分たちは撤収する予定だった。しかし佐天と面と向き合って話してしまったことで余計に春上の自信が喪失する羽目になってしまいどうしようかと☒理は悩んでしまう。

「さーとと。それじゃ何か食べようかなー」

「え？ 御飯は食べてないの？」

「はい。帰ってからゆっくり食べようと思ったので」

「だったら☒理と衿衣の作った御飯が余ってるからそれを食べたなら？」

「え？ そうなんですか？」

「うん。いいよね2人とも？」

「勿論、大丈夫だよ」

「それじゃさっそく準備しますなの」

そう言うと☒理と衿衣は冷蔵庫へと向かい、冷蔵庫の中から先程の晩御飯の残りが入ったタッパーを取り出して電子レンジで温める。

晩御飯の準備できるまでツナと佐天は雑談を交わしていた。

「今さらですけどツナさんってこの2人と知り合いなんですか？」

「衿衣は夏休みに出会ったけど、☒理は木山さんの生徒なんだよ」

「ええ!？」

☒理が昏睡状態で眠っていた生徒だったということを知って佐天は驚きの声を上げた。

電子レンジで全ての料理を温め終わると料理を皿に乗せて運ぶ。

「いったただきまーす！」

学芸都市を脱出してから何も食べていなかったので佐天は次々と料理を口に入れていく。

「うーん！ 美味しい！」

☒理と衿衣の料理が余程、美味しかったのか佐天は頬に手を当てながら幸せそうな表情かおを浮かべていた。

「2人とも料理上手なんだね」

「私はそれ程でも。上手いのは衿衣ちゃんの方だよ」

「ええ!?! 私は大したことないよ！」

「謙遜しないでいいよ。ね？ ツナお兄ちゃん？」

「そうだよ。衿衣の料理は美味しいよ。それに前に衿衣が作ってくれたお菓子。すっごく美味しかったよ」

「あ、ありがとうございますなの……!!」

(んん……?)

ツナに褒められてまんざらでもない様子の春上。そんな春上を見て佐天は違和感を覚える。

「それにこの3日間、積極的に家事をやってくれたし。色々と気配りもできるし。衿衣はいいお嫁さんになるんじゃないかな」

「お、お嫁……!?!」

「……」

(あ……これかなりヤバイやつ……)

ツナの発言を聞いて顔を真っ赤する衿衣。一方で佐天は箸をゆつくり置く。そして顔を俯けた。そんな佐天を見て☒理は顔を真っ青にする。

「ツナーさん？」

「ひい!!」

ゆつくりとツナの名前を呼びながら顔を向ける佐天。佐天は笑顔だったが瞳には光はなく、ツナに向けて殺気が放たれていた。ツナはそんな佐天を見て悲鳴を上げる。

「これから1週間。御飯は抜きでいいですよね？」

「ええ!? 何で!？」

「い・い・で・す・よ・ね・?」

「は、はい……」

(さ、佐天さん……超怖い……)

あまりの恐怖で佐天の言葉に逆らえず萎縮してしまうツナ。殺気も向けられていない☒理も恐怖していた。

「じゃ、じゃあ!! その間、ウチに食べに来て下さいなの!!」

「え……?」

「なっ!？」

(おおっ!? ここでまさかの衿衣ちゃんの反撃に!?)

ここで春上が勇気に振り絞ってそう言った。春上の言葉にツナはキョトンとし、佐天は驚きを上げ、☒理は春上の言動に感動していた。

「流石に1週間は厳しいなの!! だからウチに来れば大丈夫なの!!」

「え……えつと……」

「い、いや!! 春上さん!! 今のは冗談で!!」

春上の言葉に困惑するツナ。一方で佐天は慌てて弁明する。

「嫌ですかの?」

「え……いや……」

(ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ)

目を潤ませながら訴える春上。春上の言葉を聞いてツナは心が動かされそうになる。佐天はもの凄く焦ってしまっていた。

「ダ、ダメえええええ!!」

「ちよっ!? 佐天!？」

「あああ……!!」

すると佐天はツナの隣に移動し、ツナの腕に抱き付く。佐天に抱き

付かれてツナは顔を真っ赤にする。その光景を見て春上は顔を赤くし口をパクパクしながら動揺していた。

「ず、ずるいな!!」

「ええ!!」

「衿衣ちゃん!」

今度は春上がツナの腕に抱き付く。まさかの春上の行動にツナと

☒理は顔を赤くしながら動揺していた。

「絶対に離さないな!!」

「わ、私だって!!」

「ちよっ!! 2人とも!!」

お互いにヒートアップし過ぎてしまい自分のやっていることに気づいていない。ツナは女の子2人に急接近されて顔を真っ赤にしてしまっていた。

(これが……修羅場ってやつなのかな……?)

この光景を見てそう思った☒理であった。

この後、クールダウンした2人は自分のしたことがどれ程のものだったということに気づき、恥ずかしさのあまりのたうち回ったのだという。

標的（ターゲット） 249 女王襲来

修羅場が発生してから3日後。 9月9日。

「ふわあ……」

ツナはおもいっきりあくびをしながらパトロールをしていた。少し歩くと赤信号に引掛かったのでツナは青になるのを待つこととなった。

「フフツ。ここで待ってればあなたに会える。あの子たちの言う通りねえ」

「え?」

突如、ツナの背後からから女性の声した。ツナは声の主のいる方へと振り返る。

「はあい☆ 常盤台が誇る超絶美少女。食蜂操折ちゃんだゾ☆」

「操折!」

ツナが振り返った先にいたのはニコニコしながら右手を振っている操折だった。

「驚かせちゃってごめんなさい。別にあなたにドッキリを仕掛けるつもりはなかったのよ。ただあなたに話があるのよねえ。風紀委員ジャックメンの協力者さん?」

「え!? 何でそのことを!」

操折には風紀委員ジャックメンの協力者だということジャックメンを明かしたことはない。にも関わらずそのことを知っていることをツナは驚きを隠せないでいた。

「そりや色々と調べさせてもらったわよ。あなたの身分、パトロールのコース。とにかくあなたのことについて徹底的に。私の悩み力を聞いてもらう為にねえ」

「何でそこまで……?」

「この話はあなたにだから話せることなのよ」

「どういうこと?」

「ここじゃ他の人に聞かれる可能性があるから話せないわねえ。着いて来てもらっていいかしらあ?」

「いや……俺、パトロール中なんだけど……」

「困ってる人を助けるのは風紀委員ジャッジメントの役目。何か間違ってるかしらあ?」

「……」

操折の言っていることは何も間違っていないのでツナは反論することができずツナは操折に着いていくことを決める。

「そういえばこの前はありがとう。ユニを預かってくれてくれた上に砥信を自由にする為に色々としてくれて」

「気にしないでいいわよお。あなたには借りがあったから借りを返しただけだし。それにまた気が向いたらいつでも遊びに来てくれて構わないってユニちゃんに伝えてもらえるかしらあ?」

ツナは未明革命サイレントパーティーの際に操折が色々世話になったのでお礼を言った。当の本人は何も気にしておらず、それどころかユニのことが気に言った様子であった。

「そういえばどうやって俺のパトロールコースを調べたの?」

「私には優秀な人材がいるのよねえ。だから色々調べられたわあ」

「もしかして派閥っていうやつ?」

「その通りよお。よく知ってるわねえ」

「前に司って人に教えてもらったんだ。操折は常盤台中学の中で最大派閥のトップだって」

「司って……もしかして雅王院司のことかしらあ?」

「うん。そうだけど。やっぱり同じ学校だから知ってるんだね」

「まあ常盤台の副会長だしねえ。けど話したことはないわあ。ただ変わり者だっことは噂で聞いたことがあるわねえ」

(まあそれは否定できない……)

『私は常盤台中学の少女たちがひた向きに何かに打ち込む姿を見る度に昇天しそうになるのです』

『ああ……できることなら私自身が後者の天井になって少女たちの尊い姿を見守り続けたい。そう……私は常盤台になりたい……』

ツナは操折の発言を思い出す。司が言っていたあまりにもぶつとんだ発言を。

「それにしても常盤台^{ウチの学校}中学の副会長と知り合いなんて驚きねえ」

「ま、前に道を教えて欲しいって言われて案内したんだ！」

「何で焦ってるのかしらあ……？」

司が常盤台中学に帰れず徘徊したことを話してしまえば司の名誉に関わる為、詳細を省いて話した。しかしツナの口調は慌ててしまっていた。操折はなぜツナが焦っているのかわからず操折は不信に思ってしまった。

歩くこと20分。ついに目的地にたどり着く。

「ハハハよお」

「ハハハ?」

着いた場所は超がつく程のビルの高層マンションであった。ツナはビルを見上げながら驚きの声を上げた。

(あ、でも……)

反射的に驚いてしまったツナであったが、冷静に考えればマフィア城や継承式をする為に貸し切った城に比較すればそこまでではないと感じてしまった。

2人はマンションの中へと入って行く。

(あれ?)

ビルの中へと入ったツナであったが違和感を感じる。それはマンションの中に自分たち以外の人がいないということに。

「このビルは私が買い取った場所だから基本的には私が招待した人しか来ることはないのよ」

「買い取った!?!」

ツナが考えていることを理解したのか操折はツナの疑問について答える。いくら操折がお嬢様学校の生徒とはいえ、中学生がそこまで

できるだけの権力と財力を持っていることにツナは驚きを隠せないでいた。

「最上階に話す為の部屋を用意してるわ。ついて来て」

2人はエレベーターに乗って最上階を目指す。エレベーターが最上階に辿り着くとツナは操折の案内されるまま話し合いをする為の部屋へと向かって行く。

「ここよ」

そう言うのと操折は扉の近くに備えつけられている指紋認証の機械に右手の5本指を当てる。するとカチツという音が鳴ると操折はドアノブに手をかけて扉を開ける。

「ぎ。入って」

「う、うん……」

操折が先に入るように促してきた為、ツナは困惑しながらも部屋の中へと入る。

部屋の中は普通の高級マンション以上の仕様となっていた。

「そのソファにでも座ってて。ちょっと長くなると思うから」

「うん」

操折に言われてツナは一番最初に目についたソファに座る。そして操折はツナから見て右斜め上の位置に置いてあるソファへ座った。「私の我が儘力に付き合ってもらってごめんなさい。さつきも言ったけどこの話はあなたにしかできない話なの。だからわざわざ人気力のないこの場所まで来てもらったの」

「一体、何なの？ 俺にしか話せない話って？」

真剣な眼差しで話す操折を見て今からする話がとても重要だということをツナは理解する。そして話の詳細について尋ねた。

「そうねえ。その話をする前に確認しておかないといけないわねえ。絶対能力進化計画を頓挫させた無能力者さん？」

「っ!？」

標的（ターゲット） 250 操折の計画

操折の口から絶対能力進化計画のことについて告げられて衝撃を隠せないツナ。

「その反応。私の推測通りのようねえ」

「な、何言ってるの……!? 何のことかわからないんだけど……!?」

ツナの反応から自分の予想が当たったということを操折は確信する。ツナは知らないとしらを切るが操折が絶対能力進化計画のことを知っていることに驚きを隠せていなかった。

「そう来るのは折り込み済みだわあ。でも調べはついてるのよねえ」

「調べて……そもそも俺は無能力者じゃないよ……操折だって知ってるでしょ?」

「そうねえ。でも明らかに不自然なのよねえ」

「どういうこと?」

「あなたのことを書庫のデータを調べさせてもらったんだけど、どういう訳かあなたは無能力者という扱いになってる。御坂さんに余裕で勝てるだけの戦闘力を有し、調和という学園都市にとっては利益になる炎を持っている。にも関わらず無能力者っていうのは不自然力、極まらないのよねえ」

「それは……」

「何であなたが無能力者扱いされているのかはこの際、どうでもいいのよねえ。それよりも私はふと思ったのよねえ。もし絶対能力進化計画を潰したのが無能力者っていう噂が表向きに無能力者に扱いにされている人物の仕業だったらってね」

「……」

操折の言葉を聞いてツナは何も言えずただただ黙ってしまっていた。

「一方通行の能力はあらゆる向きを操ることができるとも調和の特徴を持つあなたの炎なら一方通行の能力を封殺できる。といってもこれまでの話はおくまで私の勝手な推測。これだけじゃ決め手力に欠ける。でも私は偶然、見ちゃったのよねえ。昨日、あなたが妹達と一緒にいるのをね」

「っ!？」

「悪いけどあなたたちの会話を聞かせてもらったわあ。詳しいことはわからなかったけど会話の中にミサカネットワークという言葉が出てきた。この単語を知る者はあの計画のことを知る者だけ。でもあなたはそれに対して何の疑問を持つどころかミサカネットワークが何なのか知っているような口ぶりだった。この会話を聞いて私はあなたのことに対して色々調べようと思ったのよね」

「……」

「ここまで言われて反論がないってことは私の言っていることが間違っていないと思ってもいいのかしらあ？」

「その通りだよ……操折の言っていることは間違っていないよ……」

どう足掻いても隠し通せないと踏んだツナは操折の言葉を肯定した。

「それよりもどうして操折がああ計画を知っているの？」

「質問に答える前に誤解を解かせてもらおうけど、私はあの計画に携わってた訳じゃないわ」

「じゃあどうして？」

「始まりは私の所属していた研究員の会話。あなたが計画を潰した後、あの計画が頓挫したことが裏社会に広まったの。それであの計画のことを知ったのよ。そして調べていく内にこれからとんでもないことが起こるかもしれないのよねえ」

「とんでもないこと？」

「木原幻生という男を知ってるかしらあ？」

「知ってるよ。学者の間でマッドサイエンティストだと呼ばれてる人でしょ」

木山に記憶を見た際に邪悪な笑みを浮かべていた男の姿がツナの

脳裏に浮かんでいた。☒理たちを酷い目に遭わせたこの名前をツナは忘れられるはずもなかった。

「そうよお。真理の為に目的の為に手段を選ばず、数多の能力者と研究機関を破滅させた男。そして絶対能力進化計画の発案者」

「あの計画の……!?!」

「そ。そしてそんな男が何やら悪巧み力を発揮しようとしているようなのよねえ」

「まさかまたあの実験が再開されるの!?!」

「幻生はそんなセコいことをするような真似はしないわあ。おそらくミサカネットワークを使ってろくでもないことをしようとしてると私は睨んでいるわ」

「どのみち妹達シスターズに危険が迫ってるってことなんだよね?」

「ええ。だから私は幻生が悪巧み力を発揮する前に捕らえようと思ってる。で長くなったけどここからが本題。あなたに私の護衛をお願いしたいの」

「護衛?」

「そ。幻生を相手にするとなれば石橋力を叩きまくっても足りないわあ。だから念には念はと思ってるねえ。別にこのことを他言しないなら断ってくれても構わないわあ。元々、1人でやろうと思ってるらしい。それに協力してくれるというならタダとは言わないわあ。ちゃんと見合った報酬も……」

「報酬なんてどうだっていいよ。幻生はどこにいるの?」

ツナからすれば報酬などどうでもよかった。報酬なんてものよりもミサを助けることの方がなによりも大事であった。

(どうでもいいか……本当、あの人にそっくりなのね)

ツナの言葉を聞いて操折はほんの少しだけ口元が緩んでいた。それと同時にとある人物の姿が脳裏に浮かんでいた。

「あなたもお人好しね」

「え?」

「だってそうでしょ? いきなりこんな話をして私を全く疑わないんだもの。疑うでしょ普通」

「そりゃ誰とも知らない人に言われたらそう思うけど。操折は友達だし。それに操折が悪い人じゃないってことぐらいは知ってるし」

「私は他人を操れるのよ。それでも悪人じゃないって言い切れるのかしらあ?」

「操るって聞いたらしいイメージはないけど、それは使う人の問題だし。操れる能力を持つ人が全員が悪人って訳じゃないでしょ。もし操折が悪人ならとくに色々やってるだろうし、最大派閥のトップになんてなれないだろうし」

「あなたって本当に変わってるのね。まあいいわあ。私として話が早く進むし。それじゃ協力してくれるってことでいいのよねえ?」

「うん」

「わかったわ。それで幻生の居場所なんだけど。幻生は9月20日に国際能力者会議にお忍びで出席するわ」

「能力者会議?」

「そ。神出鬼没はジーさんだから居場所を突き止めるのに苦労したけど内部の人間の記憶を見たから間違いないわあ。作戦の内容は当日伝えるわ。あなたのことを信用してないわけではないけど、もし私たちの作戦がバレたら全てが水泡力に帰すから」

「わかった」

「本当にいいの? 今ならまだ引き返せるわよ?」

「え?」

「今回の作戦、元々は1人で実行しようと思ってた。けどあなたが絶対能力進化計画レベル。シフトのことを知ってるって知って私は勝手に巻き込んだ。だから無理しなくてもいいのよ。居場所を突き止め、作戦を立てるといっても相手は木原幻生。無事で済む保証なんてどこにもないわあ。それでもいいの?」

いくらツナが強いといっても相手が相手なだけに操折はツナに本当に大丈夫なのか尋ねた。

「大丈夫だよ。前から戦う覚悟は決めてたから」

「どういうことお?」

「俺はミサたちが笑って生きられる世界を作りたいと思ってるんだ」

「ミサ？」

「妹達シスターズのこと。名前があつた方がいいと思つて俺が名前をつけたんだ」

「成る程ねえ」

ミサが何のことなのかわかつた操折は納得すると同時に、ツナがミサたちのことを一人の人間として見ているということを理解する。

「それに美琴とも約束したんだ。学園都市がこんな間違つたことをさせるつていうなら俺が学園都市をぶつ壊すつて」

「なっ!？」

穏やかなツナがとんでもないことを考えていた為、操折は驚きの声を上げた。

「あ、あなた本気で言つてる訳……!？」

「本気だよ。でも美琴だつてこの街に大切なものがあると思うから。それでもし美琴が学園都市をぶつ壊すことを望むなら俺は学園都市をぶつ壊すよ」

(本気……みたいねえ……)

能力でツナの頭の中を見ずとも操折には、ツナが学園都市を本気でぶつ壊すことが偽りではないということを理解していた。

「もう見たくないんだ美琴が泣くところなんて」

ツナは思い出す。一方通行と戦う前アクセラレータに橋の上で見た美琴の泣くところを。

「美琴には笑っていて欲しいんだ。だから絶対に阻止するよ。俺の誇りにかけて」

「よく言つたぞツナ。部下を見捨てるようなボスはボンゴレにはいらねえんだ」

「誰!？」

ツナがそう言つた瞬間、知らない声が部屋に響き渡る。操折はバッグから素早くリモコンを取り出して警戒態勢に入る。

すると部屋に置いてある植木鉢から足が生え、ツナたちの方へ向いた。

「ちやおつす」

「リボーン!?」

標的（ターゲツト） 251 証明

絶対能力進化計画の発案者である木原幻生を捕まえる為に協力して欲しいと操折に頼まれたツナ。だが呼ばれていないはずのリボーンがなぜか部屋の中にいた。

（な、何……う？ この奇妙力満載の赤ん坊は……？）

突如として現れた、喋る赤ん坊の存在に操折は衝撃を隠せないでいた。するとリボーンは植木鉢のコスプレを素早く脱ぎ捨てて、いつものスーツ姿となる。

「初めましてだな。俺の名はリボーン。ツナの家庭教師かてきょうにして殺し屋ヒットマンだぞ」

「はあ……う？」

喋る赤ん坊の存在だけでも頭がショートしそうなのに、さらに意味のわからないことを言ってきたので操折は空いた口が塞がらない状況になってしまっていた。

「何やってんだよりボーン!? というか何でお前がここにいるんだよ!？」

「お前がパトロール中にも変わらず知らねえ女と歩いてたのが見えたからな。面白そうだから着いて来たんだぞ」

「じゃあ最初からここにいたのかよ！」

「そうだぞ。まあこんなやべえ話をするとは思ってもいなかったがな。だが俺の気配に気づかねえとはまだまだだな。こいつはまたがつつりと鍛えねえとな」

「気づく訳ないだろ！」

「そんじゃさっそく修行を初めるぞ。まず気配を絶つには自然と同化しなくちゃならねえ。とりあえずこいつを着て自然と同化するところから始めるぞ」

「何で着なくちゃいけないのよ！ つーか入る訳ないだろ！」

リボーンは先程、着ていた植木鉢の服をツナに渡そうとするも即座に却下された。

すると操折はリモコンをリボーンに向けて押した。

「色々とツツコミたいところがあるんだけど、大事な話をしてる途中なのよねえ。悪いんだけど黙ってもらえるかしらあ？ これはあなたのようなお子様が口が挟めるような話じゃないのよお」

「前に美琴が言ってた通り、本当にリモコンで人を操るんだな。面白えな」

「っ!？」

自分の能力が効かず操折は驚きの表情を浮かべる。操折はリボーンに向かって再びリモコンを押した。

だが

「無駄だぞ。お前ごときの能力で操られる程、俺はヤワじゃねえんだ」
「っ!？」

またしてもリボーンに自身の能力が効かなかった為、操折は驚きの表情を浮かべた。それから何度も操折はリモコンのスイッチを押す。しかしリボーンには通じてはいなかった。なぜならリボーンはコーヒーを作り始めていたからである。

(ど、どうなってるのぉ!? 何で私の操作力が効かない訳え!?)

操折の能力は動物や無機物には効かないという弱点がある。いくらリボーンが奇妙な存在であるとはいえ人間であることには変わりはない。にも関わらず能力が効かないことに動揺を隠せないでいた。「お、落ち着いて操折！ リボーンは絶対能力進化計画のことを知ってるから！」

「はあ!？」

こんな子供が絶対能力進化計画のことを知ってるっていうことを知って操折は驚きの声を上げた。

「いや!! ありえないでしょ!! こんな子供が何であの計画を知ってるのよ!!」

「瀕死になったミサを治してもらおう為に俺がリボーンに頼んだんだ

よ」

「何でよお!?! そこは病院に連れて行くのが普通でしょ!! 何でこんな子供に頼むよ!?!」

「ギャーギャーうるせえぞ。せつかくのコーヒータイムが台無しじゃねえか。つたく。常盤台のお嬢様つつても中身はガキなんだな」

「子供のあなたに言われたくないんですけど!! あなたと違って私は立派な大人なんですう!!」

「何が大人だ。そんなんだからどうせ彼氏の1人もいねえんだろ」

「は、はあ!?! ベ、別にいますけどお!?!」

(嘘だ……嘘ついてるよ操折……)

リボーンの言葉を聞いて目を泳がせ、動揺しつつも必死に強がって見せる操折。ツナは必死に強がっている操折を見て心の中でツッコミをいれていた。

「嘘が隠せてねえぞ」

「れ、恋愛もしたことない子供にはわからないわよ。大人の恋っていうのはそう簡単じゃないのお」

やられっぱしが悔しかったのか操折は平静を装ってリボーンに反撃する。

「何、言ってるんだ。俺にだって女はいるぞ」

「意味わかって言ってるのかしらあ!?!」

(完全にリボーンのペースだ……)

リボーンは親指以外を立てながら数字の4という意味を表した。リボーンの言っている意味を理解した操折はツッコミをいれる。操折が振り回されるのを見てツナは心の中で操折に同情してしまっていた。

「ちよつとお!! この子をなんとかしなさいよお!! あなたの知り合いでしょお!?!」

「いや……リボーンは俺より強いし……」

「何、言ってるのよお!?!」
アクセラレータ
「一方通行に勝てるあなたがこんなチンチクリンに負ける訳ないでしょ!!」

学園都市の第1位に勝てるのになぜ目の前にいる子供1人に勝て

ないのか操折にはわからなかった。

「だったら証拠を見せてやろうか」

「証拠？」

「今から俺とツナが戦う。それで俺の実力をお前に証明してやる。それで俺の実力を認めるならお前の作戦に俺も加えろ」

「ちよっ!? 勝手に決めんなよりボーン！」

「じゃあねえだろ。こうでもしなきゃこいつは俺の実力を認めねえだろうしな。それに今回の相手はかなりヤベエ相手なんだ。戦力が多いことに越したことはねえだろ。それとも俺じゃ戦力として不安か？」

「そりや……まあ……」

リボーンの言っていることは間違っていない為、ツナは反論できず口ごもってしまう。

「わかったわあ……あなたの条件を呑むわあ。ただし實力不足だと思ったら作戦に加えない。それでいいかしらあ？」

「ああ。構わねえぞ」

標的（ターゲツト） 252 規格外

ツナとリボーンが戦う為に3人はマンションの屋上へと移動する。

「準備はいいか？ ツナ」

「ああ」

（相変わらず様変わりするわねえ……）

リボーンの視線の先には超^{ハイパー}死ぬ気モードになったツナがいた。超^{ハイパー}死ぬ気になったツナを何度か見ているとはいえ、操折はまだ慣れていなかった。

（にしても本当に強いのかしらあ……？）

操折はリボーンが本当に強いのか。というよりもそもそも戦えるのか信じられないでいた。

（でもねえ……）

しかしリボーンあの強気な態度。そしてツナに強いと言わしめたこと。それが操折はどうしても気になってしまっていた。

「いくぞ」

「っ!？」

リボーンの姿が一瞬にして消えた。ツナは咄嗟に右手を薙ぎ払い炎の壁を作る。炎をの壁を作ったと同時にリボーンが炎の前に現れた。リボーンはクロスさせた腕を顔に移動させた状態で炎の中へと突っ込む。

（やるじゃねえか）

炎の壁を抜けた先にはツナの姿はなかった。リボーンはツナの思惑を理解する。炎の壁で目眩ましをしている間に死角に移動したのだと。

そしてツナは上空から一気に加速しリボーンの間近に迫っていた。

「今のは悪くなかったぞ」

リボーンは目にも止まらない早さで懐から銃を素早く取り出して、銃口を自分の斜め後ろに向けた状態で引き金を引いた。その瞬間、銃口から晴の炎が放たれその反動でリボーンが地面へと一気に移動し着地する。その0.05秒後にツナの拳が放たれるがツナの拳は空を切る。

「俺に武器を使わせるようになるとはな。成長したなツナ」
「……」

またツナが成長したのが嬉しかったかリボーンは嬉しそうな笑みを浮かべる。一方で操折はあまりに速すぎる戦いに開いた口が塞がらない状態になってしまっていた。

（な、何が起ったの……!?!）

操折は能力こそ強いが戦闘力は皆無。故に今の1秒にも満たない戦闘が見える訳もなかった。わかったのはせいぜい炎が見えたことと銃声が響き渡ったことだけである。

「氣い抜くんじゃねえぞ」

「っ!?!」

（か、体が……!?!）

リボーンがそう言ったと同時に殺気に放たれる。リボーンの殺気によってツナは即座に戦闘体勢を取り、全神経を研ぎ澄ます。一方で操折はリボーンの殺気で体が動けずじまっていた。

「本番はここからだぞ」

リボーンが銃の引き金を引く。ツナは両手を前に出して炎を逆噴射させて即座にその場から飛び引いて弾丸を躲していく。そこからリボーンは容赦なく弾丸を放っていく。ツナはなんとかリボーンの攻撃を躲していく。

（零地点突破で吸収したいが……）

リボーンの放ったのはXANXUSと同じく弾丸と化した死ぬ気の炎。死ぬ気の零地点突破改で吸収できる。しかし吸収している隙を狙われる。しかも死ぬ気の零地点突破改は死ぬ気の逆の状態になり生命力を枯渇する危険な状態にならない。そんな状態でリボーンは攻撃を浮ければ致命傷となるのは火を見るよりも明

らかであった。

(殺気！)

後ろから殺気を感じたツナは即座に後ろを振り向いた。
「がっ!？」

ツナの顔面に銃が直撃する。リボーンはツナが超直感で自分の位置を把握することを読んでいた。そこを逆手に取ったのである。ツナの超直感是对人にしか働かない。故に無機物の銃に反応できなかったのである。

「超直感に頼り過ぎだぞ」

「グフツ!？」

顔面に走る痛み。その一瞬の隙にツナの腹部にリボーンは拳が決まる。リボーンの蹴りによってツナの体はくの字に曲がる。

「ガハツ!？」

さらにリボーンはツナの顎に上段蹴りを喰らわせた。リボーンの蹴りを喰らったツナは上空に蹴り飛ばされる。

「ボケツとしてんじゃねえ」

リボーンは上空に飛ばされたツナに向かって炎の弾丸を放った。ツナは炎を逆噴射させて横方向に移動したが弾丸がツナの頬を掠り、ノーダメージとはいかなかった。

「まだまだだぞ」

「グハツ!？」

ツナは背後から弾丸を喰らって地上へと落ちていく。

(う、後ろから……!?)

ツナはなぜ後ろから弾丸が来たのかわからず動揺していた。リボーンが先程、放った弾丸。それが屋上に設置してあった貯水槽に当たって反射しツナの背中に直撃したのである。

「二つの判断ミスで戦況は大きく変わる。これが戦いだ」

「ガハツ!？」

いつの間にかツナの上空に移動していたリボーンがツナの脳天にかかと落としを喰らわせる。リボーンの攻撃を喰らってツナは地面に叩きつけられた。

「とどめだ」

リボーンは地面に叩きつけられたツナに銃口を向けて容赦なく銃の引き金を引いた。銃口からは枝分かれした無数の炎の弾丸がツナに向かつていく。ツナは避ける術はなく全ての弾丸を直撃する。

リボーンは地面に着地すると銃口から出た煙に向かつてそつと息を吐いた。

「落ちたな」

「っ!？」

煙幕が晴れるとそこには額の炎が消え、ボンゴレギアが元の27の手袋へと戻りノーマル状態で気絶しているツナがいた。そんなツナを見て操折は衝撃を隠せないでいた。

「どうだ？ これで俺の実力は認めてもらえたか？」

「え、ええ……」

リボーンにそう問われるが操折はあまりに衝撃で曖昧な返事しかできなかった。

「そんじゃ俺も作戦会議に加わらせてもらおうぞ」

「それはいいけど……まだ彼が……」

「ったく。しょうがねえな」

作戦会議を再開しようにもツナが気絶してしまっている為、操折は今すぐに作戦会議を始めることが不可能だということを悟る。

リボーンは嘆息すると気絶しているツナの元へと歩いていく。

「いつまで気絶してやがんだ。とつとと起きやがれ」

「なっ!？」

リボーンはツナの脇腹におもいつき蹴りを受け入れた。操折はリボーンの行動に驚きを隠せないでいた。

操折の目など知らずリボーンは容赦なくツナに蹴りを喰らわせていく。

「ゴッホ！ ゴッホ！」

「お。起きたか」

「起きたじゃないだろ!! 何でこんな風に起こされないといけないんだよ!？」

「いちいち口答えしてんじやねえ」

「ゴフツ!？」

(なんかあの人が強い理由がわかった気がするわあ……)

リボーンのアまりにも常識外れの行動を見て操折はツナがなぜあそこまで強いのかということを理解する。

(本当に大丈夫かしらあ……?)

リボーンの破天荒な行動を見てこの先、本当に大丈夫なのかと不安になる操折であった。

標的（ターゲット） 253 試される覚悟

リボーンがツナを強制的に目覚めた後、元の部屋に戻って作戦会議を続ける。

「ま。さつき作戦は話した通りなんだけども。1つ問題があるのよねえ」

「問題？」

「妹達を狙ってる組織がいるのよねえ」

「木原幻生の手の奴らか？」

「多分ねえ。問題はそいつらがどんな奴らかわからないってこと」

「つーことは奴らの手の内も、どんな手を打ってくるかもわからないってことか」

「そういうことよお。場合によっては私たちの関係者が狙われる可能性力もあるわあ」

「だったらそいつらは俺に任せろ。全員、1秒とかからずあの世に送ってやる」

「そ、そう……？ だ、だったら任せろわあ……」

先程の戦いを見ていた為、操折はリボーンの言葉が頼もし過ぎて困惑してしまっていた。

「それより1つ聞いていいか？」

「何かしらあ？」

「何でお前が妹達シスターズを助けたいと思ってるんだ？ 正直、お前にメリットがあるとは思えねえんだが」

「さあ？ そこまで話す義理はないわあ」

「そうか。別に喋りたくねえならそれでいい。お前にも何かしら事情があるんだろ。そいつを無理に聞くつもりはねえ」

「あら。紳士なのね」

無理に秘密を聞こうとしないリボーンの姿勢に操折はちよつとだ

け感心する。

「ただし」

そう言うとりボーンは懐から銃を取り出すと、銃口を操折に向けた。

「もしお前の隠していることが妹達シスターズに害を成すものだっていうなら俺は容赦なくお前を殺すぞ」

「ちよっ!? リボーン何言ってるんだよ!？」

リボーンが急に操折に対して殺害予告した為、ツナは驚きを隠せな
いでいた。

「俺は女に手を出さねえ主義だ。だがそれは自分てめえの大事な者もんを蔑ろにしてまで自分てめえの矜持を貫き通す気つもりはねえ。そのことを忘れるんじゃねえぞ」

「おいリボーン!! 待って!!」

「気にしないでいいわよお。このくらい当然の反応だもの」

リボーンという言葉聞いてツナは制止する。しかしリボーン
の言葉を聞いてもなお操折は動揺することなく淡々とした表情でそう答えた。

「お生憎様。私はあんなイカれた計画に加担する程、墜ちてはいないわあ」

「それで信用しろとも?」

「信用しなくてもいいわあ。ただあなたの言う通り、私が道を踏み外すようなら容赦なく殺しなさい。それくらいの覚悟はできてるわ」

「そうか」

操折の返答を聞いてリボーン不適な笑みを浮かべた。そして持っていた銃を懐にしまった。

「悪かったな。試すような真似しちまってな」

「試してたの?」

「まあな。だがこいつでわかった。お前が悪人じゃねえってことがな」

「随分と物わかりがいいのねえ」

「俺は超一流の家庭教師かてきょうしだ。今まで数多の生徒を見てきたからな。そ

のくらいわかるぞ」

(それって家庭教師に必要なのかしらあ……?)

悪人か全員かどうかを見極める技術が家庭教師に必要なだとは操折にはどうしても思えなかった。

「最後に1つ質問だ。美琴にはこのことを話さねえのか? あいつが加われればかなりの戦力になるはずだぞ」

「生憎と私と御坂さんは犬猿の仲なのよねえ。そんな協調性がない相手と協力すれば作戦に支障力をきたすわあ。それに御坂さんがこの計画を知れば冷静な判断力を失う。そうなれば幻生の思う壺になって私たちの計画が狂いかねない。違つかしらあ?」

「確かにな」

操折が美琴の力を頼らない理由を聞いてリボーンはそう答えた。

(どうやらただ仲が悪いってだけじゃなさそうだな)

いくら犬猿の仲とはいえ美琴の強さを操折は知っているはず。それでもなお美琴に頼る気のない操折の態度を見てリボーンは何かがあることに気づいたが、それについて追及することはなかった。

「ツナ。お前はそれでいいのか?」

「うん。美琴がすでに巻き込まれてるんだったら話した方がいいと思うけど。でも美琴が巻き込まれた訳じゃないし。それに美琴には笑ってて欲しいから」

未来の戦いではハルと京子を自分たちの戦いに巻き込んでしまった。ツナは禍々しい世界を見せたくないという想いから2人には何も話さなかった。だがすでに戦いに巻き込んでいるのにも関わらず話さないのは身勝手であると理解し2人に全てを話した。

しかし今回は木原幻生が暗躍しようとしていることに関しては美琴は全く知らない。だからツナは美琴にこのことを話さない方がいいと判断した。

「そうか」

リボーンはツナが美琴に隠し事をしてることに対して罪悪感を感じていることを悟った。しかしツナ自身が自分で考えて決めたことなのでそれ以上、何も言うことはしなかった。

「それじゃ最後に連絡先を交換するわよ。今日ここで話したことは絶対に他言無用。作戦当日にはいつでも連絡が取れるようにおきなさい。この作戦に失敗すれば多くの妹達シスターズが犠牲になるかもしれない。心してかかるわよ」

「うん！」

「了解だぞ」

残骸（レムナント）篇

標的（ターゲット） 254 気に入らない

操折から木原幻生を倒す為の計画を聞かされてから4日後。9月13日。

美琴の住んでいる常盤台中学の寮。

「ということがあったのよー」

『へー。そんなことがあったんだ』

美琴はベッドの上で携帯を片手に話していた。話し相手はツナであった。

（お姉様……また沢田さんと……）

携帯でツナと楽しそうに会話する美琴を見て、黒子は面白くなさそうな表情かおをしながら見ていた。

（私だって……）

ツナと楽しそうに会話している美琴であったが、内心ではある決意していたのだった。

時は遡る。ツナとりボーンが操折から木原幻生を倒す計画を聞かされていた時に遡る。

「それで私に相談って何？ 佐天さん？」

放課後。美琴は佐天に相談したいことがあるという連絡を受けて

ファミレスにいた。

「実は……」

佐天は昨日の出来事について語る。広域社会見学に行っている間に自分に秘密で勝手にリボーンが春上と衿衣を連れ込んでいたこと。春上がツナのこと好きだということを。

(あいつ……!!)

同じくツナに好意を抱いている美琴はリボーンのものでかしたことに怒りを覚え右手を強く握り締めていた。

「春上さんつてとつてもおしとやかで可愛いんですよね。ツナさんつてああいう子がタイプだと思うし」

(た、確かに……)

佐天の言葉に美琴は何も言い返すことができなかつた。温厚で平和主義者のツナであれば春上のような護つてあげたくなるような子がタイプだということはすぐに理解できた。

「正直、春上さんつて私たちにとつて脅威だと思うんですよねー」

「脅威つて……そんな大袈裟な……」

「大袈裟でもないですよ!! 春上さんにツナさんを取られてもいいんですか!？」

「ぶっ!!」

佐天が大きな声で変なことを言い出した為、美琴は顔を真っ赤にしながらかいてしまう。

「な、何を言ってるの!?! べ、別に私はあいつのことなんて……!?!」

「好きじゃないんですか?」

「え……!?!」

否定しようと思つた美琴。しかし佐天に真顔で尋ねられてしまったので美琴は驚いてまう。

「前に戦つた時に言つた言葉は嘘だつたんですか?」

「そ、それは……!!」

『それでも私は誰にもあいつを渡したくないつて思つたの!! 自分以外の女の子を見ないで欲しいつて思つた!! 私だけを見て欲しいつて思つたの!!』

誤魔化すこともできない雰囲気になった美琴は顔を赤くすると同時に夏休みに佐天に対してツナへの想いを言い放った時の言葉が脳内で再生されていた。

「う、嘘じゃないです……!!」

「素直でよろしい」

「っ!」

消え入りそうな声でツナへの想いを正直に暴露する美琴。そんな美琴を見て佐天は笑顔でそう答えた。美琴は真っ赤になった顔を覆った状態で悶えていた。

「あーあ。私も京子さんみたいな女子力があつたらなー」

「きょうこ?」

「ツナさんの好きだった人です」

「沢田の好きだった人……」

『俺も中学の時に好きな女の子がいたんだ。もうフラれちゃったけどや』

常盤台狩りの事件の歳に重福との会話の際に言っていたことを美琴は思い出す。

「京子さんっておしとやかで優しく笑顔の素敵で女子力も滅茶苦茶高いんですよ。春上さんも京子さんと似てる部分があるから春上さんってツナさんの理想の女性だと思うんですよー」

「そ、そんなに凄いの……? 京子って人……?」

「ええ……そりゃあもう……正直、常盤台中学の人でも京子さんに勝てないと思いますよ……」

佐天は京子と会った時のことを思い出すと同時に悲観する。一目会っただけで女子力の化け物だとわかる京子の魅力。自分とは比べ物にならない。まさに月とすっぽんであるということ。

(そういえばリボンが言ってたわよね……)

『ツナは超がつくお嬢様学校の生徒よりもどこにでもいるような普通の女の方がタイプだからな』

美琴は夏休みにリボンが自分に対して言った言葉を思い出す。自分の本心を引き出す為にならぬと言ったことではあるが事実である

ということを美琴は理解していた。
(だったら私は……)

場面は戻り美琴の寮

(まずはあいつに私のことを意識してもらおう！)

佐天との会話で美琴はまずは自分の意識を向けさせることを決めた。その為に美琴はここ数日、ツナに電話して何の変哲もない会話をすることにしたのである。

美琴の行動に最初は違和感を覚えたツナであったが、すぐに違和感は無くなり美琴との会話を楽しみ始めた。

「そろそろ消灯時間だから切るわね」

『うん。じゃあまた明日』

「うん。また明日」

お互いに別れの言葉を告げるとツナの方から電話を切る。美琴は完全に電話が切れたのを見計らって通話終了のボタンを押した。

(また明日か……)

美琴はツナがまた明日と言ってくれた為、嬉しい気持ちになると同時に顔がニヤついていた。

「よっほど嬉しかったみたいですね。そんなに顔がニヤついていますわよ。お姉様」

「は、はあ!?! ニヤついてなんかいいわよ!?!」

嬉しそうな表情をする美琴に対して皮肉を放つ黒子。黒子の言葉で我に返った美琴であったが動揺まで隠せておらず顔が赤くなっていた。

「最近、沢田さんと電話で話すようになりましたわね。一体、どういった心境ですか？」

「たまたまよ!! たまたま!!」

「話していることは重要な話ではなく何の変哲もないもの。別に沢田さんはなく私でもいいと思うのですが」

「いつも欲情して抱きついて来るあんたじゃ話にならないのよ」

「だったら佐天さんでもいいのでは？」

「あー!! もう!! 私が誰と喋ろうと勝手にしょ!! ほら!! さっさと寝るわよ!!」

これ以上は分が悪いと思ったのか美琴は話を強引に打ち切り、布団を被ってベットで横になる。

(とつくにわかつていたはずの……お姉様が沢田さんに特別の感情を抱いていることは)

『佐天が惚れた男にお前も惚れたのはいいが、佐天の幸せを邪魔できない。そんなところか』

黒子は思い出す。夏休みの下旬。リボーンの口から美琴がツナのことを異性として好きだということや伝えられたことを。そして今、ツナを自分のものにする為に本格的に動き出したということや理解していた。

(確かに沢田さんは善人……多くの人々を……私自身も助けられてきましたの……)

ツナが学園都市にやって来てから2カ月弱。黒子の脳裏にはツナによって救われた者たちの姿が浮かんでいた。黒子自身もツナがどこまでも優しい人格の持ち主であるということも理解している。それどころかツナに対して敬意すら表している。

(ですが気に入らないんですの……)

黒子は美琴に対して敬意だけでなく恋愛感情を抱いている。それは冗談でも何でもなく美琴と結ばれる為なら美琴へのアプローチは欠かさず、どんな障害だろうと乗り越える覚悟だっている。それ故にツナがどれだけ善人であろうとも美琴がツナに好意を抱いているという状況がどうしても気に入らないのである。

(お姉様は私のものですよ!!)
(

標的（ターゲツト） 255 亀裂

9月14日。風紀委員177支部。ジャッジメント

「……」

黒子は椅子に座り、握った状態の右拳を右頬に当てながら深く考え込んでいた。

「白井さん」

「……」

「白井さん」

「……」

「もう！ 白井さん！」

「っ！」

深く考え込んでいる黒子に話しかける初春であつたが黒子からの応答がなかった為、声を大きくして名前を呼んだ。初春の声で黒子は我に返った。

「何ですの初春？ 騒々しいですわよ」

「騒々しいですわよじゃあないですよ。ボーツとしてたから何度も話しかけたのに返事をしないから大きい声を出さないといけなくなつたんじゃないですか」

「それは申し訳なかつたですの」

「それよりどうしたんですか？ すつごく怖い表情かおしてましたけど？」

「ちよつと考え事してただけ。大したことじゃありませんわ」

初春の質問に答えると黒子は椅子から立ち上がり支部内に設置してある冷蔵庫の前に移動する。そして冷蔵庫の中から水の入ったペットボトルを取り出すと蓋を開けて口に含む。

水を飲み終わると黒子は蓋を閉めてペットボトルを冷蔵庫の中へ戻した。

「そういえば今日は沢田さんは休みでしたよね」

「初春。私の前でその名前を口にしないで下さいまし。不愉快ですの」

「白井さん……?」

「今のは忘れて下さいまし……私はパトロールに行つてまいりますの」

黒子の発言を聞いて初春は違和感を覚える。失言してしまったことに気づいた黒子は申し訳なさそうな顔した後、扉へと出てパトロールへと向かった。

「白井さん……沢田さんと何かあつたんでしょうか?」

一方でパトロールに出た黒子。

（いけませんわね……. 工作中に私情を挟むなんて……）

街を歩きながら先程の発言と余計なことを考えてしまったことを反省する黒子。

（心を切り替えねばいけませんの!）

両手で両頬を叩いて気合いを入れ、ジャッジメント風紀委員の仕事を真つ当することを心に決める。

しかし気合いを入れ治したのはいいものの本日、管轄内には特に困っている人も困つたことをするような人もいなかった。

（これ以上のパトロールの必要はなさそうですわね……）

これ以上のパトロールの必要性がないと判断した黒子は支部へと帰る為に振り返つた。

その時だった

「ありがとう沢田。あんたのお陰でコンプリートできたわ」

「揃ってよかったね」

(お姉様!?)

黒子のカフェを通り過ぎようとした時、カフェの中からトートバツク美琴とツナが出て来る。2人がなぜカフェの中から出て来たのかわからず黒子は驚きを隠せないでいた。

「げっ！ 黒子！」

「あ。本当だ」

「おおおお姉様!?! なぜ沢田さんと!?!」

「いやー……そのー……」

動揺しながら美琴にツナと一緒にいた理由を尋ねる黒子。美琴は黒子の質問に答えたくないのか歯切れの悪い返事をする。

「コラボカフェに来たんだよ」

「ちよっ!?! 沢田!?!」

「コラボカフェ?」

ツナが美琴の代わりに黒子の疑問に答える。ツナの言葉を聞いて美琴は動揺し、黒子は疑問符を浮かべる。

「なんかゲコ太? っていうキャラとこのカフェがコラボしてるらしくって、その缶バッチを手に入れる為に協力して欲しいって言われて……」

「お姉様……」

ツナは会話を聞いて黒子は頭を抱えてしまっていた。

ゲコ太とはカエルの姿をしたマスコットキャラクターである。しかしこのゲコ太が好きなのは保育園生や幼稚園生、小学生といった小さい子供が対象。それでも美琴はゲコ太のことが好きであり、なんなら子供よりもハマっているぐらいである。

しかし黒子は美琴がゲコ太が好きなことに否定的である。なぜなら名門である常盤台生にして学園都市に7人しかいない超能力者レベル5がこんな子供じみたものが好きだということが周囲に知れば美琴の評判に関わるからである。

「あれだけ言っているではありませんか……こんな子供じみた趣味はお止めになつて下さいと……」

「い、いいでしょ!! 私が何を好きになろうと勝手にでしょ!!」

「沢田さんも沢田ですの……どうしてこんなことに付き合っているのですか……?」

「いや……別に暇だったし……それに人の好きなものを否定するのもアレだし……」

「沢田……!!」

ツナの言葉を聞いて美琴はとても嬉しそうな顔をしていた。今まで子供の趣味だと言われることが多かった美琴にとってこの言葉はとても嬉しいものはなかった。

(まあ獄寺君に比べたら別に普通っていうか……)

ツナは友達である獄寺のことを思い出す。獄寺は本気でUMA未確認生物を生物を信じていたり、授業中にG文字という独自の文字を作成したりという変わった人物である。別にツナは獄寺の好きなことを否定している訳ではないが、獄寺の好きなことに比べたら美琴の好きなものが普通に思えるのである。

(お姉様があんなに嬉しそうに……)

普段はクールで表情を崩すことがあまりない美琴が嬉しそうな表情かおをしたので黒子は少しだけ驚いてしまっていた。

(でも何で沢田さんなんですの……!?)

美琴の変化に驚いた黒子であったが、すぐに驚きの感情から嫉妬の感情へと変化する。そして拳を強く握り締める。

そんな心情を知ってか知らずか黒子の携帯に着信が入る。黒子は自分の感情を抑えつつ電話に出る。

「もしもし?」

『あ。白井さんですか?』

「何かあったんですの?」

『はい。事件が発生しまして。ですがちよつと妙な事件なんです』
「妙な事件?」

『はい。とにかく一旦、支部に戻ってもらえますか?』

「わかりましたの。すぐに戻りますの」

初春からの連絡を聞くと黒子は通話を終了し携帯をポケットの中

へと入れる。

「事件が発生したようです。なので一旦、支部に戻りますの」

「俺も行くのか？」

「必要ないですの!!」

「え……？」

今日は非番のツナであつたが事件が発生したと知って手伝おうとする。しかし黒子は怒りを露にし声を荒らげながら否定する。急に黒子の態度が豹変した為にツナは驚きを隠せなかった。

「生憎とあなたの力を借りる程、私は落ちぶれていませんの!! 子供扱いしないで下さいまし!!」

そう言うと黒子はテレポートを使って支部へと戻って行ったのだった。

標的（ターゲット） 256 窃盗と唾然

初春の連絡を受けて支部へ戻る黒子。

「ただいま戻りましたの」

「すいません。急に呼んじやって。って何かあったんですか白井さん？」

「別に。何でもありませんわ。それよりも事件の概要を説明してもらえますの?」

「は、はい……」

パトロールに出る前よりも機嫌が悪くなっていることに気づいた初春であったが、黒子はさらっと受け流す。これ以上は聞かない方がいいと判断したのか初春はパソコンを操作し始める。

「まず最初にこれを見て欲しいんです」

初春がパソコンの画面を指を指す。画面に映し出されていたのはスーツに身を纏った男たちが車に乗っていた者たちを襲撃している光景だった。そして襲撃犯の1人が車のトランクを開けて旅行用のキャリアケースを盗み出す。そして襲撃犯たちはキャリアケースを持って逃走し始める。

「ただの窃盗事件じゃないですか。一体、これのどこが妙なんですか?」

「これを見て下さい」

初春はパソコンを操作してキャリアケースを拡大する。するとキャリアケースにエンブレムが刻まれていた。

「あら。この刻印。どこかで……?」

「はい。第23学区のエンブレムですね」

黒子はキャリアケースのエンブレムに見覚えがあった。初春はこのエンブレムが何を意味しているのか理解しているようであった。

学園都市23学区。1学区全てが航空・宇宙分野で占められた飛行場兼発射場。一般生徒は立ち入りを禁じられており学園都市で唯一、

国際空港が建設されている場所でもある。

「型番から調べたんですけどこのキャリアケース、高気密生と各種宇宙対策が施された特殊ケースみたいなんです」

「宇宙旅行でもするつもりでしたの？ 被害者は23学区の研究者？」

「それはわかりません。それともう一つ妙なことがあるんです」

「何ですか？」

「キャリアケースを奪われた被害者の人たちが自分たちで窃盗犯を捜索しようとしているってところなんですよね」

「それは確かに妙ですわね」

通常、窃盗が発生すれば風紀委員ジャッジメントもしくは警備員アンチスキルに通報するのが普通である。その方が捜査網が張られ、風紀委員ジャッジメントや警備員アンチスキルが動けば犯人を迅速に捕えられ確実にキャリアケースを取り返すことができる。にも関わらず被害者たちは自分たちでキャリアケースを取り返そうとした。これは誰か見てもおかしいと思う光景である。

「おそらく被害者が通報しなかったのはキャリアケースの中身が風紀委員ジャッジメントや警備員アンチスキルにバレれるとマズいものだったというところでしょうかね」

「それだとどうしましょうか？ 加害者と被害者どっち追いましょうか？」

通報の窃盗と違い加害者だけでなく被害者の方まで怪しいとなつてくると話は違ってくる為、初春はどちらを追えばいいか迷っていた。

「加害者の方ですわね。現状、被害者が黒だという証拠がない以上、被害者を追っても無駄です。逆に加害者を捕えてキャリアケースの中身を調べて被害者が黒だという証拠になるかもしれない。もし黒であれば被害者を逮捕できる大義名分を得られますしね。初春、犯人の逃走経路ルートは？」

「車を捨てて地下街に逃げたみたいです。現在、信号機の配線ミスか何かで渋滞が起きてるみたいなので」

「それは好都合ですの」

「白井さん行く気ですか？」

「直接、犯人に聞いた方がてっとり早いのですの」

「でもまだ場所の特定が……犯人グループはカメラの死角をついて地下を移動してるので場所の特例が……」

「私を誰だと思っっていますの。地下だろうと何だろう関係ありませんわ」

現在、犯人たちは逃走手段を失っている。黒子のテレポートのスピードであれば容易に追い付ける。さらにどんな強固な建物に隠れようが黒子なら壁を無視して侵入できる。

「それに今はムシヤクシヤしていますの。暴れてやりますわ」

一方、その頃。佐天の家では。

(どうしたんだろう黒子……?)

ツナは現在、佐天の家に帰っていた。あの後、美琴から今日はもう別れようと言われたので佐天の家に帰ったのである。

「ツナさん？」

「佐天……」

「どうかしたんですか？ 暗い表情かおをしていますか？」

「いや……黒子がさ……」

「白井さんがどうかしたんですか？」

「実は……」

ツナは先程あった出来事を佐天に話した。美琴とコラボカフェに行った際に黒子に出会ったが黒子が自分に対して怒りを露にしたことを。

「つてことがあったんだ……」

(成る程な……)

ツナの話を聞いて佐天は一瞬にして理解する。美琴をツナに取ら

れたと思つて嫉妬したのだということ。

(本当に御坂さんと一緒に出掛けたんだ……)

あらかじめ美琴と出掛けることは佐天は聞いていたがどうしても嫉妬しまった。

「子供扱いされたことには怒り過ぎつていうか……黒子らしくないっていうか……」

(そこまでわかつてるのに何でわかんないかなー……)

もうほとんど答えが出てるようなものなのになぜわからないのが佐天にはわからなかった。

(まあツナさんたださえ鈍感だし……女性同士の恋愛とか理解できないくて当然か……)

ツナの鈍感さを嫌という程、理解している佐天は納得せざる得なかった。

「それは多分、白井さんは最近誰かに子供扱いされたんですよ。それでツナさんが子供扱いしたから柄になく怒ったんじゃないですか？」

「え？ そうなの？」

「そうですね。それに乙女心は複雑なんです。白井さんだって年頃の女の子なんです」

佐天も嫉妬したことがあるので黒子の気持ちは理解している。しかしここで黒子の気持ちをバラすのは黒子のプライバシーに関わるので誤魔化すことに決めた。

「そっか……そうだったんだ……」

(何で信じちやうかなー……)

佐天の言葉を聞いてツナは疑うことなく納得する。佐天は1ミリも疑わないツナを見て呆れてしまっていた。

(あの様子じゃ何で御坂さんが電話してきたりとか、遊びに誘つて来たのかも理解してないんだろうな……)

佐天は美琴に同情する。心を素直になれない美琴が勇気を振り絞つて行動したのにも関わらず、当の本人は美琴の行動に何も違和感を感じてないのだから。

(今さらだけど私も御坂さんも厄介な人を好きになつちやたなー)

標的（ターゲット） 257 敵視と同系統

窃盗事件が発生し窃盗犯が逃げたであろう地下街へと向かう黒子。

「あ……あ……」

「ク、クソ……」

「こ、こんなところで……」

地下街の路地裏。スーツを着た男たちが10人が血に転がっていた。

「やれやれ。やはり私の相手ではありませんわね」

奪取することに成功したキャリーケースの上に乗った黒子が窃盗犯を見下げながらそう言った。

相手は銃を持ち黒子が風紀委員だジャッジメントと知ると容赦なく発砲してきた。とはいえ相手は能力開発を受けていない大人。そんな相手弾丸より速く移動のできる黒子にとって相手にすらなかった。

「それにしても一体、これは何なんですか？」

キャリーケースを見つめながらこの中身が何なのか考える黒子。

「ま。後は警備員アンチスキルに任せればいいですわよね」

窃盗犯の連行とキャリーケースの回収は警備員アンチスキルの仕事。その内、警備員からキャリーケースの中身の情報を伝えられる。そう考えた

黒子は警備員アンチスキルに連絡することに決める。

その時だった。

「お姉様？」

黒子の携帯に美琴から着信が入る。黒子は通話ボタンを押して電話に出る。

『あ。黒子？…』

「お姉様？ どうかされたんですか？」

『ちよつと頼みたいことがあるんだけど……今、工作中？』

「ええ……まあ……」

『そっか……今日、寮の抜き打ち検査があるって聞いたから私物を隠して貰いたいって思ったんだけど……』

「ま、まさか……お姉様……沢田さんと……？」

『ち、違うわよ!! ちよつと野暮用があつて遅くなるだけから!!』

帰りが遅くなる理由がツナと一緒にいたいからという理由だと思つた黒子。だがすぐに顔を真っ赤にした美琴によつて否定される。

『あ、あのさ黒子……』

「どうしたんですのお姉様……？」

『ごめんね……』

「え？」

『私つてば自分のことばかり考えてて……あんたのこと考えてなかつたわ』

美琴は最近、自分がツナのことばかり気にかけてばかりおり黒子のことを気にかけてやれなかつた。今日、黒子がツナに対して冷たく当たつた時にそのことに気づいた美琴はそのことを謝つた。

(何で……!?! 何でお姉様が謝るんですの……!?!)

美琴が何も悪いことをしていないのにも関わらずに謝罪の言葉を述べた。そのことで黒子の心の内では怒りの感情が渦巻いていた。

(これも全部、あの男のせいですの!!)

怒りの感情が渦巻く黒子の脳裏には美琴が謝る原因を作つたツナの姿が浮かんでいた。

『黒子……? どうしたの……?』

「お姉様。抜き打ち検査の件ですが、悪くがなんとか間に合わせますので。それでは」

『ちよつ!?! 黒子!?!』

返事が帰つて来ない黒子を心配する美琴。しかし黒子は抜き打ち検査のことだけ返事をして一方的に通話を切つた。美琴の返事を待たずに。

(許しませんの!! たとえ相手が沢田さんだとしても!!)

今まで貯まっていた黒子のフラストレーションがついに爆発する。
その時だつた

「えっ？」

黒子が椅子代わりにしていたキャリアケースが消え失せ、黒子は仰向けの状態で倒れていた。黒子は何が起こったのかわからず放心状態になってしまっていた。

「がっ……!?!」

すると黒子の右肩に何かが刺さる。黒子が右肩を見るとそこには飲料用水の入った瓶の蓋を開ける際に使われるコークスクリューが刺さっていた。

敵の攻撃だと判断した黒子はすぐにテレポートで少し離れた場所へと移動する。そして前を向くとそこには上半身は桃色のサラシを巻いて上にブレザーを羽織り、下は冬服のミニスカートに金属ベルトという露出度の高い格好をしている、茶髪のツインテールの女性が黒子が椅子代わりにしていたキャリアケースの上に座っていた。

(何者ですか?)

黒子はコークスクリューによって貫通した右肩を抑えながら謎の女のことを見ていた。

「ふう……」

急に現れた謎の人物を前にして動揺を隠せていない黒子とは対照的に謎の女は余裕の笑みを浮かべ、見下すような目で黒子のことを見ていた。

「全く……使えない連中ね。使えないからキャリアケースの回収なんて雑用を任せたのに。それすらできないなんて予想外だわ」

謎の女は黒子によって倒された窃盗犯の方を見ながら言い放った。

(やはり私と同じ能力を……!?! しかしキャリアケースには触れられていなかったはず……)

自分の元にあつたはずのキャリアケースがいつの間謎の女の元にあつたことから黒子は謎の女の使った能力が自分と同じ空間移動テレポートだと推測する。しかしキャリアケースに触れることなくキャリアケースが移動していた為、本当に空間移動テレポートなのかどうかかわらないでいた。

「あら。もうお気づき? 流石に同系統の能力者だと理解が早いわ

ね」

謎の女は黒子の表情から自分の能力の詳細がバレたということ理解する。

「けど私は貴方とタイプが違うの。出来ない貴方と違ってね。いちいち物体に触れる必要がないんだから」

自身の能力がバレても謎の女は余裕の笑みを崩すことはなかった。そして謎の女はスカートに装備している警棒兼用の軍用懐中電灯を手取る。

「さしずめ座標移動ムーブポイントといったところかしら。どう素晴らしいでしょう？
風紀委員の白井黒子さん？」

標的（ターゲツト） 258 決裂

黒子の前に現れた黒子と同系統の能力を持つ謎の女。

「どんな目的は知りませんが……私が風紀委員と知った上での攻撃なら手加減する必要はありませんわね!!」

黒子は太ももにホルスターを巻いて忍ばせた金属矢を謎の女に向かってテレポートさせる。

一方で謎の女は一切、動揺することなく懐中電灯を上へ薙ぎ払った。その瞬間、黒子が倒した窃盗犯たちが謎の女の前に現れる。

（仲間を盾にする気ですの!?!）

黒子は謎の女が能力を使って男たちをテレポートさせたことを驚く。

さらに

（人の壁で目標をズラされた!?! この男たちは盾ではなく目隠しの為に!?!）

黒子のテレポートで飛ばした金属矢は謎の女の前に落ちる。男たちが謎の女の前に現れたことによって謎の女の位置が黙視で正確にわからなくなり、金属矢が当たらなかったのである。

すると謎の女は落ちた金属矢をテレポートで手元に移動させると金属矢を黒子に向かって投げ飛ばす。

「甘いですわよ!!」

黒子はテレポートで謎の女の目の前まで一気に距離を詰めると同じ時に金属矢を躲す。

が、

「がはっ……!?!」

だが黒子は謎の女の前で這いつくばるような姿勢で倒れてしまう。なぜなら黒子の横腹に金属矢、そして胸部にはコークスクリューが刺さっていたのだから。

「言ったでしょう。私の座標移動は貴方みたいに手を触れる必要なんてないって」

そう言う謎の女は黒子の落とした金属矢をテレポートで手元に移動させる。

「残念ね。切羽詰まってるとはいえ私事に後輩を巻き込むような人間には思えなかったんだけど。御坂美琴のやつ」

「なぜ……そこで……お姉様の名前が!」

「あら? 知らなかったの?」

何のことかわからなくて困惑する黒子を見て、謎の少女面白そうなものを見つけたかのような笑みを浮かべていた。

「知らないで利用されてるっていう線はなさそうね……常盤台の超電磁砲はさぞご高潔なのでしょうし」

謎の女は黒子を見ながら勝手にぶつぶつと呟き始め、自分で勝手に結論を出していた。

「都合がいいとは思わなかった? ウチの使えない連中がタイミングを計ったかのように渋滞に巻き込まれたこととか。あの常盤台のエースが何を司る能力者か」

「さつきから……?」

「レムナントって言っても分からないわよね。シリコランダムでも難しいかな……」

学園都市が誇る世界最高のスーパーコンピュータ。別名アブソリュートリシミュレーター。今後25年は誰にも追い抜けないと判明している超高性能な並列コンピュータで正しいデータさえ入力すれば、完全な未来予測が可能。かつて木山は樹形図の設計図の力を借りて昏睡状態の教え子を救おうとした。

「樹形図の設計図の残骸って言えばわかるかしら? 朽ちてなお莫大な可能性が残されたスーパーコンピュータの演算中枢って言えば……」

「馬鹿な……!?! あれは今も軌道衛星上に浮かんでいるはずでしょう……?」

信じられない表情をしている黒子。謎の女は1枚の写真を取り出

して黒子の前に落とす。

「撃墜に関するレポートの添付資料ってやつよ。レアでしょう？
ツリーダイアグラム
樹形図の設計図はとつくに破壊されてるのよ。だからこそ世界
中がこぞって残骸レムナントを欲しているのよ」

写真には地球の上にはバラバラになった巨大な機械が写っていた。

「御坂美琴も大変ねえ。何者かが樹形図ツリーダイアグラムの設計図を破壊してくれたおかげで悪夢を終わっていたのに、あれが復元されれば実験が繰り返されてしまう……まあ悪あがきしたくなる気持ちもわからくもないかな？」

「実験……？」

「うふふ……完全に蚊帳の外って感じね」

実験という単語を聞いてもなお黒子は何のことわからずにいた。そんな黒子を見て謎の女は笑みを浮かべていた。

「8月21日。貴方がここまで辿り着ければお友達になってあげてもよかったのだけどね」

そう言うと謎の女は持っていた金属矢を空中に放った。黒子は金属矢を持って一子報いる為に謎の女は特攻する。

が

「お、おねえ……さま……」

謎の女がテレポートさせた金属矢が黒子の全身に刺さり黒子は倒れてしまう。そして現場には謎の女は窃盗犯と共にキャリアケース消えていた。

一方、ツナは。

「よし。醤油ゲット」

第7学区にあるスーパーの前にいた。佐天が醤油を買い忘れた為、ツナが買いに行くことになったのである。

「さてと。早く帰らないとな」

もう完全下校時刻が近いのであまり遅くならない内に帰ろうと決めたツナは佐天の寮へと戻って行く。

「はあ……はあ……」

「え……う？」

帰る途中、路地裏から奇妙な声がする。ツナは奇妙な声を聞いて咄嗟に路地裏の方に注目する。

「許さない……許さない……」

「え……!?!」

先の見えない暗い路上裏。そこから心の底から恨んでいる相手に向かって放つ単純にして恐ろしい言葉が聞こえてきた。ツナは瞬時に路地裏の方を見る。

「絶対に許さない……」

「ひい!!」

そこから現れたたのは全身ボロボロで茶髪で髪で顔が隠れた女だった。ツナは恐怖のあまり腰を抜かしてしまっていた。

「次会ったら容赦はいたしませんわ……」

「く、黒子……う？」

暗闇の路地裏から現れたのはいつものリボンが外れてツインテールではなくロングヘアになってしまった黒子であった。突然のことにツナの思考は止まってしまっていた。

「よかった……黒子か……」

「沢田さん……」

数秒後。止まっていた思考が動き出し幽霊か何かと勘違いしていたツナであったが相手が黒子であった為、ツナは安堵する。

安堵するツナとは正反対に謎の女に対しての怒りが覚えていた黒子。しかしツナと出会ったこと怒りの感情ががフツフツと込み上げツナへの怒りが頂点に達する。

「って黒子!?! どうしたのその怪我!?! 大丈夫!?!」

まともに働いていなかった思考が動き出したことでツナは黒子がボロボロになっていたことによく気づく。

「と、とにかく病院……いや!! リボンに連絡して来て貰えば」

黒子がこんなにもボロボロになった理由よりもまずは黒子の治療が先決だと判断したツナは立ち上がると、携帯を取り出してリボンに連絡することを決める。

「必要ありませんの……」

「な、何を言ってるの!? どう見たって治療が必要だよ!!」

「必要ないと言っているんですの!!」

「っ!？」

ついにツナへの怒りが爆発し、黒子の叫び声が学園都市に木霊する。黒子の叫び声にツナは気圧されてしまう。

「全部あなたのせいですの!!」

「黒子……?」

「あなたは何も知らず人の大切なものを奪う!! 奪われた者の気持ちを知らずに!!」

「奪う……? 俺が……?」

黒子が言ってる意味がわからずツナは困惑してしまっていた。

「あなたのせいで私はもう何もかも滅茶苦茶なのです!! あなたのせいでお姉様はあんな言葉を!!」

黒子は思い出す。美琴に気を遣われ、何も悪いことをしていないのに謝罪されたことを。

「あなたは疫病神ですの!! もう私の前に現れないで下さいまし!!」

そう言うとき黒子はレポートを使ってどこかへ消えてしまった。

黒子のあまりの圧力にツナは追うことすらできなかった。

しかし追うことはできなかったのは黒子が怒りをぶつけてきたからではなかった。

（黒子が……泣いてた……）

怒りだけをぶつけていた黒子。しかし黒子には涙が浮かんでいたのだった。

（黒子……）

黒子と別れた後、ツナは佐天の寮に戻った。戻った後、黒子に連絡したが連絡はつかなかった。そこで黒子に何があった知る為に初春に連絡し詳しい詳細を求めた。

『ということがあったらしいんです』

「そっか……」

初春から事件の詳細を聞いたツナ。事件の概要と顛末を知ったツナは複雑な気分になってしまっていた。

「それで黒子は？」

『わかりません。例の学生のことと事件の関係者を調べてくれと電話で頼まれて……今、そのことについて調べてる最中なんです』

「わかった。何かわかったら俺にも教えて」

『わかりました』

初春から黒子のことを聞くとツナは通話終了のボタンをタップした。

「黒子の様子はどうだ？」

「わかんないって」

「そうか……」

「とりあえず今は初春からの情報を待つしかねえな。敵がどこにいるかわからねえ以上、どうすることもできねえしな」

「うん……」

リボーンは冷静に状況を判断する。リボーンという言葉は正しいとはわかってはいるがツナは落ち着いてはいられなかった。

その時だった

「ん？」

リボーンのスマホかに連絡が入る。リボーンは即座に電話を出す。「俺だ」

リボーンは電話に出ると誰かと話し始める。黙って相手の会話を聞き始める。

「わかった。すぐに向かわせる」

そう一言だけ相手に伝えるとリボーンは電話を切ってツナの方を向いた。

「ツナ。緊急事態だ」

「緊急事態?」

「ミサから連絡だ」

「ミサから? 何かあったの?」

リボーンに何があったのか尋ねるがすぐには答えなかった。

10秒程、黙っていたリボーンがようやく口を開いた。

「あの実験が再開される可能性が出てきたらしい」

「え……!?!」

リボーンから伝えられた内容にツナは驚愕のあまり固まってしまった。

「正確に言うなら新たにあの実験を再開させるようとしている勢力が学園都市で暗躍しようとしているらしい」

「い、一体……誰が……!?!」

「それは今、ミサたちがミサカネットワークを使って調べているらしい。とにかくお前は今から病院に向かえ」

「うんっ!」

ツナはXイックスBバーUナーNナーEナーR用のヘッドフォンを装着すると慌てて寮から飛び出した。

「あれ? ツナさん帰ってないんですか? ツナさんの声が聞こえたと思っただけですけど」

「帰ってねえぞ。お前の気のせいだよ」

風呂から上がった佐天がリボーンに尋ねる。リボーンは顔を佐天の方を向けつつも、視線は寮の扉の方を向いていた。

(油断すんじゃないぞツナ)

一方。その頃黒子は。

「とりあえず応急手当は完了しましたわね……」

現在、黒子は自分の寮に戻ると風呂場にこもり、謎の女から受けた傷を応急処置を行っていた。

（まだリタイアする訳にはいきませんの……お姉様の身の周りで何かが起こりつつあるんですから……）

通常であれば入院する必要性がある程の負傷。しかし美琴に危機が迫っていると知った黒子はいても立ってもいられない状態にあった。

そして初春から連絡が入る。

『白井さん！ 大丈夫ですか！』

「私の方は問題ありませんの。応急処置は今しがた終えたところですの」

『応急処置って……』

「それよりも私が頼んでいた件の方は？」

『は、はい……』

初春が心配するよりも黒子は初春に依頼していた内容を求めた。電話越しからでも圧力を感じた初春は調査結果を話し始める。

白井が戦った相手の名は結標淡希^{むすじめあわき}。霧ヶ丘女学院の2年にして大能力者^{レベル4}。能力は結標自身が言っていたように物に触れずとも物をテレポルトさせることができる座標移動^{ムーブポイント}。能力開発際に能力を暴発

させて大怪我を負ったという経歴が残っている。そしてその大怪我がトラウマになり自分自身をレポートさせることができなくなつた。

「そしてキャリアケースの方なんですが……」

初春はキャリアケースを運んでいた被害者たちのことを語る。彼らは運び屋であつたことが判明。しかしキャリアケースの中身のことを知らずに運んでいたらしく事件が解決の為の糸口にはなりそうになかつた。

一方でキャリアケースの強奪犯は確定ではないがおそらく学園都市と敵対するの外部勢力の可能性が出てきたらしい。

(一体、結標は何者なんですか……)

ツリーダイアグラム
樹木図の設計図が破壊されたことを知り、外部勢力との繋がり持つ。黒子には結標の正体がますます気になってしまっていた。

『それと未確認情報なんですけど。結標は案内人だそうです……』

「何ですか?」

『実は結標が窓のないビルの案内人ないかという噂があるんです』
「っ!?!」

窓も扉もないビルと聞いて黒子は驚きの表情を見せる。なぜならその場所は学園都市の統括理事長がいるとされる場所だからである。「それは本当なんです? それは都市伝説や噂レベルの話ですよ」

『そ、そうですね。現に結標は霧ヶ丘女学院を頻繁に欠席しているんです。しかも特別公欠で。風紀委員ジャッジメントの活動じゃないのにおかしくないですか?』

(その噂が事実なら……)

結標が窓も扉のないビルに入れる存在であれば普通の人が知らない情報を知つてもおかしくないと黒子は考えた。

「とにかく早く捕まえないと。初春。結標の逃走ルートを」

『ええ!? まさか一人で行く気ですか白井さん!』

「当然ですの。このままやられっぱなしでいられませんの」

『無茶ですよ!!』

結標の元に向かおうとする黒子を止める初春。それもそうだろう。全快状態で全く歯が立たなかった上に相手に一矢報いることすらできなかった。今の状態の黒子が結標の元に向かっても勝算はほとんどないのだから。

「今度は遅れは取りませんわ」

『もしものことがあったらどうするんですか!! 冷静になって下さい!!』

「私は冷静ですの。とにかく結標の逃走ルートを」

『1人でなんて無茶です!! 沢田さんに協力を要請しましょう!!』

「その名を口にするなど言っただけですの!! あの男の力だけは絶対に借りませんわ!! それにこれは学園都市の問題!! いつまであの男の力に頼っているんですの!!」

『理屈はわかりますけど、今はそんなことを言ってる場合じゃないですよ!!』

「もういいですの。なら私1人で行きますの」

『ちよっ!? 白井さん!! 白井さん!!』

黒子は一方的に電話を切る。初春は黒子の名前を何度も呼ぶが黒子からの応答なかった。

「こうしちゃいられない! 沢田さんに連絡しないと!」

黒子が出て行ってから数分後。

「黒子……」

美琴が寮を帰ると風呂場には包帯と応答キッドがそのまま置かれたままになっていた。それを見美琴は拳を強く握り締めて怒りに震えていた。

そしてツナは。

「ミサ」

ツナは第7学区にあるカエル医者 of 病院。ミサの入院している病室に辿り着いていた。

「実験が再開される可能性があるって本当？」

「本当です。とミサカは事実を伝えます」

「そんな……」

「だからミサカのことを助けて下さい。とミサカお願いします」

「ミサ……」

ミサは頭を下げてツナにお願いする。そんなミサを見てツナは少し驚いていたがすぐに真剣な眼差しとなった。

「わかった。情報を教えて」

標的（ターゲット）260 樹木図の設計者（ツリー
ダイアグラム）

「それで実験の再開する可能性があるってどういうことなの？」

「最近、世界中の国々が宇宙に向かってシャトルを打ち上げてることはご存知ですか？ とミサカは尋ねてみます」

「そういえば最近、テレビのニュースでそんなことを言っていたような……それがどうしたの？」

「それは樹木図ツリーダイアグラムの設計者を狙っているんです。とミサカは説明します」

「樹木図ツリーダイアグラムの設計者って……宇宙にある学園都市が作った凄いコンピューターでいいんだよね？」

「その認識で間違っていないませんよ。とミサカはツナのぎっくりした説明を肯定します」

「それで何で樹木図ツリーダイアグラムの設計者を世界中が狙ってるの？」

「樹木図ツリーダイアグラムの設計者は学園都市にしか作れないスーパーコンピューターであり、正しいデータさえ入力すれば完全な予測が可能性だからです。とミサカは樹木図ツリーダイアグラムの設計図の希少価値について伝えます」

「だから世界中の国が狙う訳か……」

樹木図ツリーダイアグラムの設計図の凄さを知ってツナは世界中の国々が樹木図ツリーダイアグラムの設計者を狙う理由を理解する。

（そういえば木山さんも……）

ツナは木山が教え子たちを救う為に樹木図ツリーダイアグラムの使用許可を求めていたと言っていたことを思い出す。

「本来であれば奪われないよう人口衛星おりひめ1号の中に搭載させている……はずでした。とミサカは過去形で答えます」

「どういうこと?」

「世界中のミサカからの情報によるとどうやら樹木図ツリーダイアグラムの設計者が破壊されていることが判明しているみたいなんです。とミサカは衝撃の事実を明かします」

「ええ!?!」

学園都市しか作れないスーパーコンピューターが破壊されたと知ってツナは驚きの声を上げる。

「でもちよつと待って! 壊れてるんなら回収したって意味がないんじゃないの!」

「回収されたのは樹木図ツリーダイアグラムの設計者の残骸です。とミサカはより正確に情報を伝えます」

「残骸……つまり部品つてこと?」

「その通りです。とミサカは答えます。そして世界の国々はこの残骸を手に入れて残骸から樹木図ツリーダイアグラムの設計者を作り直そうとしているのです。とミサカは伝えます」

「そつか……今が手に入れる絶好のチャンスつてことか」

ツナは理解する。今までは衛星の中で嚴重に守られて手が出せなかったが、衛星が破壊されたことによって嚴重な守りが解かれ無防備な状態。この好機チャンスを逃さない為に国々が動き始めたのだと。

「そして一方通行アクセラレータが絶対能力者レベル6になる方法を導き出したのは樹木図の設計者なんです。とミサカはあの実験の真実を伝えます」

「それつて……!?!」

「もし樹木図ツリーダイアグラムの設計者が復活すれば絶対能力進化計画レベル6シフトを再開される可能性があると訳です。とミサカは一番伝えたいことを伝えます」

「つ!?!」

絶対能力進化計画レベル6シフトが復活するというカラクリを理解し驚愕してしまっていた。

「ちよつと待って! 確か樹木図ツリーダイアグラムの設計図の残骸を世界中が回収してることとは世界中で樹木図ツリーダイアグラムの設計者が復帰する可能性があるって!?!」

「現在、8カ国と19の組織が残骸を狙っています。とミサカはミサ

カネットワークで得た情報を暴露します」

「そんなに!?!」

「ですが復帰する可能性のある残骸は1つだけでその残骸はこの学園都市にあります。とミサカは有力な情報を伝えます」

「じゃあ学園都市にある残骸を破壊すれば全て終わるってこと!?!」

「その通りです。とミサカは肯定します。現在、学園都市に残っているミサカたちが残骸の行方を捜索中です。とミサカは現在の捜査状況を伝えます」

「それなら……」

世界中で樹木ツリー図ダイアグラムの設計者が復活すれば流石に厳しいと思っていたツナ。しかし残骸が1つでそれも学園都市にあるのであれば話は変わって来る。

(今度こそ! 終らせるんだ!)

ジャッジメント
風紀委員177支部。

「繋がらない……」

初春は応援の要請の為にツナに連絡していた。だがツナは電話に出ることはなかった。ツナはミサに病院に呼ばれた際に携帯を忘れて出てしまったからである。

「お願いです! 繋がって下さい!」

黒子を止めることができなかつた今、頼れるのはツナしかない。初春はツナが電話に出てくれることを祈っていた。

一方。その頃。

「見つけたわ」

美琴は自分の能力で監視カメラをハッキングして何かを見つけていた。

「よし！ これで奴の元に！」

ハッキングで誰かの場所を特定したのか美琴はどこかへ向かおうとする。

『超能力者^{レベル5}って呼ばれようが超電磁砲レールガンの異名で呼ばれようがお前は人間だ。1人でできることなんてたかが知れてる。何でもかんでもできる訳じゃねえ。だから1人で背負おうとすんな。巻き込みたくねえっていう気持ちはわかるが、お前には頼れる仲間がいるだろ。仲間に頼ってればもつと早く解決できたはずだぞ』

『仲間ってのは自分の大切な者の為に死ぬ気になれる奴らのことだ。仲間の為に死ぬ気になれず仲間を失うことは死と同義だ。間違うなとは言わねえ。ただ奴らを本当の意味で死なせたくなえなら仲間を頼れ』

(そうだったわよね……)

どこかへ行こうとする美琴であったが前にリボンに言われた言葉が脳裏に浮かんだ。

「沢田」

美琴はツナに連絡をすることを心に決めるとポケットから携帯を取り出しツナに電話をかける。

「もうっ！ 何で出ないのよ！」

しかし現在、ツナは携帯を持っていない。初春と同じく美琴もツナに電話が繋がらなかった。

「ああ！ もう！」

時間がないと判断したのか美琴はツナに連絡をつけることを諦め、どこへと向かって行ったのだった。

標的（ターゲット） 261 超電磁砲（御坂美琴） V

S座標移動（結標淡希）

それぞれの思惑が交差する中。

（一刻も早く見つけなければ！）

黒子は夜の学園都市をテレポートで移動していた。今回の事件に美琴が巻き込まれてる可能性があるのと知った以上、黒子はなんとしても結標を見つけ出さなければならなかった。

（どこにいるんですの!?! 結標淡希!!）

結標が見つからないことに黒子は焦っていた。自ら初春との連携を絶った為、黒子は結標を捜すことが難しくなっているのである。

時間が経過するとのに比例して焦りとイライラが募っていく黒子。

その時だった

ドオオオオオオン！

「っ!?!」

黒子の近くで凄まじい轟音が響き渡る。黒子は轟音とした方に即座に視線を向けた。

「まさか!?!」

黒子の視線の先には大量の電気が広範囲に渡って発生していた。黒子はすぐに理解した。あの電撃が何なのかということも。

建設途中の建物。しかし周りは建設用具や建設車両、そして黒いスーツを身に纏った男たちが倒れていた。

「出てきなさいよ卑怯者。いつまでコソコソ隠れているつもり?」

そこには冷たい視線を鉄骨の上の方に向けている美琴がいた。

「別にコソコソしてるつもりはないけど。私はここで捕まる訳にはいかないの。どんな手を使っても生き延びさせてもらおうわ」

美琴の視線の先にはキャリアケースを携えた結標が鉄骨の上で美琴ことを見下すような表情で美琴のことを見ていた。

「無理よ。自分でも気づいているんでしょ? あんたの能力にはクセがある。仲間の体や周りの物はバンバン飛ばしてくるクセに自分自身は座標移動で飛ばさずに逃げるだけ。あんたは自分の体を飛ばせない。書庫に残ってた暴走事故の件が関係してるんじゃない?」

美琴は事前に調べたていた情報と今までの戦いの傾向から結標の弱点を導き出した。余裕の笑みを浮かべていた結標だったが、美琴の言葉を聞いて真剣な眼差しへと変わる。

「例えばだけど慎重になり過ぎるあまり2、3秒のタイムラグが生じる……とかね?」

言葉でじわじわと結標を追い詰めていく美琴。するとポケットからゲームコインを取り出すと空中に放った。

「3秒あったら何発撃てるかしら?」

美琴は空中に放っていたコインを右手で握ると、どこか自信ありげな表情で結標を挑発する。

「うふふ。あなたの方こそ焦っているようね」

真剣な眼差しで聞いていた結標。しかし凶星だったのか諦めたような笑みを浮かべていた。

「そんなに残骸が組み直されるのが怖いのかしら? それとも実験が再開するのが怖いのかしら?」

今度は結標の方から美琴に向けて挑発が行われる。結標の言葉を聞いて美琴は黙ったまま俯いていた。

「あんなもの放っておけばいいのに。あれらは実験の為に作られたのに。だったら本来通り壊せばいいのよ」

「本気で言ってるの?」

「だって結局、貴方は私と同じでしょ? 自分の為に戦ってる。後悔、悲観、そして怒り。ちっぽけな自己満足の為に」

「そうね。私をムカついている。私の欠陥がブチ切れそうなくらいにね」

美琴はおもいつきり拳を握り、怒りを露にしていた。

「あの馬鹿……相当焦ってたのね……」

美琴は思い出す。寮の風呂場にあった散らかった包帯と応急措置キットを。美琴はわかっていた。結標と戦って黒子が負傷したのだと。そして自分を巻き込まない為に慌てて飛び出したのだと。

「ええ!! 私にはムカついてるわよ!!」

美琴の怒りが爆発し、美琴の全身から大量の電流が迸る。

「ウチの後輩を巻き込んだ事!! 目の前のクズと!! この状況を作り出した自分に!!」

美琴が雷撃を喰らわせようとした時、結標は美琴の頭上に大量の鉄骨がテレポートさせる。だが美琴は鉄骨を磁力で操って宙に浮かし落下を防ぐ。

「そんなスッカスカの盾で!!」

落下してくる鉄骨をもとめせず美琴は結標に向かって雷撃を放つ。すると美琴の前にスーツを身に纏った男たちがテレポートさせられる。

「さて問題。この中に無関係な一般人が何人、混じっているでしょうか?」

「っ!」

結標の言葉を聞いて美琴は慌てて電撃を解除する。美琴は慌てて無関係な人間に電撃が直撃していないか調べる為に地面に倒れた男たちの元に駆け寄る。

「何よ……気絶しているのは全員、あいつの仲間じゃない……」

倒れている男たちを調べたが無関係な一般人などいなかった。

「くっ……!?!」

美琴は結標のいた場所を見たがそこには結標はすでに逃げた後だった。ハメられたことに気づいた美琴は悔しそうな表情を浮かべていた。

そして美琴は結標を追う為に走り出す。

(お姉様……)

建設現場の入り口。そこには建設現場から走り出す美琴の姿を遠目で見っていた黒子がいた。

(今の言葉だけ伝わりましたの。貴方がどれ程、私のことを思いやつてくれているのか……)

黒子は美琴と結標の一部始終を全て見ていた。そして美琴が結標に対して言ったことも全て聞いていた。

「それでも貴方の馬鹿な後輩は戦い抜くと決めたからには引き返す訳にはいきませんの……!」

一部始終を見てもなお、黒子の闘志は全く折れてはいなかった。

「さあ行きますわよ。白井黒子。必ず帰る為に戦場の一番奥深くへ」

自分を奮い立たせる為の言葉を放つと、黒子はレポートでその場から消える。

ミサの病室。

「お姉様?」

「え?」

「今、お姉様の力を感知したと外にいるミサカから連絡が。とミサカは突然のことに驚きを隠せません」

「美琴の力って……まさか!!」

美琴の力が感知されたと知って、ツナは美琴も残骸を破壊する為に動いているのではないかと推測する。

その時、

『おい。聞こえるかツナ』

「リボーン?」

ツナのヘッドフォンからリボーンに無線で連絡が入る。なぜここでリボーンが連絡してきたのかわからずツナは疑問符を浮かべる。

『初春からお前の携帯に連絡があつてな。俺が代わりに出たんだがお前を伝えたいことがあるのにお前が携帯を忘れたせいで初春は困ってたみたいだぞ』

「あ。ごめん……」

『それで伝言だ。何でも黒子が1人で窃盗犯を捕まえに言ったらしい。初春の制止も聞かずにな』

「ええ!?!」

『それでお前に黒子の救援に向かつて欲しいらしいぞ』

(救援……)

黒子を助けて行けば絶対能力進化計画の復活を阻止できなくなりミサたちが再び死ぬ可能性がある。逆に残骸を破壊に向かえば黒子が死ぬ可能性がある。究極の2択を前にツナはどうすればいいかわからず迷ってしまった。

『それと窃盗事件を起こした奴らと、黒子が戦った奴のことがわかったらしいぞ。窃盗事件の犯人は学園都市の人間じゃなくて外部組織と思われる奴ら。そして黒子を襲った犯人は霧ヶ丘女学院の結標淡希。どうやらこいつら手を組んでるらしいぞ』

「外部組織……?」

リボーンから外部組織という単語を聞いてツナは何か引つ掛かっていた。

(もしかして……!?!?)

キャリアケース強奪事件の犯人が外部組織だと知ってツナは重要なことに気づいた。

『どうすんだツナ？ 悩んでる時間はねえぞ』

黒子の救援か実験の阻止で迷っているであろうツナにリボーンはどうするのか尋ねた。

「リボーン！ 今から初春に電話して！」

『どうしたんだツナ？』

「説明してる暇はないんだ！ とにかく初春に連絡して黒子の行方を調べてって伝えて！」

『わかった』

ヘッドフォン越しからツナの慌てているのがわかり、ツナは何かあると悟ったりボーンは即座にツナの言われた通りにする。

「何かあったんですか？ とミサカは無線での会話から重要なことがあったと察します」

「わかったんだ。残骸の在りかが」

『どういうことですか？ とミサカは詳細を求めます』

「今日、学園都市で車で運んでいたキャリアケースが盗まれるっていう事件があったんだ。そのキャリアケースを取り返す為に窃盗犯を俺の仲間が捕まえに行って倒すことに成功したんだ。けどキャリアケースを回収しようとした時に結標淡希っていう人に邪魔されて返り討ちにあつたらしくってキャリアケースを奪い返すことができなかったんだ」

ツナは今日、初春から聞いたキャリアケース強奪事件の詳細をミサカに説明する。

「それでキャリアケースを車から奪った奴は学園都市の人間じゃなくて外部組織と思われる人たちで結標淡希と手を組んでるみたいなんだ」

「ま、まさか……とミサカはツナの言いたいことを理解します」

「うん。その外部組織っていうのはおそらく残骸を手に入れようとして学園都市にやって来たどこかの国の人たち。その外部組織が奪ったキャリアケースの中身がおそらく残骸。そして今、残骸を持っているのが結標淡希だよ」

標的（ターゲット） 262 仕返し

キャリアケースを強奪した犯人は残骸を手に入れる為に学園都市にやって外部組織。さらにその外部組織と黒子を倒した女、結標淡希が手を組んでいることが判明。このことからキャリアケース強奪事件と樹木図ツリーダイアグラムの設計図の残骸を手に入れようとしている勢力が同一犯であることをツナは導き出す。そして黒子が結標淡希を捕えようとしていると聞いてツナは動き出そうとしていた。

一方で逃げた結標を追う美琴は。

「クソツ!! どこにみんなのよあの女!!」

結標が自分自身を座標移動ムーブポイントで移動させることができないことを知っている美琴は結標は自分の足で逃げていると推測。なのでそう遠くへ逃げてはいないと考え自分の足で結標を追っていた。

とあるオフィスビル。

「ふふ。私自身を移動テレポートさせる事はないとタカをくくってたみたいね」

結標は見逃げた自分を追い掛けて為に街を走っている美琴をビルの中から見下すように見ていた。結標は自分をテレポートさせることができないと思っっている美琴の心理を逆手に取り、自分自身をビルの中テレポートさせて美琴の追跡を撒いたのである。

「うくつ……」

美琴を撒くことには成功したものの、無理やり自分をテレポトさせた反動で体が拒絶反応を起こし吐き気を催した。結標は片膝をつき口元をハンカチで押さえていた。

(その気になればいつだって克服できるのよ……その気になりさえすればトラウマなんて……)

拒絶反応を起こした自分に発破をかける結標であったが、自分の弱さから目を背け強がっているようにしか見えなかった。

その時だった

ドスッ!

「あ…!?!」

鈍い音と同時に結標の右肩にコークスクリューが刺さる。結標は何か起こったのかわからず結標は困惑してしまっていた。

「そうそう克服できないからトラウマと言うのではなくて?」

結標が声をする方へと視線を移す。そこには机の上に座り、見下すかのような視線で黒子を見ていた。

「白井黒子!?! なぜこの場所!?!」

「このコルクはお返ししますわ。それとついでこちらも
「がっ!?!」

動揺する結標に対して、黒子は金属矢をテレポトさせる。テレポトさせた金属矢は容赦なく結標の体を突き刺した。結標は片膝をついてしまう。

「慌てなくても急所は外していますの。ま。やられた場所にお返しただけですけど」

結標にやられたことを余程、根に持っていたのか黒子は皮肉を放つた。

「よかったら。それお使いになつて」

そう言うのと黒子は結標の目の前に止血剤をテレポトさせた。

「せいぜい床に這いつくばって傷の手当てをして下さいな。そこまでしてやっとおあいこですよ」

「ふふ……こういう子供みたいな仕返しは嫌いじゃないわ」

「そういえば先程の問い。まだ答えておりませんでしたね。なぜこの場所がわかったのか。答えは単純ですの。貴方と私は大変よく似ていますもの。この状況下で同系統の能力。加えて同じ傷を負ったものがどの場所へ逃げ込もうと考えるか……私に予測できないとでも？」

「そんなハツタリで……!?!」

黒子の言葉を否定しようとした結標。しかし黒子が同じ場所に傷を作ったのが自分の行動パターンを読みやすくしようとしたことに気づく。そのことから結標は黒子が自分の位置を割り出したのも偶然ではないということを理解する。

「さてと……提案なんですけど。大人しく降伏してもらえませんか？」

お互いの為に」

「それはどうかしら？ 本当に超電磁砲を巻き込むつもりなら初めから連れて来ていたのではなくて？ それにさっきの奇襲。このコルク抜きで私の脳でも心臓でもぶち抜けばとつく勝敗は決していたのに……」

結標は笑みを浮かべる。それは黒子がなぜこんな回りくどいやり方をしたのかわかったからである。

「よほどあのお優しい常盤台のエースに心酔しているのね。貴方がそこまで守る価値があるのかしら？ 超電磁砲が思い描く身勝手でおセンチな世界を……」

「護りたいですわよ」

黒子を煽ってくる結標。しかし黒子は一切、惑わされることなく答えた。

「護りたいに決まっていますの。お姉様は望んでいますのよ。こんな状況下でさえ私と貴方が争いなどしなくても済む方法を……その気になればコイン1つで全てを粉々に打ち砕くこともできる。だからこそそれをしない。貴方のことまで助けようとしている。全く身勝手ですよ。そんなんだから誰にも言えない苦勞を背負い込んで……」

美琴を何よりも敬愛する黒子はわかっていた。美琴の心の内を。

「そんなお姉様の思いを!! この白井黒子が踏みにじるとお思いですの!!」

黒子は叫ぶ。そんな優しい美琴だから、心の底から敬愛し護りたいと黒子は心の底から思っているのである。

「さあ。これから貴方を私の手で日常に帰して差し上げますわ」

「フ……ならその思いごと貴方を踏みにじってやれば私の勝ちかしらね」

ミサの病室。

『ツナ。黒子の居場所がわかったぞ』

「本当!?!」

『ああ。わずかだがオフィスビルのガラス越しにキャリアケースを持った女と黒子が映ってたらしい』

「わかった。今から向かうよ」

そう言うツナはポケットから27と書かれた手袋を装着するよ目を閉じる。数秒後、ツナの額にオレンジ色の炎が灯り、瞳の色がオレンジ色に変貌する。そして装着していた手袋は赤いグローブへと変貌する。

「場所はわかった。行って来る」

「気をつけて下さい。とミサカは無事を祈ります」

ミサに行つて来ることを伝えると、ツナは病室の扉を開ける。そして窓の淵に乗ると、そこからグローブに炎を灯すと炎を逆噴射させて夜の学園都市を飛んでいく。

『しかし今回はお前にしちやあ、珍しく頭が回ったじゃねえか』

「聞いてたのか」

『初春に連絡してる間も無線は切ってなかったからな』

「そうか」

リボーンに向けて話しているつもりはなかった為、リボーンは知らないと思っていたツナであったが、理由を聞いて納得する。

「リボーン。佐天のことなんだが」

『初春から連絡を受けて黒子を助けに行っただって言うておいたぞ』

「助かる」

『こつちのことは気にせず、おもいつきり暴れてこい』

「ああ」

リボーンからの激励を聞いてツナは炎を強めてさらに加速していく。

(もうあんな悲劇を繰り返えさせない!! 今度こそ終らせてやる!!)

俺の誇りにかけて!!)

標的（ターゲツト） 263 狂人

オフィスビル

「右!？」

黒子の右方からノートパソコンが飛んでくる。黒子はその場から一歩下がって飛んでくるノートパソコンを躲した。

「やはり……軍用ライトの動きを注視すればある程度、回避するすることは可能ですの!」

黒子は前回の戦いから結標が物体をテレポートさせる際に懐中電灯を使って標準を定めていることを学習していた。

ノートパソコンを躲した黒子は一気に結標の間合いへ入っていく。しかし結標は即座に懐中電灯を上に向かって薙ぎ払う。するとオフィスにあるデスクや椅子といったあらゆるものがテレポートされ、黒子の目の前に落下していく。

（また目隠しの盾ですの!？ そう何度も引っ掛かりませんわよ!）

黒子は落下してくる物体のを落下地点を予測し、落下物の盾の先へとテレポートする。これも前回の戦いから学んだことである。

しかし黒子の目の前に結標はいなかった。黒子の行動を呼んでいたのか結標はキャリアケースの取っ手を掴んでキャリアケースで殴りかかろうとする。事前に黒子はデスクからくすねておいた鉛筆をテレポートさせる。テレポートした鉛筆はキャリアケースの取っ手の部分に刺さり取っ手を破壊する。

黒子のテレポートによって突き刺さった物体は強度に関係なく突き刺さっていく。理論上、紙でダイヤモンドを切断することも可能である。

取っ手を破壊したことキャリアケースは結標の手から離れ宙を舞う。

（この距離なら!）

今度こそ間合いに入れると確信した黒子は結標に殴りかかる。しかし結標は取っ手の外れたキャリーケースをテレポートさせる。

「がつ!？」

テレポートしたキャリーケースは黒子の頭部に直撃。黒子は後方に倒れてしまう。

一方で結標は懐中電灯を後ろへ向けた。すると倒れかけて黒子が結標の背後へとテレポートさせられる。

「ガハッ!？」

空中で仰向けになった状態で黒子は肘鉄を結標の背中に叩き込む。黒子は咄嗟に機転を利かせて結標のテレポートを逆に利用したのである。

「はあ……はあ……!？」

結標に肘鉄を喰らわせたのはよかったが、着地までは考えてはいなかった為、黒子はそのまま床に落下。さらに応急措置を行っていた傷が開いてしまう。

「このっ……!？」

仰向けで倒れている黒子に向かって結標は再びオフィスにある、ありとあらゆる物を黒子の頭上に落下させる。そして結標のテレポートさせた大量の物体が黒子の上から容赦なく降り注ぐ。

「っ……!？」

黒子は瓦礫の雨を躲すことができず瓦礫の山に埋もれてしまっていた。瓦礫に埋もれたのは下半身だけであり、上半身が瓦礫に埋もれることは回避された。

「白井さん。避けないと死ぬわよ」

結標がそう忠告すると小さな本棚を倒れている容赦なく頭上にテレポートさせると本棚を落下させる。

「動きがない所を見るともう空間移動は出来ないみたいね。痛みで計算式が組み上げられないのかしら……？ 全く……デリケートな能力を持って困りものよね」

しかし本棚は黒子を直撃しておらず、黒子の真横に落下していた。結標は敢えて先に忠告することで黒子がテレポートできるかどうか

確認したのである。

「ねえ白井さん。こんな話を知ってるかしら？」

黒子は体に刺さっていたコークスクリューと金属矢をテレポートで抜くと語り始める。

その昔、強大な能力者とする組織が存在した。組織は能力者を増やす為にクローンを作ることにした。しかし結果は失敗。出来上がったクローンはオリジナルに満たない出来損ないの存在だったと。

「なぜだと思う白井さん？　なぜクローンは失敗作だったのかしら？」

オリジナルと遺伝子レベルで同じ能力開発を受けたというのに。これって脳以外の何かが関係してることじゃない？　それを突き止めれば人間以外でも能力を使えるってことにならないかしら？」

「何を言っていますの……!!?　自分だけの現実が人間以外に適応されるだけでも……!!?」

「現実をどんな形で把握するのは時間割りで行われている能力開発はそこよね」

結標は語る。学園都市の能力者は第六感といった特殊な感覚ではなく自分だけの現実と意図的な演算能力と判断能力を使って現実の観測と分析を行い、その結果に応じてミクロな世界の確率を不自然なに変動させ何らかの現象を産み出している。

「与えられた情報の観測と分析。その結果として発言するのが能力ならわざわざ人間の脳を使う必要はないと思わない？」

結標は人差し指で額の部分を指しながら自分の仮説を語る。

「原則を観測することぐらい人じゃなくても可能でしょう？　そうですね。例えば人間の機能を持つ演算装置を使えば……」

「馬鹿げてますわ……その機械の心臓部に能力を宿すつもりですか?!?　誰がそんな戯言ことを!?!」

「ええ。この程度では無理でしょうね。けど樹木図ツリーダイアグラムの設計者があれば予測はできる。人間の代わりに超能力を扱える個体は存在するのか。私はそれを知りたいの」

ここにきてようやく結標は自分の野望を黒子に話した。

「ねえ白井さん。貴方は初めてその能力を手にした時、どんな気分

だった？ 私は正直、恐ろしかったわ。こんな力があることが怖かった。他愛のない空想で人すら殺せてしまうこの力が」

結標の脳裏には幼い自分の後方に能力によって積まれた大量の物体が浮かんでいた。

「この能力がはずれ研究、解析されて世界の役に立っていく。そう思って耐えていたのに」

結標は天井を見つめながらその呟く。その目はどこか悲しげであつた。

「人じゃなくも人じゃなくてもいいなら。なぜ私にこんな力を与えたの？」

天井に向けていた視線を下に向ける結標。先程の悲しげな目とは違い、今度は憎悪の目に変わっていた。

「学園都市には自分と同じく能力になじめずに苦しんでる子たちがたくさんいるのよ。あの外部の黒服とは違う。本当の仲間」

そう言う結標の脳裏には自分と同じ境遇の仲間たちの姿が浮かんでいた。

「白井さん。貴方にだってあるはずよ。能力なんて怪物に振り回されて他人を傷つけてしまったことが」

結標は黒子の前まで移動するとしゃがんで、両手で黒子の頬に優しく触れながらそう言った。

「思ったはずよ。なぜこんな力を持ってしまったのか。私にはわかる。だって私たちは似てるもの」

そう言う結標の表情は今までにないぐらい優しい表情だった。

「どう白井さん？ 私たちと共に真実を知る気があるなら私は貴方を歓迎する」

ここで結標は黒子を仲間に引き入れようと優しい声音で勧誘の言葉を放った。

結標の言葉を聞いて黒子はゆっくりと立ち上がる。

「お断りですわ。そんなもの」

黒子は左手で右腕に巻いている風紀委員の腕章を抑えながら結標

の勧誘を断った。

「そんな自分に酔った台詞でこの白井黒子を丸め込めると思っていますの？　もしかして貴方、私に冷えた目で見られることでゾクゾクしたかったのかしら」

「分からないの!?!　私たち能力者は怪物にならずに済んだのかもしれないのよ!?!　こんな危険な力を一生……」

「どんな可能性を示されたところで私たちの能力が消えることはありませんもの……どう使うかは自分次第」

結標は必死に自分の思いを主張するが黒子には一切、揺ぐことはなかった。

「力が怖い？　傷つけるから欲しくない？　能力カがあろうとなかろうと貴方が目的の為に人を傷つける人間であることに変わりはありませんの」

そう言うと黒子はフラフラしながらゆっくりと結標に向かっている。結標は咄嗟に懐中電灯を構える。

「そんなボロボロの体で何……が……」

すでに満身創痍の黒子を見て結標は相手にすらならないと思っていたが、覚悟に満ちた黒子の表情に気圧されてしまい持っていた懐中電灯を落としてしまう。黒子は最後の力を振り絞って結標に殴りかかる。

が、

パァン!!

オフィスに発砲音が響き渡る。発砲音の後、黒子は力なく倒れた。

「はぁ……はぁ……!?!」

撃ったのは結標であった。しかし結標は動揺を隠せておらず肩で息をしていた。

「あぁ……」

倒れた黒子を見て結標は動揺する。能力によって人を傷をつけたくないと言っていたのにも関わらず、銃で黒子に致命傷を与えたのだから。

結標は落とした懐中電灯を手取る。しかし自分の意思とは関係

なく能力が発動し懐中電灯はテレポートしてしまう。

テレポートする懐中電灯を見て結標は思い出す。能力開発の際に自分の足が壁にめり込み、大怪我した時のことが。

「ああああああ!!」

結標は両膝をついて頭を抱え込みながら絶叫する。そして能力が暴走しオフィスのガラスが割れ、オフィス内にあったありとあらゆる物がテレポートされていく。

「はあ……はあ……」

能力による暴走が収まったが、結標は胃液が逆流し体外に排出してしまった。

「許さない……貴方だけは!! 貴方だけは許さない!! よくもこの私を壊してくれたわね!!」

結標は発狂しながら倒れている黒子に容赦なく蹴りを喰らわせていく。結標は自分で人を傷つけたのにも関わらず人のせいにしていく。最早、狂人にしか見えなかった。

「絶対に殺す!! 貴方がいなければ私はどうとでもなったのに!!」

一方、美琴は。

「はあ……はあ……お願い!! 間に合って!!」

今だ息を切らしながら黒子と結標のいるビルへと向かっていた。結標が逃げ込みそうな場所を片っ端から探したが見つからなかった為、美琴は監視カメラをハッキングして2人の位置を把握したのである。

「あれは……まさか……!?!」

美琴の上空にオレンジ色の光がもの凄い勢いで移動していく。それを見て美琴は驚くと同時に確信する。オレンジの光の正体を。

再びオフィスビル。

「ハハッ……」

銃の引き金を引いて黒子の息の根を止めようとした結標。しかし
またしても自分の意思と反して能力が勝手に発動し、銃は黒子の頭上
にレポートし頭部に直撃してしまう。

「仕方がないわよね……能力が暴発しちゃうんだから……」

結標は銃で黒子を殺すことを諦め、能力で黒子を殺すことを決め
る。しかしこの発言は、先程の発砲した行為をなかつたことにしよう
と自分に言い訳をしているようにしか見えなかった。

「あなたが悪いのよ……あなたが私を壊したんだから……」

無理矢理、笑顔を作りながら自分のやったことを正当化しようとする
結標。能力の補助の為に使っていた懐中電灯を手を持つことすら
できなくなつたので、結標は懐中電灯を使わず能力を発動しようとす
る。懐中電灯が無ければ標準を定めることができないうが能力を発動
させることはできる。しかもオフィスにはレポートさせることができ
るものがたくさん存在する。まさしく下手な鉄砲も数撃てれば
当たるである。

「さようなら白井さん」

優しい声音でそう言うと、結標はオフィスにあるとあらゆるものを
黒子の頭上にレポートさせる。そして黒子は避ける術もなく黒子
は瓦礫に埋もれてしまっていた。

「ハハッ……ハハ……ハハハ……アハハハハハ!! アハハハハハハ
ハ!!」

先程とは違い完全に埋もれ見えなくなった黒子。目の前の光景を
見て結標は狂ったように笑い始める。黒子に核心を突かれたこと
によって結標の本性が表に出てしまったのである。しかしそのせいで

理性が崩壊し笑うしかできなくなりました。

その時だった

「GURURU……GAOOOOOOO!!」

「っ!」

突如として動物の雄叫びが響き渡ると目の前の瓦礫の山が一瞬で石化する。狂ったのように笑っていた結標も何が起きたのかわからず笑みが消え、驚きの表情へと変わっていた。

すると石化した物体にオレンジ色の炎が纏い、物体は塵と化している。そこにはナツツを右肩に乗せ、黒子をお姫様抱っこしているツナがいた。

「さ、沢田さん……」

黒子は朦朧とする意識の中で少しだけ目を開きながらツナの顔を
確認する。

「待たせてごめん……」

標的（ターゲット） 264 答え

黒子の絶対絶命のピンチに現れたツナ。

（こいつ?! 一体どこから!?!）

結標はどこからともなく現れたツナの存在に驚きを隠せないでいた。なぜなら結標は動揺していたとはいえずツナの存在を全く感知できていなかった。

（ダメージを負ってない……!?!）

結標は気づく。黒子が全くダメージを負っていないことに。つまりテレポートによる落下した物が黒子に落下する前に黒子を助けたということ。

（そんなことが本当にありえるの……!?! 発火能力者に……!?!）

テレポートしたものが落ちるまでの時間はほんのわずか。空間移動系の能力者ではないツナがテレポート並の速さで移動したことに結標は驚きを隠せないでいた。

（いや……それよりも!!）

結標が一番、気になったのは瓦礫の山が石化したことである。正確には石化する前に聞こえたナッツの雄叫びである。

（本当に人間以外にも能力が……!?!）

瓦礫越しで直接、見えていた訳ではなかったがナッツの雄叫びが聞こえたとほぼ同時に瓦礫が石化した。つまりナッツの力によって瓦礫が石化したかもしれないと結標は推測する。

（もしかしてこの男は知っているの……!?!）

結標は人間以外の生物が能力を使えるのかどうかを知りたがっていた。そしてその求めていた答えの1つが目の前にあるかもしれない。そう思った瞬間、結標の口角が上がる。つまりツナとナッツに興味を抱いたのである。

本来であれば倒すか逃げるかのどちらかを選ぶべきなのが結標の知りたいという欲求がこの2つの選択肢を無くしてしまったのである。

超直感で結標が自分たちに興味を抱いていることを見透かしたツナは、黒子を抱えたままゆっくりと後ろへと移動していく。

「遅れてすまない。よく持ち堪えてくれた黒子。お陰で助かった」

「沢田さん……？ どうして……？」

「初春からお前を助けてくれて頼まれたんだ」

「そうじゃありませんの……私は……あなたに……」

『全部あなたのせいですの!!』

『あなたは何も知らず人の大切なものを奪う!! 奪われた者の気持ちを知らずに!!』

『あなたのせいで私はもう何もかも滅茶苦茶なのです!! あなたのせいでお姉様はあんな言葉を!!』

『あなたは疫病神ですの!! もう私の前に現れないで下さいまし!!』

黒子は思い出す。ツナに向かって吐いた暴言の数々を。

「お前が俺を敵視してるのは知っている。けどお前を護りたい気持ちは変わらない。それが俺の誇りだからな」

そう言っているとツナは黒子を壁にもたれかけるような体勢でゆっくり降ろす。

「ナッツ。 カンピオ・フォルマ モード・ディフューザ 形態変化。防御モード」

ツナがそう呟くとナッツがマントへと変化する。マントはツナに装備されるがツナは纏っていたマントを取ると、黒子にマントを纏わせた。

「ここで待っていてくれ。すぐに終らせる」

そう言っているとツナは向きを変えて、結標の方に向かってゆっくりと歩いていく。

（わかっていたはずですの……）

結標の方に向かってゆっくりと歩くツナの背中を見守ることしかできなかった。

（私はただ沢田さんに嫉妬してた……お姉様が私には見せたことなのな

い顔を沢田さんに見せたことが気に入らなくて沢田さんに怒りをぶつけることで現実から目を背けてようとした……)

本当はわかっていた。自分の力では変えることのできなかつた美琴がツナによって変わり始めたことが嫌で仕方がなかったことを。美琴が自分ではなくツナに夢中になっていたことが。

(それだけじゃない……沢田さんに嫉妬するあまり私は初春にも……)

ツナに怒りを覚えるあまり冷静な判断を失い、初春には怒りをぶつけてしまった。さらに初春の言葉にも耳を貸さず独断専行し、挙げ句の果てに結標に返り討ちに遭う始末。

(何がお姉様の世界を護るのです……何が学園都市の治安を護るジャッジメント風紀委員ですの……私が護っていたのはちっぽけな自分の自尊心……私はなんて醜い存在ですの……!?)

自分の弱さと自分のしでかしたこと。そして何よりも自分の愚かさに気づいた黒子は涙が止まらないでいた。

(沢田さん……)

一方で結標の前に移動したツナは。

「お前が結標淡希だな」

「そうよ」

「大人しく投降しろ。お前がツリーダイアグラムの設計図の残骸を持っていることはすでにわかっている」

「っ!？」

結標は初対面で何も知らないはずのツナが自分の目的とキャリアケースの中にある残骸のことを知っていることに驚きを隠せないで

いた。

「お前の目的は樹木図ツリーダイアグラムの設計図を復活させて絶対能力進化計画レベル6シフトを再開させることか？」

「っ!？」

（レベル6シフト計画……?）」

結標はツナが絶対能力進化計画レベル6シフトのことを知っていることに驚き、黒子は何のことかわからず困惑してしまっていた。

「驚きね。あの計画を知ってるなんてね。けど私はあの計画に興味ないの。ただ知りたいのよ」

「知りたい？」

「私がどうして能力を宿ったのか？ 私がなぜこんな怪物になってしまったか。その為に私は樹木図ツリーダイアグラムの設計図が必要なのよ」

「その為に仲間にキャリアケースを強奪させたのか？」

「少し違うわね。あいつらは私の仲間じゃない。私の本当仲間は別にいるわ。私と同じ痛みを知る仲間がね」

「痛み？」

「能力がなじめず人生を歪められた哀れな被害者。学園都市にはそういう人がたくさんいるのよ」

「……」

結標の言葉は嘘を言っていないことを感じると、ツナは考え込んでしまう。学園都市には能力が開花せず周囲となじめない人がいることを幻想御手事件レベルアップで知った。しかしその逆はあまり考えたことはなかったからである。

「そういうあなたも思ったことあるんじゃない？ 望んだ訳じゃないのに人を傷つけたこと。こんな力がなかったらよかつたって思ったこと」

「……」

結標の言葉にツナは反論できずにいた。今まで自分の力で多くの人間を傷つけてきた。なんなら人の命を奪ったことすらある。ツナ自身望んで得た力ではない。力を得て戦わなければ仲間を失うから、戦ってきたのである。

(まさか……沢田さんを……)

黒子は結標の思惑を理解する。おそらく人間ではないナッツが能力を持っているのではないということを感じ、仲間に引き入れようとしているのだと。

「その様子じゃ凶星のようね。どうかしら？ 私仲間にならないかしら？」

「何だと？」

「さっきも言った通り私は何で能力が宿ったのか、なぜ何で自分がこんな怪物になったのか知りたいの。そしてさらに言えば人間以外の個体に能力が宿るのかとかね」

「成る程。あの石化がナッツのものだと気づいた訳か」

「その発言。やはりあの猫の仕業だったのね」

結標は自分の推測通り、ナッツが瓦礫を石化させたと知って笑みを浮かべる。

「どうかしら？ 私と手を組まない？ あなたにとっても悪い話じゃないと思うわよ。あなたも私と同じで能力によって人生を歪められた者同士。きつと最高のパートナーになれるはずよ」

結標はツナを言葉巧みに騙し、ツナを引き込もうとする。

(もう少しよ……もう少しで……!!)

結標は後少しで自分が求めていた情報が手に入る。結標は必死で理性を保っていた。

「最後に1つ聞きたい」

「何かしら？」

「お前は木原幻生と繋がっているのか？」

前に操折から木原幻生がミサカネットワークを使って暗躍しようとしていることをツナは知った。しかし詳細は不明な上に推測に過ぎない。そこでツナはあの計画を知っている結標なら、あの計画の立案者である木原幻生のことを知っているかもしれないと考えた。

さらに前木原幻生は目的の為なら手段を選らばないマツサイエンティスト。結標の計画に興味を持ち、協力しているかもしれないとも思ったのである。

もし結標が木原幻生と繋がっているなら木原幻生の計画の詳しい詳細を知っているかもしれないとツナは思ったのである。

「木原幻生？ あんな危険な極まりない存在と手なんて組む訳ないでしょ。デメリットしかないわ」

「そうか」

「そろそろいいかしら？ あなたの返答を聞かせてもらいたいんだけど？」

これ以上、待つことができない結標はツナに自分の仲間になるかどうかの答えを求める。

「わかった」

するとツナは炎を逆噴射させて一瞬でその場から消える。そして落ちていたキャリーケースに向かって拳を叩き込む。ツナの拳によつてキャリーケースと中身の残骸は粉々に砕け散る。

「これが俺の答えだ」

「なっ!？」

確実に自分の仲間に取り入れられると思っていた結標。故にツナの予想外の行動に衝撃を隠せないでいた。

「な、何を!？」

「お前の言葉なんて信じちゃいない。俺が知りたかったのはお前と木原幻生に繋がりがどうか知りたかっただけだ」

「まさか!？ 私を利用したの!？」

「お前が俺たちに興味を持っているのはわかっていた。だから俺が黒子を運んでる間に残骸を持って逃げなかつたんだろう。まあそのお陰で容易に残骸を破壊できたがたな」

(こいつ!？ 最初から!?)

結標は自分の心の内を見透かされたことに驚くと同時に、自分の心理を利用されたことに怒りを覚える。

「そもそも他人を傷つける理由を能力のせいにするような弱い奴の言葉なんて信じる気もないがな」

「貴様ああああああ!!」

ツナは結標の心理すで見透かしていた。黒子と同じく核心を突

かれた結標は激昂する。

「どいつもこいつも私をコケにしてんじゃないわよ!! 許さない!! 絶対に許さないわ!!」

「許さない……?」

許さないという単語を聞いた瞬間、ツナの周囲に竜巻が発生し大量の死ぬ気の炎が溢れ出す。結標は暴風によって吹き飛ばされ壁に激突する。

「許さないのは俺も同じだ!! お前の自分勝手な目的のせいで黒子は!! 黒子は!! 黒子は傷ついたんだ!!」

(な、なんて突風!? こいつまさか超能力者!?)

ツナの怒りが頂点に達する。あまりの力を結標は恐怖する。ツナは今の今まで怒りを抑えていたのである。結標から木原幻生の情報を聞き出す為に。

(あの沢田さんが……怒ってる……)

黒子はツナが本気で怒っている初めてとところを目撃した為、驚きを隠せないでいた。

「結標淡希!! 俺はお前を許さない!」

標的（ターゲット） 265 譲れないもの

結標に対して怒りを爆発させるツナ。

「ハハッ!! ハハハハ!! 許さない!? 許されないのはあなたの方でしょ!?!」

「何だと!?!」

「ツリーダイヤグラム樹木図の設計図は学園都市のもの!! 私だけじゃなく多くの研究者がツリーダイヤグラム樹木図の設計図を必要としてる!! なのにあなたはツリーダイヤグラム樹木図の設計図を復活させる可能性を無に還した!! あなたは多くの科学者の夢と科学の発展を奪ったのよ!! あなたこそが真の罪人よ!!」

「どうともで言え!! 俺はあの子たちを護る為にここにいる!!」

「あの子たち……!? まさかあの出来損ないのクローン共に感情移入してる訳!? その為だけにツリーダイヤグラム樹木図の設計図の破壊したっていうの!?

たかが実験の為だけ産み出されただけに!? そんなことの為に!?!」
「たかがとは何だ!?! あの子たちだって生きてるんだ!! 決して殺されていい命じゃない!!」

ミサたちシスターズ妹達のことを何と思っていない結標の発言に、ツナの怒りはさらにヒートアップする。

「あの子たちを護る為なら俺は何だってやってやる!! 学園都市が敵になるっていうなら俺が学園都市ぶっ壊してやる!!」

「くっ!?!」

ツナの怒りがヒートアップしたのに比例して、風は威力を増し、さらに炎が溢れる。結標はまともに目を開けられず座ったまま腕をクロスさせることすらできないでいた。

（学園都市をぶっ壊す……!?! 何を言って……!?!）

黒子は理解できなかった。ツナが学園都市をぶっ壊そうとなどと言ったことに。

怒りでヒートアップしていたツナであったが、なんとか怒りを収める。その証拠に暴風は止み、溢れ出ていた炎が消えていた。

「ツリーダイアグラム樹木図の設計図を復活させられる残骸はそれだけだというのは知っている。そしてその残骸も破壊した。終わりだ結標淡希。大人しく投降しろ」

「くっ!?!」

ツナの言い分に何も言い返すことができず結標は歯ぎしりするこ
としかできなかつた。

「そうね……終わりね……」

だがもう足掻いてもダメだと判断したのか、諦めたような表情を浮かべる結標。

「貴方たちがね!!」

諦めた表情から一転。結標の表情が邪悪な笑みへと変わる。するとオフィスビルがミシミシという音が聞こえ始め、天井から塵のような物が降ってくる。

「フフフ!! ハハハハハ!!」

「何をした結標!?!」

「この階より上にあるビルにある柱をできる限りレポートさせたのよ!!」

「何っ!?!」

歪んだ表情を浮かべながらそう言う結標の言葉を聞いて衝撃を受けるツナ。そして理解する。結標はビルを崩壊させて自分たちを圧殺しようとしていると。

「あなたたちが悪いのよ……私を壊しただけじゃなくて残骸レムナントまで破壊したんだから……!?!」

(もうまともな精神じゃない……!?!)

歪んだ笑みを浮かべながら両目から涙を流す結標を見てツナは結標の精神が崩壊していることを察する。

「お察しの通りこのビルは倒壊するわ。逃げたければ逃げなさい。まあ白井さんを置いていけばだけでも。ま。そちを選べば白井さんと共に圧殺するだろうけど……ハハハハハ!! アツハハハハハハ

ハ!!」

狂った笑い声を上げた後、結標は確実に逃走する為にテレポルトで外に出る。もう自分のトラウマのことを考えてなどいなかった。

「黒子!!」

結標がテレポルトでいなくなった後、ツナは慌てて黒子の元へと駆け寄る。

「黒子!! 大丈夫か!?!」

「沢田さん……私のことはいいですよ……ここから早く逃げて下さいの……私はテレポルトで逃げますから……」

「嘘をつくな。もうお前にテレポルトできるだけの力がないことぐらいわかる」

超直感で直感しなくとも今の黒子に能力が使えるだけの力が残っていないことは一目瞭然であった。

「私は何も悪くない沢田さんに酷いことを言った挙げ句、初春の忠告も聞かずに独断専行しこのあり様……学園都市の治安を護る立場でありながら治安よりも私情を優先し多くの人に迷惑をかけた……こんな私に救われる価値なんてありませんの……だから私を見捨てて逃げて下さい……」

黒子は今までの自分の愚行に責任を感じ死を選ぶことを心に決めていた。

「馬鹿を言うな。俺にはお前より大切なものなんてない」

だがそれでもツナの意思が変わることなどあるはずもなかった。

「さつきも言ったがお前は俺の誇り。絶対に譲れないものなんだ。お前のいない世界なんて俺には考えられない」

「沢田さん……!?!」

ツナの言葉を聞いて黒子は涙が止まらないでいた。こんな醜い自分を見捨てず助けようとしてくれたことに。

するとツナたちのいる階の天井に大きなヒビが入る。柱が無くなったことで建物が重さに耐えられなくなり始めたのである。

「黒子。このビルに俺たち以外に人はいるのか?」

「え……!?!」

「どうなんだ？」

「いませんの……事前にこの会社に人がいないのは確認済みですの……どうやらこの会社、現在社員旅行で誰もいないみたいですよ……」

「そうか。わかった」

ツナは黒子から話を聞くと少し離れた場所へゆつくりと歩く。

「オペレーションX」イクス

『了解シマシタボス。イクスバーナー発射シークエンスヲ開始シマス』

ツナはそう呟くと、左手を床の方に向けると炎を逆噴射させる。そして右手を天井の方へと向けた。

(あれは……!?!? あの時の……!?!?)

黒子はツナの構えを見て思い出す。学生誘拐事件でヘルリングによってパワーアップしたエスカに使った技。リボン曰く、ツナの必殺技だと。

「沢田さん……な、何を……!?!?」

「このビルを破壊する」

「は……!?!?」

「このままじゃ俺たちだけじゃなくて周囲に甚大な被害が出る。だったらこのビルを破壊して被害を最小限に食い止める」

「で、ですが……!?!?」

「美琴がこの場所に向っている可能性がある」

「っ!?!?」

美琴が来るかもしれないと知って黒子は顔色を変えると同時に思い出す。美琴が結標を追って自分よりも先に結標と戦っていたことを。ならばこの場所に向かっているもおかしくない。

ここに来る前にミサカネットワークにて美琴の力を検知していたことをツナはミサカから聞いていた。結標を追ってここに来る可能性は十二分あるとツナは考えていた。

『ライトバーナー炎圧上昇。58万……59万……60万 F V』ファイアンマホルテージ

コンタクトレンズから右手の炎の出力情報が映し出される。右

手から発射される剛の炎の準備が完了する。

「黒子！ マントで全身を覆え！」

「は、はい！」

ツナの強気な言葉を聞いて慌てて黒子はマントで全身を覆う。ここから先はどんな被害が出るかわからない。だからマントで全身を覆わせて黒子の体を護ることにしたのである。

『レフトバーナー炎圧上昇。 58万……59万……60万 FファイアンマボルトVテージゲージシンメトリー発射スタンバイ』

コンタクトレンズから左手の炎の出力情報が映し出される。左手の炎から支えの炎である柔の炎と発射する炎の剛の炎が均等になったことについてXBURNERイクスバーナーの発射準備が整う。

そしてツナたちのいる天井が倒壊の重みに耐え切れず崩壊し、上階にあるもの全てが雨のように降り注ぐ。

「XBURNER!!」

ツナの右手の炎から大量の死ぬ気の炎が発射される。ツナの放った炎があらゆる物を一瞬にして塵と化していく。

(これは……!?)

マントに覆われ外の状況が全くわからない黒子。すると黒子の頭の中に映像が映し出される。

(これは……沢田さんの過去……!?)

黒子の頭の中に入ってきたのは佐天と美琴も見た、ツナの過去であった。

(こんなことが……)

ツナが修羅場を乗り越えてきたことは黒子はわかっていた。しかしそれは想像を絶するものだった。

「うおおおおおおお!!」

ツナが叫び声を上げると炎が瓦礫を押し退け、徐々に上昇していきビルを破壊していく。

「はああああああ!!」

そしてついにツナの炎が全てを破壊し、火柱が学園都市の上空に発生した。炎が消えると遮蔽物は一切、無くなりそこには満点の星空が

広がっていた。

「ナッツ」

ツナがナッツの名前を呼ぶとナッツはマントの状態から元の状態に戻ると、そのままリングの中へと戻った。ナッツが元に戻るとツナは黒子の元へ駆け寄り黒子を抱えた。

「帰ろう。俺たちの居場所へ」

標的（ターゲット） 266 阻む者

ビルを破壊したことで周囲の被害をゼロにし黒子を護ることに成功したツナ。

「どうやら被害は防げたみたいだな」

黒子を抱えた状態で上空からツナは周囲の被害状況を把握する。幸いなことにも怪我人も周囲への建物の状況はなかった。

ツナはゆつくりと空中からゆつくりと下降。オフィスの前の歩道に着地する。

（今すぐ追いたいところだが……）

ツナはこれからのことを考える。残骸は破壊し結標の野望を打ち砕いたので実験が再開する可能性は無くなった。しかし結標の精神状態はまともではなく何をしでかすかわからない状態であった。今すぐにでも捕えたいところだが、重症の黒子を置いていく訳にはいかない。

「病院に行く。しっかり捕まってる黒子」

ツナは黒子を第7学区にあるカエル医者元へと連れて行くことを決める。

その時だった

「沢田!! 黒子!!」

「美琴!!」

「お姉様……」

結標の在りかを突き止めた、オフィスのビルに向かっていった美琴が到着する。

「やっぱりお前も結標を追ってたのか」

「ええ……って何よこれ!? ビルが無くなってるんじゃない!!」

「そのことは後回しだ。それよりも……」

「後回しにできるレベルを超えてんでしょうが!!」

「騒ぐな美琴。黒子の傷の響く」

「あ……ごめん……って!! あんたが騒がせたんでしようが!!」

ツナに忠告したことでシユンとなる美琴であったが、自分のせいじゃないと気づきすぐにツッコミをいれる。

「残骸は破壊したが結標が逃げた。俺は奴を追う。警備員アンチスキルに連絡と黒子を病院に送ってくれ!!」

「ちよっ!? 待ちなさいよ!!」

そう言うとツナは黒子を渡すと結標を追う為に炎を逆噴射させて飛んで搜索する。ほとんど事情を知らされず黒子のことを任された美琴は上空にいるツナに向かって叫ぶが自分の声が届くことはなかった。

「つたく……どおりで連絡が取れない訳だわ……」

自分と同じく残骸を追っていたのだと知って、美琴は連絡が取れない理由を納得する。

「お姉様……」

「あつ! 黒子。大丈夫?」

「申し訳ありません……ご心配をおかけして……」

「本当よ。全く」

世話の焼ける黒子後輩の姿を見てそう言う美琴。だが言葉とは裏腹に黒子が優しい笑みを浮かべる。

「待ってて。今、救急車呼ぶから」

「あの……お姉様……」

「どうしたの黒子? どこか痛むの?」

「沢田さんは一体、何と戦っているんでしょう……?」

「えっ?」

黒子の発言を聞いて美琴は意味がわからずキョトンとしてしまう。

「沢田さん……おかしなことを言っていましたの……あの子たちを護る為に何だっやってやる……学園都市が敵になるなら俺が学園都市をぶっ壊してやるって……」

(あいつ……)

黒子の発言を聞いて美琴は確信する。ツナはミサたちの為に、そし

て自分の為に戦っているのである。

「後……レベル6シフト計画とか……結標が木原幻生と繋がっているのかって聞いていましたの……」

（木原幻生……？ 会ったことはないけど名前は聞いたことはある……でも何であいつが……？）

木原幻生という名前は聞いたことはあったが、なぜツナが結標に木原幻生のことを聞いていたのかわからないでいた。

（何を考えてんのよあいつ……!?!）

結標の行方を追っているツナは。

（どこに言った!?!）

ツナは上空から結標がどこにいるか捜していたが見つからず焦っていた。

『聞こえますかツナ？ とミサカは確認を取ります』

「ミサ!？」

ツナのヘッドフォンにミサ無線が入る。ミサからの無線が聞こえてツナは上空で止まる。

「どうしたんだミサ？ 何かあったのか？」

『外にいるミサカから情報が入りました。とミサカは報告します』

「情報？」

『結標と思われる人物を見たという情報です。とミサカは情報の内容を開示します』

「本当か!？」

『茶髪のツインテールにブレザーにサラシを巻いた女性で間違いです

か? とミサカは尋ねます』

「ああ。間違いない」

『ですが肝心のキャリーケースを持っていません。とミサカはさらに情報を伝えます』

「問題ない。残骸は破壊した。これでもう実験が再開されることはない。安心してくれ」

『そうですか。とミサカは安心します』

「それで結標は場所どこにいる? 残骸は破壊したが結標本人は精神が不安定で何をしでかすかわからない。今すぐ捕まえたいんだ」

『了解です。とミサカはそちらの状況を把握します』

一方で逃走した結標は。

「はあ……!?! はあ……!?!」

結標は追ってから逃れる監視カメラの死角になる路地裏に逃げ込んでいた。しかし結標は追い詰められている表情をしており、呼吸もままならない状況にあった。

(どうしよう!?! どうしよう!?! どうしよう!?! どうしよう!?! どうしよう!?! どうしよう!?!)

精神の均衡を失い、ハイになってビルを崩落させたツナと黒子を殺害したのはいいが、残骸を破壊され目的も失った結標はどうすればいいのかわからないでいた。

(まだきつと何かあるはずよ!! きつと!! 大丈夫!! 大丈夫!! だ
から落ち着くよ私!!)

自分が絶体絶命のピンチに陥っているという事実から目を背け、自

分を奮い立たせようとする結標。

(とにかく自分の安全を確保しましょう!! 自分が助からなかったら何の意味がないもの!!)

そう自分に言い聞かせると結標は路地裏から出て、道路へと出る。幸いにも時刻は夜。人口の8割が学生の学園都市なら誰にも目撃することも無い。

(警戒すべきは御坂美琴だけ……あの女にさえ気をつけていれば私はどうとでもなる!!)

ツナと黒子は潰した。今回の事件を知り、尚且つ結標にとって脅威となるのは美琴ただ1人。美琴の目を掻い潜れば後はどうにかなると結標は考えた。

が、

「つたくよオ。俺を倒しておきながらこんな雑魚を取り逃しやがって。相変わらず甘エ野郎だア」

結標の前方の横断歩道。そこから1人の男の声が聞こえてくる。しかしビルの影で隠れていた為、男の姿は見えなかった。

(誰? いやそんなのがどうでもいい。御坂美琴じゃなければ何も問題ない……)

目の前にいる男がどういう人物であれ自分の相手ではない。油断せず落ち着いて対処すれば問題ない。そう思った結標。

しかし

「まあ。リハビリにはなるかア」

(あ、あいつは……!?)

暗闇の中から出てきた人物を見た瞬間、体が震え始め結標の感情が恐怖に染め上げられる。

(無理よ……!! 超電磁砲レールガンですら勝てないのよ……!?)

結標の目の前にいた男は松葉杖をつき、首に黒いチョーカーを巻いていた。チョーカーの先端には電極が取りつけられており、電極は額、こめかみ、首筋に貼り付けられていた。

(私にどうにかなる相手じゃない……!?)

そして男の全身が露になる。そこにいたのは学園都市最強の超能

力者。一方アクセラレータ通行だった。
「せっかくのリハビリだア。10秒は持ってくれよ」

標的（ターゲット） 267 恐怖と調和

逃亡した結標。しかしその行く手を阻んだのはなんと一方通行で
あつた。アクセラレーター

『その時は戦うよ。たとえ学園都市を敵に回すことになっても。約束
したんだ。妹達シスターズが……みんなが笑える未来を作るって。
だからもう覚悟はできてる』

（何がミンなが笑い会える未来を作るだ。こんなんじゃ前途多難もい
いところじゃねエか。クソツタレが）

アクセラレーター 一方通行の脳裏には実験が終わった後、ツナが言っていた言葉を思
い出す。

時は遡り。ツナがミサの病室を訪れていた頃。

（ツたく……ガキのお守りは面倒くさいッたらありやしねえ……）

アクセラレーター 一方通行は自動販売機で買ったコーヒーを飲みながら病院の廊下
を歩いていた。

「ああ？」

アクセラレーター 廊下を歩いていた一方通行であつたが、ミサのいる病室の扉が少し
だけ開いていることに気づいた。そして中から話し声が聞こえてく
る。

アクセラレーター 一方通行はミサが誰と話しているのか気になった為、扉の隙間から

覗き込む。

「あいつは……!?!」

ミサが話している人物を見て一方通行は目を見開く。そこにいたのは今まで負けたことがなかった自分を負かしたツナだったのだから。

何の話をしているのか気になったのか一方通行は2人の会話を盗み聞く。

(あの実験が再開する可能性があるだと)

一方通行は知ってしまう。今回の事件の概要。そしてツナの推測を。

(あの野郎……本当に止められんのかア?)

病室の窓からツナが飛び立ったのを確認した一方通行。しかし一方通行は懸念があった。それはツナの甘さである。

一方通行は世界を滅ぼせるだけの力を持っている。だがそんな自分をツナは倒すだけでなく、戦わずして戦意を喪失させるだけの力を持っている。しかしツナは自分を殺そうとしないどころか助けようとまでした。1万人以上の人間を殺した自分を。

そしてその甘さを利用して実験の再開を阻止できなくなるのではないかと。

(何で俺があいつの心配しなくちゃならねエンだ……クソツタレが……)

そして場面は戻る。

「俺も堕ちたもんだなア……いや……元々、堕ちたんだからこの言い

方は違エな……じゃあこの場合、なんて言えばいいんだア……？」

「何、1人でブツブツ言ってるのよ!!」

自分の存在にすら眼中なく1人で喋って、自己完結する一方通行に^{アクセラレータ}苛立ちを露にする結標。

「ハハッ……ハハハハ……!!」

苛立ちを見せていた結標であったが、何かに気づいたのか結標が笑みを浮かべる。

「私は知ってるわ!! あの人の近くにいたから知ってるわよ一方通行^{アクセラレータ}!! あなたは8月31日に能力^{ちから}を失っているはずよ!!」

窓のないビルの案内人だった結標は普通の人なら知らない情報を知っている。故に絶対能力^{レベル6ソフト}進化計画の要である一方通行^{アクセラレータ}のその後についても知っていた。

「今の貴方にかつての演算能力はない!! 最強の能力者でも何でもないのよ!! そうでしょう!? 何故さつきから立ったままなの!? 何もできないからでしょ!? ハツタリで私を追い詰める気だったのかしら!」

絶対に勝てないと思っていた相手が弱体化し勝てるかもしれないと思っただのか結標は気が大きくなり饒舌になり始める。

「哀れだなア……お前……本気で言ってるなら抱きしめたくなくなっちゃう程、哀れだア」

結標の言葉を聞いても一方通行^{アクセラレータ}は動揺するどころか、呆れた表情を浮かべていた。

「確かになア。俺はあの日、脳にダメージを追った。今は電極を失って外部に演算を任せてる身だ」

一方通行^{アクセラレータ}は思い出す。8月31日。ある人物を能力で救助する際に能力に集中し過ぎて反射の力が働かなくなり、敵の放った銃弾を頭に受けてしまった時のことを。

「こいつのバッテリーもフル戦闘で使えば15分も持たねエよ」

一方通行^{アクセラレータ}は親指でチョーカーを指を指しながら答える。

「だがよ……俺が弱くなくなつたところで別にお前が強くなつた訳じゃねエだろうが!! あア!」

一方通行は歪な笑みを浮かべる。すると地面に大穴が発生し、周囲にあつたビルのガラスだけが割れ、ガラスが雨のように降り注ぐ。

「っ!」

結標は躲しきれないと判断したのか即座に自分をガラスより上にテレポートする。

「うっ!」

ガラスの雨を躲したのは良かったが体が拒絶反応を起こし吐き気を催し、右手で口元を押さえる。

(翼!?)

結標の前には歪な笑みを浮かべ、気流でできた4つの翼を纏った一方通行がいた。ガラスの雨を降らすことで結標を空中にテレポートで逃げるように仕組み、脚力の向きベクトルの操作に加えて気流を操作してテレポートした結標の所まで一瞬で移動したのである。

「悪イがこっからは一方通行だ!! 大人しく尻尾才巻いて元の場所へ引き返しやがれ!!」

「ゴハッ!」

一方通行の拳が容赦なく結標の顔面に容赦なく叩き込まれる。結標は容赦なく地面に叩き込まれる。

「これは……!?!」

結標が落ちたのは一方通行が発生させた大穴だった。そして結標の下には大量の土の上だった。

(土がクッション代わりになって……とにかく助かった……)

もう終わりだと思っていた結標だったが、運良く助かってホッとす

る。

「ギアて。楽しい楽しい拷問の時間だ。残骸の在りかを話してもら

うぜエ」

(あああああ……!?!)

結標の目の前に一方通行が降り立つ。一方通行を目の前にした結標は体は恐怖のあまり体の震えが止まらず、声を出したくとも出せないでいた。そして結標は理解する。土がクッションになったのは偶

然ではなく、アクセラレータ一方通行が敢えてそうしたのだと。今、生きてるのは残骸の在りかを聞き出す為に生かされただけなのだ。

結標の考えは正しかった。アクセラレータ一方通行は最初に大穴を発生させると同時にコンクリートの下にある土を向き操作で土のクツションを形成したのである。そして加減した拳で土のクツションへと落としたのである。

「残骸をどこに隠しやがった？ 正直に言え」

(い、言わなきゃ!! 言わなきゃ殺される!!)

アクセラレータ一方通行の質問に答えたい結標であったが、恐怖のあまり声が出ず
アクセラレータ一方通行に質問に答えられないでいた。

「何だア？ 答えられねエのかア？」

結標の表情から恐怖のあまり喋ることすらできないことを察する
アクセラレータ一方通行。しかし嬉々とした表情を浮かべていた。

「だったら答えられるようにしてやる」

(こ、殺される!! 殺される!! 殺される!! 殺される!! 殺される!! 殺される!!)

アクセラレータ一方通行は両手を結標に手を伸ばし、肉体的苦痛を与えて無理やり結標の口を割らそうとする。

結標は生命の危機を感じ、必死で口を開いて答えようとするも口は開いてくれることはなく大量の涙が溢れ出ていた。

「安心しろ。殺しはしねエ。死ぬ程痛エだけだア」

(も、もうダメ……!!?)

アクセラレータ一方通行の手が迫る。結標にはもう目を閉じ、拷問を受ける覚悟を決めることしかできなかった。

(みんな……ごめんね……)

結標の脳裏には自分の仲間の姿が浮かんでいた。この場にはいなかったが結標は心の中で仲間に向けて謝罪した。

(?)

アクセラレータ肉体的苦痛を覚悟した結標であったが、結標の体に痛みはおろか
アクセラレータ一方通行に触られた感触すらなかった。

「え……?」

結標がおそるおそる目を開ける。そこには炎を纏った右手で一方通行の右手を掴んでいるツナがいた。

「そこまでだ」

「て、てめエは!?!」

ツナが現れたことに驚いた一方通行は視線をツナの方へ向けツナのことを睨んでいた。

(こ、こいつ……まさか……!?!)

ツナの性格上、黒子を見捨てられる人格ではないことは結標はわかっていた。なのにツナがここにいるということは黒子を見捨てず、ビルの崩壊からも逃れたのだと結標は理解する。

(いやそれよりも!! 何で一方通行に触れるの!?!)

ツナが生きていることにも驚いたが、結標はそれよりもツナが一方通行に触れていることに驚いていた。

一方通行は触れたものを全て反射する学園都市最強の能力者。にも関わらずツナは当たり前のように一方通行は触れていた。ツナの炎の特性を知らない結標からすれば驚愕でしかなかった。

「手を引け。一方通行。これ以上やるなら俺はお前と戦うことになる」

ツナは今、大空の炎の特徴である調和の炎だけに絞った、殺傷能力が一切ない炎を纏った状態で一方通行の右手を掴んでいる。これ以上、結標に手を出すなら殺傷能力のある炎に変えて戦うという意味がこの言葉に込められていた。

「ちッ! わーッたよ」

舌打ちしながらも一方通行は掴まれていた右手を無理やり離した。「変わったな。一方通行」

「俺はお前にボコボコにされて負けたんだぞ。あんだだけの力を見せられたら、嫌でも学習するに決まってるだろうが。馬鹿かてめエは」
「一方通行が負けた……!?! まさかこいつがあの実験を終らせたって
いふの……!?!)」

絶対能力進化計画を潰した人物がツナなのではないかと結標は推測する。

(でも実験を止めたのは無能力者^{レベル}って話じゃ……!?)

自分が聞いていた話とは違うことに違和感を覚えた結標だったが、一方通行^{アクセラレータ}が素直に引いたことや、嘘を言っているように見えなかったこと、ツナが妹達^{シスターズ}を護ると言っていたことから、結標はツナが本当にあの実験を潰した人物なのではないかと思うようになった。

「残骸は俺が破壊した。後のことは任せろ」

「何、意味のわからねエこと言ッてやがる。俺は散歩してる途中に喧嘩を売られてそれを買ッただけだ」

ツナは一方通行^{アクセラレータ}がこの場にいるのが偶然ではなく、自分と同じ目的の為に動いていたことを理解していた。

一方通行^{アクセラレータ}はツナの言葉を聞いても本心を言うことはなかった。

「俺ア帰るぜ。もう眠イんでな」

「一方通行」

「ああ?」

「ありがとう」

「てめエ。誰相手に言ッてんのかわかってンのか?」

一方通行^{アクセラレータ}は自分の能力向上の為に1万の人間を殺した男。結標などとは桁違いの罪人である。そんな相手にお礼の言葉を述べるツナの神経が一方通行^{アクセラレータ}にはわからなかった。

(ちッ! 相変わらず何考えてるかわからねエ野郎だぜ)

自分の言葉に対しても何も反応せず黙って自分のことを見るツナを見て一方通行^{アクセラレータ}は心の中で舌打ちした。

「じゃあな」

そう一言だけ告げると一方通行^{アクセラレータ}は自分の帰るべき場所へと帰っていた。

「結標。お前を……」

ツナは結標の方を向く。しかし元々精神の均衡を喪失していた上に、助かったとはいえ一方通行^{アクセラレータ}の恐怖に植え付けられたことに放心状態になりまともに話すことすらできなくなっていた。

そんな結標を見かねたツナは右手の人差し指に炎を灯すと結標の額に炎を当てる。放心状態の結標は避ける素振りすら見せなかった。

(温かい……)

結標はツナの炎の温もりを感じていた。そしてツナの大空の炎の特性である調和が結標の壊れた精神と、一方通行アクセラレータに植え付けられた恐怖が消えていく。

「あ……」

恐怖のあまり声が出なかった結標であったが、ツナの炎によってようやく声を出すことができるようになった。

「大丈夫か？ 結標？」

「私は……」

精神の平衡を取り戻した結標は今まで自分の身にあったことを思い出す。

「私は……負けたのね……」

「そうだ」

「まさかあなたに助けられるなんてね……」

殺そうとしたツナがいなければ一方通行アクセラレータに痛みつけられ、最悪死んでいた。結標からすれば皮肉以外の何でもなかった。

「それよりもどうやって崩落から逃れたのかしら……？ あなたのことでだから白井さんも無事なんですよ……？」

「ビルを消滅させた」

「は……!？」

何か上手い方法で逃げ出したのかと思っていた結標だったが、ビルを消滅させるというぶっ飛んだ方法で難を逃れたと知って結標は衝撃を受ける。しかし先程、ツナが絶対能力進化計画を潰した人物だと知ったので結標はツナの言葉が本当なのだと理解する。

すると街に警備員アンチスキルの警報が響き始める。

「どうやらお迎えが来たようね……」

「随分と素直だな」

「誰かさんのせいで目的も失ったしね……これ以上、逃げても無駄な上に、罪が重くなるだけだしね……」

「そうか」

精神は元に戻っても結標の闘争心はすでに折られていた。ツナと

美琴、アクセラレータ一方通行に目を付けられた上に警備員アンチスキルに自分の悪行を知られた以上、逃亡するよりも捕まった方がまだマシだと判断したのである。それは自分だけが助かりたいからではない。今回、自分に協力してくれた同じ境遇の仲間をこれ以上、危険に遭わせない為でもあった。

「ねえ最後に聞かせて。あなたは自分の力を手にしたことに対してどう思ってるの？」

「怖いさ。この力で多くの人を傷つけ、何なら人の命だって奪ったことすらあるからな」

「え……!?!」

「この力を使わずに生きていけたらなんて何度も考えたさ。それでも大切なものを失うことはもつと怖い。だから力を使うしかなかった。だから力を使うことを選択して戦う道を選んだんだ。俺だけじゃない。他のみんなだつてきつと」

ツナは今までの自分が戦ってきた姿を、そして他のみんなが戦っている姿を。

「力は使う者によつて変わる」

ツナは知っていた。予知能力を正しく使ったユニと平行世界パラレルワールドの知識を共有する力を悪用した白蘭。どちらも力を持った者の人格によつて善にも悪になると。

「能力を知る前にまず自分自身と向き合え。まずはそれからだ」

「自分自身……」

ツナの言葉を聞いて結標は俯いた状態で何かを考え始めた。

その後、警備員アンチスキルによつて結標は捕らえられた。

標的（ターゲット） 268 悶絶

結標が警備員アンチスキルに捕まったことよって結標と協力していた外部組織及び、結標の仲間たちは逮捕された。これによつてキャリーケース強奪事件は幕を閉じた。

時刻はお昼前。第7学区。カエル医者カエルの病院。

「……」

事件が終わつて黒子は病院に運ばれ治療を受けた。幸いにも命に別状はなく現在、黒子はベッドの上にいた。そして病室の窓から学園都市を眺めていた。

すると病室の扉がノックされる。

「どうぞですの」

黒子が入室を許可すると扉が開く。入室して来たのはフルーツの入ったバスケットと紫色の花の束を持ったツナであった。

「黒子。大丈夫？」

「沢田さん……」

やつて来たのがツナだったので、黒子はツナと顔を合わせるのが気まずいようであった。

「ええ。明日には退院できるそうですの。退院しても車椅子生活になるそうですけど」

「そっか」

自分が思っていたよりも早く黒子が退院できると知つてツナは安堵する。ツナはベッドの近くにある棚にバスケットを置き、花瓶に持ってきた花を花瓶に入れる。

「沢田さん」

「何？ 黒子？」

「えっと……その……すみませんでしたの……色々ご迷惑をおかけしまして……」

「気にしないでいいよ。もう終わったことだし」

「そうじゃありませんの……私が……その……沢田さんに酷く当たったのは……その……」

黒子は言い辛そうな表情かおをしていた。ツナに怒りをぶつけた理由が、ただただ美琴を取られたと思いついで勝手に嫉妬しただけなのだから。

「大丈夫だよ。もうわかってるから」

「沢田さん……」

「佐天に聞いたんだ。黒子は子供扱いされたから俺が怒ってるんじゃないかって」

「へ……？」

ツナの言葉を聞いて拍子抜けしてしまう黒子。やはりツナは佐天の嘘に気づいていなかった。

「それに乙女心は複雑だって言ってたし。俺、そういうのよくわからないしさ」

「い、いや……その……」

「とにかく黒子も色々あったようだし。まあとにかく黒子が無事であったよ」

「っ!？」

ツナは花瓶に花を移し終わると黒子の方を向いて笑顔でそう言った。そんなツナの顔を見た瞬間、黒子は顔が赤くなる。

（か、顔が……!?! 心臓の鼓動が……!?! 沢田さんの顔をまともに見られませんの……!?!）

黒子は自分の顔が熱くなり、心臓の鼓動が早くなっていることを自覚する。

（こ、これは……!?! まさか……!?!）

黒子は理解してしまう。自分がツナに対して恋心を抱いているこ

とに。

(そ、そんな訳ありませんの!! 私はお姉様一筋!! お姉様以外の方に惚れるなどありませんの!!)

黒子は首をブンブンと横に振りながら自分の気持ちを否定する。

「痛っ!?!」

首を振ったことによつて黒子の全身に痛みが走つてしまう。

「だ、大丈夫!? 黒子!?!」

「っ!?!」

痛がる黒子を見てツナが慌てて駆け寄る。黒子は自分の視界に入った瞬間、黒子の顔が真っ赤になる。

「だ、大丈夫ですの……!! ちょっと痛みが走っただけですよ!!」

顔を真っ赤にした黒子はツナを直視できず俯いた状態で消え入りそうな声で答えた。

(ど、どうして……!?! どうして沢田さんの顔を直視できないんですの!?!)

今までは普通に顔を見て話すことができていたのに今はそれができない。黒子は自分がおかしくなってしまったのではないかと思いはじめ始める。

すると病室の扉が開いた。

「白井さん。食事の時間を持つてきました」

昼前ということもあり、看護婦がお盆に乗った料理をワゴンに乗せて病室へと入つて来た。看護婦はワゴンに乗つたお盆をベッドテーブルの上に乗せると、ワゴンを押して病室から出ていく。

「ちよ、丁度お腹が空いていたので頂きますの!!」

食事が届けられたことを利用し、黒子はそこまでお腹が空いてないのに慌てて食事にありつこうとする。

「っ!?!」

しかし急に体を動かした為、黒子の全身に再び痛みが走つてしまう。

「ダメだよ黒子!! いくらお腹空いてるからつてそんなに急に体を動かしちゃ!!」

(な、何て有り様ですの……!!)

誤魔化そうとした余り自滅してしまった自分を黒子は恥じてしまった。

「あっ！ そうだ！ 俺が食べさせてあげればいいんだ！」

「た、食べ……!!？」

まさかここでツナが食べさせてくれるというイベントが発生するとは思ってもみなかった為、黒子は顔を真っ赤にしてしまう。

「うん。これなら黒子が動かなくてもいいし、痛みが走ることもないから大丈夫でしょ」

(大丈夫な訳ないですの!! 何を考えているんですのあなたは!?)

ツナは何の違和感もなくそう言うのに対して、黒子は顔を真っ赤にし動揺してしまっていた。

「じゃあ口を開けて黒子」

「え……!？」

黒子の返答も聞かずツナはお粥の入った皿を持つと、お粥をスプーンで掬った。黒子は本当にツナが食べさせようとしていると知って驚く。

「お腹空いてるんでしょ？ ほら早く」

(ま、まさかこんなことになるなんて!!)

咄嗟についた嘘のせいでこんな風に自分が追い込まれてしまうとは思ってもみなかった為、黒子は何であんな発言をしてしまったことを後悔してしまっていた。

(もうどうにでもなれですの!!)

黒子は腹を括ったのか口を開けてツナに食べさせてもらうことを決める。黒子が口を開けたのを見計らってツナはスプーンを黒子に口に入れる。

「どう？ 美味しい？」

「は、はい……!!」

ツナに味の感想を聞かれてそう答えるが、実際には味を感じるどころではなかった。

「じゃあ次いくね」

「ぎ、沢田さん!? 何を!？」

ツナは2口目を用意をし始める。ツナの行動を見て黒子は驚いてしまっていた。

「何って……流石にこれだけじゃ足りないでしょ」

(ま、まさか食事を食べ終えるまでこれが続くんですの!?)

1口目ですら相当の勇気を振り絞ったというのに、また食べさせてもらう勇氣など黒子にはなかった。

「それにちゃんと食べないと治るものも治らないよ。ほら口開けて」

(こ、こんなのがこれ以上、続いたらおかしくなってしまいますの!!) 純粋な目で口を開けるよう言ってくるツナ。これ以上、食べさせてもらえば自分の精神がどうにかなってしまうと黒子は感じていた。

(こ、こっとなったら!!)

黒子は料理に直接手を伸ばすと料理を口の中にテレポトさせて一気に飲み込んでいく。常盤台生にも関わらずこんなマナー違反なことをしていることは自覚していたが、自分の身を優先することにした。

「ええ!? どうしたの黒子!？」

「こ、こうすれば体に負担をかけないで済む上にすぐにお腹いっぱいになりますの!!」

「そ、そうだね……」

黒子の行動に唾然としてしまったツナであったが、黒子の言い分は間違っていない為、納得せざる終えなかった。

「い、一気に食べたら眠くなってしまうましたの!! 少し横になりた
い気分ですの!!」

「そっか。じゃあ帰るね。学校が終わったら佐天たちも来るらしいから」

黒子の嘘に気づかず帰ることを決めたツナは、伝えるべきことだけ伝えて病室を出て行った。

ツナが出て行ったのを確認すると黒子はベッドの上で横になる。

「はあ……どうしてこんな風になってしまったんですの……」

黒子はいつものように普通にツナと会話できないことに困惑して

しまっていた。

(どうして……)

黒子はツナに食べさせてもらった時のことを思い出す。味は感じられなかったがもの凄く胸が高まったことを。そしてなぜあんなにも高まってしまったのか黒子はわからなかった。

「これなら一気に食べなければよかったですの……」

黒子は後悔していた。レポートで一気に料理を食べてしまったことに。

(つて!! 何を考えていますの!! これじゃ沢田さんに食べさせて欲しいと思っっているみたいじゃないですか!?)

黒子は先程呟いた発言を思い出して真っ赤になった顔を両手で覆っていた。

「あれは桔梗の花……?」

両手で顔を覆っていた黒子。すると指の隙間から花瓶に入った紫色の花が視界に入り、それが桔梗の花だということを理解する。

「ああああああ!!」

桔梗の花を見てから数秒後、黒子は顔を真っ赤にし狼狽する。

全ての花には花言葉が存在する。勿論、桔梗の花にも。ただ同じ花でも色が変われば花言葉は変わってくる。紫色の桔梗には4つの花言葉がある。1つ目は気品。2つ目は誠実。3つ目は変わらぬ愛。そして4つ目は永遠の愛である。

(ま、まさか私に告白してるつもりですか!?! いやそんな訳ないですの!!)

黒子は桔梗の花言葉を思い出して動揺する、しかし買って来た花がたまたま桔梗だったただけだと自分にそう言い聞かせた。

『馬鹿を言うな。俺にはお前より大切なものなんてない』

『さつきも言ったがお前は俺の誇り。絶対に譲れないものなんだ。お前のいない世界なんて俺には考えられない』

(ま、まさかあれが告白の言葉!?)

黒子は昨日の時点でツナに告白されていたのではないかと思っ
てしまっていた。

(あ、甘過ぎですわよ沢田さん!! 私がこの程度で揺らぐ訳ありませんの!! 第一、私にはお姉様という心に決めた方が……)

すると黒子の脳内にタキシードを着たツナとウエディングドレスを着た自分が結婚式場で歩いている姿が映し出された。

(な、何を考えていますの私は!? これじゃ私が沢田さんとの結婚を望んでいるみたいじゃないですか!?)

美琴とのイチヤイチャをする姿を想像するつもりだったのに、なぜかツナとのイチヤイチャする姿を想像してしまったことに黒子は動揺する。

(これは絶対に恋じゃありませんの……!! そう……絶対に……!!)

標的（ターゲット） 269 修羅場

時刻は夕方。学校が終わる時間となった。

第7学区。カエル医者者の病院。

「どうぞですの」

黒子の病室の扉がノックされる。黒子が返事をする。と佐天と美琴と初春が病室に入ってきて来る。

「見舞いに来たわよ黒子」

「白井さーん。元気ですかー?」

「……」

普通に入って行く美琴と佐天に対して、初春は気まずい顔をしながら入室する。

「あ、あの……白井さん……」

それでもなんとか黒子と会話のきつかけを作ろうとするが、何を話していいかわからないでいた。

「申し訳ありませんの初春」

「え……!?!」

黒子はベッドの上から初春に向けて頭を下げると同時に謝罪の言葉述べた。黒子の言葉を聞いて

「私は風紀委員ジンヤツジンメントでありながら自分のことしか考えていませんでした。ですがあなたはちゃんと状況を理解し最善の選択を私に提示しましたの。しかし私はそれを聞かずに勝手に独断専行し被害を拡大させ、あなたに心配をかけた。あなたが謝ることなんて一つもありませんの。だから堂々として下さいな」

「白井さん……」

「ですから……その……こんな私でいいなら……これらも私の相棒パートナーとして一緒に学園都市の治安を護ってもらえますか……!?!」

黒子は少し顔を赤らめながら、まるで告白でもするかのように初春に伝える。

「も、もう!! し、仕方ないですね!! 白井さんは私がいなくて何もできなんですから!!」

初春は後ろの方を向いた状態で答えた。両目に涙を貯めていたが、それでも初春は嬉しそうな顔をしていた。

そんな初春を見て佐天と美琴は笑みを浮かべていた。

「佐天さんもお姉様も。ご心配かけて申し訳ありませんの。明日には退院できるそうですの。少しの間、車椅子生活になりそうですの」

「こっちは大丈夫よ。それよりも早く元気になりなさい」

「あつ! それだったら! 退院したら私が治してあげますよ!」

「あつ! そっか!」

「はい。私の晴の炎の活性の力なら白井さんの傷をすぐに治せますよ」

「じゃあお願いしてもいいかしら?」

「勿論です!」

晴の炎の力を使って黒子の傷を治すことを決めた佐天はやる気満々の様子であった。

「お気遣いありがとうございます佐天さん。ですが結構ですの」

「ええ!? 何ですか!?!」

黒子は右手を前にして佐天の提案を丁重に断る。佐天はなぜ黒子が断るのかわからず驚いてしまう。

「今回の傷は私の独断専行によって負ったもの。佐天さんが気を遣う必要性はないですの」

「で、でも!!」

「今後、今回のようなことがないように、この傷は戒めとして残しておきたいんですの」

「白井さん……」

「ですが今後、怪我を負った際には佐天さんをお願いするかもしれないので、その時はよろしくお願いしますの」

「は、はい……」

「どうしたんですの?」

「い、いや……白井さんなんか変わってというか……なんだか丸くなりましたね」

「別に。今回の1件で痛い目を見て反省しただけですの」

(ほ、本当にそれだけなのかな……?)

黒子の言う通り今回の事件で反省したのは本当であろうが、それだけの理由だとは佐天にはなぜか思えなかった。

「それとお姉様」

「ん?」

「今回の1件で己の弱さを痛感致しましたの。今はまだお姉様の隣に立つことはできませんが、いずれお姉様の隣で立てるような女になってみせますの。ですから笑って待って下さい」

「う、うん……」

黒子の言葉を聞いて美琴は佐天と同じく違和感を感じてしまっていた。

(そう強くなれば……)

黒子の脳裏には超ハイパー死ぬ気モードになったツナの隣に立っている自分の姿が映っていた。

(また沢田さんの姿が!?)

美琴の隣に立つ自分の姿を想像したはずなのに美琴ではなくツナのことを想像してしまったことに黒子は驚いてしまっていた。

「暗い話ばかりでアレだしとりあえず林檎でも剥きますよ。せっかく沢田さんがフルーツを持ってきたみたいですし」

「いいですね。じゃあ御坂さん食べさせてあげて下さい」

「え!? 何で私!?!」

「何でって。御坂さんが食べさせてあげた方が白井さん喜ぶからに決まってるじゃないですか。それにこうした方が白井さんにとっていい薬になるじゃないですか」

「し、仕方がないわね……」

いつもなら嫌がる美琴であったが、今回は事が事だったので美琴は渋々、佐天の提案を受け入れることにする。

「今回だけだからね黒子」

「ええ。ありがとうございますのお姉様」

((ん?))

美琴が食べさせてくれるという黒子にとって大イベントが発生しているのにも関わらず、黒子が平然としていることに3人に違和感を覚える。

佐天は病院から果物用のナイフと皿を借りると林檎の皮を向いた後、林檎を食べやすい大きさにカットしカットした林檎を皿に乗せた。

「はい。口開けて」

美琴にそう言われて黒子は口を開ける。美琴が林檎を口の中にいると黒子は林檎をゆっくりと咀嚼する。

「どうしたんですか白井さん!!」 どこか他に悪いところでもあるんですか!!」

「騒々しいですわよ初春。ここは病院ですよ」

「騒々しくもなりますよ!!」 御坂さんに食べさせてもらってるのに何で平然としていられるんですか!!」 いつもなら興奮してるじゃないですか!!」

「っ!」

初春の言葉を聞いた途端、黒子はずっと忘れていたことを思い出したかのような表情になる。

(う、初春の言う通りですよ!!)

憧れのお姉様^{美琴}に食べさせてもらったというのに何も感じなかった自分に黒子は驚きを隠せないと同時に。黒子は何で自分がこんな風になったしまったのかわからないでいた。

(沢田さんの時はあんなに動揺していたのに……!?)

ツナに食べさせてもらった時は動悸が早くなり、どうにかなってしまいそうだった。しかし美琴に食べさせてもらった時はツナの時のようなことはなかった。

(違いますの!!) これは恋なんかじゃありませんの!!)

これだけのことに気づいてもなお、黒子はツナに恋しているという

事実を認めることはなかった。

「御坂さんに興奮しない白井さんなんて白井さんじゃないですよ!!」

「確かにこれは病気かも……」

「まあ私としては助かるんだけど……」

いつもと違う黒子を見て初春と佐天は重い病気にかかっているのではないかと推測する。

一方で美琴はこれで過度なスキンシップをしてることが無くなる。美琴からすれば重い病気が治って助かったと思っていた。

「黒子のその症状。重度の病気だぞ」

「「「っ!?!」」」

突如、病室にリボーンの声を響き渡る。全員、周囲を見渡すがリボーンの姿は見えなかった。

「ちやおっす」

「どこに隠れてるの!!」

するとツナの買って来たフルーツのバスケットの中のメロンから手足が生える。それはメロンのコスプレをしたリボーンだった。まさかフルーツの中に紛れているとは思ってもみなかった為、佐天はツツコミを入れる。

するとリボーンはメロンのコスプレを止めてすぐにいつものスーツの姿に戻ると、バスケットの中のバナナを食べ始めた。

「にしても俺がいることに気づかないとはまだまだだなお前ら」

「わかる訳ないでしょ!! とうか何で白井さんのお見舞い品食べてるの!?!」

「しやあねえだろ。ずっとここにいて腹が減ってんだ」

「まさかツナさんが来た時からいたの!?!」

「まあな。お前らにもやるぞ。腹減ってんだろ」

「ちよっ!?! いきなり投げないでよ!! とうかこれ白井さんのお見舞い品だから食べれないよ!!」

リボーンは見舞い品の林檎を佐天に投げ飛ばした。佐天は虚を突かれたがなんとか林檎をキャッチする。

「それで黒子が重度の病気ってどうということよ!?!」

「そうですね!? 白井さんの身に何が起きていますか!?

黒子が重い病気にかかっているという言葉の真意を美琴と初春はリボーンに尋ねる。

「つーか佐天と美琴はこの病気にかかっているけどな」

「ええ!? 私、病気なんてかかってないよ!!」

「そうよ!! 変なこと言ってんじゃないわよ!!」

「何、言ってるんだ。もうかかってんじゃないか。恋という名の病にな」
「っ!?!」

リボーンの言葉を聞いて否定する佐天と美琴であったが、すぐに顔を赤くし黙ってしまう。

「でも白井さんはすでに御坂さんのことが好きですよね」

「そ、そうですね! 私はお姉様一筋! 恋の病にかかっているって当然ですよ!」

初春はリボーンの言葉を聞いても動揺することはなかった。黒子はリボーンという言葉に動揺しつつも強がって見せた。

「馬鹿を言うな。俺にはお前より大切なものなんてない。さつきも言ったがお前は俺の誇り。絶対に譲れないものなんだ。お前のいない世界なんて俺には考えられない」

「な、なぜその言葉を!?!」

「ツナのヘッドフォンは無線になってな。ツナの奴、携帯を佐天の寮に忘れて初春からのSOSが伝えられなくてな。だから俺が代わりに出て無線で俺が初春のSOSを伝えただ。初春がSOSを伝えた後も、俺もそっちの状況が気になって無線は切らずにいたんだ。だからお前らに何があったかは筒抜けって訳だ」

「っ!?!」

あの場になかったリボーン相手なら誤魔化せるとタカを括っていた黒子であったが、無線越しとはいえあの時のことを知っていると知って動揺が隠せず顔を赤くしてしまう。

「え……!?! 白井さん……!?! もしかして沢田さんのことが……!?!」

「なななななな!?!」

「違いますのお姉様!! 私がお姉様以外の方に惚れるなんてことは絶

対にありませんの!!」

「……」

初春の言葉を聞いた途端、美琴は顔を赤くする動揺する。黒子は慌てて弁解する。3人が騒がしくなる中、佐天は黙って俯いてしまっていた。

「これでもまだ同じことが言えんのか？」

「なっ!？」

リボーンは携帯を操作すると携帯の画面を全員に見せた。画面にはツナに食べさせてもらう黒子の姿が動画で流れる。この動画を見て黒子は顔を真っ赤にする。

「く、黒子……!?!? あんた本当に……!?!？」

「違いますの!! これは沢田さんが私のことを気遣っただけで!! 決してやましい気持ちはありませんの!!」

「という割には美琴が食べさせた時よりも動揺してるよな。ツナに惚れ過ぎたせいで美琴に食べさせてもらっても動揺しなくなったんじゃねえか?」

「そ、それは……!?!？」

ニヤニヤしながら言うリボーン。しかし黒子は何も言い返すことができないでいた。

「へー。ツナさんに食べさせて貰ったんですか。白井さん」

「ち、違いますのよ佐天さん!! これはですね!! その……!?!？」

佐天が俯いた状態で低い声でようやく口を開いた。佐天の言葉を聞いて寒気の走った黒子は慌てて弁解する。

「大丈夫ですよ白井さん。私、怒ってませんから。本当に。だから気にしないで下さい」

「ひい!!」

佐天は顔を上げる。佐天は清々しい程、爽やか笑顔を浮かべていた。すると時間差で右手に持っていた林檎が粉々に潰れる。潰れた林檎を見て黒子は顔を真っ青にし、悲鳴を上げてしまった。

「り、林檎が……!?!？」

「またツナがやらかしたことで怒りが爆発すると同時に全身リミッ

ターが解除されたな」

「の、呑気に解説してる場合じゃないでしょ!!」

素の状態の佐天が林檎を潰したことに初春は恐怖する。林檎を潰した原理を解説するリポーンに美琴はツツコミを入れるが恐怖を隠しきれていなかった。

「すいません。ツナさんに用事ができたので帰らせてもらいます」

「「は、はい……」」

佐天の言葉に美琴、黒子、初春ははいと返事をし病室へと出て行く佐天の背中を見守るしかできなかった。

その後、ツナがどうなったかは想像にお任せする。

とある少女たちの結婚生活（マリードライブ）
標的（ターゲット） 270 佐天涙子

時は一気に進む。

「ただいまー」

ここはとあるマンション。スーツ姿のツナが限界から帰って来る。
「お帰りなさい」

玄関からエプロン姿の佐天がやって来る。ツナの妻である佐天涙子、改めて沢田涙子である。中学生離れしていたスタイルはさらに発達し、グラビアアイドル顔負けのスタイルになっていた。

「パパー!!」

「お帰りー!!」

さらに奥から佐天とそっくりな女の子とツナとそっくりな男の子が走ってやって来る。ツナと佐天の子供にして双子の姉の沢田さわだ涙なみ奈。もう1人の双子の妹の沢田さわだ綱つな子である。現在3歳である。

「ただいま。涙奈。綱子」

ツナは自分を迎えに来てくれた涙奈と吉子の頭を撫でる。2人は幸せそうな顔をしていた。

「ご飯にする？ それともお風呂？」

「じゃあ先にご飯かな」

「わかった」

4人は台所へと移動する。

「「いただきまーす」」

4人は両手を合わせて合掌すると料理を食べ始める。

「「美味しいー!!」」

「もう。そんなに慌てて食べなくても誰も取らないんだから。ゆつくりよく噛んで食べなさい」

「「はーい」」

佐天の言葉を聞いて元気よく返事をする2人を見て、ツナと佐天は温かい目で見守っていた。

「涙奈、綱子。頬っぺご飯ついてるよ」

「パパー。取ってー」

「綱子もー」

「はいはい」

「……」

娘たちにおねだりされてツナは2人に頬についた米粒を取る。一方で佐天はツナと娘たちのやり取りを見て頬を膨らませていた。

「あっ！ ママ！ 焼きもちしてる！」

「本当だー！」

「そ、そんな訳ないでしょ!! 変なこと言わないの!!」

綱子と涙奈に凶星を突かれたのか佐天は動揺し、顔を赤くする。そんな佐天を見てツナは微笑んでいた。

「というような微笑ましい光景がありつつも、4人は食事を終える。」

「パパー!! 遊んでー!!」

「私も!!」

「涙奈。綱子。パパは仕事で疲れてるんだから我が儘言わないの」

食事を終えたツナがソファで、ダブルレットに目を通していると涙奈と綱子が両腕に絡みついてきながら、遊んでくれとツナにせがんでくる。

洗い物をしていた佐天はツナの体調のことを考えて2人にツナを困らせないよう注意点した。

「別にいいよ。明日は仕事は休みだし」

「やったー!!」

「もう……」

ツナは何も気にしていなかった。涙奈と綱子はツナの返答を聞いて両手を上げて喜んでいた。佐天は娘に対するツナの甘さに呆れてしまっていた。

「私、ボードゲームしたい!!」

「私、おままごと!!」

「はいはい。じゃあ順番にね」

「はーい!!」

綱子と涙奈の要望を聞いてツナは開いて両手上下に動かし、2人を宥める。ツナの言葉を聞いて2人は元気の良い返事をした。

(全く……)

ツナの行動に呆れる佐天であったが、娘たちと遊ぶツナの姿を見て微笑んでいた。

(でもそういうあなただから好きになっちゃったのよね……)

佐天は思い出す。ツナと出会った時のこと。付き合い始めた時のこと。プロポーズされた時のこと。結婚式を挙げた時のこと。涙奈と綱子が生まれた時のことを。

「寝ちやったか……」

しばらく涙奈と綱子と遊んでいたツナ。遊び疲れたのか2人は寝息を立てながら眠ってしまった。ツナは寝ている2人に起きないようそろつと布団をかけた。

「お疲れ様」

「ありがとう涙子」

ツナが椅子に座ると佐天が紅茶をテーブルに出す。佐天にお礼を言うとツナは紅茶を飲み、佐天はツナの隣に座った。

「仕事が休みなんて言ってたけど嘘なんですよ?」

「やっぱりバレてた?」

「当たり前だよ。長い付き合いなんだから」

「ハハハ……やっぱり涙子には敵わないね」

そう言うとツナは誤魔化すかのように、再び紅茶を口に入れた。

「大丈夫だよ。みんなのことは俺が護るから」

「俺がじゃなくて、私たちであの子たちを護る。でしょ?」

「涙子……」

「あの頃と違って、もう護ってもらえばかりの存在じゃないんだよ」

「そうだったね。ごめん涙子」

佐天の言葉を聞いてツナは気づかされた。昔とは違って佐天は護ってあげるだけではなくなったことに。今はもう対等な立場なのであると。

「私にこんなことを言わせたんだから、私の我が儘を聞いてもらうよ」
そう言うと佐天はツナの方に顔を向けると両目を閉じて、唇を狭めたまま何かを待っていた。ツナは佐天の意志を理解し顔を近づけていく。

「ん……」

ツナと佐天の唇が重なる。2人はお互いの唇の感触を感じあっていた。そして30秒後。2人ようやく唇を離れた。

「理由をつけてまでキスしようとするなんて。よっぽど涙子と綱子に嫉妬したんだね」

「しょ、しょうがないでしょ!! 私だってしたくてしてる訳じゃないし……!! 第一、ツナは昔から私の気持ちに気づかず他の女の子に……!!」

「でもそれだけ嫉妬してるってことはそれだけ俺のことを愛してくれてるってことだよ」

「っ!?!」

ツナの言葉に佐天は何も言い返すことができず顔を赤くしてしまっていた。

「大丈夫だよ。俺が愛してるのは涙子だけだよ」

「そんなこと言われたって騙されないんだからね……!!」

真っ直ぐな瞳で自身への愛を伝えるツナ。ツナの言葉を聞いて佐天は言葉と裏腹にまんざらでもない表情を浮かべていた。

「じゃあ今度は俺のお願いも聞いてもらおうかな」

「何？」

「久しぶりに俺と一緒に風呂に入った」

「お、お風呂!？」

「どうかな？」

「も、もう……!! 仕方ないわね……!!」

佐天の言葉とは裏腹に佐天の表情は頬が緩みまくってしまっていた。

「じゃあ行こうか」

「うん……!!」

2人は椅子から立ち上がると台所を抜けて浴場のある部屋と向かって行くのだった。

ピピピピピピピ!!

「……」

ここは佐天の寮。佐天の部屋に目覚まし時計の音が響き渡る。佐天は目を覚ました。

(はああああああ!!)

夢の内容を全て思い出した佐天は顔を真っ赤にし、枕に顔を埋めながら両足を上下にバタバタさせていた。

(私ったらなんて夢を!？ で、でも私とツナさんが結婚して子供まで……しかもツナさんとお、お、お……お風呂なんて……!!)

顔を真っ赤にして動揺していた佐天だったが、夢の内容は最高だったのか頬の緩みが止まらなくなっていた。

(は、早く!! あの夢の続きを!!)

佐天はうつ伏せの状態から仰向けの状態になるとあの夢の続きを見ようと2度寝しようとする。あの夢の続きを。ツナとの入浴するシーンを見る為に。

この後、頑張つて夢の続きを見ようと奮闘する佐天だったが、夢の続きを見るところか興奮して眠ることすらできなかつたのだった。

標的（ターゲット） 271 御坂美琴

ここはとあるマンション。

「うくん？」

ツナはベッドの上にあった。目が覚めるそこには部屋の天井が広がっていた。

「ふわあ……」

大きなあくびをするとツナはベッドから起き上がろうとする。

「ん……う」

上半身を起き上がらせたがそこから動けないでいた。だがツナは慌てた様子はなかった。なぜなら動けなかった理由は微笑ましいものだったからである。ツナの視線の先には幸せそうな表情でツナの左腕に抱き付いた状態の美琴がいた。

「あれ？」

ツナは美琴を起きないように腕を解こうとするが美琴の力は強く、拘束を解こうとしても解くことはできなかった。

「やれやれ……こりやダメだな……」

拘束を解こうとしても無駄だと判断したツナは美琴を起こして拘束を解くことを決める。

「美琴。起きて」

「うくん？」

ツナは拘束されていない右腕で美琴の体を揺らして起こる。ツナが揺らしたことで美琴から曖昧な返事が返って来る。

「どうしたのツナ……？ もう朝……？」

美琴はうつすらと目を開けながらそう言った。現在の美琴の名は沢田美琴。ツナの妻になっていり。

「うん。起こしてごめんね。本当は起こすつもりはなかったんだけど、美琴が離してくれないからさ。とりあえず離れてもらえるかな？」

「このままじや起きれないんだ」

「嫌……絶対、離さないんだから……」

「ちよっ……!?!」

ツナは美琴に離してくれるようお願いするが、美琴は離すどころか腕に捕まる力を強める。美琴がさらに力を強めたことでツナは動けなくなってしまうていた。

昔のようなキリツとした表情を浮かべ、ツンツンしていた美琴はどこにもいなかった。現在の美琴はデレデレしており、昔のようなピリついた雰囲気はどこにもなかった。

「どうしても離して欲しいなチューしなさいよ……」

「何でそうなるの……?」

「チューしてくれないなら離さないんだから……」

「全く……しようがないなあ……」

キスすることを強要してくる美琴。このまま説得したところで離してくれないと判断したツナは腹を括り、寝ている美琴に顔を近づけていく。

「ん……」

ツナと美琴の唇が重なる。2人は互いの唇の感触を感じ合う。30秒程、キスすると2人は唇を離した。

「美琴。これで離れてくれる?」

「ええ。わかったわ」

ツナがそう尋ねると美琴は右腕の拘束をゆっくりと解いていく。

が、

「油断したわね」

「ちよっ!?!」

美琴は素早くツナの前方に移動する。そしてそのままツナを押し倒しツナの上に股がった。完全に油断していたのかツナはなす術もなくまんまと美琴の策略にハマってしまった。

「最近、仕事が忙しくて帰って来なかったんだから覚悟しなさい」

「ちよっ !?! 美琴……んん!?!」

美琴は目をギラギラさせながら鼻息を荒くさせていた。ツナは嫌

な予感がしたが時すでに遅く、美琴に唇を塞がれてしまう。

「プハッ!!」

キスされてから1分後。ようやく美琴の唇から解放されたツナ。
が、

「これで終わりだなんて言った覚えはないわよ」

「んん!？」

美琴の攻撃が終わることはなかった。ツナの唇は二度美琴の唇によって塞がれてしまう。

(こ、このままじゃ……!?)

このままでは自分の身がもたないと危機感を覚えるツナであったが、どうすることもできなかった。この後、ツナは美琴が満足し終えるまで美琴の愛を受け入れることしかできないのだった。

「あー。スツキリしたわ」

「そ、そうだね……」

美琴は部屋のカーテンを開ける。カーテンを開けたことで日差しが入ると、美琴はベッドで横たわっているツナに向かって満面を笑みを浮かべながらそう言った。一方でツナは美琴にキスされまくったせいで酸欠になりかけており、ベッドの上で虫の息であった。

ツナと美琴は自分たちの部屋から出るとリビングへと移動する。

「おいでナッツ」

「ガウ♪」

美琴がナッツの名前を呼ぶとナッツが嬉しそうな表情を浮かべながら美琴の元へとやって来る。

「よしよし。いい子ね」

「ガウ〜♪」

美琴はナッツを抱き抱えるとナッツの頭を撫で始める。美琴に撫でられてナッツは幸せそうな表情を浮かべていた。

かつては美琴に怯えていたナッツであったが、今では怯えることは無くなり美琴に懐いている。

「ナッツも随分、美琴に懐くようになったね」

「そうね……」

美琴はナッツに懐くまでのことを思い出す。ツナと付き合い始めてからちよつとずつではあるが、自分に懐いてくれたことに。

「美琴と結婚する時にナッツが怖がらないか心配だったけど懐いてくれてよかったよ。ナッツも大事な家族なんだからさ」

「そうね。それに家族も増えるし、子供に怖がられなきやいけないわね」

「え？ 家族が増える？」

美琴の発言を聞いた途端、ツナは驚きのあまりキョトンとした表情になってしまっていた。

「妊娠したのよ……!! 私……!!」

「ええ!?!」

美琴は顔を赤らめ、左腕で抱えると右手で自分のお腹を優しく撫でながら呟いた。ツナは突然の妊娠宣言に衝撃を受けていた。

「ほ、本当に……!?!」

「本当よ……!! ツナが中々、帰って来ないから言えなかつたのよ……!!」

「じゃ、じゃあ美琴が母親になるってこと……!?!」

「ええ……!! それでツナが父親になるってことよ……!!」

「ハハハ……俺たちが……」

自分たちが1児の母親と父親になると知って嬉しい反面、実感が湧かない気分であった。

「だからこれからは帰るようにしなさいよね……お父さん……!!」

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「っ!？」

ここは常盤台中学の寮にして美琴の住んでいる寮。美琴の部屋に目覚まし時計の音が響き渡る。現在、黒子が入院している為、部屋には美琴しかいない。

「なななななな!？」

美琴は思い出す。自分が見た夢の内容を。夢の中の自分がツナに對してキスしたことを。

(な、なんて夢見てんのよ!?! というか何してんのよ夢の中の私は!!!)
なぜか結婚していた上にキスをおねだりした挙げ句、自分から何度もキスするという性欲の権化と化した自分の姿を見て美琴は顔を真っ赤にし、ベッドの上で悶えていた。

(し、しかも……!!)

キスだけでなくさらに妊娠までしていたという事実が美琴の心を最大限にまで動揺させてしまっていた。

(はっ!!)

だがここであることに気づいた美琴。そのお陰か美琴は冷静さを取り戻した。

(もしかしてこれは予知夢!?)

美琴は思い出す。夢の中の自分がナッツに怖がられておらず、懐いていたことに。

(そうよ!・きつとこれは予知夢よ!)

あの光景が予知夢だと自分にそう言い聞かせる美琴。

(今日こそナッツと!!)

ナッツと仲良くできるチャンスだと考えた美琴は放課後にナッツに会いに行くことを決意するのだった。

しかし美琴はナッツと仲良くするどころか、リングの中から出て来てくれることすらなく、美琴はショックを受けるのだった。

標的（ターゲツト） 272 白井黒子

「ここはとある一軒家。

「ただいまー」

「お帰りなさいませですの。あなた」

ツナが家の扉を開けるとエプロン姿の黒子がツナを迎える。ツナの白井黒子改め、沢田黒子である。

「お帰りなさいませ。お父様」

「ただいま黒奈^{くろな}」

すると黒子と瓜二つの見た目にツンツン頭の茶髪の女の子がやって来る。彼女の名は沢田黒奈^{さわだくろな}。ツナと黒子の一人娘である。

黒子の教育の賜物なのか見た目とは裏腹に話し方と雰囲気は子供のように無邪気な様子はなく、冷静沈着な大人のようなだった。

「お風呂になさいますか？ ご飯になさいますか？」

「先にお風呂にしようかな」

「了解しましたの。それではその間に食事の準備をしておきますわ」

「ありがとうございます」

「お母様。私もお手伝いしますの」

「あら。黒菜はお利口さんですわね。ではお手伝いの方をよろしくお願ひしますわ」

「はい。お母様」

そう言うと黒子は黒菜と共に台所に。ツナは靴を脱いでお風呂場へと向かって行った。

ツナが風呂から上がると食事を取る。

「(ご)馳走様でした(の)」

3人は食事を食べ終わると両手の掌を合わせて合掌した。

「お父様。お母様。DVDを見たいのですがよろしいでしょうか？」

「DVD?」

「実は学校のご友人からこの作品が面白いと勧められたのです。そして見たら感想を教えてください」と

「あら。気の合うご友人ができたようですね」

「はい。それで見てよろしいでしょうか？」

「俺はいいよ。黒子は?」

「私も構いませんわよ」

黒菜がDVDを鑑賞してもいいか確認を取るとツナと黒子は快く快諾する。

「せっかくだし俺たちも見ない黒子?」

「そうですね。よろしいですか黒菜?」

「はい。構いませんわ」

黒菜の友達から勧められた作品にツナは興味を持った。黒子も同じく興味を持ったのか見てもいいかどうか黒菜に尋ねると、黒菜は快く快諾した。

「では再生します」

3人がソファアーに座り、DVDを見る準備が完了すると黒菜はリモコンの再生ボタンを押した。再生ボタンが押されたことで映像が始まる。

が、

「く、黒菜……!?!」

「こ、これは……!?!」

テレビ画面に映った映像を見た途端、ツナと黒子は黒菜の方を向いてテレビ画面に向かって指を指した。2人の体が震えて顔は真っ青

になっていた。

「ホラー映画です。それがどうかしましたか？」

「い、いいや……」

「な、何でもありませんわ……」

ホラー映画なのに平然とした顔でいる黒菜。黒菜が全く動揺していないのを知ったツナと黒子は、黒菜の前でかっこ悪い所を見せられないと思ったのか何でもないようなフリをして映画を見ることを決める。

(め、滅茶苦茶怖ええええええ!!)

(落ち着くんですの黒子!! これは芝居!! フィクションですよ!!)

映画が始まってから20分。ツナと黒子は声を上がりそうになるがなんとか我慢し、1秒でも早く映画が終わることを祈っていた。

「面白い作品でしたねお父様、お母様」

「そ、そうだね……!!」

「な、中々リアリティーのある作品でしたわね……!!」

映画が始まってから1時間40分。ようやく映画が終了する。黒菜は全くビビっていないのに対して、ツナと黒子は体を震わせながらも必死に強がっていた。

「お父様。お母様。もしかして怖かったのですか？」

「い、いや!! 全然!!」

「そうですわ!! 大人の私がこのようなお芝居で怖がるなんてありませんの!!」

「ではなぜ抱き合っているのですか？」

「へっ?」

黒菜の指摘されるとツナと黒子はようやく気づいた。恐怖のあまり互いに抱き合ってしまったことに。そして2人は顔を赤くすると即座に離れた。

「どうされたのですか? お父様? お母様?」

「こ、これは……!! その……!! ふ、夫婦だからだよ!! 夫婦ならこ

れくらい当然なんだよ!! ね!! 黒子!」

「そ、そうですわ!! 私たちはラブラブなのですから!!」

「そうだったのですか」

純粹な瞳で尋ねてくる黒菜に対して、ツナは咄嗟に嘘をつき、黒子ツナの嘘に便乗した。咄嗟についた嘘であったが黒菜は疑問を感じることではなく2人の言葉を信じた。

「それでは私は先にシャワーを浴びさせてもらいます」

「う、うん。いつてらっしやい」

「ごっくりどうぞですよ」

シャワーを浴びに行こうとする黒菜をツナと黒子がぎこちない笑みを浮かべながら見送った。

「ふう……」

黒菜が完全にいなくなったのを確認すると、ツナと黒子はぎこちない笑みを解いて脱力した。

「な、なんとか誤魔化した……」

「まさかホラー映画とは思いませんでしたの……」

「本当だよ……というか何で黒菜は平気なの……?」

「あの子、妙に大人びているところがありますから……」

ツナと黒子は黒菜がなぜ怖がらないのかわからないと同時に、ビビりまくっていた自分たちが情けなさを痛感していた。

「黒子……その……さつきはごめん……その……抱きついちゃって……!!」

「いえ……こちらこそ……すいませんでしたの……!!」

ツナと黒子は勝手に抱きついてしまったことを謝罪する。そこから会話が途切れてしまう。

が、

「黒子」

「何です……んん?!」

会話が途切れしまつてから1分後。ツナは黒子の唇を奪った。ツナからの突然のキスに黒子は驚きを隠せないでいた。

30秒後。ツナは黒子から唇を離す。

「ごめん……黒子……映画を見てた時に抱きついてのは無意識だったけど、抱きついてたのは気づい……んん?!」

すると今度は黒子がツナの唇を奪った。黒子の突然のキスにツナは驚きを隠せないでいた。

30秒後。黒子はツナから唇を離す。

「私もですの……!!」

黒子もツナと同じだった。抱きついたのは無意識だったが、抱き合っていたことには気づいていた。そして離れたくなかったことも。

「黒子……!! 愛してるよ……!!」

「私も愛していますわ……!! ツナ……!!」

少しの間、互いに見つめ合うと2人は同時に顔を近づけていき3度目のキスを交わした。

そして先ほどよりも長いキスを終える。

「ねえ黒子」

「何ですか?」

「そろそろ2人目……欲しくない?」

「ええ。私も同じことを考えていましたの」

「じゃあ今夜は寝かさいよ」

「望むところですの」

第7学区。カエル医者者の病院。

「はあ!!」

キャリアケース強奪事件で負傷し病院のベッドで寝ていた黒子。しかし自分の見た夢に驚いて飛び起きてしまう。

（わ、私はなんて夢を!!）

自分の見た夢の内容を思い出し顔を真っ赤にして、動揺する黒子。

（そ、それに……!?!）

3度に渡るキスだけでも衝撃的な光景であった。だがその後にながが言った、寝かさないという発言の意味を黒子はどういう意味なのか知っていた。

(わ、私と沢田さんが夜の営みを……!? って何を考えているのですか私は!? これでは私が沢田さんとそういうことをしたいと望んでいるみたいではありませんか!!)

首を横に降って自分の見た夢を否定し、忘れようとする黒子。しかし黒子の脳裏にはツナと黒子の間に生まれた2人目の子供の姿が。2人目の子供が大きくなった姿が。そして4人で花見に行き、レジャーシートの上で楽しく弁当を食べるといふ幸せな光景が。

「ハハ……ハハ……ハハハハハ……私はもう寿命が近いかもしれせんわね……」

大覇星祭篇

標的（ターゲット） 273 愉快的仲間たち

キャリーケース強奪事件解決から4日後。9月19日。
「うわー。すっごい賑わってるー」

現在、学園都市はたくさんの人たちが闊歩している上に多くの屋台が出展しており賑わいを見せていた。今日は学園都市最大のイベント。大覇星祭である。

大覇星祭とは最先端の科学技術があふれ、能力開発が行われている、閉ざされた空間である学園都市が唯一、一般に開かれるイベントが大覇星祭である。簡単に言えば学園都市に存在する全学校の生徒たちが参加し、競い合う大運動会である。

普通の運動会との違いは能力使用の一部解禁という要素を加えることで、ごく普通の運動会を一大エンターテインメントに昇華させている。

開催期間は7日間。能力者たちが繰り広げるド派手な競技の数々を見る者たちの目を楽しませ、世界にテレビ中継されている。同時に、能力開発の成果をお披露目する格好の場でもあり、学校間でしごぎを削るイベントともなっている。

「えーっと……佐天の学校は……」

ツナはポケットに入れていたパンフレットを取り、プログラムと佐天の所属する柵川中学が参加する場所を確認する。

「あつー！ いてっー！」

パンフレットを見ることに集中するあまり視線が下へ向いた状態で歩いていた為、ツナは周囲が見えておらず誰かとぶつかってしまった。

「あ、すいません……って沢田!？」

「当麻!？」

ツナがぶつかった相手は体操着姿の当麻だった。2人はぼったりここで会ったことに驚いてしまう。

「ごめん当麻。パンフレットに見るのに集中し過ぎててさ」

「気にすんな。こんだけ人混みなんだからしょうがないって」

ツナがぶつかったことを謝罪するが、当麻に全く気に留めていなかった。

「それにしてもすつごい人混みだよな」

「そっか。沢田は大覇星祭初めてだもんな」

「うん。学園都市に来たのは2カ月前だし」

「今日は学園都市中の人が集まっている上に学園都市の外から色んな人間が来てるからな」

当麻は周囲にいる多くの人たちを見渡しながらそう言った。

「なあ沢田。今から時間あるか?」

「え? どうしたの?」

「今からクラスの奴らとこの後出る競技の作戦をやる予定でさ。お前に俺の友達を紹介したいんだけど……」

「うん。いいよ」

佐天の出る競技の時間は事前に佐天本人から聞いており、まだ時間まで余裕があると判断したツナは当麻の友達に会うことを了承する。そしてツナは当麻と共に歩き始める。

歩くこと15分。ツナは当麻の案内の元、当麻の通う高校にして控え室でもあるとある高校の校庭にやって来た。

「な、何これ……?」

校庭にやって来た途端、ツナは驚きの光景を目にしていた。なぜならそこにはアスファルトと上でうつ伏せになっていたり、壁にもたれかかった状態で上を向いたり、体育座りの状態で俯いた生徒たちが魂が抜けた状態になってしまっていたのだから。

「ど、どうした!? この最終日みたいなテンションは!?!」

まだ一つも競技に出場していないのにも関わらず、すでに疲れ切った表情をしているクラスメイトを見て当麻は驚きを隠せないでいた。

「徹夜で大騒ぎし過ぎて一睡もしてませんが何か……?」

「戦術も詰め込み過ぎてクラス全員で揉めまくったし……」

「もうやる気出ねえ……」

「本末転倒だろお前ら!!」

「ハハハ……」

作戦会議のし過ぎで満身創痍になったと知って当麻はツツコミをいれる。ツナはただただ苦笑いすることしかできなかった。

「ていうかカミヤん。そいつは誰だにや……?」

金髪にサングラスをかけた青年がツナの存在に気づき、当麻にツナのことを尋ねた。

「ああ。俺の友達でさ。お前らに紹介してやろうと思ってよ」

「えっと……沢田綱吉です。よろしくお願いします。気軽にツナって

呼んで下さい」

「俺は土御門元春だ。よろしくだぜツナやん」

「それでそっちが青髪だ」

「よろしゅうなツナやん」

土御門は壁にもたれかかった状態で手を降りながら答え、うつ伏せの状態で倒れている青髪はなんとか起き上がりツナの方を向いて答えた。

「君。制服来てないけどどここの学校?」

すると校庭の近くにあったドラム缶をベンチ代わりにして座っている無表情の黒髪ロングの女性がツナに尋ねる。

「え、えっと!! 俺、夏休み前に退学しちゃってさ!! 今は学校に通っ

てないんだ!! 俺、頭悪いからさ!!」

「そうだったんだ。私。姫神秋沙。ひめがみあいさよろしく」

ツナは咄嗟に嘘ついたが姫神は疑うことはなく、自己紹介した。

「なんや。ならツナやんは大覇星祭に参加できんってことかー。可哀想やなー」

「ま、まあ……俺、運動得意じゃないし……とにかくみんなのことを応援するよ」

「なんていい奴なんだにやー。もういつそのこと、とある高校ウチに入っちゃまおうぜえ」

「そうやそうや。歓迎するで」

土御門と青髪はツナのが気に入ったのか自分たちの学校に来るように勧誘する。2人の言葉を聞いて他の生徒たちは息を吹き替えたかのように元気なり、歓迎モード一色となる。

「何、盛り上がってるのよあんたら」

盛り上がっている最中、黒髪ロングのどこか美琴のようにキリツとした表情の女生徒がやって来た。

「って……あなた誰?」

「こいつは俺の友達で沢田っていうんだ。せっかくだから俺の友達を紹介してやろうと思ってるよ」

「そうだったの。私は吹寄制利ふきよせりよ。よろしく」

「さ、沢田綱吉です……」

知らない人間がいることにキョトンとした吹寄であったが、当麻から事情を聞いてすぐに納得し自己紹介する。ピリついた雰囲気は圧されのか少しだけ萎縮しながら自己紹介した。

「それにしてもあなたこんなところでゆっくりしていいの? あなたも出場するんでしょ」

「それがなー吹寄。ツナやん退学してもうて大覇星祭に出場できひんらしいのよ」

「そうだったの……実行委員としてなんとかしてあげたいけどこればかりはどうしようもないわね」

「実行委員?」

「ああ。私、この大覇星祭の実行委員なのよ」

そう言うと吹寄は右腕に巻いていた実行委員と書かれた腕章を見せた。

「大覇星祭に参加できないのは実行委員として残念だけど、大覇星祭は競技だけじゃなくて色々イベントがあるから楽しんでね」

「う、うん」

少しだけ時は進む。

「ここね。あいつの高校が出る会場は」

美琴は自分が出る競技まで時間があるので当麻が出場する高校が出ることをパンフレットで知ったので、競技の行われる暇潰しがてらやって来たのである。

「お、お腹が空いたんだよ……」

「……」

するとそこにはお腹を鳴らしながらベンチに横たわっているインデックスがいた。そんなインデックスを見て美琴は唾然としてしまっていた。

実はこの2人は親しい仲ではないのだが、9月の初頭に起きたある事件にて出会っている為、全くの赤の他人という訳ではないのである。

空腹で苦しんでいるインデックスを見ていられなかったのか美琴はインデックスにペットボトルの入った水を差し出した。

「ありがと短髪」

「短髪って……」

水をくれた美琴にお礼の言葉を述べるインデックス。自己紹介していなかったとはいえ短髪と呼ばれたことに若干、イラっとしてしまっていた。

「何だ。お前らも来てたのか」

「あらりボーンじゃない……ってどんだけ買ってたのよ!!」

美琴が横を向くとそこにはたこ焼き、ポテト、フランクフルト、ジュースといったありとあらゆる食べ物や飲み物に囲まれているりボーンがいた。りボーンがあまりに多くの物を買っていたので美琴にツツコミをいれる。

「た、食べ物……」

りボーンの買った食べ物を見てお腹を鳴らしながら羨ましそうな表情で食べ物を見ていた。通常であればりボーンのが気になるところなのだが、空腹状態のインデックスはりボーンのことよりりボーンの買った食べ物の方が気になってしまっていた。

「腹減ってんなら食うか?」

「え!?! いいの!?!」

「いいぞ」

「ありがとうなんだよ!!」

食べ物を恵んでくれると知ってインデックスはりボーンの周囲にある食べ物を次々と胃の中へとぶち込んでいく。

「こいつ。お前の知り合いか?」

「まあ……知らない仲じゃないって感じ……?」

「そうなのか。なあお前。ボンゴレに入らねえか?」

「ウォンゴレ?」

「勧誘してんじゃないわよ!!」

りボーンの勧誘を聞いて、口に食べ物を頬張った状態のインデックスは疑問符を浮かべる。美琴は名前すら聞いてない状態でボンゴレに勧誘したことにツツコミをいれる。

『ただいまより棒倒し選手権を始めます』

インデックスが食べてる間に競技開始のアナウンスが流れる。

「あ。始まるみたいね」

「やっぱり当麻の競技を見に来たのか？」

「自分の出場する競技まで暇だしね。それと私だけじゃなくて多分そいつもね」

「何だこいつも当麻の知り合いなのか」

「そうらしいわよ。といっても相手の高校は能力者も多くいる学校。その一方であいつの学校は能力者がいない。応援しに来なくても結果は見えてけどね」

「そうか？ むし面白い展開になると思うぞ」

「は？ どういうことよ？」

『それでは選手の入場です』

リボーンの言葉の真意を尋ねようとした美琴だったが、アナウンスのせいで聞きそびれてしまった。

そして両高校の選手が入場する。

「あっ！ ツナもいるんだよ！」

「はあ!？」

インデックスの発言を聞いた途端、美琴は驚きの声を上げる。そして当麻たちのいるとある高校の中にとある高校の体操着を着たツナがいた。リボーンだけは不適な笑みを浮かべていた。

「何であいつがいんのよ！」

標的（ターゲット） 274 一気団結

棒倒しの競技に出場権のないはずのツナがなぜかとある高校に出
ていた。

「何で沢田がいんのよ!! あいつ学校通ってないんだから出る資格な
んでないのでしょ!! とうかバれるに決まってんでしょ!!」

ツナが大覇星祭に出場するというありえないことが起きてしまい、
インデックスがツナのことを知ってることなどどうでも良くなつて
しまっていた。

一方、その頃。

「ええ!? 何で沢田さんが出てるんですか!？」

「考えられる理由はアレしかない……」

「ですわね……」

街中に設置された街頭モニターに映し出された映像を見て初春も
美琴と同じく驚きの声を上げてしまっていた。佐天と黒子も驚いて
はいたものの、ツナが競技に出場している理由をなんとなく理解して
いた。

場所は戻って棒倒しの競技の会場。

「あんた一体、どうやって沢田を出場させたのよ!!」

美琴はリボーンがツナを競技に出場させたのだとすぐに理解した。

「何も言っただけなのによくわかったな美琴」

「あんた以外、誰がいるって言うのよ!!」

リボーンという言葉聞いて美琴はツツコミをいれる。こんなことができるのは、ツナを鍛えるという名目で学校を辞めさせるような破天荒なことを当たり前のようにやってのけるリボーンしかいないことを美琴は嫌という程、わかっていた。

「実はな……」

時はツナが当麻たちと出会っている頃。

「当麻。どうしたの？」

「いや……俺たちの担任が何か話しているみたいだよ……」

当麻が指を指す。するとそこには桃色の髪にチアダンスの格好に桃色のポンポンを持った、低身長で童顔の女性と長身に眼鏡をかけた男性が何やら話しているようだった。

「えつと……どつちが当麻の担任？」

「あのチアダンスの格好した方だ。月詠つくよみ小萌こもえ先生だ」

「へー……」

あまりに子供っぽい見た目から本当に先生だと信じる者はほとんどいない。しかしリボーンという月詠以上の見た目の家庭教師かてきょうがい

るツナは月詠が先生だと知っても驚くこともなく、素直に当麻の言葉を信じた。

「ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです。それは私たちのせいであって生徒さんたちに何の非もないのですよー!!」

「設備の不足はお宅の生徒の質が悪いからでしょう？　結果が出れば統括理事会から追加資金が降りるはずですから」

必死に訴える月詠のに対して、男性教諭は見下すような表情で言い放った。

「あなたの所の1学期の期末能力測定も酷かったそうじゃないですか。全く。失敗作を抱えると色々と苦労しますねえ」

「生徒さんに成功も失敗もないのですー。あるのはそれぞれの個性なのですよー」

「それは夢のある意見ですな。なら私は現実で打ち消してみせましょうか。私の担当したエリートクラスでお宅の落ちこぼれたちを完膚なきまでに撃破して差し上げましょうかね」

月詠の言葉を聞いても男性教諭は意にも返さなかった。

「ご心配なく。一応、手加減はしてあげますから」

そう言うのと男性教諭は振り返り、歩いて競技が行われる会場へと向かって行った。

「違いますよね……みんな落ちこぼれなんかじゃ……」

男性教諭がいなくなった後、月詠は悲しそうな表情で呟いた。

「酷い……」

月詠と男性教諭のやり取りを聞いていたツナは男性教諭の発言に怒りを覚えていた。

「おいお前ら」

当麻が後ろを振り返えることなく呟いた。すると2人の後ろにはいつの間にか当麻のクラスメイトが集まっていた。どうやら月詠と男性教諭の会話を聞いているようだった。

「わかってるよな?」

当麻がそう尋ねると、クラスメイト全員が迷うことなく首を縦に振った。

「打倒!! エリート校!!」

「「「うおおおおおおおおお!!」」」」

当麻が叫んだ瞬間、クラスメイト全員が一気団結し雄叫びを上げた。

「こんなの見せられたら黙っちゃいられねえよな。ツナ」

「リボーン!?!」

自分の後方から自分のことを呼ぶ声がしたので振り返るとそこにはリボーンがいた。

「あ、赤ん坊が喋つとる!?!」

「き、奇妙ね……」

「可愛い……」

リボーンが存在と流暢に喋ったことに青髪と吹寄は驚きを隠せないでいた。姫神はリボーンにぞつこんな様子だった。

(何だこの赤ん坊……? 一体、何者だ……?)

先程までヘラヘラしていた土御門だったが、リボーンの確認した瞬間、真剣な眼差しになりリボーンのことを観察していた。

「久しぶりだな当麻。夏休み以来か」

「お、おう……久しぶりだな……」

「カ、カミヤン……知り合いなん……? この妙な赤ん坊と……?」

「ま、まあ……」

リボーンの正体を知ってはいるもののリボーンの正体が正体なだけに青髪の言葉に返事で答えた。

「ちやおつす。俺はリボーン。ツナの家庭教師かてきよにして殺し屋だぞ」

「「「は……?」」」」

リボーンという言葉聞いて当麻のクラスメイトは啞然としてしまっていた。

「なんやなんや。面白い子やなー」

「あつ!! 気軽に触っちゃダメ!!」

青髪だけはちよつと変わった子供だと思いリボーンの頭をポンポンと軽く叩く。青髪の行動を見てツナは慌てて制止する。

「気軽に触るんじゃねえ」

「グフツ!!」

しかし時すでに遅かった。リボーンは青髪の顎下にジャンプするとそのまま青髪の顎を蹴り上げ、青髪を蹴り飛ばした。

「いだあ!! 滅茶苦茶痛いんやけど!!」

あまりのリボーンの蹴りの威力に両手で顎を抑えながら青髪は仰向けの状態でのたうちまわっていた。

「何、悪ふざけしてんのよあんた」

「悪ふざけなんかしてへんって!! めっちゃ痛いんやって!!」

(信じてもらえないろうな……)

青髪は必死に訴えるが、吹寄からすれば青髪が痛がっているフリをしていると思われず呆れられるだけだった。ツナと当麻は信じてもらえない青髪の姿を見て同情してしまっていた。

(あの身のこなし……あの蹴り……タダ者じゃない……殺し屋っていうのは嘘じゃないのか……!?)

土御門はリボーンの蹴りを見てリボーンが先程、言っていたことが本当だということを理解すると同時に恐怖を覚えていた。

「さっきの光景見せてもらったぞ。そしてお前らの覚悟もな」

(い、嫌な予感……)

不敵な笑みを浮かべながらそう言うリボーンを見てツナは嫌な予感がしてしまっていた。

「俺はお前らを気に入った。よってツナをお前らのチームとして参加させてやる。あの5流教師のチームに勝つ為にな」

(やっぱりだ……!!)

リボーンは一切、臆することなく堂々と宣言した。自分の嫌な予感が当たってツナは心の中で叫んだ。

一方でリボーンの言葉を聞いてクラスメイトたちは困惑してしまっていた。

「い、いや……そもそも沢田はウチの学校の生徒じゃない沢田が参加できる訳ないだろ……」

「なーに。そこは問題ねえ。俺がこの大会の運営と直接、交渉してやる」

(絶対に口クでもないことをする気だー!!)

当麻の指摘を聞いてもなおリボーンは言い淀むどころか、物凄く楽しそうな笑みを浮かべていた。そんなリボーンを見てツナはリボーンがとんでもないことをやろうとしていることを理解する。

「気持ち嬉しいけど運営委員としては認められないわね。いくら相手が嫌な相手でもルールを破った訳じゃない。沢田君がどんな能力を持つてるか知らないけどルール違反はダメよ」

勝つ為とはいえルール違反をしては本末転倒。吹寄はリボーンの提案を却下した。

そんな時だった

「ボンゴレシヨツピングの時間だぞ。本日、紹介する商品ははこちら」
「っ!?!」

すると急にリボーンは甲高い声を上げると地面に大量の物を置いた。リボーンの置いた物を見て吹寄の顔つきが変わった。

「健康グッズ一式だぞ。なんと今回はボンゴレシヨツピング創業を記念して先着1名にこの健康グッズ一式を無料でプレゼントするぞ」
「くっ……!?!」

リボーンという言葉聞いて吹寄はうずうずしていた。実は吹寄は健康オタクであり健康グッズに目がない。故に目の前にある大量の健康グッズが喉から手が出る程、欲しかった。そして同時にリボーンのことを理解する。ツナを試合をさせられることを見逃してくれればこの健康グッズをプレゼントするということ。

「さらにその先着1名にはこの健康グッズをこれから3カ月続けて無料でプレゼントするぞ」

「っ……!?!」

ここでリボーンは吹寄に対してさらなる好条件餌で吹寄は釣ろうとする。リボーンという言葉聞いて吹寄の理性はさらに揺れ動いた。

そして

「わ、わかったわ……」

吹寄はリボーンの魅力に勝てずリボーンのことを呑むことにした。リボーンが堅物の吹寄の心を完全に掌握したことにクラスメイトた

ちはざわついたのであった。

再び場面は戻って競技会場。

「ということがあつてな」

「相変わらずねあんた……」

リボーンはツナが競技に出場している経緯を話した。相変わらず無茶苦茶なことをしていたことに美琴は呆れると同時にリボーンらしいとも思っていた。

「というかどうやって沢田を出場させたのよ……どうせロクでもないことをしたんでしょうけど……」

「そんなことねえぞ。ちよつと交渉したらすんなり理解してくれたぞ」

「聞いた私が馬鹿だったわ……」

愛銃をチラつかせながら満面の笑みを浮かべるリボーンを見て美琴は後悔する。

『それでは競技を開始します』

競技開始直前となり両校とも臨戦体勢に入り、周囲の空気がピリつき始める。

「ようやくだな」

リボーンは満面の笑みを浮かべると愛銃の銃口を会場にいるツナと当麻に定めた。

そして試合開始のホイッスルが鳴り響く。

「いっぺん死んでこい」

標的（ターゲット） 275 大波乱

ついに競技が開始される。

「いっぺん死んでこい」

試合開始のホイッスルが鳴ると共にリボーンは引き金を引くと2発の弾丸を放った。

そしてホイッスルが鳴り終わると同時にツナと当麻の額に弾丸が着弾し、2人は後方へゆつくりと倒れていく。

（俺……死ぬんだ……もつたいなあ……死ぬ気になれば競技にも勝てたのに……死ぬ気で戦えばよかった……）

（う、嘘だろ……俺……死ぬのかよ……こんなあつさり……まだ戦ってもねえつてのに……月詠先生の為に頑張るって決めたのに……）

後方へ倒れながらツナと当麻は後悔した。エリート校に勝つと決めたのにも関わらず死んでしまうことに。

そして2人は地面に仰向けの状態で倒れた。

「沢田君!?! 上条!?!」

「ええ!?! 急にどないしたん!?!」

急にツナと当麻が倒れた為、吹寄と青髪は驚きを隠せないでいた。他のクラスメイトや相手校、観客たちもざわつき始める。

（今、間違いなく銃声がした! 誰の仕業だ!?!）

周囲が困惑する中、土御門だけは周囲を見渡し狙撃した犯人を探し始めた。

（あいつは……!?!）

土御門の視線の先には口元を緩ませながら銃を構えたままのリボーンがいた。撃つたのがリボーンだと知って土御門は衝撃を受ける。

観客席

「ちよっ!? あんた何やってんのよ!?!」

「な、何!?! 何がどうなっているんだよ!?!」

ここでリボンがツナと当麻に弾丸を放ったことに美琴は驚きを隠せないでいた。インデックスは何が起きたかわからず困惑していた。

突然の出来事に情報が処理できず会場と人たちと映像で見ている人たちは困惑してしまっていた。

その時だった

「^{リ、ボン}復活!!」

ツナと当麻がカツと目を開く。すると2人の額にオレンジ色の炎が灯り、体操着が破れ、パンツ1丁になる。

「^{リ、ボン}死ぬ気でエリート校に勝つ!!」

2人は白目になった状態で右手に人差し指を相手校に向かって宣言した。

「なななななな、何やってんのよ2人共!?!」

「だ、大胆……!?!」

「カ、カミヤンが能力に目覚めたああああ!?!」

突然、パンツ1丁になったことに赤面する吹寄と姫神。青髪は当麻が能力に目覚めたと錯覚し驚愕する。

(^{イマジネーション}幻想殺しを持つカミヤンに能力に目覚めるはずはないはず!?! どうなっている!?!)

土御門はあらゆる能力を無力化する当麻の右腕。幻想殺しイマジンブレイカーの
ことを知っていた。故に今、起きた現象がどういふことなのかわからず衝
撃を

受けていた。

この光景に相手校も観客席の人たちは驚愕し、空いた口が塞がらな
い状態になっていた。

街中

「ななななな、何がどうなってるんですか!?!」

「さ、沢田さんの……沢田さんのあられのない姿が……!!」

(リ、リボン君……!!)

映像で見えていた初春と黒子はパンツ1丁の姿を見て、顔を真っ赤に
しながら動揺していた。

一方で佐天は赤面しながらも、この現象がリボンが死ぬ気弾を
撃ったことよって起こったものだと理解していた。

観客席

「イツツ死ぬ気タイム」

「どどど、どうなってるんだよ!! とうまとつなが!!」

「ちよ、ちよつと!! あんた何したのよ!!」

パンツ1丁のツナと当麻の姿を見てインデックスと美琴は動揺し赤面していた。

「この程度で動揺するなんてガキだな。お前ら」

「うっさいわね!! さっさと説明しなさいよ!!」

「こいつを使ったんだぞ」

そう言うとりボーンは懐から炎のマークが入った赤い弾丸を右手の人差し指と親指で摘まんで見せた。

「それって……佐天さんに使った……?」

「同じ特殊弾でも佐天とは違う特殊弾だ。こいつは死ぬ気弾つってな、こいつを脳天に撃たれた奴はいつぺん死んで死ぬ気なって甦る。死ぬ気になる内容は死ぬ前に後悔したことだ」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!! それ後悔してなかったらどうなってたのよ!?!」

「俺は殺し屋だぞ」

「死んでたの!?!」

「とうまとつなが……!!」

死ぬ気弾の詳細を聞いて美琴は衝撃を受けていた。

一方でインデックスは当麻とツナのあられのない姿を見たことによつて頭がショートしりボーンの話が頭に入っていなかった。

競技会場

「いくぞ当麻!!」

「おおっ!!」

「う、撃て!!」

ツナと当麻は猛スピードで相手校に真正面から特攻していく。

あまりの出来事に啞然としていた相手校だったが、パンツ1丁の男2人が猛スピードで鬼のような形相で迫って来た為すぐに臨戦体勢に入り能力を使用する。あまりの恐怖に相手校は手加減できず2人に容赦なく一斉に能力を叩き込む。相手校の能力によって次々に爆発が発生する。

「効かーろーん!!」

だが2人は直撃を喰らいながらも全く意にも介さず突っ込んでいき、生徒たちを次々に薙ぎ倒していく。

観客席

「な、なんかいつもと様子が違う……?」

「超^{ハイパー}死ぬ気モードになった時と見た目は一緒なのに超^{ハイパー}死ぬ気モード時のようなクールな雰囲気とは逆にとても荒々しい雰囲気になっていることに美琴は戸惑っていた。

「死ぬ気弾は危機によるプレッシャーで外部から全身のリミッターを外す弾だからな。逆にツナと佐天の超^{ハイパー}死ぬ気モードは自分自身の秘めたる意思を気づかせることで静なる闘志を引き出すと同時に全身のリミッターを外すんだぞ」

「成る程ね……」

「何を言ってるかわからないんだよ……」

リボーンの説明を聞いて理解する美琴に対して、正気に戻ったインデックスはリボーンの説明を聞いてもちんぷんかんぷんな様子であった。

相手校を次々と薙ぎ倒していくツナと当麻。

「とり抑えろー!!」

相手校はツナと当麻を無力化する為に総動員で2人を取り押さえようとしがみつく。しかしあまりの力で引き剥がされ抑えることはできなかつた。それでもなんとかツナと当麻を足止めすることには成功していた。

観客席

「追加弾だぞ」

リボーンはニヤニヤしながら4発程、弾丸をツナと当麻に向かって放った。

リボーンの放った弾丸はツナと当麻の両手の甲に着弾する。

「な、何だ!？」

「て、手が!？」

相手校は恐怖していた。なぜならツナと当麻の両手の拳が巨大化していたのだから。

「おりやあ!!」

「おらああ!!」

「」「ぎやーーーーー!!」「」

ツナと当麻はその場で回転すると巨大化した拳で相手校の生徒を次々に吹き飛ばしていく。

観客席

「今度は何!？」

「死ぬ気弾は撃つ場所によって色んな効果を発揮するんだぞ。死ぬ気

弾を手の甲に撃てばゲンコツ弾だ」

また変な現象を起こって驚く美琴に対して、リボーンは誇らしげな表情で説明する。

「さらに追加だぞ」

そう言うとりボーンはさらに10発の弾丸を放った。

リボーンの放った弾丸はツナと当麻の太もも、肩、肘、腕に着弾する。

「まだまだ!!」

するとツナと当麻は深くしゃがみ込むと一気に上空へとジャンプする。

「た、高い!?!」

ツナと当麻は10メートル以上ジャンプしていた。あまりのジャンプに相手校の生徒は驚愕していた。

死ぬ気弾は太ももに当たれば驚異的なジャンプ力を発揮できるジャンプ弾の効果を発揮するのである。

「メガトンパンチ!!」

「ぎゃーーーーー!!」

ツナと当麻は空中から地面に向かって拳を叩き込むと巨大なクレーターが発生し、その余波で相手校の生徒たちが宙に舞うことになった。

死ぬ気弾を肘、肩、腕の3連続で撃てば強力なパンチが打つことができる、メガトンパンチ弾の効果を発揮する。

2人のあまりの攻撃力に、相手校は恐怖し戦意は折られてしまっていた。この競技を見ていた者たちはあまりの光景に驚きを隠せないでいた。

観客席

「これで最後だぞ」

そんな中、リボーンだけはこの状況を楽しんでおり4発の弾丸を放った。

リボーンの放った弾丸はツナと当麻の両頬に着弾する。するとツナと当麻の顔が巨大化する。

「これで終わりだ!!」

「ひいひいひい!! か、顔が!？」

「く、来るなー!!」

「に、逃げろー!!」

顔が巨大化したツナと当麻が相手校に向かって全速力で追い回していく。そんな2人を見て相手校は戦うことを止め全員、一目散に逃げていく。

死ぬ気弾を両頬に撃つと顔が巨大化し、戦意を喪失させる、にらめっこ弾の効果を発動するのである。しかし先程の攻撃で相手校の心はすでに折れている。それでもにらめっこ弾の効果を発動させたのはリボーンが楽しむ為である。

「も、もう………競技どころの話じゃないわね………」

「というかこれは競技なん……?」

あまりのカオスな状況に吹寄と青髪はそう呟いた。正直、ツナと当

麻以外は競技に参加せず最初の位置から動いていない。正確に言うなら参加したかったが、2人のあまりの凄さに動けないでいたというのが正しいのであるが。

ツナと当麻が大暴れしたことによって相手校はリタイアしとある高校は勝利を収めた。ただ月詠は素直に勝利を喜べず、なんとも言えない気持ちになってしまっていたという。

ちなみにとある高校を見下していた男教師はパンツ1丁の男2人に負けたことへのショックとあまりにもカオスな負け方をした為、観客席にて気絶。その後、今日の光景が毎晩、夢に出てうなされるようにまでなった。そしてこの一件のショックが大きかったのか髪が抜けるようになり完全に教師としての自信を失って、最終的に辞職届けを出したという。

エリート校に勝利したとある高校。しかしツナと当麻があまりにも大暴れした為、嬉しさよりも衝撃の方が勝ってしまいあまり勝ったという自覚がなかった。

とある高校。

「つーか沢田……さっきのアレ何だったんだ……？」

死ぬ気モードを初めて体験をした当麻は、棒倒しの時に自分自身に起こった時の出来事の詳細をツナに尋ねた。

「あれは死ぬ気弾だよ……」

「し、死ぬ気弾……？」

「うん……死ぬ気弾はボンゴレに伝わる特殊弾で、死ぬ気弾で脳天に撃たれた人は一度死んで、死ぬ気になって甦るんだ……」

「え!?! 俺、1回死んでんの!?!」

まさか自分が死んでいたなどと露にも思っていなかった当麻は衝撃を隠せないでいた。

「そ、それと……死ぬ気になる内容は死ぬ前に後悔したことなんだ……つまり死ぬ前に後悔してないと……その……」

「死んでたのかよ!!」

1回死んだという事実だけでも衝撃だったのに、後悔していなかったら永遠の眠りについていたかもしれないと知って当麻はさらなる衝撃と恐怖を感じていた。

一方、その頃。

「俺だ」

とある高校の校舎裏。誰もいない校舎裏にて土御門は神妙な面持ちである人物に電話をかけていた。

『土御門か』

土御門が電話をかけた相手はなんと学園都市の統括理事長、アレイスター・クロウリーだった。

『何の用だ?』

「とぼけるなよアレイスター。俺の聞きたいことくらいわかっているはずだ。どうせ見ていたんだろう」

『幻想殺しを持つ上条当麻がなぜ能力に覚醒したか……そうだろうか?』

「ああ。イマジンプレイカー幻想殺しは能力や魔術を打ち消す力。それ故に能力や魔術を使えるようになるんてない。それはお前自身が一番、わかっているはずだ」

『その通りだ。しかしそれが能力でも魔術でもない力だとしたら?』
「何?」

能力でも魔術でもない力という単語を聞いて土御門は反応を見せた。

「そんな馬鹿なことがある訳ないだろう。第一、そんな力があるならお前が何かしらの行動を起こすはずだろう」

『起こさないんじゃないかって起こせないのだよ』
「どういうことだ?」

アレイスターが言っている意味がわからず土御門はアレイスターに詳しい詳細を求めた。

『その話をする前に種明かしをしておこう。まず上条当麻はの能力に目覚めた訳ではない。第3者の手によって潜在能力を強制的に引き出されたのだよ』

「第3者……まさか!」

アレイスターの言葉を聞いて、土御門はアレイスターの言う第三者が誰なのか理解する。ツナと当麻が倒れた歳に2人を狙撃した人物のことを。

『そうだ。奴の撃った特殊な弾丸によって上条当麻は潜在能力に引き出されたのだよ』

(やはりあの男か!?)

土御門は当麻が覚醒した原因がリボーンと関係あるとは思っていた。しかし狙撃と当麻の覚醒が繋がらずリボーンが犯人だと言いつれなかったのである。

『だが弾丸によって潜在能力を引き出す技術なんて可能なのか?』

『無理だな。学園都市の力を集結させたとしても創り出すことは不可能だ』

『だったらなぜ奴はそんな物を持っている?』

学園都市の科学技術は外の世界よりも20年は進んでいる。つまり学園都市は世界一の科学技術を持った都市。そんな学園都市ですら創り出せないような代物をなぜリボーンが持っている理由が土御門がわからなかった。

『あの弾丸はこの世界の科学技術ではない。異世界の技術だからだ』

『異世界だと!? ふざけてるのかアレイスター!?!』

『ふざけてなどいない。事実だ。あのリボーンという男、そして沢田綱吉。この2人はこの世界の人間ではない』
『何っ!?!』

リボーンだけでなくツナまでもが異世界の人間だと知って驚く土御門。

『私も予想外の出来事だった。本来であれば交わることのなかった世界。しかし向こうの世界の人間がこの世界と向こうの世界を繋ぐ装置を創り上げたのだよ』

『それが事実だとしてなぜそんなに悠長にしていられる? 学園都市の技術が奪われる可能性だってあるはずだ』

『奪われたところで何も問題はない』

『どういう意味だ?』

『奴らは超能力よりも有用な力を持っているからだ』

「有用な力？」

『超能力でも魔術でもない力。その名を死ぬ気の炎』

「死ぬ気の炎？」

『8月上旬に起きた学生誘拐事件は覚えているか？』

「ああ。俺たち暗部が総動員してもなお犯人の手がかりが掴めなかったあの事件か」

土御門元春。とある高校の生徒。だがそれは表の顔。裏の顔は学園都市都市の暗部、グループのメンバーである。しかしそれも彼のほんの一面であり、他にも色々な顔を持っている謎多き人物である。

『あの事件の主犯は奴らの世界の人間だ』

「あの事件が!？」

『そうだ。あの事件はエスカというたった1人の人間によって起こされ学園都市は混乱に陥った。そんな前代未聞の力をなし得たのは死ぬ気の炎の力によるものだ』

「学園都市を陥れる程の力……死ぬ気の炎とは何なんだ？」

『人間の生命エネルギーを可視化した力。覚悟とそれに応えるリングさえあれば誰でも使える力だ』

「誰にでもだと!? じゃあ学生誘拐事件の真相を明かさなかったのは……!？」

『この力が知れば学園都市の存在意義がなくなる可能性があるからだ』

超能力は才能によるもの。学園都市の中で能力を開花させている人間よりも能力を開花していない人間の方が多い。そんな学園都市において誰にでも使える力の存在が知られば学園都市が存在する意味はなくなってしまう。

『とはいえ全ての人間が絶対に死ぬ気の炎を使えるようになる訳ではない。しかし能力と違って平等だ』

「能力に目覚めない学生、能力のレベルが上がらない学生……能力に対して並々ならぬ執念を抱いている学生は多い……十分に目覚める可能性はある……確かに言える訳がない……」

『いや。すでにこの学園都市で死ぬ気の炎に目覚めている者がいる』
『何っ!?!』

『柵川中学の佐天涙子。彼女は無能力者^{レベル0}だったが奴らの世界で修行し死ぬ気の炎に目覚め、たった1カ月たらずで超能力者^{レベル5}クラスの強さ⁵にまで成長している』

「1カ月だと?! そんなことがありえるのか!?!」

『事実だ。試しに大能力者^{レベル4}の犯罪者を脱獄させて戦わせてみたが、佐天涙子は余裕で大能力者^{レベル4}を圧倒した』

「外道が……」

9月の初頭に起きた柵川中学にやって来た能力者を佐天が倒した事件。あの事件は偶然ではなくアレイスター仕込んだものだった。

アレイスターのやり方に土御門は虫酸が走っていた。

『そして沢田綱吉は。彼は一方通行^{アクセラレータ}に余裕で勝つ程の力を持っている』

「一方通行にだど?! あの男があの実験を止めたのか!?!」

『そうだ。そして学生誘拐事件を止めたのも彼だ。同じ世界の者同士ではあるものの彼はエスカを撃破。つまりは学園都市を混乱に陥れたのも救ったのも同じ世界の人間だったという訳だ』

「らしくないな。そこまで好き勝手にされてなぜ黙っている?」

『黙っている訳ではない。対策を講じたところで何の意味もないからだ』

「どういうことだ?」

『奴らの世界には学園都市を混乱に陥れたエスカよりもさらに強い人間が奴らの世界に多くいる。その多くが超能力者^{レベル5}クラス。それ以上の存在も確認している』

「神のみならぬ身にて天上の意思に辿り着く者……そう言いたいのか……!?!」

『そう言ってもさしつかえないだろう。8月31日に起きたテロは憶えているか?』

「ああ。STUDYという暗部が起こしたテロのことだな」

『そうだ。STUDYは駆動鎧^{パワードスーツ}2万體。最終手段として高度3万5

000キロからミサイルを使って学園都市を壊滅させようとした。だが奴らは壊滅されることとなった。沢田綱吉の仲間によってな』

『あの事件にまで関わっていたのか……!?!』

『ああ。そしてこの事件と学生誘拐事件によって奴らの勢力の強さがわかった。わかっているだけでも実体のある幻術を創り出す者、ブラックホールを出現させる者、動物や恐竜の力を己の身に宿す者。奴らの世界の人間ではあるものの中立派なのか奴らと与してはいなかったが、私と同じく数百年以上生きている人間がな』

『異次元過ぎる……!?! 本当にそいつらは人間なのか……!?!』

『さあな。そしてさらに奴らの勢力の中に原石の存在も確認されている』

『原石だと!?!』

『現時点でわかっているのが不死身の肉体を持つ者、予知能力を持つ者、的中率100%のランキングを作れる者。そして平行世界パラレルワールドに干渉し知識を共有できる者』

『平行世界パラレルワールドの知識を共有するだと……!?! そんなことができるなら確かに俺たちに勝ち目はない……!?!』

『そうだ。奴らを敵に回せば勝ち目はない。だったら奴らの逆鱗に触れないように何もしないことが無難なのだよ』

アレイスターは真正面からツナたちに勝てないとわかっている。故にツナたちの情報を拡散せず、学園都市から追い出そうとせず迎合しているのである。アレイスター自身がツナたちを興味を抱いているというのもあるのだが。

(今回の一件でおそらく沢田綱吉は学園都市を壊すかどうか決まる……)

アレイスターはツナと食蜂の作戦のことを知っていた。そしてその結果によって、美琴の為に学園都市を壊すかどうか決めることを確信していた。

『話すことは全部話した。これで満足か土御門?』

『正直、信じられないが充分だ』

『それはよかった』

「どれだけ恐ろしいかは俺にはわからないが、せいぜい奴らを敵に回さないように注意することだな」

『お前にもわかるさ。近い内にな』
「?」

アレイスターの言った言葉が気になった土御門であったが、アレイスターが先に通話を切ってしまったので聞けずにいた。とはいえもう1度かけ直す気もなかったので土御門は携帯をポケットにしまった。

「話は終わったか」

「っ!」

土御門の後方から誰かの声がする。土御門が即座に振り返るとそこには、物置の上に座り土御門を見下ろしているリボーンがいた。

「ちやおっす」

(こ、こいつ!? いつの間にか!?)

土御門は暗部として多くの死線を乗り越えている。故に暗部の中でも優秀な人間の部類に入る。そんな土御門が全くリボーンの気配を全く感じ取ることすらできなかった。

「そう身構えるな。お前と戦う気はねえ」

「っ!」

戦う意思がないとは言うものの、自分に気配どころか視線すら感じることのできないような人間相手を信用できず土御門は戦闘体勢を解除できなかった。

「まあ。戦いてえっーなら話は別だが」

「っ!」

そう言った瞬間、リボーンは土御門に向かって殺気の放った。リボーンの殺気を感じた瞬間、土御門は金縛りにあったかのように動かなくなり、体が恐怖の感情を支配された。そして自分が殺されるビジョンまで見えてしまった。

(こ、こんなことがありえるのか……!?)

今まで色んな敵と戦ってきた土御門であったが、ここまで格の違う相手と出会ったのは初めてだった。

(まさか聖人クラスだともいうのか!?)

土御門の脳裏には長い黒髪に日本刀を携えたとある女性の後ろ姿が映っていた。

「やるな」

自分の殺気を受けて動けなくなるものの、完全に心まで折れなかった土御門を見てリボーンは殺気を解いた。

「悪かったな。ビビらしちまって」

(アレイスターの言っていたことは嘘じゃない……だがここまでとは……!?)

笑顔で謝るリボーンに対して土御門は大量の汗が吹き出してしまっていた。そしてアレイスターの言っていたことが本当だということ体を理解した。

「出会った時からタダ者じゃねえとは思ってたが思ってた以上だな。ボンゴレ^{ウチ}に欲しいくらいだぞ」

「最初から気づいていたのか?」

「まあな。お前からは殺し屋の気配を感じてたからな。といつても俺とは天と地の差があるがな」

「何が目的だ?」

「別に。ただお前が怪しい動きをしていたからつけてきただけだ。まさかこの学園都市のトップと話しているとは思わなかったがな」

「な、なぜそれを!」

「その反応。やっぱりそうか」

(しまった!?! 嵌められた!?!)

土御門はアレイスターの会話の中で統括理事長という単語は出さなかったのにも関わらずリボーンがアレイスターの正体に気づいたことに驚きを隠せないでいた。しかしカマをかけられたとわかって自分の迂闊さに後悔する。

「まあ会話の内容からかなりの権力者だとは思っていたがな。それに俺たちが今までこっちの世界に来て不法侵入扱いされてない時点で大きな力が働いていることは明白だったしな」

そう言うとりボーンは物置から飛び降りるとそのままゆっくりと

歩いて行く。

「じゃあな。せいぜい敵対しないよう祈ってるぞ」

リボーン土御門の方を一切、振り向くことも、歩みを

止めることもなく去っていった。

「敵対しないことを祈るだど……？ それはこっちの台詞だ……クソツタレが……」

標的（ターゲツト） 277 奇病

リボーンと土御門の会話が終わったその頃。

「じゃあ俺はそろそろ帰るね」

「おう。ありがとな」

これ以上ここにいる意味もないと判断したツナは佐天たちの所へと戻って行った。

「あれ？　なんか体が……」

ツナの姿が見えなくなった後、当麻は謎の倦怠感を感じ始める。

「とうまー」

体の違和感を感じた当麻。するとインデックスがやつ右手を大きく振りながらやって来た。

「おうインデックス。競技見てくれたか？」

「う、うんっ……!?!?　す、凄かったんだよ……!?!?」

「？」

インデックスに競技のことを尋ねた当麻。だが競技の時のパンツ1丁の当麻のことが脳裏に浮かんだのかインデックスは顔を赤らめ当麻から視線を反らしながら答えた。なぜインデックスが目を合わせてくれないのか当麻はわからずにいた。

実はインデックスは完全記憶能力を有している。故にパンツ1丁の当麻の姿が死ぬまで脳から消えることはないのである。

「あれ？」

「ん？　どうしたインデックス？」

「とうまの掌。何かついてるんだよ」

「ん……?　って何だこれ!?!?」

インデックスの指摘されて掌を見る。すると掌に黒いドクロマークが浮かんでいた。タトウーなどいれた訳でもないのに関わらず

ドクロマークが浮かんだ理由がわからず当麻は驚きの声を上げる。

「そいつはやべえぞ」

「リボーン!？」

当麻が困惑する中、リボーンが当麻の掌に浮かんでいるドクロマークの詳細を説明をする。

「あれ？ 当麻、この子と知り合いなの？」

「まあな。そういうインデックスこそ何でリボーンのことを知ってるだよ」

「さつき食べ物を恵んでくれたんだよ」

「そうなのか!? 悪いリボーン!」

「気にすんな」

リボーンがインデックスに食べ物を分け与えてくれたことを知って当麻はお礼を言った。リボーンは特に気にしていない様子だった。

「それより自分の心配した方がいいぞ」

「ど、どういうことだよ？」

「今、お前は病気にかかっている。ドクロ病っていう病気にな」

「ド、ドクロ病……!？」

「そうだぞ。先に結論だけ言っとく。当麻。お前は後1時間以内に死ぬぞ」

「へっ……!？」

いきなり死ぬと宣告されて当麻とインデックスは衝撃のあまり固まってしまう。

「な、何を言ってるんだよ……!？」

「そ、そうだぜ……いきなり死ぬなんて冗談きついぜ……」

「冗談じゃねえぞ。腕を見てみる」

「腕……? って何だこりゃあ!？」

リボーンに言われて腕を見ると当麻は驚きの声を上げる。なぜなら当麻の腕に体育の授業でボールが股間に当たったという文字が書かれていた。

「ドクロ病は死に至るまで人に言えない秘密や恥が文字になって浮かび上がるんだ。故にドクロ病は別名死に恥をさらす病とも呼ばれて

るんだ」

「マジで病気なのかよ!?!」

「そう言ってるんだろ。ちなみにドク口病はこの死ぬ気弾を脳天に受けた者になる不治の病気だぞ」

「沢田から聞いているぞ。それを撃たれたらいつペン死んで死ぬ気になって甦るんだろ……ってお前のせいじゃねえか!!」

ツナから聞いたことを思い出した当麻であったが、ドク口病になった原因がリボーンだということに遅くながら気づきツツコミをいれる。

「知ってるのか。それなら話が早え」

「どうしてくれんだよ!! お前のせいで死ぬことになつとまったじゃねえか!!」

「本来だったらドク口病になるはずはないんだがな」

「はあ!?! どういうことだよ!?!」

「ドク口病は死ぬ気弾を脳天に10発喰らった者になる病気だ。だから死ぬ気弾を脳天に1発しか受けていないお前になるはずはないんだ。それでもなつたつてことは相当、運が悪いとして言いようがないな」

「不幸だー!?!」

当麻は不幸体質の人間であり。故に常日頃から不幸が訪れている。よりもよってこのタイミングで不幸が発動したことに頭を抱えながら絶叫してしまう。

「な、なんとかならないんだよ!?!」

死ぬ気弾の下りは理解できなかったが、このままだと当麻が病気で死んでしまうということを理解したインデックスはリボーンに助けを求め。

「しようがねえな。この病気を治せる医者が俺の知り合いにいるからそいつを呼んでやるぞ」

「本当!?!」

そう言うとりボーンは携帯を操作し始める。リボーンの言葉を聞いて希望が見えたのかインデックスは明るい表情になった。

リボーンが連絡してから25分後。

「いやーーーーー!!」

「吹寄!？」

突如、校庭に吹寄の悲鳴が上がる。急に吹寄が悲鳴が聞こえてきた為、当麻は慌てて悲鳴があった地点へと向かった。

「どうした!?! 吹寄!？」

当麻が駆け付けると吹寄は怯えた目で地面の方を向いていた。そこには顔面に靴の跡がくつきりと浮かんだ状態で倒れているシャマルがいた。そして周囲には当麻と同じく騒ぎを聞きつけたクラスメイトたちがいた。

「な、何これ……?？」

「痴漢よ上条!! この男が私にキスしようとしてきたのよ!!」

「はあ!？」

青髪がシャマルのことを指を指しながら事の顛末を説明した。突然のことに当麻は意味がわからず驚きの声を上げた。

「変態じゃねえぜ嬢ちゃん」

するとシャマルはよつころしよと呟きながらゆっくりと起き上がる。

「俺は紳士だ。魅力的な女性がいるならキスしに行くのは当然のことだ。だから俺は変態じゃねえ」

「何が紳士や!! どう考えても変態やる!!」

「あんたも変態でしようが!!」

身だしなみを整えながら自分が変態ではないと主張するシャマルに青髪がツツコミを入れる。しかし青髪も吹寄にツツコミを入れられてしまう。

「何を言うてるんや吹寄!! 僕はこいつみたいに嫌がる女の子にキスしようとなんてする訳ないやろ!! 僕は落下系ヒロインのみならず、義姉、義妹、義母、義娘、双子未亡人、先輩、後輩、同級生、女教師、幼なじみお嬢、様、金髪、黒髪、茶髪、銀髪、ロングヘア、セミロングショートヘア、ボブ、縦ロール、ストレート、ツインテール、ポニーテール、お下げ、三つ編み、二つ縛り、ウェーブ、くせつ毛、アホ毛、

セーラー、ブレザー、体操服、柔道着、弓道着、保母さん、看護婦、メイド、婦警、巫女、シスター、軍人、秘書、ロリシヨタ、ツンデレ、チアガール、スチュワードレス、ウェイトレス、白ゴス、黒ゴス、チャイナドレス、病弱、アルビノ電波系、妄想癖、二重人格、女王様、お姫様、ニーソックス、ガーターベルト、男装の麗人、メガネ、目隠し、眼帯、包帯、スクール水着、ワンピース水着、ビキニ水着、スリングショーツ、水着バカ、水着、人外、幽霊、獣耳娘まであらゆる女性を迎えられる包容力を持っているだけや!!」

「何だこいつ……新手的な変態か……!?!」

「何であんたが引いてんのよ!!」

青髪の言葉を聞いてシャマルはマジで引いてしまっていた。シャマルの言葉を聞いて吹寄は再びツツコミをいれる。

「ああもう!! 拉致が明かない!! 上条!! アンチスキル警備員に連絡して!!」

「お、おう……」

吹寄に気圧されて当麻はポケットから携帯を取り出して吹寄に言われたようにアンチスキル警備員に連絡しようとする。

「アンチスキル警備員に連絡していいの当麻?」

「どういうことだよ?」

「こいつがアンチスキル警備員に連れて行かれるとドクロ病が治せなくなるぞ」

「え!?! こいつがお前の言ってた医者!?!」

まさか目の前にいる変態男がドクロ病を治せる医者だと知って当麻は驚きを隠せないでいた。

「医者? この変態が?」

シャマルが医者だと聞いて吹寄はゴミを見るかのような目でシャマルのことを見ていた。

「おいおい嬢ちゃん。俺はこう見えても凄腕の医者だぜ」

「信じられる訳ないでしょ。第一、あなたが仮に医者だったとして何で病院じゃなくてこんな所にいる訳?」

「急患だよ。まあ見てな。今から俺が見せる姿を見れば嬢ちゃん惚れちまうぜえ?」

そう言うシャマルは当麻の方へとゆっくりと歩いていく。

「どれどれえ?」

「っ!」

するとシヤマルは当麻の横にいたインデックスの胸に両手を当てた。突如のことにインデックスは顔を真っ赤にする。

「何するんだよ!!」

「グハッ!」

インデックスの拳がシヤマルの腹部におもいつきりめり込み、シヤマルはそのまま四つん這いの状態になる。

「何やってだよあんた!!」

「診察に決まってるんだろ……ちなみに診察結果は異常なしだ……それに可愛いときてる……」

「いや病気なのはインデックスじゃなくて俺だから!!」

「え……お前……?」

「そ、そうだけど……」

「ちっ……何だよ……」

患者がインデックスではなく当麻であったと知った途端、シヤマルは嫌そうな顔がしながら立ち上がる。

「悪いな。俺は男は診ないんだ」

「へ……!?!」

シヤマルの発言を聞いて当麻は衝撃のあまりその場で固まってしまうていた。

「リ、リポーンさーん……?」

「そーいやそーうだった」

「リポーンさん!」

明らかにわかっていたであろうことをちゃんと伝えていなかったと知って当麻はリポーンに抗議する。

「どうすんだよ!! このままじゃ俺の病気が治んねえじゃん!」

「病気?」

当麻の口から放たれた病気という言葉の意味がわからずクラスメイトたちは疑問符を浮かべる。

「実はな……」

リボーンは当麻のドクロ病のこと。当麻の寿命のこと。ドクロ病が治せる医者がシャマルしかないということを説明する。

「つー訳だぞ」

「うわあ……本当にカミヤンの恥ずかしい秘密があるわ……」

「こ、これは恥ずかしいわね……」

「いやー!! 見ないで!! 上条さんの秘密を!!」

当麻の体に浮かび上がった恥ずかしい秘密を見て青髪と吹寄は引いてしまっていた。当麻はその場でしやがみ込んで秘密を見られないようにするが焼け石に水であった。

「おい!! あんた医者だろ!! 医者が患者を見捨てていいのかよ!」

「言っただろ。俺は男は診ねえ。運が悪かったと思うんだな」

当麻はシャマルの説得を試みるがシャマルが心代わりすることはなかった。

「当麻が死ぬまで10分を切ったな」

「カミヤン……たとえカミヤンが死んでもカミヤンの魂はみんなの心に生き続けるから安心しい……」

「そうよ……だから安心して逝きなさい……上条……」

「何でみんな諦めモード何だよ!! 何で誰も上条さんのことを助けようとしてくれないの!」

クラスメイト全員がしんみりとし、当麻の死をなんとかしようとする人が誰もいないことにツッコミをいれる。

「インデックスからもなんとか言ってくれよ!!」

「主よ。どうか性欲にまみれで穢れたこの男に天罰を……」

「インデックスさん!? 気持ちはわかるけどちよつとは上条さんのことを心配して!!」

インデックスはシャマルに胸を触られた恨みが大きかったのか当麻のことを忘れ、シャマルに天罰が下るように天に祈っていた。

誰から見捨てられ死を待つしかなくなり、もう諦めるしかないと思った当麻。

その時だった。

「何? このしんみりした雰囲気?」

「姫神!!」

クラスメイトが集まっているのに気づき、何かあったのかと思った姫神がやってきた。

「何かあったの?」

「姫神さん!! 聞いてくれよ!!」

姫神ならなんとかしてくれると判断したのか藁にも縋る思いで当麻は現在の状況を説明する。

「ていう訳なんだ!!」

「了解」

当麻の説明を聞いてもなお表情一つ変えなかった姫神。すると姫神はあるものを取り出した。

「私が説得してあげる」

「姫神さん!?!」

そう言う姫神の手には黒くて細長い棒が握られていた。それを見た当麻は驚きの声を上げる。なぜなら姫神の手に握られていたのはスタンガンだったのだから。

「じよ、嬢ちゃん……!?!」

スタンガンを持ったまま近づいて来る姫神。そんな見てシヤマルは恐怖していた。しかしシヤマルが恐怖したのはスタンガンではなく姫神から自分に向かって放たれる殺気であった。

実は姫神は上条に恋愛感情を抱いてる。故に当麻を助ける為に暴走しているのである。

「大丈夫。この魔法のステッキであなたの心を改心させてあげる」

「いや!! それステッキじゃなくてスタンガンじゃねえか!!」

「大丈夫。痛いのは一瞬だから」

「話し合おう嬢ちゃん!! 話せばわ……ぎや……!!」

姫神に落ち着せるようにするシヤマル。しかし姫神はシヤマルに容赦なくスタンガンをお見舞いした。

この姫神の行動があつてかこの後、無事に当麻のドク口病は治されたのだった。

標的（ターゲツト） 278 佐天、無双

当麻が姫神に助けられ九死に一生を得た頃。

「ただいまー」

「二ぎ、沢田さん……!!?」

ツナは初春と黒子の元へと戻って来る。ツナの顔を見た途端、2人は顔を赤くする。

「どうしたの?」

「い、いえ……さっきの競技……!?!」

「あー……」

恥ずかしくて詳しいことは言えなかった初春。ツナは初春の態度から死ぬ気モードのことだと理解する。

「だ、大丈夫ですよ……!! 佐天さんからあの状態の沢田さんのことは聞いていますから……!!」

「う、うん……」

一緒に観戦していた佐天から死ぬ気弾のことは聞いてはいたが、それでも恥ずかしかったのか初春ははつきりと本音が言えないようであった。

初春の心情を察したのかツナは何も言わずにいた。

（ダ、ダメですわ……!! 沢田さんの……沢田さんのあられのない姿が!!）

画面越しにいたツナが帰って来たことで黒子の脳裏に、死ぬ気モードのツナの姿が離れないでいた。

（落ち着きなさい白井黒子!! 私は名門常盤台生の生徒にしてお姉様の露払いなのですよ!!）

黒子は自分にそう言い聞かせる。しかし黒子の脳裏からツナの姿が離れることはなかった。

『黒子』

『沢田さん……』

(何ですかこのシーン!! これでは私が沢田さんとうこうなりたいと望んでいるみたいじゃないですか!!)

黒子は脳裏にはセクシーな下着姿の自分がベッドの上で仰向けの状態になり、自分の上には四つん這いの状態で今にも襲おうとしているツナと見つめ合っている光景が浮かんでいた。

現実で起こっていない上に卑猥な妄想をしてしまった黒子は顔を真っ赤にし動揺してしまっていた。

「黒子? どうしたの?」

「な、ななな何でもありませんわ!! 決して!! 絶対に!! 問題ありません!!」

「そ、そう……」

様子がおかしい黒子を見て心配するツナであったが、黒子の高圧的な返答に気圧されてツナは何も言えずにいた。

「それより美琴と佐天は?」

「2人なら競技に出るので競技の会場にいますよ」

「あつ。もうそんな時間か。というか美琴も出るの」

「はい。学校対抗5kmマラソンに出るんです」

『後5分で学校対抗5kmマラソンを開始します』

初春が佐天と美琴が出場する競技について説明すると競技が開始する時間を伝えるアナウンスが流れる。

「どうやら競技には間に合ったようだな」

競技が始まる直前がタイミングでリボーンがツナたちの元にやって来る。

「リボーン。佐天の競技、見に来たの?」

「当たり前だろ。生徒の活躍する場面を見に来るのは当然のことだろうが。つってもぶつちぎりで1位だろうがな」

「ぶつちぎりって……いくら何でも舐め過ぎじゃありませんの? 第

一、この競技にはお姉様もいるんですのよ」

この競技に多くの生徒が参加している。もちろん優秀な能力者も。

佐天が強くなっていることは黒子も聞いてはいるが、ぶつち切りで1位になれるとは思えなかった。

「そうなのか。ま。それでも結果は変わらないだろうがな」

美琴が参加すると聞いてもなおリボーンの自信が揺らぐことは微塵もなく、不敵な笑みを浮かべていた。

学校対抗マラソン。スタートライン。そこには多くの生徒たちが集まっていた。

『それでは学校対抗のマラソン大会を始めます』

ついに競技開始の時間となり、アナウンスを聞いた生徒たちは競技はスタートダッシュの体勢に入る。

「位置についてよーい……」

パァン！

ヘッドフォンをつけた運営委員がスターターピストルを上に向けると、ピストルの引き金を引いた。発砲音が聞こえた瞬間、生徒たちは一斉に走り出す。

この対抗マラソンも他の競技と同じく能力の使用が認められている。ただし能力で全く走らずに移動することは禁止。例えばレポートや宙を浮いての移動などである。つまりちゃんと自分自身で走った上で自分自身を能力で加速させることは違反にはならない。

風の流れを操り追い追い風を作って加速する者。自分を軽して加速する者。念動力を自分自身にかけて加速する者。周囲に加速する者。サイコキネシス両手から爆破をさせて爆風で加速する者。能力者たちは能力を工夫しながらゴールを目指していく。

「くっ!!」

「流石に一筋縄じゃいかねえか……!?」

しかし能力者たちは余裕ではなかった。なぜなら自分たちの前にはトップに踊り出る美琴がいたのだから。

(これならあんまり体に負担をかけずに移動できる)

美琴の前方には砂鉄の球体があり、その球体は美琴と共に移動していた。美琴は砂鉄に自分を引っ張らせて加速していた。美琴は素の身体能力も優れている。それと能力が組み合わさったことで誰よりも速く移動できていた。

(けど……)

しかし美琴の顔は余裕そうではなかった。むしろ険しい表情を浮かべていた。

街中。

「流石はお姉様ですわ。常盤台のエースは伊達じゃありませんわね」

超能力者^{レベル5}の出力は他の能力者たちとは比べものにならない。故に当然の結果だと黒子は思っていた。

「ちよつと!! あれ見て下さい!!」

初春が画面に向かって指を指した。その先には今だに

スタートラインから一步も動かずにいた佐天がいたのだから。

「な、何をしていますの……? もうとつくに競技は始まっていますのに……」

「もしかして佐天……」

「ああ」

黒子はなぜ佐天がスタート地点から動かないにかかわらず困惑していた。一方でツナとリボーンは佐天が何をしようとしているのか

理解していた。

スタート地点。

(落ち着いて……)

周囲の観客たちがスタート地点から動かない佐天に対して困惑している中、佐天は目を閉じて集中していた。

(思い出せ……あの時の感覚を……)

佐天は学芸都市にて捕まったことがあり、手錠をかけられた。その際に特殊弾を使うことなく自力で超^{ハイパー}死ぬ気モードになった。その時の感覚を思い出して佐天は超^{ハイパー}死ぬ気モードになろうとしていた。

(一度でききたんだ……絶対にできるはず……自分を信じるんだ)

佐天はさらに集中する。誰もいなくなったことへの不安も周囲の視線が気にならない程に。全ては自身の力を自力で目覚めるさせる為。

そして

「っ!?!」

佐天の額と両手に晴の炎が灯り、佐天は自力で超^{ハイパー}死ぬ気モードへとなる。

街中

「あ、あれは!? 沢田さんと同じ!?」

黒子は今まで佐天の力を見たことがなかった。まさか佐天がツナと同じ力に目覚めているとは思ってもしなかった。

「そうか。黒子は佐天の力を使うところは初めてみるんだったな」

「え、ええ……」

「こつからだぞ佐天は。なんせ佐天は逆境にこそ力を発揮するからな」

リボーンは知っていた。シエンツとの戦いの決着を決めた炎の複数同時使用。美琴の超電磁砲レールガンで晴の炎の特徴である活性の力で雨属性の炎を強化し防いだこと。佐天は追い詰めた時こそ本領を発揮することに。

「暴れてこい。佐天」

再びスタート地点。

「時間がかかっちゃったわね……」

超ハイパー死ぬ気モードになるのにかなり時間がかかってしまったことを反省する。

(でもこれで感覚は覚えた……)

佐天はこれからは特殊弾なしで超ハイパー死ぬ気モードになれることを確信した。

「死炎速」

佐天は両手を後方に移動させると炎を細く絞った状態で逆噴射させる。その瞬間、佐天の姿が一瞬にして消える。

マラソンコース

「え……!?!」

「な、何!?!」

無能力者及び能力者であるものの能力を競技に活かすことのできず自力で走っていた生徒たち。だが突然、何か自分たちの横切ったことに困惑していた。

(使いどころを考えないと……)

佐天の死炎速は炎を細く絞ることでジェット噴射を実現し、炎を絞らない時よりも数倍加速することができる。しかしあまりの加速である為、真つ直ぐにしか移動できないので方向転換ができない。故に人が密集してる場所で使えば人に激突し大怪我を負わせてしまう。佐天は他の生徒たちを抜かす時や曲がり角では炎を絞らない状態で逆噴射させて生徒たちを抜かしていた。

しかし通常の炎でも人に激突する危険性がある。それでもなお激突しないのは炎の精密なコントロールができる佐天だからこそである。

ここから佐天はさらに追い上げていく。

「はあ……はあ……」

「クソッ……」

佐天の前方には美琴になんとか追い付こうと能力を駆使していた生徒たちがいた。しかし前方に美琴の姿はなく生徒たちはへばっていた。

このマラソンはシンプルではあるが能力者が必ずしも有利という訳ではない。能力を使って加速できても、それを継続させる為の体力がなければ意味がない。現在、美琴に勝とうと必死に抗った生徒たちは能力を使った反動で、体力が減り演算への集中力が落ち能力が充分に使えていない状態だった。故に能力者よりも無能力者にも好成績を残せる可能性がある競技なのである。

「!?」

へばっていた生徒たちであったが突如として自分たちの横を何か疾風のごとく抜かしたことに驚きを隠せなかった。誰かに抜かされたのだと即座に理解し、前方に視線を向けたのだがそこには誰もいなかった。

街中

「さ、佐天さんの姿がほとんど見えませんけど……」

「速すぎてカメラに映らねえんだろ」

「いくら何でも凄すぎですの……」

競技のカメラが佐天のスピードに追い付いていけないのか佐天の姿が映像で映っていないことに初春は困惑していた。リポーンはこれくらい当然だと言わんばかりの表情で語る一方で黒子は佐天の成長速度に驚きを隠せないでいた。

「ま。一番凄えのは佐天をあそこまで成長させたこの俺が凄いだけ

どな」

「結局、自分の自慢かよ!!」

マラソンコース

(後1人……)

能力を活かしている順位をキープしていた能力者たちを追い抜いた佐天だったが、まだ美琴を抜かしていないことを理解していた。

「見つけた」

走り続けること5分。ついに佐天は美琴の背中を目撃する。

「死炎速」

もうこの先美琴以外の人間はいない。なので人が密集して死炎速が使えないことはない。佐天は遠慮なく炎を絞って逆噴射させ加速していく。

「先に行くわよ」

「っ!?!」

急に声をかけられて心臓がドキツとした美琴。すぐにそれが佐天のものだと理解する。

「やっぱり無理だったわね……」

美琴は攻撃力や広範囲攻撃は佐天より優れているは機動力では劣る。前と佐天に戦った時に美琴はそのことを競技が始まる前から理解していた。佐天が超^{ハイパー}死ぬ気モードになれば今の自分の機動力では佐天に勝つことはできないと。

「でも!!」

佐天との実力差を知ってもなお、美琴は悲観することなく競技に最後まで全力で挑むことを決める。

ゴール地点

「え……!?!」

ゴール地点にはゴールテープを持っていた運営委員の生徒が2人いた。だが誰かがゴールの前からやって来たことを確認した訳でもないのにゴールテープが切れた。2人は何が起きたかわからず呆然としていた。

「あ、あのー……」

「っ!?!」

何が起きたかわからず呆然としていた生徒2人に超^{ハイパー}死ぬ気モードを解いて通常モードに戻った佐天が申し訳な^かさそう^おな表情で話しかける。生徒2人は急に話しかけられた為、体をビクつかせてしまう。「今、ゴールしたんですけどー……私が1位ってことでもいいんですね……?」

「え……?」

佐天が事情を説明するが、2人は驚きのあまり佐天を言っている意味を理解できずにいた。

佐天があまりにも速すぎた為、競技学園都市製のハイスピードカメラでルール違反をしていないかが確認された。スローの映像の公開と大会運営の判断によって佐天がルール違反していないことがわかり佐天は1位となったのだった。

標的（ターゲット） 279 勝負と策略

佐天がゴールしてから10分後。

「ふう……」

佐天に続いて美琴もゴールに辿り着いた。磁力を使った移動方法は速く動くことが可能になる。ただあまり速くすると美琴の体に負担がかかる為、今の美琴には車の速度くらいが限度。それ故に疲労を隠せないでいた。

「お疲れです御坂さん」

「ありがとうございます……佐天さん」

美琴のゴールを待っていた佐天は水の入ったペットボトルを差し入れる。美琴は佐天にお礼を言いながら受け取る。

（全然、息が乱れていない……）

水を飲みながら美琴は気づいた。自分より速く移動していたのに関わらず体力が衰えを見せていないことに。

佐天の超^{ハイパー}死ぬ気モードは全身のリミッターを解除され5感が研ぎ澄まされる。しかしデメリットとして体への負担が大きく、使いこなすには相当の体力が必要になる。しかしリボーンの過酷な修行を受けた佐天はこの程度では平然していられるのである。

「ねえ御坂さん。勝負しませんか？」

「勝負？」

美琴が水を飲み干したのを見計らって佐天が勝負を申し込む。美琴はどういうことかわからず疑問符を浮かべていた。

「はい。柵^{私の学校}川中学と常盤台中学。大覇星祭で勝った方がツナさんとフオークダンスで踊れるっていう勝負です」

「え!?!」

佐天からの勝負の内容を聞いて、美琴は顔を赤くしながら驚きの声

を上げた。

大覇星祭では最後の夜の夜にキャンプファイアを囲みながら男女が2人1組でフォークダンスを踊るといふのである。

「い、いや!! そもそもあいつ学校に通ってないし!! 無理でしょ!!」
美琴はツナとフォークダンスを踊ると聞いて恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら誤魔化した。

「大丈夫ですよー。ツナさんすでに棒倒しに出ていますし。体操服が汚れて私服で参加したって言えば問題ないですよ」

「で、でも……!?!」

『だから負けるつもりはないわよ。恋も強さも』
「っ!?!」

どうにかして断ろうと頭をフル回転させていた美琴であったが、
(私っては何、弱気になってるのよ……)

美琴に恥ずかしがって行動しようとしないうち自身に心の中で渴
を入れた。

(それに……)

佐天は先程、自分の学校と常盤台中学との勝負だと言った。能力の
エリート集団の常盤台にして柵川中学は常盤台とは対極的に能力者
がほとんどいない学園都市内では普通の中学校。いくら佐天が強
くなったとはいえ柵川中学の方が不利であることに変わりはない。そ
のことを佐天が理解していない訳ではない。それでもなおこの勝負
を挑んだということは佐天が自分を追い込み強くなるうとしている
のだということをも美琴は理解する。

「いいわ。受けて立つわ」

美琴は佐天の思惑を理解すると佐天の勝負の申し出を受けると佐
天の前に拳を突き出した。

「流石です」

美琴が拳を突き出したのを見て佐天も拳を突き出して美琴の拳と
合わせた。

街中

「さて。佐天の成長も見れたしな。行くぞ初春」

「はい。リボン君」

リボンがそう言うのと初春はとても嬉しそうな笑みを浮かべる。

「え？ どうしたの？」

ツナは初春とリボンと一緒に行動することが珍しいと感じたのか、2人に行動する理由を尋ねた。

「大したことじゃねえ。初春から黒子が怪我してるから黒子の変わりにパトロールに付き合ってくれねえかって頼まれたんだ」

「はい。なので沢田さん。白井さんのことよろしくお願いします」

「え……でも初春、競技あるよね？ だったら競技に出ない俺の方がいいんじゃない？」

「大丈夫ですよ。競技の時は固法先輩に交代してもらうので。それより沢田さんには白井さんの監視をお願いしたいんです」

「監視？」

「はい。白井さん。こんな怪我でも風紀委員ジャッジメントの業務を遂行しようとすると思うと思うので」

「うっ……」

初春の言葉が凶星だったのか黒子は何も言い返すことができないでいた。

「沢田さんなら白井さんが無茶しても止められますし。という訳で白井さん。怪我してるんですから大人しくしてて下さいね」

「わかりましたの……」

キャリーケース強奪事件にて初春に迷惑をかけた為、黒子は反論す

ることできず素直に初春に従うしかなかった。

「じゃあ沢田さん。白井さんのことよろしくお願いしますね」

「うん。わかった」

「白井さん。せっかくの大覇星祭なんですから。沢田さんと一緒に楽しんで下さいね」

「はっ!？」

初春がニヤニヤしながらそう言うと黒子はようやく気づいた。これは初春が自分とツナの2人つきりにしようという策略であるということに。

実は初春。黒子がツナに好意を抱いているということを知ってこの作戦を思いつきリボーンに相談したのである。勿論、リボーンは初春の作戦に乗り気満々であった。

「話は終わったようだなー。行くぞ初春ー」

「はいー。リボーン君ー」

「お、お待ち下さいの!!」

ニヤニヤしながら棒読みで会話するリボーンと初春。黒子は顔を真っ赤にしながら2人を引き止めようとするが、2人は早足でその場から去って行きすぐに人混みの中へと消えてしまっ行って行った。

「どうしたの黒子? 何かあったの?」

「へっ!?! 何でもありませんの!!」

黒子が2人を引き止めようとした黒子を見てツナは何かあったのかと気づいた。しかしツナと2人つきりになることが恥ずかしいなどと本人の目の前で言える訳もなく黒子は顔を真っ赤にしながら答えた。

「それじゃ行こっか」

そう言うとツナは黒子の乗った車椅子を押して人混みの中を進んで行く。

「どこ行こっか?」

「え、えっと……!?!」

周囲を見渡しながらどこへ行こうかと尋ねるツナ。しかし黒子はツナという2人つきりの状況で動揺している為、まともに返事をする

ことすらできないでいた。

(こゝ、これではデートみたいなんです!! これからどうなってしまおうんですのー!?)

標的（ターゲツト） 280 静かなる怒り

初春とりボーンの策略によってツナとデート？することになってしまった黒子。

「買って来たよー」

しばらく歩いていたツナであったが、クレープを売っている店を見つけたので黒子の為に屋台で買って来たわたあめを、待たせていた黒子の為に持ってきた。

「はい」

「あ、ありがとうございますの……」

ツナが黒子の分のクレープを渡す。黒子は緊張しながらクレープを受け取る。

（まさかこんなことになってしまっただなんて!! こ、これでは本当にデートみたいではありませんか!!）

なんとか平静を装いながらクレープを食べる黒子。しかし2人で仲良くクレープを食べているというこの状況がデートみたいだと感じ、もの凄く動揺してしまっていた。

「美味しいね」

「そ、そうですね……!!」

ツナも同じくクレープを食べて笑顔になっていた。黒子はぎこちないえみを浮かべながら答えた。

「そういえば1つ聞きたいことがあるんだけどさ」

「は、はい！ 何ですの!?!」

周囲を見渡していたツナはあることに気づき、黒子に質問しようとする。黒子はツナと2人つきりであることに緊張しているのか声の上擦ってしまっていた。

「黒子の親って来てないの?」

「私の親ですか……?」

「うん。今日って学園都市の外からも人が来るからさ。だったら黒子の親も来てるのかなって思ってたさ」

「どうでしょう? 大覇星祭のことは知っているでしょうけど来てるかどうかは……なにせ仕事も忙しいでしょうし……」

ツナが急に自分の親のことを聞いてきたことがわからず黒子は困惑してしまっていた。

(はっ!? っ、これはまさか将来のことを見据えて私の親にご挨拶するつもりですか!?)

黒子勝手な勘違いしてしまっていた。ツナが自分の両親を話題を上げた。つまりツナが将来、自分と結婚することを見据え、その為に黒子の親とより良い関係になる為に今の内に挨拶しておこうと考えているのだと。

「そういえば黒子の親って何の仕事をしているの?」

(やはり!? 私の親に挨拶する時の為に事前に親のことをリサーチするつもりですかね!?)

ツナは興味単位で黒子の親のことを聞いただけであつたが、黒子は勝手に深読みしてしまっていた。

「わ、私の実家はコンビニチェーンや輸入雑貨スーパーなどを運営する、ホワイトスプリングホールディングスという企業を父が経営していますの……!!」

「え!? 黒子の親って社長なの!？」

「ええ……といっても常盤台の生徒の方々に比べたら私の家は古くから名家ではありませんの……」

「いや……それでも充分だと思うけど……」

黒子の言う通り常盤台の中では劣るのかもしれないがツナからすれば凄いとしか言いようがなかった。

「なんていうか凄なお父さんなんだね」

(お、お義父さん!? まだ会ってもいないのにお父様のことをそのように呼ぶだなんて!? 沢田さんは私とゴールインする覚悟がそこまですべてできているのですか!?)

経営者たる黒子の父親をただ褒めただけのツナ。その一方で黒子は、ツナが自分の父親のことをお義父さんと勘違いしてしまっていた。

いつもの黒子であればこんな勘違いをすることなどありえなかった。しかしツナを好きになって以来、黒子はツナが発する言葉を脳が全て恋愛方面に変換されるようになってしまったのである。

「やっぱりお父さんが凄い人だから黒子もお父さんのように凄い人になったんだと思うなー」

「そ、そんな……私はなんて大した人間ではありませんの……」

「そんなことないよ。いつも学園都市の治安を護る為に頑張ってるしさ。なんていうか……ヒーローみたいだよな」

(ヒーロー……私が……?)

ツナが自分のことをヒーローと言ったことに対して、黒子はキョトンとしてしまっていた。

「ヒ、ヒーローだなんて……私より沢田さんの方がよっぽどヒーローですわ……」

今まで多くの人間を護り抜き。キャリアケース強奪事件においては絶対絶命のピンチに駆け付けた自分のことを護ってくれた。ツナこそまさしくヒーローと呼べる人物だと黒子は思っていた。

「俺はヒーローじゃないよ。昔、リボーンに言われたんだ。お前はヒーローになれない人間だつて」

『かっこつけないツナ。お前はヒーローになんてなれねえ男なんだぞ。みんなを過去に帰すとか、敵を倒す為に修行に耐えるとか、そんなかっこつけた理屈はお前らしくねえんだ。あの時の気持ちはもつとシンプルだったはずだぞ』

ツナは思い出す。未来で最初にリングに炎を灯す修行にてリボーンがリングに炎を灯せない自分に対して言った言葉を。

「俺は黒子と違って学園都市の治安を護りたいみたいな大きな夢はないよ。俺はただみんなを護りたい。それだけなんだ」

「沢田さん……!!」

真つ直ぐな目で語るツナの姿を見て黒子はツナから目を離せない

でいた。そこにいつものキリツとしたお嬢様の姿はなかった。そこにいたのは恋に落ちた1人の少女の姿であった。

(はっ!! わ、私は何を!?)

しばらくツナを見惚れていた黒子であったが、すぐに

我に振り返りが何をしていたのか思い出した。

(ど、どうして私はこんな……!!)

黒子はわからなかった。少し前までツナと話すことなど何ともなかった。しかし今はキャリーケース強奪事件が終わってからツナと話す際に心臓の鼓動が速くなり、平常心でいられなくなってしまったことに。

(やはり私は沢田さんのことが……!!)

『馬鹿を言うな。俺にはお前より大切なものなんてない』

『さつきも言ったがお前は俺の誇り。絶対に譲れないものなんだ。お前のいない世界なんて俺には考えられない』

黒子の脳裏には結標によってビルが崩されそうになった際にツナ言った言葉が脳内で再生されていた。

今まで自分の気持ちを否定していた黒子。しかし今はもう黒子はツナのが好きだということを認めざる得ない状況になってしまっていた。

(そういえば……)

『お前の目的は樹木図ツリーダイアグラムの設計図を復活させて絶対能力進化レベル6シフト計画を再開させることか?』

『あの子たちを護る為なら俺は何だってやってやる!! 学園都市が敵になるっていうなら俺が学園都市ぶっ壊してやる!!』

キャリーケース強奪事件のことを思い出していた黒子。だが途中であることを思い出した。それはツナが結標が会話していた際に言っていた言葉である。

(あの言葉は一体……!?)

ツナのことを意識し始めたせいで忘れていたが、ツナがあの時に行った不可解な発言。黒子はツナが結標に対して放ったあの言葉の真意が気になっていた。

(ですが……)

あの時のことが気になっていた黒子であったが躊躇ってしまった。確証がある訳ではないがあのことを聞いてはいけなさと感じ聞こうかどうか迷ってしまっていた。

その時だった

「いてっ！」

ツナの太ももに何かがぶつかる。ツナは太ももを右手で押さえる。

「あら。ごめんなさい」

白い布に巻かれた長い物を持ち、胸元を露出しヘソを出したウエーブのかかった金髪の外国人女性がツナに対して謝罪の言葉を述べた。

「怪我はないかしら？」

「い、いえ!! 大丈夫です!! 気にしないで下さい!!」

「……」

相手が露出の高い美女だった為、ツナは顔を赤くしながら返答した。そんなツナを見て黒子は黙った両手で車椅子を強く握っていた。

「あ、あのそれは？」

女性の持つている大きな物が気になった為、ツナは何なのか尋ねた。

「ああ。これ？ ちょっと配送のバイトしててね。これをで目的地まで届けないといけないのよねー」

「そうだったんですか。よければ運びましょうか？」

「あらお姉さんのことを気遣ってくれるの？ 紳士なのね」

「い、いや……そんな……!!」

「でも大丈夫よ。もう少しで着くから」

「っ!？」

「……」

すると女性はツナに近づくとツナの頬にそっとキスした。キスされたことでツナは顔を真っ赤にし動揺してしまっていた。一方で黒子の乗っている車椅子の肘掛けからバキッという音が鳴り、肘掛けにヒビが入っていた。

「あら。ウブな反応見せちゃって。可愛い」

「あ、あの……!!」

「ぶつかちやつたからそのお詫びよ。氣遣ってくれてありがとう。じゃあね」

顔を真っ赤にしながら慌てふためくツナを見て女性は妖艶な笑みを浮かべると、女性は右手を軽く振って人混みの中へと消えて行った。

女性が消えた後、黒子はツナの袖を掴んだ。

「ご、ごめん黒子!!」

女性にキスされた衝撃が強すぎて黒子のことを忘れてしまったことを謝罪するツナ。謝罪したのも束の間。ツナの姿が一瞬にして消える。

「いでっ!?!」

姿を消したツナであったが、すぐに空中で仰向けの状態で現れる。そしてそのまま地面に落下し体を強打。仰向けの状態で倒れてしまっていた。

「がっ……!?!」

今度は空中から車椅子が降り注ぎツナの頭に強打する。

(な、何……!?!)

意識が薄れていくツナ。薄れゆく意識の中、ツナの視界に映ったのは暗殺者のような目で自分のことを見る黒子の姿であった。しかしツナは自分の身に何が起きたかわからないまま意識を失った。

周囲の人たちはツナが気絶させられた光景を見てざわつき始める。

「はっ!!」

ツナのことを暗殺者のような目で見ていた黒子であったが、周囲がざわつき始めたことによって我に返る。

(こ、これは!? なぜ沢田さんがこんなことに!?!)

黒子はなぜツナが車椅子の下敷きになった状態で気絶している状況を目撃する。しかし何があったかわからず動揺してしまっていた。どうやら自分がツナを気絶させたことを覚えていないようである。

(い、一体誰がこんなことを!?!)

黒子はツナをこんな目に遭わせた犯人への怒りを覚える。

が、

(っ!?)

しかし黒子は全てを思い出す。金髪美女に対してまんざらでもない表情を見せたツナを見て嫉妬。頭で考えるもよりも先に体が動きテレポートが発動させた。そしてツナを地面に落下させて、そこから車椅子をテレポートさせてトドメを刺してしまったことを。

(わ、私が沢田さんを……!?)

黒子は全てを思い出しツナをこんな目に遭わせたのが自分だということを完全に理解した黒子。しかもそれが自分の意思とは関係なく体が本能的に動いてしまったことを。しかも明確な殺意を持って。

(ありえませんか!! これでは好きな人に夢中になってしまうあまりに狂って強攻に出た、重たい女みたいではありませんか!!)

自分のしでかしたことを思い出した黒子であったが絶対に否定する。ただ嫉妬だけならまだ受け入れることはできたかもしれない。しかし今の行動は彼氏を束縛する重たい彼女みたいなことを行動を無意識にやってしまった。これを素直に受け入れることなど今の黒子にはできなかった。

この後、ツナは風紀委員177支部ジャッジメントに運ばれ無事に意識は回復。幸いにも何があつたかは覚えていなかった。

一方で黒子は自分がとても重い人間だということを気づかされ落ち込んでしまったのだった。

標的（ターゲツト） 281 迷子と保護者

黒子によって気絶させられたツナは風紀委員^{ジャッジメント}177支部に運ばれ、無事に意識が回復した。

一方で黒子は自分が重たい女だということを知ったショックが大きかったのか、大覇星祭の期間中に常盤台中学が泊まってホテルで休むことになった。

（黒子？ 大丈夫かな？）

ツナが目を覚ました後、黒子の姿はなかった。目覚めた後、初春から黒子が貧血になり別に大したことはないのだが大事を取ってホテルで休むと聞かされた。勿論、これは黒子から事情を聞いた初春が黒子の為を思っただけの嘘をついたのである。ちなみにツナが倒れた理由は黒子の能力が暴走してしまったということだけで片付けられた。

「無視しないでよー！ ってミサカはミサカは抗議してみる！」
「ん？」

黒子のことを考えているとツナのズボンの裾を引っ張りながら話しかけてる声が聞こえる。ツナは後方を振り返ると同時に視線を下に落とす。

「ようやく気づいてくれたってミサカはミサカは憤慨してみる！」
「ミカ！」

視線の先にいたのはなんとミカであった。ミカが現れたことにツナは驚きを隠せないでいた。

「ミカも来てんだ」
「こんなお祭りに参加しない訳がないよってミサカはミサカはここに来た理由を説明してみたり！」

その場でおもいきりはしやぎながら大覇星祭に参加した理由を説明するミカ。

が、

「で、でも……迷子になって絶賛、ピンチ中だつてミサカはミサカは現在の状況の語つてみる……」

「えー……」

おもいつきりはしやいでいたミカであったが、急に大人しくなり視線をキョロキョロさせながら語つた。ミカが迷子だと知つてツナは困惑してしまつていた。

「もしかして……病院、抜け出したのミカ……?」

「違うもん!! 　つてミサカはミサカは憤慨してみる!! 　ちゃんと許可をもらつて来たんだもんつてミサカはミサカは抜け出してきたんじゃないつて証明してみる!!」

「ご、ごめん……」

頬を可愛らしく膨らませながら抗議してくるミカ。勝手な解釈でミカを疑つたことに対してツナは謝罪する。

「許可をもらつたていうことは誰かと一緒に来たつてこと?」

いくら外出許可をもらつたと言つても、カエル医者がミカ1人で外出を許可をするとは思えない。おそらく誰かがミカと付き添つているのだとツナは推測する。

「そうだよつてミサカはミサカはツナの推測が当たつてるつてことを伝えてみる」

「わかつた。とりあえず捜そつか。その人」

「おおっ! 　話が早くて助かるつてつてミサカはミサカはツナの頼もしさに感激してみる!」

ツナが自分の同伴者を一緒に捜してくれると知つてミカはパアつと表情を明るくさせる。

(早く見つけないと……)

ツナが同伴者を見つけようと言つたのはただミカが困つてるからだけではない。木原幻生がミカのことを狙う可能性があったからである。

「それじゃあ肩車してつてミサカはミサカは懇願してみる!」

「え?」

「ミサカが高い所が見ればすぐに捜せるつてミサカはミサカは効率的

な方法を提示してみたり！」

「成る程……」

ツナはミカの同伴者の顔を知らない。それなら同伴者のことを知っているミカに捜してもらおう方が効率的だと思い、ミカの考えに乗ることにした。

ツナはミカを肩車すると人混みの中を歩いて行く。

「ねえミカ。今日、誰と一緒に来たの？」

ミサの名前が出なかった以上、ミサではないということにはわかっている。しかしミサ以外にミカの同伴してくれる人がツナの中では心当たりがなかった。

「それは見つけてからのお楽しみだってミサカはミサカは焦らしてみたり！」

しかしミカはツナの問いに素直に答えることはなかった。

「でもミサカを助けてくれたとつても優しい人だつてミサカはミサカは自慢してみる」

とても嬉しそうな笑みを浮かべながらミカはその人物の語っていた。

「あつ！ たい焼き屋さんを発見つてミサカはミサカはツナにゴーサインを出してみる！」

「ええ!？」

一方、その頃。

(ちツ。人が多くて仕方ねエ)

人混みの中、松葉杖をつき、アクセラレータ周囲を見渡しがら一方通行は人混みの中を歩いていた。

(ツたくあのガキ！ ちょっと目を離れた隙にどツか行きやがって！

捜さなきゃいけないエこっちの身にもなりやがれッてんだクソツた
れが!」

現在、アクセラレータ一方通行は非常に面倒くさいことになっている。それに加え
ての猛暑。アクセラレータ一方通行はイライラしていた。

(頭を冷やすか……)

アクセラレータイライラしていた一方通行だったが、飲み物を売ってる移動販売車
を視界に捕える。そして飲み物でも買って一旦、落ち着こうと決め
る。

幸いにも誰も並んでいなかった為、アクセラレータ一方通行は迷わず移動販売車に
向かって歩を進める。

「おい。コーヒーつくれ」

アクセラレータ店員にコーヒーを注文する一方通行。だがコーヒーを注文したの
は一方通行だけではなかった。

「ん?」

「てめエは……!?!」

アクセラレータ一方通行が横を向くとそこには特に驚いた様子もなく自分のこと
を見ているリボンがいた。アクセラレータ一方通行はリボンが驚きを隠せない
でいた。

色々と言いたいことはあったが店の前にずっといれば迷惑になる
為、コーヒーができる店から離れる。

「まさかこんな所で会うとは。アクセラレータ一方通行」

「それはこっちの台詞だ」

少し離れた場所へと移動すると2人はカップに入ったコーヒーを
少しずつ飲みながら会話を始める。

「少し見ねえ間に姿が変わったじゃねえか。イメチェンか?」

「これがイメチェンに見えてンのかてめエは?」

「冗談だぞ。大方、能力を補助する機械つてところだろ」

「っ!?!」

何も言っていないのにも関わらず自分のつけているチョコカーの
機能を見抜いたことに驚きを隠せないでいた。

「凶星か」

「何でわかッた?」

「あらゆるものを反射するお前が汗をかく訳ないからな」

リボーンは見逃さなかつたアクセラレータ一方通行が汗をかいていることを。9月とはいえ充分な暑さ。しかも現在、学園都市は高層ビル郡に大量の人がいる状態。汗をかくには充分な温度である。

「みたところ大きな外傷もねえ。なのに松葉杖をついてる。おそらく脳に何かしらダメージを負ったんだろ。その影響で演算能力と歩行能力を失った。違うか?」

「惜しいな。失ったのは演算と歩行能力と言語能力だ」

「そうか。愉快な体になっちまったもんだな」

「ほぎきやがれ」

「にしても学園都市最強の能力者がそんな風になっちまうとはな。これじゃあもうどう足掻いても学園都市最強を名乗れそうにはないな」
「学園都市最強だア? それなら俺なんかよりお前やあの茶髪みたいな化け物の方がふさしいだろうが」

学園都市最強と唱われた自分を戦意喪失させるようなツナとリボーンに出会ってからアクセラレータ一方通行は自分は学園都市最強ではないという嫌でも理解させられた。仮に弱体化していなくても学園都市最強になることは不可能だということも。

「そーいやツナから聞いたぞ。お前、誰も傷つけないから絶対能力者レベル6になろうとしたんだってな」

(あの野郎……余計なことを喋りやがって……)

リボーンの言葉を聞いてアクセラレータ一方通行は心の中で舌打ちした。

「ツナは苦手か?」

「当たり前だ。俺のような悪党からしたらあんなヒーロー野郎はむず痒くて仕方ねえ」

「ヒーロー? あいつがヒーローな訳ねえだろ。あいつ程、ヒーローに向いてねえ人間を俺は知らねえ」

「何?」

「ま。そんなこと言ってお前にはわかんねえだろうがな」

不敵な笑みを浮かべながら語るリボーン。しかしアクセラレータ一方通行にはり

ボーンの言っている意味がわからずにいた。

「それとお前が悪党を名乗るは100万年早え。自慢じゃねえが俺の殺した人間の数はお前が殺した人間の非じゃねえぞ。まあ一般人に手を出したことは一度たりともねえが。まあそれでもお互い地獄行きカタギの罪人だつてことは変わりやしねえがな」

「それに関しちや同意だな」

先程の発言はわからなかった一方通行アクセラレータだったが、今回のリボーンの発言に関しては容易に理解できた。

「それと安心しろ。お前の望みなら俺が叶えてやれるぞ。なんせ銃の引き金を引いてお前の脳をぶち抜くだけでいいんだからな。もし自分の望みを叶えてえなら俺に依頼すりゃあいい。なんせ俺は殺し屋だからな」

「冗談でも笑えねエ冗談だな……」

一方通行アクセラレータに銃口を向けながら平然と語るリボーン。リボーンの発言に流石アクセラレータの一方通行アクセラレータも恐怖を覚える。

リボーンの発言は一方通行アクセラレータが死ねば一方通行アクセラレータはどう足掻いても人を傷つけられないという意味である。

「話しすぎちまツたな。俺はそろそろ行くぞ。生憎と探し物の途中な
ンでな」

「探し物？」

一方通行アクセラレータの言う探し物が何のことかわからずリボーンは疑問符を浮かべる。

その時だった

「今度はかき氷屋さんを発見つてミサカはミサカは再びツナにゴーサインを出してみるー!」

「ちよつとミカ! 人を探すんじゃないの!？」

「あの野郎……」

ミカを肩車しているツナの姿が一方通行アクセラレータの視界に入る。一方通行アクセラレータは額に手を当てながら呆れていた。

「あれがお前の探し物か？」

「ああ……探す手間が省けたぜ……最悪な形でな……」

一方通行アクセラレータの反応から一方通行アクセラレータの探し物がミカであるということをしりボーンは理解する。一方通行アクセラレータは右手を顔で覆いながら呆れてしまっていた。

「すごいやツナが言ってたっけな。妹達シスターズに命令できる奴に出会ったって」

「打ち止め。妹達シスターズの反乱した時の為に作られた個体だ。といっても中身は手のかかる傍迷惑をかかるガキだがな」

「だがそんな手のかかるガキ……それも自分が殺したクローンと一緒にいるなんてな。ツナに負けたショックでロリコンにでも目覚めたか？」

「何でそんなんだよ!？」

ミカと一方通行アクセラレータがいることについて聞いてくるのかと思いきや、全く検討違いのことを

りボーンが聞いてきたので一方通行アクセラレータは冷静さを失ってしまう。

(クソ……あの野郎とこいつの前だといつもものペースが乱される……)

一方通行アクセラレータは冷静さを失っていつもの自分でいられなくなり、調子が狂ってしまうことに嫌悪感を覚える。

「冗談だぞ。それで？ 何があった？」

「何もねエよ」

りボーンに聞かれた後、一方通行アクセラレータはゆっくりと歩き出し行く。

「学園都市最強の座は失ったが、それでも俺はあのガキの前じゃ最強を名乗るって決めた。sonだけだ」

一方通行アクセラレータはりボーンの方を一切、振り向くことなくそう言った。「どうやら道は決まったようだな」

以前に会った時とは違う一方通行アクセラレータの姿を見たりボーンは不敵な笑みを浮かべながら呟くのだった。

この後、ミカの同伴者が一方通行アクセラレータだと知ったツナは腰を抜かしたという。

標的（ターゲツト） 282 入れ替わり

ミカと一方通行アクセラレータと別れたツナ。

「まさかミカが一緒に来てたのが一方通行アクセラレータだったなんて……」

「本来ならあの2人はあんなに仲良くなれるような関係じゃなかったはずだ。それがああなってるってことは一方通行アクセラレータの奴が変わったってことだな」

「そういえば自分を助けてくれたってミカが……」

『でもミサカを助けてくれたとつても優しい人だってミサカはミサカは自慢してみる』

ツナは今さらながら理解する。自分のことを助けてくれたと言っていたのは一方通行アクセラレータのことだったのだと。

「そうか……今度会ったらそのことについて詳しく聞いてみるのも良さそうだな」

一方通行アクセラレータがミカのことを助けたと知ってリボーンは面白そうな笑みを浮かべる。

「お。常盤台中学の競技やってるみてえだぞ」

「あ、本当だ」

街頭テレビで常盤台中学の競技が始まっていることに気づいたりリボーンとツナ。

開催されていた競技はバルーンハンター。頭に紙風船をつけ、指定された球を使って割るといふ競技である。紙風船を割られた者から脱落していき、最後に割られなかった人数が多かったチームが勝者となる。

「あ。美琴だ」

街頭テレビにて競技を観戦していたツナ。すると競技に一生懸命打ち込んでいる美琴の姿を視界に捕える。

「ん？」

美琴の姿を画面で捕えたツナであったが、ここであることに気づいてしまう。

「え……ミサ……？」

ツナが気づいたのは現在、競技に出ているのが美琴ではなくミサであるということである。なぜ気づいたのかというとミサの右指の中指に前にツナがあげた指輪があったからである。

「本当だな。ありやミサだな」

ミサの動きからリボーンも競技に出ているのがミサだということを理解する。

「で、でも何で……？」

「何でも何もねえだろ。おそらく美琴と間違えられて出場させられた以外ねえだろ」

「だ、大丈夫かな……これでミサの正体がバレたりしないかな……？」
「大丈夫だろ。あいつらを見た目で判断できる奴なんてそうそういねえだろうしな。むしろここで俺たちが変な行動を起こせば敵に怪しまれる可能性がある。ここは大人しく見てるのが妥当だろうな」

「美琴は知ってるのかな？」

「多分、知ってるんだろ。映像はあちこちに流れてんだかたな」

「だよね……」

「心配すんな。これだけで美琴が俺たちの計画に気づくことはねえ」

美琴に自分たちの計画を知られるかもしれないと思ったツナ。そんなツナの心情を察したのかりボーンはツナを安心させようと言った。

「それよりちゃんとミサの勇姿を見てやれ。勘違いで出場されたとはいえ死ぬ気で競技に挑んでるんだからな」

「うん」

そう言うリボーンの視線の先には懸命に競技に打ち込んでいるミサの姿があった。ツナはリボーンの言われた通り、競技の行く末を見守ることを決意する。

競技は常盤台の方が劣勢であった。相手校はエリート校と呼べる

学校ではない。しかし卓越した戦略でじわじわと常盤台を追い詰めていた。

「常盤台の方が追い詰められてる……」

「どうやら相手校には頭のキレる司令塔がいるみてえだな」

ツナはエリート校である常盤台が追い詰められていることが信じられない様子であった。リボーンは相手校が常盤台を追い詰めている理由を冷静に分析していた。

試合は続いて行く。相手校の作戦になす術もなく紙風船を割られて行く常盤台。ついに常盤台側はミサー1人になってしまった。

相手校は大人数でミサに強襲する。しかしミサは華麗な動きで躲していく。

「凄い……全部、避けてる……」

「アクセラレータ二方向の攻撃に比べれば、あんな奴らも攻撃を避けるなんざ訳ねえだろ」

ミサが大人数を相手にしてもなお、攻撃を全て躲しきっていることにツナは驚く。しかしリボーンは当然といった表情で冷静に分析していた。

一方通行は一度でも触れることは死を意味する。アクセラレータ一方通行との戦闘経験とミサカネットワークによって得たアクセラレータ一方通行の戦闘データが今まさしく生かされていた。

しばらく攻撃を避けていたミサであったが、相手が大人数だということもあり風船を割られてしまう。

「まあそうだよね……」

自分以外の味方がリタイアし多勢に無勢だった為、ツナはミサが負けたのも無理もないと納得する。

（今、一瞬だがミサの動きが鈍った……これも相手の策略か……？）

リボーンはミサがリタイアの寸前にミサの動きが鈍ったのを見逃さなかった。普通に考えれば相手校の作戦でミサに大人数で強襲し、ミサの意識が周囲の敵に向けさせてミサの死角から能力を使って動きを一瞬封じ、その隙に紙風船を割ったというのが自然。だがリボーンは根拠はないが、今の出来事に違和感を覚えていた。

違和感を覚えたりリボーンだったが何も確証もなかった為、ミサに伝えることは控えた。ミサに伝えれば何かあったのではないかと感づかれてしまうと思っただからである。さらにミサを通じて美琴にバレることも恐れたというのもある。

バルーンハンターが終わり時刻は昼となる。

「昼か。俺たちも何か食うか」

「そうだな」

そう言うと2人は昼御飯を食べられる店を探す為に歩き始める。

「あ」

しばらく歩いているとツナとリボーンの反対方向からやって来た美琴とばったり遭遇する。

「ちやおつす美琴。さっきの競技は残念だったな」

「やっぱり気づいてたのね……」

リボーンはいつもの口調で皮肉を言い放った。美琴はリボーンが皮肉言ったことに気づく。

「そうよ。あんたの言う通りあれは私じゃなくてあの子よ。私が前の競技で体操着を汚しちゃって、体操着を取りに行ってる間にあの子が私が間違われて競技に出場することになっちゃったのよ」

「そりや間違われて仕方ないよね……美琴とミサは瓜二つだし……」

「どうかいくらあの子と仲が良いからってよく私が出場してないことがわかったわね」

「簡単だ。いくら似てるつっても動きは全く違うからな。なんせミサはお前と違って動きには品があるからな」

「ああ……そうですか……!!」

リボーンの発言を聞いて拳を強く握り、青筋を浮かべながら怒りを露にする美琴。しかしここで怒りを爆発させても意味がないと判断した美琴は怒りを抑える。

「そーいやツナはどうやってミサだつてわかったんだ？」

「指輪だよ。俺が買ってあげた指輪をつけてたんだ。だからわかったんだよ」

「指輪をあげた……!?!」

指輪という単語を聞いて美琴は再び怒りを露にする。実は先程の競技が終わった際に美琴はミサと会っている。その時にミサのしている指輪のことを尋ねたのだが自分で買ったと答えた為、特に気にも止めていなかった。しかしそれが嘘であり、ツナが買ったとなれば話は別。美琴にとって無視できる話ではなかった。

「それどういふことか説明してもらえるかしら……!?!」

「美琴たちが広域社会見学に行ってる時にミサと遊びに行ったことがあったんだ。それでミサが指輪に興味を示してたから俺が買ってあげたんだ」

(こ、こいつ……!?! 私のない間にまた……!?!)

ツナから事情を聞いた美琴は嫉妬のあまり怒りが頂点に達していた。いつもなら怒りのあまり電撃を放つ美琴であったが、大勢の人たちを巻き込む訳にはいかない為、能力が発動しないよう必死に怒りに耐える。

その時だった

「あ。美琴ちゃん」

「あ……」

すると美琴の前方から美琴のことを呼ぶ声がある。ツナとりボーンの後方には、どこか美琴と容姿が似ている女性が手を振りながらこちらに向かっていった。その女性を見た美琴は少しだけ驚いた様子であった。

「あら？　もしかして美琴ちゃんのお友達かしら？」

「え、えつと……すいません……あなたは……？」

「あらやだ！　私ったら！」

ツナの言葉を聞いて自分の自己紹介を忘れたことに気づいた女性。すると女性は美琴の後方に移動し、両手を美琴の両肩にポンツと置いた。

「美琴ちゃんのママをやってまーす！」

御坂美鈴みさかみすずでーす！」

標的（ターゲツト） 283 相性抜群

「美琴ちゃんのパママをやってまーす！ 御坂美鈴みさかみすずでーす！」
「ええ!？」

目の前にいる女性が美琴の母親だと知ってツナ驚きを隠せないでいた。ツナが驚くのも無理もない。なぜなら学生だと勘違いされてもおかしくない見た目だったのだから。

「ちよつとママ！ 変な挨拶しないでよ！」
「えー。いいじゃない〜」

自分の母親がキャピキャピした自己紹介をしたのが恥ずかしかったのか美琴は顔を赤くし美鈴に止めるように進言する。だが当の本人は気にしていなかった。

「そうか。美琴は母親のことをママって呼ぶのか」
「ち、違うの!! こ、これは昔の名残で呼んじやっただけよ!!」

美琴が美鈴のことをママと呼ぶという子供っぽい一面を知ってリボーンはニヤニヤしながらそう言った。美琴はリボーンのことを聞いて慌てて弁解するが、普段から母親のことをママと呼んでいることがバレてしまう。

「あら？ この子も美琴ちゃんの知り合い？」
時間差でリボーンに気づく。現在は大勢の人がいる為、背丈小さなリボーンの存在に今まで気づかなかったのである。
「ちやおつす。俺はリボーンだぞ」

「あ、沢田綱吉です」
リボーンが自己紹介したのでツナも同じく自己紹介する。
「それで美鈴。お前ボンゴレに入らねえか？」
「え？」

「だから勧誘するな!!」
いつものごとくりボーンはボンゴレに勧誘する。美鈴は何のころ

かわからず疑問符を浮かべ、ツナと美琴はツツコミをいれる。

「ヴオンゴレってパスタのことかしら？」

「違えぞ。ボンゴレはマフィアのことだぞ。ちなみに俺は超一流の家庭教師かてきよにして世界最強の殺し屋だぞ」

「あら。小さいのに難しいこと知ってるのね」

リボーンの言葉を聞いても美鈴は本気にはおらず、子供目線で喋っていた。

「凄いわね学園都市って。こんな小さいな子供が喋れる科学力があるんだもの」

「いや……」

リボーンが流暢に喋れるのが学園都市の科学力の賜物だと勘違いする美鈴。美琴は美鈴の誤解を解こうと思つたが説明したところで信じてもらえないのが関の山なので説明することを断念した。

「にしても若いなお前の母親。本当にお前の母親なのか？ 姉とかつてオチじゃねえだろうな」

「あら。嬉しいこと言ってくれるのねリボーン君。でも私は正真正銘、美琴ちゃんの母親よ」

「そうか。つーことは学生時代に旦那とできちゃった婚しちやっただけか」

「そうなのよ。若気の至りっていうかー。私つたらつい勢い余つてできちゃったのよね。あの時のあの人つたらそりや激しくって！

でもそんなワイルドなところに惚れたっていうかー」

「悪ノリでとんでもないこと言ってるんじゃないわよ!!」

リボーンの言葉を聞いて顔を赤らめた頬に両手に当てながら、体をクネクネしながら悪ノリする美鈴。悪ノリでとんでもない発言をする美鈴に対して美琴ツツコミを入れた。

「もうっ美琴ちゃんつたら。冗談に決まってるじゃない。ノリが悪いんだからー。ねえあなた」

「そうだぞ。ったく。どうしてこんな風に育っちゃったんだ。父さんは悲しいよ」

「何、父親ぶってんのよ!! あんたに育てられた覚えなんてないわよ

!!」

(美琴のお母さんノリが良すぎる……)

会って間もないのにも関わらずリボンと美鈴が息ピッタリのボケに対して美琴のツツコミがされる。ツナは2人にいじられる美琴の姿を見て同情してしまっていた。

「そんな調子だと惚れた男に振り向いてもらえないぞ美琴」

「そ、それは関係ないでしょ!!」

「え? もしかして美琴ちゃん好きな人できちやったの?」

「い、いや……!!」

美琴娘に好きな人ができたと知って母として放っておけない話題。

美鈴は興味津々な様子で問い詰めるが美琴は何も言い返せず顔を赤くしたまましおらしくなってしまう。だがツナの方をチラチラと見ている。

(成る程ねー。沢田君ねー)

美鈴が美琴がツナの方を見ていることを見逃さずニタニタした表情を浮かべていた。

「え!! 美琴って好きな人いるの!？」

「ち、違うわよ!! こいつが勝手に言ってるだけよ!!」

「だ、だよね……あーびっくりした……」

(こ、これは前途多難ね……)

美琴に好きな人がいると知ってツナは驚きのあまり固まってしまっていた。ニタニタした表情を浮かべていた美鈴であったが、ツナの発言を聞いてニタニタした表情が消え頭を抱えてしまっていた。

「この通りツナは鈍感でな。他にもツナのことを好きな女がいるんだが美琴はあの通り素直になれずあの調子なんだぞ」

「それは困ったわねえ……」

リボンは美鈴の右肩に乗ると美鈴の耳元に向かって小声で話す。ツナの鈍感と美琴が素直になれない性格が相まって関係が進まないと知って美鈴は困った表情をしていた。

「そうかわ!!」

どうしたもんだと迷っていた美鈴であったが、何か良案を思いつい

たのか両手をパンツと叩いた。

「沢田君。もうお昼は食べたの？」

「まだです。今から食べに行こうかと思つてたところです」

「丁度よかつたわ。今から一緒にお昼を食べない？」

「え？」

「なっ!？」

突然の美鈴からのお昼を一緒に食べないかという誘いに対してツナはキョトンとし、美琴は美鈴の意図に気づいて動揺する。

「せっかく美琴ちゃんのパイフレンドに出会えたんだし。美琴ちゃんの普段の様子とか聞きたいし。どうかしら？」

「俺はいいですよ」

「俺もいいぞ」

「じゃあ決まりね。さっそく行きましょう」

「ちよ、ちよっと!! 何で勝手に決めてるのよ!!」

自分の合意を聞かずにツナとりボーンの合意だけで話を進める美鈴に対して美琴は納得がいかない様子であつた。

「いいじゃない。せっかくならみんなで食べる方が美味しいし」

「そ、それはそうだけど……」

「どうした？ 何か食べたくない理由でもあんのか？」

「何かあつたの美琴ちゃん？」

(こ、こいつら……!!)

一件、美琴を心配しているようなりボーンと美鈴の発言。しかし2人はニタニタ表情を浮かべており心配などしておらずからかつているだけであつた。2人の表情を見て美琴は怒りを覚える。

「わかつたわよ!! 一緒に食べればいいんでしょ!! 食べれば!!」

「もう美琴ちゃんつてばさつきから怒つてばかりじゃない」

「カルシウムが足りてねえみたいだな。牛乳飲むか？」

「あんたらのせいよ!!」

美鈴の誘いで御坂家と一緒に昼飯を食べることになったツナとリボン。4人は近くに飲食店を見つけ、そこで昼食を食べることにした。

店内は大勢の人たちで埋まっていたが、幸いにも空いているスペースを見つけ4人は席へと座る。

「さあー、できたわよー！」

「こ、これって……」

笑顔でそう言う美鈴に対してツナは困惑していた。なぜならテーブルの上にカセット焔炉を置き、その上に鍋を置いてチーズフォンデュを作っていたからである。他にもテーブルにはチーズにつける具材が置かれていた。

大覇星祭は多くの人たちが来場し、外で食事を取ることのできる場所がなくなる。なので人々も必然と屋内に集中するのである。そういった事情もあり大覇星祭中は飲食店内に飲食物を持ち込んでも飲食店側は何も言わないのである。

「何で昼食に鍋持参でまでチーズフォンデュなのよ……?」

「えー。いいじゃない。運動会で母娘揃って鍋囲むのも乙つてもんじゃない」

「どこがよ……」

「贅沢言うんじゃないぞ美琴。母さんがせっかく作ってくれたというのに」

「だから父親でもないのに父親目線で話すんじゃないわよ!!」

「そうだな……お前は離婚した母さんと前の父親の間に生まれた子で私とは血縁関係もない……だから私に反抗するのは無理もないか……」

「勝手に設定作るんじゃないわよ!! 後、人の母親を勝手にバツイチ

すんじやないわよ!!」

しんみりとした表情を浮かべながら真面目なトーンで喋るリボンであったが、美琴は騙されることもなくツツコミをいれる。

「チーズが中々、溶けないわねー。もつとチーズを細かく切ればよかったかしら」

美鈴はチーズを溶かす為にかき混ぜていたが、思ったよりも溶けない為、憤りを感じていた。

「ちよつとお手洗い行つて来るから、鍋見てて」

そう一言だけ告げると美鈴は席から離れて、お手洗いに向かつて行く。美鈴がいない間、ツナがチーズをかき混ぜる。

「チーズが溶けるまで時間がかかりそうだな。こいつでも飲んでゆつくりするか」

するとリボンはどこからか一升瓶の入った日本酒をテーブルの上に乗せた。

「日本酒!」

まさかここで日本酒を出してくるとは夢にも思わなかった。ツナと美琴は驚きを隠せないでいた。

「お前何でそんな物、持って来てんだよ!!」

「俺が飲む為に決まってるだろうが」

「赤ん坊が飲んでいい訳ないだろ!!」

「つたく。しゃあねえな。だったらこいつだ」

そう言うトリボンは今度はワインの入ったボトルをテーブルに置いた。

「こいつならいいだろ」

「良くないわよ!! 結局、お酒じゃない!!」

「やれやれ。ああ言えばこう言う。本当に我が儘だなお前ら」

「それはお前だろ!!／あんだでしよ!!」

うんざりした表情を浮かべながら言うリボンに対してツナと美琴のツツコミが同時に炸裂する。2人に言われたこともありリボンが日本酒もワインを口にせず大人しくすることはなかった。

「ごめーん。待たせちゃってー。人が多くってねー」

しばらくするとお手洗いに行っていた美鈴が早足で戻って来る。

「あつ！ 日本酒にワインじゃない！ どうしたのよこれー！」

「俺が持ってきたんだぞ。飲むか？」

「いいの!? ありがとうりボン君!!」

よっぽど酒が飲みたかったのか美鈴はなぜりボンが酒を持って
いるのか追及することすらしなかった。

「ちよ、ちよつと昼間から飲むつもり!?」

「大丈夫よー。ちよつとだけだから」

真つ昼間から酒を飲もうとすることに美琴は驚いたが、美鈴は美琴
の言葉を聞かず一升瓶の封を開けるとグラスに日本酒を注いで飲み
始める。

「ぶはっー!! やっぱ日本酒は最高ねー!!」

美鈴グラスに注いだ日本酒を一気に飲み干すと、週末の仕事終わりに
大好きなお酒を飲んだおっさんみたいな感想を述べる。すると美
鈴はすぐに2杯目を注ぎ始める。

そして

「あの人ってばたまにしか帰って来ないし!! 美琴ちゃんは年に数回
しか会えないし!! 家族全員バラバラでこれじゃ何の為に結婚した
のかわかんないっいたらないわよ!!」

顔を赤くしながら愚痴を溢す美鈴。あれから大丈夫だと言いな
がら日本酒とワインを1人で飲み干し、完全に泥酔状態に陥っていた。

「ねえ聞いているの!」

「は、はい……聞いてます……」

(最悪だわ……)

酔って高圧的な態度になった美鈴に対しツナは圧倒され下手に何
も言えなかった。今のツナにできるのは必要最低限の返事をして、心
の中で美鈴が酔いから覚めるのを待つことしかなかったにだった。

一方で美琴は周囲の目があるのにも関わらず美鈴が泥酔状態に
陥ったことに羞恥の感情を覚えると同時に頭を悩ませていた。

ちなみにリボーンは美鈴に絡まれるのが嫌だったのか鼻ちようち
んを作って眠ってしまった。

「ヒック……あの人のことよ……きつと私みたいなオバサンなんてほつといて海外で若い女を引つ搔けてよろしくやってるに決まってるわ……うわあああああん!!」

「お、落ち着いて下さい!!」

「もうお願いだからこれ以上、恥をばら時かないで……!!」

怒り上戸から泣き上戸へと変貌する美鈴をツナは落ち着かせようとする。酔っているとはいえ大声で泣く美鈴を見ていられなかったのか両手で顔を覆い、消え入りそうな声で時間が過ぎていくことを願うしかなかった。

「もう頭に来たわ!! そっちがその気ならこっちだって考えがあるんだから!!」

泣き上戸になっていた美鈴であったが再び怒り上戸へと戻り、ポケットの中に入れていた携帯を取り出した。

「今から離婚してやるわ!!」

「ええ!?!」

夫が勝手に浮気しているという被害妄想に取りつかれた美鈴は夫に離婚しようと電話で伝えようとする。まさかの美鈴の行動にツナと美鈴は驚きの声を上げる。

「止めないで!! 私決めたの!! 帰って来ない夫よりもずっと側にいてくれる夫と結婚してやるわ!! そして側にいてくれる子供を産んでやるんだから!!」

「それは絶対に不味いですって!!」

「そうよ!! 酔った勢いでとんでもない決断するんじゃないわよ!! しかも娘の前で!!」

酔った勢いで家庭崩壊を起こそうとしてる美鈴。流石に止めないと不味いと判断したツナと美鈴は即座に席から立ち、携帯電話を引き剥がそうとする。

「大丈夫よ美琴ちゃん!! 私だってまだまだ若いんだから!! 何だったら私の魅力大企業の社長を落としてやるわ!! 社長の奥さんになれば働かず贅沢し放題!! しかも働かないで済むのよ!!」

「危ない方向に行こうとしてんじゃないわよ!!」

「美琴ちゃんはいいわよね!! いつも家で1人にいる私と違って沢田君と1つ屋根の下で暮らして!! しかも学生結婚でデキ婚して子供も産まれて今だって妊娠してるんでしょ!?!」
「とんでもないデマ流すんじゃないわよこのバカ母が—————!!」

泥酔した勢いで離婚しかけた美鈴。

「うう……頭痛い……」

現在、美鈴は風紀委員^{ジャツジメント}177支部のベッドにてうつ伏せの状態で見失ってしまった。酒を一気に飲んだ反動で美鈴は頭痛に苛まれてしまっていた。

「良かった……なんとか落ち着いてくれて……」

「私としては母親のせいで色々恥をかいたけどね……」

泥酔しただけでなく離婚までしかけた時はどうなるかと思ったツナが事なきを得て安堵していた。しかし娘^{美琴}としては母親^{美鈴}の恥ずかしいところを周囲に見られてしまったので正直、恥ずかたしかなかった。

「にしてもやっぱ似てるよなお前ら」

「は、はあ!?! どこがよ!?!」

事の顛末を聞いたリボーンは頭痛で苦しんでいた美鈴を見ながら美鈴と美鈴が似ていることを理解する。美鈴はリボーンの言っている意味がわからずムキになってしまう。

「美鈴はお前と違って素直そうに見えるが、実際には家族といつも一緒にいられないことが寂しいんだろ。だが母親として娘の前でそんな姿は見せられねえ。だから敢えてそのことは言わねえように平常心でいるんだろ」

「っ……!?!」

リボーンの一言に美鈴は反論できずにいた。なぜなら泥酔状態の時に吐いた台詞は美鈴の本当の心の内なのだと思っただけである。「それよりお前ら頭痛薬を買ってこい。美鈴は俺がなんとかしといてやる」

「そうだね。行こう美琴」

「仕方ないわね」

リボンに言われてツナは頭痛薬を買いに行くことを決める。美琴も自業自得とはいえ母親が苦しんでいる姿を見ていられないので重い腰を上げる。

頭痛薬を求めて2人は外に出る。

「いつもだったらすぐに行けるのに……」

大覇星祭は競技だけでなく様々なイベントが開催される。その影響で普段であれば通れる道が通れなくなるなる場合がある。今がまさにそうでありツナは焦りを見せていた。

(どどど、どうしよう!! まさかこんなことになるなんて!!)

一方で美琴は成り行きとはいえツナと2人つきりになってしまったこの状況に動揺してしまっていた。前に2人きりになった時は自分から誘った為に心の準備が決まっていた。しかし今回は心の準備も決まっておらず、美鈴の為に頭痛薬を買って来るとというのが目的だったので美琴は時間差で2人きりという状況に気づいたのである。

(お、落ち着くのよ!! まずは何か話を!!)

話のきっかけを作ろうと頭から湯気を出しながら脳をフル回転させる美琴。しかし考えても考えても良い話の話題が出てくることはなかった。

「あらあ? 御坂さんじゃない?」

「げっ……」

すると2人の後方から声がする。必死に頭を回転していた美琴

だったがその声の主を見て途端、もの凄く嫌そうな表情をする。

「あ。操折」

「はあい。ごきげんよう」

「何の用？」

ツナの言葉に対して操折は笑顔で手を振りながら答える。一方で美琴は操折のことを警戒してるのか、操折のことを睨んでいた。

「御坂さん怖い。たまたま見つけたから挨拶しただけなのに」

美琴が自分に対して警戒心を剥き出しにしていることに気づいてもなお操折は一切臆することなく、いつもの口調で答える。

「あなたたちこそどうしたのかしらあ？ 昼休みに2人きつりで」

「べ、別に何でもないわよ!!」

(へえ……これはいいこと知っちゃったわあ……)

操折が冗談でからかったつもりだったが、美琴は動揺を隠せずにした。美琴の反応から美琴がツナのこと好きだということを知り操折は今後、美琴のことをからかうネタができて嬉しそうな様子であった。棚からぼた餅とはまさにこのことである。

「えつと……友達が頭が痛いつていうからちよつと頭痛薬を買いに行たんだけ」

美琴の心情を察してか、美鈴が泥酔したとは言えなかったのでツナは美鈴ではなく友達ということにした。

「それは大変ねえ」

ツナから事情を聞いた操折は愛用しているショルダーバッグの中に手を入れる。

「はい。これ」

「え……？」

操折がバッグから取り出したのは頭痛薬だった。操折が頭痛薬が持っていることにツナはキョトンとする。

「心配性な派閥員の差し入れよお。必要ないって言ってるのに持たせてくるのよねー」

「で、でも……」

いくら本人が必要ないと言ってるとはいえ、ツナは流石に貰うのは

申し訳ないと思うのか、受け取るのを拒否しようとする。

「大丈夫よお。頭痛薬は1つだけじゃないわ」

ツナの心情を察したのか操折はバッグから他の頭痛薬を取り出し、見せることでツナが受け取ってくれるようにアピールする。

「これで受け取ってくれるかしらあ？」

「うん……ありがとう」

操折が再度、尋ねるとツナは操折の厚意に甘えて頭痛薬を受け取ることにする。

「やっぱり操折は慕われてるんだね」

「別にいい。私に対して過保護力を発揮し過ぎる大袈裟な人がいるのよ」

「なんかわかるなその気持ち」

操折の言葉を聞いてツナは思い出す。自分に忠誠心を誓うと公言している獄寺のことを。

「俺もいるんだよね。やたら俺のことを心配してくれる友達が。俺としてはもつと普通に接して欲しいんだけどさ」

「わかるわあ。私にも私のことを心酔力を発揮し過ぎなのよねー。もつと普通にしてくれればもこっちも楽なんだけどねー」

操折のにも獄寺のような人間がいるのか困ったような表情をしながらも首を縦に振ってツナの言葉に納得していた。

「1人だけでも手に余るのに、他にも忠誠力が強すぎの子が多くて大変なのよねー。私のことを慕ってくれるのは嬉しいんだけどやり過ぎちゃう困ったちゃんが多くってえ」

「そうそう。俺はそこまで望んでないのに次々にトラブルを起こして大変っていうか」

「そのせいで心が休まなくなってる……」

「もう毎日毎日、大変で……」

「苦労するんだよね……／苦労するのよね……」

ツナと操折は日々の苦労を思い出したのか、同時に同じ台詞を吐いた後に大きなため息を吐く。

「なんだがあなたとは気が合うわあ。今度、一緒にお茶しながら互い

の苦労力をもつと語り合わない?」

「うん。いいよ」

ツナが自分と同じような悩みを抱えていると知って操折はツナをお茶に誘う。ツナも同じ悩みを抱える人物と初めて出会って嬉しかったのか操折の誘いを承諾する。

「何、仲良くなつてんのよ……!?!」

「み、美琴!?!」

(し、しまったわあ……私の苦労力をわかつてくれる人に初めて出会ってつい……)

自分だけ疎外されて仲良くなる2人を見て嫉妬心と怒りが膨れ上がったのか美琴は全身に電流が送らせていた。

怒りを露にする美琴にツナは恐怖し、操折は自分の言動の迂闊さを心の中で反省する。

「じゃ、じゃあ私は用事力があるからあ!!」

ここにいとヤバいと判断した操折は即座にこの場から撤退して人混みの中に消えて行つた。

美琴から逃げた操折。

「ここまで来れば安心ねえ……」

肩で息をしながら周囲を見渡しながら美琴が追いかけて来ているか確認し、美琴がいないとわかつて操折は安堵する。

「全く……こんな暑い日に……」

こんな人混みの多い暑い日に体力を消耗するようなことをしてしまった自分に嫌気が差してしまっていた。操折はバッグの中からミネラルウォーターの入ったペットボトルを取り出した。

「あつ……」

操折はうつかりペットボトルを落としてしまう。落ちたペットボトルは前方へ転がってしまふ。

すると転がったペットボトルを1人の男が拾う。

「大丈夫か？」

「あつ……」

ペットボトルを拾ったのは当麻だった。ペットボトルを拾ったのが当麻だと知って操折はその場で固まってしまっていた。どうやら操折は当麻のことを知っている様子であった。

「なんだ食蜂じゃねえか」

「え……!?!」

どうやら当麻も操折のことを知っている様子であった。操折は名前を呼ばれただけなのにも関わらず衝撃を受けているようだった。

「どうした？ 前はもつと高飛車な感じだったのに」

「え、えつと……!?!」

当麻の言葉に操折は困惑してしまい、まともに返答できないでいた。

「悪いな。ちよつと急いでんだ。また今度な」

そう言うのと当麻は操折にペットボトルを渡すと走って行き、そのまま人混みの中へ消えていく。

「まさか本当に奇跡が起こすなんて……流石、私の惚れた男だぞ☆」

操折は笑顔を浮かべながらそう呟いた。だが瞳からは大粒の涙が溢れていたのだった。

標的（ターゲツト） 286 作戦前夜

操折から頭痛薬を受け取った後、ツナと美琴は美鈴のいる177支部へ戻り薬を渡す。薬を飲んだ後、美鈴は眠りについた。数時間後に目覚めると頭痛薬の効果があつたのか、完全にではないが美鈴は体調を戻した。そして

ツナは美鈴が宿泊予定のホテルに送った。

そして時は一気に進み大覇星祭1日目が終了する。

「「いただきまーす」」

大覇星祭1日目のプログラムが終了し佐天、ツナ、リボーンは寮に戻って晩御飯を食べる。

「今日は大活躍だったね佐天」

「いやー。それ程でも……あるかなー?」

全学年対抗のマラソンから佐天は他の競技でめざましい活躍をしていた。その勇姿を見ていたツナは佐天を褒める。想い人に褒められたのが嬉しかったのか佐天は浮かれている様子だった。

「随分と余裕があるようだな。その様子ならこの大覇星祭中の7日間もみっちり修行できそうだな佐天」

「ちよっ!!? 勘弁してよりボーン君!! 流星にそこまで余裕ないって!!」

大覇星祭で奮闘してもなお余裕のある佐天に向かってリボーンのドSっぷりが容赦なく炸裂する。リボーンならやりかねないと思つたのか佐天は無理だと宣言する。

「何、言つてんだ。大覇星祭中の最中に不在金属シヤドウメタルを捜そうとしてたのはどこのどいつだ」

「え!?! 何で知つてるの!?!」

「美鈴の看病してる時に聞こえたんだぞ。お前らが不在金属シヤドウメタルのことを

調べてることをな」

「聞こえてたの!?!」

「まあな」

佐天と初春は自分たちの競技の出番が来るまで177支部を休憩室に使っていた。その時に美鈴が休んでいることを事情を知っている。理由は美琴が誤魔化した。それ故に初春と佐天が何を話していたのか医務室から聞こえていた。勿論これはリボンが人並み外れた聴覚を持っているからであり、同じく医務室にいたノーマル状態のツナには聞こえていない。

「シヤドウメタル?」

「学園都市にある都市伝説ですよ。何十何百という能力が衝突するところで、自然界には存在しない新しい金属が生まれることがあるらしいんですよ。しかも希少価値が高くすごい高値で売れるみたいです」

「ふーん」

シヤドウメタル不在金属の概要を佐天から聞いたツナであったが、都市伝説ということもありあまり興味がないという感じであった。

「でもその様子じゃ見つからなかったみたいだね」

シヤドウメタル不在金属が本当に存在するものだとしても、そんな希少価値があるものが見つかる訳がない。仮に見つかったのであれば佐天なら大騒ぎしているはず。このことからツナは佐天が見つけた行つたが見つからなかったのだと確信する。

「い、いや……見つからなかったっていうか……見つけに行かなかつたんです……」

「え? さつきリボンが見つけた行こうとしたつて言つてたのに……」

「いやー……言つてはみましたけどなんかこの暑い中を探すのはめんどくさいと思つて……」

「まあ。それもそうか」

佐天の言葉に納得したのかツナはお茶を飲んだ。一方で佐天は話が終わつてもなおあまり表情が固い様子であった。

(学芸都市でも危険な目に遭つたし……それに……)

佐天は初めて超^{ハイパー}死ぬ気モードになった時のことを思い出し泣いた。恋慕弾を撃たれた際に脳裏に浮かんだ倒れている自分を見て泣くツナの姿であった。いつもなら好奇心に身を任せて行動する佐天であったが、あんなツナの姿を見る可能性があるぐらいなら不在^{シヤドウメタル}金属のこと諦めた方がマシだと思ったからである。

(成長したな佐天)

リボーンは佐天の内心を見透かしていた。それ故に佐天が成長していることが嬉しかったのか少しだけ口角が上がっていた。

一同は晩御飯を食べ終わると食器を片付けて、入浴を済ませる。佐天は明日からもまだまだ競技に参加しないといけない為、早めに就寝することにした。

「いよいよだね」

「ああ」

佐天が自室で就寝した後、リビングにて真剣な面持ちで話していた。明日はいよいよ木原幻生との戦いが始まるからである。

すると2人の携帯に着信音が入る。2人が携帯を取り出とメールには通知が入っていた。メールを送ってきたのは操折だった。2人はメールのアプリを開く。

「集合場所か」

届いたメールには9:00にここに来てという文章と学園都市の地図の画像だった。地図の画像では編集で星マークのついていた。

「どうやらそっちも同じみてえだな」

リボーンはツナの携帯の画面を覗き込む。ツナのメールにも自分と同じく文章とメールだけが送られていた。

「ツナ。覚悟はできてんだろうな？」

「うん」

「ならいい」

ここで迷うツナではないということはリボーン自身わかっていたが、念の為にリボーンはツナの意味を確認していた。ツナの返答は一言だけだったが、ツナの眼差しから覚悟と体調も万全だということを理解する。

(終わらせるんだ。今度こそ)

ツナの脳裏には涙を流す美琴と傷つき満身創痍になっているミサの姿が浮かんでいたのだった。

大覇星祭篇 2日目
標的（ターゲット） 287 疑惑

大覇星祭2日目。9月20日。

「ここか」

「で、でも……ここって……？」

佐天を見送りした後、ツナとリボーンは操折からメールのあった場所にやって来た。リボーンは冷静だったが、ツナは困惑している様子であった。なぜなら操折がメールで指示してきた場所は普通のタクシー乗り場だったからである。

すると2人の前に1台のタクシーが止まり、後部座席が

扉が開いた。

「お待ちせ」

すると後部座席から神妙な面持ちの操折が降りて来る。

「とりあえず乗ってもらえるかしらあ？ 長居力は危険だから」

操折がそう言うのとツナとリボーンは何も言うことなく黙ってタクシーに乗り込む。ツナとリボーンは後部座席に乗り、操折は助手席に座る。

「悪いわねえ。手間力かけちゃってえ」

「それはいいんだけど……何でタクシー乗り場が集合場所だったの？」

「馬鹿かツナ。相手がいつどこで見てるかわかんないんだぞ。木を隠すなら森の中。人を隠すなら人の中って訳だ。そうだろう？」

「理解力が早くて助かるわあ。その子の言う通りよ。相手はどこにいるかわからない。今もどこかで見てるかもわからない。少しでも目立たない方法で行くことが絶対条件よお」

「そっか……」

リボンと操折の言葉を聞いてすでにもう木原幻生との戦いが始まっているということを理解する。

「それでどこに向かっているの?」

「私が持つてる施設よ。前にあなたたちと話した出会った所とは別のね」

(やっぱ常盤台の生徒の感覚って違い過ぎる……)

当たり前前のようにとんでもないことを平然と言つてのける操折。ツナは操折の発言についていけない様子であった。

「そこで今回の作戦を話すわ。それと会ってもらわないといけない人物がいるしね」

「会ってもらおう人? 誰?」

「ここでは言えないわあ。着いてからでないと。ただ1つ言えるのは会ってもらおう人物はあなたが知ってる人物だってことよ」

「俺の知ってる……?」

「わかっても口に出さないでねえ。作戦を成功させたいと思うからね」

操折の言葉を聞いてもなおピンとこない様子のツナ。操折はツナがうっかり口を滑らさないという念を押すとツナは何も言わないように心に決めた。

ここから会話は無くなる。タクシーが発車してから30分が経過し、タクシーは第2学区のタクシー乗り場へと到着した。3人はタクシーから降りる。

「お疲れ様」

操折は運転手をリモコンに向けるとリモコンのスイッチを押した。

「どうしたの?」

「運転手の記憶から私たちの記憶と会話を消去したのよお。私たちの情報を知られない為にね」

木原幻生と戦うといっても敵が1人だけでということはない。木原幻生の配下も存在することは自明の理。その中に読心能力サイコメトリーを持つ者がいれば運転手に問い質すことなく情報がバレる恐れがある。故に操折は記憶を改竄したのである。

「ここからちよつと歩くわ。ついて来て」

操折がそう言うのとツナとリボーンは操折について行くことにする。

タクシー乗り場から降りて歩くこと20分。
「着いたわ」

「ここが……」

3人がやって来たのは研究施設と思わしき建物だった。

「研究施設か……」

「正確に言えば研究施設だった場所よ」

「だった？ どういう意味だ？」

「言葉通りよお。元々あった研究施設を私が買い取った。それだけよ」

「それだけじゃなさそうだけどな。ま。俺は紳士なんぞでな。そのところ聞かないで置いてやるよ」

「過分なお心遣い感謝するわあ」

リボーンの言葉に対して操折は心のこもっていない返答をする。

「さ。中に入るわよ」

そう言うのと操折は研究施設の中へと歩いて行く。ツナとリボーンも操折について行く。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

「ちよつ!?! 大丈夫、操折!?!」

操折の案内の元、研究施設内の歩いてきたツナとリボーン。しかし階段の登り降りが多かったのか災いして操折が階段の踊り場で息を切らし、バテバテの状態になってしまっていた。そんな操折を見てツナは心配になってしまっていた。

「も、問題ないわあ……ぜえ……こ、これくらい……どうってこと……
ゲッホゲッホ!!」

(全然、大丈夫じゃねえー!!)

強がる操折であったがすぐに咳き込んでしまう。明らかに大丈夫じゃない操折を見て心の中で絶叫するツナだったが、すぐに右手で操折の背中をさすって介抱する。

「お前、体力無すぎだろ」

「し、仕方ないでしょ……運転手を巻き込まないように少し遠くのタクシー乗り場から歩いて来た上に……この施設、階段が多いんだからあ……」

「だとしても限度つてもんがあんだろ。ここまで走って来たんならまだわかるが、歩いて来てそこまでバテてるようじゃ先が思いやられるぞ」

操折のあまりの体力のなさにリボーンは呆れてしまっていた。

「お前って意外とバカなんだな」

「バ、バカ!? この私をバカ呼ばわりするなんて身の程を知りなさい!!」

「バカにバカと言って何が悪い」

「あなた紳士なんでしょ!? もつとこうオブラートに包むとかあるでしょう!!」

「自分の施設で自滅するような奴がバカじゃなかったら一体何だっというんだ」

「仕方ないでしょ!! 私の持つてる拠点の中でここが一番の隠れ家だったんだからあ!! それに敵の襲撃力があるかもしれないからエレベーターを使う訳にいかないのよお!! 私だって考えてるのよお!!」

「それは正論だな。だがこの程度でへばるようなバカ相手なら、敵がこの拠点を落とすのも楽だろうな。こりゃ戦力外通告もいいとこだな」

「せ、戦力外通告!? 私の能力を使えば一滴の血も流れず敵を一気に無力化できるのよ!! そんな私のどこが戦力外だっというのよお!!」

「能力？ リモコンを押すだけで何も起きない能力が？」

「あれに関してはあなたがおかしいだけよお!!」

リボーンの言葉に対して操折のツツコミが炸裂する。

ミクロレベルの水分操作で、体内の水分の繊細な制御、主として脳内物質の分泌、血液・髄液などの配分により間接的に精神に干渉するメンタルアウト心理掌握は対抗する術を持っていない人間であれば一瞬で操折に洗脳されてしまう。

しかしリボーンにはメンタルアウト心理掌握は効かない。何か特別なことをしている訳でもないのにも関わらず。理由は不明。敢えて言うのであればリボーンだからとしか言いようがないのである。

「お前本当に超能力者か？……まさか裏口入学で常盤台に入学したのか？」

「何でそうなるのよお!!」

「お前の能力で名門に入れる訳ねえだろ。だったら金積んで入る以外、考えられねえだろ」

「ちゃんと実力で入ったわよ!! それにこれでも派閥の長なのよ!!」

「成る程な。金を積んで相手の心理を掌握する。それがお前の能力か」

「それは能力じゃなくてただ歪んだ人格力!! そもそもお嬢様集団の常盤台の生徒はそれぐらいで掌握できる程、甘くないわよ!!」

「そうになると人の弱みをつけ込んだか。確かにその方がつとり早いしな。やるじゃねえか。見直したぞ」

「勝手に人を悪人に仕立て上げるんじゃないわよ!! 私を何だと思ってるのよお!!」

能力が紛い物だと言われ、さらには外道扱いまでされ操折は憤慨する。いつもは余裕のあるお嬢様もリボーンの前では子供扱いである。

「さて。休憩も終わったところできっと行くぞ。体力は回復しただろうが」

「回復するどころか余計に疲れたわよ!!」

現在のリボーンの振り回されツツコミを入れまくったせいで体力がどん底にまで落ちてしまっていた。

(今回の件が終わったら覚えてなさい……)

標的（ターゲット） 288 協力者と先手

なんとか体力が回復した操折の案内の元、ようやく目的地に辿り着いた。

「ターゲットよ」

2人が案内されたのは研究施設にある1つの部屋であった。すると向こうから扉が開いた。

「お待ちしてました」

「え……？」

部屋の中から出て来たのは片言の日本語を喋る金髪の外国人の男性だった。突如、出て来た謎の男性を見てツナは呆然としてしまっていた。

「お出迎え感謝するわあ。彼女の様子はどうかしら？」

「大分、落ち着いています。ですがまだ意識は戻っていません。完全に回復するまでには時間がかかりそうです」

「そう……」

外国の男から何かしらの状況を聞いた操折は哀しそうな表情を浮かべていた。

「操折……この人は……？」

「紹介するわ。彼はカイツIIノックベレーン。私の協力者よ」

「初めまして」

操折に紹介されるとカイツはツナとリボンに丁寧に頭を下げる。

「絶対能力進化計画の関係者か？」

「え!？」

「あの計画を何も知らねえような奴にホイホイ喋れるもんじゃねえ。関係者を抱き込んで協力関係を結んだってところだろ。違うか？」

「あなたって本当に勘がいいわねえ」

「本当なの操折!?!」

「そうよ。彼には色々と情報を探ってもらう為に私が雇ったの。
風紀委員や警備員アンチスキルに頼めないしねえ」

ツナが焦ったような表情かおでリボーンの言っていたことが本当なの
か尋ねると、操折は済ました表情かおで答えた。

「先に誤解のようないように言っておきますが、私はあくまで
絶対能力進化計画の警備を依頼された身です。なので直接的に実験
で関わった訳ではありません」

「だからお前に罪がねえとでも言っていてえのか?」

「いいエ。私はただ事実を申し上げただけ。ただの自己紹介ですヨ。
だから許せとは言いません」

「彼のことに対して言いたいことはあるだろうけど、彼がああの計画の
全ての元凶力ではないわあ。元凶は木原幻生。いや……木原幻生を
始めとするこの街に暗躍する者たち。彼を責めようと殺そうとも何
も事態は変わらない。違うかしらあ?」

「違わねえな」

カイツに対して敵意を向けていたリボーンであったが操折の言葉
を聞いて、これ以上は何も言わないことにした。

「私はこの2人と話したいことがあるから外してもらえるかしらあ?

彼女にも会わせたいしねえ」

「承知しましタ」

操折がそう指示するとカイツは歩いてどこかへと行ってしまった。

「とりえずあず入って。あなたたちに会わせたい人はこの中にいるわ」

操折がそう言うのとツナとリボーンは操折の後に続いて部屋の中へ
と入って行く。部屋の中には多くの機会があり、その中には1台の
ベッドがあった。

「彼女よ」

「え……!?!」

ツナはそこで驚きの光景の目にする。そこにはベッドの上で意識
を失っているミサの姿があったからである。

「ミ、ミサ……!?!」

「落ち着きなさい。命には別状はないわ」

「何があったの!?! 何でミサがこんなことに!?!」

命の別状がないと言われたものの、こんな状態になったミサを目の当たりにしたツナが動揺せずにはいらられるはずなどなかった。

「単刀直入に言うわ。幻生に先手を取られたわ」

「先手……!?!」

「ええ。幻生の奴。昨日、この子の体にウイルスを注入したみたいなのよねえ。そのウイルスでこの子は無力化。幸いにも殺す為のウイルスじゃなくて、相手を高熱にして無力化するウイルスだったから、この施設のワクチンソフトでなんとかなったようね」

「昨日!?! 何でそのことを教えてくれなかったの!?!」

「教えられなかったのよ。あなたを通じて御坂さんにこのことがバレる可能性があったから。御坂さんがこのことが知られば御坂さんが幻生の元へ乗り込んで返り討ちなんてこともある。そうなれば幻生の思う壺。全てが水泡力に帰すわ」

「で、でも……!?!」

「勿論、命の危険が伴うようならすぐに連絡したわよ。でも感情のままに動いて全てを台無し力にする訳にはいかないのよ……!?!」

「操折……」

操折が拳を強く握って怒りに耐えている姿を見て、ツナは冷静さを取り戻すと同時に理解する。操折も苦渋の決断をしたのだということ。

「前に言ったわよねあなた。御坂さんに笑顔でいて欲しい。御坂さんを巻き込みたくないって。冷静力を欠いた状態で行動すれば護りたいものさえ護れない。それどころか自分自身の身すら護れないわ」

操折はツナの両肩に両手を乗せて真剣な眼差しでツナにそう言った。

「あなただって人間。ショックな出来事が起こって感情を揺さぶられれば、今みたいに冷静でいらなくなり周りが見えなくなる」

「っ!?!」

操折の言葉を聞いてツナは思い出す。未来の戦いでユニとγが死

んだ際、悪人とはいえ怒りのままに白蘭の命を奪ったことを。

「幻生は心理戦に長けている。冷静な判断力を失った状態になって、周りが見えなくなれば必ず幻生に利用され弱点を突かれるわ。誤解のないよう言っておくけど、感情を無くせって言ってるんじゃないわよ。怒りを覚えても何も考えずに行動するなって言ってるのよ。現状をよく見てみなさい。さっきも言った通りこの子の命の無事に保証された。だったら考えなきやいけないのは過去のことじゃないわ。これからどうするのか？ もうこんなことが起きないようにするにはどうしたらいいのか？ 今、やらなきやいけないことは過去を受け入れてこれから先の未来のことを考えることよ」

「……」

操折の言葉を聞いてツナは俯いた状態で何も言わずにいた。

「どうやら冷静力になってくれたみたいねえ」

「世話をかかせやがってダメツナが」

何も言わなくなったツナ。それでも冷静さを取り戻したということとを操折とリボーンは理解した。

「操折。俺はどうすればいいの？ 作戦があるんだよね？」

『神出鬼没はジーさんだから居場所を突き止めるのに苦労したけど内部の人間の記憶を見たから間違いないわあ。作戦の内容は当日伝えるわ。あなたのことを信用してないわけではないけど、もし私たちの作戦がバレたら全てが水泡力に帰すから』

ツナは思い出す。操折から幻生の野望を聞いた際に幻生の野望を止める為の作戦があると言ったことを。

「そうねえ。冷静力を取り戻したことだし。今から話すわあ。私の考えた作戦をね」

ついに操折の口から作戦が伝えられる時がきた。

「さつきも言った通り幻生は心理戦に長けている。それに敵は何人いるかわからない。だったらやることは1つよお。短期決戦で幻生を捕える」

「どうやって?」

「前にも言ったけど幻生は今日、国際能力者会議に出席してる。だから国際能力者会議の施設を私とあなたで制圧。そして幻生を捕えるわ」

「え? リボーンは?」

「彼にはちよつと別の任務ミッションをお願いするわ」

「別の任務?」

「御坂さんの関係者の護衛を頼むわ。人質力を捕れたら終わりだしねえ」

「そっか……」

自分たちの計画の為にを関係のない佐天たちが巻き込まれる可能性があると知ったツナは罪悪感に感じてしまっていた。

「それと私の能力で御坂さんの友達から御坂さんの記憶とあなたたち2人の記憶を消させてもらうわよ」

「き、記憶を!?!」

「ええ。私たちのことや幻生のことに気づいても首を突っ込まなれないようにねえ。やってることは最低かもしれないけど、これも戦いに巻き込まない為。全てが終わったらちゃんと言いは戻すわ。それまで辛抱よ。わかってもらえるかしら?」

「わかった……」

佐天たちが自分のことを忘れてしまうと知って辛くなったツナで

あったが、それでもみんなの為だと思って記憶を消去することを承諾した。

(辛いわよね……一時的とはいえ大切な人に忘れられるなんて……こうなったのは私のせいなのに……)めんなさい……)

ツナが辛さが痛い程、理解できるのか心の中でツナに対して謝罪した。

「思ってたんだが美琴の記憶を消せねえのか？　そうすりや美琴に首を突っ込れずに済むだろ」

「それは無理ねえ。御坂さんの電磁力のせいで私の能力が妨害されちゃうのよ。だから私の無力化したくてもできないのよねえ」

「だったら美琴はどうする？　美琴が何か気づいても止められる奴がいなくなるぞ」

「私の派閥メンバーに御坂さんを監視させるわ。私たちの計画については何も知らないし、私の命令には忠実に従うから問題ないわあ。流石に何も知らない人たちに御坂さんも野蠻力を発揮できないと思うしい。最悪、止められなくても時間稼ぎはできるわあ」

「成る程な……」

リボーンの問いに対して困った表情を浮かべながら答えた。操折の言う通りに納得したのかりボーンは一言だけ呟いた。

「もう1ついいか？」

「何かしら？」

「俺の護衛の話だ。俺が護衛に行くのはいい。だがそうなるここはもぬけの殻になるぞ。もしここに敵が来れば一気に制圧される。カイツ1人^{あいつ}でどうにかできなくなるぞ。リスクは高くなるが、最悪の状況を考えて籠城戦にした方がいいんじゃないか？」

「それはそうなんだけど。実は問題が発覚しちゃったのよねえ」

「問題？」

「ええ。実は都市伝説サイトにここの存在と私の写真がネット上にアップされちゃったみたいなのよねえ」

「ええ!？」

この拠点がネット上に上がっていると知ってツナは驚きの声を上

げる。

「都市伝説が本当にあるかどうかを足で確認するっていうサイトでね。そのサイトの主にここがバレちゃってネットにアップされちゃったのよお。勿論、そのサイトにたどり着かないようカイツが^彼検索順位の高い情報をばらまいたら、そのサイトを見つけないようにしたわよ。といつてもそのサイトも突き止められちゃったのよねえ……」

「全然ダメじゃねえか」

「仕方ないでしょお!! まさか都市伝説サイトにバラされるなんて予想外力もいとこ……しかも遠く離れた水滴をレンズにする念写能力だったんだからあ!! そんなの気づく訳ないじゃなあ!!」

リボーンの言葉に憤慨する操折。尾行されていたり、監視カメラのような機械ならまだわかったかもしれないが、水滴を監視カメラのようにされては気づくのは無理もないとしかいいようがない。

「サイトが特定されたのだってそうよお!! あんだけのダミーの情報をばらまいて、特定できる人なんてほ神業もいとこよ!! イレギュラーよ!! まあ特定したのも敵じゃなくて^{ジャツジメント}風紀委員だったから心配力はないけどお……」

「え? ^{ジャツジメント}風紀委員が突き止めたの?」

「ええ。 ^{ジャツジメント}風紀委員177支部。あなたならわかるんじゃない?」

「ま、まさか……」

「初春だろうな」

操折の口から^{ジャツジメント}風紀委員177支部という単語が出たことからサイトを特定したのが初春だと理解する。

「昨日、^{シヤドウメタル}不在金属について調べた時に一緒にいた初春が特定したんだろうな。昨日、佐天の口からそのことが話題にならなかったってことは佐天は見てねえようだな。都市伝説好きのあいつが都市伝説関連の話を俺たちにしないはずがねえ」

「ど、どうしよう!! このままじゃ初春が巻き込まちゃうよ!!」

「落ち着けツナ。都市伝説サイトを見ただけだ。それだけで俺たちや幻生のがバレる訳じゃねえ。不安なら操折にその時の消しても

「らえばいい話だ」

「そ、そっか……」

「まああなたの言う通りあの都市伝説サイトだけで私たちのことに気づくことは無理力があるだろうけど、念には念を入れておきましょうか」

初春が巻き込まれることはないだろうと判断した操折であったが、それでも念の為に都市伝説サイトの記憶を消しておくことを心に決めた。

「話が反れちゃったけど籠城戦は難しそうねえ。向こうに準備させちゃう訳だし。護りを固めて敵を倒しても肝心の幻生が現れなきや意味がないわあ。幻生がいる限り計画は終わらない。バレてる可能性があるこそ一刻も早く、幻生は確実に捕えないといけない。正直、この機を逃したら幻生は二度は捕まえられないわあ」

「でもリボーンの言う通り敵がここに攻めて来たら……」

「まあね。でもこの子を殺さずに無力化したってことは、幻生にとってこの子が自分の目的に必要だと考えてる。だから目的を果たす前に殺される可能性はないはずよお」

「だがそう思わせることが幻生の作戦かもしれないねえぞ。それに会議に出席しない可能性だってあるぞ」

「確かにね。でも正直、今のところ幻生が能力者会議に会議に出る以外に情報がないわあ。この拠点に誰か強力なボディガードでも置ければいいんだけど、事が事だからあなたたち以外に頼める人がいないのよお。でもカイツ^彼だって最低限の力は持つてるし、敵が攻めて来た時の為の対策だって教えてあるわあ。それにあの子にはウイルスに感染しないよう私の能力でプロテクトをかけてある。万全とは言いがたいけど対策はしてあるわあ」

操折とリボーン意見。どちらも正しく話は平行線になってしまう。そして沈黙が訪れ、誰も言わなくなる。

「やろう」

するとツナが沈黙を破って操折の作戦を実行することを心に決める。

「ゆっくりしてたら手遅れになる気がするんだ……それにこんな状況とこに1秒でも長くいて欲しくないんだ。美琴たちもそうだし。操折たちも、ミサだつて。こんな状況とこ、全然似合わないよ!!」

ツナが自分の意見を主張する。ツナの言葉を聞いてリボーンは口元を緩ませていた。

「決まりだな」

「そうね」

ツナの意見にリボーンと操折も同意。ついに作戦が始まるのであった。

標的（ターゲット） 290 生命の危機

操折の作戦を実行することを決めたツナたち。

「とりあえず私はカイツと一緒^彼に記憶を消しに行つて来るわあ。あなたはこの場所で待つてて」

「え……俺の仕事は操折の護衛だから一緒にいた方がいいんじゃないの……？」

「あなたに護衛についてもらうのは幻生に捕えに行く時。あなたはわばこの作戦における切り札^{ジョーカー}。切り札^{ジョーカー}つていうのはそう易々と見せないからこそ切り札^{ジョーカー}よお。だからあなたは私が帰つて来るまでここでこの子の様子を見て。それと能力者会議が始まるのは午後からだから、護衛と午後の作戦の為に体調を整えておいてえ」

「わかった」

「あなたも私が帰つて来るまでここで待機よお。あなたと一緒にいると目立つから私が帰つてから護衛に向かつてもらえるかしら？」

「何だ。お前もわかつてんじゃねえか。俺の溢れ出るオーラが隠しきれねえつてことが」

（そういう意味じゃないんだけどお……まあいいわあ……）

喋る赤ん坊という奇妙な存在と一緒にいると悪目立ちするという意味で操折は言ったのだが、リボーンは勝手に勘違いしてしまっていた。ツツコミを入れようと思った操折であつたが面倒くさくなったので何も言わないことにした。

「じゃあすぐ帰つて来るまで護衛力の方、お願いねえ」

そう言うとお操折は部屋を出て、佐天たちの記憶を消しに向かった。

一方。その頃。

「白井さーん。まだ落ち込んでるんですかー」

初春が車椅子に乗った状態で落ち込んでいる黒子と木陰で待っていた。黒子が落ち込んでいるのは、自分が愛の重たい人間だと知ったからである。そんな黒子を見て初春は呆れた様子であった。

昨日の1件は初春も聞いている。聞いたというよりは黒子が初春に相談したと言った方が正しい。

ちなみに佐天がいなのは2人の為に屋台で食べ物を買っているからである。

「白井さんの愛が重いなんて御坂さんが好きだった時からじゃないですか。それが沢田さんになっちゃただけですよね?」

「ななな、何を言っていますの初春! 私に沢田さんのことなど気に止めてなどいませんわよ!!」

「じゃあ。何で沢田さんに攻撃したんですか?」

「そ、それはあまりにもだらしない表情かおをしていたから渴かわを入れただけですよ!! 決してキスされたことに対して嫉妬した訳ではありませんの!!」

(御坂さんの時とは違いますけど、白井さんが好きな人のことでポンコツになるのは変わらないんですね。まあポンコツ具合は御坂さんの時より酷いようですけど……)

美琴の時はクールな黒子が美琴の前では欲情し、お嬢様の品性が無くなり、内に秘めた変態性が惜しげもなく出現していた。しかしツナのことになれば品性が無くなることはなく、ツンデレになってポンコツ具合が悪化してしまっていることに初春は理解した。

「白井さんの言い分かりましたから。とにかく佐天さんの前でそのことは言わないで下さいね」

「そ、それぐらい言われなくてもわかっていますの!!」

初春の忠告を聞いて憤慨する黒子。だがそれと同時に佐天が自分のお見舞いに来てくれた時に見せた、素手で林檎を潰した光景を思い出し恐怖していた。ツナが謎の美女にキスされたなど佐天に知れた日には、佐天が何をしでかすかわからないからである。

「いいですよの初春。あなたも知つての通り私は由緒正しき常盤台の生徒の一員。つまり淑女レディですの。そのような無謀なことをする程、無謀ではありませんの。ましてや友達佐天さんの逆鱗を踏むような無謀な真似はいたしませんわ」

冷静さを取り戻してはいなかったが、黒子は初春に自分が無能ではないということを主張する。

「私がどうかしたんですか？」

「さ、佐天さん!?!」

ここでタイミングが悪く、飲み物の入ったスチール缶を両手に持っていた佐天が帰って来てしまう。佐天の逆鱗に触れないという話をしていた矢先に佐天が帰って来てしまったので初春と黒子は動揺を隠せないでいた。

「はい。どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

「あ、ありがとうございますの……」

佐天は黒子に紅茶の入ったスチール缶を。初春にはいちごおでんのスチール缶を手渡した。佐天の登場が相当、心臓に悪かったのか初春と黒子はぎこちない笑みを浮かべながら飲み物の入ったスチール缶を受け取った。スチールを渡し終えると佐天は体操着のポケットからコーラの入ったスチール缶を取り出した。3人分買ったので両手では持ちきれず自分の分だけポケットに入れて戻って来たのである。

「それで私の話をしてみたんですけど、何を話してたんですか？」

「え、えつと……!!」

先程、自分の名前が出ていたので何の話をしていたのか気になり、詳細を求める佐天。初春はなんとか誤魔化そうと頭をフル回転させる。

その時だった

「ななな、何でもありませんの!! 沢田さんが昨日、外国の女性の方にキスされた話を佐天さんに言わないようにしようなんて言っていないの!!」

「はっ?」

「なっ!?!」

ポンコツ状態に加えてなんとか話を反らそうと必死で考えた結果、黒子の脳がショートしてしまい馬鹿正直に全てを暴露してしまう。

黒子の言葉を聞いた途端、佐天の目から光が無くなり初春は驚きを隠せないでいた。

「はっ!?! 私は何を!?!」

（お、終わりました……）

自ら佐天の逆鱗に触れてしまったことに黒子は、自分のしでかしたこの恐ろしさに時間差で気づく。

あれだけ偉そうに淑女レディだの無謀なこととはしないなどと言っていた黒子がとんでもない地雷を踏んでしまった為、初春は絶望をしてしま

う。
「あ……あつちに迷子の子供が……わ、私行つてきますね……」
「お、お待ちなさい初春!! わ、私も行きますわ!!」

迷子の子供などいないが今から発生するであろう修羅場に巻き込まれるのを恐れ、初春は逃げることを決意。初春の思惑を咄嗟に理解し、初春の制服の裾を掴んで逃げられないようにする。

「は、離して下さい白井さん!!」

「わ、私を1人にしないで下さいまし初春!!」

「白井さんがやらかしたんじゃないですか!! 自分で責任を取って下さい!!」

「一生のお願いですの!! あなたの大好きなおちごおでんを奢って差し上げますから!!」

「絶対に嫌です!!」

敵に命乞いをするかのような必死の形相で初春の逃亡を断固阻止せんとする黒子。数日前に佐天が見せた林檎を片手で粉々にした恐

怖が忘れられない為、藁にも縋る思いで初春を逃がさないようにしているのである。

だが初春も佐天が怒りで林檎を潰した恐怖を忘れた訳ではない。初春も恐ろしい敵が迫って早く逃げなければ命に奪われるかもしれないぐらいの状況に陥っていた。故になんとかこの場から逃げようと必死に足掻く。

「初春。白井さん」

「は、はい……？」

初春と黒子が足の引っぱり合いをしていると佐天が初春と黒子の名前を呼ぶ。すると2人の全身に寒気が走り2人は金縛りにあったかのように体が動かなくなる。

「その話。詳しく聞かせてもらっていいですか？」

「ひい!!」

清々しい程の笑顔（目は笑っていない）で説明を求める佐天。すると時間差で右手に握っていたスチール缶が潰れ、中身が飛び散る。

中身の入ったスチール缶を潰すという前回の林檎よりも恐ろしい光景を見て初春と黒子は悲鳴を上げる。そして即座に昨日あった出来事を素直に白状した。

「へー……そんなことがあったんですかー……」

事の顛末を聞いた佐天。笑顔が無くなり目から光が消えてしまっていた。

「何でいつつもこうなっちゃうのかな？ 私が一番、最初にツナさんのことが好きになったのに。勇気を出して必死にアピールしてるのに全く私の気持ちに気づいてもらえないし。それどころか他の女の子にフラグを建てまくって。回りくどい真似なんてしないでさっさと告白した方がよかったのかな？ さっさと告白しなかったのが悪かったのかな？ 私が悪いのかな？ ねえそうなのかな？」

俯いた状態で今まで不満をお経を唱えるかのようにぶつぶつと呟く佐天。その光景を見て初春と黒子は涙目になっており、お互い体を震わせ抱き合っていた。

その時だった

「はあい☆。白井さん」

ここで3人の記憶を消しに来た操折がやって来てしまう。

(しよ、食蜂操折!? こんな時に!?)

もの凄いバッドタイミングで操折がやって来てしまった為、黒子は頭を抱えてしまっていた。

黒子と操折は同じ常盤台の生徒である為、知らない仲ではない。それどころか黒子は操折の派閥にも勧誘されたこともある。操折は黒子のことを大層気に入っているようだが、黒子は操折に苦手意識がある。お世辞にも良好な関係にあるとは言えない。

「それと白井さんの友達もこんにちわ。白井さんの友達の食蜂操折でーす☆」

「だ、誰が友達ですの!! あなたと友達になった覚えはありませんの!!」

「もうっ白井さんったら!! 照れ隠しなくてもいいのに!!」

「照れ隠しではありませんの!!」

操折から一方的にお友達認定されたことに対して憤慨する黒子。

その時だった

「金髪……」

操折の髪の色を見てそう呟く佐天。いつもなら有名人の存在に興奮する佐天であるがツナが金髪の外国人の女性にキスされたという話を聞いた為、目が離せないでいた。

「あらあ? 私の輝き力満載の髪が気になるのかしらあ?」

佐天が自分の髪の毛をジッと見てきたので操折は自分の髪に興味を持ったのだと勘違いする。

「ツナさんにキスしたのってあなたですか?」

「い、いきなり何を言い出すのお!?!」

佐天はツナにキスしたのが操折なのではないのかと疑い始める。急に話がぶつとんだ為、操折は顔を真っ赤にしながら驚きの声を上げる。

ツナにキスをしたのは金髪の外国人の女性であるが今の佐天はまともな思考ではない為、操折が犯人ではないということがわからない

のである。

「キスなんてしてませんよね？　ねえ違うって言って下さいよ。ねえ？　ねえ？」

「ひい!!」

禍々しいオーラを放ち虚ろな目で問い詰めてくる佐天に対して操折は恐怖を抱く。

「きゅ、急用を思い出したからこれで失礼するわあ!!　ごきげんよう!!」

記憶を消しにきた操折だったが、生命の危機を感じたので即座にこの場から逃亡を計ったのだった。

記憶を消しに行ったはずが佐天に恐怖を覚え、記憶を消すどころではなく逃走することになった操折。

「はあ……はあ……はあ……」

「おや？ 何かあったのですか？」

操折は一旦、体制を整える為にカイツの車の元へ戻って来ていた。操折が息を切らしながら帰って来た為、カイツは何かあったのかと推測する。

「き、緊急事態よお……御坂さんのお友達にとんでもない人がいたわあ……」

「とんでもない？」

「あれは普通の人間の目じゃない……あの場にいたら間違いなく殺されていたわあ……」

（一体、何かあったんですか……？）

操折は顔が真っ青になっており、両手で左右の腕を掴んだ状態で全身を震わせていた。完全に先程の件がトラウマになってしまった。

そんな操折を見て何かがあったのか気になるカイツであったが、聞くのが怖くて聞くことができないでいた。

「このままじゃ作戦実行前に殺されるわあ!! ちよつと協力しなさい!!」

本来であれば操折一人で事を終わらせるつもりであったが、このままでは無理だと判断した操折は協力を要請する。

「何があったかは知りませんが、私が協力したぐらいでどうになるのですか？」

操折の怯えようから何かとてつもないことがあったことは理解できた。しかし自分が協力したところで役に立てるとは到底思えな

かった。

「詳しいことはわからないけど、どうやら金髪の女性に対して殺意を向けてるだけだからあ。あなたなら大丈夫よお。だから安心なさい」
「それは本当に大丈夫なのですか……？」

安心しろとは言われたが、特定の特徴の人物に殺意を抱くような人間を相手に安心しろと言われても安心できる要素がなくカイツは不安でしかなかった。

「とにかくあなたが御坂さんのお友達の気を引きなさい。私がその隙にこっそり近付いて記憶を消すわあ」

「了解しました……」

操折の作戦を聞いても不安でしかなかったがこのままでは埒が明かないのではカイツは仕方なく協力することにした。

一方。その頃。

「繋がらない……」

真相を聞き出そうとツナに直接、問いただそうと佐天はツナの携帯に電話したが携帯から「おかけになった電話番号への通話は、本人の希望によりお繋ぎできません」とアナウンスが告げるだけであった。

次に佐天はツナに一番、近い人物であるリボーンに電話する。しかしリボーンも同じくリボーンの電話が繋がることはなかった。

現在2人は重要な作戦の最中。みんなを巻き込まないようにする為、作戦の関係者以外と連絡が取れないようにしているのである。

「着信拒否されてる……？」

佐天はツナとリボーンが着信拒否をしているのだということを確認

信すると同時に冷静さを取り戻す。

「着信拒否って……沢田さんとリボーン君がですか？」

「うん……」

「たまたま繋がらないだけでしよう。これだけの人がいるのですから繋がらなくなるのも無理もありませんわ」

「いや。アナウンスで本人の希望で繋がらないようになってるって言うてるから電波の問題じゃないと思います」

黒子は人混みの問題で電波が悪くなり繋がらなくなっていると指摘するが、佐天は首を横に振りながら否定する。

(でも何で?)

佐天にはわからなかった。どうして2人が自分のことを着信を拒否するのかを。

「初春。白井さん。ツナさんとリボーン君に電話をかけてくれませんか?」

自分が着信拒否されていることに違和感を覚えた佐天は初春と黒子からツナとリボーンに電話するように頼む。

「繋がりません……」

「こちらにも繋がらないの……」

佐天の頼みを聞いて黒子はツナに。初春はリボーンに連絡する。しかし結果は佐天の時と同じであった。

(初春と白井さんまで……)

自分だけでなく初春と黒子までツナとリボーンに着信拒否されてしまったことを知って佐天は驚きを隠せないでいた。

(もしかして……!?)

佐天の脳にある仮説が過る。それはツナとリボーンが何かの陰謀に巻き込まれており、自分たちを巻き込まれないようする為に着信を拒否しているのではないのかと。

「初春。白井さん」

まだ何の確証もない自分の勝手な憶測であったが、ツナとリボーンが自分たちを着信拒否する理由が考えられなかった。なので初春と黒子に自分の推測を伝えることを決める。

が、

「すいません。風紀委員とお見受けしてよろしいでしょうか？」

ジャックジメント

佐天が話そうとした瞬間、タイミング悪くカイツがやって来てしまう。

「はい。そうですけど。どうかしましたか？」

「私は大会を外から観にきた外からの観戦者なのですが、実は盗難にあってしまいました」

「それは大変です！」

盗難に遭ったと知って初春は慌てながらもスカートのポケットからペンとメモ帳を取り出す。

「えっと……何を盗られたんですか？ それと犯人の特徴やどっちに逃げたかなど……」

初春は盗難事件の解決する為にカイツに犯行が行われた時の状況を尋ねる。

「佐天さん。先程、何か言おうとしていませんでしたか？」

「はい。でも今はこの人の盗難事件を解決することの方が大事ですから。後で話します」

カイツが話しかけて来る前に佐天が何かを話そうとしたことが気づいていた黒子は佐天に何を話そうとしていたのか尋ねる。

しかし佐天はまだ起きてるかわからないことよりも、今日の前で起きてる事件の方を解決することが大切なので後で自分の推測を話すことにした。

が、

「「つひに」」

すると佐天、初春、黒子の体が金縛りにあったかのように動かなくなる。3人は自分たちの身に何が起こっているのかわからず困惑してしまう。

「ごねんなさいねえ。あなたたちを危険力を巻き込まない為なの。わかってくれないとは言わないけどおしばらく大人しててねえ」

3人の背後には路地裏の近くに隠れていた操折が現れる。動けない3人にそう告げるとリモコンのスイッチを押して記憶を消去する。

そして操折とカイツは何事もなかったかのように去って行くのだった。

記憶を消去した後、2人が車は一旦、車に戻る。

「こっちは終わったわよ」

『そうか』

操折は電話で記憶消去が完了したことを、リボーンに報告する。

「そっちの状況はどうかしらあ？」

『異常はねえぞ』

「そう。それは良かったわあ」

『それじゃ俺は護衛に向かうつてことでもいいんだな』

「いや。まだそこで待機してもらえるかしらあ？」

『何でだ？ もう記憶を消去したんだろ』

「あなたたちに見せたいものがあるの」

『見せたいもの？ 何だ？』

「それはそっちに着いてからに説明するわ。実際に見て方が説明しやすいしねえ」

『わかった』

そう言うのと操折は携帯の画面をタップして通話を終了させた。

「出して」

「了解しました」

操折が命令するとカイツは車を発進させ研究施設へと向かって行く。

「本当は言うつもりはなかったけどお……仕方ないわよね……」

標的（ターゲツト） 292 遺産と監視

操折が佐天たちの記憶を消去し終えた後、操折とカイツはミサが療養している施設へと戻っていく。

「今、戻ったわあ」

施設に戻った操折とカイツはミサの護衛をしているツナと共に戻って来る。

「お帰り操折」

「護衛力、お疲れ様。さっそくだけどあなたたちに見せておきたいものがあるの」

「リボーンから聞いてるよ」

「そ。だったら着いて来て。リボーン^彼には護衛に行ってもらわないといけないから」

そう言うのと操折はツナとリボーンを連れて部屋の外に出る。カイツは操折の命令でミサの護衛をすることになり部屋に残った。

ツナとリボーンが操折に連れて行かれたのは部屋を出て真っ直ぐ行ってすぐの場所にあったガラス張りの空間だった。

「()よお」

「え……？ ()……？」

ガラス張りの向こうには、ただ広いだけの何も無い空間があった。何も無い空間に案内されてツナは困惑してしまっていた。

「何もねえじゃねえか。とうとう頭までイカれちゃったか？」

「イカれてないわよお!! 私のことを何だと思ってる訳え!!」

「運動音痴の似非お嬢様だろ」

「何ですってえ!?!」

「お、落ち着いて操折!!」

リボーンの言葉に操折目くじらを立て怒りを露にする。今にも襲いかかりそうな操折をツナはなんとか落ち着かせる。

「光学迷彩で見えないようにしてるのよ。誰にも見られたくないものがあるから」

「見られたくないもの?」

「ええ。本当はあなたたちにも見せるつもりはなかったんだけど。協力してもらってる以上、見せておかないといけないし。それに言うておかないといけないことがあるからねえ」

そう言うのと操折はショルダーバッグの中からリモコンを取り出した。操折は目の前の何もな空間に向かってリモコンのスイッチを押した。すると何もなかった空間にある物が出現する。

「こいつは……」

「な、何これ……!?!」

リボーンとツナは目の前に現れた物を見て衝撃を隠さないでいた。なぜなら2人の前に現れたのは巨大な円柱状の2つの容器に、複数のコードに繋がられた巨大な2つの脳があったからである。

「私の大脳皮質の一部を切り取って培養、肥大化させた巨大脳。その名も外装代脳^{エクステリア}」

「エクステリア……?」

「私の能力を強化するブースト装置ってどこかしら」

「そいつはすげえな……と聞いてえところだが、わざわざ光学迷彩で隠してたんだ。それだけじゃねえな。何か裏があるんだろ?」

「ええ。確かにこの外装代脳^{エクステリア}には私の能力をブーストをさせる機能が備わってる。でも本当の目的は私の能力の強化じゃなくて私の能力を誰にでも

「使えるようにすること」

「そ、そんなことできるの!?!」

ツナには信じられなかった。能力を使えるようになるには才能に
よるものが多い。それが外装代脳エクステリアを使えば誰でも使えるという事実
に。

「外装代脳エクステリアにさえ登録さえすれば、能力者だろうと能力開発を受けて
ない一般人でも可能よお。煩雑で登録するには数日かかるけどお」

「とんでもねえもんを作ったもんだな。学園都市のロクでもねえ奴ら
作ったのか?」

「ええ。これを作ったのは才人工房クロインドリーの研究者たち」

「クロインドリー?」

才人工房クロインドリーという聞いたことのない単語を聞いてツナとリボーンは
疑問符を浮かべる。

「才人工房クロインドリー。天才や偉人級の人間を人工的に産み出そうとした研究機
関のこと。まあ今、私たちがいるこの施設がそうなんだけどお」

「え!」

まさかこの場所が才人工房クロインドリーの研究施設だと思っていなかった為、ツ
ナは驚きの声を上げた。

「けど短絡な研究者が偉人を産み出すよりも、偉人を洗脳した方が
てっとり早いつて考え始めた。その結果、生まれたのがこの
外装代脳エクステリア」

「ロクでもねえ計画だな」

「でも何で今は誰もいないの? この装置はまだ使えるのに……」

「なんてことはないわ。私クロインドリーが才人工房を潰したからよ」

「操折が!」

「私もこの才人工房クロインドリーにいたのよお。でもこの計画を知ってる私が邪魔
だった研究者たちは、私を消そうとした。まあ常盤台に入る前に私の
能力で研究者を洗脳下に置いたから計画は頓挫。だから今までバレ
なかったって訳」

「常盤台に入る前って……」

ツナは操折のあまりに壮絶な過去に同情すると同時に、小学校の時
に組織を1つ壊滅させるということをやったことに驚きを隠
せないでいた。

「それとこの装置を幻生は狙ってる可能性力が高いわ。おそらく外装代脳エクステリアを乗っ取ることで、計画を成就できるんだと私は推測してるわあ」

「つまりこいつが幻生の手に渡ったら終わりってことか。だから幻生がこいつを乗っ取る前に幻生を捕まえなくちゃならねえって訳か」

「そういうこと」

「壊せねえのか?」

「観測史上最大の5倍は地震に耐えられる仕様になってるから壊すのは無理ね。仮に壊せたとしても心理掌握メンタルアウトの持ち主である私にダメージが跳ね返って廃人確定なのよねえ」

「そうか。そのデメリットがなきやツナにぶっ壊させるんだが、そうなつてくると壊せねえな」

「二応、自壊コードを入れればダメージは回避できるんだけどねえ。だけど相手が相手だからこれを使わざる得ないこともあるから壊せない。それに外装代脳エクステリアを壊したら幻生は雲隠れ力を決めて、また別の手段を考えてまた妹達シスターズを狙って来る。前にも言ったけど今回の幻生を逃せば二度捕まえられない。外装代脳エクステリアを壊しても私たちにはデメリットしかないって訳」

「めんどくさいったらねえな」

「本当よねえ」

壊したくても壊すことができないという状況にリボンと操折は嘆息する。

「とにかく。もしここで戦闘になつても暴れ過ぎて外装代脳エクステリアだけは壊せないようにしてねえ。それだけは頼むわねえ」

「わかった」

操折が外装代脳エクステリアのことを説明してるその頃。

(動けない……)

現在、美琴は操折の派閥に囲まれ監視されていた。操折の思惑通り、美琴は派閥員には手が出せず動けずにいた。美琴の実力ならやろうと思えば監視を振り切って逃げ出すこともできる。だがその場合、周囲の人間を巻き込む程の戦闘になる為、強行手段に出ることはできなかった。

(シスターズあの子がピンチかもしれないっていうのに!!)

美琴はすでに妹達シスターズに何か危機が迫っていることを掴んでいた。

昨日、ミサが美琴と間違われて競技に出場することになった際にミサは湾内から体操着を借りていた。しかし競技が終わった際にミサも体操着が返してもらえなかった湾内は今日の朝、美琴に体操着に返して欲しいと懇願。その時、美琴はミサが湾内に体操着を返していないことを把握。なんとか湾内を誤魔化した美琴はミサを捜し出して、直接会って湾内の体操着を返してもらおうことを決意。

(まさかあの子があんなことになってるなんて……)

美琴は監視カメラをハッキングしてミサを捜し出すことに成功。しかしそこに映っていたのは救急隊員に担架で運ばれるミサの姿だった。ミサがクローンだということがバレることを恐れた美琴はミサを運んだ救急隊員にミサが運ばれた病院について尋ねた。不幸中の幸いかミサは第7学区にあるカエル医者カエルの病院に運ばれたと説明を受けた。美琴はすぐにカエル医者カエルの病院に向かったが受付にてミサが運ばれていないことが判明した。

(あの子が救急車で運ばれたのにも関わらず、学校側に何も連絡が入っていないことに早く気づいていれば……)

病院を後にした美琴は救急隊員に再び会いに行き、ミサが運ばれミサが運び込まれた時の状況を問い詰めた。しかしどういう訳か救急隊員はミサが運び込まれた時の記憶が無くなっていた。このままでは拉致が明かないと判断した美琴は強引に救急車のカーナビをハッキングした救急車の移動ルートを特定。救急車は病院に向かつてい

ないことが判明した。しかしこの時に顔がバレないように被っていた帽子が落ちて美琴が昨日、病院に運ばれたミサだと勘違いされてしまい超能力者であることも救急隊員にバレてしまう。さらには美琴が自作自演でカーナビをハッキングし改竄したのではないかと疑われてしまう。

(あんなことをしたばっかりに身動き取れない状況に……)

美琴は救急隊員に必死に弁解するも救急隊員は信じてもらえなかった。ついには救急隊員の胸ぐらを掴むという暴挙に出してしまう。しかし運悪くその瞬間を警備員に目撃されてしまい美琴は学校に通報されてしまう。幸いにも救急隊員は学校に通報するだけで事を収めてくれた。

その後、美琴は学校の車でそのまま送られた。そして降りた後で操折の派閥に監視され動けない状況になってしまったのである。

(救急隊員は食蜂に操られてたのは間違いない……)

救急隊員が病院に運んだというのに実際に運ばれていなかったのは操折が能力を使って、救急隊員の記憶を改竄したということは美琴は理解していた。そしてミサを拐ったのが操折だということも。

(そうだ!! 沢田に!!)

美琴はミサのことを知るツナに助けを求めることを思いつき、さっそくツナに連絡することを決めた。現在、美琴は操折の派閥の監視下に置かれているものの、全ての行動を制限されている訳ではない。あくまで美琴を逃がさないようにという命令の元、動いているだけ。しかも何で逃がさないようにしないといけないのかまでは知らない為、遠回しであればミサのことを言っても問題ないのである。

(ちや、着信拒否!?)

しかし自分の関係者を巻き込まないよう着信拒否してるツナに連絡できるはずもなかった。美琴は着信拒否されていることに驚きを隠せないでいた。

美琴は次にリボンに連絡する。しかしツナと同じでリボンに電話が繋がることはなかった。

(何で!?! 何で着信拒否になってるのよ!?)

ミサに危機が迫っているかもしれないという危機的状況で、2人に連絡が取れないことに美琴は苛立ちを覚える。

(あいつら……まさかあの子のピンチを知ってる……!?)

電話が繋がらないことに苛立ちを覚えた美琴だったが、すぐに気づく。ツナとリボーンはすでにミサが危機的状況にあることを知って動いていて、自分を巻き込まない為に連絡手段を断ったということに。(どういうこと?! まさか食蜂^{あのみ}を止める為に!?)

美琴は操折がミサがを拐って何か良からぬことを企んでいると考えている。故にツナとリボーンが協力しているとは露程にも思っていないかった。故にツナとリボーンが操折と敵対していると思っっているにである。

(わからない……まずはこの状況をどうにかしないと……)

ここで考えても何の状況が変わらない。そう思った美琴はなんとかこの包囲網から抜け出すことを考える。

(あれは……!?)

どうしようと思いを張り巡らしていると、美琴の視界に佐天、初春、黒子の姿を捕える。

「ちよ、ちよつと知り合いと話してきていいかしら? 逃げたりしないから」

近くにいた派閥員にそう告げる許可をもらった美琴は、3人の元へと向かう。

(まだ情報が確定していない状況で巻き込みたくないけど……そうも言ってられない!!)

情報を集める為に身動きが取れない。なら動きの封じられていない仲間に情報を集めてもらうことを決意する。

「黒子!! ちよつと頼みたいことが!!」

黒子が自分に気づかずそのまま行ってしまわないよう、走りながら黒子の名を呼ぶ。

「何ですか? 私の名を気安く呼ばないでいただけますか?」

「白井さんのお知り合いですか?」

「いえ。うちの学校の御坂美琴という先輩ですわ」

「わー。有名人じゃん。確か超電磁砲^{レールガン}って呼ばれてるんですよ!!」
「え……」

しかし黒子、初春、佐天は初対面の人間と会ったかのような返答だった。3人の返答に美琴は衝撃のあまりその場で固まってしまっていた。

「く、黒子……みんなで私をからかってる訳じゃないわよね……」

「何を言っていますの?」

自分のことをからかっているにだと思っただが、黒子の不審者を見るような冷たい目は変わることなかった。

「初春さん……佐天さんも……」

「え……」

「何で私たちの名前……」

初春と佐天の名を呼ぶ美琴。しかし2人は美琴がなぜ自分たちの名前を知っているのかわからず困惑している様子であった。

「どこで私たちのことを知ったかは知りませんが、お悩みなら話ぐらい聞いて差し上げますわよ。風紀委員^{ジャッジメント}として」

「いや……いいわ……」

黒子の言葉に対して美琴は顔を俯かせ、低い声で返答した。そして3人は美琴の元から去って行く。

（やってくれたわね……食蜂!!）

操折が黒子たちの記憶を消去したということを知った美琴の怒りは頂点に達する。

（私の友達に手を出して……もうこれはイタズラじゃ済まされないわよ!!）

標的（ターゲツト） 293 接触

操折が佐天たちの記憶を消したと知った美琴。

（こんなことしてる場合じゃないのに……）

現在、美琴は競技に出場していた。操折の派閥の監視下にいる以上、動きを取りたくても身動きができない状況。故に今は黙って競技に出場することしかできないでいた。

（なんとかここを抜け出さないと……）

なんとか操折の派閥の監視下から抜け出すことを美琴は考えていた。しかし佐天たちに忘れられていたシヨックが大きかったのか、考えたくても考えられない精神状態であった。

「御坂さん！ 風船！ 私が膨らませていいでしょうか？」

「あ……うん」

そんな美琴の心情を知らず、美琴の横では競技のパートナーである婚後が両手に競技で使う風船を持ち、ワクワクしている様子で美琴に尋ねた。婚後の問いかけに対して美琴は曖昧な返事で答えた。

今から2人が参加する競技は風船サンド。膨らませた風船を手を問わずお互いの体で挟み、ゴールまで運ぶというシンプルな競技である。

（本来だったら黒子と一緒に……）

風船を膨らませている光子を見ながら美琴は思い出していた。この風船サンドは黒子と出場する予定だったことを。そしてこの競技に出場する為に放課後、練習したことを。

しかし残骸レムントの1件で黒子が負傷してしまった為に光子が代わりに出場することになってしまったのである。

「風船といえば御坂さんが双子だとは知りませんでしたわ」

「え……？」

すると風船を膨らまし終えて、風船の端を結びながら婚後は世間話を始める。さらっととんでもない発言をしたことに美琴は衝撃を受

けていた。

「昨日の紙風船の競技に出てらしたのは妹さんでしょうか？」

昨日のバルーンハンター。序盤で脱落したものの、同じ常盤台である婚後も参加していた。故に美琴が参加していることは知っていても何もおかしくはない。しかし出場していたのが美琴じゃないということを知っているのはごく一部の者しか知らない。それを光子を知っているのはおかしい。

すると競技開始を知らせるアナウンスが流れ、出場者たちはスターラインに立つ。

「話しかけようと思ったのですが競技が始まってしまいました……」
『位置についてよーい……』

昨日のことを話すと婚後は美琴に近づき、膨らませた風船を美琴と自分の体で挟み込む。そして競技開始のピストルが鳴る。

「さあ！ 参りましょう！」

「ちよつ！ 待つて婚後さん！ 私じゃないって気づいてたの!？」

競技がスタートして1位の座を手に入れんが為、意気揚々とする婚後。一方で光子が昨日、バルーンハンターに出場したのが自分ではないということに光子が気づいていたことに驚きを隠せないでいた。

「あら。私は人を見る眼は確かなつもりですわよ？」

婚後が気づいて他の常盤台の生徒が気づかなかつた理由。それは観察眼。物事をよく観察しうる見識、能力が他の人間よりも優れていた為、バルーンハンターに出場していないということに気づいたのである。

「婚後さん！ 頼みがあるんだけど！」

婚後が操折によって記憶を操作されていない上に、ミサの正体は知らないものの、ミサの存在が知っているということを知った美琴は光子に協力を要請することを決めた。

そして美琴は婚後にこれまで自分の身に起きたことを包み隠さず全て話した。

「邪智暴虐にも程がありますわよ食蜂操折!! 妹さんを誑かしあまつさえ白井さんを操作するなど、常盤台生の風上にも置けませんわ」

「婚后さん！ 声！ 声！」

美琴の話聞いて光子は怒りを覚える。婚后が大きな声を出した為、美琴は慌てて声を抑えるよう促した。

「話は承りました。私が調べておきますから御坂さんは食蜂派閥の目を引き付けて下さいな」

「ごめん。こんな私事に巻き込んで……でもくれぐれも深入りしないで。露骨に危害を加えてきたりしないと思うけど、あの女には何を考えているのかわからない怖さがある。手掛かりさえ掴めば後は自分でなんとかするから」

「いえ。御坂さんは私からの情報を信用すべきではありません。」

「え……何で？」

「私も食蜂操折に洗脳されているかもしれないからですわ」

すると2人はゴールにたどり着く。競技には集中できていなかったが、1位の座を取得していた。

「私はこの後、精神攻撃を受けるかもしれませんが既に何かされているのかもしれない。私から私からもたらされる情報は全て罠。御坂さんはその可能性を考慮すべきですわ」

「そんな……」

「ええ。そんなことを言ったら誰も信用できませんわよね。だから私は妹さんを連れてまいりますわ」

言葉だけでは操折に操られていないと証明できない。なのでミサ自身を連れて来ることで操折に操られていないことを証明することを婚后は決める。

「信用するなど言っておいてなんですわ、私を信じてお待ち下さい」

そう言うと光子は操折の足取りを調べる為に会場を後にする。そして美琴は再び操折の管理下に置かれる。

(婚后さん……無理しないで……)

ミサを捜しに駆け出した婚后。

(まずは手掛かりを見つけてませんと……)

美琴に頼まれたはいいがミサの手掛かりがない以上、美琴の頼みを完遂することができない。故に婚后はまず手掛かりを見つけることを決める。

「あら婚后さん」

「そんなに急いでどうされたのですか？」

「湾内さん、泡浮さん！」

婚后が街中を走っていたことを湾内に話しかけられ、婚后は立ち止まってしまう。

「丁度よかったですわ！ 実は御坂さんが妹さんが行方不明みたいなんです。お見かけしてませんでしたでしょうか？」

「いえ……見ていませんが……」

「私も……」

「そうですね……」

緊急事態ということもあり婚后は端的に用件を伝える。しかし湾内と泡浮はミサのことを知らない様子であった。2人が知らないと知って婚后は暗い顔をする。

「どうやら困っておいでのようなですね」

「私たちも協力いたしますわ」

「湾内さん、泡浮さん……ありがとうございます」

美琴と婚后が困っていると知って湾内と泡浮もミサの捜索に協力することを決める。2人が協力してくれると知って婚后はお礼の言葉を述べる。

「何かわかったら私にご連絡下さい」

「はい。行きましよう湾内さん」

「ええ」

婚后がそう言うのと泡浮と湾内はミサを捜しにその場から走り去って行く。

「私も捜しに行きませんと」

湾内と泡浮が走り去ったのを見送った後、婚後も捜索を再開しようとする。

その時だった

「失礼」

「あ、はい」

婚后に誰が話しかてくる。婚后が振り返るとそこには小太りの男性がいた。

「ちよつとお話があるんですが」

「あの……今はあまり時間が……」

「御坂美琴の妹についてなんですがね……」

「っ!?!」

事態が事態である為、婚后は男の話を聞く気はなかった。しかし御坂美琴の妹という単語を聞いて顔色を変える。

「ここではなんですし。場所を移しましょう」

一方、その頃。

「犬のロボット?」

佐天は初春と黒子と別れ単独行動をしていた。現在、佐天は歩道を歩いている犬のロボットを見ていた。

「何かの宣伝かな?」

学園都市には掃除用のロボットが徘徊しているが、犬のロボットは見たことがなかった。故に佐天はどこかの企業が大覇星祭という人が多く日に自社の製品を宣伝する為にロボットを徘徊させているのではないかと推測した。

「あれ？ 婚后さん？」

すると佐天の視界に婚后と先程の男が歩いている光景が視界に入る。2人は佐天の向かい側にある広場に向かっていた。

「と……誰だろう？」

婚后の隣を歩いている男が誰なのかわからず佐天は疑問符を浮かべる。

知らない男について行った婚后は。

「妹さんという呼び方は妹達シスターズの通称からきてるんですか？ それとも本物の妹として照会されたのかな？」

「？」

婚后は男の言っている意味が理解できず、疑問符を浮かべた。

「僕もね妹さんとやらを保護するよう依頼されてまして。よければ互いの情報を提供しあいませんか？」

「ありがたい申し出ですが、その為にはあなたが誰で何が目的で妹さんを捜しているのか説明していただく必要がありますわ」

婚后はこの男のことが信用できないのか、警戒心を抱いていた。

「まあそうなりますよね。でもそこは敢えてそれらに目をつぶって手掛かりとやらを話してくれないかなあ。でない……」

すると婚后の後方から犬のロボットが襲い掛かる。婚后は紙一重でロボットの襲撃を躲す。

「お薬を使って無理やり……ってことになるよ？」

場面は再び佐天に戻る。

「おい」

「ん？」

すると佐天の後方からに話しかけてくる声が聞こえる。佐天は後ろを見たが後ろには誰もいなかった。

「ごつちだぞ」

自分の下の方から声が出て佐天は視線を向けた。そこには自分のことを見上げているリボーンがいた。

「ちやおっす」

「あ、赤ちゃんが喋ってる!？」

リボーンが流暢に喋っていることに驚きの声を上げる佐天。リボーンの記憶を消去されている為、リボーンとは初対面という関係にある。

(どうやらちゃんと記憶は消去されてるようだな)

リボーンがわざわざ佐天の元にやって来たのは、操折の能力で記憶が消去されているかどうか確認する為であった。

「え、えつと……どうしたのかな僕？　もしかして迷子になっちゃったのかな？」

こんな子供が一人で歩いていることから佐天はリボーンが迷子になったのではないかと推測する。

「違えぞ。コーヒー飲んでえから金を貸してもらおうと思ってな」

「どんな理由!？」

まさか金を貸してくれと言われるとは思っていなかった為、佐天は驚きの声を上げた。

「貸してくれんのか。サンキュー」

「貸すなんて一言も言っていないけど!」

記憶を失つてもなお佐天はリボーンに振り回され、ツツコミを入れさせられる。

「皆まで言わなくてもわかってるぞ。利子つけて倍で返せって言いてえんだろ。安心しろ」

「そういう意味じゃないから!! それと意味わかって言ってる!」

勝手にお金を貸すという前提で話が進んでいること、利子という言葉葉を当たり前のように使ったことにツツコミを入れる。

(あれ? 何で私……)

奇天烈なことを言っているとはいえ、初対面の相手にこんなにも遠慮なしにツツコミを入れたことに佐天は違和感を覚える。

(というか何か懐かしいような……)

初対面のはずなのになぜか初めて会った気がしないどころか佐天は懐かしさを覚えていた。

「ねえ君……私とどこかで会ったことある……?」

記憶を糸を手繰ってもリボーンに会った記憶があった訳ではない。だが佐天はどこかでリボーンと会っていると感じていた。

「ねえぞ。初対面だ」

「だ、だよねー……」

リボーンはバツサリと佐天の言葉を否定。あまりにバツサリに否定されたので佐天はリボーンの言葉を信じてしまう。

(それもそうか……こんなインパクトのある子に出会ってたら忘れられる訳ないし……)

(記憶を消すとはいっても違和感までは消せないようだな……長居は無用か)

佐天は自分の中で納得し、リボーンは佐天が自分に興味を抱くのを恐れてこの場を去ることに決める。

その時だった

「佐天さんー!」

ミサのことを捜していた湾内と泡浮がやって来てしまう。

「ど、どうしたんですか? そんなに慌てて……」

湾内と泡浮が慌てた様子だったので佐天は何かあったということ
を察する。

「実は御坂さんの妹さんが行方不明だそうなんです！ 心当たりはあ
りませんか！」

「おい!! それはどういう意味だ!!」

「あ。リボンさん。実は婚後さんが御坂さんから行方不明になった
妹を捜して欲しいって頼まれたんです」

（美琴の奴、気づきやがったのか!?!）

泡浮の説明を聞いて、美琴がミサに何かあったことに気づいたこと
を知ってリボンは焦りの表情を見せる。

「婚後さんといえばさっきなんか知らない人と歩いてましたよ」

「何?!? どこに行った!?!」

「む、向こうの広場の方に向かって行ったけど……ってちよつと!!」

佐天から婚後の居場所を聞いてリボンは佐天の制止を聞かず、婚
後の向かったという方向へと走って向かって行く。

（操折の奴!! あいつらとの繋がりには知らなかったのか!!）

先程の会話からリボンは操折から湾内たちは記憶消去を受けて
いないことを理解すると同時に、操折に任せっきりにしてしまったこ
とを後悔する。

（婚後……無茶すんじゃねえぞ）

怪しい男について行った婚後は男の使役する犬型のロボットの襲撃を受けることとなった。

（最初から怪しき爆発だったので食蜂操折の手の者かと思いました。が、妹さんを捜しているのが本当なら別の勢力？）

状況から男の正体を分析する婚後。すると無数のロボットに包囲されてしまう。このロボットたちはT：GDタイプグレートデー。男が使役する戦闘用のロボットである。

（逆に食蜂操折の手掛かりを聞き出せるかもとついていきましたが……なにせよ御坂さんの敵であることに変わりないようですね）

婚後は私物である扇子を取り出すと、同時に戦闘体勢に入る。だが一斉に襲い掛かってくるT：GDタイプグレートデーに対して対象しきれず逃げ惑うことしかできなかった。

「逃がさないよ。君の能力は競技後に調査済みだ」

男は容赦なく婚後にT：GD命令し、婚後を逃げ場のないフェンスの前に追い詰める。

「物体に空気の噴射口を作って飛ばす能力。ただどこにその能力を生かせる物はない。そういう場所に誘導したからね」

男は邪悪な笑みを浮かべながら婚後の能力の詳細を語る。

この男の名は馬場芳朗ばばよしお。学園都市の暗部、メンバーに所属しているメンバーである。実は馬場は昨日のバルーンハンターにて常盤台の相手校の生徒の1人として出場し、参謀として暗躍。馬場の作戦によって常盤台に勝利できたといっても過言ではない。相手の能力を全て網羅し、その上で有効な戦略を打ち立てる。まさしく戦略のスペシャリストである。

「観念して喋っちゃえば？ 痛い目を見なくて済むよ？」

勝利を確信したのか馬場は邪悪な笑みを浮かべながら婚後にそう

言った。

その時だった

「っ!」

馬場の使役していたT：GDタイプグレートデーが一斉に上空へと飛ばされていった。馬場は何が起きたのかわからず驚いた表情を見せていた。

「あなたは私の能力について2つ誤解していますわ。1つは噴射点の指定に制限はないということ」

婚后が自信満々の笑みを浮かべながらそう言うと、地面から大量の空気が噴射していた。婚后は地面に噴射点を作ることタイプグレートデーでT：GDを一掃したのである。

「そしてもう1つは噴射点を束ねれば電波塔をも成層圏まで打ち上げる大出力! 私に飛ばせないものなどありませんのよ!」

すると近くにあったパラボラアンテナが横方向に倒れる。さらに婚后がパラボラアンテナの土台の部分に手を触れる。それによつてパラボラアンテナは馬場の方に向かって飛んで行く。

(ぐっ……まさかこれ程とは……)

婚后の力の詳細を間違っていたことに加えて想定以上の出力。馬場は焦りの表情を見せていた。

(使いたくはなかったが……)

焦りの表情を浮かべつつも、馬場はまだ奥の手がある様子であった。

「さあ観念なさい!」

「くっ!」

婚后は馬場に扇子を向けて勝利を宣言する。馬場は後退するが、婚后も逃がすまいとジリジリと追い詰めていく。

その時だった

「っ……!」

婚后の体がゆっくりと倒れ、地面へうつ伏せの状態で倒れる。そして頬が火照り、全身に倦怠感が襲う。婚后は何が起きたのかわからず困惑していた。

「備えあれば憂いなし。用意しておいてよかったよ」

馬場の周囲には小さな蚊のロボットが浮遊していた。このロボットはT:M.Q。タイプモスキート蚊のように飛行して対象にとりつき、口の針からナノデバイスを注入することで対象の無力化を行う。ナノデバイスを注入された対象は患部が腫れ上がり、高熱を発して行動不能に陥るのである。

馬場はもしもの為に広場の湖にある排水溝にT:M.Q.タイプモスキートを仕込んでいたのである。先程、後ずさりしていたのはもう何も無いと思わせ、婚后に能力を使わせないようにすると同時に自分に注意を向かせせて、背後からT:M.Q.タイプモスキートで婚后を無力化させたのである。

「奥の手を使わされたのは想定外だったが、これで任務完了か。ったく。手間かけさせやがって。しかし御坂美琴も酷い女だな。無関係の人間を言葉巧み利用し巻き込んで。やっぱり超能力者レベル5ってのは人格破綻者の集まりっていうのは本当みたいだな」

動けない婚后に近づくと、馬場はゴミを見るような目でそう吐き捨てた。

「訂正……なさい……彼女は……御坂さんは他人を利用するような人間ではありません……これは私が望んだこと……あなたのよう人間には分からないでしょうけど……」

意識が朦朧とする中、美琴へ侮辱されてたことへの怒りを覚えた婚后は馬場の右足を掴みながら言い放った。

「ガハッ!？」

婚后の言葉を聞いた後、馬場は満身創痍の婚后を容赦なく蹴り飛ばした。

「うっげえなあ!! 上から物言ってるじゃねえぞ!! 結局、何もできなかったじゃねえか!! 役立たずなんだよてめえは!!」

馬場は婚后の物言いが気に入らなかつたのか動けない婚后に何度も蹴りを入れていく。婚后は抵抗することができずその場でうずくまることしかできないでいた。

「おっと……僕としたことが」

冷静さを失っていた馬場であったが、婚后がミサの手掛かりになるかもしれない人物だということを思い出して攻撃の手を緩めた。

「あー。やだやだ。下等な奴程、人をイラつかせるのだけは上手いんだから。タイプグレートデーン T:GD。こいつを運べ」

馬場は婚后を尋問する為、ロボットに婚后を運ぶよう命令を与える。馬場自身は仕事をロボットに任せて、その場を去ろうとする。

「おい!! しっかりしろ!!」

間一髪。リボーンが婚后の元へ辿り着いた。リボーンは婚后に声をかけるが、婚后からの返答はなかった。

(意識を失ってる上に発熱してやがる……何かされたな……こうなると応急措置だけじゃ無理だな)

(赤ん坊?)

リボーンは婚后の体の状態を冷静に分析する。馬場は突如として現れたリボーンの存在に違和感を覚える。

「婚后さん!!」

するとリボーンの様子が気になって追い掛けてきた佐天、湾内、泡浮がやって来てしまう。

「婚后さん!!」

「しっかりして下さい!!」

ズタボロにされた婚后の姿を見て、泡浮と湾内は目に涙を浮かべた。

「あんたがやったの……?」

佐天はボロボロになった婚后を見て怒りに頂点に達し、馬場を睨みつける。

「だったらどうだっというんだ? ゴミクズがどうなろうと勝手だろ」

馬場は佐天の言葉を聞いてもなお、自分の過ちを悔いることなく無慈悲に言い放った。

「その女、御坂美琴の為に動いてたんだっけ。他人に精神を委ねている時点で2流。その上、与えられた役割を果たせない時点で3流以下だよね。でもさっきは傑作だったよ。もう少し早く来れば面白い物が見れたのに。ズタボロにされて這いずる様はまさにゴミクズのようにだったよ」

「あんたね!!」

邪悪な笑みを浮かべ、嬉しそうに語る馬場に対して堪忍袋の緒が切れた佐天は、310と書かれた手袋を取り出した。

「好きにほざきやがれ。俺はもうキレてんだ」

「「「っ!?!」「」」

リボーンがそう言い放った瞬間、佐天、湾内、泡浮、馬場の体に悪寒が走った。怒りで我を忘れかけていた佐天も冷静さを取り戻した。

「ここは俺が食い止める。お前らは婚後を安全な場所まで運んだら救急車を呼べ」

「何言ってるの!?! 君一人置いて行ける訳ないでしょ!!」

リボーンは前方に移動し愛銃を構えると、佐天たちに指示する。リボーンの強さを忘れている佐天は、リボーン置いていけず自分が殿になろうと戦闘体勢に入る。

ズガアン!!

するとリボーンは振り返ることなく、佐天たちのいる後方に向かって弾丸を放った。だが弾丸は3人に被弾しておらず、後方に設置されていたT：GDの頭部に被弾していた。頭部に被弾しT：GDは動きを止める。

「邪魔だ。とつとと失せろ」

(全く見ることもなくT：GDを核を打ち抜いた!?! 何なんだこいつ!?!)

リボーンの技を見て余裕の笑みを浮かべていた馬場も顔色を変える。

冷徹なりボーンという言葉聞いて、3人は顔を見合わせて黙ったまま首を縦に振ると婚後を運んで広場から去って行った。

「邪魔者は消えた。後はお前を消すだけだ」

「消す? 消えるのは君の方だよ」

すると大量のロボットが馬場を護るように立ち塞がる。

「君の技には驚かされたけど、君の動きはT：GDに搭載されているAIが分析した。君の武器は通じないよ」

先程のリボーンの技に面を喰らったが、馬場は負けるとは微塵も

思っていないかった。

「君がどこの誰かは知らないけど、まあ呪うんだね。かつこつけて君一人で僕の相手をしようとした自分を。ハハハハハハ!!」

勝利を確信した馬場はその場でバカ笑いする。馬場の笑い声が広場に響き渡る。

その時だった

ズガン!!

すると再び銃声が広場に響き渡る。響き渡った銃声が収まるとリボーンは銃口から吹き出た煙に向かってそつと息を吹いた。

「は……!?!」

リボーンの放った弾丸は馬場の脇腹を貫通していた。馬場は突然のことに自分の身に何が起きているのか理解できないでいた。

「ああああああああ!!」

時間差で自分の身に何が起きたのか理解した馬場は絶叫を上げる。

「勘違いすんなよ。俺が1人になったのは、あいつらにこの光景を見せるのは刺激が強すぎると思ったからだぞ。だから1人になった。お前を確実に殺る為にな」

リボーンはドスの効いた低い声で馬場にそう言い放った。

「この俺を敵に回したんだ。楽に死ねると思うなよ」

馬場を完全に敵だと認識したりボーン。

（何でだ!? 何で!?!）

馬場はわからなかった。なぜ自分が撃たれているのかということ
が。

「簡単な話だ。そのガラクタ共の性能じゃ俺の弾丸の動きに反応でき
なかった。そんだけの話だ」

馬場の表情からリボーンは馬場が何を考えているのかを当てる。

「もしかしてお前。さっきのが俺の力の全てだと思ってたんじゃないやねえ
だろうな?」

（こ、こいつはヤバイ……!! このままでは殺される!!）

リボーンに対して命の危機を感じた馬場は即座に逃げることに決め
る。

タイプグレートデーン
「T：G D!!」

馬場は攻撃される前にロボットたちに命令。ロボットたちは一斉
にリボーンに襲い掛かる。

（あの女にT：MQは取り付けた!! 任務はこれで完了だ!!）

婚後を無力化させた際に馬場はT：MQを体に取り付けていた。

タイプモスキート
T：MQは敵を無力化するだけでなく発信器としても盗聴器として
も使える。故に婚後に直接、尋問しなくても情報を入手できる上に拐
うことも可能。

婚後がいなくなり殺されるかもしれない以上、この場にいるリスク
は馬場にはない。馬場はロボットたちにリボーンを相手させている
内に戦線を離脱することを決める。

（早く!! 早く!! タイプグレートデーン
T：G Dが時間稼ぎをしている内に!!）

馬場は弾丸が貫通した脇腹を右手で抑えながらおぼつかない足取
りで戦線から離脱する。

が、

「がああああああ!!」

馬場の右足をリボーンの弾丸が貫く。右足を撃たれた馬場は再び絶叫を上げながら地面に倒れる。

「逃がすと思ったか」

(ば、バカな……!?)

被弾した足を押さえながら馬場が振り返る。そこにはすでに倒れたまま動かなくなったロボットたちがいた。馬場はこの短時間にロボットたちを全滅させられたことに驚きを隠せないでいた。

(こ、こうなったら!! T:M Qで!!)

馬場はT:M Qを使ってリボーンを無力化することを心に決める。馬場はポケットからT:M Qの入ったカプセルを取り出し、中身を解放する。

(本当は使いたくなかったが……生き残るにはこれしかない!!)

T:M Qは限りがあり、今使ったのが最後の1つ。ロボットも逃げる術も失った馬場にとってこれが最後の希望なのである。

だが

ズガアン!!

「え……!?!」

だが馬場の希望を乗せたT:M Qもリボーンは無慈悲に打ち抜く。バラバラになったT:M Qは馬場の目の前に落下する。

(な、なぜ気づいて……!?! しかも打ち抜いただと!?)

ナノサイズのT:M Qに気づいただけでなく、それを1発で打ち抜いたことが馬場には信じられなかった。そしてバラバラになったT:M Qを見て馬場は絶望する。

「俺がそいつの存在に気づいてないとも思ったか?」

(あ、あれは……!?!)

リボーンT:M Qを人差し指と親指でつまんで馬場に見せる。馬場はリボーンが持っているT:M Qが婚后に仕掛けているものだということを理解する。

「ま。知らなくても俺が喰らうことはねえし、こんなもん喰らったと

「ところでなんともねえけどな」

そう言うとりボーンはT：M Qタイプモスキートを握り潰してバラバラにする。

（一体、何なんだこいつは!? こんな奴がいるなんて聞いてないぞ!?）
対抗する術を全て失った馬場には、絶望するしかなかった。

「後はお前だけだな」

「く、来るな!!」

リボーンは馬場の方に向かってゆっくりと歩を進める。馬場は逃げようとするも足を負傷している為、逃げることもすらできなかった。すると馬場のズボンのポケットから携帯が落ちる。馬場は落ちた携帯を見て即座に手を伸ばした。

が、

ズガアン!!

リボーンは携帯に向かって弾丸を放ち携帯に着弾させる。着弾した携帯は馬場の手の届かない場所へ弾き飛んだ。遠くへ飛んだ携帯を見て馬場は絶望する。

「何だその顔は? お前が言ったんだろ。他人に精神を依存するなんてのは2流だって。まさかとは思うが仲間連絡しようなんて思ってた訳じゃねえよな」

「っ……!?!」

リボーンは先程、馬場が言っていた言葉をそのまま返す。リボーン
の言葉に馬場は何も言い返すことはできなかった。

「ま。俺から言わせれば仲間を頼ることのできない奴なんざ5流以下
だけだな。そういうえば与えられた役割すら果たせない奴は3流以下
だって、お前のようなどこかの無能が言ってたっけな」

リボーンは馬場の発言の揚げ足を取ると同時に、煽りまくる。

そして

「調子に乗ってんじやねえぞクソガキ!! 情報さえあればお前みたいな
ガキなんざ一瞬で殺れるんだよ!!」

絶望していた馬場であったが、リボーンにプライドをズタズタにさ
れて馬場は発狂する。

「うるせえぞ」

「ガハッ!!」

そう言うとりボーンは一瞬で馬場の元に移動し馬場の顎を蹴り上げる。リボーンの蹴りを受けた馬場は宙を舞い、地面に仰向けの状態で倒れる。

「ぎゃあああああ!!」

リボーンは馬場の腹部に立つと、貫通した脇腹を足で容赦なく踏みつけた。そして馬場の絶叫が広場に響き渡る。

「情報さえあれば？ 笑わせんじゃねえ。命タマの取り合いで情報がないなんざザラにある。情報がねえと何もできねえような奴なんざ足手まといと同じだ。今のお前みたいにな」

「ぎゃあああああ!!」

リボーンは傷口を踏みつけている足をグリグリと動かす。そして馬場の体に激痛が走り絶叫が再び木霊する。

「た、助けて……!!」

肉体も精神もボロボロにされた馬場はリボーンに対して命乞いをする。

「ぼ、僕は依頼されてやっただけなんです……だから……命だけは……」

「話になんねえな」

リボーンは傷口から足をどけると馬場の顔の前に移動する。そしてリボーンは銃口を馬場の額に向ける。

「死ね」

「うわあああああ!!」

リボーンは馬場に対して死の宣告をすると馬場は絶叫を上げる。そしてリボーンは銃の引き金を引いたのだった。

が、

「情けねえ野郎だ」

だがリボーンの銃から銃声が響くことはなく、馬場も死んではおらず口から泡を吹いて気絶していたのだった。

「お前には聞きたいことがあるからな。まだ殺さないで置いてやるぞ」

リボーンの銃には弾丸が装填されていなかった。リボーン馬場を殺するもりはなく、ハツタリで馬場を気絶させるのが目的だったのである。

「ま。ここで殺されていた方がマシだと思っただろうかな」

標的（ターゲツト） 296 非情

馬場に絶望を与えたりボーン。

「んん……？」

リボーンに殺されたと思っていた馬場であったが、どういう訳か生きていた。どうやら馬場は意識を失っていたのである。

（し、縛られてる!?!）

現在、馬場は椅子に座らされた状態で上半身をカーボンファイバー製のロープと共に柱を縛られていた。馬場は自分が縛られていることに気づいて動揺する。

（ぼ、僕は一体!?!）

馬場は自分の身に何が起きたかわからず困惑してしまっていた。

「よう。起きたか」

「あああ……!!」

ここでリボーンが馬場に挨拶する。馬場はリボーンの姿を見た瞬間、全てを思い出す。

「うわあああああああ!!」

全てを思い出した馬場はあまりのトラウマに絶叫してしまう。

「うるせえぞ」

ズガアン!!

絶叫する馬場が耳障りだったのかりボーンは馬場に向かって弾丸を放った。弾丸は馬場の頬を掠る。

「っ!?!」

トラウマを思い出して絶叫していた馬場であったが、今起こった出来事に強制的に黙らざる得なかった。

「次喚いたらお前の額に弾丸をぶち込むぞ」

リボーンが銃口を向けながらそう言うと、馬場は黙ったまま首を高

速で縦に振る。リボーンは銃を懐に仕舞った。

「お前を殺さず治療して、わざわざここまで来たのはお前に聞きたいことがあるからだ」

（そ、そういうえば傷が……）

リボーンの言葉を聞いて馬場は気づく。自分の受けた傷が完全に塞がっていることに。リボーンは晴の炎の活性の力で馬場の傷を治療したのである。

（この場所は……!?）

馬場は今いるこの場所を知っていた。なぜならここは馬場が使う兵器を格納している倉庫だったからである。

「お前のスマホをハッキングしてこの場所を割り出した。ここなら邪魔が入らねえだろうからな」

馬場の携帯を見せながら場所の思っていることの疑問に答える。

リボーンは馬場が隠れ家を持っていると踏んで、携帯を破壊せず弾き飛ばすに留めたのである。

「俺の質問に正直に答えろ。嘘をつければどうなるかわかってんだろうな?」

「わ、わかった!」

リボーンは銃口を向けてドスの効いた馬場に脅迫する。馬場も死にたくないなので洗いざらい全て話すという意味を見せた。

「お前の目的は妹達シスターズを捕らえることか?」

「ち、違う!! 僕は妹達シスターズの搜索を依頼されただけだ!! あの女が妹達シスターズに繋がってるかもしれないことをT：G Dの盗聴機能と監視カメラの機能を使って知って接触したんだ!!」

（成る程な。婚后がミサを捜していることを掴めたのはそういう訳か）

この人が大覇星祭の中で自分の知りたい情報を持っている人間を普通に見つけるなど不可能。そのカラクリがわかってリボーンは自分で納得する。

「依頼されてやったって言ったな。誰の依頼で妹達シスターズを搜索するよう
に言われた?」

「し、知らない!! ただ僕は博士……僕たちの組織のメンバーのリー

ダーから妹達シスターズを搜索するよう命じられてやっただけだ!!」

「本当か？ 嘘言ってるじゃねえだろうな？」

「ち、違う!! 嘘じゃない!!」

（嘘はついてねえようだな……まあおそらく幻生だろうが）

馬場の態度からリボーンは馬場が嘘をついていないことを理解する。

「お前の他に今回の件に関係してる人物のことを教えろ」

「警策看取こうさくみとりとシヨチトルだ!!」

「そいつらの詳細を教えろ」

「警策は依頼人と僕たちの仲介者だ!! 能力は液化人影リキッドシャドウ!! 液体金属

を操る能力者だ!! 液体金属で作った人形を遠隔操作できる!! 彼

女ならおそらく依頼人の存在を知っているはずだ!!」

「シヨチトルって奴は？」

「あいつは今回から新入り!! 能力はわからない!! ただわかってる

のは、あいつの能力は学園都市の技術から外れているらしいってこと

だけだ!!」

「今回の件に関係してることで他に依頼されたことは？」

「御坂美琴の無力化だ!!」

「どういうことだ？」

「理由は知らない!! 僕は昨日、御坂美琴にウイルスを撃ち込むよう

に命令されてを御坂美琴を無力化した!!」

「ふざけんじゃねえ。美琴ならピンピンしてるぞ。嘘をついてんじゃ

ねえぞてめえ」

「ほ、本当だ!! 画面越したが確かに確認した!!」

（嘘は言ってるねえ……どうということだ？）

自分の知ってる情報と馬場の言っている情報に食い違いがあることにリボーンは違和感を覚える。

（昨日？）

昨日という言葉思い出してリボーンは何かが引っ掛かってしま
う。

「昨日って言ったな。一体、昨日のいつのタイミングでウイルスを撃

「ち込んだ？」

「バルーンハンターっていう競技が終わった後だ!! 僕は常盤台の対戦していた学校に選手として潜入していたんだ!! 御坂美琴を無力化する為に!!」

(そういうことか……)

引つ掛かりを覚えたリボーンであったが、すぐにその引つ掛かった理由を理解する。

(美琴とミサが入れ替わった時か)

リボーンは全て理解した。ミサがウイルスによって無力化されたのは馬場の勘違いによるものだ。美琴とミサが入れ替わったのは美琴にとつてもハプニング。いくら頭のキレる者でも予想できない展開である。

(本来だったら美琴が狙われていたってことか……だったら幻生の目的は美琴か? 自分の目的の為に美琴が必要だったのか? だが現にこいつはミサの奴を捜すように依頼されていた……つまり幻生の目的は美琴とミサの両方だってことか?)

本来の標的ターゲットが美琴だと知ってリボーンは幻生の目的がミサだけではなく美琴も含まれるのではないかと推測する。しかし決定打に欠ける為、結論はでなかった。

「お、おい!! もういいだろ!! 早く僕を自由してくれ!!」

「そうだな。もうお前に用はねえ。自由にしてやるよ」

これ以上、馬場に問い詰めても何も情報は得られないと判断したりボーンは馬場を解放することに決める。

「死という形だな」

だがリボーンは馬場を生きて帰すつもりなど毛頭なく、銃口を馬場に向ける。

「な、何の真似だ!? 全て話したはずだろ!!」

「何を勘違いしてんだ。情報を吐けば助けてやるだなんて言った覚えはねえぞ。脳味噌まで腐ってんのか?」

「ま、待て!! 僕を殺せば他の奴らも黙ってないぞ!!」

「だからどうした? その時はそいつら全員、皆殺しにするだけだ。」

それに今回、俺は妹達シスターズに害を及ぼす奴らの抹殺を依頼されてるんだな」

リボーンは今回の作戦にあたって9代目に許可を得ていた。ミサたちに害を及ぼす者への抹殺許可を。こちらの世界にいる者もいるとはいえ今はミサたちはボンゴレの一員。ボンゴレの人間に手を出した馬場は抹殺対象として見なされたのである。

「お前は俺たちの仲間である妹達シスターズに手を出した。だから殺す。それだけだ」

「ま、待て!! ぼ、僕が悪かった!! だから許してくれ!!」

「許す? どの口が言ってるんだ。てめえ。お前、自分が何をやったことを忘れたのか?」

ミサをウィルスで苦しめただけでなく婚後をズタズタにしそれを嘲笑った。冷静を装っているリボーンではあるが、内心では怒りの感情が渦巻いていた。

「そ、そうだ!! 僕を君の仲間にしてくれ!! きつと君の役に立つはずだ!!」

「言ったはずだぞ。情報がなきや何もできねえような奴は足手まといだったな。何よりお前は簡単に仲間のこと吐いた。自分が助かりただけにな。そんな奴がいたら仲間を危機に晒すだけ。お前のような奴はボンゴレ俺たちにはいらねえ」

馬場は必死に命乞いするがリボーンの意味は変わることはなかった。

「さて。話は終わりだ。もうお前の薄汚い声は聞くのはうんざりだ。今度は外さねえ。覚悟しろ」

「い、嫌だ!! た、助けてくれ!! 僕は死にたくない!! 死にたくないんだ!!」

ズガアン!!

馬場の命乞いを見捨ててリボーンは容赦なく弾丸を放った。

「がああああああ!!」

馬場の左足にリボーンの弾丸が被弾する。馬場の絶叫が倉庫内に響き渡る。

ズガン!!

馬場が絶叫を上げててもなおリボーンは続けて弾丸を放った。

「っ……!?!」

だが馬場の体に弾丸は貫通していなかった。それどころか馬場の貫通した傷は完全に治っていた。

(ど、どういうことだ?! 傷が治って……!?!)

馬場は傷が完全に治っている理屈がわからず困惑していた。

「今放った弾丸じゃねえ。俺の炎を銃弾に込めて放ったもんだ。そしてこの炎には傷を治癒する活性の力が備わってる」

困惑している馬場に対してリボーンは自分の炎の詳細を語る。

「今から俺は弾丸と炎を交互にお前に放つ。弾丸で体を貫いて、治して、貫いて、治してを繰り返すって具合にな」

「あああ……!!」

リボーンこれからやろうとすることを説明する。馬場はリボーンのやろうとすることを理解し、顔は真っ青にして恐怖する。

「言ったはずだぞ。楽には死ぬると思うなよつて。1発で楽にするなんてことはしねえ。死にたいと思っても死ぬない苦しみ与えてからお前を殺す。せいぜい自分の仕出かしたことを後悔するんだな」

「た、頼む……!! た、助け……ああああああああああああああああああ!!」

リボーン of 言葉を聞いて、かつてない程の馬場の絶叫が倉庫内に響き渡った。

この後、馬場はこの世とは思えない地獄を味わったのだった。

標的（ターゲット） 297 再命令

馬場を恐怖のドン底に落としたリボーン。

「俺だ」

馬場を始末したりリボーンは携帯にて倉庫を後にして操折に連絡していた。

「妹達を狙う奴と接触した」

『やっぱり現れたわね……それでそいつは？』

「ムカついたからボコって情報を吐かせた。今は警備員アンチスキルに捕まってるはずだ」

『そ、そう……』

さらっと敵を返り討ちにしたってということを知って操折は引いてしまっていた。

すでに馬場はリボーンによって抹殺されている。だが操折のことを考えて、警備員アンチスキルに捕まっていることにした。

「幻生に繋がる手掛かりはなかったが、今回の件に関係してる人物が他にいることがわかったぞ」

そう言うとりボーンは馬場から聞いた、今回の件に関連して人物。液体金属の操作でできる警策看取。学園都市の技術から外れた能力を持つていると噂されるショクトルのことを話した。

『幻生の目的はわからなかったけど、敵の詳細が知れたのは朗報ね』

「そう悠長なことをも言ってられねえぞ」

『どういう意味かしら？』

「美琴が妹達シスターズに何かあったことに気づきやがった」

『気づいたですって？ どうやって？』

「さあな。美琴の奴、妹達シスターズの搜索を他の奴に頼んだみたいだな」

『頼んだですって？ 記憶は消したはずよ。御坂さんに頼れる人なんて……』

「婚后光子だ」

『こんごう?』

「やっぱり知らなかったか」

操折の反応からリボーンは操折が婚后のことを知らないということを理解する。

「婚后は美琴の仲間だ。おそらく美琴は佐天たちが自分のことを覚えていなかったんだろ。だが婚后が記憶を失ってないって知って頼ったんだろ」

『私としたことが……リサーチ不足だったわ……』

「お前だけのせいじゃない。お前に任せっきりにした俺たちの責任でもある」

婚后のことを知らなかったことに後悔する操折に対して、リボーンはフォローする。

「それに悪いニュースはこれだけじゃねえ。婚后が俺がボコった奴にやられた」

『っ……!?!』

敵の情報を得た代償に無関係の人間を巻き込んでしまったと知って操折の表情が険しくなる。

「襲撃してきた奴はロボットを駆使してる奴でな。ロボットに搭載されている盗聴機能とカメラで婚后が妹達シスターズを捜していることを知って接触してたらしい」

『それで彼女の容態は?』

「今は救急車に運ばれてるはずだ。まあ敵も婚后から情報を引き出すと生け捕りにしようとしたはずだから死ぬことはねえはずだ」

『そう……』

(かなり効いてやがんな……)

リボーンは電話越しながらも操折がショックを受けていることを理解する。

「それと婚后を襲ってきた奴はウイルスを使って婚后を捕らえようとしてたぞ」

『ウイルスって……もしかして……』

「妹達シスターズに打ち込まれたものと同じもんだろ。婚后を襲った奴は昨日のバルーンハンターって競技に常盤台の対戦相手の学校に選手として潜入してたらしい。美琴にウイルスを打ち込む為にな」

『御坂さんに?』

「ああ。だが昨日、美琴と妹達シスターズはハプニングで入れ替わった。その影響もあつてか本来、襲われるはずだったのは美琴に代わつて妹達シスターズが敵の勘違いでウイルスにやられた。そしてそこをお前らが保護した。違うか?」

『ええ。そうよ。でもあれが妹達シスターズじゃなくて御坂さんを狙ったものだったなんて……』

操折は最初から妹達シスターズを保護する為に動いていた。なので昨日、バルーンハンターにて美琴とミサが入れ替わっていたことを知っていた。しかし昨日の出来事はミサを狙ったのではなく、美琴を狙っていたということを知って驚きを隠せないでいた。

「こうなってくれば妹達シスターズだけじゃねえ。美琴も狙われる可能性も出てきたぞ。美琴が邪魔だったっていう可能性もあるが。どのみち美琴が狙われたことには変わりはない。ここまで来たら美琴に包み隠さず全てを話した方がいいぞ」

『け、けど……』

「お前が美琴が嫌いなのは知ってる。だがもう無関係の人間を巻き込んじちまった上に重症を負わせちまったんだぞ。俺たちのせいだな」
『っ!?!』

リボーンの言葉を聞いて操折は言葉を詰まらせ、精神を揺さぶられる。操折は自身の能力で人を操ることに躊躇いはない。しかし自分の都合で巻き込んだ人間に被害が出ればショックを受けるし後悔もする。そして自ら起こした過ちに対して責任も取る。他人を操れることに躊躇いがなくとも、心がない訳ではない。超能力者レベレスと呼ばれるようと中身は14歳の少女なのである。

「これ以上、無関係な人物に被害を出すのはお前も本意なはずだ。もう美琴は妹達シスターズに何かあったことに気づいてる。それに美琴が婚後のことを知つちまったら、あいつはどんな手を使ってでも監視化を振

り切って感情のままに動き出す。そうなつちまえば幻生の思う壺だ。こうなちまった以上、不本意だろうと美琴と協力すると同時に美琴を俺たちの監視に置いた方が合理的だ。違うか？」

『そうね……』

私情を完全に捨て切れてはいなかったが、リボーンの言うことが間違っていないことを理解しリボーンの意見に同意する。

「それと婚後が襲われたことはまだツナには言うな。婚後のことを知ればあいつの集中を妨げることになる。美琴が気づいたことだけ伝えとけ」

『わかったわ……』

一方、その頃。

「アリヤリヤ。馬場ちゃん殺られちゃったみたいーい」

とある廃墟にてナース服のような格好に身を纏った、紫色の髪の毛のツインテールの少女が砕けた口調で呟く。

この少女の名は警策看取。馬場の言っていた今回の事件の依頼主とメンバーとの仲介者である。

「本当か？」

警策の他に赤と黒の入ったジャージに身を纏ったツインテールの少女がいた。

この少女の名はシヨチトル。馬場と同じく学園都市の暗部組織、メンバーに所属しているメンバーである。

「間違いナッシング。連絡が取れないから能力を使って馬場ちゃんの倉庫を調べに行ったらビックリー。殺られちゃってるよー」

「そうか」

「アレアレエ？　もしかして馬場ちゃんが死んじゃってショック受けちゃってるー？」

「あんな奴どうなるうが私の知る限りではない」

「冷たいねー。私なんて馬場ちゃんが死んでシヨツクなのにー」

(よく言う)

警策が馬場が死んだことに対して何も思っていないことなど一目瞭然であった。そんな警策を見てシヨチトルは心の中で悪態をつく。

するとシヨチトルの携帯に着信が入る。

「はい」

シヨチトルは電話に出ると、黙ったまま着信相手からの話を聞いていた。

「了解しました」

話の内容を聞き終えると一言だけ返事をする、シヨチトルは電話を切る。

「博士から連絡だ。馬場の奴、御坂美琴を押さえるのに失敗していたらしい」

「ナニナニー？ どういうことー？」

「今日の大覇星祭の競技に出場していたのが確認されたらしい。よつて御坂美琴を捕えろと博士からの命令だ」

「ナニソレー。馬場ちゃん使えなさ過ぎー。超ウケる」

馬場が任務を失敗をしていたと知っても警策は責める訳でも怒ることもなく笑っていた。

「しょうがない。ここは私が頑張りますかー」

「手強いぞ」

「オヤオヤ々？ もしかして知り合い？」

「以前、奴の戦闘を間近で見た」

「マーマー。今日中に全部、片付くならなんとかなるっしょ」

時は少し遡り。リボーンが馬場と戦っている頃。

（婚后さん……）

美琴は今だに操折の派閥の監視化に置かれていた。そして帰って来ない婚后の無事を心の中で祈っていた。

すると美琴たちの隣を1台の救急車が通り過ぎる。

「熱中症患者が増えているそうですわね」

「私たちも気をつけませんとね」

美琴を監視していた女生徒たちは誰かが熱中症で倒れて、救急車に運ばれたのだと推測する。

すると救急車は病院のある突き当たりの角を曲がる。3人は救急車が曲がった角の前を通り過ぎて行く。

その時だった

「佐天さん!? 湾内さん!? 泡浮さん!」

美琴の視界に救急車から降りて佐天と湾内と泡浮が降りて来た為、何かあったのではと思いき美琴は慌てて駆け寄る。

「どうしたの!? 救急車から降りるなん……」

何かあったのだと3人に尋ねようとした美琴。しかし聞く前に何があつたかを即座に理解した。なぜならボロボロにされ、担架の上で意識を失っている婚后を見てしまったのだから。

「こ、婚后さん……!」

美琴は意識不明の婚后を見てショックを受け、その場で固まってしまふ。

美琴がショックを受けている間にも救急隊員は婚后を病院内に運んで行く。詳しい事情を聞きたかった美琴であったが、3人と婚后と共に病院内へと入って行く。婚后はすぐに治療室に運ばれ、4人は待合室にて待機する形になる。

(私のせいだ……)

美琴は婚後がこんな目にあつたのは自分が婚後に助けを求めたからだということを理解する。

(甘かった……あんな学舎で学ぶ学友。他人を傷つけるような真似はしないと。気に入らない私にちよつかいかけてきているだけだと)

美琴は自分の認識を後悔すると同時に、操折を容赦なく叩き潰す覚悟を決める。

「あ、あの……婚後さん……犬のロボットを操る嫌な奴に襲われたんです……」

話しかけづらい雰囲気の中、佐天が勇気を振り絞って美琴に事の経緯を説明する。

「で、ですがリボーンさんが助けて下さって……」

「それでリボーンさんの指示で婚後さんを病院に連れて行くように言われて……」

「っ!?!」

佐天が勇気を振り絞つたので、湾内と泡浮も恐る恐る事情を説明する。リボーンという単語という言葉が出た途端、美琴は顔色を変え

る。(やっぱりあいつが関わっていた!! ということはやっぱり……)

今までの状況からツナとリボーンが操折と敵対関係にあると美琴は判断する。

が、

「え……湾内さん、泡浮さん、あの子のこと知ってるんですか?」

「え……!?!」

佐天の発言を聞いた途端、美琴は衝撃を隠せないでいた。

「そういえば佐天さんにご存知ないのでしたね」

「あの方は私たちのご友人なのですよ」

「そ、そうだったんですか……まさか知り合いだつたんて……」

泡浮と湾内がりボーンと知り合いだとは夢にも思ってもいなかつた為、佐天は驚きを隠せないでいた。

2人は学生誘拐事件の時に初めてリボーンに出会っている。学生

誘拐事件が起きた時には佐天は学園都市にいなかった。故に佐天とリボーンは初対面だと思っていたのである。

(な、何で佐天さんがリボーンのことを忘れてるの!?)

佐天がリボーンのことを忘れていることに美琴は衝撃を隠せないでいた。リボーンと佐天は仲間であると同時に家庭教師と生徒の関係にある。リボーンによって佐天は覚醒したと言ってもいい存在。忘れるなど考えられなかった。

(ま、まさか!?! 食蜂に!?!)

佐天がリボーンのことを忘れてるのは操折によって記憶を消されているのだと気づく。

(でも何で……!?!)

操折が佐天たちから自分の記憶を消去するのは理解できる。単に操折が美琴のことが邪魔だからである。しかし操折が、佐天からリボーンの記憶を消去する理由がない。故に操折が佐天の記憶からリボーンのことを消去した理由がわからず困惑してしまっていた。

(とにかく今は動かないと!!)

今この場で考えてもわからないと判断した美琴は行動することを決める。

「ねえ。リボーンをどこで見たの?」

「え、えつと……」

美琴はリボーンの居場所を尋ねる。美琴の圧迫感に気圧されながらも湾内が美琴の問いに答えた。

「ありがとう」

そう言うのと美琴は椅子から立ち上がって、リボーンがいたという場所へと向かって行くことを心に決め、ゆつくりと病院の出口に向かってゆつくりと歩を進める。

「み、御坂様……」

「何か事情ありそうですが……」

「どいて」

美琴を監視していた派閥員が美琴の心情を察しつつも恐る恐る遠回しに美琴を止めようとする。だが美琴が歩みを止める様子はない。

かった。

「こ、ここは他の派閥員の到着を待つて……」

「どいて」

「っ!？」

なんとしてでも美琴を止めようとする派閥員だったが美琴の一言を聞いた途端、全身に悪寒が走る。

「私を殺してでも止める覚悟がな覚悟がないならどいて」

美琴は派閥員2人の間をゆっくりと通り過ぎて行く。2人は美琴から放たれた殺意に気圧されそのまま立ち尽くすことしかできなかった。

(ど、どうしよう……)

ただならぬ雰囲気を纏った美琴の背中を佐天は心配そうな表情で見守っていた。

派閥員を振り切った美琴はリボーンが現れた場所へと向かう。

「これは……!？」

美琴の視界にはリボーンが昨日を停止させたT G Dが転がっていた。すでに戦闘が終わっておりそこには誰もいなかった。

(ダメ……止まってる……)

T G Dにハッキングして情報を得ようとした美琴であったが、完全に機能が停止しており情報を得ることは叶わなかった。

(まだ近くにいるかもしれない……)

リボーンを自力で見つけるのは困難を極めるが情報が得られない

以上、自分の足で見つけるしかないと思われぬ収穫じゃ

その時だった

「オヤオヤー？ 馬場ちゃんの後始末にしに来たのに思われぬ収穫じゃない？」

美琴の真横から全身をフードで覆い、髑髏のネットワークスをつえた警策が現れる。

「チョチョット。お姉さんに聞きたいことがあるんだけどー？」

「今立て込んでるの。あんたみたいな得体のしれないのと話してる暇はないわ。ただしあんたが私の友達を怪我させた奴の関係者なら話は別だけどね」

警策に対して全身に電気を送らせながら美琴は敵意を剥き出しにする。そんな美琴を前にしても警策は動揺するどころか何喰わぬ顔をしていた。

「得体の知れない？ ウチらの別荘を襲撃して情報をぶっこ抜いておいて」

「別荘？ 襲撃？ 何の話？」

いきなり身に覚えのないことを言われて美琴は困惑してしまっていた。

「ノンノン。とぼけたって無駄よん。こつちのこと嗅ぎ回ってんだからわかってるでしょ？ 絶対能力進化計画レイド6シフトをあなたが妨害していた

のはとつくに調査済み。計画破綻後、妹達シスターズがどうなったか知らない訳がないよねっ。学園都市内に残ったクローンをどこに匿ってるのかなっ？」

「……」

警策の問に対して美琴が応えることはなかったが、美琴の脳裏にはカエル医者カエルと9代目の姿が浮かんでいた。

「あんたたちが何者か知らないけど私の友達を襲ってまで何がしたい訳？」

「アリアリヤ今更そんなこと言っちゃう？ 私から言わせればこんな街でノウノウと暮らしてられる美琴ちゃんの方がよっぽど異常だけど」

「っ!？」

警策の言葉を聞いて美琴は動揺すると同時に思い出す。一方通行^{アクセラレター}によって殺されたミサたちのことを。

「だってほら今まで色々と見てきたでしょ？ 絶対能力者^{レベル6}を生み出す為に為されてきた非人道行為^{チャイルドエラー}。置き去りを使ったDNAマップの詐欺。それらの行為はたかだか一企業、一組織によって行われてる訳じゃない。元を辿れば必ず学園都市上層部へと繋がっていく。この街そのものが巨大な実験場であることをあなたは知っている。そう。あなたはそこらの何も知らない学生とは違う。それなのに現実^{レアル}に目を逸らして曖昧に日々を過ごしてる。よく平然としていられるものね」

「私だって……!？」

警策から告げられ事實は真実。その事実を目の当たりにしている美琴の心は揺さぶられていた。

「いいえ……それとこれとは関係ない。あんたが私の友達に危害を加えたこととは繋がらないわ」

警策の言葉によって精神的に追い詰められた美琴であったが、婚後のことを思い出してなんとか持ち直した。

「警告よ。あんたたちの目的を教えなさい」

美琴は右腕を警策の方に向け、情報を吐かなければ電撃を放つという意思を見せる。

「私の間に答えなかったクセに教えてもらおうだなんて都合がよ過ぎるんじゃない？ 生憎だけどそれは教えられないね」

「そう」

「っ!？」

すると美琴の右手から電撃が放た警策に直撃する。警策は避けることもできずうつ伏せの状態^{ステータス}で倒れる。

「安心しなさい。全身が痺れて動けない程度にしといたから」

美琴は警策から情報を得る為に気絶させず、全身が痺れて動けないレベルの電力で攻撃したのである。

が、

「容赦なく電撃放つなんて美琴ちゃん過激だねー」

「っ!?!」

美琴の電撃を喰らったのにも関わらず警策は何事もなかったかのように起き上がる。そんな警策を見て美琴は動揺を隠せないでいた。すると警策を覆っていたフードが取れる。そこには全身真っ白で、両腕が刃物のように鋭くなっているという不気味な存在が美琴の目の前にいた。

(人間じゃない!?)

明らかに人間ではない存在を目の前にして美琴は驚きを隠せないでいた。

目の前にいるのは警策ではなく液体金属によって作られた人形である。警策は人の形をした液体金属を操ることができる液化人影の持ち主。今まで喋っていたのは警策ではなく液化人影。この液化人影には聴覚と触覚があり、聴覚と触覚の情報は本体に送られる。髑髏のネックレスはカメラであり視覚の役割を果たしている。

(どうする!?! 電撃は聞いてない!?! 超電磁砲で吹っ飛ばせるか!?!)

電撃が効いてない上に生身の人間ではない以上、遠慮なく超電磁砲は撃てる。しかし効くのかどうかわからない為、美琴は超電磁砲を撃つかどうか迷っていた。

美琴が迷っている間にも液化人影は美琴に近づいていき、美琴は窮

地に立たされた。いた。

ヴェレッタ・フィアンマ・ブルーヴィア

「雨の炎矢」

「っ!?!」

すると液化人影の体のあちこちに無数の矢が突き刺さる。

「大丈夫!?!」

「佐天さん!?!」

美琴の窮地に現れたのは佐天だった。美琴は佐天が来てくれたことに驚きを隠せないでいた。

「な、何で……!?!」

「話は後。こいつを片付けるのが先よ」

「片付けるー? 生憎だけど君の攻撃はこれっぽちも効いてない

よー」

矢は刺さったが人形を破壊する程の決定打には程遠い。故に警策は余裕だった。

「本当にそうかしら？」

「っ!？」

佐天がそう言うと言いつつ警策はすぐに異変に気づいた。液化人影リキッドシャドウが動かせないことに。

「私の矢を放ったのは人形を破壊する為じゃない。人形の動きを止める為よ」

佐天の雨バレストラ・デイ・ピオッチャのボウガンは雨属性の特徴である鎮静の効果のある矢を放てる武器。それ故に警策は液化人影リキッドシャドウを動かせなくなったのである。

(ど、どうなってるの!?)

雨属性の炎のことを知らない警策は矢が刺さっただけで液化人影リキッドシャドウの動きが封じられた理由がわからず困惑していた。

警策が困惑している間に佐天は右手に指先に炎を一点に集中させて小さい炎の球を生成し、液化人影リキッドシャドウに狙いを定める。

「死炎球拡散」

佐天は一点に集中した炎を液化人影リキッドシャドウに向かって広範囲に拡散する。液化人影リキッドシャドウは避けるどころか動くこともままならず佐天の炎に包まれ、跡形もなく消し炭となった。

???

「ちっ! まさか液化人影リキッドシャドウを消し炭にできる奴がいるなんて……」

安全圏からリキッドシャドウ液化人影を操っていた警策は予想外の出来事に苛立ちを隠せないでいた。

「まあいいかー。美琴ちゃんを殺すのが目的じゃないしー。交渉したって無駄だったこともよくわかったしー」

だがすぐに苛立ちはすっかり消えて、いつものお調子者の警策に戻る。

「それに……」

警策の脳裏にはある光景が浮かぶ。それは学園都市の裏の話をした時に美琴が苦悩の表情であった。

「脈はありそうじゃない？」

標的（ターゲット） 299 情報提供

美琴の窮地を救った佐天。

「ふう」

（す、凄い……）

佐天は一息つくると超^{ハイパー}死ぬ気モードを解除しノーマルモードへと戻り、ボウガンに形態変化^{カンビオフォルマ}していたクイーンも指輪の中へ戻っていく。相性が悪かったとはいえ美琴は佐天が液化人影^{リキッドシャドウ}を一瞬で消滅させたことに驚きを隠せないでいた。

「大丈夫ですか？ 怪我してないですか？」

「う、うん……それよりどうして……？」

「心配だったんです。婚后さんのことで追い詰めてたから……」

病院にいた時の美琴がただならぬ雰囲気であった。最初は着いていくかどうか迷っていた佐天だったが、迷いに迷った挙げ句心配で美琴の元にやって来たのである。

「さっきの奴、婚后さんを襲った仲間……何ですよね？」

「それは……」

「私も協力します！ どういう目的かは知りませんが許せないので……！ 婚后さんをあんな目に遭わせた人たちが！」

依然、美琴のことを思い出せない婚后を酷い目に遭わせた連中を許せないという思いは同じ。故に佐天は美琴に協力したいという旨を伝える。

（どうしよう……）

佐天の覚悟は本物。しかし自分のことを忘れている佐天を巻き込むことには抵抗があった。

その時だった

「あっ……ごめん……」

ポケットに入っていた携帯に着信が入る。美琴は佐天に断りを入れ、電話に出るという意思表示を見せる。

「っ!？」

携帯の画面を見た瞬間、美琴の顔つきが鬼のような形相へと変貌する。

「もしもし」

美琴は低い声で電話に低い声で応答する。相手からの会話に対して美琴は最低限の返事で応答する。

「わかったわ」

電話の主から電話がかかって来てから1分後。会話が終了し、美琴は電話を切る。

「あの……何かあったんですか?」

電話がかかってから美琴の雰囲気再び変わった為、何かあったということ佐天は察する。

「やられた……」

「やられたって……?」

「ママが人質に取られた……」

「ええ!？」

まさか母親が人質に取られたということを知って佐天は驚きの声を上げる。

「人質って……もしかしてさっきの奴の仲間ですか!？」

「多分……返して欲しければ私1人で来いって……」

「そんな……」

「とにかく行って来るわ。佐天さんは婚后さんの側にいてあげて」

「あつ……」

佐天が制止する間もなく美琴は電話をかけてきた人物の指定した場所へと向かって行く。

「とにかく初春に連絡しないと……」

美琴が1人で来るように言われた以上、自分がついて行く訳にはいかない為、佐天は初春に協力してもらうことに決める。情報収集のスペシャリストである初春の力を借りれば婚后を襲った奴の仲間のこととがわかると思ったからである。

「あれ……?」

携帯を取り出してアドレス帳の中から初春の連絡しようとした佐天であったが、あることに気づいてしまう。それはアドレス帳の中に御坂美琴という名前が登録されていたのである。

「登録されてる……!?」

一方で人質にされた美鈴を救いに向かった美琴は。

「ちゃんと1人で来たわよ」

美琴はとある公園。誰もいない街路樹に囲まれた小道にやって来ていた。

「いるんでしょう!? とつとと出てきなさい!! リボーン!!」

なぜかここで美琴の口からリボーンの名前が叫ばれる。

「そんなにでけえ声で叫ばねえでも聞こえてるぞ」

「リボーン……!!」

するとすぐにリボーンからの返答が返って来る。リボーンは街路樹の中にある木の枝の上を見下ろしていた。美琴はリボーンのことを睨みつけていた。

なぜリボーンがいるのかを説明するには時を少しだけ遡らなければならぬ。

それは先程、美琴に電話をかかってきた時のことである。

『俺だ。言いてえことは色々あるだろうが、そいつは後だ。今は時間が惜しいんでな』

「わかったわ」

リボーンの発言から自分がミサのことを嗅ぎ回ってるということを理解した美琴は黙ってリボーンの言うことを聞くことにする。

『単刀直入に言う。お前の知りたい情報を教えてやる。だから今から言う場所に来い。お前1人でな』

「場所は？」

美琴がリボーンどこに行けばいいのか尋ねるとリボーンは美琴に集合場所を教える。

「今すぐ行くわ」

『お前についてる監視については気にすんな。お前の監視を止めるよ
う言ってるか安心しとけ』

「あんた……まさか……!?!」

『言いてえことは後だって言っただけだ。とにかく今すぐ来い』
「わかった。でも……」

『誰かいるのか?』

「うん佐天さんが……でもなんとかするわ」

この後、美琴は機転を利かして母親が人質に取られたということにしてリボーンの前へ向かったのである。

というやり取りがあり現在に至る。

「無駄話はいいわ。全て話してもらおうわよ」

「そのつもりだ。だがその前に1つ聞かせろ。携帯の着信拒否以外に違和感なんてなかったはずなのにどうやって俺たちのことに気づいた？」

リボーンはずっと疑問だった。着信拒否だけでは違和感を覚えても、自分たちが何をしているかを突き止めることは不可能。リボーンはそのことについて美琴に尋ねた。

「突き止めたっていうよりは……」

美琴はこれまで自分の身に起こったことをリボーンに話す。

「成る程な」

美琴からこれまで経緯を聞いて、美琴に今回の作戦がバレてしまったことに納得する。

(暴れ出す前に引き止められたのは不幸中の幸いか……)

自分たちのことだけでなく婚後が馬場が知って美琴が暴走しなかったと知ってリボーンは安堵する。

「さあ。質問に答えたわよ。今度はそっちの番よ」

「ああ。俺たちはある男を捕まえる為に動いてる。操折と手を組んでな」

(やっぱり……)

先程の会話の内容から操折を手を組んでいるのは知っていた。しかし美琴は自分が気に入らない人物と自分の知らないところで手を組んでいることに対してやるせない気持ちになっていた。

「男の名は木原幻生」

「木原幻生……聞いたことがあるわ。会ったことはないけど……」

「木原幻生。学園都市の科学者の間では有名な科学者らしいが目的の為なら手段を選ばないマッドサイエンティスト。なんせ絶対能力進化計画の立案者だからな」

「っ!？」

幻生が絶対能力進化計画の立案者だということを知って美琴は動揺を隠せないでいた。

「じゃああなたたちは幻生を追って……？」

「ああ。滅多に表に現さねえ奴だが今日、行われる国際能力者会議に幻生がお忍びで出席することを操折が掴んでな。それで操折が俺たちに協力を持ち掛けてきた。俺たちがあの実験を潰したと知った上でな」

「何で食蜂あいつが妹達シスターズを……？」

「さあな」

「さあなつて……知らないのにあんな奴と手を組んだ訳……？」

「聞いたんだが教えてくれなくてな。ま。妹達シスターズの障害になるもの排除という点で利害は一致してたしな。それで手を組んだ。ま。あいつが嘘についてないことはわかったしな」

「何で……何で私には言ってくれなかったのよ!!」

今まで抑えていた美琴の怒り、自分を頼ってくれなかったということへの怒りが爆発する。

「婚后さんがあんな目に遭ったのは私が頼ったせい……だけど私に言っていれば婚后さんがあんな目に遭うことはなかった!! 黒子たち記憶を消す必要だつてなかったでしょ!!」

美琴の脳裏にはボロボロ状態で意識不明の婚后の姿と記憶を消されたことによって自分のことを忘れた黒子たちの姿が浮かんでいた。

「前にあんた言ってたわよね!! 仲間を頼れつて!! なのに何で私を頼らないのよ!!」

「誤解だな。俺はちゃんと言ったぞ。美琴の力を借りた方がいいんじゃないかってな。だが操折が犬猿関係にあるお前と手を組めば作戦が支障が出るつて言つて断られたんだぞ」

「それは食蜂あの女の私情じゃない!! それだけで納得したつていうの!？」

「んな訳ねえだろ。決め手となったツナの言葉だ」

「沢田の?」

「お前に笑つてて欲しいってな。お前がこの作戦に加われればまた辛い目に遭うかもしれない。だからお前に今回のことを話さずに事を終わらせようとした。その為に佐天たちからも自分の記憶も消すことも了承した。全てはお前の為にな」

「何よそれ……!?!」

ミサの件に関しては自分だけでなくツナ自身も辛い思いをしている。自分のせいでツナに自己犠牲を強いてしまっていること美琴は怒りを覚える。

「だがお前が俺たちに何かしていることに気づき、さらに関係ねえ人間を巻き込む事態になっちゃった。ここまで来たら包み隠さず全て話して協力するように操折に俺が進言し了承した。だからお前を呼んだ。お前が何かしでかすと幻生の思う壺になるな」

「それって私を監視化に置くってこと……!?!」

「そう捉えてもらって構わねえぞ」

「わかったわよ……」

言いたいことはあったがこれ以上、言ったところで何も意味がないと判断して美琴は何も言わなかった。

「さて。肝心の2人の居場所だが……それを言うには条件がある」

「何よ?」

「この作戦が終わるまで婚後のことをツナに伝えるな。この条件を守るなら教えてやってもいい」

「わかったわ……」

本当は伝えるべきなのであるにであろうか、作戦成功させる為なのだろうということリボーンの意図を理解し美琴はリボーンの条件を呑むことにした。

美琴の返答を聞いてリボーンは美琴に今回の作戦の拠点の場所を教えた。

「情報は以上だ。行きてえならとつと行つてこい」

「ええ」

全ての情報を話し終えると美琴はリボーンの言われた場所へと向かって行くのだった。

標的（ターゲット） 300 曖昧な記憶

リボーンに言われた場所へと向かう美琴。やって来たのは
外装代脳エクステリアのある研究施設へとやって来ていた。

「来たわね」

（美琴……）

研究施設の入り口。ツナと操折が立ちつくす先には美琴が立っていた。いつもと変わらぬ表情を浮かべる操折に対して、ツナは辛そうな表情を浮かべていた。

「色々と言いたいことはあるでしょうけど後にしなさい。時間力が惜しいことはリボーン彼から聞いてるでしょお？」

「そうね……でもこれだけは言っておかないとね」

そう言う和美琴はゆっくりと2人の元へゆっくりと歩を進めて行く。そしてツナの前に立つ。

「美琴……グフツ!？」

「ちよっ!?! 何やってるのよ!?!」

すると美琴は右手でツナをおもいつきり殴り飛ばした。いきなり行動に操折も驚きを隠せないでいた。

「リボーンから聞いたわよ。私に笑って欲しいから今回の話を話さなかつてですって?」

「っ!?!」

「あの1件で苦しんだのは私だけじゃない。あんただってそうでしょう? 苦しむなら私も一緒。だからあんたが全部、背負うなんて絶対に許さない」

「美琴……」

「言いたいことはそれだけ。今度、私に黙ってこんなことしたら許さないわよ」

「うん……」

一方、その頃。

「つていうことがあったの」

「そんなことが……」

「……」

ここは風紀委員^{ジャツジメント}177支部。佐天はこれまでの一部始終を話す。婚后の身に起きたこと。婚后を襲った者の仲間である警策のこと。美鈴が人質に取られたことを。佐天から一部始終を聞いて初春は驚きを隠せず、黒子は黙ったまま何かを考えていたようだった。

「嘘ですわね」

「ちよつと白井さん!!」

「本当なんですつて!! 信じて下さい!!」

黒子の無慈悲な言葉を聞いて初春は焦り、佐天は信じてくれるよう懇願する。

「誤解ですわ。私が嘘といういたのは御坂美琴の人質に取られたという件ですよ」

「どういうことですか?」

「考えてもみなさいな。人質を取るような相手が人質を取ったことを他言しないよう、御坂美琴に釘を刺さない訳がありません。人質を取る側にとって第3者による妨害は何より警戒すべきことの。そんなことが分からない相手が、婚后光子を倒せるはずがありません。おそらく佐天さんを巻き込まない為に御坂美琴が一人芝居打ったと考えるのが妥当ですよ」

「そんな……」

黒子の推測に納得すると同時に、ショックを受ける佐天。

「まずは佐天さんの見たという人形使いを見つけませんとね。初春。まずは佐天さんの証言を元に書庫バンクにて人形使いの候補を調べますわよ」

「は、はい！」

「白井さん……」

「勘違いしないで下さいまし。風紀委員ジャッジメントとして学園都市の治安を乱す者を捕える為ですの」

もつともらしいことを言いつつも黒子は佐天の為に行動することを決める。

「それと私たちが御坂美琴と知り合いかもしれないという件についてですが……」

「うん。だって私たちのことを知ってたみたいだし。それに携帯の連絡先に御坂さんの連絡先が入ってたし。まるで私たちが忘れちゃってるみたいっていうか……なんていうか……」

「何者かに記憶を改竄されると言いたいんですの？」

「はい……確か常盤台には精神系の能力で有名な超能力者レベル5の人がいますよね？」

「食蜂操折……」

佐天の言葉を聞いて黒子の脳裏には食蜂操折の姿が脳裏に浮かんでいた。

黒子たちは操折と出会った時の記憶は消去されてはいるものの操折の存在までは記憶を消去されていない。操折が記憶を消去したのは黒子たちが、ツナとリボン何かしていることに気づいて自分たちの目的に首を突っ込まれないようにすること。美琴が自分たちの目的に気づいた際に、黒子たちを頼れないようにする状況を作る為である。

操折は学園都市に7人しかいない超能力者レベル5にしてエリート校常盤台中学の生徒。その存在を知らないということが敵に違和感を覚えさせ逆に怪しまれると思ったからである。故に操折は黒子たちの記憶から自分の全てを消去させなかったのである。

「確かに彼女なら可能ですが……正直、自覚がありませんの。ですから立証するのが難しいですわね。御坂美琴がいれば彼女を証明することもできたでしょうが……」

「ですよね……」

「とはいえ調べてみましょう。佐天さんの言うことも気になりますし。もしかしたら食蜂操折が自身の悪事を隠蔽する為に私たちの記憶を操作された可能性もありますし」

会ったこともないはずの美琴の連絡先があること、美琴が自分たちのことについて知っていたこと気になったこと。何より佐天が悩んでいる。黒子は食蜂のことを調べることを決める。

「マークすべきは人形使いと食蜂操折。まずはこの2人のことを徹底的に洗い出しますわよ。それと御坂美琴の搜索を同時に行いますの」

???

『マークすべきは人形使いと食蜂操折。まずはこの2人のことを徹底的に洗い出しますわよ。それと御坂美琴の搜索を同時に行いますの』
「やれやれ……こいつは厄介だな……」

とある場所。リボーンは盗聴器にて黒子たちの会話を聞いていた。

リボーンは佐天たちが婚後を病院に運ぼうとした時に最悪の事態を想定して盗聴器を佐天に仕掛けていた。

(記憶を消去されてる今のあいつらに言っても説得力がねえ……あつ

たとしてもあいづらは引くようなタマじゃねえしな……記憶を消してもらうのが無難か……)

なんとか巻き込まないようにしようと考えたりボーンであったが、どう説得したところ無駄だという結論に至り、操折に黒子たちの記憶を改善してもらうのが一番ベストだと判断する。

(ん？ 待てよ……)

ここでリボーンは思い出す。佐天が警策の操るリキッドシャドウ液化人影を佐天が撃破したということ。

(やべえな……佐天は顔を見られてる可能性があんのか……)

佐天は警策本人とは接触していないがリキッドシャドウ液化人影とは接触している。つまりリキッドシャドウ液化人影を操る警策に顔を覚えられている可能性が高い。さらに言えば佐天はあの時、美琴と一緒にいた。つまり美琴の仲間だと認識されてもおかしくない。

(つたく……記憶を消されても面倒事を起こしやがって……これじゃあ記憶を消せねえじゃねえか……)

巻き込まない為に記憶を消去したのにも関わらず、状況をややこしくする佐天に対してリボーンは心の中で嘆息する。

敵に顔を覚えられてるかもしれない状況で記憶を消去してしまえばいきなり知らない人間から襲われるという

恐怖に襲われる。つまり記憶を消去したくとも消せない状況になっちゃった。

(しゃあねえな……こうなったら警策の情報をあいづらに教えるか)

説得も記憶の消去もできないなら警策の搜索を黒子たちに行わせの方がマシだとリボーンは判断し、馬場を拷問した際に得た情報を佐天の携帯に送ることを決める。

ジャッジメント
風紀委員177支部。

「あつ。電話だ」

佐天の携帯に着信音が鳴る。佐天はポケットから携帯を取り出す。

「誰だろう……?」

携帯に映し出された番号は佐天の知らない番号。故に佐天は戸惑いを隠せないでいたが、恐る恐る電話に出ることを心に決める。

「も、もしかして?」

「ちやおつす。俺がわかるか?」

「君は……!?!」

電話の向こうから聞こえてきた声を聞いて佐天は電話の主がリボンであるということを知り、即座に理解する。

「お前に伝えたいことがあつて電話させてもらった」

「伝えたいことつて……それより大丈夫なの!? 怪我とかしてない!?!」

「あんな雑魚にすら認定できねえような奴にこの俺が傷を負わせられるなんて、天地がひっくり返つてもある訳ねえ。まあ上手く逃げられちまったがな。それよりもてめえの心配をしやがれ」

「私の?」

「お前が接触したあの犬の機械を使役していた男。目的は不明だがあいつには仲間がいることがわかつた」

「仲間?」

「そうだ。目的は不明だが。お前はあの男に顔を見られてる。だから狙われる可能性が充分にある。だから警告とその仲間のことを伝える。一度しか言わねえから耳の穴かっぽじつてよく聞けよ」

「う、うん……」

「今わかつてるあの男の仲間の名前は警策看取とシヨチトル。警策の能力は液化人影^{リキッドシャドウ}。液体金属でできた人形を遠隔操作できる能力。シヨチトルに関しては不明だ」

「あつ……」

液体金属でできた人形と聞いて佐天は思い出す。先程、自分が戦った人形が警策による能力によるものだったということに。

「私、戦ったよ」

「何だと？」

「どういう訳か知らないけど御坂さんを狙ってて……」

「そうか」

リボーンは盗聴されていること気づかれないよう知らないフリをして会話をした。

「警告はした。じゃあな」

「あつ……ちよつと!!」

佐天に伝えたいことを全て伝えたりボーンは佐天の制止を聞かずに一方的に電話を切った。

「誰からでしたの？」

「それが……さっき言ったりボーンって子で……」

「それって佐天さんたちを逃がす為に現れた子供ですよね？」

「うん……」

「一体、何者なんですか？　なぜ佐天さんの連絡先まで知っているんですの……？」

「多分だけど……御坂さんと同じであの子のことを忘れてるんだと思う……」

黒子の疑問に答えると佐天は、携帯を操作し始めた。

美琴と同じく連絡先が登録されていると考えたのである。

「あつた……」

自分の予想は見事的中し、電話帳にリボーンの名前が登録されていることが確認できた。

「やっぱり……私、あの子とも知り合いだったんだ……」

リボーンと出会った時に初対面なはずなのにも関わらず、初めて会ったという感覚がなかったのは気のせいではないということ佐天は理解する。

「やっぱりって……佐天さん、何か確信でもあつたんですか？」

「あの子と会った時、なんか初めて会った気がしなかつたっていう

か……」

「誰とも分からない情報を信じるのは危険ですが……とにかく調べるだけ調べてみましょう」

リボンという単語を聞いても何も感じなかった黒子であったが、佐天を信じて調査することにした。